

2018年度（平成30年度）
教育・研究業績書

奈良学園大学

2018（平成30）年度 教育・研究業績書 目次

【人間教育学部】

教授

- 青山 雅哉・・・1～10
- 伊崎 一夫 ※
- 大西 雅博・・・11～19
- 金山 憲正・・・20～38
- 桑原 祐子・・・39～53
- 善野 八千子・・・54～90
- 根岸 章・・・91～98
- 松田 智子・・・99～135
- 森 一弘・・・136～145
- 山本 美紀・・・146～197

特任教授

- 小竹 光夫 ※
- 増井 眞樹 ※

准教授

- 安東 雅訓・・・198～201
- 岡野 聡子・・・202～240
- 岡村 季光・・・241～266
- 熊田 岐子 ※
- 瀧明 知恵子・・・267～296
- 竹田 治美・・・297～306
- 林 悠子・・・307～315
- 松井 典夫・・・316～355
- 矢野 正・・・356～386

講師

- 阿尾 あすか・・・387～399
- 太田 雄久・・・400～428
- 大淵 裕美・・・429～452
- 岡本 恵太・・・453～464
- オチャンテ 村井 ロサ メルセデス ※
- 加奥 満紀子・・・465～470
- 西江 なお子・・・471～489
- 原口 忠之・・・490～503
- 正木 友則・・・504～524
- 山田 明広・・・525～548
- 山田 均・・・549～557

(※ 退職の為記載なし)

【保健医療学部】

教授

- 伊藤 健一
- 川野 雅資・・・558～616
- 柴田 政彦
- 辻下 守弘・・・617～641
- 中馬 成子・・・642～655
- 服部 律子・・・656～676
- 藤田 智恵子 ※
- 三浦 康代・・・677～686
- 守本 とも子・・・687～737
- 吉村 雅世・・・738～764

特別客員教授

- 梶間 敦子・・・765～769
- 播金 ヤスミ・・・770～771

特任教授

- 山口 求

准教授

- 嶋田 理博・・・772～783
- 芝田 ゆかり・・・784～788
- 田中 和奈 ※
- 西本 美和・・・789～801
- 松浦 純平・・・802～843
- 美甘 祥子・・・844～853

講師

- 北島 洋子・・・854～871
- 小林 由里・・・872～879
- 佐藤 郁代
- 高田 勝子・・・880～882
- 本庄 美香
- 吉水 清・・・883～899

助教

- 井上 葉子・・・900～914
- 齋藤 英夫
- 高橋 寿奈・・・915～919
- 田場 真理・・・920～925
- 中島 大貴
- 西出 順子・・・926～953
- 林 文子・・・954～961
- 前田 吉樹・・・962～974

助手

- 井上 昌子・・・975～976
- 野口 寿美子・・・977～979
- 溝口 みちる・・・980～982
- 村上 今日子 ※
- 山崎 陸世・・・983～986

(※ 退職の為記載なし)

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 青山 雅哉

研 究 分 野	研究内容のキーワード	
芸術学，芸術一般，器楽（ピアノ）	ピアノ奏法，音楽表現，演奏解釈	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 「音楽の基礎」におけるグレード表への取り組み	平成 22 年 4 月 ～平成 29 年 3 月	奈良文化女子短期大学での幼児教育へのピアノ音楽指導においてより効果的な指導法としてグレード表を考案していった。このことにより、学生の日常からの練習を促すこと、目標を明確にして達成度を高めていくことにもなり、効果的な取り組みとなった。 毎年更新してより良いものを学生に提示して学修を促すことにもなっている。
2) フェスティバルにおける合奏の取り組み	平成 22 年 4 月 ～平成 29 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「合奏」の授業でそれまでの成果の発表として大学のイベントであるファスティバルへの出演をさせている。学生の授業の取り組みが単に各楽器の演奏スキルの学修に止まることなく舞台での準備、練習プラン、リハーサル等の方法がこの舞台での発表をすることにより得ることのできる様々な要素が学生の実際の就職先現場に生かすことのできる学びの機会となるよう指導を行ってきた。
3) 「音楽の基礎」科目でのピアノ実技授業としてその練習の継続性と学修に向けての工夫	平成 24 年 4 月 ～平成 29 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「音楽の基礎」科目での実践。授業での指導を基に実際の幼児への工夫した音楽的環境を作っていく力の向上を図り、クラス全員でグループを作りちびっ子広場（0 歳～5 歳の母子が近隣から集う本学の広場）で幼児への音楽あそびを設定し体験させていった。設定内容の練習を重ね、実際の音楽あそびの現場体験をとおり、ピアノ実技のスキル向上への必要性を認め、学生のピアノ練習への意欲を高める効果があった。
4) 「音楽の基礎Ⅱ」科目でのピアノ実技授業としてその練習の継続性と学修に向けての工夫	平成 24 年 4 月 ～平成 29 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「音楽の基礎Ⅱ」科目での実践。授業での指導を基に実際の幼児への工夫した音楽的環境を作っていく力の向上を図り、クラスの中でグループを作りつどいの広場（0 歳～5 歳の母子が近隣から集う本学の広場）で幼児への音楽あそびや学びを設定し実践させていった。設定内容の練習を重ね、実際の音楽あそびの現場体験をとおり、ピアノ実技のスキルや音楽表現力向上への必要性を認め、学生のその後の学修への意欲を高める効果があった。
5) 「子ども学ゼミ」科目での子どもの歌への学修によるその効果と成果について	平成 25 年 4 月 ～平成 26 年 2 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「子ども学ゼミ」科目での実践。このゼミでは、子どもたちの音楽環境を観察し、新たな子どもの歌の収集と分類を行い、知見を拡げ実際の現場で効果的な曲のレパートリーを備えていくことを目的とした。さらに、子どもための曲作りを試行し、詩のありかた、曲のありかたを検討する中で様々な発見があり、学生は子どもの歌に対する捉え方を新たにする良い機会ともなった。
6) 「子ども学ゼミ」科目での楽器演奏と創作活動への学修によるその効果と成果について	平成 26 年 4 月 ～平成 27 年 2 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「子ども学ゼミ」科目での実践。ゼミ学生の特技とする琴、吹奏楽器（サクソ、ホルン、ユーフォニウム）とのコラボレーションを行う。作曲、演奏と共に音源を用いてDM（デスクトップミュージック）の基本操作を学び音楽を作っていく方法を指導した。幼児教育現場においての音楽表現の一つとして指導し、そのスキルアップに学生は興味深く学修を行っていた。つどいの広場にて学習の成果として音楽発表を行い、好評を得ることができた。

7)「子ども学ゼミ」科目での子どもの歌への学修によるその効果と成果について	平成 27 年 4 月 ～平成 28 年 2 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「子ども学ゼミ」科目での実践。ゼミ学生の特長とする琴、吹奏楽器（サクソ、ホルン、ユーフォニウム）とのコラボレーションを行う。作曲、演奏と共に音源を用いてDM（デスクトップミュージック）の基本操作を学び音楽を作っていく方法を指導した。幼児教育現場においての音楽表現の一つとして指導し、そのスキルアップに学生は興味深く学修を行っていた。つどいの広場にて学習の成果として音楽発表を行い、好評を得ることができた。
8)器楽演習Ⅰによるグレードの導入	平成 29 年 4 月 ～平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部教育学科「器楽演習Ⅰ」における授業への取り組みに新たに学生の学修し身につけるべき曲集をグレード表として一覧できるようにして取り入れた。そのことで、学生は達成度の確認、計画的な練習、到達点までの目標設定が可能となり、学生の練習意欲向上に資することとなった。
9)器楽演習Ⅰでの唱歌課題の導入	平成 29 年 4 月 ～平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部教育学科「器楽演習Ⅰ」を指導。「器楽演習Ⅰ」にこれまで学修範囲とされなかった小学校音楽の唱歌を導入した。原譜のままではレベル不足で弾くことは困難となるため、アレンジを行ってそのレベルにふさわしい課題となるよう工夫し、小学校 1 年から 6 年までの文科省指定の唱歌を学修できるよう準備を行い、指導をしている。
10) 音楽表現Ⅰにおける音楽基礎力向上への試み	平成 29 年 4 月 ～平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部教育学科「器楽演習Ⅰ」の指導において、大学生のピアノ初心者としてのスタートとして適合した練習方法を「指の運動へのストレッチ」として譜面で示し、スムーズに練習成果への効果を生むことにつながってきている。筋肉が成長し指の柔軟な動きが困難な段階からのスタートによる最適な練習方法として示し学生自身で動きを観察し、客観性をもって練習していくことを求めている。
11)基礎ゼミによる音楽演奏への取り組み	平成 29 年 6 月 ～平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部教育学科音楽専修学生への「基礎ゼミⅠ」においてモーツァルト作曲「きらきら星」の演奏と映像制作を計画し、きらきら星をピアノ連弾、サクソ二重奏とピアノ伴奏、合唱としてそれぞれアレンジしてその録音を行って完成度を高めていった。学生自身で繰り返し演奏録音をチェックすることで効果的なスキルの向上への意欲とその成果を見ることができた。
2 作成した教科書、教材		
1)音楽理論「よくわかる音楽の仕組み」	平成 21 年 4 月 ～平成 25 年 3 月	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽教育全般（音楽の基礎Ⅰ、Ⅱ、器楽合奏、合唱等）において使用。楽譜テキストと共に利用して基本的な音楽理論への理解や楽譜の理解に効果的に活用することができた。
2)ピアノ初心者のための導入用テキスト（和音伴奏による童謡集）	平成 21 年 4 月 ～平成 25 年 3 月	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽教育全般（音楽の基礎Ⅰ、Ⅱ、器楽合奏、合唱等）において使用。音楽理論テキストと共に利用して基本的なピアノ奏法への理解や簡易な伴奏譜による童謡の学修に効果的に活用することができた。
3)音楽ワークシート	平成 22 年 4 月 ～	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽の基礎Ⅰ、Ⅱにおいて使用。ピアノ練習への目標や学修へのポイントを指導後に明記して練習への参考なるものとした。学生自身も自身で練習内容を振り返り記入していくことで、考えて練習をしていくきっかけとなった。
4)音楽の基礎テキストⅠ	平成 22 年 4 月 ～	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽の基礎Ⅰ、Ⅱにおいて使用。従来までの音楽ワークシートを改良したものであり、童謡を弾くための和音練習に重きを置き、メロディーへの和声付けを和音や和音記号としてアレンジし、現場に対応できる曲集を編成してテキストとした。

5) 音楽の基礎テキストⅡ	平成 22 年 4 月 ～	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽の基礎Ⅰ、Ⅱにおいて使用。音楽の基礎テキストⅠの続編としてよりレベルアップした内容と曲集を編成。また、四季や行事等の項目毎に分けた曲集として学修やレパトリー獲得への利便性を図った。
6) ミュージック・ワークブック 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行	平成 26 年 3 月	音楽初心者にとって音楽の基本となる必要な知識と基礎的テクニックをできるだけ早く身につけていくことが必要であり、その目的にかなう教材として検討を重ね形にしたものである。ピアノ演奏力向上に導くため、譜面の基礎となる音符の理解や指の運動練習を工夫した課題に解説や図面で示して提示している。これを学習することで、音楽への理解と基礎演奏への効果的な教材となっている。
7) ミュージック・ワークシート 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行	平成 26 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部の「音楽の基礎」「音楽の基礎Ⅱ」科目の授業において使用。音楽初心者への演奏を身につける段階で、このワークでの課題学習を積み重ね知識を身につけていく教材としている。問題を答えていく形式で自習により身につけることが可能なものである。
8) グレード表による童謡、唱歌	平成 28 年 4 月 ～	奈良学園大学人間教育学部教育学科「器楽演習Ⅰ」「音楽表現」において、学生のレベルにふさわしい編曲を行い教材として使用している。学生はグレード表に示されたその童謡や唱歌をピアノ課題として身につけレベルの向上をめざしている。
9) ピアノテクニックへの基礎	平成 29 年 4 月 ～	奈良学園大学人間教育学部教育学科「器楽演習Ⅰ」「音楽表現」において、ピアノテクニックの基礎となる指の運動のためのストレッチとして、ピアノ練習の最初に行う指の感度を高めるためのテキストを作成し活用している。
10) ソルフエージュ～音楽のしぐみの実践	平成 29 年 4 月 ～	奈良学園大学人間教育学部教育学科音楽専修「ソルフエージュⅠ」へのテキストとなるもので、音楽の仕組みについて解説や課題問題集として作成し、学生の理解度と音への実践に対してより深く身につけていきそれぞれのレベル向上に資するものとなっている。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 平成 23 年度から平成 27 年度にまでの授業アンケートについて	平成 23 年 4 月 ～ 平成 27 年 3 月	奈良文化女子短期大学において、授業アンケートが各授業において実施され、14 項目のアンケート内容により項目毎の平均値、並びに総合平均値が各授業担当者に示されている。また、学科の全授業を総合した各項目、総合平均値も示されている。 平成 27 年度の担当する科目（音楽の基礎Ⅰ、Ⅱ）の授業評価は学科全体平均値 3.47 を上回り 3.86 となっている（4 段階評価）。 また、これまで行ってきた 5 年間アンケートによる平均値も全体平均値を上回ることとなっている。担当する授業の指導には個別対応が主となり、個人個人の問題に熱心に取り組んでいることが数値となっているものと思われる。
2) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学図書館長（奈良学園大学図書館登美ヶ丘分館長兼務）への学長評価による就任	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	授業指導への取り組み、学生の音楽的スキル向上や学生アンケートからの評価、また AL0、自己点検評価委員長、規程委員長等での教育上の改善によるこれまでの活動が、学長の評価により図書館長に推され就任することになった。

3)AL0、自己点検・評価委員長としての本学自己点検・評価活動	成 22 年 9 月～ 平成 28 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部におけるAL0として大学の教育活動の全面で点検と改善への提言を行ってきた。教育活動での学習成果のあり方について、学外・学内での研修を行い教職職員間での理解と必要性を高めていった。その活動は自己点検・評価委員長としての活動と併行して平成 22 年度の本学認証評価も適格を獲得することができ、その後もそのままその任に就き自己点検による改善計画が機能していくよう取り組み、学習成果のエビデンスを目的とした全学的な取り組みを実現させ、それを具体化することに努力した。短期大学基準協会による第三者認証評価の評価員として、平成 24 年には宮崎学園短期大学、平成 27 年には頌栄短期大学の評価を担当している。平成 28 年には短期大学認証評価のために、自己点検評価の活動に努め、学習成果の検証として PROG の導入をするなど、より客観性のあるエビデンスをめざした自己点検評価表を作成することにより、奈良文化女子短期大学は平成 28 年度認証評価の適格を獲得することができた。
4)サタデー・オン・ステージへのプロデュース	平成 21 年 4 月～ 平成 28 年 3 月	平成 21 年より奈良文化女子短期大学の地域貢献としての主に音楽の演奏会を毎年企画して年に 9～10 回程度のイベントを開催してきた。当初から終了までの企画や実施におけるスタッフとして活動してきた。 平成 28 年度終了時には 83 回目となる開催となった。 それまで奈良県下、京都府下の高校の吹奏楽や合唱のクラブ、プロの音楽家、本学出身者、その他多岐にわたる出演者のステージを開催することで、奈良県下の高校生や地域への知名度向上へも貢献することにもなった。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (ピアノ演奏活動) 1)ギャラリーコンサート 2)奈良文化女子短期大学公開講座 3)クリスマスコンサート 4)NHK ラジオ出演 5)奈良文化女子短期大学公開講座 6)チャリティーコンサート 7)青山雅哉ピアノ・リサイタル 8)ピアノサロンコンサート 9)NHK ラジオ出演	平成 21 年 7 月 ハービス OSAKA 平成 21 年 7 月 奈良文化女子短期大学 平成 21 年 12 月 奈良市秋篠音楽堂 平成 22 年 1 月 NHK 大阪放送局 平成 22 年 4 月 奈良文化女子短期大学 平成 22 年 5 月 大阪岸和田市浪切ホール 平成 22 年 11 月 大阪イシハラホール 平成 22 年 12 月 開成館 平成 22 年 12 月 NHK 大阪放送局	シューマン：パピヨン、子どもの情景、 ギャラリースペースでの演奏会 ハチャトゥーリアン：ソナタ、剣の舞、小川純子、橋川敦子氏との共演、 シューマン：パピヨン、子どもの情景の演奏、フォーレ：ピアノ連弾曲ドリー 安立由美、藤木雅子、中春淳子氏との共演 青山雅哉：口笛のための曲集初演 もくまさあき氏との共演 ドビュッシー：夢、映像、口笛演奏をもくまさあき、樋上敦氏とのピアノ伴奏で共演 ベートーヴェン：ピアノソナタ 21 番 でのソロ演奏、ジョージ・マッケラス氏 武田美子氏との共演 シューマン：ダビッド同盟舞曲、幻想曲 での独奏 ブラームス：ラブソディー、7つの幻想曲、シューマン：ダビッド同盟舞曲、での独奏 関西ほっとタイムでの演奏とインタビュー

10)大東サーティールホールコンサート	平成22年12月 大東サーティールホール	ショパン：幻想曲 他 作本千賀子、もくまさあき 共演
11)トゥティ・ピアノコンサート	平成23年1月 大阪八尾市文化会館 プリズムホール	ショパン：幻想曲、ポロネーズ5番でのソロ演奏、渡辺良樹氏との共演
12)奈良文化女子短期大学公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成23年2月 奈良文化女子短期大学	シューマン： 幻想小曲集、子どもの情景、モーツァルト：ピアノ連弾のためのソナタ 小川純子氏との共演、
13)エンターテイナー・コンサート	平成23年11月 守口文化センターホール	カプースチン：ピアノ曲集、共演：小山陽子、秋田武、他
14)奈良文化女子短期大学公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成24年2月 奈良文化女子短期大学	ピアノ連弾での演奏会 フォーレ：ドリー ドビュッシー：小舟にて、小川純子氏との共演
15)NHK ラジオ出演	平成24年8月 NHK 大阪放送局	関西ほっとタイムでの演奏とインタビュー
16)奈良文化女子短期大学公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成24年9月 奈良文化女子短期大学	ブラームス：ワルツ集、ハンガリー舞曲集 小川純子、若槻たえ氏との共演
17)奈良文化女子短期大学サタデーオンステージ	平成24年10月 奈良文化女子短期大学	吉松 隆：プレイアデス舞曲、ラフマニノフ：二台のピアノのためのソナタ 上野稲子氏との共演
18)ピアノ・コンサート	平成24年12月 奈良市秋篠音楽堂	ラヴェル：ソナチネ、モーツァルト：幻想曲 ピアノ発表会でのゲスト出演 共演
19)トゥティ・ピアノコンサート	平成25年9月 大阪八尾市文化会館 プリズムホール	吉松 隆：プレイアデス舞曲、シューマン： 幻想小曲集、でのソロ演奏 日下義人、中春淳子氏との共演
20)奈良文化女子短期大学公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成25年10月 奈良文化女子短期大学	ラヴェル：マメールロワ、ドボルザーク：スラブ舞曲、小川純子、上野稲子氏との共演
21)「初めてのクラシック」音楽会	平成25年11月 奈良市秋篠音楽堂	音楽に親しんで、クラシック初心者への公演。案内役と演奏。バッハ：ガボット、モーツァルト：トルコ行進曲、ベートーヴェン：エリーゼのために等
22)三重県「障害者支援チャリティー音楽祭」	平成26年1月 三重県総合文化センター中ホール	カプースチン：練習曲、前奏曲 ゲスト出演でのピアノ演奏
23)福井県 エスペランサコンサート	平成26年5月 美浜生涯学習センターなびあすホール	エスペランサ（フルート、ベースのグループ）との共演、
24)奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成26年10月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	ドビュッシー：小組曲 ピアノ連弾、アンサンブル・クラブ学生、小川純子氏との共演
25) 青山&雑賀デュオコンサート	平成27年4月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	吉松 隆：プレイアデス舞曲集より、ショパン：ワルツ、の演奏、雑賀美佳氏とのイタリア歌曲、ミュージカルメドレーでの共演

26) 東日本大震災復興支援チャリティコンサート in 西日本	平成 27 年 5 月 大阪南港ATC海 辺の野外ステ ージ	「震災を風化させず支援を続けて行くことを関西から 発信する」ことをテーマにボランティア演奏として音楽 イベントに参加
27) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公 開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 27 年 10 月 奈良学園大学 奈良文化女子 短期大学部	ブラームス：ハンガリー舞曲から 小川純子氏とのピ アノ連弾による共演、
28) ピアノ・コンサート	平成 27 年 12 月 大阪守口市文 化センター	カバレフスキー：ソナチネ、モーツァルト：幻想曲 子 どもの情景、ブラームス：ワルツ集
29) エンターテイナー・コンサート	平成 27 年 12 月 大阪守口市文 化センター	ガーシュイン：ポギーとベスより、アイ・ゲット・リズ ムでのピアノソロと儀間太久実氏との共演
30) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公 開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 28 年 11 月 奈良学園大学 奈良文化女子 短期大学部	ラヴェル：マ・メール・ロワ ピアノ連弾、アンサンブ ル学生、小川純子氏との共演
31) 奈良文化女子短期大学同窓会 50 年記念 コンサート	平成 28 年 11 月 奈良ホテル	ショパン：ワルツ集、ブラームス：ワルツ集、 吉松 隆：プレイアデス舞曲集
32) 更紗コンサート	平成 28 年 12 月 ムラマツリサ イタルホール	8 名によるピアノ・コンサートのゲスト出演 シャミナード：変奏曲、吉松 隆：プレイアデス舞曲よ り
33) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公 開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 29 年 10 月 奈良学園大学 奈良文化女子 短期大学部	親子のための講座で様々な楽器の紹介、音の不思議につ いての話と小川純子氏との共演
(教育実践等)		
1) 音楽講師のための公開セミナー	平成 21 年 8 月	ヤマハ奈良音楽教室ピアノ講師への音楽レッスンと演 奏。子どもの音への感性と音楽表現についても講演。
2) 私のしごと館 「公共のしごと～保育士の しごとと学び」ワークショップ	平成 21 年 9 月	私のしごと館のプログラム「公共のしごと～遊びから学 びへ育てのプロ」として、対象を一般の民間の方々に 保育士の仕事について音楽に焦点をあて、一日の保育士 の活動で音楽をどのように使って役に立てていくかを 紹介していった。
3) 奈良県教育委員会 コミュニティーチャ ープラン	平成 21 年 11 月	奈良県教育委員会「コミュニティーチャープラン」とし て奈良県立養護学校東大寺整肢園からの依頼による音 楽教育活動。各曲に子どもがどのように興味を示すかこ れまでの反応の情報を収集して、リズム楽器を用いてそ の曲の反応を観る。打楽器によるリズムやその変化には 反応少なく、キーボードでのメロディーを導入すると強 い反応を示す。音楽の旋律に共感し共鳴していることが 明確となった。
4) 奈良文化女子短期大学公開講座	平成 22 年 1 月	口笛奏者の日本でプロとして活躍するもくまさあき氏 と第2回日本口笛音楽コンクール優勝者との口笛談義と ピアノとのコラボレーション演奏を行った。
5) 奈良県教育委員会 コミュニティーチャ ープラン	平成 22 年 2 月	奈良県教育委員会「コミュニティーチャープラン」とし て奈良県立養護学校東大寺整肢園からの依頼による音 楽教育活動。各曲に子どもがどのように興味を示すかこ れまでの反応の情報を基にして、子どもたちに子どもた ちにも演奏を促す可能性の高いプログラムを実施。一連 のプログラムに音楽のもつ力と可能性を確認できた。

6) 私のしごと館 「公共のしごと～保育士のしごとと学び」 ワークショップ	平成 22 年 3 月	私のしごと館のプログラム「公共のしごと～遊びから学びへ子育てのプロ」として、対象を一般の民間の方々に保育士の仕事について音楽に焦点をあて、一日の保育士の活動で音楽をどのように使って役に立てていくかを紹介していった。
7) 音楽講師のための公開セミナー	平成 22 年 3 月	カワイ奈良音楽教室ピアノ講師への音楽レッスンや講演。子どもへのピアノ指導の方法について発達の観点から話を行う。
8) シルバー人材センター子育て支援講習	平成 22 年 10 月	奈良県シルバー人材センター「子育て支援講習」により、奈良文化女子短期大学で童謡の世界をテーマに世界の童謡や日本の童謡の歴史など、また古いものから新しい童謡の紹介や歌い方などを平松陽子氏と共演し講演を行った。
9) 音楽講師のための公開セミナー	平成 23 年 3 月	ヤマハ北九州音楽教室ピアノ講師への音楽レッスンや講演。子どもへのピアノ指導の方法についてウィーンでの状況を中心に話を行う。
10) シルバー人材センター子育て支援講習	平成 23 年 12 月	奈良文化女子短期大学で童謡・唱歌の世界をテーマに昨年に引き続いたテーマで主に日本の童謡、唱歌での違いや傾向、リズムや調性への違いも示し演奏して講演した。
11) シルバー人材センター子育て支援講習	平成 24 年 2 月	奈良文化女子短期大学で親子のための音楽会をテーマに子供への音楽の影響や感性や発達について説明。楽器の発達とともに音楽の変貌についても話す。
12) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 4 月	幼児への音の不思議や音環境を体験させるための準備をして、その反応から感性の発達を観察し研究する活動を 1 年に渡り計画し実行した。年少 20 人の 2 クラスを第 1 回目として「この音は何か」をテーマに様々な音を聴かせてその反応を観察した。
13) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 5 月	年少 20 人 2 クラスを第 2 回目として「どんな音がするかな」をテーマにし様々な打楽器を準備して形状からの音を想像していく実験を試みその反応を観察した。
14) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 5 月	年少クラス 20 人 2 クラスを対象に第 3 回目として「弦楽器はどんな楽器かな」をテーマにして、バイオリン、コントラバスを準備して音が出る仕組みについてその音の出る不思議さを感じその反応を観察した。
15) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 6 月	年少クラス 20 人 2 クラスを対象に第 4 回目として「どんな音がするのかな」をテーマにトランペット、トロンボーン、クラリネット等の金管、木管楽器を準備して口から吹くことで音の出る仕組みや、音色、音量の違いを体験しその反応を観察した。
16) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 6 月	年少クラス 20 人 2 クラスを対象に第 5 回目として「ピアノはどんな楽器かな」をテーマにピアノを分解してハンマーが弦を叩くことで音の鳴る仕組みを説明しその反応を観察した。
17) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 10 月	年中 25 人 2 クラスを対象に第 6 回目として「ピアノで聴いてみよう」をテーマにピアノでなじみのある曲をアレンジ演奏などをして聴くことに集中、その後一緒に歌って興味の反応を観察した。
18) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 11 月	年中 25 人 2 クラスを対象に第 7 回目として「ピアノでリズム遊びをしてみよう」をテーマになじみのある童謡からリズムを拾い出しピアノ演奏で誘導して速さのちがいが変化を体験させその様子を観察した。
19) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 12 月	年中 25 人 2 クラスを対象に第 8 回目として「打楽器でリズム遊びしてみよう」をテーマにメロディーのないリズム楽器だけの童謡からのリズムをとりだしクイズ形式で答えを求めリズムへの集中して聴く力を観察した。

20) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 25 年 1 月	年中 25 人 2 クラスを対象に第 9 回目として「和太鼓で演奏してみよう」をテーマに幼児が発表会で練習している様子や速さについての説明を行い反応を観察した。
21) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 25 年 2 月	園の音楽発表会の中で、幼児の保護者にこれまでの活動の紹介とその反応や観察におけるそれまでの研究の成果を発表。さらに音や音楽への関心や幼児の感性についてその大切さを講演した。
22) 音楽講師のための公開セミナー	平成 25 年 2 月	ヤマハ奈良音楽教室ピアノ講師への音楽レッスンや公演。子どもへのピアノ指導の方法についてウィーンでの状況を中心に話を行う。
23) 音楽講師のための公開セミナー	平成 26 年 3 月	奈良 YMCA ピアノ教師・合唱教師への公開レッスン 子どもへのピアノ指導の方法や子どもの音への感性について講演。
24) 音の不思議、音から音楽へ	平成 27 年 12 月	大阪守口市文化センターにおいて、音の性質、音から音楽へと成立していく行方、さらに音楽の表現についてピアノを通して講演した。
5 その他		
1) 日本口笛音楽コンクール審査委員長	平成 17 年～現在に至る	日本において、これまで平成 17 年より約 2 年毎に開催され、当初からその審査委員長として全 8 回の審査をこれまで担当してきている。日本に留まらず世界中からの参加者があり口笛音楽界での主要なコンクールとなつてこの優勝者からはプロとして活躍する者も生まれている。そして、主催する日本口笛音楽協会への音楽的アドバイザーも務めている。また、日本で活躍するプロ奏者の方々への音楽的表現についてのアドバイスも行っている。
2) 中国口哨協会（政府公認）と日本口笛協会との交流会	平成 22 年 12 月 平成 23 年 4 月	日本において、これまで開催してきた口笛コンクールへの総合的な行程や活動等の内容について中国の口笛演奏への主たる団体である中国口哨協会からの依頼により交流と講話を行っている。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 なし		
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 なし		
その他 第三者認証評価活動	平成 25 年 10 月 平成 27 年 10 月	一般財団法人短期大学基準協会による第三者認証評価での評価員として宮崎学園女子短期大学への評価を行った。 一般財団法人短期大学基準協会による第三者認証評価での評価員として頌栄短期大学への評価を行った。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1. ミュージック・ワークブック「Music Workbook」	共	平成 26 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行 (63 頁)	音楽初心者にとって音楽の基本となる必要な知識と基礎的テクニックをできるだけ早く身につけていくことが必要であり、その目的にかなう教材として検討を重ね形にしたものである。ピアノ演奏力向上に導くため、譜面の基礎となる音符の理解や指の運動練習を工夫した課題に解説や図面で示して提示している。これを学習することで、音楽への理解と基礎演奏へのスムーズなスタートとなる教材となっている。 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子 担当部分：pp. 1～16, pp. 32～34, pp. 45～63 音の高さについて、図で表し理解しやすく解説、そしてそのワークとなる問題集を担当。さらに筆頭著者として企画・総括のすべてを担当。
2. ミュージック・ワークブック「Music Sheet」	共	平成 26 年 4 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行 (47 頁)	音楽初心者にとって音楽の基本となる必要な知識と基礎的テクニックをできるだけ早く身につけていくことが必要であり、自己学習での確認となる音楽理論への練習問題集。そして、自己学習でのピアノ練習へと導くための練習曲集となっている。 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子 担当部分：pp. 1～16, pp. 32～47, pp.
(学術論文)				
1) ピアノ教則本の特徴Ⅰ	単	平成 21 年 12 月	紀要第 40 号 (奈良文化女子短期大学発刊) (10 頁)	音楽教育への導入となる様々な教材は、音楽へのとらえ方、その目的や環境、音楽教育に対する考え方等、様々な要因により質も内容も変化に富んだ多様性を見せている。このピアノ教則本の特徴Ⅰとして、バイエルピアノ教則本の原典ともいえる「バイエルピアノ教則本」の歴史や日本において普及していく経緯を調査し、作曲家バイエルの活動やこの作品の内容を詳細に分析することで、この作品のピアノ教材として用いる指導方法について考察している。
2) ピアノ教則本の特徴Ⅱ	単	平成 23 年 11 月	紀要第 42 号 (奈良文化女子短期大学発刊) (10 頁)	ピアノ音楽教育の初心者のための取り組みとして、様々な教則本があるが、その中のツェルニー練習曲は重要なものとなっている。この練習曲が教則本として、何故そうした位置を確立しているのかを作曲家ツェルニーの生い立ち、作曲・演奏活動から彼の作曲技法、その時代の音楽環境をとらえて調査を行った。さらに、教則本として重要な位置を占めるいわゆる「ツェルニー30 番」を取り上げ、作曲家ツェルニーのピアノ曲として詳しく分析を行い、その作品にこめた意図や練習の効果について考察したものである。
3) 幼児の音楽的な発達をうながす音楽活動プログラムの開発Ⅰ	共	平成 24 年 11 月	紀要第 43 号 (奈良文化女子短期大学) (10 頁)	奈良文化女子短期大学附属幼稚園での年少、年中の幼児を対象に半年間 6 回にわたる様々な音楽的感性の成長を促す活動を行い、音楽表現指導内容の有効性や向上を図るための研究を行った。その多様な音楽的活動内容の実施状況とそれによる幼児の様々な気づきや反応に対する観察をとらえて子どもの感性の豊かさへの分析を行っている。 担当部分：pp. 1～4, pp. 9～10 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
4) 音楽教材「Music Workbook」におけるその制作の過程と実施経過の報告	共	平成 26 年 11 月	紀要第 45 号 (奈良学園大学奈良文化女子短期大学部) (10 頁)	音楽教材「ミュージック・ワークブック」の制作するにあたり、音楽初心者への教材として適切な指導内容となるよう検討した。そうした検討過程とそれに対する意図についての報告をしている。さらにこの教材を利用し学修している学生達の状況やこれまでの効果について学生や指導教員へのアンケートも含めて状況の内容を検証し、その報告をしている。そして、この教材への使用法や指導法の工夫した利用について研究したものである。 担当部分：pp. 1～3, pp. 6, pp. 8～9 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子
5) 学生の「つどいの広場」におけるその活動と実施調査の報告	共	平成 27 年 11 月	紀要第 46 号 (奈良学園大学奈良文化女子短期大学部) (11 頁)	幼児たちの活動の場において、学生達が音楽を用い、より良い環境の場を設定することのできる力をどのように展開し獲得しようとしたか。そうした、「環境の場の設定」の立案力の分析や、今後の授業に反映させていくことも大きな目的でもあったため、この活動の観察や学生のアンケート等による調査をとおり、音楽指導における「環境の場の設定」する力を養うため音楽授業内容の成果をどのように音楽表現へと展開し活用していくか、さらにそのための授業内容や指導方法への改善を検討した内容となっている。 担当部分：pp. 1～2, pp. 7～9 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子
6) ピアノ授業におけるその指導法と内容	共	平成 28 年 11 月	紀要第 47 号 (奈良学園大学奈良文化女子短期大学部) (11 頁)	学生達のピアノ練習の実状を観察し、身体的運動や楽譜理解、楽譜分析に対する反応を脳や筋肉、骨格などのメカニズムとして研究し、これまでのピアノ指導の様々な方法に照らし分析した。これらの様々な観点による効果を検証して、新たな身体の使い方や音楽理解、音楽表現方法の獲得について考察していく。さらに、そのための効果的な練習方法や指導方法を提示したものである。 担当部分：pp. 1～4, pp. 9～11 著者：青山雅哉、小川純子、島田稲子
7) 「つどいの広場」への参加による学生の教育的効果	共	平成 29 年 11 月	紀要第 48 号 (奈良学園大学奈良文化女子短期大学部) (11 頁)	奈良市地域子育て支援拠点事業としての「つどいの広場」は、主に 0 歳～就園までの親子が気軽に集える場として地域に広く周知されるようになり、親と子どもの成長を支えることと共に、本学が保育者養成校であるという性質上、子育て支援と学生教育の接続を図ることを目的として実施している。とりわけ、将来保育者を目指す学生が子どもたちと触れ合い実際に学ぶ場としての広場の役割は大きく、早期に広場体験を行うことが学生の実践的学びとなっていることが立証されてきた。本研究では、本学の教学改革計画の中での「⑦実践力向上のために、子育て支援活動と教育との接続を充実させる」に基づいて実施し、授業での参加に注目して参加の在り方の検討とともに、学生の意識の変容を探り、教育的効果を検証し報告するものである。 担当部分：pp. 1～4, pp. 9～10 著者：青山雅哉、小川純子、中田章子

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 大 西 雅 博

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
器楽合奏・器楽演習（打楽器）・マーチング		マーチング、器楽合奏、打楽器、アンサンブル	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項			
事項		年月日	概 要
1 教育方法の実践例			
・新しい形のステージマーチングへの取り組み Vol.1 「小編成バンドのアイディア」		平成 21 年 4 月 ～ 平成 22 年 3 月	名古屋芸術大学音楽学部演奏学科の非常勤講師として、「器楽特殊研究」（1～4 年生 18 人）において、ステージマーチングについて研究する。本年度は、2 月に開催される名古屋芸大フィラルモニクアヴァン定期演奏会のオープニングにマーチングを披露することになり、当初より本番を視野にいたした演習を展開する。マーチングを実施するにはやや少人数であり、楽器の編成にもバラつきがあったため、電子オルガンと管楽器によるアンサンブルに動きを付けて show を構成した。本番のステージでは、ゲストトランペッターとして、アメリカ DCI のチャンピオンチームで活躍した岩尾幸浩氏を招き、本番アメリカのマーチングについてレクチャーも受けた。ステージマーチングについては、ゲストコメンテーターの鈴木英史氏、客演指揮者のヤン・バンデルロースト氏ともに、新しいマーチングのスタイルを感じたと好評であった。
・新しい形のステージマーチングへの取り組み Vol.2 「ステージにおける初心者対策と効果」		平成 22 年 4 月 ～ 平成 23 年 3 月	名古屋芸術大学音楽学部演奏学科の非常勤講師として、「器楽特殊研究」（1～4 年生 72 人）において、ステージマーチングについて研究する。昨年度の演奏会でのマーチングについて高い評価を頂き、今年度はフィラルモニクアヴァンのメンバー全員でステージマーチングを演習することになる。しかし、そのほとんどがマーチング初心者であるため、週一回の授業で完成させるのは困難を極めた。そこで、比較的ゆったりと動けるラベルのボレロを選曲し、ステージ上でほとんど動かない 32 名(初心者)と動き回る 32 名(経験者を核に)をコラボさせて show を構成した。昨年の少人数とは変わって本来の吹奏楽サウンドを生かしたステージマーチングとなった。
・新しい形のステージマーチングへの取り組み Vol.3 「ムーブメントとサウンドの調和」		平成 23 年 4 月 ～平成 24 年 3 月	名古屋芸術大学音楽学部演奏学科の非常勤講師として、「器楽特殊研究」（1 年生 32 人）において、ステージマーチングについて研究する。本年度はステージと客席の一体化をテーマに、2 年生以上は全て客席の最上階での演奏となる。このステージングにより 360 度全方向から音楽が聴こえてくるサラウンド効果をもたらす。しかしステージと客席の距離が演奏のタイムラグとなり、観客にズレて聴こえないよう、指揮者を会場の中心に据え、そのポイントで音楽をまとめた。この曲の作曲者である鈴木英史も絶賛のメリーウイドーに仕上がった。
・新しい形のステージマーチングへの取り組み Vol.4 「パフォーマンスの追求」		平成 24 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	名古屋芸術大学音楽学部演奏学科の非常勤講師として、「器楽特殊研究」（1 年生 32 人）において、ステージマーチングについて研究する。本年度は、打楽器アンサンブルとマーチングパフォーマンスのコラボレーションについて演習し、ムーブメントについての研究を深めた。打楽器六重奏「ジャグラー」の演奏に合わせ、管楽器のメンバーは終始楽器を持たず、パフォーマンスに徹して動く。こちらのドリルデザインと学生が創るデザインを約半分ずつにし、自ら創り出す喜びも味わえるよう配慮した。また楽器を持たないこ

・器楽演習（パーカッション）	平成 26 年 4 月 ～平成 29 年 3 月	とにより、手を自由に活用することが出来るため、通常ステージマーチングでは不可能なパフォーマンスも可能になる。その結果、既成概念にとらわれない柔軟な発想で Show を構成することが出来た。 奈良学園大学において、マーチングバンド部の監督を務める傍ら、非常勤講師として「器楽演習（パーカッション）」の授業を行う。アンサンブルを中心に打楽器の技術を習得し、幼稚園の演奏会、オープンキャンパス等で演奏を披露した。
2 作成した教科書、教材 ・「ドラムトレーニング Vol.1.1～4」作曲 ・ドラムライン in NUA 作曲 ・アルメニアダンス NUA オリジナルマーチングコンテ制作 ・ボレロ NUA オリジナルマーチングコンテ制作 ・メリーウィドウ NUA オリジナルマーチングコンテ制作 ・ジャグラー NUA オリジナルマーチングコンテ制作		名古屋芸術大学音楽学部演奏学科の非常勤講師として、「器楽特殊研究」（1～4 年生 21 人）において、自作の「ドラムトレーニング Vol.1.1～4」を使用。 ドラムラインのオリジナル楽曲を作曲。 名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第 11 回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。 名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第 12 回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。 名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第 13 回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。 名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第 14 回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 ・名古屋芸術大学における授業評価 ・奈良学園大学における授業評価	平成 21 年 4 月 ～平成 29 年 3 月 平成 30 年 4 月 ～	当初 3 年間のシラバス、及び学生の反応が評価され、4 年目より選択授業にも関わらず、演奏学科弦管打コースの新入生は全員履修する運びとなった。そしてその後毎年、名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァンの定期演奏会において、オープニングステージを任されることとなる。 人間教育学部教授に就任。 「器楽演習」「器楽合奏」「合奏指揮法」「基礎ゼミナール」「人間教育学ゼミナール」等の授業とともに、マーチングバンド部顧問を務める。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 ・愛媛県吹奏楽連盟マーチング講習会講師 ・Music office Onishi 主催の打楽器講習会開催 ・赤穂市立赤穂小学校卒業生を送る会出演 ・たつの市立龍野西中学校芸術鑑賞会出演	平成 19 年～ 平成 24 年 平成 21 年 1 月～3 月 平成 21 年 2 月 27 日 平成 21 年 12 月 8 日	平成 19 年 9 月より毎年 1 回、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会が開催される。中学校・高等学校を中心に 2 校から 3 校が選択され受講の対象となる。基本動作からフォーメーションまで、各団体の希望に応じた指導を行う。 自作の「ドラムトレーニング Vol.1.1～4」を教材として、3 ヶ月間に 4 回継続して講習会を行った。西播吹奏楽連盟の後援をいただき、2 箇所で約 80 名の中高生と一般バンドの大人が受講した。 赤穂小学校で開催された卒業生を送る会において、大西ファミリーバンドがゲスト出演する。 たつの市立龍野西中学校で開催された芸術鑑賞会において、大西ファミリーバンドが演奏会を行う。

・願栄寺花祭りコンサート	平成 22 年 4 月 4 日	願栄寺境内において、子供のための花祭りコンサートにゲスト出演する。
・兵庫県保育協会研修会（神戸支部）講師	平成 23 年 1 月 21 日	神戸市内の保育士約 50 名を対象に、間違いだらけの打楽器奏法や、既成概念にとらわれない器楽合奏法について講演を行う。
・兵庫県保育協会研修会（美方支部）講師	平成 23 年 8 月 20 日	兵庫県美方郡の保育士約 40 名を対象に、楽しい打楽器の活用法についての講演を行った。保育士は楽器を持って参加。合奏後、楽譜について即興で編曲し、楽譜作りの重要性についての講義を行う。
・姫路市立神南中学校芸術鑑賞会出演	平成 23 年 11 月 4 日	姫路市立神南中学校で開催された芸術鑑賞会において、大西ファミリーバンドが演奏会を行う。
・赤穂市立赤穂小学校研修会講師	平成 24 年 11 月 7 日	赤穂小学校の全教諭を対象に器楽合奏指導法について講義を行った。実際に合奏をしながら、楽器の数・音量のバランスの重要性を体感し、より音楽的な指導法について考察を深める講義を行う。
5 その他		なし
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許		
・中学校教諭一級普通免許（音楽）	昭和 57 年 3 月 31 日	昭五六中一普第 4678 号（愛知県教育委員会）
・高等学校教諭二級普通免許（音楽）	昭和 57 年 3 月 31 日	昭五六高二普第 5413 号（愛知県教育委員会）
2 特許等		なし
3 実務の経験を有する者について特記事項 (演奏活動)		
・赤穂市立赤穂小学校卒業生を送る会出演	平成21年2月27日	赤穂市立赤穂小学校で開催された芸術鑑賞会に大西ファミリーバンドが出演する。約 500 名の全校児童全員で歌いたいという小学校のご要望に応え、ビリーヴの歌唱指導をプログラムする。低学年にはやや難しい楽曲であるが、多少予習をしていたこともあり、大変素晴らしい合唱となった。
・たつの市立龍野西中学校芸術鑑賞会出演	平成21年12月8日	たつの市立龍野西中学校で開催された芸術鑑賞会に大西ファミリーバンドが出演する。全校生徒は約 600 名在籍するが、当日はインフルエンザのため 3 年生が学年閉鎖となり、1、2 年生のみの鑑賞となる。その 2 学年も全員がマスクを着用しての着席となり、静かな雰囲気でのコンサートとなる。こちらの進行もネガティブになってしまい大きな反省材料となる。しかし、後に送られてきた生徒の感想文は意外と好評であった。

・願栄寺花祭りコンサート	平成22年4月4日	大西ファミリーバンドの演奏する『窓の外には』の話を、住職が小学校の先生から聞き、是非花祭りの行事の日に演奏して欲しいと依頼があった。また「花祭行進曲」「子供の花まつり」の2曲については、ファミリーバンド風にアレンジし、小中学生と一般約40名を対象に一時間のコンサートを行った。
・姫路市立神南中学校芸術鑑賞会出演	平成23年11月4日	姫路市立神南中学校で開催された芸術鑑賞会に大西ファミリーバンドが出演する。今年度より家島中学校から学校長が転勤になり赴任した。以前に2回家島中学校に招待されたのも、その前の姫路市非行防止大会での演奏を評価していただいた結果だと言う。本校ではトラブルが絶えないということで、『窓の外には』の話をじっくり聞かせて欲しいと依頼される。
「指導実績」		
・I P U 環太平洋大学マーチングバンド部アドバイザー	平成22年12月19日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会第38回全国大会小編成の部第6位。
・I P U 環太平洋大学マーチングバンド部アドバイザー	平成23年12月18日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会第39回全国大会小編成の部第5位。
・I P U 環太平洋大学マーチングバンド部アドバイザー	平成23年2月26日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会ステージマーチング全国大会において、審査員特別賞受賞。
・愛媛県立丹原高等学校マーチング講師	平成23年2月26日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会ステージマーチング全国大会優において、優秀賞受賞。
・愛媛県立丹原高等学校マーチング講師	平成24年2月19日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会ステージマーチング全国大会において、優秀賞受賞
・愛媛県立丹原高等学校マーチング講師	平成23年8月21日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会第2回マーチングバンド国際大会に出場。
・愛媛県立丹原高等学校マーチング講師	平成24年8月26日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会第3回マーチングバンド国際大会において、金賞受賞。
・愛媛県立松山中央高等学校打楽器講師	平成24年11月1日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、第60回全日本吹奏楽コンクールにおいて、銅賞受賞。
・松山市立津田中学校マーチング講師	平成24年11月18日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、第25回全日本マーチングコンテストにおいて、銀賞受賞。
・三重県立相可高等学校マーチング講師	平成24年11月18日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、第25回全日本マーチングコンテストにおいて、銀賞受賞。
・I P U 環太平洋大学マーチングバンド部アドバイザー	平成24年12月16日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会第40回全国大会において、大編成の部金賞受賞。
・淳心学院中学校打楽器講師	平成25年2月11日	関西吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、第40回関西アンサンブルコンテストにおいて、金賞受賞。
・大阪市立董中学校マーチング講師	平成25年11月24日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、第26回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。

・ I P U 環太平洋大学マーチングバンド部アドバイザー	平成 25 年 12 月 14 日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会 第 41 回全国大会において、大編成の部金賞受賞。
・ 大阪市立菟中学校マーチング講師	平成 26 年 11 月 23 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 27 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。
・ 奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 27 年 2 月 14 日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会 第 14 回マーチングステージ全国大会優秀賞受賞。
・ 大阪市立菟中学校マーチング講師	平成 27 年 11 月 22 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 28 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。
・ 奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 28 年 2 月 21 日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会 第 15 回マーチングステージ全国大会講評者特別賞受賞。
・ 奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 28 年 12 月 18 日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会 第 44 回全国大会において、大編成の部銀賞受賞。
・ 大阪市立菟中学校マーチング講師	平成 29 年 11 月 19 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 30 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。
・ 奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 29 年 12 月 17 日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会 第 45 回全国大会において、大編成の部銀賞受賞。
・ 奈良学園大学マーチングバンド部顧問	平成 30 年 12 月 16 日	日本マーチングバンド・バトントワリング協会 第 46 回全国大会において、大編成の部銀賞受賞。
4 その他		
・ 名古屋芸術大学大学院音楽研究科特別演奏会出演	平成 21 年 2 月 13 日	打楽器奏者として、クラリネット奏者の大学院生と共演。PM デュボア作曲、クラリネットと打楽器のためのサーカスパレードを演奏。
・ 愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 24 年 9 月 17 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・ 愛知県吹奏楽連盟 愛知県動くコンサート特別アドバイザー	平成 25 年 2 月 9 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県動くコンサートの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD に講評を録音する。
・ 愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 25 年 8 月 10 日	愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。
・ 愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 25 年 8 月 18 日	愛知県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。
・ 愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 25 年 9 月 16 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・ 島根県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 25 年 10 月 20 日	島根県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。

・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 26 年 9 月 20 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 26 年 9 月 28 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・兵庫県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 26 年 11 月 8 日	武庫川樹脂大学において、兵庫県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 27 年 8 月 19 日	愛知県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 27 年 9 月 21 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 28 年 8 月 29 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 28 年 9 月 19 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 28 年 9 月 24 日	西条市体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・日本マーチングバンド協会関西支部 3D 講習会講師	平成 29 年 3 月 5 日	兵庫県立総合体育館において、マーチング協会関西支部主催 3D 講習会の講師を務める。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 29 年 8 月 24～25 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 29 年 8 月 27 日	愛西市立佐織体育館において、マーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 29 年 9 月 18 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・日本マーチングバンド協会関西支部 3D 講習会講師	平成 29 年 11 月 4 日	奈良学園大学体育館において、マーチング協会関西支部主催 3D 講習会の講師を務める。
・平成 30 年度全国高等学校総合体育大会「東海総体」開会式のマーチングステージを演出する。	平成 30 年 7 月 30 日	三重県営サンアリーナで開催された、全国高校総体開会式のマーチングステージにおいて、メインステージの演出を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 30 年 8 月 19 日	愛西市立佐織体育館において、マーチング講習会の講師を務める。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 30 年 9 月 1 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 30 年 9 月 24 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
「各大会の審査員」		
・滋賀県中日吹奏楽連盟 吹奏楽コンクール審査員	平成 21 年 7 月 26 日	近江八幡市文化会館において、吹奏楽コンクール滋賀県大会の審査員を務める。
・マーチング in 高砂の審査員	平成 22 年 9 月 4 日	高砂市総合体育館において、高砂青松ロータリークラブ主催マーチング in 高砂の審査員を務める。

・マーチング in 高砂の審査員	平成 23 年 9 月 3 日	高砂市総合体育館において、高砂青松ロータリークラブ主催マーチング in 高砂の審査員を務める。
・九州吹奏楽連盟 九州マーチングコンテスト審査員	平成 22 年 10 月 9、10 日	別府国際コンベンションセンターにおいて、九州マーチングコンテストの審査員を務める。
・九州吹奏楽連盟 九州マーチングコンテスト審査員	平成 23 年 10 月 8、9 日	鹿児島アリーナにおいて、九州マーチングコンテストの審査員を務める。
・岐阜県吹奏楽連盟 飛騨地区アンサンブルコンテスト審査員	平成 23 年 12 月 23 日	飛騨・世界生活文化センターにおいて、アンサンブルコンテスト飛騨地区大会の審査員を務める。
・佐賀県吹奏楽連盟 佐賀県マーチングコンテスト審査員	平成 24 年 9 月 8 日	佐賀県総合体育館において、佐賀県マーチングコンテストの審査員を務める。
・岐阜県吹奏楽連盟 飛騨地区アンサンブルコンテスト審査員	平成 24 年 12 月 23 日	飛騨・世界生活文化センターにおいて、アンサンブルコンテスト飛騨地区大会の審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 25 年 1 月 14 日	姫路パルナソスホールにおいて、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 25 年 9 月 22 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 26 年 1 月 12 日	姫路パルナソスホールにおいて、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・福岡県吹奏楽連盟 福岡県マーチングコンテスト審査員	平成 26 年 6 月 15 日	サンパレス福岡において、福岡県マーチングコンテストの審査員を務める。
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 26 年 9 月 15 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 27 年 1 月 12 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・福岡県吹奏楽連盟 福岡県マーチングコンテスト審査員	平成 27 年 6 月 14 日	サンパレス福岡において、福岡県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 27 年 1 月 10 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・福岡県吹奏楽連盟 福岡県マーチングコンテスト審査員	平成 28 年 6 月 12 日	サンパレス福岡において、福岡県マーチングコンテストの審査員を務める。
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 28 年 9 月 10 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 28 年 1 月 8 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 29 年 9 月 9 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 30 年 1 月 7 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・四国吹奏楽連盟 四国マーチングコンテスト審査員	平成 30 年 10 月 8 日	西条市体育館において、四国マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 31 年 1 月 13 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 どうなる?今後の部活動	単著	平成26年10月21日	教育PRO	自らの経験に基づき、今後の部活動のあり方について考察する。
(学術論文) 1 日本におけるマーチングの未来像	共著	平成 25 年 3 月	環太平洋大学研究紀要 2012 年度 vol.2 (第 7 号)	日本独自のマーチングについて、今後の方向性を考察し、提言する。
2 新しい打楽器練習法	単著	平成 26 年 12 月 1 日	人間教育学研究第 2 号	教育現場における打楽器の技術を、より短時間に能率よく習得する方法を提言する。
3 新しいマーチング指導法	単著	平成 27 年 12 月 1 日	人間教育学研究第 3 号	日本におけるマーチングの現状を検証し、悪しき既成概念を排除するための指導法を考察する。
4 マーチングにおける基本動作の効率的練習法	単著	平成 28 年 3 月 19 日	奈良学園大学紀要第 4 集	従来の概念にとらわれず、教育現場における効率的な指導法について、検証し提言する。
5 スクールバンドにおける指揮法への一考察	単著	平成 28 年 12 月 1 日	人間教育学研究第 4 号	木管楽器・金管楽器・打楽器の短時間練習法と、合奏指導における効果的な指揮法を考察する。
6 演奏の妨げとなる過緊張(上がり)の軽減について	共著	平成 31 年 3 月 10 日	奈良学園大学紀要第 10 集	俗に言う「あがり症」について検証し、音楽の授業を通して、過緊張を軽減する方法を提言する。
7 意欲的に取り組むための音楽科指導法の一考察	共著	平成 31 年 3 月	奈良学園大学オンラインジャーナル第 2 巻第 2 号	音楽の授業における歌唱指導・合唱指導の難しさを検証し、生徒の自主性を高めるための指導法を考察する。
(研究ノート) 1 部活動の経営に関する研究	単著	平成 29 年 3 月 10 日	奈良学園大学紀要第 6 集	中学校における部活動経営と、大学生の社会性を高めるための組織づくりを比較し、その関連性を研究する。
(作曲) 7 ドラムライン In Seiban	単著	平成21年1月	名古屋芸術大学	名古屋芸術大学「器楽特殊研究」での成果を踏まえ、姫路市を中心とする西播磨地区で打楽器講習会を行った。4 回シリーズの仕上げとして、修得した基礎技術を応用出来るような形で作曲した。打楽器奏者として必要なテクニックを網羅したものとなった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(編曲)				
1. 愛媛県立丹原高等学校打楽器 (オリジナルマーチングコンテ制作)	単著	平成24年月	愛媛県立丹原高等学校音楽部	元禄時代をテーマにマーチングを構成。パーカッションピットの編曲を行う。日本マーチングバント・バントワリング協会主催第3回マーチングバント国際大会において、金賞受賞。
1. 愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	単著	平成22年8月	愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	吹奏楽曲「元禄」をテーマにマーチングを構成・演出。21名を対象にオリジナルのステージマーチングコンテを制作。日本マーチングバント・バントワリング協会ステージマーチング全国大会優において、秀賞受賞。
2. 愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	単著	平成23年4月	愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	吹奏楽曲「元禄」をテーマにマーチングを構成・演出。28名を対象にオリジナルのマーチングコンテを制作。日本マーチングバント・バントワリング協会第2回マーチングバント国際大会に出場。
3. 愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	単著	平成24年4月	愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	吹奏楽曲「紅炎の鳥」をテーマにマーチングを構成・演出。25名を対象にオリジナルのマーチングコンテを制作。日本マーチングバント・バントワリング協会第3回マーチングバント国際大会において、金賞受賞。
4. 松山市立津田中学校吹奏楽部	単著	平成24年6月	松山市立津田中学校吹奏楽部	アメリカングラフィティをテーマにマーチングを構成・演出。37名を対象にオリジナルのマーチングコンテを制作。全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、第25回全日本マーチングコンテストにおいて、銀賞受賞。
5. 三重県立相可高等学校吹奏楽部	単著	平成24年7月	三重県立相可高等学校吹奏楽部	アフリカをテーマにマーチングを構成・演出。45名を対象にオリジナルのマーチングコンテを制作。三重県吹奏楽連盟発足以来、初の全国大会出場を果たす。全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、第25回全日本マーチングコンテストにおいて、銀賞受賞。
6. 大阪市立董中学校吹奏楽部	単著	平成25年~29年	大阪市立董中学校吹奏楽部	ジャズをテーマにマーチングを構成・演出。全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、全日本マーチングコンテストに4回出場し、優秀な成績を収める。
7. 平成30年度全国高等学校総合体育大会「東海総体」開会式	単著	平成30年7月	三重県高等学校合同バンド	平成30年度全国高等学校総合体育大会「東海総体」のメイン開会式において、マーチングコンテを作成し、ステージの演出を務める。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 金山 憲正

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
算数科教育法		算数科における指導内容に関する研究 問題解決学習の指導過程に関する研究 指導方法に関する研究	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事 項		年月日	概 要
1 教育方法の実践例			
1. マルチメディアを使った問題解決場面における見通しを持たせるための適切な助言のあり方と問題解決型の授業の実践方法		平成 19 年 4 月 ～ 平成 26 年 3 月	近畿大学附属小学校と幼稚園の全教員に対して、VIDEO と PowerPoint での吹き出しの動画を主としたマルチメディアを活用して吹き出しの形で提示する方法で、毎月の研修会において「問題解決型の授業を取り入れるねらい」「基本的な学習段階」「課題の吟味と提示の仕方」「見通しの持たせ方」「よりよい解決に向けての集団での話し合いの場の持たせ方」などを教員の習熟度に合わせて解説を積み上げていった。また、同時に行われる公開授業を具体事例として、望ましい授業展開をするための教師の役割についての指導を行った。全教員がパワーポイントでのアニメーションを作成し、指導で効果的に活用できるようになった。 (近畿大学附属小学校での副校長としての実績)
2. ICT を活用して数や図形についてイメージを抱かせ、その基本概念の理解を深めて小学校算数指導のための教材分析が的確に行えるようにすることを狙った実践		平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 1 年次生の学生約 120 名に対し、算数・数学教育の教材研究の基盤を育成することをねらった「数の理解」の講義において、ICT を活用した指導を行った。特に、内包量の概念や図形概念、測量や統計などイメージすることが難しい内容や処理が煩雑になる内容についての指導の際には重点的に ICT を活用した講義を行った。グループ活動ではあるが数量や図形の概念形成の指導において効果的な ICT の活用方法を工夫し、模擬実践が行えるようにまでなった。 (奈良学園大学「数の理解」の実践)
3. アクティブラーニングの形態で学生相互が課題に対して協働学習のもと多様なアプローチで問題解決型の授業のあり方を追求していくことをねらった実践		平成 27 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 2 年次生の学生約 120 名に対し、子供が主体的に問題解決活動を推進していくための授業構成とその指導方法について、学生自身が問題意識を持って取り組み理解することをねらった「算数科指導法」の授業を実践した。授業の環境整備として「算数科指導法」の特設ホームページを設けそこに事前課題や学生からの質問事項を記載する欄も設けリアルタイムで互いの情報が共有できるようにして授業の充実をめざした。重点教材についての授業を想定し、指導案を作成しての模擬授業の実施とそれに対する評価を行い改善案について学生間で話し合えるようになった。 (奈良学園大学「算数科指導法」の実践)
2 作成した教科書、教材			
1. 「思考力アップのための算数的活動」 【再掲】		平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において 1 年次生 120 名を対象にした「数の理解」、2 年次生 110 名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。算数的活動が重視される背景を学習指導要領とピアジェの心的活動説とを踏まえてどのように指導にあたるべきかを解説し、その具現に際してのポイントを具体的な事例をあげてまとめたものである。特に、「算数科指導法」授業においては具体的事例の中から数事例ずつについて取り上げアクティブラーニング方式で操作的活動についての理解を深める

		ねらいで効果的に使用し、そのねらいを達成できている。
2. 「活用を重視した算数科の授業」 【再掲】	平成 26 年 4 月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において 1 年次生 120 名を対象にした「数の理解」の授業で使用。ここでは自己効力感、成功感を味わわせる反省的思考活動を工夫改善するためにポイントとなる単元間の関連性と発展性を理解させるとともに教材分析の重要性とそれを的確に行うことができる資質を養うことを意図してざして作成したものであり、授業のねらいと対応させ随所で使用した。知識・技能などは活用を通して定着し、定着した知識・技能などから活用できそうなものを見つける学習活動の重要性に気づかせるために効果が上がっている。
3. 「学力調査結果を授業改善に生かす取り組み」 【再掲】	平成 27 年 4 月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において 2 年次生 120 名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。指導と評価は一体のものであり、児童の学力向上を確実にするためには的確に児童の実態を把握することが大前提になり、そのための学力調査をいかにこなせば良いかについてまとめたものである。授業では主に「問題作成の心構え」「観点評価項目の設定」など問題作成に関する留意事項と結果処理の流れや活用法に関する留意事項を理解させる際に使用し、授業のねらい達成に向けて効果に活用できている。
4. 「算数嫌いをつくらない授業」 【再掲】	平成 27 年 4 月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において 2 年次生 120 名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。算数の学習についての児童アンケート結果における「好き」と「嫌い」の理由を分析することから、授業法の問題点を探りより望ましい授業展開を考えさせる授業場面で使用した。また、「好き」「嫌い」を左右する心情面を重視した授業作りとともに、協働学習の土俵となる学級作りやコミュニティ作りの重要性についての理解を図る授業においても使用した。授業を通してコミュニケーション能力を高めていくための環境作りや展開の工夫などに着目して指導案を作成できるようになってきた。
5. 思考力・判断力・表現力を育成する算数授業 【再掲】	平成 27 年 4 月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において 2 年次生 120 名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の創造に向けて、その推進力となる学習意欲に着目して主体的な活動が保障される授業展開のあり方をまとめたものである。授業では指導内容の系統性を踏まえるとともに発達心理学面も考慮に入れた「～らしさ」の活動の様相を想定した授業展開を心がけることが主体的な解決活動を展開していくことになることに気づかせ、それを意識した模擬授業の指導案作成の際に使用して参考にさせた。本教材を使用することにより、指導内容面と発達心理学的な面との両面から授業を創造していこうとする姿勢が見られるようになっている。
6. 思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の参考指導案集 (算数科ホームページ) 奈良学園大学人間教育学部発行	平成 27 年 4 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において 2 年次生 120 名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。思考力・判断力・表現力を育成する授業の創造に向けて、様々な授業展開のあり方をまとめたものである。主体的な解決活動の展開を意識した授業指導案作成の際の参考にさせた。 このように指導を受けて作成された指導案は「算数科」専用ホームページに掲載され、いつでもどこからでも参考資料として使用することができ、特に教育実習中の学生に好評だった。

3 教育上の能力に関する大学等の評価		
1. 近畿大学学長による評価	平成 23 年 3 月 14 日	近畿大学附属小学校副校長として独自の附属小学校の授業観及び授業スタイルの見直し、基礎・基本の学力を育成するための指導をめざした教育改革を行った。また、習熟度別学習指導、チームティーチングによる指導、個に応じた指導のあり方などについての現職教育を行った。その結果、全国学力実態調査においても子どもの学力が著しく伸びたことから他の教育関係者や保護者からも高い評価を得るとともに、人事評価においても「A」評価を受けた。
2. 奈良学園大学採用時の学長評価	平成 25 年 8 月	12 年間の公立学校校長、6 年間の近畿大学附属小学校副校長としての学校経営の経験と実績、さらには大阪市教育委員会主任指導主事、大阪市小学校教育研究会算数部部長、11 年間にわたる大阪教育大学教育学部で非常勤講師として算数教育の指導に貢献した経験と実績に対して高い評価を受けた。また、教育に対する熱意と向上心に関しても高い評価と信頼を得た。
3. 奈良学園大学人間教育学部平成 29 年度後期学生による授業評価	平成 29 年 2 月	1 年次生 120 名の学生が対象の「数の理解」の講義に対する授業評価アンケートでは、ICT を活用した講義の進め方に対して、「説明が分かりやすかった」92%、「先生の授業に対する熱意や意欲が感じられた」94%、「総合的に見て満足 of いくものであった」94% などいずれも 90% 以上の回答結果で、学生が高い満足度を感じる授業が行われていたと判断できる集計結果を得ている。
4. 奈良学園大学人間教育学部平成 29 年度後期学生による授業評価	平成 29 年 7 月	2 年次生に対する前期の「算数科指導法」の講義について実施した学生の授業評価アンケートの結果、ホームページを活用して事前に課題を提示し、それについてアクティブラーニング形式で進めた講義に対して、「この授業に対する受講意欲は高かった」94%、「説明が分かりやすかった」95%、「先生の授業に対する熱意や意欲が感じられた」94%、「総合的に見て満足 of いくものであった」93% など 90% 以上の回答結果となっており、充実感があつた授業と判断できる評価を得ている。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 近畿大学附属小学校副校長としての実績 ・西日本私学小学校連盟主催の研究大会の会場校として発表 (平成 23 年 5 月 参加者 1100 名)	平成 19 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	近畿大学附属小学校副校長として、また、学力向上と教員の資質向上の責任者として、毎週行われる教員研修会において、教師主導の学習指導から児童主体の学習指導への転換を目指した授業創造のため解説を行った。授業作りの土台となる学級作りについて作成したテキストを使用して講話をし、グループディスカッションを取り入れ教員の資質の向上を図った。また、同キャンパスの附属幼稚園に対し、小学校を見据えた幼児期における数的な概念についても指導した。
2. 2009 近畿大学公開講座 における講師 「算数で育てたい力と学校教育」 (対象：保護者及び地域住民 参加者 120 名)	平成 21 年 8 月 28 日	「問題解決型の学習の果たす役割」や「子ども自身が算数を創り出していく学習」について具体例を通して紹介した。今、日本の算数教育が目指す方向と学習指導要領改訂の背景について、そのねらいについて講演した。その中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力の育成の関連にも触れそれぞれの重要性について解説した。
3. 新算数教育研究会主催・第 34 回セミナー講師 「新学習指導要領における実践上の課題」 (対象：全国の算数担当教員 400 名)	平成 21 年 12 月 25 日	教育基本法、学校教育法の改正に伴う学習指導要領の改訂の趣旨を算数科に焦点を当てて講演を行った。その中で、思考力・判断力・表現力の育成を目指した新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業を具現する際に重要となる、「見通しを持たせるための指導順序と単元構成の工夫」「表現力を育てるためのノート指導のあり方」について具体的な事例を挙げて解説を加えた。

4. 近畿大学附属幼稚園教員対象指導講座の講師 学期に1回、年3回実施 (対象：幼稚園教員及び保護者)	平成22年4月 ～ 平成25年3月	同じキャンパスにある近畿大学附属幼稚園の教員に対して小学校を見据えた幼児期の子どもに数概念や図形概念を育てる算数の基礎的指導のあり方について指導助言を継続的に行った。ゲームや遊びを通して楽しみながら数概念の素地を養ったり図形の構成要素を意識させたりする指導について具体的な例を通した演習形式で研修を行った。また、幼小接続を意識した幼稚園教育の取り組みへの理解と協力を得ることをねらって保護者へも参加を呼びかけた。
5. 2010近畿大学公開講座 講師 「算数科で育てなければならない力」 (対象：保護者及び地域住民 参加者120名)	平成22年9月 10日	主な対象者が地域の一般市民のため、算数科で育てる力と、そのため学校ではどのように具体的な授業が行われているかを、教科書の内容を系統的に取り上げて講演した。また、幼小接続の観点から、幼稚園で学んでおく小学校入学時の算数の学習に効果がある数概念や図形概念形成のための事例についても紹介した。
6. 西日本私学連盟主催平成23年度研修会 講師 「ゆめ教育からの決別ー算数科の指導を例にー」 (於：近畿大学附属小学校、参加者約1100名)	平成23年5月 23日	全体会において講演した。主に、新学習指導要領で目指す学力の育成するためには、教え込みの解説型の授業から脱却し問題解決型の授業へ転換する必要があることを強調した。同時に、問題解決型の授業成立には教師の深い教材研究が必要であるため、使命感を持ち教育活動に取り組む必要性も併せて強調した。
7. 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科での 講義	平成26年4月 ～ 現在に至る	「数の理解」の授業では、数量や図形などの基本的な概念や基礎的な知識に対する理解を深めるとともに、算数のよさを知り、数学的思考力や判断力、表現力を養う授業づくりのための教材研究の手がかりが得られるように、ICTの活用や具体的な事例を交えて授業を進めている。特に、数学的思考力を涵養する力量と算数科の教材を開発する力量を育成することに重点を置いた講義内容である。 「基礎ゼミナールⅠ」の授業では、学生の自己表現力の育成に加えリメディアル教育を分担し、学生個々の習熟度に応じたテキスト作りと、その解説を作成している。 「算数科指導法」では、アクティブラーニングの形態で、学生相互が課題に対して協働学習のもと多様なアプローチで問題解決型の授業のあり方を追求していく授業となっている。学習指導案作成の基本や模擬授業を通して問題提示や発問・助言のあり方についての理解を深めることをねらいとしている。
5 その他		
1. 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の学生 に対する課外における算数・数学指導	平成26年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の学生に対して、リメディアル的な取り組みが必要な学生に対しては基礎的な数学の理解をねらい課外での指導を行っている。また、希望者には採用試験対策の数学の指導も行っている。
2. 大阪市立放出小学校の算数教育充実に向けての 実践研究に年間を通しての指導	平成26年4月 ～ 平成28年3月	校内研究会での算数指導のねらいと望ましい指導のあり方の解説と各学年の実践授業についての指導を行っている。
3. 八尾市立永畑小学校の算数教育充実に向けての 実践研究に年間を通しての指導	平成27年4月 ～ 平成29年3月	校内研究会での算数指導のねらいと望ましい指導のあり方の解説と各学年の実践授業についての指導を行っている。
4. 奈良学園小学校の算数教育充実に向けての指導 と助言	平成27年9月 ～ 現在に至る	奈良学園小学校が現在「メタ認知」に着目した実践研究に対して、望ましい授業の構成の仕方や展開の工夫及び評価の生かし方などについて指導と助言を行い充実した教育活動の創造をめざしている。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 1) 小学校教諭一級普通免許 2) 中学校教諭一級普通免許 (数学) 3) 高等学校教諭二級普通免許 (数学)	昭和46年4月 昭和46年4月 昭和46年4月	昭和46小一普第160号 (大阪府教育委員会) 昭和46中一普第1228号 (大阪府教育委員会) 昭和46高二普第328号 (大阪府教育委員会)

4) 司書教諭	昭和46年1月	昭和46年12月1日 第49956号(文部省)
2 特許等 な し		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 近畿大学附属小学校 副校長	平成19年4月 ～ 平成25年3月	近畿大学附属小学校には、「児童の算数の学力向上を達成させること」と「教員の資質を向上させること」が主たる使命での赴任であった。まず、教員研修の充実と共に研究・教員組織の改革を提起し、大改革を実施した。 具体的な改革の内容は、「高学年への教科担任制の導入」「第3学年から第6学年までの算数科はチームティーチングでの指導体制の導入」「教員全員が自分の専門教科を定めその教科の研修を深める研究体制の導入」などである。 特に、教え込み教育から脱却し、問題解決型の授業へと質の転換を図ってきた。結果、全国学力状況調査では、国語・算数のA・B問題とも全国平均を10ポイント以上上まわった。 教職経験8年未満の教員に対しては、別に「若手研修」と名付けて、「学級経営のあり方」「保護者との対応のあり方」「事故の対処の方法」「学級内で起きたトラブルへの対応法」など、具体的な事例を想定して考えさせるなどの研修を行った。
4 その他		
1) 奈良学園大学 FD委員会 委員長	平成26年4月 ～ 平成28年3月	FD委員長としてこれまで実施されてきた事業を見直し本学のFDに対する取り組みの改善を図った。 特に、これまで前期・後期と年2回実施の「学生の授業評価アンケート」事業において、「調査用紙の作成・集計・分析」の外部業者への委託を止め、内部処理をする方針に変更した。その道筋をつくるため、「マークシート用紙の作成」「マークシートの読み取り」「読み取り結果を集計・分析するためのプログラム作成」「集計・分析結果をまとめて図表に表すためのプログラム作成」「各授業担当者への集計結果の通知と自己評価の記入依頼」「全ての集計結果をPDF形式にまとめてホームページにアップ」の一連の作業を委員長として全て一人で作成・処理している。評価対象は約130講義でアンケート用紙枚数は約3000枚になるが、実施から集計・まとめまでに要する時間は業者委託に比べ半分の期間で処理できているため、本学のホームページへのアップもタイムリーに行っている。 また、教員が互いの授業参観を通して指導力を高めるための「公開授業」事業では、他学部の授業参観も可として学部間における閉鎖性の払拭をめざしている。あと「授業改善シート」「FD講演会」事業についても改善・充実の方向で実施している。
2) 奈良学園大学 教職センター委員	平成26年4月 ～ 平成29年3月	2年次生が対象となる「介護等体験」に関する取り組みの企画・立案を行っている。また、来年度から始まる「教育実習」関連では、2年次生を対象に実習受け入れの依頼の手続きについて全体への指導とあわせて個別への指導も行っている。 教員採用に向けて基礎的学力の定着を保障するために設けられている「教師塾」について、その効果的な運用方法について企画・立案と運営に関わっている。
3) 奈良学園大学 入試委員会 委員長	平成28年4月 ～ 現在に至る	本学園のAO入試・公募制推薦入試・一般入試・大学入試センター試験利用入試の各入試に関する入試業務が厳正に執り行われる為の体制の整備と準備に 計画的に取り組んでいる。開学からの入試データを分析し今後の望ましい入試業務についての改善案を作成している。また、大学入試センター試験会場としての準備、実施等の運営管理にも取り組んでいる。

4) 奈良学園大学 副学長	平成 29 年 4 月 ～ 現在に至る	本学園三郷キャンパス長として教職員個々の業務内容を把握・調整し学園運営が円滑にそして効率よく推進できるよう努めている。特に、共通教育委員会・入学試験委員会・広報委員会・FD委員会・教務委員会に関しては各委員会担当副学長としての任務に携わっている。 また、来年度の人間教育学部の定員増に向けての各種手続きや入試・広報活動のあり方について支障が起きないよう点検と整備に取り組んでいる。
---------------	------------------------------	--

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1. 活用力を育てる！算数授業プラン&ワークシート	共著	平成 21 年 4 月	明治図書	低・中・高学年編の 3 冊で構成され、4 つの活用力を育てるワークシートと授業を実践する際に参考となる展開例を提案。 B 5 版 全 1 3 6 頁 (3 冊) 編者：金本良道 共著者：一ノ瀬喜子、吉田博、岩崎浩、笠置道宏、赤沢マキ、<u>金山憲正</u>、松岡克典、岸田初美、森洋子、中井美貴子、森本明、野津吉宏、植村徳治、谷口孝臣 他 3 0 名 本人担当部分：低学年編では第 1 学年「大きい数」(P42～P45)のうち「この授業で育てたい活用力」の項を単著。 中学年編では第 3 学年「重さ」第 4 学年「分数」(P84～P87)の事例について、また、高学年編では第 6 学年「立体の体積」(P108～P111)の事例について「この授業で育てたい活用力」の項を単著。 「大きい数」では、具体物を数えた個数を「何十といくつ」と表したことから類推させて、数の仕組みと表現のよさに気づかせる指導を提案。「重さ」では、長さ、体積、重さの単位のそれぞれに共通する関係や類似性を見だし、見いだした関係や類似性から新たな単位を予想する活動を取り入れた指導について提案。「分数」では、和が 1 より大きくなる同分母分数の加法の計算の仕方を図や数直線を用いたり、単位の考えを基にしたりして考える活動を取り入れた「見通しを持ち筋道立てて考える力」を育てる指導について提案。「立体の体積」では図形の面積の求め方で学習した等積変形や倍積変形の考え方を活用して、角柱や円柱の体積を求めたり、ICT を用いて説明したりする活動を取り入れた指導について提案している。
2. 「小学算数」(教師用指導書研究編)	共著	平成 23 年 4 月	日本文教出版	全学年を通した体系に重点を置いて、各領域別の系統的な解説とその数学的背景を明らかにするとともに、新しい指導方法、数学的思考方とその指導、ICT の活用など現在の算数教育における主要な問題点について示す。 A 4 判 全 2 8 6 頁 編者：日本文教出版社編集部 共著者：小山正孝、中原忠男、<u>金山憲正</u>、重松敬一、崎谷真也、狭間節子 本人担当部分：「総論」(P2～P12)を単著 「確かな学力の向上を目指した算数科の学習指導」の章では、算数の学習指導の基本的な考え方として、ブルームの教授理論に基づいて「基礎的・基本的 な知識・技能の習得と活用」「思考力・表現力の育成」について解説している。また、「確かな学力が身につく算数の学習指導」の章も前章同様に「問題解決型学習の意義」「算数の学び方の指導」「表現力の育成」「学習意欲の向上」など新学習指導要領のめざしている学力と育成のための留意点を述べている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				また、幼児期に経験した概念形成の過程を踏まえて指導に当たることが不可欠な小学校低学年の指導について、幼小の連携を図ることの必要性を強調し、ピアジェの認知発達理論を参考にした幼児期の児童の発達段階に即した指導形態についても解説している。
3. 教育フォーラム 50 「やる気」を引き出す・ 「やる気」を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房	教師が子どもの「やる気」を引き出し、育てるための方策を、国語・算数・体育・総合的な学習の時間などとの教科の関わり、教材・校内研究の取り組みなどを考察、提案する。大前提となる教師自身の「やる気」についても論じる。 A 5 判 全 1 7 9 頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、松田智子、善野八千子、<u>金山憲正</u>、勝見健史、久田孝、錦織彰、住本克彦、野田健司、中田正浩、前田洋一、中村哲、瀧明知恵子、浅田匡 本人担当部分：「子どもの〈やる気〉が出る算数授業のために」(P47～P57)を単著 知識及び技能の定着を確かなものにしたたり思考力・判断力などの能力を育成したりする際の大前提となる主体的な学習活動は子どもの「やる気」が推進力となって推進されるものである。ブルーム理論で強調される認知領域の目標に情意領域の目標と指導方法の工夫を加え、「やる気」を引き出しそれが推進力となって展開する指導についての理論と方策を具体的な実践事例を通して紹介している。また、幼稚園児の数概念を育てる上での着眼点や留意点について解説を加えている。さらに、「やる気」を育てる上で重要な役割を果たす個が認められる集団づくりのポイントについても紹介している。
4. 思考力アップのための算数的活動	単著	平成 25 年 1 月	株式会社 E R P	算数的活動を重視した学習展開が強調されている背景を学校教育法及び学習指導要領の改訂のねらいとピアジェの心的活動説を踏まえて解説するとともに、算数的活動をどう理解して指導にあたるべきかを明らかにした。主に manipulation に近いものを指す具体的操作活動をはじめ、マッハが提唱している思考実験にも相当する「内的な活動」の効果的な取り入れ方、さらには Model-making の過程の踏ませ方について具体的な教材を取り上げて紹介している。 A 5 版 全 6 8 頁
5. 教育フォーラム 54 各教科の学習を支える言語活動—言葉の力をどう用いるか	共著	平成 26 年 8 月	金子書房	新しい学習指導要領で強調されている「知的な力」、「確かな学力」を育てていく土台となる「言葉の力」をどう捉え、どう活用することが各教科の学習の充実につながるのかを考察し、その指導のあり方を提案している。 A 5 判 全 1 7 9 頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、松田智子、善野八千子、<u>金山憲正</u>、金澤孝夫、阿部秀高、桜本明美、大畑健実、川俣徹、蔵あすか、 本人担当部分：「算数の授業に言語活動を生かす」(P47～P57)を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
				思考は、言語を媒介とする自己内の対話によって成立し、他者に向けて表現したり他者の表現内容を受け入れたりする活動を通して整理され、洗練されたり深められたりする。したがって考える力は表現する力を抜きにしては考えられない。数学的な表現様式については、ブルーナの EIS 理論が基盤となって「現実的表現」「操作的表現」「図的表現」「言語的表現」「記号的表現」の五つに分類されることがある。算数科の指導においては「言葉の力」を「言語的表現」のみに限定せず、「現実的表現」から「記号的表現」にいたる全てを「算数のことば」ととらえて指導にあたることの必要性を強調した内容である。
6. 人間教育を視点にした教職入門 第6章 教員の仕事 第9章 教育実習の意義と心得	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	激動する社会、急変する教育界の中で、次世代の社会を担い、自律して問題解決能力を持つ子どもを育てることのできる資質・能力を身につけ、地球的視野から持続可能な社会の発展と構築に貢献する教師の心構え、あり方などについて、人間教育を視点にして述べている。 A 5 判 全 2 8 0 頁 編者：中田正浩 共著者：中田正浩、鎌田首次郎、松田智子、中田律子、<u>金山憲正</u>、瀧明知恵子、長井勘治、太田雄久、 本人担当部分：「小学校教員の仕事」(P110～P120)を単著 「生きる力」を育てることを目指して各学校が掲げている教育目標達成に向けて教師が努力していかなければならないことを、「教科等の指導に関わる仕事」「生活指導に関わる仕事」「校務分掌として位置づけられた仕事」のそれぞれについて解説している。 本人担当部分：「教育実習の意義と心得」(P235～P253)を単著 教育実習は、教師として教壇に立つときの心構えや必要となる指導技術などについて事例を挙げて解説している。また、教育実習での経験は、将来の教師として自己のあり方を厳しく問い、教職に向けての真剣な学びを始める契機となるため、教育実習への参加には、日常の講義に出席する際の心構えとは全く異なる性質の決意が求められることの理解を図ることをねらって説いている。
7. 教育フォーラム 57 PISA 型学力を育てる	共著	平成 27 年 2 月	金子書房	近年のような社会環境の変化の激しい時代にあっては、子どもたちは全く新しい事態や問題に次々に直面する。それらを解決する力をどう育てられるか、原理的な面、大学入試に関わる面、各教科の授業改革の面から論じ具体的実践的な提案をしている。 A 5 判 全 1 5 8 頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、立田首治郎慶裕、西辻正副、鎌田首治朗、清水静海、角屋重樹、岩田一彦、渡部久美子、鶴飼洋子、<u>金山憲正</u>、佐藤雄一、松田智子、高木悠哉、井上信子 本人担当部分：「算数 B 問題が解ける力を育てる」(P95～P105)を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
				活用力が問われるB問題を解く力を育てるためには、旧態依然とした指導者中心の教え込み指導から脱却し、子どもが主体的に学習活動に取り組む授業を通して、活用で使う道具となる知識・技能を身につけさせることの重要性について論じている。つまり、どれだけ身につけていること以上にどのようにして身についたのかに力点を置いた授業づくりをめざす必要がある。そのための授業法として、ポリアの提唱した問題解決の4段階の重要なステップを基本とし、各段階における指導の充実を図ることが思考力、判断力、表現力の育成につながることを算数科の指導を例に挙げて述べている。
8. 教育フォーラム 59 対話的な学び	共著	平成 29 年 2 月	金子書房	「主体的な学習」と密接な関係にある「対話」を教育活動に取り入れることは、教師にとって今後の大きな課題のひとつである。積極的に「対話」を用いることで「深い学び」を得るためにはどうしたらよいか。どのようなことに注意し、どのように授業を展開していけばよいのか。多面的な視点から、具体的かつ実践的な提案をしている。 A5判 全169頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、伊崎一夫、<u>金山憲正</u>、菅井啓之、後藤紗貴、北俊夫、赤堀博行、善野八千子、牧田秀昭、五百住満、中村豊、石森広美、オチャンテ村井、井上信子 本人担当部分：「対話的な学びを組み込んだ算数学習のために」(P47～P57)を単著 「対話的な学び」の「対話」が、指示されたから始めるという受け身的な「対話」ではなく、興味や知的な好奇心などの心情面に支えられた問題意識の醸成につながる「対話」やじこの考えを確かめたり深めたりする必要を感じて始める「対話」でなければ、目的としている主体的能動的な学習を重質させることは難しい。そこで求められる指導者の自動理解と教材研究の重要性とその方法を具体的な例を通して説いている。
9. 教育フォーラム 60 対話的な学び	共著	平成 29 年 8 月	金子書房	学習指導要領の総則について議論が展開されている「深い学び」については未だに焦点が拡散している現状である。その「深い学び」は単に「授業の型」や「学習方式」といった一定の教授・学習活動のパターンに関わるものではない。どのようにすれば「深い学び」になり、それを実現できるのかについて、具体的かつ実践的な事例を通して、基本的なポイントを明確に提案している。 A5判 全144頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、古川治、伊崎一夫、<u>金山憲正</u>、大畑健美、菅井啓之、後藤紗貴、石森広美、善野八千子、岡村季光、松井典夫、瀧明知恵子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				本人担当部分：「算数科における〈深い学び〉とは」(P79～P88)を単著 ここでは、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を個々に分析的にとらえるのではなく「深い学び」が授業改善の究極の目標であるにとらえ、「深い学び」を達成させるためには「主体的・対話的な学び」があつてはじめて実現するものであるという立場で算数指導について提案している。その際の着眼点として「学習意識」というものに焦点をあてることにより解決活動がより主体的に展開できることを具体的事例で紹介している。
10. 教育フォーラム 61 対話的な学び	共著	平成 30 年 2 月	金子書房	新しい学習指導要領に入れられた「見方・考え方」は、高次な学習の土台として期待される大切な視点の 1 つである。この「見方・考え方」には各教科等における基本かつ重要といえる固有の展開があるはずだが、実際にはどのようにクローズアップし、授業の組み立てに生かすべきかが課題となっている。各教科等の特質を踏まえた教育のあり方を具体的に論じ、「見方・考え方」を生かす授業実践のヒントを提案している。 A5判 全148頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、<u>金山憲正</u>、角屋重樹、中村哲、越智貢、大畑昌己、善野八千子、高木悠哉、杉浦健 本人担当部分：「算数科における〈基本的な見方・考え方〉」(P38～P48)を単著 数学的に考える資質・能力の育成をめざす算数科の学習指導の基本的な考え方として「数学的な見方・考え方」が深い学びにつながる授業を創造していく上で重要な役割を果たすという立場で論を進めている。「数学的な見方・考え方」を働かせながら知識及び技能を習得したり、習得した知識及び技能を活用して課題を探究したりすることにより充実した授業の展開となること示した実践事例を挙げて提案している。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11. 教育フォーラム 62 人生や社会をよりよく生きる力の涵養を	共著	平成 30 年 8 月	金子書房	大きく動きつつある現代社会において、子どもたちは社会生活や職業生活の在り方に対応する力を身につけなければならない。しかし、「人間」そのものが見失われ、「社会的に役立つ駒」を育成する教育となってしまうのではなく、その土台となる「人生」の充実の大切さを新しい学習指導要領では示している。具体的にどのような授業展開をすればよいのか、よりよく生きる力を育むための工夫と実践を紹介している。 A 5 判 全 1 5 8 頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、<u>金山憲正</u>、菅井啓之、西村紗貴、中村哲、飯田真人、寺尾正、中村浩也、八木成和、今西幸蔵、井上信子、二瓶弘行 本人担当部分：「算数教育を通じて人生や社会をよりよく生きる力の涵養を」(P37～P46)を単著 問題解決の過程は疑似社会であるともとらえられるため、それを主体的な取り組みにより体験することが充実した人生を過ごすための生きて働く数学的な考え方を育てることになると期待できる。その主体的な活動の推進力となるのが子どもの学習意識であることと、その学習意識を軸にした授業づくりについて具体的な実践事例をあげて児童の実態把握の仕方、教材研究のあり方について提案している。
12. 教育フォーラム 63 人間性の涵養	共著	平成 31 年 2 月	金子書房	新しい学習指導要領に加わった「人間性の涵養」。これこそが教育で実現すべき最終の成果である。しかし、この実現は大きな課題であり具体的な方法は各々の教育人が試行錯誤しながら地道に築き上げていく必要がある。学校生活全体の指導を通して、教師にできる「人間性の涵養」の取り組みについて、実践的な種々の提言を紹介している。 A 5 判 全 1 9 9 頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、<u>金山憲正</u>、金澤孝夫、菅井啓之、西村紗貴、岡本祐佳、中村哲、飯田真人、山口聖代、高橋美由紀、中村浩也、阿部秀高、井上信子、杉浦健、古川治、栗岡住子、宮坂政宏 本人担当部分：「算数教育と人間性の涵養」(P48～P57)を単著 学習指導要領算数科においても、教科の目標はもちろんのこと、新たに各学年の目標においても「～しようとする態度を養う」との表記があり、学習意欲に支えられて主体的な問題解決活動を進めていく原動力となる子どもの内面を重視した指導をめざしていることがうかがえる。ここでは、「学びに向かう力、人間性等」の柱ではどのような心の動きを想定しているのかをとらえ、その心の動きに焦点を当てて人間性の涵養をめざした算数指導について具体的な事例を取り上げて提案している。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文)				
1. 新学習指導要領における実践上の課題－活用する力を育む場づくり－	単著	平成 22 年 3 月	新算数教育研究会 新しい算数教育 No. 470	学校教育法 30 条の 2 に基礎的・基本的な知識・技能を習得し、それを活用して思考力、判断力、判断力を育成する旨のことが明示されている。つまり、思考力、判断力、表現力を育成する重要なポイントとなる「活用」に焦点を当てた授業づくりを心がけることが「生きる力」を育てていく上で不可欠であることを述べ、その指導のあり方を提案している。充実の着眼点として「既習の学習内容を活かす単元構成の工夫」、「算数のおもしろさ、よさに触れさせる指導」、「学習ノートの充実」の 3 点を挙げ、具体的な実践例を通して活用する力を育む場づくりについて論じている。
2. 活用を重視した算数科の授業	単著	平成 23 年 5 月	日本教育総合研究所 教育 P R O No. 18 P12～P15	DeSeCo によれば、PISA 学力調査の「読解力リテラシー」「数学的リテラシー」は、社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」カテゴリーのうち、「言葉、シンボル、テキストを相互作用的に活用する力」に関わると言っている。算数科の学習で習得する知識・技能は、これに関わるキー能力である。この能力を育成するため、自己効力感、成功感を味わわせる反省的思考活動を工夫改善し、「習得教育」「活用教育」「探求教育」を統合的にとらえ、習得と探求を活用でつなぐ算数教育のあり方を提案した論文である。
3. ゆるみ教育からの決別	単著	平成 24 年 2 月	日本私立小学校連合会 平成 23 年度 研究集録	改訂された学習指導要領をもとに、学校教育現場が目指さなければならない指導のあり方を算数科に焦点をあてて提言している。学習指導要領の総則及び内容を分析し、総則で各教科の指導に当たり問題解決的な学習の重視が述べられ、特に算数科では算数的活動が内容に明示されていることから、これまでの指導の取り組みが十分でなかった点を指摘すると共に、改善策について論じている。指導内容に算数的活動という指導方法に関することが記述されたのは教師としてその力量が問われているとの危機感を持つ必要があることを訴えている。学習指導要領のねらいを達成するための授業づくりの観点を例示し教材研究への取り組む重要性を述べた論文である。
4. 思考力アップのための算数的活動	単著	平成 25 年 4 月	日本教育総合研究所 教育 P R O No. 9 P22～P25	本論文は、まず算数的活動の概念規定を行い、学習指導要領に置いて重視されることとなった背景とねらいをこれまでの算数教育の取り組みの歴史から分析している。さらに、子供のある思考状態に自由に引き入れ、狙った陶冶部分を鍛錬する状況を作り上げる際に重要な働きをする「気づく」「気づかせる」に着目したゲシュタルト心理学の考え方も念頭に算数的活動を分析し、各単元における効果的な算数的活動の位置づけを明らかにした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 思考力アップのための算数的活動(2)	単著	平成 25 年 5 月	日本教育総合研究所 教育 P R O No. 10 P12～P15	学習指導要領において算数的活動は作業的・体験的な活動など身体や具体物を用いる活動に限らないとされている。本論文では、算数的活動のなかでも内的な活動について焦点を当て、マッハ氏や篠原助市氏の「教授原論」で提唱されている思考実験の論を参考に、現在の算数教育において思考実験が重視される背景と意義を分析し、思考実験を伴う学習指導の改善に向けて指導のねらいと留意事項について具体的実践を通して明らかにした。
6. 算数嫌いをつくらない授業	単著	平成 25 年 11 月	日本教育総合研究所 教育 P R O No. 26 P9～P13	学習についての児童アンケートで算数の授業が「きらい」と答えた児童の理由の分析結果で、授業の進め方に起因していると考えられるものがかなりの割合を占めていた。つまり授業において充実感や達成感を十分に味わえないため「きらい」となる実態が明らかになった。「好き」と「きらい」のそれぞれの割合が多い調査校における授業の実態を対比し、解説型から問題解決型の授業スタイルへの転換を図り、満足度の高い授業を創造する必要性を明らかにした論文である。
7. 思考力・判断力・表現力を育成する算数授業	単著	平成 26 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第 1 集 p 37～p 46	思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の創造に向けて、その推進力となる情意面に着目し、主体的な活動が保障される授業展開を追究した。ポリア提唱の問題解決型の授業展開を基本にしながら発達心理学面から低・中・高学年らしい活動の様相を想定し、その発達の段階にふさわしい活動を呼び起こす学習意欲が連続・発展するような単元構成及び 1 時間の学習活動の構成について具体的な実践事例を通して検証したものである。
8. 思考力を養う操作活動	単著	平成 26 年 10 月	日本教育総合研究所 教育 P R O 特集号 P34～P37	操作を生かした学習活動は、ペスタロッチ、デューイ、ブルーナなどによって古くから重視されている。また、操作をピアジェは一貫した構造的体系をもった心的活動として述べている。本論文では、これらの学説の対比及び算数科の指導内容を分析し、算数指導における操作活動をどう捉えるのかを明らかにした。さらに、具体的な指導場面でどのような操作活動を取り入れることが思考力を育成することになるのかまた、その指導に際しての留意点について具体的な実践を通して検証したものである。
9. 生きる力を育てる算数指導 (査読付き)	単著	平成 27 年 4 月	人間教育研究協議会 紀要「人間教育学研究」 第 2 号 p 71～p 80	生きる力を育成するために算数教育が担う役割は何かを明確にするとともに、算数教育のねらいで重視されている「思考力・判断力・表現力」を分析し、どのような授業を創造していくことがそれらの力を育てることになるのかの検討を加えた。本論文では、「思考」と「表現」は互恵的な関係であると考え、それらが相乗的に作用し合ってよりよいものを作り上げていく授業づくりをめざして、ポリアの提唱している問題解決型の指導過程を取り入れた効果的な指導のあり方について実践事例を通して考察したものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10. エクセル関数でのプログラミングとICT	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第 3 集 p 59～p 72	2013 年度実施の国際教員指導環境調査 (TALIS) 結果において、ICT を用いた指導実践を頻繁に行う教員の割合が全参加国の中で最下位である現状に注目し、本論文では ICT を活用した教育を推進することの必要性と教育効果のあるソフト開発、及びその使用の有用性について述べている。特に、基礎・基本の定着を図る際、習熟度や個別学習で活用することにより大きな効果を発揮するソフトのプログラム作成の手順とその効果的な使用方法を明らかにしている。
11. 生きる力の育成と主体的な問題解決活動 (査読付き)	単著	平成 27 年 12 月	日本人間教育学会 紀要「人間教育学研究」 第 3 号 p 25～35	数学教育現代化の失敗以降、算数数学教育の潮流は大きく問題解決に切り替えられたが、それが形式や表面的な学習指導に留まっていたのは、底流するプラトンのあるいは絶対主義的な数学観の論理的帰結として、コミュニケーション活動の本質が看過されていたからに他ならない。本論文では、コミュニケーションを含め表現力の充実が叫ばれるようになっている背景を分析し、数学的コミュニケーションの育成という視点から授業構成のあり方を提言した。
12. 算数科の基礎学力が育つ道筋と授業づくり	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第 5 集 p 53～p 66	算数科で育てるべき学力の中核となるものは数学的な考え方に他ならない。ここでは数学的な考え方を基礎学力と位置づけ、それを育てる授業のあり方を人間性の育成という視点も加えて追求している。基礎学力は子どもの活動の姿として学習の中に現れてはじめて育ったと言えるので基礎学力が育ち、それを活用できるような単元構成や指導者の役割についての提案をしている。さらに、低・中・高学年の発達の段階における子どもの特性を生かした活動の場づくり、および授業づくりのポイントについても提案している。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他)				
1. 新任教員のためのハンドブック	単著	平成 24 年度	近畿大学	教員の研修課題テキストとして使用するため、学級経営に関する事項、いろいろなケースでの子どもに接する際の留意事項、家庭訪問の留意事項、事故が起こった場合の対処の仕方などをQ&A形式でA4版74頁にまとめて全教員に配付し、それを学校の基本方針として共通理解を図り日々の教育実践の充実に向けて取り組む体制作りをした。
「依頼原稿」 1. 授業中における事態に対応するには(算数)【シリーズ】	単著	平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月	日本文教出版	教育情報誌「ROOT」第1巻～第4巻 P19 教育現場で算数の授業中に遭遇する事態にどのように対処すればよいのか、その対処法を具体例で提示。「見通しが持てない子どもにはどのようなすればよいのか」「早く解決できて時間があまっている子どもにはどうすればよいのか」などの内容。特に、経験の浅い教師がこの原稿を参考にして適切に対応することにより一人ひとりの児童が充実した学習活動に取り組んでいけることを願っての提案。 また、話し合い活動を通して各自が考えた解決方法をよりよいものに練り上げていくための学習集団をどのように育てていけば良いのかについても提案。 さらに、幼児期における学習および生活経験が十分でないことが原因と考えられる第1学年の数概念や図形概念の理解に関する学習内容におけるつまずきに対する予防と補充指導についても例示。
「教材作成」 1. 等積変形の説明教具	単独	平成 21 年 12 月	新算数教育研究会	第5学年の単元「図形の面積」の指導において、三角形は底辺と高さが同じであればどのような形の三角形であっても面積も同じであることを理解させるための教具である。子どもにとって高さにあたる頂点が底辺の外に出ている三角形の面積についての理解に抵抗が見られる傾向にある。そのため、少しずつ長さが短くなっていく細い線を何本も積み重ねて三角形を作り、アニメーションでその1本ずつを移動させ底辺も高さも同じ三角形に変形していくことにより、底辺と高さが同じであれば面積も同じであることを理解させるという情報機器を活用した教具となっている。
2. 円の面積の求め方の説明教具	単独	平成 23 年 5 月	西日本地区私学連盟研究大会	第6学年「円の面積」の単元で使用する教具である。円の中心を通る直線で等分し、それを等積変形して平行四辺形や三角形にすることを実際に紙にかいたものを用いて操作させたり示したりすることは困難なことである。そこで、グラフィックソフトを用いて円を32等分したり64等分したりして作成したおうぎ形をアニメーションで平行四辺形や三角形に等積変形して示すことにより、円の求積公式である半径×半径×円周率の理解を確かなものにするのをねらって作成した

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
3. 計算の習熟を図るプリント作成ソフト	単独	平成 23 年 5 月	西日本地区私学連盟研究大会	第 1 学年から第 6 学年までの計算領域で扱われる全ての計算について任意に入力した数値を用いて計算問題の式が作成できるソフトである。数範囲は整数・小数・分数の全て、また、演算も単純な四則はもちろんあまりのあるわり算や商を四捨五入で処理する問題や解答も数値の入力で自動作成されるようにしてある。作成にあたってはエクセルの関数を用いているので一般的に何処ででも活用することが可能な自作ソフトである。
4. 「活用力」育成のためのデジタル教材	共同	平成 25 年 6 月	株式会社 e 教育研究社	第 1 学年～第 6 学年の算数の全単元について、学習指導要領に示された「活用力」育成のための指導用メディアミックス型デジタル教材を作成。授業プリントとデジタル教材コンテンツを合わせて利用することにより PISA 型学力を育てることをねらいとした教材である。 教授資料は B 5 判全 2 6 7 頁 編者：梶田叡一 共著者：加藤明、金山憲正、中島繁雄、松浦武人 本人担当部分：第 5 学年・第 6 学年の「活用問題」「実践問題」「発展問題」(P118～p267) の 95 教材を単著。各単元に対応したデジタルコンテンツを作成。 活用問題では「読解力」を重視した内容を扱い、ヒントや解き方はオンマウスでポップアップするようにしてあるため、ICT 教育でも活用が図れるよう工夫してある。
「学会発表」				
1. 新学習指導要領（算数）における実践上の課題	—	平成 21 年 12 月	新算数教育研究会 第 34 回セミナー （於：箱根・ホテル小涌園）	教育基本法、学校教育法の改正に伴う学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた算数科学習指導の要点を提案。活用を重視する指導では指導内容の関連を明らかにし、既習のどの内容が発展するのかを捉えて単元構成をすることの重要性を各学年の主要教材を取り上げた事例で発表。また、表現力を育成するための「ノート指導」のあり方について実践例を映像機器で示しながら紹介。これらを通し思考力・判断力・表現力の育成を目指した新学習指導要領の趣旨を踏まえた望ましい指導のあり方を発表。
2. 算数科における問題解決学習の充実	—	平成 23 年 5 月	第 53 回西日本地区私学連盟研究大会 （近畿大学附属小学校）	新学習指導要領で育てたいと目指している学力は、教え込みの解説型の授業から脱却しポリアの提唱した問題解決型の授業を基本として展開することによって効果的に育成されることを主張すると共に、問題解決型の授業をするためには児童の実態を的確に把握することと、教師の綿密な教材研究とが大前提になることを強調。 また、幼小連携の観点から小学校における算数学習の充実のために幼児期にどのように数概念や図形概念の理解に関する指導を行えば良いかについても解説。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
3. 時代のニーズに応えた学校運営	—	平成 24 年 4 月	平成 24 年度近畿大学附属関係校研究大会 (近畿大学)	組織面については、小学校高学年における教科担任制、一年担任制、習熟度別学習態勢の導入、及び、各教員への研究教科の割り振りなど、基礎・基本の確実な定着を目指ための学校の取り組むべき方向と方策を提案。 また、小学校教育と幼稚園教育の関連を図り、より充実した小学校教育の創造を目指す幼・小連携の必要性と必要性を強調。 教育内容面では、日々の教育実践において、「問題解決学習の進め方」「学級経営のあり方」「机間指導・ノート指導のあり方」「子どもが主体的に学習へ取り組む授業の創造」など、思考力・判断力・表現力を育てるための教育をどう実践していくべきかを提案。
4. 算数的活動を取り入れた指導	—	平成 25 年 10 月	「人間教育研究協議会」平成 25 年度定例会	思考力を高めるための授業作りに欠かすことのできない算数的活動について、重視される理由・取り入れるために必要となる教材研究・展開の方法などを具体的な実践例と結びつけての発表内容である。 作業的活動・体験的活動・思考的活動の各活動について具体的な教材を例に、活動をさせる目的、効果的に取り入れる方法についての解説に加え、言語活動にあたる「説明する活動」「表現し伝え合う活動」についても同様の解説を加えて発表した。
5. 教材研究をする際に知っておかなければならない「算数のことば・用語」	—	平成 25 年 12 月	教師力向上研究会 (第 4 回総会)	算数指導に当たって指導者が「算数のことば・用語」をしっかりと理解しておかなければ十分な教材研究をすることができないということを伝えることをねらいに発表。 センテンス型とフレーズ型の式の区別を意識させておく必要性や等分除と包含除のいずれの問題場面で導入することが適切であるのかなど、教材研究と算数の用語の理解は切り離して考えることができないことを強調。
6. 算数的活動を取り入れた指導のポイント	—	平成 26 年 2 月	「人間教育研究協議会」フォーラム in 大阪	学習指導要領で算数的活動が重視されている背景とねらいを分析し、算数的活動を取り入れた授業の充実を図る際のポイントについて発表。特に、算数的活動というものが単に作業的活動や体験的活動を意味しているのではなく、思考活動が伴わなければ価値がないことをピアジェの心的活動の論とを関連づけて強調した。また、算数的活動を取り入れると学習効果が発揮される指導場面とその留意事項についても具体的な例を通して発表した。
7. 算数の授業で言語活動を充実させる	—	平成 26 年 6 月	教師力向上研究会例会	言語活動を充実させるための目的を明確に捉えた上で実践に取り組まなければ十分な成果が期待できないため、まず教科の目標を実現する手立てとして言語活動を充実させるのであることが大前提になることを強調した。 特に、算数の言葉と言われている式に焦点を当て、「式に表す活動」「式をよむ活動」の具体例を取り上げ、言語活動を充実させるポイントとなる抽象化の過程や一般化の過程の構成について重点を置いた提言と、それを具現するための指導のあり方について発表した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 思考力・判断力・表現力を育てる算数指導	—	平成 26 年 8 月	教師力向上研究会 サマーセミナー	思考力・判断力・表現力を育てるには問題解決型での指導が望ましい。問題解決型の指導では既習の学習内容と関連づけることが求められる。一方、関連づける既習の学習内容が本時の解決に結びつく内容でない場合は、逆に子どもを混乱させることになる。既習内容どう想起させるのか、また、そのために必要となる手立てを内容の系統性・関連性を明確にする視点から解説した。特に、教材分析の重要性と指導内容の関連を明確にすることの重要性を強調。
9. 意識を軸にして展開する算数指導	—	平成 27 年 10 月	日本人間教育学会 第 1 回総会	ブルーナの操作を生かした学習活動に関する論とピアジェの心的活動の論を基に、即物的対象のイメージ、経験的記憶再生のイメージ、想像のイメージがより抽象的・概念的なイメージへと高まる過程と問題解決の過程との関係を明らかにし、学習者の意志によって主体的な学習活動が展開される授業作りの要点を提言。イメージが連続発展するような単元構成及び授業構成を試みるに際しては、能力心理学で分析されている認識能力と欲望能力の観点から発達段階を考慮した活動の様相を想定しておくことが必要となることも強調。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 桑原 祐子

研 究 分 野		研究内容のキーワード
言語学		日本語学 日本文学 正倉院文書
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 日本語の文法研究の成果を生かした実践的授業 2) 実地見学を取り入れた授業 3) 所見カードによる問題意識の啓発	平成 7 年度 ～平成 22 年度 平成 22 年 11 月 平成 22 年度～ 24 年度	摂南大学国際言語文化学部国際言語文化学科非常勤講師として担当した留学生の「日本語」及び「日本語上級作文Ⅰ」の授業。中国語圏の留学生にとって習得の難しい助詞の機能について、文法研究における構文論の研究成果を取り入れ、日本語文の構造には様々な層があることを解説し、身近な文を分析しながら実践的教育を行った。また、日本語の歴史的変化を具体的に示しながら、現代の日本語の実態を分析することも試みた。その結果、日本語の作文能力の向上が見られた。 奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した「詩歌の発生と展開」の授業に於いて、万葉集・正倉院を中心に授業を行った。そこで、東大寺の奈良時代の遺構の実地見学及び正倉院外構の見学を行った。写真では実感できない構造物の大きさや、機構の規模などが実感でき、概ね良好な反応が得られた。 奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した「奈良の文学と風土」(平成 22 年～24 年)、「日本の文学」(平成 24 年)では、毎回の授業で 2～3 の問を提示し、これに答える形で講義をすすめている。授業の最後の 10 分間で、所見カードに、この問に対する答えを記入させ、疑問や質問も主体的に記入させている。これによって、受講生の理解の度合いが認識でき、また受講生理解向上が図れ、問題意識の啓発に資することができた、と認識される。記入された質問・疑問については、翌週の講義で取り上げて解説を加えている。
2 作成した教科書、教材 1) 講義用教材「奈良の文学と風土」 2) 講義用補助教材「日本語コミュニケーション」	平成 22 年度～ 24 年度 平成 23 年度～ 24 年度	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した一般教養科目「奈良の文学と風土」において、授業時間内に使用する文学作品・文字資料などを毎回授業で配布している。できる限り、当時の文字の姿や文章の書き方が視覚的に捉えられるように、原本・写本の写真を掲載するように努めている。また、パワーポイントを使用して、古代の文物をできるだけ閲覧できるようにしている。 奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した全学共通の導入基礎科目「日本語コミュニケーション」において、毎授業の開始直後に、日本語の知識全般にわたる小テストを行い、日本語の基礎知識の定着を計っている。これによって、毎時間予習をするようになり、一定の教育効果が確認されている。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 奈良産業大学学生による授業評価アンケートにおける評価	平成 24 年度	奈良産業大学では、毎年学生による授業アンケートを実施している。平成 24 年度のアンケート結果によると、受講生の満足度に関して、「かなり満足」「やや満足」と答えた学生は、「日本語コミュニケーション」は 68%・「日本の文学」は 89%、「日本語（上級作文）」は 93%であり、比較的高い評価を得たものと認識している。

4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) ひょうご震災記念研究機構学術交流センター ひょうご講座 2009「古代史最前線」 講師 「正倉院文書からみる下級官人の言語生活」 2) 2009 年若手支援プログラム「正倉院文書を考える」の特別講師「正倉院文書の国語学的アプローチ」 3) 京都府立国語科研究会（山城支部）研修会 講師 「正倉院文書にみる下級官人の国語―石山寺造営関係資料―」 4) 朝日カルチャーセンター芦屋教室公開講座「東アジアと萬葉集」講師 「正倉院と正倉院文書」 5) 奈良産業大学公開講座・王寺町リーバーカレッジ 講師 「正倉院文書の世界―古代官人の世界―」 6) 帝塚山大学公開講座「奈良学への招待」講師 「正倉院文書と古代日本語」 7) 奈良県大学連合主催「なら講座」講師 「正倉院と正倉院文書」 8) 三郷町文化振興財団主催『カルチャーサロンさんごう』文学・歴史・経済セミナー講師 「正倉院文書と木簡の世界」	平成 21 年 7 月 平成 21 年 8 月 平成 22 年 3 月 平成 22 年 9 月 平成 23 年 11 月 平成 23 年 11 月 平成 24 年 12 月 平成 25 年 11 月	ひょうご講座 2009「古代史最前線」での講座を担当した。奈良時代の紙の利用の仕方から意外な文書の事実が分かること、古代の下級官人の人間関係がどのように言葉遣いに反映するかということを講義した。 奈良女子大学古代学学術研究センターと万葉文化館主催による、2009 年若手研究者支援プログラム「正倉院文書を考える」での特別講義。正倉院文書を国語資料として使うときの工具類及び工具の使い方を紹介すると共に、正倉院文書を奈良時代の姿に復原する手続きを講義した。 現代の日本語の中には和製漢語が数多くある。その中に「早速」という言葉がある。この言葉は正倉院文書の中にしばしば見られる。特に、下級官人達がある特定の場面で専ら使用している。そのことから、新しい言葉が誕生する背景や使用者の言語に対する意識について講義を行った。 朝日カルチャーセンター芦屋教室公開講座「東アジアと万葉集」の第 4 回目の講座の講師として講義を行った。奈良正倉院と正倉院文書の紹介を行い、正倉院文書の分析を通して古代の下級官人の勤務の実態について講義を行った。 正倉院に残された古代官人たちの書いた文書の分析を通して、役所で彼らがどのような仕事をしていたのか、給料はどのくらいだったのか、出勤状況はどのようにして把握されていたのか、ということを紹介した。また、借金の証文から役人たちの住居の場所が明らかになることや、下級官人たちの書いた文書がなぜ正倉院に残ったのかということについて解説を行った。 奈良の正倉院には華麗な宝物とともに一万数千点の文書が残されている。これらは、8 世紀の日本語を知るための極めて重要な言語資料である。『万葉集』や『古事記』とは異なった、古代の生の言語生活を知ることができる。古代の官人たちが書いた休職届や欠勤届を分析しながら、病気の治療・回復をどのように表現していたのかということを紹介した。また、彼らが母語である和語と外国語である漢語をどのように意識して使い分けていたのかということも、具体的に紹介した。 古都奈良の秋に開催される正倉院展には、1250 年の時を越えて伝えられた聖武天皇遺愛の宝物や東大寺ゆかりの品々が展示される。これらの特色を解説すると共に、それなの中であって、思いがけない情報を我々に語ってくれる一大文書群、正倉院文書を紹介し、当時の役人が、どのような場合にどのような言葉を生み出していったかということ、解説した。 正倉院正倉（奈良市、国宝）が南倉、中倉、北倉と三室に分かれていること、「東大寺献物帳」（目録）が添えられていたため北倉の品々は、史料価値が高いことなど、正倉院に関する基礎知識を説明し、東大寺写経所が残した正倉院文書（給料の請求書、欠勤届他）や平城宮跡出土木簡などに書かれた漢文を現代語訳しながら、当時の役人や写経生の仕事内容や仕事ぶりを解説。また、漢字の「怠（おこたる）」を取り上げて当時の人々の生きた言語生活を紹介した。
---	---	---

9) 奈良産業大学公開講座・王寺町リーバーカレッジ 講師 「正倉院文書・木簡からわかる古代日本語」	平成 26 年 10 月	正倉院の宝物と正倉院文書について1千年以上も保管された要因とその文化財的価値について説明した。また、正倉院文書は造東大寺司の下に置かれた写経所の残した文書群であることを説明し、そこで仕事をしていた写経生たちの提出した休暇願・欠勤届や同時代の木簡を読み解きながら、古代の人々の言語生活の一端を明らかにし、平仮名がまだなかった時代に、漢字や漢語の用法を借りながら、古代の人々がどのようにして言葉の世界を拓いていったのかということを解説した。
10) 第5回奈良学園公開文化講座講師・志賀直哉旧居 「正倉院文書と古代の役人」	平成 28 年 10 月 18 日	第68回正倉院展に合わせ、出展が予想される正倉院古文書・正集五 第1紙～8紙を取り上げ、その内容を読み解いた。 天平宝字5年(761)頃の近江・石山寺の増築をめぐる、造石山寺所や管轄する造東大寺所とのやりとりを解説し、役人が現場の窮状を訴え、米や銭の支給を取り付ける過程を分析した。 また写経所の経師が、3日に1度の飲酒や月に5日の休暇などを求める内容を記した待遇改善の草稿も紹介し、その背景の解説を行った。
11) 三宅町歴史学習推進講座 第1回「正倉院宝物と正倉院文書」	平成 29 年 6 月 20 日	正倉院宝物の成り立ちとその国際的背景について、具体的な宝物を通して解説を行った。更に、正倉院文書を残した東大寺写経所での、写経生達の勤務実態について、具体的な資料を取りあげて説明を行い、彼らが提出した欠勤届や休暇願いから、当時の病の治療の一端を紹介した。
12) 三宅町歴史学習推進講座 第2回「第69回正倉院展から」	平成 29 年 9 月 19 日	第69回正倉院展に出陳される宝物10点について、その特徴や来歴、東大寺献物帳との照合に関する研究について解説を行った。また正倉院文書と聖語藏経巻との関係及び写経所文書の最新の研究についても、解説を行った。
13) 三宅町歴史学習推進講座 第3回「正倉院文書と木簡」	平成 29 年 12 月 19 日	第1回、第2回で取りあげた正倉院文書と同時代資料である木簡の様々な用途について紹介した。更に、平城宮の大極殿が、遷都の710年にはできあがっていなかった事が木簡の発見によって明らかになった事について解説を行った。
14) 三宅町歴史学習推進講座 第4回「古代官人の仕事ぶり」	平成 29 年 2 月 20 日	正倉院文書の中に残されている古代造営史料のうち、近江石山寺の造営史料の中から、実務を担当した下級官人である下道主の書いた書類と手紙を取りあげてこれを読み解いた。そして、どのようにして下道主が上位機関を動かしたかということを分析した。
15) 奈良学園秋季公開文化講座講師・志賀直哉旧居 「正倉院文書を読み解く」	平成 30 年 11 月 17 日	2018年度の正倉院展に出陳された「月借錢解」を読み解き、そこから分かる奈良時代の下級官人達の間関係や住まいの実態を紹介した。また、新羅との交易の様子が具体的に分かる正倉院宝物やそれに関わる文書を読み解き、八世紀の平城が如何に国際的な都市であったのかということを考察した。また、極めて貴重な八世紀の新羅の文書が正倉院に残されている事実についても紹介した。

		級作文Ⅰ」では、語彙・文法の知識を深めるため、単文の作成を中心に実践練習を行った。「日本語上級作文Ⅱ」では、専門的な文章の読解を中心に据え、文章構成の型・レポート作成の基本的技術を学び、与えられたテーマにそった文章作成を行った。この実践練習によって、大学における専門科目の講義を聴く能力・レポートの作成能力を習得させることができた。 「日本語上級会話Ⅰ」（平成14年～平成21年度） 「日本語上級会話Ⅰ」（平成14年～平成21年度） いずれも留学生対象の科目（半期2単位）である。主に2回生以上の学生を対象とした科目である。「日本語上級会話Ⅰ」では、日常生活の様々な場面を設定し、複数の学生に実践練習をさせ、口頭言語の背後になる日本特有の文化や具体的な表現の諸相を習得させた。「日本語上級会話Ⅱ」では、先ず日本語特有の敬語表現を大系的に学び、次に実際に様々な場面を想定し、具体的な敬語表現の実践練習を行った。合わせて、敬語表現を生み出した日本語話者の感性・思想・人間関係のとらえ方なども学ばせた。本授業によって、基本的な日本語の運用能力の向上をはかることができた。 「コミュニケーション論」（平成18年～21年度） 薬学部の学生を対象にした一般教養科目。特に薬学専門家として患者や地域社会の人たちと円滑にコミュニケーションを図るための具体的な知識や技術を身につけさせることができた。
3) 京都光華女子大学における教育実績	平成4年4月～平成24年3月	京都光華女子大学生活学科の非常勤講師（平成4年4月から平成24年3月まで）として以下の科目を担当した。 「国語表現」（平成4年～平成17年度） 「言葉の理解」（平成18年～平成22年度） 「言葉と表現」（平成18年～平成23年度） いずれも1回生対象の一般教養科目（半期2単位）である。「国語表現」は、平成18年度から名称変更によって、「言葉の理解」（前期2単位）・「言葉と表現」（後期2単位）となった。 「言葉の理解」（平成18年～平成22年度） 日本語の特徴を学び、日本語話者の文化的背景を学ぶと共に、実践的な日本語の運用能力を養うことを目指し、基本的な語彙の習得をさせた。更に、正しい敬語表現を身につけるための実践練習を行った。これらの実践練習によって、社会人として適切な日本語の運用能力を習得させることができた。 「言葉と表現」（平成18年～平成23年度） 日本語の表現のうち、書き言葉の表現技術の向上を目指して実践練習を行った。様々な文章を書く練習を行い、大学におけるレポート作成・小論文作成の能力を身につけることができた。 「文学と人生」（平成13年～平成14年度） 『万葉集』の中から、特に古代史を彩った様々な人物の歌を取り上げ、歌の背後にある古代史の出来事を解説し、古代の人々の人生を考える授業を行った。言語芸術である文学作品から何が読み取れるのかということを考えさせた。本講義によって、文学を鑑賞する力をつけることができた。

4) 奈良産業大学（現奈良学園大学）における教育実績	平成 22 年 4 月～現在に至る	奈良産業大学情報学部情報学科及び奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の専任教員（平成 22 年から現在に至るまで）として以下の科目を担当した。 「日本語コミュニケーションⅠ」（平成 22 年～24 年度） 「日本語コミュニケーションⅡ」（平成 22 年～24 年度） 1 年次配当の共通教育基礎科目（半期 2 単位）である。 「日本語コミュニケーションⅠ」では、話し言葉を中心に実践的な日本語の運用能力を習得させることができた。時に敬語の背景にある日本語話者の文化的背景についても理解を深めることができた。「日本語コミュニケーションⅡ」では、書き言葉を中心に学習し、レポート作成・小論文作成のための実践的能力を養うことができた。 「奈良の文学と風土」（平成 22 年から現在） 共通教育科目（半期 2 単位）である。万葉集の歌と正倉院文書から明らかになる古代の人々の生きた姿を講義形式で紹介した。できるかぎり現存する文書の写真や木簡の写真を使って、古代言語生活を具体的に学んだ。加えて正倉院に伝世した宝物を通して東西文化の交流を学んだ。本講義を通して、奈良という地域の特性を正しく具体的に理解することができた。 「詩歌の発生と展開」（平成 22 年～23 年度） 共通教育科目（半期 2 単位）である。日本文学の中で重要な位置を占める詩歌について、万葉集・記紀歌謡・古今和歌集の歌を講義形式で解説した。特に、万葉集では漢字だけで以下に日本語を表現する工夫をしたのかということも学んだ。本講義を通して、平仮名の発生や詩歌に対する知識を養うことができた。 「日本の文学」（平成 24 年～25 年度） 共通教育科目（半期 2 単位）である。古事記・万葉集の韻文を中心に講義形式で行った。古事記を題材として、神話に語られた自然現象、韻文の始まりを語った物語などを紹介し、また、万葉集の歌を通して、人間の心のあり方を、喜びや悲しみをいかにして表現したのかということ学んだ。本講義を通して文学先品を鑑賞する能力を養うことができた。 「日本語 上級作文Ⅰ」（平成 22 年～平成 26 年度） 「日本語 上級作文Ⅱ」（平成 22 年～平成 26 年度） 平成 22 年度は「日本語 文章表現」の名称での講義であったが、23 年度から「日本語 上級作文」に名称変更された。留学生の 2 年次生を対象にした共通教育科目（半期 2 単位）である。「日本語上級作文Ⅰ」では、基礎段階として、単文の作成を中心に実践的授業を行い、基本的な日本語文の作成能力を習得することができた。「日本語 上級作文Ⅱ」では、応用のレベルとして専門的な内容を含む長文の読解を行い、加えてテーマを設定してレポート作成を行った。この実践的授業を通して、レポート作成の知識と技術を身につけることができた。
-----------------------------------	--------------------------	--

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 1) 中学校教諭一種免許状 2) 高等学校教諭専修免許状 3) 文学修士 4) 博士 (文学)	昭和 54 年 3 月 昭和 56 年 3 月 昭和 56 年 3 月 平成 16 年 12 月	中学校教諭一種免許 国語 昭和 53 中一種第 880 号 (奈良県教育委員会) 高等学校教諭専修免許 国語 昭和 55 高専修 56 号 (奈良県教育委員会) 奈良女子大学 204 号 論文題目「正倉院文書に於ける上代特殊仮名遣」 奈良女子大学第 124 号 論文題目「正倉院文書の国語学的研究」
2 特許等 特記事項なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 奈良女子大学古代学学術研究センター協力研究員	平成 19 年 度 ～ 21 年度	奈良女子大学古代学学術研究センターは、古代日本の中心であった奈良に立地する奈良女子大学の特色を生かし、東アジアという広い視野の中で日本古代の歴史・文学・言語を学際的に研究する拠点として平成 17 年に設置された。このセンターにおいて、平成 19 年～21 年までの間、科学研究費補助金 (基盤研究 C) 「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」 (研究課題番号 19020396) の研究代表として、研究活動を行った。合わせて、前年度までの C O E 研究員として企画を行った報告集の作成も行った。C O E 関連授業における博士課程の受講生に対する事前指導を引き続き行った。
・奈良女子大学研究推進プロジェクト「正倉院文書からみた日本語表記の成立過程に関する研究」の研究分担者。	平成 21 年 4 月	上代の文献 (万葉集・古事記など) ・木簡・正倉院文書を用いて、日本語表記成立過程を明らかにする事を目指した研究プロジェクトである。研究代表は奈良女子大学の奥村悦三教授である。このプロジェクトの主に木簡と正倉院文書を研究分担した。
・奈良女子大学古代学学術研究センター主催の若手支援プログラム「正倉院文書を考える」の特別講師。	平成 21 年 8 月 5 日	特別講義「正倉院文書の国語学的アプローチ」を行った。正倉院文書中の写経生の書状を取り上げ、文書の断簡をどのようにして復原するのかという方法と研究工具の使い方を講義した。合わせて、年紀の記されない書状の年代を明らかにし、書状の書かれた背景を、様々な帳簿類を検討することで明らかにしていく手法を示した。
・学術振興会 科学研究費補助金 (基盤研究 (c)) を申請。課題は「正倉院文書訓読における日本語表記成立過程の研究」。	平成 21 年 11 月	平成 22 年 4 月に採択された (研究課題番号 22520467) 。研究代表者。本研究の目的は、正倉院文書に代表される実用の言語生活の中に、後世の日本語表記システム (漢字仮名交じり文) が成立していく契機があることを、具体的な事例に基づいて実証的に解明することである。そのため、正倉院文書の中に散見する下級官人や在野の技術者・非官人に光を当て、彼らの言語生活を明らかにすることである。
・科研基盤研究 (c) 「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」 (研究課題番号 1920396) の報告書 3 冊を刊行。	平成 22 年 3 月 30 日	3 冊は以下の通り。報告書Ⅰ『正倉院文書の訓読と注釈—造石山所寺解移牒符案 (一) —』 (研究代表者桑原祐子執筆) ・報告書Ⅱ『正倉院文書の訓読と注釈—啓・書状—』 (研究分担者黒田洋子執筆) ・報告書Ⅲ『正倉院文書からたどる言葉の世界 (一) 』 (連携研究者中川ゆかり執筆)。以上の報告書の企画・編集を行い、報告書Ⅰの執筆を行った。

2) 「科研費申請」 韓国研究財団 土台基礎研究「日本正倉院文書と韓国文字資料の物品名の研究—物品の用度、単位、書体のDB構築」(共同) [研究分担] 3) 科学研究費助成事業(基盤研究C) 「正倉院文書の読解を通じた上代文学の表現の生成に関する研究」研究分担 課題番号: 26370220 代表: 中川ゆかり	平成 23 年 8 月 平成 26 年度～28 年度	釜山大学日本研究所の研究チームが中心になって申請した研究プログラムである。日本の正倉院文書と韓国古代文字資料に見える物品名の用例を分析し、物品の用度・単位・書体をDBに構築し、古代日韓両国の文字文化と言語生活及び生活様式を再解釈できる基礎をつくり、後続研究の土台の提供を目的とする。日本側の一般協同研究員として参加した。 奈良時代の下級官人達を書き表した膨大な文書の集積である正倉院文書を読み解くことによって、当時の官人達を書く文章の実態・人間関係のあり方・信仰の様相を明らかにした。又、『古事記』や『日本書紀』・『風土記』には見えない言葉を発掘し、上代語の知見を広め、さらに、正倉院文書の文章とそれらを比較することによって、それぞれの作品の文章の性格を浮き彫りにし得た。以上の研究に分担者として参加した。
4) 科学研究費助成事業(基盤研究B) 「海外敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の解明」研究分担 課題番号: 15H05151 代表: 西一夫 5) 科学研究費助成事業(基盤研究C) 「敦煌書儀による書記言語生活解明のための基礎的研究」研究分担 課題番号: 16K02587 代表: 楊莉	平成 27 年～現在に至る 平成 28 年～現在に至る	本研究課題は、現在日本・中国・台湾・イギリス・フランス・ロシア等に散在する敦煌文献、なかでも書儀・尺牘断片を中心に据えた実見調査を通して新たな資料を発掘し、日本への受容や伝搬の実態を把握し、マクロ的に統合することを第1の目的とする。その上で正倉院蔵『杜家立成雑書要略』に焦点を絞り、当該書の注釈作業を通して、わが国における敦煌書儀・六朝尺牘の受容をミクロ的にも研究することで、表記・語法・歴史環境分野のさらなる研究推進をはかるものである。この研究に分担者として参加している 本研究の目的は、敦煌文献資料の一つである敦煌書儀について、各々の書儀に注釈を加え、実用生活における書記言語資料としての位置づけを行うことである。そのため、具体的な作業として、日本語による「敦煌書儀注釈」を作成し、研究成果として、それを刊行することを目指している。この研究に研究分担者として参加している。
[共同研究] 6) 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館共同研究員産学連携研究「清潔と洗淨をめぐる総合的歴史文化研究」研究代表: 関沢まゆみ	平成 29 年～現在に至る	日本列島における「清潔」と「洗淨」について、通史的に概観するとともに、歴史資料から、詳細にその実態を問い直すための端緒を拓くことを目的とする。「清潔」をめぐる文化や政策を概観する研究は2000年前後までさかんに行われてきたが、それ以降、全体像を大きく見ることを目指しての事例は少ない。本共同研究は、この状況から新たな一歩を進めるため、論点整理を行う。長期的に「清潔」という文化全体を見ることを目指し、その最初の共同研究として、とくに「清潔(感覚)」と「洗淨(行為)」の歴史に注目する。特に、共同研究者として日本古代の「清潔」「洗淨」に関する国語学的分析を行う。
4 その他 1) 大阪市立大学日本史学会『市大日本史』第14号「栄原ゼミと私」執筆「再掲」	平成 23 年 5 月	日本古代史学界の中で正倉院文書研究を牽引してきた栄原永遠男先生の退任を記念して特集が組まれた。その中の一編として、最新の正倉院文書研究の場である「栄原ゼミ」の存在意義について国語学の立場から述べたものである。栄原ゼミで10年間研究をしてきた経験に基づき、ゼミが有意義な存在であることを述べた。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1) 『上代写経識語注釈』	共著	平成 27 年 2 月	勉誠出版	日本には、飛鳥・奈良時代（7 世紀～8 世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究である。上代文献を読む会において、平成 18 年 10 月から約 6 年を費やして輪読を行い、編集委員会を設け、さらなる検討を重ね、現存する写経識語の訓読・現代語訳・注釈を施した。さらに写経識語に関する論考 4 本と索引を加えた。本書は、平成 27 年度日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けた。全 684 頁
2) 『正倉院文書の歴史学・国語学的研究—解移牒符案を読み解く—』	共著	平成 28 年 6 月	和泉書院	古代の一次資料である正倉院文書を歴史学と・国語国文学のそれぞれの立場から精緻に読み込み、分析検討を行う輪読会を 9 間に亘って続けてきた。この輪読会に参加した 10 名の研究者による研究論集である。その研究内容は、帳簿論、写経論、上代の日本語の語法・語彙の研究、文字表記の研究など、多岐に亘る。特に国語国文学の分野における正倉院文書研究の指針となる論集である。全 370 頁、pp. 111～156
3) 『犬飼隆編『古代の文字文化』（『古代文学と隣接諸学』④）	共著	平成 29 年 7 月	竹林舎	Ⅱ 正倉院文書が語る 8 世紀の文字世界の章において「日本語史料としての正倉院文書—「運漕」の場合—」を執筆した。8 世紀の下級官人が仕事を遂行するために書き記した一次資料である正倉院文書を資料として、8 世紀の日本における実務官人の漢字の独自用法について考察を行った。一見して具体的な意義が了解できる視覚情報としての漢字の特性を自由闊達に使用し、「船舶による輸送」を表す漢語「運漕」を、状況に応じて「水陸両方を含む輸送」をも表す言葉としてもしている実態を明らかにした。その用法の背景とその用法がもたらす効用にも言及した。さらに、この独特の用法が 10 世紀の「延喜式」にも見られることも指摘した。全 557 頁、pp. 221～257

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1) 上代写経識語注釈（その一）大般若経（長屋王願経・和銅経） （査読付）	単著	平成 22 年 4 月	続日本紀研究会誌「続日本紀研究」第 385 号 P. 26～P. 44	日本には、飛鳥・奈良時代（7 世紀～8 世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究である。特に本稿で取り上げた識語は現存する識語の中で、奈良時代のごく初期の写経経典でありながら、各地に点在する、極めて貴重なものである。
2) 写経生の書状—正倉院文書にみる古代官人の実態—	単著	平成 22 年 11 月	奈良産業大学情報学部「情報学フォーラム紀要」 P. 1～P. 8	いつ何のために何を書いたか不明であった写経生の書状について、その紙背文書の分析から書かれた年代を特定し、その時の写経所の状況、写経生等の勤務状況を明らかにし、仕事を依頼するための書状であったことを指摘した。そこには、漢字漢文では表現できない日本語特有の敬意を含んだ言葉が表出することを合わせて指摘した。
3) 正倉院文書の「笑」と「簀」	単著	平成 23 年 6 月	釜山大学校日本研究所「日本研究」12 輯 P. 7～P. 31	正倉院文書の造営資料や木簡等の一次資料、律令公文・延喜式などの歴史史料、万葉集などの文学資料、及び古辞書に見える「笑」と「簀」の使用実態を調査し、「笑」を、ヤダケを意味する和語「の」とよませる漢字用法は、漢字本来の意義から逸脱する日本的用法（国訓）であることを明らかにし、日本的漢字用法が、どのような人々によってどのような理由で生じるのか、その要因をさぐった。
4) 上代写経識語注釈（その九）十輪経（五月一日経） （査読付）	単著	平成 23 年 8 月	続日本紀研究会誌「続日本紀研究」第 394 号 P. 33～P. 44	日本には、飛鳥・奈良時代（7 世紀～8 世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究シリーズの第 9 である。特に本稿で取り上げた五月一日経（一切経）は、その写経の過程を知る文書・帳簿が正倉院文書に多量に残存し、経典そのものも大量に残存する世界的にも希有な資料群である。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5) 上代写経識語注釈（その十）千手千眼陀羅尼經（玄昉願經）（査読付）	単著	平成 23 年 8 月	続日本紀研究会誌「続日本紀研究」第 393 号 P. 36～P. 49	日本には、飛鳥・奈良時代（7 世紀～8 世紀）に書き写された經典が現存している。これらの經典には經典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究シリーズの第 10 である。本稿で取り上げた玄昉願經は、正倉院文書によってその写経の過程を知ることのできる写経經典の一つであり、この識語の分析によって、東大寺創建・国分寺建立にも深く関わる内容であることを指摘した。
6) 正倉院文書の「堪」と「勘」—古代下級官人 爪工家麻呂の学習—（査読付）	単著	平成 24 年 9 月	萬葉語文研究会『萬葉語文研究』第 8 集 和泉書院 p. 121～p. 147	8 世紀の原本が残る正倉院文書の分析を通じて、当時の下級官人の言語生活を記述した研究である。同一人物の作成した文書・帳簿を写経事業毎に選別し、特定の人物の置かれた状況・仕事内容を明らかにして上で、役人としての基本的な語彙をどのようにして習得したのかということ明らかにした。つまり、外国語である漢字・漢文を、日本語を母語とする人々がいかにして習得したかということ明らかにすることは、異文化を享受しながら独自の文字システムを構築してきた日本語のあり方を知ることにつながる。
7) 正倉院文書の「早速」—和製漢語のうまれる場面—（査読付）	単著	平成 25 年 3 月	奈良女子大学文学部国文学会誌「叙説」第 40 号 p. 33～p. 57	漢籍に例を見ない「早速」が和製漢語であることを正倉院文書・木簡の悉皆調査によって明らかにした。類義の副詞「早・速・急・火急」と比較対照させることによって、奈良時代の人々が、どのような場面で、誰に対して、どのような事情がある時に「早速」を使用するのかということ进行分析した。合わせて文学資料における使用実態も調査し、和製漢語がどのような場面で生まれるのかという、言葉の発生のプロセスを明らかにした。『史学雑誌』（東京大学 史学会）の回顧と展望において取り上げられた。
8) 道豊足の人事—あいまいな表現の背景—（査読付）	単著	平成 25 年 10 月	正倉院文書研究会会誌『正倉院文書研究』13	石山寺造営関係資料の中には、人員の派遣に関する様々な文書や、勤務実態を明らかにする文書・帳簿が多く残存している。本稿では、道豊足の派遣を要請する文書の日付や要請理由、派遣を許諾した文書のあいまいな表現に注目し、文書間の整合性を保つために周知な準備をしていたことを確認した。さらに、道豊足の勤務実態と要請理由との間に生じた矛盾が、許諾文書のあいまいな表現の要因になったということを明らかにした。『史学雑誌』（東京大学 史学会）の回顧と展望において取り上げられた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9)「正倉院文書注釈—造石山寺所解移牒符案（三の1）—」（査読付）	単著	平成 28 年 3 月	奈良女子大学古代学学術研究センター『古代学』第 8 号 p. 42～p. 59 頁	二冊の科研報告書『正倉院文書の訓読と注釈—造石山寺所解移牒符案（一）—』『同（二）』の発展的続編である。日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文・現代語訳と注釈を施した。一部補注も加え、注目すべき語法について考察を行った。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。
10)「写経生・実務担当者の選択——「啓」という書式を選ぶ時——」	単著	平成 29 年 3 月	奈良女子大学古代学学術研究センター『漢字文化の受容—東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式—』報告集、pp66～83	造石山寺解移牒符案の中にある一通の「啓」について、「解」でなく書状の「啓」で発信された要因を、文書の内容と返信文書の分析から特定した。加えて、「解」で発信されることが定められていた休暇・欠勤の申請を「啓」や書状形式で発信している 8 通について、発信された時の状況と発信後の文書の処理過程を解明し、「啓」や書状形式で発信した要因をも明らかにした。これらの検討によって、古代の律令文書行政の世界での「啓・書状」の位置づけの一端を示した。
〔報告書〕 1) 正倉院文書訓読による古代言語生活の解明	共著	平成 22 年 3 月	平成 19 年度科学研究費補助金基盤研究 C（課題番号 1920396）研究成果報告書（平成 19 年～21 年）	平成 19 年度科学研究費補助金 基盤研究（C）（課題番号 1920396）の 3 カ年の研究報告書である。以下の 3 冊からなる。 Ⅰ 正倉院文書の訓読と注釈—造石山寺所解移牒符案（一）— 日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。一部補説も加えた。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。 （執筆 桑原祐子）A4 版 161 頁 Ⅱ 正倉院文書の訓読と注釈—啓・書状— 正倉院文書中の啓・書状をすべて収録し、写真・釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。啓・書状を内容によって分類し、関連資料の解説も合わせて行った。日本の書状の歴史研究、書道史の研究のための基礎研究となるものである。 （執筆 黒田洋子）A4 版 360 頁 Ⅲ 正倉院文書からたどる言葉の世界 正倉院文書の中から、国語国文学研究の観点から重要である語彙を取り上げ、その語を含む文書の訓読と注釈を行い、注目すべき語の考察を行った。文書の写真・釈文を提示している。更に、正倉院文書と日本古代の文献との比較研究に関わる論考 2 編を収録した。 （執筆 中川ゆかり）A4 版 95 頁 以上の研究は、『日本語の研究』（日本語学会）第 8 巻 3 号の日本語学界の展望において注目された。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2) 「正倉院文書訓読による日本語表記成立過程の解明」	共著	平成 26 年 3 月	平成 22 年度～25 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号 22520467) 研究成果報告書 研究代表：桑原祐子	平成 22 年～25 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号 22520467) の 4 カ年の研究報告書である。以下の 2 冊からなる。 Ⅰ 正倉院文書の訓読と注釈—造石山寺所解移牒符案 (二) — 注釈篇は、日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文・現代語訳と注釈を施した。一部補注も加え、注目すべき語法について考察を行った。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。論考篇には、これらの資料に関わる 4 編の論考を収録した。 (執筆 桑原祐子) A4 版 179 頁 Ⅱ 正倉院文書からたどる言葉の世界 (二) 正倉院文書の中から、5 通の文書を取りあげ、写真・釈文・訓読文・現代語訳を施し、その文書の背景を解説し、国語国文学研究の観点から注目すべき語の考察を行った。更に、正倉院文書と日本古代の文献や漢籍との比較研究に関わる論考 2 編を収録した。 (執筆 中川ゆかり) A4 版 142 頁
3) 「正倉院文書の読解を通じた上代文学の表現の生成に関する研究」	共著	平成 29 年 3 月	平成 26 年度～28 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号：26370220、代表者：中川ゆかり) 研究成果報告書	『正倉院文書注釈—造石山寺所解移牒符案 (三) —』 日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。一部補説も加えた。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。 (執筆 桑原祐子) A4 版 82 頁
〔その他〕 栄原ゼミと私	単著	平成 23 年 5 月	大阪市立大学日本史学会 『市大日本史』第 14 号	日本古代史学界の中で正倉院文書研究を牽引してきた栄原永遠男先生の退任を記念して特集が組まれた。その中の一編として、最新の正倉院文書研究の場である「栄原ゼミ」の存在意義について国語学の立場から述べたものである。栄原ゼミで 10 年間研究をしてきた経験に基づき、ゼミが有意義な存在であることを述べた。
〔学会発表〕 1) 道豊足の人事—「正倉院文書の訓読と注釈」の作業から	—	平成 22 年 10 月	正倉院文書研究会第 29 会大会 (大阪市立大学)	近江石山寺造営資料における文書・帳簿の分析を通して、古代の下級官人の人事システムと人事の実態のずれを明らかにし、その背景には、律令文書主義の中で文書の整合性を保つための様々な調整が行われたことをも、文書の訂正状況や表現の差異から分析検討を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
2) 正倉院文書の「早速」 —和製漢語の生まれる場 面—	—	平成 23 年 12 月	国語語彙史研究会 第 99 回大会 (大阪大学)	漢籍に例を見ない「早速」が和製漢語であることを正倉院文書・木簡の悉皆調査によって明らかにした。類義の副詞「早・速・急・火急」と比較対象させることによって、奈良時代の人々が、どのような場面で、誰に対して、どのような事情がある時に「早速」を使用するのかということ进行分析した。合わせて文学資料における使用実態も調査し、和製漢語がどのような場面で生まれるのかという、言葉の発生のプロセスを明らかにした。
3) 正倉院文書の「運」と 「漕」	—	平成 26 年 11 月	奈良女子大学古代学 学術研究センター研 究会 「正倉院文書研究の 新たな試み」	文字を書くことが仕事であった古代の下級官人たちは、本来の漢語用法から逸脱しながらも、実務の現場にふさわしい漢字の使い方をしている。しかし、それは、彼らが漢語本来の用法を認識していなかった結果ではない。漢字の持つ機能を十分に理解したうえでの様々な工夫がそこにはあったと考えられる。そのような実態の一端を「運」と「漕」という言葉を通して明らかにし、日本的な漢字用法が生み出される背景を考えた。現代では「漕」は「コグ」とよまれるが、古代では水運による移動「ハコブ」を表していた。そこで、正倉院文書中の「運」と「漕」に着目し、その運用実態を調査し、加えて、漢字熟語「運漕」について、正倉院文書や延喜式には独自の用法があることを明らかにした。
4) 「写経生・実務担当者の 選択——「啓」という書式 を選ぶ時——」	—	平成 28 年 8 月 22 日	第 12 回若手研究者支 援プログラム「漢字文 化の受容—東アジア 文化圏からみる手紙 の表現と形式—」	造石山寺解移牒符案の中にある一通の「啓」について、「解」でなく書状の「啓」で発信された要因を、文書の内容と返信文書の分析から特定した。加えて、「解」で発信されることが定められていた休暇・欠勤の申請を「啓」や書状形式で発信している 8 通について、発信された時の状況と発信後の文書の処理過程を解明し、「啓」や書状形式で発信した要因をも明らかにした。これらの検討によって、古代の律令文書行政の世界での「啓・書状」の位置づけの一端を示した。
5) 帙了（筆）暇の実態と 表現	—	平成 30 年 3 月 11 日	第 2 回正倉院文書の研 究会（大阪市立大学）	東大寺写経所（官営写経所）の教師が提出した 240 通余の請暇解・不参解の中から、仕事の切れ目である「帙了暇」の実態について分析を行った。上帙が提出されたタイミングで提出された請暇解を取りあげ、その実態と表現の分析を行い、彼らが認識していた休暇の許容範囲を明らかにした。加えて、定型からはずれた表現の背後にある表現者の意図を読み解いた。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
6) 清潔と洗浄——日本古代資料「正倉院文書」の事例——	単独	平成 31 年 1 月 23 日	国立歴史民俗博物館 産学共同研究「清潔と 洗浄をめぐる総合的 歴史文化研究」 第 4 回研究会	「清潔と洗浄をめぐる総合的歴史文化研究」の 1 部門として、日本古代における清潔と洗浄に関する分析検討を行うのが、歴博共同研究員として課せられた課題である。その分析検討の一つとして、古代の一次資料である正倉院文書に見られる清潔・清浄及び洗浄に関する具体的な行為とその背景にある写経所のシステムについての考察を行った。
〔招待講演〕 1) 古代言語資料としての 正倉院文書	単独	平成 23 年 3 月	釜山大学日本研究所 主催 (於釜山大学)	漢籍に例を見ない漢字熟語が正倉院文書の中には、しばしば見られる。このような漢字熟語について、誰がどのような場面で、誰に向かって使用したかということ进行分析していくと、使用者の心情や心理が明らかになり、和製漢語が生じる背景を考察することが可能になるということについて報告を行った。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 善野 八千子

研 究 分 野		研究内容のキーワード
教育学		学校間接続、生活科、教員の力量形成
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 ・リフレクションカードを活用した学習の定着及びグループディスカッションの実施	平成 20 年 4 月 ～現在に至る	奈良教育大学兼任講師として担当の「初等教科教育法（生活）」（3 回生）（教職科目、3 年次配当、半期、必修 2 単位）、奈良学園大学 教授として担当の「人間教育開発力実践演習ⅠⅡ」（1～2 回生）（専門科目、1～2 年次配当、通年、選択 1 単位）、において、実践した。 学習定着を目的として、毎時限の最後にリフレクションカードによるフィードバックを実施。毎回、学生が記述したリフレクションカードに、コメント評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用。1 枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなり、学生自身が毎回の自己の学修成果と課題を明確にできた。 グループディスカッションについては、初回は、ペアワークとし、徐々に 5～6 人グループで行った。テーマに応じた協同的な学びの姿が見られ、話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果からも「自分と違う意見や考えによって理解が深まった」等の学生の満足度がさわめて高かった。 上記と同様に、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」（2 回生）（教職科目、2 年次後期配当、半期、必修 2 単位）、「生活の理解」1 年次後期配当、半期、必修 2 単位）、「人間教育実践力開発演習Ⅳ」（Ⅳ回生）（専門科目、4 年次配当、通年、選択 1 単位）、において実践した。
	平成 22 年 4 月 ～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育学概論」（1 回生）（専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）、「教育制度論」（専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）、「教職実践演習」（専門科目、2 年次配当、半期、必修 1 単位）において、実践した。 毎時限の最後に、学習の定着のためにリフレクションカードによるフィードバックを実施した。毎回、学生が記述して提出したリフレクションカードに、コメント及び A 評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用した。承認や賞賛の体験が乏しい学生にとって意欲の高まりが顕著に見られた。1 枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなることから、学生自身が自己の学習成果と課題を明確にすることができた。グループディスカッションについては、少人数から徐々に 5～6 人グループで行った。話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果から「授業満足度は、全クラス 97%以上であった。

・ 毎回の復習テストを活用した学習の定着の工夫 ・ 予習レポートの活用と授業設計	平成 22 年 4 月 ～平成 26 年 3 月まで 平成 23 年 4 月 ～現在に至る	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の専門科目、「教育制度論」（専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）において、学習の定着を図るために、毎回の講義導入において復習ミニテストを実施したところ、履修者の相当数において、当該科目の履修の前後を比較すると、復習の習慣化と学習の定着度が向上した。 奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の専門科目、「教育学概論」（1 回生）（専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）において、予習習慣の定着のために毎回の予習レポート「子ども情報カード」を実施した。学生は、シラバスに関連した子どもに関するニュース及び自己の考えを記述してくる。毎回の講義の冒頭で発表させることで、学生同士の関心意欲が喚起できる。また、教員は学生の実態を把握し、配慮した授業設計を行うことができる。履修者の相当数において、予習の習慣化と学習課題に対する関心意欲の向上が見られた。 上記と同様に、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」（2 回生）（教職科目、2 年次後期配当、半期、必修 2 単位）、「生活の理解」1 年次後期配当、半期、必修 2 単位）において、科目ごとの目標に対応した予習課題を設定して実践した。
2 作成した教科書、教材 ・ 「学校評価を活かした学校改善の秘策」（再掲） ・ 学校力・教師力を高める学校評価（再掲） ・ 小学校教科用図書「あたらしいせいかつ」	平成 17 年 4 月 ～平成 26 年 3 月まで 平成 22 年 4 月 ～平成 26 年 3 月まで 平成 23 年 4 月 ～現在に至る	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育原理（平成 20 年 3 月まで）、教育学概論（平成 20 年 4 月から科目名変更）」（専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）、において使用。 教員の資質向上のための学校改善の方策について、評価の運用及び実践事例の内容を示した。学生は、毎回の講義で 10 分間読解し、本時の目標に関わる章について、気づき及び疑問を発表し、教育の現状及びこれからの教育課題について意欲的な対話が可能になった。 奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育制度論」（専門科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）において、使用した。教育制度における全容から、とりわけ学校評価の目的及び信頼構築の有様と実践事例の内容を教育制度の視点から示した。学生は、理解の困難な制度についても、公教育における制度のや現代的課題に関心を深めた。また、具体的な学校現場の事例を通して理解した。 平成 23 年度用、平成 27 年度用小学校生活科 教科用図書 採択された市町村立小学校及び私立小学校の第 1 学年・第 2 学年に於いて、使用されている。 また、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」（教職科目、2 年次配当、後期、必修 2 単位）において、使用した。学生は毎時間の模擬授業の際に活用し、学校現場での実践力強化として指導案作成のプロセスと低学年における児童理解が深まった。また、予習学習の定着と共に、指導法の課題が明確になった。

・キャリア教育読本「コドモたちへの想い」 (再掲)	平成 23 年 4 月 ～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として 担当の「キャリアデザイン演習」(専門科目、1 年 次配当、半期、選択 1 単位)において、使用した。 就業力向上のために、仕事内容ややりがい等の具体 的事例について示した。学生は、保育・教育の今を 知り、教育現場の実際や課題を検討することが可能 となった。
・幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発(再掲)	平成 23 年 4 月 ～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として 担当の「教職実践演習」(専門科目、2 年次配当、 半期、必修 1 単位)において、使用した。幼児期か ら児童期に関わる教員の資質向上のために特に就 学前後の課題や生活科の具体的事例について示し た。学生は、これからの保育・教育の課題を検討し 実践力向上につなげた。
・子どもの育ちと学びをつなぐ一幼小連携のあり方 と接続カリキュラムの作成一(再掲)	平成 24 年 9 月 ～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として 担当の「キャリアデザイン演習Ⅱ」(専門科目、1 年次配当、半期、選択 1 単位)において、使用した。 保育者・教員の資質向上のための幼小接続カリキュ ラム開発及び実践例について示した。学生は、幼児 期のカリキュラムと生活科に位置付いたカリキュ ラム作成のプロセスの理解が深まった。また、教育 保育現場の実際を知り、就業力向上へもつなげた。
・子どもの育ちと学びをつなぐ一幼小連携のあり方 と接続カリキュラムの作成一(再掲)	平成 27 年 9 月 ～現在まで	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授と して担当の「生活科指導法」(教職科目、2 年次配 当、後期、必修 2 単位)において、使用した。保育 者・教員の資質向上のための幼小接続カリキュラム 開発及び実践例について示した。学生は、幼児期の カリキュラムと生活科に位置付いたカリキュラム 作成のプロセスの理解が深まった。また、予習学修 の定着と共に、指導法の課題が明確になった。
・教科力 生活	平成 28 年 9 月 ～現在まで	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授と して担当の「生活の理解」(教職科目、1 年次配当、 後期、必修 2 単位)において、使用。保育者・教員 の資質向上のための小学校生活の理論をもとに、歴 史や評価の実践例についても提示。学生は、生活科 の科目の特性に位置付いたカリキュラム作成と指 導理論のプロセスの理解が深まった。また、予習学 修の定着と共に、子ども理解の課題が明確になっ た。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
静岡県総合教育センター主催新任校長研修(小・中) 講演(於：静岡県総合教育センター)	平成 21 年 5 月 1 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善 について講演した。
芦屋市立幼稚園教育研究会主催 幼稚園園教育研 究会総会講演	平成 21 年 5 月 12 日	元気な幼稚園づくり～学校評価を活かした学校改 善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催 幼稚園における学校 評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演(於： 片桐西幼稚園)	平成 21 年 5 月 14 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の 発信をめざして～について講演した。
静岡県総合教育センター主催新任教頭研修(小・中) 講演(於：静岡県総合教育センター)	平成 21 年 5 月 19 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善 について講演した。
広島県公立中学校長会主催 研修大会講演(於：ク レイトンベイホテル)	平成 21 年 5 月 22 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の 発信をめざして～について講演した。
大和郡山市立幼稚園における学校評価を活かした カリキュラム改善研修会(於：片桐幼稚園)	平成 21 年 5 月 26 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の 発信をめざして～について講演した。

大和郡山市教育委員会主催 幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：昭和幼稚園）	平成 21 年 5 月 29 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市立「幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会」（於：平和幼稚園）	平成 21 年 6 月 2 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市立幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：矢田幼稚園）	平成 21 年 6 月 12 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
山梨県教育委員会主催 学校評価シンポジウム講演（於：山梨県総合教育センター）	平成 21 年 6 月 16 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：郡山西幼稚園）	平成 21 年 6 月 18 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：治道幼稚園）	平成 21 年 6 月 19 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：郡山北幼稚園）	平成 21 年 6 月 22 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：筒井幼稚園）	平成 21 年 6 月 25 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
奈良県教育研究所主催 幼稚園経営研修講座講演（於：奈良県教育研究所）	平成 21 年 7 月 1 日	幼稚園における学校評価について講演した。
広島県福山市教育委員会主催 福山市教育支援事業指定校研究事業指導助言（福山市立内海小学校）	平成 21 年 7 月 2 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
やまぐち総合教育支援センター主催 山口県幼稚園長研修講座講演（於：やまぐち総合教育支援センター）	平成 21 年 7 月 3 日	幼稚園における学校評価について講演した。
大和郡山市教育委員会主催 幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：矢田南幼稚園）	平成 21 年 7 月 7 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
島根県浜田市立金城中学校主催 教育講演会講演（於：浜田市立金城中学校）	平成 21 年 7 月 12 日	授業力を高める～学校評価を活かして～について講演した。
大和郡山市教育委員会主催 幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：郡山南幼稚園）	平成 21 年 7 月 13 日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
奈良県教育委員会主催 奈良県私立学校「学校評価」に関する研修会講演（於：奈良県立教育研修所）	平成 21 年 7 月 14 日	私立学校における学校評価を活かした学校改善について講演した。
広島県総合教育センター主催 広島県教職員マネジメント研修・10 年経験者研修講演（於：広島県総合教育センター）	平成 21 年 7 月 24 日	学校マネジメントと組織づくり～学校評価を活かして～について講演した。
川西市教育委員会主催 教育講演会講演（於：川西市文化会館）	平成 21 年 7 月 28 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
大阪市教育委員会主催 校内生活科研修会講演（於：大阪市立磯路小学校）	平成 21 年 8 月 3 日	保幼小連携～遊びから学び～について講演した。
愛知県日進市教育研究会主催 教育諸問題研修会講演（於：日進市民会館）	平成 21 年 8 月 5 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
福井市教育委員会主催 教職員課題研修会講演（於：福井県立大学）	平成 21 年 8 月 6 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。

平成 21 年度教員免許更新講習 選択「生活」(於：奈良教育大学)	平成 21 年 8 月 8 日	保幼小連携～遊びから学びへについて講習会を担当した。
奈良県教育研究所主催 10 年経験者研修講座講演 (於：奈良県教育研究所)	平成 21 年 8 月 1 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
文部科学省委嘱事業奈良市立六条小学校区保幼小連携委員会主催 保幼小連携研修会講演	平成 21 年 8 月 18 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
堺市教育委員会主催 堺市教育講演会講演 (於：堺市消費生活センター)	平成 21 年 8 月 19 日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
奈良市教育委員会主催 第 8 回教育フォーラム講演 (於：奈良市立飛鳥幼稚園)	平成 21 年 8 月 21 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
御殿場市教育委員会主催 幼保小教職員合同研修会講演 (於：御殿場市役所玉穂支所)	平成 21 年 8 月 22 日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
相生市教育委員会主催 学校園経営研修講座 (於：相生市立総合福祉会館)	平成 21 年 8 月 24 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
愛知県丹波地方小中学校長会主催 学校評価研修会講演 (於：犬山市福祉会館)	平成 21 年 8 月 25 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
明石市教育研究所主催 明石市スーパーバイザー事業講演 (於：明石市立高丘東幼稚園)	平成 21 年 9 月 4 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
広島県海田町立教育委員会主催 授業力向上研修会講演 (於：海田町立海田西中学校)	平成 21 年 10 月 6 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
平成 21 年度教員免許更新講習 必修「教職についての省察」(於：奈良教育大学)	平成 21 年 10 月 1 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
伊丹市教育委員会主催 学校評価担者研修会講師 (於：伊丹市総合教育センター)	平成 21 年 10 月 27 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
三田市教育委員会主催 教育資質向上事業 学校評価に係る研修会講師	平成 21 年 10 月 3 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催 大和郡山市幼小連携合同研修会講演 (於：同山市昭和幼稚園)	平成 21 年 11 月 17 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
摂津市教育委員会主催 摂津市教育課程研究開発委嘱事業研究発表会全体会講演 (於：摂津市立味生小学校)	平成 21 年 11 月 2 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市教育委員会主催 奈良市 30 人学級指導法改善委員会研究保育指導助言 (於：奈良市立富雄北幼稚園)	平成 21 年 11 月 19 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
岡山県教育委員会主催 園長等運営管理協議会講演 (於：岡山県総合教育センター)	平成 21 年 11 月 27 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市保健福祉部主催 奈良市公私立保育所職員研修会講演	平成 21 年 12 月 1 日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
高知市教育委員会主催 高知市立学校教頭研修会講演 (於：アスパルこうち)	平成 21 年 12 月 4 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催 大和郡山市幼稚園長・教頭研修会講演 (於：市民交流館)	平成 21 年 12 月 17 日	学校評価を活かした学校改善情報発信の在り方へについて講演した。
福井県女性校長・教頭会主催 冬季研修会講演 (於：ニューサンピア敦賀)	平成 21 年 12 月 25 日	評価を活かした学校改善～教員評価・学校評価～について講演した。

神奈川県厚木市教育委員会主催 厚木市立飯山小・小鮎小学校合同研修会講演	平成 22 年 1 月 8 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
西宮市子育て支援センター主催 子育て支援研修会講演（於：西宮市子育て支援センター）	平成 22 年 1 月 15 日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
奈良県指導主事会主催 幼稚園における学校評価研修会講演（於：奈良県立教育研究所）	平成 22 年 1 月 19 日	幼稚園における学校評価について講演した。
大和高田市教育委員会主催 教頭研修会講演	平成 22 年 1 月 22 日	学校評価を活かした学校改善～教頭に求められるもの～について講演した。
広島県三次市教育委員会主催 教務主任研修会講演	平成 22 年 1 月 26 日	学校評価を活かした学校改善～ミドルリーダーの役割について講演した。～
兵庫県立芦屋高等学校授業力向上委員会研修会講演（於：県立芦屋高等学校）	平成 22 年 1 月 29 日	授業力を高める～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県女性校長会主催 学校づくり研修会講演（於：ピュアリティまきび）	平成 22 年 2 月 8 日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
兵庫県市町村指導主事学校評価担当者研修会講演（於：兵庫県立研修所）	平成 22 年 2 月 17 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市教育委員会主催 奈良市 30 人学級指導法改善委員会研究保育指導助言（於：古市人権文化センター）	平成 22 年 2 月 23 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
名古屋市共生の会主催 ミドルリーダー育成研修会講演（於：メルパルク名古屋）	平成 22 年 2 月 26 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
伊丹市公立私立幼稚園・小学校合同研究会（於：スワンホール）	平成 22 年 3 月 2 日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
ERP 大阪フォーラム（於：大阪国際交流センター）	平成 22 年 5 月 2 日	「ゆとり教育からの脱却」についてコーディネーターをした。
西播磨地区小学校校長会研修会（於：相生市総合福祉会館）	平成 22 年 5 月 7 日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
富士市立富士中学校区三校合同 PTA 講演会（於：富士市交流プラザ）	平成 22 年 5 月 8 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三重県公立小中学校女性校長教頭会研修会（於三重県総合文化センター：）	平成 22 年 5 月 25 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
高知県所長・園長研修会（於：高知県教育センター）	平成 22 年 6 月 11 日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市 30 人学級指導法検討委員会（於：奈良市庁舎）	平成 22 年 6 月 14 日	30 人学級を活かした指導の改善
和歌山県幼稚園保育所合同研修「初任者園長研修会（於：和歌山ビッグ愛）	平成 22 年 6 月 15 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
大和郡山市幼稚園・小学校連携研修会（於：矢田コミュニティ会館）	平成 22 年 8 月 4 日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
幼稚園・保育所と小学校連携促進事業夏季研修会（於：田原本青垣生涯学習センター）	平成 22 年 8 月 5 日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
天理市幼稚園教員研修会（於：天理市役所）	平成 22 年 8 月 10 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
桜井市幼小中学校教職員研修会（於：桜井市中央公民館）	平成 22 年 8 月 17 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。

倉敷市公立幼稚園教職員研修会(於：くらしき健康福祉プラザ)	平成 22 年 8 月 20 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
奈良市 30 人学級指導者研修会(於：奈良市庁舎)	平成 22 年 8 月 23 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
滋賀県守山市幼小中学校教職員研修会(於：守山市民ホール)	平成 22 年 8 月 27 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
豊野地区幼稚園長・指導主事研修会(於：池田市合同庁舎)	平成 22 年 8 月 30 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
平成 22 年度 PDCA 研修Ⅱ(於：秋田県庁舎)	平成 22 年 9 月 4 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県園長等運営管理協議会(於：ピュアリティまきび)	平成 22 年 9 月 27 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
教育セミナー山陰 2010 課題講演(於：鳥取県社会福祉人材研修センター)	平成 22 年 10 月 2 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
葛城市立新庄北小学校附属幼稚園 幼小連携研修会(於：新庄北小学校附属幼稚園：)	平成 22 年 10 月 25 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三田市第 2 回幼・小・中学校教頭研修会(於：三田市総合文化センター)	平成 22 年 10 月 26 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
学校経営品質向上研究会(於：関西生産性本部)	平成 22 年 11 月 8 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 22 年 11 月 9 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
平成 22 年度 岡山県国公立幼稚園長研修会(於：ピュアリティまきび)	平成 22 年 11 月 26 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
平成 22 年度岡山県ブロック公立小中学校副校長・教頭研修会(於：ロマン高原かよう総合会館)	平成 22 年 11 月 30 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三次市主幹・教頭研修会(於：三次市)	平成 22 年 12 月 14 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
明日香村人権教育研究会「子どもの学力保障」(於：明日香村立明日香幼稚園)	平成 23 年 1 月 24 日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
平成 22 年度 学力の把握に関する研究指定校事業研究協議会(於：文部科学省)	平成 23 年 1 月 26 日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
磯城郡小学校教育研究会(於：田原本青垣生涯学習センター)	平成 23 年 2 月 16 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
第 3 回奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 2 月 17 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
海田町新教育課程研修会(於：広島県安芸郡海田町ひまわりプラザ)	平成 23 年 2 月 18 日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
姫路市異校種連携研修会(於：姫路市立勤労市民会館)	平成 23 年 5 月 13 日	よりよい保幼小連携の進め方～子どもの育ちと学びをつなぐ～について講演した。
平成 23 年度第 1 回 奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 6 月 2 日	「30 人学級」を活かした指導の改善について講演した。
兵庫県私立小学校学級経営研究会(於：甲南小学校)	平成 23 年 6 月 3 日	子どもと保護者と教師が育ち合う学級経営について講演した。

第 19 回岐阜授業実践フォーラム(於：岐阜羽島文化会館)	平成 23 年 6 月 4 日	学校づくり部会指導助言
奈良市解放保育研究会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 7 月 12 日	元気な保育園づくりのために ～これからの保育者に求められる資質～について講演した。
平成 23 年度第 2 回奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 7 月 26 日	「30 人学級」を活かした指導の改善について講演した。
岡山県国公立幼稚園教育研究会 備前支部研修会(於：岡山県加賀郡吉備中央町農業振興センター)	平成 23 年 7 月 29 日	元気の出る学校評価 ～マネジメントツールを生かして～について講演した。
福井県鯖江市小中学校学級経営研修講座(於：鯖江市文化の館)	平成 23 年 8 月 2 日	子どもと保護者と教師が育ち合う学級づくりについて講演した。
八尾市幼保小合同研修会(於：中河内府民センター)	平成 23 年 8 月 5 日	子どもの育ちと学びをつなぐ ～幼保小連携による教育・保育を通して～について講演した。
兵庫県公立学校女性管理職研修会(於：ウェスティンホテル淡路)	平成 23 年 8 月 8 日	兵庫県公立学校女性管理職を対象に、「学校力・教師力を高める学校づくり」について講演した。
芦屋フォーラム学校づくり部会(於：兵庫県芦屋市立宮川小学校)	平成 23 年 8 月 12 日	育ちと学びをつなぐ学校づくり ～ 知・徳・体を育てる ～について講演した。
第 3 回 滋賀県 10 年経験者研修会(於：滋賀県総合教育センター)	平成 23 年 8 月 23 日	「園における望ましい連携の在り方」 ～子どもの育ちと学びをつなぐために～について講演した。
愛知県豊川市 授業力向上研修会(於：愛知県豊川市 音羽文化ホール)	平成 23 年 8 月 25 日	これからの教師に求められる資質 ～授業力向上をめざして～について講演した。
兵庫県篠山市 主幹教諭研修会(於：兵庫県篠山市市役所庁舎)	平成 23 年 8 月 29 日	元気な学校づくり～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県園長等運営管理協議会(於：ピュアリティまきび)	平成 23 年 9 月 30 日	幼稚園における学校評価～マネジメントツール、コミュニケーションツールとしての活用～について講演した。
西宮市幼年教育研修(於：西宮市子育て総合センター)	平成 23 年 10 月 25 日	幼・保・小連携～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造～について講演した。
敦賀フォーラム(於：プラザ萬象 大ホール)	平成 23 年 11 月 3 日	「学校・家庭・地域でつなぐ教育・共育・協育 ～敦賀の誇りと教育力を高める」～として、敦賀市教育委員会主催討論会登壇した。
奈良学園幼稚園園内研修会(於：奈良学園幼稚園)	平成 23 年 11 月 8 日	幼児期と小学校以降の教育 ～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造～について講演した。
平成 23 年度第 4 回 奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 11 月 14 日	「30 人学級」を活かした指導の改善
幼稚園経営研修講座(於：奈良県立教育研究所)	平成 23 年 11 月 29 日	教育課程編成の工夫と教職員の共通理解 ～育ちと学びをつなぐ園づくりのために～について講演した。
広島県三次市小中学校 校長研修会(於：みよしまちづくりセンター)	平成 23 年 12 月 6 日	育ちと学びをつなぐ学校づくり～マネジメントツールとしての学校評価を活かして～について講演した。
伊賀市教頭会研修(於：伊賀市教育研究センター)	平成 23 年 12 月 9 日	元気の出る学校づくり ～学校評価を活かして～について講演した。

大阪府私立幼稚園連盟 免許更新講習(於：大阪府私学教育文化会館)	平成 23 年 12 月 21 日	幼稚園をめぐる最新事情「幼稚園の信頼構築と改善に生かす学校評価と幼小連携」について講演した。
西宮市幼小連携研修・実践報告会(於：西宮市子育て総合センター)	平成 24 年 1 月 13 日	。幼小連携～実践への提言・助言～について講演した。
奈良文化女子短期大学付属幼稚園教員研修会(於：奈良文化女子短期大学付属幼稚園)	平成 24 年 1 月 17 日	幼稚園の信頼構築と改善に生かす 学校評価について講演した。
八尾市研究指定事業研修会(於：八尾市立東山本幼稚園)	平成 24 年 1 月 31 日	八尾市研究指定校園の教諭・指導主事等を対象に「つたえあい・ひびきあい・まなびあう ～幼小がつながって～」について講演した。
泉北 3 市 1 町幼稚園管理職研修(於：忠岡町シビックセンター(忠岡町役場))	平成 24 年 2 月 7 日	泉北 3 市 1 町(和泉市・泉大津市・高石市・忠岡町)幼稚園管理職を対象に「元気の出る幼稚園づくり」～幼稚園管理職のマネジメント力と年度末の検証～について講演した。
平成 23 年度第 5 回 奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 24 年 2 月 13 日	奈良市内幼稚園・小学校教諭等を対象に「30 人学級」を活かした指導の改善について講演した。
猪名川町教頭・副主幹合同研修会(於：兵庫県猪名川町教育委員会室)	平成 24 年 2 月 16 日	猪名川町教頭・副主幹を対象に「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」について講演
久米田看護専門学校における特別講義(於：久米田看護専門学校)	平成 24 年 3 月 1 日	看護学生(1・2・3 年生)を対象に、「評価を活かして自分を変える～生き生きスキルアップ、シェイプアップ、メイクアップ～」について講演
門真市私立幼稚園・保育園合同研修会(於：門真市仙亭会議室)	平成 24 年 3 月 1 日	門真市私立幼稚園・保育園の理事長・園長等を対象に、幼小連携～育ちと学びをつなぐ学校園づくり～について講演
北葛城郡広陵町幼稚園教員の資質向上にかかる講演の講師(於：北葛城郡広陵町総合福祉会館「さわやかホール」)	平成 24 年 5 月 2 日	北葛城郡幼稚園教育研究会会員を対象に「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造」について講演
敦賀っ子教育審議会にかかる「学び育み委員会」「子どもサポート委員会」合同開催 委員として講話(於：敦賀市立図書館 研修室)	平成 24 年 5 月 15 日	敦賀っ子教育審議会にかかる「子どもサポート委員会」委員を対象に「学びの基礎力」をもとに今後の方向性を提案
桜井市「第 2 回 子育てセミナー」講師(於：桜井市立中央公民館)	平成 24 年 5 月 25 日	桜井市就学前の幼児とその保護者対象に「第 2 回子育てセミナー」において「遊びから学びへ～幼児教育と小学校教育の接続」について講演
平成 24 年度 西日本私立小学校教員研修会 講師(於：追手門学院小学校)	平成 24 年 5 月 25 日	西日本私立小学校教員を対象として「学級経営分科会」において、「子どもと保護者と教師が育つ学級経営」について講演
兵庫県私立小学校連合会研修会講師 モラル教育の公開授業 指導講演(於：甲南小学校)	平成 24 年 6 月 1 日	兵庫県私立小学校学級経営部会教員を対象として「モラル・マナー・ルールを通して、公開授業指導講演
第 20 回授業実践フォーラム 教育課題講座の講師(於：岐阜県羽島市文化センター)	平成 24 年 6 月 2 日	初任者から経験者まで全国から参加の学級担任及び管理職等を対象に「学級づくりの諸課題～子どもと保護者と教師が育つ学級経営～」について講演
三田市教育委員会主催 三田市立保幼小・中・連携推進にかかる研修会 講師(於：有馬富士自然学習センター)	平成 24 年 6 月 19 日	三田市内の小・中校長または教頭、保育所長・私立幼稚園長又は教諭 50 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小・中・連携」について講演
第 1 回宝塚市立小・中・特別支援学校 校長研修会講師(於：宝塚市立教育総合センター)	平成 24 年 6 月 22 日	宝塚市立小・中・特別支援学校 校長等 30 人を対象に、「人材育成へのマネジメント～ 学校改善へのリーダーシップ ～」について講演

天理市教育委員会主催 天理市内保・幼・小・中の連携推進にかかる研修会 講師（於：天理市教育総合センター）	平成 24 年 6 月 29 日	天理市内保・幼・小・中の校園所長 25 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保・幼・小連携」について講演
特例社団法人日本精神看護技術協会主催 教育方法研修会 講師（於：京都研修センター）	平成 24 年 7 月 3 日	看護実習指導者を目指している者(80 名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の形態」について講義
特例社団法人日本精神看護技術協会主催 教育方法研修会 講師（於：京都研修センター）	平成 24 年 7 月 4 日	看護実習指導者を目指している者(80 名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の方法」について講義
全国幼児教育研究協会 主催 中国地区岡山支部研修会 講師（於：岡山衛生会館 三木記念ホール）	平成 24 年 7 月 7 日	中国地区岡山県の幼稚園長・教諭・保育所長・保育士・大学関係者など 300 名を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かして～」の講演
鳴門教育大学大学院 特別講義（於：鳴門教育大学）	平成 24 年 7 月 13 日	鳴門教育大学大学院授業科目「学習指導と学習評価」及び学部授業科目「教育評価論」における特別講義
平成 24 年度奈良市「30 人学級」指導者研修会 講師（於：奈良市庁舎 中央棟 6 階 正庁）	平成 24 年 7 月 24 日	奈良市立幼稚園・小学校教員を対象に『奈良市小・中学校学力・学習調査の結果から見えてくる「30 人学級」での効果的指導法』について講演
福井県丹生郡学校教育研究会主催 丹生郡教育講演会 講師（於：越前陶芸村文化交流会館）	平成 24 年 7 月 26 日	福井県丹生郡内小中学校教職員 150 名を対象に「育ちと学びをつなぐ学校づくり 授業づくり」について講演した。
第 3 回門真市一貫教育課程研修会 講師（於：門真市教育センター）	平成 24 年 7 月 27 日	門真市立幼小中学校教員を対象に、「就学前と義務教育の連携を深めるために」について講演した。
敦賀市教育委員会主催 敦賀市ミドルリーダー研修会講師（於：敦賀市立図書館）	平成 24 年 8 月 7 日	敦賀市ミドルリーダー40 名を対象に、「教員の質の向上～信頼構築のためのスキルアップ、ブラッシュアップ、メイクアップ～」と題して講演
伊賀市教育センター主催 平成 24 年度伊賀市教育センター研修講座（於：伊賀市教育センター）	平成 24 年 8 月 10 日	伊賀市小中学校及び幼稚園教員 40 名を対象として、「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」と題して講演
和歌山県福祉保健部主催 平成 24 年度幼稚園・保育所関係職員合同研修会 講師（於：和歌山北コミュニティセンター）	平成 24 年 8 月 20 日	公・私立幼稚園の園長及び教員、公・私立保育所の所長及び保育士、認定子ども園の園長及び職員、公・私立小学校の校長及び教員、各市町村教育委員会指導主事、各市町村保育行政担当者 240 人対象に「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐために～」講演
社団法人 大阪府私立幼稚園連盟主催 免許更新更新講習講師（於：大阪私学教育文化会館）	平成 24 年 8 月 22 日	大阪府私立幼稚園教員 120 名を対象に、免許更新更新【必修】講習を担当。「チーム保育に学校評価を取り入れ、小学校につないでいくために」について講義
名古屋市教育委員会指定校事業において、名古屋市立大高南小学校研修会 講師	平成 24 年 8 月 27 日	名古屋市立大高南小学校教員を対象に、「ポジティブプロパガンダを創り出す学校評価」について講演・演習
岡山県教育委員会主催の園長等運営管理協議会講師（於：ピュアリティまきび）	平成 24 年 9 月 24 日	国公立私立幼稚園長を対象に、「幼稚園における学校評価」について講演
奈良市教育委員会主催の 30 人学級指導法検討委員会において、指導助言（於：奈良市庁舎）	平成 24 年 10 月 2 日	奈良市幼小教員を対象に、「第 2 回 30 人学級指導法検討委員会」に委員長として指導助言

三田市教育委員会主催の校園長会及び教育委員等研修会 講師（於：三田市消防本部会議室）	平成 24 年 10 月 3 日	三田市立幼小中校園長、教育委員、指導主事希望する市内私立幼稚園長または公私立保育所長等 50 名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼・小・中連携」について、講演
大阪私立幼稚園連盟青年振興部主催の研修会 講師（於：大阪私学教育文化会館）	平成 24 年 10 月 9 日	大阪私立幼稚園青年振興部教職員を対象に「学校評価と幼小連携」について講演
長岡京市教育委員会主催の保幼・小・中連携会議研修会 講師（於：長岡京市立図書館大会議室）	平成 24 年 10 月 26 日	長岡京市内保育園・保育所・幼稚園・小学校の教職員等 70 名を対象に、「発達と学びの連続性を踏まえた幼児期と児童期の接続カリキュラムづくりについて」、講演
岡山県保育協議会主催 保育研究会 講師（於：JA 岡山 7 階ホール）	平成 24 年 10 月 30 日	県内保育所関係者・職員等 240 名を対象に、「元気の出る保育園づくり～保育の質を高める自己評価を活かして～」について講演
八尾市教育委員会主催の研究指定園 園内研修会 講師（於：八尾市立東山本幼稚園（研究指定園）	平成 24 年 11 月 5 日	八尾市幼稚園園長・教諭及び小学校校長・教員並びに指導主事を対象に、「園内保育」について指導助言
福井市教育委員会主催の平成 24 年度福井市公立幼稚園保育研究会 講師（於：福井東郷公民館）	平成 24 年 11 月 10 日	福井市内公立幼稚園 40 名小学校教職員及び保育士を対象に、「幼児教育と小学校教育の連携・接続に向けて」について講演
第 7 回全国高等学校保育教育研究大会 講師（於：千里阪急ホテル）	平成 24 年 11 月 16 日	全国高等学校保育コース担当者等 150 名を対象に、「生きる力を培う保育者の育成～育ちと学びをつなぐために～」と題して基調講演
生駒市立教育委員会研究発表会 講師（於：生駒市立老分幼稚園）	平成 24 年 11 月 20 日	幼稚園教諭参加者 82 名、保育園 3 名、小学校教諭 5 名（老分小 1 年担任）中学校教諭、高等学校教諭を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～小学校、中学校、高等学校との交流から～」について記念講演。
日本保育協会主催の大阪支部女性部研修会講師（於：菓業年金会館）	平成 24 年 11 月 26 日	日本保育協会大阪支部の保育士 90 名を対象に、「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐ～」について講演
大阪保育部会北大阪ブロック会主催の年末研修会 講師。（於：ホテル・アゴーラ大阪守口）	平成 24 年 12 月 3 日	会員園の管理職 80 名を対象に「育ちと学びをつなぐ保小連携」について講演
有田市教育委員会主催の「実効性の高い学校評価・情報提供の充実・改善に向けた取組」にかかる研修会 講師。（於：有田市橘家）	平成 24 年 12 月 4 日	有田市立小中学校教員等 80 名を対象に「学校改善につながる学校評価にするために」について講演
紀の川市教育委員会主催の「豊かな学びと育ちをつなぐ保幼小合同研修会」講師。（於：紀の川市立安楽川保育所）	平成 25 年 1 月 22 日	紀の川市立保育所、私立幼稚園、紀の川市立小学校 園長・校長・教頭・教職員等 約 70 名を対象に、「遊びから学びへ 育ちをつなぐ生活科」について講演
宝塚市教育委員会主催の「宝塚市立学校教頭研修会」講師（於：宝塚市立教育総合センター）	平成 25 年 1 月 29 日	宝塚市立学校教頭 24 名をを対象に、「学校力改善の秘策～元気の出る学校づくりのために」について講話と演習
奈良市教育委員会主催の平成 24 年度奈良市 30 人学級指導法検討委員会に委員長として出席。（於：奈良市庁舎）	平成 25 年 2 月 8 日	奈良市 30 人学級指導法検討委員を対象に最終報告及び「30 人学級」での期待できる効果についての集計結果検討などについて指導助言をした。
奈良文化女子短期大学幼小接続フォーラムの企画及び総括講演（於：奈良文化女子短期大学）	平成 25 年 2 月 24 日	幼小接続フォーラムの参加者（保育士・幼稚園教諭、小学校教諭及び管理職、教育委員会、教育関連企業等 139 名を対象に「幼児教育と小学校以降の育ちと学びをつなぐ」について講演

敦賀市研究指定学校 敦賀南小学校校内研修会の講師。(於：敦賀南小学校)	平成 25 年 2 月 26 日	敦賀市研究指定学校 敦賀南小学校教職員 25 名を対象に、「元気の出る学校づくり～家庭・学校・地域をつないで～」について講演
阪南市教頭会主催の小中学校教頭会の講師(於：阪南市商工会館)	平成 25 年 2 月 28 日	阪南市立小中学校の教頭等 16 名を対象に、「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」について講演
社会福祉法人成光苑主催の 7 ヶ園合同研修会の講師(於：ホテル阪急エキスポパーク)	平成 25 年 3 月 26 日	社会福祉法人成光苑の理事、園長、保育者等 120 名を対象に「幼保小の連携」について講演
大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習会【必修】の講師(於：エル・おおさか(大阪府立労働センター))	平成 25 年 8 月 6 日	大阪府私立幼稚園免許状更新講習者を対象に免許更新講習【必修】を担当。
京都府教育委員会主催の平成 25 年度「保育技術専門講座Ⅰ」及び「新規採用者研修『幼稚園教諭 2』講座」の講師(於：京都府教育センター)	平成 25 年 8 月 8 日	教諭(幼稚園及び特別支援学校の幼稚部 国立・私立を含む) 90 名を対象に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続」について、講演及び演習。
奈良市教育委員会主催の平成 25 年度第 1 回「30 人学級」指導者実践交流会の講師(於：奈良市教育センター)	平成 25 年 8 月 12 日	奈良市内幼稚園教諭及び小学校教員等を対象に指導助言及び講演。
安堵町教育委員会主催の夏季職員研修の講師(於：安堵町立中学校会議室)	平成 25 年 8 月 13 日	安堵町中学校小学校教職員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい連携・接続のあり方～」について講演。
丹波市教育委員会主催の丹波市小学校長会研修会の講師(於：丹波市山南住民センター)	平成 25 年 8 月 27 日	丹波市小学校校長 25 名を対象に「元気の出る学校づくり」について講演。
第 2 回高校と大学の連携フォーラム in 大阪のパネルディスカッション、コーディネータ(於：内田洋行セミナーホール)	平成 25 年 8 月 31 日	大阪府及び奈良県内高等学校関係者、教育関係者 120 名を対象に「日本の教師を育てる～教育三都物語～」について、パネルディスカッションにおいて、コーディネータ
愛知県教職員組合主催の第 63 次教育研究愛知研修会記念講演の講師。(於：愛知県産業労働センター(ウイंकあいち))	平成 25 年 10 月 19 日	市町村教育長・愛知県小中学校長役員・PTA 代表・教員代表等 450 名を対象に「子どもたちの健やかな成長をめざして～力と夢を育てる地域ぐるみの学校づくり～」をテーマに記念講演。
鳥取県中部委員会主催の平成 25 年度鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士等の合同研修会の講師(於：倉吉未来中心センター)	平成 25 年 10 月 30 日	鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士名を対象に、「元気の出る園づくり～園評価を活かして」をテーマに記念講演。
愛知県知多郡武豊町教育委員会主催の教育講演会の講師(於：武豊町立武豊中学校体育館)	平成 25 年 11 月 22 日	武豊町 6 小中学校教職員を対象に「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演
大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会の講師(於：もと大阪市幼児教育センター)	平成 25 年 11 月 29 日	大阪市私立幼稚園連合会、幼稚園教諭を対象に「幼小連携」をテーマに講演
久米田看護専門学校主催の講師会の講師(於：社会医療法人 生長会 府中病院 セミナーホール)	平成 25 年 11 月 30 日	実習指導者、専任教員、非常勤講師他 60 名を対象として、「学生・教員・学校が輝く教育評価」をテーマに講演
尾張地区女性役職会主催の研修会の講師(於：名古屋国際会議場)	平成 25 年 12 月 15 日	尾張地区女性役職会研修会参加者 450 名を対象として、「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演
日本初等理科教育研究会堺大会発表校 堺市立浜寺石津小学校研修会の講師(於：堺市立浜寺石津小学校)	平成 26 年 2 月 7 日	日本初等理科教育研究会堺大会発表校 堺市立浜寺石津小学校教職員を対象に、第三者評価をふまえた総括会として、「未来を切り拓く子どもを育てるー日本初等理科教育研究会堺大会での成果と課題ー」と題して講演
東海市立教員研修センター TEC21 主催の東海市立教員研修の講師(於：東海市立文化センター)	平成 26 年 2 月 7 日	東海市立小中学校教員 60 名を対象として、「元気の出る学校づくり」をテーマに講演。

奈良文化女子短期大学第2回幼小接続フォーラムの総括講演（於：奈良文化女子短期大学）	平成26年3月2日	保幼小教職員・教育関係者等120名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに総括講演。
鳥取県東部地区幼稚園等の教員及び保育士の合同研修会 講師（於：鳥取県立福祉人材研修センター）	平成26年5月14日	保幼小教職員・教育関係者等200名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。
大阪府立高等学校第7ブロックPTA連絡協議会の講師（於：大阪府立大塚高等学校）	平成26年6月14日	大阪府立高等学校第7ブロックPTA連絡協議会主催のPTA総会講演会において、保護者・校長・教頭・教員150名を対象に「高校生活をどう過ごさせるか」をテーマに講演
人間教育学会「学校間接続分科会」の講師（於：奈良学園大学）	平成26年8月4日	人間教育学会「学校間接続分科会」において、講演
三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会の講師（於：愛知県岡崎市民会館 甲山会館）	平成26年8月5日	三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会において、小中教員250名を対象に「力と夢を育てる学校づくり・授業づくり～総合的な学習を通して」をテーマに講演。
阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会の講師（於：阿久比町勤労福祉センター・エスペランス丸山）	平成26年8月6日	阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会「教育講演会」において、小中教職員200名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。
日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会の講師（於：ホテルモントレ ラ・スール）	平成26年8月21日	日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会において、小学校教員80名を対象に「元気の出る学級づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して」をテーマに講演。
豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会の講師（於：アクア文化ホール）	平成26年8月28日	豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会において、公私立小学校、幼稚園、公立・民間保育園、児童発達支援センター、認定こども園、所属長及び教職員180名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい幼保小連携・接続のあり方～」をテーマに講演。
和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会の講師（於：和泉市立北池田小学校）	平成26年8月29日	和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会において、教職員30名を対象に「元気な学校づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して～」をテーマに講演
寝屋川市教育委員会主催の研修会の講師（於：寝屋川市立北幼稚園）	平成26年9月17日	寝屋川市教育委員会主催の研修会において、小学校教員、公私立幼稚園教諭・保育士100名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前後の接続を中心に～」をテーマに講演。
日本精神看護協会主催の看護実習指導者の資格取得の講師（於：日精看 京都研修センター）	平成26年10月21・22日	看護実習指導者の資格取得を目指すものの80名を対象に、教育方法研修会における講師
神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成26年11月10日	神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会において、公私立幼稚園教諭150名を対象に「元気の出る園づくり～子どもの育ちと学びをつなぐ～」をテーマに講演。
沖縄県庁主催の平成26年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成26年11月17日	沖縄県庁主催の平成26年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会において、公立、公私立幼稚園長、教諭・市村教育委員会指導主事、宮古島市教育研究所指導主事を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かした保育改善を通して～」をテーマに講演。
大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成26年12月3日	大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会において、私立幼稚園教諭80名を対象に「元気の出る園づくり～子どもの育ちと学びをつなぐ～」をテーマに講演。

大東市主催の保幼小研修会の講師（於：大東市民会館）	平成 27 年 1 月 27 日	大東市主催の保幼小研修会において保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、園長、行政等 300 名対象として、「育ちと学びをつなぐ保幼小連携」をテーマに講演。
第 58 回大阪府私立幼稚園教育研究大会（免許更新講習）の講師（於：大阪国際会議場（グランキューブ大阪）	平成 27 年 3 月 26 日	大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習において、大阪府私立幼稚園・園長・教職員、近畿地区私立幼稚園教諭 100 名を対象に「幼稚園の信頼構築と改善～学校評価と幼小接続・連携をもとに～」について、講義を担当。
大阪市私立幼稚園連合会研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成 27 年 5 月 13 日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭 40 名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
羽衣学園中学・高等学校の父母教育懇談会の講師（於：羽衣学園中学・高等学校）	平成 27 年 5 月 16 日	羽衣学園中学・高等学校の父母教育懇談会において、保護者及び教職員 200 名を対象に「親として、中・高時代をどう過ごさせるか」をテーマに講演。
近畿ブロック都市福祉事務所長連絡協議会主催の第 9 回通常総会における講師（於：大和高田市さざんかホール）	平成 27 年 5 月 22 日	近畿ブロック都市福祉事務所長連絡協議会主催の第 9 回通常総会において、福祉事務所長 80 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ町づくり・人づくり～子ども・子育て新制度をふまえて」をテーマに講演。
神戸市総合教育センター主催の職務研修講座における講師（於：神戸市総合教育センター）	平成 27 年 6 月 12 日	神戸市総合教育センター主催の職務研修講座において、公立幼稚園主任 30 名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
日本私学教育研究所主催の平成 27 年度私立学校初任者研修小学校（西日本地区）の講師（於：大阪ガーデンパレス）	平成 27 年 7 月 30 日	日本私学教育研究所主催の平成 27 年度私立学校初任者研修小学校（西日本地区）において、小学校教員 40 名を対象に「子どもに力をつける教員の力量形成～教師力を学校力につなげる～」をテーマに講演。
古座川町保小中一貫教育研修会の講師（於：古座川町中央公民館）	平成 27 年 8 月 2 日	古座川町保小中一貫教育研修会において、保小中教職員・保護者 60 名を対象に「保幼接続・小中一貫」をテーマに講演。
姫路市教育委員会主催の園長研修の講師（於：姫路市立総合教育センター）	平成 27 年 8 月 4 日	姫路市教育委員会主催の園長研修において、幼稚園長 30 名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
宝塚市保幼小中特別支援学校合同研修会の講師（於：宝塚市立安倉小学校ランチルーム）	平成 27 年 8 月 6 日	宝塚市保幼小中特別支援学校合同研修会において、市立保育所長・園長・小中学校教職員・学校長 60 名を対象に、「子どもたちの育ちや学びをつなぐ保幼小連携の在り方」をテーマに講演。
教育セミナー関西 2015 の講師（於：京都ノートルダム女子大学）	平成 27 年 8 月 8 日	教育セミナー関西 2015 において、参加者 20 名を対象に「ワークショップ～子どもたちの育ちや学びをつなぐ」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成 27 年 8 月 12 日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50 名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム①」をテーマに講演
中丹地域保育所（園）・幼稚園・小学校連携推進研修会の講師（於：綾部市保健福祉センター）	平成 27 年 8 月 17 日	中丹地域保育所（園）・幼稚園・小学校連携推進研修会の講師
教員免許更新講習の講師（於：奈良学園大学幼小接続室）	平成 27 年 8 月 19 日	教員免許更新講習として、幼稚園教諭・小学校教諭 30 名を対象に「これからの生活科～子どもの育ちと学びの連続をふまえて～」をテーマに講師として全 6 時間の講習を担当。

岡山市教職員研修の講師（於：岡山ふれあいセンター）	平成 27 年 8 月 24 日	岡山市教職員研修こども園・保育園・幼稚園（年長担任もしくは連携担当者）、小学校（1 年生担任もしくは生活科担当者）250 名を対象に「子どもの「育ち」と「学び」をつなぐ保育、授業づくり～保幼小接続におけるこれからの言語活動～」をテーマに講演。
あま市小中学校教職員会研修会における講師（於：あま市美和文化会館）	平成 27 年 8 月 25 日	あま市小中学校教職員会研修会において、あま市小中学校教職員 350 名を対象に「力と夢を育てる学校づくり～学校間接続と学校評価を活かして」をテーマに講演。
第 10 回教師力向上研究会における講師（於：箕面自由学園小学校）	平成 27 年 8 月 29 日	第 10 回教師力向上研究会において、参加者 30 名を対象に「子どもの「育ち」と「学び」をつなぐ授業づくり」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成 27 年 9 月 8 日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50 名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム②」をテーマに講演
鳥取県教育委員会事務局鳥取県教育センター主催の【研修名】【幼児教育④】の講師（於：鳥取県教育センター）	平成 27 年 9 月 15 日	鳥取県教育委員会事務局 鳥取県教育センター主催の【研修名】【幼児教育④】信頼される魅力ある園づくり～園評価を活かして～において、鳥取県内の幼稚園長・保育所（園）長・認定こども園長の 21 名を対象として、「信頼される魅力ある園づくりをめざしテーマに講義・演習を担当。受講者園長 20 名及び聴講（教育委員会幼児教育担当 6 名）
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成 27 年 10 月 21 日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50 名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム③」をテーマに講演
平成 27 年度和歌山県那賀地方 PTA 指導者研修会講演会の講師（於：岩出市民俗資料館）	平成 27 年 11 月 14 日	平成 27 年度和歌山県那賀地方 PTA 指導者研修会において、保護者及び教員 65 名を対象として、「親として、中学時代をどう過ごさせるか～これからのコミュニケーションと学びの力～」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成 27 年 11 月 25 日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50 名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム④」をテーマに講演
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成 27 年 12 月 9 日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50 名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム⑤」をテーマに講演
看護実習指導者を目指すものを対象とした「教育方法研修会」①の講師（於：京都研修センター）	平成 27 年 12 月 16 日	日本精神看護協会 京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者 38 名を対象に「授業の形態」をテーマとして、講義・演習
看護実習指導者を目指すものを対象とした「教育方法研修会」②の講師（於：京都研修センター）	平成 27 年 12 月 18 日	日本精神看護協会 京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者 38 名を対象に「授業の方法」をテーマとして、講義・演習
宝塚市子ども未来部主催の所内研修会の講師（於：宝塚市立安倉中保育所ホール）	平成 28 年 1 月 13 日	宝塚市子ども未来部主催の所内研修会において、所長・職員・保育教諭 20 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小接続・連携」をテーマとして、講演。

大阪市私立幼稚園連合会研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成 28 年 5 月 24 日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭 40 名を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。
三宅町幼稚園園外研修会（於：奈良学園大学幼小接続室）	平成 28 年 6 月 1 日	三宅町主催の研修会において、27 名（町長・健康子ども部部長・職員 5 名、保護者 18 名、評議員 1 名、その他 1 名）を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。
愛知県一宮市西成東小学校 PTA 講演会（於：一宮市西成東小学校講堂）	平成 28 年 6 月 12 日	愛知県一宮市西成東小学校主催の PTA 講演会において、管理職及び保護者 50 名を対象として、「親として、小学時代をどう過ごさせるか～これからのコミュニケーションと学びの力～」をテーマに講演。
ゆめナビ講義ライブ（於：インテックス大阪）	平成 28 年 6 月 18 日	ゆめナビライブにおいて、高校生 80 名を対象として、「保育士も教師も！～育ちと学びをつなぐ教育のスペシャリストになる～」をテーマに講義。全国の大学 250 講義の中で 1 万人参加の高校生アンケートにより「もう一度聴きたい講義」の第一位に選出された。
鳥取県中部教育局園経営研修（於：伯耆しあわせの郷）	平成 28 年 6 月 28 日	鳥取県中部教育局主催の【幼児教育④】園経営研修において、鳥取県内の幼稚園長・保育所（園）長・認定こども園長、園経営にかかわる副園（所）長、部長等の 50 名を対象として、「園を活性化するための組織マネジメントのあり方 ～信頼される特色ある園づくりをめざして～」をテーマに講義・演習。
精神科認定看護資格取得研修会（於：京都研修センター）	平成 28 年 7 月 22 日	日本精神看護協会主催の精神科認定看護資格取得を目指すもの 86 名対象とした「組織内における活動、教育論Ⅰ」において、「教育に必要な理論・教育プログラムの展開に必要な教育技法」をテーマに講義。
西宮市幼保小第 2 回「つながり」研修（於：西宮市立子育て総合センター）	平成 28 年 7 月 26 日	西宮市立子育て総合センター主催の第 2 回「つながり」研修（幼保小）において、保育所保育士、幼稚園・小学校・特別支援学校教員等 110 名を対象に「生活科を窓口としたスタートカリキュラムとアプローチカリキュラム」と題して講演。
岸和田市「平成 28 年度 管理職（校長）研修（於：波切りホール）」	平成 28 年 8 月 1 日	岸和田市教育委員会主催の「平成 28 年度 管理職（校長）研修」において、市内幼小中学校校長 40 名を対象に「力と夢を育てる元気な学校づくり～学校評価を活かして～」をテーマに講演。
きのくに共育コミュニティ研修会（於：和歌山ビッグ愛）	平成 28 年 8 月 3 日	和歌山県教育庁主催のきのくに共育コミュニティ研修会において、参加者 1100 名（学校関係者 80 名、社会教育関係者（行政・公民館関係者・コーディネーター等 30 名）を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～学校・家庭・地域がつながる共育～」をテーマに講演。
福井県平 28 年度組織づくり研修講座（於：嶺南教育事務所）	平成 28 年 9 月 7 日	福井県教育庁主催の平成 28 年度組織づくり研修講座において、福井県嶺南地区小中学校・高等学校教職員 20 名を対象に、「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演。
三郷町立幼稚園 新規採用教員研修及び園内研修会（於：三郷町立南畑幼稚園）	平成 28 年 10 月 14 日	三郷町教育委員会主催の「幼稚園新規採用教員研修」及び園内研修において、町教委職員及び園長並びに職員を対象に講演。

大阪府立高等学校第3ブロックPTA協議会研修会 (於：大阪府立市岡高等学校)	平成28年11月8日	大阪府立高等学校第3ブロックPTA協議会研修会において、保護者、校長、教員等55名を対象に「親子のコミュニケーション」をテーマに、講演。
柏原市「市教教研修会」(於：柏原市立玉手幼稚園)	平成28年11月11日	柏原市教育委員会主催の「柏原市教育研究会幼稚園部会」において、公立私立幼稚園及び小学校教職員50名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼小接続カリキュラムのあり方～」について、講演。
日本精神看護協会「教育方法研修会」(於：京都研修センター)	平成28年12月21日	日本精神看護協会 京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者36名を対象に「授業の形態・方法」をテーマとして、講義・演習。
和歌山県社会教育関係職員等研修会(第2回)・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム(於：紀南文化会館小ホール)	平成29年1月16日	和歌山県生涯教育局主催の「平成28年度和歌山県社会教育関係職員等研修会(第2回)・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム」において、社会教育関係職員・家庭教育関係職員・福祉関係職員・学校関係教職員、子育て中の保護者、子育て支援活動をしている方、家庭教育支援チーム員等100名を対象としたパネルディスカッション「つながろう！家庭・学校・地域・行政・福祉切れ目のない支援のために」をテーマにコーディネータとして担当。
西宮市幼保小第3回「つながり」研修(於：西宮市立子育て総合センター)	平成29年1月20日	西宮市立子育て総合センター主催の第3回「つながり」研修(幼保小)において、保育所保育士、幼稚園・小学校・特別支援学校教員等88名を対象に『幼小小接続を考える「とまどいマトリクス」を通して』と題して講演及びワークショップを実施した。
鳥取県「幼保小連携推進研修会」(於：鳥取県福祉人材研修センター)	平成29年2月27日	鳥取県教育委員会主催の「幼保小連携推進研修会」において、幼保・認定子ども園棟等の管理職及び教諭、保育士、保育教諭、小学校、特別支援学校の管理職及び連携担当者、1年生の担任、市町村教育委員会担当者などの200名を対象に幼保小の円滑な接続をめざして～幼児教育と小学校をつなぐ～をテーマに講演・演習、指導講評を担当
岡山市保育協議会研修(於：岡山市役所 保健福祉局勤労者福祉センター)	平成29年6月5日	岡山市保育協議会主催の研修会において、保育園・こども園の園長・保育士135名を対象として、子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前までに育てたい力、つきたい力～」をテーマに講演。
大阪市私立幼稚園連合会講演(於：)	平成29年6月20日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭50名を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。合わせて、事務局を通じて、本学の案内と共に、学生の実習の際の受入等についてもお願いした。
奈良県就学前教育振興プログラム策定会議(於：)	平成29年6月28日	奈良県教委が京都大学に委嘱した事業「就学前教育プログラム策定」委員として出席し、2017年度取り組みを検討した。とりわけ、保育・教育現場への評価規準や指標の示し方の提示など、新たな知見が情報交換された。
大和高田市まち・ひと・しごと創生会議(於：大和高田市役所)	平成29年7月4日	大和高田市主催の大和高田市まち・ひと・しごと創生会議において議長として、協議会を進行。議案の2「地方創生加速化交付金に係る事業の実施結果」及び議案の3「地方創生推進交付金に係る事業の実施状況」について検証。
平成29年度第1回大阪府教育行政評価審議会(於：大阪府庁)	平成29年7月18日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府HPにて公開。

平成 29 年度第 2 回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成 29 年 7 月 19 日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府HPにて公開。
西宮市教育委員会主催「つながり研修②」（於：西宮市職員会館）	平成 29 年 7 月 24 日	西宮市教育委員会主催の「つながり研修」において、幼稚園・保育所・小学校、特別支援教育の教職員 100 名を対象として、『育った力を学びの力につなぐⅠ「とまどいマトリクス」の活用を通して』①をテーマに講演。
大和高田市人権研究会 市人教 課題別研修会	平成 29 年 7 月 29 日	大和高田市人権教育研究会主催の平成 29 年度大和高田市人権教育研究会 課題別研修会において、市人教会員（保幼小中高の教職員）120 人を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ ～幼児期と小学校教育の連携・接続～」をテーマに講演。
平成 29 年度第 3 回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成 29 年 7 月 31 日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府HPにて公開。
平成 29 年度保育士の専門性を高める連続研修会（於：TKP 心斎橋駅前カンファレンスセンター）	平成 29 年 8 月 1 日	大阪府社会福祉協議会主催の平成 29 年度保育士の専門性を高める連続研修会において、府内の民間保育園・認定こども園に所属する施設長、リーダー、主任保育士に準ずる者 200 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前までに育てたい力～」をテーマに講演。今後の実習のお願いもした。
平成 29 年度和歌山県訪問型家庭教育支援事業第 1 回協議会（於：和歌山県庁）	平成 29 年 8 月 2 日	議長として、協議会を進行した。平成 29 年度の方向性として、以下の 2 点に特化して協議した。 ①事業の成果や効果を図るための成果指標の効果的な活用について ②円滑な支援に向けたシステムの構築について。①について、成果目標のもと、経年比較を行い事業評価報告で指標を示し、成果の客観性を図るよう指示した。
教員免許更新講習（於：奈良学園大学）	平成 29 年 8 月 9 日	奈良教育大学委嘱の教員免許更新講習を担当した。奈良学園大学「幼小接続室」を会場として、現職教員小学校及び幼稚園教諭 38 名に対して、生活科及び幼小接続カリキュラムについての理解を深め、認定評価した。
平成 29 年度第 4 回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成 29 年 8 月 30 日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府HPにて公開。
平成 29 年度海南市公民館大会（於：海南市民会館）	平成 29 年 9 月 3 日	海南市教育委員会主催の「海南市公民館大会」において、海南市公民館館長教育関係 200 名を対象に「未来を拓く学びをつなぐ公民館～ 学校・家庭・地域がつながるためにできること～」をテーマに講演。和歌山県における本学の周知活動と共に、お礼と次年度以降の実習等のお願いもした。
鳥取県倉吉市「幼保小連携推進研修会」（於：鳥取県立倉吉体育文化会館）	平成 29 年 9 月 5 日	倉吉市教育委員会主催の幼保合同研修会において、倉吉市内保育園・認定こども園の教職員、小学校教職員 50 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続～」をテーマに講演。鳥取県における本学の周知活動と共に、実習先の校長及び教員の参加もあり、お礼と次年度以降のお願いもした。
沖縄県宮古地区園長等運営管理協議会（於：宮古教育事務所）	平成 29 年 9 月 11 日	沖縄県宮古教育事務所主催の宮古地区園長等運営管理協議会において、宮古管内幼保教職員、小学校教職員・校長 120 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続～」をテーマに講演。沖縄県における本学の周知活動と共に、お礼と次年度以降の実習等のお願いもした。

奈良県就学前教育振興プログラム策定会議 実地訪問指導（於：田原本町立南幼稚園）	平成 29 年 9 月 19 日	H29 奈良県就学前教育調査研究事業に係る、訪問調査へ委員として出席。奈良県教育委員会企画部及び教育委員会幼小担当指導主事、京都大学大学院生、田原本南幼稚園園長、教員に評価について指導助言及び今後の評価シート作成に当たってのインタビューを進めた。
奈良県就学前教育振興プログラム策定会議（於：奈良県立教育研究所）	平成 29 年 9 月 29 日	第 2 回奈良県就学前教育振興研究会へ委員として出席。訪問指導の報告と他の実践に対する分析を行った。
和歌山県訪問型家庭支援事業第 2 回協議会（於：和歌山県庁）	平成 29 年 10 月 16 日	議長として、協議会を進行した。平成 29 年度の方向性として、以下の 2 点に特化して協議した。 ①事業の成果や効果を図るための成果指標の効果的な活用について ②円滑な支援に向けたシステムの構築について。①について、成果目標のもと、経年比較を行い事業評価報告で指標から、成果の客観性を確認した。
宇陀市平成 29 年度宇陀市教育センター研修「幼小連携・接続講座」（於：宇陀市役所）	平成 29 年 11 月 20 日	宇陀市教育委員会主催の「平成 29 年度宇陀市教育センター研修」幼小連携・接続の講座において、幼稚園・保育所・こども園小学校の教職員 40 名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続」をテーマに講演。本学の周知活動と共に、実習のお礼と次年度以降のお願いもした。
和歌山県訪問型家庭支援事業第 3 回協議会（於：和歌山県庁）	平成 29 年 12 月 4 日	議長として、協議会を進行した。平成 29 年度各市町の取組成果とシンポジウムの方向性の 2 点について協議した。 ①事業の成果や効果を図るための成果指標の確認 ②シンポジウムの企画と進行の原案検討
日本精神看護協会主催「教育方法研修会」（於：京都研修所）	平成 29 年 12 月 13 日	日本精神看護協会京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者 46 名を対象に「授業の形態・方法」をテーマとして、講義・演習を担当した。
大阪府私立学校審議会（於：大阪府庁）	平成 29 年 12 月 21 日	「大阪府私立学校審議会」の委員による平成 29 年度 12 月定例会に出席。議事は、8 号議案の申請概要を審議した。また、報告事項 2 点に基づいて意見交換された。
奈良市教職員研修講座（於：奈良市教育センター）	平成 29 年 12 月 26 日	奈良市教育センター主催の平成 29 年度教職員指導力向上研修講座において、受講者 103 名（小学校 43 各担当者、市立こども園 12、幼稚園 23 保育園 12、幼児教育アドバイザー等）を対象に「幼児教育と小学校教育の育ちと学び連続性」について、講演。また、教育実習及び学校園支援ボランティアのお礼と今後のご指導のお願いの場とした。
大阪府教育庁主催「第 3 回地域教育コーディネータ研修」（於：大阪府庁）	平成 30 年 1 月 24 日	大阪府教育庁主催の「第 3 回地域教育コーディネータ研修」において、「家庭教育支援員」「親学習リーダー」を含む地域教育コーディネータ・学校教職員・行政関係者 200 名を対象に「つながろう！家庭・学校・地域・行政・福祉～切れ目のない支援のために～」をテーマに講演した。また、教育実習及び学校園支援ボランティアのお礼と今後のご指導のお願いの場とした。

和歌山県訪問型家庭教育支援事業シンポジウム講演及び第4回協議会（於：紀南文化会館）	平成30年1月29日	和歌山県生涯教育局主催の「平成29年度和歌山県社会教育関係職員研究会・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム」において、「家庭教育支援員」「親学習リーダー」を含む地域教育コーディネータ・学校教職員・行政関係者90名を対象に「つながろう！家庭・福祉・教育!!ひろげよう！家庭教育支援!!切れ目のない支援に向けて～」をテーマに講演した。また、教育実習のお礼と今後のご指導のお願いの場とした。さらに、「第4回協議会」で座長として、議事進行と総括をした。
西宮市教育委員会主催「つながり研修②」（於：西宮市立芦之湯会館）	平成30年2月1日	西宮市教育委員会主催の「つながり研修②」において、・小学校27名、特別支援教育5名、幼稚園32名・保育所46名の教職員105名を対象として、『育った力を学びの力につなぐ「とまどいマトリクス」の活用を通して』Ⅱをテーマに講演及びワークショップを実施した。 実習校の教員の参加もあり、お礼と次年度のお願いもした。
奈良県教育委員会主催奈良県就学前教育センター「明日の保育をつくる人材育成フォーラム」（於：奈良県社会福祉総合センター大ホール）	平成30年2月19日	奈良県教育委員会主催の奈良県就学前教育センター「明日の保育をつくる人材育成フォーラム」において、公私立幼児教育関係教職員及び行政関係者120名を対象として、「奈良県就学前教育プログラムで育む子どもの姿」のパネルディスカッションにおけるコーディネーターを務めた。続いて「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児教育と小学校の連携・接続～」をテーマに講演した。 実習校の教員の参加もあり、お礼と次年度のお願いもした。
大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府庁）	平成30年2月28日	第32回大阪府人権施策推進審議会に委員として出席。会長代理に任命された。審議内容は、以下の4点であった。（1）会長及び会長代理の選任について、（2）平成28（2016）年度人権施策の状況について、（3）性的マイノリティの人権問題についての理解増進に向けた取組について、（4）その他について審議した。
大阪府私立学校審議会（於：大阪府庁）	平成30年3月19日	「大阪府私立学校審議会」平成30年度3月定例会を開催し、委員として出席。議事は、21議案の申請概要を審議し、報告事項2点に基づいて意見交換がなされた。
阪急学園教職員研修会（於：阪急学園）	平成30年3月26日	阪急学園教職員研修会において、幼稚園教諭、保育園保育士計80名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演を実施した。8園の法人は、理事長を中心に強固な研修体制を推進されており、学内の幼保コースへの就職情報としても提供したい。
和歌山県訪問型家庭支援事業第1回協議会（於：和歌山県民文化会館）	平成30年6月26日	訪問型家庭支援事業第1回協議会に会長として出席。昨年度の課題整理をふまえて今年度の方針性を協議。年度内計画を策定した。
大和高田市まち・ひと・しごと創生会議（於：大和高田市役所）	平成30年7月3日	大和高田市長依頼の「大和高田市まち・ひと・しごと創生会議」において、会長として選出され、進出した。大和高田市まち・ひと・しごと創生戦略における実施状況報告と地方創生関連交付金にかかる実施状況の報告と意見交換をした。
日本精神看護協会「教育方法研修会」（於：京都研修センター）	平成30年7月4日	日本精神看護協会主催の研修会において、精神科認定看護師資格取得を目指す看護師60名を対象に「組織内における活動 教育論1」をテーマに講義演習を実施した。

岡山市保育協議会研修（於：岡山市役所 保健福祉局勤労者福祉センター）	平成30年7月10日	岡山市保育協議会主催の「保幼小連携研修会」において、岡山市公私立認可保育園・認定こども園保育士130名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前までに育てたい力、つけたい力～」をテーマに講演。
西宮市教育委員会主催「つながり研修」（於：青空幼稚園）	平成30年7月24日	西宮市教育委員会主催の「つながり」研修において、保育所保育士、幼稚園等・小学校・特別支援学校教員等100名を対象に『保幼小連携・接続のためになすべきこと、できること～「とまどいマトリクス」の活用を通して～』をテーマに講演。
奈良市教頭講座②（於：奈良市教育センター）	平成30年7月25日	奈良市教育センター主催の「教頭研修講座②」において、小学校、中学校、高等学校の教頭68名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ校種間連携の在り方」をテーマに講演。
島本町夏季セミナー（於：島本町立第二小学校）	平成30年7月31日	大阪府島本町教育委員会主催の夏季セミナー健康教育分科会において、教職員50名を対象（2中学校、4小学校、2幼稚園、保）に保幼小連携推進協議会の活動報告とグループ討議の後に「保育所・幼稚園から小学校へ～よりよい接続のために～」について指導助言。
湯浅町PTA講演会（於：湯浅町立湯浅小学校）	平成30年9月28日	和歌山県湯浅町教育長及び学校長と共に、全学級を授業参観後、湯浅小学校において、教職員40名及び保護者85名を対象に「PTA子育て講演会」講師を担当。近隣の県立耐久高等学校からの入学者もある本学の紹介も含めて「2030年に生きる力を輝かせる～育ちと学びの連続をふまえて～」をテーマに講演。
王寺町子育て「どんぐり」in 奈良学園大学（於：奈良学園大学）	平成30年11月24日	王寺町子育て「どんぐり」in 奈良学園大学において、保護者30名を対象に「変わる子育て、変わらない子育て-2030年の社会と子どもの未来を見ずえて」をテーマに講演。
「就学前教育振興プログラム」研修会（於：天理市立嘉幡保育所）	平成30年12月10日	奈良県教育振興課主催の「就学前教育振興プログラム」研修会において、県内市町村指導主事、教育研究所長期研究員、保育所長・保育士等16名を対象に「幼小接続期における育ちと学びの連続『ハイスコープ就学前教育プログラム』の活用と言葉の力」をテーマに参観後の講演。
大阪府人権教育審議会（於：国民会館）	平成30年12月19日	第33回大阪府人権施策推進審議会に副会長として出席。(1)大阪府人権推進計画の点検について、(2)行政文書における性別記載の点検・見直しについて審議した。
訪問型家庭支援事業シンポジウム（於：和歌山県勤労福祉会館プラザホール）	平成31年1月21日	和歌山県教育長主催の「訪問型家庭支援事業シンポジウム」において、家庭教育支援関係者・社会教育関係職員・学校関係職員・福祉関係職員・子育てサークル関係者・SSW/SSC/等の参加者160名を対象にコーディネーター及び講師として「つながろう家庭・福祉・教育！ひろげよう家庭教育支援！！切れ目のない支援に向けて～地域で家庭をささえるために～」をテーマに講演。
訪問型家庭支援事業第3回協議会（於：和歌山県勤労福祉会館プラザホール）	平成31年1月21日	訪問型家庭支援事業第1回協議会に会長として出席。課題整理をふまえて実施項目及びシンポジウム評価を策定した。
西宮市教育委員会主催「つながり研修②」（於：西宮市職員会館）	平成31年1月28日	西宮市教育委員会主催の第2回「つながり」研修において、市内小学校教諭・幼稚園教諭等110名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ言葉の力を育むために～2030年の社会と子どもの未来を見ずえて～」をテーマに講演。

第34回 大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府男女共同参画センター）	平成31年2月15日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第34回大阪府人権施策推進審議会」に副会長として出席。(1)ヘイトスピーチの解消及び性的マイノリティに対する差別の解消に向けた条例整備について（諮問）審議した。
第35回 大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府男女共同参画センター）	平成31年3月22日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第35回大阪府人権施策推進審議会」に副会長として出席。(1)大阪府人権尊重の社会づくり条例における府民及び事業者の責務について（論点整理）(2)人種又は民族を理由とする不当な差別的言動の解消に向けた規定について（論点整理）(3)性的マイノリティに関する当事者及び有識者の主な意見について(4)その他報告事項。審議した。
5 その他 ・国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定校事業企画委員 ・大阪府私立学校審議会委員 ・大阪府子ども施策審議会委員 ・大阪府行政評価審議委員 ・大和高田市ひとまちしごと創生会議委員長 ・三郷町産官学連携常任委員 ・三宅町評議員 ・和歌山県訪問型家庭教育支援事業委員長 ・奈良県就学前教育プログラム策定委員 ・大阪府人権教育施策推進委員	平成21年5月～平成22年7月 平成22年7月～平成29年3月 平成25年6月～平成28年3月 平成26年6月～平成28年3月 平成27年6月～現在に至る 平成28年6月～現在に至る 平成28年6月～平成29年3月まで 平成28年6月～現在に至る 平成28年6月～平成30年3月まで 平成30年2月～現在に至る	総合的学習と生活科の関連を中心に、指定校に対して、指導助言をした。 大阪府内私立学校にかかる審議事項を検討した。 大阪府子ども施策にかかる審議事項を会長代理として検討した。 大阪府教育施策にかかる審議事項を委員として検討した。 大和高田市地方創世にかかる意見交換会において委員長として検討した。 三郷町産官学連携会議において常任委員として検討した。 三宅町評議員として検討した。 文部科学省指定事業「和歌山県家庭教育支援事業」委員として検討した。 奈良県就学前教育プログラム策定委員として、検討した。 大阪府人権教育施策推進委員会会長代理として、検討した。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年月日	概 要
1 資格、免許 (1) 小学校教諭2級普通免許状	昭和50年3月	大阪府教育委員会 昭49小2普第1601号
(2) 小学校教諭1級普通免許状	平成3年11月	大阪府教育委員会 平3小1普第507号
(3) 修士（学術）	平成16年3月	大阪教育大学大学院 第3506号 論文題目「学校教育自己診断」を活かした学校改善の研究

2 特許等 なし				
3 実務の経験を有する者について特記事項 (1) 堺市立南八下小学校 教頭 (2) 堺市立美木多小学校 教頭 (3)大阪府教育センター 学校経営研究室主任指導主事、企画室主任指導主事	平成 9 年 4 月 ～平成 12 年 3 月 平成 12 年 4 月 ～平成 13 年 3 月 平成 13 年 4 月 ～平成 17 年 1 月	教頭として、校内研究推進及び学校の活性化並びに地域との連携に取り組んだ。教頭会研修委員として「学校のリスクマネジメント」にかかる研究を堺市教頭研修会において発表した。 教頭として、生活科・「総合的な学習の時間」にかかる堺市教育委員会指定事業を推進させた。堺市立美木多中学校区の「公立・私立、保育園・幼稚園・小学校連絡協議会」において、保幼小の研究推進に取り組んだ。上記 2 点の取組を「地域と学校の特色を生かした実践とその評価」(2001 文溪堂) P. 18～P. 30 で論じた。また、教員の実践例 P. 39～P. 46、P. 63～P. 70、P. 79～P. 86 について、監修指導した。(再掲) 主任指導主事として、4 年間、全国教育研究所連盟、近畿地区教育研究所連盟、大阪府教育研究所連盟、近畿所長会の事務局長として、研究会の企画及び研究推進に努めた。また、大阪府内の新任校長研修会・新任教頭研修会、指導主事研修会等の企画運営及び講師の任にあたった。「大阪府教育センターフォーラム」の企画及び分科会の講師・コーディネーターを担当した。大阪教育大学との連携において、スクールリーダーフォーラムの講師、シンポジスト等を担当した。 研究主担として、3 年間、「大阪府学校教育自己診断」の調査研究を推進し、「学校改善への道筋」をまとめた。		
4 その他 なし				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
(著書) 1. キャリア教育読本 「コドモたちへの想い」	共著	平成 22 年 11 月	奈良学園キャリア 開発センター	就業力向上のために、仕事内容ややりがい等の具体的事例について示した。学生は、保育・教育の今を知り、教育現場の実際や課題を検討することが可能となった。幼児教育学を活かせる保育士・幼稚園教諭以外の分野 (主にビジネス) について一定の認知・理解を示した。 A5 版 全 119 頁 編者：奈良文化女子短期大学キャリア教育センター 共著者：石田秀朗、善野八千子、益田美保、島野恭子、田平友子、河井佐紀、杉井涼香、遠山健、李初子、加藤優里、松村友紀、廣岡由香里、福田寿美代、羽野麻里子、福本千春 本人担当部分：第 1 章保育者を目指すあなたへ～「子どもの笑顔をつくるスペシャリストになる」とは？ 6～9 頁を単著。 保育者を目指すための要件について 2 点について整理した。子どもを理解するための日

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
2. 子どもの育ちと学び をつなぐ～保幼小連携 WGの取組を通して～	共著	平成 23 年 3 月	奈良学園キャリア 開発センター	常的な生活から子どもへの関心を持つ方策、子どもに関連する番組、ニュース、書籍や絵本をとした方法及び実際に、子どもに関わる施設でボランティア活動を通して、観察・体験について述べた。また、笑顔でいるための自己コントロールについて、時間の管理、健康管理、経済管理から説いた。少子化の進行、育児サービスの多様化に伴って生じている幼稚園と保育所の抱える問題、幼稚園と保育所の一元化の動き、「保幼小連携」への取り組みにも言及した。 奈良文化女子短期大学が組織する幼小連携 WG の合同研究会の取組について、代表としてまとめた。組織開発の経緯、参加者の振り返りを通して、汎用性のある接続カリキュラム着手の意義及び活用のあり方を示した。 A5 版 全 185 頁 共著者： 善野八千子、前田洋一、荒井恵子、梅田真寿美、南尚美、阪本さゆり、中田章子、熊井祥子、前田嘉余子、大山夏生 本人担当部分：第 1 章 pp. 5-18, 第 3 章 pp. 33-37, 第 6 章 pp. 80-85, 第 7 章 pp. 86-90, 第 8 章 pp. 92-101, 第 9 章 pp. 102-116, 第 11 章 pp. 156-162, 第 13 章 pp. 167-175 を単著。 幼小連携の必要性及び進まない理由について言及し、現状について整理した。また、その解決策としての本学のシンクタンクとしての役割として本研究会を設置した経緯について発信した。育ちと学びをつなぐためには、幼児教育と小学校以降の教育に関わる専門家として互恵性と継続性、発展性の重要性について論じた。幼小接続カリキュラムを作成するための手順とその実際について示した。入学前の 3 週間試案については、3 つのカテゴリーと 5 領域を整理して、小学校教員にも理解が進むように示した。さらに、生活科の適応指導及びスタートカリキュラムを視点とした入学後の 4 週間の日案を検討した。
3. 幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発 ～子どもの育ちと学び をつなぐ～	共著	平成 23 年 4 月	MJ-Book	幼児期と児童期の接続カリキュラムについて、その課題を明らかにした。特に、就学後の生活科を中心とした汎用性のあるカリキュラムを開発。 子どもの育ちと学びの「連続性・一貫性」のためには、どのような組織開発が必要とされ、実現可能か、またいつまでにだれが何をどのようにしていくことが重要化について解説。 A5 版 全 136 頁 共著者： 善野八千子、前田洋一 本人担当部分：第 1 章必要なことは、「連続性・一貫性」5～17 頁、第 3 章接続カリキュラム作成のための組織開発 31～34 頁、第 5 章～10 章入学後接続カリキュラムの実践 61～128 頁を単著。 現職の教員と保育者をつなぎ、資質向上にも寄与する研究成果をまとめた。具体的なカリキュラム作成の手順として、生活科を中心とした小学校入学後の目標設定や活動内容について汎用性のある実際のカリキュラム作成のプロセスについてもフォーマットを提案

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
4. 教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望 教育フォーラム 48 国際 教育の課題と展望	共著	平成 23 年 8 月	金子書房	した。適応指導を中心に入学前の 3 週間 18 日分の日案を提示し、入学後はじめての 7 つの課題を検討した。学習自立・生活自立・精神自立の 3 つの自立に分類し、生活科の自立の基礎をはぐくむ方法と内容に整理した。さらに学校園として接続カリキュラムに取り組むための組織開発についても示した。 日本の学校教育の喫緊の課題である国際教育・グローバル教育は。子どもたちの生活自体は国際色豊かなものとなり、学校や地域でも積極的な取り組みが行われている。しかし、具体的に教育においてどのように国際性をとらえ、育てていけばよいのかは理解が深まっていないのが実情に言及した。 A5 版 全 176 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、見上一幸、松田智子、松田公平、鎌田首治朗、前田洋一、川崎由花、古川治、<u>善野八千子</u>、筒井愛知、山本美紀、加藤明、河上隆一、湯峯裕、汐海治美、渡部久美子 本人担当部分：第 9 章「幼小接続期における国際教育」81～90 頁を単著。 幼小接続期における国際教育について、自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立のためには何が必要であるかを論じた。学習指導要領改訂では「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」の教育内容の主な改善事項の一つとして「伝統や文化に関する教育の充実」が掲げられたことから、新しい学習指導要領のめざすものの具体例を示した。また、幼小接続期における国際教育の必要性和その体験を経験化する方法を示した。 教育的な願いとねらいをはっきりと持ち、それを実現する活動を準備し、子ども一人ひとりの国際体験・異文化体験を教育的な意味で経験化するために様々な視点から考察、問題提起した。
5. 学校管理職の経営課題 5 学校をエンパワーメントする評価	共著	平成 23 年 10 月	ぎょうせい	学校評価を経営改善に生かす視点を探った。学校経営のビジョン、カリキュラム経営、組織マネジメントから学校評価に至るまで、学校経営に必要な重要トピックスを詳解。 A5 版 全頁数 194 頁 編者：天笠茂、大脇康弘 共著者大脇康弘、加藤崇英、相澤良明、<u>善野八千子</u>、小島宏、八尾坂修、根津朋美、<u>白井達夫</u>、猪股亮文、京都市教育委員会 本人担当部分：第 4 章「マネジメントのツールとしての学校評価」56～76 頁を単著。 学校評価のこれまでの経緯を解説し、課題と改善のためのシステムを示した。第三者評価とは何か、また第三者評価を活かして学校のポジティブプロパガンダをいかに創るかをフローチャートで提示した。学校をエンパワーする評価のあり方、マネジメントツールとしての学校評価のうち、自己評価の手法、学校関係者評価、第三者評価を中心に整理した。加えて、学力を育てる学習評価と授業評価及び教師力を育てる教員評価、カリキュラム・アセスメントについて論考した。

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
6. 子どもの育ちと学び をつなぐⅡ～幼小連携 WGの取組を通して～	共著	平成 24 年 3 月	奈良学園キャリア 開発センター	奈良文化女子短期大学幼小連携WG合同研究会の平成 23 年度の取組をまとめた。幼小接続カリキュラム（就学前）を開発を試みるとともに、入学前の 3 週間を再検討した。全頁数 185 頁 共著者：善野八千子、前田洋一、筒井通子、阪本さゆり、南尚美、前田嘉余子、大山夏生、定豊子、田村豊、荒井恵子、角田道代、 本人担当部分：第 1 章「幼小連携 WG 合同研究会の取り組みと意義」6-11 頁、第 4 章「とまどい」を解決する幼小接続カリキュラム 52-82 頁、を単著。 幼小連携 WG 合同研究会の取り組みと意義について、これまで生活科移行期において、カリキュラム作成の経験からの方法論と組織開発につながる発展性を価値づけた。また、指導者が困っている入学直後の状況からだけでなく、学習者の側からみた就学後の子どものとまどい要因 6 点を提示した。 学びの基礎力とのマトリクス作成により、ワークショップで活用し、幼児教育と小学校教育者による合同の教育課程の理解及び検討の方策についての具体的な道筋を示した。
7. 教育フォーラム 50 ＜やる気＞を引き出 す・＜やる気＞を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房	教師が子どもの＜やる気＞を引き出し、育てるための方策を、教科のかかわり、教材・校内研究、学習塾の取り組みなども参考に考察、提案した。 A5 版 全頁数 179 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤 明、松田智子、金山憲正、善野八千子、勝見健史、久田 孝、錦織 彰、住本克彦、野田健司、中田正浩、前田洋一、中村 哲、瀧明知恵子、浅田 匡 本人担当部分：第 9 章「子どもの＜やる気＞をつなぐ幼小接続」34～46 頁を単著。 子どもの＜やる気＞をつなぐこと、育ちと学びをつなぐことの共通の問題から論述した。意欲・モチベーション、＜やる気＞に関するデータ及び諸説を考察・整理した。幼小接続に必要な 3 要素及び脳が＜やる気＞を出してくれる 4 つの条件などの知見を示した。幼少期の子どもの意欲については、その正体と環境について、幼小接続期における＜やる気＞を引き出す実践事例について、考察した。

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
8. 子どもの育ちと学び をつなぐー幼小連携の あり方と接続カリキュ ラムの作成ー	共著	平成 24 年 9 月	MJ-Book	幼児期と児童期の接続カリキュラムにつ いて、生活科移行期から取り組んできた経緯 を考察した。就学前後を接続する汎用性のあるカリキュラムを改善する視点を明確にし た。 A5 版 全 131 頁 共著者：善野八千子、前田洋一、定豊子、阪 本さゆり、南尚美、大山夏生、前田嘉余子、 田村豊 本人担当部分：第 1 章幼小接続のためにな すべきこと、できること 8-17 頁、第 4 章「と まどい」を解決する幼小接続カリキュラム 58-87 頁、第 5 章育った力を学ぶ力へ 88-99 頁を単著。 教員の資質向上にも寄与する実践研究に ついて、考察した。「とまどいマトリクス」 を開発し、研修で活用できるように試みた。 ワークショップ研修の方法や活用について も示した。また、「一日体験入学の」活動事 例について、紹介し今後の発展課題を明示し た。
9. 夢と力を育てる新し い学校づくり	共著	平成 25 年 4 月	教育出版	未来に向かう力をつけることのできる学 校経営の在り方の提案として、新たな知見と 実例をふまえ、未来志向型の学校づくりの提 案。 A5 版 全 136 頁 共著者：善野八千子、前田洋一 本人担当部分：第 1 章忙しい木こりの物語 (1-4 頁)、第 2 章こんな学校が日本の教育を 変える(5-14 頁)、第 7 章「一石五鳥プラン」 と「仕事の A B C」(84-106 頁)、第 8 章幼 稚園における学校評価(107-116 頁)、第 9 章 さらなる外部評価アンケートの改善 (117- 136 頁)を単著。 教員の資質向上が子どもの学校文化を創 る力になることを論考した。学校訪問記や評 価を改善に生かした事例等のフィールドリ サーチや分析から考察。学校づくりの発信転 換の必要性を説き、学校教育関係者、学生等 と共に熟考し、行動変容を可能にする知見を 示した。
10. 教育フォーラム 54『各教科等の学習を支 える言語活動』	共著	平成 26 年 8 月	金子書房	言葉の力を育てるため単元目標構造図や 年間指導計画の活用などを考えながら、各教 科特有の言語活動について、教師がどのよ うな点に留意した指導を行えばよいのか、具 体的な実践を踏まえて考察した。 A5 版 全頁数 140 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤 明、金澤孝夫、櫻 本明美、金山憲正、中田正浩、川俣徹、松田 智子、善野八千子、蔵あすか、オチャンテ村 井ロサメルセデス 本人担当部分：第 10 章「幼小接続におけ るこれからの言語活動」98-109 頁を単著。 幼小接続期の対話と姿勢について、育ちと 学びをつなぐ課題から論述した。

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
1 1. 教科力 生活	共著	平成 28 年 2 月	玉川大学出版	学習指導要領平成 20 年に対応。教員の力量形成において重要な生活科の内容構成の理解を目的として、生活科のための実践力の自学自習テキスト。 A5 版 全頁数 182 頁 編者：寺本潔 共著者：寺本潔、綿貫健治、森山賢一、神永典郎、善野八千子、 本人担当部分：第 11 章「スタートカリキュラムの重要性と指導内容」114～124 頁、第 12 章「交流を通じた人間関係作りの指導内容」125～135 頁、第 14 章「自己成長に気付けさせる内容」146～156 頁、おわりに「生活科創設の内容や最新の教育界の動向」176～182 頁を単著。
1 2. 教育フォーラム 59『対話的な学び-アクティブ・ラーニングの 1 つのキーポイント-』	共著	平成 29 年 2 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版 全頁数 176 頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、伊崎一夫、金山憲正、菅井啓之、北俊夫、赤堀博之、善野八千子、牧田秀昭、五百住満、中村豊、石森広美、オチャンテ村井ロサメルセデス、井上信子 本人担当部分：「幼小接続期の対話的学びの力」91～101 頁を単著。 幼児期から小学校接続の対話的学びの力として、一次的事と二次的事との接点に立つ教師の役割から考察した。
1 3. 教育フォーラム 60『深い学びのために-アクティブ・ラーニングの目指すもの-』	共著	平成 29 年 8 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版 全頁数 176 頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、古川治、鎌田首治朗、伊崎一夫、湯峰裕、大畑健美、菅井啓之、金山憲正、石森広美、善野八千子、瀧明智恵子、岡村季光、松井典夫 本人担当部分：「幼小接続期の深い学び-地域と未来につなぐ生活科の事例から-」103～113 頁を単著。 幼児期から小学校接続の「深い学びの力」について論考し、生活科事例から考察した。
1 4. 教育フォーラム 61『各学習領域における基本的な見方・考え方-アクティブ・ラーニングで鍛えられるもの-』	共著	平成 30 年 2 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版 全頁数 147 頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、鎌田首治朗、湯峰裕、金山憲正、角屋重樹、中村哲、越智貢、大畑昌己、善野八千子、高木悠哉、杉浦健、渡邊規矩郎 本人担当部分：「小学校低学年における＜基本的な見方・考え方＞」91～101 頁を単著。 低学年における見方考え方について、生活科を基軸に授業改善に散り組むための考察をした。

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
(学術論文) 1. 幼稚園における学校 評価項目作成の試み	単著	平成 21 年 12 月	奈良文化女子短期 大学研究紀要 第 40 号 p. 83- p. 99	幼稚園における学校評価項目作成を目的 とし、現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保 育士養成校学生に対して「私が親ならこんな 幼稚園に通わせたい」ことを記述するアンケ ート調査を実施し分析した。大項目を分類・ 整理し、さらに、受益者としての保護者の願 いや期待を取り入れて精査した結果、幼稚園 における学校評価項目として望ましい 88 の 評価項目を提示した。提示した評価目の実施 による検証が課題として残され、継続研究の 方向性と展望を示した。
2. 幼小接続期における カリキュラムの開発	単著	平成 22 年 12 月	奈良文化女子短期 大学研究紀要 第 41 号 p. 49- p. 67	幼稚園と小学校両者による教育課程の理 解を中心に推進することの意義及び子ども の育ちと学びの連続保証を目的として、両者 の教職員の連携活動を推進する組織開発の あり方を探った。そして、「汎用性のある幼 小接続期のカリキュラムの作成」を通して、 構成要素と作成の手だてについて明らかに しつつ、教育課程の理解を入り口として、教 職員の理解と子ども理解を同時にすすめな がら、幼小連携を推進するために必要な組織 のあり方や方向性等の知見を示した。
3. 幼小接続期における カリキュラムの開発Ⅱ	共著	平成 23 年 11 月	奈良文化女子短期 大学研究紀要 第 42 号 p. 49～p. 67	幼児教育と小学校以降の教育に関わる双 方による教育課程の理解を中心にした「育ち と学びの連続性」及び子どもの成長保障と学 力保障の両全を目的として、幼小両者の教職 員の連携活動を推進するカリキュラム開発 及び組織開発のあり方を探った継続研究を まとめた。今回は、「汎用性のある幼小接続 期のカリキュラム作成」の中で、とりわけ就 学後の就学直後の課題を探り、就学前のカリ キュラム改善のためのフォーマットを作成 し、活用方法を提示した。 本人担当部分：就学直後の課題を探り、就 学前のカリキュラム改善のためのフォーマ ットを作成した。このことにより、幼小連携 を一層推進し、生活科の授業改善につなげる 方策を示した。 共著者：善野八千子、前田洋一

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
4. 幼稚園の学校評価に おける外部アンケート 項目作成の試み (査読付)	共著	平成 24 年 7 月	日本学校教育学会 「学校教育研究」 NO. 27p. 93～p. 105	幼稚園における保護者の満足度に関する研究を 3 年にわたり継続し、幼稚園の経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。質問項目の作成を目的とする調査 A、質問項目の精選を目的とする調査 B から、信頼の決定要因を究明した。また、幼稚園の経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。10 園を現地訪問調査し、改善事例から分析し、その活用の有効性について検討した。作成された簡便な質問紙は経営状況を弁別しうることを検証した。 本人担当部分：質問項目の作成を目的とする調査 A、質問項目の精選を目的とする調査 B を実施し、信頼の決定要因を検討した。また、対象幼稚園全園を訪問指導し、経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。10 園を現地訪問調査し、改善事例から分析し、その活用の有効性について検討した。 共著者：前田洋一、善野八千子
5. 幼小接続期における カリキュラムの開発Ⅲ ～入学後の子どもの戸 惑いに着目して～	単著	平成 24 年 11 月	奈良文化女子短期 大学研究紀要 第 43 号 p. 49～p. 67	「育ちと学びの連続性」及び子どもの成長保障と学力保障の両方を目的として、幼小両者の教職員の連携活動を推進するカリキュラム開発及び組織開発のあり方を探った継続研究である。指導者が困っている状況からではなく、学習者である子どもが「入学後に戸惑っている状況」に着目し、とりわけ就学直後の課題を「とまどい」の視点から調査した。それらを解決する「生活科」カリキュラム開発または改善の手がかりとなるツールを提示した。とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成及び改善の手立てとして、研修会でも活用できることを示唆した。
6. 「人間教育」の典型 — 幼小連携・接続教育 の価値 — (査読付)	単著	平成 26 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol. 1 p. 67～p. 78	教育の連携性と教育の一貫性をふまえ、幼小連携・接続の価値について述べた。また、これまでの研究の知見から幼小接続期におけるカリキュラム開発の方法について提示した。さらに、幼児期の教育と小学校における、生活科との連続性について論述した生活科成長単元において、学習者の自己成長への気づきを促す過程を分析し、活動の活性化及び指導者の関わり方の必然性について、考察を行った。

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
7. 人間教育に資する 「これからの幼小接続 教育」の展開(1) ー自己成長への気づき を促す生活科の実現に 向けてー (査読付)	単著	平成 27 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol. 2 p. 93～p. 105	「これからの幼小接続の基軸となる生活 科教育」の工夫改善となる 3 つの要件を導出 した。さらに, これら 3 つの要件。生活科成 長単元において, 学習者の自己成長への気づ きを促す過程を分析し, 活動の活性化及び指 導者の関わり方の必然性について, 考察を行 った。これら 3 つの要件を充足する実践事例 「生活科成長単元第 2 学年自分たんけん」の 分析による検証を行い, その有効性について 解明した。
8. 人間教育に資する 「幼小接続期カリキュ ラム」のあり方ー「とま どいマトリクス」を活用 した接続カリキュラム の改善ー (査読付)	単著	平成 28 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol. 3 p. 39～p. 50	就学前後の子どものとまどい要因を幼児 教育と小学校教育の双方で解決することに よって, 「子どもの育ちと学びをつなぐカリ キュラム」を作成できることを示唆した。ま た, それらを活かした「一日体験学習」の実 践幼稚園の訪問調査結果から 4 段階の変容を 分析した。 とまどい要因を幼児教育と小学校教育の 双方で解決することによって, 「子どもの育 ちと学びをつなぐカリキュラム」改善の手立 てとして, 活用できることを幼児教育の実践 事例を分析し検証した。
9. 人間教育に資する 「幼小接続期カリキュ ラム」のあり方(2)ー カリキュラム・マネジメ ントから考察する「とま どいマトリクス」の活用 ー (査読付)	単著	平成 29 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol. 4 p. 43～p. 56	就学前後の「子どもの育ちと学びをつな ぐ」ためにスタートカリキュラムを作成する ために必要なこと, またそのカリキュラム・ マネジメントのあり方についてを示唆した。 3 つの実践小学校に関わった管理職の聴き 取り調査結果から 4 段階の変容を分析した。 とまどいマトリクス活用によって, 「子ど もの育ちと学びをつなぐカリキュラム」改善 の手立てとして, 活用できることを小学校入 門期の教育実践事例を分析し検証した。
10. 生き抜く力を育 む人間教育ー小学校にお ける教科指導と現代的 課題に着目してー (査読 付)	共著	平成 29 年 12 月	人間教育学研究 p. 39～p. 54	生き抜く力を育む人間教育をめざして, 「特別の教科道徳」における「夢や希望を育 む」指導と「算数科」を軸にした「学力不振 による不登校の未然防止」の指導を検討し た。指導案例を提示することで, 改善の方向 性を示した。特別の教科道徳の中で, 自己の 生き方を考える時間の保障をすることや算 数科指導の中に, 生徒指導の 3 機能を生かし た指導の改善などの視点を明確にした。 共著者: 善野八千子・金山昴資重安勝星・内 藤翔一・早坂虹穂・松田彩加

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
1 1. 「生き抜く力を 育む人間教育(2)-幼小 接続期から小学校にお ける学習指導と現代的 課題に着目して-」(査読 付)	共著	平成 31 年 3 月	人間教育学研究 p. 1～p. 24	未来を築く子供たちに生き抜く力を育む 人間教育をめざして、「生活科」及び「特別 活動」における「幼小接続期の給食指導」と 「家庭と生活」を軸にした指導法について検討 した。具体的に指導事例を提示することで、 改善の方向性を示した。また、それらの学校 教育の取組について、社会に開かれた教育課 程の一役を担う学校HPについても検討し た。 共著者：善野八千子・中菜摘・中西貴大・ 織谷百江・村田一輝
1 2. 「生き抜く力を 育む人間教育(3)-小学 校における学習指導と 非認知能力に関する現 代的課題に着目して-」 (査読付)	共著	平成 31 年 3 月	人間教育学研究 p. 25～p. 46	現代的課題として挙げられる非認知能力 「学習意欲、規範意識、自尊感情」の3点の 課題解決をめざして、「算数科」を軸にした 「学習意欲」、「特別の教科 道徳」における 「いじめ問題」、「国語科」を軸とした「読書 指導」について考察した。具体的に指導事例 を比較・検討することで、改善の方向性を示 した。 共著者：善野八千子・芳之内貴一・久保田 巧・東川博規
(その他) 「研究報告書」 1. 奈良県就学前教育研 究調査事業最終報告書	共著	平成 29 年 3 月	京都大学地域連携 教育研究推進ユニ ット	奈良県委嘱研究（奈良県就学前教育研究調 査事業）A4版 全175頁研究代表 高見茂 本人担当部分：1. 小学校との連携と親関与 「就学前教育振興のために-小学校との連携 推進及び家庭教育の支援を促進する取り組 みに焦点を当てて-」2～21頁を単著。
2. 奈良県就学前教育研 究調査事業最終報告書	共著	平成 29 年 12 月	京都大学地域連携 教育研究推進ユニ ット	奈良県委嘱研究（奈良県就学前教育研究調 査事業）A4版 全159頁研究代表 高見茂 本人担当部分：3. プログラム実践状況の分 析「就学前教育振興のために-参観訪問園及 び他1園の実施の現状を踏まえた分析と評 価・総体について-」104～116頁を単著。
「収録集」 1. 平成 25 年度研究・ 研修収録第 44 号	単著	平成 26 年 3 月	大阪市私立幼稚園 連合会	平成 25 年度研究・研修収録「専門教養研 修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携「子供の育ちと学 びをつなぐ」69～72頁を単著。
2. 平成 26 年度研究・ 研修収録第 45 号	単著	平成 27 年 3 月	大阪市私立幼稚園 連合会	平成 26 年度研究・研修収録「専門教養研 修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携(2)「子供の育ち と学びをつなぐこれからの言語活動」85～89 頁を単著。
3. 平成 27 年度研究・ 研修収録第 46 号	単著	平成 28 年 3 月	大阪市私立幼稚園 連合会	平成 27 年度研究・研修収録「専門教養研 修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携「幼小接続カリキ ュラムの作成と改善とまどいマトリクス >を活用して」78～80頁を単著。

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
4. 平成 28 年度研究・ 研修収録第 47 号	単著	平成 29 年 3 月	大阪市私立幼稚園 連合会	平成 28 年度研究・研修収録「テーマ研修」 として、執筆。 本人担当部分：子どもの育ちと学びをつな ぐ幼小接続期の対話的学びの力 35～38 頁を 単著。
5・平成 29 年度研究・ 研修収録第 48 号	単著	平成 30 年 3 月	大阪市私立幼稚園 連合会	平成 29 年度研究・研修収録「テーマ研修」 として、執筆。 本人担当部分：子どもの育ちと学びをつな ぐ幼小接続期の「深い学び」21～25 頁を単著。
「事典」 1. 改訂 実践教育評価 事典	共著	平成 22 年 8 月	文溪堂	新学習指導要領と新指導要録を基本据え た教育評価の基礎知識的な用語を解説。 A4 版 全 264 頁 共著者：梶田叡一、加藤明、長谷浩也、吉村 希至、土田圭子、石井雅幸、上之園公子、尾 崎友美、松田智子、鎌田首治朗、勝見建史、 金沢緑、有本昌弘、木下博義、古川治、猿田 祐嗣、小倉康、立田慶裕、土田圭子、二瓶弘 行、田中博史、松浦拓也、寺本貴啓、善野八 千子、角谷重樹、米田豊、北川達夫、小楠徹、 内田和寿、林義樹、菅千索、森敏昭、川崎弘 本人担当部分：「学校評価」188～189 頁を単 著。 学校評価について、学校評価のガイドライン の改訂から進め方まで解説。
「依頼原稿」 1. 仕事の ABC ～苗代 ってなんですか～	単著	平成 21 年 5 月	明治図書学校マネ ジメント 6 月号	「教職員意識のギャップ＝ビックリ例」と して、新任教師に対する自然体験不足以前の 知識不足、教材研究不足についての実態につ いて具体事例をあげた。規範意識以前の社会 のマナー・ルール・モラルを「親育て」をも 担っていく教師に身につけさせていく必要 とともに経験豊富な教員へのエールを送っ た。 本人担当部分：12～13 頁を単著。
2. マル得情報をキャッ チするアンテナの立て 方	単著	平成 21 年 9 月	明治図書学校マ ネジメント 10 月号	情報の収集・活用・編集・発信の一連の流 れについて整理し教師にとって重要な「生き る力」として、「学校評価」に関する関係法 令 学校評価に関する学校教育法・学校教育 法施行規則の規定 学校評価の推進関する 調査研究協力者会議学校評価及び情報提供 の実施状況（調査結果）及び学力向上の具体 策発信と実行について、7 点に整理して提示 した。 本人担当部分：15～16 頁を単著。

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
3. 学校評議員制度の変 革点と現場への影響予 測	単著	平成 22 年 1 月	明治図書学校マネ ジメント 2 月号	変革点として評議員制度に関連する教育 の無償化と「学校理事会」の設置 2 点を予測 して論じた。学校教育の無償化がもたらすも の学校格差を生み出さない学校評価の「学校 理事会」の設置についての課題と教育情報の 可視化とアーカイブ化の必要性を示した。 本人担当部分：14～16 頁を単著。
4. 子どもの育ちと学び をつなぐ保幼小連携Ⅰ 接続カリキュラム作成 のポイント	単著	平成 22 年 11 月	日本教育総合研究 所 週刊教育 PRO 第 40 巻第 43 号	幼稚園教育と小学校「生活科」教育につい てを、「遊びから学び」へという視点から検 討を加えた。1 点目に、発達に即した「育て たい姿」と「内容」を設定すること。2 点目 に、子どもにとっての環境の変化や違いを知 ること。3 点目には、子どもにとっての新しい 環境の変化や違いを「時間・空間・仲間」 で整理することを読み解いた。特に、就学前 5 歳児 2 月末から、入学後 1 年生 4 月・5 月 第 1 週までの「接続期 7 週間モデル案」のう ちの、小学校入学後第 1 週の生活科スタート カリキュラムの一例から、その重要性を示し た。本人担当部分：36～ 38 頁を単著。
5. 子どもの育ちと学び をつなぐ～明日からで きる幼小接続カリキュ ラム①	単著	平成 24 年 5 月	日本教育総合研究 所週刊教育 PRO 第 42 巻第 11 号	異校種の保育・教育現場をつなぎながら、 子どもの育ちをつなぐ研究と実践の往還を 実現していく装置としての組織開発につい て、示唆した。これまで、2009 年から着手し た継続研究を整理し、課題と展望を示した。 また、幼児教育と小学校教育をつなぐ「幼 小接続カリキュラム（就学前）（就学後）」の カリキュラムを作成するプロセスを示唆。 本人担当部分：32～37 頁を単著。
6. 子どもの育ちと学び をつなぐ～明日からで きる幼小接続カリキュ ラム④	単著	平成 24 年 7 月	日本教育総合研究 所週刊教育 PRO 第 42 巻第 15 号	新幼稚園教育要領の基本理念である、「生 きる力」の基礎をはぐくむことから、幼児教 育終了段階で身に付けたい「知・徳・体」、 学びの基礎力の基本事項を解説。幼小接続カ リキュラム（就学前）の作成にあたり、目標 を示した。さらに、生活科につながるカリキ ュラム作成のための視点を「時間、空間、人 間、もの、技能、心情」の 6 項目であると示 し、縦軸に、「知・徳・体」、横軸に、「時間、 空間、人間、もの、技能、心情」のマトリク スを考案。また、「学校ごっこ」と就学後の 子どもの体験と遊びの重要性についてまと めた。 本人担当部分：33～37 頁を単著。

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
7. 子どもの育ちと学び をつなぐ～明日からで きる幼小接続カリキュ ラム⑤	単著	平成 24 年 7 月	日本教育総合研究 所 週刊教育 PRO 第 42 巻第 16 号	入学前の「一日体験入学から、学校ごっこへ」について、幼児教育と生活科の接続について、考察した。入学前後のとまどい要因は、6 点あることを示した。時間・空間・人間・もののちがいにについて、小学校入学時点との相違点について、解説。「より意義のある一日体験入学」の活動について、幼児教育のねらいと小学校生活科のねらいを併記して、目標に対応した活動としての評価を検討した。活動名「もうすぐいちねんせい」、単元名「あたらしい 1 年生をしょうたいしよう」に関連して提示した。 本人担当部分：34～37 頁を単著。
8. 子どもの育ちと学び をつなぐ～明日からで きる幼小接続カリキュ ラム⑥	単著	平成 24 年 8 月	日本教育総合研究 所 週刊教育 PRO 第 42 巻第 17 号	筆者の提案を元に「幼小接続カリキュラム」を実施した八尾市立東山本幼稚園からの聞き取りと記録を通して、実践例を示し考察した。また、学校園の組織として連携を継続するために幼小接続は、管理職の問題意識や役割が非常に大きいことから、保育所から小学校に連携を申し出る手続きは、子どもの入学先や可能な相手校を選択して、主体的に働き掛けていくことの必要性を提言した。公私立の園と小学校の交流限定などの制約実態や子どもの交流の前に、まず教職員の交流から始める方策を示した。 本人担当部分：34～37 頁を単著。
9. 特集輝いて活躍する 女性「にこやかなハイタ ッチでつながる」	単著	平成 26 年 3 月	全国公立小・中学校 女性校長会本部だ より	第 63 回全国公立小・中学校女性校長会全国研究協議大会（奈良県開催）における女性管理職のマネジメントのあり方を検討し、内閣府が行った『男女共同参画社会に関する世論調査』（平成 24 年）等のデータなどを根拠として、ロールモデルとしての人材育成のあり方を提示した。 本人担当部分：P6 を担当。
10. 生活科における 「深い学び」を実現する ための理論と授業づく りのポイント	単著	平成 30 年 1 月	学校教育 NO.1205 広島大学附属小学 校 学校教育研究 会	新学習指導要領の改訂（平成 29 年 3 月告示）の特徴である、「学びの質に着目した授業改善の取組の活性化を目指した構造の変更」から論じた。「深い学び」を実現するための生活科の課題と深い学びのための連続発展する 4 観点(1)幼児教育とつなぐ(2)次の活動につなぐ(3)家庭・地域とつなぐ(4)中学年の各教科へつなぐをふまえて、実践事例を元に論考した。 本人担当部分：14～21 頁を担当。
11. 未来を創る子ども に染み込む「価値」	単著	平成 30 年 8 月	阪急学園教育広報 誌 8 月号	未来を創る子どもに染み込む「価値」について、1 点目は全国弁論大会の体験から、2 点目は、体験的学習の価値「親子でクッキング」の中で、「料理は科学」「料理は美学」「料理は五感力」「料理は段取り力」という講話の例から、3 点目は本学の学生育成の核について論じた。 本人担当部分：1 頁（表紙）を担当。

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
「学会発表」 1. 幼稚園における学校 評価項目作成の試み	共同	平成 22 年 6 月	日本教育経営学会 第 50 回大会 (於:静岡大学)	幼稚園における学校評価項目作成を目的 とし、現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保 育士養成校学生に対して調査した。項目を分 類し、さらに、望ましい 88 の評価項目を提 示した。幼稚園満足度と評価項目カテゴリー との関係を因子分析し、検証した。評価項目 作成のアンケート調査研究及び考察した。 本人担当部分: 幼稚園における学校評価項目 作成を目的とした現職小学校・幼稚園教諭及 び教員・保育士養成校学生に対して実施した 調査方法について、受益者側から項目を作成 する知見を述べ、評価項目作成のアンケート 調査結果を考察から得た結果について、詳述 した。
2. 子どもの育ちと学び をつなぐ幼小接続期に おけるカリキュラムの 開発	個人	平成 22 年 6 月	日本生活科・総合的 学習教育学会第 19 回大会 (於:立命館小学校)	共同発表者: 善野八千子、前田洋一 幼小による教育課程の理解を中心に推進 することの意義及び子どもの育ちと学びの 連続保証を目的として、「汎用性のある幼小 接続期のカリキュラムの作成」を試みた。ポ スターセッション型実践交流を推進した取 り組みの問題点を整理した結果、校区の特性 によって異なる取り組みを解決するための カリキュラム作成の必要性を説いた。その構 成要素と作成の手だてについて明らかにし、 教職員の理解と子ども理解を同時にすすめ ながら、幼小連携を推進するための組織開発 を提案した。
3. グローバル社会時代 の学校づくり～学校評 価を基軸とした教育情 報の可視化とアーカイ ブ化～	個人	平成 22 年 9 月	日本グローバル教 育学会第 18 回大会 (於:鳴門教育大学)	シンポジウムにおいて、グローバル社会時 代の学校づくり～学校評価を基軸とした教 育情報の可視化とアーカイブ化～と題して、 1. グローバル社会時代の子どもの育成す る資質能力 2. 経験知をふまえた理論や 具体的提案 3. 学校づくりの基軸となる学 校評価～教育情報の可視化とアーカイブ化 ～ 4. グローバル社会に時代に対応した 学校づくりと教師の力量形成について、提案 し示唆した。とりわけ、教師の力量形成にお ける知見として、学校評価の参画者として学 校への愛着と誇りを持った教員の育成につ いて提案した。
4. 子どもの育ちと学び をつなぐ幼小接続期に おけるカリキュラムの 開発～「幼小接続 7 週間 モデル案 (第 2 次)」作 成を通して～	個人	平成 23 年 6 月	日本生活科・総合的 学習教育学会第 20 回大会 (於:岐阜聖 徳大学)	幼小連携にかかる子ども観・評価観の違いを 整理した。また、教育課程の理解を中心に推 進することの意義及び子どもの育ちと学び の連続保証を目的とするとして、「汎用性 のある幼小接続期のカリキュラム幼小接続 7 週間モデル案 (第 2 次)」作成した。作成の 手順及びこれまでのカリキュラム改善の視 点について知見を述べた。具体的には、就学 後の 18 日案、第 1 週～5 週までの生活科を基 軸とした実践事例を提示した。適応指導のみ の考えでない幼児教育の育ちをつなぐため の新たなスタートカリキュラムの考えを提 案した。

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概 要
5. 子どもの育ちと学び をつなぐ幼小接続期に おけるカリキュラムの 開発Ⅲ～「入学後の子 どものとまどい」に着目し て～	個人	平成 24 年 6 月	日本生活科・総合的 学習教育学会第 21 回大会（於：徳島大 学）	子どもの育ちと学びの連続保証を目的と して、「幼小接続カリキュラム（就学前）」を 作成。指導者が困っている状況からではな く、学習者である子どもが「入学後に戸惑っ ている状況」に着目し、「とまどい」マトリ クスを提示した。とまどい要因を幼児教育と 小学校教育の双方で解決することによって、 「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラ ム」を作成及び改善手立てとして、幼児教育 と小学校教育に関わる教員の混合グループ ワークショップにおいて、研修会でも活用で きることを示唆した。
6. 子どもの育ちと学び をつなぐ幼小接続カリ キュラムの開発（Ⅳ） ～「入学後の子どもの戸 惑い」を見通した一日体 験入学～	個人	平成 25 年 6 月	日本生活科・総合的 学習教育学会第 22 回大会（於：神戸大 学附属小学校・附属 明石小学校）	継続研究の 4 年目において、「とまどいマ トリクス」を活用した「幼小接続カリキュラ ム」の作成プロセス及びその一例として「一 日体験入学」の活動案を提示した。とりわけ、 「とまどいマトリクス」活用の有効性を実践 検証した。
7. 「子どもの育ちと学 びをつなぐ一幼小中の 接続－」	個人	平成 26 年 8 月	人間教育学会「学校 間接続分科会」（於： 奈良学園大学）	幼・小・中学校にかかる子ども観・評価観 の違いを整理した。また、教育課程の理解を 中心に接続を推進することの意義及び子ど もの育ちと学びの連続保証を目的に考察し、 「汎用性」のある接続期のカリキュラムモデ ル作成の手順及びこれまでのカリキュラム 改善の視点について、新たな知見を述べた。
8. 子どもの育ちと学び をつなぐ幼小接続カリ キュラムの開発（Ⅴ） ～「とまどいマトリク ス」を活用した「一日体 験入学」の改善	共同	平成 28 年 6 月	日本生活科・総合的 学習教育学会第 24 回大会（於：宮城学 院女子大学）	継続研究の 5 年目において、「とまどいマ トリクス」を活用した「幼小接続カリキュラ ム」を活用した合同研修事例を提示し「一 日体験入学」の改善案を考察した。とりわけ、 岐阜県山形市立小学校における「とまどいマ トリクス」活用の有効性を実践検証した。
9. 幼小接続期における 育ちと学びの連続 「ハイスコープ就学前 教育プログラム」を手が かりに	共同	平成 30 年 12 月	日本人間教育学会 第 4 回大会（於：桃 山学院教育大学）	幼小接続期の非認知能力の向上のため「ハ イスコープ就学前教育プログラム」を導入し 発達レベルの評価基準や幼児の能力を高め る指導戦略に生かした。また、教育視点の可 視化と共に、幼児教育における基準や評価に ついて教員の保育観の交流を進めた。評価ス ケール作成により、取組の成果と課題のエビ デンスをもって卒園児の保護者及び小学校 に伝える契機となった。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 根岸 章

研 究 分 野		研究内容のキーワード
数学、情報学、経済学		作用素論、量子ウォーク、グラフ理論、垂直軸風車、ジニ係数
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
(1) 数学用ソフトウェアを用いた数学教育	平成 19 年 9 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良産業大学(現奈良学園大学)情報学部専門科目「情報数学Ⅱ」において、KNOPPIX/Math の CD を配布し、フリーの数式処理ソフトウェア Maxima を用いた数学の学習活動を行った。これによって、関数のグラフをパラメータを使って動的に動かしたりが容易になり、関数の係数の意味を把握した理が容易になるなどの教育効果があった。 平成 22 年度からは、学内のパソコンが CD から起動できなくなり、Windows 版の wxMaxima を利用するように変更した。 平成 25 年度からは新規科目「ゲーム数理」においても、3 次元曲線のパラメータ表示などの視覚化に役立て、平成 26 年度からは、新課程科目「情報数学Ⅱ」でも、他変数関数の微積分の学習で活用するようになった。
(2) 達成度別課題学習システムの構築	平成 20 年 4 月 ～ 平成 22 年 3 月	奈良産業大学(現奈良学園大学)情報学部専門科目「情報数学Ⅰ」において、授業内容を課題として設定し、一つの課題に複数の同種の問題を用意して課題内容未達の学生は、繰り返し課題を行うようなシステムを構築した。学生は学内 LAN から自分の達成状況が分かる。また、成績評価も絡めることによって課題達成への意欲を持たせるようにした。
(3) 能力別クラス編成の実践	平成 22 年 4 月 ～ 平成 23 年 3 月	奈良産業大学(現奈良学園大学)情報学部 1 年次生に対し 4 月当初に数学についてのプレースメントテストを行い、日本人学生に関しては、多喜正城教授とクラス分けをして専門科目「情報数学Ⅰ」を行った。それによって、学生の状況に応じた授業がしやすくなり、学生のやる気を高める教育効果があった。
(4) 「基礎数学」の科目設置	平成 23 年 4 月 ～ 平成 28 年 3 月	奈良産業大学(現奈良学園大学)の全学共通の導入基礎科目「基礎数学Ⅰ」「基礎数学Ⅱ」を設置し、4 月入学時に全学的に数学についてのプレースメントテストを行い「基礎数学Ⅰ」から履修、「基礎数学Ⅱ」から履修、「履修免除」にわけ、それぞれの科目を各学部で複数クラス開講して少人数教育にした。それによって、大部分の学生は数学力の向上が見られるなど教育効果があった。
(5) 講義科目「情報数学Ⅰ」と演習科目「情報数学演習Ⅰ」の同時受講	平成 24 年 4 月 ～ 平成 28 年 3 月	奈良産業大学(現奈良学園大学)情報学部の平成 23 年度のカリキュラム改革で、主要科目において講義科目と演習科目を併設して同時受講させるようにした。平成 24 年度から 2 年次配当科目として「情報数学Ⅰ」と「情報数学演習Ⅱ」を同時受講させ、両科目を連携させることによって数学的内容の理解とともに計算力をつけさせるように工夫した。

(6) 講義科目「解析学基礎」における問題作成演習	平成 30 年 4 月 ～ 現 在 に 至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学基礎」において、中学・高等学校数学を範囲とした問題作成を行なった。問題作成と同時に対象学年や難易度、解答と解説も行わせ、将来中学校や高等学校の数学教員になる際に必要とされる知識や考え方を学ばせた。
2 作成した教科書、教材		
(1) 「統計学入門」	平成 19 年 4 月 ～ 平成 24 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）ビジネス学部で兼任した「統計学入門」（学部共通基礎科目、1 年次配当、半期 2 単位）で使用したテキスト。 記述統計について平均や分散、相関係数などまでを扱う。平成 20 年度からは留学生対応としてルビをふるようにした。なるべく数式を使わずに統計学の概念の理解をさせるように工夫し、それによって、数学が苦手な学生でも統計の基礎的な概念が理解できる教育効果があった。A4 全 29 ページである。
(2) 「経済統計入門」	平成 19 年 4 月 ～ 平成 24 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）ビジネス学部で兼任した「経済統計入門」（学部共通基礎科目、1 年次配当、半期 2 単位）で使用したテキスト。 インターネットで入手できる経済統計のデータについて、マクロ経済学の諸概念との関連を強調しながら入手方法や意味を扱う。実際のデータを入手したり、それを加工するような課題を課すことによって、経済データの分析手法を学ばせる教育効果があった。経済統計のデータの更新や統計調査の名称変更などはプリントで補った。A4 全 28 ページである。
(3) 「数学入門 第 2 版」	平成 22 年 3 月	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、1 年次配当、半期、2 単位）で使用していた教科書。数の集合の拡張とそれぞれの関係から始め、初等的な方程式の解法や 1 変数関数の初歩的事項から、微積分、テーラー展開や数値積分までを扱っている。第 2 版では集合や命題と論理を付録として追加した。 自然数から有理数を導出する考え方と、指数が自然数のベキから小数のベキへの導出を対比させるなどして、いろいろな事項をなるべく関連させながら学習していくように工夫し、それによって、学生に 1 変数の解析を学習しやすくする教育効果があった。 A5 全 146 ページで学術図書出版より発行された。 (ISBN978-4-7806-0187-9)
(4) 「情報数学Ⅰ」	平成 24 年 4 月 ～ 平成 24 年 9 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「情報数学Ⅰ」（専門科目、2 年次配当、半期、2 単位）で配布したプリント。平成 23 年度のカリキュラム改革で設置された「基礎数学Ⅱ」を修得した学生を対象とした科目内容に改めた。授業中のプレゼンテーションではカラー化したものを用意し、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全 95 シートである。
(5) 「情報数学Ⅱ」	平成 25 年 4 月 ～ 平成 29 年 9 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「情報数学Ⅱ」（専門科目、3 年次配当、半期、2 単位）で配布したプリント。2 変数関数の微積分を中心として、変数変換や近似計算も扱っている。Maxima の利用により、微積分の具体的な計算よりその意味を考えることに集中でき、また、2 変数関数のグラフなどが視覚化されわかりやすくなるなどの教育効果があった。A4 判全 28 頁。

(6) 「ゲーム数理」	平成 25 年 10 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「ゲーム数理」（専門科目、3 年次配当、半期、2 単位）で配布したプリント。平成 23 年度のカリキュラム改革で設置されたゲーム制作で現れる数学のうち、CG の変換の基礎となる数学事項に特化した内容を扱っている。授業中のプレゼンテーションではカラー化したものを用意し、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全 111 シートである。
(7) 「数学の世界」	平成 27 年 4 月 ～ 平成 30 年 9 月	奈良学園大学において平成 26 年度から設置された「数学の世界」（共通教育科目、1 年次配当、半期、2 単位）で配布したプリント。幾何、代数、解析の 3 分野を中心に、「数の世界」、「量の世界」、「形の世界」、「計算の世界」、「変化の世界」と題して数学の諸分野の内容を紹介する。整数の集合など簡単な材料を用いることによって、高校までの数学ではでてこない比較的新しい数学の概念や考え方を、興味をもって学習できるように工夫した。全 99 シート。
(8) 「日常に数学を一文理をつなぐ数学教室から」	平成 27 年 4 月 ～ 平成 30 年 9 月	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、1 年次配当、半期、2 単位）で使用中の教科書。日常生活に近い場面での数学の活用例を中心に、関数、数列、行列の基礎知識と学びながら応用方法も学んでいく。 物体の動きと微分や、金利と数列、人数の変化と行列などを結び付け、学習者の興味を引き出しながら学んでいくように工夫している。大田靖氏（岡山理科大学総合情報学部准教授）との共著で A5 全 169 ページで学術図書出版より発行された（ISBN978-4-7806-0464-1）。根岸の担当分は第 2 部 101 ページである。
(9) 「情報数学演習Ⅱ」	平成 27 年 9 月 ～ 平成 28 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「情報数学演習Ⅱ」（専門科目、3 年次配当、半期、1 単位）で配布したプリント。平成 23 年度のカリキュラム改革で設置された情報系で必要とされる数学内容のうち、グラフ理論を扱っている。演習中心に展開しつつ、グラフ理論の基礎用語の説明や、さまざまな定理の証明を実例を交えつつ行い、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全 84 シートである。
(10) 「解析学基礎」	平成 30 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学基礎」で配布したプリント。集合論の基礎から微分のロピタルの定理までをほぼすべてに詳しい証明をつけて述べた。高校数学では単なる計算で終わりがちな微分を、実数の基礎から確認していくことを目的としている。A4 で 38 ページである。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 学生の授業評価アンケートの結果	平成 27 年度前期	最高点 4.00 で、「数学の世界」の総合的満足度は 2.85 であり、全体平均の 3.29 よりだいぶ低い値となっていた。講義内容・方法についての項目の科目平均は 2.31 ～3.92 となり、全体平均と比べ低い項目も高い項目もあった。低かったのは、授業時間外の指導等で、高かったのは、授業中の私語対策などであった。その他の担当科目については受講生が 10 名未満だったため、アンケートの対象外だった。

	平成 27 年 度 後 期	「生活の中の数学」の総合的満足度は 3.33 であり、全体平均の 3.24 より若干高い値となっていた。講義内容・方法についての項目の科目平均も 3.33～3.56 となり、どの項目も全体平均より高い値となっていた。その他の担当科目については受講生が 10 名未満だったため、アンケートの対象外だった。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
(1) 「Excel を用いた成績管理」	平成 21 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2009」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、いくつかの統計関数を使いながら得点を 3 段階評価に変えたり、散布図やヒストグラムを作る方法を講演した。また、観点別の評価を総合の評価に計算するなどの方法を講演した (受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 25 名程度)
(2) 「情報処理学とは」	平成 22 年 4 月	私立奈良文化高校で行われた「奈良文化高校分野別ガイダンス」において標記のテーマで講師を務めた。情報処理学という学問分野の概説を行い、合わせて、奈良産業大学情報学部の特徴を述べた。 (聴講者は奈良文化高校の生徒 2 名)
(3) 「社会生活の中の数学」	平成 22 年 7 月	奈良県王寺町一べる王寺において、王寺町と奈良産業大学の主催で行われた「王寺町～べるカレッジ」において標記のテーマで講師を務めた。社会生活に数学が使われている例として、2 つの具体例を取り上げて解説した。1 つは、産業連関分析で、数学的には逆行列の応用となっていること、もう一つはデジカメで使われるパッシブ方式のオートフォーカスの原理で、差分の考え方の応用となっていることを述べた。 (聴講者は地域の高齢者の方を中心に 30 名程度)
(4) 「Excel VBA の活用」	平成 22 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2010」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、マクロの利用方法と VBA の使い方を講演した。マクロの利用方法としては、一つ一つの点の記号が異なる散布図の作り方を扱い、VBA の使い方としてはまた、出席簿をカテゴリー別の表に帰るユーザー定義関数の例や FOR ループを利用したプログラミングについてを講演した。 (受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名程度)
(5) 「Excel VBA の活用」	平成 22 年 12 月	奈良産業大学で行われた「2010 年度冬季 教職員のための公開講座」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、マクロの利用方法と VBA の使い方を講演した。マクロの利用方法としては、一つ一つの点の記号が異なる散布図の作り方を扱い、VBA の使い方としてはまた、出席簿をカテゴリー別の表に帰るユーザー定義関数の例や FOR ループを利用したプログラミングについてを講演した。 (受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名弱)
(6) 「Excel VBA の活用」	平成 23 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2011」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、マクロの利用方法と VBA の使い方を講演した。マクロの利用方法としては、一つ一つの点の記号が異なる散布図の作り方を扱い、VBA の使い方としてはまた、出席簿をカテゴリー別の表に帰るユーザー定義関数の例や FOR ループを利用したプログラミングやセルの内容を基にしたセルごとの操作についてを講演した。 (受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名程度)

(7) 「情報の数理」	平成 24 年 6 月	奈良県立大和中央高等学校で行われた「進路相談会」で標記のテーマで模擬講義の講師を務めた。情報量とは何かを主題に、対数の定義やその性質を述べ、そこから情報量の定義を与えた。また、ファイルの可逆圧縮と非可逆圧縮の違いを、情報量の観点から述べ、実演を行った。 (受講者は大和中央高校の生徒 15 名)
(8) 「Excel 関数自由自在」	平成 24 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2012」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、条件によって変化する関数を主題に講演した。IF 関連関数や他の関数との組み合わせ利用、配列数式の利用法補などを扱い、それぞれの違いを講演した。 (受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名程度)
(9) 「Word と Excel をリンクした文書作成」	平成 24 年 8 月	三郷町立三郷北小学校で行われた「教員研修会」において標記のテーマで講師を務めた。Word と Excel をリンクした文書作成を主題に、Word のグラフ作成において、Excel とリンクさせない場合とさせた場合の違いや、差し込み印刷の使い方などを講演した。 (参加者は三郷北小の教員 20 名程度)
(10) 「こども ICT 講座」	平成 29 年 2 月	三郷町文化振興財団と奈良学園大学が共催した三郷町の小学生を対象にしたカルチャーサロン「こども ICT 講座」において、プログラミング言語「スクラッチ」を用いたプログラミングの教室の講師を務めた。 (参加者は三郷町の小学 4 年生から 6 年生 16 名)
(11) 「子ども ICT 講座」	平成 30 年 2 月	三郷町文化振興財団と奈良学園大学が共催した三郷町の小学生を対象にしたカルチャーサロン「子ども ICT 講座」において、プログラミング言語「スクラッチ」を用いたプログラミングの教室の講師を務めた。 (参加者は三郷町の小学 1 年生から 5 年生 14 名)
(12) 「たつたクラブ」	平成 30 年 3 月 ～ 現在に 至る	三郷町において、3 月より月 1 回行われている小中学生向けのプログラミング教室にサポーターとして参加している。8 月から 12 月までは月 2 回のロボットプログラミング教室、および平成 31 年 1 月に行われた、競技会に主催者の一員として参加した。
(13) 「AI と囲碁」	平成 30 年 6 月	奈良県王寺町りーべる王寺において、王寺町と奈良学園大学の主催で行われた「第 27 回大学と地域をつなぐ公開講座『りーべるカレッジ』」において標記のテーマで講師を務めた。AI とその発展史を概観し、近年のキーワードとしてディープラーニングを取り上げた。合わせて、囲碁 AI の開発史を概観し、モンテカルロ法とディープラーニングにより、急速に強さが増していったことを見た。その後、Excel 上で簡単なニューラルネットワークモデルを作成し、ソルバー機能を用いて最適化を行うディープラーニングの実例を取り上げた。 (聴衆は地域の高齢者の方を中心に 15 名程度)
(14) 「数式処理ソフトの使い方」	平成 30 年 10 月	奈良県立高取国際等学校で行われた進路相談会の模擬講義において、標記のテーマで講師を務めた。導入として AI の発達による各種の職業の将来性について、野村総合研究所の発表をもとに解説した。その後、高校 1、2 年の数学の内容を数式処理ソフト Maxima を使いながら概観し、数式処理ソフトを使った授業法について述べた。 (受講者は高取国際高校の 2 年生 8 名)
5 その他 特記事項なし		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許		

高等学校教諭第一種免許（数学）	平成 2 年 3 月 31 日	平成高一め第四三六三号（京都府教育委員会）		
2 特許等 特記事項なし				
3 実務の経験を有する者についての特記事項 （1）インターンシップ科目検討ワーキンググループ	平成 23 年 8 月 ～ 平成 27 年 2 月	インターンシップ実習の単位化にあたり、科目の内容、実施方法の検討を行った。その後、平成 25 年度は 2 年次生担当科目「インターンシップⅠ」を、平成 26 年度は 3 年次生担当科目「インターンシップⅡ」を担当した。		
（2）情報学部評議員	平成 24 年 4 月 ～ 平成 26 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部情報学科の評議員を務めた。		
（3）情報学部長	平成 27 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部情報学科の学部長を務めた。		
（4）情報センター長	平成 29 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	奈良学園大学情報センター長を務めた。		
（5）人間教育学部評議員	平成 30 年 4 月 ～ 現 在 に 至る	奈良学園大学人間教育学部の評議員を務めた。		
（6）自己点検・評価委員会委員長	平成 30 年 4 月 ～ 現 在 に 至る	奈良学園大学自己点検・評価委員会の委員長を務めた。		
（7）三郷町文化振興財団理事	平成 30 年 6 月 ～ 現 在 に 至る	三郷町文化振興財団の理事を務めた。		
（8）三郷町 ICT 学び推進協議会委員	平成 30 年 7 月 ～ 現 在 に 至る	三郷町 ICT 学び推進協議会の委員を務めた。		
4 その他 特記事項なし				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
（著書） 1 数学入門（第 2 版）	単著	平成 22 年 3 月	学術図書出版社	（再掲のため略）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 日常に数学を－文理をつなぐ数学教室から－	共著	平成 27 年 3 月	学術図書出版社	(再掲のため略)
(学術論文) 1 ジニ係数の数理的性質と実証研究例	単著	平成 23 年 12 月	奈良産業大学紀要第 27 集 pp. 79-94	複数の集団のそれぞれのジニ係数と、それを合わせた全体の集団のジニ係数の関係を考察した。ジニ係数の定義を拡張し、新たな定義に対し必要となる性質を定理として得た。この結果、元の 2 集団の要素数の比率と全体の集団のジニ係数は無関係であることを一般的に示した。また、「国民生活基礎調査」の公開データをもとに、日本の高齢化がジニ係数の増加に与える要因分析を行った。
2 有限グラフ上の量子ウォークについて I：定義と条件	単著	平成 25 年 2 月	奈良産業大学情報学フォーラム紀要第 8 集 pp. 99-108	有限グラフ上の量子ウォークについて、まず、グラフに無関係な一般のヒルベルト空間上のユニタリ写像を置き、その中で、グラフと結びつけるうえでのいくつかの仮定の下、グラフの頂点と関係する部分空間の次元を導出した。
3 有限グラフ上の量子ウォークについて II：例と性質	単著	平成 25 年 12 月	奈良産業大学紀要第 30 集 pp. 57-63	有限グラフ上の量子ウォークについて、2 部グラフでの解析において、半分の次数の行列を用いれば十分であることを示した。
4 有限グラフ上の量子ウォークについて III：Propagator Set の次元	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要第 7 集 pp. 91-96	有限グラフ上の量子ウォークについて、量子ウォークの Propagator Set の定義を与え、実パラメータの自由度を次元として Propagator Set の次元を与える定理を示した。また、瀬川、鈴木両氏の "Generator of an abstract quantum walk." における定義と根岸の定義の違いについて考察した。
(その他) 1 奈良産業大学（現奈良学園大学）インターンシップ第 2 期実施報告：研究ノート	共著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要第 3 集 pp. 209-227	平成 24 年度から奈良産業大学で実施された単位化された科目としてのインターンシップについて、その導入の経緯から実習後の教育効果までを記述した研究ノート。山本英司氏（現金沢星稜大学経済学部教授）との共著で、根岸は主にデータの解析とその分析結果の記述を担当した。
2 奈良産業大学「基礎数学」の報告と分析：研究ノート	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要第 5 集 pp. 197-211	奈良産業大学（現奈良学園大学）で平成 23 年度から平成 27 年度にかけて実施した数学の導入教育について、科目の到達目標の設定段階の状況報告から実施後の学生の成績に基づく分析までをまとめた。
3 解析学における高大連携の私論（その 1）：論考	単著	平成 27 年 11 月	教育 PRO 第 45 巻 25 号 p. 16-17	数学の高大連携において、解析学に重点を置くことの意味を示し、いくつかの数学用語についての高校と大学での違いを述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 解析学における高大連携の私論（その2） ：論考	単著	平成 27 年 12 月	教育 PRO 第 45 巻 27 号 p. 16-17	数学の高大連携において、微分と積分において、高校段階で注意すべき点をいくつか示し、それらが大学でどのような意味を持つかを述べた。
5 Quantum random walks – an introductory overview （論文紹介） （量子ランダムウォーク – 入門的概観） ：口頭発表		平成 21 年 9 月	2009 年夏の作用素論シンポジウム 於：いわて県民情報交流センター アイナ（盛岡）	量子ウォークについての J. Kempe 氏の論文紹介を中心に、量子ウォークとは何かについて、特に 1 次元量子ウォークの一つであるアダマールウォークとランダムウォークとの分布の違いについての講演を行った。
6 有限グラフ上の量子ウォークについて ：口頭発表		平成 22 年 9 月	2010 年夏の作用素論シンポジウム 於：松本市中央公民館	有限グラフ上での量子ウォークの一般的な定義を与え、いくつかの簡単な例について、漸近挙動の分布の様子の数値計算例を紹介した。
7 辺から見た量子ウォーク ：口頭発表		平成 23 年 9 月	2011 年夏の作用素論シンポジウム 於：熊本市国際交流会館	有限グラフ上での量子ウォークを双対グラフ上で考察することによって設定を単純化できることを示した。
8 Some examples of quantum walk on finite graphs. （有限グラフ上の量子ウォークのいくつかの例） ：口頭発表		平成 24 年 9 月	2012 年夏の作用素論シンポジウム 於：新潟大学駅南キャンパス ときめいと	量子ウォークの漸近挙動について、グラフが星形グラフ、直線、サイクルの場合について考察した。
9 有限グラフ上の量子ウォークについて ：口頭発表		平成 25 年 9 月	2013 年夏の作用素論シンポジウム 於：広島大学東千田キャンパス	有限グラフ上での量子ウォークについて、ユニタリ性の見地からのより一般的な定義を与えた。また、この考えの応用例として、二部グラフにおける量子ウォークの固有関数についての定理を与えた。
10 トルク差を利用した垂直軸風車について ：口頭発表		平成 26 年 9 月	2014 年夏の作用素論シンポジウム 於：セミナー・カルチャーセンター臨湖	垂直軸風車において、羽の両面の形状の違いによるトルク差を利用するアイデアを提唱し、その数値計算例を与えた。
11 垂直軸風車の周速比の計算例 ：口頭発表		平成 27 年 9 月	2015 年夏の作用素論シンポジウム 於：福岡県フェニックスプラザ	トルク差を利用した垂直軸風車について、周速比の計算例を与えた。
12 量子ウォークの時間発展の次元について ：口頭発表		平成 28 年 9 月	2016 年夏の作用素論シンポジウム 於：米子コンベンションセンター BiG SHiP	$U(2n)$ に属するユニタリ行列の中で、辺数 n の有限グラフ上の量子ウォークの時間発展となりうる行列の集合の幾何学的次元とその条件を与えた。
13 量子ウォークの Propagator Set の次元について ：口頭発表		平成 29 年 7 月	2017 年夏の作用素論シンポジウム 於：伊勢市観光文化会館	量子ウォークの Propagator Set の定義を与え、 $U(2n)$ に属するユニタリ行列の中で、辺数 n の有限グラフ上の量子ウォークの Propagator Set の幾何学的次元に関する定理を示した。
14 羽根と質点の衝突から導出される方程式		平成 30 年 9 月	2018 年夏の作用素論シンポジウム 於：徳島市シビックセンター	空気分子が風車の羽根に与える角運動量とエネルギーの保存則から風車の羽根の形状の運動方程式を導出した。

教 育 研 究 業 績 書

平成 3 1 年 3 月 3 1 日

氏名 松田 智子

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
教育学		教育思想と教育史・特別活動の指導・生活科の指導・幼児教育	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事 項		年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 (1) 学生の相互評価を導入した成績評価の開発		平成 21 年 4 月 ～24 年 3 月	指導者として求められる感性及び表現力を育成するにあたり、学生の相互評価を導入した成績評価を実施した。事前の学生との討議で具体的な評価基準を作成し、他者のスピーチを相互に評価した。その成果及び課題を発表者に返す作業を行うことにより切磋琢磨の気風が醸成され、個々の観察力がさらに細かく具体的となった。表現の工夫では、具体物使用や身体表現が広がる等の効果が出た。 京都光華女子大学短期大学部・環太平洋大学の実践である。
(2) 形成的な評価を活用した授業計画の開発		平成 21 年 4 月 ～現在に至る	シラバス作成時に授業の形成的評価を計画に位置付け、それを基に授業の改善を行う。また、それぞれの授業終了時に3段階の満足度評価（学習者と指導者二者を対象とする）及び自由記述形式のアンケートを実施し、その集計結果を次の授業でフィードバックして、自己評価に活用する。これにより授業改善のみならず学生とのコミュニケーションツールとしての役割も果たした。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科及び奈良学園大学人間教育学科の実践である。
(3) 生活科の体験を通じた気づきを表現する過程で言語力を育てる系統的指導		平成 21 年 9 月 ～26 年 3 月	児童は直接体験を伝え合う中で自分の気づきと友達のそれとを比較し、共通点や相違点を発見する。これは相手意識と目的意識を備えた活動でなければ効果は望めない。そこで生活化の体験と国語科の低学年の「話す・聞く」の能力を系統的に指導する中で子どもの言語力を育てることを紹介した。朝のスピーチを連続的・系統的に取組み気づきの質を高める言語力指導を具体的に提示した。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科及び奈良学園大学人間教育学部の実践である。

(4) 特別活動の学級活動の話し合いを有効に進めるための学級経営の環境的な工夫を発見するため、DVDを通して学校現場を分析する指導	平成26年4月～現在に至る	担任が学級活動の話し合いを通して良好な人間関係を形成するために、日常的に行っている学級経営を聞き取った。さらに学級の掲示物や、児童生徒の発表の仕方など学級のルールや文化等が特別活動の学級活動の話し合いに与える影響を分籍した。教師の指導力が学級活動のも目標達成に大きな影響を与えることを実証した。奈良学園大学の特別活動の指導法の実践である。
2 作成した教科書、教材 (1) 言語力を育てる授業作り —新学習指導要領対応—【再掲】 共著（図書文化）	平成21年9月	今までの学習指導要領の教育の問題点を洗い出し、新たなカリキュラム改革を目指す理念と課題を明確にした。生活科のカリキュラムについての理解が深まったと感想が出た。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科生活科指導法で参考書として使用した。
(2) 教育フォーラム[46] 共著（金子書房） —言葉の力を育てる— 【再掲】	平成22年8月	各教科で新学習指導要領の要請される言語力を育てる方策について述べたものである。具体的であると好評だった。芦屋市幼稚園教育研究会の教育課程の学習会で資料として配布し論議を深めた。
(3) 実践教育評価事典【再掲】 共著（文溪堂）	平成22年8月	環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科のゼミナールで、学習指導要領の歴史を把握する際の教科書として使用した。歴史についての意識が低かったが、興味を持った学生が出てきた。
(4) 不登校生支援ハンドブック【再掲】 (学研エディケーショナル)	平成22年12月	不登校の事例を挙げて、取り組みおよび評価を述べたもの。学校復帰の具体的過程が分かったと好評だった。環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「生活の理解」の事例資料として使用した。
(5) 教育フォーラム[46] 共著（金子書房） —〈こころ〉を育てる—【再掲】	平成23年3月	個々との教育とは何かを論じ、各教科での心の教育への取り組みの在り方を述べたものである。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科「学級経営ゼミナール」資料として活用した。
(6) 次世代教職入門【再掲】 共著（大学教育出版）	平成23年5月	教師としての在り方についてその理念、研修や服務および仕事の内容について述べた。環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「教育実習事前事後指導」で確認のための資料として使用した。
(7) 教育フォーラム[50] 【再掲】 共著（金子書房） —〈やる気〉を引き出す〈やる気〉を育てる—	平成24年8月	子どものやる気とは何か、各教科におけるやる気の引き出し方について論じた。やる気のポイントが理解できたと好評だった。環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「教育実習事前事後指導」の参考書として使用した。
(8) 次世代の教育原理 【再掲】 大学教育出版	平成24年10月	基本原理と教育思想の歴史等、教育の一般原理について述べた。分かりやすい言葉で書かれていてわかりやすいと好評だった。奈良学園大学人間教育学部の「教育原理」の教科書に使用した。

(9) 子どもと生活—知的好奇心を育む環境づくり— 【再掲】 ふくろう出版	平成 25 年 3 月	子どもたちの知的好奇心を育む教育について、幼稚園教育要領の環境及び小学校学習指導要領の生活科を軸として、述べたものである。写真等が多くて好評だった。奈良学園大学人間教育学部「生活の理解」で教科書として使用した。
(10) 人間教育を視点にした「教職入門」 共著（大学教育出版）【再掲】	平成 26 年 12 月	教育の本質は人間の人格の形成であり、教職に就く者の基本理念を述べた。内容が具体的であり、学生にわかりやすかった。奈良学園大学と環太平洋大学の「教職入門」の教科書として使用した。
(11) 哲学する教育原理（保育出版社）【再掲】	平成 29 年 3 月	どうして教育原理を学ぶのか、現在の教育にどのように結びついているのかに視点を当てて作成した。奈良学園大学の「教育原理」の教科書として使用した。
(12) 特別活動の指導法—各教科、道徳、総合的な学習の時間との連携を通して— ERP 出版（共著）【再掲】	平成 30 年 1 月	特別活動では「社会の形成者としての資質・能力」を身に付けるものであり、方法原理としては「なすことによって学ぶ」を原則とすることを論じた。桃山学院教育大学と奈良学園大学の教育学部での特別活動で教科書として使用した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
(1) 環太平洋大学次世代教育学部教授として採用に おいての評価	平成 21 年 4 月	学校法人創志学園、大橋博理事長から、授業指導の能力、校長経験や教育委員会で身に着けたマネジメント能力を高く評価され、環太平洋大学の学級経営学科学科長で新規に採用をされた。
(2) 環太平洋大学平成 21 年度後期学生による授業評価アンケート	平成 22 年 3 月	学生による授業評価 12 項目の平均評価は 3.52（満点は 4）である。特に専門基礎である「学校と社会」が 3.77 と高い評価であった。
(3) 環太平洋大学平成 22 年度前期学生による授業評価アンケート	平成 22 年 9 月	学生による授業評価「生活の理解」満足度 4.00 中の 3.85、「学校学級文化の受容力」満足度 4.00 中の 3.97 であり、高い評価である。
(4) 環太平洋大学教職センター長としての評価	平成 23 年 3 月	学長より、公立学校の教員採用試験の合格者を倍増するように指示を受け、教師を目指す組織である「大志会」を設立し、学生の自学自習の支援システムと教職センターの組織を確立し、目標を達成した。
(5) 環太平洋大学平成 22 年度後期学生による授業評価アンケート	平成 23 年 3 月	「生活科教育法」3 コマのそれぞれの学生満足度は 4.00 中の 3.76、3.90、3.84 であり高い評価を得ている。「学校と社会」満足度 4.00 中の 3.35 である。
(6) 環太平洋大学平成 23 年度前期学生による授業評価アンケート	平成 23 年 9 月	「生活の理解」2 コマの学生の授業満足度は 4.00 中の 3.91 と 3.70 である。特に授業方法が適切で興味が持てる授業展開の項目が 4.00 と高い評価であった。
(7) 環太平洋大学平成 23 年度後期学生による授業評価アンケート	平成 24 年 3 月	「生活科教育法」3 コマのそれぞれの学生満足度は 4.00 中の 3.90 であり高い評価を得ている。
(8) 環太平洋大学キャリアアセスメントセンター長としての評価	平成 24 年 3 月	学長から地方の私立大学である環太平洋大学が、岡山県及び全国を上回る就職率 96.06%を達成したことを高く評価された。学生の進路別にキャリア室を編成

		し、支援のシステムを構築したことを評価された。
(9) 環太平洋大学の学長補佐としての評価	平成 24 年 3 月	理事長と学長と理事との意思疎通を図るパイプ役を務めるように指示され、その役割を果たした。大学の経営方針作成や新設学科設立に参画し、マネジメント力を評価された。
(10) 環太平洋大学平成 24 年度前期、学生による授業アンケート	平成 24 年 9 月	「生活の理解」2 コマの学生の授業満足度は 4.00 中 3.8 以上であり、具体的な楽興驚異の実践的な事例と結びつけ実際の授業に役立つとの意見が多かった。
(11) 環太平洋大学平成 24 年度後期、学生による授業評価アンケート	平成 25 年 3 月	「生活科教育法」3 コマの学生の最も高い満足度は 4.00 中 3.77 である。具体的な模擬授業や、児童への発問、評価の褒め言葉などが参考になっていた。
(12) 奈良学園大学平成 26 年度前期 学生による授業アンケート	平成 26 年 8 月	特別活動の指導法（中等）において、学生自身が学習指導要領を読み取る力が付いたと述べている。満足度は 4.00 中 3.83 と高いものだった。特に板書の工夫については 3.92 と高得点である。
(12) 奈良学園大学平成 28 年度後期学生による授業アンケート	平成 29 年 3 月	教育原理(中等)において、学生が教育哲学者を調べて、発表し相互交流する授業を行った。自らの学びが深まったと 90% の学生が指導方法を評価をした。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校全国研究会の総合的な学習の時間の指導助言 「総合的な学習で福祉を取り扱う留意点」 (朝日ヶ丘小学校教員約 30 名を対象)	平成 21 年 2 月	福祉教育で高齢者とののかかわりの授業参観と事後研究を行った。高齢をマイナスにとらえる児童が多いが、ふれあいや探究活動を通して、歳を重ねることの素晴らしさを体感させる取り組みであり、体験を文字化し児童が、自分自身の変化をメタに認知する場面が必要であると指導した。
(2) 兵庫県芦屋市立山手小学校全国発表会総合的な学習の時間の指導助言 「総合的な学習と環境教育」 (全国大会参加者約100名を対象)	平成 21 年 2 月	芦屋川の環境をテーマに、地域住民や専門家と連携した「環境サミット」の公開授業で、能動的に環境に働きかける姿が参加者より高い評価を受けた。保護者や地域住民、行政関係者等が一体となり児童の当事者意識を高めることができた。総合的な学習と国語科の書く力を連携させ、日常的に言語力を育成する重要性を指導した。
(3) 兵庫県河辺郡猪名川町立公立幼稚園長及び校長研修会の講師 「保護者・地域との連携」 (猪名川町管理職及教育委員会職員 60 名を対象)	平成 21 年 2 月	危機管理の視点から保護者の意見や苦情が学校や園の教育活動へ与えている影響を論じた。またそのような社会的背景も考察した。教育活動には「不測の事態」は避けられないが、傾聴する姿勢が不可欠である。クレームに対応する基本姿勢「スピード・面談・誠意」の重要性を述べた。また、組織的に対応し、教訓を継承することの重要性を説明した。

(4) 兵庫県芦屋市立公立幼稚園園長及び主任研修会の講師 「言語活動と幼小連携」 (芦屋市園長及主任約 20 名を対象)	平成 21 年 3 月	新学習指導要領の実施に伴い、今後ともめられる言語活動の重視及び体験的な活動と知識理解との関係について論じた。芦屋市の教育課程基底の枠組みについて指導した。また小学校教育との連携のスタートカリキュラムについて説明した。遊びを学びとしてとらえる指導と評価を提案した。
(5) 兵庫県芦屋市立公立幼稚園研修会全体講師 「幼稚園教育要領の改定と芦屋の特色」 (芦屋市幼稚園教諭約 100 名を対象)	平成 21 年 3 月	幼稚園教育要領の改訂のポイントと、その内容が小学校・中学校の教育内容にどのように継続しているのかを解説した。芦屋市の地域性を全校学力状況調査の結果と結び付けて説明した。比較的学力の高い地域に求められる「心をたがやす保育」の方向を提示した。
(6) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「幼児期における言語活動」 (朝日ヶ丘幼稚園教員約 10 名を対象)	平成 21 年 6 月	5 領域の「言語」に焦点をあて公開保育と事後研究会を行った。豊かな体験を基本とした絵本の読み聞かせを通して、子どもの感性を磨く公開保育であった。体験の言語化を援助する教師の指導について、幼児期から小学校低学年までの幼児児童の発達の特徴と関連付けながら論じた。
(7) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「幼稚園の教育評価と保育内容」 (西山幼稚園教員約10名対象)	平成 21 年 6 月	幼稚園の教育課程の意義と、教育課程には評価が不可欠であることを述べた。さらに教育評価では地域住民や保護者からの声を反映し、次年度へ反映するPDCAサイクルの必要性、外部評価の有効な活用方法を例示し説明した。道徳的な実践力のため言語活動を重視した保育の必要を論じた。
(8) 第 17 回授業実践フォーラム生活科部会講師 「新学習指導要領の言語活動と生活科」 (生活科部会参加者約 40 名対象)	平成 21 年 6 月	生活科の中で言語活動が重視されている。それに伴い一部の実践で「見つける・比べる・たとえる」の「たとえる」ことが強調されすぎ、体験感動・内面の納得を伴わない言葉遊びになる危険性があることを指摘し、「知的な気づき」の重要性を再確認し指導した。
(9) 奈良市立幼稚園教員研修会 「保護者・地域との連携を支える共感」 (生活科部会参加者約 40 名対象)	平成 21 年 8 月	園に苦情や要望を述べる保護者が増加した社会的な背景を述べるとともに、園独特の組織的な弱点と強み分析し、それを活かした保護者対応を指導した。あわせて、幼稚園独特のトラブルを例にして「共感」をロールプレイで提案した。
(10) 兵庫県阪神地区小学校教科等研修会生活科部会講師「生活科における言語活動」 (兵庫県阪神地区の小学校生活科担当教諭150名を対象)	平成 21 年 8 月	新学習指導要領に基づいて講演を行った。提案された生活科のレポートへの指導助言も行った。生活科の活動や体験が、身近な地域を対象に工夫されているが、目標が明確でないことを助言した。
(11) 兵庫県猪名川町教職員研修会講師 「保護者・地域との連携」 (兵庫県猪名川町の教職員約50名対象)	平成 21 年 8 月	社会的な背景とともに、保護者の意見や苦情が学校や園の教育活動へ与えている影響を論じた。教育活動には「不測の事態」は避けられないが、傾聴する姿勢が不可欠であり、クレームに対応する基本姿勢「スピード・面談・誠意」の重要性を述べた。
(12) 平成 21 年度免許更新講習会講師	平成 21 年 8 月	新教育課程で教師として求められる「資

「求められる資質と職務遂行能力」 (岡山県教員40名対象)		質」と「職務遂行能力」について講義をした。年代別に、教員経験年数に伴う、学校の校務分掌の中で果たすべき役割について論じた。特に新任教師が増加している今日、教職10年経験教師はミドルリーダーとして、学校運営に参画が求められている述べた。
(13) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修会講師 「道徳性の芽生えと幼稚園教育要領」 (芦屋市立幼稚園教諭約 10 名を対象)	平成 21 年 9 月	保育参観と指導助言を行った。新学習指導要領の道徳教育重視の流れを受けて、幼稚園での道徳性の芽生えを図ることの重要性を述べた。集団的な体験活動での葛藤や、その後の話し合い活動など、幼稚園としての活動を提案した。
(14) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修会講師 「幼稚園における言語活動と環境構成」 (芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園教諭 10 名を対象)	平成 21 年 10 月	保育参観と指導助言を行った。新学習指導要領の小学校の言語力育成を受けて、幼稚園としてふさわしい学力は何かを提案した。幼稚園でも「話す・聞く」活動を系統的实施する必要性を助言した。
(15) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修会講師 「保育における話し合い活動の指導」 (芦屋市立西山幼稚園等教諭約 10 名を対象)	平成 21 年 11 月	保育参観と指導助言を行った。話し合い活動を通して思考力を育てる事を目標とした公開保育が実施された。子どもの葛藤場面を保育の中で取り上げ、教師が適切な価値の方向性を示すことの重要性を指摘した。
(16) 兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言 「新学習指導要領と授業時間数の増加」 (兵庫県内の教職員約50名を対象)	平成 21 年 11 月	教育課程の編成の基本理念の指導助言をした。新学習指導要領が先行実施されて、授業時数や指導内容の増加など、教員にとって研修の必要性が高くなっていることを助言した。教科書と教育課程とを同一視していることは誤りで、教員が各単元の目標分析をすることを提言した。
(17) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校全国研究発表会 全体会講師 「言語力を育成する授業の在り方」 (全国の教員約450名を対象)	平成 22 年 2 月	授業参観と全体講演をした。携帯電話が子どものコミュニケーションを阻害している実態について話した。携帯電話の弊害を乗り越える正しい言語力を育成するための、授業に求められる話し合い活動について、また対話が成立する学級・学校文化の重要性について提案した。
(18) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「絵本の幼稚園教育における役割」 (芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等教諭10名を対象)	平成 22 年 2 月	保育参観と指導助言を行った。絵本読み聞かせや親子絵本の会の実施に取り組んでいることの意味づけを行った。絵本に親しみ豊かなイメージを持ち、言葉の感覚を養うことを話した。幼児期に培われた言葉が小学校教育に継続されると論じた。
(19) 兵庫県神戸市小学校教科等研修会総会における 生活科講師 「新学習指導要領と生活科の変更点」 (神戸市の生活科担当者約60名対象)	平成 22 年 3 月	新学習指導要領の変更点を説明。算数や理科の指導内容が多く、国語が注目を浴び、生活科の影が薄くなっているが、体験に支えられた納得・実感・本音の理解が重要である。小1プロブレムを解消のため、小学校入学時のスタートカリキュラムが重要と提案した。
(20) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「幼児期にふさわしい言葉の指導」 (芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等教諭 10 名を対象)	平成 22 年 5 月	4・5歳児の「遊びの中で言葉の力を育む」を狙いとした保育参観。5領域は、幼児期に育てたい幼児自身の発達の側

		面から取り上げたものであること。各領域の内容は総合的に指導するものであり、幼児を取り巻く環境を構成する視点でもある。幼児の活動は「言葉」という領域に偏った指導は好ましくないことを例示し指導した。
(21) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「子どもの人間関係を豊かにする指導」 (芦屋市立西山幼稚園等教諭10名を対象)	平成 22 年 5 月	4・5 歳児の保育を参観し指導助言を行った。友達や教師と安定した人間関係が築かれることにより情緒が安定すること。幼児が「友達」を理解する過程やその中で育つ他者を思いやる気持ちについて話した。また、そのための保育者の役割について論じた。
(22) 兵庫県芦屋市幼稚園教育課程研修会講師 「幼稚園と小学校のカリキュラムの連続性」 (芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等教諭10名を対象)	平成 22 年 7 月	小学校のような文字指導がなくても、日常生活の中で文字を読み書きできる現状を認識した保育が重要であることを話した。幼児期の小学校形式の一斉指導は課題があると指摘した。幼児期の言葉は知的能力の指標としてとらえがちであるが、日々の豊かな経験に基づく総合的な発達の中で言葉が育つことの重要性を指導した。
(23) 兵庫県加古川市教頭研修会講師 「地域・保護者との連携と教頭の役割」 —信頼される学校園をめざして— (兵庫県加古川市立学校教頭等50名を対象)	平成 22 年 8 月	信頼される学校園づくりには、まず子どものことを第一において、何をどのように解決するべきかを保護者とともに考えることが大切であることを強調した。いわゆる「モンスターペアレント」という呼称を持つ否定的な意味を取りあげて信頼関係を構築するための具体的な方策を助言をした。学校園で明日からでも取り組める電話記録メモの改善、苦情処理シートの迅速な処理のための校内組織体制づくりについて述べた。
(24) 奈良市小学校教員夏季研修会講師 「地域・保護者と連携する教師の在り方」 —保護者と信頼関係を築くために— (奈良市立小学校教諭等30名を対象)	平成 22 年 8 月	奈良市内小学校で起きている具体的事例を取り上げながら、ロールプレーで演習を行い、問題解決への過程を示した。保護者の苦情をや訴えを聞き取り、その裏にある思いや願いを読み取ることの重要性を指導した。学校ができることを明確にして対応することが不可欠であると話した。
(25) 兵庫県芦屋市山手小学校校内人権教育研修会講師 「男女平等教育の歴史と学校のジェンダー」 (芦屋市立山手小学校教員 20 名を対象)	平成 22 年 8 月	人権教育の男女平等教育に係る授業実践の基本的な理念について指導助言を行った。ジェンダー問題の歴史及び男女平等教育の現状さらに学校教育における課題について話した。特に教育課程を編成にあたり、意図的計画的に位置付け学校の教育活動全体を通してを男女平等教育を推進することや教師自身の研修が重要であることを提案した。
(26) 兵庫県阪神地区小学校教科等研修会生活科部会講師 「心豊かにたくましく生きる力を育む生活科の実践」 (兵庫県阪神地区生活科担当教諭 200 名を対象)	平成 22 年 8 月	伊丹市と芦屋市の幼稚園と小学校の連携をねらいとした実践の発表があった。両者の連携はとするとイベントになりがちなので、双方の教育課程に位置付け継続的に関わりを持つことを助言した。講演では、小学校低学年における教科横断的・総合的な指導の必要性を強調した。

(27) 兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言 「教育課程と総合的な学習の時間」 (兵庫県小学校教員 50 名対象)	平成 22 年 11 月	生活科及び総合的な学習の時間の単元構成について指導助言した。総合的な学習の時間が新学習指導要領で時間数減となるが、それは意義やねらいの後退ではないことを論じた。従来の総合的な学習の時間の問題点である単なる体験活動を乗り越え、課題解決的な学習に高める必要性を説明した。
(28) 全国女性校長会近畿地区大会分科会指導助言 「学校運営と女性校長の指導性」 分科会テーマ —新しい時代を拓く学校経営と校長の指導性—「家庭・地域・学校の連携と、学校運営への協働・参画」 (近畿小中学校の女性校長 50 人を対象)	平成 22 年 11 月	女性校長の数が全国的に減少する中、女性の特性を生かした学校運営の在り方を話した。公的な学校で常識と考えられている様々な習慣が、世の中の動きに合わなくなっていることを自覚する必要性を指導した。細やかな配慮などは、女性校長の特質であるかのようなステレオタイプを乗り越え学校経営することを示した。
(29) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修指導助言 「豊かな人間関係を育てる保育」 (芦屋市立西山幼稚園教諭 10 名対象)	平成 23 年 1 月	4・5 歳児クラス保育を参観し指導助言をした。道徳性の芽生えを培うには、幼児が他の人と関わる中でその存在に気づき相手を尊重することが大切であること。また、身近な動植物へ親しむことにより豊かな感情が育つことを話した。信頼感や思いやりは一直線に育つのではなく、葛藤やつまづきを体験を乗り越えて育つことを助言した。
(30) 兵庫県芦屋市教育研修所教員研修会講師 「保護者・地域との連携をはかるために」 (兵庫県芦屋市立小学校・幼稚園教諭等 20 名対象)	平成 23 年 2 月	学校園と地域社会・保護者との関係に変化が起きた社会的な背景を、具体例を挙げながら解説した。社会や国民全体の権利意識の高揚や保護者の経験した学校生活などが、要因になり、学校の教員の意識改革も不可欠であることを説明した。
(31) 兵庫県芦屋市教育委員会指定研究会講師 「自分らしさを発揮し友だちと響きあう幼児」 (芦屋市幼稚園教員約 150 人を対象)	平成 23 年 6 月	4・5 歳児の自我の発達と、他児とのコミュニケーション力の発達に着目して、遊びの中での子どもの心の葛藤とひきだす保育の意義について話をした。また、児童が葛藤し心を成長させるために保育者の役割と環境構成のあり方が重要性であり、幼児期の道徳性の芽生えを図ると指摘した。
(32) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修指導助言 「異年齢交流と協同学習①」 (芦屋市立幼稚園教諭 10 名対象)	平成 23 年 6 月	4歳5歳とも単学級の園が、その利点を生かして、日常的に異年齢交流を実施している。特に体を動かして異年齢で教え合う昔の遊びを活用して、5歳児に責任ある行動やおもいやりの心を育むことの意義を論じた。
(33) 岡山県総合教育センター研修講師 「新しい生活科の具体的な授業づくり」 —児童の気付きを深めたり広げたりするための、支援の在り方— (岡山県内 30 人の生活科担当教員対象)	平成 23 年 8 月	児童の気付きとは何かを学習指導要領の解説書を基に説明した。子どものシートを用いて、「気付きを深める声掛け」「気付きを広げる声掛け」を演習した。広げ深める声掛けも。あくまで単元全体や本時の狙いに沿わないと一般的抽象的なものになると論じた。
(34) 「あしや教育フェスティバル」生活科部会指導助言 「若い先生でもできる生活科」 (芦屋市生活科担当の教員 20 名を対象)	平成 23 年 8 月	2年生「私の町の素敵をおしえよう」の実践の指導助言。若い教師が増え、生活科の狙いや学習スタイルが理解できず、教科書をなぞる授業が増加している。生

		活科が設置された社会的な背景や理念について話した。教員の若返りが進む学校現場で、生活科や総合的な学習の時間の指導が困難になる危機を指摘した。
(35) 京都中央看護専門学校研修会講師 「主体的に学ぶ学生集団作りについて」 (看護師養成専門学校の教員 50 人を対象)	平成 23 年 9 月	看護学校の授業は基本は40人以下で実施されており、個別の対応に配慮はされている点は評価した。しかし、授業が講義や実習にしても一方的なものが多い。双方向の授業であっても、教師と学生が1対1で双方向に取り組んでいるにすぎない。学生を集団として学ばせる学習集団の育成が遅れていることを指摘した。
(36) 兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言「新教育課程と総合学習」 (兵庫県小学校教員 40 名対象)	平成 23 年 11 月	兵庫県の各地から総合的な学習の時間のレポートが30本報告をされた。3年生では兵庫県が自然体験補助金を出しているため、安易な体験あって学びなしになると指摘した。自然体験だけでなく、振り返る学習とセットで取り組む重要性を指摘した。
(37) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修指導助言「異年齢交流と協同学習②」 (芦屋市幼稚園教諭 10 名対象)	平成 23 年 11 月	単学級の利点を生かして、日常的に異年齢交流を実施している。特に体を動かして異年齢で教え合う昔の遊びを活用し、5歳児に責任やおもしろいの心を育むことを狙いとするとともに、子どもの協同学習に焦点を当て子どもの保育にあたるという姿勢を評価した。園の方針の共通理解が重要であることを指導助言した。
(38) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「自分らしさを発揮し友だちと響きあう幼児」 (芦屋市幼稚園教諭 6 名対象)	平成 24 年 1 月	2月の生活発表会の表現活動の保育を参観した。保護者に見せる作品に完成するため、物語の主題とずれた箇所、子どもの表現を無理に引き出そうとしている教師の意図の誤りを指摘した。幼児の意識の流れに合わず、生活発表会の流れが重視する危険性を論じた。
(39) 兵庫県芦屋市立潮見中学校 総合的な学習の時間の講師 「進路選択のためのキャリア教育」 (芦屋市立潮見中学生 120 名対象)	平成 24 年 2 月	「今の中学校2年生に伝えたいこと」という「生き方」をテーマに講演会を行った。2年生は中学校の中で中だるみに時期であり、進路についてまだ確たる意識付けがない時期である。この時期の生徒に、大学で学ぶ基礎的な学力と、夢を持ち続ける大切さを話した。
(40) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園 園内研修講師 「教育目標を日常の保育に反映させる」 (芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園教諭 6 人を対象)	平成 24 年 5 月	進級や入園間もないクラスでの保育を参観した。4歳児は園の決まりを身につけ。5歳児は年長としての自覚を育成している時期である。この時期に、園としての教育目標を各保育にどのように反映するかを、具体的な保育を事例に指導した。
(41) 平成 24 年度免許更新講習会講師 「今求められる資質と職務遂行能力」 (小学校教員 40 名対象)	平成 24 年 8 月	新教育課程を実践するうえで教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」について講義をした。教員経験年数に伴う、学校の校務分掌の中で果たすべき役割について論じた。特に新任教師が増加している今日、ミドルリーダーとして、学校運営に参画することが求められていることを述べた。また、学校としてのチームワークの重要性が今後ますます求められることを指摘した。

(42) 「あしや教育フェスティバル」生活科部会 指導助言 「国語科の書くことと生活科の関連」 (芦屋市教員 15 名対象)	平成 24 年 8 月	生活科と国語科と合科的に扱った指導実践例の報告があった。国語科指導で事実を見る目や書く力は育っているが、自分との関係性において植物の成長をとらえる弱さを指摘した。
(43) 兵庫県芦屋市立岩園小学校人権教育研修会講師 「男女共生教育と教育実践」 (岩園小学校の教員 30 名を対象)	平成 24 年 10 月	男女共生教育について研修会の講師を務めた。男女共生教育の歴史とともに、道徳のみでなく、各教科と連携して、学校教育全体で扱うべきと助言した。国語科の言葉を取り上げ、特に隠れた潜在的なカリキュラムにへの留意を指導した。
(44) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園 園内研修講師 「異年齢交流と協同学習③」 (朝日ヶ丘幼稚園の教員 6 人を対象)	平成 24 年 11 月	異年齢交流での協同遊びと、その後の話し合い活動の参観。話し合い活動では、友だちの良い点を発言させ、人間関係を気付いていた。さらに、聞くという姿勢を徹底的に指導されていることを評価した。
(45) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 (兵庫県教員 40 名対象)	平成 24 年 11 月	実践発表の指導助言を行った。総合的な学習の体験の部分クロウズアップされ、探究の部分が消えていることに警鐘をならした。総合も設立から年月を重ね、活動がパターン化している傾向があると指導した。
(46) 兵庫県芦屋市立岩園小学校人権教育 校内研究会講師 「国語教育で男女共生教育」 (小学校教員 20 名対象)	平成 25 年 1 月	男女共生教育の4年生の授業の事後研修会を行った。国語の男子や女子を形容する形容詞や形容動詞に焦点を当てて、児童がもっているステレオタイプの考え方を、学校教育でどのように指導するかを話した。男女共生教育を巡る隠れたカリキュラムを論じた。
(47) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 (兵庫県教員 40 名対象)	平成 25 年 11 月	実践発表を取り上げ指導助言を行った。東日本大震災から防災教育が教育課程の中に新たに取り込まれる事例が増えた。総合的な学習や特別活動ので実践が増加したが、各教科とも連携し意識的に教育課程に組み込む必要性を助言した。
(48) 神戸市立小学校生活科部会研究会 講師 「生活科でいのちを大切にすること」 (神戸市幼稚園・小学校の教員 60 人を対象)	平成 26 年 1 月	1 年生の成長単元の授業参観と講話を行った。生活科の成長単元は児童の自尊感情を育み周囲に感謝の気持ちをもたせることがねらいであること。これは命を大切にすることに繋がることをアンケート調査を基に説明をした。
(49) 兵庫県芦屋市立小槌幼稚園研究会講師① 「心豊かに感じ、共に育ちあう幼児を目指して」 (小槌幼稚園教員 10 名を対象)	平成 26 年 5 月	年長と年少の全クラスの保育参観と指導助言を行った。入園して 1 か月の年少児に年長児が積極的に関わるための環境設定について述べた。
(50) 兵庫県芦屋市立小槌幼稚園研究会講師② 「自分らしさを発揮し人と関わる力が育つ援助を考える」教員の在り方 (小槌幼稚園等教員 10 名が対象)	平成 26 年 6 月	1 か月経過後、再度保育参観を行い、幼児の人と関わる力の伸長と、教員の指導の在り方の相関性について述べた。4 歳児 5 歳児全クラス保育参観を行い、具体的な教師の振る舞いや声掛けが、保育に及ぼす影響について分析した。
(51) 「あしや教育フェスティバル」生活科部会 指導助言 入学直後の「学校探検」の意味について (芦屋市教員 20 名対象)	平成 26 年 8 月	生活科を通して1年間の幼・小の交流を教育課程に位置付ける際の留意点について話した。近年、幼小の交流とともに、保育所との連携を提案した。スタートカ

		リキュラムは、幼保ともに対象であると確認した。
(52) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 (兵庫県教員 50 名対象)	平成 26 年 11 月	兵庫県下各地の実践発表20件に指導助言を行った。生活科や総合学習は地域に根差したテーマを採り上げて、児童生徒が課題解決をするという学びのスタイルは定着したが、生活科は教員の指導による取組の格差、総合学習は学校行事への準備の時間として安易に活用される課題を論じた。
(53) 兵庫県芦屋市保・幼・小合同研修会講師（1 回目） 芦屋市立精道保育所保育公開助言 (保育所・幼稚園の教員 20 名を対象)	平成 27 年 5 月	保育参観を行った後に、保育内容が小学校にどのようにつながるかについて、保育の具体的な内容を事例にして説明した。保育所と幼稚園の教員合同の研究会は意義があった。
(54) 兵庫県芦屋市立打出幼稚園園内研修講師 (幼稚園教諭 10 名対象)	平成 27 年 5 月	保育参観後にそれぞれの保育について助言した。クラス替え間もない時期に学級づくりの方向や、保育案の目標と保育の内容が明確でないと、教員の言葉かけが有効でなくなる等を助言した。
(55) 兵庫県芦屋市幼・保・小連携研修会講師 2 回目 (保育所・幼稚園・小学校の教員 60 名を対象)	平成 27 年 7 月	スタートカリキュラムの必要性を、生活科の教科書の内容を具体的に示し、保育所保育指針と幼稚園教育要領と生活科の学習指導要領を比較した。3つの目標や活動内容が似通っていることを具体的に理解できた。
(56) 兵庫県芦屋市保・幼・小合同研修会 芦屋市立精道幼稚園公開保育助言 (芦屋市保育所・幼稚園・小学校教員 20 名対象)	平成 27 年 9 月	「からだづくり遊び」をテーマに公開保育を行った。保育所や幼稚園の保育の見方について話し合った。小学校の教師には、保育を学び認識することが困難なので、参観の目標と視点について意見交流を行った
(57) 兵庫県芦屋市立打出幼稚園園内研修指導諸言 (幼稚園教員 10 名対象)	平成 27 年 10 月	豊かな心と人間関係作りを育むことを目標として公開保育を行い、指導助言を行った。特に道徳性の自立の時期を意識して保育することの重要性を論じた。
(58) 兵庫県芦屋市立精道幼稚園園内研修指導助言 (幼稚園教員 10 名対象)	平成 27 年 10 月	「さかさま運動会」を公開保育で参観した。健かな身体づくりが生活的な自立の基礎となることを、5 領域と関連付けながら問題提起をした。
(59) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校生活科研修会指導助言 (小学校教員 10 名対象)	平成 27 年 10 月	体育の4年生ポートボールで共同的に活動し、学習における仲間づくりをする公開授業を参観し指導助言を行った。
(60) 兵庫県芦屋市立打出幼稚園園内研修指導諸言 (芦屋市幼稚園教員 30 名対象)	平成 27 年 10 月	「豊かな心」の指定研究会であった。特に人間関係に焦点を当てて、保育を実施した。教員の声掛けを提案型にして、園児の自主性を促す保育を助言した。
(61) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 (兵庫県教員 50 名対象)	平成 27 年 11 月	総合学習のレポートを基に指導助言を行った。特に総合的な学習が地域再発見の契機になるが、それ以後の地域づくりに還元されていないことを指摘した。

(62) 兵庫県芦屋市指定研究会講師 「保・幼・小の連携」 (保育所、幼稚園、小学校教員 100 人を対象)	平成 27 年 11 月	スタートカリキュラムの具現化について、公開保育と講演を行った。就学前後のカリキュラムを幼・保側と小学校側でできることを具体的に示し、滑らかな接続を図ることを提案した。
(63) 兵庫県芦屋市立山手小学校 生活科校内研究会指導助言 「自分でできるよ」一家族にっこにこ大作戦— (小学校教員 30 名対象)	平成 27 年 11 月	2年生の家族単元の授業参観後に指導助言をした。成長に係る単元は、家庭事情により児童の活動が影響を受けるため、家庭との連携が不可欠であること、お手伝い等の家庭の活動は継続させ内面化させる手立てが重要であることを助言した。
(64) 兵庫県芦屋市立精道保育所① —保育所と小学校連携のカリキュラム— 指導助言 (保育所職員 30 名対象)	平成 27 年 12 月	5歳児の保育の参観後、文科省が示した連携視点「自己調整力」「表現力・思考力」「伝え合う力」の3点について、子供の育ちの現状を分析し、今後求められる指導を提言した。
(65) 兵庫県芦屋市立精道保育所② —保育所と小学校連携のカリキュラム— 指導助言 (保育所職員 30 名対象)	平成 28 年 1 月	前回の助言に基づき、保育を改善した結果を検証した。同じ5歳児クラスの参観を行い、「自己調整力」は育成されているが「伝え合う力」が十分でないことを指摘した。指導者側の目標意識の低さや保育環境の見直しを提言した。
(66) 「幼児期と児童期の円滑な接続について考える」 芦屋市内合同研究会講師 (芦屋市の公立幼稚園・保育所及び私立幼稚園・保育所の教員と保育士 80 人を対象)	平成 28 年 3 月	5歳児保育後期に求められる保育課程について説明した。形ばかりの保育課程でなく、指導者が目標を意識した保育を実施することが重要であると提言した。
(67) 「心も体もしなやかでたくましい児童の育成」 —接続期カリキュラムを視点に—指導助言 (芦屋市立小槌幼稚園の教諭等 20 人対象)	平成 28 年 5 月	4歳児・5歳児の伝え合うをテーマにした保育参観後、ねらいと発問について助言した。また、心の成長の中で特に自己調整力が、小学校1年生の学校生活への適応に影響を与えることを指導した。
(68) 「学校生活につなぐ学びの芽生えを育む」 のテーマの指導助言 (芦屋市立精道幼稚園教諭等 20 人対象)	平成 28 年 6 月	4歳児・5歳児の運動遊びの保育参観後、小学校入学後の学習の姿勢や鉛筆等の正しい持ち方が、幼稚園の運動遊びを基礎に育つことを助言した。
(69) 芦屋市公立・私立保育所合同研修会講師 「小学校期へのなだらかな成長支援」 (対象者：芦屋市公立・私立保育所教職員 約 220 名)	平成 28 年 6 月	乳児期から幼児期までの人間関係の育ちが小学校1年生の精神的な自立にどのようなかわるかをベネッセの2016年縦断調査の報告を例示しながら説明した。特に入学後直後の学習意欲が年長児の生活習慣や言語力に影響されること、年長児の言語力が年中児の調整力に影響されることを根拠を挙げて論じた。
(70) 芦屋市立精道保育所市内保育公開研修会指導助言 「接続期の保育所の保育について」 (精道保育所の教職員等 30 名対象)	平成 28 年 6 月	4歳児と5歳児の異年齢交流の保育参観後に指導助言をした。生活の場である保育所は、言語的な面で学習用語を獲得するのが困難な可能性が高いことと、解決の方策を示した。
(71) 兵庫教育文化研究所、総合的な学習の時間 研修会指導助言 兵庫県教職員約 35 名	平成 28 年 8 月	神戸市中央区を4つのコースに分けてフィールドワークをして情報を収集し、神戸市観光大使として意見交換後、指導助言を行った。

(72) 兵庫県芦屋市教育フェスティバル総合学習・生活科指導助言 (兵庫県芦屋市教職員約 20 名対象)	平成 28 年 8 月	生活科と総合的な学習の実践発表と指導助言。地域のだんじりと、国語の言語活動との関係を総合的に扱った発表。教員が若返り、総合や生活の意味が受け継がれていないと感じたため、歴史的な経過を指導した。
(73) プール学院大学教職員研修会講師 (プール学院大学教員 30 名対象)	平成 28 年 9 月	文部科学省の課程審査会の新たな書式について解説を行うとともに、平成 30 年度の再課程審査の意義について説明を行った。さらに教育学部の教員に求められる資質や能力についても論じた。
(74) 芦屋市精道幼稚園市内研修講師 (芦屋市幼稚園教員等 90 名対象)	平成 28 年 11 月	で 4・5 歳児の公開保育の後、指導助言。運動遊びの中で身につける規範意識の芽生えや、思考力や話し合う力の育ちが小学校低学年のどのような能力の基礎になるかを具体的スタートカリキュラムとして論じた。
(75) 幼稚園・小学校接続期のカリキュラム作成 (芦屋市立幼稚園教員等 100 名対象)	平成 28 年 11 月	スタートカリキュラムの必要性和新教育要領の方向性を文科省の新たな答申を基に解説をした。小学校で求められる能力を幼稚園の遊びの中で環境を通して具体化する視点についても論じた。
(76) 奈良県三郷町立南畑幼稚園指導助言 (幼稚園教員 6 名対象)	平成 29 年 1 月	3 歳児保育を参観し、事後研修会を行った。3 歳児の言語の発達と思考力育成に与える影響について、人的及び物的な環境構成について指導助言を行った。園の教育課程についても解説した。
(77) 芦屋市精道幼稚園園内研修講師 (幼稚園教員 6 名対象)	平成 29 年 2 月	言語力を育成するための、新たな 4・5 歳児の遊びの開発の実践例の検証を行った。言語力育成の基盤として幼稚園では集中して聞くことや多様性を認める学級文化が求められることを論じた。
(78) 芦屋市精道幼稚園園内研修講師 (幼稚園教員 6 名対象)	平成 29 年 6 月	「学校生活に繋がる体づくりについて」をテーマに 4・5 歳児の保育実践例の検証を行った。体幹を鍛えることが学習効果に及ぼす影響を論じた。
(79) 第 56 回学校保健ゼミナール講師 (全国の養護教諭 400 名対象)	平成 29 年 8 月 (東京ニッショーホール)	学校におけるクレーム処理と保護者対応のポイントというテーマで講話した。演習も入れたのが好評であった。養護教諭だけでなく教育行政側の問題点も指摘した。
(80) 芦屋市立伊勢幼稚園園内研修講師 (芦屋市幼稚園教員約 30 名)	平成 29 年 9 月	阪神幼稚園教育研究会の事前研修であった。年長児と年少児がペアになって、体づくり遊びを作り出す保育公開と助言を行った。
(81) 兵庫県国公立幼稚園・こども園教育研究会全大会講師 (兵庫県幼稚園等教員約 300 名対象)	平成 29 年 11 月 芦屋市保健福祉センター	「幼児期の教育を小学校につなげて一資質・能力を育成する教育課程」というテーマで、須幽学前までに育成したい 10 の力について論じた。
(82) 兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言「新教育課程と総合学習」 (兵庫県教員 50 名対象)	平成 29 年 11 月 西宮市立浜脇中学校	新学習指導要領で。総合的な学習の時間で育てる力が「探究」とであると示され方向性が鮮明な実践が多かった。学校全体計画が完成している学校では、マンネリ化の傾向も見られ、地域と積極的な連携を促した。

(83) 芦屋市精道幼稚園園内研修講師 (幼稚園教員 6 名対象)	平成 29 年 11 月	4歳児は体づくり遊びを通して、話し合う活動、5歳児は言葉イメージ実践をして、後の指導助言を行った。
(84) 奈良県公立学校養護教諭研修会講師 (奈良県養護教諭 100 名対象)	平成 30 年 2 月	保護者のクレームが起きる社会的な背景と、現在の学校業況を分析して述べた。養護教諭の業務の特徴に合わせて、クレーム処理をする際に、学校組織の在り方と養護教諭の役割について述べた。
(85) 養護教諭フォーラム研究会講師 (関西地区養護教諭 300 人対象) テーマ 「保護者クレームにおける養護教諭の役割」	平成 30 年 7 月 アフィーナ大阪	保護者クレームが現在第3ステージに至っていることを説明し、学校園における養護教諭の位置づけや役割についても確認した。子どもを評定しない養護教諭だからこそ可能である保護者への共感や、他の教諭に対してのサポートを話した。
(86) 京都市養護教諭研究会講師 「保護者の気持ちに寄り添うためには一養護教諭としての保護者対応のポイント」	平成 31 年 1 月 京都市総合教育センター	京都市の養護教諭のすすんだ取り組みに学びつつ、今後の行政との連携の重要性を提案した。管理職と養護教諭が、同じ時点で学校全体を見る必要性を論じた。
5 その他		特になし
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 資格、免許 (1) 小学校教諭 2 種免許 (2) 小学校教諭 1 種免許 (3) 小学校教諭専修免許 (4) 修士 (教育学)	昭和 52 年 4 月 平成 5 年 4 月 平成 10 年 3 月 平成 10 年 3 月	昭 52 め第 2263 号 (京都府教育委員会) 平 5 小 1 第 22 号 (兵庫県教育委員会) 平 9 小専第 2035 号 (大阪府教育委員会) 大阪教育大学 実践教育学専攻 証第 20 号 論文題目: 「生活科新生の試みー新たな防災教育を中心にー」
2 特許等		特になし
3 実務の経験を有する者について特記事項 (1) 国立大学法人兵庫教育大学と株式会社ベネッセコーポレーションとの協同研究総括チーム委員	平成 21 年 4 月～ 平成 22 年 3 月	「活用型学習」の指導方法及び評価方法等の研究を行った。本研究では習得・活用・探求の意味づけを行い、各教科ごとに活用型学習の開発を行った。各教科に属さず、全体を総括する評価や指導の研究を行った。
(2) 兵庫県芦屋市学力向上推進委員会委員	平成 21 年 4 月 ～平成 22 年 3 月	平成 19・20 年度の全国学力状況調査の結果を受け、市内の学力向上のためのシステムを提案することを目的とする学識経験者、小中の校長、教諭、行政関係者等 10 名により構成された。学力向上には、研究会の充実と小中連携が不可欠であることを提案した。
(3) 兵庫県猪名川町教育委員会「猪名川の教育・点検・評価報告書 (平成 19～29 年度対象)」作成協力者	平成 21 年 9 月 ～平成 30 年 3 月	猪名川町教育委員会学校教育の各項目について目標達成度・今後の課題について、外部委員学識経験者として点検評価を行った。特色ある学校づくりを目指し今後の 5 年間にわたる教育基本構想の基盤となるもので、評価報告書は公開されている。

(4) 兵庫県猪名川町教育基本計画策定委員	平成 22 年 5 月 ～平成 23 年 3 月	改定教育基本法後の「兵庫教育策定プラン」に基づき 10 年間の教育のプランを策定。教育の振興方針と施策の体系を示し、教育振興を図るための基本計画を策定。委員は学識経験者、保護者、学校関係者。
(5) 兵庫教育大学ベネッセ教員育成研究奨学生 選考委員	平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月	ベネッセコーポレーションが兵庫教育大学の教職大学院で学ぶ学生に対して研究助成を行い、その奨学生の選考を行う。毎年当初に計画書を審査し、年度末にその成果を提出発表する。
(6) 兵庫県立芦屋高等学校の学校評議員及び学校関係者評価委員	平成 21 年 4 月～ 現在 28 年 3 月	学校評議員及び学校関係者評価委員を 4 年間勤めた。学校行事及び学力向上研究会等に参加し、学校評価点検を実施し、保護者地域等に公開した。委員は保護者、地域住民、学識経験者、学校関係者など 8 名で構成。
(7) 三田市教育振興基本計画検討委員会委員	平成 23 年 6 月～平成 24 年 9 月	三田市民や保護者・学校関係者・学識経験者を含む 10 名で委員会は構成されている。副委員長として、委員長を補佐し会の運営にあたった。教育基本計画は、三田市の今後 10 年間の教育の方向性を検討する基盤案であり、その作成に尽力した。
(8) 兵庫県猪名川町いじめ問題対策審議会 委員長	平成 27 年 9 月～ 現在に至る	猪名川町保護者、学校関係者、学識関係者等 7 人で委員会は構成され、委員長を務める。猪名川町で発生した重大事例について基本的考えや対応等について研修と対応等を審議した。
(9) 奈良県三宅町総合教育会議オブザーバー	平成 27 年 10 月～ 平成 29 年 3 月	三宅町教育振興計画の代わりとして教育大綱を設定する会議に、学識経験者として継続的に参加して有益な意見を述べた。
(10) 奈良県広陵町総合計画後期基本計画策定 懇話会委員	平成 28 年 5 月～平成 29 年 2 月	広陵町の町・人・仕事等についての戦略を町民・行政関係者、学識関係者等 20 人前で委員会は構成され、人口増を図るための町づくりにを論議した。
4 その他		
(1) 京都光華女子大学における役職 ・短期大学部こども保育学科広報委員	平成 20 年 4 月～ 平成 21 年 3 月	幼稚園と保育所との連携を図るスタートカリキュラムについて生活科との関連に重点を置いて広報活動を行った。
(2) 環太平洋大学における役職 ・次世代教育学部学級経営（教育経営）学科長 平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月 ・教職センター長 平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月 ・キャリアセンター長 平成 23 年 4 月度～平成 25 年 3 月 ・学長補佐 平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月	平成 21 年 4 月～25 年 3 月	次世代教育学部学級経営（教育経営）学科の学科長を 4 年間勤めた。学科長 2 年目に教職センター長を兼務し、1 期生を卒業させ、約 70% の学生が教育関係への進路を確保した。さらに平成 23 年から 2 年間は、教育経営学科長とキャリアセンター長、学長補佐を兼務した。卒業生の進路は、毎年全国平均を上回り、就職に強い大学としての社会的評価を築いた。学長補佐として事務職員と教員の関係の強化に努め、大学運営の要としての存在だった。

(3) 奈良学園大学における役職 ・人間教育学部長 平成 26 年 4 月～現在に至る ・キャリアセンター長 平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月 ・スポーツ振興委員長 平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月	平成 26 年 4 月～ 現在に至る	人間教育学部学部長兼キャリアセンター長として、学部の要を担っている。人間教育学部長として文科省に申請したカリキュラムの適切な実施に尽力し、平成 30 年度からは定員を 30 名増加し、専攻を中等数学と音楽を増加した。教育内容では、特に若手教員の教育力の向上に尽力している。 キャリアセンター長として、キャリア授業の内容の充実を図り、教員と職員の連携を強め、就職率向上に尽力している。第 1 期生の就職状況は、教師、一般企業とも好成績を挙げた。
--	-------------------------------	---

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(1)「言語力」を育てる授業づくりー新学習指導要領対応ー	共	平成 21 年 9 月	図書文化 全 157 頁	学習指導要領の改訂示された言語力の重視の意義と各教科における取組について論じたもの。 A 5 版 編者：梶田叡一・甲斐睦朗 共著者：梶田叡一・甲斐睦朗・加藤明・吉川芳則・棚橋尚子・岩田一彦・清水静海・角屋重樹・松田智子・琉田直・高橋美由紀・新富康央 （担当：P, 162～167 生活科の部分を単著） 生活科の言語力育成の部分を担当執筆。生活科は体験の言語化が重要になる。具体的には保育所幼稚園の年長から小学校の入門期において国語科の「話す・聞く」領域と連携しながら系統的に、生活科のスピーチを取り組む過程を紹介した。ものごとをたとえたり比較したりして，それらを言語化して表出することにより，気づきの質が高まることを提示した。これらは保育所や幼稚園の5歳児後半でも取り組む必要があることを強調した。そして，文字化したものを，仲間と交流することにより，異なった感じ方に触れ，再度自分の気づきを深めることができるという過程も提案した。
(2) 教育フォーラム[46] ー言葉の力を育てるー	共	平成 22 年 8 月	金子書房 全 146 頁	新学習指導要領に基づき、言語力育成提案。 A 5 版 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・伊崎一夫・鎌田首治朗・増井眞樹・勝見健史・汐海治美・谷本寛文・中島繁雄・米田豊・浅田匡・松田智子・他 13 名 （担当：P, 136～146 幼児期の言葉部分を単著） 「幼児期にふさわしい学力を考えるー言語力の育成を通してー」をテーマに言葉を中心にした幼稚園の教育課程について論じた。言語の役割として伝達としての機能と思考力の機能の二つがあること、年長児における合意形成を目指した言語活動の経験が自己をコントロールする力や思考力を身につけることを事例を挙げながら論じた。また幼児期につけたい言葉の力として，その特徴と獲得させたい基本的な語彙を幼児の認識力と関連付けながら述べた。また、幼稚園4歳児と5歳児の言葉の指導カリキュラムも紹介した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(3) 不登校生支援ハンドブック	共	平成 22 年 12 月	学研エディケーショナル 全 207 頁	不登校生を支援するために書かれた，学校の教師とスクールカウンセラーのための著作である。具体的な事例を挙げ，その対策を述べている。 B 5 版 監修：近藤靖弘 共著者：杉村省吾・富永良喜・本多修・小谷一良・大橋節子・勝田麻津子・倉光修・斎藤文夫・内田伸子・新井肇・亀田憲治・松田智子他 9 名） （担当：P, 12～19 第 1 章 1 節 校内連携部分単著） 不登校生に対応する際に，担任教師が個人的に対応するのではなく学校がチームとして対応する必要性を論じた。中学校では教科外の特別活動や総合的な学習を学年単位で行うので，不登校を乗り越えるために，校内の意識を変革する必要性を論じた。担任個人の対応から校内チームで不登校生に対応することにより，その数を激変させた具体例を挙げながら分析した。また，生徒と年齢の近い学生ボランティアを教科外の特別活動や総合的な学習の時間に活用する必要性を論じた。
(4) 教育フォーラム[47] ーこころを育てるー	共	平成 23 年 3 月	金子書房 全 150 頁	心を育てることの意味と，どのような指導が必要であるかについて論じたものである。 A5 版 監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・渡辺満・松田智子・鎌田首治朗・山本美紀・中村哲・大野光二・高橋真理・江淵弘明・蔵あすか・中家淳悟・増尾慶裕 （担当：P, 38～47 総合的な学習で心を育てる部分を単著） 総合的な学習の時間などの教科外活動で心を育てるための単元構成の基本について述べた。探求課題を設定する際には，教師の指導性ととも児童生徒の中の必然性が必要であることを論じた。教科外活動が心を育む根拠として，その活動形態が協同的な集団学習であることや，体験を通してなすことにより学ぶ学習スタイルを具体例とともに例示した。さらに地域住民のニーズを取り上げて課題とすることが多いため，地域全体の振興に役立ち，地域として子どもの心を育てる契機となると提案した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(5) 次世代の教職入門	共	平成 23 年 5 月	大学教育出版 全 297 頁	教員の資質向上と研修が求められる社会的な背景を教育基本法等の改正や学習指導要領の改訂と関連付けながら論じたものである。 A5 版 編者：中田正浩 共著者：鎌田首治朗・中田正浩・松田智子・大野光二・山本正・大石隆夫・中田律子・伊崎一夫・住本克彦・杉田郁代・筒井愛知 （担当：P, 61～102 第 3 章「教員の資質向上と研修」、4 章「教員の身分と服務」部分を単著） 教員の研究と教師の身分と服務の部分を担当執筆した。教員研修については、初任者研修・大学院修学研修・10 年目研修・指導改善研修等について意義と現状について述べた。教員の身分と服務については、地方公務員法や教育公務員特例法を基にしながら、具体的な事例を挙げて論述した。将来教員になる者にとって不可欠である、職務上の義務や身分上の義務については、過去の判例を提示しながら教員としての服務の特徴を示した。
(6) 教育フォーラム[48] —国際教育の展望と課題	共	平成 23 年 8 月	金子書房 全 158	子どもに真の国際性を育てるための教育の指針について述べたものである。 A5 版 監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・見上一幸・松田智子・松田公平・鎌田首治朗・前田洋一・川崎由花・古川治・善野八千子・筒井愛知・山本美紀・加藤明 （担当：p 27～p37 日本における多文化の歴史部分を単著） 国際教育の今後の課題として「多文化共生社会と日本語教育」の焦点を当てて論じた。日本の国際的な政治・経済状況を背景として進行している多文化の実情を述べた。次に日本における日本語教育と多文化共生の歴史を，戦後の韓国・朝鮮人への日本語教育から現在のニューカマーと言われる人々への日本語教育の連続性について考察した。多文化共生という快い言葉に隠された両面性について課題を提示した。さらに，日本語教師が現在の日本で果たすべき役割を，その資質と関連付けながら論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(7) 教育フォーラム 50号 (やる気)を引き出す (やる気)を育てる	共	平成24年 8月	金子書房 全169頁	日本の子どもの学習意欲の低さに焦点を当て各教科での取り組みについて述べたものである。 A5版 監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・松田智子・善野八千子・金山憲正・勝見健史・久田孝・錦織彰・住友克彦・野田健司・中田正浩・前田洋一・中村哲・瀧明千恵子、浅田匡 (担当：p24～33 総合的学習の部分単著) やる気に関する2つの全国調査をもとに、子どもがやる気を出すときについて分析した。そのための要素として「体験」と「学習課題の質」と「学び方」について述べた。体験については活動で終わることなく探究活動と結びついたものとなること、学習課題については、子どもの必要感と興味関心と結びついていること、学び方では、探究が広がり深まるような言葉かけと指導が必要であること、最後には、体験の振り返りが重要であることを提案した。
(8) 次世代の教育原理	共	平成24年 10月	大学教育出版 全153頁	教育の基本原則と教育思想の歴史(西洋と日本)、教育行政と教育課程等一般原理について述べた。 A5版 編著：中田正浩、松田智子 共著者：中田正浩・松田智子・中田浩司・鎌田首治朗・住本克彦・岡野聡子・久田孝 (担当：p29～44、p119～134 第3章日本の教育思想、第4章教師の仕事の部分単著) 3章では、日本の教育思想について古代の「学令」から武士社会になる中世の「足利学校」等・幕藩体制の封建的社会的世の「藩校」等の多様な教育・さらに近代に至るまでの種々の学校制度を社会背景と関連付けて論じた。さらに江戸時代における庶民への教育の広がりを寺小屋や郷校とともに論じた。近代では学に伴う復古思想の隆興と大正期の自由主義教育の思想を論じた。敗戦後の教育では、政治的情勢と教育思想が結びつき、教育政策がすすめられたことを述べた。最後に、戦後70年経過した今日、子どもの発達の早期化に合わせた、新たな日本の教育制度の必要性を提案した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				4章では日本の現行の教育制度とそれに付随する教員の仕事の目的や内容について教育基本法等の法令に基づいて論じた。そもそも教育の目的は何であるか、そのための専門的職業人として教師はあり方について述べた。さらに現行の大学等における教員養成の現状や課題を教育職員免許法に基づき論じた。採用後の研修制度について、地方公務員法や教育基本法や教育公務員特例法に基づき述べた。また、最近導入された免許更新制度の狙いについても論じ、現実的な効果と課題を説明した。最後に、これからの義務教育を担う教員にとっての必要とされる資質について、年代別に提案した。
(9) 子どもと生活—知的好奇心を育む環境づくり—	共	平成 25 年 3 月	ふくろう出版 全 157 頁	子どもたちの知的好奇心を育む教育について、幼稚園教育要領の環境及び小学校学習指導要領の生活科を軸として、述べたものである。 A5 版 編著：岡野総子 共著者：岡野総子、松田智子、吉村啓子、大野純子、筒井愛知、他 6 名 (担当：p 12～21) 第 1 章 2 節「幼稚園・保育所と小学校の連携を踏まえた教育」の部分単著 幼稚園教育は環境を通して行われると言われているが、その真の意味について問い返した。その過程で、幼稚園・保育所の教育と小学校生活科における教育の連続性について問題を提起した。幼児から児童にと環境が大きく変化することにより、子どもに及ぼす影響をかんがみ、小学校入学期の子どものスタートカリキュラムの在り方について論じた。具体例として、生活科の単元「学校探検」を例に挙げ、保・幼・小で共通の授業を作り上げていく事例を紹介した。
(10) 「学校安全」—長尾先生と考える 36 のナラティブ—	共	平成 26 年 6 月	教育出版 全 157 頁	命を守り安全な生活の為に学校は何をできるかを、語り」形で作成したものである。 B5 版 編著：長尾彰夫 共著者：長尾彰夫、松田智子、小林忠三、浜條信彦・松井典夫、若狭孝太郎、神田英幸、砂田信夫、中井尚人、佃繁、伊原正俊、藤田大輔、諏訪清二、他 5 名 担当：(p 100～101)「帰ってきたキャロリン」(p 104～107)「武庫川大橋の向こうは世界が違う」(p 112～117)「この町で生き続ける子どもとともに」の部分単著 阪神淡路大震災の当時 1 年生を担当していた筆者の目から、被災地の子どもや教師の生活現状を当事者の立場で述べるとともに、その危機を乗り越えるための生活科の授業の特質を生かして取り組んだ「町探検」の実践を述べたものであ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				る。東日本大震災から3年が経過し、被災地への愛着が、震災復興の要になると論じたものである。
(11) 人間教育を視点にした「教職入門」	共	平成 26 年 12 月	大学教育出版 全 279 頁	教員の本質は人間を望ましい姿に育てるため心身両面にわたって、意図的計画的に働きかけるという視点に立って教職の基本理念を述べた。 A5 版 編者：中田正浩 共著者：鎌田首治朗・中田正浩・松田智子・中田律子・金山憲正・瀧明知恵子・長井勘治・太田雄久・久田隆 （担当：P, 62～101 第3章「教員の資質向上と研修」、4章「教員の身分と服務」部分を単著） 教員の研修義務と教師の身分と服務の部分を担当執筆した。初任者研修・大学院修学研修・10 年目研修・指導改善研修等の目的と現状の課題について述べた。指導改善研修は、各都道府県の実態も参考にした。教員の身分と服務については、学校教育法や地方公務員法や教育公務員特例法を基にしながら、日常に起きる具体的な事例を挙げて論述した。教員として不可欠である、職務上の義務や身分上の義務は、過去の判例を提示しながら社会人としての常識を述べた。
(12) 「看護のための『教育学』」	共	平成 27 年 12 月	あいり出版 全 158 頁	看護師養成は教員養成と目的は違うが、共通の理念が必要である立場で看護師要請の教育論を論じた本である。 B5 版 編者 守本とも子 共著者：守本とも子、松田智子、虎杖真智子、鎌田首治朗、梶村郁子、松浦純平、中尾友美、武富由美子、山口曜子、新谷奈苗、他 2 名 （担当：p 1～p 12 第1章「教育原理について」の部分単著） 教育の意義と目的について、西洋と東洋における教育という言葉発祥とともに歴史的な視点で論じた。教育の変遷では西洋に焦点を当てて、モンテスキュー・カント・ルソー・ペスタロッチ・デューイ・デュルケム等の教育思想を中心に解説した。また、発達と教育に関してはボウルビィ・ワトソン・シュテルン等の思想を歴史的な社会背景とともに紹介し、教育評価ではブルーナー・ヴィゴツキーの考え方を解説した。最後に看護職を目指す者が教育学を学ぶ意義について述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(13) 教育フォーラム 57 「PISA 型学力を育てる」	共	平成 28 年 2 月	金子書房 全 153 頁	PISA 型学力を中心とした教育改革で重視されている諸課題を教科及び各分野から提示した著作。 A5 版 監修：梶田叡一 共著者：立田慶裕・西辻正副・鎌田首治朗・清水静海・角谷重樹・岩田一彦・渡部久美子・鶴飼洋子・金山憲正・佐藤雄一・松田智子・他 2 名 (担当：「絵本から見る Death Education (死への準備教育)」 p 115～p 124) 命の教育は学校教育で行われているが現在の道徳教育だけでは不十分であることを述べ、死をテーマとした Death Education の必要性を述べた。医療が進み死と向き合う時間が長くなり避けては通れない問題である。死についての時間がない子どものための Death Education には、絵本という芸術作品は適切な教材であり、デーケンの提唱した Death Education の基本的な 5 つの目標に合致する絵本を分析して提案した。Death Education を扱う絵本は、個々の内面と向き合う絵本が多いことも検証した。
(14) 哲学する教育原理	共	平成 29 年 3 月	保育出版社 全 188 頁	どうして教育原理を学ぶのか、教育原理が現在の教育にどのような影響を与えるかを考察した著書 A5 版 編集：伊藤潔志 共著者：川本太郎、相馬伸一、松永幸子、松田智子、友野清文、杉山直子、渡辺明、歌川光一、竹中烈、有馬知江美、田中直美、濱元伸彦、上村崇、中川雅道、伊藤潔、奥田秀巳、北村陽、他 5 名 担当：第 2 章「なぜ、日本の教育思想を学ぶのか」 1 項「前近代の教育思想」 p 35～p 39 日本における飛鳥時代の教育思想の始まりから、古代の大宝律令の教育思想へ進み、日本独自のかな文化の発生に触れた。中世の教育では武家の家訓と寺院における世俗教育に触れ、民衆と支配者側の教育の差について論じた。近世の江戸時代では多様な教育の出現とその社会的な背景を権力側からと民衆の側からの要求として論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(15) 特別活動の指導法—各教科、道徳、総合的な学習の時間等との連携を通して—	共	平成 30 年 1 月	E R P 出版 全 93 頁	平成 29 年告示の学習指導要領の特別活動で育成したい資質・能力とその具体的な指導ポイントについて、その具体事例を指導案等と同時に示した。 A5 版 共著者：松田智子、新川靖、林真太郎 (担当部分：第 1 章 理論編の pp6～pp33、pp36～pp42 を単著) 特別活動の目標「集団や社会の形成者としての見方・考え方」と「なすことによって学ぶ」という方法原理に基づいて、学級活動（ホームルーム）児童会（生徒会）活動、学校行事、クラブ活動（小のみ）でそれぞれ育てたい資質・能力を具体的に挙げて述べた。さらにその活動で教師として指導における留意する点について論じ、学校の全体計画作成時には、特に各教科、道徳、総合的な学習の時間との関連を視野に入れて、学校全体として取り組む必要性を論じた。さらに評価についても結果だけでなく過程や子どもの良い点に着目することを論じた。最後に地域や家庭との連携があつてこそ特別活動は効果があることを述べた。
(16) 子どもの生活理解と環境づくり—就学前領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える—	共	平成 31 年 1 月	ふくろう出版 全 206 頁	子どもたちの知的好奇心を育む教育について、幼稚園教育要領の環境及び小学校学習指導要領の生活科を軸として、述べたものである。特に 3 法令同時の改訂を受け止め、小学校と就学前施設との学びの接続に焦点を当てた著作である。 A5 版 編著：岡野総子 共著者：岡野総子、松田智子、吉村啓子、大野純子、筒井愛知、伊崎一夫、村田真理子、他 8 名 担当部分：pp21～30，第 1 章 2 節「幼稚園・保育所と小学校の連携を踏まえた教育」の部分単著就学前後の子どもの空間認識、時間概念、経験としての勉強がどのように変化するか論じた。文科省が提案した就学前までに育ってほしい 10 の姿を提示し、解説した。さらにそれが小学校でどのように具体化するか述べた。小学校は学習の自立のスタートであり、体験を言語化する学びの積み重ねであることを踏まえて、各教科の学びの特徴を解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) (1) 幼稚園教育課程編成の現状と課題 (1) — A 市立 B 幼稚園の教育課程の現状を通して —	共	平成 24 年 12 月	環太平洋大学 研究紀要 第 6 号 (p135～p140)	幼稚園における教育課程の意義、その具体的な活用について A 市の教育課程の基底及び B 幼稚園の教育課程指導計画を分析し報告したもの。A 市の教育課程基底が各幼稚園に及ぼす影響を平成 22 年から 23 年にかけて B 幼稚園の研究紀要をもとに明らかにした。公立幼稚園では教育課程が文言化されているが、それが日常の保育にどのように効果的に作用しているか、また、教育課程の P D C A サイクルの実情についても言及した。 (松田智子・土谷長子) 担当部分：兵庫県阪神地区 A 市 B 幼稚園に 3 年間継続的に保育観察に入り、教員とともに教育目標が保育内容にどのように具現化しているか分析した。A 市の教育課程の基底の改定の委員会にメンバーとして出席し、改訂の原案に対して指導助言者として参画した。
(2) 特別活動で培う主体的防災行動への一考察	単	平成 25 年 3 月	環太平洋大学 研究紀要 第 7 号 (p149～p160)	防災教育の目的と、特別活動の位置づけと役割を明確に、防災意識の低さを克服するために、初等・中等学校が特別活動の学習を通して獲得する能力について述べた、初等・中等の義務教育の特別活動の内容項目や目的と関連付け、防災避難行動のあり方を東日本大震災の中学生の避難行動の具体例を挙げながら論じた。現状の避難訓練の効果と特別活動の改善点とに焦点を当て、防災教育を充実させるため発達段階に応じ、特別活動と各教科を関連させ行う必要があることを論じた。特別活動等を通して地域と日常的に地域住民を巻き込んだ特別活動が地域防災に不可欠であると述べた。
(3) 日本語教師論入門 — 中国での実践を通して —	共	平成 25 年 3 月	環太平洋大学 研究紀要 第 7 号 (p137～p148)	日本語教師の資質と能力と関連付けながら論じた。日本語教育における教師の役割について論じた。中国で日本語教師をした経験から、中国における日本語教育事情を挙げながら論じた。中国の担当する学生にアンケート調査を行い、日本語学習者の現状と意識を分析した。さらに現代の中国で日本語教育にかかわる意義について論じた。 (松田公平、松田智子) 担当頁は抽出不可。事前の学生アンケートの作成とアンケートの結果の分析整理を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(4) 特別活動で築く人間関係力 - 防災教育の実践を通して -	単	平成 25 年 4 月	教育 PR0 第 43 巻第 9 号 (P6～P10)	特別活動の特質・特性である「集団活動であること」「なすことによって学ぶ」この 2 つが、地震大国に住む国民にとって、命を守る中心だと述べた。特別活動の狙いである望ましい人間関係の構築が、学校内にとどまらず地域住民まで広がり、防災行動を下支えすることも述べた。さらに望ましい人間関係を形成する能力を育てる方法とその過程について言及した。最後に、特別活動は体験活動が重視されるためイベント的に終わってしまう危険性があり、活動の後に振り返り、子どもが内省化する必要があることを具体的に例示した。
(5) 内面世界の形成を促す人間教育原理への一考察 - ソクラテスの問答法に焦点を当てて - 【査読有】	単	平成 26 年 4 月	人間教育学研究 創刊号 奈良学園大学人間教育学部 (p 7～p 14)	教育の言葉の意味を探るため、世界東西の紀元前の思想家が教育を論じている文献を調査した。人類文化の思想的な夜明けと教育の起源は関係し、教育は「子どもを善くしようとする働きかけ」を意味し、ソフィストという職業集団教師が存在した。特に内面の教育を実践した、ソクラテスの人物像やその「問答法」に視点をあてて論じた。彼の「無知の知」を相手に自覚させる対話は、内面世界に配慮した教育への示唆を含んでいる。彼は青年を教育対象としたが、梶田が提唱する「内面性の人間教育」との関連性も述べた。梶田の人間教育における「自己凝視、自己対話、自己表現」を支える教育の基盤も述べた。
(6) Death Education による人間教育 - 絵本の分析を通して - 【査読有】	単	平成 26 年 12 月	人間教育学研究 第 2 号 奈良学園大学人間教育学部 (p 59～p 70)	今日の死生観が返還した過程を振り返った。命の教育は学校教育で行われている道徳育では不十分であり、死と向き合う教育が必要なことを述べた。医療が進み死と向き合う時間が長くなり避けては通れない問題である。子どものための Death Education には、絵本という芸術作品は適切な教材であるため、デーケンの提唱した Death Education の基本的な 5 つの目標に合致する絵本を分析して提案した。それぞれに対応した国内外の絵本を選択し、内容を分析し Death Education にいかに活用できるかを示唆した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(7) 近世における女子教育 史への一考察 —江戸時代末期の女子教育 について—	単	平成 27 年 9 月	奈良学園大学 研究紀要 第 3 号 P125～P134	江戸時代末期に士族のみならず庶民・農民に至るまで教育のすそ野が広がっていった外的及び内的な要因を 3 つ挙げた。士族の女子教育を支える日本独自の女徳（生活技術より徳を上位）が日本の女子学の特徴である。庶民の女子教育を支えるは実学であり、その根本思想は主婦学であった。女子教育が母親教育の枠組みの中ではあるが社会的に認知された意義は大きいと論じた。また農村地域の最下層の女子にまで、文字の読み書きが広がっていたことを資料で明らかにした。幕末期に藩校で女学校成立の動きがあったが、富国強兵のための母親学の色彩が濃かった。寺子屋での女師匠誕生や男女が同室学習を例に挙げ、明治の学制実施の前の男女共通教育の萌芽について論じた。
(8) 貝原益軒の教育思想へ の一考察 —江戸の子育て法と教育書 を通して— 【査読有】	単	平成 27 年 12 月	「人間教育学 研究」第 3 号 人間教育学会 p 47～p 54	本論は鄭和と秩序の時代であった江戸時代の教育ネットワークおよび益軒の著作である『大和俗訓』及び『和俗童子訓』等に焦点をあて論じた。教育に果たす父母の役割は大きく、益軒は父母こそが教育の心得を学ぶべきとして庶民に分かりやすい仮名書きの教育書を多く発行した。彼の学問の根本は習俗としての儒学であり目的は「善」を行うことであり、仁や礼を大切にした孝の教育である。彼は子どもが邪悪を覚える前に早期に教育すべきと説き、その年齢に応じた教育課程を示し大きな支持を得た。また、親の過保護を厳しく戒めた。このような益軒の思想が江戸時代に受け入れられた社会的な背景も、思想内容とともに分析した。
(9) 生活科から小学校社会科への連続性の一考察 -防災教育と減災教育に視 点を当てて-	共	平成 28 年 9 月	奈良学園大学 研究紀要 第 5 号 P141～150	日本の国土の環境から災害大国であるリスクがある反面、国民の危機意識は低いことを前提に、防災教育と減災教育の必要性を小学校 6 年間の生活科と社会科の連続性の中で論じた。学習指導要領に防災教育がどのような内容と目標で示されているかに焦点を当てて分析した。さらに指導内容を「自助」「共助」「公助」という防災の枠組みと関連付けて論じた。生活科の目標は自立の基礎を育てることであり、「自助」「公助」との関係が深い。一方社会科の目標は「共助+公助」の公民的資質を育成、災害についての知識獲得意欲を中心に置いている。特に命を守る一次非難に重要な空間的認知の獲得にも社会科の果たす役割は大きい。 共著者：山田均、松田智子 担当部分：総論と生活科の部分単著 p 141～145

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(10) 教育行政と教育課程－学校経営に視点をおいて－【査読付】	共	平成 28 年 12 月	日本人間学会学会誌 第 4 号 P115～124	教育行政と教育課程をテーマとして，学習指導要領をめぐる論議，教育課程行政の統制手法の変化，教育課程マネジメントの課題，戦略的で柔軟な学校運営と教育課程，教育課程に関する地方教育行政の役割等を学校経営の観点から，論述した。 共著者：松田智子，伊田義信 本人担当部分：(p115～118 を単著) 第 2 項、教育課程行政の課題（教育課程の統制）として専門統制、国民統制、行政統制、市場統制について解説し、第 3 項では、教育課程行政の統制手法の変化（履修主義から習得主義への転換）インプットからアウトプットへの転換を論じた。第 4 項では教育課程マネジメントの課題として教育課程と「出口」の学力格差の現状を論じた。
(11) 公立学校における保護者クレームに係る学校問題-教育行政の役割に視点を当てて-	共	平成 29 年 9 月	奈良学園大学 研究紀要 第 7 号 P143～152	現在も継続している学校クレームの現状から、その要因となる歴史的背景を明らかにするとともに、公立小中学校の保護者と教員との意識のずれを明らかにした。そして、この 20 年間の教師の意識変革や取組に焦点を当てて、そのバックとして教育行政が役割と現状について明らかにして今後の課題を提案した。 共著者：松田智子，伊田義信 担当部分：保護者クレームの要因となる社会的背景と学校の内部の組織的な脆弱さと危機管理意識の低さと教育行政の課題部分単著 p143～147
(12) 総合的な学習の時間の探究課題の設定について 一教科横断的・総合的なカリキュラムの歴史的な考察を通して一	単	平成 30 年 1 月	奈良学園大学 ジャーナル 「人間教育」 第 1 巻第 1 号 p15～p24	総合的な学習の時間の目標は「探究的な見方・考え方」を育てることが目標であると平成 29 年度告示の新学習指導要領で示された。探究の過程で重要なことは、探究すべき課題の価値を教師が明確にして子どもに提示すること、さらに子どもと協働して課題発見の指導をすることである。初めに子どもありき、内容ありきの二者択一に陥ることを避ける必要があることを論じた。これらについて、日本及び世界の教科横断的なカリキュラムの歴史を振り返ることを通して、再認識する必要性を論じた。
(13) 特別活動の体育的行事における「感動」体験についての考察 ースポーツ科学と安全教育の観点からー	共	平成 30 年 2 月	プール学院大学 研究紀要 第 58 号 p 395～ p 402	特別活動の体育的行事において、昨今後遺症が残る事故が起きている組体操について論じた。その教育的な効果と学校安全の観点から、どのような演目を教員として選択するべきかを述べた。学校教育の「感動体験」と「学校安全」を両立させるための方策について、教育学部学生のアンケートを分析した方向性を明示した。 共著者：松田智子，林真太郎 本人担当部分：p395～399、後遺症が残る可能性が高い組体操を、学校行事で中止しない理由を学生アンケートにより確認した。教育的効果と自己の感動体験や地域の伝統等が影響を与えているこ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				とが明確になった。自己自身の経験を乗り越えて教育内内容を省察する力を持つ必要を論じた。
(14) 保育内容の意義及び今後の課題と展望 —奈良県のA幼稚園の実践を通して—	共	平成30年2月	奈良学園大学 ジャーナル 「人間教育」 第1巻第2号 P66～p76	保育課程の歴史と保育内容の意味と保育内容の歴史を述べた。その後、具体的な5領域の狙いと内容とともに。その全体構造が保育内容にどのように反映しているか、幼児の具体的な姿と理論を連携させて論じた。幼稚園や保育園の保育内容は環境を通して5領域を横断的・総合的に扱い、一人一人の良さや過程を評価することを指導の留意点と共に示した。さらに、就学前までに育成したい10の力と小学校教育とのつながりを提案した。更に、指導案の中で、5領域のどの力を育てているか教師自身が意識的に構想することの重要性を論じた。 共著者：加奥満紀子、松田智子 担当部分：p60～70 保育課程の歴史と保育内容の意味と保育内容の歴史部分を担当。具体的な5領域の狙いと内容とともに。その全体構造が保育内容にどのように反映しているか論じた。
(15) 日本の教育行政と教員制度改革への一考察 —英国における教員制度改革との比較を通して—	共	平成30年3月	奈良学園大学 ジャーナル 「人間教育」 第1巻第3号 P77～p86	世界的に急速に進行する教育改革と社会的な背景に焦点を当て、日本の教員制度改革を論じた。教師の仕事の特徴を、日本の近代学校制度成立と関連付けて分析した。現代教員制度激変の節目になる教員評価制度の実施、教職免許更新制度の導入、教職大学院創設等による教師教育再編の動向を述べ、さらに改革により起因した課題について検討した。日本の教員制度の今後の展開を、イギリスの教員制度改革と比較して論じた。 共著者：松田智子、阿部秀高 担当部分：日本の教育行政の動きと教員制度改革の行政施策をイギリスと比較した部分単著 (p80～p86)
(16) 絵本を活用した道徳教育の試み —絵本『死んでくれた』を通して—	単	平成30年6月	奈良学園大学 ジャーナル 「人間教育」 第1巻第5号、 P149～P156	幼児や小学校低学年の子どもの道徳性を育成する教材として絵本を活用する有効性と具体的な指導方法について論じた。谷川俊太郎の絵本「死んでくれた」を例に、幼稚園や小学校低学年での実践しを分析した。道徳の生命尊重がテーマあるが、死＝他の生命の命を頂き人間は生きるという現実を直視することを通して命の大切さを考えさせる有効性を論じた。幼児や小学校低学年でも、絵本等の教材を使用することにより死を通して生命尊重を指導することは可能であると提示した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(17) 就学前の子どものための指導計画と評価	単	平成 30 年 7 月	奈良学園大学 ジャーナル 「人間教育」 第 1 巻第 6 号、 P163～P170	保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携認定こども園教育・保育要領」の 3 法案が一斉に改訂された社会的な要請に触れた。就学前までににつけたい 10 の力を保証するために幼稚園や保育所等で保育する内容の指導計画の長期、短期だけでなく月案、週案等の具体的な立て方とその評価について論じた。さらに指導計画を活用するために有効な PDCA サイクルの在り方についても論じた。保育所と幼稚園の養護と教育の違いに焦点を当てて、相互に配慮すべき留意点について提案した。
(18) 日本の学校制度と教育課程の評価について —明治から昭和の敗戦までに焦点をあてて—	単	平成 30 年 8 月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」 第 1 巻第 7 号、 P163～P170	近代公教育制度の基本的骨格である学制が施行されてから、昭和で敗戦を迎えるまで期間の教育制度と教育内容と評価について、その社会的な背景と関係づけながら論じた。あえて学校制度と教育課程とその評価までを一体としてとらえ、そこから概観する日本の教育について提案する。教育の目的や教育課程は、その時の国家の求める人材像に規定されることは、歴史的に明確である。しかし、教育評価については、前者の 2 つと切り離して論じられる。そこで、上記の 3 つを一体としてとらえ、日本の公教育の制度の基礎が構築される過程を概観した。
(19) 絵本から学ぶグリーフプロセス	単	平成 30 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第 9 号 P148～P156	愛する人に先立たれた際の、遺された人の悲嘆について、社会問題と認識して論じた。この悲嘆は、個別的で多様性を備えているが、それを乗り越えようとする癒しの作業がグリーフケアである。本稿では悲嘆を乗り越えるグリーフワークの一部として、絵本療法を活用することを提案した。まずデーケンの悲嘆のプロセスを具体的に紹介し、その段階を考慮しつつ適切な絵本を提示し、内容を分析した。本来の絵本学から逸脱と批判はあるが、絵本の多様性を活用した生命尊重の道徳教育の在り方を提案した。
(20) 就学前における領域「言葉」とその指導法について	単	平成 31 年 3 月	奈良学園大学研究紀要 第 10 号 P123～P132	幼児教育で育む「資質・能力」の 3 つの柱について言及し解説した。さらに就学前までに育みたい 10 の姿の中の「伝え合う力」に視点を当て領域「言葉」と関連付けて 3 歳児から就学までの話し言葉についての指導論を述べた。言葉を遊びや生活を通して総合的に指導する際の留意点を、具体例とともに述べた。言葉を育てる際の望ましい環境構成も論じた。最後に領域「言葉」と小学校「国語科」、との差異について述べ領域「言葉」の幼保と小学校との連携を論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他) 「事典」 (1) 実践教育評価事典	共	平成 22 年 8 月	文溪堂 全 261 頁	教育評価の意味と各教科での評価のあり方と、評価用語の詳しい解説を述べたものである。 B 5 版 監修：梶田叡一・加藤明 共著者：梶田叡一・加藤明・長谷浩也・吉村希至・土田圭子・鎌田首治朗・金澤緑・米田豊・角谷重樹・北川達夫・勝見健史・松田智子・他 19 名 (担当：P, 126～129・P, 138～139・P, 190～191 育評価の基礎知識「教育評価史(日本)」「教育評価史(西洋)」「学習指導要領と指導要録」「カリキュラム評価・カリキュラム改善」の用語概略と説明を単著) 日本の教育界に残る心情や印象で教育を語る実践を乗り越えるために本書は執筆された。「結果」を重視した地に足着けた教育をするために各用語についての基本的な解説を行った日本と西洋の教育史では、それぞれの学習の評価の方法や観点に焦点を当てて、教育評価の歴史を論じた。 学習指導要領と指導要録の項では、社会的な背景と明治以降の日本の教育界動向を関連付け、なぜ学習指導要領が変遷してきたかを述べた。学習評価と指導の改善に視点を当てて論じた。カリキュラムの項は PDCA サイクルの必要性を述べた。
「報告書」 (1) 命の教育のカリキュラムをどのように進めるか 一幼児が友達との交流を深めることを通しての育ち—	共	平成 22 年 12 月	第 2 回命の教育実践研究会報告集 全 75 頁	幼児が身近な自然とのかかわりを通しての感動や葛藤を伝え合い、共感することを通して、自ら生き物に関わろうとする意欲を育てる指導を提案した。動物の飼育活動は、当番活動として考えられるが、あえて自主的な活動と位置付け、そこで生じる幼児の葛藤を取り上げ、生命を大切にすることを育成する指導の方法について述べた。葛藤場面での教師や友達の声掛けを分析し、日常の保育の中で児童の内面を理解する重要性も論じた。 (担当：p 14～p 15, p 36～37, 梶田叡一，渡邊満，古川治，川上一馬，松田智子、他 4 名)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(2) 命の教育のカリキュラム化をどのように進めるか ー幼稚園・小学校低学年の命の教育ー	共	平成 24 年 1 月	第 3 回命の教育実践研究会報告集	実践事例「ツバメの町を探検しよう」では保育案の新しい書式を提案し、ねらい内容と育てたい力を明確に指導した。育てたい力は①人とかかわる力②環境とかかわる力③自己とかかわる力の 3 視点を設けた。そのうえで援助のポイントを考えることを入れた保育案を提案した。小学校低学年生活科では，学習指導要領改訂の趣旨である安全教育の充実に着目し通学路をテーマに「寄り道のすすめ」単元を作成しを生活科の中に取り入れた指導案をを提案した。 (担当：p 18～p 19, p 27～32 梶田 叡一，渡邊満，古川治， <u>松田智子</u> 、他 3 名) 全 115 頁
(3) 学びを描き出し伝えるーメンタリングの実際と課題ー	共	平成 25 年 2 月	日本教師学学会誌「教師学研究」増刊号	日本教師学学会第 12 回大会シンポジウム報告集。メンタリングに着目し，教師教育・看護教育・学校経営・e ラーニングの立場からシンポジウム形式で発表をしたものの報告である。 担当部分は公立学校の初任者研修における指導教員と初任者との関係をメンタリングの視点から分析することである。現在の主任者研修は、メンターと対象者との関係に利害関係がありそれが課題であること、また期間は初任者研究は 1 年で終了だが、メンタリングの観点からは、3 年ほどの継続が望ましいことを提言した。 担当頁はシンポジウムなので抽出不可 (田村由美・松田岳士・河村美穂・石原逸子・ <u>松田智子</u>) p 25～P 44
(4) いのちの教育カリキュラムモデルの開発と実践 平成 24 年度～26 年度科学研究費補助金研究報告集 (基盤研究(B)) 科研番号 24330254	共	平成 27 年 1 月	奈良学園大学 研究代表者 梶田叡一 いのちの教育 実践研究会 全 207 頁	生活科と特別活動における防災教育のカリキュラムを提示した。防災教育を定義し、その必要性を日本の地理的な環境面から提起し、その中で義務教育機関が果たす役割を論じた。特に生活科の単元構成と特別活動の人間関係構築力に焦点を当てて、実践事例を示すとともにカリキュラム編成の基本観点を論じた。 (担当：第 4 章第 3 節生活科と特別活動における防災教育 p 96～107 共著者：梶田叡一、近藤靖弘、渡邊満、古川治、五百住満、 <u>松田智子</u> 、大谷武彦、住本克彦、杉田育代、三木澄代、松井典夫他 9 名)
(5) 「豊かに感じ生き生きと生活する幼児をめざして」 ー学校生活につなぐ学びの芽生えをはぐくむー	共	平成 28 年 2 月	芦屋市立精道幼稚園 全 53 頁	保育所・幼稚園と小学校の円滑な接続を図る芦屋市教育委員会研究指定園としての報告である。文科省の示した接続の 3 観点「自己調整力」「考える力」「伝え合う力」で年間 3 回の保育参観実施し、特に 5 歳児後期の変容を確認した。幼稚園で意識的に伝え合う力の育成に努めるとともに小学校での学びを支える体幹を鍛えることを意識した保育の報告である。 (担当：p 32～33 単著及び全体の校正及び助言)、共著者：西窪千昌、上埜吉実、内藤純子、中村友光子、松井奈央子、 <u>松田智子</u>

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(6) 第 56 回学校保健ゼミナール講演集	共	平成 29 年 11 月	東山書房 「保健教室」 全 170 頁	「学校におけるクレーム処理と保護者対応のポイント」について保護者クレームの社会的な背景を論じた。またクレーム対応の基本的な姿勢と、特に電話対応の問題を指摘した。学校体制として教職員の事案への共通理解と職場の同僚性が重要であること、学校組織としての対応が不欠であることを論じた。さらに学校以外の専門的な機関と協働関係に意識改革をすることを求め、クレーム対応の今後の展望を述べた。 担当ページ：P3～p22 共著者：土井吉晴、村瀬健、三原総子、細谷良太、 <u>松田智子</u>
「依頼原稿」 (1) 絵本を通して「死」から「いのちの教育」を考える	単	平成 29 年 8 月	建学社 「心とからだの健康」 8 月号	死の観点から教育を考える意義を絵本の読み聞かせ実践を通して論じた。幼稚園と小学校 1 年生に谷川俊太郎の絵本「しんでくれた」を読み聞かせ児童の反応から、生きることの大切さを考えさせた実践である。植物連鎖の頂点に立つ人間の命をどのように捉えるかを考えさせ、食物を大切にするとする一般的な食育にならず、生命尊重となるような教材解釈を示した。 p78－81
(2) 幼稚園・小学校の実践から〈いのち〉の教育を考える	単	平成 30 年 1 月	建学社 「心とからだの健康」 1 月号	幼稚園の「うさぎ当番」を役割でなく生命尊重の観点で話し合い合意形成する実践を例示した。小学校では児童が自らの命を守るために、帰り道を自主的に探検し、子どもの空間認識を養い、災害発生時に、安全な場所に一時避難し命を守る実践を例示した。子どもが話し合い意思決定することが重要であることを論じた。P75－78
「講義・指導助言等資料」 (1) 教員免許更新講習会 講義資料冊子 「今求められる資質と職務遂行能力」Ⅰ	単	平成21年8月	環太平洋大学 教職センター A4 版 10 頁	教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」について講義を行った。年代別に、教員経験年数に伴う、学校の校務分掌で果たすべき役割についてライフスタイルとともに説明した。特に新任教師が増加している今日、教職10年を経過する教師はミドルリーダーとして、学校運営に参画する必要性を教員人口比率のグラフを示して具体的に説明した。
(2)生活科における言語力 育成一幼稚園・保育所とのつながりに視点を置いて-	単	平成22年8月	阪神地区小学校生活科教育研究会（伊丹市立産業情報センター） A4 10 頁	レジメを基に、話し言葉が中心の幼稚園から書き言葉が中心の小学校へ進級した祭に起きる小1プロブレムについて言語活動に焦点を当て論じた。幼稚園では語を単位とした指導になりがちで、語の質を高めるには活動や体験を通して、その意味や背景を考えさせることが重要であることを述べた。静かに読み聞かせを聞くことを是とする指導の再考を提案した。絵本の読み聞かせ通しイメージと論理的な思考を育む必要性も論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(3) 自分らしさを発揮し友 だちと響きあう幼児	単	平成23年6月	兵庫県芦屋市教育委 員会 A4版 8頁	兵庫県芦屋市幼稚園教員約150人を対象 に、資料を配布して、4歳児と5歳児の自 我の発達と、他児とのコミュニケーション 力の発達に着目して、遊びの中での子ども の心の葛藤とひきだす意義を話した。児童 が葛藤し心を成長させるために保育者の 役割と環境構成のあり方が重要性であり、 領域人間関係に重点を置いた、幼児期の道 徳性の芽生えを図る教育課程の編成の意 義とその具体的な方策を論じた。
(4) 教員免許更新講習会 講義資料冊子 「今求められる資質と職 務遂行能力」Ⅱ	単	平成24年8月	環太平洋大学 教職センター A4版 10頁	レジメで教員の年齢構成を提示しつつ、新 教育課程を実践するうえで教師として求 められる「資質」と「職務遂行能力」につ いて、教員経験年数に伴う、学校の校務分 掌の中で果たすべき役割について論じた。 また、年代別にどのような力が求められる かを、経営者100人からのアンケート結果 として一覧で提示し役割を自覚し、チーム 力んの必要を指摘した。
(5) 神戸市立小学校生活科 部会研究会資料 「生活科でいのちを大 切にする教育」	単	平成26年1月	神戸市立小学 校生活科部会 研究会 A4版 8頁	レジメに基づき、幼稚園・小学校の教員 60人を対象に講話を行った。生活科の成 長単元は児童の自尊感情を育み周囲に 感謝の気持ちをもたせ命を大切にする 狙いを説明した。子どもの死生観調査の 結果を提示し、死生観の変化の境目を意 識して教育に当たる必要を述べた。
(6) 小学校期へのなだらかな 成長支援を図る教育課程	単	平成28年6月	芦屋市公立・私立保育 所合同研修会 パワーポイント15枚	芦屋市公立・私立保育所、こども園等の 教職員220名を対象に、乳児期から幼児 期までの人間関係の育ちが小学校1年生 の精神的な自立にどのようにかわる かをベネッセの2016年縦断調査の報告 を例示しながら説明した。特に入学後直 後の学習意欲が年長児の生活習慣や言 語力に影響されることが、年長児の言語力 が年中児の調整力に影響されることを 教育課程に反映させる必要を論じた。
(7) 幼児期の教育を小学校 につなげて ー資質・能力を育成する 教育課程(保育課程)ー	単	平成29年 11月	兵庫県公立幼 稚園阪神地区 教育研究会 パワーポイント18枚	参加者300名を対象に、教育課程編成の 趣旨と、それに基づいた各期の目標、そ して長期と短期の指導計画の作成方法、 本日の保育案と、教育課程の編成が連動 しつつ公開保育がなされてことを説明 した。幼稚園卒園までにねらう10の力 を示し、特に小学校以降の学びに関係が 深い「自立心」「協同性」「思考力の芽生 え」について詳細に説明した。さらに本 日の保育での「主体的・対話的で深い学 び」の幼児の姿を論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(8) 保護者クレームにおける養護教諭の役割	単	平成30年7月	養護教諭フォーラム研究会 (アフィーナ大阪) 研究会要項 p22～p36	養護教諭 300 人を対象に、保護者クレームが現在第 3 ステージに至っていることを、社会的な背景と共に説明した。さらに学校園における一人職種である、養護教諭の位置づけや役割についても確認した。子どもを評価の対象としない養護教諭の「立場だからこそ可能である保護者への共感や、他の教諭に対してのサポートの在り方を演習を交えて具体的に論じた。今後の行政機関が開催する養護教諭研修会を、養護教諭の位置づけと役割を明確にしたものに改革する必要性を論じた。
「学会発表」 (1) 保育士養成教育と卒業時の満足感との関係	—	平成 20 年 9 月	全国保育士養成協議会 第 47 回大会 (北海道・函館国際ホテル)	免許・資格取得のための独自教科のみならず「基礎演習」で掃除の仕方や箸や礼儀作法等を実施している。また伝統文化（歌舞伎・西陣織・正しい日本語）等の授業を行っている。この特徴あるカリキュラムに対する実証的な検証を行った。 担当部分は、学生満足度評価の実施分析である。(吉村啓子・松井裕子・松田智子・土谷長子・智原江美・高橋浩輔・下口美穂・岡野総子)。
(2) 「今なぜ命の教育が必要か」 パネラーとして提案発表 「飼育活動でいのちを大切にする幼児・児童教育」	—	平成 22 年 12 月	第 2 回いのちの教育実践交流会 (大阪・御堂会館)	幼稚園や小学校特別活動のウサギの飼育を通しての実践例を報告した。多くの学校園では小動物の飼育活動をし、当番活動は特別活動の係活動として、教師が順番に決めていることが多い。本実践は、自主的なウサギ当番と学級活動の話し合い活動を通し「ウサギの世話は命を預かることである」という気付きの経過を述べた。話し合いには教師の指導性が不可欠であることも強調した。 (古川治，松田智子，久保弘子，津田一司，山口光一，渡邊満，市川真奈美)
(3) メンタリングの実際と課題 パネラーとして提案発表 「学校におけるメンタリング機能の実際」	—	平成 23 年 2 月	日本教師学会第 12 回大会 (兵庫・甲南大学)	メンタリングに着目し，教師教育・看護教育・学校経営・e ラーニングの立場からシンポジウムで発表をした。公立学校の初任者研修における指導教員と初任者との関係をメンタリングの観点から分析した。メンタリングの観点からは、3 年の研修継続が望ましいことを提言した。(田村由美・松田岳士・河村美穂・石原逸子・松田智子)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(4) 幼稚園と小学校低学年対象の命を大切にする教育とは パネラーとして提案発表	—	平成 24 年 1 月	第 3 回いのちの教育実践交流会(兵庫・六甲荘)	命の教育のカリキュラム化について提案した。幼稚園児の命の教育は「小動物の飼育」や「植物の栽培」を通して行われることが多い。これらは，愛着を持つだけでなく，子どもの心を癒すからである。その心の働きが命を大切にする契機となる。一方、生活科では，改訂の趣旨に登場する「安全教育を充実」に着目し、通学路をテーマに取り上げた単元を構成し提言した。担当部分は、幼稚園・小学校低学年の指導部分である。(古川治，松田智子，津田一司，山口光一，三木澄子)
(5) 生活科における命の教育の単元開発	—	平成 24 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 21 回大会（徳島・徳島大学）	東日本大震災の教訓として地域全体での防災教育の大切さが確認された。小学校 1 年生で安全の一部として通学路を教材とするが、扱いは安全な登校を目指すものであり取り扱う時間が少ない。通学路のみの安全と限定するのではなく、地域の避難通路や避難場所も組み入れた単元を構成する必要性を提案した。生活科の教科書で提示されている通学路の危険が、大雨や不審者等に偏っている傾向があり、津波の記述も求めた。抄録 p 209
(6) 領域「環境」における授業研究 ～体験活動と授業後の発展学習を重視した授業の展開～	—	平成 24 年 9 月	全国保育士養成協議会第 51 回大会（京都文教大学）	授業に自然や環境に触れ合う体験活動を組み入れ、さらに発展学習として関係する課題を与えた。 課題に対するフィードバックを通して学生同士が交流するための時間を毎回確保した。この学習サイクルの繰り返し、学生の意欲をどのように刺激し授業への参加態度等が変化するかを検証したものである。筆者は学生の授業への参加態度や課題等への取組態度の分析を担当した。 (岡野聡子・松田智子) 抄録 p 268～269
(7) 防災からいのちの教育を考える分科会のコーディネーター	—	平成 25 年 2 月	第 4 回いのちの教育実践交流会(兵庫・六甲荘)	東日本大震災がの際に、児童を 100%救助した教訓について、麻生川氏から提案発表があった。諏訪氏から震災発生時の学校と地域との望ましい関係は、従来の特別活動の退屈な避難訓練では構築できないと助言があった。コーディネーターとして、特別活動の学校行事を核とし、自主的集団避難行動をうながす防災教育のまとめを提言した。 (麻生川敦・諏訪清二・松田智子) (p 32～p 41)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(8) 生活科と特別活動における防災教育	—	平成 27 年 1 月	いのちの教育実践交流会第 6 回シンポジウム in 兵庫 (兵庫・六甲荘)	兵庫県教育委員会が、防災教育と教科や領域と結びつきを調査した結果、特別活動・生活科・道徳などと関連が深かった。特別活動と生活科に焦点を当て、目的と内容と学習方法で防災教育との関連を論じた。生活科では単元目標を防災教育と関連を紹介した。特別活動では災害時の一時避難活動の重要性と避難集団内の人間関係がその結果を左右することから、集団の良好な人間関係の構築の重要性を確認した。集団活動さえすれば良好な人間関係が育つのでなく、その目的や自主性が重要であることを論じた。報告集 p 96～107
(9) 絵本の分析を通しての Death Education (死への準備教育)	—	平成 27 年 2 月	日本教師学学会第 16 回大会 (日本女子大学)	死生観の転換期である 5 歳から 7 歳の児童を対象に、Death Education に有効な絵本を紹介した。医療が進み、死と向き合う期間が長くなるとともに、災害等で親しい人と死別体験する機会が増加している。さらに病院死が増加し、子どもたちが命を実感を持って受け入れる環境に乏しい。子どもの健全な死生観の発達に揺らぎを引き起こしている。子どもの発達段階に応じた絵本を分析的に紹介した。抄録 p50～51
(10) 絵本を通してのグリーフケア	—	平成 29 年 6 月	第 21 回絵本学会大会 (札幌大谷大学短期大学部)	Death Education の中でも 2 人称の死に子どもが遭遇した際のグリーフケアに視点を当てて、予防医学の観点から絵本の活用を論じた。欧米のグリーフケアの思考やコミュニケーションについて、絵本の描写表現や文章から分析した。頭で考える言葉のよる「死」は合理的であるが、感性レベルでのコミュニケーションで絵本は高価が高いと論じた。キリスト教文化圏の死生観と日本のそれとを、絵本を通して比較して論じた。抄録 p30

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 森 一弘

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
体育科教育の実践に関する実務 総合的な学習の指導法に関する実務		体育科指導法・自主的な学び・総合的な学習
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 ○アクションリサーチを活用した授業の改善 ・単元における課題の持たせ方 ・子どもの聞き合う場づくり ・子どもと子どもの関係性 ・子どもと教師の関係性 ・子どもの理解度と授業の有効性 ○社会性を育む体育の授業づくり ・チームプレイが重要だという認識の持たせ方 ・チームが勝つための自分の役割に気付かす ○フラッグフットボールの教育的価値について授業実践からの検討	平成 16 年 4 月～平成 24 年 7 月 平成 16 年 4 月～平成 24 年 7 月 平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	○授業をビデオで撮影し、子どもの実態をもとに授業改善の方策を探る。教師の授業における出場として、発問・切り返し・課題の再設定などに対して、子どもたちが実際にどのような姿をしめしたのか分析するとともに個と個の関係、個と教材との関係、個と集団との関係、個と教師の関係、集団と教師の関係など協働的な学びをもとに、授業の改善を明らかにしてきた。 (神戸大学附属住吉小学校) ○フラッグフットボールを教材にして、子どもたちの社会性を育む授業デザインを行う。「わかる・できる」を一体的に扱い、ゲームに勝つための、自分の役割を意識し、作戦を進めていくことを通して、相手への思いやり、ゲーム進行でのルールの順守、マナーの向上が見られた。(神戸大学附属住吉小学校) ○フラッグフットボールの授業においてイーブンナンバーゲームを用いて授業展開しても、戦術的な学習課題へ焦点化でき、プレーにおいて子どもたちの役割の明確化とともに積極的なプレーへの参加を促す可能性があることを明らかにした。(奈良学園小学校)
2 作成した教科書、教材 総合学習「普天間問題を考える」 フラッグフットボール指導テキスト（再掲）	平成 22 年 5 月 平成 22 年 7 月	○普天間基地を考えるための沖縄の歴史をまとめた冊子 15 ページ（教材） 沖縄が本土によって、とられた政策を知ること、沖縄の人々の思いを感じ、戦後になってもアメリカ軍の多くの施設が沖縄に駐留する現実を知らせる資料を作成した。 (神戸大学附属住吉小学校の総合的な学習の時間に参考資料として使用) ○日本フラッグフットボール協会から出版した指導者のためのテキスト 36 ページ（教科書） 高橋建夫先生が監修した、学校体育で活用できるフラッグフットボール練習方法などを示した。 オフェンス時の作戦づくりをしていくために、2 対 1, 4 対 3, 5 対 3, (オフェンスチームの人数を多くする) でパスコース・ランコースを考えていくモデルとなる動きを示した。また、オフェンス時にも相手チームをブロックする動きを示し、フラッグフットボールのオフェンス時の作戦をスモールステップで学べるように工夫した。(神戸大学附属住吉小学校の体育の指導参考資料として使用)

3 教育上の能力に関する大学等の評価 勤務評定 ・神戸大学附属住吉小学校の校長からの評価 ・芦屋市立山手小学校の校長からの評価	平成 16 年度から平成 25 年度 平成 26 年度から現在に至る	副教頭として校務全般を取り仕切り、学校のかなめとして、各教員らの信頼も厚く、また、PTA との関係を密にして保護者からの信頼も厚いものがある。なくてはならない人材として高い評価を得ている。 研究主任・6 年学年主任として学校全体の教育課程の編成、授業実践、若手教員の指導などの業務に精通し学校運営の一翼を担っていたという評価を得ている。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 ○教育実習生に対する指導 ○NHK 教育テレビ 「スポーツ教室」 フラグフットボール 基礎編・発展編の 構成及び指導出演	平成 4 年 4 月から現在まで 平成 21 年度 平成 22 年度	○これまで毎年教育実習生を受け入れて、担任や管理職の立場で行った講話内容 ・学校運営、児童理解、生徒指導と学習指導 ・単元の作り方と 1 時間の授業の作り方 ・学習評価の考え方の実際の評価の仕方 ・体育の授業の作り方 ・担任と養護教諭・カンセラーの連携 ・特別活動 等 ○NHK教育テレビ「スポーツ教室」の番組で、フラグボールを取り上げ、その番組の構成・演出及び指導者として出演した。ここでは、フラグフットボールの楽しみ方に力点を置き、実際の小学校体育授業で活かしていける内容構成にした。どの子どもも楽しめるための動きや作戦を中心に番組を構成した。
5 その他		なし
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 教員免許	昭和 57 年 3 月 31 日 昭和 57 年 3 月 31 日	小学校教諭 1 級普通免許状 昭 56 小普第 5892 号 (埼玉県教育委員会) 中学校教諭 2 級普通免許状 (社会) 昭 56 中普第 5629 号 (埼玉県教育委員会)
2 特許等 特になし		

3 実務の経験を有する者について特記事項 ○授業づくりセミナー講師 ○全国附属学校養護教諭部会でのメンタルヘルスについての発表	平成 21 年 8 月 平成 21 年 8 月	○神戸大学附属住吉小学校が主催した「授業づくりセミナー」において授業を公開し、その後のセミナーにて講演を行った。具体的には、小学校2年生を対象にした鬼遊びの授業を公開した。この中では、指導要領の改定時期と重なっていたため、改定の趣旨について解説し、改定後の内容に沿った授業づくりのポイントを示した。 ・既習内容や体験を基に、課題を明らかにさせる。 ・新しい内容を知り、これまでにしたことがない動きや作戦の考え方などを見つける。 ・子どもが運営するゲーム大会を開催する。 ○絆を大切にする子どもの育成を目指して子どものケア体制の充実～という題目で、日々の学校で起こる子どもたちの抱える諸問題を解決するために、「心のケア委員会」を立ち上げた。この委員会が機能するために、教育相談担当者・カウンセラー・メンタルフレンド・養護教諭・管理職の連絡体制、相談体制、指示体制などを具体的な事例をもとに発表した。
4 その他 「社会貢献」 芦屋市教育委員会 「社会科副読本作成アドバイザー」 全国大学体育連合主催 大学体育指導者全国研修会講師 「指導助言関係」 ・芦屋市立朝日ヶ丘小学校講師 ・三田市立武庫小学校講師 ・三田市教育委員会主催研修会講師	平成 21 年度 平成 24 年 8 月 平成 16 年度～22 年度 平成 21. 22 年度 平成 21. 22 年度	芦屋市社会科部会作成の社会科副読本のアドバイザーとして企画・編集・校正に取り組む。指導内容として、3・4年生の社会科の指導内容を押さえ内容にするとともに、芦屋市の特色を取り入れるようにアドバイスをを行った。 大学体育連合会の研修会にて大学教員へ「フラッグフットボール」の実技講習を行った。大学での体育授業に取り入れるための研修会として初心者への指導の具体を示した。この研修では、基本的な動きからゲーム（戦術）まで網羅的に体験することができました。研修を通して、フラッグフットボールの魅力を体感し、その特性を生かした授業について、実践的な知見を学ぶことができるプログラムを紹介した。 校内授業研究会での指導助言及び研究発表会時の指導助言 校内授業研究会での指導助言及び研究発表会講師 研究主任対象の「学校研究の進め方」講師 校内授業研究会での指導助言

・川西市市立久代小学校指導助言	平成 23. 24 年度	校内授業研究会での指導助言
・芦屋市教育文化センター講師	平成 27 年 5 月	若手教員が今やるべきこと「授業実践を通して」講演
・芦屋市山手小学校研究会講師	平成 27 年 8 月	授業研究の進め方「学び合いのある活動について」講演
・西日本私学連盟体育部会実技研修講師	平成 28 年 5 月	「フラグフットボール授業の進め方」実技研修において、小学校高学年におけるゴール型ボールゲームの考え方及びフラグフットボールの授業展開の仕方 講師
・奈良県三宅町立三宅小学校運動能力向上のための指導講師	平成 28 年 5 月	小学生 1 年生から 6 年生を対象に、投動作の指導を実施しボール投げの技能向上を目指した指導を行った
・奈良県三宅町立三宅小学校ボール運動授業実技講習指導	平成 28 年 8 月	フラグフットボールを中心にボールゲームの授業構想について 2 日間に渡り実践指導を行った。
・尼崎市立大島小学校講師	平成 28 年 8 月	学級づくりのポイントを示し、子供が主人公の学校づくりの必要性を指導した。
・芦屋市教育文化センター講師	平成 28 年 8 月	2 年次から 5 年次までの若手教員を対象に、学級づくり・授業づくりを指導した。
・奈良県三宅町教育委員会授業評価委員	平成 29 年 2 月	三宅町教育委員会の企画事業を第三者の立場で評価した。
・奈良県三宅町健康づくり推進協議会座長	平成 29 年 3 月	三宅町における健康増進計画・食育推進計画を審議し、計画書を作成した。
・芦屋市授業研究担当者会講師	平成 29 年 5 月	芦屋市の小中学校授業研究担当者会において、授業研究の進め方として、どの年代の教員も積極的に研究に取り組む手立てを指導した。
・奈良県三宅町教育委員会授業評価委員	平成 30 年 2 月	三宅町教育委員会の企画事業を第三者の立場で評価した。
・芦屋市授業改善部会講師	平成 30 年通年	新学習指導要領による授業改善の具体を指導する。3 つの柱にした授業の具体とその評価について講話等を行なった。
・芦屋市新任教員研修講師	平成 30 年 8 月	芦屋市新規採用者を対象に、授業のつくりかたを中心に、新任として必要な教師の脂質と能力を講話した。
・奈良県三宅町教育委員会授業評価委員	平成 31 年 2 月	三宅町教育委員会の企画事業を第三者の立場で評価した

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文) 1 グローバル社会を生きる「社会の更新」を実現していく子どもの育成 ～「活用」を視点にした授業づくり～	共著	平成 22 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2009 P6～P22	授業を通して子どもが新しい知識を生み出したり取り入れたりすることを知の更新とし、更新していくための有効な手立てについて提案した紀要である。この基礎編に対して、研究内容の論の進め方、その具体、成果と課題が整合しているかを読み取り、研究部へ伝達した。伝達内容は、活用型授業には、内容面で知の更新が必要であり、内容の深化として「新たな知」が授業展開に位置づけられることが必要であるといものである。 ～「活用」を視点にした授業づくり～ 単元目標に向けた一時間として本時までの知を、各教科等の視点からとらえ直して、活用できる形にする。活用できる形にするとは、前時までの学びをもとにして、本時の課題解決をしていく際に、どのような視点を持てばよいのかを明確にするということである。また、「新たな知」を生み出させるために個々の考えをつなぎ合わせることも必要であるということを示した。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：高橋正、福原雅生、小林秀平、森一弘（他 19 名）
2 グローバル社会に生きるひびき合う学びを創造する子ども ～確かな理解を生む相互作用の場をデザインする～	共著	平成 23 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2010 P6～P16	授業の中で、友だちとの関係性を核にして互いに納得し、新しい知識や技能を身につけていくことを提案した紀要である。 この紀要の基礎編に対して、研究内容の論の進め方、その具体、成果と課題が整合しているかを読み取り、研究部へ伝達した。伝達内容は、授業において他者との交流による活動を内容面の違い、同意、視点の違いなどから授業を構想する必要性を明らかにすることである。 ～確かな理解を生む相互作用の場をデザインする～ 相互作用の質の向上のためには、教科等の知をどのような活動を通して子どもに出合わせるのか、その場面や支援の具体について教材研究をしておく必要がある。一つは、多様な見方や考え方を表出する場において、何が他者と違うのか明確に言語化させることが必要である。二つ目は、新たな知を創出する場において、自己の変容を言語化して自覚化を図る必要性があることを明らかにした。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義、福原雅生、神山真一、森一弘（他 19 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3「共創」を実現していく子ども ～相互作用の質に着目して～	共著	平成 24 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2011	授業の中で、友だちとの関係性を核にしその関係性をつないでいくための方策を提案した紀要である。 この紀要の研究基礎編に対して、研究内容の論の進め方、その具体、成果と課題が整合しているかを読み取り、研究部へ伝達した。伝達内容は、授業化の視点を具体として授業の中に位置づける時、課題の認識では、比較や資料からの読み取りなど諸能力の必要性を指摘し、修正していかせた。 ～相互作用の質に着目して～ 互いの思いや考え尊重しながら影響を与えあう相互作用を生むために、「援助の授受」に着目し、相互作用の質を規定する要素として位置づけた。授業において「援助の授受」を伴う相互作用を通して新たな価値を生むために、問題解決の過程に二つの「授業化の視点」を設定し、その有効性を明らかにした。 授業化の視点 1：葛藤を顕在化し、共通の課題を認識させる。 授業化の視点 2：各自の理解深度のプロセスや理解の結果をもとに思考を深化させる。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義、福原雅生、佐古賢一、<u>森一弘</u>、（その他 16 名）
4「協働社会」を実現していく子ども ～つながりが生まれる場をデザインする～	共著	平成 25 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2012 掲載 p6～p18	「協働社会」を実現していくために、協働的な学びの中で、互いの観方や考え方を調整しながら、よりよい問題解決の道筋を探り解決を図る子どもとおいた。具体的に授業を構想する手立てを示した。その内容は「聴きとなる状況を生む」「相互了解を生む」「自分の考えの見つめ直しを生む」という 3 つの瀬点を設け授業構想を考え、実践をし結果から検証していくようにというものである。 ～つながりが生まれる場をデザインする～ 3 つの視点を持って実践した結果、次のようなことが明らかになった。 対象に対する自分の考えを明確にし、他者と考えとの共通点や相違点に気付かせ、解決を図る手立てが必要である。 互いが納得できる見方や考え方について表現させる手立てが必要である。 自分見方や考え方の変容の過程をふりかえり、学習内容に対する理解を深めたり、意味づけを豊かにしたりする手立てが必要である。 このような 3 つのことが明らかになった。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義、福原雅生、小河内直樹、<u>森一弘</u>、（その他 13 名）
5 新しい体育授業の創造をめざして ～ライフスキルの育成を視野に入れた体育学習～	単著	平成 25 年 3 月	教育 PRO 3 月号 株式会社 ERP 掲載 p6～p9	「成就性」「承認性」「親和性」の三つの要素をおき、体育授業を実践していくことは、子どもが運動好きになることでもある。「精一杯動いた楽しさ」「できるようになった喜び」「仲間と協力できたよさの実感」「新しい発見」がある授業である。この結果として、身体的エフィカシーが高まり、セルフエスティームの獲得がみられるという主張を行った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6 人間教育を支えるもの～自尊感情に焦点を当てる体育科の授業構想～	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究 第 2 号「人間教育学」の可能性-理論の展開と実践- p89～p100	体育科の授業構想において次の 3 点がポイントとなることを明らかにした。①この多様性を授業に関わる全員が受け入れる。②仲間との関わりで生成される思考や技能を表現する。③仲間との関わりの中で差異を明らかにし認め合う。 このポイントを授業に位置付けることで、体育科の特性としての資質も高めることができる可能性がある。○自由に操れる体・身体的エフィカシー、○精神的・肉体的な粘り強さ、ストレス対処スキル、○批判的思考、社会性、コミュニケーション、自律心などの資質を高めることができ、この資質が生涯スポーツへつながっていく大事な要素であることを示した。
7 共に学びを創り合う子どもをめざして～言葉を生かし知識や技能を更新する～	単著	平成 27 年 2 月	芦屋市立山手小学校 研究紀要 2014 掲載 p33～p39 掲載 p120～p126	授業研究基礎編 授業研究において最も大事にしたことは、各研究同人の主體的な取り組みである。研究同人である教師一人ひとり、授業の質を高めることを目指し、授業研究に取り組んできた。授業の質について秋田は、『一人ひとりの子どもが授業中どれだけ「安心・安定（well-being）しているか」という居場所感と、学びの対象に対してどれだけ深くまたより長く「没頭・夢中（involvement）関わり考えることができるか』という集中の 2 点を挙げている。この 2 点を踏まえ、子どもたちが教師との信頼関係、仲間に受け入れられているという受容感、よくわからない、迷ったり、困ったりしていることを自己開示できる安心感、自分の考えや言葉に共感しそれを豊かにすることから生まれる一体感を授業の中でみていくという主張を行った。 授業実践編 生き物の 3 つの特徴である、 ◇「外の世界とつながり」事例 1 ◇「一つの個体としてつながり」事例 2 ◇「長い時間の中で過去の生き物たちとつながり」事例 3 をなぜ筆者は、この順で示し、特徴として挙げたのかということを考える時間である。 （批判的思考の活用）この特徴をこの順で示した理由は、目に見える身近なつながりから目には見えないつながりを挙げ、つながりがだんだんと長くな っていき、事例 3 のつながりは永遠につながっていくという時間的空間の深まりを意味している。このような筆者の工夫を共同的な学びで発見させ、読みの楽しさを実感させることを明らかにした。 共著者：中村整七、西尾節子、 <u>森一弘</u> （その他 32 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8 フラッグフットボールにおける戦術アプローチによる簡易化されたゲームの有効性と課題	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要 掲載 p135～p141	フラッグフットボールは、アメリカンフットボールを簡易化したゲームである。簡易化された要素は、タックルの危険性を回避するために腰につけたフラッグをとることで、身体接触を禁止した。また、人数は5人対5人とした。用具であるボールは、小さく柔らかいものとしている。指導要領に示されている簡易化する要素を取り入れながら、授業を展開している。この中で、戦術アプローチの考えを持ち込み、アントナumberのゲームであったり、パスに限定した動きをさせたりするが、これらの学習では、子どもたちの作戦をつくりだすという思考・判断させる活動が弱体化させていることを指摘し、オープンnumberでのゲーム、ボールをゴールに運び込む手立てを提案した。
9 新聞を活用した総合的な学習の時間-アクティブ・ラーニングを意識した授業-	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究 第3号「人間教育学」の視座-新しい「教育改革」への提言- p107～p114	新聞を活用し、子供たちが自らの興味関心にもとづき、課題を設定し、課題を解決するために情報を集め、課題解決のための方策を考え、まとめていく授業実践を提言した。この中で、新聞活用のポイントとして、「琴線に触れる言葉を探させる」「これからの自分の生き方について示唆している記事を探させる」という2点が重要であることを明らかにした。
10 経験による「教師の成長」について考察する	単著	平成 28 年 3 月	大阪教育大学実践学校教育講座 実践教育学論集 2015 -現代の教育問題を考える 20- p58～p61	「教える」という営みは、子どもたちの活動と結果として起こる事柄の詳細な関連を見いだし、反省していく熟慮的な「経験」だととらえることができないだろうか。ここでいう「経験」は、常に他者や自分自身の未来に開かれ、また新しいものを絶えず受け入れていこうとする。このような「経験」の繰り返し、教師の成長を確かなものに「教える」プロとして変容をもたらせてくれる。日々の授業の中で一人ひとりの子どもや個々の教材と向き合い熟慮する。また、日々、教師は自分の行動をふりかえり、反省的に教材内容の本質や子どもの思いに気づいていくことを、教員志望の学生に指導する必要性を提言した。
11 修士論文 小学校体育におけるフラッグフットボールゲームの授業実践研究-オープンnumberゲームの有効性-	単著	平成 29 年 1 月	大阪教育大学大学院 教育研究科	本研究の目的は、フラッグフットボールゲームを公式ルールである5人対5人(クラスの数によっては、4人対4人)のオープンnumberゲームで実施しても戦術学習が成り立つことを明らかにすることであった。結果として、ゲームパフォーマンスが向上する。以上のことから、フラッグフットボールの授業においてオープンnumberゲームを用いて授業展開しても、戦術的な学習課題へ焦点化でき、プレーにおいて子どもたちの役割の明確化とともに積極的なプレーへの参加を促す可能性があることを明らかにした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12 新しい視点から見た教職入門	単著	平成 30 年 3 月	大学教育出版 第 4 章 教員のメンタルヘルス p89～p105 第 5 章 教育実習・教育実習事前事後指導・教職実践演習 p251～p265	教員のメンタルヘルスに関する現状と課題を明らかにし、予防的取り組みについて述べた。教育実習の意義及び実習に関わる組織の役割、実習のための具体を示した。また、有意義な実習になるための必要な条件について述べた。 共著者：中田正浩、住本克彦、 <u>森一弘</u> 、長井勘治、その他 6 名
13 特別支援学校における感染性胃腸炎ンボ集団発生の要因とその拡大予防に関する検討	共著	平成 30 年 10 月	奈良学園大学研究紀要第 9 集	特別支援学校において感染性胃腸炎の集団発生から終息までの欠席。学級閉鎖の状況対応策の記録を分析し、感染ルート、感染拡大の原因、対応策について検討した。病原菌の感染力に強さに加え、児童生徒の過密、授業等における集団の形成が感染の原因である可能性が示唆された。共著者：中島栄之介、 <u>森一弘</u>
(その他) 1 芦屋市立朝日ヶ丘小学校指導助言時の冊子	単著	平成 16 年度～22 年度	神戸大学附属住吉小学校 森 4 ページ	*全員の先生方の授業を参加しての感想および助言を文章にまとめ配布した。 ・教室の空間：たおやかな空間を 静かな空間を 整理整頓された空間を 教師が最大の言語環境である ・活動量ありきで内容なしの授業はしない工夫 ・子どもとの関係づくり：つなぐ、もどす、きく 子どもを体こ入れる 子どもと面を作る ・同僚生の発揮 ・私の授業の創造 ・指示命令のない学校づくり ・縦割り集団の意義
2 三田市教育委員会主催研修会講演時の冊子	単著	平成 21. 22 年度	神戸大学附属住吉小学校 森 2 ページ 2 ページ	研究の進め方 *研究の進め方～研究テーマの設定の仕方～ ・児童の実態、教育界の課題、教師の思いを織り交ぜてテーマを設定 ・学級を開くという意味 ・授業化の視点を創り出す ・同僚生の発揮が必要 *学習評価の在り方 ・絶対評価と相対評価の違い ・評価規準と評価基準 ・単元目標と本時目標の関係と自己評価の指導
3 芦屋市教育委員会「社会科副読本作成アドバイザー」	共著	平成 21 年度	芦屋市教育委員会	芦屋市社会科部会作成の社会科副読本のアドバイザーとして企画・編集・校正に取り組む。指導内容として、3・4 年生の社会科の指導内容を押さえ内容にするとともに、芦屋市の特色を教材化し、問題解決型の副読本づくりをサポートした。 編者：芦屋市教育委員会、 共著者：伊田義信、金川秀人、俵原正仁、 <u>森一弘</u> （他 9 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 フラッグフットボール指導テキスト	共著	平成 22 年 7 月	日本フラッグフットボール協会	指導者テキストづくりへの助言 日本フラッグフットボール協会から出版した指導者のためのテキスト 36 ページ（教科書）高橋建夫先生が監修した，学校体育で活用できる練習方法などを示した。オフェンス時の作戦づくりをしていくために，2 対 1，4 対 3，5 対 3，（オフェンスチームの人数を多くする）でパスコース・ランコースを考えていくモデルとなる動きを示した。また，オフェンス時にも相手チームをブロックする動きを示し，フラッグフットボールのオフェンス時の作戦をスモールステップで学べるように工夫した。 共著者名：高橋建夫， <u>森一弘</u> ，（その他 5 名）
5 川西市市立久代小学校指導助言時の冊子	単著	平成 23. 24 年度	神戸大学附属住吉小学校 森 2 ページ	体育授業の進め方 サッカーゲームの単元構想 ・ドリルゲーム タスクゲームの位置づけ方 ・スペースの利用 ・課題の持たせ方→振り返りの活用 ・思考力の育成をめざして
6 全国大学体育連合主催 大学体育指導者全国研修会「大学体育 100 号」	単著	平成 24 年 12 月	全国大学体育連合 掲載 p55～p57	大学での体育授業に取り入れるための研修会として初心者への指導の具体を示した。フラッグフットボールの研修では、基本的な動きからゲーム（戦術）まで網羅的に体験することができました。研修を通して、フラッグフットボールの魅力を体感し、その特性を生かした授業について、実践的な知見を学ぶことができるプログラムを紹介した。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏 山 本 美 紀

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
芸術学（芸術学・音楽学・芸術史・芸術一般） 教育学（教育学・教科教育学）	各教科の教育（音楽）、生涯教育、社会教育、多文化教育、社会福祉、共生社会、音楽学・音楽史、芸術諸学、芸術政策・産業	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
・ 視聴覚教育技術の利用	平成 20 年 10 月 ～平成 21 年 9 月	関西学院大学神学部の非常勤講師として担当の「キリスト教と音楽」（専門科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位）において、グレゴリオ聖歌の原曲と楽譜、またその現代における応用例を、視聴覚教材を用いて講義した。特に、グレゴリオ聖歌は音楽教育として用いられたものでもあるため、各国図書館に保存されている画像を提示の上、旋律線をアップル社のアプリケーションなど最新機器を用いて再現した。その結果、学生たちにはより具体的な理解が促進されたと同時に、教職を希望する学生の受講者も多かったため、音楽教育法の歴史的体験も可能となり、満足度の高い授業となった。
・ 大学教育と連動した地域への実践教育	平成 23 年 4 月 ～平成 25 年 3 月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「子育て支援実践演習Ⅰ」（コア科目、2 年次配当、通年、選択 4 単位）、「子育て支援実践演習Ⅱ」（コア科目、3 年次配当、通年、選択 4 単位）において、地域貢献のための実践教育を実施。学生たちの、地域の子育て支援ができる技能や発想力、また企画運営のための即戦力を育成する実践教育を行った。その結果、学生たちのコミュニケーション能力の向上がみられ、地域の評価を高めた。
・ 講義・演習授業の効果的連携 ・ 視聴覚教育技術の利用	平成 23 年 4 月 ～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部専任准教授、また奈良学園大学人間教育学部専任准教授として「音楽の理解」（講義）において、音楽の専門用語及び音楽の思考法について徹底した理解の定着を行う。その知識を、「音楽科指導法（教育法）」（演習）での学習指導要領の内容理解につなげ、模擬授業の指導案作成及び実施に際して、具現化できるよう指導を行った。特に、合奏指導に関する模擬授業については、楽譜の編曲指導、楽器の演奏法など、より実践に則したものとなるよう、小学校での大学生によるボランティア指導の様子などの記録ビデオを使用し、学生によりイメージを持ちやすく指導を工夫した。

・演習・実習の効果的な活用 ・楽器奏法の教授	平成23年4月 ～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部専任准教授、また奈良学園大学人間教育学部専任准教授として担当の「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門科目、1・2年次配当、半期、選択2単位）において、特にⅠ・Ⅱを実習必修科目と設定。科目の到達目標を実習で利用できる音楽能力の確保（ピアノ基礎と弾き歌い）と設定し、各自のレベルに応じて完全個別レッスンを実施。さらに、音楽系科目「音楽の理解」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「音楽科教育法」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）、「表現B（音楽表現）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）と教科内容を連動。学生がスパイルに多様な音楽的能力をつけられるよう工夫した。その結果、学生の理解と音楽的実力が伸び、実習先からも実習生に高い評価を得た。
・演習・実習の効果的な活用 ・楽器奏法の教授	平成23年4月 ～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授、また奈良学園大学人間教育学部専任准教授として担当の「音楽科教育法」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）、「表現B（音楽表現）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、小学校学習指導要領、幼稚園教育要領を詳説したうえで、いかに具体的教育実践へ落とし込んでいくか、実例を挙げて解説。指導案作成指導とともに、模擬授業を実施し、教育法の実践的活用を具体的に指導した。その際、初等教育で使用する楽器（カスタネット・タンブリン・鈴・ピアノカなど）や小学校で使用するリコーダー等の基本的な奏法も、授業で活用できるよう指導した。その結果、音楽科教育や幼児への音楽表現の指導に対する理解が深まり、実習先からも高い評価を得ると同時に、2次試験対応能力が向上し、学生の教員採用試験、公務員試験（専門職）合格に貢献した。
・レポートの活用 ・オフィスアワーの活用	平成23年4月 ～現在に至る	リメディアル教育やキャリア教育の一環として環太平洋大学で取り組まれてきた「学習支援講座（国語）」「小論文講座（基礎）（応用）」「基礎ゼミ」、また奈良学園大学人間教育学部での「教職表現力演習Ⅰ、Ⅱ」では、レポートの提出による学生の文章力の向上に貢献してきた。 特に「教職表現力演習Ⅰ」では、教職に必要な基礎的日本語運用能力の向上を、同Ⅱでは教職に必要な文章スキルを基盤とした、社会的文章構成力を培い、各テーマに即した文章作法を指導した。さらにオフィスアワーでは、ディスカッションも取り入れ、個々の問題意識を文章に活かす指導を行った。その結果、学生の段階的な日本語運用能力が向上し、論理的思考力の育成に貢献した。
・授業用コミュニケーションシート（大福帳）の活用	平成26年4月 ～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「音楽の理解」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）及び「音楽科指導法」（教職科目、2年次配当、半期必修1単位）において、学生とのコミュニケーションの確保・出席の確認・学習内容の習熟状況の確認のために、「授業用大福帳」を導入。各授業終了時に授業内容についての質問の他、学習方法についての質問を記入させ、次回授業に返すようにしている。中には、大学生生活全般についての質問なども含まれる場合もあり、学生の出席状況の把握に努めるだけでなく、生活状況の把握にも役立てることができている。

2 作成した教科書、教材 ・講義用補助教材（視聴覚教材） ・学生配布用ワークシート ・『小学校で培う音楽の力 ー共感する心を育てる』（再掲） 山本美紀 著 ヨベル社（平成 22 年 12 月出版） 【全 96 ページ＋別冊課題 48 ページ】 ・『幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現ー音楽でつむぐ学びの歳時記』（再掲）山本美紀／岡田美紀編著 ヨベル社（平成 22 年 10 月出版） 【全 157 ページ＋別冊課題 23 ページ】 ・『新装改訂版 小学校で培う音楽の力 ー共感する心を育てる』（再掲）山本美紀 著 ヨベル社（平成 24 年 4 月出版） 【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	平成 21 年 4 月 ～9 月 平成 23 年 4 月 ～平成 24 年 3 月 平成 23 年 4 月 ～平成 24 年 9 月 平成 24 年 4 月 ～平成 26 年 3 月	関西学院大学神学部の非常勤講師として担当の「キリスト教と音楽」（専門科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位）において、歴史的に希少価値の高い資料や、フィールドワークで独自に採取した資料を扱う必要性から、パワーポイントによる視聴覚教材および、学生配布用のワークシートを作成した。ワークシートは日付順にファイルすることで最終的に講義ノート（参考書）として完成するようになっており、学習ポイントが明らかになるよう工夫を行った。その結果、学生は復習が可能となり、試験対策時にもポイントを押えた学習が可能となった。 環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「音楽科教育法」（専門科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）のためのテキストである。前半で音楽科教育史および、学習指導要領実現のための授業実践について解説を行っている。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。 環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「表現 B（音楽表現）」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、「音楽の理解」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）および「器楽演習 I・II・III・IV」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。基本的なソルフェージュ知識や、弾き歌い、小学校低学年用音楽科共通教材、幼稚園教材とともに、幼稚園保育園に関する音楽が関わる学校行事運営において、必須項目について解説した。音楽に関する項目について執筆。 巻末には幼児教育の現場で使用されやすい楽曲の伴奏用楽譜と、小学校の低学年用共通教材の伴奏用楽譜を収録している。基礎的楽典内容などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。（山本美紀／岡田美紀：行事に関する内容担当、山口聖代：編曲担当） 環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「音楽科教育法」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、および「器楽演習 I・II・III・IV」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。前刊で音楽科教育法講義の際に使用したことをふまえ、内容に小学校共通教材の編曲された伴奏用楽譜、および図表解説を追加。さらに授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて解説を強化した。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。
--	--	---

・『新装改訂版 幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽表現で紡ぐ歳時記と役立つ楽器』（再掲）山本美紀／岡田美紀編 ヨベル社（平成 25 年 3 月出版）【全 B5 判 全 175 頁＋別冊課題 32 頁】	平成 25 年 4 月～平成 29 年 3 月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「表現 B（音楽表現）」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、「音楽の理解」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）および「器楽演奏Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。前刊で「表現 B（音楽表現）」に使用したことをふまえ、小学校低学年用音楽科共通教材、幼稚園教材とともに、現場で用いられやすい基礎的な楽器群について解説を行う。音楽に関する項目について執筆。また別冊には従来の内容に加え、指導案作成用の用紙を添付。授業の復習とともに、実践的な理解ができるように工夫した。（山本美紀／岡田美紀：行事に関する内容、筒井はる香：楽器に関する内容、山口聖代：編曲担当）
・『教職表現力ノート』（再掲）西辻正副／<u>山本美紀</u>編著 奈良学園大学（平成 27 年 4 月）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】 共著者：岡村季光 岡野聡子 高木悠哉 松井典夫	平成 27 年 4 月～平成 29 年 3 月	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「教職表現力演奏Ⅰ」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 1 単位）のためのテキストである。新聞のコラムをはじめとした模範的文章の書きとり、語彙力をきたえるための項目、より深く記事を読み込むための要約演習ページを含む。本教材により、大学生にふさわしい基礎的な日本語運用能力を鍛えると共に、それらを教員の言葉としてつなげる工夫が行われている。編者として関わると共に、音楽に関するミニレクチャーの項目について執筆。人の話を聴いて、必要な情報を獲得していけるよう、実践的学びができるように工夫した。【A4 判 全 142 頁】（山本美紀：2-63, 108-109）
『音楽教育から地域の文化力へ－イメージをつむぐ』（再掲）山本美紀編著 株式会社 ERP	平成 27 年 7 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授（平成 29 年度より教授）として担当の「コミュニティと音楽文化」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 1 単位）のためのテキスト、及び音楽科指導法・表現（音楽）の参考資料として作成。幼稚園や小学校での音楽を通した学びが地域の文化とつながり、やがて地域文化力の基盤となっていくための発達に応じた指導法について言及。 学校と地域との交流としてのゆるやかな連携だけでなく、幼児期の遊びや音楽科の授業をより豊かにするための外部連携を取り入れた指導法について、保・幼・小各校種別の実践からアプローチしたもの。特に、地域の教育力を学校内で生かしていくことは、子どもたちにとって学びの機会をより豊かにすることにもなる。編者として関わると共に、各校種別の発達段階に応じた連携事例に基づく指導法について執筆。実践的応用力が得られるように工夫した。編著者：山本美紀、著者：伊崎一夫、大久保充代、寺尾正、中村滋延、根岸一美、御園綾菜【A5 判 全 105 ページ】（山本美紀：5-8, 20-33, 51-61, 63-82; 表作成, 85-88, 101-103 頁）
・『人間教育としての音楽科教育 一知覚・感受から共感へ』（再掲）山本美紀 著 ヨベル社	平成 27 年 9 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授（平成 29 年度より教授）として担当の「音楽科指導法」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）に合わせ、さらにこの数年でより具体化した学習指導要領と授業内容をふまえた音楽科指導について、人間教育の視点に立った指導法の解説を行う。 特に、現行の音楽科学習指導要領において問題となっている「知覚」「感受」の解釈と実践に焦点を当て、音楽用語としての独特な位置づけから、互いのコミュニケーションへとつなぐために「共感」をキーワードとし、音楽だからこそできる「人間教育」としての音楽科指導を示す。 【A4 版全 123 頁＋別冊課題 48 頁】

・『幼児・初等教育のための音楽表現と指導法―歳時記と学ぶ楽典・子どものうた・鑑賞』（再掲）山本美紀 編著 ヨベル社	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任教授として担当の「音楽科指導法」（コア科目、2年次配当、半期、必修2単位）に合わせ、幼稚園教育及び、小学校音楽科教育に共通して必要かつ基本的な楽典やソルフェージュ知識、弾き歌い、編曲法、表現指導について解説し、その指導法を示したもの。幼小の学びの連続性への配慮から、「童謡」「鑑賞」の項目を設け、「童謡」では日本語としての美しさや価値観を、「鑑賞」では多文化理解につながる指導を、園・学校での歳時記を背景に示す。基礎的な楽典の知識もカバーしており、音楽の要素をふまえた幼児の表現活動への指導法、初等教育段階での指導法を発展的に扱う。音楽に関する学校行事運営において、必須項目についての解説を行うと共に、幼稚園要領の「表現」について、具体的な曲をとりあげ、曲の持つ歴史的背景と共に発達との関連性を意識して内容を解説。全体レイアウト、及び音楽に関する項目執筆。 （pp:7～9, 12～15, 18～21, 24～27, 30～33, 36～39, 42～45, 48～51, 54～57, 60～63, 66～69, 72～75, 78～81, 84～87, 90～93, 96、別冊課題： 全21頁分）編著者：山本美紀 著者：岡田美紀、筒井はる香、山口聖代、中村徹 【A4版全215頁＋別冊課題32頁】
3 教育上の能力に関する大学等の評価 ・環太平洋大学次世代教育学部「音楽科教育法」 「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成23年9月	受講生：154名クラス数：2クラス（2コマ） 1. 資料及び白板や教育機材の使用は適切：3.39 2. 毎週の学習目標は明確：3.30 3. 話し方は明瞭で、声量も適切で聞き取りやすい：3.46 4. 質問したり、意見を述べたりする配慮：3.23 5. 授業の進度や説明は適切：3.34 6. 授業への参加意欲が促されるような工夫がされていた：3.34 7. 教員の授業に対する熱意が感じられた：3.36 8. この授業は適切な方法で展開され、興味を持つことができた：3.29 9. この授業で有用な知識やスキルを習得できた：3.38 10. この授業では私語・居眠り・携帯電話などの迷惑行為はほとんどなかった：3.35 11. この授業は開始・終了時のあいさつを含めきっちり行われていた：3.46 12. この授業はわかりやすかった：3.29 13. 総合的に見てこの授業は満足でき、受講を後輩に勧めたいと思う：3.30
・環太平洋大学次世代教育学部「表現B（音楽表現）」 「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成24年3月	受講生：99名クラス数：2クラス（2コマ） 1. 資料及び白板や教育機材の使用は適切：3.21 2. 毎週の学習目標は明確：3.33 3. 話し方は明瞭で、声量も適切で聞き取りやすい：3.30 4. 質問したり、意見を述べたりする配慮：3.27 5. 授業の進度や説明は適切：3.24 6. 授業への参加意欲が促されるような工夫がされていた：3.18 7. 教員の授業に対する熱意が感じられた：3.39 8. この授業は適切な方法で展開され、興味を持つことができた：3.28 9. この授業で有用な知識やスキルを習得できた

・奈良学園大学人間教育学部「音楽の理解」 「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成 27 年 3 月	10. この授業では私語・居眠り・携帯電話などの迷惑行為はほとんどなかった：3. 43 11. この授業は開始・終了時のあいさつを含めきっちり行われていた：3. 40 12. この授業はわかりやすかった：3. 18 13. 総合的に見てこの授業は満足でき、受講を後輩に勧めたいと思う：3. 18 講義内容・方法：3. 29 総合的満足度：3. 44
・奈良学園大学人間教育学部「音楽の理解」 「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成 28 年 3 月	講義内容・方法：3. 53 総合的満足度：3. 83
・奈良学園大学人間教育学部「音楽の理解」 「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成 29 年 3 月	講義内容・方法：3. 16 総合的満足度：3. 29
4 実務の経験を有する者についての特記事項 【シンポジウムパネリスト、講演等】 ・展覧会シンポジウム・パネリスト 『會館の時代ー中之島に華開いたモダニズムとその後』（東京大学 比較文学比較文化研究室、表象文化論研究室主催） 山本美紀「朝日会館から大阪フェスティバルホールへ アウセイ・ストロークー文化装置のデザイナーとしての音楽マネージャー」	平成 27 年 3 月 14 日	1926 年から 1962 年までかけて存在した「大阪朝日会館」とその機関誌『會館藝術』の、関西のモダニズム運動をけん引した働きについてのシンポジウムと展覧会。その中で、文化施設・機関雑誌として、社会的に果たした教育的役割と啓蒙的役割、またその後の大衆文化との関連性について解説を行う。特に音楽マネージャーと日本人スタッフによって達成された地方公演は、遠征地での児童たちとの関わりを可能とし、洋楽受容をより身近なものとして受け止めることを可能にした点に注目した。
・トーク・イベント 「中之島 3 丁目 時代と建築の響き合い『よみがえる朝日会館』」主催；朝日ファミリー・ニュース、後援；朝日新聞社、協賛；竹中工務店、関電工、高砂熱学工業、協力；朝日ビルディング	平成 27 年 8 月 28 日	登壇者として参加。関西モダニズム運動の牙城となり、建築としても特徴的な朝日会館そのものに焦点をあてたトーク・イベント。研究会の成果を広く社会に知らせる目的も同時に持っていた。基調講演では特に、朝日会館で行われた子供の教育に関するプログラムについて言及し、地域の教育・文化施設として朝日會館が果たしていた役割、さらに運営方法について、芸術的内容と共に解説を行った。＜登壇者＞前島志保（東京大学准教授）、<u>山本美紀（奈良学園大学准教授）</u>、山上揚平（東京芸術大学講師）ほか
・「音楽と社会」研究会シンポジウム：音楽が生起するときー出会う《職業人・愛好者・大衆》ー 「音楽を媒体とする場の考察からー宗教・教育・音楽祭ー」（再掲） 立命館大学衣笠キャンパス創思館	平成 28 年 1 月 23 日	立命館大学公開研究会「音楽と社会」研究会 基調講演者として登壇。 芸術作品の成立に欠かせない、芸術科や鑑賞者、価値を歴史的に担保・維持する関係性について、特に音楽の実践における人々の関係性に着目して開催されたシンポジウム。 講演では、音楽祭や専門家による教育プログラム等の音楽活動における、音楽家と人々との関係性の歴史的変遷について論じる。 長年、芸術によって社会を有機的に結びつけることを盲目的に信じる考えが合ったが、近年では「芸術の社会を分断する力」を認識し、克服しようとする目的が、欧米諸国における芸術に携わる諸団体の各種「教育プログラム」やアーツカウンシルの取り組みの根底にあり、それが作品そのものにも影響を与えていると考えられる。本講演では、これまでの日本における「アートマネジメント」や「文化政策」の課題を提示した上で、欧米諸国の現状を紹介し、後の議論につなげた。

・パネルディスカッション「賛美歌の共有について 思うこと」（再掲） 立教大学 池袋キャンパス	平成 28 年 9 月 10 日	2016 日本賛美歌学会第 16 回全国大会中に開催された、日本賛美歌学会主催、公開シンポジウム「讃美歌の共有を考えるー『共通讃美歌』をきっかけに」司会者／ファシリテーターとして登壇 明治以降現代に至るまで、教派により様々な賛美歌が日本で出版されてきた。そのため、同じ賛美歌であっても訳の違いや、誤訳、あるいは神学上の問題点など、情報の混乱が見られる現代である。さらに、社会的な課題に向き合う海外の賛美歌創作の状況を考えるならば、今日日本において賛美歌そのものだけでなく、賛美歌に関わる様々な情報の共有が至急の課題であることは明らかである。本パネルディスカッションでは、ようやく始まろうとしている賛美歌の共有に関わる現代の課題を提示すると共に、共有することの意義、また意識の共有について扱った。 司会／ファシリテーター：山本美紀 パネリスト：水野隆一（関西学院大学）、宮崎光（立教大学）、宮越俊充（上智大学）ほか
・シンポジウム「能楽における伝統の意味を考える」 報告「伝統文化遺産の保存と活用ー教育の場での扱いを含めた日本における動向ー」 林原美術館 （再掲）	平成 30 年 4 月 21 日	民族芸術学会公開シンポジウム「能楽における伝統の意味を考える」において、報告者として登壇。 報告「伝統文化遺産の保存と活用ー教育の場での扱いを含めた日本における動向ー」2020 年の東京五輪を前に、文化行政の動きも活発化しており、観光の目玉として日本の伝統文化について、伝統文化の「保存と活用」から、今まで以上に「活発な活用」が求められている。能も例外ではなく。そこで今回は、朝日会館における「朝日会館能」昭和初期の活動を取りあげ、現在では「ホール能」と呼ばれる形式が、どのように始められていったか明らかにした。また、現代の能に教育の場での能など日本古典芸能の事例を取り上げながら、これまで「伝統芸能」がどのように受け止められ扱われてきたのか、近代通史的に概観すると共に、「活発な活用」が「伝統芸能」に与える影響について報告を行った。
・講演「近代日本のメディアを活用した福祉活動と、メソジスト文化としての賛美歌」（再掲） 日本キリスト教団 渋谷教会	平成 30 年 9 月 8 日	日本ウェスレー・メソジスト学会主催による公開講演。 「メディア」も「福祉活動」も、「賛美」と同様にメソジストの働きとして最初から力を入れられていたものであったことから、コミュニティ形成の要素として、賛美歌の役割がコミュニティ内でどのように変化していったかについて言及した。 さらに、「ボランティア」という言葉が、今日的意義をもって使われるようになったのも、メソジストが始まりだといわれているように、福祉的働きも、メソジストコミュニティにおいて大きな役割を果たしてきた。このような、キリスト教文化を背景とした福祉的活動がどのように日本に受け入れられてきたのかについてもふれた

・「コミュニティ形成と音楽教育 ―日本近代における宗教的影響とメディア―」 神戸大学大学院	平成 30 年 10 月 19 日	神戸大学大学院における公開講演。 賛美歌の持つ歴史について概観した後、産業革命以降、変化したコミュニティ形成に、賛美歌がどのような役割を果たしたのか、またそれによるコミュニティが互助団体を超えて、どのような福祉活動を展開していったのかについて講演。さらに、現代メディアにおける被災地をはじめとした「生きることの困難さ」が、ショー化していく過程について、その萌芽がすでに近代メディアの福祉的内容の扱いや関わりから見えることを示唆した。
・シンポジウム 「文化装置としての朝日会館・『会館芸術』」	平成 30 年 12 月 2 日	登壇者として参加。 登壇者発表「朝日会館の子供対象事業；メディアが築く福祉的・重層的つながり」 1926 年から 1962 年までかけて存在した「大阪朝日会館」における、子供を対象とした企画に焦点をあてたもの。展覧会では、大阪だけでなく、神戸・京都・名古屋、東京・横浜を結んだ機関誌『コードモの本』についてパネルを作成。展示にも関わる。 シンポジウムでは特に、機関誌の果たしたバーチャル・コミュニティ形成の方法と共に、そこに関東大震災や戦争などによる社会不安へのメディアの福祉的介入が、芸術文化活動と抱き合わせで、芸術文化活動の実施根拠にも利用されながら、現代に続く試みがすでに行われていた萌芽を実証的に論じた。 ＜パネリスト＞前島志保（東京大学准教授）、岡野博（東京大学博士課程）山上陽平（東京芸術大学）、<u>山本美紀（奈良学園大学教授）</u>、 ＜コメンテーター＞橋爪節也（大阪大学教授）
【コンサート、展覧会等企画】 ・地域の公的機関等との連携による教育活動 京都フィルハーモニー室内合奏団 プロジェクト会議メンバー	平成 22 年 1 月～平成 24 年 3 月	京都フィルハーモニー室内合奏団の「子どものためのコンサートシリーズ」拡充にあたってのプロジェクト会議。ここでの内容が、コンサートに反映されていくものである。企画会議メンバーとして、子どもの発達に応じた、地域の教育機関としてのオーケストラの在り方について、提言する。 第 1 回：平成 22 年 1 月 7 日 第 2 回：平成 23 年 3 月 17 日 第 3 回：平成 23 年 8 月 5 日

・免許更新講習（幼稚園教諭免許）	平成23年8月25日 平成24年8月23日 平成25年8月20日 平成28年8月17日 平成29年8月17日 平成28年8月16日 平成29年8月17日 平成30年8月16日	幼稚園教諭免許更新に関する講習会を実施。わらべ歌を用いた音楽表現活動や、様々な楽器を用いた表現活動、ボディーパーカッションによる音楽表現などについて、即実践可能な講習を行う。音楽的技能だけでなく、身の回りの様々な素材に着目した講習内容であり、満足度の高い授業として受講者の多い科目である。
・平成23年 芦屋フォーラム「確かな学力とこころの教育—新教育課程とその実践—」 （於）芦屋市立宮川小学校 主催：非営利特定団体 人間教育研究協議会 教科部会「音楽」コーディネーター	平成23年8月12日	「音楽」部会コーディネーターとして、発表者の選定ほか運営を行う。コーディネーター発表主題：音楽科教育における地域連携の可能性をさぐる — 広がる教室とこころの育ち —
・備前市立西鶴山小学校（岡山県教育研究会 音楽部会 研究指定校）スーパーバイザー 研究授業テーマ「音楽科教育と他教科連携」	平成24年4月1日～26年3月31日	岡山県教育研究会音楽部会研究指定校である備前市立西鶴山小学校スーパーバイザーに就任。校内研修・研究授業などにおいて指導助言を行う。「音楽科教育と他教科連携」をテーマに、地域の教育資源としてのアウトリーチの活用と育成、また学校によるコンサートホールや美術館博物館など公共施設の活用について指導助言を行うとともに、施設の学校対応について具体的な提案を行い、両者のコーディネートに携わる。 校内研修会講師：平成24年4月24日、6月8日、6月29日、平成25年2月27日 研究指導助言：平成24年10月25日、平成25年1月8日（於：環太平洋大学）、 公開研究中間発表会 講師：平成25年2月27日 公開研究大会：平成25年11月6日
・備前市立西鶴山小学校 PTA 主催 教育講演会 「希望となる音楽 —人種差別を超えて—」	平成25年1月17日	備前市立西鶴山小学校 PTA 主催による講演会であると同時に、6年生・5年生の「道徳」と「音楽」の授業時間に相当するものとして計画された。 児童が日ごろあまり触れる機会のない、他国の人権問題としてアメリカの人権問題を取りあげ、「ゴスペル」と言われるジャンルのうち、人権問題に付随した形で発展してきた「黒人霊歌（ブラック・スピリチュアル）」について講演する。公演では途中に代表的な「ゴスペル」の鑑賞・体験としてのワークショップを取り入れた。地元放送局・新聞社にとりあげられる。

・研究実践授業 「音楽から生まれるダンスーダンスはどんなふう に生まれるの？」	平成25年2月 15日	科学研究費補助金 基盤研究 B による、研究実践授 業。備前市立西鶴山小学校3年生の児童を対象に、 来年度の校内コンサートに向けて、作品理解を深め るための事前指導として行う。 ＜内容構成＞ ・レクチャー 物語から音楽へ 『ももたろう』のルーツとも言われているインドの 民話『ラーマヤナ』の物語と、それをもとに生まれ た弦楽四重奏曲『ソヴァン・マチャ』を紹介し、子 どもたちの身近な物語と、弦楽四重奏曲をつなぐ。 ・ワークショップ 音楽から生まれるダンス 実際に弦楽四重奏曲『ソヴァン・マチャ』から生ま れたダンスを映像で観た後、第3学年音楽科教科書 にあるビゼー作曲「アルルの女」より《鐘》を鑑賞 した後、音楽のイメージからダンスを創作する。
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団教職研修会 「メソジストの伝統と讃美」	平成25年6月 17日:京都ロ イヤルホテル	日本フリーメソジスト教団教職に対しての講義。英 国国教会を起源とするメソジスト派の音楽の伝統 を、キリスト教における讃美の歴史から説き起こす。 現在問題となっているエキュメニカルと讃美歌の課 題と、信仰的伝統とのバランスなどについて、伝道 の最前線にあるアクチュアルな議論として展開し た。 対象：日本フリーメソジスト教団教師
・地域の公的機関等との連携による教育活動 アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかい りょこう」（再掲）	平成25年6月 20日:社会福 祉法人 日本 コイノニア福 祉会 円町ま ぶね隣保園 平成25年6月 25日:社会福 祉法人 京都 地の塩会 光 の子保育園	実践研究の一環として、地域の保育園と演奏団体と 連携し、ワークショップ型のコンサートを企画した。 コンサートでは、日常の園での表現活動を重視し、 日頃からなじみある歌をきっかけに、世界と園児と をつなぐ音楽表現の充実を、プロの演奏家の演奏に よって実現した。コンサート中には楽器の体験も行 い、すべての園児たちがヴァイオリンに触れる機会 となった。コンサート後には、演奏会の印象を園児 たちに絵で描く時間が設けられ、それぞれが音楽を 聴いた思いを絵に描いた。 対象園児：5才児 30名、演奏曲目：国際急行列車、 スペインの踊り、金婚式、タイスの瞑想曲他 出演者：森本真裕美（京都フィルハーモニー室内合 奏団、ヴァイオリニスト）
・地域の公的機関等との連携による教育活動 アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかい りょこう in まぶね隣保園」	平成25年6月 20日	実践研究の一環として、地域の保育園と演奏団体と連 携し、プロの演奏家によるワークショップ型のコンサ ートを企画。コンサートでは、まぶね隣保園での日常の表現 活動や音楽遊びを重視し、まぶね隣保園バージョンで プログラムを組み、楽器体験や音楽を聴いてのお絵か き時間などをとった。 対象園児：2~3才児 30名 演奏曲目：国際急行列車、スペインの踊り 出演者：森本真裕美（京都フィルハーモニー室内合奏 団、ヴァイオリニスト） 場所：社会福祉法人 日本コイノニア福祉会 円町まぶ ね隣保園

アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかいりょこう in 光の子保育園」	平成 25 年 6 月 25 日	実践研究の一環として、地域の保育園と演奏団体と連携し、プロの演奏家によるワークショップ型のコンサートを企画。光の子保育園での日常の表現活動や音楽遊びを重視し、光の子保育園バージョンでプログラムを組み、楽器体験や音楽を聴いてのお絵かき時間などを行った。 対象園児:5 才児 30 名 演奏曲目:金婚式、タイスの瞑想曲他 出演者:森本真裕美(京都フィルハーモニー室内合奏団、ヴァイオリニスト) 場所:社会福祉法人 京都地の塩会 光の子保育園
・地域の公的機関等との連携による教育活動 ストリングスストーリー ―がっきで、からだで、おはなししよう！(再掲)	平成 25 年 8 月 12 日:岡山県立美術館ホール	公立小学校(備前市立西鶴山小学校)と地域の文化施設(岡山県立美術館)との連携実践研究として企画した弦楽四重奏コンサート。西鶴山小学校の全生徒と、その保護者や家族を対象としたもの。「喜怒哀楽」をキーワードとしたコンサートでは、小学校音楽科鑑賞教材で既習の作品の他、事前授業で学んだ現代音楽で中村滋延作曲《ソヴェン・マチャ》を、映像・ダンスと共に鑑賞した。後のアンケートで、あらかじめ事前授業でコンサート内容を理解した子供たちが、音楽で表現された内容を深く読み取り、積極的な音楽聴取につなげていた。保護者からは、生の弦楽四重奏をコンサートホールで家族で聴く機会が持てたと、好評を得た。 対象児童:西鶴山小学校生と引率教員、保護者 演奏曲目:ワルツィングキャット、天国と地獄、ソヴェン・マチャ 出演者:京都フィルハーモニー室内合奏団、奥祥子(ダンス)中村滋(映像)
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団女性の集い 「メソジストの伝統と讃美」 ① 西部地区 ② 中部地区	①平成 25 年 7 月 5 日:明石上の丸教会 ②平成 25 年 11 月 14 日:桜井聖愛教会	日本フリーメソジスト教団女性のつどいにおいての講演。メソジストの讃美の伝統を、キリスト教における讃美の歴史から解説。ジェンダーやフェミニズム、マイノリティーへの眼差しなど、現代的課題が歌い込まれている讃美歌を中心に紹介。讃美歌の今日的意義について講演を行う。 対象:日本フリーメソジスト教団女性部
・地域の公的機関等との連携による教育活動 三郷町公開セミナー(三郷町村役場) 「地域と大学をつなぐボランティア・ワークの可能性」	平成 26 年 10 月 10 日 (三郷町村役場)	本セミナーでは、学校と地域との連携による教育の在り方について、「ボランティア」をキーワードに講演を行った。具体的な事例として、〈持続可能な地域文化力〉を高めることに寄与する地域連携による芸術教育プログラムをとりあげ、ボランティアとは何か、受け入れる際の注意点や、確認すべきこと柄など、実際のケースに応じた内容から、地域との連携による教育的可能性の広がりについて解説。
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団 信徒伝道者養成講座 ②礼拝と讃美―奏楽者の心得Ⅰ「『讃美の共有』のために」	平成 28 年 7 月 23 日:桜井聖愛教会	日本フリーメソジスト教団信徒伝道者養成のための連続集中講義第 1 回(全 2 回)。 キリスト教における讃美の意味、および信仰共同体としてのメソジストとその讃美の伝統について、音楽史的視点と公共性との観点から解説する。また、今日的課題に応えようとする新しい讃美の動向について紹介した。
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団 信徒伝道者養成講座 ②礼拝と讃美―奏楽者の心得Ⅱ「『讃美の共有』のために」	平成 28 年 11 月 26 日	日本フリーメソジスト教団信徒伝道者養成のための連続集中講義第 2 回。 9 月 10 日に開催された賛美歌学会第 16 回でのパネルディスカッションで話し合われた内容をふまえ、現代の讃美歌に託された期待と、現代的課題について解説。キリスト教信仰における讃美の伝統と、近代以降の「共に歌うこと」の意味を比較し、現代における讃美と共同体について講義する。

・地域の公的機関等との連携による教育活動 「斑鳩町三園合同クリスマス会」総合演出及びオペレッタ『クリスマスにはおくりもの』制作・上演 「斑鳩町三園合同クリスマス会」総合演出及びオペレッタ『サンタさんの12ヶ月』制作・上演 「斑鳩町三園合同クリスマス会」総合演出及びオペレッタ『サンタパスポート』制作・上演 ・地域の公的機関等との連携による教育活動 「第61回聖公会関係学校教職員研修会」 教会音楽講師 「時代とのキャッチボールで育まれる教会音楽と教育」	平成28年12月22日	斑鳩町教育課からの要請を受け、斑鳩町立の三園（「斑鳩東幼稚園」「斑鳩幼稚園」「斑鳩西幼稚園」）の幼稚園児と保護者に向けクリスマス会の総合演出を行う（於「いかるがホール（斑鳩町）」）。中心演目となったオペレッタ『クリスマスにはおくりもの』は五味太郎氏の絵本を底本に音楽・舞台装置を制作し、参加型の演目とした。
	平成29年12月21日	中心演目となったオペレッタ『サンタさんの12ヶ月』はクリスマス以外のサンタの生活を描いた複数の絵本を底本に新たに制作。音楽・舞台装置を制作し、参加型の演目とした。
	平成30年12月18日－19日	斑鳩ホール改修のため、3園を巡回公演。中心演目となったオペレッタ『サンタパスポート』は、のぶみ氏の絵本を底本に音楽・台本を制作し、参加型の演目とした。
	平成30年8月23日～24日	エキュメニズム ecumenism は一般に「教会一致推進運動」とされますが、教会音楽でのそれは、あらゆる側面における「違いを超えて連帯していこうとする姿を音楽で表現すること」といえる。近年の賛美歌には、性差や格差、人種の違いなど、実に様々な内容が歌いこまれ、時に音楽でさえ、伝統的に「会衆歌（音楽）」とされる教会音楽の前提を易々と越えていく。今回は、前世紀以来続く教会音楽の新しい地平を教育的見地から紹介するとともに、皆様とともに歌い、分かち合う。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許		
・中学校教諭 第一種免許	平成3年3月31日	音楽 平二中一第 1740 号 兵庫県教育委員会
・高等学校教諭 第一種免許	平成3年3月31日	音楽 平二高一第 1882 号 兵庫県教育委員会
・中学校教諭 専修免許	平成10年3月31日	音楽 平9中専第 2176 号 大阪府教育委員会
・高等学校教諭 専修免許	平成10年3月31日	音楽 平9高専第 2223 号 大阪府教育委員会
・修士（芸術）	平成10年3月24日	大阪教育大学 第 2258 号 論文題目：音楽企画－舞台裏の詩学－
・博士（文学）	平成14年9月17日	大阪大学 第 17270 号 論文題目：聖化する音楽祭－グロカリゼーションとしての祝祭研究－
2 特許等 なし		

3 実務の経験を有する者について特記事項 ・国際日本文化研究センター 共同研究員 ・歌詞対訳 ベートーヴェン：交響曲第9番 ニ短調 Op125 第4楽章「歓喜によせて」*京都市交響楽団 第557回 定期演奏会 パンフレット ・歌詞対訳 京都市交響楽団ニューイヤーコンサート*京都市交響楽団 第550回 定期演奏会 パンフレット	平成15年6月～平成25年3月まで 平成23年12月 平成24年12月	鈴木敏美氏の研究班「近代中国東北部（旧満州）文化に関する総合研究」及び「出版と学芸ジャンルの編成と再編成ー近世から近代へ」等に参加。共同研究員として関連研究会に出席。 京都市交響楽団委嘱：自主第九公演用初の新対訳を作成。ハインリヒ・フォン・シラー作 「歓喜によせて」 平成24年～27年コンサートでも再掲。 京都市交響楽団委嘱：ヨハン・シュトラウス（息子）作 「こうもり」より《公爵様、あなたのようなお方は》（アデーレのアリア）新対訳作成
【大学間国際交流】 ・奈良学園大学 国際交流委員として、2015年東アジア文化交流研修 実施。 場所：大韓民国 東亜大学校 富民洞キャンパス（釜山） ・奈良学園大学 国際交流委員として、2016年ベトナム国立ダナン大学との大学間協定締結に関わる。 場所：ベトナム ダナン大学	平成27年11月1日-3日 平成28年2月22日-25日	学生引率、及び研修会にて学生の発表指導を行う。また、東亜大学校において東アジア文化交流会の実施に立ち会う。 学生間・教師間交流事業などについて、具体的内容を確認。
【競争的資金の獲得状況】 平成22年度 科学研究費補助金 基盤研究C 「地域の教育・文化施設における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」 (研究課題番号:22531043) 平成23年度 科学研究費補助金 基盤研究B 「学校・文化施設による＜持続可能な地域文化力＞を育む『連携型プログラム』の開発研究」 研究代表者 (課題番号:23330234) 公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション 音楽に関する研究への助成「音楽・舞踏・メディアアートを用いた芸術教育コンテンツの作成」 益財団法人 両備禮園記念財団 助成金「岡山孤児院音楽幻燈隊にみる音楽教育的意義ー日本にもたらされた音楽教育の多面性ー」 独立行政法人日本学術振興会 科学研究費助成金 挑戦的萌芽研究「宗教系団体等が所蔵する幻燈史料の記録化と分析による道徳観成立へのアプローチ」 (課題番号:15K13194)	平成22年～平成24年 平成23年～平成25年 平成25年度 平成25年度 平成27～29年度	分担者 獲得金額：個人1,600,000/総額3,200,000 (間接経費:960,000含まず。3年間) 研究経費：2010年度 2,100千円、2011年度 600千円、2012年度 600千 研究代表者：伊崎一夫 研究代表者 獲得金額：個人4,500,000/総額8,000,000 (間接経費：2,400,000含まず。3年間) 研究経費：2011年度 3,000千円、2012年度 2,500千円、2013年度 2,500千円 研究分担者：伊崎一夫、根岸一美、中村滋延、寺尾正 研究代表者 助成金額：300千円（単年度） 研究分担者：根岸一美 研究代表者 助成金額：150千円（単年度） 研究分担者：安田寛、北原かな子 研究代表者 獲得金額：個人 2,400千円/総額2,600千円 研究経費：平成27年度 1,000千円、平成28年度 800千円 研究分担者：伊崎一夫、阿尾あすか

独立行政法人日本学術振興会 科学研究費助成金 基板研究 C「『朝日会館』を巡る文化活動の記録 化とその歴史的影響の分析」(課題番号: 16K02301)	平成 28～30 年度	分担者 獲得金額:個人 240 千円/総額 3,500 千円 研究 経費:平成 28 年度 80 千円 研究代表者:山上揚平、研究分担者:前島志保
科学研究費助成金 基板研究 C「『朝日会館』の子供を 対象とした文化活動の検証及び記録化と社会教育へ の影響研究」 (課題番号:18K023770001)	平成 30 年～ 平成 32 年	研究代表者 獲得金額:個人 2,200 千円/総額 3,300 千円 研究経 費:2018 年度 1,100 千円 研究分担者:前島志保、紙屋牧子、大森雅子、高山花 子
【ワークショップ、コンサート等企画】 中小企業庁「平成 21 年度 地域商店街活性化事業」 KOB E ミュージック・ウォーク 2010 コンサート出演	平成 22 年 3 月	K O B E ミュージックウォーク 2010 実行委員会か らの委嘱を受け、ヴィオラとピアノによる、ライブ コンサート(グループ名:Maris Stella)を企画。 主催:K O B E ミュージックウォーク 2010 実行委員 会 後援:兵庫県/神戸市/(財)神戸国際観光コンベン ション協会/(財)神戸市民文化振興財団/(社)神戸 港振興協会/神戸商工会議所/神戸新聞社/サンデ レビジョン/ラジオ関西 企画及び、ヴィオラ演奏を担当 場所:ストリート(神戸元町商店街)
アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかい りょう in まぶね隣保園」(再掲)	平成 25 年 6 月 20 日	地域の保育園と演奏団体と連携し、プロの演奏家による ワークショップ型のコンサートを企画。コンサートでは、ま ぶね隣保園での日常の表現活動や音楽遊びを重視 し、まぶね隣保園バージョンでプログラムを組み、楽器 体験や音楽を聴いてのお絵かき時間などをとった。 対象園児:2～3 才児 30 名 演奏曲目:国際急行列車、スペインの踊り 出演者:森本真裕美(京都フィルハーモニー室内合奏 団、ヴァイオリニスト) 場所:社会福祉法人 日本コイノニア福祉会 円町まぶ ね隣保園
アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかい りょう in 光の子保育園」(再掲)	平成 25 年 6 月 25 日	地域の保育園と演奏団体と連携し、プロの演奏家による ワークショップ型のコンサートを企画。光の子保育園で の日常の表現活動や音楽遊びを重視し、光の子保育園 バージョンでプログラムを組み、楽器体験や音楽を聴 いてのお絵かき時間などをとった。 対象園児:5 才児 30 名 演奏曲目:金婚式、タイスの瞑想曲他 出演者:森本真裕美(京都フィルハーモニー室内合奏 団、ヴァイオリニスト) 場所:社会福祉法人 京都地の塩会 光の子保育園

ストリングスストーリー ーがっきで、からだで、おはなししよう！	平成 25 年 8 月 12 日	公立小学校（備前市立西鶴山小学校）と地域の文化施設（岡山県立美術館）との連携実践研究として企画した弦楽四重奏コンサート。西鶴山小学校の全生徒と、その保護者や家族を対象としたもの。コンサートでは、「喜怒哀楽」をキーワードに、音楽でそれがどのように表現されているのか、小学校音楽科鑑賞教材で既習の作品の他、事前授業で学んだ現代音楽で中村滋延作曲《ソヴァン・マチャ》を、映像・ダンスと共に鑑賞した。後のアンケートで、あらかじめ事前授業でコンサート内容を理解した子供たちが、音楽で表現された内容を深く読み取り、積極的な音楽聴取につなげていたことが明らかであった。さらに、保護者からは、生の弦楽四重奏をコンサートホールで、家族で聴く機会が持てたとの好評を得た。 対象児童：西鶴山小学校生と引率教員、保護者 演奏曲目：ワルツィングキャット、天国と地獄、ソヴァン・マチャ 出演者：京都フィルハーモニー室内合奏団、奥祥子（ダンス） 映像：中村滋延（九州大学教授） 場所：岡山県立美術館ホール
4 その他 ・論文の引用実績（被参照／引用実績） 森山貴仁・川本彩花・野島那津子「メディアによる文化的公共圏の再編成 ―戦後における音楽祭の日米比較を中心に―」京都大学グローバル COE『親密性と公共圏の再編成をめざすアジア拠点』次世代研究 26 GCOE ワーキングペーパー ・論文の引用実績（被参照／引用実績） 前川 公美夫『明治北海道映画史』	平成 22 年 9 月 平成 24 年 3 月	<被参照／引用文献> 山本美紀 論文「戦後の国際日本における国際音楽祭の受容に関する一考察」（「研究業績等に関する事項」【学術論文】8） 山本美紀 博士学位論文『聖化する音楽祭―グロカリゼーションとしての祝祭研究―』（「研究業績等に関する事項」【学術論文】6） <被参照／引用文献> 山本美紀 論文「興行としての宣教」国際日本文化研究センター（「研究業績等に関する事項」【学術論文】9）

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる	単著	平成 22 年 12 月	ヨベル社	音楽科教育法講義の際に使用されることを想定し、作成。音楽科教育史および、学習指導要領実現のための授業実践について解説を行う。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについても扱った。さらに、各学年の学習指導要領内容のポイントを、実際の授業における単元(題材)とつなげて解説を行い、指導案作成について解説している。小学校で培う音楽の力と共に、共感する心を育てることに通じる、音楽教育における言語活動の充実についても言及する。【B5 判 全 96 ページ+別冊課題 48 ページ】。
2. 教育フォーラム 47 <こころ>を育てる	共著	平成 23 年 2 月	金子書房	心を育てることの意味と、どのような指導が必要であるかについて論じた論文集。 本人担当部分：「共感する心を育てる音楽科教育―音楽の力とこころの育ち」【pp. 60-69：単著】では、これまで音楽が「物語」と「体験」とどのように結び付けられ、何が達成されてきたのか、歴史的に論じる。次に、執筆時点で筆者が研究課題として取り組んでいた「体感型読書」(平成 22 年度科学研究助成対象研究課題)における、音楽を「物語」と「体験」に結びつけるための、初等から小学校音楽科教育までの実践を紹介し、幼稚園から小学校にかけて音楽が連続的に「心を育てる」ことにつながるための指導法について論じたもの。 共著者：梶田叡一、加藤明、渡邊満、松田智子、鎌田首治朗、山本美紀、中村哲、大野光二、高橋真里、江渕弘明、蔵あすか、中家淳悟、増尾慶裕【A5 判 全 157 ページ】
3. 教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望	共著	平成 23 年 8 月	金子書房	国際教育の意義と、その指導について論じたものである。本人担当部分：「音楽教育を通じて異文化理解教育をウィグモア・ホールの教育プログラムに学ぶ」【pp. 103-116：単著】では、ロンドンにあって地域密着型のホールとして、幼児から生涯教育まで、スパイラルに展開するウィグモア・ホールの芸術教育実践を紹介。地域の文化施設の教育実践の実態とともに、そこと連携していくためのカリキュラム上の工夫を初めとした方法論について論じた。特に、移民の多いロンドンにあって、音楽が様々な文化をつなぐものとして、学校でのグローバル教育・インクルーシヴ教育などの一翼を担っていることに注目し、音楽を通しての異文化理解教育について、幼児期における表現教育の持つ可能性について考察した。共著者：梶田叡一、加藤明、見上一幸、松田智子、松田公平、鎌田首治朗、前田洋一、川崎由花、古川治、善野八千子、筒井愛知、山本美紀、河上隆一、湯峯裕、汐海治美、渡部久美子【A5 判 全 174 ページ】

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽でつむぐ学びの歳時記	共著	平成 23 年 10 月	ヨベル社	幼稚園教育及び、小学校音楽科教育に共通して必要かつ基本的なソルフェージュ知識や、弾き歌い、表現指導について解説したもの。掲載楽曲は幼児教育や保育の現場でよく歌われたり演奏されたりする音楽作品を中心に取上げた。また幼少連携を意識して「小学校音楽科共通教材」の音楽も掲載し、この 1 冊で、幼稚園教諭にとっては小学校での学びを意識した表現指導に、また小学校教諭には保育園・幼稚園での五領域「表現」の既習内容をふまえた教育ができるように配慮した。また音楽に関する学校行事運営において、必須項目についても解説を行い、1 年間の学校生活や行事に沿った構成となっている。各該当月に使用されることを想定し作成した。さらに、幼稚園要領の「表現」について、具体的な曲を、発達との関連性を意識して内容を解説。指導案作成へとつなげられるようにしている。全体レイアウト、及び音楽に関する項目【pp. 7-9, 12-15, 18-21, 24-27, 30-33, 36-39, 42-45, 48-51, 54-57, 60-63, 66-69, 72-75, 78-81, 84-87, 90-93, 96、別冊課題：全 21 ページ分：単著】について執筆。 共著者：山本美紀 岡田美紀【B5 判 全 157 ページ＋別冊課題 23 ページ】
5. 教育フォーラム 49 特集 確かな学力を育てる確かな授業	共著	平成 24 年 2 月	金子書房	確かな学力を育むということの意味と、どのような指導が必要であるかについて論じたものである。本人担当部分：「ウィーンにおける音楽科教育にみる光と影 ―「夢の街」が夢から醒めるとき―」【pp. 128-139：単著】ウィーンにおける、地域密着型音楽ホールでの教育プログラムの調査に基づき、劇場や演奏団が行っている教育プログラムの実例を提示すると共に、分析を行う。本論稿の特徴は、教育プログラムを受け入れ、授業に活用している学校を中心に調査を行ったことである。学校の教師が、どのようにホールや文化施設での教育プログラムを生かし授業に利用しているのか、実態を示すとともに、指導法について解説を行った。また、日本で実際に運用する場合、現時点で障害となっている事柄を整理し、学校教育の中で、外部の演奏団体や文化施設などといった地域の文化資源活用の可能性について示唆。共著者：梶田叡一、加藤明、田中博史、鎌田首治朗、長谷浩也、阿部秀高、金澤孝夫、横須賀薫、高岡信也、古川治、山本美紀、渡邊規矩郎【A5 判 全 150 ページ】
6. 【改訂新版】小学校で培う音楽の力－共感する心を育てる	単著	平成 24 年 4 月	ヨベル社	前刊で実際に音楽科教育法講義の際に使用したことをふまえ、内容に編曲された楽譜、および図表解説を追加。さらに授業に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについての解説を強化した。また、各学年の学習指導要領内容のポイントを、実際の音楽教育現場の単元とつなげて解説を行い、指導案作成についてより具体的な解説を行う。指導案作成用の課題プリントを添付。実際に指導案作成→模擬授業実施→ふりかえりが行える内容となっている。【B5 判 全 123 頁＋別冊課題 48】

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
7. ヨベル新書 4 メソディストと音楽 ー 現代讃美歌の源流と私たちの讃美ー	単著	平成 24 年 6 月	ヨベル社	メソディストとは、イギリス産業革命時代、社会の激変によって崩壊するコミュニティに、新しい讃美歌をもって新しいコミュニティ形成に成功した英国国教会の一派である。リーダーとなったジョン・ウェスレーの「讃美の手引き」、及び使用した讃美歌集に注目し、専門的音楽教育を受けていない大衆に対して、どのような音楽が提供されたのか示した。その結果、楽譜は旋律想起のきっかけとして機能する一方で、規定された歌唱方法によって連帯感が生まれ、共に歌うことによって歌詞の意味が集団内でより強化されて定着する過程を明らかにした。 * 明治期に日本において今日に残る多くのミッション系学校の創設に関わったオルチンによる、音楽活動及び社会教育活動をまとめた「興行としての宣教ー G. オルチンによる幻燈伝道をめぐって」を収録。【新書版全 124 頁】
8. 【改訂新版】 幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現ー音楽でつむぐ学びの歳時記く伴奏譜・楽器解説付き>	共著	平成 25 年 3 月	ヨベル社	幼稚園における自発的音楽表現や遊びと、小学校音楽科教育指導とに共通して必要とされる基本的なソルフエージュ知識や、弾き歌い、発達に応じた指導法について解説したもの。特に、新版では保育園・幼稚園や小学校での行事に用いられることの多い楽器類について、正しい取扱い説明と指導の際の留意点などを明記した項目を追加。 掲載楽曲は、保育・幼児教育の現場でよく活用される音楽作品を中心に挙げた。また幼少連携を意識して「小学校音楽科共通教材」の音楽も掲載し、この 1 冊で、幼稚園教諭にとっては小学校での学びを意識した表現指導に、また小学校教諭には保育園・幼稚園での五領域「表現」の既習内容をふまえて指導ができるように配慮されている。また音楽に関する学校行事運営において、必須項目についても解説を行い、発達段階に応じて連続して 1 年間の学校生活や行事を発展的に捉え、力を伸ばし学びが達成できるような構成となっている。さらに、幼稚園要領の「表現」について、手遊びや遊びなど具体的に曲を挙げ、発達との関連性を意識して内容を解説。指導案作成へとつなげられるようにしている。全体レイアウト、及び音楽に関する項目を執筆。 【 pp.7-9,12-15,18-21,24-27,30-33,36-39,42-45,48-51,54-57,60-63,66-69,72-75,78-81,84-87,90-93,96、別冊課題：全 32 ページ分）：単著】。 共著者：山本美紀 岡田美紀、筒井はる香 【B5 判 全 175 ページ+別冊課題 32 ページ】

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
9. 絵本がひらく＜体感型読書＞の世界	共著	平成 25 年 3 月	ERP 文庫	本書は、学校教育の中や図書館などでこれまで行われてきた従来の「読み聞かせ」による読解力や表現力の育成を一步進め、幼児や、児童生徒の互いの共感力をスパイラルに育成していくために、「体感型読書」の導入を進める手引書である。本人担当部分：幼稚園での表現遊びに使える音楽と絵本の組み合わせ等、音楽に関する記述を担当。【pp. 20-25、27-48:担当執筆】近代日本の国語科教育（読本）と連携してきた音楽科教育（唱歌）との関連性から、音楽を用いつつ五感を使って読み聞かせをあげよう方法とともに、その実践報告を含んでいる。小学校の国語科教材と音楽科教材「音楽劇」の連携を含め、現場で導入しようとする教師にとっても、参考になるよう構成されているものである。 編著者：伊崎一夫、山本美紀、ライナーノーツ：山口聖代【A5 判 全 62 ページ】
10. 『教職表現力ノート』（再掲）西辻正副／山本美紀編著 奈良学園大学（平成 27 年 4 月）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	共著	平成 27 年 4 月	奈良学園大学	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「教職表現力演習Ⅰ」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 1 単位）のためのテキストである。新聞のコラムをはじめとした模範的文章の書きとり、語彙力をきたえるための項目、より深く記事を読み込むための要約演習ページを含み、さらに担当講師人による講義用のレジュメのページからなる。本教材により、大学生にふさわしい基礎的な日本語運用能力を鍛えたと共に、それらを教員の言葉としてつなげる工夫が行われている。 編者として関わると共に、音楽に関するミニレクチャーの項目について執筆。人の話を聴いて、必要な情報を獲得していけるよう、実践的学びができるように工夫した。 編著者：西辻正副、山本美紀、共著者：岡村季光、高木悠哉、岡野聡子、松井典夫【A4 判 全 142 頁】（山本美紀：2-63, 108-109）
11. 『音楽教育から地域の文化力へイメージをつむぐ』（再掲）山本美紀編著 株式会社 ERP	共著	平成 27 年 7 月	株式会社 ERP	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「コミュニティと音楽文化」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 1 単位）のためのテキスト、及び「音楽科指導法」「表現（音楽）」の参考資料として作成。幼稚園や小学校での音楽を通じた学びが地域の文化とつながり、やがて地域文化力の基盤となっていくための発達に応じた指導法について言及。 学校と地域コミュニティとの交流としてのゆるやかな連携だけでなく、幼児期の遊びや音楽科の授業をより豊かにするための外部連携を取り入れた指導法について、保・幼・小各校種別の実践からアプローチしたもの。特に、地域の教育力を学校内で生かしていくことは、子どもたちにとって学びの機会をより豊かにすることにもなる。編者として関わると共に、各校種別の発達段階に応じた連携事例に基づく指導法について執筆。実践的応用力が得られるように工夫した。編著者：山本美紀、著者：伊崎一夫、大久保充代、寺尾正、中村滋延、根岸一美、御園綾菜【A5 判 全 105 ページ】（山本美紀：5-8, 20-33, 51-61, 63-82;表作成, 85-88, 101-103 頁）

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
12. 『音楽祭の戦後史』	単著	平成27年8月	白水社	本書は、戦後 70 年を「音楽祭」をキーワードに振り返り、音楽祭の社会的・教育的意義を、歴史的に振り返り、コミュニティにおける音楽祭を中心とした共同体意識の生成と芸術文化活動を論じた。 まず、戦後日本の音楽祭のルーツとして、ザルツブルク・フェスティバル、エディンバラフェスティバルを取り上げ、そこで再生産されていく共同体の「土地の記憶」をもとにしたイメージと共に、音楽祭の社会的意義を示した。また、日本の音楽祭としては、前記 2 つの音楽祭をモデルに作られた大阪国際フェスティバル、またその対角線上にあった 20 世紀現代音楽研究所による「現代音楽祭」をとりあげた。グローバル化に資する音楽祭として、札幌で行われている教育音楽祭 PMF (Pasific Music Festival) をとりあげ、音楽祭の教育力を分析した。 さらに、現代社会におけるフェスティバル世界の共同体意識の比較検討を行い、戦後日本におけるフェスティバルの意義の変遷を明らかにした。 本書は、グローバル化をはじめ、変化の激しい現代において、場（地域）と不可分なはずの「祭り」の現代的条件を探り、地域とは、共同体とは何か、改めて問うものとなっている。 書評として『日本教育新聞』2015 年 10 月 12 日付、『日経新聞』「短評」2015 年 10 月 18 日付、『北海道新聞』「本の森」2015 年 11 月 8 日付等に取り上げられた。 【A5 版全 250 頁】
13. 『人間教育としての音楽科教育 一知覚・感受から共感へ』（再掲）山本美紀 著 ヨベル社（平成 24 年 4 月出版）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	単著	平成27年9月	ヨベル社	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「音楽科指導法」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）に合わせ、さらにこの数年でより具体化した学習指導要領と授業内容をふまえた音楽科指導について、人間教育の視点に立った指導法の解説を行う。 特に、現行の音楽科学習指導要領において問題となっている「知覚」「感受」の解釈と実践に焦点を当て、音楽用語としての独特な位置づけから、互いのコミュニケーションへとつなぐために「共感」をキーワードとし、音楽だからこそできる「人間教育」としての音楽科指導を示す。 【A4 版全 123 頁＋別冊課題 48 頁】
14. 『＜戦後＞の音楽文化』	単著	平成28年1月	青弓社 (全 80 頁)	「戦後 70 年」となる年に、戦後の社会がどのような変遷を遂げてきたのか、またその社会の中で音楽文化がどのように息づいているのかを明らかにするために、様々なキーワードで網羅した事典において、項目「音楽祭・フェスティバル」、コラム「音楽ホール」をそれぞれ担当。社会教育的観点から執筆。 編著者：戸ノ下達也 (山本美紀, pp. 228-230, pp. 259-260)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
15. 『会館芸術 第Ⅱ期 戦中編 第17巻 1940年（昭和15年）4～6月』解説	単著	平成29年9月	ゆまに書房 pp. 219-223	大阪フェスティバルホールの前身である大阪朝日会館発刊の機関誌『会館芸術』復刻版の解説を執筆。朝日会館は、関西のみならず、日本における近代芸術活動の先駆的試みを数多く行い、様々な文化活動の中心的拠点となった劇場であり、後の大阪国際フェスティバルのソフト部分を準備したといえる。 担当年月巻は、日常生活に色濃く戦争の陰が落ちる時期でもあり、海外からの新しい情報の制約が増す中に、日常と芸術活動が「戦争」を介して微妙に絡み合う様相が読み取れる時期である。現代とも共鳴するものであると同時に、芸術文化活動の歴史的展開が、社会そのものを象徴することを如実に示す。
16. 幼児・初等教育のための音楽表現と指導法―歳時記と学ぶ楽典・子どものうた・鑑賞	共著	平成30年3月	ヨベル (215頁＋別冊課題32頁)	幼稚園教育及び、小学校音楽科教育に共通して必要かつ基本的な楽典やソルフェージュ知識、弾き歌い、編曲法、表現指導について解説し、その指導法を示したもの。幼小の学びの連続性への配慮から、「童謡」「鑑賞」の項目を設け、「童謡」では日本語としての美しさや価値観を、「鑑賞」では多文化理解につながる指導を、園・学校での歳時記を背景に示す。基礎的な楽典の知識もカバーしており、音楽の要素をふまえた幼児の表現活動への指導法、初等教育段階での指導法を発展的に扱う。音楽に関する学校行事運営において、必須項目についての解説を行うと共に、幼稚園要領の「表現」について、具体的な曲をとりあげ、曲の持つ歴史的背景と共に発達との関連性を意識して内容を解説。全体レイアウト、及び音楽に関する項目執筆。 (pp:7～9, 12～15, 18～21, 24～27, 30～33, 36～39, 42～45, 48～51, 54～57, 60～63, 66～69, 72～75, 78～81, 84～87, 90～93, 96、別冊課題： 全21頁分) 編著者：山本美紀 著者：岡田美紀、筒井はる香、山口聖代、中村徹
17. 『会館芸術 第Ⅲ期 戦後編 第28巻 1947年（昭和22年）1～6月』解説	単著	令和1年5月	ゆまに書房 pp. 261-273	朝日会館発刊の機関誌『会館芸術』復刻シリーズの解説を執筆。 担当年月巻は、戦後直後の日本の日常を率直に反映する号となっている。日常の物資に事欠き、食糧難も続いている。しかし何よりも、敗戦により一気に民主化が進む中、民衆は「自由」に戸惑い、戦中の画一化された生活のために、自ら考え行動することに非常な不安を抱えていた。 各記事に共通するテーマは「自由とはなにか、どのような状態なのか」が絶えず問われ、文化人が様々な方向から検討を加えていた。
18. 『会館芸術 第Ⅲ期 戦後編 29巻 1947年（昭和22年）7～12月』解説	単著	令和1年5月	ゆまに書房 pp. 285-298	朝日会館発刊の機関誌『会館芸術』復刻シリーズの解説を執筆。 担当年月巻では、誌名が『DEMOS』（大衆の意）となり、芸術や文化の大衆化が全面に押し出される。しかし一方で、戦中の学徒動員など「人材の不足」が深刻化、人口の都市部集中化にインフラが追いつかない状況が示される。誌面を通し、「戦争」の後遺症に悩む社会の姿がどのようなものなのかを示す、貴重なドキュメントとなっている。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
(学術論文) 1. 「群れを導く歌— 初期メソディスト における讃美歌の 意味—」(査読有り)	単著	平成22年3月	大阪大学大学院文学研究科 文化表現論 音楽学 『阪大音楽学報』第8号 pp.165-180	英国国教会司祭ジョン・ウェスレー (John Wesley 1703-1791) は、彼を指導者とした信仰復興運動メソディズム Methodism において「歌うメソディスト」と揶揄されるほど、あらゆる機会に歌うことを勧めた。彼は、讃美歌の歌詞とその歌唱方法の指導によって信徒を教育し、一方信徒は、歌うことで信仰を表明するだけでなく、共同体の一致を、実感・実現していたのである。本研究では、讃美歌に反映された道徳心や規範意識を分析し、新たな共同体を形成していく過程において「歌うこと」が果たした役割を明らかにした。
2. 「会衆歌と公共性— ウェスレーの宗教体験と初期メソ ディストの讃美歌 を巡って—」	単著	平成22年3月	環太平洋大学 『紀要』第3号 pp.79-90	メソディストは、産業革命によって社会構造が激変する中、地方からの労働者を中心に新たな絆で結ばれ、社会現象ともなった信仰復興運動であるメソディズム Methodism を推進したグループである。指導者ウェスレーにとって、讃美歌の歌詞とその歌唱方法は、信徒教育の意味を持ち、その讃美には、社会の構成員として求められる道徳心や規範意識が反映され、新しい時代の「公共圏」の創造に大きな役割を果たした。本論ではウェスレーの歌唱指導の理念を、教育的配慮と「公共性」の視点から考察した。初期メソディストの讃美歌の歌詞に注目し、「共に歌うこと」による歌詞内容の理解の強化を明らかにした。
3. 音楽科教育における他分野教育との 連携への考察:音楽 と物語— 展覧企画 『木を植える人』か ら体感型読書『スイ ミー』へ—	単著	平成23年3月	環太平洋大学 『紀要』第4号 pp.57-64	本論稿は、「体感型読書」プログラムの構築に関わる、実践報告及び「体感型読書」構想に至る、これまでの筆者の研究実践「展覧企画」プロジェクトとの関連性を明確にしようとするものである。「体感型読書」とは、「音声言語を主とする従来の語り手に対して、音楽・映像等の情報を付加し多様な表現活動を保障すること」と、「受動的になりがちな聞き手に対して、物語の再創造の保障と聞き手同士の関わりを活性化すること」の両面が成立する双方向の読書活動である。本論考では、実際に小学校で行った音楽科教育内での教育実践をふまえ、物語と音楽、さらにそこから広がる子どもの発達段階に応じた言語活動について論じた。能動的な物語の受け止めを可能にする「体感型読書」プログラムの構築により、音楽科教育と他分野教育との連携から生まれる言語活動の充実の教育効果について述べ、実際の指導における課題と今後の展望について示した。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
4. The Study for The digital Teaching Materials which used “Warabe-uta” into Music Education of Japan. — The Outlook and The Issues — (Full Paper) (査読あり) 「わらべ歌」を音楽教育に用いたデジタル教材に関する研究－展望と課題－	共著	平成23年3月	SITE 2012--Society for Information Tecnology & Teacher Education International Coference 2012In Austin Texas Association for the Advancement of Computing in Education p. 153	本稿は『「わらべ歌」を用いたデジタル教材の活用』についての論文である。「わらべうた」とは伝統的な子供の遊び歌であり、非常に少ない音による単純な構造を持つ。「わらべ歌」を音楽教育に導入することにより、教師はピアノをはじめとした特別な音楽の技術や技能を必ずしも要することなく、音楽の授業を進めていくことができるという利点がある。一方、日本のデジタル教材の開発は、十分に研究が進んでいるとはいえない。本人担当部分：「わらべ歌」導入についての実態調査と分析、論文執筆。大阪教育大学寺尾研究室で作成された当該教材について、現場での使用の実態を調査し、日本における全体的なデジタル教材の普及率と比較検討を担当した。同時に、今後の課題を示すと共に、幼児から初等教育への連続して子供の力を伸ばすデジタル教材の活用についても提案事例を示し論述した。共著者：山本美紀、寺尾正、竹下裕来【教員教育・情報技術教育国際学会 プロシーディング】
5. ウィーンにおける劇場と音楽団体による音楽教育の試み —課題と展望—	単著	平成24年3月	環太平洋大学 『紀要』第5号 pp. 57-64	オーストリアは、EU 中の1つの国となり、通貨も「シリング」を手放して「ユーロ」となったことで、「ウィーンはウィーン」でなくなる危機が訪れている。本論文では、たとえ伝統的に芸術文化が豊かな地であっても、絶えず教育活動や啓蒙活動を行っていかなくては、文化水準が維持できないことを、平成23年度に行ったフィールドワークの分析から明らかにしたものである。現在、オーストリアでは国立劇場をはじめ、劇場を学校教育に活用した音楽指導の方法が模索されている。特に昔から音楽で有名なオーストリアでは「伝統文化」としての教育課題と、一般的な音楽教育としての課題とが存在している。論文では、両国の劇場との連携による音楽教育の比較を、「伝統音楽」の扱いに注目して分析を行った。伝統の継承と、新しい文化創造の基盤づくりとしての音楽科教育と指導法について論じた。教育が決定的に作用する将来の文化水準から、その持つ意味の重さと共に、持続可能な地域文化育成のための具体的な施策について提案。
6. 学校と社会文化施設との連携を考える—地域連携が『生きる力』へとつながるために—	単著	平成24年4月3日・10日合併号	雑誌『教育プロ』第42巻 第8号 通巻1693号 pp. 6-10 (5000字)	紙面「オピニオン」に掲載。ここ10年ほど学校教育現場では、様々な連携が行われてきた。それぞれの立場で実際に「連携」に携わってきた人々には、「そろそろ振り返り時がきた」との実感がある。本稿では特に、「ゲストティーチャー」や「出前授業」「アウトリーチ」に着目し、「学校と地域との連携」について最近の3つの事例を通して、芸術科教育の指導法を、今後の「学校と地域連携」の観点から論じた。変化の激しい時代を生き抜いていかなくてはならない子どもたちだからこそ、「生きる」ということに不可欠な「潤い」や「慰め」となる本物の「芸術文化」に触れる機会を、芸術科教育は担保できるのか、また生涯に渡って「能動的な鑑賞体験」ができるように、学校内での教育と地域での教育とをいかにつなげていくか、具体的な事例と共に示めた。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
7. 草創期メソディスト讃美歌集にみるウェスレーの芸術観—『ファウンダリー・コレクション Foundery collection』より—	単著	平成 24 年 12 月	環太平洋大学 『紀要』第 6 号、pp. 39-45	メソディストの最初期の讃美歌集“The Foundery Tune Book” 実際に使われている音楽の分析を通し、ウェスレーの芸術観と音楽教育について考察したもの。再版されることがなかったことから、編集者ジョン・ウェスレーにとっての「失敗作」「試験作」という意見方がされてきたが、楽譜を確認すると、記譜法などの通常との違いは、音楽教育を受けていない当時の一般の人々にとって、わかりやすく表記しようとした意図が見える。 “The Foundery Tune Book” の分析によって、会衆歌の芸術性と共に、対象を明確化することによる楽譜の役割と公共教育の効果について明らかにした。18 世紀のウェスレーらによる楽譜の検討を通し、楽譜の持つ意味と芸術教育との関わりについて考察した。
8. 初期メソディストの讃美歌集にみる、会衆歌としての意義とジョン・ウェスレーの音楽教育—『ファンダリー・コレクション Foundery Collection』を中心に—（査読有り）	単著	平成 25 年 3 月	日本ウェスレー・メソジスト学会『ウェスレー・メソジスト研究』第 13 号、pp. 27-45	メソディストは、青山学院大学、関西学院大学の創設理念の基礎をなすキリスト教の一派である。その活動は「ボランティア活動」の始まりともいわれ、信仰に基づく社会福祉的活動を特徴とする。その中には、当時の社会問題となっていた貧困層の子供たちへの公教育もあり、メソディストの創立者ジョン・ウェスレーは彼らを教育するために炭鉱町に学校を作り、現在もその学校はイギリスの名門校として存在する。本稿では特に初期の 3 冊のメソディストの讃美歌集の分析を通し、一般庶民が楽譜を読める力（音楽リテラシー）と、集団での歌唱教育について分析を行った。
9. 地域の音楽資源の活用によるこどもの表現活動充実への一考察—初等教育における音楽体験の場の創造をめぐる—	単著	平成 25 年 3 月	環太平洋大学 『紀要』第 7 号、pp. 43-51	こどもの感性と表現に関する領域として設定されている「表現」において、音楽はそれだけで存在するのではない。「表現」は、音楽や図画工作、体で表現すること、演じることなど、対象とする事柄が多様であり、様々な要素の介在によって子供たちの豊かに感じる心を育てる目的がある。本稿では、「表現すること」「感じて受け止めること」の楽しさを幼児期から十分に理解するための方法を、イギリスでの幼児対象から小学校低学年を対象としたワークショップでの実践例の分析を踏まえ、日本の現状との比較考察から論じたものである。特に園での表現領域を充実させるために、外部の専門家によるワークショップやアウトリーチ活動を取り入れ、活用していくか、また、それが後の学校教育にどのように連結されていくのか、具体的に論じた。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
10. 《やすかれ、わがこ こころよ》に《フィン ランディア》が 使用される理由－ 賛美歌における楽 曲の意味をめぐっ て－ [5382 文字]	単著	平成 26 年 2 月	日本基督教団出版局 『礼拝と音楽』160 号 通巻 162 号、pp. 26-29	シベリウス作曲《交響詩フィンランディア Op26》からの旋律を伴う《やすかれ》は、多く の日本人信徒の愛唱賛美歌の一つである。作曲者 のシベリウスは音楽史上では「国民楽派」に分類 される作曲家であり、賛美歌に転用された部分に は、別の歌詞がついて《フィンランド頌歌》と言 われ「第 2 の国歌」としてフィンランド国民の愛 国の歌になっている。特に、シベリウス作品の「交 響詩」には「音詩」という意味があり、旋律に文 学的・詩的内容が直接的に表現されていることを 示すものである。つまり賛美歌に使用された《フ ィンランディア》は、音楽の含有する意味がかなり 限定された旋律なのである。これほどに特別な 意味を持つ個性的な旋律が付けられた《やすか れ》の原詩の全容は、「主が共にいます平安」と いうよりもむしろ、苦難に立ち向かう「戦いの歌」 である。日本語歌詞を追うだけでは、なかなか思 いをはせることが少ないと思われる《やすかれ 》の「戦いの歌」という側面に、本稿では、翻訳 過程で変化していく歌詞内容と、音楽が内包する 意味との関係性から論じた。
11. 「人間教育」と音楽 の力－ 賛美歌に託 された神学と教理 －（査読有り）	単著	平成 26 年 3 月	人間教育学学会『人間教 育学研究』、創刊号、 pp. 39-45	明治初期の音楽教育の導入において、賛美歌を 源泉とする「唱歌」はそれぞれが近代国家にふさ わしい「新しい日本人」をどのように明治政府が 考えていたか、明確に示している。しかし実際の 導入に当たっては、「音楽」は「体育」と同様、 それまでの日本の教育には含まれない教科で もあり、困難を極めた。明治以降現代にいたるま で、教育現場に携わる人間にとってギリシャ・ロ ーマ時代からの西洋社会における音楽やそれを 教育することの持つ意味が十分理解される機会 はほとんどなかったと言っていいただろう。しか し、西欧社会においては、時代が変わり、施政者 が変わっても、音楽は共同体を疑似体験させ創出 させる 1 つの重要な媒介であり、それにより共同 体となった集団を望む方向に向かわせることが できることから、重要な教育科目であり続けた。 その延長線上に、ジョン・ウェスレーのメソディ スト運動の中の賛美歌教育を捉え、教育における 普遍的目的を論述したものである。
12. 1890 年代の岡山孤 児院における音楽 事象と人間教育 －先駆的器楽教育 実践の近代音楽史 における位置づけ を目指して－ （査読有り）	単著	平成 27 年 3 月	人間教育学学会『人間教 育学研究』第 2 号、 pp. 163-172	石井十次は、近代日本において「児童福祉の父」 とされる人物である。中でも、岡山孤児院音楽幻 燈隊の活動は、巡回公演を通じて日本人に西洋音 楽や「音楽隊」を紹介した、画期的な活動であっ た。本稿では、岡山孤児院において音楽幻燈隊活 動の前提となる音楽事象がどのようなものであ ったのか具体的な内容を検討し、さらに今日の近 代音楽史研究の成果、及び岡山孤児院音楽隊をめ ぐっての先行研究の再検討を行った。その結果、 先行研究の定説に反し、音楽隊活動が救世軍の影 響を受けたものではないことを明らかにし、当時 の日本に於ける一般的な音楽状況を反映した可 能性が強いことを指摘した。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
13. 教員養成系大学における人材育成の視点から考える音楽科教育と地域連携 ―学生「教員に求められる資質」形成につなげるために―	単著	平成 27 年 3 月	奈良学園大学『紀要』第 2 集、pp. 167-179	平成 23 年度から 25 年度にかけて、筆者は「学校・文化施設による＜持続可能な地域文化力＞を育む『連携型プログラム』の開発研究」を行ってきた。その研究成果を踏まえた上で、現在本学学生によって行われている活動に至る、筆者のこれまでの研究と共に、実際の文化施設におけるボランティアがどのようなものであり、さらにそこでどのような力が必要とされているのか、教員養成系大学の教育課題として提示する。さらには、このような主体的な地域連携を通して、学生の資質能力の向上に資する教育の方向性を示したものの。
14. 岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって (査読有り)	単著	平成 27 年 3 月	京都大学大学院文学研究科キリスト教学専修現代キリスト教思想研究会（アジアと宗教的多元性研究会）『アジア・キリスト教・多元性』第 13 号、pp. 101-125	岡山孤児院やその音楽隊についての研究は、これまで音楽的事象に着目してこなかったことで、取りこぼした点や誤解してきた点だけでなく、さらなる広がりを持った研究領域との接続が困難であった。本稿では、音楽隊が始まる以前の岡山孤児院の日常的音楽状況や、音楽教育の指導と使用した音楽教材について明らかにした。さらに、石井十次や聴衆となった大衆が触れたキリスト教を背景とした音楽状況の特性を探った。その結果、①キリスト教音楽における 1 ジャンルである器楽音楽が、「バンド文化」として関西で、しかもまずは、子どもの情操教育と健康的配慮を目的に始まったこと、②当時の豊かな世俗曲（謡も含め）を背景としたキリスト教音楽が存在したことを明らかにした。
15. 岡山孤児院音楽幻燈隊にみる音楽教育的意義―日本にもたらされた音楽教育の多面性―	単著	平成 27 年 9 月	財団法人 両備檀園記念財団 2015 年度『文化、芸術、教育活動に関する研究論叢』pp. 21-33	本研究は、岡山孤児院で行われた「音楽幻燈隊」に関わる一連の事業及び活動を、教育史的観点から研究したものである。音楽幻燈隊の活動は孤児院の運営資金集めに利用されてきたことから、これまで音楽的内容や、音楽教育に関わる内容に踏み込んだ研究はなかった。研究の結果、孤児院音楽幻燈隊結成の黎明期、石井はルソー『エミール』の教育思想に傾倒し、その実践に努める一方で、音楽隊については軍楽隊をモデルとしていたことが確認された。ただ、音楽隊責任者であった孤児院職員からは、音楽が子供たちの情操面や規範意識育成を促すことへの期待の言葉もあることから、音楽教育が孤児教育において重要な役割を担っていたことを明らかにした。
16. 山室軍平『平民の福音』および、救世軍所蔵幻燈用ガラススライドにみる近代日本における人間教育と宗教―大衆とキリスト教との出会いを巡る一考察― (査読有り)	単著	平成 27 年 12 月	日本人間教育学会『人間教育学研究』第 1 号 pp. 65-72	山室軍平（1872;M5-1940;S15）は、近代日本においてキリスト教を同じ平民の立場から当時の一般大衆に伝えようと『平民の福音』を著した、日本救世軍草創期のメンバーである。本稿は大衆伝道に用いられたと考えられる当時の幻燈ガラススライドを、『平民の福音』を踏まえて考察したものである。その結果、山室が、当時の日常生活の不協和の要因を「罪とが」として設定し、その解消にキリスト教を背景とした道德教育の実践をスタートさせたことが明らかになった。ここに、一般大衆が持っていた道德観とキリスト教倫理観との接点と共に、大衆にむけての人間教育の視点「国家の領民の育成」が確認された。また、幻燈や流行歌が大衆教育の手段として用いられた過程を明らかにし、現代社会における大衆化する教育が持つ課題との共通点を示した

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
17. 初期救世軍軍歌と 日本製 Tune の登場 ー基督教の大衆化と近代日本キ リシト教音楽文化 をめぐってー (査読あり)	単著	平成 28 年 3 月	日本ウェスレー・メソジ スト学会『ウェスレー・ メソジスト研究』第 16 号、pp. 81-108	救世軍の初期軍歌における日本の Tune につい て、『平民之福音』での山室の方法を踏まえて考 察。最初期の 2 つの軍歌集『救世軍軍歌 M29』と 『救世軍軍歌 M42』の掲載讃美歌を分析。表を作 成し、それぞれの歌の転載元を整理。日本オリジ ナル Tune を特定した。その結果、救世軍で使 用された軍歌集は、岡山孤児院音楽幻燈隊と深い 関係性があり、日本名の付いた Tune と、岡山孤 児院音楽幻燈隊のレパートリーとが、軍歌を中心 に重なっていることを明らかにした。ここから、初 期救世軍軍歌集において日本製 Tune として採用 された Tune について、1) 一般大衆に身近な、 娯楽性の強い通俗曲であるということ。2) すで に、音楽隊(楽隊)のレパートリーとして、大衆 に受け入れられていた作品であること、を示し、 救世軍軍歌が、当時の大衆音楽を取り入れた娯 楽性の強い「余興の音楽」を中心としたレパート リーであったことを明らかにした。
18. 初等教育における 鍵盤ハーモニカの 役割	共著	平成 28 年 9 月	『奈良学園大学紀要』第 5 集、pp. 1-10	鍵盤ハーモニカの学習が初等教育の「器楽の活 動」および「表現教材」においてどのような役割 を果たしているのか、現行の各社音楽科教科書の 分析から明らかにしたもの。 音楽科における鍵盤楽器の位置づけを明らか にした上で、鍵盤楽器の導入としての鍵盤ハー モニカの課題を提示した。 共著者：山本美紀、筒井はる香
19. 大衆娯楽と近代社 会における人間教 育への一考察ー救 世軍幻燈上映の日 英比較をめぐって ー (査読あり)	単著	平成 29 年 3 月	『人間教育学研究』 pp. 125-134 日本人間教育学会	本稿は、救世軍が社会教育的に用いた「幻燈」 について、世界救世軍歴史資料館 International Heritage Center/ Salvation Army が所蔵する幻 燈スライドとその上映を中心に、2015 年に行っ たロンドンでの現地調査に基づき、大衆娯楽を用 いた社会教育の視点から検討を行った。 これまでの研究で、岡山孤児院幻燈対と救世軍 音楽幻燈隊、また『救世軍軍歌』の深い関係性 を明らかにしてきた。それをふまえ、本稿では調 査資料を当時の社会的ニーズによる規範意識の育 成を教育的視点から考察。大衆娯楽を用いた社会 包摂の手法について、日英の比較を歴史的変遷の 視点から論じたものである。
20. 研究ノート 日英救世軍の初期 幻燈上映における 「場の記憶」の影響 力ー娯楽と社会 教化の狭間でー	単著	平成 29 年 3 月	『アジア・キリスト教・ 多元性』第 15 号 pp. 181-193	山室軍平記念救世軍資料館での資料には、日本 宣教の開始以来の英国救世軍(万国救世軍本部) との緊密な関係性がうかがえるものが多い。しか し、救世軍国際記念館(歴史資料館 International Heritage Center/The Salvation Army)との連 携が完全ではなく、日本救世軍に関する資料につ いては不明な点が多い。そこで、救世軍創設 150 周年の記念の年であった 2015 年の夏、救世軍国 際記念館の日本関係資料について、幻燈資料を中 心に調査を行った。 本論では、収集した資料の整理と共に、救世軍 による初期上映の場所が、元々どういう場所で あったのかに注目し、上映場所の持つ傾向と活動 との影響関係について報告した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21. 「共にうたうこと」から考える「うたの力」ー基督教のうたう文化としての「賛美」と近代以来の日本の「合唱」ー [7248 文字]	単著	平成 29 年 4 月	日本基督教団出版局『礼拝と音楽』173 号通巻 175 号、pp. 10-14	音楽教育が「教科」として組み込まれていること自体が、日本の教育史における「音楽」の位置づけをよく表している。本稿は、基督教の歌う文化によって達成されてきた共同体形成について、グレゴリオ聖歌から説き起こす。さらにそれが、近代日本にどのように受け止められ、展開のか、岩倉使節団から、うたごえ運動、学校教育における合唱コンクールまでを射程に論述。今日まで続く、共同体形成との関連性から、日本における合唱の扱われ方の特徴を明らかにした。
22. 文部省唱歌から童謡へー山田耕筰の童謡観からみた旋律と日本語アクセント	共著	平成 30 年 3 月	『奈良学園大学紀要』第 8 集、pp. 119-126	明治時代後半以降、一部の人のものであった子供と教育への関心は、教育的イベントをきっかけに大正期に入って急激な広がりを見せる。本稿は、そのような社会的ムードの中で展開した、山田耕筰の童謡観について、山田自身の 2 つの著述「作曲者の言葉——童謡の作曲に就いて」（『詩と音楽』大正 11 年 11 月号ほか所収）、「歌謡曲作曲上より見たる詩のアクセント」（『詩と音楽』大正 12 年 2 月号所収）に基づき考察したものである。童謡における山田の活動は、全国各地の小学校で、文部省唱歌の代りに童謡をうたわせることが多かった時代にあつて、初期唱歌教育で目指された共通日本語教育への志向が、芸術家によって一定の見解をみた大きな成果の一つであったことが明らかとなった。 共著者とともに、実践的な理解ができるように工夫した。（共著者：山本美紀 筒井はる香）
23. 20 世紀初頭の日本のメディアを活用した福祉活動と、メソジスト文化としての賛美歌 (査読あり)	単著	平成 31 年 3 月	日本ウェスレー・メソジスト学会『ウェスレー・メソジスト研究』第 16 号、pp. 81-108	日本の近代において、基督教が果たした教育的役割は大きい。特に「メディア活動」「福祉活動」「共同体の歌」といった文化は、基督教が信仰の表現としてとった手法が育てたものである。基督教諸派の中でも、メソジスト派は「賛美歌」による呼びかけから始まり、賛美歌集や新聞などの出版物発行としての「文書伝道」（「メディア」の活用）を行い、やがて「福祉活動」を積極的に行い、それがメソジスト派の特性ともなった。本稿では、このようなメソジストの特徴的な文化がどのように日本に入ってきたのか検討した。 その結果、近代において基督教は、近代教育の側面を担うものとして受け止められていたということを明らかにした。海外とも対等に近代都市機能を回していくための教育的意義、あるいは、近代社会に転じていく際のひずみを調整していく基督教会の役割に注目し、そこに価値を見いだしていたのである。日本における基督教受容は「役立つもの」でなければならず、同時に、基督教のネットワーク形成手段が信仰とは切り離されて、現代に至るまで利用されてきたことを示唆した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
24. 伝統文化遺産としての能楽の保存と活用－教育の場での扱いを含めた日本における動向－ (査読あり)	単著	平成 31 年 3 月	民族藝術 173 号 通巻 175 号、pp. 10-14	東京 2020 を前に、伝統文化遺産の「保存と活用」がにわかに議論されるようになった。本稿では、民間総合文化施設「朝日会館」(1926 年～1962 年)、及び現代の教育における能楽等の扱いを例に、「保存と活用」が伝統文化に与える影響を考察する。 両者の比較は、「活用」の際の課題と方策にさほど違いがないことを明らかにする。グローバル化が叫ばれる時、「伝統文化遺産」には固定化が期待される勝ちである。しかしながら、「活用」は伝統の固定化によっては達成するのは難しい。伝統の活用のためにも、伝統芸能の担い手の育成のためにも、教育現場との結びつきは今後必須要件となっていくだろう。外国人家庭の子供たちの受け入れなど、激変する教育現場との連携は容易ではない。「活用」のスローガンは、どこに伝統文化を導くのか。
25. 戦前の民間ホール主導による子供の趣味教育とネットワーク－ホールの社会的存在意義の自覚と社会へのアプローチ－	単著	平成 31 年 3 月	『奈良学園大学紀要』第 8 集、pp. 145-152	朝日新聞社会事業団が 1926 年(大正 15 年)10 月以来、大阪中之島に運営していた朝日会館は、各種の子供を対象とした企画を持っていた。研究会なども活発に行われ、当時の教育センター的役割を担っていた。本稿では、こどもを対象として行っていた事業のうち、3 つの事業「コドモの會」『アサヒ・コドモの本』(以下「コドモの本」) ア テ ネ 「アサヒ・コドモ・芸術院」(以下「コドモ・アテネ」)から、特に音楽が関係する活動に焦点をあて、戦前のホール主導による社会教育としての芸術教育及び、ホールを具体的な場としたこどもの芸術活動とその文化的ネットワークについて考察を行った。その結果、朝日会館は、具体的な場と観客層を雑誌を介してつなぎ、さらに「お稽古事」等を通して時間をつなぐ組織化を図っていたこと。それにより、現実と仮想空間の両方を持つネットワークを形成していたことを明らかにした。これは、現代の SNS などを通じたバーチャルな交流を具体的な活動に取り込んでいく方法の先駆的な事例である。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
(その他) 【研究報告書】 1. 「地域の教育・文化施設における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」	共著	平成 25 年 3 月	平成 22-23 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (課題番号 225310435002)	平成 22 年度から平成 24 年度に、地域の文化施設や小学校などで実施した「体感型読書」プログラムの実践報告と、プログラム開発に関わる研究報告である。本人担当部分：音楽部分についての解説および、音楽を物語に結び付ける際の教育的効果について考察を執筆。【pp. 18-26、27-50:担当執筆】体感型読書とは、絵本の読み聞かせに音楽やダンスなどを組み合わせ、子どもたちに絵本や芸術を深く体験させる新しい芸術鑑賞方法である。当システムの研究と、芸術鑑賞教育プログラムの構築により、子どもの表現力と感じる力を伸ばし、他者理解力を高め、共感力の育成を目指した。授業や、地域の子どもの対象とした教育実践例を紹介。子どもの音楽表現に「物語性」が与える影響を明らかにした。 共著：伊崎一夫、 <u>山本美紀</u> 、山口聖代【A5 判 全 60 ページ】
【講演等報告】 1. 2016 日本賛美歌学会第 16 回全国大会パネルディスカッション「賛美歌の共有について思うこと」報告	単著	平成 28 年 11 月	立教大学 池袋キャンパス 主催：日本賛美歌学会 日本賛美歌学会 ニューズレターNo. 42 p. 5-6	平成 28 年 9 月 10 日立教大学池袋キャンパスで持たれた賛美歌学会全国大会パネルディスカッションについての報告。 パネラーの所属教派と各派の伝統についての概説、ディスカッションの問題設定と「賛美歌の共有」今日的意味と課題を解説し、パネルで話し合われた内容を報告した。「賛美歌」は、キリスト教各派の信仰における『共同体』意識、体験と切り離せないものであり、その共有は、各派の伝統を尊重する姿勢から意味あるものとなることを、歴史的観点を含め論述した。
【書評】 1. 『教会音楽ガイド』【4000 字】	単著	平成 24 年 9 月	日本賛美歌学会紀要第 5 号 pp. 46-50	本書は、2010 年 7 月に日本基督教団出版局から刊行された(編者は越川弘英、塚本潤一、水野隆一)。1975 年『教会音楽ガイド』以来の教会音楽についての『讃美歌 21』に対応する参考書である。35 年間の礼拝や讃美の変遷をふまえ、教会における音楽活動を様々な立場で担う信徒や教師にむけ書かれている。書評では、内容をふまえつつ今日の教会がもつ課題を讃美の側面から明らかにすると同時に、讃美を共有することの現代における意義を論じる。また、教会が地域の音楽教育の場として長い歴史の中で担ってきた働きを説き、さらに学校教育における音楽教育の停滞が、教会での音楽活動の低下に直接反映する関係性を示し、教会が地域の音楽教育の場として再び機能する必要性を説く。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
2. 更新伝道会出版委員会編 『チャールズ・ウェスレー讃美歌 30 選』 【7000 字】	単著	平成 26 年 3 月	日本ウェスレー・メソジスト学会『ウェスレー・メソジスト研究』第 14 号、pp139-148	本書は、2013 年に更新伝道会出版委員会から刊行されたチャールズ・ウェスレーによる讃美歌集である。UMH（合同メソジスト教会讃美歌集）で採用されているチャールズ作詞の 50 曲のうち、「最初はメロディーの美しい、これまで歌われていなかったもの、心に響く詩のものを基準に、そこから少しずつ「教団や他の教派の讃美歌に入れられていないもの（一部を除く）を拾い上げ」加えられていったという 30 曲を選んで編まれたという。本書評では、現代におけるチャールズ・ウェスレーの讃美歌の意義を明らかにするとともに、特に新しい旋律が付けられた作品について、作曲者の紹介や旋律の特徴、また伝統的に重点を置いてきたメソヂストの音楽教育を通じた信徒訓練の解説を行った。
3. 梶田叡一著『不干斎ハビアンの思想ーキリシタンの教えと日本的心性の相克』創元社	単著	平成 26 年 6 月 16 日	日本教育新聞 平成 26 年 6 月 16 日付け 15 面	副題にある「心性」とは、文字通り「心の性（さが・特質）」であると同時に、学問的には、特定の時代の集団的なものの考え方や感じ方を意味し、現代の歴史学や社会学、さらに第二バチカン公会議や著者が意識する「宗教多元主義」において重要な用語である。本書はハビアンの代表的著書の幾つかを、おのおのが書かれた目的に沿って読み解いたものである。 書評では著者による精神的・信仰的位相の分類『習俗』『信』『行』『覚』について注目し、精神性の教育の重要性と今日的意義について述べた。さらに、精神教育における師弟関係の影響について言及し、不干斎ハビアンの教育的環境と共に、彼自身が指導した弟子との関わりに着目して評論した。
【評論・解説】 1. プログラム解説 京都市交響楽団 第 529 回 定期演奏会 【4500 字】	単著	平成 21 年 10 月	京都市交響楽団 第 529 回 定期演奏会 pp. 5-8	モーツァルト《交響曲第 36 番ハ長調「リンツ」》、ブルックナー《交響曲第 9 番ニ短調》（ノヴァーク版）についての解説を担当。 プログラムを構成することが、美術館における「企画展」と共通点があることをふまえ、2 人の作曲家が取り上げられた理由を示す。モーツァルトはザルツブルク、ブルックナーはリンツとそれぞれオーストリアの都市を代表する作曲家であり、名前を冠する音楽祭も開催されている。当日演奏された作品を分析しつつその背景ににもふれ、それぞれの都市で、当時 2 人がどのようにコミュニティに受け入れられていたか、また現代の位置づけについて解説した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. プログラム解説 京都市交響楽団 第 536 回 定期演奏会 【4500 字】	単著	平成 22 年 6 月	京都市交響楽団 第 536 回 定期演奏会 パンフレット pp. 5-8	ウェーベルン《大管弦楽のための 6 つの小品 op. 6》、ウェーベルン《管弦楽のための 5 つの小品 op. 10》、マーラー《交響曲第 7 番 短調「夜の歌」》 マーラーは世紀末ウィーンを代表する大作曲家であり、多様な楽器を用いた大型の作品を多く書いた。作曲家であったが、生活のために指揮者としても成功していた。対するウェーベルンはマーラーにあこがれ、同じように指揮者として働きながら、シンプルなおとぎ話とされた作品を制作した作曲家である。 年齢は差があるものの、世紀末ウィーンと現代をつなぐ音楽の様式の端境期に位置した 2 人の作曲家の生涯を、作品の特徴に焦点をあてて解説を執筆。
3. プログラム解説 京都フィルハーモニー室内合奏団 173 回定期公演 【4500 字】	単著	平成 22 年 12 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 173 回定期公演 パンフレット pp. 2-3	「京フィルの第九 一日韓交流！アジアからの発信」 ベートーヴェン：《献堂式》序曲 ハ長調 op. 124 ：交響曲第 9 番 二短調 《合唱付き》op. 125 《献堂式》は、「交響曲第 9 番」初演時に同じプログラムにあがっていた作品である。寒い時期に初演され（10 月）、かなり長い演奏会であったが、聴衆は最後までまんじ聴いて、最後に万雷の拍手でベートーヴェンを称えたという。しかしすでにベートーヴェンの耳は聞こえなくなっており、助手に聴衆の方を向かせようやく拍手が「見えた」という。 本解説では、日本で「第九」が初演された坂東にある小学校・中学校が、現在も入学式・卒業式で「歓喜に寄せて」を歌うことを紹介し、すでに日本の地域文化を担い、同郷のアイデンティティーの元になっていることにふれ、「第九」の現代日本における教育的意義に着目した解説を行った。
4. プログラム解説 京都フィルハーモニー室内合奏団 174 回定期公演 【3550 字】	単著	平成 23 年 1 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 174 回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「ニューイヤーコンサート『アメリカ&ラテンアメリカ』」 H. ヴィラロボス：ブラジル風バッチャ第 2 番 G. ガーシュイン： ラプソディー・イン・ブルー A. コーブラント：アパラチアの春 L. アンダーソン：セレナータ ：ゴールデン・イヤーズ ：ブルー・タンゴ ：舞踏会の美女 世界に名高い、いわゆる「ウィーン・フィルによるニューイヤーコンサート」は、ワルツやポルカを中心に、きらびやかな新年の祝祭を演出する。しかし、今回は「アメリカもの」を中心とした、明るく楽しい新年の祝いである。特にアンダーソンは日本の学校教育でよく取り上げられる。イメージをしやすい彼の作品の魅力を中心としつつ、「新世界」アメリカがどのような音楽文化をはぐくんでいったのかを中心に、新しい年への期待を込めて解説。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
5. 京都フィルハーモ ニー室内合奏団 175 回 定期 公 演 [3550 字]	単著	平成 23 年 3 月	京都フィルハーモニー 室内合奏団 175 回定期公 演パンフレット pp. 3-5	「古典派への道程 Vol. 12」モーツァルト： デ イヴェルティメント ニ長調 K. 136 ファゴ ット協奏曲 変ロ長調 K. 191 ハイドン：交響曲第 101 番 ニ長調 Hob. I : 101 《時計》 2 人の作曲家は、同時代人であり、生前にも面識 があった。彼らの時代は、作曲の依頼主の社会的 立場の交代期にあたり、それはオーダーそのもの が変わる意味を持っていた。 時代の変わり目に、貴族・市民と依頼主が変わ ることによる作品に与えた影響と、それでも変わ らない彼らの作品の特徴について解説。
6. 京都フィルハーモ ニー室内合奏団 176 回定期公演 [3550 字]	単著	平成 23 年 4 月	京都フィルハーモニー 室内合奏団 176 回定期公 演 パンフレット pp. 3-5	「ロシア！」 P. チャイコフスキー：弦楽セレナーデ S. プロコフィエフ：古典交響曲 L. ストラヴィンスキー：組曲「プルチネッタ」 この日のコンサートに取り上げられた作曲家 3 人を結びつけるのは、「ディアギレフ」である。 彼はバレエ・リュスを率いて、多くの新しい才能 を見出し、後世に残る芸術作品を生み出した。本 解説では、ディアギレフが彼らとどのような関わり を持ち、何を見出し生み出していったかと言う 視点から、作品それぞれのもつ魅力を解説してい った。
7. 京都フィルハーモ ニー室内合奏団 177 回定期公演 [4500 字]	単著	平成 23 年 6 月	京都フィルハーモニー 室内合奏団 177 回定期公 演 パンフレット pp. 3-5	「フランス！」 ルーセル：シンフォニエッタ オネゲル：ピアノ小協奏曲 ラヴェル：クーランの墓 ビゼー：アルルの女 フランス音楽を生んだ「フランス」を、科学立 国との共通点として「センス」をキーワードに読 み解く。さらに、多少年が前後するものの、同時 代人の作曲家として、4 人がどのような社会情勢 の中で作曲家として自分の仕事を見つめ、進めて きたのか解説を行った。
8. 京都市交響楽団第 550 回定期演奏会 [4300 字]	単著	平成 23 年 9 月	京都市交響楽団 第 550 回 定 期 演 奏 会 pp. 7-10	モーツァルト：舞踊音楽「レ・プティ・リアン」 K. Anh. 10 (299b) シベリウス：ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 op. 47 ラフマニノフ：交響的舞曲 op. 45 作曲家にとって「故郷」とは、音楽ににじみ出 る、特別なタームである。モーツァルトは故郷ザ ルツブルクが息苦しく、シベリウスは故国の独立 のため音楽をもって戦った。ラフマニノフは政治 の混乱によって亡命せざるを得なかった。 本公演は指揮者である外山雄三の 80 歳の祝い も兼ねていたが、彼の選んだ作品のうちラフマニ ノフのそれは、作曲家が死ぬ間際に、多くのロシ ア人亡命演奏家がいたフィラデルフィア管弦楽 団のために書いた特別の作品である。作曲家自身 のオーケストラ団員への感謝の言葉が、そのまま 外山の京都市交響楽団メンバーへの感謝の言葉 であったと言える。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
9. 京都フィルハーモニー室内合奏団 178 回定期公演 [3700 字]	単著	平成 23 年 10 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 178 回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「室内オーケストラ名曲選」 モーツァルト： 弦楽のためのディベルティメント へ長調 KV.338 ：ピアノ協奏曲第 26 番 ニ長調 KV.530 「戴冠式」 ストラヴィンスキー： 管楽のための八重奏曲 ニーノ・ロータ：九重奏曲 「室内オーケストラ」とは、小編成のオーケストラのことであり、大型編成のオーケストラが出てくる前のヨーロッパではごく普通の合奏形態であった。近代になっても、小回りが利くからこそ、多くの作曲家が特殊な編成で響きを確認してみるなど、実験的な場として用いてきた経緯がある。演奏会では、「室内オーケストラ」という編成を縦糸に、イタリア音楽を横糸にして企画されたものであり、共通項とともに各作品のもつ実験性や特徴を中心に解説を行った。
10. 京都フィルハーモニー室内合奏団 179 回定期公演 [3000 字]	単著	平成 23 年 11 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 179 回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「ベートーヴェン！」 ベートーヴェン： ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op. 61 交響曲第 5 番ハ短調 op. 67「運命」 ベートーヴェンの人生は、幼いころから苦悩に満ちたものだった。子どものころは、子どもに英才教育をほどこしてモーツァルトのようにしたいと思うアルコール依存症の父親からの暴力、青年期には進行型の難聴を患い、中年以降は甥の養育権をめぐる親族の争いと甥の自殺未遂、とどれも現代に通じる、逃れることのできない、家族にまつわる苦悩ばかりである。そのような中で、ベートーヴェンはそれらを正面から受け止め、戦っていくことと並行して作品を生み出していった。ベートーヴェンの生涯とともに、彼にとっては実験的な「協奏曲」ジャンルの解説、それをふまえた「交響曲」の位置づけに焦点をあて解説を行う。
11. 京都フィルハーモニー室内合奏団 180 回定期公演 [3500 字]	単著	平成 23 年 12 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 180 回定期公演 パンフレット pp. 2-3	「京フィルの第九」 ベートーヴェン： 《コリオラン》序曲ハ短調 op. 62 交響曲第 9 番 ニ短調 《合唱付き》op. 125 ベートーヴェンは自身の難聴がすでに完治しないことを確信したとき、音楽家としての将来に絶望し、有名な『ハイリゲンシュタットの遺書』を書く。まさに、音楽家としてこれからという 32 歳の時である。しかしその内容は、「死」からの決別であり、「自分の為すべきことを成し遂げるまでは、決して死なない」という、遺書の形をとった決意表明であった。《コリオラン》は遺書を書いた後の作品であり、「傑作の森」と呼ばれる彼の創作の黄金期に書かれたものである。また、交響曲第 9 番は「為すべきことを為す」のを続けてきたベートーヴェンの晩年の作品であり、ブラームス、マーラーなど、彼に続く多くの作曲家に影響を与え続けてきた。人の人生を支え得る音楽の持つ力を証明する作品として、解説を執筆。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12. 京都市交響楽団第557 回定期演奏会 [3600 字]	単著	平成 23 年 12 月	京都市交響楽団 第 550 回 定期演奏会 パンフレット パンフレット 12-16 頁	モーツァルト：フルートとハーブのための協奏曲 ハ長調 K. 299 ダマーズ：フルート、ハーブ、弦楽のためのデュオ・コンチェルトベートーヴェン：交響曲第 9 番 ニ短調 《合唱付き》op. 125 EU（欧州連合）のいわゆる連帯の歌は、ベートーヴェン「交響曲第 9 番」4 楽章の合唱「歓喜に寄せて」である。耳が不自由だったベートーヴェンの中では、常に「音楽」と「言葉」が同じ意味を持っており、言葉を交わしていたと考えられる。「歓喜の歌」の楽曲構成から、第九でベートーヴェンの内的言語の可能性に基づき、楽曲解説を行った。
13. 京都フィルハーモニー室内合奏団 182 回定期公演 [3700 字]	単著	平成 24 年 3 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 182 回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「古典派への道程」 ヴィヴァルディ： 弦楽のための協奏曲 ト短調 RV. 157 4 つのヴァイオリンとチェロのための協奏曲 ロ短調 RV. 580 ～《調和の靈感》Op. 3 より第 10 番～ ピッコロ協奏曲 ハ長調 RV. 443 モーツァルト： セレナータ・ノットウルナ ニ長調 K. 239 ハイドン： 交響曲第 45 番 嬰へ短調 《告別》Hob. I -45 3 人の作曲家は、日本の義務教育期間において音楽科の教科書で必ず目にする作曲家たちである。そのため、名前を見ただけでは古い印象がぬぐえない。しかし彼らの作品は、作曲された当時には時代の先端をいく作品であり、現代のコンサートで聴いたとき、むしろ「新しさ」を感じる場合が多い。本解説では、彼らの作品の持つ「新しさ」の要素を、独自性と共に解説し、長く人々に愛される「古典」というジャンルの普遍性について考える機会とした。
14. 京都フィルハーモニー室内合奏団 183 回定期公演 [3700 字]	単著	平成 24 年 4 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 183 回定期公演 パンフレット pp. 4-6	「ロマンティズムあふれた ヨーロッパ音楽探訪」 E. グリーグ：組曲「ホルベアの時代から」Op. 40 R.G. シュトラウス：クラリネットとファゴットのための二重小協奏曲 ヘ長調 B.B.V. バルトーク：弦楽合奏のためのディベアルティメント プログラムの 3 曲は、いずれも作曲家の危機的状況の直前・直後に生まれた作品である。不思議と、音楽史の過去の時代の様式に則ったスタイルで書かれていることが共通する。 人間は、危機的に状況に陥ると、過去の幸せだった時代を巨大回顧して危機を乗り越えようとするという。作曲家が作品創作当時、どのような危機的状況にあったのか、またどうしてその作品スタイルをとったのかに注目し、解説を行う。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
15. 京都フィルハーモニー室内合奏団 184 回 定期公演 [3000 字]	単著	平成 24 年 6 月 24 日	京都フィルハーモニー 室内合奏団 184 回定期公 演 パンフレット pp. 4-6	「ドイツ・オーストリアの栄光と苦悩」 ハイドン：交響曲第 7 番 ハ長調「昼」Hob. I : 7 ワーグナー：ジークフリート牧歌 シュレーカー：室内交響曲 京都フィルハーモニー室内合奏団の創立 40 周年記念コンサートである。取り上げられた 3 人の作曲家は、時代と作風の変化の時代に生き た作曲家であった。中でもシュレーカーは、リ ヒャルト・シュトラウスと拮抗する人気を誇っ た作曲家であったが、ナチスドイツの台頭によ り心痛のあまり亡くなってしまった。彼の作品 は、あまり演奏されることがなく、作風の理解 や解釈が進んでいない。本作品は、彼がウィー ン・アカデミーの教授陣の演奏会のために作曲 したものである。それぞれの作曲が創作した時 代背景、またその必然性について触れながら、 「作曲の理解と時間」をテーマに作品解説を執 筆した。
16. 辻井伸行(ピアノ) 垣内悠希 指揮 京都市交響楽団 [3500 字]	単著	平成 24 年 9 月 20 日	京都市／京都コンサー トホール（公益財団法人 京都市音楽芸術文化振 興財団）6-9 頁	ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第 2 番 ハ短調 op. 18 チャイコフスキー：交響曲第 4 番 ヘ短調 op. 74 本プログラムと全く同じプログラムで行われ たコンサートに、アシュケナージ指揮によるも のがある。そのコンサートはアシュケナージが 亡命先のイギリスから、初めて祖国に戻った際 のコンサートであり、非常に政治的なものでは あると同時に、アシュケナージの祖国への思いを 象徴するコンサートであった。2 つの作品は、 そのために選ばれたものである。両作品の持つ、 ロシア土着の音楽の魅力と、それを生かしつつ 洗練された手法をもって作曲された作品の魅力 について解説を行う。
17. 京都フィルハーモニー室内合奏団 185 回 定期公演 [3500 字]	単著	平成 24 年 10 月 21 日	京都フィルハーモニー 室内合奏団 185 回定期公 演パンフレット pp. 3-5	「ドビュッシー生誕 150 年とフランス音楽」C. グノー：小交響曲 D. ミヨー：打楽器と小管弦楽 のための協奏曲 C. ドビュッシー：牧神の午後へ の前奏曲（シェーンベルク編曲） 管弦楽の ための 3 つの交響的素描「海」（J. ユ ー編曲）【世界初演】 ドビュッシー生誕 150 周年を記念してのコン サートでは、ドビュッシーの作品を編曲した 2 曲と、ドビュッシーの才能をいち早く認めたグ ノー、生前のドビュッシーと親交のあったミオ ーとをとりあげる規格である。特に《海》は、 楽譜の初版の表紙が葛飾北斎「神奈川沖波裏」 の大きな波の絵が用いられた。また、2012 年に 歌舞伎の猿之助襲名披露の中で演じられた『黒 塚（安達原）』と、バレエ・リュスとの関係を 解説。バレエ・リュスはドビュッシーの《牧神 の午後の前奏曲》作曲のきっかけとなったバレ エ団である。日本とフランスが、文化的に深い 影響関係にあったことをふまえ、曲目解説を行 った。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
18. 京都市交響楽団 特別演奏会 「第九コンサート」 [4200 字]	単著	平成 24 年 12 月 27 日・28 日	京都市交響楽団 パンフレット 11-16 頁	ワーグナー 舞台神聖祭典劇「パルジファル」第 1 幕への 前奏曲 楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」 第 1 幕への前奏曲 ベートーヴェン 交響曲第 9 番ニ短調「合唱付」 op. 125 *歌詞対訳 一部改訂、再録される ワーグナーはベートーヴェンの後継者として 自分を位置づけ、ベートーヴェンの生誕 100 周 年の祝いに有名な「ベートーヴェン論」を発表 した。そして、ワーグナーが自分の音楽作品の ために作った「パイロイト祝祭劇場」のこけら 落としには、自身の作品とともにこの「第九」 を演奏し、「ドイツ音楽芸術の至高」を目に見 える形で表そうとしたのである。 「第九」作曲当時のベートーヴェンの状況と、 対照的な後世の社会的・政治的な「第九」理解 とを比較しつつ、周りの状況がいかにあろうと も変わらぬ、「第九」が表現しようとする「連 帯」と「歓喜」について解説。
19. 京都フィルハーモ ニー室内合奏団 187 回定期公演 [3500 字]	単著	平成 25 年 2 月 22 日	京都フィルハーモニー 室内合奏団 パンフレット 3-5 頁	ヨハン・セバスティアン・バッハ ブランデンブルク協奏曲全曲 BMV1046-1051 バッハの若い時代において、自身のポートフ ォリオとして作成した協奏曲集の全曲演奏会に 向け、バッハ一族の音楽的特徴とともに、17 世 紀に活躍した古楽器についても解説を行う。 現代の音楽教育におけるバッハの意義につい ても言及した。
20. 京都フィルハーモ ニー室内合奏団 188 回定期公演 [3500 字]	単著	平成 25 年 4 月 21 日	京都フィルハーモニー 室内合奏団 パンフレット 3-5 頁	武満徹《ファンタズマ／カントスⅡ》 ベートーヴェン《ピアノ協奏曲第 3 番 Op. 37》 ブーランク《シンフォニエッタ》 現代音楽の巨匠 2 人が、映画音楽の作曲経験 があったことから、映像と音楽との関係にふれ つつ解説を行った。 また、明治時代以降、音楽と映像はしばしば 教育の現場で用いられ、子供たちのイメージを 膨らませ、教育内容理解の大きな助けとなっ てきた歴史にも言及した。
21. 京都市交響楽団第 568 回定期演奏会 [4300 字]	単著	平成 25 年 5 月 24 日	京都市交響楽団	ベートーヴェン《序曲「コリオラン」 op.62》 ブルックナー《交響曲第 8 番ハ短調》[ノヴァ ーク版 第 2 稿 (1890)] 鍵盤楽器奏者として出発し、ウィーンで成功 した 2 人の作曲家について、作曲家としてのアイ デンティティー、また音楽がアイデンティティ を支える「思い出」に大きく影響を与えるこ とを踏まえた解説を行った。
22. 京都フィルハーモ ニー室内合奏団 189 回定期公演 [3200 字]	単著	平成 25 年 6 月 17 日	京都フィルハーモニー 室内合奏団 パンフレット 3-5 頁	P.チャイコフスキー 《フィレンツェの思い出 》 Op.70 ニ短調 A.E.ヒナステラ《協奏曲 Op.23》 出身国の音楽的伝統が色濃く反映された作曲 家とその作品について、民族共通の音楽性と共 に、作曲家の独自性を観点に解説を行う。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
23. 京都市交響楽団第 572 回定期演奏会 [4600 字]	単著	平成 25 年 9 月 6 日	京都市交響楽団 パンフレット 7-10 頁	F.メンデルスゾーン序曲《フィンガルの洞窟》 ロ短調 Op.26 L.ベートーヴェンピアノ協奏曲第 1 番ハ長調 Op.15 L.ベートーヴェン交響曲第 3 番 変ホ長調 《 英雄》 Op.55 新しい時代の影響が作品に色濃く反映された 作品を並べたプログラムである。音楽作品が音 楽教育や聴衆、技術革新や社会そのものの影響 を強く受けつつ、作曲家を通して世に生み出さ れていることについて、作品に基づき解説する。
24. 京都フィルハーモ ニー室内合奏団 190 回 定期 公 演 [3200 字]	単著	平成 25 年 10 月 27 日	京都フィルハーモニー 室内合奏団 パンフレット 3-5 頁	J.L.F.メンデルスゾーン、B. 《弦楽のための交 響曲第 9 番 ハ長調》 G.マーラー《交響曲第 1 番 ニ長調 「巨人」 Op.23 》 オリンピックが東京で 2020 年に開かれるこ とが決定されたことを受け、スポーツと音楽と の関係について、「祭典」をキーワードに解説。 どちらの作曲家もユダヤ系であったことから、 宗教的な背景もふまえ、解説を行う。
25. 京都フィルハーモ ニー室内合奏団 192 回 定期 公 演 [3200 字]	単著	平成 26 年 3 月 16 日	京都フィルハーモニー 室内合奏団 パンフレット 3-5 頁	H.I.F.von ビーバー《バッターリア》 W.A.モーツァルト《フルート協奏曲 第 1 番 ト長調 K.313 (285c)》 F.J.ハイドン《交響曲第 103 番 変ホ長調 Hob. I :103 「太鼓連打」》 3 つの作品に共通の、「作品と依頼人との関 係性が強い」側面に光をあて、解説を行う。ま た、ウィーンが自己の伝統として、音楽文化を 教育していこうと積極姿勢を示していることに ふれ、音楽的伝統と教育、また聴衆と作品との 関係性について、解説を行う。
26. 京都フィルハーモ ニー室内合奏団 194 回 定期 公 演 [3500 字]	単著	平成 26 年 6 月 29 日	京都フィルハーモニー 室内合奏団 パンフレット 3-5 頁	ブリッジ 《アイルランドの旋律ーロンドン デリーの歌ー》 ラター《弦楽のための組曲》 ブリテン《フランク・ブリッジの主題による変 奏曲》作品 10 コーブランド《劇場のための音楽》 コーブランド以外は、イギリスを活動拠点と した比較的新しい作曲家によって構成された演 奏会の解説。「イギリス的」なるものと「アメ リカ的なもの」との差と共に、伝統的な旋律 が現代の作曲家によって新たな作品として提示 される過程とその意義について言及する。
27. 京 都 市 交 響 楽 団 特別演奏会 「第九コンサート」 [2400 字]	単著	平成 26 年 12 月 27 日・28 日	京都市交響楽団 パンフレット 9-12 頁	バーバー《弦楽のためのアダージョ》 M. ラヴェル《亡き王女のためのパヴァーヌ》 ベートーヴェン 交響曲第 9 番ニ短調「合唱付」 op. 125 *歌詞対訳 一部改訂、再録される バーバー／ラヴェルの両作品は、現代にも映 画に使用されるなど比較的名作である。 今年は「ベルリンの壁」が崩壊して 25 周年 にあたり、その式典で歌われたのがやはり《歓 喜によせて》であった。「第九」が表現しよう とする「連帯」と「歓喜」について、現代の世 界状況と合わせて解説。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
28. 京都フィルハーモニー室内合奏団 197 回 定期公演 [3200 字]	単著	平成 27 年 3 月 14 日	京都フィルハーモニー室内合奏団	モーツァルト「フィガロの結婚」より《序曲》 ベートーヴェン ピアノ協奏曲第 4 番 Op. 58 交響曲第 8 番 Op. 93 3 曲は共に、時代を反映した作品である。 解説では、フランス革命前夜の雰囲気が色濃い「フィガロの結婚」、ナポレオンのヨーロッパ席捲を背景としたベートーヴェンの作品群を、それぞれに関連性のある他の作品との比較によって解説した。
29. 弦楽六重奏曲の粹	単著	平成 27 年 4 月 24 日	京都コンサートホール コンサートホールアン サンプルホールムラタ パンフレット 2-3 頁	ブラームス：弦楽六重奏曲第 1 番変ロ長調 Op. 18 チャイコフスキー：弦楽六重奏曲ニ短調 Op. 70 《フィレンツェの思い出》 ヴァイオリン：ゲオルギ・バブアゼ、梅原ひまり ヴィオラ：山本由美子、江口純子 チェロ：林裕、上森祥平 19 世紀の産物である、弦楽六重奏曲というジャンルの特性を社会的背景から解き明かし、さらにブラームスやチャイコフスキーの創作活動における、各作品の位置づけと現代における意義を解説。
30. 京都フィルハーモニー室内合奏団 199 回定期公演「ラヴェル 讃」 [3200 字]	単著	平成 27 年 6 月 28 日	京都コンサートホール コンサートホールアン サンプルホールムラタ パンフレット 3-5 頁	ラヴェル《クープランの墓》（管弦楽版）、《ピアノ協奏曲》、《亡き王女のためのパヴァーヌ》（管弦楽版）、《マ・メール・ロワ》（バレエ全曲版） 2 つの大戦をはさんで作曲家であったラヴェルは、志願して兵隊として働いたこともある人物である。文化が政治に利用されることを徹底的に拒む一方で、友人の死を悼んで作曲し、戦争で右手を失った友人のためには、左手のコンチェルトを作曲した。平和と芸術の関係性について注目した曲目解説。
31. 京都市交響楽団 特別演奏会 「第九コンサート」 [3500 字]	単著	平成 27 年 12 月 26/27 日	京都市交響楽団（京都コンサートホール）	シベリウス 《交響詩「エン・サガ（伝説）」op.9 》12 月 26 日 《交響詩「タピオラ」op.112 》12 月 27 日 ベートーヴェン 交響曲第 9 番ニ短調「合唱付」 op. 125 * 歌詞対訳 一部改訂、再録される 指揮：高関 健 合唱：京響コーラス 独唱：平野雅世(S) 西原綾子(Ms) 小餅谷哲男(T) 榎 貴志(Br) 国民楽派と言われるシベリウスとベートーヴェンの「第九」の共通点は、「祖国」である。時間軸として、シベリウスは過去(ルーツ)を、ベートーヴェンは、未だ実現しない未来(憧れ)を音楽で描いた。宗教的背景をもった民族的・国家的確執が、各地で紛争となって現れている現在と作曲者の時代性に注目した曲目解説。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
32. 京都フィルハーモニー室内合奏団 201 回定期公演「ニューイヤー」[3200 字]	単著	平成 28 年 1 月 9 日	京都コンサートホール コンサート（大ホール） パンフレット 5-7 頁	メンデルス・ゾーン《序曲 フィンガルの洞窟 op. 26》、モーツァルト《ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 変ホ長調 K. 364》、ベートーヴェン《交響曲第 3 番変ホ長調「英雄」作品 5》 指揮: 斉藤一郎 : 独奏: 松野弘明 (vn.) 川本嘉子 (va.) ニューイヤーコンサートらしい、ポピュラーな作品が並んだプログラムである。作曲家それぞれの時代が望んだ「英雄像」とはどのようなものであったのか、時代背景を描くと共に、またそれが作品の中でどのような表現と通じるものなのか解説。
33. 京都市交響楽団第 598 回定期演奏会 [4200 字]	単著	平成 28 年 2 月 14 日	京都市交響楽団 京都コンサートホール コンサート（大ホール）	エルガー 《弦楽セレナードホ短調 op. 20》 《チェロ協奏曲ホ短調 op. 85》（ヴィオラ版） ドヴォルザーク《交響曲第 8 番ト長調 op. 88》 指揮: 大友直人 : 独奏: 今井信子 (va.) 両作品に共通する「イギリス」と「ヴィオラ」の 2 つがキーワード（テーマ）となっているプログラム。エルガーでは、作曲家と演奏家の関係性を、またドヴォルザークでは作曲家と出版社との関係性に着目した解説を執筆。
34. 京都フィルハーモニー室内合奏団 202 回定期公演「ラヴェル讃」[3600 字]	単著	平成 28 年 3 月 6 日	京都コンサートホール コンサートホールアン サンブルホールムラタ	ヴィヴァルディ《調和の靈感 作品 3-第 11 番ニ短調》、バッハ《管弦楽組曲第 2 番ロ短調 BWV. 1067、モーツァルト《交響曲第 40 番 ト短調 K. 550》 指揮/独奏: 有田正広 (fl.) バロックから古典派の時代にかけて現れる、調性・教会旋法などはじめとした、豊かで多様な音の力学に注目して曲目解説を行う。
35. 京都市交響楽団 特別演奏会 「第九コンサート」 [2800 字]	単著	平成 28 年 12 月 27/28 日	京都市交響楽団（京都コ ンサートホール）	W.A.モーツァルト 歌劇「ドンジョバンニ」《序曲》K.527, 12 月 27 日 歌劇「魔笛」《序曲》K.620, 12 月 28 日 ベートーヴェン 交響曲第 9 番ニ短調「合唱付」op. 125 * 歌詞対訳 一部改訂、再録 指揮: ステファン・ブルニエ 合唱: 京響コーラス 独唱: 横山恵子 (S) 手嶋眞佐子 (Ms) 高梁淳 (T) 伊藤貴之 (Br) モーツァルト 2 つの序曲の背景をふまえ、特色を解説した。彼は、時代の転換期とともに、音楽家の在り方や社会的地位が大きく変わる時代にあった。作品は、民衆が主導権を握り始めた時代を反映する歌劇の序曲である。ベートーヴェンもまた、革命・産業化社会と大きく世界的に変化する時代に合った。作品と社会との関係性において、2 人の作曲家を対比し、第九の現代的意味を中心に解説を執筆。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
36. 京都市交響楽団 608 回定期演奏会 [5000 字]	単著	平成 29 年 1 月 22 日	京都市交響楽団 (京都コンサートホール)	モーツァルト《ピアノ協奏曲第 25 番ハ長調 K.503》 ブルックナー《交響曲第 0 番ニ短調 WAB.100》 (ノヴァーク版) 指揮：下野 竜也 独奏：パスカル・ロジェ (ピアノ) 時代を異にした地方出身者の作曲家が、それぞれの環境の中で、どのように仕事をし作品を残していったのか。時代の要請と、作品創作との関係性に重点を置き、解説したもの。作品が作曲された時代と無関係ではないこと、過去の作品を現代に再現していくことの意義について明示。また、その理解のために、教育の重要性について言及した。
37. 京都市交響楽団 特別演奏会 「第九コンサート」 [5000 字]	単著	平成 29 年 12 月 27/28 日	京都市交響楽団 (京都コンサートホール)	ベートーヴェン：序曲「コリオラン」op.62 12 月 27 日 ショスタコーヴィチ：ジャズ組曲第 1 番 12 月 28 日 ベートーヴェン 交響曲第 9 番ニ短調「合唱付」op.125 *歌詞対訳 一部改訂、再録 指揮：井上道義 合唱：京響コーラス 独唱：菅 英三子(S) 林 美智子(Ms) 笛田 博昭(T) ジョン・ハオ(Br)
【歌詞新対訳作成】 1. ベートーヴェン：交響曲第 9 番ニ短調 Op.125 第 4 楽章「歓喜によせて」	単著	平成 23 年 12 月	京都市交響楽団 第 557 回 定期演奏会 パンフレット	京都市交響楽団委嘱 ハインリヒ・フォン・シラー作 「歓喜によせて」 新対訳作成
2. ヨハン・シュトラウス(息子)喜歌劇「こうもり」より 《公爵様、あなたのようなお方は》(アデーレのアリア)	単著	平成 24 年 1 月	京都市交響楽団 第 551 回 ニューイヤーコンサート パンフレット	京都市交響楽団委嘱 ヨハン・シュトラウス (息子) 作 「こうもり」より 《公爵様、あなたのようなお方は》(アデーレのアリア) 新対訳作成
【歌詞翻訳および解説】 1. 主に向かって“新しく”歌おう 《主よもう一度 Tell me again how》	単著	平成 30 年 5 月	日本基督教団出版局 『礼拝と音楽』177 号 通巻 179 号、pp.60-61	教えてください、もう一度 TELL ME AGAIN HOW (1991) Sylvia G. Dunstan / Lynette P. Miller シベリウス作曲《フィンランディア》のチューン Tune に乗せられた、新しい賛美歌の翻訳及び解説を担当。3 回の連載予定。
2. 主に向かって“新しく”歌おう 《神がひらく 扉ぬけ Going Home, Moving on》	単著	平成 30 年 8 月	日本基督教団出版局 『礼拝と音楽』178 号 通巻 180 号、pp.60-61	神がひらく 扉ぬけ Going Home, Moving on Michael Forster / Anonin L. Dvorak 《家路》で有名なドヴォルジャーク作曲交響曲第 9 番 2 楽章の主要旋律を用いた、英国メソジスト教会賛美歌の歌詞翻訳と解説を担当。Tune 文化が盛んな英語賛美歌において、旋律がもつ物語性の影響に言及した。
【作詞および解説】 1. 主に向かって“新しく”歌おう 《荒れ野 喜び満ち》	単著	平成 30 年 11 月	日本基督教団出版局 『礼拝と音楽』179 号 通巻 181 号、pp.60-61	中島みゆき《麦の唄》の旋律にのせた賛美歌を試作。Tune 文化の実践例として示す。残念ながら、日本のポップスでは、旋律と歌詞が分かちがたく結びつくため、原曲使用は許諾されなかった。現代社会における、智の開示・共有と比較しながら、日本における「歌」の文化の広がりを、どのように確保していくのか、課題も明らかになった。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
【学会発表/シンポジウム／講演】 1. 静かにささやく声	—	平成 21 年 7 月	関西学院大学 神学部 チャペル 講演	明治初期に来日した宣教師オルチンの、幻燈伝道活動の裏にあった彼の音楽を媒体とした教育理念を、宣教レポートの記述から明らかにする。彼の幻燈伝道は学校教育においても度々実践され、教材として用いられたものは道徳的な内容のことが多い。キリスト教精神に基づく道徳観を日本の風俗に変換するために用いた彼の手法において、音楽は教育効果をさらに高めるために必要なものであった。音楽教育が単に「音楽」に限られた教育目標を持つものではなく「生きる力」として人間を支えていく力となっていくと想定されていたことを、オルチンの記述から示唆した。
2. 18 世紀メソヂストにおける讃美歌と公共性—個人的体験から共同体の一致体験へ—	—	平成 21 年 10 月	第 60 回日本音楽学会全国大会 大阪大学	メソヂスト運動とは、英国国教会司祭ジョン・ウェスレー John Wesley によって 18 世紀後半から英国で展開された信仰復興運動である。その特性は、ウェスレーの個人的な信仰的覚醒がその発端となっている点であり、「会衆歌」（共同体の歌）として設定された讃美歌にその影響があることだ。指導者ウェスレーにあって、讃美歌の歌詞とその歌唱方法は、信徒教育の意味を持ち、その讃美には、社会の構成員として求められる道徳心や規範意識が反映され、新しい時代の「公共圏」の創造に大きな役割を果たした。本発表ではウェスレーの歌唱指導の理念と、現代の日本の音楽科教育目標との共通点に注目し分析を行った。特に、教育的配慮と「公共性」の視点から、初期メソヂストの讃美歌の歌詞に注目し、「共に歌うこと」による歌詞内容の理解の強化を明らかにした。
3. 音楽科教育における地域連携の可能性をさぐる — 広がる教室とこころの育ち —（「再掲」）	—	平成 22 年 8 月	主催：非営利特定団体 人間教育研究協議会 （於）芦屋市立宮川小学校	第 26 回人間教育実践交流会 2011 年 芦屋フォーラム「確かな学力とこころの教育—新教育課程とその実践—」「音楽」部会コーディネーターとして、発表者の選定ほか運営を行う。日本各地で個々に始まりつつある音楽科教育における「出前授業」をはじめとした専門家のアウトリーチ活動の受容状態や、文化団体の教育プログラムについて概観し、分析を行った。本発表は実践成果を共有することにより、子供たちのこころの育ちを、芸術文化をキーワードに支援し実現していくための連携について、問題提起するものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. コンサートホールにおける「教育プログラム」の構造と作品アプローチウィグモア・ホール Wigmores Hall (英国: ロンドン) の教育プログラムを中心にー	ー	平成 23 年 11 月	2011 年 日本音楽学会 第 62 回 全国大会 (於) 東京大学	本研究発表は、英国における地域密着型コンサートホールの運営する「教育プログラム」の分析を通して、1 つの音楽現場における作品へのアプローチの実態を検証し、作品受容における方向性の広がり可能性を示そうとするものである。とりあげたウィグモア・ホールの教育プログラムは、人生の全ステージにおいて、多様な関心とレベルにあった音楽享受のレディネスを保証する、戦略的な構造となっている。中でも特徴的なのは、地域の幼稚園や小学校で活用できる「デジタル教材」を用意しており、幼児や児童生徒を対象としたコンサートと連携するしくみを構築していることである。そのような努力の結果、同ホールのスクールコンサートは通常のコンサートでは演目にのりにくいレパートリーや難解とされる作品を扱う内容となっている。本発表では、ホール運営における戦略的な構想と扱われる作品の新たな意義づけを通し、幼児期の表現活動、また小学校音楽科教育内での受容の実態にたつ音楽作品へのアプローチの可能性を示すものである。
5. The Study for The digital Teaching Materials which used “Warabe-uta” into Music Education of Japan. ー The Outlook and The Issuesー (Full Paper) 「わらべ歌」を音楽教育に用いたデジタル教材に関する研究ー展望と課題ー	ー	平成 24 年 3 月	SITE 2012--Society for Information Tecnology & Teacher Education International Conference 2012 In Austin Texas Association for the Advancement of Computing in Education (査読あり)	本発表は『「わらべ歌」を用いたデジタル教材の活用』についての発表である。「わらべうた」とは伝統的な子どもの遊び歌であり、非常に少ない音による単著純な構造を持つ。「わらべ歌」を音楽教育に持つことにより、幼稚園や小学校の教師はピアノをはじめとした特別な音楽の技術や技能を必ずしも要することなく、表現活動や音楽の授業を進めていくことができるという利点がある。一方、日本のデジタル教材の開発は、十分に研究が進んでいるとはいえない。本人担当部分: 「わらべ歌」導入についての実態調査と分析、論文執筆。大阪教育大学寺尾研究室で作成された当該教材について、現場での使用の実態を調査し、日本における全体的なデジタル教材の普及率と比較検討を担当した。同時に、今後の課題を示すと共に、幼児から初等教育へ連続して子供の力を伸ばすデジタル教材の活用についても提案事例を示し 【教員教育・情報技術教育国際学会 プレゼンテーション】山本美紀/寺尾正/竹下裕来 教員教育・情報技術教育国際学会 *発表については、単独発表。
6. 草創期メソディスト讃美歌集にみるウェスレーの芸術観ー『ファウンダリー・コレクション Foundery Collection』よりー	ー	平成 24 年 9 月	日本ウェスレー・メソジスト学会 於: 日本基督教団銀座教会	メソディストの最初期の讃美歌集 “The Foundery Tune Book” 実際に使われている音楽の分析を通して、ウェスレーの芸術観と音楽教育について考察したもの。再版されることがなかったことから、編集者ジョン・ウェスレーにとっての「失敗作」「試験作」という意見方がされてきたが、楽譜を確認すると、記譜法などの通常との違いは、音楽教育を受けていない当時の一般の人々にとって、わかりやすく表記しようとした意図が見える。 “The Foundery Tune Book” の分析によって、会衆歌の芸術性と共に、対象を明確化することによる楽譜の役割と公共教育の効果について明らかにした。18 世紀のウェスレーらによる楽譜の検討を通し、楽譜の持つ意味と芸術教育との関わりについて考察した。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
7. シンポジウム「地域 発、生活発、共同体 発、1950 年代以降 のキリスト教各派 の新しい讃美歌 — 伝統と信仰の普 遍性を越えて —」 コーディネーター	—	平成 24 年 11 月 24 日	日本音楽学会第 63 回 全国大会（於）西本願寺 聞法会館	18 世紀イギリス産業革命時に起こった「メソディ スト運動」は、社会システムの変換が新しい共同 体生成の契機となり、そこには必ず新しい共同体 の歌が生まれることを示している。そのような共 同体の誕生や社会的要請と創作との関係は、普遍 である。特に第 2 次世界大戦を受けた第 2 バチカ ン公会議前後から現代に至る、社会変革に伴う讃 美歌をはじめとした教会音楽に認められる変化 は、カトリック／プロテスタントにかかわらず、 歴史的に激しく大きなものである。讃美歌集の変 化の中で特に顕著なものに、「こども讃美歌」の 扱いがある。このような教会内外の状況変化か ら、本パネルでは、教会内外で音楽活動に携わる キリスト教各教派のパネラーによって、1950 年代 以降の変遷のそれぞれの音楽的特徴をふまえつ つ、地域の音楽教育の場としての教会と讃美歌の 果たす役割についてシンポジウムを行った。 コーディネーターおよび、17 世紀～18 世紀イ ギリスにおける音楽と文化について発表を担当。 コーディネーター：山本美紀 パネリスト：小栗 献（関西学院大学礼拝音楽非常勤講師）、長畑俊 道（立教小学校音楽科教師）、林祐美子（エリザ ベト音楽大学教授）、山本有紀（松山東雲女子大 学子ども学科教授）
8. 共同発表「教育プロ グラム」としての作 品創作の試み — 中村滋延 「悲し みの島」プロジェク トと教科領域への 挑戦—	—	平成 24 年 11 月 25 日	日本音楽学会第 63 回 全国大会 （於）西本願寺 聞法会 館	研究代表を務める「学校・文化施設による＜持 続可能な地域文化力＞を育む『連携型プログラ ム』の開発研究」（科学研究費補助金（基盤研究 B）における連携型教育プログラムに使用するコ ンテンツ作成に関する研究発表である。本研究プ ロジェクトでは、現在、中村滋延作曲弦楽四重奏 曲集「悲しみの島」より《ソヴァン・マチャ》、 同氏作メディアアート、創作舞踊（榎茂都梅弥月 氏）をコラボレーションさせた、保・幼・小およ び、中・高教育に用いる教材創作に取り組んでい る。本発表では、発達段階に沿ったプログラム開 発の創作過程及び、その実践より得た成果から、 各校種の連携を視野に入れ、教科の領域を超えて 能動的に芸術を受け止めていく力を育む、教育方 法の方向性について、考察を担当、発表した。 発表者：山本美紀、中村滋延、根岸一美
9. 初期メソディスト の讃美に託された もの — 個人的体 験から共同体の信 仰告白へ —	—	平成 25 年 9 月 14 日	日本讃美歌学会第 13 回 全国大会 （於）青山学院女子短期 大学	ウェスレーは会衆のために、最初の讃美歌集 『ファンダリーに集う会衆のための旋律付き讃 美歌集』“A Collection of Tunes set to Music as they are commonly sung at the Foundery”を 出版し、その後約 20 年たって 2 冊目の讃美歌集 『讃美歌選集』（1761 年、Select Hymns with Tunes Annex）を出版した。本発表では、まず ウェスレー「讃美の心得」『The Directions for Singing』を概観後、『ファンダリー・コレク ション』と『讃美歌選集』に収められた讃美歌の比 較を通し、ウェスレーが会衆讃美に託した教育的 機能を考察し、彼の音楽指導法について発表を行 った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10. 園・学校とホール・芸術文化団体とによる連携型教育プログラム研究 — 持続可能な地域文化力をはぐくむために —	—	平成 25 年 10 月 12 日	日本音楽教育学会第 44 回 全国大会 (於) 弘前大学	学校教育課程における音楽科教育は、様々な音楽や音楽活動に触れる重要な入り口となる役割は果たしているが、それぞれの音楽の良さを味わうために必要な教育方法への言及は少なく、現場に任されている。本発表では、具体的な教育的内容に踏み込むための課題に取り組むべく、①芸術作品聴取への取り組み、②教科領域の越境と可能性、の 2 つの観点から、連携型教育プログラム研究でのこれまでの保・幼・小各校種での成果を分析し、発達段階に即してスパイラルに発展する鑑賞教育の方法を提示した。さらに、教育期間を超えても、自分で芸術作品聴取の可能性を広げ続けるための、主体的鑑賞経験の基盤づくりについて提言を行った。
11. ホール・芸術文化団体と学校とによる「連携型教育プログラム」開発をめぐるドラマが導く音楽芸術体験の深化—	—	平成 25 年 11 月 2 日	日本音楽学会第 64 回 全国大会 (於) 慶応大学	本発表は、ホールやオーケストラ団体などといった地域既存の文化資源と教育機関との連携による「連携型教育プログラム」の開発をめぐる、「ドラマ」(物語性)が受け手の芸術体験の深化にどのような役割を果たすのか考察するものである。「連携型教育プログラム」が目指すのは、単に子どもたちが「盛り上がる」ことではなく、他の芸術プログラムに対しても、主体的受容姿勢につながる強い動機となる芸術体験の積み重ねを実現することである。「連携型教育プログラム」とは、学校と多様な文化施設とがふさわしい形で連動し、〈持続可能な地域文化力〉を高めることに寄与する芸術教育プログラムをさす。今回の発表では子どものための「連携型教育プログラム」開発をめぐる、音楽芸術の様々な入り口について「ドラマ」をキーワードに発表した。
12. 音楽マーケットとしての「日本」の始まり—アウセイ・ストロークのジャパン・プロモートをめぐって—	—	平成 25 年 11 月 24 日	『会館芸術』研究会発表 東京大学駒場キャンパス	アウセイ・ストローク (1887-1956) は、雑誌『会館芸術』のスポンサーである朝日新聞社社主村山家をうごかし、フェスティバルホールのこけら落としに「大阪国際フェスティバル」の開催を勧めた「きっかけ」となった人物である。彼が招聘した海外からの演奏家の多くは地方公演も行い、各地の小学校などで交流活動を行い、それがきっかけとなって音楽家を目指し演奏家となった日本時も多い。本発表では、そのような日本の音楽界の将来をにらんで教育的活動も続けたストロークについて、「大阪国際フェスティバル研究」に関わる史料に基づき、音楽教育界に与えた影響を明らかにすると共に、戦後日本の音楽界の土台をつくった音楽マネージャーの仕事について、概観した。
13. 朝日会館から大阪国際フェスティバルへ — ストロークの残像と影響 —	—	平成 26 年 7 月 13 日	『会館芸術』研究会発表 東京大学駒場キャンパス	大阪国際フェスティバルは、かつて日本における音楽祭の代名詞であり、実質的には日本初の国際音楽祭である。本発表では、提唱者であるアウセイ・ストロークが、どのような音楽祭を志向し、スポンサーの朝日新聞社社主村山一族に提示していたのか明らかにし、ストロークの死後、その影響がどの程度まで大阪国際フェスティバルに残っていたか、講演内容から考察した。日本の音楽受容の基本的イメージを構成した彼の仕事は、日本近代音楽史に重要な足跡を残している。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14. シンポジウム「地域と音楽ーコミュニケーション力を有する相互作用型コンテンツ形成と音楽芸術をめぐってー」	ー	平成 26 年 11 月 9 日	日本音楽学会第 65 回全国大会（於）九州大学大橋キャンパス	コーディネーターを務める。パネリストは尾本章（非会員：九州大学）大久保充代（非会員：八尾市文化ホールプリズムホール館長）中村滋延（西日本支部：九州大学教授）このパネル企画のテーマにある、「相互作用」の「相互」とは今回の場合は、「音楽作品」と「環境」を念頭に置いていた。音楽作品とは、作品そのものであるのに対し、環境には演奏会場や地域、演奏者、聴衆、企画者などが含まれる。環境の直接的影響を受けて作品がつくられ、さらに新しいジャンルが成立しつつあるという現代の事情として、それらを全体的なコンテンツとして包括的に分析する視点や方法論が今後必要とされているというのが本パネルの持つ課題意識である。本パネルでは特に、地域の教育と文化の拠点として小学校・中学校に向けての「コンテンツ研究」について意見を交わした。コーディネーター及び2人のパネルからは作品の学校という環境、児童生徒を対象とすることから作品そのものの「有り様」が変化した事例を提示、作曲家の中村氏からは、子供たちの「他者に関わる態度の深化」につながることを目指して「コミュニケーション力のあるコンテンツ」の作った経験から、また、尾本氏には作品を巡る環境である建築と、環境に関わる人材育成について、大学教育の立場から話題提供をいただいた。
15. 岡山孤児院における音楽的事象と教育 一石井十次の「音楽」の用い方ー	ー	平成 26 年 12 月 12 日	同志社大学人文科学研究第 1 研究会近代日本とキリスト教（於）同志社大学 啓明館 第 1 合同研究室	岡山孤児院において音楽幻燈隊活動の前提となる音楽教育を、多様な先行研究の検討及び、今日の近代音楽史研究の成果を踏まえながら明らかにした。特に本発表では、岡山孤児院音楽隊を舞台に展開した、近代日本音楽教育史と近代音楽史、及び近代日本宗教史研究のトライアングルな状況が持つ研究課題を明らかにした。 その結果、これまでの「音楽隊活動は救世軍の影響であった」という定説を覆し、当時のごく一般的な西洋音楽消費とそれほど変わらなかったこと、また、孤児院内の器楽教育が、当初はシグナルとして使用されることが目指され、後にそれが情緒の育成から音楽的内容を含むものへと変化していったことを明らかにした。
16. 岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって	ー	平成 27 年 3 月	京都大学アジアと宗教的多元性研究会ー（於）京都大学 キリスト教学研究室	岡山孤児院と音楽隊についての研究は、これまで音楽的事象に着目してこなかったことで、取りこぼした点や誤解してきた点だけでなく、さらなる広がりを持った研究領域との接続が困難であった。本稿では、楽隊が始まる以前の岡山孤児院の日常的音楽状況から結成直前の音楽教育、特に器楽教育に関わる内容を明らかにした。さらに、石井十次や聴衆となった大衆が触れたキリスト教を背景とした音楽状況の特性を明らかにした。その結果①キリスト教音楽における 1 ジャンルである器楽音楽が、「バンド文化」として関西で、しかも子どもの手によって始まったこと、②当時の豊かな世俗曲（謡も含め）を背景としたキリスト教音楽が存在したことを明らかにした。さらに今後の研究として、近代日本の音楽文化の大衆化と音楽教育との関わりについて可能性を示した。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
17. シンポジウム 「會館」という文化 装置－『會館藝術』 と大阪朝日会館	－	平成 27 年 3 月 14 日	『會館藝術』研究会主催 シンポジウム 東京大学駒場キャンパ ス	パネリストとして参加。 パネル発表「朝日会館と大阪フェスティバルホ ール－箱を文化装置化するという事」 1926 年から 1962 年までかけて存在した「大阪 朝日会館」とその機関誌『會館藝術』の、関西の モダニズム運動をけん引した働きについてのシ ンポジウムと展覧会。その中で、文化施設・機関 雑誌として、社会的に果たした教育的役割と啓蒙 的役割、またその後の生涯教育との関連性につ いて解説を行う。特に音楽マネージャーと来日アー ティストによって実現した地方公演は、国際交流 の場となり、洋楽受容をより身近なものとして受 け止めることを可能にした点に注目した。 ＜パネリスト＞岡野博（東京大学博士課程）、 前島志保（東京大学准教授）、ヘルマン・ゴチェ フスキ（東京大学准教授）、高山花子（東京大学 博士課程）、 <u>山本美紀（奈良学園大学准教授）</u> 、 ＜コメンテーター＞渡辺裕（東京大学教授）
18. トーク・イベント 中之島 3 丁目 時代 と建築の響き合い 「よみがえる朝日 会館」	－	平成 27 年 8 月 28 日	アサヒコムホール 主催；朝日ファミリー・ ニュース、後援；朝日新 聞社、協賛；竹中工務店、 関電工、高砂熱学工業、 協力；朝日ビルディング	登壇者として参加。 関西モダニズム運動の牙城となり、建築としても 特徴的な朝日会館そのものに焦点をあてたトー ク・イベント。研究会の成果を広く社会に知らせ る目的も同時に持っていた。基調講演では特に、 朝日会館で行われた子供の教育に関するプログ ラムについて言及し、地域教育・文化施設とし て朝日會館が果たしていた役割、また教育内容と その方法論について、その芸術的内容と共に、解 説を行った。 ＜登壇者＞前島志保（東京大学准教授）、 <u>山本美 紀（奈良学園大学准教授）</u> 、山上揚平（東京芸術 大学講師）ほか
19. 「音楽と社会」研究 会シンポジウム： 音楽が生起すると き－出会う《職業 人・愛好者・大衆》 － 「音楽を媒体とす る場の考察から －宗教・教育・音 楽祭－」（再掲）	－	平成 28 年 1 月 23 日	「音楽と社会」研究会 立命館大学衣笠キャン パス創思館	基調講演者として登壇 芸術作品の成立に欠かせない、芸術科や鑑賞者、 価値を歴史的に担保・維持する関係性について、 特に音楽の実践における人々の関係性に着目し て開催されたシンポジウム。 講演では、フェスティバルや専門家による教育プ ログラム等の音楽活動における、音楽家と人々 との関係性の歴史的変遷について論じる。 長年、芸術によって社会が有機的に結びつくこ とを盲目的に信じる考えが合ったが、近年では「芸 術の社会を分断する力」を認識し、克服しようと する目的が、欧米諸国における芸術に携わる諸団 体の各種「教育プログラム」やアートカウンシル の取り組みの根底にあり、それが作品そのもの にも影響を与えていると考えられる。本講演では、 これまでの日本における「アートマネーজে メント」や「文化政策」の課題を提示した上で、欧 米諸国の現状を紹介し、後の議論につなげた。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
20. 2016 日本賛美歌学 会第 16 回全国大会 パネルディスカッ ション「賛美歌の共 有について思うこ と」（再掲）	—	平成 28 年 9 月 10 日	立教大学 池袋キャン パス 主催：日本賛美歌学会	「讃美歌の共有を考えるー『共通讃美歌』をきっかけに」司会者／ファシリテーターとして登壇 明治以降現代に至るまで、教派により様々な賛美 歌が日本で出版されてきた。そのため、同じ賛美 歌であっても訳の違いや、誤訳、あるいは神学上 の問題点など、情報の混乱が見られる現代である。 さらに、社会的な課題に向き合う海外の賛美 歌創作の状況を考えるならば、今日日本において 賛美歌そのものだけでなく、賛美歌に関わる様々 な情報の共有が至急の課題であることは明らか である。本パネルディスカッションでは、ようや く始まろうとしている賛美歌の共有に関わる現 代の課題を提示すると共に、共有することの意 義、また意識の共有について扱った。 司会／ファシリテーター：山本美紀 パネリス ト：水野隆一（関西学院大学）、宮崎光（立教大 学）、宮越俊充（上智大学）ほか
21. 19 世紀末から 20 世紀初頭における 英国救世軍の活動 と幻燈ー社会包摂 としての娯楽の機 能；救世軍国際記念 館（International Heritage Center／ The Salvation Army）における調 査 資 料 の 報 告 （2015 年）を兼ね て	単独	平成 28 年 10 月 26 日	京都大学アジアと宗教 的多元性研究会ー （於）京都大学 キリス ト教学研究室	ロンドンにある救世軍国際記念館（歴史資料館 International Heritage Center／The Salvation Army）の日本関係資料及び、救世軍オリジナル の幻燈から見える、救世軍の幻燈の用い方につ いて、生涯教育の視点から論じたもの。 現在日本の山室軍平記念救世軍資料館及び、英国 救世軍（万国救世軍本部）の救世軍資料の所蔵状 況について、日本宣教の開始以来の英国救世軍 （万国救世軍本部）との緊密な関係性がうかがえ る資料に関する報告を行った。 特に、両救世軍が積極的に用いたメディアである 幻燈について資料収集を行い、当時の”War Cry” 等の雑誌資料とを比較し、近代に両国のメディア において日本と世界がどのように描き出されて いたのか分析した。
22. 誌上の祝祭へのア プローチ —— 雑誌『會館藝 術』にみる大阪国際 フェスティバルを 準備した土壌——	単独	平成 29 年 6 月 24 日	同時代史学会 関西研究 会 （於）西宮市大学交流セ ンターセミナー室 2	『音楽祭の戦後史』に続く報告ということから、 フェスティバルホール前身である朝日会館の 機関誌『會館藝術』をもとに、当時の一大メディ アである朝日新聞社の福祉事業として出発した 朝日会館運営について報告を行った。 現代もあるフェスティバルホール、および大阪国 際フェスティバルの原風景を描き出すことによ って、朝日会館の存在なしには成立しなかったこ とを明らかにした。芸術活動が一般化していく初 期の段階に、具体的な場を背景とした機関誌をは じめ様々なメディアを駆使してその活動を補完 し、バーチャルな聴衆（観衆）共同体を形成する と同時に、社会教育・福祉活動の基盤を構築する プロセスを示した。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
23. 『コドモの本』と朝 日會館 ——現実の 場を補完するバー チャルなつながり の構築	単独	平成 29 年 8 月 3 日	東京大学駒場キャンパ ス 8 号館 319	『コドモの本』は、朝日會館が発行した、子供の ための総合文化雑誌である。朝日會館では、1926 年（大正 15 年）10 月のオープン当初より「アサ ヒ・コドモノの會」（以下「コドモの會」）を初 め、『アサヒ（カイカン）・コドモの本』（以下 「コドモの本」）「アサヒ・コドモ芸術院」（以 下「コドモ・アテネ」という、子供を対象とした 大きな規格の枠組みがあった。雑誌は、そのよう な具体的な場と、読者（子供と保護者）をつなぎ、 組織的な発展を実現していった。この組織力は、 戦後の「労音」や「うたごえ」に踏襲される組織 作りの手段でもある。 本発表は、『コドモの本』に関する第 1 回目の発 表でもあり、現存する資料からの出版の経緯の整 理、運営母体である朝日新聞厚生事業団における 「子供文化」の位置づけと組織構築の必要性、戦 後に続く文化活動への影響等について言及した。
24. 戦前の大型民間ホ ールとこどもの音楽 活動 —社団法人朝 日新聞社会事業団 のこども対象企画 (1926 年-1935 年) の検討より—	単	平成 29 年 10 月 22 日	日本音楽教育学会 愛知教育大学	1926 年（大正 15 年）10 月に大阪中之島にオー プンした朝日會館では、オープン当初以来「アサ ヒ・コドモノの會」が終戦間際まで開催され、238 回を数えた。そこでは、運営母体である社団法人 朝日新聞社会事業団のこども対象企画を反映し、 様々なジャンルの芸術教育（趣味教育）が、こど もとその保護者に向けて提供されていた。 本発表では、社会事業団がこどもを対象として行 っていた事業のうち、3 つの事業「コドモの會」 『アサヒ・コドモの本』「アサヒ・コドモ・芸術院 アテネ」に焦点をあて、戦前のホール主導による社会教 育としての芸術教育及び、ホールを具体的な場と したこどもの芸術活動とその文化的ネットワー クについて考察。民間団体による戦前のこどもを 対象とした具体的な場（ホール）をもつ芸術活動 ／教育と、誌面での仮想的つながりが、こどもの ための芸術教育活動として果たした機能と役割 にを明らかにするとともに、その先駆的展開が現 代に与えている影響について提示した。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
25. 戦前の民間ホール 主導による子供の趣味 教育とネットワーク ー ホールの社会的 存在意義の自覚と 社会へのアプローチ ー	単	平成 29 年 12 月 16 日	日本音楽芸術マネジメン ト学会 武蔵野音楽大学(江古田 キャンパス)	『アサヒ・コドモの本』は、1926 年(大正 15 年)10 月に大阪中之島にオープンした朝日会館の子供対象企画の機関誌である。朝日会館ではスタート直後より子供向けの映画会を皮切りに子供のための企画枠を持っており、具体的な「現場」としては、「アサヒ・コドモの會」と、「アサヒ・コドモ・芸術院(アテネ)」があった。本発表は、ホールと読者をつなぐと同時に、読者間をつなぐネットワーク作りによって、子供の趣味教育を志向したホールの活動(現場)と機関誌がどのような関連性にあったのか、考察しようとするものである。 都会に住む子供達のための「健全な娯楽と慰安を提供」を目的とした「コドモの会」に対し、「コドモの本」は読んだり創作して懸賞応募できるコーナーを作ったりといった、家で楽しむ内容が充実している。同時に、保護者に子供のための「良い本」を提案したり、学校校長や専門分野を持つ教育者に執筆依頼したり、家庭教育への介入も強く意識したものであった。 ホールが社会で果たす役割を自覚し、教育的機能を覚醒するに至るプロセスと現代に続く意義を明らかにした。
26. シンポジウム「能楽 における伝統の意 味を考える」 報告「伝統文化遺産 の保存と活用ー教 育の場での扱いを 含めた日本におけ る動向ー」(再掲)	単	平成 30 年 4 月 21 日	民族藝術学会 林原美術館	2020 年の東京五輪を前に、文化行政の動きも活発化しており、観光の目玉として日本の伝統文化について、伝統文化の「保存と活用」から、今まで以上に学校や地域での教育活動を中心に「活発な活用」が求められている。能も例外ではない。そこで今回は、朝日会館における「朝日会館能」昭和初期の活動を取りあげ、現在では「ホール能」と呼ばれる形式が、どのように始められていったか明らかにした。また、現代の能に教育の場での能など日本古典芸能の事例を取り上げながら、これまで「伝統芸能」がどのように受け止められ扱われてきたのか、近代通史的に概観すると共に、「活発な活用」が「伝統芸能」に与える影響について報告を行った。
27. メディアによる子供 を媒介とした家庭へ の介入の始まりとキ リスト教ー朝日新聞 社の初期子供向け 事業から	単	平成 30 年 5 月 19 日	京都大学アジアと宗教的 多元性研究会 京都大学キリスト教楽研 究室	大阪朝日新聞社に於いて、芸術文化活動は社会教科活動であり、自社が所有する朝日会館に於ける芸術文化的活動は、何よりも社会福祉の意味を第一としていた。子供を対象とした様々な企画は、それが最も鮮明な形で現れたものである。 本発表では、発表者がこれまで研究してきた明治期以降の幻燈などを媒体(メディア)としたキリスト教社会福祉による様々な社会教育活動が、メディアに徐々に代わられる移行期について、「子供を対象とした」企画や、朝日会館機関誌『会館芸術』、及び『アサヒカイカン コドモの本』の記事から考察したのである。

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
28. 講演「近代日本のメディアを活用した福祉活動と、メソジスト文化としての賛美歌」(再掲)	単	平成30年9月8日	日本ウェスレー・メソジスト学会 (於)日本キリスト教団 渋谷教会	日本ウェスレー・メソジスト学会における講演。「メディア」も「福祉活動」も、「賛美」と同様にメソジストの働きとして最初から力を入れられていたものであったことから、コミュニティ形成の要素として、賛美歌の役割がコミュニティ内でのどのように変化していったかについて言及した。さらに、「ボランティア」という言葉が、今日的意義をもって使われるようになったのも、メソジストが始まりだといわれているように、福祉の働きも、メソジストコミュニティにおいて大きな役割を果たしてきた。このような、キリスト教文化を背景とした福祉的活動がどのように日本に受け入れられてきたのかについてもふれた。
29. 講演「コミュニティ形成と音楽教育 ―日本近代における宗教的影響とメディア―」(再掲)	単	平成30年10月19日	神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 研究会	神戸大学大学院における講演。賛美歌の持つ歴史について概観した後、産業革命以降、変化したコミュニティ形成に、賛美歌がどのような役割を果たしたのか、教育的側面から言及した。また形成されたコミュニティが互助団体を超えて、どのような教育・福祉活動を展開していったのかについて講演。さらに、現代メディアにおける被災地をはじめとした「生きることの困難さ」が、ショー化していく過程について、その萌芽がすでに近代メディアの福祉的内容の扱いや教育との関わりから見えることを示唆した。
30. 展覧会 「朝日会館と京阪神モダニズム ―戦前・戦中・戦後―」 シンポジウム 「文化装置としての朝日会館・『会館芸術』」(再掲)	―	平成30年12月2日	『会館芸術』研究会主催 シンポジウム 大阪大学豊中キャンパス 大阪大学会館	登壇者として参加。 登壇者発表「朝日会館の子供対象事業;メディアが築く福祉的・重層的つながり」 1926年から1962年までかけて存在した「大阪朝日会館」における、子供を対象とした企画に焦点をあてたもの。展覧会では、大阪だけでなく、神戸・京都・名古屋、東京・横浜を結んだ機関誌『コドモの本』についてパネルを作成。シンポジウムでは特に、機関誌の果たしたバーチャル・コミュニティ形成の方法と共に、そこに関東大震災や戦争などによる社会不安へのメディアの福祉的介入が、芸術文化活動と抱き合わせで、芸術文化活動の実施根拠にも利用されながら、現代に続く試みがすでに行われていた萌芽を実証的に論じた。 ＜パネリスト＞前島志保（東京大学准教授）、岡野博（東京大学博士課程）山上陽平（東京芸術大学）、山本美紀（奈良学園大学准教授）、 ＜コメンテーター＞橋爪節也（大阪大学教授）
【演奏会企画】 1. アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかいりょう in まぶね隣保園」	単独	平成25年6月20日	社会福祉法人 日本コイノニア福祉会 円町まぶね隣保園	地域の保育園と演奏団体と連携し、プロの演奏家によるワークショップ型のコンサートを企画。コンサートでは、まぶね隣保園での日常の表現活動や音楽遊びを重視し、まぶね隣保園バージョンでプログラムを組み、楽器体験や音楽を聴いてのお絵かき時間などをとった。 対象園児：2～3才児 30名 演奏曲目：国際急行列車、スペインの踊り 出演者：森本真裕美（京都フィルハーモニー室内合奏団、ヴァイオリニスト）

著書、学術論文等の名称	単 著 ・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
2. アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかいりょこ in 光の子保育園」	単独	平成 25 年 6 月 25 日	社会福祉法人 京都地の塩会 光の子保育園	地域の保育園と演奏団体と連携し、プロの演奏家によるワークショップ型のコンサートを企画。光の子保育園での日常の表現活動や音楽遊びを重視し、光の子保育園バージョンでプログラムを組み、楽器体験や音楽を聴いてのお絵かき時間などをとった。 対象園児：5 才児 30 名 演奏曲目：金婚式、タイスの瞑想曲他 出演者：森本真裕美（京都フィルハーモニー室内合奏団、ヴァイオリニスト）
3. ストリングストーリー ―がっきで、からだで、おはなししよう！	単独	平成 25 年 8 月 12 日	岡山県立美術館ホール	公立小学校（備前市立西鶴山小学校）と地域の文化施設（岡山県立美術館）との連携実践研究として企画した弦楽四重奏コンサート。西鶴山小学校の全生徒と、その保護者や家族を対象としたもの。コンサートでは、「喜怒哀楽」をキーワードに、音楽でそれがどのように表現されているのか、小学校音楽科鑑賞教材で既習の作品の他、事前授業で学んだ現代音楽で中村滋延作曲《ソヴァン・マチャ》を、映像・ダンスと共に鑑賞した。後のアンケートで、あらかじめ事前授業でコンサート内容を理解した子供たちが、音楽で表現された内容を深く読み取り、積極的な音楽聴取につなげていたことが明らかであった。さらに、保護者からは、生の弦楽四重奏をコンサートホールで、家族で聴く機会が持てたとの好評を得た。 対象児童：西鶴山小学校生と引率教員、保護者 演奏曲目：ワルツィングキャット、天国と地獄、ソヴァン・マチャ 出演者：京都フィルハーモニー室内合奏団、奥祥子（ダンス） 映像：中村滋延（九州大学教授）
【演奏活動】 1. 中小企業庁「平成 21 年度 地域商店街活性化事業」 KOB E ミュージック・ウォーク 2010 コンサート出演	共同	平成 22 年 3 月	元町商店街 特設ステージ	KOB E ミュージックウォーク 2010 実行委員会からの招聘を受け、ヴィオラとピアノによる、ライブコンサート（グループ名：Maris Stella）に出演。小学校音楽科歌唱共通教材、および旧鑑賞共通教材から作品を選び構成。好評を得る。 主催：KOB E ミュージックウォーク 2010 実行委員会 後援：兵庫県／神戸市／（財）神戸国際観光コンベンション協会／（財）神戸市民文化振興財団／（社）神戸港振興協会／神戸商工会議所／神戸新聞社／サンテレビジョン／ラジオ関西 ヴィオラ演奏を担当

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 安東 雅訓

研 究 分 野		研究内容のキーワード
表現論的組合せ論		整数の分割, ヤング図形, 母関数
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 (1) 学習支援システム上への演習問題の公開 (2) 就職試験対策講座における, 数的推理・判断推理分野の推理による解法の実践	平成 24 年 4 月 ～平成 30 年 3 月 平成 25 年 6 月 ～平成 29 年 8 月	稚内北星学園大学において, 講義で扱った演習問題を学習支援システム上に上げている. 在学生の他にも高校で教員をしている卒業生もたびたび確認しており, 授業の参考や自学に活用している. 数的推理・判断推理分野の問題は初等的な数学を用い時間をかけて丁寧に解けば答えの出せるものが殆どだが, その方法で正解率・回答速度を上げようとすれば慣れるより他なく, それなりの時間を要す. そこでこの分野は「数学」ではなく「推理」であるとしての, ベイズ確率等のテクニックにより選択肢を推理する方法を紹介している. 実際に公務員試験等で使い, 有効だったとの評価を得ている.
2 作成した教科書, 教材 (1) 数学科目演習問題 (2) 就職試験対策講座における演習問題 (3) 数理パズル集	平成 24 年 4 月 ～平成 30 年 3 月 平成 25 年 6 月 ～平成 29 年 8 月 平成 26 年 12 月	稚内北星学園大学において, 担当数学科目(数学基礎 I, II, 線形代数学 I, II 演習, 代数学 I, II, 幾何学 II, 集合論入門)で扱った演習問題を LMS (ラーニングマネジメントシステム) 上にアップしたもの. 教科書の演習問題としてはあまり見ない類の問題も多く載せている. 稚内北星学園大学における就職試験対策講座において, 教材として使用したもの. 定着のために扱う問題の種類を絞り類似の問題を多くそろえており, それらの問題を不得意とする学生には好評であった. 稚内北星学園大学まちなかメディアラボのプレオープンにおいて特集した数理パズル集. 小学校低学年レベルの問題から高校生レベルまでを揃えている.
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 稚内北星学園大学採用時の学部長の評価	平成 24 年 2 月	数学についての深い知識だけでなく, 教育に対しての情熱と使命感を備えており, 数学教育だけでなく教員養成にもその力を発揮すると期待する.
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 北海道教育大学大学院生への指導	平成 26 年 9 月 平成 27 年 10 月	北海道教育大学の大学院生 2 名に対し, 大学数学と高校数学の関連, 教員採用試験過去問の解説, 中高生向けの数学トピック紹介等の指導を行った. 北海道教育大学の大学院生 2 名に対し, Latex のインストールと使用方法, 教員採用試験過去問の解説, 大学入試問題の指導方法等の指導を行った.
5 その他 特記事項無し		

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 資格, 免許				
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(学術論文) (査読有) 1 Combinatorics for graded Cartan matrices of the Iwahori-Hecke algebra of type A.	共著	2013	Annals of Combinatorics , 17(3)427-442.	熊本大学山田裕史教授, 岡山大学鈴木武史准教授との共同研究である. オイラーの奇・相違分割等式の証明に用いられるグレイシャー対応の各ステップにウエイトを付け, そのウエイトを用いて A 型岩堀-ヘッケ環の次数付きカルタン行列の行列式を記述している. 共著: 山田裕史, 鈴木武史, <u>安東雅訓</u>
2 A combinatorial proof of an identity for the divisor function.	単著	2013	Electronic Journal of Combinatorics, 20(2)12pp.	内村型 q -恒等式と呼ばれる, 約数関数と関連した q 級数の等式について, 組合せ論による翻訳と, 写像を用いての全単射証明を与えている.
3 Products of parts in class regular partitions	共著	2017	Hiroshima Mathematical Journal, 47(1) 15-18.	熊本大学山田裕史教授との共同研究である. r -類正則分割から定まる盤上に 2 種のウエイトを定義し, それらの積が階数を定める毎に一致することを示している. 0 階以降の積は岩堀-ヘッケ環の次数付きカルタン行列の行列式に一致する. 著者: 山田裕史, <u>安東雅訓</u>
(査読なし) 4 グレイシャー対応とヘッケ環の次数付きカルタン行列	共著	2011	京都大学数理解析研究所, 1738, 83-91.	整数の分割の各成分の個数について, p -進法での桁数を考えるという式と, その背景にある A 型次数付きカルタン行列の行列式を説明している. この結果は宇野-山田のカルタン行列に関する結果の次数付き版となっている. 著者: 山田裕史, 鈴木武史, <u>安東雅訓</u>
5 次数付きカルタン行列に関する組合せ論	共著	2011	代数群と量子群の表現論研究集会報告集 12-20.	オイラーの奇・相違分割の等式の全単射証明法の 1 つにグレイシャー対応と呼ばれるものがある. このグレイシャー対応の各ステップにウエイトを付けたものを複数次え, これらの積が次数付きカルタン行列の行列式に一致することを示している. 著者: 山田裕史, 鈴木武史, <u>安東雅訓</u>

著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
6 約数関数に関する q - 方程式	単著	2013	北海道大学数学講究 録, 157, 209-212.	約数関数に係る内村型 q -恒等式 と呼ばれる式について, 組合せ論的な 意味づけと精密化を行っている.
7 内村型 q -恒等式の組 合せ論的理解と一般化	単著	2013	室蘭工業大学数理科 学談話会報告集, Web 掲載	内村型 q -恒等式と呼ばれる q 級数の 等式について, 式変形・超幾何関数の 特殊化と色々な証明が知られているが, 組合せ論の話として証明している.
8 制限分割の数え上げ	単著	2017	数学セミナー2月号	雑誌「数学セミナー」の整数の分割 特集において, 制限分割の数え上げに ついての記事を担当した.
：				
(その他) 講演・学会発表				
1 ヤング図形のフック長の 積		2010年3月	日本数学会年会	
2 グレイシャー対応と次 数付きカルタン行列		2010年9月	日本数学会秋季総合 分科会	
3 グレイシャーウエイト と次数付きカルタン行列		2010年10月	RIMS 研究集会組合せ 論的表現論とその応 用	
4 次数付きカルタン行列 における組合せ論		2011年6月	代数群と量子群の表 現論研究集会	
5 相異分割のヤング図形 と約数関数		2012年3月	日本数学会年会	
6 内村型 q -恒等式の組合 せ論的理解と一般化		2013年2月	室蘭工業大学数理科 学談話会	
7 約数関数に関する q -方 程式		2013年2月	数学総合若手研究集 会	
8 内村型 q -恒等式の組合 せ論的理解と一般化		2013年6月	東海大学数学科談話 会	
9 内村型 q -恒等式とヤン グ図形		2013年10月	RIMS 研究集会組合せ 論的表現論の展望	
10 4-正則分割について		2014年1月	岡山大学理学部数学 科談話会 CORE	
11 分割のフック長の積に 関する公式		2014年3月	第1回岡山-広島代数 学シンポジウム	
12 分割と相異分割の母関 数における相似性の理解 とその応用		2014年9月	日本数学会秋季総合 分科会	
13 約数関数と相異分割		2014年11月	東京無限可積分セミ ナー	
14 奇数と台形数		2015年3月	日本数学会年会	
15 奇数と台形数		2015年3月	第2回岡山-広島代数 学シンポジウム	
16 ヤング図形のフックの 超対称性について		2015年11月	室蘭工業大学数理科 学談話会	
17 長方形型と階段型のヤ ング図形		2016年3月	第3回岡山-広島代数 学シンポジウム	
18 劣正則分割とグレイシ ャー対応		2016年8月	稚内表現論小研究集 会	
19 ヤング図形におけるフ ックの超対称性について の組合せ論的証明		2017年8月	弘前表現論小研究集 会	
20 整数の分割と母関数		2018年8月	岡山大学オープンキ ャンパス	

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
21 カタラン数の表示につ いての 3 つの証明 22 劣正則分割とグレイシ ャー対応 ：		2018 年 8 月 2018 年 9 月	福井表現論小研究集 会 日本数学会秋季総合 分科会	

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 岡野 聡子

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
幼児教育、キャリア教育、地域福祉		子どもと環境、キャリア教育、子育て支援、地域福祉	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事項		年月日	概 要
1 教育方法の実践例 (1) メールアドレスの使用による学生相談		平成 20 年 4 月～ 平成 23 年 3 月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科にて、保育学生のキャリア支援を担当した。学生のキャリア発達を促すためには、自分の話を親身に聞いてくれる人が必要となる。そのため研究室のメールアドレスを学生に周知し、いつでも質問に応じられる体制を整備した。学生の疑問に対して即時対応が可能であり、そのことによって学生は指導者を身近に感じるだけでなく、研究室に来訪する回数も増え、進路決定に対する意欲が高まった。
(2) 学内掲示板を利用した学生の質問への回答		平成 20 年 6 月～ 平成 23 年 3 月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科にて、キャリア支援の一環として、1 年生の 4 月から 2 年生の 3 月まで合計 5 回の進路希望調査を実施した。その中に自由記述欄を設け、進路相談を含め、日常生活の中での悩みや疑問を匿名式で書かせた。回を重ねるごとに自由記述への書き込みが増え、それらの質問に対する回答を 3 日以内に学内の掲示板に貼り出した。掲示板での回答方式により、学生同士の情報共有化を推進しただけでなく、自分の抱えている悩みが他の人も抱えている悩みであったということを知るきっかけとなり、学生内の安堵感を作り出すことができた。
(3) 視聴覚教材の活用		平成 24 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科の講師として、「子どもと環境」を担当した。保育を専攻する学生は、子どもと接する経験が豊富であるとはいえず、また教科書の記述や講義だけでは、学生は子どもに対するイメージがわきにくいいため、ビデオ教材を適宜使用した。映像を通して子どもの実像を実感し、理解を深めるように工夫している。また、ビデオ教材は学生が受身的に観て終わりということになりやすいので、ビデオ視聴前に課題を与え、問題意識を持ってビデオ教材を視聴させるようにしている。なお、その課題に対する解答へは、採点をして返却をしている。それらの過程により、学生の子どもに対するイメージが豊富になり、教育効果が上がっているといえる。
(4) 体験学習を取り入れた授業		平成 24 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科の講師として、「子どもと環境」を担当した。授業内において幼稚園や保育所にて実際に活用できる教材研究を体験的に行わせる工夫をした。その結果、学生アンケートにおいても就職後にすぐに使用できるものであると好評を得た。
(5) LINE アプリを活用したキャリア支援の実施		平成 28 年 6 月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の講師として、キャリア形成科目（キャリアデザインⅠ・Ⅱ、キャリアディベロップメントⅠ・Ⅱ、キャリアスキルアップⅠ・Ⅱ、インターンシップ）を担当した。奈良学園大学のキャリア教育は、1～3 年まで実施し、就職活動が本格化する 4 年次は、学生と教員の実質的支援がなくなる。そのため、これまでのキャリア教育で培った力が発揮されるよう、LINE アプリを用いてキャリア支援を実施した。任意登録としたが、2017 年 5 月現在で全学生 100 名中、52 名が参加をし、一般企業志望者である 38 名は全て加入している。なお、LINE アプリを通して、教

		員と情報交換をすることで、5月22日時点における一般企業就職内定者は、64.1%という成果を上げることができた。
(6) 授業に関するホームページの立ち上げ・運営	平成30年4月～現在に至る	「子どもと環境」および「キャリアスキルアップⅠ」にて活用する授業補助教材を提示したホームページを立ち上げた。学生のレポートを添削し、その結果をホームページ上で公開しており、サイトを見た学生が他者の優れたレポートを閲覧することができるため、具体的にどのように文章構成をすればよいかがあったとの声を学生から多くもらった。また、教育実習中の学生も授業内容を知ることができるため、授業についていけなかったらどうしようといった不安が軽減されたとの声もあった。
2 作成した教科書、教材 (1) 平成23年度キャリアデザイン「一般企業就職希望者へのキャリア支援教材」(教材)	平成24年5月	平成23年9月26日～平成24年1月31日までに講義をした内容を「一般企業就職を目指す学生のための支援教材」としてまとめ、作成した。一般企業就職希望者(3年生106名)を対象として、企業研究の方法やエントリーシート・SPI試験対策などの教育課程外にあたるキャリア支援の提供も手厚く行った。キャリア教育の本来的目的である就労意欲の向上を実現するために外部講師の充実も図った。 (作成者) 岡野聡子 (発行元) 環太平洋大学キャリアセンター (総頁数) 186ページ (所属) 環太平洋大学キャリアセンター、 (使用した科目名) キャリアデザイン
(2) 仏教保育行事「まことの保育」 ～学校法人安居院 あぐい幼稚園の実践事例から～ (教材)	平成24年6月	私立園は、園独自の保育方針や保育カリキュラムを持っている。その中で、保育に仏教思想を取り入れている園は数多くみられる。特に仏教保育を展開している私立園に就職を希望している学生のために、仏教保育とは何か、生活の中での仏教保育の取り入れ方、仏教三大行事(降誕会・成道会・涅槃会)、行事で使用する楽譜集等も含め、一つの冊子としてまとめた。仏教系私立保育園を目指す学生に貸出をし、好評を得ている。 (作成者) 岡野聡子 (発行元) 環太平洋大学こども発達学科 (総頁数) 37ページ (所属) 環太平洋大学次世代教育学部こども発達 学科 (使用した科目名) 子どもと環境
(3) 「キャリアデザイン サブノート」(教材)	平成24年9月	本学の後期に開講される「キャリアデザイン」は、4つの分室(教職支援室、幼保施設分室、公務員支援室、企業等就職支援室)に分かれて指導を行っている。前年度まで、各分室で行ってきた授業内容は会議で共有されるものの、教育の効果や評価に対する議論が不足していた。 そのため、学生の学びを可視化し、適切な評価をそれぞれの教員ができるようにサブノートの作成を行った。 (作成者) 小野憲一、岡野聡子、大野光二、三木澄代、久田孝 (発行元) 環太平洋大学 (出版社) ふくろう出版 (総頁数) 64ページ (所属) 環太平洋大学次世代教育学部こども発達 学科 (使用した科目名) キャリアデザイン
(4) 『子どもと環境～身近な環境とのかかわりを深めるために～』(教科書)(再掲)	平成25年2月	乳幼児期は、学校の一斉授業のように知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる土台を作る時期である。この時期は、子ども自身が生活の中から、好奇心や探究心をもって環境にかかわることで遊びを展開し、充実感や満足感を味わうことが大切である。子どもが自発的に環境とかかわり、さまざまな体験から生きる喜びや充実感が味わうためには、子どもの遊びの質を高められるような保育

		者の意図的なかわりが必要となる。本書では、子どもと自然環境、物的環境、社会環境のかかわりについて実践事例を用いて解説した。 (単著・共著) 単著 (判型) A5 判 (総頁数) 71 ページ (出版社) E R P ブックレット (所属) 環太平洋大学次世代教育学部こども発達 学科 (使用した科目名) 子どもと環境
(5)『子どもの生活理解と環境づくり～幼児教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』(教科書)(再掲)	平成 25 年 3 月	2005 年の中央教育審議会答申では、幼児期教育の意義と役割を「学校教育の始まりとして幼児教育をとらえれば、幼児教育は、知識や技能に加え、思考力・判断力・表現力の基礎を育成する役割を担っている」とした。そのことによって、幼児教育のあり方が、学校教育をより意識したものに変化してきていることがわかる。本書では、幼稚園や保育所で行われる幼児教育と小学校教育の連携をいかに図っていくかについて、幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」を軸として、自然環境・物的環境・社会環境の 3 つの視点を用いて事例を取り上げながら解説を行った。 (単著・共著) 共著 (判型) A5 判 (総頁数) 166 ページ (出版社) ふくろう出版 (担当頁) pp. 1-12, pp. 134-137, pp. 140-142, pp. 137-140 (翻訳担当) (担当部分) 第 1 章第 1 節、第 5 章第 3 節 1、2-2・3 第 5 章第 3 節 2-1 の翻訳 (編著者) 岡野聡子・筒井愛知 (分担執筆) 松田智子・吉村啓子・辻野孝・大野鈴子・金光文代・平松茂・馬場浩一郎・中道美鶴・岡田美紀・土谷長子・アンソニー・ウォルシュ (所属) 環太平洋大学次世代教育学部こども発達 学科 (使用した科目名) 子どもと環境
(6)「キャリアデザイン サブノート ～改訂版～」 (教材)	平成 25 年 4 月	前年度に作成したキャリアデザインサブノートに、自己理解や業界研究、社会の理解の開設、就職活動の資料を新たに加えて作成した。前年度まで、各分室で行ってきた授業内容は会議で共有されるものの、教育の効果や評価に対する議論が不足していた。そのため、学生の学びを可視化し、適切な評価をそれぞれの教員ができるようにサブノートの作成を行った。 (編集・著者) 岡野聡子 (共著者) 小野憲一、石渡嶺司、三木澄代、大野光二 (発行元) 環太平洋大学 (出版社) ふくろう出版 (総頁数) 90 ページ (担当頁) pp. 2-9, pp. 34-45, pp. 51-86 (所属) 環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科 (使用した科目名) キャリアデザイン
(7)「教職表現力演習ノート」(教材)	平成 27 年 4 月	前年度に実施した教職表現力演習の授業内容を精査し、教材を作成した。授業目的は、新聞記事や評論文を用いて、他者に物事をわかりやすく説明する力の育成を図り、アカデミックスキルの基礎を涵養することにある。作成した教材の構成は、①読んでまとめる、②言葉を学ぶ、③聴いてまとめるから成り立ち、それぞれの項目を段階的に学べるようにしている。 (編集・著者) 西辻正副、山本美紀 (共著者) 岡村季光、岡野聡子、高木悠哉、松井典夫 (発行元) 奈良学園大学 (出版社) 株式会社廣済堂 (総頁数) 152 ページ

		(担当頁) pp.114-115 (所属) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 (使用した科目名) 教職表現力演習 I
(8)「キャリアデザインⅡ～職業研究ワークブック～」 (教材)	平成 27 年 9 月	キャリアデザインⅡでは、職業研究「働くこととは」をテーマとして、さまざまな業界から各分野において活躍している・してきた外部講師を招聘し、仕事に対する考え方や進め方を研究することを授業目的としている。本ワークブックでは、聞いたことをメモにまとめる要約力と、まとめた情報を簡潔に示す構造力を身に付けられるように構成した。 (作成者) 岡野聡子 (発行元) 奈良学園大学 (総頁数) 30 ページ (所属) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 (使用した科目名) キャリアデザインⅡ
(9)「キャリアディベロップメントⅡ～職業研究 2 ワークブック～」(教材)	平成 27 年 9 月	キャリアディベロップメントⅡでは、①自己理解の深化、②職業への理解を深める、③インターンシップの 3 部構成としており、1 年次で学んだことを活かす内容となる。本ワークブックのねらいは、授業分析等を通して、仕事内容への理解を深めると同時に、多様な職種の情報を収集し、学生自身が具体的な職業像を獲得できることである。 (作成者) 岡野聡子 (発行元) 奈良学園大学 (総頁数) 30 ページ (所属) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 (使用した科目名) キャリアディベロップメントⅡ
(10)「2016 年度版 教職表現力演習ノート」(教材)	平成 28 年 4 月	前年度に活用した「教職表現力演習ノート」を精査し、改訂版として教材を作成した。授業目的は、新聞記事や評論文を用いて、他者に物事をわかりやすく説明する力の育成を図り、アカデミックスキルの基礎を涵養することにある。作成した教材の構成は、①読んでまとめる、②言葉を学ぶ、③聴いてまとめるから成り立ち、それぞれの項目を段階的に学べるようにしている。 (編集) 西辻正副、岡村季光 (共著者) 岡村季光、岡野聡子、桑原祐子、高木悠哉、山本美紀 (発行元) 奈良学園大学 (出版社) 株式会社廣済堂 (総頁数) 109 ページ (担当頁) pp.52-53 (所属) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 (使用した科目名) 教職表現力演習 I
(11)「キャリアスキルアップⅠ～就活準備ワークブック①」(教材)	平成 29 年 4 月	キャリアスキルアップⅠでは、3 年生全員が履修をする科目である。1 年後に控えた教員採用試験や一般企業就職活動、公務員採用試験の準備をするにあたり、①就職活動の流れ、②インターンシップの概要、③履歴書の書き方、④SPI 試験の概要、個人・集団面接、グループディスカッション、集団討議の概要をまとめたものである。学びの積み重ねが可視化できるようにしたワークブックである。 (作成者) 岡野聡子 (総頁数) 48 ページ (所属) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 (使用した科目名) キャリアスキルアップⅠ
(12)『子どもの生活理解と環境づくり[改訂版]～就学前教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』(教科書)(再掲)	平成 31 年 3 月	2017 年に学習指導要領が改訂され、資質・能力の三つの柱と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10 の姿)が明示された他、保幼小連携の強化が取り上げられた。本書では、学習指導要領改訂にともない、領域「環境」にて設置された新項目も含め、就学前教育と小学校教育の教育内容の接続に言及し、自然環境・物的環境・社会環境の 3 つの視点を用いて事例を取り上げながら解説を行った。 (単著・共著) 共著 (判型) A5 判

		(総頁数) 206 ページ (出版社) ふくろう出版 (担当頁) pp. 1-20, pp. 81-83, pp. 103-104, pp. 106-108, pp. 146-147 (担当部分) 第1章第1節、第3章第2節1-2、1-3、第4章 第1節1、1-2、第5章第1節1-3 (編著者) 岡野聡子 (分担執筆者) 松田智子・大野鈴子・吉村啓子・筒井愛知・村田眞理子・森田美・辻野孝・伊崎一夫・中道美鶴・岡田美紀・田中卓也・前川豊子・平野知見 (所属) 奈良学園大学人間教育学部 (使用した科目名) 子どもと環境、保育内容Ⅱ「環境」
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 京都光華女子大学短期大学部こども保育学科 学科長による評価	平成 20 年 3 月～ 平成 23 年 3 月	こども保育学科共同研究室実習・就職支援室にて、実習・就職支援室の主担当として、保育職を志す学生の実習支援と就職支援を行った。こうした学生支援だけでなく、研究助手として幼稚園や保育所への実施調査に携わったことや幼稚園現場の実情を講義内で講演したこと、全国保育士養成協議会等にて研究発表を行っていたことで、幼児教育における教育的・研究的な能力を有していると毎年評価をされた。
(2) 環太平洋大学学長補佐/キャリアセンター長/ 教育経営学科長による教員評価	平成 24 年 7 月	5 年間の幼稚園教諭の経験を活かして、理論と実践を結びつけ「子どもと環境」の科目を担当していることを評価された。内容としては、授業にて理論と体験的な活動を取り入れて保育指導方法を示す工夫をしていることや、毎回のレポートや課題を学生に課し、それに対する学生へのフィードバック等、実務経験や授業改善への姿勢が、科目を担当するための教育的な能力を有していると評価された。
(3) 平成 24 年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境 大学名：環太平洋大学	平成 24 年 7 月	「子どもと環境」の授業評価に関するアンケート調査を実施した。5 点尺度（不必要である（1 点）から必要である（5 点）まで）にて回答を求めた。回答結果は、①教科書の用語の確認：4.028 (SD=0.839)、②授業内の本読み：3.676 (SD=0.868)、③授業内の配布資料：4.408 (SD=0.761)、④映像学習：4.535 (SD=0.646) ⑤体験活動：4.676 (SD=0.708)、⑥室外授業：4.338 (SD=0.918)、⑦グループワーク：4.436 (SD=0.8)、⑧授業後の発展学習：3.859 (SD=0.997)、⑨提出課題のフィードバック：3.944 (SD=0.918) であった。体験活動に対する評価が最も高く、また、96%の学生が本講義を受けて自分のためになったと答えた。
(4) 平成 25 年度授業評価アンケートの実施 科目名：生活の理解 大学名：環太平洋大学	平成 25 年 7 月	FD 活動の一環として、「生活の理解」学生による授業評価アンケートを実施した。履修者数は 209 名、回答者数は 172 名（有効回答率：82.2%）であった。質問紙は 15 項目から成り立ち、①学生自身の取り組みについて、②担当教員や指導方法等について 4 点尺度で実施した。評価結果の平均評定は 3.419 であり、総合的満足度は 3.445 であった。また、教材研究の授業内容を多く取り入れたこともあり、「授業への参加意欲が促されるような工夫がされていましたか」について 3.47 の評価をもらうことができた。
(5) 平成 26 年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザインⅠ 科目名：キャリアデザインⅡ 科目名：生活の理解 大学名：奈良学園大学	平成 26 年 4 月～ 平成 27 年 3 月	平成 26 年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4 点尺度で実施した。 ・キャリアデザインⅠ：3.37 ・キャリアデザインⅡ：3.43 ・生活の理解：3.65 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(6) 平成 27 年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境（前期） 科目名：生活の理解（後期） 科目名：キャリアデザインⅠ（前期）	平成 27 年 4 月～ 平成 28 年 3 月	平成 27 年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4 点尺度で実施した。 ・子どもと環境：3.68

科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名：キャリアディベロップメントⅠ（前期） 科目名：キャリアディベロップメントⅡ（後期） 大学名：奈良学園大学		・生活の理解：3.06 ・キャリアデザインⅠ：3.51 ・キャリアデザインⅡ：3.44 ・キャリアディベロップメントⅠ：3.4 ・キャリアディベロップメントⅡ：3.37 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(7) 平成 28 年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境（前期） 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名：キャリアディベロップメントⅠ（前期） 科目名：キャリアディベロップメントⅡ（後期） 科目名：キャリアスキルアップⅠ（前期） 科目名：キャリアスキルアップⅡ（後期） 大学名：奈良学園大学	平成 28 年 4 月～ 平成 29 年 3 月	平成 28 年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4 点尺度で実施した。 ・子どもと環境：3.45 ・キャリアデザインⅠ：3.55 ・キャリアデザインⅡ：3.59 ・キャリアディベロップメントⅠ：3.46 ・キャリアディベロップメントⅡ：3.09 ・キャリアスキルアップⅠ：3.55 ・キャリアスキルアップⅡ：2.95 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(8) 平成 28 年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成 28 年 10 月～ 平成 29 年 3 月	平成 28 年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4 点尺度であり、回収率は 90.9%（履修者数：55 人、解答者数：50 人）である。 ・学習効果を上げるための工夫・準備：3.36 （全体平均：3.28） ・担当教員の話し方が明瞭かどうか：3.66 （全体平均：3.31） ・学生の理解や反応を見ながら授業していたか：3.38 （全体平均：3.29） ・授業の満足度：3.30（全体平均：3.32） ・新しい知識・考え方・教育実践力が得られたか：3.44 （全体平均：3.36） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：3.20 （全体平均：3.27）
(9) 平成 29 年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成 29 年 10 月～ 平成 30 年 3 月	平成 29 年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4 点尺度であり、回収率は 88.9%（履修者数：54 人、解答者数：48 人）である。 ・学習効果を上げるための工夫・準備：3.35 （全体平均：3.33） ・担当教員は学生が主体的かつ意欲的に学べるような授業づくりを行っていたか：3.38 （全体平均：3.31） ・新しい知識・考え方が得られたか：3.48 （全体平均：3.49） ・教育実践力やそれにつながる力を得られたか：3.23 （全体平均：3.33） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：2.96 （全体平均：3.21） ・授業の満足度：3.27（全体平均：3.38）
(10) 平成 29 年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名：キャリアディベロップメントⅠ（前期） 科目名：キャリアディベロップメントⅡ（後期） 科目名：キャリアスキルアップⅠ（前期） 科目名：キャリアスキルアップⅡ（後期） 大学名：奈良学園大学	平成 29 年 4 月～ 平成 30 年 3 月	平成 29 年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4 点尺度で実施した。 ・キャリアデザインⅠ：3.05（全体：3.38） ・キャリアデザインⅡ：3.44（全体：3.41） ・キャリアディベロップメントⅠ：3.54（全体：3.38） ・キャリアディベロップメントⅡ：3.52（全体：3.41） ・キャリアスキルアップⅠ：3.35（全体：3.38） ・キャリアスキルアップⅡ：3.47（全体：3.41） いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。

(11)平成 30 年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成 30 年 10 月～ 平成 31 年 3 月	平成 30 年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4 点尺度であり、回収率は 67.3%（履修者数：98 人、解答者数：66 人）である。 ・学習効果を上げるための準備・工夫：3.62 （全体平均：3.33） ・担当教員は学生が主体的かつ意欲的に学べるような授業づくりを行っていたか：3.67 （全体平均：3.32） ・新しい知識・考え方が得られたか：3.65 （全体平均：3.47） ・教育実践力やそれにつながる力を得られたか：3.47（全体平均：3.33） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：3.30 （全体平均：3.22） ・授業の満足度：3.68（全体平均：3.38）
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1)兵庫県芦屋市立西山幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 1 月	兵庫県芦屋市立西山幼稚園にて園内研究会の指導助言として携わる。研究テーマは、「幼児同士の育ち合い学び合いを育む」である。年長 2 クラス・年少 2 クラスの公開保育（劇遊び）を参観した。日常生活の中で取り上げた絵本への興味関心を深めるために、絵本を題材とした劇遊びを保育に取り入れた。幼児の発達に合わせたふさわしい活動を展開するためには、教員がどのような環境構成をする必要があるかについて、教員 8 人を対象に指導助言を行った。
(2)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 5 月	兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園にて園内研究会の指導助言として携わる。研究テーマは、「新学期の保育の指導計画や教師の援助の在り方について学び、教師の資質向上を図る」である。年長 1 クラス・年中 2 クラスの保育を参観した。異年齢児の活動において、遊びを工夫して創りだすことや他の幼児の考えにふれ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わえるような援助について、教員 6 人を対象に指導助言を行った。
(3)岡山市議会「緑風会」会派視察における講師	平成 24 年 10 月	特定非営利団体岡山市子どもセンターは、岡山市内にある岡山国際児童年記念公園こどもの森の敷地を 2008 年から借りて、「冒険遊び場：おかやまプレーパーク」という子どものための遊びの広場の運営をしている。「おかやまプレーパーク」の運営および取り組みについて、①子どもの遊び場を確保する必要性、②NPOの取り組みと現状（ボランティアマネジメント）という 2 つの視点を用いて講演をした。おかやまプレーパークの運営は、市民ボランティアが中心となって活動を行っており、ボランティアマネジメントの重要性を言及した。
(4)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 11 月	兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園にて園内研究会の助言指導として携わる。研究テーマは、「2 学期の幼児の発達に合った援助のあり方について学び、教師の資質向上を図る」である。年長 1 クラス・年中 2 クラスの保育を参観した。運動会を終え、クラスとしての集団のまとまりがより一層感じられた。日常の保育における集団遊びについて、体験をより確かなものにするために振り返りの時間を設けること、集団遊びをイベントのように取り扱うのではなく、継続的・組織的に行い、積み上げていくことの重要性について、教員 6 人を対象に指導助言を行った。
(5)岡山市子どもセンター・研究協力者	平成 24 年 4 月～ 平成 26 年 3 月	岡山市子どもセンターは、平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月まで、岡山市庭園都市推進課主催の ESD プロジェクトから助成金（年間 200 万円）を獲得し、都市公園での遊び空間の創造をテーマとして、子どもの遊びの広場を展開した。筆者は、研究協力者として、公園を活用してできる遊びを提案したり、保護者アンケートを通して満足度を測定し、報告書にまとめる役割をになった。平成 24 年度は、5 ヶ所でプロジェクトを実施し、平成 25 年度は、6 ヶ所で行った。
(6)岡山市中央中学校・出張講義講師	平成 25 年 3 月	岡山市立岡山中央中学校の 1 年生に対して総合的な

		学習の時間を用いて、出張講義の講師として携わる。講演テーマは、「将来を考える3つのポイント」である。中学1年生は、普通学級88名、特別支援学級10名を対象として行った。何のために働くのかについて考察した後、20問表や価値観シートを用いて自己理解を深めた。また、生徒による職業調べから、それらの職業に就くには、具体的にどのような学習をする必要があるかを解説した。最後に、学校卒業後の職業生活におけるライフイベント（結婚、出産、年収、転職等）の平均値をもとに解説した。
(7)一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会・出張講義講師	平成26年8月	gid.jp 関西交流会において、「就職に関する「ストレス」を考える～ストレスチェックを通して、自分のストレス耐性を知ろう～」をテーマとし、90分間の講演を行った。講義では、ストレス耐性チェックを通して、自分が持つストレスを客観視し、ストレス解消法ではなくストレスと上手に付き合う方法の提案をした。また、性同一性障害の方が持つ就職活動・職場の人間関係での悩みについて事例を取り上げ、自己開示を含めたグループワークも実施した。実施場所は、大淀コミュニティセンター（大阪）で行い、受講生は18名であった。
(8)特定非営利活動法人男女共同参画ネット尼崎（尼崎市女性・勤労婦人センター）・出張講義講師	平成27年3月	2015 あまがさき女性フェスティバル記念講演会において、「カナダのコミュニティハウスに学ぶ 支えあいのまちづくり」をテーマとし、90分間の講演を行った。多文化共生の国カナダには、子どもから高齢者まで、さまざまな人々が利用するコミュニティハウスがある。そのコミュニティハウスの成り立ちとそこで実施されているサービスとプログラムについて紹介した。また、カナダのコミュニティハウスから学べることとして、コミュニティオーガニゼーションの概念を「人、もの、こと、ところ」、そして「時間の共有」という具体的内容に置き換えて述べた。社会保障の制度化が進む中で、福祉行政の専門分化が起こる過程についても解説した。実施場所は、尼崎市女性センター・トレピエで行い、受講者は40名であった。受講者満足度は100%であった。2014年度尼崎市立女性・勤労婦人センター事業報告書：p.26
(9)一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会・出張講義講師	平成27年6月	gid.jp 関西交流会において、「自分自身について知る～自己概念の揺らぎを体験しよう～」をテーマとし、90分間の講演を行った。講義では Twenty statements test=T.S.T/Who am I 法の心理検査も用いて、自己概念とは何かを解説した。また、「私の価値観を知ろう」をテーマとし、価値観の書かれた15枚のカードを、自分が大切にしたいと思う順番に並べてもらい、ペアワークを実施した。価値観カードのワークから、自己概念（自己が持つ自分のイメージ）がいかに揺らぎやすいか体験をしてもらった。実施場所はパシフィックマークス西梅田14Fガクトホール（大阪）で行い、受講生は20名であった。
(10)2015年度奈良学園大学公開講座「王寺町り～べるカレッジ」・出張講義講師	平成27年7月	奈良学園大学公開講座において、「子どもに求められる職業教育とは—キャリア教育の視点から—」をテーマとし、90分間の講演を行った。講演では、キャリア教育が生まれた背景を解説し、キャリア教育が開発すべき社会生活を営む上で必要となる能力や態度について述べた。また、小学校から高等学校までのキャリア教育の取り組み事例を紹介し、能力開発を行う上で、最も重視すべき事項として、自己肯定感を育む必要性についても述べた。質疑応答の時間も20分程度取り、対話形式で講演を行い、大変好評であった。受講生は18名であった。
(11)平成27年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	平成28年1月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（32名）と保護者（33名）65名を対象として、科学遊び・学びの広場プロジェクト「ピンホールカメラ作り～小さな穴から見える不思議な世界～」を実施した。ピンホールカメラ作りを通して、光の仕組みについて解説をした。低学年児童には解説は難しかったが、ピンホールカメラを覗くと、映し出される映像が逆転しているということに対し、不思議さと驚きを感じ、その仕組みがどのようになっているのかに関心

		が高まった。実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は100%であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。
(12) 登美ヶ丘北中学校区地域教育協議会第3回 スクールコーディネーター研修・出張講義講師	平成 28 年 9 月	「海外の地域コミュニティにおける活動～カナダ・バンクーバー市ネイバーフッドハウスの事例～」をテーマとして、2015～2016 年度の科学技術研究費（若手研究B）の成果報告を兼ねて実施した。参加者は7名であり、現在、地域活性化事業を行っている者を対象として行った。カナダにおける移民支援組織の成り立ちやセトルメント運動における生活を包括的に支援する仕組み、ボランティアコーディネートの手法、コミュニティディベロップメントの概念についての解説を行った。多数の質問を受け、日本とカナダの文化的背景の差異はあるものの、地域における福祉活動の統合化には聴講者が共感し、高評価をいただいた。
(13) 平成 28 年度三郷町立西部保育園第 3 回新任保育士研修会・出張講義講師	平成 28 年 12 月	三郷町立西部保育園にて新任保育士研修の講師として携わる。「環境を通した教育・保育のあり方を学ぶ～保育の「質」を考える～」をテーマとし、①保育の質、質の高い保育とは、②保育環境評価スケールの使用方法の解説および実践を実施した。昨今、教育経済学の視点から、幼児教育の経済学や学力の経済学という書籍が発刊され、就学前教育の充実が強力な公共投資となりうることに注目が集まっている。幼児教育がもたらす効果（自己統制力、向社会的行動、等）について、海外の調査研究の結果を事例として取り上げ、解説した。また、保育環境評価スケールを実践し、保育環境の見直しや保育活動の振り返りを行った。受講生は3名であった。
(14) 平成 28 年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	平成 29 年 1 月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（28名）と保護者（30名）58名を対象として、科学遊び・学びの広場プロジェクト「色が変わる、まほうの水で描く世界」を実施した。レモン水（酸性）、せっけん水（弱アルカリ性）、石灰水（アルカリ性）を用意し、紫キャベツで染めた紙（リトマス紙）に模様を描き、化学反応によって紙の色が変わる様子を、酸性・アルカリ性の解説をした。学生主導で実施を行い、実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は100%であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。また、こうしたプロジェクトの実施により、学生の事業運営能力・スキルも格段に上がったと言える。
(15) 平成 28 年度三郷町立西部保育園第 4 回新任保育士研修会・出張講義講師	平成 29 年 3 月	三郷町立西部保育園にて新任保育士研修の講師として携わる。「保育環境評価スケールの活用を振り返って」をテーマとし、3、4、5 歳児のクラス担任に保育環境評価スケールの結果を提示しながら、担任（保育経験 10 年以上）と副担任（保育経験 1 年）の結果を共有した。結果の共有では、保育経験 10 年以上の保育者は、自身の保育活動について個別具体的に思い出しながら、保育内容の質に関する発言が多くみられた。一方で、保育経験 1 年の新任保育者は、クラス全体を考えると概ね環境が整っていると回答し、全体的に高い評価をつけることがわかった。これらの結果を話し合うことで、10 年以上の保育経験を有する保育者は、新任保育者の視点を学ぶことができ、今後の指導に役立てることができると述べていた。新任保育者は、10 年以上の保育経験を有する保育者の発言を通して、保育の質について、より深く考えることができたと言った。園長からは、評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケーションを図ることで、保育の質の向上につながると述べていた。受講生は6名であった。
(16) 第 14 回「産学連携のための経営者セミナー」・出張講義講師	平成 29 年 3 月	奈良県大学連合が主催する産学連携のための経営者セミナーにおいて、「学生の主体性を育むキャリア教育の在り方とは」をテーマとして講演を行った。大学生活で身に付けておきたい能力（学士力、社会人基礎力、ジェネリックスキル、21 世紀型スキル）の解説をした後、本学のキャリア教育・キャリア支援を紹介した。また、2名の学生から、インターンシップ成果報告会の発表もしてもらい、場内からは、学生が堂々と発表する姿勢を

		大変評価していただいた。受講生は23名であった。
(17) 広陵町幼稚園保育園職員研修会・出張講義講師	平成 29 年 3 月	広陵町幼稚園・保育園職員研修会の講師として、「保育の質を考える～保育環境評価スケールの活用を通して～」をテーマとして講演を行った。保育の質の定義を考えると共に、保育環境評価スケールを用いて、客観的に自身の保育活動を振り返る必要性について述べた。聴講者の中で、保育環境評価スケールの活用をしたことがある者は1名（大学時代に実施した）であり、初めて活用した者ばかりであった。新任保育者よりも保育経験が10年を超える者は、他園見学や研修の機会を積んできていることもあり、他園と自園を比較して評価を付けることから、自己評価が厳しくなる傾向があると伝えると、納得できると聴講生からの感想があった。また、適宜、客観的な評価指標を用いて保育活動を点検する機会を設けることには意義があるとの感想をいただいた。受講生は、45名であった。
(18) 平成 29 年度北葛城郡内幼稚園教育研究会（総会）・出張講義講師	平成 29 年 4 月	北葛城郡幼稚園教育研究会の講師として、「保育の質を考える」をテーマとして講演を行った。保育の質を考えるために、幼児期における教育活動が、向社会行動や非認知能力の向上に影響を及ぼすという諸外国の研究結果を事例として取り上げた。また、幼稚園内の保育・教育環境を評価するためのツールとして、保育環境評価スケールを紹介し、先生方に保育・教育環境のチェックおよび振り返りをしていただいた。聴講生からは、「幼児教育の重要性を改めて認識することができ、仕事へのやりがいを感じることができた」や「客観的指標を用いて自身の保育・教育を確認することがなかったのも、良い機会となった」と感想をいただいた。受講者は、90名であった。
(19) 平成 29 年度第 1 回北葛城郡幼稚園教育研究会・園内研究会講師	平成 29 年 5 月	第 1 回北葛城郡幼稚園教育研究会の園内研究会講師として、①幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について、②特別な支援を必要とする幼児の状態等に応じた計画的、組織的な指導の在り方についてをテーマとし、指導助言を行った。まず、各園の取り組みについて、実践報告をしていただいた。次に、講話者から、カリキュラム・マネジメントの概念について整理し、特別な支援を要する幼児の実態を把握するためのチェックリスト解説を行った。出席者は、12名であった。（11園の参加）
(20) 第 1 回吉野青年会議所事業合同会議・講師	平成 29 年 5 月	第 1 回吉野青年会議所事業合同会議の講師として、「学生を主体とした事業運営方法について～他者理解を深める技法とは～」をテーマとし、講義を行った。吉野青年会議所事業は、吉野広域に住む小学生を対象とした課外活動を実施し、青少年健全育成に取り組んでいる。大学生が主体となって事業を実施するため、事業目的を共有し、事業立案方法を提示した。また、参加者がコミュニケーションを円滑に行えるようにするために、他者理解を深める2つのワークショップを開催した。今回は、奈良学園大学の学生17名、奈良女子大学の学生2名、吉野青年会議所から5名が参加をした。
(21) 平成 29 年度三郷町立西部保育園第 1 回新任保育士研修会・出張講義講師	平成 29 年 5 月	三郷町立西部保育園第 1 回新任保育士研修会の講師として、「社会人に求められるコミュニケーションスキルとは」をテーマとして、講義を行った。研修では、第一印象の重要性、気持ちの良い挨拶の方法、身だしなみ、言葉遣いの4点を重点指導項目として、実施した。また、3月まで学生であった新任保育士の方々に、学生と社会人の違いについて考えてもらい、社会人としての自覚を再認識していただいた。受講生からは、「姿勢等、指摘されるまで意識していなかった」や「保護者様の対応に役立てます」といった声をいただいた。受講生は、5名であった。
(22) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 5 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9:00-11:30まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13:00-16:30まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマ

		として、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。KJ法を用い、①子どもの様子、②環境構成、③教師の援助の3つの観点から、各クラスの担当教員に本日の保育活動を振り返っていただいた。結果として、自然環境に関する項目の出現が見られなかったため、自然環境における環境構成の再点検と栽培活動に関わる子どもの様子を取り上げる必要性が明らかとなった。また、本園に関する重点項目として、①異年齢児交流、②遊び空間の改善・集中できる遊び作りの工夫、③遊び内容の充実、④教材の確認が取り上げられた。教員からは、「自然環境の項目がないことに対し、当たり前なこと、見過ごしていたと思う」や遊び空間の改善に関する意見があった。今回は、教員9名の参加であった。
(23) 平成29年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成29年9月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9:00-11:30まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13:00-16:30まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成29年度幼稚園教育要領における資質・能力の3本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員9名の参加であった。
(24) 平成29年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成29年10月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9:00-11:30まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13:00-16:30まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成29年度幼稚園教育要領における資質・能力の3本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員9名の参加であった。
(25) 平成29年度第2回北葛城郡幼稚園教育研究会・園内研究会講師	平成29年10月	北葛城郡幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9:00-11:30まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13:00-16:30まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成29年度幼稚園教育要領における資質・能力の3本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員9名の参加であった。
(26) 平成29年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成29年11月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9:00-11:30まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13:00-16:30まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成29年度幼稚園教育要領における資質・能力の3本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員9名の参加であった。
(27) 平成29年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成29年11月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9:00-11:30まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13:00-16:

		30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(28) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園長研修会講師	平成 30 年 1 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園にて、広陵町の幼稚園 5 ヶ園の園長先生を対象とし、幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの進め方について指導助言を行った。また、園内目標の立て方についてワークショップを実施した。園長 5 名、教員 5 名の参加であった。
(29) 平成 29 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 2 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの捉え方」をテーマとし、広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園で実施した 1 年間のカリキュラム・マネジメントの実践を交えながら、講義をした。講義後、西部保育園の P D C A サイクルの構築について、参加保育士と園長先生を交え、話し合った。保育士 8 名の参加であった。
(30) 平成 29 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 3 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育環境評価スケールの活用を振り返って」をテーマに指導助言を行った。12 月に実施した保育環境評価スケールの結果をもとに、3・5 歳のクラスの担任と副担任に示し、評価結果の差について、話し合った。評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケーションを図ることで、保育の質の向上につながる。保育士 6 名の参加であった。
(31) 平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 5 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育士として求められるコミュニケーションスキルとは」をテーマに講演を行った。新任保育士を対象としており、社会人としてのマナーや保育園ならではのトラブル事例などをもとに相手に伝わるコミュニケーションの取り方について講義をした。計 10 名の参加であった。
(32) 平成 30 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園・園内研修会	平成 30 年 6 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、「保育指導助言および特別支援教育について」をテーマに、指導助言を行った。特別支援については、加配職員向けに具体的事例を取り上げながら、指導方法について助言を行った。教員 8 名の参加であった。
(33) 平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 7 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「チームビルディング研修」をテーマに講演を行った。全教職員 20 名を対象とし、N A S A ゲームを用いて、合意形成の手法を講義した。また、話し合いが有益であることを数値化して示したことにより、参加者の納得感を得られた。
(34) 平成 30 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園・園内研修会	平成 30 年 10 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、「保育指導助言および特別支援教育について」をテーマに、指導助言を行った。指導案の書き方について指導をした他、特別支援については、加配職員向けに具体的事例を取り上げながら、指導方法について助言を行った。教員 8 名の参加であった。
(35) 平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 12 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育のプロセスの質評価スケールの活用について」をテーマに指導助言を行った。0・5 歳のクラスの担任と副担任を対象とし、評価スケールを用いて、各保育士に自身の日々の保育活動を振り返ってもらった。保育士 15 名の参加であった。
(36) 平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 31 年 3 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育のプロセスの質評価スケールの結果を振り返って」をテーマに指導助言を行った。12 月に実施した保育環境評価スケールの結果をもとに、3・5 歳のクラスの担任と副担任に示し、評価結果の差について、話し合った。評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケーションを図ることで、保育の質の向上につながる。

		る。保育士 15 名の参加であった。
5 その他 (1)NP0 法人ウエルス会報誌 2012 年 夏号 「園庭の芝生化事業の推進と幼少期における身体機能の形成について」	平成 24 年 6 月	教育現場における園庭・校庭の芝生化事業は、1970 年頃から始まり、現在では、研究機関や自治体、NP0 法人等による芝生化の実践や調査がされている。本会報誌では、調査研究の概要や園庭や校庭の芝生化が子ども達にもたらす 4 つの教育効果（外遊びの増加、情操の安定、芝生の弾力性がスポーツ活動に安全性と多様性をもたらすこと、環境教育の生きた教材として活用できること）を言及した。 （科目担当実績）子どもと環境
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 (1)幼稚園教諭二種免許状取得	平成 11 年 3 月	免許状番号 平 10 幼二め 第 804 号（京都府教育委員会）
(2)プロジェクトワイルドエデュケーター資格取得	平成 18 年 7 月	財団法人公園緑地管理財団：資格番号なし
(3)保育：子育てアドバイザー（初級）	平成 21 年 4 月	特定非営利法人保育：子育てアドバイザー協会：認定番号 第 10001024 号
(4)修士（都市政策）	平成 23 年 3 月	大阪市立大学大学院創造都市研究科都市政策専攻（都市政策修士 第 730 号）「修士論文題名：現代的セッルメント「ネイバーフッドハウス」の社会的意義～ゴードンネイバーフッドハウスの取り組みをめぐって～」
(5)小学校教諭二種免許状取得	平成 23 年 7 月	免許状番号 平二三小二第六号（京都府教育委員会）
(6)生涯学習コーディネーター資格取得	平成 23 年 10 月	財団法人社会通信教育協会：第 31110009 号
(7)生涯学習 1 級インストラクター資格取得	平成 23 年 10 月	財団法人社会通信教育協会：第 11110009 号
(8)メンタルケアカウンセラー資格取得	平成 25 年 7 月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学会：資格第 134014563 号
(9)キャリアカウンセラー資格取得	平成 25 年 9 月	日本キャリア教育学会：認定登録第 214 号
(10)メンタルケア心理士資格取得	平成 25 年 10 月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学会：資格第 134014563 号
(11)准ケアストレスカウンセラー資格取得	平成 25 年 11 月	財団法人職業技能振興会：J C-080018
(12)ガイダンスカウンセラー資格取得	平成 26 年 12 月	スクールカウンセリング推進協議会 認定番号：第 14030010 号
(13)修士（学校教育学）	平成 28 年 3 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻（学校教育学修士 第 8401 号）「修士論文題目：多世代交流としての子育て支援に関する研究—カナダ・ネイバーフッドハウスの事例から—」
2 特許等 特記事項なし		
3 実務の経験を有する者について特記事項 (1)京都光華女子大学短期大学部 こども保育学科 こども保育学科共同研究室内実習・就職支援室担当	平成 18 年 3 月～ 平成 23 年 3 月 (5 年間)	実習・就職支援室の主担当として、保育職を志す学生の実習支援と就職支援に携わる。実習支援では、教育実習事前事後指導の教員補助として園内における環境構成の指導や指導案の指導の他、実習園との連携協力を構築して実習後の学生へのフィードバック体制を確立した。就職支援では、京都市内の園を中心として毎年 2 月に 30～40 園を訪問し、保育現場が求める人物像の聞き取り調査を実施した。その調査結果を活かして、就職支援プログラムの構築に役立てた。

(2) 特定非営利法人岡山市子どもセンター おかやまプレーパーク運営委員	平成 24 年 3 月～ 現在に至る	特定非営利法人岡山市子どもセンター(岡山市北区久米 348) の事業の一つである「おかやまプレーパーク」の運営委員に着任し、月に 2 度、岡山国際児童年記念公園こどもの森へ出向いて活動を行なっている。『自分の責任で自由に遊ぶ』ということをモットーとし、子どもがのびのびと思いつき遊べるように敷地内の禁止事項(例えば、木登り禁止等)をなくし、やりたい遊びを実現できる遊び場の確保に力を注いでいる。年間事業計画の見直しや助成金の申請、行政と交渉をする際の助言役を務めている。
(3) 特定非営利活動法人ウエルス 理事	平成 24 年 5 月～ 平成 27 年 3 月	特定非営利法人ウエルス(京都府亀岡市)の顧問に着任し、幼稚園や保育所における自然環境としての園庭の芝生緑地化推進活動の助言を行っている。園庭の芝生化により、子ども達の遊び方の変化や外遊びの増加、それに伴う健全な肉体形成等、芝生化によってどのような教育的効果があるか、共同研究を行った。(住所: 法人事務所: 〒621-0805 京都府亀岡市安町大池 11 日進ビル 101)
(4) 陶芸ギャラリー吾子 代表	平成 25 年 10 月～ 現在に至る	京都市東山区泉涌寺地区は、陶芸職人の町として知られているが、職人の高齢化が深刻な問題となっており、その地に根付いた文化が途絶えようとしている。そのため、地域振興の一環として、平成 25 年 10 月よりギャラリーの開催している。展示作品は、陶器に関わらず絵画なども展示している。地域のお祭りがある際には、無料で開放し、音楽会なども行っている。(京都市東山区泉涌寺東林町 17-29)
(5) 広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会・ ひと部門 部会長	平成 27 年 7 月～ 平成 28 年 3 月	本審議会は、まち・ひと・しごと創生法に基づく国の長期ビジョン及び総合戦略を勘案し、内閣府地方創生推進室が示す「地方人口ビジョン策定のための手引き」及び「地方版総合戦略策定の手引き」に基づき実施した。また、国の総合戦略が定める 4 つの政策分野(①地方における安定した雇用を創出する、②地方への新しい人の流れをつくる、③若い世代の結婚、出産、子育ての希望をかなえる、④時代に合った地域を創り、安心なくらしを守るとともに、地域と地域を連携する)に則り、まち部門、ひと部門、しごと部門の作業チームに分け、筆者はひと部門の部会長の任命を受け、総合戦略策定に向けた審議を実施した。
(6) 広陵町幼保一体化推進会議 副会長	平成 27 年 8 月～ 平成 28 年 7 月	本会議では、「町立幼稚園・保育園における幼児教育・保育のあり方等について」を主題とし、5 回にわたって審議を行った。審議事項は、①幼稚園・保育園におけるより良い教育・保育の提供、②現在策定中の幼保一体化総合計画に基づいた町立幼稚園・保育園の施設整備の促進、③就学前の子どもたちへの子育て支援の充実であり、それらを答申としてまとめ、報告した。
(7) 広陵北幼保連携型認定こども園設計業務公募 型 プロポーザル選定委員会 委員	平成 28 年 3 月～ 平成 28 年 6 月	本プロポーザルは、広陵町における幼保の一体化を進めるため、広陵北幼稚園と広陵北保育園を統合し、広陵町で初めての幼保連携型認定こども園の設計業務の委託先を選定するものである。9 社から応募があり、一次審査において 5 社を選定、2 次審査において業務委託先を決定した。平成 30 年 4 月 1 日に開園予定であり、災害時の乳幼児を対象とした福祉避難所としての機能も有する施設となる。
(8) 広陵町総合戦略等検証委員会 委員	平成 28 年 7 月～ 平成 29 年 3 月	平成 27 年 7 月～平成 28 年 3 月までに実施した広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会において策定した事業のうち、先行で実施している 8 事業に対して、その実施状況および事業の有効性に関する審議を行った。
(9) 出会いウィーク 2017 実行委員会 委員	平成 28 年 10 月～ 平成 29 年 3 月	本事業は、奈良 NPO センターが主体となり、奈良県下にて活動を実施する NPO およびボランティア団体の広報活動の一環として実施したものである。奈良学園大学ボランティアサークルも参加をし、「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の PR を行った。実施日は、平成 29 年 2 月 18 日(土)～19 日(日)であり、当日の

		参加団体は36団体であった。2日間の参加者総数は、800名程度であった。
(10) 広陵町総合戦略等検証委員会 委員	平成 29 年 8 月～ 現在に至る	平成 27 年 7 月～平成 28 年 3 月までに実施した広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会において策定した事業の実施状況および事業の有効性に関する審議を行っている。
4 その他 (1) 環太平洋大学キャリアセンター運営委員会 委員	平成 24 年 4 月～ 平成 26 年 3 月	環太平洋大学キャリアセンターは4つの分室(教職支援室・幼施設分室・公務員就職支援室・企業等就職支援室)に分かれて進路支援をしている。月に1度キャリアセンター運営委員会を開催し、各分室との連携を図っている。また、環太平洋大学の場合、体育会に力を入れている学生も多く、4年生の前期が終わるまで進路決定を引き延ばす学生の姿が見られ、そうした学生に対して、ゼミ担当教員も含めて支援を実施した。
(2) 環太平洋大学教職課程委員会 委員	平成 24 年 4 月～ 平成 25 年 3 月	学生の介護等体験実習が円滑に運営できるように、実習の事前事後指導およびオリエンテーション、個別指導に携わる。集団指導では、介護等体験実習を終えた学生を招いてパネルディスカッションを行うと共に、実習簿やお礼状の書き方の指導を担当した。個別指導では、特別支援施設での実習生 8 名、社会福祉法人での実習生 10 名を担当した。
(3) 環太平洋大学幼児教育言語力育成研究会 代表	平成 24 年 4 月～ 現在に至る	2008 年に改訂された学習指導要領では、「言語活動の充実」が育成すべき重要項目の第一として取り上げられた。そのことを受け、現場における言語活動の充実を特に幼児を対象として調査することを目的として岡山市立大野幼稚園や岡山市立江西幼稚園の園長先生とともに研究会を立ち上げた。幼稚園の教育現場と大学組織が協同して、幼児期における言語活動の充実に関する調査を実施している。
(4) 環太平洋大学ハラスメント委員会 委員	平成 25 年 4 月～ 平成 26 年 3 月	本学では、アカデミック・ハラスメントやジェンダー・ハラスメント、パワーハラスメント等を総合的に取り扱う部としてハラスメント委員会を設置している。今年度は、ハラスメントのない教育研究環境づくりの一環として、オープンスペースを利用して学生相談を行うことや、学生が研究室にいない場合は、ドアを開けておくなど、誤解やトラブルを未然に防ぐ対策をとった。
(5) 奈良学園大学キャリアセンター運営委員会 委員	平成 26 年 4 月～ 現在に至る	奈良産業大学から名称変更された奈良学園大学は、2 学部 2 学科(人間教育学部・保健医療学部)が新設された。それに伴い、大学組織も改変され、平成 26 年 4 月に就職支援課からキャリアセンターへと名称変更および業務内容の変更や統合がなされた。新体制のもと、学生のキャリア形成支援体制の確立にむけた会議を重ねているところである。また、人間教育学部では、教員採用試験支援室として教職センターを設置し、運営を行っている。平成 30 年 4 月から、キャリアセンター副センター長に任命され、現在に至る。
(6) 奈良学園大学ボランティアサークル 顧問	平成 26 年 4 月～ 現在に至る	奈良学園大学において、ボランティアサークルの顧問となり、学生指導をしている。平成 27 年度、平成 28 年度に吉野青年会議所とボランティアサークルに所属する大学生と協働で吉野広域において「小学生を対象としたキャンプ事業」を実施した。また、平成 27 年度には、奈良県庁主催の財団法人奈良県青少年会館からの寄付金を活用した「青少年の健全育成事業」に奈良学園大学ボランティアサークルで応募し、20 万円の採択を受けた。採択のテーマは、「科学遊び・学びの広場プロジェクト」であり、三郷町内の小学生を対象とし、参加者総数は 150 名であった。三郷町教育委員会からも高い評価を受けた。また、第 14 回大和川七夕まつり(平成 29 年度)において燈花会事業を実施し、参加した学生が大和郡山市ロータリークラブから感謝状を授与された。平成

		29年度の部員数は、22名（4年生：4名、3年生：6名、2年生：9名、1年生：3名）であった。平成30年度の部員数は、25名（4年生：6名、3年生10名、2年生：3名、1年生6名）である。令和元年の部員数は、34名（4年生：10名、3年生：3名、2年生：13名、1年生：8名）である。
(7)奈良学園大学サッカー部 顧問	平成29年4月～現在に至る	奈良学園大学において、サッカー部の顧問となり、学生支援をしている。平成29年度の部員数は、20名（4年生：5名、3年生：5名（マネージャー：2名）、1年生：10名（マネージャー：1名））である。平成30年度の部員数は、16名（4年生：3名、（マネージャー：2名）3年生：6名（マネージャー：2名）、1年生：3名）である。令和元年度の部員数は、20名（3年生：7名（マネージャー：2名）、2年生：4名、1年生5名（マネージャー：2名））である。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 『次世代の教育原理』	共著	平成24年10月	大学教育出版	2011年から小学校・中学校・高等学校と順次完全実施される新学習指導要領の意図を汲み取りながら、教職を目指す学生に教育の基礎・基本的な知識と教養を身に付けさせるための入門書である。 A5判 全159ページ 編著者：中田正浩・松田智子 共著者：中田浩司・鎌田首治朗・住本克彦・<u>岡野聡子</u>・久田孝 本人担当部分：第7章「キャリア教育とは」(pp.102-117)を単著 本人担当部分の概要： キャリアの語源やキャリア教育が導入された背景などを概観しながら、キャリア教育で育成すべき能力を取り上げ、小学校・中学校・高等学校で取り組むべきキャリア教育の目標と内容について解説した。キャリア教育とは特別な教育活動ではなく、日常の教育活動を通して、子ども達の学ぶ態度や意欲を育てながら、児童・生徒が社会とのつながりを見出していくための教育であることを学生にわかりやすく解説している。
2 『子どもと環境～身近な環境とのかかわりを深めるために～』	単著	平成25年2月	ERPブックレット	乳幼児期は、学校の一斉授業のように知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる土台を作る時期である。この時期は、子ども自身が生活の中から、好奇心や探究心をもって環境にかかわることで遊びを展開し、充実感や満足感を味わうことが大切である。子どもが自発的に環境とのかかわり、さまざまな体験から生きる喜びや充実感が味わうためには、子どもの遊びの質を高められるような保育者の意図的なかかわりが必要となる。本書では、子どもと自然環境、物的環境、社会環境のかかわりについて実践事例を用いて解説した。 A5判 全71ページ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
3『子どもの生活理解と環境づくり～幼児教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』	共著	平成25年3月	ふくろう出版	幼稚園や保育所で行われる幼児教育と小学校教育の連携をいかに図っていくかについて、幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」を軸として、自然環境・物的環境・社会環境の3つの視点を用いて事例を取り上げながら解説した。 A5判 全166ページ 編著者：岡野聡子・筒井愛知 共著者：松田智子・吉村啓子・辻野孝・大野鈴子・金光文代・平松茂・馬場浩一郎・中道美鶴・岡田美紀・土谷長子・アンソニー・ウォルシュ 本人担当部分： 第1章「幼児教育から小学校教育へ」第1節「幼児教育と領域「環境」」(pp.1-12)を単著、第5章「社会環境とのかかわり」第3節「異文化を理解することとは」「1.異文化理解と異文化交流」(pp.135-137)、「2-2)文化の獲得」(pp.140-141)、「2-3 持続発展教育の考え方」(pp.141-143)を翻訳。 本人担当部分の概要： 第1章第1節では、幼児教育とは何かを解説した上で、領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」にて取り上げられるねらいと内容の中身について解説した。第5章部分は、翻訳を担当した。
4『保育者・小学校教師のための道しるべ』	共著	平成29年10月	学文社	本書は、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭をめざす短大生、大学生、専門学校生に向けて、就職する前に身に付けてほしい保育者・教師に求められる基礎知識、専門知識、技術をまとめたものである。 B5判 全140ページ 編著者：田中卓也・松村齋・小島千恵子・志濃原亜美・木本有香 共著者：黒田政広・秀真一郎・五十嵐淳子・中田尚美・岡野聡子・岩治まとか・雲津英子・谷原舞・橋爪けい子・光井恵子・今村民子・佐々木由美子 本人担当部分： 第8章「保育実習・幼稚園教育実習・小学校教育実習で実力を発揮しよう」(1)保育実習とはどのような実習なのか(pp.58-60)、(2)幼稚園教育実習とはどのような実習なのか(pp.60-62)、(6)実習日誌、指導案とはどのようなものなのか(pp.68-72)を単著。カフェタイム(コラム)②「ちょっと知っておきたい保育室の飾り付け」(p.23)を単著。 本人担当部分の概要： 保育所実習と幼稚園実習について、観察実習、見学実習、部分実習、一日実習をまとめ、それぞれに修得すべき事柄を解説した。また、実習日誌や指導案では、実際に活用されている書類を事例として取り上げ、書き方のポイントを解説した。カフェタイムでは、保育室内の飾りの意味について取り上げた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5 『MINERUVA はじめて学ぶ保育 12 子育て支援』	共著	平成30年3月	ミネルヴァ書房	本書は、子ども・子育て支援新制度、保育教諭など最新の動向を盛り込みつつ、保育の基本を解説したものである。 B5 判 全 220 ページ 監修：大方美香・名須川知子 編著者：伊藤篤（12 巻担当） 共著者：岡野聡子・大方美香・大西晶子・寺村ゆかの・植木信一・山岡ティ・高畑芳美・吉岡洋子 本人担当部分： 第 1 章 子育て支援の必要性和制度（レッスン 1 子育て支援が求められる社会背景①子育てをめぐる社会環境の変化、②少子化という社会現象、③子育てをめぐる諸課題（pp. 2-15）、レッスン 2 子育て支援に関する制度・施策の展開①わが国における子育て支援の制度・施策の歩み、②少子化の進行と子育て支援（pp. 16-29）、第 4 章 海外に学ぶ子育て支援（レッスン 13 北米における子育て支援①多文化主義国家であるカナダ、②カナダにおける子育て家庭支援の展開、③カナダにおける子育ての現状、④子育て家庭支援の取り組みーファミリーリソースセンター、⑤子育て家庭支援の取り組みーネイバーフッドハウス、⑥子育て家庭支援の取り組みーノーバディズパーフェクトプログラム（pp. 156-171））を単著。 本人担当部分の概要： 第 1 章では、子育て支援が求められる社会的背景について、我が国における子育てをめぐる社会環境の変化や少子化についてデータを提示し、子育てをめぐる諸課題について解説した。また、我が国におけるこれまでの子育て支援に関する制度や施策の歩みを表にしてまとめ、その成果についても言及した。第 4 章では、カナダにおける子育て支援について、ファミリーリソースセンター、ネイバーフッドハウスの取り組みを紹介した。子育て家庭支援の取り組みでは、ノーバディズパーフェクトプログラムについて解説した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6 『子どもの生活理解と環境づくり(改訂版)～就学前教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』	共著	平成31年3月	ふくろう出版	2017 年に学習指導要領が改訂され、資質・能力の三つの柱と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10 の姿)が明示された他、保幼小連携の強化が取り上げられた。本書では、学習指導要領改訂にともない、領域「環境」にて設置された新項目も含め、就学前教育と小学校教育の教育内容の接続に言及し、自然環境・物的環境・社会環境の3つの視点を用いて事例を取り上げながら解説を行った。 A5 判 全 206 ページ 編著者：岡野聡子 共著者：松田智子・大野鈴子・吉村啓子・筒井愛知・村田真理子・森田美・辻野孝・伊崎一夫・中道美鶴・岡田美紀・田中卓也・前川豊子・平野知見 本人担当部分： 第1章「就学前教育から小学校教育へ」第1節「就学全教育と領域「環境」」(pp.1-20)、第3章「自然環境とのかかわり」第2節1-2) 栽培植物の選定条件とは、1-3) 自然環境マップづくり (pp.81-83)、第4章「物的環境とのかかわり」第1節1. ものの性質や仕組みを知る (pp.103-104)、1-2) ものの仕組みを理解する (pp.106-108)、第5章「社会環境とのかかわり」第1節1-3) 生活科における「行事」のとらえ方 (pp.146-147) 本人担当部分の概要： 第1章では、就学全教育と領域「環境」の概要を述べ、2017年度の学習指導要領改訂にて取り入れられた資質・能力の三つの柱と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)、これから求められる幼児教育の在り方について解説した。また、保幼小連携の重要性から、領域「環境」と「生活科」の教育内容の接続について解説した。第3章では、自然環境のかかわりにて、園内にある栽培植物の選定条件を解説し、自然環境マップづくりを紹介した。第4章では、物的環境とのかかわりにて、子どもがものの性質や仕組みを理解する過程について解説した。第5章では、社会環境とのかかわりにて、2017年度の要領改訂において領域「環境」に示された行事の役割が、小学校教育「生活科」にどのように教育内容が接続されているかを解説した。
「学術論文」 1 現代的セツルメント「ネイバーフッドハウス」の社会的意義～ゴードンネイバーフッドハウスの取り組みをめぐって～(修士論文)	単著	平成23年3月	大阪市立大学大学院	ブリティッシュ・コロンビア州にあるネイバーフッドハウス協会は、「人々の交流」を目的とし、そこで取り込まれるサービスやプログラムは、個人と個人を結びつける「ハブ」のような役割を担っている。イギリスを発祥とするセツルメント文化を受け継ぐ現在のネイバーフッドハウスの取り組みや、1つの施設において人間のライフサイクルを見越した複合的なサービス展開をしている場作りに着目し、日本の行政サービスとの違いを論じた。 A4 判 全 48 ページ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 保育士養成校における就職活動の特徴と課題～就職支援の実践から見えるもの～	共著	平成23年12月	京都光華女子大学短期大学部研究紀要第49集(pp. 1-6)	保育者を目指して本学に来た者は、目的意識をはっきりと持って入学してくる者が多く、保育職内定率も100%である。しかし、授業や実習指導を受ける中で、保育職への不安が学生の間で広まるため、1年生の4月からキャリア支援プログラムを実践した。その実践から、卒業後の支援（特に早期離職者への対応）にも言及した。 代表者：吉村啓子 共著者：<u>岡野聡子</u> 本人担当部分： 1年生の4月から実施したキャリア支援プログラムの企画および実施、評価を担当した。
3 非営利団体における社会サービスの提供に関する一考察～カナダのバンクーバー市におけるゴードンネイバーフッドハウスの取り組み～	単著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要第5号(pp. 31-39)	社会事業の専門分化が進むにつれ、需要と供給をスムーズに行うために子ども・高齢者・障害者といった分野ごとの支援体制が確立されてきた。 本稿で取り上げたカナダのバンクーバーにおけるゴードンネイバーフッドハウスは、専門的な福祉ニーズの提供を事業の主軸にするのではなく、地域に住む人々を結びつける基盤（コミュニティ・ベースド）としての「交流の場」から醸成される相互扶助関係の構築に注目をした事業を展開している。その在り様をミッションステイメント・サービスとプログラム内容・運営資金・ボランティアスタッフの4つの観点から考察した。
4 環太平洋大学におけるキャリア支援体制の確立にむけて（Ⅰ）	共著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要第5号（pp. 61-68）	大学のキャリア教育をめぐる昨今の動向をみると、就職に至るまでの支援過程の議論が活発であり、「キャリア形成支援」という言葉で表現されている。今後の課題は、キャリアセンターでの支援において、学生一人ひとりのキャリア形成を図ることを意識して支援を行う必要があることが明らかとなった。 代表者：<u>岡野聡子</u> 共著者：杉田郁代 本人担当部分： 本学キャリアセンターのキャリア支援プログラムの企画および実施を行い、評価をした。
5 幼児期における「言語活動の充実」に関する研究～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	共著	平成24年12月	環太平洋大学研究紀要第6号（pp. 1-8）	言語活動の充実に関する研究は、小学校教育における事例研究が多く、幼児期における研究は管見するあたり少ない。本研究では、幼児期における言語活動とは何かを概観し、幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され保育実践として取り組まれているか、岡山市公立幼稚園教諭を対象としてアンケート調査から考察を試みた。調査結果（有効回収率：38.7%）から、伝達力や思考力を意識した保育を行っているとは回答した者の割合は6割を超えた。伝達力、思考力を意識した保育実践では、伝達力よりも思考力を意識した保育実践のあり方に戸惑いが見られた。言葉にかかわるカリキュラムを園内で作成しているケースは32.5%、小学校「国語科」との連携を図っている園が43.2%であった。第4章では、言語活動の充実をめぐる保育現場の戸惑い等の課題も含めて評価を行った。 代表者：<u>岡野聡子</u> 共著者：大野鈴子 本人担当部分： 質問紙作成、結果の分析と考察を行った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6 幼児期における科学的思考を育む環境づくりに関する一考察	共著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第7号 (pp. 97-105)	本稿では、5歳児を対象として、池田・戸北(2004)の科学的基礎的発言の分析手続を用いて、日常生活では出会わないゾウリムシを観察させることによって、幼児期における科学的萌芽および知的好奇心を育む教育環境の整備について検討した。 第1章では、科学的思考の萌芽に関する先行研究を取り上げ、この研究が小学校教育課程の生活科や理科教育の分野で実施されてきたことを述べ、幼児を対象とした科学的思考の萌芽に関する研究の少なさについて言及した。第2章では、池田・戸北(2004)や加藤(2007, 2008, 2009)の科学的思考の萌芽の分析手法を概観し、本稿で扱う分析手法を解説した。第4章では、実践の分析結果を考察し、科学的基礎的な発言へと移行する可能性がある一時的な表現の発言や対象物を身体で表現しようとする姿が目立ったことや、対象者の1名のみが科学的基礎的な発言をしたことに対し、対象物が身近でなかったこと、そうした物事に触れる体験が少なかったことに起因するのではないかと考えられた。今後の課題として、幼児の「知的な気付き」の発言を促す環境づくりについて、教師の態度に着目をして検討を要することが明らかとなった。 代表者：筒井愛知 共著者：岡野聡子、平松茂 本人担当部分：分析手法の検討を行った。
7 体験活動と授業後の発展学習を重視した保育内容「環境」の授業展開—大学2年生前期授業における実践事例から—	単著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第7号 (pp. 29-36)	領域「環境」における授業展開では、「身近な環境とかかわる力の育成」を学生に具体的に理解させるため、講義形式の授業だけではなく、体験活動を取り入れている事例も多く見られる。本稿では、体験活動の他に授業後の発展学習課題を学生に与えることによって、領域「環境」への理解や幼児教育に関する学習意欲の向上が見られるかについて、授業評価アンケートや授業後の感想文から分析を行った。アンケート結果からは、本授業が「役立った」と回答した者は、95.8%であった。体験活動では、実際に自然や素材と触れ合うことで、具体的に授業の趣旨を理解することができたという感想が多くみられた。発展学習では、提出された課題をまとめて授業中に配布をするなど、他者の考えに触れることができるフィードバックについて高く評価していた。授業後の感想からは、「子どもの様子やどのような遊びを取り入れるべきか自分で考えることができた」とあり、子どもの理解に対して一定の学習効果が見られた。学生自身の体験を通して、子どもが主体的に環境にかかわりたくなるような環境構成の工夫や仕組み作りのあり方を学べた点が大きかったといえる。その一方で、授業後の発展学習の交流（フィードバック）の方法が今後の課題であると思われた。
8 幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価に向けて—「聞く力」を量的に捉える試み—	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第8号 (pp. 115-122)	子どもの育ちを可視化し、教育実践が効果的に行われたかを教員が振り返るためには、教育効果の測定と評価が必要である。しかし、幼児教育は、小学校以降の教科の学習と異なり、遊びを通して総合的に学習されるため、「見えない教育」と言われ、その教育効果を量的に測定したものは管見するあたり数が少ない。本調査では、京大NX5-8を用いて、内容の理解度といった観点から、幼児の「聞く力」の測定を試みた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				調査対象者は、言葉の教育に特に力を入れているA園と言葉の教育以外に力を入れているB園の園児を対象とした。結果は、課題ごとに素点を出し、換算表に従って偏差値に変換した。言語性という項目を設け、2要因分散分析を行った結果、A園とB園には違いがなく、課題の主効果($F(3, 42)=4.481, p<.01$)のみ有意であった。本調査の取組から、園の取組の違いを結果に反映しにくいなど、測定の難しさが浮き彫りになった。また今後は、聞く力だけでなく、話す力、伝え合う力の測定について考える必要がある。 代表者：岡野聡子 共著者：吉村啓子、大野鈴子 本人担当部分：第1、2、3、5章部分 第1章では、言語活動における教育効果の測定の評価の必要性和測定方法における先行研究を提示した。第2章では、調査対象園の概要をまとめ、第3章では、調査概要および研究手法、研究分析手法について提示した。第5章では、検査結果の提示および今後の課題として、聞く力だけでなく、話す力、伝え合う力の量的測定に対して言及した。
9 NIEを取り入れた教育実践研究—大学2年生を対象とした時事教養Iの授業実践を通して—	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第8号(pp. 147-154)	学生の基礎学力の向上は、本学にとっても大きな課題であり、この課題解決の一つとして、新聞の利用による教育の導入を平成25年4月からはじめた。授業は学部単位で行い、420名が履修をした。授業内容は、山陽新聞社による講義と現在注目されている新聞記事を題材（出生前診断やユニクロ世界同一賃金、アベノミクス等）を使用した講義を実施した。また、講義内に3回の試験を行い、講義後には学生アンケートを実施した。試験は、難易度が同程度の試験問題を使用した。試験結果を分析すると、分散値にそれぞれ有意差は出していないが、1回目と2回目、2回目と3回目、3回目と1回目の平均点の間に有意差が見られ、点数が上昇していることから、基礎学力（ここでは言語力）と教養が身に付いたということが言えると思われる。また、学生アンケートからは、これまで新聞を読まなかった学生も新聞に関心を持てるようになったことが明らかとなった。 代表者：渡邊規矩郎 共著者：仲田輝康、木戸和彦、三木澄代、岡野聡子、正木友則 本人担当部分：第2章部分 第2章では、日本におけるNIEの導入の変遷にふれ、どのように大学教育において実践がされてきたか、先行研究を提示した。
10 都市公園における子どもの遊び場環境づくりの可能性—NPOと行政の協働による「緑の遊び場(ESD)プロジェクト」を通して—	単著	平成26年10月	奈良学園大学研究紀要第1号(pp. 11-23)	本稿は、子どもの遊び場環境の変化にふれながら、おかやまプレーパークの積み上げてきた実践と今回のプロジェクトの事業評価・考察を行うことを目的としている。筆者は、2013年3月からNPO法人岡山市子どもセンターのプレーパーク運営委員となり、都市公園における子どもの遊び場環境作りに携わってきた。2012年4月からNPO法人岡山市子どもセンターは、岡山市庭園都市推進課と協働して「緑の遊び場(ESD)プロジェクト」を実施する運びとなり、筆者は、プロジェクトに参加をし、2年間に渡って記録を取りまとめた。実践記録を用いて、「遊び場

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				の設定と専門性の有無のマトリクス」を作成し、遊び場の設定と遊びの種類がどのような人員配置によって運営がされていたかを分析した。今回の分析結果として、緑の遊び場（ESD）プロジェクトの目的である「子どもが岡山市における中心市街地の公園の魅力を、遊びを通して発見し、原風景として子どもの記憶にとどめてもらいたいという願い」には来場者アンケートの回答も含め、十分応えられているものの、「公園内との緑とのかかわりを深めるための遊び場づくりを目的とした」では、合計 53 種類の遊びのうち 8 種類の設定であり、15%の実施率であったことが浮き彫りとなった。今後の改善点として取り上げるべき項目が明らかとなった。
1 1 キャリア教育とキャリア支援の相互展開による実践と課題について—キャリア教育・キャリア支援における教職員連携の取り組みから—（査読有）	単著	平成26年12月	人間教育学研究第 2 号 (pp. 131-138)	大学におけるキャリア教育やキャリア支援は、1997 年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。 キャリア教育は、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力の育成を目指して、教員主導のもとにカリキュラムの構成・授業の実施がされてきた。一方のキャリア支援は、従来の就職課で実施してきた就職活動に直結する学生支援を職員が担っている。昨今では、こうしたキャリア教育とキャリア支援を全学的・体系的に見直す動きがある。すなわち、教職員が職務分掌の枠を超えて連携するということである。本稿では、K 大学を事例とし、キャリア教育とキャリア支援の連携について、その実態と課題を明らかにすることを目的としている。 まず、K 大学が育成する人物像について述べた後、キャリア教育とキャリア支援の全体図を提示し、その実態を俯瞰した。次に、キャリア形成科目において、キャリア支援にあたっている職員のヒアリングで得た情報等をもとに、キャリア形成科目のカリキュラムの見直しおよび改善結果を提示した。そのことで、キャリア教育内で把握できなかった個々の学生のニーズを把握することができ、キャリア支援につなぐ体制を整備することが可能となった。今後の課題は、就職活動準備は 3 年生の後期から本格的にはじまるのだが、学習意欲の低下が見られる 1, 2 年生に対し、早期のポジティブ・アクションが 3 年生以降の進路を決める上で重要となると思われる。
1 2 子育て支援の多様化に関する一考察—子育て支援施策の揺らぎを越え、「チルドレン・ファースト」の舞台へ—	共著	平成27年3月	幼年児童教育研究第 27 号兵庫教育大学幼年教育コース (pp. 115-126)	本稿では、子育て支援の変遷について国の施策を概観しつつ、その中で、子育て支援の対象者や実施運営主体が多様化していく様子を整理し、子育て支援の今後の課題について検討することを目的としている。「子育て支援」という言葉が行政の諸文書に登場してから 25 年目を迎えるが、その間、子育て支援の実施主体の多様化から、子育て支援が誰によって、どのように実施されているのかが見えにくい状況が生じているという課題があり、本稿において子育て支援の類型化を試みた。類型化では、横軸に支援の実施主体として公的主体、民間主体を取り上げ、縦軸に支援のニーズとして個別的ニーズ、社会的ニーズを取り上げて分類した。その分類に従って、子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				育て支援の具体的事例を取り上げ、今ある子育て支援の現場が持つ課題について論じた。子育て支援の変遷や事例の考察から、子育て支援は多様な実施主体の活動によって量的拡大をしてきたが、今後は子育て支援の質的保障の検討や点の支援を面の支援へとつなげ、子育て支援のネットワーク体制を確立することが求められると同時に、子どもの最善の利益を考えた「子どもの育ち」における議論の深まりの必要性が明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共著者：佐伯岳春、吉富裕子、馬場陽子 本人担当部分：第1、2、3-（1）、4章 第1章では、多様化した子育て支援を類型化し、その事例を提示することによって、今後の子育て支援の課題について考察する必要性について提示し、第2章では、日本における子育て支援の変遷を公文書や先行研究を用いて論じた。第3章（1）において、子育て支援の類型化を試みた。第4章では、子育て支援の量的拡大から質的保障への転換へといかにつなげるべきかを論じた。
13 カナダ・ネイバーフッドハウスにおける世代間交流の研究：フロッグホロウネイバーフッドハウスにおける世代間交流プロジェクトの事例から	単著	平成27年9月	奈良学園大学研究紀要第3号(pp. 9-27)	本稿では、カナダのフロッグホロウネイバーフッドハウスで2011年4月から2014年3月までに取り組まれた世代間交流プロジェクトの実態を明らかにすることを目的としている。 ネイバーフッドハウスには、日常生活に必要なサービスやプログラムが多岐に渡って展開され、多世代が集う場が形成されている。本プロジェクトは、若者と高齢者の交流の質に目を向け、異世代間の相互理解を深めるプログラムを3年間に渡って実施したことに意義がある。研究方法は、まず、フロッグホロウネイバーフッドハウスが発行している世代間交流プロジェクトの報告書“Generation Citizenship Seniors + Youth Toolkit”とフロッグホロウネイバーフッドハウスのホームページに掲載されている情報を手掛かりとして、世代間交流プロジェクトの概要を把握した後、ユースサービスコーディネーターA氏と運営責任者であるB氏、参加者である高齢者のC氏、若者のD氏に対してインタビュー調査を実施した。 プロジェクトの主要メンバーは、18名の若者（30歳以下）と6名の高齢者（50歳以上）の計24名であった。2011年～2012年度は、主要メンバーを対象として、①コミュニケーションスキルの獲得、②エイジズムへの理解を深める、③アセットマップの作成、④メンターリーダーシップ研修を実施し、2013年度に9つの世代間交流プロジェクトが実施された。主要メンバーをフォーカスグループとして2年間という時間をかけて育成していることは、他の世代間交流プログラムには見られないことである。また、補助金終了後も9つのプロジェクトのうち6つが現在も継続して実施されている。インタビュー結果からは、若者が高齢者との関わりの中で、他者理解を深め、高齢者の持つ生活体験の知に尊敬の念を抱く様子があり、高齢者は、若者との関わりにおいて目の前にいる若者だけとの関係性を構築しようとするのではなく、常に全体に対して配慮や気配りをする姿勢が見られた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14 カナダ・ネイバーフッドハウス研究Ⅰ—利用者とボランティアスタッフの双方向的関係性に着目して—（査読有）	単著	平成27年12月	日本人間教育学研究第3号（pp. 181-197）	本稿では、セツルメント運動を源流とするカナダ・ネイバーフッドハウスを研究対象とし、地域コミュニティにおける住民参画型の施設運営の在り方を考察することを目的としている。研究方法は、参与観察および聞き取り調査である。調査対象施設は、ゴードンネイバーフッドハウスであり、調査日時は、2010年3月1日～3月15日、2010年8月13日～9月11日、調査日時協力者は23名である。調査結果から、23名中、サービス・プログラムを利用し、ボランティア経験を有する者は11名（47.80%）であり、そのうちカナダ出身以外の者は10名（90.9%）であった。利用者からボランティアスタッフへ、ボランティアスタッフから利用者へとなる様子を、事例を通して検討した結果、利用者からボランティアスタッフとして活動を行う過程には、彼らにとって明確な活動動機があったわけではなく、そこでの活動が日常生活の一部として行われていることであり、「手助け」として捉えられていた。そして、ボランティアスタッフから利用者になる過程には、自己のニーズ充足だけでなく、利用者とのかかわりを通して、ボランティアスタッフとしての役割意識から解放される様子があることが示された。ネイバーフッドハウスには、数字として出てこない「手助け」が数多く存在し、また、それが期待されているのであり、活動を支える大きな柱となっているといえる。
15 多世代交流としての子育て支援に関する研究—カナダ・ネイバーフッドハウスの事例から—（修士論文）	単著	平成28年3月	兵庫教育大学大学院	本研究は、カナダ・ネイバーフッドハウスを事例として、地域コミュニティを基盤とした日常生活を包括的に支援する体制や、多様な世代が集い合う場に着目し、子育て世代にとって、ネイバーフッドハウスがどのような意義と役割を果たしているかインタビュー調査から検討することを目的としている。調査結果からは、親世代における異世代との関わりは基本的にないと示されたが、親の視点から見た子ども世代における異世代との関わりにおける利点を取り上げられた。また、親世代の利用者が参画者として子育て支援の活動に携わる様子があり、支援を受けているという感覚ではなく、主体的に子育てに関わるという姿勢が見られる。日本の子育て支援の現場においても、利用者自身が子育て支援の活動に参画できるような場や枠組みを作り、利用者—ボランティア—子育て支援員の皆が水平目線でつながり合えるパートナーとしての立ち位置を手に入れることが重要なのではないかと考えられた。
16 大学におけるキャリア教育の構造と展—本学におけるキャリア形成科目を事例として—（査読有）	単著	平成29年12月	人間教育研究誌創刊号（pp. 17-38）	本稿では、キャリア教育の変遷および大学におけるキャリア教育の構造を概観し、奈良学園大学人間教育学部におけるキャリア形成科目（共通教育科目群）の展開および培う能力について論じることを目的としている。本学の場合、学生の実態から、「基礎的・汎用的能力」の育成を重視し、キャリア形成科目の構造および培う能力指標の提示をした。また、今後の方向性として、専門科目群との連携におけるキャリア教育の授業展開の可能性について論じた。
17 アサーションスキル獲得のための教材開発—学生が作成した事例を	単著	平成30年1月	人間教育ジャーナル第1号（1）（pp. 25-44）	本教材は、平成29年度奈良学園大学人間教育学部4年次後期開講科目「教職実践演習」（必修・2単位）にて活用したものである。本教材を作成

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
通してー（研究ノート）				した理由は、2点ある。1点目は、新規学卒者の就職率は年々上昇しているが、大卒者の離職率は5年続けて30%を推移しており、若年者の離職理由の上位には「人間関係がよくなかった」が挙げられていることに着目したこと、2点目は、筆者自身が学生とのかかわりを通して、学生が、自分の気持ちを口頭にて表現することに抵抗を感じていると思うことがある点である。 アサーションスキルの講義を2回に分けて実践したが、自分達が考えた事例を読んだ学生から、「私も、アルバイトにて、店長からシフトに入ると何度も言われ、困った経験がある」等、各々の葛藤する場面に対し、共感する態度が見られた。葛藤場面に対し、どう対応するかを学生達が改めて問うたことにより、①自分の感情への気付きと表現方法、②他者の発言や行動の背景への気付きについて、考えるきっかけになったと思われる。
18 幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの実践研究 1ーA公立幼稚園における園内研修を手掛かりとしてー（研究ノート）	単著	平成30年3月	奈良学園大学研究紀要第8号(pp.127-141)	本稿は、筆者が平成29年4月から平成30年1月まで、「幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの適切な運営に向けて」をテーマとし、K町立A幼稚園にて行った園内研修での取り組みの内容とその成果を提示することを目的としている。取り組み内容は、①園の教育目標の明確化、②指導計画書の検討・改善、③保育・教育実践の記録の検討・改善である。全10回の園内研修の実践から、幼児期におけるカリキュラム・マネジメントを実施する際、何から着手するか、どの項目から進めるかに戸惑いがあるという担任教諭からの意見が多数存在した。そのため、現時点において、カリキュラム・マネジメントに必要な項目の抽出を試みた。項目数は、12項目である。また、A園におけるPDCAサイクルの思考を確立することは、次年度以降の課題となったが、カリキュラム・マネジメントに取り組むことにより、現場教員の保育実践に対する意欲が高まったという意見があった。
19 大学における教学支援体制の運営に関する一考察ーキャリア教育とキャリア支援の連携に着目してー	共著	平成30年7月	人間教育ジャーナル第1号(5)(pp.123-141)	本稿では、大学における教学支援体制の運営について、特にキャリア教育とキャリア支援の教学支援の連携がどのように行われているかに着目し、3大学（学習院大学、文教大学、昭和女子大学）の視察を手掛かりとして考察することを目的としている。結果として、学習院大学では、教学部門と支援部門の連携体制の確立はされていなかったが、大学の教育理念や方針を取り入れたキャリアセンター事業計画があり、また、就職活動に関し、OB・OGによる在学生支援体制が確立されていることが特徴であった。文教大学では、中期経営計画を立て、教学部門と経営部門がビジョンを共有し、計画→実行→評価→改善のPDCAサイクルの確立が行われていた。昭和女子大学ではキャリアデザイン委員会を設置し、全学横断型組織を確立し、教学部門と支援部門の有機的連携が確立されていた。 代表者：岡野聡子 共著者：岡村季光・杉野村井明子 本人担当部分：第1章、第2章、第3章(3)、第4章 第1章では、教学支援体制の先行研究を取り上げ、第2章では3校の視察先の概要をまとめた。第3章(3)では、昭和女子大学の視察報告

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				を行った。第4章では、3校の視察から、大学運営の一環として育成したい学生像のマネジメントが行われており、組織として運営されていることが、教学支援が成功している要因であると言及した。
20 育成したい「学生像」の明確化、能力指標構築の試みー奈良学園大学人間教育学部を事例としてー	共著	平成30年9月	人間教育ジャーナル第1号(7)(pp.185-198)	本稿では、我が国における「これから求められる力」に関する能力概念の整理をした上で、奈良学園大学人間教育学部を事例として、「育成したい学生像」の能力指標を提示することを目的としている。新学習指導要領の完全実施や大学入学共通テストの導入などにより、2020年に向けた教育改革が粛々と進行する中、大学教育にも大きな影響があると予想される。本稿では、第1に、社会から求められる能力概念の整理と学部特性を整理し、第2にAP、CP、DPから育成したい学生像の能力項目の抽出を行い、第3に能力指標を提示した。能力指標作成にあたっては、①測定される側の発達水準を考慮すること、②人間教育のあり方や目指す方向性を能力指標に反映させること、③能力の「芽生え」(ショプラー; 2007)に注目するという観点を提示した。 代表者: 岡野聡子 共著者: 岡村季光・伊崎一夫 本人担当部分: 第1章、第4章、第5章 第1章では、諸外国の教育改革における資質・能力目標をまとめたほか、人間教育学の価値について言及した。第4章では、奈良学園大学人間教育学部を事例とし、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの3つのポリシーから、育成したい学生像の能力指標案を作成した。第5章では、能力指標の運営について言及した。
(その他) 「学会発表」 1 より良い教育を目指すカリキュラム・マップの作成～FD活動の一環として～	ー	平成21年9月	全国保育士養成協議会第48回研究大会, 研究発表論文集(pp.222-223)(東北福祉大学)	本学において、養成すべき保育者像に適合した教育が実施できているか検討するため、科目ごとの到達目標とディプロマ・ポリシーの各項目の対応表(カリキュラム・マップ)を作成した。結果からは、保育士資格取得の科目には、幅広い教養を身につけるというディプロマ・ポリシーに沿う必修科目が少ないことが明らかとなった。そのため、教養として位置づけている日本の伝統文化教育なども教育実習事前事後指導で取り入れ、保育を学ぶ者の教養の質を高められるように実践も行った。 代表者: 吉村啓子 共同者: 中瀬惇、松井祐子、梅岡さと江、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、<u>岡野聡子</u> 本人担当部分: カリキュラム・マップの作成を担当した。
2 カナダにおけるネイバーフッドハウスの調査から学ぶものー日本における「子育て支援」の特徴を通してー	ー	平成22年7月	大阪市立大学大学院創造都市研究科教員・院生共同研究シンポジウム(大阪市立大学大学院梅田サテライトキャンパス)	ブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー市で行われている地域の子育て支援のフィールド調査結果も含め、日本における子育て支援の現状と課題を述べた。ネイバーフッドハウスにおける子育て支援が親の支援をより強化した内容になっており、専門の労働相談員の常駐や雇用プログラムの開催、誰もが共用で利用できるコミュニティキッチンなどの物的サービスの環境がホリスティック(包摂的)に整えられている特徴について言及した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 現場が求める人材像～聞き取り調査をふまえて～	—	平成22年9月	全国保育士養成協議会第49回研究大会, 研究発表論文集 (pp. 174-175) (甲府富士屋ホテル)	社会に通用する人材を育成するには、学生の就職先が求めている人材像を正確に把握し、それを踏まえた教育内容を構築することが必要である。そのため、保育現場への聞き取り調査および学生アンケート調査を実施した。保育現場が求める人物像の結果では、主体性やコミュニケーション能力を重視するといった語彙が上位に並び、ピアノや絵画制作等の保育技術に関する項目よりも多かった。学生アンケートの結果からは、ピアノや絵画制作といった保育技術の習得に重きを置いていることが確認された。今後キャリア支援の一貫として、社会人基礎力に示されている「人間性の育成を重視した教育」をより一層行う必要が明らかとなった。 代表者：吉村啓子 共同者：梅岡さと江、辻野孝、松井祐子、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、<u>岡野聡子</u> 本人担当部分： 聞き取り調査の実施および分析を担当した。
4 学生の進路決定を支援する～実習・就職支援室の活動報告～	—	平成22年9月	全国保育士養成協議会第49回研究大会, 研究発表論文集 (pp. 176-177) (甲府富士屋ホテル)	幼稚園・保育士養成施設として、早期のキャリア支援の重要性について言及した。具体的には、保育現場が求める人物像の調査や保育技術の指導、年3回の進路調査を踏まえた個人指導などである。2年間という短い学生生活の中で、就職活動に費やす時間を有効活用するためにも、早期のキャリア支援プログラムの構築は必要であることが確認された。 代表者：<u>岡野聡子</u> 共同者：吉村啓子 本人担当部分： キャリア支援プログラムの構築を担当した。
5 幼児期における言語力育成と保育者の役割	—	平成24年3月	日本教師学会第13回研究大会, 発表要旨集 (pp. 24-25) (早稲田大学早稲田キャンパス 8号館)	幼児教育において人的環境としての保育者の役割について提案した。環境に働きかける体験を、保育者がどのように捉え、幼児に言葉がけとして返していくかは保育の中では重要である。特に絵本や遊びを繰り返す中で幼児は多くに力を獲得していく。細切れの知識ではなくそれぞれの繋がりの中で、体験の繋がりや意味に気付いていく。この経験の積み重なりが、幼児自身の自信となり、自分を取り巻く環境政界に対しての信頼となる。そのためには、幼稚園としてどのようなカリキュラムが必要かについて、4歳児と5歳児の具体てきな教育課程を示しながら提案した。備考：日本教育新聞社の平成24年4月16日付第12面にて取り上げられた。
6 領域「環境」における授業研究～体験活動と授業後の発展学習を重視した授業の展開～	—	平成24年9月	全国保育士養成協議会第51回研究大会, 研究発表論文集 (pp. 268-269) (京都文教大学・京都文教短期大学)	領域「環境」の授業では、身近な環境とかわる力の育成を学生自身に具体的に理解させるため、講義形式の授業と体験活動を取り入れている事例が多くみられる。本講義では、体験活動を取り入れつつ、授業内で取り扱った内容への理解を深めるための発展課題を授業後に学生に与えた。授業アンケートから、学生自身が体験を通して子どもが主体的に環境にかかわりたくなるような環境構成の工夫や仕組み作りを学べた点は大きかったと言える一方で、授業後の発展学習の交流の在り方の工夫が今後の課題である。 代表者：<u>岡野聡子</u> 共同者：松田智子 本人担当部分： 授業実践を評価し、発展課題を考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7 大学生のキャリア意識とキャリア支援体制の確立に関する研究-環太平洋大学 3 年生を対象としたアンケート調査を踏まえて-	—	平成24年10月	日本キャリア教育学会第 34 回研究大会, 研究発表論文集 (pp. 86-87) (滋賀大学大津キャンパス)	大学時代は、学生から職業社会への移行期にあたり、自分の将来や人生を考え計画できる力を身につけることがキャリア教育の目的となる。本学では、教育課程内外に捕らわれず、教職員が一丸となってキャリア支援体制を確立しようとしている。そこで、学生のキャリア意識に関する実態を把握するとともにキャリア教育の効果測定も含め、「大学生の職業観に関するアンケート調査」を 3 年生のキャリアデザイン履修者 346 名（回収数 264 名、回収率 78.6%）に実施した。調査結果では、職業・仕事に関する情報源において、学校での授業が 84.1%と最も多く、次に先生との会話が 81.5%を占めるなど、就職先の情報源としての役割を教職員が十分に果たしていることがわかった。しかしながら、大学卒業後の進路では就職希望者が 84.5%であるにもかかわらず、将来就きたい職業の具体名の記述を求めると、未回答が 43.2%との結果であった。このことから、大学は就職を考えるための情報は与えているが、各職業の具体的なイメージ形成という点では学生に対して十分な手助けができていないのではないかと考察できる。今後は、各職業の具体像を提示することが重要であることが明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共同者：小野憲一 本人担当部分：調査結果の分析および考察を担当した。
8 幼児期における言語活動の充実とは～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	—	平成25年3月	日本教師学学会第 14 回大会発表要旨集 (pp. 60-61) (秋田大学手形キャンパス)	幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され、また保育実践としてどのように取り組まれているのか、伝達力や思考力の育成に関する具体的な実践事例にも着目をしながら岡山市内の公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査を通して考察することを目的としている。岡山市内にある公立幼稚園合計 68 ヶ園の 459 名の教諭（常勤・非常勤問わず）を対象、調査時期は、2012 年 9 月 11 日～9 月 22 日の 12 日間である。質問紙の有効回答数は 178 票、有効回収率は 38.7%であった。 「言葉」にかかわるカリキュラムを年間指導計画・月案・週案に含めて作成をしている園や、言葉のカリキュラムを園独自で作成している園もあるなど、幼児期における言語活動の充実は着実に進んでいるともいえる。今後は、幼児教育が学校教育のはじまりとして意識される中で、小学校の教育内容との連携・接続を考えた保育実践のあり方をより一層模索する必要があるだろう。
9 生活科への興味関心を深めるための授業研究（Ⅰ）～大学 2 年生時の開講科目「生活の理解」のアンケート調査から～	—	平成25年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第 22 回全国大会兵庫大会～生活・総合の新たな枠組みの提案 ふるさと子午線の地から世界標準を～ (p. 262) (兵庫県立明石高等学校)	本学では、生活科を学ぶにあたって、教材への理解や生活科の内容を学ぶために「生活の理解」を 2 年生の前期に開講し、生活科の指導法については、3 年生の後期に開講をしている「生活科教育法」を受講することになる。生活科を学び始めたばかりの学生にとって、生活科に対するイメージがどのようなものであり、また、授業を受講する中で、生活科への理解がどの程度深まるかについて、量的・質的調査の両面から明らかにすることを目的としている。 第一回目のアンケート調査では、「生活科」という科目を聞いたことがあるかという問いにて、58%が「ある」と答え、42%が「ない」と答

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				えた。また、小学校時代に「生活科」を学んだことがありますかという問いでは、61%が「ある」と答え、12%が「ない」、27%が「忘れた」と回答した。「生活の理解」に対するイメージを自由記述にて回答を求めたところ、「生活の中における必要なこと（知識・技能）を学ぶ」と43%の学生が回答しており、生活科のキーワードともいえる「気づき」や「体験活動」といった言葉は現段階において見られなかった。また、学生の中には「生活」という言葉を聞いて、衣食住をイメージする者も多く、「家庭科との違いは？」と質問をする学生もいた。今後も調査を続け、全15回の授業終了後に学生の生活科に対するイメージがどのように変容したか明らかにしたい。
10 キャリア形成科目における授業改善と評価—「キャリアデザイン」における新たな取り組みの授業実践報告—	—	平成25年10月	日本キャリア教育学会第35回研究大会, 研究発表論文集 (pp. 64-65) (名古屋大学東山キャンパス)	本学の3年次に開講している「キャリアデザイン」(2単位・卒業必修科目)では、進路選択に必要な知識を身に付けるためだけでなく、自己理解を深める中で自己表現力を高めることを目的としている。本発表では、平成24年度の授業内容本学学生を対象としたキャリア意識調査からキャリア教育における授業の在り方を再検討し、平成25年度の授業実践に活かしたことの事例発表を行った。
11 幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価を考える(Ⅰ)—幼児期の「聞く力」を量的に捉える試み—	—	平成26年3月	日本教師学会第15回大会発表要旨集 (pp. 80-81) (環太平洋大学)	幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価について、京大NX5-8を用いて内容の理解度といった観点から、幼児の「聞く力」の内的要素を量的に捉える試みを発表した。今回の調査結果からは、各課題において、言葉の教育に特に力を入れているA園と言葉以外の教育に特に力を入れているB園に有意な差を見ることができなかった。今後は、言語活動の充実において、「聞く力」の測定だけでなく、「話す力」、「伝え合う力」の測定方法および評価方法についても検討する必要があると考えている。 代表者：岡野聡子 共同者：吉村啓子 本人担当部分：調査実施、結果の考察を担当した。
12 幼児期における「言語活動の充実」に関する研究Ⅱ～岡山型一貫教育の中における岡山市立大野幼稚園の取り組み～	—	平成26年5月	日本保育学会第67回(近畿ブロック)発表要旨集 (p. 542) (大阪総合保育大学)	岡山市における言語活動の充実を軸とした幼小中連携教育の実践を取り上げ、その中における岡山市公立幼稚園の言語活動の充実あるいは言葉の教育の保育実践の取り組みにおける考察を発表した。岡山市は、平成14年から岡山市地域協働学校施策を始め、その中で家庭・学校園・地域社会の三者協働による教育システムの構築や幼小連携および幼小一貫教育を推進してきた。また、岡山型一貫教育と名付けた教育活動は、幼児期からの学びの連続性に着目し、幼小中連携教育の実践を行ってきたことが特徴であると言える。岡山市立大野幼稚園は、平成23～25年度まで、『園生活を楽しむための力の育成』を主題とし、副題に大野幼稚園の指導の重点である「言葉のキャッチボール(話す・聞く・伝え合う)を楽しむ幼児をめざして」を掲げ、実践研究に取り組んできた。指導上の工夫では、指導案に「話す・聞く・伝え合う」の項目を設け、教師が日々の教育・保育活動で意識できるよう配慮した。設定保育の工夫として、降園前の一日の振り返りにおいて、話し方の指導および聞き方の指導、特に話し手の内容を理解して聞いているか

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				を確認しながら聞く力の育成を行っている。また、全教員が研究協議会に参加し、情報共有化に努めている。教師は、日々の教育・保育実践を行う中で、日々の活動が子どもの育ちにどのようにつながっていくかといった「見通しのもてる教育活動」は、教師の教育活動へのやる気や意欲を向上させる意義を含んでいる。「見通しのもてる教育活動」を実践するには、幼小中の教師が集うことのできる研究協議会等を整備することが重要である。
1 3 プレーパークと行政の協働による「緑の遊び場 (ESD) プロジェクト」の実践報告～岡山市街地の公園を利用した子どもの遊び場づくり～	単独	平成26年9月	こども環境学会合同セミナー研究発表・活動報告梗概集第3号 (pp. 46-47) (名古屋工業大学)	本発表は、NPO法人岡山市子どもセンターと岡山市庭園都市推進課が協働で実施した「緑の遊び場 (ESD) プロジェクト 2012、2013」の活動内容および事業評価について振り返り、都市公園を利用した子どもの遊び場環境づくりの実践報告を行った。2012年度は5箇所の公園にて子どもの遊び場を設定し、2013年度は7箇所に増設した。「子どもが遊ぶ」という視点から見た各公園が持つ課題を提示し、その課題をどのように解決したか本プロジェクトの実施写真を用いて解説した。本プロジェクトの参加者は、年間2000名に上っており、保護者アンケートからは、「今後も是非参加したい・参加したい」と95.2%が回答している。
1 4 多世代間交流を可能とする場作り～カナダにおけるゴードンネイバーフッドハウスの事例を通して～	—	平成26年10月	日本世代間交流学会第5回全国大会要旨集 (p. 72) (姫路商工会議所)	本発表は、自主企画シンポジウム 1-Aにおける「子育て支援をめぐる世代間交流—高齢者の参加を中心に—」の話題提供者として登壇した。カナダ・バンクーバー市ウエストエンド地区に位置するゴードンネイバーフッドハウスの取り組みを紹介し、多世代間交流を可能とする場作りについて考察した。ゴードンネイバーフッドハウスでは、子育て支援や高齢者支援、雇用支援等、約30種類のサービスやプログラムの大半を一時滞在者の留学生から現地の大学生、そしてウエストエンド地区に住むゴードンネイバーフッドハウスの利用者がボランティアスタッフとなって提供している。一つの施設内に多様なサービス提供の場を配し、ここを訪れる全ての人が「与え与えられる」といった互惠性を醸成する場の可能性について述べた。
1 5 奈良学園大学におけるキャリア教育の取り組み (I) —大学1年生を対象とした「キャリアデザイン I」を通して—	—	平成26年11月	日本キャリア教育学会第36回研究大会・研究発表論文集 (pp. 73-74) (琉球大学)	奈良学園大学は、奈良産業大学から名称変更をし、従来の学部学科を一新する形で人間教育学部と保健医療学部を設置した新設大学である。筆者は、人間教育学部に属し、キャリア形成科目を中心に担当をしている。本発表では、人間教育学部における1年次のキャリア教育の授業実践を報告することを目的とした。人間教育学部は「教育の三つのポリシー」を掲げると同時に、人間教育学部が目指す教育者像である「社会の中で一人の人間として生き抜く力となる豊かな「人間力」を基盤とする、柔軟な「教育力」と高度な「実践力」を備えた教育者」である。これらのポリシーに適う人材育成をするために、1年次では、①自己を知る、②社会を知る、③人生設計の3つのユニットに分けて実施した。履修者は110人いるため、学部教員に協力をしてもらい、10グループに分けて活動を行った。グループ学習での学びの成果は、スピーチコンテストという形で確認をした。 1年次の学びでは、各ユニットを通して、まず

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				自己を振り返る活動と他者を知る活動であったと言える。また、5月に進路希望調査を実施したところ、教師のみを志望している者が53名(51.5%)であり、なんとなく教職を志望した学生像が浮き彫りになる結果が見えた。
16 大学のキャリア教育におけるNIE活用の展望～大学2年生を対象とした「時事教養Ⅰ・Ⅱ」の授業実践～	—	平成26年12月	日本NIE学会第11回仙台大会・発表要集録(p.40)(東北福祉大学)	大学におけるキャリア教育は、1997年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すためのプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。環太平洋大学では、1年次から「社会人基礎力の育成」をテーマとしてキャリア教育に取り組んでいる。「時事教養Ⅰ・Ⅱ」は、キャリア教育の充実を目的とし、授業において試験的にNIEを導入することとした。本発表では、その実践内容と成果について報告することを目的としている。NIEにて取り扱うテーマ設定および内容を構築するに際し、職業観や勤労観にふれられる内容を盛り込んだ。実践の成果では、①新聞活用を通して社会情勢に関心を持て、読書量が増えたこと(学生アンケートから)、②基礎学力の向上(内容確認テストの有意差から)、③意見の質の向上(振り返りシートから)が見られた。 代表者：岡野聡子 共同者：仲田輝康 本人担当部分： 授業実践および実践結果の考察を担当した。 備考：本発表内容は、平成26年12月24日の山陽新聞に掲載された。
17 大学のキャリア教育におけるNIE活用～事例紹介～	—	平成26年12月	第1回大学NIE研究会(キャンパスプラザ京都6F第2講習室・京都文教大学サテライト教室)	今回の発表では、基礎学力向上の課題を解決すること、キャリア教育を充実させることを目的として設置された時事教養Ⅰ・Ⅱの科目をめぐって、NIE活用の在り方や教材の作成方法について述べた。授業実践では、実際に授業で使った「第8回若者の離職を考える」を取り上げ、教材作成方法や受講生の感想、実施後の教員側の感想について述べた。授業実践を振り返る中で、学生に教材を与え、無理やり読ませ、考えさせ、書かせ、対話することにこだわるよりも、ある程度一方的に知識として教える場面を増やし、考える力の土台作りをするというのも一つの選択肢であると提案した。
18 カナダ・フロッグホロウネイバーフッドハウスにおける世代間交流プロジェクトの取り組み～Generating Citizenship Seniors + Youthの実践から～	—	平成27年10月	日本世代間交流学会第6回全国大会(p.51)(追手門大学大阪城スクエア)	現在では、国内外問わず、世代間交流プログラムの開発が多様な形で展開されている。本研究では、カナダのイーストバンクーバー地区に位置するフロッグホロウネイバーフッドハウスで実施された世代間交流プロジェクト(2011.4～2014.3)を対象として、その概要や取り組みを明らかにすることを目的としている。本世代間交流プロジェクトの目的は、①世代間のつながりを創ること、②世代間のつながりを創るためのスキルを向上させること、③コミュニティが抱えるニーズを確認するスキルを養うこと、④コミュニティに変化を与えるプログラムを開発することの4点である。ネイバーフッドハウスには、日常生活に必要なサービスやプログラムが多岐に渡って提供され、日々、さまざまな人、さまざまな世代が施設を訪問する。その中で、多様な世代がそこで出会い、雑談を交わし合う光景を見かけることができるのだが、今回、施設側が

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				世代間交流プロジェクトを実施するにあたって、「交流の質」に着目した点は大変意義深いものであったと思われる。プロジェクト参加者からは、「私たちは何年間かお互いのことを知っていたけれども、互いの人生について知ることはなかった」との意見もあり、他者理解を深めることができた結果も得られた。
19 大学のキャリア教育における NIE 活用の展望 (2) ～大学 2 年生を対象とした「キャリアディベロップメント I」の授業実践～	—	平成27年12月	日本 NIE 学会第 12 回奈良大会 (p. 37) (奈良教育大学)	本発表は、平成 25 年度から実施しているキャリア教育における NIE 活用の授業実践を報告することを目的としている。受講生は奈良学園大学人間教育学部 2 年生 (100 名) を対象としている。本授業は、NIE 実践を通して、社会人としての幅広い教養を身に付け、伝達力、思考力を磨くことを目的として実施した。授業内容は、①メディアリテラシーへの理解、②課題発見 (NIE 実践)、③私から発信する現代的課題の 3 つのユニットから成り立っている。受講前後のアンケート結果では、新聞を読むことによって、どのような能力が高まると思うかでは、受講後は、「課題発見力」が身に付くとの回答が上位に出現した。新聞を読むことを通して、論点を整理することの必要性を学生が感じたという結果を得ることができた。
20 保育内容「環境」の教授内容におけるシラバス分析の試み～SPSS Text Analytics for Surveys を活用して～	—	平成29年3月	日本教師学会第 18 回大会 (pp. 54-55) (早稲田大学所沢キャンパス 101 号館)	保育士および幼稚園教諭を養成する大学教育機関を対象として、保育内容「環境」の教授内容の現状を、各大学のシラバスから分析・考察することを目的としている。授業概要やシラバスの内容の問題点や課題を探ることで、現代社会の諸課題に対応した保育者となる者が学ぶべき事項を研究することには意義があると考えられる。まず、7 大学のシラバスを web 上から取得し、その傾向を分析した後、近畿圏内の 47 大学のシラバス分析を SPSS Text Analytics for Surveys を活用して試みた。授業計画の分析結果からは、自然環境に関する項目の頻度が 45% と最も多く、社会環境に関する項目の頻度が 8% と最も少なく出現した。SPSS Text Analytics for Survey を活用したシラバス分析は、これまでの研究において見られず、初めての試みであった。本研究において、活用の有用性についても示すことができたと思われる。
21 領域「環境」における授業内容の検討—大学における領域「環境」のシラバス分析を通して—	—	平成29年5月	日本保育学会第 70 回大会 (川崎医療福祉大学)	本発表では、大学における領域「環境」の授業内容を検討することを目的としている。平成 30 年度の幼稚園教育要領改訂に向けた文部科学省中央教育審議会幼児教育部会が取りまとめた「現行幼稚園教育要領等の成果と課題」を見ると、「(2) 幼児教育において育みたい資質・能力の整理と、小学校の各教科等との接続の在り方」の中で 10 項目 (①健康な心と体、②自立心、③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量・図形、文字等への関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現) の指導内容が取り上げられている。その中で、領域「環境」と深く関連がある項目は、4 項目 (下線部⑤⑥⑦⑧) に及ぶ。この審議内容は、今後の教授内容の在り方を左右するものであると考えられ、領域「環境」の授業内容の一層の充実が求められていると言える。本学の場合、環境構成の視点から園内を見学するという授業では、学生の関心を高めることができ、大きな成果

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				が見られた。改善点としては、栽培・飼育活動を継続的に行う工夫および社会生活との関わりに関する内容の充実が求められると言える。
2 2 カナダにおける住民参加型地域福祉の推進のための方策とその工夫～” Everything Present in the Seed の資料分析から～	—	平成29年6月	日本地域福祉学会第 31 回大会 (p. 168) (松山大学)	本発表は、地域福祉活動に従事するスタッフやボランティアスタッフを対象としたリーダーシップトレーニングの指南書として、カナダ・キャピラノ大学が 2013 年に発刊した (1) Everything Present in the Seed Community leadership Training と (2) Facilitator's GUIDE を概観し、どのような要素や内容が取り上げられているか、考察することを目的としている。研究の手法は、資料分析である。まず、(1) の資料は、13 項目から成り立っており、121 頁である。1～4 章までが地域福祉活動の概要とその必要性、所属している組織がある者はその活動の紹介、インターネットの有効活用について書かれており、5～13 章までは、リーダーシップとは何かやコミュニケーションスキルの獲得、プロジェクトの立案方法やファシリテーション、企画書の書き方といった実践的な内容になっている。(2) の資料は、(1) の資料を活用する者のための副読本となっており、67 頁である。本資料の特徴は、①本資料の読み手・扱い手を「スタッフ」として想定しているだけでなく、英語があまり得意でない移民者が読むことができ、扱える内容になっている点である。リーダーシップトレーニングが幅広い対象者に拓かれ、実践されることは、ボランティア主導で地域福祉活動を実施する上で重要なことだと言える。また、本資料は、各章が 7～9 ページの構成となっており、解説部分が 2～3 ページ、残りが実践的な内容となっているため、必要な場面に応じて必要な部分を提示できる工夫がある。今後は、本資料の利用者の意見を集め、どのような利点・難点があるのか考察したい。
2 3 多世代交流の子育て支援をめぐる取り組み～カナダ・ネイバーフッドハウスを事例として～	—	平成29年10月	日本世代間交流学会合 8 回大会 (p. 33) (熊本学園大学)	本研究は、セツルメント運動を源流とするカナダBC州バンクーバー市のネイバーフッドハウスを事例として、多世代交流の子育て支援の在り方を考察すると共に、実現に向けた方策について検討することを目的としている。本研究では、Frog Hollow Neighbourhood House、Kitslano Neighbourhood House、Gordon Neighbourhood House の 3 団体を調査した。多世代が集える工夫として、Frog Hollow Neighbourhood House では、高齢者向けサービス (ヨガや太極拳等の健康増進) や中・高・大学生のボランティアリーダー研修を受講している者を子育て広場 (Family Drop in Program) の手伝い・ワークショップ講師として参加をさせながら、子ども・親・若者・高齢者が集う場作りをしていた。Kitslano Neighbourhood House では、定期的に学齢期の子ども・親と高齢者が食事会を持つ場作りがなされていた。Gordon Neighbourhood House では、高齢者向けのランチ提供サービスにて、親子ランチ提供サービスを実施していたのだが、高齢者と子どもの食事のペースや食後に子ども達が走り回る等のことがあり、現在では多世代としての交流活動がなされていない。2 団体が多世代交流の子育て支援を現在も実施できている背景には、①それぞれの発達段階に応じた居場所があること、②ス

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				タッフの介入があることが示唆された。
2 4 吉野青年会議所と大学生の協働による小学生を対象としたキャンプ事業の実践報告～地域福祉活動への示唆～	—	平成29年12月	近畿地域福祉学会平成29年度大会（こうべ市民福祉交流センター）	本発表は、(一社)吉野青年会議所よしのびと創造委員会と奈良県下の大学生（ボランティアとして参加）が協働し、小学生を対象としたキャンプ事業の実践活動報告をすることを目的としている。(一社)吉野青年会議所と大学生は、事業当日までに計6回の合同会議を行い、事業目的の共有化や企画案の話し合い・発表を行った。事業実施後の振り返りでは、①社会人と大学生が協働によって得られたメリットや課題、②小学生にとつての本体験活動の意義、③小学生、大学生、社会人の異世代交流がもたらす価値、④地域資源の発掘と活用方法等が取り上げられ、社会人と大学生による事業は、多面的価値を生み出せる可能性が具体的に示唆された。
2 5 社会的経済における新たな資金の動き「カナダ・ネイバーフッドハウスの取り組み」	—	平成30年12月	第33回研究大会国際公共経済学会（兵庫大学）	カナダ・ネイバーフッドハウスを事例とし、ネイバーフッドハウスの組織運営体制やサービス・プログラムの概要を取り上げ、ボランティアが行うファンレイジングの取り組みや資金調達の仕組みについて言及した。ネイバーフッドハウスには、人々の日常生活を支える30種類のサービス・プログラムが存在しており、住民から寄付された食器や衣類、家具等をリサイクルストアとして販売し、得られた資金をシングルマザーの支援のために使用されていることなど、施設内の資金作りの手法について紹介した。
「研究報告書」 1 幼児期における「言語活動の充実」とは～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	共著	平成25年2月	発行：環太平洋大学	幼稚園教育要領改訂（2008）にて取り上げられた「言語活動の充実」が、実際の保育現場においてどのように実施されているのか岡山市内の公立幼稚園に勤務をしている教諭を対象としてアンケート調査を実施した。本報告書では、特に伝達力・思考力を育成するための保育実践について、自由記述からの考察を行った。自由記述では、伝達力を意識した保育実践を意識して行っていると回答した者は68.4%、思考力を意識した保育実践を意識して行っていると回答した者が60%であった。また、自由記述による伝達力を意識した保育実践に関する具体的な取り組みへの回答が146、思考力では137であった。その内容からは、思考力への取り組みに対する保育者の戸惑いがみられるものが多くあるという結果であった。 A4判 全37ページ 代表者：岡野聡子 共同者：大野鈴子 本人担当部分：アンケート質問紙票の作成および分析、考察を担当した。
2 緑の遊び場（ESD）プロジェクト2012～岡山市における中心市街地の公園の利活用について～	共著	平成25年3月	岡山市庭園都市推進課「緑の遊び場（ESD）プロジェクト2012」	私たちを取り巻く社会環境は、都市化や情報化の進行によって急激な変化を遂げてきた。そうした社会環境の変化は、子どもの育ちにも影響を与えていると言われている。緑の遊び場プロジェクトでは、子どもを中心とした公園の利活用を目的とし、子どものための移動式の遊び場の提供を行った。5つの公園を会場として、約2000人が利用した。プロジェクトでは、自然物（木の実や葉っぱ）を用いたコラージュ製作や木工、公園内に生えている樹木の名前などを当てるクイズや探検マップの製作など、遊びながら公園に親しみをもてる仕組みを提案・実践をした。本プロジェクトは、岡山市庭園都市推進

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				課からNPO法人岡山市子どもセンターが 200 万円の助成金を受け取り、実施した。 A4 判 全 55 ページ 発行者：特定非営利法人岡山市子どもセンター 発行責任者：美咲美佐子 編著・執筆者：岡野聡子・道仙八代己 実行委員：美咲美佐子、藤本富多美、 絹川利恵子、窪田昌子、道仙八代己、 松田秀太郎、筒井愛知、 <u>岡野聡子</u> 運営実施者：松田秀太郎（プレーリーダー）、 特定非営利法人岡山市子どもセンター
3 言葉の保育カリキュラム～幼児期における「言語活動の充実」の工夫～	単著	平成25年7月	公益財団法人福武教育文化振興財団(学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成)平成24年度教育研究助成成果報告書	幼稚園と大学が連携をして、幼児期における言語活動の充実を図るため、岡山市にある大野幼稚園と江西幼稚園と環太平洋大学が連携をして、言語活動の充実に関するアンケート調査を実施した。そのアンケート結果をもとに、伝達力・思考力の育成に着目をして、言語活動における指導方法や環境構成等のあり方について報告書としてまとめた。 A4 判 全 2 ページ 本人担当部分：pp. 10-11
4 緑の遊び場 (ESD) プロジェクト 2013～子どもの自由な遊び場を目指して～	共著	平成26年3月	岡山市庭園都市推進課「緑の遊び場 (ESD) プロジェクト 2013」	2013 年度は、5 つの公園から 7 つの公園に規模を拡大して「緑の遊び場 (ESD) プロジェクト」を実施した。また、前年度の活動に加え、大人が集える場作りの工夫も施した。たとえば、七輪カフェを設けたり、机やベンチを設けて、保護者の方や地域の高齢者の方など、多世代が集える場作りである。子どもを中心としたプロジェクトを通して、多様な立場の人々が出会える空間としての都市公園の利活用方法についても報告書の中で紹介をしている。なお、本報告書を用いて、こども環境学会第 3 回合同セミナー(2014. 9)にて活動の発表を行い、奈良学園大学研究紀要(2014. 10)では、事業の総合評価も行った。 A4 判 全 51 ページ 発行者：特定非営利法人岡山市子どもセンター 発行責任者：美咲美佐子 編著・執筆者： <u>岡野聡子</u> ・道仙八代己 実行委員：美咲美佐子、藤本富多美、絹川利恵子、 窪田昌子、道仙八代己、松田秀太郎、 筒井愛知、 <u>岡野聡子</u> 運営実施者：松田秀太郎（プレーリーダー）、 特定非営利法人岡山市子どもセンター
5 伝達力・思考力を育む言葉の保育カリキュラムの開発～幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価にむけて～	単著	平成26年7月	公益財団法人福武教育文化振興財団(学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成)平成25年度教育研究助成成果報告書	本研究は、平成 24 年度の本助成金を利用して得たアンケート調査結果をもとに、幼稚園と大学が連携を取って幼児期の教育現場における言葉の保育カリキュラムの作成の検討および開発をすることをねらいとしている。当初の計画では、言葉の保育カリキュラムの作成まで行う予定であったが、現場での多様な実践の一つ一つが幼児の教育効果を高めているのかについて量的に捉える必要があるため、今回の研究では、伝達力・思考力を育む上でも重要となる「聞く力」についての教育効果測定を試みた。結果として、園の取り組みの違いを結果に反映しにくいことなどから、測定の難しさが浮き彫りになったことを報告書としてまとめた。 A4 判 全 2 ページ 本人担当部分：pp. 8-9

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6 2015 年度吉野青年会議所事業報告書「大学生と遊ぼう！学ぼう！吉野体験ツアー」	共著	平成28年1月	発行：奈良学園大学	吉野広域（3 町 5 村）の高齢化率は 35%に達している中で、次世代を担う子ども達が吉野に愛着を感じ、また大人になってからも吉野で働き、生活したいと思えるような環境作りをすることが喫緊の課題となっている。今回、吉野青年会議所と本学ボランティアサークルの学生 10 名が連携し、吉野広域の小学 3 年生～6 年生を対象としたキャンパイベント実施した。実施日は、平成 27 年 10 月 31 日～11 月 1 日である。小学生の参加者総数は、16 名であった。大学生企画では、①アイスブレイク、②吉野スタンプラリービンゴゲーム、③ものづくり、④自由創作の 4 つを立案・運営した。主に学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。 A4 判 全 84 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、 奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子
7 2015 年度 ふしぎ☆いっぱい！小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成28年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、財団法人奈良県青少年会館からの寄付金を活用した「青少年の健全育成事業」の助成金（20 万円）を取得し、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。全 3 回の事業を行い、それらを報告書としてまとめた。 第 1 回：しゃぼん玉づくり名人になろう 実施日：平成 27 年 11 月 21 日（土） 参加者数：58 名（子ども 38 名） 第 2 回：くるくるアニメーションづくり 実施日：平成 27 年 12 月 19 日（土） 参加者数：27 名（子ども 12 名） 第 3 回：ピンホールカメラを作ろう 実施日：平成 28 年 1 月 23 日（土） 参加者数：65 名（子ども 33 名） A4 判 全 35 ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ボランティアサークル 運営指導：岡野聡子
8 2016 年度吉野青年会議所事業報告書「大学生と天川村でキャンプ！はじめましてから広がる吉野の“わ”」	共著	平成28年9月	発行：奈良学園大学	昨年度に引き続き、吉野青年会議所と共に奈良学園大学ボランティアサークルと協働で小学生を対象としたキャンプ事業を実施した。今年度は、奈良教育大学、畿央大学の学生と共に、大学生企画として①アイスブレイク、②フィールドビンゴゲーム、③天体観測、④ものづくりの企画立案・運営を行った。奈良学園大学ボランティアサークルの学生は 19 名が参加し、小学生の参加者総数は 23 名であった。実施日は、平成 28 年 8 月 20 日～21 日である。学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。今年度は、「大学生と社会人とのより良い協働関係を結ぶために」をテーマとして、事業実施後にアンケート調査を実施し、その内容も報告書に含めた。 A4 判 全 90 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、 奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9 2016 年度 見えないものを見る力 小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成29年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（26 万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。全 3 回の事業を行い、それらを報告書としてまとめた。 第 1 回：小さな宇宙 ～万華鏡の世界を探検しよう～ 実施日：平成 28 年 11 月 26 日（土） 参加者数：42 名（子ども 25 名） 第 2 回：空気砲を作ろう～目で見える空気の力～ 実施日：平成 28 年 12 月 17 日（土） 参加者数：62 名（子ども 38 名） 第 3 回：色が変わる、まほうの水で描く世界 実施日：平成 29 年 1 月 21 日（土） 参加者数：58 名（子ども 28 名） A4 判 全 35 ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ボランティアサークル 運営指導：岡野聡子
10 2017 年度吉野青年会議所事業報告書「ドキドキワクワク川上村で大冒険！～大学生といっしょに自然を学び・あそびつくそう！～」	共著	平成29年11月	発行：奈良学園大学	吉野広域（3 町 5 村）の高齢化率は 35%に達している中で、次世代を担う子ども達が吉野に愛着を感じ、また大人になってからも吉野で働き、生活したいと思えるような環境作りをすることが喫緊の課題となっている。今回、吉野青年会議所と本学ボランティアサークルの学生 22 名、他大学生が連携し、吉野広域の小学 3 年生～6 年生を対象としたキャンパイベント実施した。実施日は、平成 27 年 10 月 14 日である。小学生の参加者総数は、30 名であった。大学生企画では、①アイスブレイク午前の部、②自然体験活動（魚つかみ、魚釣り）、③昼食づくり、④アイスブレイク午後の部、⑤ものづくりの 4 つを立案・運営した。主に学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。 A4 判 全 80 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、 奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子
11 2017 年度 見えないものを見る力 小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成30年2月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（8 万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。2017 年度は、1 回の事業を行い、報告書としてまとめた。 第 1 回：声コプターをつくろう ～音のふしぎを目で見て体験してみよう～ 実施日：平成 30 年 1 月 20 日（土） 参加者数：49 名（子ども 28 名） A4 判 全 20 ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ボランティアサークル 運営指導：岡野聡子
12 三郷町の原風景	共著	平成30年2月	発行：奈良学園大学	平成 28 年度から「三郷町まちづくり講座」に参加をし、本学学生、行政職員、町民の方々と共に三郷町の地域資源について学びを深めた。 ①龍田古道プロジェクト事業、②信貴山における竹プロジェクト事業、③三郷町民へのインタ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				ビュー調査を実施し、その内容を報告書としてまとめた。 A4判 全102ページ 報告書監修・編集：岡野聡子
13 2018年度 見えないものを見る力 小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成31年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（20万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。2017年度は、3回の事業を行い、報告書としてまとめた。 第1回：「ひかり」のひみつをさがってみよう！ 実施日：平成30年11月3日（土） 参加者数：27名（子ども11名） 第2回：「おと」のひみつをさがってみよう！ 実施日：平成30年12月15日（土） 参加者数：21名（子ども14名） 第3回：「ひかり」と「おと」コレはホンモノ？ 実施日：平成31年2月2日（土） 参加者数：48名（子ども27名） A4判 全41ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ボランティアサークル 運営指導：岡野聡子
「その他」 1 生活科への興味関心を深めるための授業研究（Ⅱ）～大学2年生前期開講科目「生活の理解」受講後アンケート調査から～	－	平成26年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第23回全国大会埼玉大会～生活・総合の新たな枠組みの提案 ふるさと子午線の地から世界標準を～（p.216）（埼玉大学教育学部附属小学校）	平成25年度の4月10日の第1回「生活の理解」を開講した際、本科目で何を学ぶのかイメージを問うたところ、43%の学生が「生活の中における必要なこと（知識・技能）を学ぶ」と答え、家庭科のイメージが強いと回答する学生もいた。全15回の受講を通して、生活の理解に対する学生のイメージがどのように変容し、また前期で得た学びが、どの程度定着しているのかを明らかにするため、質問紙法を用いて追跡調査を実施した。受講半年後の平成26年1月21日の調査結果（有効回答率：65.9%）から、授業で一番印象に残っている内容として、身近なものへの興味関心を高める活動が47%、自然体験活動に関するものが39%、その他が4%、無回答は14%であった。最も多かった活動内容に関する記述は、グミづくりであり、その印象に残っている理由として、「美味しくなかった」や「（普段食べているグミに）砂糖がどれだけ入っているのか知った」とあり、自身にとっての予想外や発見が、半年経過した後も記憶に残っていることが示された。また、他科目との関連性では、科目名を取り上げた者が57%おり、無回答は37%であった。最も多かった記述は、「子どもと環境」であった。（※学会発表予定であったが、体調不良のため辞退し、発表内容は要旨集に掲載されている）

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 岡 村 季 光

研 究 分 野		研究内容のキーワード
心理学		青年心理学, 教育心理学, 居場所, 対人関係, 自己
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1. キャリア教育の実践	平成 16 年 4 月 ～ 平成 26 年 3 月	奈良保育学院にて進路指導を継続的に行うため、常勤教員全員がオムニバスに担当する「課題研究」を開講した。授業では、学生の基礎能力向上のため履歴書作成（含、自己PR、志望動機）、業者添削による小論文指導、漢字の学習を主に担当した。1 回生後期～2 回生前期に至る開講を行い、学生の進路への意識づけを喚起することができた。
2. e ラーニングを用いたプレゼンテーション発表実践	平成 21 年 10 月 ～ 平成 22 年 3 月	帝塚山大学経営情報学部の「教育相談」履修学生を対象に、インターネット教育支援サービス・TIES を用いて当該機関補佐員の協力の下、授業内で学生がプレゼンテーション発表を行っている様子を動画撮影し、履修学生内の範囲で公開した。その結果、自己のプレゼンテーション方法について省察を促すことができ、互いの学習内容を授業外でも参照・共有することができるようになった。
3. 障がいへの理解及び I T 技能向上への実践	平成 23 年 4 月 ～ 平成 26 年 3 月	奈良保育学院の学生を対象に障がいへの理解及び I T 技能向上を目的として「情報処理法」担当教員と連携し、「精神保健」並びに「保育・教職実践演習」授業内で継続的に P C 並びに Word, Web メール, PowerPoint を使用させた。具体的には課題として発達障がいに関する書籍を自らで探して少なくとも 3 冊以上読み、その内容及びコメントを所定様式の Word で入力し、ファイルを Web メールにて添付し送付するように求めた。さらに同種の書籍を読んだ者同士ペアを組ませ、PowerPoint を作成・発表を求めた。知的障がい児・者施設実習の前後に当該実践を行った結果、学生の障がいに対する理解が進み、さらに P C を用いたレポート及びメールの作成スキル、プレゼンテーションスキルが向上した。
4. ピアヘルパー対策講座の担当	平成 23 年 10 月 ～ 平成 26 年 3 月	奈良保育学院にて平成 23 年度後期より 3 年間ピアヘルパー資格取得志望者の募集並びに対策講座の担当を行い、カウンセリング概論・カウンセリングスキル・青年期の課題とピアヘルパーの留意点について授業を行った。その結果、3 年間で志願者 83 名中 66 名の合格者、合格率約 80%の実績を出した。
5. 初歩の心理統計学を用いたデータ分析処理の実践	平成 28 年 4 月 ～ 現在 に至る	奈良学園大学にて平成 28 年度より開講した「人間教育学ゼミナール I（基礎）」において、高校の数学 I の知識を利用した初歩の心理統計学を用い、調査や実験を通して取得したデータを分析することで、心理学研究法を学んだ。その結果、心理学研究論文に記載されているデータの意味を理解し、卒業研究に必要な文献購読の初歩的スキルが向上した。

6. 調査及び統計解析に基づく卒業論文の指導	平成 29 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学にて平成 29 年度より開講した「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」「卒業研究」において、文献による先行研究の概観、仮説に基づく調査や実験の実施、統計解析における実証的検討及び考察を通して卒業論文の執筆指導を行った。その結果、平成 29 年度は 4 名、平成 30 年度は 3 名の学生が卒業論文を完成し、いずれの学生もデータに基づき現象の把握及び考察を行うアカデミックスキルの育成を行うことができた。
2 作成した教科書、教材 1. 教育心理学テキスト共同執筆 『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』（再掲） 2. 発達心理学テキスト共同執筆 『やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－』（再掲）	平成 21 年 10 月～平成 28 年 9 月 平成 23 年 10 月～平成 26 年 3 月	『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』を共同執筆した。帝塚山大学で担当する「教育心理学」（教職科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）にて当該教科書を使用した。 『やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－』を共同執筆した。奈良保育学院で担当する「保育の心理学Ⅰ」（専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）にて当該教科書を使用した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1. 奈良学園大学における授業満足度アンケート結果 2. 帝塚山大学における授業満足度アンケート結果	平成 29 年度 平成 30 年度	前期は講義内容・方法に関して全体平均 3.25 に比し当該教員の平均は 3.38～3.41 であり、満足度に関して全体平均 3.38 に比し 3.39～3.55 であった。 前期は講義内容・方法に関して全体平均 3.30 に比し当該教員の平均は 3.35～3.58 であり、満足度に関して全体平均 3.41 に比し 3.38～3.80 であった。 教員の授業運営についての項目（7 項目、4 件法）は、前期において教員全体の平均 3.28 に比し当該教員の平均は 3.50 であり、7 項目全てが教員全体の平均より 0.02～0.38 ポイント上回った。 後期において教員全体の平均 3.29 に比し当該教員の平均は 3.84 であり、7 項目全てが教員全体の平均より 0.16～0.77 ポイント上回った。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1. 奈良保育学院における教育相談業務 2. 奈良女子高等学校への出講 3. 奈良学園大学における学生支援センターのケース会議に参加	平成 13 年 4 月～平成 26 年 3 月 平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月 平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良保育学院にて学業成績不振者本人及び保護者を呼び出し、学校心理学の見地に基づく学業指導を行った。また、学校不適応を訴える学生の相談業務を随時行い、同時に予防的教育相談業務として遅刻・欠席が目立つ学生等、いわゆる“気になる”学生の把握及び対応を常勤教職員同士で連携を図りながら行っている。 学校法人白藤学園の系列である奈良女子高等学校保育コースにて「保育演習」の授業を各学年に週に 1 時間担当することを拝命した。1・2 年生には発達心理学及び教育心理学の基礎的内容を教授し、3 年生には教育実習及び福祉を専門とする教員と連携し、各自の専門性に応じた授業の展開を企画・実践している。 奈良学園大学で、高校からの環境の激変や発達障害等による学生問題行動事象に対して、医療機関と連携して、学生のカウンセリングを継続的定期的に担当した。また該当学生にかかわる教員全員に対し「学生指導上の配慮の手紙」を発行するなどして、カウンセリング効果を組織的に実効あるものにするよう指導的役割を果たした。また、関係者が集まり該当学生につき論議するケース会議を月に 1 回の割合で定期的に主催した。

5 その他 1. 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科における教育実績	平成 12 年 4 月～平成 26 年 3 月	奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科にて（平成 12 年 4 月～非常勤講師，平成 13 年 4 月～平成 26 年 3 月教育職員として），以下の科目を担当した。 「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（平成 12 年 4 月～平成 26 年 3 月。平成 23 年 10 月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（専門科目，1 年次配当，半期，必修 2 単位）において人間の様々な諸側面の生涯発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に人間のライフサイクルや発達段階及び発達課題について理解させる教育効果があった。 「教育心理学」（平成 12 年 10 月～平成 26 年 3 月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「教育心理学」（専門科目，1 年次配当，半期，必修 2 単位）において教育・保育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育・保育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（平成 13 年 4 月～平成 26 年 3 月。平成 23 年 4 月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（専門科目，1 年次配当，半期，必修 1 単位）において幼児の心的理解の方法に関する内容の授業を行い，それによって，学生に子どもの発達や知的能力，性格に関するアセスメント及び保育への貢献について理解させる教育効果があった。 「精神保健」（平成 13 年 4 月～平成 23 年 9 月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「精神保健」（専門科目，2 年次配当，半期，必修 2 単位）において子どものメンタルヘルスに関する授業を行い，それによって，学生に発達障がいについて理解させる教育効果があった。 「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）」（平成 13 年 10 月～平成 26 年 3 月。平成 24 年 10 月～科目名変更予定） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）」（専門科目，2 年次配当，半期，必修 1 単位）においてカウンセリングの理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生にカウンセリング・マインドを育成する教育効果があった。
2. 帝塚山大学経営情報学部経営情報学科における教育実績	平成 17 年 10 月～平成 24 年 3 月まで	帝塚山大学 経営情報学部経営情報学科の非常勤講師として，以下の科目を担当した。 「教育心理学」（平成 17 年 10 月～平成 24 年 3 月まで） 帝塚山大学 経営情報学部の「教育心理学」（教職科目，2 年次配当，半期，必修 2 単位）において教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。

帝塚山大学経営情報学部経営情報学科における教育実績（続き）		「生徒・進路指導論」（旧・教育心理学Ⅱ）（平成 18 年 4 月～平成 23 年 9 月まで） 帝塚山大学 経営情報学部の「生徒・進路指導論」（旧・教育心理学Ⅱ）（教職科目，3 年次配当，半期，必修 2 単位）において教育現場における生徒・進路指導の理論と実際の現場の様子を紹介する授業を行い，それによって，学生に教育における生徒・進路指導のあり方について理解させる教育効果があった。 「教育相談」（平成 18 年 10 月～平成 24 年 3 月まで） 帝塚山大学 経営情報学部経営情報学科の「教育相談」（教職科目，3 年次配当，半期，必修 2 単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリング・マインドの必要性について理解させる教育効果があった。
3. 帝塚山大学現代生活学部居住空間デザイン学科における教育実績	平成 22 年 4 月～現在に至る	「教育心理学」（平成 22 年 4 月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部居住空間デザイン学科の「教育心理学」（教職科目，2 年次配当，半期，必修 2 単位）において教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「教育相談」（平成 22 年 10 月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部居住空間デザイン学科の「教育相談」（教職科目，3 年次配当，半期，必修 2 単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリング・マインドの必要性について理解させる教育効果があった。
4. 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績	平成 26 年 4 月～現在に至る	「教職表現力演習Ⅰ」（平成 26 年 4 月～平成 29 年 3 月まで） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教職表現力演習Ⅰ」（専門科目，1 年次配当，通年，必修 2 単位）において，新聞記事や評論文等を参照する，あるいは講話を聴き文章を作成する授業を展開した。それによって，学生に言語活動の聴く・読む・話す・書く能力のうち特に「書く力」である「文章表現力」の基礎を身につける教育効果があった。 「教職表現力演習Ⅱ」（平成 27 年 4 月～平成 29 年 3 月まで） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教職表現力演習Ⅱ」（専門科目，2 年次配当，通年，必修 2 単位）において，アカデミックな文章を読み，書くためのトレーニングを行った。具体的には，文章の論理性の理解，データの読み方，書籍輪読，内容発表およびディスカッションである。それらの取り組みによって，学生に言語活動の聴く・読む・話す・書く能力が養われ，特に「書く力」である「文章表現力」を身につける教育効果があった。

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績（続き）		「教育心理学A（初等）」（平成 27 年 4 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育心理学A（初等）」（専門科目，2 年次配当，半期，必修 2 単位）において，就学前・初等教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に就学前・初等教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「教育心理学B（中等）」（平成 27 年 4 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育心理学B（中等）」（専門科目，2 年次配当，半期，選択 2 単位）において，中等教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に中等教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「人間教育学ゼミナール I（基礎）」（平成 28 年 4 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナール I（基礎）」（専門科目，3 年次配当，通年，選択 4 単位）において，ライフステージにおいて特に重要視されている青年期を中心とした発達の理論を学習するとともに，青年期の諸側面について心理学の視点から理解を深めると。また，卒業論文を視野に入れ，パソコン操作技能及び統計の基礎的知識習得にも取り組んだ。その結果，心理学研究論文に記載されているデータの意味を理解し，卒業研究に必要な文献購読の初歩的スキルが向上した。 「教育相談の理論と方法A（初等）」（平成 28 年 10 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育相談の理論と方法A（初等）」（専門科目，3 年次配当，半期，必修 2 単位）において，初等教育現場における教育相談の活動並びにカウンセリングに関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に初等教育における教育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「教育相談の理論と方法B（中等）」（平成 28 年 10 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育相談の理論と方法B（中等）」（専門科目，3 年次配当，半期，選択 2 単位）において，中等教育現場における教育相談の活動並びにカウンセリング及び心理教育に関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に中等教育における教育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「保育相談支援」（平成 28 年 10 月～平成 31 年 3 月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育相談支援」（専門科目，3 年次配当，半期，選択 2 単位）において，幼児教育現場における保育相談の活動並びにカウンセリングに関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に初等教育における保育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。
---------------------------------------	--	--

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績（続き）		「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（平成 29 年 4 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（専門科目，4 年次配当，通年，選択 4 単位）において，卒業論文執筆に向けた先行研究の渉猟及び文献の読解に取り組んだ。その結果，卒業論文執筆に必要な序論構成を組み立てる力を養う教育効果があった。 「卒業研究」（平成 29 年 10 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（専門科目，4 年次配当，通年，選択 4 単位）において，仮説に基づく調査や実験の実施，統計解析における実証的検討及び考察を通して卒業論文の執筆指導を行った。その結果，平成 29 年度は 4 名，平成 30 年度は 3 名の学生が卒業論文を完成し，いずれの学生もデータに基づき現象の把握及び考察を行うアカデミックスキル育成の教育効果があった。 「基礎ゼミナールⅠ」「基礎ゼミナールⅡ」（平成 29 年 4 月～平成 31 年 3 月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「基礎ゼミナールⅠ」「基礎ゼミナールⅡ」（いずれも専門科目，1～2 年次配当，通年，必修 2 単位）において，大学生として，高度な専門知識と確かな学力を身につけるためのアカデミックスキルを身につけることを目指し，上述のスキルの基礎となる文献研究の方法やレポート作成法などを教授し，スキル育成の教育効果があった。 「人間教育実践力開発演習Ⅰ」（平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育実践力開発演習Ⅰ」（専門科目，1 年次配当，通年，選択 2 単位）において，教育・保育実践力を高めるために，地域園・学校へのボランティアに参加するための事前学習や行事参加を通して，幼児教育・保育における今日的課題について理解を深め，ボランティアに参加するまでの課題を各自が明確にすることができた。 「人間教育実践力開発演習Ⅱ」（平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育実践力開発演習Ⅱ」（専門科目，2 年次配当，通年，選択 1 単位）において，教育・保育実践力を高めるために，地域園・学校へのボランティアに週 1 回継続的に参加することで，幼児教育・保育における今日的課題について理解を深め，教育・保育実習に向けた課題を各自が明確にすることができた。 「保育の心理学Ⅰ」（平成 30 年 4 月～平成 30 年 9 月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育の心理学Ⅰ」（専門科目，3 年次配当，半期，保育士資格必修 2 単位）において人間の様々な諸側面の生涯発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に人間のライフサイクルや発達段階及び発達課題について理解させる教育効果があった。
---------------------------------------	--	---

		「保育の心理学Ⅱ」(平成30年10月～平成31年3月) 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育の心理学Ⅱ」(専門科目, 3年次配当, 半期, 保育士資格必修1単位)において幼児の心的理解の方法に関する内容の授業を行い, それによって, 学生に子どもの発達や知的能力, 性格に関するアセスメント及び保育への貢献について理解させる教育効果があった。
5. 平成26年度奈良学園大学公開講座の登壇	平成26年7月12日	平成26年度奈良学園大学公開講座に登壇し, 講演を行った。 本講演の内容は, 1) 様々な学際領域から「居場所」をどのように捉えられているのか, 2) 実証的研究から見えてくる「居場所」とは何なのか, 3) 「居場所」づくりにはどのような視点が重要なのか, の3点であった。
6. 奈良女子大学文学部人間科学科における教育実績	平成27年10月～平成28年3月	「青年心理学特殊研究」(平成27年10月～平成28年3月) 奈良女子大学文学部の「青年心理学特殊研究」(専門科目, 2年次配当, 半期, 選択2単位)において, 生涯発達に関する理論を理解し, 青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について授業を行い, それによって, 学生に自らのライフを振り返り展望しながら論理的に思考する教育効果があった。
7. 大和高田市立看護専門学校看護学科における教育実績	平成28年4月～現在に至る	「人間の心・精神」(平成28年4月～現在に至る) 大和高田市立看護専門学校看護学科の「人間の心・精神」(1年次配当, 半期, 1単位)において, 多岐にわたる心理学の領域, 研究及び歴史についての基礎的知識を学んだ。本講義によって, 心の働きやシステムについて理解を深め, 心理学の歴史や研究における知識を得られる教育効果があった。
8. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成28年10月3日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として, 「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には, 「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し, 大人が子どもにどのようにかわるのが適切な方法か, ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって, 子どもへの適切なかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
9. 一般社団法人日本精神科看護協会品川研修センターにて教育理論研修会(講義内容:「教育心理―青年心理―」)の講師	平成28年11月15日	一般社団法人日本精神科看護協会品川研修センターにて教育理論研修会「教育心理―青年心理―」の講師を務めた。内容は, 青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について理解を深めた。本講義によって, 青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
10. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」の講師	平成29年9月5日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は, 青年期を中心とした生涯発達理論, 認知発達過程, 学習理論, 学習意欲と動機づけ, カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって, 指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。

11. 一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会（講義内容：「教育心理－青年心理－」）の講師	平成 29 年 9 月 25 日	一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会「教育心理－青年心理－」の講師を務めた。内容は、青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について理解を深めた。本講義によって、青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
12. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成 29 年 10 月 3 日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として、「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には、「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し、大人が子どもにどのようにかかわるのが適切な方法か、ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって、子どもへの適切ななかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
13. 教員免許更新講習（選択領域）講師	平成 30 年 8 月 16 日	奈良学園大学にて幼稚園教諭対象の教員免許更新講習において、「環境を踏まえた子どもの育ちと保育内容の充実」の小テーマとして、幼稚園の終わりまでに育ってほしい「10 の姿」と児童期以降のつながりについて、発達心理学の観点から講義を行った。園児に現在どのような力が育ち、今後伸びていくのかを「10 の姿」から考えるワークを行い、乳幼児期の学びが児童期以降の発達につながることを理解するという教育効果がみられた。
14. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」の講師	平成 30 年 9 月 3 日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は、青年期を中心とした生涯発達理論、認知発達過程、学習理論、学習意欲と動機づけ、カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって、指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
15. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成 30 年 10 月 4 日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として、「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には、「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し、大人が子どもにどのようにかかわるのが適切な方法か、ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって、子どもへの適切ななかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 修士（教育学）	平成 13 年 3 月	奈良教育大学 第 817 号 「修士論文題名：自己及び他者との関係における『居場所』の個人差」
教員免許	平成 13 年 3 月	中学校教諭専修免許状（社会）取得（学校心理学付記） （平 12 中専修第 20 号、奈良県教育委員会）
学校心理士	平成 16 年 11 月	第 82689 号 （平成 26 年 12 月更新、令和元年 12 月まで有効）
2 特許等		（な し）
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1. 教務全般の企画・運営	平成 13 年 4 月～平成 26 年 3 月	奈良保育学院にて教務係としてカリキュラム・時間割・年間行事の編成、成績管理、入試業務、奨学金業務、紀要編集委員その他関連する事務処理を主任の立場で活動した。

2. 学年担当（担任）	平成 13 年 4 月～平成 26 年 3 月，平成 29 年 4 月～現在に至る	奈良保育学院（平成 13 年 4 月～平成 26 年 3 月）及び奈良学園大学（平成 29 年 4 月～現在に至る）において学年担当（担任または副担任）を受け持ち，学生の日常における生活指導，学校心理学の見地に基づく成績不振者への学業指導及び学校不適応を訴える学生及びその保護者の相談等を受け持った。
3. 学生自治会顧問	平成 14 年 4 月～平成 26 年 3 月	奈良保育学院学生自治会の顧問として学生主催の新入生歓迎会，学院祭（体育祭・文化祭），送別会等の企画運営を監督した。
4. 進路指導	平成 16 年 4 月～平成 26 年 3 月	奈良保育学院の進路担当教員と連携して進路指導の科目（「課題研究」）を立ち上げ，1 回生から 2 回生にかけて継続的に進路活動を行う体制を築いた。
5. 広報・募集活動	平成 20 年 4 月～平成 26 年 3 月	奈良保育学院の募集活動の一環として業者と連携してパンフレット・ポスター・ホームページ作成にかかわり，他教員と分担して近隣の高等学校へ訪問し広報活動を行った。
6. 広報委員会における活動	平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月	奈良学園大学にて広報委員会に所属し，委員として大学案内の内容，オープンキャンパスの内容企画，今後の広報活動及び戦略について検討を行った。
7. 教務委員会における活動	平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月，平成 31 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学にて教務委員会に所属し，委員として G P A 基準，試験要領の検討，追・再試験に関する取り扱い，入学前他大学等既修得単位の認定，保育士資格取得に関する整備，卒業論文にかかる諸規定の整備について体制を築いた。
8. 教職・保育課程委員会における活動	平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月	奈良学園大学にて教職・保育課程委員会に所属し，委員として介護等体験の指導，教育実習の訪問指導を行った。
4 その他		
1. 平成 24 年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第 51 回研究大会活動	平成 23 年 6 月～平成 24 年 9 月まで	平成 24 年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第 51 回研究大会委員に任命され，シンポジウム分科会の運営補助に携わった。
2. 関西心理学会事務局及び常任委員会活動	平成 25 年 4 月～現在に至る	関西心理学会事務局及び常任委員に任命され，平成 29 年 3 月まで学会事務局及び常任委員会の運営に携わった。また，平成 27 年 4 月より幹事に就任し，平成 29 年 3 月まで事務局の取りまとめを行った。また，平成 29 年 4 月より監事に就任し，会計監査に携わっている。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－	共著	平成 23 年 3 月	ナカニシヤ出版	胎児期から老年期まで生涯発達の段階ごとに、各章で発達のとらえかた、発達心理学の基礎的な内容を解説し、人生の節目に出逢いと別れを繰り返しながら対人関係が成長していく過程が紹介されている。 A 5 判 全 237 頁 編 者：浜崎隆司・田村隆宏 共著者：荒木美代子・岡村季光・岡本かおり・加藤孝士・澤田友希・田村隆宏・朴 信永・浜崎隆司・丸山（山本）愛子・森田泰介・森野美央・八島美菜子・湯澤美紀（50 音順） 本人担当部分：「第 3 章第 2 節 拡がる子どもの世界」（pp. 67-79.）の部分を単著。 第 1 にことばの発達において、ことばを話し始める前に乳児が他者に意思疎通を図ろうとする具体例、初語が出てからの発語量とことばの理解度の関係、2 語文の習得を始めとした文法の習得、文字の読み書きを習得しことばを楽しむ幼児の様子を紹介した。第 2 に遊びの発達において、乳幼児における遊びの重要性、乳児自身の体を用いた遊び、表象機能の発達に伴う見立て・ふり遊びとその具体例、ひとり遊びから集団遊びへの移行と特徴を紹介した。
2. 教育フォーラム第 55 号「実践的思考力・課題解決力を鍛える：PISA 型学力をどう育てるか」	共著	平成 27 年 2 月	金子書房	実践的な諸課題に向けての解決をどう図っていくのか、そのために必要となる思考力や問題解決力をどのような形で鍛えていくか、実りある着実な学習活動の展開を具体的に提案している。 A 5 判 全 160 頁 編 者：梶田叡一 共著者：伊崎一夫・井上信子・大内善一・岡村季光・梶田叡一・加藤 明・金澤孝夫・鎌田首治朗・蔵あすか・萩原憲二・藤井幸一・藤田英治・宮岸 洋（50 音順） 本人担当部分：「一人ひとりの「居場所」をどうつくるか」（pp. 111-121）の部分を単著。 これまでの先行研究から居場所を「個人性－社会性」「主観性－客観性」の軸で捉えることが可能であることを示した。また、実証的研究の知見から「居場所がない」と感じる者に精神的な安定・安心を感じるような経験を提供すること、居場所感を毎日感じられる経験を積み重ねること、大人や仲間の支えにより成長・自立を図ることが重要であることを示唆した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 教育フォーラム第 60 号「深い学びのために：アクティブ・ラーニングの目指すもの」	共著	平成 29 年 8 月	金子書房	学習指導要領にある「深い学び」は、いまだ焦点が拡散している印象がある。実践的な指導を提案しながら、基本ポイントを押さえ明確にしている。 A 5 判 全 148 頁 編 者：梶田叡一 共著者：伊崎一夫・石森広美・大畑健実・岡村季光・梶田叡一・鎌田首治朗・金山憲正・後藤紗貴・菅井啓之・善野八千子・瀧明知恵子・古川 治・松井典夫・湯峯 裕 (50 音順) 本人担当部分：「震災における教員の役割を考える」(pp. 125-134) の部分を執筆。 本稿では避難所と学校の関係，避難所に携わる教員に焦点をあて，考察を行った。具体的には，震災時における避難所で教員は責任感や使命感をもって活動している一方，自らを省みず活動することによる教員自身の心身不調の問題を指摘した。また，熊本地震において被災した学校に勤務する教員と非災害地域の教員を比較した調査を実施した。その結果，熊本の教員が一連の熊本地震に対する長期のストレス状況にあり，エネルギーの枯渇に伴う意欲低下，自らの存在価値を見出せない教員が少なからずいることを指摘した。最後に，提言として，1) 学校が平時より地域と連携することの重要性，2) 避難所における教員のリーダーシップの発揮と自治組織への移譲，3) 教員のメンタルヘルスへの支援を挙げた。
4. よくわかる！教職エクササイズ 教育心理学	共著	平成 30 年 4 月	ミネルヴァ書房	簡潔な解説で，教育心理学の基礎理論からその教育実践への応用まで学べる。授業で使いやすいよう，ディスカッション課題やワークなどの演習課題，資料図版を豊富に掲載。ノートページには書き込みの課題を提示しており，学生が自ら考え，つくりあげることができる。各講の最後は教員採用試験に掲載している。 B 5 判 全 216 頁 編 者：田爪宏二 共著者：今林俊一・梅本貴豊・岡村季光・下木戸隆司・滝口圭子・立元 真・原口 恵・増田優子・森田健宏 (50 音順) 本人担当部分：「第 4 講 心身の発達③青年期以降」(pp. 50-60.) 部分を単著。青年期における身体発達，対人関係の発達，発達主題（アイデンティティの統合）についてそれぞれ説明を行った後，成人期以降の発達について紹介した。また，「青年期」の誕生についても，歴史的背景を中心に説明を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1. 青年期における『居場所』の射程	単著	平成 22 年 12 月	奈良保育学院研究紀要第 14 号 pp. 29-38.	本論文では居場所における字義的定義から一般的に居場所がどう捉えられているのかを概観し，「居場所がない」という表現と関連が深いとされる不登校の問題を考察した。さらに居場所研究における実証的研究から，今後居場所を理解するための枠組みと可能性について展望した。具体的には近年注目されている「ひとりで過ごす居場所」や愛着（アタッチメント）との関連が考えられる。
2. 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究 —鑑賞者の反応に関する検討—	共著	平成 22 年 12 月	奈良保育学院研究紀要第 14 号 pp. 7-14.	身体表現作品を発表した後に学生にふりかえりを行う中で，鑑賞者の反応に関する検討を 3 か年度にわたり行った。その結果，1) おおよそ 7 割の学生が子どもの反応を見ていた，2) 反応は想定内の反応と想定外の反応があったが，いずれも積極的な意味で捉えていた，3) 幼稚園・保育園児は素直な反応を出しているのに対し，中学生は自意識を感じ素直な反応が乏しいなど，年齢により反応の出し方に差異があることを感じていたが，学生側は発達段階による反応の差異を受け入れていることが伺えた。 共著者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
3. 平成 19 年度熊本市内の保・幼・小・中学校保護者を対象とした児童虐待防止における意識に関する調査研究 —就労有無との関係—	共著	平成 22 年 12 月	奈良保育学院研究紀要第 14 号 pp. 15-22.	第 1 筆者が平成 19 年度に熊本市内の保・幼・小・中学校保護者を対象とした児童虐待に関する保護者の意識調査を実施。第 2 筆者が保護者の意識傾向について分析した。その結果，1) 育児疲れ・孤独感・相談相手の有無と子どもへの虐待懸念の間に関連がみられた。2) 就労有無と子どもへの虐待懸念の間に関連がみられた。上述の結果から，社会とのつながりが希薄になっている保護者へのサポートの必要性が示唆された。 共著者：谷口 卓・岡村季光 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当
4. 中学校の職場体験が現在の進路決定に及ぼす影響 —保育学生と一般学生の比較から—	単著	平成 24 年 12 月	奈良保育学院研究紀要第 15 号 pp. 65-69.	中学校時のキャリア形成を探索的に研究するため，近年さかんに行われている中学校時における職場体験の有無・内容が現在の進路決定に及ぼした影響を保育を専攻する学生（保育学生）と他を専攻する学生（一般学生）で比較検討した。その結果，現在の専攻を考えた時期は一般学生より保育学生の方が早い傾向にあり，保育学生の方が一般学生と比して，現在考えている進路内容に中学校時の職場体験の影響があると自覚する者が多いことを見いだした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究 ― 学年間における相互評価に関する検討―	共著	平成 24 年 12 月	奈良保育学院研究紀要第 15 号 pp. 51-55.	2 回生が授業で創作した身体表現作品（以下，作品）を発表した後に下級学年・当該学年の各学生が作品をどのように捉えているのか比較検討した。その結果，両回生共通して「動き」が印象に残る項目の上位に位置づけられていた。また，2 回生の方が経験を積み重ねている分，作品に対する客観的な視点が養われていることがうかがえた。 共著者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
6. 「居場所」（安心できる人）とひとりで過ごす感情・評価の関係	単著	平成 26 年 9 月	奈良学園大学研究紀要第 1 号 pp. 191-197.	安心できる人の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，“自分ひとり”の安心感を高く評定するものは，ひとりで過ごすことに肯定的な捉え方をしていることが示唆され，ひとりで過ごす感情・評価との関係が明らかになった。これはひとりで過ごすことに必ずしもネガティブな感情を抱いていないことを示唆するものであった。
7. 保育学生におけるコラージュ作品の形式分析及び作品印象に関する基礎的研究	共著	平成 26 年 12 月	奈良保育学院研究紀要第 16 号 pp. 103-110.	本研究の目的は，コラージュ作品の表現特徴を多方面にわたり分析し，さらに作品印象に関してテキストマイニングを用いて定量的に検討することであった。保育専門学校に所属していた 1 回生 367 名を対象に検討した結果，先行研究とほぼ合致する結果が得られ，コラージュ療法における表現特徴が，心理臨床のアセスメントに有益な指標をもたらすであろうことが示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
8. コラージュ作品と性格特性の関係：表現特徴とエゴグラムパターンの検討（査読付）	共著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究第 2 号 pp. 157-162.	本研究の目的は，性格特性とコラージュ作品の関連を検討することであり，387 名の専門学校生にエゴグラム（TEGII）及びコラージュ作品制作を実施した。その結果，エゴグラムパターンにより切片数，余白，作品の満足度に違いがみられることが明らかになった。すなわち，1) 切片数が多い者は心的エネルギーが高い性格特徴である可能性が，2) 余白が多い者は心的エネルギーが低く，依存的で気分・感情の不安定さを伴う性格特徴である可能性が，3) 満足度が低い者は自己否定の構えを持っている可能性が，それぞれ示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9. 青年期後期における新旧の同性友人への安心感と学校適応感の関連	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学研究紀要第 3 号 pp. 229-233.	本研究の目的は友人関係機能の「安定化機能」に着目し，一緒にいて「安心できる」という本人の主観的感情を手がかりにして友人を想起させ，新旧の同性友人の選択有無と現在の学校適応感との関連を検討することであった。新旧の同性友人の選択有無により群分けを行い，学校適応感との関連を検討した結果，新友人を選択した者が，旧友人のみを選択した者あるいはいずれも選択しなかった者に比して，現在の学校適応感が高かった。本研究結果は新旧友人関係が学校適応感に影響を及ぼす可能性を示唆するもので，今後の学校適応を考える上で意義のあるものと考えられた。
10. 「居場所」(安心できる人)を規定する要因 ―成人愛着スタイルによる検討― (査読付)	共著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究第 3 号 pp. 175-180.	本研究は対人関係の表象として挙げられる愛着スタイルに着目し，安心できる人の程度の評定に与える影響を検討した結果，男子において安定型とアンビバレント型が，女子においてアンビバレント型と回避型が予測変数として有意であることが明らかとなった。本研究の結果は，居場所によって愛着スタイルが安心できる程度に及ぼす効果が異なることを示している。それ故，安心できる程度を適応の指標とした場合には，愛着スタイルが適応に及ぼす効果に対して，居場所が調整変数として機能したことが示唆された。 共著者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
11. 「居場所」(安心できる人)を規定する要因 ―ひとりで過ごす感情・評価及び成人愛着スタイルによる検討―	共著	平成 28 年 11 月	奈良教育大学紀要第 65 巻 1 号 (人文・社会) pp. 27-34.	本研究は，対人関係の表象として挙げられるアタッチメントのパターンである愛着スタイルに着目し，「居場所」における安心できる程度の評定値，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果，安心できる人を規定する要因として，男女ともに“自分ひとり”は“孤独・不安”，“母親”は“見捨てられ不安”がそれぞれ予測変数として有意であった。また，“現学校以降の友人”は男子が“親密性の回避”，女子は“見捨てられ不安”がそれぞれ予測変数として有意であった。 共著者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12. 保育者の子育てに関する一考察 ―わが子の子育ての悩みに注目して―	共著	平成 29 年 3 月	奈良学園大学研究紀要第 6 号 pp. 115-124.	本研究では，第 1 に，現代の保育者がどのような子育ての悩みがあるのかを明らかにすること，第 2 に，保育者の子育てに関する悩みと，保育者としてのアイデンティティ形成，パーソナリティ，職務についての認識，職業観との要因との関連について検討した。その結果，各変数は年齢及び保育者歴による影響が考えられたため，両者の要因を統制した偏相関係数を子の有無別で算出し検討した。子のいない者は，子育ての経験のなさが自信のなさにつながっている可能性がある一方，保育者として誇りを持っている者は，他者から認められることが支えになっていることが考えられた。また，子のいる者は，子育て経験が自らの子育て経験が保育者としての誇り等とつながっていることが考えられる一方，保育者であることに迷いや戸惑いを感じている者は，アイデンティティの揺らぎを感じていることがうかがえた。 共著者：岡村季光・間井谷容代・谷本一榮 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当
13. 対人関係が「居場所」（安心できる人）に及ぼす影響 ―友人関係及び家族関係による検討―	共著	平成 29 年 3 月	奈良教育大学次世代教員養成センター紀要第 3 号 pp. 83-87.	家族並びに友人への親和欲求が，居場所（安心できる人）評定に及ぼす影響を検討した。その結果，1) 男女ともに，“父親”，“母親”及び“きょうだい”と家族との親密性は中程度の正の相関であった。2) 男子において，“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”と家族との親密性，“父親”“きょうだい”及び“現学校以前の友人”と友人との親密性はいずれも中程度の正の相関であった。一方，友人との親密性において，男子は“現学校以前の友人”と中程度の正の相関であったのに対し，女子は“現学校以降の友人”と中程度の正の相関であった。3) “父親”，“母親”及び“きょうだい”は男女ともに，家族との親密性が予測変数として有意であった。友人においては，“現学校以前の友人”において，男女ともに友人との親密性が予測変数として有意であった。一方，“現学校以降の友人”においては，女子のみ有意であった。 共著者：岡村季光・豊田弘司・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14. 英語スピーキングに対する不安尺度作成－小学校英語の教科化に向けて－	共著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学研究紀要第 7 号 pp. 67-74.	大学生を対象とした英語スピーキング不安の尺度作成を行った。教職課程生の英語力でも特に必要とされているのがスピーキング力だと考えられるからである。Horwitzetal (1986) の FLCAS (the Foreign Language Classroom Anxiety Scale) からスピーキング不安に関係する項目を抜粋し、情動的反応などの日本人の特性を踏まえた項目を筆者らが付け加えた。結果として、現在のスピーキング不安では 13 項目が、将来の小学校教員としてのスピーキング不安では 15 項目が、信頼性と妥当性を得た尺度として残された。また、英語スピーキング不安尺度の妥当性を検討する段階において、英語学習者が英語スピーキング時の「情動的反応性」を克服し、英語スピーキングに対する「自信」をつける英語授業の必要性が示唆された。 共著者：熊田岐子・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
15. 学生の外的要因と内的要因に着目する「外国語の理解」「外国語指導法」に関する一考察	共著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学研究紀要第 8 号 pp. 115-124.	本研究は、小学校に「外国語活動」「外国語」が導入されることを見据え、学生の外的要因（英語運用力・授業力）だけでなく、内的要因（自尊感情の低さ・他者理解の必要性・情動的反応性の克服）にも着目した研究である。本稿では、熊田・岡村 (2017) において示唆された英語スピーキング不安と自尊感情の関連について検討を行った。結果として、対人不安傾向尺度の下位尺度である「情動的反応性」が現在の英語スピーキング不安に有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。また、将来の英語スピーキング不安得点については「情動的反応性」に加え、「自尊感情」も有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、「自尊感情」と将来の英語スピーキング不安には「情動的反応性」が媒介する間接効果も見出された。上述の事象を克服するために、近藤 (2010) の「基本的自尊感情を育む共有体験」に着目すること、大学カリキュラムマネジメントにより他教科と連携することを提案した。 共著者：熊田岐子・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
16. 「居場所」(安心できる人)を規定する媒介要因の検討－“自分ひとり”で過ごす居場所に注目して－	単著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学研究紀要第 8 号 pp. 115-124.	本研究の目的は、居場所（安心できる人）の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価を測定し、安心できる人を規定する要因に媒介要因が介在している可能性を検討することであった。大学生 260 名に調査を行った結果、自分ひとりの居場所を志向する要因は、ひとりで過ごすことによる充実感や満足感によって規定されており、さらに両者の関係にはひとりで過ごすことへの孤独感や不安感のなさが媒介していることが明らかになった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17. 大学における教学支援体制の運営に関する一考察—キャリア教育とキャリア支援の連携に着目して—	共著	平成 30 年 7 月	人間教育第 1 巻第 5 号 pp. 123-141.	本稿では、大学における教学支援体制の運営について、特にキャリア教育とキャリア支援の教学支援の連携がどのように行われているかに着目し、3 大学（学習院大学、文教大学、昭和女子大学）の視察を手掛かりとして考察することを目的としている。結果として、学習院大学では、教学部門と支援部門の連携体制の確立はされていなかったが、大学の教育理念や方針を取り入れたキャリアセンター事業計画があり、また、就職活動に関し、OB・OG による在学生支援体制が確立されていることが特徴であった。文教大学では、中期経営計画を立て、教学部門と経営部門がビジョンを共有し、計画→実行→評価→改善の PDCA サイクルの確立が行われていた。昭和女子大学ではキャリアデザイン委員会を設置し、全学横断型組織を確立し、教学部門と支援部門の有機的連携が確立されていた。 共著者：岡野聡子・岡村季光・オチャンテ 村井 ロサ メルセデス 本人担当部分：上述の内、文教大学に関する部分（pp. 127-132）を担当
18. 育成したい「学生像」の明確化、能力指標構築の試み—奈良学園大学人間教育学部を事例として—	共著	平成 30 年 9 月	人間教育第 1 巻第 7 号 pp. 185-198.	本稿では、我が国における「これから求められる力」に関する能力概念の整理をした上で、奈良学園大学人間教育学部を事例として、「育成したい学生像」の能力指標を提示することを目的としている。新学習指導要領の完全実施や大学入学共通テストの導入などにより、2020 年に向けた教育改革が粛々と進行する中、大学教育にも大きな影響があると予想される。本稿では、第 1 に、社会から求められる能力概念の整理と学部特性を整理し、第 2 に AP、CP、DP から育成したい学生像の能力項目の抽出を行い、第 3 に能力指標を提示した。能力指標作成にあたっては、①測定される側の発達水準を考慮すること、②人間教育のあり方や目指す方向性を能力指標に反映させること、③能力の「芽生え」（ショプラー；2007）に注目するという観点を提示した。 共著者：岡野聡子・岡村季光・伊崎一夫 本人担当部分：上述の内「奈良学園大学人間教育学部における「育成したい学生像」の能力指標の構築」に関する部分（pp. 192-196）を担当

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
19. 災害時における教師の職業的役割―「使命感」と「多忙感」に着目して― (査読付)	共著	平成 30 年 9 月	教師学研究第 21 巻第 2 号 pp. 13-21.	本研究では、災害時において、その教師の「職業的使命感」は統制の効かない状況における「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そして、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし、非災害地域の教員の「使命感」「多忙感」との比較調査を行うことによって、災害時における教師の職業的使命感の実態を明らかにすることを目的とした。そこで本研究では、熊本地震において被災した学校に勤務する教員 26 名と、非災害地域として、関西圏の小学校教員 47 名の計 73 名との比較アンケート調査を実施した。その結果、使命感に関しては、被災の有無にかかわらず高い使命感を有している反面、被災を経験した教員において、多忙感や内的統制感の高さが、自らの存在価値や意欲の高まりにつながっていない実態が明らかになった。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
20. ドリンク剤パッケージにおける色イメージに関する探索的研究―健康不安及び体調の差異による検討―	共著	平成 31 年 3 月	人間教育第 2 巻第 2 号 pp. 45-50.	本研究では、健康不安及び体調の差異によるドリンク剤パッケージの色イメージについて検討を行うことを目的であった。大学生及び登録販売者を対象に調査を行った結果、以下の点が明らかになった。すなわち、1) 健康不安に関する調査では、大学生と登録販売者間に回答の差異は見いだせなかったが、直近 1 か月の体調に関する調査では、総じて大学生の方が登録販売者と比して体調不良を示す得点が高かった。2) ドリンク剤色イメージ評価において、目を引く色は青色、滋養強壮は金色、美容及び食物繊維は黄色において有意な差を見だし、いずれも健康不安のない群がある群と比して選択率が高かった。3) 直近 1 か月の体調を独立変数、各項目における色選択を従属変数とする判別分析を行った結果、大学生において、眠気覚ましは体調不安、体調の悩み、ストレス、疲れの変数が黒色の選択に、登録販売者において、美容は体調不安、体調の悩み、ストレス、疲れの変数が青色の選択に、それぞれ有意な影響を及ぼしていた。 共著者：岡村季光・多根井重晴・増田善昭 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21. 英会話授業における「自尊感情を高める共有体験」に関する調査－学生の内的要因に着目して－	共著	平成 31 年 3 月	奈良学園大学研究紀要第 10 号 pp. 55-61.	本稿では、熊田・岡村 (2018) で着目した「基本的自尊感情を育む共有体験」(近藤、2010) を応用し、英語スピーキングの共有体験に関する調査を行った。「自尊感情を育む共有体験」として、英語スピーキングを場面と定め、他者とのコミュニケーションにおける英語スピーキング不安を検証した。具体的には、ペアワーク、グループワーク、クラス発表を場面として設定した。考案した項目を因子分析した結果、ペアワーク、グループワークにおいては「肯定承認」、「安心」、「忌避」、クラス発表においては「肯定承認」、「不得意」の構造を見いだした。さらに、英語スピーキング不安、対人不安傾向、自尊感情、自己受容、他者受容との関連を検討し、他者からのフィードバックが得られるグループワークが有効である可能性が示唆された。今後の展望として、他者からのフィードバックとして、信頼する人、すなわち教師がすべきフィードバックについて検討することが課題として残された。 共著者：熊田岐子・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
22. 居場所（安心できる人）の評定と自己－他者認識：協同作業認識との関連	単著	平成 31 年 3 月	奈良学園大学研究紀要第 10 号 pp. 55-61.	居場所（安心できる人）の評定とひとりで過ごす感情・評価、友人との関係の取り方及び協同作業認識との関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって自分群、全体高群、全体低群の 3 群に分け、安心できる人の評定による群ごとに、ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度、友人関係尺度と協同作業認識尺度の各尺度得点の相関係数を算出し検討を行った。その結果、1) 安心できる人の評定が全体的に低い者は、協同作業への肯定的な認識が低く、他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は、協同作業の必要性を低く感じている傾向にあった。2) 相関係数の同等性の検定において、友人関係尺度における“傷つけることの回避”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”及び“互恵懸念因子”に有意差がみられた。Ryan 法による多重比較の結果、“協同効用因子”において全体高群と比して全体低群の方が“傷つけることの回避”との正の相関が強く、“互恵懸念因子”において全体高群と比して全体低群及び自分群の方が負の相関が強かった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他) 「学会抄録」 1. 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究 ―鑑賞者の反応に関する検討―	単著	平成 21 年 5 月	日本保育学会第 62 回大会発表論文集 p. 287. (千葉大学)	身体表現作品を発表した後に学生にふりかえりを行う中で、鑑賞者の反応に関する検討を行った。その結果、1) おおよそ 7 割の学生が子どもの反応を見ていた、2) 反応は想定内の反応と想定外の反応があったが、いずれも積極的な意味で捉えていた、3) 年齢により反応の出し方に差異があることを感じていたが、発達段階によりその差異を受け入れていることが伺えた。
2. 青年期女子における「居場所」(安心できる人)の選択 ―家族・友人との親密性及び関係的自己の可変性との関係から―	単著	平成 22 年 3 月	日本発達心理学会第 21 回大会発表論文集 p. 348. (神戸国際会議場)	青年期女子における安心できる人の評定と家族・友人との親密性及び関係的自己の可変性の関係を検討した。その結果、自己の否定的変化意識と安心できる人の評定に関連がみられた。
3. 「居場所」(安心できる人)の評定と対人態度の検討 ―ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルとの関連から―	単著	平成 24 年 3 月	日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集 p. 655. (名古屋国際会議場)	「居場所」における安心できる程度の評定、ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果“自分ひとり”の評定と各尺度間に関連が見いだされた。
4. 本学院における表現活動発表会への取り組み(2)ーオペレッタ(身体表現作品創作)に注目してー	共著	平成 24 年 9 月	全国保育士養成協議会第 51 回研究大会研究発表論文集 pp. 494-495. (京都文教大学、京都文教短期大学)	2 回生が授業で創作した身体表現作品(以下、作品)を発表した後に下級学年・当該学年の各学生が作品をどのように捉えているのか比較検討した。その結果、両回生共通して「動き」が印象に残る項目の上位に位置づけられていた。また、2 回生の方が経験を積み重ねている分、作品に対する客観的な視点が養われていることがうかがえた。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
5. 青年期後期における危機的場面の対人志向 ―成人愛着スタイルとの関連―	単著	平成 24 年 11 月	日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集 p. 610. (琉球大学千原キャンパス)	危機的場面における対人志向評定及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果、危機的場面において男女とも“自分ひとり”の評定が低くなったことを見だし、状況により「安心できる人」が変わる可能性が示唆された。また、“自分ひとり”の評定と「親密性の回避」は弱い正の相関、他者への対人志向評定と「親密性の回避」はいずれも弱い負の相関であった。
6. 青年期女子における「居場所」(安心できる人)の評定ー抑うつに耐える力との関連ー	単著	平成 26 年 11 月	日本教育心理学会第 56 回総会発表論文集 p. 486. (神戸国際会議場)	「居場所」(安心できる人)における危機的場面の安心できる程度の評定と抑うつに耐える力の関連を検討した。その結果、“自分ひとり”の評定を高くつけた者は“孤独に耐える力”が高く、“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”の評定を高くつけた者は“不安に向き合う力”が高かった。ひとりの時間を志向しつつ、友人に安心感を持つことで自身の問題を直視し不安に向き合うことが示唆された。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の基礎的研究—ひとりで過ごす感情・評価の関係から—	単著	平成 27 年 3 月	日本発達心理学会第 26 回大会発表論文集 P5-045. (東京大学)	中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果、平常時において“自分ひとり”，“子ども”，“孫”という場面において評定を高くつけた者は，“孤独・不安”において、得点が高かった。また、危機的状況においては“自分ひとり”でいる場面で評定を高くつけた者のみ“孤独・不安”得点が高かった。特に中年期以降においては，“自分ひとり”のみならず，“子ども”“孫”の存在が「居場所」に影響を及ぼす可能性が示唆された。
8. 「自分ひとりの居場所」の志向に関する検討 —「安心できる人」評定、ひとりで過ごす感情・評価及び協同作業認識尺度の関係から—	単著	平成 27 年 8 月	日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集 p. 683. (朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター）)	居場所（安心できる人）の評定、ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び協同作業認識との関連を検討した。その結果、ひとり感情・評価尺度の“孤絶願望”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”に弱い負の相関関係がみられた。また、安心できる人の評定が全体的に低い者は他者との協同作業への肯定的な認識が低く、他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は協同作業の必要性を低く感じている傾向にあることを見いだした。
9. Relationship between Ibasho “Person who eases your mind” and sense of contribution in late adolescence (青年期後期における居場所（「安心できる人」）と貢献感の関係)	単著	平成 28 年 7 月	Poster presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan (パシフィコ横浜)	大学生に「安心できる人」の評定をクラスター分析により検討した結果、安心できる評定の高低により 4 群に分類できることを見いだした。さらに、安心できる人の評定が低い群は所属している集団への貢献感が他の群と比べて有意に低かった。
10. The effects of power and grit on satisfaction and apathy in academic settings (影響力, grit 及びアパシーが大学生活に与える影響)	共著	平成 28 年 7 月	Poster presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan (パシフィコ横浜)	本研究は、影響力, grit 及びアパシーが大学生活にどのような影響を与えているのかを検討した。将来展望を明確に持っているか否かで群分けを行い、重回帰分析を行った結果、将来展望を明確に持っている者において影響力, grit 及びアパシーが大学生活に影響を与えていることが明らかとなった。 共同発表者：高木悠哉・赤間健一・岡村季光 本人担当部分：データ分析結果・考察部分を担当
11. 「居場所」（安心できる人）を規定する媒介要因の検討—“自分ひとり”の居場所に注目して—	単著	平成 28 年 10 月	日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集 p. 451. (サンポートホール高松・かがわ国際会議場)	本研究は、安心できる人を規定する要因に媒介要因が介在している可能性を検討することを目的とした。自分ひとりの居場所を志向する要因は、ひとりで過ごすことによる充実感や満足感によって規定されており、さらに両者の関係にはひとりで過ごすことへの孤独感や不安感のなさが媒介していることを明らかにした。
12. 居場所（安心できる人）の評定と貢献感の関連	単著	平成 30 年 3 月	日本発達心理学会第 29 回大会発表論文集 p. 655. (東北大学川内北キャンパス)	大学生に「安心できる人」の評定をクラスター分析により検討した結果、安心できる評定の高低により 3 群に分類できることを見いだした。さらに、安心できる人の評定が低い群は所属している集団への貢献感が他の群と比べて有意に低かった。本研究における「安心できる人」分類において、特に家族に関するクラスター得点差は他と比して顕著であったことから、家族に対する安心できる感覚の差が貢献感の得点差に影響を及ぼしている可能性が考えられた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13. 保育者の子育てに関する探索的研究	共著	平成 30 年 5 月	日本保育学会第 71 回大会発表要旨集 p. 659. (宮城学院女子大学)	本研究では、保育者の子育てについて自由記述により探索的に検討することを目的とした。子育てをしながら仕事をするについて、「大変」「ポジティブ」「時間」「協力」の出現頻度が高く、保育者と子育ての両立が大変である一方、ポジティブに受けとめていることがうかがえた。また、他者の協力により、子育てと仕事の両立が維持されていることが推察された。子の担任やママ友に自身が保育者である旨を積極的に告知することはないという回答が多く、条件付で告知をする姿勢がうかがえた。 共同発表者：岡村季光・間井谷容代 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当
14. 居場所と「個」及び「関係性」の観点にもとづくアイデンティティの関連	単著	平成 31 年 3 月	日本発達心理学会第 30 回大会発表論文集 p. 305. (早稲田大学戸山キャンパス)	本研究では、居場所と「個」及び「関係性」の観点にもとづくアイデンティティとの関連を検討することを目的とした。その結果、全般的には「個」のアイデンティティよりも「関係性」のそれの方が居場所尺度との関連は強い傾向であった。また、男女間で相関係数の差の検定を行った結果、社会的居場所のうち、誰かから承認されている感覚が、「関係性」のアイデンティティ形成につながることを示唆されたが、その傾向は特に男子において顕著であった。
「学会発表」 1. 居場所と適応に関する研究と教育への貢献：居場所と愛着の関係（会員企画 ラウンドテーブル RT5-1 話題提供）	—	平成 24 年 3 月	日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集 p. 63. (名古屋国際会議場)	本ラウンドテーブルでは、居場所の研究者が個々の課題を出し合い、定義や方法論について練り合うとともに、教育への貢献できる研究への方向性を探る意図で企画された。第 3 話題提供者は“安心できる人”の選択または評価と心理的距離及び成人アタッチメントスタイルとの関連に関する研究報告を行った。その後、居場所感の要因検討並びに居場所感を感じられる教育のあり方について討議が行われた。 企画：豊田弘司 話題提供者：豊田弘司・石本雄真・岡村季光・則定百合子
2. 青年期女子における「居場所」（安心できる人）の評価—ひとりで過ごす感情・評価及び関係的自己の可変性との関係から—	—	平成 25 年 11 月	関西心理学会第 125 回大会発表論文集 p. 82. (和歌山大学)	「居場所」における安心できる程度の評価、ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び関係的自己の可変性との関係を検討した。その結果、友人への安心感評価が低いと自己が変化することに対して怖い、嫌だ、うまくできないという思いがやや高まる傾向を見いだした。また、自分への安心感評価が高いと自己が変化することの必要性を感じる等、変化に対して肯定的に捉えていた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3.「自分ひとりの居場所」を志向する要因の検討―「安心できる人」の評定とひとりで過ごす感情・評価及び満たされない自己との関係から―	―	平成26年11月	関西心理学会第126回大会発表論文集 p. 36. (大阪市立大学)	「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって3群に分け、ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び満たされない自己との関係を検討した。その結果，“自分ひとり”に安心できる評定を高くつけた者の中にも，他者への評定を比較的低くつけている者は対人関係に苦痛を感じ，対人交渉の逃避をしていることが示唆された。また，自分だけ，または一部の者のみに安心感の評定を高くつけた者は自他共に安心感の評定が高い者と比して日常生活においての目標に喪失感や停滞感を感じていた。 共同発表者：岡村季光・高木悠哉 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
4. 心理学を学び、研究し、実践する―ライフステージとキャリアパス― (シンポジウム話題提供)	―	平成27年11月	関西心理学会第127回大会発表論文集 p. 9. (関西学院大学)	本シンポジウムでは，心理学関連の大学教員として勤めている話題提供者が，これまでにどのようなキャリアパスを経てきたのか，また，自らのライフステージにおいて，どのような歩みがあったのかをそれぞれ発表した。その後，心理学のキャリアパスとライフステージとの兼ね合いについて率直な意見が交わされた。 話題提供者：大竹恵子・岡村季光・杉若弘子・土肥伊都子 指定討論：小椋たみ子・莊巖舜哉
5.「居場所（安心できる人）の評定と他者認識―友人との関係の取り方と共同作業認識の関連から―	―	平成27年11月	関西心理学会第127回大会発表論文集 p. 42. (関西学院大学)	居場所（安心できる人）の評定，友人との関係の取り方及び協同作業認識との関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって自分群，全体高群，全体低群の3群に分け，安心できる人の評定による群ごとに，友人関係尺度と協同作業認識尺度の各尺度得点の相関係数を算出した。相関係数の同等性の検定を行った結果，友人関係尺度における“傷つけることの回避”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”及び“互惠懸念因子”に有意差がみられた。Ryan法による多重比較の結果，“協同効用因子”において全体高群よりも全体低群の方が“傷つけることの回避”との正の相関が強く，“互惠懸念因子”において全体高群よりも全体低群及び自分群の方が負の相関が強かった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6.「自分ひとりの居場所」の志向に関する検討 ―「安心できる人」評定、ひとりで過ごす感情・評価及び孤独感との関連―	―	平成 28 年 11 月	関西心理学会第 128 回大会発表論文集 p. 35. (京都大学)	本研究では、居場所（安心できる人）の評定、ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び他者とのつながりが感じられているか否かを測定するために孤独感を測定し、三者の関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって全体高群、親群、恋人群、他者低群の 4 群に分け、さらに、ひとり感情・評価尺度の“孤独・不安”得点をもとに、得点の中央値を上回った群を高群、中央値以下を低群に分類した。孤独感尺度得点について、4（居場所）×2（ひとり感情・評価尺度“孤独・不安”得点高群・低群）の分散分析を行った結果、ひとり感情・評価尺度の“孤独・不安”得点低群において、“他者低群”が他の群に比して孤独感得点が高かった。
7. 災害時における教員の職業的役割 ―「使命感」と「多忙感」に着目して―	―	平成 29 年 3 月	日本教師学学会第 18 回大会発表要旨集 pp. 30-31. (早稲田大学所沢キャンパス)	現代の学校教育に関連する諸課題に対する教育現場への期待や責任の増大に伴い、教員の「多忙化」が指摘されている。その一方で、地震災害時に教師は、「多忙感」の一要因である残業の多寡に関わらず、避難所運営に携わるなどの例がある。そこで本研究では、教員の「使命感」と「多忙感」の相関性について、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして、教員への意識調査をもとに検討した。その結果、他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し、熊本自身で被災した教員群にそれらがみられないことから、一連の熊本地震に対する対応の疲労感が高まっていることが背景因子として懸念された。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
8. 居場所（安心できる人）の評定と社会不安及び生活満足感の関連	―	平成 29 年 11 月	関西心理学会第 129 回大会発表論文集 p. 52. (京都橋大学)	本研究では、居場所（安心できる人）の評定、他者からの否定的な評価による不安及び生活満足感を測定し、三者の関連を検討することを目的とした。各場面における「安心できる人」評定得点を用いて、クラスター分析を行った結果、各評定の高低により 4 群に分類することができた。さらに、FNE 短縮版得点（社会的不安得点）をもとに、平均値を上回った群を高群、平均値以下を低群に分類し、4（居場所）×2（社会的不安得点高・低）の分散分析を行った結果、社会的不安得点低群において“全体高群”及び“家族高群”が他群に比して全般的な生活満足感得点が高かった。特に、家族への安心感と他者への否定的評価への不安のなさが全般的な生活満足感の高さにつながったと言え、アタッチメントの影響が示唆された。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
9. ありのままの自分を求めて：グローバル社会と「居場所」（日本心理学会第 82 回公募シンポジウム SS-082）	—	平成 30 年 9 月	日本心理学会第 82 回大会発表論文集 p. 220. (仙台国際センター)	「居場所 (Ibasho)」は日本固有の概念であるが、さまざまな心理学的概念と密接に関連していると考えられる。たとえば、アイデンティティ (Erikson, 1950) は「居場所」との関係性が示唆される。多様な人々が生活する複雑な現代社会において、ありのままの自分を表現でき、ありのままの自分でいられる「居場所」を我々はどのように見つけ出していけるのだろうか。また、アイデンティティと「居場所」はどのような関係にあるのだろうか。本シンポジウムでは、多文化環境のなかで生育・生活する人々を中心に、ありのままに「居場所」をめぐる、(文化的) アイデンティティや「居場所」について議論を行った。 話題提供者：鈴木一代・岡村季光・植松晃子・石橋道子 指定討論：佐野秀樹
10. 新旧友人関係及び学校への認知が現在の居場所感に及ぼす影響—コミュニティ・アイデンティティ及びトポフィリアの視点から—	—	平成 30 年 10 月	関西心理学会第 130 回大会発表論文集 p. 59. (甲南大学)	本研究の目的として、新旧友人関係及び学校への認知が現在の居場所感に及ぼす影響について検討を行った。特に、学校への認知はコミュニティ・アイデンティティ (CI) (野波・加藤, 2009) 及びトポフィリア (TP) (Tuan, 1974) に着目して検討を行った。その結果、高等学校までの友人が“親友”として認知されやすい傾向にあり、過去に所属していた CI 及び TP を重視する傾向がみられた。特に現在の“承認的居場所”の感覚は、新旧友人及び過去・現在 CI が規定因として認められ、過去とのつながりが居場所を感じる要因として重要であることが考えられた。
「その他」 1. 災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第 4 回 実証的研究からみえる教師の災害時における「使命感」と「多忙感」の関連	—	平成 29 年 8 月	教育 PRO 第 47 巻第 17 号 通巻 1842 号 pp. 8-9.	教員の「使命感」と「多忙感」の相関性について、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして、教員への意識調査をもとに検討した。その結果、他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し、熊本自身で被災した教員群にそれらがみられないことから、一連の熊本地震への対応の長期のストレス状況にあることが推察された。一方、教員からの聞き取り調査では、教員は自らよりも児童生徒を優先して心のケアに努める利他行動が認められた。
2. 災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第 8 回 ベトナムにおける「保護」の根底にあるもの	—	平成 29 年 10 月	教育 PRO 第 47 巻第 22 号 通巻 1847 号 pp. 8-9.	ベトナムは様々な天災に見舞われているものの、災害の大きさに比して、被害が思いのほか小さい。そこには、災害等非常時における「保護」の主体が関連しているという示唆を得られた。本稿では、その「保護」意識の根底について考察した。その結果、ベトナムにおいては、近年の経済成長における都市化現象が核家族化を進展させたものの、家族を重要視するという観点も根強く残っている一方、知らない人への警戒心は非常に強いことが伺えた。上述の「警戒心の強さ」は「保護」意識の規定因である可能性が示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第12回 取り戻す日常と薄れゆく震災の記憶 ～防災教育が持つ価値の提言～	—	平成29年12月	教育PR0 第47巻第27号 通巻1852号 pp. 6-7.	本稿では，日常を取り戻そうとする「復興のベクトル」と，震災の記憶のうち「想起のベクトル」が減少していくという相反する状況の中で，防災教育が果たす役割について考察を行った。古来から「津波てんでんこ」などの教訓として後世に伝えられてきた事象を検討した結果，防災教育の根幹は，残された「教訓」の活性であることを見出した。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：先行研究収集・考察部分を担当

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 瀧明 知恵子

研 究 分 野		研 究 内 容 の キーワード
教育学		音楽科教育、声楽、学校教育、教員養成
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1)教科音楽において主体性・創造力を育むグループ発表	平成 25 年 4 月～7 月	幼・保採用試験の課題曲であった数曲を練習し、現場で即、生かせるよう「振付をつけた歌の発表」を課題とした。5 人グループで振付を創作し主体的に練習を進め「発表の審査」も課題の一つにした。工夫点や改善点など、活発な意見交流を促すことで互いに高めあい、教師の指導助言にもしっかりと耳を傾けた。今後の創作活動に活かせる活動となった。武庫川女子大学の実践
2)教科音楽において授業内容の定着を図る取り組み	平成 25 年 4 月～7 月	楽典の知識理解が全体的に低い状況が見られたため、毎時間始めの 10 分、反復練習を取り入れるとともに、基本事項を精選し、繰り返し教えることで、まとめのテストでは 60%未満の点数は 0.5%の学生にとどまった。集中して学ぶ姿勢が実力をつけることにつながった。 武庫川女子大学文学部教育学科「教科音楽」
3) 教科音楽において自己評価を生かした授業づくり	平成 25 年 4 月～7 月	授業の最後毎回自己評価を記載させている。「授業内容・力が発揮できたところ・できなかったところを文章表記・最後に A～E の評価」自分自身の取り組みを確認させ、授業への意欲付となっている。どの学生も熱心に書き、次回のより良い授業づくりに生かしている。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」での実践。
4) 音楽科指導法において、アウトリーチを活用した授業づくり	平成 25 年 9 月～26 年 3 月	武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」において、限られた授業時間の中で、音楽授業をより充実させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを学生に考えさせる。地域のホール・専門家・学校がつながりあうことで、音楽科教育はより豊かになる。そこで、実際、地域の邦楽活動家に、授業参加を依頼し、アウトリーチを活用した授業の実践を行う。学生にアウトリーチを活用した授業づくりについて学ばせる。
5) グループワークによるピアノ技能の向上	平成 26 年 4 月～7 月	武庫川女子大学文学部教育学科「器楽演習Ⅰ」において 30 年余り、教育現場で音楽教育を行い、会得してきた指導方法を生かした授業を推進する。ピアノ個人レッスンにグループレッスンの時間も取り入れる。特に初見演奏の際に、グループで行うことにより、比較的早く曲の全体が体得できる。また、階名読みは宿題にするが、読み辛い生徒はグループの教えあいにより、比較的速くできるようになる。仲間意識が高まるとともに、ピアノの技能も初心者学生にスムーズに身につけさせることができた。

6) パターン化した歌唱法の修得と発達段階に応じた指導法の開発	平成 26 年 4 月～7 月	武庫川女子大学文学部教育学科「器楽演習Ⅲ」において 30 年余り、教育現場で音楽教育を行い、会得してきた教育内容と指導方法を生かした授業を推進する。ピアノ個人レッスン・連弾・合唱のオムニバス形式での授業において、合唱を受け持つ。呼吸法、発声法をパターン化し、毎回繰り返すことにより、少しずつ音域・音量等の力をつけさせる。パターンの応用を各校種学年に応じて考えさせ、指導者となったときの備えとさせた。合唱では 2 重唱、3 重唱、独唱にも挑戦させ、個性特性を発揮させるとともに技能を伸長する。
7) アクティブラーニングを活用した指導案づくり・授業力の向上	平成 26 年 9 月～平成 27 年 3 月	武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」において 4～5 名のグループ分けを行い、模擬授業の指導案作成・討議・実践準備を行わせ各グループに、模擬授業を実施させる。特に導入部に視点を当て、いかに興味関心を持たせる授業づくりをするかを考えさせる。協力しあうことで、指導案・授業力の向上を図ることができた。
8) 発表会形式小テストの積み上げによるピアノの技能向上	平成 27 年 4 月～平成 27 年 7 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅰ」において、集団で高め合う時間とグループレッスン・個人の実技を高める時間を設定し、意欲を喚起する。初めてピアノに取り組む学生が約 80%だったが、どの学生にもバイエル 90～100 番の技能をつけるために、3 回の発表会形式による実技テストを行い、全員 103 番を弾けるようになった。
9) グループワークと集団での学びにおける発表と評価、及び福祉施設での音楽活動体験	平成 27 年 9 月～平成 28 年 2 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ」において、集団で高め合う時間と個人の実技を高める時間を設定し、修得したことを仲間に教えたり、発表したり、批評し合うことによって技能（ピアノ演奏や弾き歌い）の修得の深化が見られた。成果発表を、地域の福祉施設にて、音楽ボランティアとして実施する。大変喜んでいただき自信をつけ、意欲を喚起することにつながった。
10) アクティブラーニングを活用した器楽アンサンブルの創作・発表・評価で実践力の育み	平成 28 年 4 月～7 月	武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」においてアクティブラーニングを活用し、器楽アンサンブルの創作・楽譜作成と発表を行わせる。使用する楽器演奏の仕方から調べさせ、幼児・園児が楽しめるアンサンブルの楽譜を作成し、発表までを協力し行う。互いの発表を評価し意見交流の中で、言語活動を活発に行わせ、お互いが切磋琢磨しながら、より良い教材研究づくり、指導法の力をつけることができた。
11) 成果発表を 3 段階設け、人前での演奏力をつけ、福祉施設での音楽活動の実践。	平成 28 年 9 月～平成 29 年 3 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ」において、集団で発声・歌唱法を学び、個人・グループで伴奏法や弾き歌いを学ぶ。その成果発表を 3 回の小テストとして実施するとともに、福祉施設での音楽活動体験を行う。人前での実技発表で力をつけ、お年寄りに喜んでいただくことで、大変励みになっている。社会貢献につながる活動である。
12) 器楽演習における基本的技能の演習から、人前での演奏力をつけ、演奏できる喜びと共に、周りの人に楽しんでもらえる喜びを体感させる実践。	平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月	器楽演習Ⅰにおいては集団で高め合う時間と個人の実技を高める時間を設定し意欲を喚起し、ほぼ全員 103 番を弾けるようになった。器楽演習Ⅱではグループ・弾き歌いの上達を目指し、まとめの活動として福祉施設・地域のつどいでの音楽活動を行う。取り組みの様子は奈良新聞に掲載される。
2 作成した教科書、教材 1) 若い教師に伝えたいこと[再掲] ～範を示せる教師であれ～週刊教育PRO	平成 24 年 3 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として教育実習生や新任教員へ教育活動の核となる教科経営、学級経営について要点をまとめた資料。後の武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」において活用する。

2) 新任教師に伝えたいこと[再掲] ～生徒指導の心得～週刊教育PRO	平成 24 年 6 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として、教師の心構え、生徒指導の在り方についてまとめた資料。校長として教育実習生や新任教員の指導に活用した。
3) 新学習指導要領における音楽科教育 ～音楽教育に献身してきて思うこと～ 教育フォーラム 50 号[再掲]	平成 24 年 8 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として、新学習指導要領における音楽科教育のあり方、可能性（歌唱・器楽指導等）をまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。後の武庫川女子大学文学部教育学科「教科音楽」の中で活用する。
4) 新学習指導要領における、音楽科授業への提案[再掲] —音楽を通した感動体験から豊かな心を育む— 週刊教育PRO	平成 24 年 9 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として新学習指導要領における音楽科教育の可能性（歌唱・ピアノ伴奏法・弾き歌い等）をまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。後の奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅰ」、武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。
5) 音楽科を核とした合唱活動の広がり 週刊教育PRO[再掲]	平成 24 年 10 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として、学校における合唱活動をいかに広げ、充実させるか（歌唱・ピアノ伴奏等）についてまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。後の武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。
6) 「新学習指導要領実施・活気あふれる学校運営 ～小規模校の特色を生かして～」週刊教育PRO[再掲]	平成 25 年 1 月	武庫川女子大学文学部教育学科において、学校教育のあり方について、音楽教育の年間計画・指導案のたて方、生活・学習規律の指導の仕方、音楽行事への準備の仕方・注意点などについてまとめた資料。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」、後の奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅰ」の中で活用する。また、教育実習生指導においても活用する。
7) 「音楽を通した感動体験から豊かな心を育む～合唱劇の取り組みから～」を単著[再掲]	平成 25 年 3 月	武庫川女子大学文学部教育学科において、音楽を通した感動体験から豊かな心を育む～合唱劇の取り組みから～」を単著執筆する。 生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成にかかせないものである。限られた授業時数の中で、これまでの授業を見直し、学年全体で活動できる「合唱劇の取り組み」についても積極的に授業に取り入れていく。歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏法、様々な器楽演奏指導等、新教育課程における指導法を創意工夫する。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。
8) 「初等科音楽基本の内容と指導法～ここがポイント～」単著 [再掲]	平成 27 年 5 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「初等科音楽基本の内容と指導法～ここがポイント～」を単著執筆する。保育士、幼稚園・小学校教諭が音楽指導する際に必要な基礎基本内容と指導法をまとめる。「小学校学習指導要領音楽編」、「幼稚園教育要領・保育所保育指針 表現」について解説する。また、各学年、年齢に応じた指導内容や、発達段階に応じた歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞の指導法などを実践例を示しながらまとめる。資料には楽典の基本事項をわかりやすく示す。奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ」、武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」、の中で活用する。

9) 「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ ～歌唱活動に注目して～」単著 [再掲] 教育フォーラム 56 号[再掲]	平成 27 年 8 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ～歌唱活動に注目して～」を執筆する。「イタリアの歌唱活動をはじめとする音楽科教育に学び、発達段階に応じ、正しく表現する方法である呼吸法や発声法など基礎技能の教育方法を示す。また、音楽科教育の活動を広げ、総合的な表現力の向上のために、音楽科教育を核とした合唱劇のプロジェクト（総合表現活動）を紹介する。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ（鍵盤楽器）」の中で活用する。
10) 「初等科・中等科音楽教育基礎と指導法～歌唱・合唱の系統性に視点を置いて～」単著 [再掲]	平成 28 年 4 月	これまでの教育活動を見直し、「キー・コンピテンシー」や「21 世紀型スキル」などを視野にいれ、初等科・中等科音楽科教育の目標・内容について基本をおさえ、指導・支援にあたれるよう示している。指導計画の作成の仕方・評価を生かした授業づくりについて事例を示して述べている。指導法については、発達特性の基本的な考え方、発達段階に対応した指導・支援方法のポイントについて述べ、特に歌唱（民謡や日本の伝統的な歌唱法を含む）を中心として、理論的な意味付けを明確にし、共通教材について留意し具体的な実践の展開に結びつけていくよう述べている。 B5 判
11) 「人間教育」の根源である「いのちの教育」に関する一考察 ～中学校における実践から～[再掲]	平成 28 年 5 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「人間教育」の根源である「いのちの教育」に関する一考察 ～中学校における実践から～」を執筆する。「2013 年『いのち』に関わる意識調査『こころに関するアンケート』の結果分析から導き出した 5 つの視点を紹介する。それらを中学校における「いのち」に関わる授業実践において活用した様子を報告する。実践研究からを活かし作成した、中学校における「いのちの教育」のカリキュラムを示す。学生に「いのちの教育」の大切さを学びとらせる。奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「教職入門 B（中等）」の中で活用する。
12) 「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ～創造性・主体性の育みを視点として～」(共著) [再掲]	平成 28 年 8 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ～創造性・主体性の育みを視点として～」次世代に生きる子供たちには「創造性をめぐる」や「コミュニケーションと ICT」を重点課題とした教育が望まれている。創造性や個性・特性を重視しているイタリアにおける、ICT を活用し、様々な教科（英語・国語・体育・道徳など）と音楽を融合させた授業や、総合的な表現力の向上を目指す音楽科を核とした合唱劇のプロジェクト（総合表現活動）、地域の音楽文化やアウトリーチを取り入れた授業などに示唆を導き出す。より良い授業の創造に活かしていく。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ（鍵盤楽器）」の中で活用する。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1)武庫川女子大学の非常勤講師（音楽科教育）として採用される際の、文学学部長及び学科長の評価。	平成 25 年 4 月～現在に至る	武庫川女子大学文学部教育学科の非常勤講師として、「教育音楽」「初等音楽科指導法」において教鞭をとる。採用に対し声楽家としての活動や、合唱におけるピアノ伴奏指導や発声指導の工夫が高く評価され採用された。
2)奈良学園大学の講師（音楽科教育）として、器楽演習Ⅰ・Ⅱ、器楽・歌唱法担当者として採用される際の、学部長の評価。	平成 26 年 4 月	奈良学園大学人間教育学部の講師として、「器楽演習Ⅰ・Ⅱ」「器楽・合唱法」において教鞭をとる。採用に対し、長らくの中学校現場の経験、声楽家としての活動や、合唱におけるピアノ伴奏指導や発声指導の工夫が高く評価され採用された。

3) 武庫川女子大学の非常勤講師（音楽科教育）として、初等音楽科指導法・器楽演習Ⅰ・Ⅱの担当者としての学生の評価	平成 27 年 2 月	学生アンケートより、初等音楽科指導法では「声の大きさ、話し方、板書は適切か・・・強くそう思う 96%」意見として、「経験談を話してくださり、私もがんばろうと思った」、器楽演習Ⅰ・Ⅱでは「私語を少なくするよう適切な指導・・・90%」、意見として、「毎回できなかったことを何度も指導していただき、家でも頑張れた」などの評価を得た。
4) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の講師として、「教職入門B（中等）」担当者としての教員評価	平成 28 年 4 月	「教職入門B（中等）」における評価として「板書が見難い、声が聞こえない等、授業中の不便がないか確認し、パワーポイントを活用、非常にスムーズな板書が行われていた」「中学校教諭としての経験を交えながら、クラス運営の実践例を解説されていた」「授業のテーマに対して学生の意見発表の場を設け、能動的な授業を展開されていた」「受講生に私語はなく、教室は静穏な状態が保たれていた。質問形式で学生に問いかけを行い、都度、理解を確認されていた」などの評価を得た。
5) 奈良学園大学の准教授（音楽科教育）として、声楽実技Ⅰ（日本伝統歌唱を含む）（単独）・声楽実技Ⅱ（日本伝統歌唱を含む）（単独）・声楽演奏法演習Ⅰ（単独）・声楽演奏法演習Ⅱ（単独）・合唱Ⅰ（単独）・合唱Ⅱ（単独）・音楽科教育法Ⅰ（単独）・音楽科教育法Ⅱ（単独）・音楽科教育法Ⅲ（単独）・音楽科教育法Ⅳ（単独）・教育実習事前事後指導（中・高）（複数）・教育実習Ⅰ（中・高）（複数）・教育実習Ⅱ（中）（複数）・教育実践演習（中・高）（複数）」担当者となる際の、学部長の評価。	平成 29 年 12 月	奈良学園大学人間教育学部の准教授として、「声楽実技Ⅰ（日本伝統歌唱を含む）」等において、担当任用に対し、長らくの中学校現場の音楽教諭経験、管理職として市内や阪神間の音楽教育研究会の運営や、教職員指導支援、実践をまとめた著書の作成、また、地域を巻き込んだコンサートの企画・運営などが評価され採用された。
6) 奈良学園大学・王寺町共催公開講座くりに～べるカレッジ＞特別企画「和&輪コンサート～歌い継ぐ、心の歌～」における企画・運営・出演者としての学長、及び、王子町長・三郷町長の評価	平成 30 年 5 月	平成 28 年 5 月・29 年 6 月・30 年 5 月、3 回目の実施となり、毎回 300 名を超える地域の方々の参加者がある。子どもからお年寄りまで集い、世代を超えて、童謡・唱歌に込められた日本の伝統文化、美しい景観や思いやりの心をレクチャーし味わうとともに、箏や尺八とのコラボレーションなど、伝統音楽（楽器）の良さを広げ、高める活動である。プロの洋楽家、邦楽家、地域の少年少女合唱団、高校生合唱団、大学箏和の音楽サークルが出演、王寺町・三郷町の支援を得、毎回多くの方々に楽しんでいただき、学長から、大きな地域貢献を果たしていると評価。朝日新聞に「日本の歌 素晴らしさ伝える」（30 年）として掲載される。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 西宮市立音楽連盟副会長として研究授業について指導助言と実技指導を行う。	平成19年度～ 平成24年度	西宮市立西宮浜中学校教頭・西宮市立浜甲子園中学校教頭、西宮市立浜甲子園中学校校長として、年 2 回研究授業を参観し、研究協議において指導助言を行うとともに、新教育課程における音楽科のあり方について、発声法・パートリーダーの育成等について指導助言を行う。 西宮市立浜脇中学校 合唱指導「涙を超えて」 西宮市立上ヶ原中学校 合唱指導「マイバラード」観点別評価の研究会も行う。 西宮市立平木中学校 鑑賞指導「運命」（新任教員研究授業） 西宮市立瓦木中学校 器楽指導（アルトリコーダー） 西宮市立真砂中学校 鑑賞指導「ジャズ演奏」 西宮市立鳴尾中学校 合唱指導「夢の世界を」他

2) 兵庫県教育委員会より新学習指導要領（音楽科）伝達講師に任命され、文部科学省の伝達講習会を受け、県下各地の講師を務めた。	平成20年8月	西宮市立浜甲子園中学校教頭として文部科学省の伝達講習会においては、新指導要領の特色となる所など、注意して聴き取る。音楽科改訂の要点として、内容の構成の改善、「共通事項」の新設、歌唱教材の提示、我が国の伝統的な歌唱の充実、和楽器の指導、創作の指導内容の焦点化・明確化、鑑賞領域の改善が挙げられるが、質問時間を有効に活用し、疑問点、もう少し聞きたいところなど積極的に質問した。阪神音楽科研究会では阪神間の中学校音楽教諭50名近くが熱心な態度で聞き入った。できる限り、例など示しながら、また、その趣旨を明確にしながら伝達し、質疑応答の時間を設け、その後、Q&Aの資料も作成した。西宮市でも実施し、より理解が深められたのではないかと思う。その後も、若い教員のために勉強会を続け、音楽科における新指導要領にそった授業実施に貢献することができた。
3) 西宮市立中学校校長会において、市内の教育実習の担当として教職の基礎についてまとめ、各校の実習が円滑に行われるよう貢献する。	平成22年度～平成24年度	西宮市立浜甲子園中学校校長として市内の教育実習が円滑に行われるよう貢献すると共に、教育実習生が充実した実習生活が送れるよう、現任校において教育方針・活動についてや教職の心がまえについて指導する。最終日は成果と課題について報告を受け、今後の指導助言を行う。
4) 西宮市人権教育研究会において講師を務める。	平成22年11月	西宮市立浜甲子園中学校校長として西宮市立高須中学校・1～3年研究授業、西宮市人権教育研究協議会にて指導助言を行う。
5) 西宮市人権教育研究会において講師を務める。	平成23年10月	西宮市立浜甲子園中学校校長として、西宮市立鳴尾南中学校・1～3年研究授業、西宮市人権教育研究協議会にて指導助言を行う。
6) 大阪府教職員自主研修支援事業 大学オープン講座（夏季講座）の講師を務める。	平成26年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 講師として、講演テーマ＜心を育む歌唱・合唱指導 ～歌声ひびく学級づくり～＞講演内容は①音楽行事と学級指導 ②呼吸法や発声法、響きある歌声づくりへのワンポイントアドバイス ③心と歌声を合わせ美しい音楽表現を目指す学級づくり、を行う。
7) 王寺町主催くりに～べるカレッジ～における講師を務める	平成26年10月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 講師として、講演テーマ＜日本の心の歌 ～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞内容は①日本の心の歌 「童謡・唱歌」の歴史、作詞者・作曲者についてや、曲の内容などの講話 ②呼吸法や発声法、響きある歌声づくりへのワンポイントアドバイスを行う。
8) 平成24年度～平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）課題番号24330254における「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」授業実践・研究協議での講師を務める。	平成26年10月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 講師として、「いのちの教育」において、「心についてのアンケート」を実施するとともに、兵庫県道徳副読本「心かがやく」より『語りかける目』の実践研究など、授業研究の指導案作成・研究授業における指導助言を行う。
9) 三宅町教育委員会社会教育部より以来を受け涯学習推進講座において講師を務める	平成27年5月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 講師として、歌い継ぐ日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうた～をテーマに、講演と独唱「朧月夜」他。出席者への歌唱指導、指揮を行う。約60名の参加者があった。
10) 音楽研究授業、研究協議において講師を務める。	平成27年6月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 講師として、奈良学園小学校4年生の音楽研究授業参観、研究主題のメタ認知を視点とした研究協議、また、アウトリーチを活用した「和の音楽」に関わる研究協議を行う。

11) 大阪府教職員自主研修支援事業 大学オープン講座(夏季講座)の講師を務める	平成27年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 講師として、「心を育む歌唱・合唱指導そのⅡ ～歌声ひびく学級づくり～」をテーマに①呼吸法や発声法、発達段階に応じた歌声づくり、②心と歌声を合わせ美しい音楽表現、③合唱指揮法の基本についてなど。
12) イタリア(ローマ)での音楽科教育研究会における音楽活動	平成27年9月	音楽科教育研究交流を行っている Scuola Primaria “Ermenegildo Pistelli” ビステッリ小学校(幼小・中学校の一体型学)の小学2年生・4年生の研究授業において、日本の心の歌である童謡・唱歌・わらべうたを紹介する。パワーポイントでのプレゼンテーションを行い、歌を披露するとともに、遊び方を教え、ローマ字での日本の歌を、共に歌うことができた。日本の心の歌の良さを伝え、日伊の親善に貢献する。
13)合唱コンクールに向けたプレ発表会及び小中交流会における指導・講評を行う。)	平成27年10月	西宮市立大社中学校において、全校合唱コンクールに向けたプレ発表会が苦楽園小学校 6 年生を招き行われる。中学生 3 年 300 名の学年合唱、7 クラスの学級合唱が行われ、小学生は熱心に聴きいった。学年・学級合唱における発声・発音・曲の仕上げ方などの指導を行う。音楽科教諭・校長への中学校における音楽科教育について聴き取り調査を行う。
14)和の音楽鑑賞会及び体験学習における講師を務める。	平成28年1月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 講師として、奈良学園小学校5年生 3 クラスを対象に、和の音楽伝承グループによるアウトリーチを活用した音楽鑑賞会及び体験学習におけるコーディネータを務める。子どもたちは大変興味深く鑑賞し、お箏、尺八の体験に意欲的に取り組んでいた。
15)三郷町教育委員会生涯学習課より依頼を受け、文化協会・老人連合会共催の講座において講師を務める。	平成28年2月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 講師として、歌い継ぐ日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうた～をテーマに、講演と独唱。童謡・唱歌・わらべうたの歴史や特徴などパワーポイントでのプレゼンテーションを行うとともに「荒城の月」など独唱、出席者への呼吸法・発声法の指導、指揮を行う。多くの参加者が熱心に受講し、地域と世代をつなぐ取り組みとなった。事後アンケートで「日本の心の歌を沢山のひと々と共に後々に伝えていくことの大切さを教えられた」など 100 名以上の方に好意的な意見をいただく。(参加者 165 名)
16) Musical Live Performance ～Koto & Shakuhachi with Japanese spirits “wa” songs for you～ 奈良県より依頼を受け、外国人向け和のコンサート企画・出演	平成28年6月	奈良県より依頼を受け、外国人向け「和のコンサート」実施(奈良ビジターセンター)。伝統楽器である箏・尺八の合奏グループとともに、「日本の心の歌」「春の海」等の演奏を披露。プログラム執筆、アンケートによるまとめ執筆、
17)三宅町市民講座において、童謡・唱歌指導および講演	平成28年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 講師として、ヴォイストレーニングの概要説明とともに指導を行う。また、童謡唱歌に纏わる話を行いながら、独唱の披露、歌唱指導を行う。参加者 20 名
18)王寺町主催くり～べるカレッジ>における講師を務める	平成28年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 講師として、講演テーマ<日本の心の歌 ～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～> 内容は①日本の心の歌 「童謡・唱歌」の歴史、作詞者・作曲者についてや、曲の内容などの講話 ②呼吸法や発声法、響きある歌声づくりへのワンポイントアドバイスをを行う。奈良学園大学人間教育学部学生 5 名も参加し、学生と歌おうのコーナーでは地域の方々と交互に歌い合うなど共に歌い合いを楽しんだ。地域交流、世代交流の場ともなった。地域参加者約 70 名

19) イタリア（ローマ）での音楽科教育研究 交流会における講師	平成28年9月	音楽科教育研究交流を行っている Scuola Primaria “Ermenegildo Pistelli” ビステッリ小学校（幼小・中学校の一体型学）の小学2年生・4年生の研究授業において、日本の心の歌である童謡・唱歌・わらべうたについて、プレゼンテーションを行う。また、「オペラプロジェクト」を活用した授業の参観、研究協議において助言を行う。
20) マルティーニ（ボローニャ）音楽院にて 視察及び、日本の音楽専門教育の特色につ いて提言。	平成28年9月	マルティーニ音楽院の音楽活動における施設・設備の視察を置こうとともに、イタリアにおける音楽専門教育（年数・内容等）、音楽科教員養成の在り方について聞き取り、日本の音楽専門教育の特色について提言し研究交流。
21) イタリア（ボローニャ）での音楽科教育 研究会において提言	平成28年9月	ボローニャ大学において、日本の学校音楽科カリキュラムについて発表、音楽科教員養成、学校外教育との連携の在り方の研究交流。
22) 奈良学園大学志賀直哉旧居セミナーに て、レクチャーコンサートの実施	平成29年4月	「日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうた～」をテーマに、一般的に「童謡」と言われている「童謡・唱歌・わらべうた」の成り立ち、創られた背景や目的、その特徴など、パワーポイントを活用し講演を行うとともに、数曲を披露。
23) 奈良学園大学公開講座くり～べるカレ ッジ>における特別企画「和&輪コンサ ート」の企画・運営・出演	平成29年5月	「和&輪コンサート」の企画を行う中で、地域のこどもから、学生、ミドル世代、シニア世代が会場で共に、日本の心の歌や、伝統楽器である箏・尺八の音楽を楽しみ合えるコンサート創りを目指す。自らも「からたちの花」など披露。350名の参加があり盛況に実施。 奈良新聞に掲載される。
24) 奈良学園大学・王寺町共催公開講座くり ～べるカレッジ>において講演	平成29年7月	「音楽を活かしたまちづくり」～創造都市の視点から～についてパワーポイントを活用した講演と共に、「我は海の子」など披露。 65名参加
25) イタリア（ローマ）での音楽科教育研究 交流会における講師	平成29年9月	ビステリ校にて授業実践（3年・5年）とともに、「日本の心の歌」の紹介。音楽科教育研究交流会において、日本の「童謡・唱歌・わらべうた」について提言、学年の成長に応じた発声法、学校音楽科カリキュラムについて研究交流。
26) セントチェチュリア音楽院及び、プライ ナー音楽院の視察、及び初等教育における 発声法における提言。	平成29年9月	セントチェチュリア音楽院及び、プライナー音楽院においてベルカント発声法とドイツ式発声法について研究交流。
27) ウィーン少年合唱団の視察、及び初等教 育における指導法についての研究交流。	平成29年9月	ウィーン少年合唱団の施設・設備について視察、及び学年の成長に応じた発声法、指導法について研究交流。
28) 奈良県立3つの高校と連携したコン サートづくりに向けた提言、指導・指揮。	平成30年3月	日本の心の歌である童謡・唱歌の味わい、において、地域の人々を楽しんでいただくコンサートづくりの提言を行うと共に、合同歌唱の指導・指揮を行う。 奈良県立郡山高校部・奈良北高等学校合唱部・生駒高等学校合唱部

29)「初春のコンサート」主催。企画・運営・指導を行う。	平成30年4月	平成 25 年から京都市立国際交流会館で実施し、6 回目となる。ヴァイオリン・ピアノ・歌唱・合唱のコンサートを企画・運営・出演する。1 部、児童・生徒・学生のおさらい会、2 部、講師演奏会として、ともに実技を磨きあう会とする。自身も独唱・重唱するとともに合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。
30)奈良学園大学志賀直哉旧居セミナーにて、レクチャーコンサートの実施	平成30年4月	テーマ「日本の心の歌と箏曲の調べ」 ～童謡 100 周年に寄せて～、鈴木三重吉の児童雑誌「赤い鳥」の創刊、北原白秋・西條八十・山田耕筰など、一流の創作者たちが子どもたちへの愛情を注ぎ多数の童謡を生み出した。世界でも類まれといわれた童謡文化を見直しながら、パワーポイントを活用し講演を行うとともに、数曲を披露。生田流筑紫会 飛梅司大師範 篠原歌鶯、都山流 竹琳軒 中野猷山
31)「初夏のコンサート」企画・運営・出演	平成30年6月	武庫川女子大学卒業生の会宝塚支部長として「宝塚カンタービレ」コンサートを開催。「日本の心の歌とオペラアリア」を実施、独唱、重唱、共に歌うコーナー等、企画運営を行う。声楽 瀧明知恵子、関西歌劇団 安田定栄、武庫川女子大学准教授 藤原匡人、ピアノ 山本麻代他 宝塚ワシントンホテルガスライト
5 その他 特になし		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 1) 中学校教諭一級免許普通免許音楽 2) 高等学校教諭一級普通免許音楽 3) 修士（学校教育学） 4) 中学校教諭専修免許状音楽 5) 高等学校教諭専修免許状音楽 6) 養護学校教諭二級免許状	昭和50年3月 昭和50年3月 平成7年 3月 平成8年 3月 平成8年 3月 平成8年 3月	昭四九中一普第九六三号 (兵庫県教育委員会) 昭四九高二普九九五号 (兵庫県教育委員会) 兵庫教育大学大学院 修第 3264 号 題名「中学校音楽科選択履修拡大に関する一考察」 平七中専第一五六号 (兵庫県教育委員会) 平七中専第二五三号 (兵庫県教育委員会) 平七中専第二五三号 (兵庫県教育委員会)
2 特許等 ・特になし		
3 実務の経験を有する者について特記事項 1) 西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し、西宮の音楽教育の充実・発展に尽力する。 2) 西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「くすの木コンサート」の運営に貢献する。 3) 西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「西宮市内音楽祭」の運営に貢献する。	平成 14 年度～平成 24 年度 平成 14 年度～平成 24 年度 平成 14 年度～平成 24 年度	西宮市内の音楽教育活動のより充実発展を目指す。 西宮市立中学校卒業生の音楽活動発表の場である「くすの木コンサート」の充実に力を入れ、西宮市出身の若い音楽家の活動の場を広げる。 1 年に 1 回行われる「西宮市内音楽祭」(各学校吹奏楽・合唱発表)の充実に力を入れ、より発展を目指し、活性化に努める。

4) 西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「西宮市内合唱祭」の運営に貢献する。	平成 14 年度～ 平成 24 年度	1 年に 1 回行われる「西宮市内合唱祭」の充実に力を入れ、より発展を目指し、活性化に努める。
5) 兵庫県教員採用試験（音楽）試験官として任命され、7 年間にわたって、実技試験内容や評価の在り方について研究を深める。	平成 15 年度～ 平成 21 年度	7 年間、小学校教員採用試験の実技試験（歌唱と器楽とピアノ演奏）の試験官を務めた。その間、実技試験内容の歌唱曲の選曲を拍子感や音域、詩の内容、曲想の面から検討し見直した。また、発声指導の時間をとり、短時間で声の調子を整えさせるよう、発声内容や注意点の内容について工夫した。「新曲」の作成においては、基本的な単純拍子・複合拍子でメロディーは 1 段目で難易度を低くし、2 段目は臨時記号を入れるなど難易度を上げるよう配慮した。また基本的なリズムパターンを何カ所かに入れることとし、しかも曲としてまとまりのある曲となるよう、3・4 名で 20 曲程度作成した。評価項目、評価基準については、毎年検討会をもち、意見交流しながら共通理解を深めた。後半の 3 年間は音楽実技試験官のまとめ役をし、実技試験がスムーズに実施されるよう尽力した。
6) 西宮市中学生主張大会審査委員として会の充実に貢献する。	平成 20 年 8 月～ 平成 21 年 8 月	教頭会副会長として、審査員を務める。
7) 西宮市立中学校中学生中国友好訪問団団長として市内中学校代表 20 名を引率し、中国を友好訪問し、音楽科授業の参観交流授業を行う。	平成 22 年 12 月	第 23 回団長を務める。尖閣諸島問題で日中関係が微妙な年であったが、礼を持って交流し、友好親善の目的を果たす。音楽授業を参観し、音楽科における日中合同音楽授業を行い交流を深める。
8) 西宮市栄養教員・栄養職員研究会会長として研究紀要の発行に尽力する。	平成 23 年 3 月	西宮市の栄養教員・栄養職員研究会において、研究のまとめの発行に尽力する。
9) 兵庫県西宮市音楽教科書採択委員として尽力する。	平成 23 年 7・8 月	西宮市教育委員会より音楽教科書採択委員会の委員長を命ぜられ、採択委員会を開き、採択結果を西宮市教育委員会に報告する。
10) 西宮市校園長会の会長として幼稚園・学校・中学校・高校の連携を深めるため尽力する。	平成 24 年 4 月～ 平成 25 年 3 月	会長として、幼稚園・学校・中学校・高校の連携を深めるため、校園長との連絡調整・とりまとめを行う。特に音楽科教育の連携に力を入れる。
11) 西宮市中学校家庭科教育研究会会長として総会の充実に尽力する。	平成 24 年 5 月	西宮市の家庭科教育・食育において、充実発展を目指し、会の活性化を図る。
12) 西宮市栄養教員・栄養職員研究会会長として総会の充実に尽力する。	平成 24 年 5 月	西宮市の栄養教員・栄養職員研究会において、充実発展を目指し、会の活性化を図る。
13) 文部科学省共催、独立行政人教員研修センターにおける学校評価指導者養成研修会において発表、学校評価指導者養成研修修了証書を授与される。	平成 24 年 7 月	現任校における学校評価の取り組み、及び成果と課題について発表すると共に、他府県の取り組みや、文科省の講演より多くのことを学び、学校経営に生かす。
4 その他 1) 科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」を行う。	平成 24 年度～ 平成 26 年度	研究協力者として、「いのちの教育カリキュラムモデルの開発事例」を実践研究し、＜いのちの教育部会研究報告書＞に「西宮市立山口中学校における実践」「中学校の年間カリキュラム」「音楽科教育における成就感・自尊感情の育み」を執筆する。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1) 特集＜やる気＞を引き出し、育てる (教育フォーラム 50 号)	共著	平成 24 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会	教師が子どもの＜やる気＞を引き出し、育てるための方策を考察し、教師自身の＜やる気＞についても論じる。B 5 判 全 179 頁 編集代表 梶田叡一 梶田叡一、加藤 明、松田智子、浅田 匠、中村 哲、善野八千子、金山憲正、勝見健史、久田 孝、 <u>瀧明知恵子</u> 、ほか 5 名 担当部分 「新学習指導要領における音楽科教育～音楽教育に献身してきて思うこと～」を単著 中学校教育における音楽科の果たす役割を強く実感している。生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成にかかせないものである。新学習指導要領において音楽科ではこれまで通りの授業数にとどまった。限られた授業時数の中で、これまでの授業を見直し、新しい課題についても積極的に授業に取り入れていく必要がある。歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏、和楽器を含む器楽演奏指導・鑑賞等、新教育課程における指導法を創意工夫すると共に、地域の音楽文化を生かし、小・中学校の 9 年間の連続した取り組みも意識し、新教育課程における年間計画を創意工夫していかなばと考える。 p. 146～155
2) 「新学習指導要領実施・活気あふれる学校運営～確かな学力・情操豊かな人間性を育む～」	単著	平成 26 年 1 月	株式会社 E R P	新学習指導要領全面実施の中、梶田叡一氏による『『やる気』をいかに喚起するか、より良い学習環境をいかにつくっていくか』を課題とした学校運営について述べる。まず、学校教育目標を見直し、第 1 章では確かな学力の定着のために、生活・学習規律の醸成を踏まえた心の居場所となる学級づくりと学びがいのある授業づくりについて、第 2 章では情操豊かな人間性を育むため、音楽活動を核とした、仲間とともに築き上げる行事への取り組み、音楽教育の在り方、また参画と共同の取り組みについて、さらに第 3 章では学校評価を生かした活気あふれる学校づくりについて述べ、課題解決の方策に迫る。 全 72 頁 A5 判
3) 特集＜文字が育てる言葉の力＞文学教材を用いた指導をどうするか (教育フォーラム 53 号)	共著	平成 26 年 2 月	金子書房 人間教育研究協議会	＜文字が育てる言葉の力＞において、言葉の力を育てるための方策を考察し、各教科領域における文学教材を用いた指導をどうするかについて論じる。B 5 判 全 147 頁 編集代表 梶田叡一 梶田叡一、加藤 明、鎌田首治朗、伊崎一夫、勝見健史、山下敦子、汐見治美、永田里美、湯峰 裕、 <u>瀧明知恵子</u> 、ほか 2 名 担当部分 「音楽を通した感動体験から豊かな心を育む ～合唱劇の取り組みから～」を単著 これまで筆者が実践してきた「合唱組曲・合唱劇」の取り組み過程を述べている。合唱を中心とするが、独唱、重唱の場面を取り入れるなど、生徒の個性・特性を発揮させ、より豊かな表現を目指す取り組みである。伴奏はピアノで作曲されているものが多いが、生徒に演奏しやすく編曲したり、朗読のバックのピアノ演奏

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4)「人間教育を視点にした教職入門」	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	を加えたり、ピアノだけでなく、生徒が取り組みたい楽器の楽譜をつくるなど創意工夫を重ねてきた実践を具体的に示している。音楽には共に演奏することで連帯感を持たせる力がある。孤独感を抱きやすい思春期の中学生には、前向きに生きるエネルギーになるこの連帯感が必要である。生徒が心揺さぶられるような一体感を感じる授業を成立させるためには他教科や学校行事と連携しながら計画的に行っていくことが大事であることを力説している。 p. 146～155 「人間教育を視点にした教職入門」においては「次世代の教職入門」を変化する教育情勢に対応し、新しく人編集し直す。人間教育を視点とし、理論編、実践編から教職の道を説く。 B 5 判 全 279 頁 編集代表 中田 正浩 中田 正浩、鎌田首治朗、松田智子、金山憲正、長井勘治、中田律子、太田雄久、久田 孝、瀧明知恵子、担当部分 第 5 章第 3 節＜中学校教員の仕事＞ 思春期の真只中にある生徒たちが自ら課題を克服できるよう、見守り、自信を持たせ、希望を持って学校生活を送れるよう、中学校教員として為すべき仕事内容について述べる。学習指導要領の主な内容、学校教育目標の成り立ちについて、学習規律の醸成を大切にしたい学びがいのある授業づくりについて、中学校教員の 1 日についてなど、長い現場経験で学級担任・学年主任・教頭・校長として勤めた経験を生かし、重要なポイントを述べる。p. 120～129 第 6 章第 3 節＜中学校の学級経営＞ 社会的問題ともなっている「いじめ」「不登校」など多くの課題を抱える中学校現場で、生徒たちが安心して心豊かに学校生活を送ることができるよう、生活の基盤である学級集団づくりについて述べる。 学級の意義について、心が通い合い、お互いに高め合い、支え合う学級づくりについて、学校目標と学年・学級目標の関わりについて、望ましい集団活動を通して生き方の自覚をふかめさせる特別活動について、3 年間を見通し、成長に応じた学級活動年間計画をたてる必要性、協力しあって創りあげる体育行事、音楽行事の大切さなど述べる。p. 160～170 第 7 章第 2 節＜中学校の生徒指導＞ 物質的豊かさの中で育つ生徒たちは、忍耐力、自主性、自立性が弱くなるなどの状況が見られる。生徒一人一人の可能性を開き、主体的に判断・行動し、積極的に自己をいかしていけるよう生徒指導を充実させていくことが大事である。生徒指導の目標について、生徒のおかれている現況について、生徒理解の大切さについて、生徒たちが心豊かに学校生活を送れるよう開発的な生徒指導の具体的活動について、生徒の主体性を生かす生徒会活動について、スクールカウンセラーと連携した教育相談についてなどから、長い現場経験で学級担任・学年主任・教頭・校長として勤めた経験を生かし、重要なポイントを述べる。p. 190～199

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5)「保育士、幼稚園・小学校教諭のための初等科音楽基礎基本と指導法～ここがポイント！～」発達段階に応じた指導を目指して	単著	平成 27 年 5 月	株式会社 E R P	初等科音楽基本内容と指導法について、重要なポイントを押さえながら述べる。特に発達段階に応じた歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞指導法について、具体的な例をあげながら示す。音楽指導のためのピアノ・歌唱・弾き歌いの実技上達法についても述べ、資料として楽典の基本事項も示している。音楽教諭として 20 数年、管理職として 10 年あまり経験し、その間に多くの保育士・幼稚園・小学校・中学校教諭の授業実践の指導助言を行ったり、音楽を苦手と感じている方々の相談に応じたり、より良い音楽活動づくりを考え合ったりしてきた。その実践を生かした理論書である。 B 5 判 全 86 頁
6)特集＜アクティブラーニングとは何か＞（教育フォーラム 56 号）	共著	平成 27 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会	＜アクティブラーニングとは何か＞において、実践的な課題解決力を育成するために、思考力や問題解決力をどのように鍛えていくか、各教科領域におけるアクティブラーニングをどう組み入れていくかなど考察し実りある学習活動の展開を提案する。 B 5 判 全 147 頁 編集代表 梶田叡一 梶田叡一、加藤 明、鎌田首治朗、伊崎一夫、前田洋一、溝上慎一、岸 周吾、芝池宗勝、米川雅士、武谷嘉之、瀧明知恵子、ほか 3 名 担当部分・特別寄稿 「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ ～歌唱活動に注目して～」を単著 歴史的に西欧の音楽文化の中心であったイタリアと日本の学校音楽科教育の歌唱活動を中心とした比較を通して、日本の音楽教育への示唆を導き出すことを課題とした。イタリアの歌唱活動をはじめとする音楽科教育に学び、発達段階に応じ、正しく表現する方法である呼吸法や発声法など基礎技能の教育方法の開発を進める。また、音楽科教育の活動を広げ、総合的な表現力の向上のために、音楽科教育を核とした合唱劇のプロジェクト（総合表現活動）開発を行いたいと考える。 p. 120～130
7)「中等科音楽教育基礎と指導法～歌唱・合唱の系統性に視点を置いて～」	単著	平成 28 年 4 月	株式会社 E R P	これまでの教育活動を見直し、「キー・コンピテンシー」や「21 世紀型スキル」などを視野にいれ、音楽科教育の目標・内容について基本をおさえ、育成すべき資質や能力を具体化し指導・支援にあたれるよう示している。初等科・中等科音楽基礎基本内容（「表現」（歌唱・器楽・音楽づくり）、 「鑑賞」）をコンパクトにまとめ、指導計画の在り方、作成の仕方などについて、事例を示すとともに、評価を生かした授業づくりについて述べている。指導法については、発達特性の基本的な考え方、発達段階に対応した指導の・支援方法のポイントについて述べています。特に歌唱を中心として、理論的な意味付けを明確にし、共通教材について留意し具体的な実践の展開に結びつけていくよう述べている。 B 5 判 全 86 頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8) 特集＜主体的能動的な学習ーアクティブラーニングの精神を生かす＞教育フォーラム (58号)	単著	平成 28 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会	＜主体的能動的な学習ーアクティブラーニングの精神を生かす＞において、実践的な課題解決力を育成するために、思考力や問題解決力をどのように鍛えていくか、各教科領域におけるアクティブラーニングの精神をどのように生かしていくのかなど考察し実りある学習活動の展開を提案する。 B 5 判 全 155 頁 編集代表 梶田叡一 梶田叡一、鎌田首治朗、伊崎一夫、吉田明史、角屋重樹、原田智仁、菅井啓之、押谷由夫、井上信子、瀧明知恵子、ほか 1 名 担当部分・特別寄稿 単著 p.137～p.148 「イタリアの学校音楽科教育に学ぶⅡ～創造性・主体性の育みを視点として～」 次世代に生きる子供たちには「創造性をめぐる」や「コミュニケーションと ICT」を重点課題とした教育が望まれている。具体的には、「21 世紀型能力」や、「キー・コンピテンシー」の視点から、育成すべき資質や能力を音楽科教育でどのように育んでいくのか、明確にしていく時期である。「創造性・主体性」の育成を視点として音楽のカリキュラムと授業実践について日本とイタリアの国際比較を行い、示唆を得たいと考えた。イタリアの目指す教育の方向性の移り変わりを概観し、カリキュラム指針でのねらい、内容を考察する。創造性や主体性を育んできたイタリアの音楽科教育の特色を探るため、イタリアの児童・生徒・保護者等に向けた音楽科教育に関する意識調査(アンケート)及び聴き取り調査を試み分析結果を示す。また、ピステッリ国立学校における音楽科授業の現況を紹介する。イタリアのカリキュラムとの比較研究を進め明らかになったことは、①領域についての相違点、②共通教材についての扱い方、③総括目標での位置付けなどについてである。
9) 「オペラプロジェクト」に見るイタリアの学校外教育ーボローニャ大学との研究交流からー	単著	平成 29 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会	「深い学びのために」ーアクティブラーニングの目指すものー学習指導要領の総則について議論が展開されているが、「深い学び」についてはいまだ焦点が拡散している。はどのようにすれば「深い学び」になり、実現できるのか。具体的かつ実践的な授業を行い、基本ポイントを明確に押さえていく必要がある。 B 5 判 全 144 頁 編集代表 梶田叡一 梶田叡一、鎌田首治朗、伊崎一夫、古川 治、湯峰 裕、大畑健実、菅井啓之、金山憲正、善野八千子、瀧明知恵子、ほか 3 名 担当部分・特別寄稿 単著 p. 114～124 「オペラプロジェクト」に見るイタリアの学校外教育ーボローニャ大学との研究交流からー イタリア公教育は学校外での教育機会が豊富である。地域の音楽文化と一体化させた取り組みを行っているのである。ボローニャ市では、音楽教育を振興しており、「音楽を身近に感じ味わうこと」を学校教育・社会教育の共通のねらいとしており、子どもたちに本物のオペラに触れる機会を提供している。子どもたちは、音楽専門家に学び、オペラ歌手とともに歌い、ステージ体験も行う。地域の専門機関・学校・保護者が連携し

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12) 「新学習指導要領実施 初等科・中等科音楽教育基礎と指導法～系統性に視点をおいて～」	単著	平成 30 年 11 月	株式会社 E R P	てより良い教育を行うことを目指す場でもあるのだ。学習指導要領の改訂に向けて「創造性」が重要視されるなど、教育改革の準備が進められている。音楽は一生の友であり、生涯学習につながっていくものである。イタリアの学校外教育との連携にも示唆を得ながら実践研究を進めていく。 2020 年度から、小中高の新学習指導要領が順次全面実施され、知識と技能だけでなく、思考力・判断力・表現力の育成を掲げ、「主体的・対話的で深い学び」による授業が進められる。新学習指導要領では学習者である児童・生徒の視点に立った記述が徹底されている。「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」、指導する教師の意識や授業実践の在り方が大きく変わるといえる。本書では新しい音楽科教育の目標・内容について、基本をおさえ、育成すべき資質や能力を具体化し指導・支援にあたれるよう述べている。特色として、小学校から中学校にわたって 系統的な指導を目指している。子どもの発達段階の基本的な考え方や、青年期の発達特性に基づき、「表現」（歌唱・器楽・音楽づくり）の指導、「鑑賞」の指導の在り方とともに指導・支援方法のポイントについて述べ、具体的な実践の展開に結びつけていくよう導いている。特に歌唱をはじめとして、共通教材について留意し、具体的な実践の展開に結びつけていくよう述べている。また、指導計画の在り方、作成の仕方、評価を生かした授業づくりについては、実例を示している。さらに今回の改定の重要課題「カリキュラムマネジメント」の実現に向け、社会に開かれた教育課程の中で、様々な体験をし、資質・能力を高めていけるよう、「音楽活動の広がり」「参加と共同による授業づくり」など、現場目線から具体的に述べている。 B 5 判 全 90 頁
（学術論文等） 1) 浜甲子園中学校 学校経営方針及び 学校評価のまとめ	単著	平成 23 年 12 月	西宮市立浜甲子園中学校 研究紀要 p.1～3 p.98～104	「学校経営方針」「学校評価のまとめ」 平成 22 年度、浜甲子園中学校研究のまとめ。 学校評価（教職員・生徒・保護者・地域）を実施し、学校評価委員会を含む地域連携協議会にてその結果について様々な意見をいただく。また、第三者評価として古川治甲南大学教授に学校関係者評価委員会に入ってもらい、ご意見もいただいた。その成果と課題をまとめ論ずる。次年度の学校運営に生かしていくべく本校の強みを明らかにし、改善点を具体的にあげ次年度の方向性を論ずる。 全 105 頁
2) 「若い教師に伝えたいこと～範を示せる教師であれ～」	単著	平成 24 年 3 月	週刊教育 PRO 3.20・27 株式会社日本教育総合研究所 p.16～17	音楽教育や演奏活動を通して、体験し学び取ったことなど、教育活動の一端を若い教師に伝えた。まず、教育活動の核となる教科経営、学級経営について述べる。生徒の学力を向上させ、豊かな人間性を身につけさせるために、教師は身近な大人として常に範を示せる存在でありたい。地域社会の中で愛され信頼される教師であるために、常に自己研鑽に励み、自己を磨く努力をすることを提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3) ～家庭・地域と連携して進める兵庫の道徳教育～ 「兵庫県版道徳教育副読本『心かがやく』を活用して」	単著	平成 24 年 5 月	刊「兵庫教育」5月号 道徳教育の推進 兵庫県教育委員会発行 p. 18～21	兵庫県版道徳教育副読本『心かがやく』を活用して」 兵庫県教育委員会は、道徳教育副読本を作成している。 本校は副読本の効果的な活用を図る授業づくり、学校・家庭・地域が一体となって進める道徳教育の実践研究指定校となった。全教師の共通理解のもと推進し、教材研究を深める。道徳教育を学校が中心的な役割を果たし計画的に推進し、三者で深めていくこと、副読本を活用し3学年の成長を見通した道徳教育年間計画の整備を行っていくことなど述べている。
4)新任教師に伝えたいこと[再掲] ～生徒指導の心得～	単著	平成 24 年 6 月	週刊教育PRO 株式会社日本教育総合研究所 週刊教育PRO 6.19 監修者 梶田叡一 p. 24～25	いじめ、暴力行為等の児童生徒の問題行動等については、依然として教育上の大きな課題となっている。何かが起こってからでなく、開発的な生徒指導を目指しておちついた学習環境のもと心豊かに学校生活が送れるよう①～⑨について心がけて欲しい。
5)「新学習指導要領における、音楽科授業への提案—音楽を通した感動体験から豊かな心を育む」	単著	平成 24 年 9 月	週刊教育PRO 9.18 株式会社日本教育総合研究所 p. 12～13	「新学習指導要領における、音楽科授業への提案—音楽を通した感動体験から豊かな心を育む」 新学習指導要領において音楽科ではこれまで通りの授業数は確保している。しかしながら、中学校では個人選択授業が無くなり、総合的な学習の時間は小・中学校とも減少し、実質的には音楽教育の場は減少していると言える。限られた授業時数の中で授業を見直し、伝統音楽など授業に取り入れていく必要がある。地域の小・中学校の9年間の連続した取り組みも意識し、歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏を含む器楽演奏指導・鑑賞等、新教育課程における年間計画について提案した。
6)「音楽科を核とした合唱活動の広がり」	単著	平成 24 年 10 月	週刊教育PRO 10.16 株式会社日本教育総合研究所 p. 22～23	音楽科の活動を広げ、深め、歌声の響く学校を目指すために限られた時間の中で、基本は授業で指導し、音楽的行事を成功させ、生徒たちに成就感や達成感を味わわせることの重要性を論じた。多くの感動体験を通して生徒たちの音楽に対する感性がより育まれ、心をより強くより豊かに育てる。そのため大きな声で生き生きと歌うための発声法、歌唱法、合唱づくり、音楽をより豊かにするピアノ伴奏法、編曲についてなどその手順や配慮せねばならないことについて、具体的に論じた。
7)「活気あふれる学校運営～小規模校の特色を生かして～」	単著	平成 25 年 1 月	週刊教育PRO 12.13 株式会社日本教育総合研究所 p.20～23	「活気あふれる学校運営 ～小規模校の特色を生かして～」 浜甲子園中学校において活気あふれる学校を目指し取り組んできた成果のまとめを紹介する。生徒の主体性を生かす生徒会活動、トライやる・ウィークの取り組み、総合的な学習の時間における、特色ある活動としてマリン体験、開かれた学校への取り組みとして緑化サポート（環境づくり）・音楽科における授業サポート（和楽器等支援）における取り組みを紹介する中で、確かな学力をつけ、豊かな情操を育む教育活動の在り方を論ずる。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8)特集＜やる気＞を引き出し、育てる（教育フォーラム 54 号）	単著	平成 26 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会 p. 128～130	＜各教科等の学習を支える言語活動＞において、各教科領域全体で言葉の力を育てるための方策を考察し、子どもに新の「賢さ」を育てるために教師にできること・すべきことを提案する。 全 138 頁 編集代表 梶田叡一 担当部分 特定非営利活動法人人間教育研究協議会活動だより 第 29 回 2014 年度人間教育実践交流会 in 奈良 「言葉の力と学力向上～各教科等の学習を支える言語活動～」の内容説明とともに、今年度の活動について紹介する。
9)音楽科教育におけるアウトリーチに関する一考察～地域の音楽文化とつながる～	単著	平成 26 年 8 月	学校音楽教育研究 発表要旨集録 P. 90 資料 4 p	現行の学習指導要領において、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチ（洋楽器演奏者、和楽器奏者、声楽家、アンサンブル等）を活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。
10)「School music education in Japan and Italy」日本から見たイタリアの学校音楽教育～イタリアでの実地音楽育調査から～	単著	平成 26 年 9 月	Scuola Primaria “Ermenegildo Pistelli” ピステッリ小学校（幼小・中学校の一体型学） 全 7 p	在イタリア日本大使館一等書記官西池万葉氏の紹介を受け、イタリアの初等科音楽教育研究会に出席する。実地音楽教育調査から、第 1 に義務教育における音楽教育のカリキュラムの比較、第 2 に義務教育における音楽授業の実践研究、第 3 に音楽科を核としたプロジェクトの立案についてなどまとめ、在イタリア日本大使館とピステッリ小学校へ報告する。日本においてもイタリアにおいても、より豊かな音楽教育活動が実施できるよう、研究を深めていく。
11)音楽科教育の有益性における一考察～歌唱・合唱活動を通して～	共著	平成 27 年 1 月	奈良学園大学人間教育学部 p. 47～55	学校だからこそ得られる音楽を通じた感動体験は、生涯にわたって「生きる力」の育成を図ることにつながっていくものと考え。学校教育における音楽科教育の歴史から、音楽科教育に託されたものや、その有益性について示すとともに、どのように活性化させていくのか考察する。発達段階に応じた発声法・歌唱法、パート練習の仕方、パートリーダーの育成、合唱指揮法、ピアノ伴奏法など、理論とともに具体的に述べ、活動手順を示す。
12)特集＜実践的思考力・課題解決力を鍛える＞（教育フォーラム 55 号）	単著	平成 27 年 3 月	金子書房 人間教育研究協議会 p. 147～149	＜実践的思考力・課題解決力を鍛える＞において PISA 型学力をどう育てるかに、実践的な課題解決をどう図っていくか、思考力や問題解決力をどのように鍛えていくか、アクティブラーニングをどう組み入れていくかなど考察し実りある学習活動の展開を提案する。 B 5 判 全 157 頁 編集代表 梶田叡一 担当部分 特定非営利活動法 人間教育研究協議会活動報告とまとめ 第 29 回 2014 年度人間教育実践交流会 in 奈良 「言葉の力と学力向上～各教科等の学習を支える言語活動～」の発表内容をはじめ、1 年間の活動のまとめを記載する。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13)「人間教育を支える音楽科教育～」	単著	平成 27 年 3 月	奈良学園大学人間教育学会誌 全 10 頁	本論文では、人間教育を支えるものとしての学校教育における音楽科教育の意義・果たすものについて論じる。その際、豊かな表現を工夫し、総合的な表現活動へと発展させた「合唱劇」の実践を通して考察する。歌唱・合唱の指導、ピアノを始め器楽伴奏の指導についてもふれる。今後の課題を探るとともに人間形成に大きく関わる音楽科教育が、学校教育の中で、より活性化していくための方策を考察する。
14)「音楽科教育におけるアウトリーチに関する一考察～地域の音楽文化とつながる～」	単著	平成 27 年 3 月	武庫川女子大学紀要 p. 25～30	現行の学習指導要領において、音楽科の授業時数は確保しているが、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチを活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。音楽科教育をより豊かにし、心の育みが行っていくよう地域の音楽文化（大学音楽学部・和楽器グループなど）とのつながりを考察する。
15)「音楽科教育におけるアウトリーチに関する一考察」	単著	平成 27 年 3 月	学校音楽教育研究 日本音楽教育実践学会紀要 p. 18～21	音楽活動を通して感動体験を味わわせることは、一人ひとりの豊かな心を育み、生きる力を培っていくものとする。音楽科教育の活性化のために、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。そのことにより生徒たちの歌唱や器楽の表現力をより高めることとなる。音楽科教育をより豊かにするため、音楽の専門家や和楽器の演奏団体、地域の大学などとのつながりを考察する。
16)「中学校教育における音楽科教育活動に関する一考察」～地域の音楽文化との連携から～	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学人間教育学会誌 全 10 頁	中学校における音楽活動をより充実・発展させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討する。担当教諭が児童生徒を指導支援するという授業に、ゲストティーチャーが第 3 者として入り、授業を展開する。アウトリーチを導入することにより、学校では新たな学びのスタイルが生まれる。地域のホールや専門家など音楽文化と学校の連携の在り方を考察するとともに、アウトリーチを組み入れた授業案を創作し、提案する。
17)「アートが根付くイタリアの音楽科教育研究調査を通して」	単著	平成 27 年 11 月	指導と評価 2015.12 図書文化 p.4～5	<だんわしつ>執筆。機会を得て、2 度目になるイタリア（ローマ）の学校音楽教育を実地調査することができた。多くの文化遺産に包まれているイタリアの学校音楽科教育について研究を深め、日本の音楽科教育への示唆を導き出したい。具体的には歌唱活動に注目した学校音楽科カリキュラムに注目し、日本で根付いてきたカリキュラムを、文化遺産の抱負なイタリアの教育から検討することで、より良い授業を創造する機会としていきたいと考える。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
18)「イタリアの道徳教育と学習者の評価」～イタリアの学校教育実地調査から～	単著	平成 27 年 12 月	指導と評価 2015.12 図書文化 p.22～24	＜特集＞ 道徳教育と評価 いよいよ学習指導要領改訂の準備が始まっている。道徳の教科化、評価方法のあり方については、議論の集中するところである。カトリックの総本山バチカン市国があるイタリアでは、宗教が学校の授業の中に組み込まれ、長く培われた伝統と習慣で気付きあげられた生活が現在も営まれている。しかし、以前から宗教とは別に道徳「憲法とシチズンシップ」（道徳）が教科として導入されている。学習者の評価は、10 段階であり、「行動面」は文章で評価される。イタリアの学校教育について研究を深め、教育改革の準備に向けて示唆を導き出すことは意義あることと考える。
19)「学校教育における音楽科教育活性化に関する一考察」～音楽科を核とした合唱劇の取り組みから～	単著	平成 27 年 12 月	武庫川女子大学紀要 全 8 頁	音楽科教育の活性化について、これまでの長年にわたる学校現場の実践の一つである総合的な表現活動へ発展させた合唱劇の実践から考察する。人間の根源的な活動である音楽活動は学校生活を豊かで潤いのあるものとするとともに、情操豊かな生徒を育む土壌ともなっていることが、その後の生徒・教師・地域や保護者の感想や意見から読み取ることができた。関わった教師たちは、生徒が変化していく様子を目の当たりにしている。音楽科の時間を核として、学活行事や総合的な学習の時間において、音楽活動を発展させていけるよう考察する。
20)「人間教育」の根源である「いのちの教育」に関する一考察 ～中学校における実践から～（査読有り）	単著	平成 28 年 5 月	人間教育学会研究紀要 p.133～p.144	本研究では、「2013 年『いのち』に関わる意識調査『ここに関するアンケート』の結果分析から導き出した 5 つの視点が、どのような教育実践で確かめられるのかを検証しようと試みた。中学校において「いのち」に関わる授業実践の前後にアンケート調査を行い、比較調査では、『本当に人のいのちは大切なんだ！』と心の底から感じたことがありますか」とのクロス集計において考察した。その結果、アンケートのクロス集計や、指導にあたった教師、生徒の感想や意見から、多くの生徒の心の動きを確認し、ポジティブな効果を捉えることができた。また、これらの取り組みを活かし作成した、中学校における「いのちの教育」の年間カリキュラムを紹介する。
21)人間教育の普遍的要素を成す音楽科教育における一考察 ～ 中学校音楽科を核とした総合的な表現活動の視点から ～	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学人間教育学会誌	音楽家教育は人間の成長や発達において、欠くことのできないものである。教育課程においては音楽科の学習は、豊かな心の醸成を担うものとして位置づけられている。本研究では長年にわたる合唱・合唱劇の取り組みにおいて、音楽を核とし、教科の学びだけでは得られない豊かな学びがあり、総合的な力の向上を生徒自身が実感し、その後の学校生活に変化を与えていることを確認した。クラスの団結力が高まり、これまでより発言しやすい雰囲気となったり、教え合いが活発になるなど、授業の活性化が、各教師の感想や意見から明らかになった。音楽活動は学校の生活全体を豊かで潤いのあるものとするとともに、情操豊かな生徒を育む土壌ともなっていることが、実証されたといえる。学校教育全体計画の一環として意図的に計画的に対応することも大切であり、このような活動が音楽活動の内容充実を図る要因となりうるものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
22) 人間教育の普遍的要素を成す音楽科教育における一考察 ～ 中学校音楽科を核とした総合的な表現活動の視点から ～	単著	平成 28 年 12 月	人間教育学会研究紀要	学校生活の中で心の豊かさや情緒の豊かさを育む教育活動を進めていく必要性を論じる。音楽活動を通して感動体験を味わわせることは、生徒たちの豊かな心を育み、生きる力を培っていくものである。音楽科教育の活性化について、まず、現在の生徒を取り巻く状況を把握し、学習指導要領における音楽科教育の歴史を確認する。そのことにより、音楽科教育に託されたことや、意義について理解し、総合的な表現活動である合唱劇の実践から音楽教育の活性化を考察する。
23) 中学校における「いのちの教育」と音楽科教育による一考察 — 成就感・自尊心を育む歌唱・合唱活動を通して —	単著	平成 29 年 3 月	武庫川女子大学院教育学研究論集	各教科が道德教育との関連を考慮し、学校教育として、生徒らに他者との関係づくりや集団性を育成することの必要性が言われている。中学校教育における音楽科授業では、音楽力を高めるとともに、他者や学級での協力や団結する力を培っている。そういった中で、生徒たちの成就感や自尊心も育まれていく。他者との関係性を重視する指導は、音楽の感性的な面と結びつき人間性育成や社会性育成を目的とする道德教育とともに、「いのちの教育」において、音楽科授業の果たす役割は大きい。 生徒たちにとって、思ったことを自己の外に表出できることは大事なことである。心を合わせて歌うことで、大きな感動を生むといった感動体験を少しずつ積み上げていくことによって、「命の大切さ」を確かに生徒たちの心に刻み込むことができるのである。限られた時間の中で、学習を深めていくために道德や総合的な学習の時間、各教科などを連携させて、年間を見通した計画的組織的な取り組みを考察し、年間カリキュラムの流れに沿って行われるよう、教育計画を提案する。
24) イタリアの音楽科教育における一考察～小・中学校における歌唱指導の視点から～	単著	平成 29 年 12 月	奈良学園大学人間教育学会誌	多くの文化遺産に包まれているイタリアの学校音楽科教育について研究を深め、日本の音楽科教育への示唆を導き出す。歌唱面では小・中学校とともに、注意深く「聴く」ことに力を入れ、良い声づくりとともに音感をつけようとしている。また、外部の専門家が入ったり、地域に出て（音楽ホールなど）学習するシステムが定着している。そうした中で子どもたちの主体性や創造性が育まれているのである。
25) イタリアの音楽科教育におけるカリキュラムと実践における一考察～歌唱指導の系統性に視点を置いて～	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学会誌	本論文において、イタリアの音楽科教育における歌唱指導の系統性に視点を置いて、カリキュラム内容と授業実践に焦点をあて、研究を進め、次のことが明らかになった。カリキュラムにおいて、日本では総括目標は音楽的側面からの目標が設定されているが、イタリアでは音楽を「人間教育の基礎であり普遍的要素を成す」と明確に示しており、協力性や社会性を促進させ、創造性と共有能力の発揮など人間教育の基盤となることを示している。そして、表現や鑑賞のみならず、社会、人間、生活における音楽を包括的な視野で思考することが要求されているなどである。示唆としては、イタリアの音楽科の理念にみられる。協力性や社会性を促進させ、創造的な人材育成に貢献する教科

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
26) 「ベル カント発声法の教育的考察～ ローマからウィーンへ～」	単著	平成 31 年 3 月	人間教育学会研究紀要	が明確に示されている点、音楽の基礎的能力の在り方や、学習活動への展開も明示し「生活と音楽との関わり」が重視されていることである。様々な学校でカリキュラムがいかに関心され実践されたかを捉えて、初めてそのカリキュラムの成否は検証されるのである。学校現場で、どのように計画され、実行されているのか今後の研究につなげていく。 歌を歌うことから言葉ははじまったと言われている。歌い合うことで仲よくなれる、つまりコミュニケーションの基礎とも言えるのである。 歌唱は、人間に等しく与えられた声帯という楽器で奏でる。人間の声帯は素晴らしい楽器である。美しく鳴らすための健康管理から楽器作りまでを正しく行えば、思うような音楽が奏でられるという幸せがある。日本の歌唱や合唱指導は、活発に行われているが基本的な指導法については未だ確立されているとは言えない。イタリアの古から引き継がれてきた歌唱指導法や創意工夫に学び、発達段階に応じ、正しく表現する方法である呼吸法や発声法など基礎技能の教育方法の検証を深めてきた。伝統的なベルカント唱法を引き継ぎ、その継承にあたっているウィーン国立音楽院での研究調査、及びウィーン少年合唱団での実地調査を行う中で、喉に無理なく低音から高音まで、気持ちよくのびやかに歌えるベル・カント唱法について研究を進めた。日本で根付いてきた歌唱指導法を、ベルカント唱法発祥地のイタリア、そしてウィーン教育から検討することで、学年の成長に応じた、系統的な歌唱指導を考察した成果を述べる。
(その他報告書) 1) 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発事例」	単著	平成 27 年 1 月	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金(基盤研究 B) 課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書 p.60～69	「いのちの教育部会」では、幼・小・中・高等学校の成長に応じたカリキュラムを作成し(中学校を担当する)、各時期のねらいを設定した。「いのち」に関わる教育活動の大切さを検証するとともに、どのようなプロセスをたどって生徒が「いのち」の大切さを実感するのか、公立中学校において「いのちの教育」を実践研究する。その際、取り組みの前後にアンケートを実施し、分析・考察する。(研究協力者)
2) 「西宮市立山口中学校における実践」	単著	平成 27 年 1 月	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金(基盤研究 B) 課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」<いのちの教育部会研究報告書> p.17～26	共著者・眞鍋美穂 公立中学校における「いのちの教育」の実践研究について報告する。2013 年実施の「心のアンケート」(児童・生徒のいのちに対する意識の実態Ⅱ)におけるクロス集計結果内容を反映させた実践「ホメホメシャワー」について、道徳における兵庫県道徳副読本「心がやく」より『語りかける目』の実践について、『『ありがとう』と言われる一日をすごそう』についてなど。(研究協力者)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3)「中学校における『いのちの大切さ』を実感させる実践研究の考察と課題」	単著	平成 27 年 2 月	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金(基盤研究 B) 課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」<いのちの教育部会研究報告書> p.41～43	「いのちの教育」の実践研究について、取り組み前後に「心のアンケート」実施し比較調査を行う。 そのクロス集計において、いくつかの項目で、生徒の心の動きがみられた。今後、学校全体で共通理解を進めていくことが大切である。 限られた時間の中で、学習を深めていくために道徳や総合的な学習の時間、各教科など連携させて、年間を見通した計画的組織的な取り組みが必要である。(研究協力者)
4)「いのちの教育カリキュラムモデルの開発～音楽科教育における成就感・自尊感情の育み～」	単著	平成 27 年 3 月	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金(基盤研究 B) 課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書 p. 119～132	「いのち」に関わる教育をより深めていくために、音楽科における「いのちの教育」の可能性について考察する。音楽科で取り組んできた「合唱活動」において表現活動の基盤となる合唱は、音楽を苦手とする生徒にとっても、仲間とともにその美しさを共有できる場である。伴奏には様々な楽器演奏を加え、さらに豊かな表現を創りあげることができる。仲間と協力して活動する大切さを学びとり、連帯感が育まれ、より意欲的な生活態度につながっている。今後、教育現場への提案・実践研究を進め、より具体性のある教材を発信していきたいと考える。
5)「音楽を通した街づくり」	単著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学	和文化教育学会全国大会にて、コーディネーターとして提言「音楽を通した街づくり」 資料「和&輪コンサート」実施とまとめの執筆
(その他) 「学会等発表等」 1)課題「新しい時代を創造する豊かな心と確かな学力を育む学校運営」	—	平成 21 年 8 月	阪神地区女性学校運営研修会 伊丹シティーホテル	幼・小・中学校、教育委員会において、各学校園が運営上の諸問題について、どのように改善するか交流する。 テーマ 「学校・家庭・地域社会の力強い連携のもと生徒の自立を支援する」をテーマに、新しい教育課程づくりについて述べる。①確かな学力を基盤とした生きる力を育成する新教育課程の創意工夫 ②家庭・地域社会と連携を深め、豊かな教育環境づくりについて、など特色ある教育課程づくりについて述べる。 阪神地区女性学校運営研修会
2) 人間教育実践交流会 西宮フォーラム発表 新教育課程における音楽科授業への提案 ―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む―	—	平成 23 年 8 月	人間教育研究協議会 兵庫県私立百合学園小学校	新教育課程における音楽科授業への提案として、小学校からは「生き生きした歌声を」、中学校からは「合唱活動を通して豊かな心を育む」、大学では「デジタルコンテンツの授業への活用」など、ことばの力を生かした音楽表現力の育成について考察する A 4 判 P. 68～69
3) 音楽を通した感動体験から豊かな心を育む ～音楽科を核とした合唱劇の取り組みから～	—	平成 25 年 8 月	第 18 回日本音楽教育実践学会 発表要旨集録 お茶の水女子大学	音楽科を核とした合唱劇の取り組みについて、発声・合唱・独唱・ピアノ伴奏を含め、感動的な取り組みの流れと共に、豊かな心の育成の関わりについて論じる。学校教育において音楽科教育活動は、いじめ、不登校、暴力行為等、問題を抱える生徒たちの心をなごませている。心の豊かさや、情緒の豊かさを育む教育活動を進めていく大切さを論じる。 A 4 判 P. 84 資料 4 頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4) 人間教育実践交流会 大阪ミニフォーラム発表 「学級指導と音楽行事」	—	平成 26 年 2 月	人間教育研究協議会 内田洋行大阪オフィス	ミニフォーラムのテーマ「言葉の力と学力向上」を受け音楽部会では「学級指導と音楽行事」をサブテーマとする。音楽科教育を支えるものとして言葉の力があり、歌詞の読み取りなど言葉の力を育みながら、学級での合唱づくりや行事への取り組みについて発表するとともに、意見交流を行う。 資料 4 頁
5) 音楽を通した感動体験から豊かな心を育む ～音楽科を核とした合唱劇の取り組みから～	—	平成 26 年 3 月	日本学校音楽教育研究	個性や創造性を発揮することが求められつつある中で、生徒一人ひとりの多様な能力の伸長を目指すという観点からの対応を図り、心の豊かさや情緒の豊かさと言った視点での教育活動を進めていかねばと考える。音楽科を核とした合唱劇の取り組みから音楽科教育の充実発展を考察する。 A 4 判 P. 117～118
6) 奈良フォーラム発表 テーマ ＜言葉の力と学力向上＞～音楽科の学習を支える言語活動～	—	平成 26 年 8 月	人間教育研究協議会 奈良学園大学	限られた授業時間の中で、音楽活動をより充実・発展させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを行っていきたいと考える。学校と地域の音楽文化とのつながりを考察する。 A4判 P. 45 資料 4 頁
7) 音楽科教育におけるアウトリーチに関する一考察～地域の音楽文化とつながる～	—	平成 26 年 8 月	第 19 回日本音楽教育実践学会 熊本大学	現行の学習指導要領において、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチを活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。
8) 「日本における初等科音楽教育」	—	平成 26 年 8 月	Scuola Primaria "Ermenegildo Pistelli" ピステッリ小学校（幼・小・中学校の一体型学）	イタリアの初等科音楽教諭音楽授業研究会にて発表。日本での初等科音楽教育について、基本内容と指導法について、発達段階に応じた歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞指導法について、具体的な例をあげながら示す。指導のためのピアノ、歌唱、弾き歌いの上達法、楽典の基本事項も資料として示している。イタリアの初等科音楽教育についての発表を受け交流を深める。 A4 4 頁
9) 「小・中・高等学校意識調査結果を踏まえた『いのちの教育』のカリキュラムモデル開発への取り組み」	—	平成 26 年 11 月	岡山心理学会第 62 回大会にて発表 岡山心理学会大会論文集	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」 「2013 年『いのち』に関わる意識調査『こころに関するアンケート』」を実施し、クロス集計の結果分析する中から、5 つの「いのちの大切さ」を実感させる視点を導き出した。これらの視点を生かして、小・中・高等学校における発達段階に応じた『『いのちの大切さ』を実感させる教育カリキュラム』を作成した。一連の取り組みについて発表する

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10) 主体性・創造性を育む音楽科教育活性化における研究	—	平成 28 年 3 月	教師学会にて発表 奈良学園大学	次期学習指導要領の改訂に向けて準備が進められている。人が人となるための基礎としての音楽をはじめとした芸術教育が、独立した必修教科であり続けた意義を再確認し、音楽科改善の視点から、さらなる充実をめざさねばと考える。これまで取り組んできた合唱活動や総合的な表現活動である合唱劇の実践から音楽教育の活性化を考察するとともに、アクティブラーニングを活用した取り組みとして発展させ、主体性・創造性を育む教育活動を考察する。 資料 A4 4 頁
11) 学校教育における音楽文化伝承に関する一考察～地域の伝承家とのつながりから～	—	平成 28 年 10 月	日本音楽教育学会 (横浜国立大学)	学習指導要領に「伝統・文化の尊重」が明記されたことにより、和楽器の必修が言われ、教育環境の整備や指導者の研修など、行政において、組織的に取り組まれてきたが、現状としては、「どう指導したら良いのか」という現場の声が未だにある。「楽しみ、親しめる和楽器」「邦楽への関心」を高めることに、授業のねらいを置き、教育内容が広がっていくようなカリキュラムづくりについて、授業実践から考察し、発表する。 資料 A4 4 頁
12) まほろばからの伝統文化教育の発信 コーディネーター・提言	—	平成 28 年 11 月	和文化教育学会全国大会 奈良学園大学	「まほろばからの伝統文化教育」をテーマに、各地から興味深い提案を受け、研究協議を行う。 コーディネーターとともに提案「歌い継ぐ日本の心の歌」の活動紹介 資料「和&輪コンサート」実施とまとめの執筆)
13) 日本人間教育学会「新学習指導要領と人間教育の理念—人格の完成を目指す—」音楽部会のコーディネーター・提言	—	平成 29 年 2 月	奈良学園大学	新学習指導要領における音楽科教育～言葉の力を活かした音楽表現力の育成～をテーマに「音楽教育におけるアクティブラーニング」、「地域創生—音楽を通じた街づくり」等、発表を受け研究協議を行う。 「音楽を通じた街づくり—「和&輪コンサート」の実施とまとめの執筆 資料 A4 10 頁
14) 音楽科教育活性化における研究	—	平成 30 年 2 月	教師学会にて発表 甲南大学	全国大会発表「学校教育における音楽文化伝承に関する一考察～地域の伝承家とのつながりから～」 資料 A4 8 頁
「合唱指導及び審査員、等」 1) 「小さなコンサート ～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 21 年 9 月	京都こども文化会館 小ホール	共同開催。ヴァイオリン・ピアノをはじめとする、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサート。「ビリーブ」等、合唱指導指揮・ピアノ伴奏の指導を行う。
2) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクール、審査にあたる	単独	平成 21 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
3) 「小さなコンサート ～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 22 年 7 月	京都こども文化会館 小ホール	共同開催。ヴァイオリン・ピアノ・歌唱による演奏会。幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画し、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「心の瞳」など。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたる。	単独	平成 22 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
5) 西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め、賞の授与とともに全体の講評を行う。	単独	平成 22 年 11 月	鳴尾文化ホール	西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに講評を行う。審査にあたり、ピアノ伴奏や、発声、ハーモニーのバランス等を考慮し審査、講評する。
6) 西宮市立中学校中学生中国友好訪問団団長として市内中学校代表 20 名を引率し、表敬訪問の際、合唱を指揮	単独	平成 22 年 12 月	中国紹興市元培中学校	中国友好訪問において表敬訪問の際、合唱曲「時の旅人」「茉莉花」(中国語)の指揮を行い、合唱を披露し絶賛される。また音楽授業を参観するとともに、音楽科における日中合同授業を行い交流を深める。
7) 「初秋のコンサート」	共同	平成 23 年 9 月	京都 レスパス・エラン	共同開催。ヴァイオリン・ピアノ・歌唱による演奏会。幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画する。「コスモス」等、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。
8) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて校長として指導するとともに審査にあたる。	単独	平成 23 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
9) 西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。	単独	平成 23 年 11 月	鳴尾文化ホール	西宮市立中学校合唱祭において、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。
10) 「初秋のコンサート」	共同	平成 24 年 9 月	京都 レスパス・エラン	ヴァイオリン・ピアノ・歌唱において、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画し、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「マイバラード」等。
11) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査を行う。	単独	平成 24 年 10 月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。
12) 西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。	単独	平成 24 年 11 月	鳴尾文化ホール	実行委員長を務め会の充実のため音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。市内音楽教諭が実技指導を通して学び合う場でもあり、終了後、各校への指導助言を行う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13) 「小さなコンサート ～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 25 年 9 月	京都市立国際交流会館	ヴァイオリン・ピアノ・歌唱・合唱を披露するコンサートを企画運営する。幼児から大人までの年代層の出演者によるコンサートである。「この道」等、独唱するとともに、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。
14) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査委員長として審査及び講評を行う。	単独	平成 25 年 10 月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。
15) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査委員長として審査及び全体に講評を行う。	単独	平成 26 年 10 月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。
16) 「小さなコンサート ～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 26 年 10 月	京都市立国際交流会館	ソロ・アンサンブル・ヴァイオリン・ピアノによる、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサート。出演者による合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「ビリーブ」等。
17) アウトリーチを生かした授業展開・コンサートづくりについて指導助言を行う。	単独	平成 27 年 2 月	宝塚市立末広小学校	宝塚市立末広小学校におけるアウトリーチを活用した音楽研究授業及び、まとめのコンサート・研究協議が行われる。アウトリーチを生かした授業・コンサートづくりについて指導助言を行う。
18) 筑紫鶯美会主催、三郷町教育委員会・文化協会後援の箏曲演奏会「初夏の香り」に出演する。	単独	平成 27 年 5 月	三郷町文化センター文化ホール (定員 540 名)	筑紫鶯美会代表の篠原歌鶯先生主催の演奏会に出演し、お琴、ヴァイオリン、ピアノの演奏をバックに「ふるさと」等、独唱するとともに会場の歌唱指導指揮を行う。満席になり、盛況に行われた。(観客 530 名)
19) 「初秋のコンサート」	共同	平成 27 年 9 月	京都市立国際交流会館	1 部ではヴァイオリン・ピアノの発表会、2 部は指導者の演奏会を実施する。ピアノ伴奏の指導、出演者による合唱指導指揮、独唱「エーデルワイス」等、披露する。(観客 100 名)
20) 合唱コンクールに向けた「プレ発表会」	共同	平成 27 年 10 月	西宮市立大社中学校	合唱コンクールに向けた「プレ発表会」において、3 学年学年合唱、クラス合唱 (7 クラス) への指導助言を行う。地域の小学校が参観し、小中合同の合唱の実施、小学校から感想意見の発表、中学生から小学生へのアドバイスなど、小中合同での合唱指導の場となった。
21) 「プチコンサート」	共同	平成 28 年 3 月	京都 レスパス・エラン (定員 60 名)	ヴァイオリン・ピアノの発表会及び、指導者の演奏会を実施する。ピアノ伴奏の指導、出演者による合唱指導指揮、独唱「この道」、重唱「逢えてよかったね」等、披露する。(観客 60 名)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
22) 「和&輪コンサート～歌い継ぐ、心の歌～」の企画・実施	共同	平成 28 年 5 月	王寺地域交流センター リーベルホール (定員 330 名)	大学と地域をつなぐ特別企画コンサートにおいて、童謡や唱歌、叙情歌に託された「日本の伝統文化、美しい景観や思いやりの心」を味わい、美しい箏曲の音色を楽しみ、和の音楽文化のすそ野を広げていくとともに、地域の世代を越えた人たちが交流し触れ合う場とすることを目的とした特別企画コンサート。全体の司会進行を行うとともに、独唱「この道」、重唱「さくらさくら」「荒城の月」など、箏アンサンブル、ヴァイオリンの演奏とともに披露する。 (観客 330 名)
23) 西宮市立瓦木中学校合唱コンクールにおいて審査委員長・講評	単独	平成 28 年 10 月	公江記念会館 (定員 1500 名)	西宮市立瓦木中学校(全 26 クラス)合唱コンクールにおいて審査にあたり、講評を行う。 (観客 1200 名)
24) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査委員長・講評	単独	平成 28 年 10 月	鳴尾文化ホール (定員 600 名)	西宮市立浜甲子園中学校(全 9 クラス)合唱コンクールにおいて審査にあたり、講評を行う。 (観客 550 名)
25) 西宮市立上ヶ原中学校合唱コンクールにおいて審査委員長・講評	単独	平成 28 年 11 月	西宮市アミティーホール (定員 1000 名)	西宮市立上ヶ原中学校合唱コンクールにおいて審査委員長として審査及び講評を行う。(全 19 クラス) (観客 900 名)
26) 奈良県立 3 つの高校と連携したコンサートづくりに向けた提言、指導・指揮。	単独	平成 30 年 2 月	奈良県立郡山高校合唱部 奈良北高等学校合唱部 生駒高等学校合唱部	日本の心の歌である童謡・唱歌の味わい、において、地域の人々に楽しんでいただくコンサートづくりの提言と共に、出演高校等と会場との合同歌唱に向けて指導・指揮を行う。
27) 第 3 回「和&輪コンサート～歌い継ぐ、心の歌～」主催・出演	共同	平成 30 年 5 月	王寺地域交流センター リーベルホール (定員 330 名)	「和&輪コンサート」日本の心の歌や、伝統楽器である箏・尺八の音楽を楽しみ合えるコンサート創りを目指す。自らも「初恋」など披露、合唱指揮。 声楽 木下紀章、ヴァイオリン 遠山千景、ピアノ 山本麻代、箏 アンサンブルちくし、尺八 都山流山本玉山、奈良県立生駒高校、他 2 校 (観客 330 名) 朝日新聞に掲載される。
28) 「和と輪のコンサート～歌い継ぐ、心の歌～in 郡山」出演	共同	平成 30 年 11 月	やまと やまと郡山城大ホール (定員 1000 名)	郡山市で合唱指揮者として活躍の重竹宜恵先生と共に「和と輪のコンサート～in 郡山」を実施する。日本の心の歌や、伝統楽器である箏・和太鼓の音楽を加え、楽しみ合えるコンサート創りを目指す。 声楽 瀧明知恵子、木下紀章、ヴァイオリン 奥吉奈都絵、ピアノ 山本麻代、箏 前川八詠子 村尾恵子、奈良県立生駒高校、奈良県立郡山高校、奈良学園大学他、(観客 850 名) 奈良新聞に掲載される。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
29) 第3回「和&輪コンサート～歌い継ぐ、心の歌～」主催・出演	共同	令和元年6月	王寺地域交流センターリーベルホール（定員 330 名）	「和&輪コンサート」～「日本の心の歌」と「イタリアの歌」～伝統楽器である箏・尺八の演奏と共に、和の音楽を楽しみ合えるコンサート創りを目指す。今年はベルカント唱法の発祥地であるイタリアの歌も加え、より豊かなプログラムとした。 声楽 瀧明知恵子、木下紀章、ヴァイオリン 遠山千景、ピアノ 山本麻代、箏 篠原歌鶯社中、 尺八 川崎貴久、奈良学園大学、奈良県立郡山高校、他 2 校 （観客 330 名）
（その他・音楽活動・社会貢献活動） 1)西宮市女性学校運営研修会にて歌唱指揮を行う	共同	平成 21 年 7 月	芦屋モノリス	教育長・教育委員会を交えた西宮市女性学校運営研修会にて、研修を深めるとともに、歌唱指揮を行う。
2) 音楽活動 歌い継ぐ ～日本の心の歌～	共同	平成 21 年 7 月	介護老人福祉施設シルバーコースト	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「浜辺の歌」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。お琴・フルートの伴奏で独唱し、会場の人たちへの指揮を行う。
3) 音楽活動 歌い継ぐ ～日本の心の歌～	共同	平成 21 年 12 月	介護老人福祉施設ケアハウス花屋敷	「花の会」瀧明知恵子（お話・歌・ピアノと担当）、フルート・琴奏者とともに介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに童謡唱歌「ペチカ」等を会場と共に歌う。独唱するとともに、歌の指導指揮を行う。
4)鳴教会研修会及び総会において歌唱指導指揮を行う。	共同	平成 21 年 12 月	武庫川女子大付属高校視聴覚室	鳴教会総会及び研修会において、「子どもたちの環境」の講話を受け、会員交流を行うとともに、歌唱指導指揮を行い、共に歌い合う。教員 40 名が集う。
5) 音楽活動 歌い継ぐ ～日本の心の歌～	共同	平成 22 年 7 月	介護老人福祉施設夢御殿山	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「朧月夜」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。お琴・フルートの伴奏で独唱し、会場の人たちへの指揮を行う。
6)楽朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）演奏役員として、「楽朋会演奏会」を行う。	共同	平成 22 年 12 月	兵庫県芸術文化劇場小ホール（平成 22 年～26 年）	武庫川女子大学音楽学部後援 2 年に 1 回、出場者を募り、コンサートを開催する。独唱、アンサンブル、ピアノ独奏・連弾を行う。バイオリンアンサンブル他、演奏役員として貢献する。300 人の観客がおとずれる。
7) 音楽活動 歌い継ぐ ～日本の心の歌～	共同	平成 23 年 1 月	介護老人福祉施設花やしき	花の会 瀧明知恵子（歌・ピアノを担当）、フルート・琴奏者とともに、介護老人福祉施設にて音楽演奏を行う。「冬景色」等、唱歌を会場と共に歌う。会場の歌のピアノ伴奏や琴・フルートとのアンサンブルなど行う。
8) 音楽活動 歌い継ぐ ～日本の心の歌～	共同	平成 23 年 1 月	介護老人福祉施設ケアハウス花屋敷	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに童謡唱歌を会場と共に歌う。「雪の降る街を」等、独唱披露し、歌の指導指揮も行う。
9)鳴教会研修会に及び総会において歌唱指導指揮を行う。	共同	平成 23 年 3 月	武庫川女子大付属高校視聴覚室	鳴教会総会及び研修会において、「体験の言葉化」の講和を受け、会員交流を行うとともに、歌唱指導指揮を行い、共に歌い合う。教員 40 名が集う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10) 音楽活動 歌い継ぐ ～日本の心の歌～	共同	平成 23 年 7 月	介護老人福祉施設夢御殿山	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「花かげ」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。独唱披露し、歌の指導指揮も行う。
11) 音楽活動 歌い継ぐ ～日本の心の歌～	共同	平成 24 年 8 月	宝塚市福祉協議会 仁川デイサービスセンター	「花の会」フルート・琴奏者とともに、音楽演奏会を行う。歌唱を担当し、「茶摘み」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。歌の指導指揮も行う。
12)第 63 回全日本中学校長会研究協議会・近畿中学校長会研究協議会式典において「国歌斉唱」の伴奏を務める。	単独	平成 24 年 10 月	大阪国際会議場	大阪で行われた第 63 回全日本中学校長会研究協議会・近畿中学校長会研究協議会式典において、「国歌斉唱」の伴奏を務め、全国から参集した中学校長の歌声が会場中に響き渡った。
13) 音楽活動 歌い継ぐ ～日本の心の歌～	共同	平成 24 年 12 月	介護老人福祉施設夢御殿山	介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「ふるさと」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。独唱披露し、歌の指導指揮も行う。
14)鳴教会研修会に及び総会において歌唱指導指揮を行う。	共同	平成 25 年 3 月	武庫川女子大付属高校視聴覚室	鳴教会総会及び研修会において、「心身の健康」についての講和を受け、意見交流。副会長として学校教育における音楽をはじめとする情操教育の大切さを語るとともに、歌唱指導指揮を行い、共に歌い合う。
15) 音楽活動 歌い継ぐ ～日本の心の歌～	共同	平成 25 年 7 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」 瀧明知恵子（歌・ピアノを担当）、フルート・琴奏者とともに、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「朧月夜」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。
16)敬老会コンサートに出場する	共同	平成 25 年 9 月	介護老人福祉施設夢御殿山	介護老人福祉施設での敬老会コンサートに出場する。講和を行うとともに、童謡唱歌「浜辺の歌」等を会場の指導指揮を行い、会場と共に歌う。
17) 音楽活動 ＜日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞	共同	平成 26 年 6 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」として、音楽演奏を行うとともに童謡唱歌「朧月夜」等を会場と共に歌う。会場の指導指揮も行う。
18) 敬老会コンサートに出場する	共同	平成 26 年 9 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」として、敬老会コンサートに出場する。講話・演奏（フルート・琴）とともに歌唱指導を行う。童謡唱歌「もみじ」等を会場と共に歌う。
19) 楽朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）演奏役員として、「楽朋会演奏会」を行う。	共同	平成 26 年 12 月	兵庫県芸術文化劇場小ホール	武庫川女子大学音楽学部後援 2 年に 1 回、出場者を募り、コンサートを開催する。独唱、アンサンブル、ピアノ独奏・連弾を行う。バイオリンアンサンブル他、演奏役員として貢献する。300 人の観客がおとずれる。
20)音楽活動 ＜日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞	共同	平成 27 年 3 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	童謡・唱歌・わらべうたの講話・演奏「さくらさくら」・歌唱指導を行う。（他、声楽家 1 名） 講和・歌唱・ピアノを担当する。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21) 楽朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）創立50周年記念コンサートに出演する。	共同	平成 27 年 4 月	ホテル甲子園ノボテル 甲陽の間	楽朋会創立 50 周年記念コンサートではピアノ独奏、連弾、独唱、重唱、コーラスの演奏。「花」等、重唱を行う。 参加者 120 名
22) 音楽活動 ＜日本の心の歌を 歌い継ぐ～＞	共同	平成 27 年 8 月	王寺ディサービスセンター	唱歌・叙情歌の講話・独唱「朧月夜」他。ピアノ伴奏・歌唱指導を行う。学生の演奏も披露し喜んでいただく。
23) 音楽活動 ＜日本の心の歌を 歌い継ぐ～＞	共同	平成 27 年 9 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	依頼を受け、フルート奏者と共に敬老会コンサートに出場する。講和を行うとともに、独唱「夏の思い出」「浜辺の歌」等、ピアノ伴奏、会場の歌唱指導・指揮を行う。
24) 音楽活動 ＜日本の心の歌を 歌い継ぐ～＞	共同	平成 27 年 11 月	三郷デイサービス	奈良学園大学学生とともに、わらべうた・唱歌・童謡の歌唱「虫の声」他。歌唱及び歌唱指導を行う。学生の演奏を披露し喜んでいただく。
25) 音楽活動 ・社会貢献活動 ＜日本の心の歌 を歌い継ぐ～＞	共同	平成 28 年 8 月	王寺ディサービスセンター	奈良学園大学学生をとともに、音楽活動を行う。わらべうた・唱歌・童謡の歌唱「虫の声」他。歌唱及び歌唱指導を行う。学生の演奏も披露し喜んでいただく。
26) ＜奈良学園大学から音楽の贈り物＞（社会貢献活動）	共同	平成 28 年 9 月	三郷やわらぎデイサービス	奈良学園大学学生を引率し、音楽活動を行う。わらべうた・唱歌・童謡の箏演奏、歌唱及び歌唱指導を行う。「我は海の子」等。
27) ＜奈良学園大学から音楽の贈り物＞（社会貢献活動）	共同	平成 29 年 1 月	三郷やわらぎデイサービス	奈良学園大学学生をとともに、音楽活動を行う。童謡・唱歌・わらべうたの講話・独唱「荒城の月」他。ピアノ伴奏・歌唱指導を行う。学生の振り付けや様々な楽器を入れるなど楽しんでいただく。
28) 信貴山寅祭りコンサートでの講話と演奏	共同	平成 29 年 2 月	信貴山朝護孫子寺	信貴山寅祭りコンサートに依頼を受け出演。「箏・尺八演奏と日本の心の歌」和楽器と歌唱のコラボレーションを披露する。「冬景色」「雪の降る街を」等
29) 音楽活動 ・社会貢献活動	共同	平成 30 年 1 月	三郷やわらぎデイサービス	奈良学園大学学生を引率し、音楽活動を行う。童謡・唱歌・ピアノ演奏を披露し、学生の振り付けを入れるなど、共に歌い合い楽しんでいただく。
30) 音楽活動 ・社会貢献活動	共同	平成 30 年 1 月	リーベルホール	王寺町歌声サロンに依頼を受けて＜奈良学園大学から音楽の贈り物・歌と箏とピアノ演奏＞ 学生の日頃の練習の成果を披露するとともに、共に歌い合う
31) 信貴山寅祭りコンサートに出演	共同	平成 30 年 2 月	信貴山朝護孫子寺	「箏・尺八演奏と日本の心の歌」和楽器と歌唱のコラボレーションを行う。筑紫鶯美会篠原歌鶯さんはじめ、まほろば会（尺八）と共に演奏する。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 竹田 治美

研 究 分 野		研究内容のキーワード
比較言語学・外国語教育・多文化教育・翻訳学		中国古代口語史・ マイノリティーの学校教育・家庭教育
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) 留学生科目における教材の開発	平成 18 年度～現在に至る	実用性を重視し、旅行・商談・学習・生活などのニーズを応じ、基礎編と応用編に分けて、徹底的に役に立つ指導することを工夫した。単に言葉を直訳するではなく、言語の背後にある生活習慣、地域性、国民性と言語の関連性をつなぎ、価値観の違いを理解するうえで、授業内容や教材などを考えた。また、留学生の日本語科目（語彙・文法）において、生活言語と学習言語を平行線形式で考え、独自に教材を開発した。その結果、日本語能力試験の合格率が向上を目指し、大きな成果がみられた。本学の留学生のみならず現在でも駿台観光外語専門学校の教材として使用されている。
2) 遠隔技術の利用	平成 20 年度～現在に至る	授業以外、学外の語学学習にも重視し、インターネットのチャット利用を試み、随時質問を受け、学習の指導、作文や小論文の添削など行い、また、生活、進路などにも相談にも応じている。
3) 日本語・中国語スピーチ活動による課外教育	平成 21 年度～現在に至る	留学生の日本語及び中国語のスピーチコンテストの審査委員として継続的に活動するほか、出場学生に対する課外指導や、指導教員向け・実務家のセミナー活動を積極的に続けている。実用的なスピーチ教育を通じて、指導学生が学外大会等で受賞したなどの学外に誇る成果を残している。
4) 中国語科目における効果的な学習方法及び海外語学研修	平成 23 年 4 月～25 年 3 月	奈良産業大学専任講師及び准教授として共通教育科目「中国語会話Ⅰ・Ⅱ」を担当した。受講生が数名しかいない中国語科目を復活させた。興味性などを重視し、常に就職進路や国際的意識を強めさせ、物事を多方面から考える柔軟性を重視した。その結果、短期語学研修などを希望する学生も増えつつ、夏季短期語学研修が認定科目として認定された。
5) 中国語科目にアクティブラーニングの導入及び夏季短期語学研修の取り組み	平成 25 年度～現在に至る	学生の国際的な視野、多様な思考力・分析力、問題発見能力、コミュニケーション能力、学んだ知識の応用力等を育成するために、アクティブラーニングを積極的に展開している。
6) 参加型学習の機会の充実	平成 27 年度～現在に至る	ゼミ演習だけでなく、学生の主体的参加を促すために、学生による調査にもとづくプレゼンテーションや、ワークショップ方式によるアイスブレイキング、グループ・ディスカッションと発表を積極的に導入している。
7) 企業との座談会・研修	平成 28 年度～現在に至る	夏休み期間、大和工業株式会社をはじめ、大手企業への座談会と研修を行い、直接企業の管理職や新入社員からアドバイスを受け、学生も積極的に質問し、就職活動に役に立てている。

2 作成した教科書、教材 「教材開発」 1) 「日本語表現一文法編」 (奈良学園大学日本語科目専用) 2) 「日本語表現——作文・小論文編」 (奈良学園大学日本語科目専用) 3) 「コンピューター用語辞典(留学生用)」 情報学部向井教授と共同作成 4) 『漢字ドリル3000』 (奈良学園大学日本語科目専用) 5) 『中国語楽しい会話』(奈良学園大学 中国語会話科目専用)	平成 18 年度～ 現在に 至る 平成 21 年度～ 現在に 至る 平成 22 年度～ 現在に 至る 平成 26 年度～ 現在に 至る 平成 26 年度～ 現在に 至る	日本学習者のニーズに応じて、日本語能力試験 N2、N1 を目指す学習者が効率よく自習できるよう工夫した。機能語を意味によって分類して構成を考え、できるだけ簡単明瞭に文法的性格を解説しようと試みた。五十音図順で文法に関する事項を250セクションに細分し、例文で分かりやすく解説する。また、留学生が苦手な部分の社会・政治、経済を練習問題にし、一石二鳥を狙う。 B5判 52 頁 新しい作文の練習法で文章の構築力をつける練習帳である。留学生不得意な受け身、副助詞、接続詞で表現力をアップする練習帳である。 A4判 35 頁 留学生が最も理解しにくい情報学に関する専門用語を中国語に翻訳し、専門科目の授業内容の理解度を向上させることができた。(簡体字と繁体字二種類を作成) 日本能力試験 N1 を目指す留学生のために、漢字を音読みと訓読みをグループ別に構成し、効率的に習得できることを目指した。また過去数年間の能力試験1級に出題された漢字、語彙問題を徹底的に分析し、その他、漢字圏の留学生にとって落とし穴である同形語の用例を加えた。 本学の中国語会話科目は半期科目のみあり、市販の通年用教材が殆ど適用しないため、本学の学生の学力に合わせた教材を作成した。言語のみならず、習慣、文化など総合的な要素を入れて、効率的な教材の開発を試みた。修正して出版の予定。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 奈良産業大学情報学部 学生による評価 2) 非常勤講師としての教育評価 3) 奈良学園大学人間教育学部・保健医療学部 学生による評価	平成 18 年度～ 25 年度 平成 25 年度～ 現在に 至る 平成 26 年度～ 現在に 至る	学生より評価12項目においてすべて平均評価を上回り、3.8以上を維持してきた。高い出席率を維持していて、大半の学生の受講意欲が高く、「理解しやすい、熱意を感じる」と学生から評価を受けた。課外活動やクラブ活動、ボランティア活動、地域活動など学生と共に参加した。学習のみならず生活指導なども行い、学生から高い評価を受けた。特に留学生に対して、携帯電話の番号、メールアドレス、チャットIDを公開し、学習のみならず、生活、進路どの相談を24時間体制で受ける。留学生から信頼を得ている。 奈良女子大学、関西大学の中国語学科の科目においても「中国語検定試験」、中国語スピーチコンテストなどの指導をし、優秀な成績をおさめることができて、学生、大学からも好評を受けた。20年度から奈良県日本語スピーチ、全日本中国語スピーチコンテスト奈良県審査員を務めた。指導した学生が平成25年中国観光局の中国文化言語クイズ大会18賞のうち14賞を獲得した。 学生の学習意欲が高くて、出席率も良好である。講義について継続して全学の平均値を上回り、学生から高い評価を得た。また、インターネットなどを利用して随時学生の質問などを受け、指導ができるよう工夫した。毎年夏季語学研修も短時間で定員がうまる状態になる。また、留学先からも好評を受けている。

4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 地域市民講座 (財) 奈良県経済クラブ 中国語講座 2) 医療業界向け外国人看護師国家試験受験教育 3) 奈良県人権教育研究会講師 (奈良県下教職員約 50 人) 「多言語・多文化社会を目指して」 4) 長安の日本人ー阿倍仲麻呂と漢詩ー 「奈良産業大学公開講座」 5) 奈良市人権教育研究会講師 (奈良市公立学校教職員約 30 人) 「外国人生徒のライフスタイルからみる学校教育」 6) 奈良県人権フォーラム文化活動交流会講師 「アジアの小学校と日本の小学校」 (奈良県大和郡山市 小学生教員約 30 人) 7) 奈良県外国人教育研究会講師 「多文化時代における外国人家庭教育」 8) 東大阪市教育センター研究会 講演 (公立学校教職員約 50 人) 「中国の子どもたちと家庭教育ー異文化の視点から」 9) 大阪市教育センター研究会講師 (大阪市立教職 30 人) 「多言語・多文化社会へのまなざし」	平成 15 年度～現在に至る 平成 20 年度～現在に至る 平成 21 年 10 月 平成 22 年 5 月 平成 22 年 7 月 平成 23 年 4 月～9 月 平成 24 年 8 月 平成 25 年 6 月 平成 26 年 6 月	地域の経済連合会主催の語学講座の講師を務めた。また、奈良産業大学と社会人向けの「奈良駅前大学」という地域連携事業の講師を務めた。コンサートや料理教室などを主催し、本学の学生、留学生との交流を活発にさせた。本講座は 2018 年に 15 周年を迎える。毎年、語学研修、コンサート、特色のあるイベントなど開催し、地域から「民間大使」と評価され、多大な評価を受ける。28 年度から東京オリンピックのボランティアガイドの育成を取り込む。された。 ・平成 25 年 8 月中国大使館から感謝状と表彰。 ・平成 28 年 10 月 10 日「奈良新聞」に「日中民間文化の広場」報道された。 ・平成 28 年 10 月 10 日「奈良新聞」に「日中の架け橋として」報道された。 ・平成 29 年 2 月 22 日「奈良新聞」に「民間大使」報道された。 ・平成 28 年 11 月 10 日「奈良テレビ」に報道された。 経済連携協定（EPA）による外国人の看護師や介護福祉士を受け入れの日本語教育を主導、全国の総合病院に優秀な外国人看護師を送った。N1 試験及び国家試験の合格率 2 割の中、指導学生の合格者は 9 割にのぼる。関東地域の病院会、関西地域総合病院の顧問をしている。 日本の学校における外国籍の児童生徒を事例にして、彼からの日常生活及び学校生活においての問題点を取り上げて、学校現場からどのように対応したらいいかと検討する。また、日本人学生が他者と異文化との出会いによって、相互理解をすることを新しい共生の視点から検討した。 日本の歴史上、アジアとの関係構築に一生を捧げたわが国最古の留学生として、奈良から中国・長安に旅立ったことで遣唐使阿倍仲麻呂の異郷での生涯を紹介した。 奈良市の公立学校における中国籍の児童生徒の学校教育・家庭教育の問題点について検討し、彼らは日本の学校でどのような適応を遂げていくのか、彼らのアイデンティティはどのように構築されていく中の母語教育の重要性を説明した。 月一度計 6 回、小学生と教員に「アジアの小学校」をテーマに、ネーティブスピーカーを招き、文化、言語、絵本、教科書、楽器、ゲームなどからアジアの小学校を紹介した。 学校教育現場における外国人児童生徒の教育問題の背景にある家庭教育について検討し合った。 中国の幼・小・中・高・大の教育の全体像を紹介した上、現在中国の家庭教育や地域教育の差を紹介した。また、中国人と日本人の価値観や文化の差異の視点から現在の日本の学校教育における外国人児童・生徒に対する対応を考察する。 追跡調査した外国籍の児童生徒を事例にして、彼からの日常生活及び学校生活においての問題点を取り上げて、日本人学生が他者と異文化との出会いによって、相互理解をすることを新しい共生の視点から論じた。
---	---	--

10) 奈良 SGG クラブ（善意通訳ガイド協会）講師 「阿倍仲麻呂一唐での足跡」	平成 29 年 2 月	奈良遷都 1300 年記念行事の一環として、阿倍仲麻呂と遣唐使の歴史的な背景、唐の社会などを紹介し、史的視点から阿倍仲麻呂の高級官吏としての生活と半生を検証した。2017 年 2 月 22 日「奈良新聞」に掲載された。
5 その他 ・地域保健医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と中国吉林省長春医学高等专科学校との交流 ・地域保健医療の国際交流の企画及び実施 公益財団法人奈良県理学療法士協会と中国東北師範大学人文学院リハビリテーション学院との交流 ・地域介護医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と中国東北師範大学人文学院看護学院との交流 ・地域介護医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と中国東北師範大学人文学院リハビリテーション学院との学術交流 ・地域介護医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と南京衛生学校との交流 ・地域介護医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と中国東北師範大学人文学院看護学院との交流 ・地域医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と南京医科大学付属病院との交流	平成 24 年 4 月 平成 25 年 4 月 平成 26 年 11 月 平成 28 年 4 月 平成 28 年 4 月 平成 28 年 10 月 平成 29 年 11 月	長春の総合医療機関、医科大学と国際交流協定などを締結し、看護師養成の国際交流活動を実施した。 日本の理学療法と最新の知識や技術を中国の大学で紹介し、中国の「鍼灸」治療法を見学した。 医療の学術交流と国際看護実習、研修の受け入れを企画し、実行を行った。 最新の医療機器と日本の医療臨床の事例を紹介し、回復期の先端リハビリテーション科学最先端の研究と臨床を紹介した。 日本の医療技術の高度化・国際化の強化をめざすための国際医療交流と看護学の国際化の交流を行い、看護留学生の育成の協定を締結した。 看護の質の向上と国際的に通用する医療人の育成のため、豊かな国際感覚を身につけ広い視野から保健医療福祉について考えられるというテーマで、中国の看護学生を招聘し、国際看護師の養成を考える。 放射能治療の学術交流、中国の大学病院を視察研修し、日中の臨床について議論を行った。日本における粒子線がん治療施設が 19 ヲ所、うち重粒子線 6 ヲ所、陽子線 14 ヲ所、高井病院の陽子線センターを紹介した。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 1) 高等学校教諭一級普通免許（音楽）（中国で取得） 2) 日本語能力試験 1 級合格 3) J. TEST 実用日本語検定 4) 修士（教育学） 5) 博士（文学） 6) NAFL 日本語教師養成プログラム LD	平成 4 年 9 月 平成 11 年 2 月 平成 12 年 11 月 平成 15 年 3 月 平成 20 年 9 月 平成 20 年 12 月	内 920068 号 （内モンゴル自治区教育庁） 400 点満点のうち 399 点取得 1000 点満点のうち 972 点取得、平成 12 年までの最高点数記録であった。 奈良教育大学大学院 （奈良教育大学第 957 号） 論文題目 中国帰国児童・生徒の内部葛藤とアイデンティティの模索—ライフ・ヒストリーからの考察— 奈良女子大学大学院 （奈良女子大学博課第 393 号） 博士論文題目 宋代語録における副詞研究 株式会社アルクの主催する通信講座にて、420 時間相当する日本語教師養成講座を受け、最終試験を受けて終了。（20 科目取得平均点 96 点）
2 特許等		特になし

3 実務の経験を有する者についての特記事項 奈良産業大学及び奈良学園大学 学内委員会 1) 国際交流センター運営委員 2) 入学試験委員会・編入学実施小委員 3) 全学共通・教養教育推進会委員 4) 紀要編集委員 5) 学生支援センター運営委員 6) 学生委員会委員 7) 地域連携推進委員 8) 自己点検・評価委員 9) 社会・国際連携運営委員	平成 21 年度～ 29 年度 平成 21 年 度 ～ 29 年度 平成 22 年度～ 23 年度 平成 22 年度～ 23 年度 平成 23 年度～ 24 年度 平成 25 年度～ 26 年度 平成 27 年度～ 29 年度 平成 30 年～	留学生の生活、学習の支援・指導、留学生の引率、留学生行事、特別聴講生、短期留学生の指導、日本人学生の語学研修、海外協定校に関する業務全般を担当。また、国際交流事業の企画、提案など、「国際交流センター記録」の編集などを担当留学生科目の担当の提案など。 大学の入学試験に関する業務全般。 留学生及び特別聴講生の日本語科目などを適切に履修することができるよう提案する。またクラス編成、協定校との調整などの全般業務である。 奈良産業大学紀要第 27 号の編集など。 学生の生活、学習の支援、指導、大学行事の協力及び企画、実施を行う。 大学が持っている物的・人的資源を社会に提供する企画・実施などを行う業務全般。 大学自己点検評価の業務などに携わる。 社会及び地域との連携活動の推進と留学生の支援や海外提携校との連携事業等を行う。大学および学生と大学外の企業・地域社会・行政・非営利組織など、さまざまな団体と連携することで本学学生の留学支援、本学で学ぶ留学生の支援業務全般。
4 その他 1) 企業の顧問 2) 日中民間文化・経済交流 3) 特別研究員	平成 14 年 度 ～ 現 在 に 至 る 平成 19 年 度 ～ 24 年度 平成 23 年 度 ～ 24 年度 平成 22 年 度 ～ 28 年度	社団法人奈良県経済倶楽部の会員企業の顧問、主に中国に関する業務に携わる。 民主党日中交流協議機構・大長城計画訪中団 日中国交回復 35 周年の記念事業（民主党訪中団）を実施することに合意し、日中至誠基金による長城計画と合同した形で「（日中）交流協議機構・大長城計画訪中団」が結成され、議員団と一般参加者からなる大長城計画が実施され、通訳として同行。 中国教育部国家教育行政学院 特別（協力）研究員 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター 非常勤 協力研究員

4) 医療関係の相談役及び顧問	平成 24 年 度 ～ 現 在 に 至 る	社会医療法人高清会高井病院、東京都病院会の相談役及び顧問、主に医療の国際交流、外国人看護師、外国人介護士の受け入れ業務及び国際医療人材育成の企画を行った。
5) 日本語スピーチコンテスト審査員	平成 25 年 12 月	公益財団法人 AFS 日本協会・奈良県高等学校国際教育協議研究会主催の奈良県留学生・研修生の日本語による体験発表会」の審査員を務めた。
6) 『中国語学辞典』編集員	平成 26 年 度 ～ 現 在 に 至 る	日本中国語学会辞典編纂委員会『中国語学辞典』編集員
7) 日本語スピーチコンテスト審査員	平成 27 年 度 ～ 28 年度	奈良市日中友好協会日本語スピーチコンテスト審査員
8) 中国語スピーチコンテスト審査員	平成 29 年 平成 30 年	第 35 回・36 回全日本中国語スピーチコンテスト奈良県大会 審査員

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1) 『台風雑記』 「翻訳著書」	共著	平成 22 年 3 月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所出版	百年前、台湾植民統治時代に当時の官僚である佐倉孫三氏が漢文で記録した『台風雑記』を翻訳した。また、『台風雑記』と著者について紹介し、被植民者の思いと本書の意義についての論文の翻訳を担当した。担当部分「植民者による植民地の風俗記録」 A6 判 (全 220 頁) (12 頁-30 頁を担当)、その他、原稿全体の編集など。 三尾裕子監修 台湾の自然と文化研究会 編訳 木村自、李春子、山田仁史、王巖隈、福浦厚子、林美杏 <u>竹田治美</u>
2) 『宋代語録における副詞研究』	単著	平成 24 年 12 月	白帝社	本書は、著者のこれまでの中古・近古副詞や文法についての研究と、博士論文「宋代語録における副詞研究」をまとめたものである。 近年、中古・近古の文法や語彙、音韻の研究において個別の語彙について分析及び考察する研究があるものの、史的研究はきわめて少ない。本書は、史的な角度から宋代の言語状況を概観し、宋代語録の定義、起源、形成について論じ、総計 436 副詞の個々の使用状況、特徴、性質について考察を加え、宋代語録における副詞の特徴を明らかにした。 宋学語録における副詞の研究は、これまでの宋学語録研究が閑却してきた部分に着目し、近古語彙史の基礎研究を補完するものとして、学術的な意義は大きい。A6 判 (全 298 頁)
3) 『宋代口語研究』 (査読付き) 中国国家図書出版助成金 で出版	単著	平成 30 年 6 月	北京大学出版社	本書は、宋代の膨大な文献から口語の機能・性格などについて分析、考察したものである。「音韻」、「語彙」、「語法」について系統的分類し、その背景などにも言及した。宋代口語についての専門書は、系統的なものであり、学術的な意義は大きい。A6 判 (全 460 頁)
4) 『恋恋紅塵』—台湾学術文化研究叢書・明清文化史研究叢書 (査読付き) 台湾蔣経国国際学术交流基金会助成 (翻訳部門 受賞)	共著	平成 30 年 7 月	東方書店	20 世紀 (民国期) の上海、17、18 世紀 (清代) の揚州、明末清初の南京など中国近世の都市で繰り広げられる社会生活のディテールを描き出す本書が明示する、政治的伝統や礼教に隠れた士大夫の逸楽や宗教への信仰、庶民の情欲などの記述は、中国人の日常生活の中身を見直す際の参考となるであろう 李孝悌／野村鮎子、和泉ひとみ、上原徳子、 <u>竹田治美</u> 、辜知愚、高尾有紀 A6 版 (全

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				536 頁) (317 頁－413 頁担当) 現在中国語文化史書籍類においてトップ販売数を占めている。アマゾンからも高評価を受ける。
(学術論文) 1) 日本語学習における諸問題	単著	平成 22 年 9 月	奈良産業大学紀要 25 集 pp. 73－77	留学生の日本語学習の習得課程における諸問題を分析し中級レベルの学習者における共通の問題として、文法・助詞・動詞などの混同、誤用などの問題点を考察し、教室における日本語指導を通して、講義中や作文、レポートなどの誤用例を収集し、これらの問題に焦点を絞って、分析・考察を行う。
2) 宋代語録における語気副詞について	単著	平成 23 年 9 月	奈良産業大学紀要 26 集 pp. 35-43	宋学語録を焦点に合わせ、語気副詞を考察した。語気副詞は数が多く、複音節化が顕著され、宋代の語気副詞は既に副詞の機能のみを担うものが多いということが分かる。一部の語気副詞は宋代以後も強い生命力を持って、現代漢語に定着し、口語表現として頻用されている。
3) 日本語コースカリキュラムと指導について	共著	平成 24 年 9 月	奈良産業大学紀要 28 集 pp. 161-166	短期留学生が急速に増加している中、日本語短期研修を実施する際、教材の選択・使用、クラス編成、プログラム計画、教員配置などのあり方について、本学の夏季短期を事例として考察し望ましいコースカリキュラムの作成と指導のあり方について模索する。 (原稿の構成や問題意識の提起、講義の担当など全体にかかわったため分割不可能) 共著者：竹田治美・廣田直俊・加納巧
4) 外国人児童・生徒の内部葛藤とアイデンティティの模索—学校の多文化教育に向けて—	単著	平成 24 年 9 月	奈良産業大学紀要 28 集 pp. 129-139	2003 年から 10 年間にわたり、外国人児童・生徒の日本語学習や母語環境、学校生活などについて調査した。子どもたちの学校生活と家庭環境に焦点をあて、その背景、実態から見えてくるものを考察し、学校における日本語学習と日本語カリキュラムの位置付けを指摘する。そして、問題解決のために日本の学校、地域、社会が改善すべき点を具体的に提言する。
5) 第二言語としての日本語習得について—一人称代名詞の認識と運用をめぐる—	単著	平成 25 年 2 月	奈良産業大学情報フォーラム第 8 集 pp. 89-98	第二言語習得 (second language acquisition/SLA) 研究に基づきながら、留学生の日本語習得における人称代名詞の認識と運用について検討したものである。第二言語としての日本語の人称代名詞を通して第二言語習得研究の中、特に教室における指導がどのように学習者に影響を与えるかについて考察し、より効果的な指導方法を探っていく

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
6) 『祖堂集』における程度副詞について	単著	平成 26 年 9 月	奈良学園大学紀要集 1 集 pp. 57-63	現存の最古の禅宗史総集『祖堂集』の程度副詞の機能、用法、特徴などを考察し、中古から近古にわたって程度副詞の体系そのものがどのように変遷したのか、また歴史的にどのように構築されていたかに考察する。
7) 『祖堂集』における接尾辞に関する一考察	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要集 3 集 pp. 83-88	『祖堂集』における副詞の接尾辞に焦点を合わせて分析し、その使用状況、機能、変遷に考察を加える。
8) 『多文化時代における外国人家庭教育観の変容について』	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要集 5 集 pp. 91-99	外国人児童・生徒の家族を含めた生活実態を考察することによって彼らの価値観の認識と変化してきた家庭の側面を分析し、子供たちと保護者の意識と家庭教育がどのように変容してきたのかを明らかにした。また、彼らの成長と人格形成にどのような影響をもたらしたのか、複雑に絡み合った問題の起因を整理し、多様な対応が認められる学校現場に一助したい。
9) 中国の古代諺語に関する一考察 —『古諺語』小考—	単著	平成 30 年 1 月	奈良学園大学学術機関リポジトリ	清の杜文瀾が編纂した『古諺語』百卷、三千三百余首の諺と八百六十余首の諺を輯録した諺語集であり、民芸文化研究の第一次資料である。諺語の性質により歴史の変遷、言葉の位相には階層・年齢・性別・地域などの差異がみられ、古代中国政治社会の深層を知ることができる貴重な資料である。本研究は、『古諺語』の諸相を通して童謡の歴史的な変遷や発展について考察を試みたい。
10) 世紀転換期におけるマイノリティーの言語教育と文化伝承に関する研究 —中国北方地域の無文字少数民族を中心に—	単著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学紀要集 8 集 pp. 61-69	民族言語と伝統文化が消滅の危機に追われている人口の少ない、文字を持たない民族、エヴェンキ族の学校教育、家庭教育と母語教育の全体像をフィールド調査する同時に社会的・文化的背景とともに考察し、少人口民族の母語喪失の実態を通して、彼らが社会と経済、価値観が大きく変動していく中国社会においてどのような適応を遂げていくのか、その文化の伝達、アイデンティティはどのように構築していくのかを明らかにすることにある。
11) 明清時代の俗曲における呼称の表現性 『霓裳統譜』の人物呼称を中心に — (査読付き)	単著	平成 31 年 3 月	関西大学中国文学会 紀要 40 号 pp.47-67	本論は、清の乾隆六十年(1795)に版行された俗曲総集『霓裳統譜』に用いられる人物の呼称に焦点を当てて、明清俗曲集の情歌において女性の「語り」の諸相へのアプローチを試みるものである。呼称には対象人物に向けて呼びかけを行う機能と、叙述の対象を指示する機能がある。また、叙述の双方の性質と属性を示す親疎関係、年齢、社会的な地位、身分及び周辺との関連性を示す機能がある。女性たちがどのような呼称を用いて自己、他者を表現するのか、呼称の構造と性質及び周辺とどのような関連性があるのか、それぞれの特徴から見えてくる多様な女性世界をのぞいてみたい。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
その他 「学会発表」 1) 近世漢語における副詞の音節変遷について 2) 『祖堂集』における程度副詞について 3) 日本における古代漢語研究について（学会講演） 4) 宋代副詞的新詞構成 5) 明清俗曲中的人称表現 6) 明清俗曲以及周辺	単独 単独 単独 単独 単独 単独	平成 24 年 9 月 平成 25 年 10 月 平成 25 年 11 月 平成 26 年 10 月 平成 29 年 11 月 平成 30 年 5 月	古 代 漢 語 研 究 会（北京大学にて） 日本中国学会第 65 回大会 第 2 届漢語副詞研究學術検討会（重慶師範大学にて） 第 3 届漢語副詞研究學術検討会（貴州大学にて） 古 代 漢 語 研 究 会（北京大学にて） 東アジア文化交渉学会（香港城市大学にて）	副詞は、最も複雑の品詞であり、数が多く、多様性を持っているのが特徴である。本発表は音節の角度から、中古・近世漢語の音節変遷について考察し、その機能と性質及び個々の使用状態を分析した。副詞の分節化の多重性からその意味と統語的な機能と構造と関連させ、系統性を試みる。 現存の最古の禅宗史総集『祖堂集』の程度副詞の機能、用法、特徴などを考察し、中古から近古にわたって程度副詞の体系そのものがどのように変遷したのか、また歴史的にどのように構築されていたかに考察する。 日本における古代漢語の研究状況を（語彙・文法・音韻などについて）紹介・報告した。 宋代の副詞に中の複合式構詞、付加式構詞、音韻構詞を系統的に分類し、その特徴について考察した。 明清の俗曲集の『霓裳統譜』における口語と復音節俗語の機能、性質などについて考察し、その背景にある歴史要素、社会要素などを明らかにした。 明清の俗曲集と女性および言語、またその背景にある生活、社会、文化との関連性を考察した。
「研究報告書」 1) 日本の大学における職業教育と大学生の職業意識（中国語 査読付き）	単著	平成 23 年 8 月	中国教育科学「十一五」計画 教育部重点研究課題 職業教育と企業文化との結合研究と実験（研究課題番号：GJA104009） 中期研究成果論文集 中華職業教育出版社 pp. 367 - 372	中国教育部職業技術教育センター研究所からの要請で日本の大学におけるキャリア教育及び大学生の就職意識について考察、具体的なデータを挙げ分析した。また、その背景にある歴史的な原因、社会要素などについて明らかにした。海外から投稿論文の中、唯一入選されたものであり、高く評価された。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 林 悠子

研 究 分 野	研究内容のキーワード	
健康・スポーツ科学、スポーツ心理学、身体表現学	スポーツ心理、体育、運動イメージ、発育発達、表現	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 発達段階に応じた子ども向けダンスのグループ制作、保育者と園児役とに分かれて行う表現遊びの指導実践、サーキット遊びやボール遊びの創作と指導実践を行う。	平成 21 年～現在に至る	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部「体育の基礎Ⅰ・Ⅱ」「身体表現」、奈良学園大学人間教育学部「健康・運動の理解」において、乳幼児から小学生の発達段階を理解し、音楽リズムダンスの振り付けやリズム遊びの実践、「子どもに身につけさせたい基礎的な動き」を取り入れたサーキット遊びやボール遊びの創作を行わせた。
2 作成した教科書、教材 ダンスの振付用紙や運動あそび・音楽に合わせた身体表現遊びの指導案の作成とオペレッタのオリジナル台本の作成。	平成 21 年～平成 30 年	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部「体育の基礎Ⅰ・Ⅱ」「身体表現」において、実習現場等で利用できるようにダンスの振付用紙や音楽にあわせたリズム遊び・身体表現遊びの指導案を作成した。「子ども学ゼミ」においては音楽科目担当者と共同でセリフ・BGM・舞台装置の動き等も含んだオペレッタの製作をしている。これまでに、「不思議の国のアリス」「ピーターパン」など計 10 本のオリジナル台本を作成した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部授業科目に対する学生評価 「体育の基礎」（Ⅰ回生前期講義）、「体育の基礎Ⅱ」（Ⅰ回生後期講義）、「保育表現技術（身体表現）」（Ⅱ回生前後期講義）		奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での授業科目に対する学生評価では、ほぼ全体平均を上回ってきた。（平成 27 年度 3.49 ポイント、平成 28 年度 3.43 ポイント） 「体育の基礎」：平成 27 年度未実施、平成 28 年度 3.37 ポイント。「体育の基礎Ⅱ」：平成 27 年度未実施、平成 28 年度：3.62 ポイント。「保育表現技術（身体表現）」：平成 27 年度：3.53 ポイント、平成 28 年度：3.66 ポイント
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 奈良文化高等学校「社会人のための『ウォーキング』講座」講師 (2) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部主催講座講師 ①（社）奈良県シルバー人材センター協議会委託子育て支援講習 ②子育て支援事業「ちびっこ広場」 ③公開講座「親子で楽しむシリーズ」	(1) 平成 22 年 (2) ① 平成 23 年 2 月 ② 平成 23 年～平成 30 年 ③ 平成 23 年～平成 29 年	(1) 奈良文化高等学校で 3 年生を対象に行われた特別講座「社会人のための『ウォーキング』講座」において講師を担当した。 (2) ①（社）奈良県シルバー人材センター協議会の委託を受けて行われた子育て支援講習において、「子どもと楽しむ運動遊び」として、表現遊びや発育発達についての講義と演習を行った。 ② 地域の子育て支援事業「ちびっこ広場」において、保護者に向けて青年期の発達を見据えた、子どもとの音楽リズム遊びの実践を行った。 ③ 公開講座では、親子向けの保育表現や音楽表現「親子シリーズ」のうち、運動遊びやリズム遊びやダンスを行う身体表現の講師を担当した。
5 その他		特記事項なし
職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許		特記事項なし
2 特許等		特記事項なし
3 実務の経験を有する者についての特記事項 磯城郡保育士研修会講師		磯城郡保育士会より依頼を受け、研修会の講師を
4 その他		特記事項なし

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文)				
1. 短大幼児教育学科学生の性格特性について(3)	単著	平成 21 年 11 月	奈良文化女子短期大学 紀 要 第 40 号 : 109-116	本研究は、TEG 式エゴグラムを用いて本学幼児教育学科の学生の性格特性を明らかにすることを目的とした本学紀要第 39 号の続報であり、ここでは入学者の特徴と在学生の経年変化とをみることを目的とした。調査・分析の結果、入学者の特徴および在学生の特徴はさほど変化がなかったものの、在学生では昨年度見られなかった「大人」の特性を多く持つ学生が見られた。
2. 高齢者における一過性運動の心理的効果	単著	平成 22 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 41 号:77-86	本研究は、子育て支援講習の運動遊びプログラム「子どもと楽しむ運動遊び」に参加した高齢者における一過性運動による心理的効果と、参加者らの日常の運動実態を明らかにするために行った。その結果、運動によって疲労感と積極的な安寧感情が増加し、日頃運動を行っている参加者とそうでない参加者とはその変化に顕著な差があることが認められた。また参加者の約 7 割は日頃から何らかの運動を行っており、運動に関する関心の高さが明らかとなった。
3. 保育実習における身体活動と学生の気づきについて	単著	平成 23 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要 42 号 : 97-106	本研究では、2 回生地元保育所実習において、保育所内でどのような身体活動(体育・運動遊び・リズム遊びなど)が行われていたのか、またそれらの活動を観察する中で学生自身がどのような気づきをしたのかについて、実習後のアンケートにより調査を行った。その結果、学生らは月齢による運動発達の違いや社会的発達の違いなどに気づき、また体育・表現の分野での実習中に必要な課題について明らかにすることができた。
4. 保育者養成校に求められる学生の資質についてー保育現場へのアンケート調査よりー	単著	平成 24 年 11 月	奈良文化女子短期大学 紀 要 第 43 巻 : 127-134	本研究では、過去 6 年間の卒業生の勤務実態についてのアンケート調査の自由記述から、園長・施設長らが保育者養成校に望むこと、また就職した本学卒業生が評価されていることを分析した。その結果、保育現場ではまず保育者としての「技術や知識」、「資質」が、そして社会人としての力や保育者として働く意識が求められること、卒業生らは個々の資質や人柄、働く姿勢は評価されているが「保育技術」に対する評価は十分ではないことが明らかとなった。
5. 子育て支援広場に参加している乳幼児の運動状況について 〔査読有り〕	単著	平成 25 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 44 巻 : 91-99	本研究では、親子が集えるスペースに参加している未就園児親子を対象に、子どもの発育発達状況や日々の遊びなどの活動状況、また母親の運動歴や運動実施状況等についてアンケート調査を行った。その結果、子どもたちはおおむね活発に運動を行っており、遊びは室内遊びが多く、保護者(母親)の運動実施が少ないことなどが明らかとなった。

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
6. 新人保育者の早期離職 に関する実態調査 〔査読有り〕	共著	平成 25 年 11 月	奈良文化女子短期大 学 紀 要 第 44 巻： 101-109	本研究では、保育者の早期離職問題に着 目し、現場へのアンケート調査と早期離 職者へのインタビュー調査を実施した。 その結果、保育者は女性のライフサイク ルの影響が強い職種であること、早期離 職者の退職理由は、「進路変更」や「体 調不良」が多いが、その根本的な原因は、 職場での人間関係にあることが明らか になった。
7. 保育者養成校に求めら れる学生の保育実践能力 と資質について 〔査読有り〕	単著	平成 26 年 11 月	奈良文化女子短期大 学 紀 要 第 45 巻： 123-130	本研究では、本学における保育者養成の 在り方についての示唆を得ることを目 的に、近畿一円の幼稚園、保育所（園） の管理職者または新人教育担当者に対 してアンケート調査を実施した。「現場 で求められている能力と新入職者の能 力とのギャップ」に焦点を絞り、教育課 程による差を探索したところ、保育者と して求められる資質については教職課 程に差がないものの、4 年制大学と短期 大学卒業生では保育実践能力において 差があることが明らかになった。
8. 保育者としての資質と 保育実践能力に対する学 生の意識について 〔査読有り〕	単著	平成 27 年 11 月	奈良文化女子短期大 学 紀 要 第 46 巻： 121-128	本研究では、本学学生が保育者としての 資質や能力についてどのように考え、ど の程度それらの力を身につけていると 考えているのかを明らかにした。保育者 としての専門能力も資質も、それを重視 するかという自身の考えについてはほ とんどの項目で 1 回生の方が高く、いま 自分がどれくらい実践できるか（身にっ けているか）という自己評価について、 保育者としての実践的専門能力は 1 回 生の方が高く、保育者の資質は 2・3 回 生の方が高かった。
9. 保育者養成に求められ る保育者の資質について （２）－就職先へのアンケ ート調査の前回調査との 比較から－ 〔査読有り〕	単著	平成 28 年 11 月	奈良文化女子短期大 学 紀 要 第 47 巻：71-80	本研究では、平成 23 年度から平成 26 年 度の本学卒業生の就職先に対して行っ た勤務実態についてのアンケート調査 のうち、自由記述から園長らが保育者養 成校に望むこと、また就職した本学卒業 生が評価されていることを分析した。前 回調査と比較した結果、保育現場では即 戦力として役立つ保育の実践力は当然 ながら、保育者の資質や社会人としての 態度や覚悟、特に「社会人基礎力」とさ れる、チームで働く上で重要視される 様々な能力が求められていることが示 唆された。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10. 各発達の時期における「先生」のネガティブな言動について 〔査読有り〕	共著	平成 28 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 47 巻：31-40	本研究では、養成課程の学生が子どもの立場を理解し不適切でネガティブな言動をしないため、教師のネガティブな言動とは何かについて整理を行うため調査を行った。その結果、幼児期においては教員のネガティブな言動は少ないが、小学校高学年から中学生の時期においては、教員の言動でネガティブとして捉えられた言動が多くなっており、高校生になると減っていた。この変化は思春期と関係していると考えられ、教員の言動でネガティブと捉えられる言動は、それらを受け止める子どもの発達の時期によって量的にも質的にも異なっていた。
11. 保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について 〔査読有り〕	共著	平成 28 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 47 巻：41-48	本研究では、保育者養成短期大学生 160 名の Y G 性格検査の判定結果をもとに、その性格特性の傾向について明らかにするとともに、卒業時の進路状況（進路選択）との関連について調べることを目的とした。学生の半数近くにみられた性格特性は「情緒の不安定さ」であった。進路状況との関連では、職種に関わらず非正規として就職あるいは就職をしない選択をした学生と、性格因子尺度の「劣等感」「非協調性」が高い傾向にある学生とのあいだに関連があることが示唆された。
12. 女子大学生における運動能力の現状について-運動適正テストと運動不振尺度から- 〔査読有り〕	単著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 48 巻：87-96	本研究では、運動適正テストの実施と運動不振尺度の調査から、女子大学生の運動能力の実態について検討を行った。その結果、学生の半数以上で運動能力水準が低いこと、運動不振には技能的な側面とともに体力面での不振が関与することが示唆された。
13. 施設実習における学生の不安を軽減する事前学習についての研究 〔査読有り〕	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 48 巻：31-40	本研究では、施設実習に参加した学生に対して行った実習事後指導における振り返りレポートを分析し、実習に参加する前の実習に対するイメージや不安感や疑問などを分類することで、実習に臨む学生にとっての必要な事前学習とは何かを明らかにした。また、実習において自身の不足していた点について分析を行ったことで、実習の取り組み点検チェック表を作成することができた。
14. 新人保育者に必要な資質について-新人保育者に対する総合的な評価につながる具体的な資質- 〔査読有り〕	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 48 巻：41-49	本研究では、本学卒業生の勤務実態についてのアンケート調査から、どのような新人保育者が評価されるのかについて分析した。その結果、高い技術や知識よりもまずは新人という立場をわきまえながら礼儀正しく責任を持って一つ一つのことに意欲的に取り組む姿勢が必要であることが明らかになった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
15. 身体表現科目における表現遊びの指導実践内容と学生の気づき 〔査読有り〕	単著	平成 30 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 49 巻：105-115	本研究では、身体表現遊びの指導実践の内容と有用性について分析した。その結果、指導内容は 5 歳児を対象とした遊びが半数を占め、運動遊び要素の強い遊び、既知の遊びを展開する傾向が同われ、発達段階の広い理解と遊びのレパートリーを増やす努力が必要であると考えられた。
16. 新人保育者に対する評価～前年度との比較を通して～ 〔査読有り〕	共著	平成 30 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 49 巻：49-59	本研究では、短期大学卒業生の勤務実態についてのアンケート調査から、どのような新人保育者が評価されるのかについて、前年度と比較分析した。その結果、満足度や将来性への期待が向上している傾向が伺われた。
(その他) 1. 連載 遊びの世界 27 「大和地方のうた遊び」	単著	平成 27 年 10 月	子どもと発達 13-3：195-198	学会誌連載「遊びの世界」において、「大和地方のうた遊び」と題し、奈良県にちなんだ伝承遊びについて執筆した。
(学会発表) 1. 安静体験イメージによる精神生理学的変化について	—	平成 24 年 6 月	日本バイオフィードバック学会第 40 回大会発表（立命館大学）大会予稿集 P30.	くつろいだ姿勢を取った「安静体験」と、その体験の再現イメージを行った場合の生理的变化について、①安静時の自分の筋感覚②自分の生理反応③自分の周りの様子、の 3 つのイメージを課題とし脳波・心拍数・呼吸数を指標として比較検討を行った。その結果、生理反応的イメージ課題では β 波含有率の減少がみられたことから、課題により安静状態が促されたと推測された。
2. 子育て支援広場に参加する乳幼児の発達発達状況について	—	平成 24 年 8 月	日本体育学会第 63 回大会発表（東海大学）	本研究では、短期大学における地域貢献・子育て支援事業である親子が集えるスペースに参加している未就園児親子を対象に、子どもの発達発達状況や日々の遊びなどの活動状況、また母親の運動歴や運動実施状況などについてアンケート調査を行った。その結果、子どもの遊びは室内遊びが多く、保護者（母親）の運動実施が少ないことなどが明らかとなった。
3. 保育士養成校に求められる学生の資質について	—	平成 24 年 9 月	全国保育士養成協議会第 51 回研究大会発表（京都文教大学・京都文教短期大学）大会予稿集 p530-531.	本研究では、卒業生の就職先に対する卒業生の勤務実態についてのアンケート調査から、現場で保育者養成校に望むこと、また本学卒業生がどのように評価されているか分析した。その結果、第一に保育者としての「技術や知識」、「資質」が求められ、次に社会人としての力や保育者として働く意識が求められること、卒業生らは個々の資質や人柄、働く姿勢は評価されているが、「保育技術」に対する評価は十分ではないことが明らかとなった。

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
4. 安静体験イメージによる精神生理学的変化について	—	平成 25 年 6 月	日本バイオフィードバック学会第 41 回大会発表（鎌倉女子大学） 大会予稿集 P29.	くつろいだ姿勢を取った「安静体験」と、その体験の再現イメージを行った場合の精神生理学的変化について、①安静時の自分の筋感覚②自分の生理反応③自分の周りの様子、の 3 つのイメージを課題とし、脳波とイメージ想起に対する自己評価の高低との関連について比較検討を行った。その結果、自己評価の高い群は低い群に比べてイメージ時の大脳活動がより活発であったことが示された。
5. 幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（1）	—	平成 25 年 8 月	日本体育学会第 64 回大会発表（立命館大学） 大会予稿集 P138.	本研究では、和歌山県私立 W 幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体格における発育発達の特徴について検討を行った。H11 年・H16 年・H21 年の園児の、身長・体重・胸囲・座高の 4 つの身体測定データを分析対象とした。
6. 幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（2） —和歌山県私立 W 幼稚園における体力・運動能力測定データから—	—	平成 25 年 8 月	日本体育学会第 64 回大会発表（立命館大学） 大会予稿集 P138.	本研究では、和歌山県私立 W 幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行った。H11 年・H16 年・H21 年の 25m 走、立ち幅跳び、ボール投げ、両足連続跳び越しの 4 つの運動能力測定データを分析対象とした。その結果、性差は年中児の跳び越しくぐりにのみみられ、「ボール投げ」や「立ち幅跳び」ではあまり年代の差が見られなかったのに対し、「25m 走」「跳び越しくぐり」では年代による差が見られた。
7. 保育現場が保育士養成に望むこと	—	平成 25 年 9 月	全国保育士養成協議会第 52 回研究大会発表（高松） 大会予稿集 p332-333.	本研究では、本学における保育者養成の在り方についての示唆を得ることを目的に、近畿一円の幼稚園、保育所（園）の管理職者または新人教育担当者に対し、保育現場で働く新入職者の現状と保育者養成に望むことについてアンケート調査を実施した。その結果、4 年制大学化や保育士の国家資格化を望む声は少ないが、資質や基礎学力においては 4 年制大学卒が優れているという指摘もあり、養成校における保育者資質の向上が望まれることが明らかとなった。
8. 幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（3） —和歌山県私立 W 幼稚園における体力・運動能力測定データから—	—	平成 26 年 3 月	日本発育発達学会第 12 回大会発表（大阪成蹊大学） 大会予稿集 P83.	本研究では、和歌山県私立 W 幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行った。3～5 歳の園児の H11 年・H16 年・H21 年の 25m 走、立ち幅跳び、ボール投げ、両足連続跳び越しの 4 つの運動能力測定データおよび身長・体重・胸囲の体格データを分析対象とした。その結果、「25m 走」「跳び越しくぐり」では年代による差が見られ、ボール投げでは体格との正の相関がみられた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9. Psychophysiological changes in the movement imagery -Preliminary study- 身体動作イメージにおける精神生理学的変化につ	—	平成 26 年 8 月	7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress, Tokyo 大会予稿集 P33.	本研究では内的な身体動作イメージと外的な身体動作イメージにおける脳波含有率の変化を分析した。その結果、 α 1 波含有率は内的イメージ時には頭頂・中心領域での減少、外的イメージ時には後頭領域での減少がみられた。
10. Team Building Intervention for High School Volleyball Team 高校バレーボールチームに対するチームビルディングの介入効果について	—	平成 26 年 8 月	7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress, Tokyo 大会予稿集 P32.	本研究では、高校バレーボールチームに対して、チャンピオンシップの最終出場資格を失った後にチームの結合を回復するため、その精神的な準備に対してスポーツ心理学がどのような働きを持ったかについて調査を行った。
11. 幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について (4) —和歌山県私立 W 幼稚園における体力・運動能力測定データから—	—	平成 26 年 8 月	日本体育学会第 65 回大会発表 (岩手大学) 大会予稿集 P129.	これまで和歌山県私立 W 幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行ってきたが、本研究では運動能力測定データを分析対象とし、きょうだい構成の違いによる幼児の運動能力ならびに体格の発達特徴について検討を行った。H11 年・H16 年・H21 年の 25m 走、立ち幅跳び、ボール投げ、両足連続跳び越しの 4 つの運動能力測定データを分析対象とした。いずれの運動能力においても、ほぼすべての年代・年齢において第 1 子に比べて第 2 子以降の運動能力が高く、特に「跳び越しくぐり」において顕著であった。
12. 幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について (5) —和歌山県私立 W 幼稚園における体力・運動能力測定データから—	—	平成 26 年 8 月	日本体育学会第 65 回大会発表 (岩手大学) 大会予稿集 P116.	これまで和歌山県私立 W 幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行ってきたが、本研究では H11 年・H16 年・H21 年の身長・体重・胸囲の 3 つの身体測定データを分析対象とし、きょうだい構成の違いによる幼児の体格の発達の発達の特徴について、運動能力との関連について分析した。
13. 現場が求める保育実践能力と卒業時に獲得している能力の教育課程別比較	—	平成 26 年 9 月	全国保育士養成協議会第 53 回研究大会発表 (博多) 大会予稿集 P36.	本研究では、本学における保育者養成の在り方についての示唆を得ることを目的に、近畿一円の幼稚園、保育所 (園) の管理職者または新人教育担当者に対してアンケート調査を実施した。「現場で求められている能力と新入職者の能力とのギャップ」に焦点を絞り、教育課程による差を探索したところ、保育者として求められる資質については教職課程に差がないものの、4 年制大学と短期大学卒業生では保育実践能力において差があることが明らかになった。

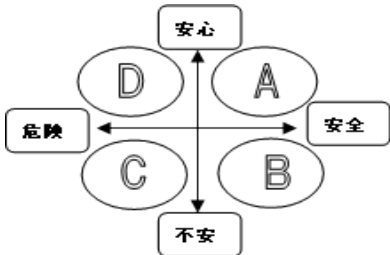
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
14. 視点の異なる運動イメージに対する精神生理学的反応について	—	平成 27 年 7 月	日本バイオフィードバック学会第 43 回大会発表（筑波大学） 大会予稿集 P32.	本研究では、内的視点からなる体験イメージ（internal imagery）と外的視点からなる観察イメージ（external imagery）による単純な身体動作を課題とし、それらを想起した際の大脳活動の違いを比較することによって身体運動イメージの精神生理学的特徴を明らかにした。イメージ課題は3つの身体動作（脚を屈曲する・前屈する・腕を上げる）とし、体験イメージと観察イメージを行った。
15. 脳波からみた運動学習における運動イメージの効果について	—	平成 27 年 8 月	日本体育学会第 66 回大会発表（国士舘大学） 大会予稿集 P132.	本研究では、提示された他者の動きに対して、内的または外的視点から想起した自己像を意識しながら、動作の模倣を行うことを課題とし、脳波を用いて運動学習における運動イメージの効果を検討した。動作は、両手を置いた状態から手首を屈曲させて右手または左手を上げる単純動作であった。課題中は、頭皮上の 13 部位から脳波の記録を行った。反応時間、正答率および脳波に関して、経時変化の検討および内的視点・外的視点イメージ間の比較を行った。
16. 保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識について	—	平成 27 年 9 月	全国保育士養成協議会第 54 回研究大会発表（札幌） 大会予稿集 P35.	本研究では、本学における保育者養成の在り方についての示唆を得ることを目的に、「保育者としての保育実践能力」と「保育者としての資質」についてどの程度重視し、どの程度自分の身についていると思うか、本学学生に対してアンケート調査を実施した。その結果、1 回生と 2・3 回生とでは重視する能力や自己評価について差が見られた。
17. 本学における子育て支援事業の 5 年間の取り組みと評価	—	平成 27 年 9 月	全国保育士養成協議会第 54 回研究大会発表（札幌） 大会予稿集 P179.	本学における子育て支援事業「ちびっこ広場」「つどいの広場」について、これまでの利用者アンケートや利用者数データなどから、5 年間の取り組み内容とその評価をまとめた。
18. Effects of motor imagery perspectives on motor learning based on EEG EEG をベースとした運動学習におけるイメージの視点の効果について	—	平成 28 年 6 月	2016 NASPSPA Conference (Montreal) 大会プログラム P22.	本研究では、提示された他者の動きに対して、内的または外的視点から想起した自己像を意識しながら単純動作の模倣を行う運動学習課題における運動イメージの効果を検討した。その結果、他者の動作を模倣する際には、刺激と反応が一致する条件で反応が速かった。反応の速さと運動イメージの達成度・鮮明度・コントロール度とも対応関係が見られた。すなわち、運動学習において運動イメージの視点の違いが脳波に反映され、パフォーマンスとも関連することが示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
19. 女子大学生の運動イメージ想起能力について	—	平成 28 年 8 月	日本体育学会第 67 回 大会発表（大阪体育大 学） 大会予稿集.	本研究では、運動部に所属する健康な女子大学生 56 名を対象に、運動イメージ質問紙 JMIQ-R を用いて、イメージ想起の際の体験イメージ（すなわち内的視点イメージ）と観察イメージ（すなわち外的視点イメージ）のタイプを調査した。総合得点はバスケットボール部とソフトボール部で所属部間に差は見られなかったが、さらに、モーズレイ性格検査（MPI）による個人の性格特性やこれまでの運動経験等から、運動イメージ想起能力としてのイメージの視点について特徴を分析した。
20. 保育者養成に求められる保育者の資質について—就職先へのアンケート調査より—	—	平成 28 年 8 月	全国保育士養成協議 会第 55 回研究大会発 表（盛岡） 大会予稿集 P57.	本研究では、平成 23 年度から平成 26 年度の本学卒業生の就職先に対して行った勤務実態についてのアンケート調査のうち、自由記述から園長らが保育者養成校に望むこと、また就職した本学卒業生が評価されていることを分析した。前回調査と比較した結果、保育現場では即戦力として役立つ保育の実践力は当然ながら、保育者の資質や社会人としての態度や覚悟、特に「社会人基礎力」とされる、チームで働く上で重要視される様々な能力が求められていることが示唆された。
21. 運動イメージタイプと性格特性からみた女子大学生の運動イメージ想起能力について	—	平成 28 年 11 月	日本スポーツ心理学 会第 43 回大会発表（北 星学園大学）大会予稿 集 pp154-155.	本研究では、バスケットボール部とソフトボール部に所属する女子大学生を対象に、イメージ能力に関係するとされる性格特性との関わりや個人特性を分析することで、運動イメージ想起能力としてのイメージの視点についての特徴を明らかにした。それぞれの部においてポジションごとの比較をしたところ、ソフトボール部においては差がみられなかったが、バスケットボール部においてフォワードに比べてセンターの内的得点が高い傾向がみられるなど、所属部とポジションすなわち運動特性と役割におけるイメージ能力の違いが示唆された。

教 育 研 究 業 績 書

平成31年3月31日

氏名 松井 典夫

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
教育学		教師教育・教科教育（図画工作科）・学校安全（安全・防災教育）	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項			
事項	年月日	概 要	
1 教育方法の実践例 ・「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会誌 第3巻1号 p62-66 松井）を用いた安全教育	平成21年度 ～現在に至る	 安全教育で目指すべきところは、「安全で安心」であるAのカテゴリーである。しかし、このカテゴリーに児童の状態がいれば、安全教育の役割が達成されたかと言えばそうではない。知識や技能が備わっていない状態であるなら、真の安全・安心とは言えないだろう。たとえば、防犯ブザーの例で言うと、防犯ブザーの学習をする前なら、Aの位置（「防犯ブザーは持っていれば安全で安心だ」）にいた児童も多数いるだろう。「防犯ブザーはいざという時に、不審者を撃退することができる。それを持っていれば安心だ」と感じている状態である。しかし、学習を進めるうちに、実は持っているだけでは安全とは言えないことに気が付き始める。児童は「安全を守るものだけど、それだけではだめだ。自分にはいざという時に使うことができない」というBの状態や、あるいは、「まったく安全とは言えない。頼るのはこわい」というCの状態へと移行し始める。このように、これまで何の疑問を持たずに「安全」だと過信し、「安心」しきっていた状態のAの位置では、児童の生涯にわたる「安全」「安心」とは言えない。まずは「真実」を知ることが、安全教育の大きな役割のひとつと言えるだろう。しかし、この学習をした時点で、児童はBやCの位置にとどまらず、ベクトルは再び、真の意味でのAに向かい始めているのである。児童の中では、「この学習をしたから自分の考え方が変わった」あるいは、「防犯ブザーの使い方をしっかり学んだから、いざというときに自分がどのような心理状態になるかわかった」というように、「安全・安心」を真に見つめることができるようになるのである。その状態や児童の変容を客観的に測るマトリクスとして、「安全安心様相図」を考案した。	
・「児童の安全意識尺度（Safety Awareness Scale of Children “SASC”）」の開発	平成27年8月～現在に至る	前掲の「安全安心様相図」を用いて安全教育に関する授業を行うことによる、一定の効果を実証することができたのは確かである。しかしながら、安全安心様相図のポイントを数値化することができず、客観性に足りない。そこで、容易に数値化することができ、なおかつ児童自身にポイントさせることができ、授業の事前、事後調査が可能な「尺度」に着目し、作成したものが「児童の安全意識尺度（Safety	

・「図工科指導法」の講義における模擬授業過程の可視化 ・図画工作科における小学校時代の実態調査 ・地震災害被災地の小学校における教育実践演習	平成26年4月～現在に至る 平成26年4月～現在に至る 平成29年10月	Awareness Scale of Children “SASC”)」である。SASCを、協力校に事前に送付し、安全授業を実施する1週間前に、事前調査を実施してもらう。調査にあたっては、授業を実施する低・中・高学年のそれぞれのクラスで実施した。また、性別とイニシャルを記入してもらい、事前、事後調査で個別にその変容を見て取ることができるようにした。 大学における「図工科指導法」の授業において、指導案を作成し、模擬授業を行う際、学生同士が児童役となっていく場合が多い。その際に、児童役の子供たちが児童役に没頭し、授業全体の流れや発問内容を把握、吟味することが困難である。また、授業者が自分自身の表情、発問のタイミングなどを即時評価することができるという意味でも、iPadで授業を撮影し、模擬授業後の協議会で動画を用いながら振り返り、自己、他者評価に活用している。 担当する「美術の理解」（1回生必修）及び「図工科指導法」（2回生必修）においては、第1回目の授業時に、1. 図画工作科の授業は好きだったか。2. 図画工作科の授業は楽しかったか。3. 小学校時の図画工作科の授業でもっとも印象に残っている授業は。という項目でアンケート調査を行い、授業改善に役立てている。 平成29年4月に発生した熊本地震では、多くの学校も被災し、また避難所となった。避難所となった学校に訪問し、登校時の安全指導ボランティアや、授業補助の演習を行うことを目的として、奈良学園大学の教職志望の学生10名を引率し、熊本県益城町立広安西小学校を訪れ、実践的演習を行った。
2 作成した教科書、教材 ・安全教育実践指導略案集(再掲) ・安全教育実践考察集(再掲) ・「美術の理解」授業プレゼンテーション及びワークシート ・教職表現力演習ノート	平成22年2月 平成26年4月～現在に至る 平成27年4月	本指導略案集と実践考察集は、現職の教員、及び教育実習生の参考資料として作成したものである。大阪教育大学附属池田小学校は、平成21年度より、文部科学省教育課程特例校として、「安全科」を設置した。当該校「安全科」主任として、平成21年度に実践した安全教育の授業（防犯・生活安全・地震災害・交通安全・火災・水難災害）の指導略案を作成し、それぞれの授業後に考察した内容を記録した考察集を作成し、平成21年度の大阪教育大学附属池田小学校教育研究協議会において、参会者に配布し、教育実習生に配布した。安全教育に対する必要性の実感は、メディアを賑わす事件や事故、災害の後は教育現場において高まる観があるが、どのような実践をすればよいかわからないというのが、教育現場で聞かれる多くの声である。その一助にと作成したものである。 理解」においては、芸術分野の内容理解、美術教育の概観の内容理解を行うために、テキストを使用するのではなく、その理論に伴った実際の児童の姿や授業の内容について、具体的に想起しながら学ぶことができるように、プレゼンテーションを作成して授業を行っている。また、その内容を復習しながら習熟していくことができるように、ワークシートに記入させ、15回の講義後にワークシートを綴じ、テキストとして使用することができるようにしている。 奈良学園大学人間教育学部の必修科目である教職表現力演習の教材として、授業担当者で通年使用可能な教材を作成した。ワークシートとしても即時に記入しながら利用することができる構成になっている。

3 教育上の能力に関する大学等の評価 - 大阪教育大学附属池田小学校 学校教育診断 - 大阪教育大学附属池田小学校 個人評価 - 奈良学園大学における学生の授業評価 - 奈良学園大学における学生の授業評価	平成17年度～平成25年度 平成17年度～平成25年度 平成27年度 平成28年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年4回にわたって、児童対象と保護者対象に分けて、学校教育診断を実施している。およそ30項目の質問事項に対して、マークシート式で回答し、その他の要望等を記述式で回答する。結果はホームページにおいて公開され、授業参観時に全保護者が閲覧できるように冊子化もされる。その結果において、児童、保護者ともに、毎年度高い評価を得ている。 大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年度4月に個人目標を設定し、3月に管理職面談を経て個人評価を受ける。この結果は給与に反映される。この個人評価において、毎年度高得点を得て、高い評価を得ている。 人間教育実践力開発演習では、教師として求められる、教育現場の現代的課題への対応力として、学校安全マップの意義や授業構成に関する授業を行ったことで、教員としての将来への展望と、教員の資質能力に関して具体的に学ぶことができたが高評価を得て、以後毎年、学校安全マップの授業に取り組んでいる。 教育実習事前事後指導では、学校運営、学級経営、教室掲示とうについての講義を担当した。そこでは求められる教師の姿や学校の組織としての姿、組織力に関して具体的に学ぶことができた、高評価を得た。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 - 大阪教育大学教育実習生指導 - 名古屋市立井上小学校：安全研修講師 - 守口市教育委員会：守口市安全指導者研修会講師	平成17年度～平成25年度 平成21年8月 平成21年8月	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年度9月に基本実習生およそ50名、11月に併修実習生およそ50名を受け入れ、指導に当たっている。平成17年度から20年度においては図画工作科主任として、特に美術科の学生を受け入れ、授業実践、指導案作成、生活指導等の指導に当たった。また、平成22年度、23年度においては学校安全主任として、全教育実習生を対象とした安全講話を行うとともに、将来、教師になったときのための経験として、不審者対応訓練の見学、参加を指導した。また、平成25年度においては、教生指導部長として、全教育実習生の指導、相談に当たってきた。 名古屋市教育委員会主催による、安全担当者の夏期研修の講師を、名古屋市警察とともに務めた。当校教員が不審者対応訓練を行い、その訓練を参観した後、名古屋市警察とともに不審者対応訓練の指導助言を行った。訓練は、訓練の意義は、学校安全への意識を高め、チームとして学校の安全に向かう点にもあるという助言も行った。 「学校安全に必要なもの ～安全管理と安全教育～」というタイトルで、守口市の安全指導者を対象に、講演を行った。ここでは主に、不審者対応訓練による教職員の安全意識の向上と、「お金のかからない」安全対策、例えば机上整理による可視性の向上や、スリッパではなく靴を履くことによる、安全意識の向上について提案した。

・豊中市立南桜塚小学校：夏期研修会講師	平成 2 1 年 8 月	豊中市立南桜塚小学校の教員夏期研修会。当校の教職員は、それまで教職員対象の不審者対応訓練を行ったことがなかった。そこで訓練の方法や手順をコーディネートし、その後、「学校安全に必要なもの～安全管理と安全教育～」というタイトルで、不審者対応訓練の指導助言、及び講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校における不審者対応訓練の様子をビデオ視聴することによって、参考になるようにした。
・京都府教育委員会：安全指導者研修会南部大会講師	平成 2 2 年 8 月	京都府教育委員会主催の、安全指導者研修会で、「学校安全と安全教育」というタイトルで、学校安全管理と、安全教育に関する講演を行った。ここでは主に、教職員の安全意識を向上させることが、学校安全につながるという内容で話した。京都府下南部の教員約 1 0 0 名が参加した。
・京都府教育委員会：安全指導者研修会北部大会講師	平成 2 2 年 8 月	上記、南部大会の 3 日後に、北部大会において、同様の講演を行った。京都府下北部の教職員役 1 0 0 名が参加した。
・守口市教育委員会：守口市安全指導者研修会講師	平成 2 2 年 8 月	「学校安全に必要なもの ～安全管理と安全教育～」というタイトルで、守口市の安全指導者研修を対象に、講演を行った。守口市教育委員会の依頼で、前年度に引き続き開催された研修会である。前年度の内容に加え、大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件の概要を伝え、そこから教訓として取り入れる内容、特に ID カードの役割について強調する内容とした。
・豊中市立南桜塚小学校区：夏期研修会講師	平成 2 2 年 8 月	豊中市立南桜塚小学校区の教員夏期研修会において、「学校安全に必要なもの ～安全管理と安全教育～」というタイトルで、講演を行った。前年度は当校のみの教員研修会だったが、前年の講演内容から、中学校区の小学校と中学校も参加することとなり、三小学校・一中学校の教員を対象に行った。小中学校の教員が混在することもあり、特に東日本大震災における「釜石の奇跡」を資料として取り上げ、小中学校の連携の重要性を紹介した。
・羽曳野市立古市南小学校：夏期研修講師	平成 2 2 年 8 月	「学校安全に必要なもの ～安全管理と安全教育～」というタイトルで、羽曳野市立古市南小学校夏期研修会において、講演を行った。安全管理においては、教職員の安全意識の向上と、ID カードの大切さや意味について話し、安全教育については、大阪教育大学附属池田小学校で実践している授業について紹介した。
・日本損保協会：防災ダック座談会パネリスト	平成 2 2 年 1 0 月	日本損保協会主催の防災ダック座談会において、神戸市消防局安全担当者、京都大学教授とともにパネリストを務め、安全管理と安全教育に関する座談会を行った。発表では安全教育の授業内容、特に安全マップの授業について紹介した。聴衆は、現職教師、警察、消防関係、一般市民であった。
・大阪教育大学附属池田中学校：安全研修講師	平成 2 2 年 1 2 月	同じキャンパス内にありながら、附属池田中学校では、教職員対象の不審者対応訓練が行われていなかった。そのことを憂慮した当時の教務主任に相談を受け、講師として赴いた。不審者対応訓練の意義と方法を提案し、実際に訓練を行い、事後講評を行った。

・宮崎県教育庁：宮崎県学校安全研修会講師	平成23年5月	「学校安全と安全教育」というタイトルで、90分の講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校で行っている、教職員対象不審者対応訓練の映像を資料として使用し、訓練による二次的な効果としての、教職員の安全意識の向上について話した。本研修には、宮崎県下の安全担当教職員役200名が参加した。また、本講演には関西テレビが同行取材を行い、後日、一部が放映された。
・豊中市立第5中学校：安全研修講師	平成23年8月	豊中市立第5中学校において、不審者対応訓練のコーディネート、及び講演「学校安全に必要なもの～学校安全と安全教育～」を行った。中学校における訓練については、小学校とは違った意味、方法を持つ。また、教職員の意識も違う。まずはチームとして学校安全に取り組む必要性について述べた。
・守口市立梶中学校区：安全研修講師	平成23年8月	夏期休業中に行われた教職員の研修会で、守口市立梶中学校区の梶中学校、梶小学校、藤田小学校、3校の教職員全員が参加した研修会で、講師を務め、90分の講演を行った。「学校安全に必要なもの～学校安全と安全教育～」というタイトルで行い、附属池田小学校事件や阪神・淡路大震災を題材に、教訓から学ぶことの必要性を説いた。
・竜王町教育委員会：教職員夏期研修会講師	平成23年8月	滋賀県の竜王町教育委員会が主催する、教職員夏期研修会において、安全研修の講師を務めた。竜王町の教職員、約50名が集まった。「学校安全と安全教育」というタイトルで講演を行い、火災・地震災害・交通安全・水難災害・防犯の各カテゴリーにおける安全教育の実践例を紹介し、安全教育が及ぼす児童への影響について話した。
・守口市教育委員会：安全指導者講習会講師	平成23年8月	守口市教育委員会主催の安全指導者研修会の講師は、平成21年度から続く、3年目になる。年度ごとに各校の安全担当者が変わっており、毎年研修会を開くことの必要性を実感した研修会でもあった。本研修会では、例年、大阪教育大学附属池田小学校の教職員対象不審者対応訓練のビデオを題材として使用し、訓練の必要性と2次的な効果（教職員の安全意識の向上）について述べるようにしている。
・竜王町教育委員会：竜王町校長教頭会講師	平成23年8月	本研修会は、竜王町の校長、教頭会であるため、学校安全にかかわる際の管理職の役割について内容を構成した。「学校安全のリーダー性について～管理職の役割～」というタイトルで講演を行った。従って、これまで講演した内容を管理職向けに再構成し、不審者対応時の管理職の役割や、IDカードを徹底することの必要性、教職員の安全意識を向上させていくことの必要性と方法について提案した。
・豊中市立桜塚小学校区：3校合同研修会講師	平成23年8月	例年、豊中市立南桜塚小学校で開催している夏期研修会を拡大し、同校区の豊中市立第3中学校、桜塚小学校、南桜塚小学校の3校合同で開かれた研修会で、およそ100名が参加した。「子供たちの命を守るために必要なこと～学校安全設備と安全教育～」と題し、お金がかからないで、見落としている学校安全についてと、安全教育に関しては、東日本大震災を題材に話し、マンネリ化しない避難訓練について話した。

・大阪教育大学附属池田中学校：校内研修会講師	平成23年12月	平成22年度に引き続き、2年目の研修会である。初年度は初めての不審者対応訓練であり、戸惑いがちな様子がみられたが、2度目とあって、教職員の安全意識が飛躍的に向上し、積極的に研修会に参加している様子が伺えた。訓練後、訓練の振り返りを指導助言した。当校はまた、今回の訓練の様子をビデオ撮影し、後に校内研修で振り返りを行った。
・大阪教育大学メンタルサポートセンター：講演	平成24年2月	大阪教育大学附属池田小学校事件後に、児童のメンタルケアを目的として設置された、大阪教育大学メンタルサポートセンターが開催した学校安全フォーラムにおいて、大阪教育大学附属池田小学校の「安全科」に関する紹介と、安全教育の実践内容の紹介、学校安全に関する講演を行った。全国から約200名の参加者があった。
・豊中市教育委員会：管理職研修会講師	平成24年2月	豊中市教育委員会が主催する管理職研修会で、平成24年度においては学校安全に関する研修会を計画され、実施されたものである。管理職が対象ということで、これまでの講演内容を管理職対象のものに再構成した。また、主催者側の要望もあり、ワークショップも取り入れた。ワークショップでは、不審者対応時にどのように教職員を動かすか、どのようなリーダーシップを発揮するかという内容で行った。
・岬町立岬中学校：夏期研修会講師	平成24年5月	岬中学校における本研修会は、強く記憶に残るものであった。まず教職員の安全意識が非常に高く、それは安全担当者の熱心な姿勢からくるものであると推察された。当日実際に行われた不審者対応訓練では、防火扉を有効に使い、教職員同士で声を掛け合いながら不審者の居場所を限定していくという、大変工夫されたものであった。一人の教員の熱意やリーダーシップがうまく作用している様子が伺えた。
・宮崎県教育庁：宮崎県学校安全研修会講師	平成24年5月	平成23年度に引き続き、2年目の宮崎県での講演となった。前年度は、内容については講演者に一任されたが、当年度の講演は、地震災害についてのもという要請があった。東日本大震災をうけてのものと思われる。「釜石の奇跡に学ぶ～避難訓練についての再考～」と題し、休み時間に避難訓練をすることなどの重要性について話した。
・大阪教育大学：「学校安全の日」事業講師	平成24年6月	大阪教育大学柏原キャンパスにおいて、学部生、及び大学院生、200名を対象に、「安全な学校を作る教師になるために」というタイトルで講演を行った。将来、教師になったときの、子供たちを守る方法と意味について話した。この講演は、朝日、読売、毎日新聞の取材を受け、後日各紙に掲載された。
・守口市教育委員会：幼稚園長研修会講師	平成24年7月	守口市の幼稚園長を対象に、「子どもたちの命を守るために」というタイトルで90分の講演を行った。ここでは、交通安全を題材として取り上げ、幼稚園から小学校に上がった時の交通事故の増加に関する資料を示し、幼稚園児に対する安全教育の必要性和方法について話した。
・守口市立八雲中学校：安全教育授業・講演会	平成24年12月	守口市立八雲中学校において、5校時に中学校1年生から3年生を対象に、体育館で命の大切さを実感する授業として、東日本大震災を教材とする授業を行った。またその後、教職員を対象に、「子どもたちの命を守るということ」と題し、90分の講演を行った。ここでは、授業の振り返りも含めて、「釜石の奇跡」について紹介し、教訓から学ぶべき内容について話した。

・岡山県備前市立三石小学校：P T A人権教育小中合同研修会講師	平成25年6月	備前市立三石小学校において、午前の人権教育参観で第4学年において、「溺れかけた兄妹」という、作家の自伝的作品を題材にした安全教育（水難災害）の授業を行い、午後からP T A人権教育小中合同研修会で、「命を大切にする教育」と題し、安全教育と学校安全に関して、教員・保護者を対象に90分の講演を行った。
・豊中市立南桜塚小学校：安全研修会講師	平成25年8月	当校での安全研修講師は、5年続けてのものである。豊中市立南桜塚小学校の安全研修会において、当校の不審者対応訓練のコーディネート、及び指導助言を行うとともに、「子どもたちの命を守るために」と題し、教職員に対して90分の講演を行った。当校では、3年間の安全研修で教職員の安全意識も向上し、全員がIDカードを着けるようになったという、校長先生からのお話があった。
・茨木市立穂積小学校：安全研修会講師	平成25年8月	茨木市立穂積小学校の安全研修会において、「子どもたちの命を守るために」と題し、教職員に対して90分の講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校における不審者対応訓練の紹介と、「安全科」の授業実践を紹介し、具体的な安全対策について述べた。
・守口市立八雲中学校：安全教育授業・講演会	平成25年12月	守口市立八雲中学校において、前年度に引き続き、5校時に中学校1年生から3年生を対象に、体育館で命の大切さを実感する授業を行った。当日は、全校生徒による地震災害の避難訓練も行われ、見学をした。授業内容は、「Smile School～いじめと命について考えよう～」であり、いじめを題材とした授業を行った。授業後、教職員を対象に、いじめに関する講演を90分行った。
・守口市教育研究会 生活・総合部会：指導助言	平成25年12月	守口市教育研究会生活・総合部会において、当研究会の担当者による地震災害の安全教育の授業を参観し、その指導助言を行うとともに、「これからの学校安全と安全教育」と題し、60分の講演を行った。ここでは、担当者の授業実践の内容を絡め、教科教育と安全教育の類似点と相違点について話し、児童にとって有効な安全教育の必要性について話した。
・寝屋川市立堀溝小学校：安全研修講師	平成26年6月	寝屋川市立堀溝小学校において、5、6年生を対象に、「Smile School～いじめと命について考えよう～」と題して安全教育に関する授業を行い、児童下校後に、教職員対象に、『「有効な」安全教育とは ～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」を例に～』と題し、90分の講演を行った。ここでは、本当に児童にとって「安全で安心な学校」とは何かについて話し、いじめについての取り組みの必要性と方法について話した。
・岬町立淡輪小学校：安全研修講師	平成26年8月	本研修会は、平成24年5月に行われた、岬町立岬中学校の研修会に参加していた、淡輪小学校の安全担当者の依頼によるものであった。「これからの学校安全と安全教育」というタイトルで、120分の講演を行った。特に大阪教育大学附属池田小学校事件の詳細を話し、そこから教訓として学ぶべき事柄を話した。

・豊中市立南桜塚小学校：安全研修講師	平成26年8月	平成21年度から続く、南桜塚小学校の6年目の研修会講師である。「これからの学校安全と安全教育」というタイトルで90分の講演を行った。特に、学級崩壊やいじめといった、教育の現代的課題について話した。当校では、学校安全については過去5年間話していたため、安全に対する意識は向上し、取り組みを強化している様子であった。そこで一度立ち止まって考えたとき、子供たちにとっての「安全で安心な学校」とは、まずいじめなどがない学校であることを考えていくことを進めた。
・寝屋川市立第7中学校区「いのちの教育」研修会：講師	平成26年8月	寝屋川市の第7中学校校区である、第7中学校、南小学校、堀溝小学校の3校合同で開催された、「いのちの教育」研修会で、120分の講演を行った。「いのちの教育としての安全教育～“Smile School”の提案～」と題し、大阪教育大学附属池田小学校において実践した研究授業「Smile School～『いじめと命』未来に向けて考えよう～」の実践内容と、授業実践時の児童の反応を中心として、いじめについて子供たちが向き合う方法について話した。
・三郷町ひまわりセミナー：講師	平成26年11月	現在勤務する奈良学園大学人間教育学部がある、奈良県生駒郡三郷町における、一般向けのセミナーで90分の講演を行った。当日は、三郷町の町長、教育長、地域の小学校校長、市民ボランティア団体、一般の町民等、様々な人が参加した。「子供たちの命を守る「安全・安心」～町と大人の役割～」と題し、事件や事故、災害の実例を挙げながら、どのようにして子供たちの命を守るのかという、地域の大人の役割について話した。
・豊中市立豊南小学校：初任者研修指導助言	平成26年11月	豊中市立豊南小学校の初任者教員の、校内研究授業（国語・算数）の研究授業を参観し、授業後に指導助言を行った。当該教員は2年生を担当しており、特に、発達の課題を持った児童がいる学級における、一斉授業のあり方、方法について指導助言を行った。
・豊中市立豊南小学校校内安全研修：講師	平成26年12月	当校ではこれまで、校内の安全研修を行ったことがなく、研修のあり方、不審者対応訓練について、教職員の安全意識の向上についての講演依頼によって行った。当校教員約30名に90分の講演を行った。大阪教育大学附属池田小学校事件の教訓を例に挙げ、児童の安全を守るために学校、教職員が取り組んでいくべき内容について話した。
・豊中市立豊南小学校 安全教育授業	平成27年5月	当校において、安全教育の模範授業を実施し、研究調査を合わせて行った。授業内容は、「知らない人であれば」というタイトルで、防犯に関する授業を低、中、高学年で行った。「いかのおすし」という安全標語について、考える授業を行った。
・王寺町リーベルカレッジ：講演	平成27年8月	奈良学園大学社会連携センターと王寺町の共同による取り組み、王寺町リーベルカレッジにおいて、地域住民や子を持つ保護者を対象に、「子どもの安全を考える ～大人と地域の役割～」と題した講演を行った。神戸市小1女児の連れ去り事件などを例に挙げ、地域の大人の目の大切さについて話した。
・全国地域安全運動 泉大津・忠岡安全大会：講演	平成27年10月	忠岡町シビックセンターにおいて、泉大津・忠岡町の合同安全研修会で講演を行った。地域住民が200名ほど集まり、「子どもの安全を考える ～大人と地域の役割～」として、2004年の奈良小1女児殺害事件や、この年の夏に発生した奈良県香芝市の小6女児監禁事件を例に挙げ、「3つの死角」（場・地域住民・学校教育）について提案した。

・ 2015 なら講座：講演	平成27年12月	例年開催されているなら講座での講演。奈良県立医科大学で行われ、地域住民を対象に、「地域防犯の視点から」と題して講演を行った。地域の登下校見守り隊などのボランティア活動は高齢者頼みになっている実態を提示し、行政と地域が協同し、見守りなどの活動を活性化する必要性を提案した。
・ 大阪市立堀江小学校 卒業記念講演	平成28年2月	大阪市立堀江小学校の6年生100名を対象に、「命の学び ～中学校へ！新たな希望～」と題し、90分の授業講演を行った。3つの題目を設定し、「連れ去りについて」「いじめと命について」「避難訓練について」話した。
・ 豊中市立豊南小学校教員安全研修会：講師	平成28年5月	毎年行っている、豊中市立豊南小学校の安全研修の講師に赴いた。今回は教員が実際に不審者対応訓練を行い、それを見学して指導講評を行うというものだった。その中でも、教師という職業的性格から、責任感を強く持って有事に対応しようとするが、教師の命も大切な命であるということを強調した。
・ 授業力&学級づくり研究会：発表	平成28年6月	平成28年4月に、主に大阪府の小学校教員を中心とした「授業力&学級づくり研究会」を立ち上げた。会の運営に携わっているが、ここでは「ネームプレートを用いた非言語コミュニケーションの価値」と題して、授業の中で使うネームプレートの活用方法とその効果について発表した。50名の参加者で行った。
・ 奈良学園小学校：安全教育授業	平成28年6月	奈良学園小学校の全児童を対象に、安全教育の授業を2日間に分けて行った。小学校1、2年生を対象に行った「あんしんしてとうげこう」では、集団で登校することによる防犯上の利点について理解できる授業を行った。3、4年生を対象に行った「ここは安全？危険？」では、安全マップの前段階ともいえる、防犯の視点形成の授業を行った。5、6年生を対象に行った「命の学び」では、国立教育政策研究所の「いじめ実態調査」の資料をもとに、いじめに関する授業を行った。
・ 奈良学園登美ヶ丘（幼・小・中・高）：教職員安全研修 講演	平成28年6月	奈良学園登美ヶ丘キャンパスの幼稚園から高等学校までの全教員対象の研修会で、90分間の講演を行った。タイトルは「学校安全の意識」とし、前職であった大阪教育大学附属池田小学校における事件の教訓をもとに、教職員の不審者対応訓練の方法や意義、また、安全教育などについて話した。
・ 教職員自主研修事業 大学・専修学校等オープン講座 講演	平成28年7月	「事件・事故・災害の教訓から考えるこれからの学校安全と安全教育」と題し、90分間の講演を行った。とくに連れ去り事件に焦点を置き、安全教育を実践する際の視点の置き方について話した。また、年代別防犯の方法について、幼・小学校低学年、小学校中学年、そして小学校高学年・中学生と、年代別にわけて提案した。
・ 免許更新講習 講師	平成28年8月	保・幼稚園教諭を対象とする免許更新講習で、90分の講義を担当した。「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実を考える」というテーマで行い、「表現領域（美術）」を担当した。図画工作科教室において、保育内容を充実させる授業内容をグループで考案し、ポスターセッションを行って実践例を共有する活動を行った。

・三郷町立小学校 2 校合同研修会 講師	平成 2 8 年 8 月	三郷町立三郷小学校と三郷北小学校が合同で行う、合同不審者侵入対策訓練において、訓練実施後の講評と講演を行った。講演では、事件の教訓に基づいた学校安全対策について、校門のセキュリティーや ID カードの意味について、具体的に必要な学校安全対策について話した。
・日野町立西大路小学校 安全研修会講師	平成 2 8 年 8 月	日野町立西大路小学校における不審者対応訓練の指導講評をおこない、その後講演を行った。訓練は地元警察官が不審者役となり、臨場感あふれる訓練だった。講演では「事件の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」と題し、教員が意識すべき 3 つの「死角」（場の死角、地元住民の死角、学校教育の死角）について話した。
・大阪府立枚方高等学校 模擬授業	平成 2 8 年 1 0 月	高校 2 年生の、教職に関心をもつ学生およそ 3 0 名に、「子どものいのちと教師の役割」と題して 5 0 分間の模擬授業を行った。事件を教訓にして学校安全を考えていくことの大切さや、学校の安全を守ろうと奮闘してきた教師の姿について話し、安全教育の実践事例について、高校生も自らが考え、意見を交流することができる方法で模擬授業を行った。
・甲賀市立大原小学校安全研修講師	平成 2 9 年 1 月	甲賀市立大原小学校の教員安全研修会において、「防災教育をどうすすめるか」のタイトルで講演をおこなった。これまでの安全教育の想定やセオリーを見直し、児童生徒や地域の実態に応じた防災教育の必要性について話した。とくに避難訓練のありかたと有効性について話題にした。
・奈良県立大宇陀高等学校 模擬授業	平成 2 9 年 2 月	高校 2 年生の、教職に関心をもつ学生を対象に、「子どものいのちと教師の役割」と題して 5 0 分間の模擬授業を行った。事件を教訓にして学校安全を考えていくことの大切さや、学校の安全を守ろうと奮闘してきた教師の姿について話し、安全教育の実践事例について、高校生も自らが考え、意見を交流することができる方法で模擬授業を行った。
・熊本県益城町立広安西小学校 PTA 対象 講演	平成 2 9 年 4 月	熊本地震が発生した平成 28 年 4 月 14 日（前震）の前日である 4 月 13 日の放課後に、甚大な被害を被った益城町の小学校 P T A を対象に、「子どもの命を守る大人の役割」と題した講演を行った。
・熊本県益城町立広安西小学校 防災教育授業	平成 2 9 年 4 月	平成 28 年 4 月 14 日（前震）に発生した熊本地震からちょうど 1 年のこの日（平成 29 年 4 月 14 日）、甚大な被害を被った益城町の小学校で、児童対象に防犯・防災教育の授業実践を行った。低学年対象では、自分たちを守ってくれているものや人について改めて認識し、安心感を生む授業を行った。中学年には東日本大震災における「釜石の奇跡」を題材に、避難訓練の有用性に関する授業を行った。高学年避難訓練の有用性に関する授業を行った。高学年対象としては、阪神淡路大震災における被災者の数から、命の尊さに結びつけて考える授業を行った。
・奈良県立西の京高等学校 キャリア教育 講師	平成 2 9 年 5 月	教職を志す高校生約 30 名を対象に、「子どもの命と教師の役割」と題して講義を行った。過去に発生した略取・誘拐事件を題材に、アクティブ・ラーニングの授業スタイルで、個人の思考から対話の中での思考の深化、表出を意識した授業を行った。

・奈良学園小学校：安全教育 講師	平成29年 6月	奈良学園小学校の全児童を対象に、安全教育の授業を2日間に分けて行った。小学校1年生を対象に行った「あんしんしてとうげこう」では、集団で登校することによる防犯上の利点について理解できる授業を行った。3年生を対象に行った「こんなときどうする？」では、安全マップの前段階ともいえる、防犯の視点形成の授業を行った。5年生を対象に行った「いのちを守る判断」では、国立教育政策研究所の「いじめ実態調査」の資料をもとに、いじめに関する授業を行った。
・高槻市立郡家小学校：学校安全研修 講師	平成29年 7月	「事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」として、当小学校の教職員夏期研修会で話した。学校で発生した児童が被害に遭う事件を教訓に、学校安全の方法について話し、またそれらを教材にした安全教育の授業題材や授業方法、教授法について話した。
・大阪市 資質向上研究会 講師	平成29年 7月	「事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」として、大阪市の教員、管理職で構成される資質向上研究会で3時間の講演を行った。学校で発生した児童が被害に遭う事件を教訓に、学校安全の方法、管理職の役割について話し、またそれらを教材にした安全教育の授業題材や授業方法、教授法について話した。
・教員免許更新講習 講師	平成29年 8月	「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実を考えるー幼児期における造形表現活動の意義と役割ー」 保育、幼稚園教諭の教員免許更新講習の講師として、40名を対象に講義を行った。保育内容の5領域と「表現」領域の関連性について講義を行い、その後、アクティブ・ラーニングとして、グループで造形活動実践の計画、ポスター作成、ポスターセッションを行った。
・三郷町立小学校2校合同研修会 講師	平成29年 8月	本年度は三郷北小学校において、合同不審者対応訓練が行われ、その指導助言に赴いた。訓練は、安全担当者により周到に準備されたものだった。訓練後、学校安全における「教師の役割」について話した。
・生駒地区小中学校管理職・事務職員研修会 講師	平成29年 9月	「学校での事故・災害など、緊急事態に対する対応と予防」について、生駒地区の小中学校の管理職と事務職員に講演した。これまでの学校での事故や災害を例に挙げ、発生いたとき、あるいは予防方法について、教師の役割、管理職の役割について話した。
・第67次兵庫県教育研究集会（ひょうご教育フェスティバル） 指導助言	平成29年 11月	西宮市で開催された本研究会で、「生きる力を育む教育」分科会の指導助言に行った。当分科会では、主に震災に関連した発表が多くあり、震災関連教育については、今後、児童生徒の生きる力としての「レジリエンス」の重要性について話した。
・北海道の子育て、教育を支援する会 講演	平成30年 7月	北海道の子育て、教育を支援する会が主催する講演会、ワークショップにおいて、講師を務めた。午前の部は講座1として、「どうすれば子どもたちの命は守れるのか」と題し、90分の講演を行った。ここでは、過去における事件、事故、災害を教訓として、学校安全、安全教育の生かす必要性と、その実践方法について講演した。午後は講座2として、実際に安全教育のプログラムをグループで考案し、ポスターセッションで交流した。

・大阪市中堅教員研修 講師	平成30年 7, 8月	大阪市の中堅教員研修の講師として、3回(延べ600人)を対象に学校安全、安全教育に関する講演を行った。「事件、事故、災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」について、実際の事件や災害の実例を紹介しながら、どうすれば防げたのか、学校ではどのような対応が必要だったか、という、中堅教員がこれから出会うであろう課題を想定して講演した。
〔招待講演〕 ・カンボジア王国 王立プノンペン大学 講演	平成30年 9月	カンボジアの日本人会による企画において招へいを受け、王立プノンペン大学において90分の講演を行った。「日本における学校の安全と安全教育」と題し、およそ30名のプノンペン大学生および教員に、日本の学校安全について話した。講演の中では質疑応答が活発に行われ、カンボジアと日本の文化、災害事情の相違などによる対策の方法の違いなどが確認され、双方において新たな知見が共有された。
・奈良市「子ども安全の日の集い」講演	平成30年 11月	2004年11月に、奈良市内で発生した小1女児殺害事件に関して、奈良市が毎年開催している「子ども安全の日の集い」において、およそ300人の教員、PTA、地域住民を対象に講演した。「子どもたちを守るために～危険個所が見える化するための一つの方策～」と出し、文部科学省の「登下校防犯プラン」に基づいて、集団下校の方法や見守り隊の役割について話した。
・大阪市幼稚園主任者研修 講師	平成30年 12月	大阪市の幼稚園主任者研修において、およそ40名の幼稚園主任教諭を対象に、「子どもの安全のために必要なもの」と題して90分の講演を行った。とくに、近年の略取誘拐事件の実態について、統計を例に挙げて話し、大人(教員)は事前にどのような対策をとればよいのかについて提案した。2018年度
5 その他 特記事項なし		

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 (1) 小学校教諭一種免許状 平8小一第2378号	平成9年3月	大阪府教育委員会
2 特許等 特記事項なし		
3 実務の経験を有する者について特記事項 大阪教育大学附属池田小学校教諭 ・ 図画工作科主任 ・ 第6学年主任 ・ 第4学年主任 ・ 第2学年主任 ・ 学校安全主任 ・ 学校安全主任 ・ 図画工作科主任	平成17年度 ～平成21年度 平成21年度 平成22年度 平成23年度 平成22年度 平成23年度 平成25年度	大阪教育大学附属池田小学校における、主たる校務分掌を記した。着任後すぐに、5年間図画工作科主任になり、教科論を記した。また、その後4年間学年主任の業務においては、新任指導も含め、円滑な学年経営に努め、成果を残してきた。学校安全主任は、当該校の要とも言える。その任に就き、学校安全の推進、保持、発信、また、安全教育の推進と、責務を果たしてきた。
4 その他 「研究助成」 1. 下中科学研究助成（研究代表者） 『安全教育の実効性とその客観的効果の測定に関する研究』 2. 科学研究費補助金 奨励研究（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『児童の発達段階に応じた安全教育プログラムの開発に関する実証的研究』 (研究課題番号22908005) 3. 日本教育弘済会教育論文 奨励賞受賞 『安全教育のレリバンスに関する研究』 4. 科学研究費補助金 奨励研究（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『安全教育のレリバンスに関する実証的研究』 (研究課題番号26908040)	平成22年4月1日～平成23年3月31日 平成25年4月1日～平成26年3月31日 平成25年3月 平成26年4月1日～平成27年3月31日	安全意識調査を行ったとき、安全学習を実施したクラスの児童と実施していないクラスの児童では、回答結果に差異が生じる様相が見られた。この差異は、感覚的には感じてはいても、実証的に研究された事例はない。本研究においては、1年生から6年生までの児童の安全学習履歴と安全意識、けがや事故の状況を調査することにより、その差異を明らかにすることによって、安全教育の必要性和価値に実証性を持たせることを目的とした研究。 安全教育における、発達段階についての研究はまだ未開発である。しかし、発達段階を考慮しなければ、真に効果的な安全教育はなされない。本研究では、公立小学校の協力校等で授業実践を行い、そのデータをもとに、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムを作成することを目的とする。 大阪教育弘済会の教育論文に応募したところ、個人部門で上部団体の主催する日本教育弘済会の教育賞に推薦され、奨励賞を受賞した。 1つの授業を低、中、高学年で実施し、安全教育と児童の発達段階の妥当性を検証した論文である。 これまでの安全教育の現状と課題として、小学校6か年というスパンにおける、児童の学齢の差異を考慮した安全教育プログラムの開発がされてこず、避難訓練や「いかのおすし」に代表される標語的用語などによる安全指導内容が見直されてこなかった。また、日常の山積する課題対応に追われる多くの公立学校において、年間で実施可能で、かつ有効な安全教育プログラムの開発がされてこなかった。ことが考えられる。これらのことから、安全教育内容の有効性の検証と開発・児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証・年間で実施する安全教育プログラムの開発が、緊急の課題と言える。これらを、『安全教育のレリバンス(妥当性)』と総称し、授業実践から実証的研究を進め、有効な安全教育の発展と頒布に寄与しようとするものである。

5. JR西日本あんしん財団研究助成（研究代表者） 「児童の発達段階を考慮した『有効な』安全教育プログラムの構築に関する実証的研究」	平成27年4月1日～平成28年3月31日	これまでの研究として、「安全教育の有効性とレリバンスに関する実証的研究～大阪教育大学附属池田小学校『安全科』の実践から～」として、防犯概念・防犯スキル・自然災害・交通安全の各カテゴリにおける、児童の学齢と安全教育内容のレリバンス（妥当性）について研究を進めてきた。その中で、申請者が考案した「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会誌（第3巻第1号）P62-66 2010 松井）を用いて実践、検証した結果、学年に応じた有効な安全教育内容が明らかになってきた。しかし、その研究の中で新たな課題が見えてきた。そこで本研究においては、安全教育内容の有効性の検証と開発・複数小学校を対象にした児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証・児童、教職員、学校に応じた安全教育プログラムの開発を行う。これらを授業実践から実証的研究を進め、有効な安全教育カリキュラムの開発と頒布に寄与しようとするものである
6. 科学研究費補助金 基盤研究C（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『小学生の学年に応じた安全教育プログラムの開発』 （研究課題番号16k04791の研究代表者として、研究分担者1名体制で研究を率いている）	平成28年度～平成30年度	本研究は、小学校6ヵ年というスパンにおける小学生の学年を考慮し、低・中・高学年それぞれにおいて、その学年に妥当で有効な安全教育プログラムを開発することを目的とするものである。これまでの安全教育は、全学年同時に行う避難訓練や、「いかのおすし」に代表される標語的用語が中心であり、果たしてその安全教育内容が、小学生の、その学年に妥当であり有効なものなのかという検証はされてこなかった。そこで本研究では、これまでの事件や災害で失われた幼い命が残した教訓を生かした教材開発を行い、その妥当性と有効性を調査、検証し、全国の学校において実施可能な、有効で汎用性の高い安全教育プログラムを開発する。本研究は、安全で安心な社会の構築の一助となることはもとより、児童の命を守るための研究である。
「海外視察」 - 台湾：台中教育大学教育国際シンポジウム - カンボジア：メコン大学 - カンボジア：メコン大学 - カンボジア：メコン大学 - ベトナム ダナン市 - カンボジア：メコン大学 - カンボジア：メコン大学 「教員採用試験対策」 n a r a g a k u G Tの結成と代表	平成24年11月 平成26年2月 平成27年3月 平成28年3月 平成28年8月 平成29年2月 平成30年2月 平成28年2月～現在に至る	台中教育大学において開催された教育国際シンポジウムに参加し、台中教育大学、及び屏東教育大学を視察した。 奈良学園大学人間教育学部生および看護医療学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。 平成26年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。 平成27年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。 ベトナムにおける洪水災害に関して、ダナン市教育訓練局、ダナン市立小学校、ダナン師範大学、防災リスク管理局を訪問、視察した。 平成28年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。 平成28年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。 奈良学園大学人間教育学部の取り組みとして、2018年度の教員採用試験対策グループを構成し、日々、試験対策、面接対策に取り組んでいる。また、採用試験対策のみならず、息の長い教員を育てるという目的を持って取り組んでいる。 平成30年度教員採用試験においては、奈良学園大学1期生において、21名の最終合格者を出した。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 『いのちの教育』	共著	平成21年 10月	東洋館出版	平成13年6月8日に発生した児童殺傷事件。それ以来、安全教育と道徳を中心として、児童の安全と安心のために取り組んできた8年間の教育・授業実践を26例載せた。教育関係者がすぐにでも実践できるように、指導計画や板書例を掲載し、授業による児童の変容についても、具体的に記述した。 B5判 全124頁 編者：大阪教育大学附属池田小学校 共著者：藤田大輔・佐々木靖・浅田正志・井上伸一・岩井伸夫・岩井陽介・江原悦子・小原愛子・垣内幸太・鎌田菜絵・岸本卓也・坂下剛・佐藤学・田中毅・竹本和也・辻匡美・富田有香・長野純子・中村晶子・西江なお子・西村恭美・能川正人・土師尚美・林美恵子・孕石泰孝・平田葵・升村誠志・松井典夫・松浦恵・松原梨沙・葉師寺美江・矢藤学・柳井友裕・山崎聡・龍神美和 本人担当部分：「いのちをつなぐ機器AED」(115頁－118頁)を単著 本教材は、ここ数年で普及率が大幅に上昇しているAED (Automated External Defibrillator) [自動体外式除細動器]についての知識理解を深め、また、生命と常に向き合う職業を持つ人の話を聞き、交流することによって、豊かな人間的感性と生命に対するリアルな認識を身につけていくきっかけとするものである。児童にAEDの使用認可に至るまでの人々の努力について考えさせ、また、実際にAEDを体験することによって、ハードがあるから安心なのではなく、使用する(命を助けようとする)ことの勇氣について考えることによって、実体のない「いのち」の尊さに実感を持たせることがねらいである。 「命のバイスタンダー」 (119頁－122頁)を単著 命を大切にしなければならないということは、誰も分かっていることである。しかし、命というものには実態がないだけに、実感を持つことは難しい。子どもたちにとっては尚更である。そこで本教材では、一次救命処置のスキルを学び、もしも傷病者が自分の目の前にいたとき、「何かできるだろう」と思う自分から、「何もできないけど、自分にできることをさがして行動したい」と思える自分に変容させることをねらいとした。怖いと思う自分。何もできない無力な自分。でも、できる限りのことはしたいと考える自分。そのような自分を自己認識することが、実感を伴った命の大切さの実感へと結びつくと考えた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 学校安全 36の ナラティブ	共著	平成26年 3月	教育出版	子供たちの命を守り、安全で安心できる生活のために、学校は何ができ、また、何をすべきかという命題のもとに、学校安全に関わる著者陣が原稿を寄せてできた本。この安全・安心に関する問いかけに対しては、すでに多くの解説書や教材集、マニュアル本等が刊行されている。しかしそれらは、ともすれば上からの押し付けのような論が多い。そこで本書では、各著者が「私はこう考えている」「私はこんな体験をした」という、お話風の「語り（ナラティブ）」として編集された。 B5版 全157頁 編者：長尾彰夫 共著者：小林忠三・浜條信彦・松井典夫・若狭孝太郎・神田英幸・前馬晋策・丸山涼子・植木美佳・砂田信夫・中井尚人・佃繁・松田智子・伊原正俊・藤田大輔・諏訪清二・村川雅弘・立田慶裕 本人担当部分 「スリッパとIDカード」（pp14-15）を単著 概要 校内に配備された多数の防犯ブザー、赤外線システム、玄関の二重扉、可視性を重視した透明度の高い校舎。それらはお金がかかるものである。しかし、「お金がかからない学校安全」は、見落とししていることがたくさんある。そこで本項では、スリッパやIDカードの重要性、他にも、職員室の机上（可視性・校内安全に対する雰囲気）、教室の机の物かけ（いざという時の弊害）、教室の窓側のロッカーの上（可視性・安全性）、放送の使用（緊急時の連絡が可能か）、安全マニュアルの見直し（実現可能性・教職員の安全意識）、教職員の訓練の実施（子どもたちの安全・教職員の安全意識）などを紹介し、見落としがちな学校安全の重要性について書いた。 「安全な公園は危険な公園？」（pp18-19）を単著 概要 危険予知力と危険回避力は、矛盾することもあるということについて、入り口が一つの公園と、入り口が二つある公園の安全性比較から書いた。「危ないな」と感じると同時に、子どもは自分の身を守る方法も考える。例えば、路上駐車があり、まわりに人がいないとき、「車の陰から人が出てきたら」や「車に連れ込まれたら」と考えるのが危険予知であり、その車から離れて歩いたり、とっさに道を変えるのが危険回避である。ここに矛盾はないが、公園の例の場合、「逃げる」という意識（危険回避）が優先してしまうのである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				「わるい人とはどんな人？」(pp25－27)を単著 概要 こんな人が悪い人だという答えは、どこにもなく。こんな人を見たら、すぐに逃げまじょうと教えることも、するべきではない。既成の概念を崩し、正解がないことを知り、それでも行動しなければならないことを知り、今、教室で頭を振り絞って考えておくことが大切なのである。その思考と体験の蓄積が、「最も適切な行動」を生み出す礎になると考える。「知らない人にはついていかないようにしましょう」と、指導することは、果たして子どもたちの安全を保障する教えなのだろうか。「この行動が安全だ」と教えるだけでは、逆に不安全な結果を招く可能性もある。ただ対処する方法を教えるだけでは、安全を生み出す力に結びつかないばかりか、その方法は、果たして正解だと、断言できるものではない。既成の概念や教えを正しいと思い込むことの怖さを書いた。 「いかのおすしとおはしも」(pp48－49)を単著 概要 「いかのいすし」や「おはしも」に代表される、安全標語は、どれも大切なことだが、その一方で、どれも子どもたちは、当たり前「知っていること」である。そして、「いかのおすしを指導したから安全だ」「いかのおすしを思い出せば安全だ」「いざというときには、いかのおすしが役に立つ」という考えを持つ。しかし大切なのは、「ついていかない」という指導ではなく、「知らない人ってどんな人」かを学習し、思考し、判断材料を蓄積することである。「大声を出す」と指導するのではなく、大声を出すことの難しさを体験、実感させることである。「何かあったらすぐ知らせる」と言葉を覚えさせるのではなく、どのタイミングで、どこに、どんな方法で知らせるのか、考え、体験することである。安易に「言葉」だけで指導するのは、逆に「不安全」を生み出す可能性があるということについて書いた。 「休み時間に地震が起きたらどうしよう」(pp54－57)を単著 概要 多くの学校園での避難訓練は、「2時間目の授業中」という想定で行われる。実施時期にしても同様で、1月に避難訓練をしていると、「今年は7月にやってみよう」とはなかなかならない学校現場の現状がある。そこでここでは、休み時間に地震が起こることを想定した学習と、実際の休み時間の避難訓練の取り

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				組みについて紹介した。児童に予め、休み時間に遊ぶ場所と、もしもそこで地震が発生したら、どのように避難するかを想定させ、避難訓練で検証する授業を紹介した。児童はその時、予め想定した行動とは違う行動をした児童がいた。それが正解かどうかは結果しか物語らないが、とっさに判断をする体験の積み重ねの重要性を書いた。 「いろいろな不審者対応訓練」(pp62-65)を単著 概要 これまで、いろいろな学校で不審者対応訓練の講師を務めてきたが、その中で、「この学校は素晴らしい！」と思えたのは、数少ない。それだけに、校内で行う不審者対応訓練は難しく、また、その難しさに気づいていない学校が多いように感じられる。本項では、小中4校での訓練の様子と実態を紹介し、そこから、不審者対応訓練の困難性と必要性について述べた。 「火災現場に戻らない、は正解か」(pp74-77)を単著 概要 火災現場に「戻らない」というのは、命を守る上で大切なことである。しかし、絶対に戻ってはいけないのだろうか。本人の判断で戻り、大切な命を救った人もいる。ここでは、災害現場での葛藤と判断を体験する授業について書いた。安全指導は、セオリーを教え込みがちである。そのセオリーが現場で、いざという時に大いに知識として役立つことだろう。しかし安全学習は、その時、その場に応じて知識や体験を活用し、「最も適切な判断をすることができる力」を育むことである。その力は、単なる知識ではなく、様々な場面で臨機応変に対応することができ、子どもたちの、生涯にわたる安全・安心を保障していくものであるということを、火災現場での葛藤を考えさせる授業を例にして書いた。 「命のバイスタンダーの授業から」(pp82-87)を単著 概要 「命は大切」なことは、誰もが言い、誰もがわかっていることである。しかし、実体のない命に対して、それは本当に実感できるものではなく、子供たちにとってはなおさらである。そこで子どもたちに、命に触れることの怖さ、命に対する畏れを感じさせることによって、「命の大切さ」の実感を育むことを目的とした、『命のバイスタンダー』の授業を考案し、実践した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 教育フォーラム 56 「アクティブ・ラーニングとは何か」	共著	平成27年 8月	金子書房	「溺れかけた兄妹を教材にして」(pp108－111)を単著 概要 有島武郎の自伝的短編『溺れかけた兄妹』を題材にした、水難災害の授業を紹介することから、助けたいという「道徳的心情」と、二次災害の恐れとの狭間に生じた葛藤、そこから学ぶものについて述べた。児童の授業の中での言葉に、「その時になってみないとわからない。」という言葉があった。この言葉は、授業の中で判断し、自分の立場を明らかにすることができず、その場しのぎの言葉のように聞こえる。しかし、波の高さ、周りの状況、大切な人を助けたいという、その場の切迫した状況。それらが相互作用し、判断するのだという臨場感を子どもたちが感じていたからこそその言葉であったように感じられ、子どもたちは、安全な行動と、命を守りたいという心情の間の葛藤を「実体験」したのであり、そこに安全教育で大切な、実体験からくる学びの大切さについて書いた。 本書は、アクティブ・ラーニングのために必要な、課題意識の喚起のさせ方、多様な発想・アプローチへの目の開かせ方、粘り強い課題取り組みへの支援、課題解決の結論の検討や再吟味の促しといった、さまざまな働きかけ、指導の実際を具体的に提示したものである。 A5判 全169ページ 共著者(執筆順): 溝上慎一、加藤明、伊崎一夫、鎌田首治朗、前田洋一、岸周吾、芝池宗克、米川雅士、武谷嘉之、<u>松井典夫</u>、瀧明知恵子、井上信子、梶田勲一 本人担当部分: 「児童にとって『有効な』安全教育プログラムに関する一考察」(pp. 105－114)を単著 概要 安全教育の課題として、何よりも児童の発達段階を考慮した、体系的な安全教育がされてこなかった。発達段階を考慮し、最も「有効」な安全教育カリキュラムを構築することが、これからの安全教育にとって必要不可欠である。そこで本稿においては、児童の安全に対するレリバンス Relevance (知識・技能・行動・情緒面における妥当性)を検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築する研究成果について記述した。
4. どうすれば子どもたちのいのちは守れるのか ー事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育	単著	平成29年 2月	ミネルヴァ書房	本書は、著者が、大阪教育大学附属池田小学校において、同僚とともに実践してきた不審者対応訓練や ID カード等による学校安全対策、様々な「いのちの教育」の授業の事例などを通じて、これまで当たり前とされてきた「安全」についての考え方や方法を根本的に見直し、これからの学校安全と安全教育のあり方をさぐることを目的とした書である。そ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 教育フォーラム 60 「深い学びのために ーアクティブ・ラー ニングの目指すもの」	共著	平成29年 8月	金子書房	の中で、学校の安全を担う教師の役割、職責、使命感、資質能力について記述した。 A5判 全216ページ アクティブ・ラーニングの中で提唱される「深い学び」については、一定の教授・学習活動のパターンに関わるものではない。本書では、どのようにすれば「深い学び」になり、実現できるのかを、具体的、かつ実践的な提案で記している。 A5判 全145ページ 共著者（執筆順）：梶田叡一、古川治、鎌田首治朗、伊崎一夫、湯峯裕、大畑健美、菅井啓之、後藤紗貴、金山憲正、石森広美、善野八千子、瀧明知恵子、岡村季光、<u>松井典夫</u> 本人担当部分：「震災における教師の役割を考える」（pp. 125－134）を共著（岡村季光、松井典夫） 本稿は、近年における地震活動の活発化から、避難所としての学校の役割に注目した。また、その中で教員の活動について、教員における多忙感、内的統制感と諸変数の関係について実証的に論及した。また、そこから、学校が平時から地域とのコミュニティを強固にしておくことの有効について述べた。
6. 教師のための教育 法規・教育行政入門	共著	平成30年 3月	ミネルヴァ書房	本書は教職入門、教職概論、教職行政論、教員採用試験対策のテキストを目的として著述された。初学者にむけて学校教育のしくみを法的に理解できるよう、事例などをまじえ具体的に解説している。また、巻末に「主な教育法規」を収録した。 A5判 全210ページ 共著者：古川治、五百住満、八木眞由美、今西幸蔵、<u>松井典夫</u>、藤本裕人、藤田敏和、富江英俊、中村豊、岡邑衛 本人担当部分：「教育職員免許法」（pp. 14－15）を単著 概要 学校の教員になり、学校で授業を行うには、教員免許状が必要である。教員免許状を取得するには、教職課程のある大学等で、必要な科目及び単位を修得し、各都道府県教育委員会に教員免許状の授与申請を行うことが必要である。本稿では、教員免許状の種別と効力、教員免許制度における原則や欠格事由について述べた。 本人担当部分：「校務分掌」（pp. 38－39） 概要 学校はひとつの組織体である。校務とは、その組織体としての学校が、教育目標を達成するために、学校全体で行うべき業務全体のことであり、組織的、効率的、かつ調和的に行われなければならないものである。本稿では、校務と教員の勤務実態について、OECD 国際教

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				員指導環境調査 (TALIS2013) に基づいて記述するとともに、校長の責任と権限について記述した。 本人担当部分:「校長と教諭の職務」(pp. 40－41) を単著 概要 一般的に「教員」「教職員」「教師」と様々な呼称があるが、「教師」という用語だけは法令用語ではない。そして、「教職員」と呼称する場合は教員と事務職員、学校医等も含めている。また、本稿で取り扱う「教諭」とは、教職員の中の「職種」あるいは職階の呼称である。本稿では、教職員の職種とその職務内容の概略、それらを示す根拠となる条文を挙げるとともに、校長と教諭の職務について、過去の判例を挙げながら記述した。 本人担当部分:「司書教諭の職務」(pp. 42－43) を単著 概要 平成9年の学校図書館法の一部改正により、「学校図書館の専門的職務を掌らせるため」(学校図書館法第5条の1)、12学級以上の学校には司書教諭を置くことが義務付けられた。本稿では、学校司書と司書教諭の役割や職務について記述し、また、これからの学校図書館の果たす役割について、アクティブ・ラーニングと関連付けて記述した。 本人担当部分:「教員免許の更新制」(pp. 108－109) を単著 概要 これまでは、教員免許状に効力の期限はなく、いったん免許を得れば恒久的にそれを保持することができた。しかし、平成19年の改正教育職員免許法の成立により、平成21年4月1日から、教員免許更新制が導入され、教員は免許更新講習を受講しなければ、教員免許を保持することはできないこととなった。本稿では、教員免許更新制度の意義と、その講習について述べた。 本人担当部分:「学校保健・安全と法規」(pp. 152－153) を単著 概要 本稿は第6章「学校保健・安全と法規」の扉文となる稿である。まず近年の学校教育を取り巻く学校保健・安全に関する諸問題について概観し、学校保健・安全に関する学校教育の方向性について、世界保健機関(WHO)のオタワ憲章や、過去の事件や交通事故を例に挙げて述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				本人担当部分：「学校保健安全法」（pp. 154－155）を単著 概要 学校保健安全法（以下、同法）は、学校保健法が改正され、平成21年4月1日から施行された。本稿では、改正された点について、「学校保健」と「学校安全」について分類して解説し、学校保健については「学校保健計画の策定」と、「学校環境衛生基準」について、また学校安全については「学校安全計画」について解説した。 本人担当部分：「安全点検と安全教育」（pp. 156－157）を単著 概要 本稿ではまず、学校安全における現状と課題として、学校でのけが、登下校中の交通事故と略取・誘拐事件、そして災害については南海トラフ地震等への備えについて解説した。そして安全点検の方法について述べ、安全教育による児童生徒の危険予知や危機回避力の育成について解説した。 本人担当部分：「災害安全・防災教育」（pp. 158－159）を単著 概要 本稿では、まず近年の災害に関する現状について、阪神淡路大震災（平成7年）、新潟中越（平成16年）、中越沖地震（平成19年）と甚大な被害をもたらした震災を例に挙げ、平成23年に発生した東日本大震災については、津波や福島第1原子力発電所事故など、様々な災害をもたらした、また、学校管理下において発生した地震であることから、改めて多くの課題を認識することとなった経緯について解説した。その対策として、文部科学省の資料「学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き」に基づいて、防災マニュアルの作成について解説した。 本人担当部分：「養護教諭の職務」（pp. 160－161）を単著 概要 近年、様々に移り変わる社会状況等の変化に伴い、児童生徒等の健康に関する諸問題について、様々な課題が生じている。学校保健については、ストレスによる心身の不調などメンタルヘルスに関する課題や、アレルギー疾患を抱える子どもへの対応に当たって、学校において子どもの状況を日々把握し、的確な対応を図ることが求められている。その上で重要な役割を担う養護教諭の職務への期待や具体的な内容について解説した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				本人担当部分：「学校事故と国家賠償法」(pp. 162-163)を単著 概要 一般的に学校事故とは、「学校の管理下における児童生徒等の災害」(独立行政法人日本スポーツ振興センター法第15号第1項第七号)のことを指す。学校事故は、基本的には安全管理を徹底し、安全教育を実践していくことによって、未然に防止されることが望まれるが、それでも学校現場においては、不測の事態が発生し、事故が起こる場合が考えられる。本稿では、学校事故と損害賠償について、民法と国家賠償法の両面から解説した。 本人担当部分：「食育基本法」(pp. 164-165)を単著 概要 食育基本法は、平成17年7月に施行された。本法の成立背景には、我が国における飽食の時代ともいえる時代背景から、「食」を大切にしている心情や態度の欠如が危ぶまれていること、また、偏食や不規則な食生活、肥満や生活習慣病(がん、糖尿病、脳卒中など)の増加などがあげられる。本稿では、本法の体系を整理して解説し、また、食育推進基本計画についても解説した。 本人担当部分：「学校給食法」(pp. 166-167)を単著 概要 学校給食とは、同法第3条第1項、第2項において、義務教育諸学校(小学校、中学校、義務教育学校、中等教育学校の前期日程、特別支援学校の小、中学部)において、その児童生徒に対し実施される給食をいうと規定されている。本稿では、学校給食の意義と役割について解説した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1. 『Self Defense ～震災の教訓から～』	単著	平成22年2月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要 p p 4 6 - 4 9	研究協議会における公開授業の学習指導案。安全教育においては、命の大切さの実感の醸成と、実感を伴う体験活動が肝要である。本実践では、阪神淡路大震災の教訓を教材に、起振体験をもとに、6434 という死者数を、1枚の画像から考えさせ、その悲しみの実感をもとに、安全な行動に対する実践力へと結びつけた。
2. 『安全科の授業における児童の「安全・安心」の様相の変容に関する研究』 (査読論文)	共著	平成22年3月	日本セーフティプロモーション学会誌 第3巻1号 p p 6 2 - 6 6	本論文では、児童の安全・安心に対する意識の変容を客観的に調査する『安全安心様相図』を発表した。「命のバイスタンダー」の実践において、児童の変容を『安全安心様相図』を用いて継続的に調査し、安全教育が及ぼす児童への影響、効果を明らかにした。 著者／松井典夫・浅田正志・佐々木靖・藤田大輔 本人(松井)は、本研究の企画、構成、授業実践、論文執筆を担当した
3. 「安全科と International Safe School」	単著	平成22年12月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とどころ」 p p 1 2 - 1 7	大阪教育大学附属池田小学校研究誌「とどころ」の発刊にあたって、巻頭言を書いたものである。文部科学省教育課程特例校としての「安全科」の発足経緯と、教科としての安全科の意味、また、日本で初めてだったWHO International Safe School の認証の経緯とその意味を記述した。
4. 『命の避難訓練』	単著	平成23年2月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要 p p 3 5 - 3 6	本稿では、「命の重さ、尊さに対する実感を伴った避難訓練こそ、児童にとって必要な避難訓練である。命の避難訓練は、訓練事前の、災害に対する学習の深まりがあってこそ成立する」諷旨を書いた。実態調査では、児童の中で「火災」と「避難訓練」が結びついていないという結果を示し、そこから、スモークマシンによる煙体験による指導方法を提案した。
5. 命の大切さの実感を育む「安全科」の授業『命の避難訓練』	単著	平成23年6月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とどころ」 p p 2 4 - 2 7	本稿は、マンネリ化しがちな避難訓練について、本当に「命を守る避難訓練」になっているかを再考・提案する授業実践についての報告である。授業後の協議会で、児童が火災の中でも大切な命を助けに戻りたいと発言したことについて、「安全指導としては、戻ってはいけなくて教えるべきだ」という意見が出されたことを例に、「安全指導」と「安全学習」の相違について述べた。
6. 「自己変容の認識と非言語コミュニケーションツールとしてのネームプレートの活用」	単著	平成23年12月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とどころ」 p p 4 8 - 4 9	安全科の授業において、その客観的効果を測定するために、「安全安心様相図」(H22 松井)を考案した。授業の中で、安全安心様相図にネームプレートを置かせ、その変容を読み取り、安全教育の効果について測定することが目的だったが、ネームプレートを置く行為そのものが、児童の自己変容を認識させる有効な手立てだということがわかってきた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7.『釜石の奇跡に学ぶ』	単著	平成24年2月	大阪教育大学附属池田地区合同研究協議会研究紀要 p p 3 5 - 3 6	平成23年度研究協議会で行った、公開授業指導案。小中高合同研究会で、安全科の授業を中学生に行うことにより、小中高連携をはかる目的で行った。実際に釜石市を訪れて教材研究を行い、「釜石の奇跡」を題材とした。日頃の避難訓練が自分たちの命を救ったというインタビューをもとに、「有効な避難訓練とは何か」を考えさせる授業を行った。
8.「安全指導と『安全を学ぶ』ということ」	単著	平成25年9月	日本文教出版「教育情報」2013. No. 3. 巻末	本リーフレットは、日本文教出版が教育資料として発刊しているものであり、全8ページからなるものである。最終ページの「クローズアップ! 教育の現場」のコーナーの原稿を担当し、「安全指導」と「安全学習」の違いについて述べた。大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で実践した「命の避難訓練」の授業から、「おはしも」(押さない・走らない・しゃべらない・もどらない)という、これまで疑いも持たれず避難訓練時のセオリーとして通ってきた言葉を題材にし、想定にとらわれ、慣習にとらわれることの危険性について述べたものである。
9.『美術における「鑑賞教育」のあり方 ～小学校図画工作に焦点を当てて～』	単著	平成25年2月	週刊「教育PRO」No.1716 平成25年2月5日号 p p 6 - 1 0	「美術鑑賞」という言葉から、どのような様子を想像するだろう。「鑑賞教育」とは何か。多くの学校の美術教室には、世界の有名絵画がポストカードになった、鑑賞カードがある。カードを鑑賞し、著名な芸術家の名前と作品を一致させることが鑑賞教育ではない。本稿では、小学校図画工作科における鑑賞教育のあり方について再考し、提案した。児童が新たな課題や素材に出会った時、そこから何を生み出そうとしているかという、「個の認識」の萌芽が見られる。それはまだ、イメージが具象化していない段階であり、自由闊達なものである。そして造形表現活動を始めた時、そのイメージは次第に具象化し、題材の具現化が始まる。この時、「個の認識」はいったん完結したように感じられるが、それは自己中心的なものであり、高次の自己認識とは言い難い。そこで鑑賞活動を取り入れる。例えば、個々の作品をグループで鑑賞し、意見を交流し合う。その時、思いの他、自らのイメージが伝わらない、あるいは具象化されていないことに気付く。鑑賞活動による他者評価は、妥協したり、曖昧だった認識を強化したり、高めたりするのである。
10. 人間教育と美術の力ー美術体験と学校教育ー Human education and The dynamic of Art ーArt experience and education at schools ー (査読論文)	単著	平成26年4月	人間教育学会誌「人間教育学研究」創刊号 p p 8 9 - 9 5	図画工作・美術教育において、学習指導要領などに随所に現れる「自由」「創造的」「個性的」「喜び」という用語から教科としての特性と課題が見える。それらの用語は、図画工作・美術の他教科にはない特性を表すと同時に、捉えようによると教科としての「ゆるみ」に繋がりがかねない。そこで本稿では、図画工作・美術教育の課題を歴史的背景から紐解くと同時に、図画工作・美術科が持つ教科としての特性を、鑑賞教育を中心とした特徴的な実践から論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11. 小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅰ ～ICTを活用した絵画教育の可能性～ Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education -Possibility of Painting Education Using ICT-	単著	平成26年9月	奈良学園大学研究紀要第1集 pp109-115	戦後の美術教育史の中で、絵画教育が敬遠され、衰退してきた感は否めない。その理由として、絵画教育は、「上手」「下手」と2局的に、即時的に、そして結果的に評価されるため、授業者にとっても児童にとっても、それぞれの理由で積極的に取り組む関心・意欲・態度を逸してきたのだと考えられる。 そこで本稿では、新たな絵画教育の方法として、ICT機器を活用した動画による鑑賞活動を取り入れた授業実践を紹介し、その授業の方法から、新たな絵画教育の方法や、美術教育の価値について論じた。
12. 小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅱ — 小中連携教育の意義と課題 — Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education — Significance and Problems of elementary and junior high education cooperation — (査読論文)	単著	平成26年12月	人間教育学会誌「人間教育学研究」第2号 pp121-129	小学校と中学校の義務教育期における教育の役割は、人間教育の観点での土台を築くものである。その重要性から、学校教育活動は小学校と中学校の連携を念頭に置き、共に理解し、共に手を携えた教育を実践する試みが多くなされている。 本稿においては、大阪教育大学附属池田地区合同研究会における具体的な取り組みから、小中連携の課題と意義について考察した。 小中連携の意義とは、その実践を行った小学生の、中学校以降の学力、生活の様子、いじめの実態などの経年観察が必要であり、また、小中連携を行った学年とそうでない学年の比較研究、そして小中連携教育の方法面での効果の実証研究が必要であり、多岐にわたる。今後においては、協力校との連携を進め、小中連携教育の研究をさらに進めなければならない。
13. 学校安全・安全教育	単著	平成27年1月	平成24年度～平成26年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）課題番号 24330254「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発と実践」 PP77-95	本稿は、平成24年度～平成26年度科学研究費補助金「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書「いのちの教育ーカリキュラムモデルの開発と実践ー」の中の、第4章 学校安全・防災部会の報告、第1節学校安全 (PP77-81) と第2節安全教育 (PP82-95) の部分を単著したものである。主に大阪教育大学附属池田小学校における学校安全の取り組みや、「安全科」において取り組んだ安全教育の方法と実践内容について述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14. 児童の発達段階を考慮した安全教育プログラムの開発に関する研究－「児童の安全意識尺度（SASC）」の開発に関する基礎的研究－ A study on the development of safety education program in consideration of the developmental stage of the children －Basic research on the development of “Safety Awareness Scale of Children (SASC)”－（査読論文）	単著	平成27年 12月	人間教育学会 「人間教育学研究」 第3号 pp97－106	本研究においては、より汎用性の高い安全教育プログラムの開発を念頭に、児童の発達段階を考慮した安全教育プログラムの開発に関する研究における、「児童の安全意識尺度（SASC）」の開発に関する基礎的研究を行うことを目的とした。そこで、「児童の安全意識尺度（SASC）」の開発に関する基礎的研究として、公立小学校の協力校に赴き、SACSを用いた事前調査、安全教育の授業、事後調査という流れで調査を進めた。安全教育の授業においては、低・中・高学年、それぞれで同一授業を行った。調査結果を質問内容に着目した考察と、授業時の児童の様子に着目した考察を行った。その結果、本研究で取り上げた実践例である「知らない人にはついていってはけません」という教えを題材とした安全教育内容は、低学年が最もその妥当性が高いと見なすことが可能となった。
15. 学校安全の課題と展望に関する一論考～教訓と教材と教師について～	単著	平成28年 2月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌 「とごころ」 pp56－60	平成27年7月に、奈良県香芝市で小学校6年の女兒が誘拐された事件は世間を震撼させた。幸いにも女兒の命は無事だったが、同じように突然の魔物に連れ去られ、無事ではなかった命を私たちは思い出す。2004年の奈良小1女児殺害事件や2014年に発生した神戸女児遺体遺棄事件、2015年の和歌山小5殺害事件など、これらの連れ去り事件では、未来のある小学生の児童が命を失うという、最悪の結末を迎えている。この、幼い大切な命を救うことはできなかったのか。防犯に関して、具体的な事件を想起しながら、教訓と教材と教師、という3つの視点で記述した。
16. 想像力と創造性を結合する美術教育の可能性 Possibility of education to combine the creativity and imagination （査読論文）	単著	平成28年 12月	日本人間教育学会 「人間教育学研究」 第4号 pp57－63	国際競争を展開する教育政策は、科学技術と国民道徳の教育に傾斜していく中で、さらに学校教育費は恒常的な削減を繰り返す、芸術教科の授業時数は大幅に削減されていく。次の学習指導要領の改訂に関する答申では、特別の教科としての道徳の設置、英語教育の充実のための授業時数の増加、プログラミング学習の推進などが盛り込まれ、ますます芸術領域の存在場所が狭まっていく感は否めない。本稿では、その現実の中、アートの教育的意義を再発見、再確認することの急務を感じつつ、近現代のアート教育の実践を検証しながら美術教育が喚起する教育の可能性に接近することを目的とした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17. 「事件の教訓から学ぶ教師と学校安全 ―池田小学校事件からの発信を視点として―」	単著	平成29年10月	特別課題研究「震災・学校危機と教師教育」研究報告集 「震災・学校危機の教訓から学ぶ ―希望ある未来のための理論化にむけて―」 日本教師教育学会 pp. 127－134	児童が生命を脅かされ、あるいは失う事件、事故、事案は後を絶たない。そこで、過去の事件や災害の教訓は生かされているのかという問いが生じる。またそこに付随して、教訓とは何か、教訓を生かす方法とは何か、教訓を生かすのはだれかという問いについて議論を重ね、体系的に整理し、児童の命に結びつき生かされる教訓にしていくことが急がれる。そこで本稿では、今一度、池田小学校事件に立ち戻り、事件が残した教訓と、その後、附池小が発信した学校安全の取り組みを視点として、とくに教師が、それら教訓をどのように学校安全に生かしていくのかについて論考した。
18. 事件・事故・災害時における学校対応と児童の安全・安心に関する研究 A Study of school's response to incidents, accidents, disasters, and safety and security of children. (査読論文)	共著	平成29年12月	奈良学園大学人間教育学研究会 「人間教育研究」第1号(創刊号) PP. 55－71	これまで、児童生徒が被害に遭った事件・事故・災害において、その犯罪機会や動機、あるいは自己の発生原因や災害による被災状況については多く語られ、研究されてきた。本研究では、それら事件・事故・災害において、学校はどのように対応し、その対応は適切だったのかについて、過去の事例研究をもとに論考した。 著者／松井典夫・古田浩大・竹中遙一郎・中本将馬・池上紗耶・森高千晶・戸川理夏 本人(松井)は、本研究の企画、構成、授業実践、論文執筆を担当した。
19. 被災地小学校での絵画によるケアの実践 ―熊本地震復興アートプロジェクトの児童と教師たち― Practice of care by painting at elementary school in disaster area ―Kumamoto earthquake reconstruction art project and children and teachers -	単著	平成30年3月	奈良学園大学紀要第8集 PP. 87-95	本研究は、災害時における学校、教師、児童生徒に関連して2つの課題を見出した。一つは、災害時における「教師」を主体として見たとき、その多忙感を越えた使命感で避難所を運営する教師の姿は当たり前ではなく、教師は学校教育の推進に関わる者であり、それは被災者や避難所のものではなく、教師は学校、そして子どもたちのものであるという認識の必要性である。もう1点は、防災教育のありかたとして、それは次に来たる災害への準備、対応のための教育という意義は認められるものの、その視点を災害後の心のケアに着目した教育に置き、その方法を構築していく必要があるということである。 これら課題の着眼から、本研究では熊本地震において、学校再開直後に実践された復興アートプロジェクトに注目した。そして、「心の復興」を目的とする教育活動の有効性を、児童、教師、教材の3つの視点から検証することを目的とした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
20. 教師教育の視座における国際理解教育の必要性への考察 ―教職志望学生の開発途上国研修におけるテキストマイニングから― A study on the necessity of international understanding education in the viewpoint of teacher education. -From text mining in developing country training for teacher aspiring students-	単著	平成30年9月	奈良学園大学紀要第9集 PP. 137-146	近年我が国において、日系人を含む外国人の滞日が増加している。それに伴い、ニューカマーの児童生徒への教育や対応、社会的問題として、経済的危機（貧困）、学校不適応、母国への郷愁、それらが複合的に混在した結果によるいじめなど、多くの問題が指摘されている。本研究では、それらニューカマーへの教育をはじめ、国際理解は教師にとって重要な資質能力であるにもかかわらず、教師教育の視座において、その認識や対応が進んでいないことを課題とした。そこで、大学における教員養成課程での教職志望学生の海外研修をターゲットとして、研修参加学生の事後自由記述の作文をテキストマイニングによって分析した。そこから、ターゲットとした開発途上国研修は、教職志望学生の国際理解を進め、有効であることは明確となったが、グローバルパースペクティブや教員の資質能力向上に関しては、さらなる研究が必要であることが示唆された。
21. 災害時における教師の職業的役割 ―「使命感」と「多忙感」に着目して― Occupational role of teacher in case of disaster -Focusing on “sense of mission” and “busy feeling” - (査読論文)	共著	平成30年9月	日本教師学学会誌「教師学研究」第21巻 第2号 PP. 13-21	本研究では、災害時において、その教師の「職業的使命感」は統制の効かない状況における「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そして、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし、非災害地域の教員の「使命感」「多忙感」との比較調査を行うことによって、災害時における教師の職業的使命感の実態を明らかにすることを目的とした。そこで本研究では、熊本地震において被災した学校に勤務する教員26名、非災害地域として、民間主催の研究会に参加した小学校教員31名、及び関西圏の小学校教員16名との比較アンケート調査と熊本群の小学校教師6名に非構造化インタビューを実施した。その結果、使命感に関しては、被災の有無にかかわらず高い使命感を有している反面、被災を経験した教員において、多忙感や内的統制感の高さが、自らの存在価値や意欲の高まりにつながっていない実態が明らかになった。 著者／松井典夫・岡村季光 本人(松井)は、本研究の企画、構成、調査、論文執筆を担当した。 論文については、1. 本研究の背景 4. まとめと考察を担当した。
22. 教職志望学生が危機管理意識の国際的な相違を認識することの有効性に関する考察 ―「学校安全」における留学生と日本人学生の学びの比較から― A study on the effectiveness of recognizing international differences of crisis management consciousness by students who wish to be teachers. - From a comparison of the studies of	単著	平成31年3月	奈良学園大学紀要第10集 pp. 113-122	本研究では、北海道地震における訪日外国人が直面した課題がこれからの時代において看過できない課題であり、また、昨今の学校教育における外国籍児童生徒の増加に伴い、これから教職を志す学生が「何を学ぶのか」という視点に立ったとき、諸外国の危機管理意識やその方法について学ぶことの必要性について考察した。そこで本研究では、教職志望学生が日本以外の国の危機管理について知るとは、教員の重要な資質能力の一面を形成すると仮定した上で、「学校安全」の授業における中国人留学生と日本人学生の学びについて比較検討した。そこで、学生の発表の際に記述した自由記述感想文をテキストデータとして使用し、テキストマイニングによって分析を行った。 両者の学修を比較したとき、危機管理において「命」というものに最大の重きを置き、「人の命も大切であり、できれば救いたい」という感覚においても中国人留学生と日本人学生は同様の質を示すことが示唆された。しかし、授業の中でもよく見られたこととして、

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
international students and Japanese students in “school safety” -				中国人留学生の思考としては、道徳的な感情だけで「命」や危機管理について語る事はなく、そこには知識や技能などの基盤が重要であるという発想があった。そのような中国人留学生の発言、発想は日本人学生にとって、大きな刺激となることが示唆された。
(その他) 「教材の作成」 1. 教職表現力演習ノート	共著	平成27年4月	奈良学園大学	西辻正副・山本美紀編 岡村季光・岡野聡子・高木悠哉・松井典夫著 奈良学園大学人間教育学部の必修科目である教職表現力演習の教材として、授業担当者で通年使用可能な教材を作成した。
2. 「教育指導案・考察集の作成」 1. 安全教育実践指導略案集 2. 安全教育実践考察集	単著	平成22年2月	大阪教育大学附属池田小学校	本指導略案集と実践考察集は、現職の教員、及び教育実習生を対象として作成したものである。大阪教育大学附属池田小学校は、平成21年度より、文部科学省教育課程特例校として、「安全科」を設置した。当該校「安全科」主任として、平成21年度に実践した安全教育の授業の指導略案を作成し、授業後の考察集を作成し、平成21年度の当該校教育研究協議会において、参会者に配布し、教育実習生に配布した。
「学会発表(抄録)」 1. 『児童の直感に基づいた危険予知・回避能力を育む安全学習の在り方～児童の実態と犯罪機会論の比較から～』	—	平成21年9月	日本安全教育学会第11回大会 (於 東京学芸大学)	安全マップの学習は、マップを作ることが目的ではない。真の目的は、児童の危険回避能力・危険予知能力を育み、自ら犯罪機会を避けることができる力を育成することにある。学習のとしては、立正大学の小宮理論をもとに、「入りやすく、見えにくい」という視点を確立することによって、危険予知・回避能力を育むことを目標としてきた。しかし、学習を進め、児童の実態を観察するうちに、「入りやすく、見えにくい」という言葉では測りきれない、児童の危険に対する感覚が明らかになってきた。そこで、児童の実態に則した安全マップの学習を構築すべく、研究を進め、発表した。
2. 『安全科の授業における児童の変容に関する研究』	—	平成21年11月	日本セーフティプロモーション学会第3回学術大会 (P69)	本研究は、AED (Automated External Defibrillator) [自動体外式除細動器]を含めたBLS (Basic Life Support) に関するスキル学習を通して知識理解を深めることによって、豊かな人間的感性と命に対する実感を育むことを目的としている。事前アンケートでは、児童は、もし目の前に傷病者がいたらという質問に対し、990%の児童が、何らかの方法で傷病者を助けると答えた。しかし、BLSのスキルを習得した結果、「助ける」と答える児童は激減した。このことは、児童が「助けたい」という思いを持ちながらも、命に関わることの恐れを実感したことにより、初め、児童は自分が本当にできることを実感を持って考える。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3.『安全教育カリキュラムの構築に関する研究～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～』	－	平成22年9月	日本安全教育学会第11回宮城大会 (於 宮城教育大学)	平成13年児童殺傷事件を契機として始めた安全教育は、防犯のカテゴリーに特化した安全教育だった。しかし、子どもたちの目の前にある危険を考えたとき、安全教育を交通安全や災害安全教育を抜きにして語ることができない。そこで防犯、生活安全、交通安全、災害安全、命の大切さを実感する授業、の5カテゴリーを安全科において実践している。しかし、カリキュラムの構築を考えたとき、児童の安全に対する適時性（知識・技能・行動・情緒面において）を抜きにしては語れない。そこで、本研究においては、本校「安全科」の実践例をもとに児童の安全に対する適時性を検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築について発表した。
4. 安全科の授業における児童の安全意識の変容に関する研究	－	平成22年10月	日本教育大学協会研究集会（於 島根県サンラポーむらくも）	本発表は、日本教育大学協会が主催したものであり、第3分科会「附属学校の改革と実践の動向」で「安全科の授業における児童の安全意識の変容に関する研究」として発表したものである。特に、安全教育の有効性について、「安全安心様相図」を用いた授業実践と、児童の変容について発表し、安全教育の有効性の実証について発表した。交通安全学習については、学習前は「安全安心様相図」では、多くの児童が図の中心付近に多くポイントしていたが、授業後は「不安・危険」のカテゴリーに多くポイントした。このことにより、授業による児童の変容が明らかになったという内容を発表した。他に、水難災害、命を実感する授業の実践についても、授業前と後の、児童の変容を視覚的に見ることがができる内容で発表した。
5. 児童の発達段階における安全教育の有効性に関する実証的研究	－	平成23年11月	日本セーフティープロモーション学会 第5回学術大会（於 大阪教育大学）	本研究においては、一つの実践を低・中・高学年で行い、その相違を明らかにし、発達段階ごとの安全教育カリキュラムの作成につなげることを目的としたものである。防犯ブザーの使用法に関する授業を題材とした。防犯ブザーは、すべての児童が通学リュックに装着している。しかし、防犯ブザーに対する意識、使用に対する構えなど、低・中・高学年では大きな相違が見られると予想される。そこで、「安全安心様相図」を用いて実態を調査するとともに、同授業を3学年で行い、児童の授業時における記述などをもとに調査を行った。考察として、学年が上がるにつれて、リスクマネジメントに対する自我が発育する。しかし、それは実態を伴わない場合が多い。低学年では自尊感情を育み、中学年では実践的な、そして高学年では自己意識の再構築をねらいとする授業構成が肝要であると述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. 安全教育のレリバン スに関する研究～大阪教 育大学附属池田小学校 「安全科」の実践から～	－	平成24年 7月	日本カリキュラム学会 第23回大会（於 中 部大学）	本研究では、「安全安心様相図」（日本セーフ ティプロモーション学会 2011 松井）を用い て、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」 の授業実践による児童の変容を客観的に実 証することにより、安全教育内容と児童の発 達段階の妥当性を検証しようとしたもので ある。これまで安全教育においては、児童の 発達段階を考慮した学習内容が検討され、研 究されてこなかった。したがって、避難訓練 をはじめ、交通安全学習など、どの学年に適 しており、どの学年で行うのが妥当である という検討がされてこなかったため、「有効な」 安全教育であったかという疑問が生じる。本 研究で、安全教育と児童の発達段階の妥当性 を実証することにより、有効な安全教育プロ グラムを作成していくことを目標とした。
7. 安全教育のレリバン スに関する研究	－	平成24年 10月	日本安全教育学会第1 3回大阪大会（於 大 阪教育大学）	中央教育審議会学校安全部会において、「防 災科」あるいは「安全科」として、安全教 育を教科化する方針が打ち出された。これま ではひとつの「視点」であった安全教育を、体 系的に学ぶことができるようにという発想 であり、東日本大震災による災害から、教育 が一步前に進もうとする願れといえる。しか し、安全教育で最も大切なのは、「重要性の 認識」もさることながら、「効果的な学習を すること」にあると考える。これまでの安全 教育は、安全だと信じ、考えてきたことを疑 ってこなかった。例えば児童に当たり前の ごとく「安全指導」として教えてきた、「揺れ たら机の下に身を隠す」ことや、「いかのお すし」「おはしも」をはじめとする言葉など においても、一層吟味し、指導方法、内容を 考え直さなければならない。そこで本研究 においては、「効果的な安全教育」であるた めに、安全教育のレリバンに着眼した。今後 、教科化するにおいても、また、安全教 育を推進していく上でも、そのカリキュラ ムの構築において、児童の安全に対するレ リバン Relevance （知識・技能・行動・情 緒面において）を考慮することが肝要であ る。そこで、本研究においては、実践例を もとに児童の安全に対するレリバンを検証 した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 安全教育カリキュラムのレリバンスに関する研究～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～	—	平成24年 1月	第6回アジア地域セーフコミュニティ会議	大阪教育大学附属池田小学校では、平成21年度より、文部科学省の教育課程特例校に認定され、「安全科」を設置した。安全教育のカリキュラムの構築を考えたとき、児童の安全に対するレリバンス Relevance （知識・技能・行動・情緒面において）を考慮することが肝要である。そこで、本研究においては、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践例をもとに児童の安全に対するレリバンスを検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築の礎とすることを目的とした。「安全安心様相図」を用いた調査から、低高学年に比して、中学年が著しく違う様相を示した。このことは、発達段階的には防犯ブザーに依存（信頼）する段階でありながら、ブザーが実際には鳴らなかつたり、鳴らすタイミングに迷う自分と改めて向き合ったことによる一時的なショックがあると考えられる。また、低高学年においては類似した様相を示したが、記述内容を見ると、高学年における防犯ブザーに対する依存心（信頼度）の低さが伺えた。これらのことから、同授業を年代別で実施した結果、年代による相違が明らかとなった。
9. 学校安全と防災教育 といのちの教育	—	平成27年 1月	いのちの教育実践交流会 第6回シンポジウム in 兵庫	本研究発表は、平成24年度～平成26年度科学研究費補助金「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書「いのちの教育－カリキュラムモデルの開発と実践－」の中の、第4章 学校安全・防災部会の報告、第1節学校安全（PP77-81）と第2節安全教育（PP82-95）の部分を単著したものに基づいて発表したものである。主に大阪教育大学附属池田小学校における学校安全の取り組みや、「安全科」において取り組んだ安全教育の方法と実践内容について、実践結果を交えながら発表した。
10. 災害時における教員の職業的役割 ～「使命感」と「多忙感」に着目して～	—	平成29年 3月	日本教師学学会第18回大会（於、早稲田大学所沢キャンパス）	本研究では、特殊な状況下、とくに災害時においては、その「使命感」は「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そこで、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし、非災害地域の教員との比較調査を通して検証し、教員固有の職業的役割を明確にすることを目的とした。調査の結果、他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し、熊本群の教員にそれらがみられないことから、一連の熊本地震に対する対応の疲労感が高まっていることが背景因子として懸念され、早急の対応が求められることがわかった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 1. 「事件の教訓から学ぶ教師と学校安全 ―池田小学校事件からの発信を視点として―」	―	平成29年9月	日本教師教育学会 第27回奈良大会 (於、奈良教育大学)	児童が生命を脅かされ、あるいは失う事件、事故、事案は後を絶たない。そこで、過去の事件や災害の教訓は生かされているのかという問いが生じる。またそこに付随して、教訓とは何か、教訓を生かす方法とは何か、教訓を生かすのはだれかという問いについて議論を重ね、体系的に整理し、児童の命に結びつき生かされる教訓にしていくことが急がれる。そこで本稿では、今一度、池田小学校事件に立ち戻り、事件が残した教訓と、その後、附池小が発信した学校安全の取り組みを視点として、とくに教師が、それら教訓をどのように学校安全に生かしていくのかについて発表した。
1 2. 災害時における教員の職業的役割	―	平成29年9月	日本安全教育学会 第18回岡山大会 (於、岡山大学津島キャンパス)	教員の「多忙化」が指摘される中、災害という統制できない状況のとき、その「多忙」の多寡にかかわらず、教員が避難所運営に主体的に、あるいはリーダーシップを発揮して携わるなどの例がある。 本研究では、教員の「使命感」と「多忙感」に着目し、その関連性について、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして、教員への意識調査をもとに検討した。
1 3. 被災地におけるアートプロジェクトが児童・教師に及ぼした影響について On the Influences of Art Projects in Disaster Areas on Children and Teachers		平成30年3月	日本教師学学会 第19回大会 (於、甲南大学平生記念セミナーハウス)	1995年に発生した阪神・淡路大震災以降、被災者の心のケアの重要性が広く認識されるようになった。学校教育においては被災した児童生徒のためのストレス対処法や、災害後の心の傷を予防するためのストレスマネジメント教育の必要性が指摘されており、新たな防災教育が求められている。本研究は、熊本地震において被災し、避難所となった小学校において実践されたアートプロジェクトの報告から、防災教育の新たな方向性を見出そうとすることを目的とした。
1 4. 教職志望学生の「学校安全」に関する体験的学修の有効性		平成30年9月	日本安全教育学会 第19回横浜大会 (於、國學院大學)	教員免許法が改正され、教職課程の授業の改善や、教職課程全体についてのデザインのさらなる検討が、各大学に求められるようになった。教職課程コアカリキュラムにおいては「学校安全」への対応が求められる。そこで本研究では、教職志望学生が「学校安全」を体験的に学修することによる教職への意識の変容、あるいは資質能力の形成における有効性について検討した。
1 5. 教職志望学生の「学校安全」に関する学修の有効性 Effectiveness of study on “School Safety” of students who wish to become teachers		平成31年3月	日本教師学学会 第20回大会 (於、上智大学)	教職課程コアカリキュラムにおいて、「学校安全への対応」が必修項目とされた。これまでの課題の経緯を踏まえ、教職志望学生がいかに「学校安全」を学び、それが教職への資質能力へとどのように結びつけることができるのか、計画と実践、評価と検証が必要になってくる。本研究においては、教職志望学生が学校安全を学ぶひとつのモデルとして、体験的学修が教職への意識、資質能力にどのように結びつくのか、実践と学生の反応から検証した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「教育誌等」 1.『安全教育と防犯① 学校安全の現状と課題 「災害はひとごと」という意識を超えて』	単著	平成23年 10月	週刊「教育資料」 No.1180 平成23年10月10日号 pp18-19 日本教育新聞社	「学校は安全な場所ですか」 この問いに対して、学校関係者はどのような答えを出すだろう。さらに「あなたの学校は安全ですか」という問いに対してならどうだろう。8人の子どもの命を失った大阪教育大学附属池田小学校の、悔恨と痛恨から生み出されてきた学校安全の取り組みについて、安全で安心な学校生活と、人を傷つけない、傷つけられない子どもたちが育つための安全教育の方法について記述した。
2.『安全教育と防犯② 学校安全管理と教職員の安全意識』	単著	平成23年 10月	週刊「教育資料」 No.1181 平成23年10月17日号 pp24-25 日本教育新聞社	お金がかからない安全管理は多くある。それらの安全管理は、学校に「見えない防壁」を作る。しかし、一般的に、多くの学校園には見えない壁はなく、侵入は容易であり、事を起こし、逃げることも容易である。「壁」とは、校門のガードであり、校舎の周囲であり、教職員集団の意識であり、管理職のリーダーシップである。教職員の安全意識の持ち方や、学校で取り組むことができる安全対策について記述した。
3.『安全教育と防犯③ 不審者対応訓練について ～「訓練」の失敗から次の課題を見出す～』	単著	平成23年 10月	週刊「教育資料」 No.1182 平成23年10月24日号 pp18-19 日本教育新聞社	大阪教育大学附属池田小学校では、年間5回の教職員対象不審者対応訓練を行っている。 平成22年度の当校の安全研修会で、「公開不審者対応訓練」を実施した。その訓練では、見学した教育関係者の多くが、これまで学校園で取り組んできた訓練との違いを実感している様子だった。そして、それぞれが各地の学校に帰り、公開訓練のことを伝え、取り組んでいくことの大切さについて記述した。
4.『有効な安全教育とは何か？～体験と実感で子ども自身の判断を育む～』	単著	平成23年 11月	週刊「教育資料」 No.1183 平成23年11月7日号 pp24-p25 日本教育新聞社	命の大切さという意識は潜在的なものであり、命にはその実体がないだけに、実感することは容易ではない。その大切さに対する実感は、大人はもちろん、ましてや児童が容易に持ち得るものではない。したがって、実体のない命に対する実感は、家庭はもちろんのこと、教育活動の中で育んでいくべきものである。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で取り組まれてきた安全教育カリキュラムを、その実践例を通して紹介した。
5.『安全教育と防犯⑤ これからの学校安全に向けて ～安全に「絶対」はなく不断努力が必要～』	単著	平成23年 11月	週刊「教育資料」 No.1184 平成23年11月14日号 pp18-19 日本教育新聞社	「安全管理マニュアル」は、各学校園で作成し、校内に置くことが義務付けられている。大切なことは、「改訂を続けること」である。改訂し、より実践的、現実的なマニュアルにしていくことが必要である。学校安全の既存する考えや概念を問い続け、研究し続け、前に進み続けなければならないということである。安全指導上、「良し」とされてきたことが、実際の場面で本当に児童の生命を守る術となっているのかということについて、改めて見直し、改訂していくことが学校安全において必要であるということを記述した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6.「これからの学校安全について考える」～第1回 事件の教訓から学校安全の実態を見る～	単著	平成27年8月	『教育プロ』第45巻 第17号 通巻1786号、ERP、pp.26-27	警察庁のまとめによると、子供の連れ去り（略取・誘拐）事件のうち、発生時間帯として最も多かったのが、午後4時から午後6時の時間帯とされている。この時間帯は、言わば下校時間帯にあたる。奈良小1女児殺害事件以降、この時間帯は「魔の時間帯」とされ、子供たちの安全を守ろうと、地域住民による見守り隊など、児童の下校を見守る大人の姿が多く見られるようになった。しかし、13歳未満が被害に遭った略取・誘拐事件に関して、2004年の奈良の事件以降の10年間を見ると、2004年の141件以降減少し、2008年には63件まで減少した。しかし、2014年は100件を超す発生件数を数えている。地域住民が努力しても、なぜ犯罪は減らないのか。事件の教訓を視点に学校安全の実態について述べた。
7.「これからの学校安全について考える」～第2回 子どもの命を守る『有効な』安全教育とは～	単著	平成27年8月	『教育プロ』第45巻 第18号 通巻1787号、ERP、pp.26-27	児童が何者かに連れ去られそうになったとき、大声を出した（いかの「お」すし）結果、その大声を最悪の方法で犯人が止めようとする場面を想像する。だが、「大声を出す」と教えたのは、現在の学校での安全教育の王道なのである。その教えるを頑なに守ろうとした結果、不安全を招く可能性があることを認識しなければならない。ここでは、岡山県での安全教育実践を例に挙げ、安全標語に頼らない、「有効な」安全教育について述べた。
8.「これからの学校安全について考える」～第3回 学校安全と教訓～	単著	平成27年9月	『教育プロ』第45巻 第20号 通巻1789号、ERP、pp.26-27	2001年6月に発生し、世間を震撼させた大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件では、「学校安全神話の崩壊」と言われた。しかし、学校がなぜ安全だと思い込まれていたのだろう。その思い込みが、8名の児童の大切な命を失う結果となったのである。今もなお、学校安全に対する思い込みはないだろうか。その思い込みが、今日の前にいる大切な子供の命を失うことにはならないだろうか。本連載では、「これまでの」学校安全に対する思い込みを検証し、考え直し、認識を改めていく必要性を述べてきた。最終回となる本稿では、学校安全を支える教訓について述べた。
9.「教育実習の課題と展望」第1回 教育実習の意義～その必要性和質～	単著	平成27年12月	『教育プロ』第45巻 第28号 通巻1797号、ERP、pp.14-15	学校における現代的課題として「いじめ」「学級崩壊」「不登校」「家庭との連携」「学力保障」「子どもの安全」など、教育現場はそれらの問題と常に向き合い、対処、対応し、解決していかなければならない。学習面・メンタル面・人間関係面などで特別のケアや支援を必要とする子どもの増加や、増大する保護者の要望・クレームへの対応など、学校・教職員が対応すべき問題や課題は多様化し増大している。したがって、教員の資質・能力はより高いものが要求されていると言える。大切なことは、「では、この流れゆく社会の中で求められる教師像に対応する資質・能力を、教員養成系大学や学校現場で、どのよう

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10.「教育実習の課題と展望」第2回 教育実習の実態～実施する大学と受け入れる学校～	単著	平成28年1月	『教育プロ』第46巻第1号 通巻1798号、ERP、pp. 26-27	に育むのか」という現実的に必要な視点である。本稿ではその中でも特に、教員になる上で必修である教育実習について、そのあり方や価値、抱える課題について論考し、教育実習のこれからの展望を捉えていくことを目的として記述した。 公立諸学校の教育実習生の受け入れについては、様々な点で課題がある。まず公立学校は、そもそも教育実習を受け入れる前提での体制が整えられていない。また、いわゆる母校実習については、“大学側の対応や評価の客観性の確保等の点で課題も指摘されることから、できるだけ避ける方向で、見直しを行うことが適当である”とあるように、公立学校にとっては、いつ何時、どのような、どの学生を受け入れるのかという点において、不確定なのである。本稿では、受け入れる学校側の実態について記述した。
11.「教育実習の課題と展望」第3回 教育実習の役割～教職の道標～	単著	平成28年1月	『教育プロ』第46巻第2号 通巻1799号、ERP、pp. 24-25	教育実習の前、大学における3年生になるまでのカリキュラムの中で、介護等体験や、大学のカリキュラムによっては学校支援ボランティアなど、教育という社会の一部に経験はあっても、そこにある「子どもたちに対する責任」の荷重はさほど大きくはない。しかし、教育実習ではおよそ1ヵ月の期間、教師たちとほぼ同じ時間、子どもたちと接している。けんかをしている子どもたちの対応に迫られる場面もあれば、学級全体を指導する場面にも出会う。その中で、おのずと「子どもたちに対する責任」の荷重は大きくなる。教育実習生は「学生」でありながら「先生」であるという、重層的立場（Student Teacher）を持つことになる。本連載の第3回目にあたる本稿では、教育実習生そのものに焦点をあて、教育実習現場での実際の学びと、その学びの有用性や効果について論考した。
12.「教育実習の課題と展望」第4回 これからの教育実習～質と夢の保証～	単著	平成28年2月	『教育プロ』第46巻第4号 通巻1801号、ERP、pp. 16-17	平成27年1月に文部科学省から発信された「高大接続改革実行プラン」は、センター試験の廃止や記述式試験の導入などがセンセーショナルにクローズアップされた。したがって一般的に私たちは、大学入試改革に意識が向きがちだが、高大接続改革とは、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の三者一体的改革であるという捉え方をすべきである。それは、高校での「学力の3要素」の育成と、それを受けた大学教育の質的変換、そして、高大の接続を担う大学入試制度が三位一体となった改革である。そこには、「新しい時代にふさわしい」学力や人材を育成するというビジョンが土台となっている。この構造を、教員養成に関わる一連の過程の中に求めるという視点で記述した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13.「これからの教員養成における質的転換」 第1回 教師の資質能力の変化と転換	単著	平成28年 8月	『教育プロ』第46巻 第18号 通巻1815号、ERP pp12-13	社会の進歩や変化にともない教育の世界にその時流は確かに訪れてはいる。しかし、その一方で、教育そのものを担う教師の存在（意義）や資質能力、また、それらの礎となる教員養成の変化と進歩に大きな胎動は見られない。そこで本稿では、社会の変化や進歩に対応する教員養成の質的転換について、教師の資質能力、教育実習、教員としての進路選択をキーワードにして論考した。
14.「これからの教員養成における質的転換」 第2回 教員の「多忙感」と教職の実像	単著	平成28年 9月	『教育プロ』第46巻 第20号 通巻1817号、ERP pp14-15	次期学習指導要領案の特色と学校教育の役割について論じた。小学校の英語教育の強化、授業時数の増加、またプログラミング教育の導入など、その改定は急速に進む。一方で、今後の教員採用者数は、少子化と退職者数の頭打ちから、減少する傾向は否めない。このことから推測されるのは教員の「多忙感」の増大である。教員の「多忙感」に注目し、今後求められる教員の資質や「学校行事精選と授業時数確保」についても論考した。
15.「これからの教員養成における質的転換」 第3回 揺るぎない「教職の体幹」とは	単著	平成28年 9月	『教育プロ』第46巻 第21号 通巻1818号、ERP pp16-17	文部科学省の答申における「教員の資質能力」は時代や社会の要請に応じて、その資質能力や教師像が変容しつつ、揺れ動いている。本稿では日本の歴史的な学校制度の変換や教員養成の歴史的変換に視点を当て、教員の資質能力や今後の教職キャリアについて整理した。さらに時代のニーズは変化しても、教師に求められる「教職の体幹」＝「児童や生徒に好かれる資質」についても論じた。
16.「これからの教員養成における質的転換」 第4回 「教職の体幹」を育成するカリキュラムデザイン	単著	平成28年 10月	『教育プロ』第46巻 第22号 通巻1819号、ERP pp16-17	教員の資質能力について言及し、揺るぎない「教職の体幹」＝「児童や生徒に好かれる資質」について論じた。教育への使命感や子どもへの情熱など、その教師は何を身に着け、それをどのように学んだかという点が大切である。それは先天的なものや外見ではなく、後天的に養成されたものである。「児童や生徒に好かれる資質」を後天的に養成するカリキュラムデザインについて論考した。
17. いのちの教育 ー教師の視点をいかにもつかー 第1回「研究会の成立過程とこれまでの歩み」	単著	平成28年 10月	『教育プロ』第46巻 第23号 通巻1820号、ERP pp16-17	1995年に発生した阪神・淡路大震災、神戸連続児童殺傷事件（1997年）、2004年には、長崎県で小6女子児童による同級生殺害事件が発生するなど、子どもたちのいのちへの感覚、あるいは死生観というものに対する、当たり前で疑いようもなかったものへのある種の懐疑と、それに伴う教育の再構成の必要性が高まるなか、このような背景から、2009年、「いのちの教育実践研究会」が発足した。本稿では、研究会の成立過程と「いのちの教育」の必要性について述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
18.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第1回 震災をめぐる教師の「使命感」と「多忙感」への着目	単著	平成29年6月	『教育PRO』第47巻第14号 通巻1839号、ERP、pp. 28-29	災害時はまさしく、自己のコントロール（統制）が効かない特殊な状況下といえる。本研究では、災害時において、教師の「職業的使命感」は統制の効かない状況における「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そして、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし、災害時における教師の“ノブレス・オブリージュ”の実態を明らかにすることを目的とした。
19.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第2回 「災害支援者」としての教師の役割	単著	平成29年7月	『教育PRO』第47巻第15号 通巻1840号、ERP、pp. 6-7	「災害対策基本法」は、東日本大震災後、2回の改正を繰り返した。2013年6月の改正における「被災者保護対策の改善」で、「緊急避難場所」と「避難所」が明確に区別されることとなった。避難所となった学校において、教師たちは「役割分担が決められていない」状況の中、「災害時に救援する職業」として、目の前の災害に救援する役割を担うことになる。災害時の救援対策訓練を受けた「職業的災害救援者」ではなく、教師としての「使命感」で救援に従事する教師の実態について述べた。
20.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第3回 災害時における教師の職業的有能性	単著	平成29年7月	『教育PRO』第47巻第16号 通巻1841号、ERP、pp. 10-11	本稿は、熊本地震で主体的に避難所を運営した一人の教師をモデルに、教師の災害時における職能について論考した。教師の使命感からくる災害時の職業的有能性を、明確な災害支援対策として位置づけ、分担し、だからこそ教師は災害支援者なのであるという認識を明確にしていくことは、今後における災害時の有効な避難所運営の模索においても、あるいは教師の、災害時における職業的役割の明確化においても、必要となる。
21.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第5回 避難訓練に対する被災地からのメッセージ	単著	平成29年8月	『教育PRO』第47巻第18号 通巻1843号、ERP、pp. 10-11	熊本市内の南部に位置する熊本市立小学校で、管理職に取材を行った結果、被災地における子どもの様子や学校運営上の実情から、避難訓練の在り方に対する重要な示唆を得ることができた。避難訓練の在りようについて再考し、再確認することの必要性を示唆する、まさしく被災地からの大切なメッセージについて論述した。
22.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第6回 福島県の「今」が伝える、地域における学校の価値	単著	平成29年9月	『教育PRO』第47巻第20号 通巻1845号、ERP、pp. 8-9	2011年3月11日に発生した東日本大震災では、地震による津波災害という、2次的な災害によって大きな被害を被った。その中、地震動と津波による3次的災害が発生した。それが福島第一原子力発電所事故である。本稿では、原発事故から6年半経った福島県において、避難指示が解除されて再開した学校に着目し、学校が地域に果たす役割について記述した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第7回 子どもたちのいのちを守るのは「だれ」なのか	単著	平成29年9月	『教育PRO』第47巻 第21号 通巻1846号、ERP、pp. 12-13	災害に関して、その被災地域を世界に目を向けたとき、被災者数などその被害の大きさに関心が向けられるが、それらはどのように教訓とされ、発信されてきたのか。そこから見えてくるものの価値は大きい。本稿では、ベトナム社会主義共和国において、災害や事件などに対して、子どもを「保護」する親の姿勢を、日本の近年の実態と比較した。
24.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第9回 教訓を生かした避難所開設・運営に	単著	平成29年10月	『教育PRO』第47巻 第23号 通巻1848号、ERP、pp. 8-9	災害時における避難所を運営する主体に目を向けたとき、「避難所運営ガイドライン」には、教員、あるいは教職員が割当てられている役割は見当たらない。現実には、学校が避難所となる場合、そこを開錠して避難所を開設し、初動段階で被災者を受け入れ、運営を進めるのは教師であることが予想される。本稿では、避難所開設、運営時における教師の役割について述べた。
25.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第10回 災害に関する教師へのインタビューから見えてきた課題	単著	平成29年11月	『教育PRO』第47巻 第24号 通巻1849号、ERP、pp. 8-9	本研究では各小中学校の管理職を対象としてインタビューを行ってきた。それらは非構造化インタビューであり、明確な問いに対して明確な回答を求めてきたのではなく、筆者らが震災のことを、そしてそこに関わる教師たちの内面的なものを知りたかったというのが率直なところである。本稿では、その後実施した半構造化インタビューの結果を考察し、災害に関連して、教員にかかっている過重なストレスについて検討した。
「年鑑」 1.『安全教育の実効性とその客観的効果の測定に関する研究-第6学年「命のバイスタンダー」の実践から-』	単著	平成22年7月	財団法人下中記念財団 2010年報 pp14-17	平成19年度、21年度における下中科学研究助成金の取得により、その研究成果を下中科学記念財団年報に寄稿したもの。 安全教育の効果や実効性は、これまでは授業者の実感による主観的なものでしかなかった。それを『安全安心様相図』を用いて客観的に児童の変容を測定し、分析した結果を発表した。
「リーフレット」 1.『安全指導と『安全を学ぶ』ということ』	単著	平成25年9月	日本文教出版「教育情報」巻末	本リーフレットは、日本文教出版が教育資料として発刊しているものであり、全8ページからなるものである。最終ページの「クローズアップ! 教育の現場」のコーナーの原稿を担当し、「安全指導」と「安全学習」の違いについて述べた。大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で実践した「命の避難訓練」の授業から、「おはしも」(押さない・走らない・しゃべらない・もどらない)という、これまで疑いも持たれず避難訓練時のセオリーとして通ってきた言葉を題材にし、想定にとらわれ、慣習にとらわれることの危険性について述べたものである。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 矢野 正

研 究 分 野		研究内容のキーワード
教育学・保育学・心理学		保育実践・臨海学校・いじめ・特別支援
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 教育現場でのタイムリーな情報のデジタル化による教材作成とそれを活用した授業 教員採用試験小論文対策	平成 21 年 6 月 平成 29 年 4 月	現場での教育の様子をデジタル情報化し、教材として編集して授業で活用している。教授目的に合わせたタイムリーな情報を収集し、教材化することにより、特に子どもへの理解を深めることに役に立っている。教育実習以外に直接子どもたちとかかわり学習する機会を養成教育課程の中で設けることは難しい。授業内容に合わせた可能な限り生きた教材を活用することにより、現場での授業がより具体的に把握できることが、学習後のレポート等からも示唆された。 生徒指導を中心として、新学習指導要領のキーワードに関する勉強を行いながら、公務員・教員採用試験の小論文対策講座を全 15 回行った。教育時事のトピックにそって解説をし、ポイントを整理し教員志望学生の学習を促した。
2 作成した教科書、教材 生徒指導論（再掲） 教育心理学（再掲）	平成 25 年 3 月 平成 28 年 5 月	生徒指導・生活指導・進路指導の在り方について執筆したテキストである。その中で、新しい教育の在り方として、教育と福祉が手をつなぐことを論じた。さらに、特別支援教育と SSW の両輪が機能することで学校という柱が機能することを理論化し述べている。また、SC や SSW の意義及び役割やその未来についても考察した。具体的な進路指導やキャリア教育について考えるテキストである。 教育心理学の初心者でも扱えるテキストとして執筆した。子どもの発育や発達および教育に関する最新のデータを交えて紹介している。よりよい現場づくりのための理論的背景として教育心理学の知見をはめ込むことを試みた。保育者・教員を目指す学生や現場で勤務する人、様々な現場で子どもとかかわっている多くの方々の必要とされる課題に対する問題解決のヒントとなる一冊である。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 学会による評価 学生による評価	平成 26 年 11 月 平成 30 年 9 月	日本教育実践学会より、研究論文・研究発表の功績により、優秀教員賞を受賞した。 「道徳・特別活動論」では、子どもの実態についてよくわかると、概ね学生の満足度が高かった。小学生への指導に関して、また現代教育の諸課題についてわかりやすく解説されていると高く評価された。教員採用試験対策にもつながる優れた授業であると評価された。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 高校出前授業 保育士等キャリアアップ	平成 30 年 2 月 平成 31 年 2 月	誉高校高大連携大学講義「参加型の楽しい授業づくりについてーユニバーサルデザイン入門ー」を担当した。 現任保育士を対象としたキャリアアップ等の講師（幼児教育）を担当した。

5 その他 教員の自己形成およびキャリア形成支援モデルの開発に関する研究（研究分担者） 社会の形成者としての資質を涵養する特別活動の積極的な生徒指導機能の実証的研究（研究分担者）		平成 24 年 4 月 平成 30 年 4 月	科学研究費補助金基盤研究 C(課題番号 24530842) 科学研究費補助金基盤研究 C(課題番号 18K02548)	
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 資格, 免許 小学校教諭専修免許状 中学校教諭専修免許状（社会）		平成 17 年 3 月 平成 17 年 3 月	大阪府教委平 16 小専第 2036 号「学校心理学付記」 大阪府教委平 16 中専第 2294 号「学校心理学付記」	
2 特許等 特記事項なし				
3 実務の経験を有する者についての特記事項 スクールサポーターとしての実務 小学校教員の実務		3 年間 11 年間	大阪市立東桃谷小学校放課後児童健全育成指導員 帝塚山学院初等部・城星学園初等部専任教諭	
4 その他 研修会講師 研修会講師		平成 30 年 6 月 平成 31 年 2 月	三郷町立西部保育園主催の園内研修会の研修講師を務めた。「特別支援教育の考え方」について指導助言した。 大阪府の保育士等キャリアアップ研修会の研修講師を務めた。「幼児教育」について講習した。	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1) 保育と健康	共著	平成 21 年 4 月	嵯峨野書院	専門職としての保育者, 保育士や幼稚園教諭を目指し, 子どもの教育や健康について学ぶ学生を対象とした, 保育内容「健康」領域の教科書である。(担当部分概要)第 4 章「幼児のこころの発達(pp. 23～29)」について, 精神的発達, 知的能力の発達, 社会性の発達について最近のデータをもとに紹介し, わかりやすくまとめて執筆した。 編者: 三村寛一, 安部恵子, 分担執筆: 原寛, 三上聡子, 矢野正, 岸本みさ子, 生田香明, 内山明子, 高木信良, 岸本恵一, 藤岡宏樹, 西川泰行, 大西英子, 白紙友里子, 原田健次, 野中耕次, 上田優人, 浦光良, 鉄口宗弘, 喜多宣彦, 上田真也, 臼井達矢, 三村達也(B5, 総 120 頁)
2) 学級経営の達人: 学級経営の極意と崩壊からの復帰法	共著	平成 21 年 5 月	久美出版	主に初任者や, 若手中堅の小学校教員向けの教育・学級経営参考図書として執筆した。生活科や体育科の研究法をはじめとし, 最近導入されつつあるSSW(スクールソーシャルワーカー)の動向や特別活動の実践から学級経営の進め方についてを, 具体的に紹介した。(担当部分概要)担当は, 第 1 章学級経営の基本, 第 2 章学級作りの技術と方法についてを執筆(pp. 1～74)。子ども

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3) 新訂 幼児期の運動あそび：理論と実践	共著	平成 21 年 9 月	不昧堂出版	の生活に即した経営の在り方、体育の授業が経営のバロメーターの 1 つとなること、学級経営で大切になる基本的技術と応用方法、さらに崩壊からの復帰法など現在の教育において重要な問題を、事例に即して執筆している。教育の理念について論じた中で、崩壊から脱却するためのチェック表の作成を試みて、チーム学校の在り方を述べた。共著者：矢野正、宮前桂子(A5, 総 111 頁) 幼児体育における運動あそびの理論と実践をまとめた教科書。(担当部分概要)第一部の理論編のなかの、第二章幼児期の発育・発達の章の中で「精神の発達」と「社会性の発達」について(pp. 39～57), 運動あそびの指導に必要な内容について執筆した。 編著：高木信良, 分担執筆：矢野正, 安部保子, 安部恵子, 谷本満江, 武本喜久代, 林和博, 山崎英幸, 小川克博(A5, 総 186 頁)
4) 保育と環境	編著	平成 23 年 4 月	嵯峨野書院	専門職としての保育者、保育士や幼稚園教諭を目指し、子どもの教育や健康について学ぶ学生を対象とした、保育内容「環境」領域の教科書として作成した。第 12 章 小学校教育との連携(pp. 98-106)について、第 14 章 実践事例(pp. 122-125)について執筆した。幼稚園課程の環境の指導法でも用いている。共編者：矢野正、小川圭子(B5, 総 150 頁)共著者：石上浩美・藤井奈津子・梅野和人・樋野本順子・横島三和子・上月康代・井筒紫乃・島内武・原田健次・多田琴子・原口富美子・藤岡宏樹・山本淳子・加藤英子・宮前桂子・酒井幸子・原寛
5) 教師力を高める学級経営	共著	平成 23 年 4 月	久美出版	主に保育初任者や、若手・中堅の小学校教員向けの学級経営バイブル的書として企画し、執筆した。第 1 章「学級経営の基本と考え方」、第 2 章「学級づくりの技術と方法」を執筆(pp. 1-96 まで執筆)。学級経営で大切なこと、その基本的技術と応用方法、SC や SSW の導入と活用、さらに崩壊からの復帰法などを、事例に即して執筆した。その中で、崩壊から脱却するためのチェック表を作成した。第 3 章は総合的な学習の時間についての事例を掲載し、第 4 章は学級崩壊からの復帰法を述べている。第 5 章では実践事例をふんだんに織り込んだ(pp. 180～227)。学習指導要領上位位置付けられてこなかった学級経営を考える書。(A5, 総 231 頁) 共著者：矢野正、宮前桂子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6) 保育と人間関係	編著	平成 24 年 4 月	嵯峨野書院	専門職としての保育者、保育士や幼稚園教諭を目指し、子どもの教育や健康について学ぶ学生を対象とした、保育内容「人間関係」領域の教科書。として作成した。第 11 章 気になる子どもとのかかわり (pp. 80～89), 第 14 章 実践事例について執筆した。共編者：矢野正、柏まり (B5, 総 134 頁)
7) 水辺の野外教育	共著	平成 24 年 4 月	杏林書院	野外教育入門シリーズの第 3 巻。第 9 章 伝統的な水辺の体験活動プログラム (pp. 80～88) について、臨海学校、海水浴、遠泳、海洋少年団、漁師体験についてそれぞれ執筆した。(A5, 総 202 頁) 監修：星野敏男・金子和正
8) 社会福祉の相談援助	共著	平成 24 年 7 月	久美出版	保育士養成教育課程科目「相談援助」のテキスト。福祉・医療・保育・教育におけるソーシャルワークをわかりやすく解説している。第 1 章 相談援助の理論について (pp. 7～24) を執筆した。SSW の重要性について解説している。編著者：相澤譲治・井村圭壯 (A5, 総 183 頁)
9) 障害児保育	共著	平成 24 年 8 月	一藝社	保育者養成シリーズの第 9 巻である。「第 2 章 障害児保育の理念と形態」について (pp. 21～34), 1 章分を執筆した。障害児保育の理念、分離保育と統合保育、インクルージョンについて解説している。(A5, 総 204 頁) [監修] 林邦雄・谷田貝公昭 [編著] 青木豊
10) 現代地域福祉論	共著	平成 24 年 9 月	保育出版社	現代地域福祉に関するテキストである。第 1 章 2 節 地域福祉の理念についての解説を、発達人間学や社会福祉学の観点から執筆した (pp. 16～19)。(B5, 総 182 頁) 監修：高内正子、編著：高井由起子
11) 社会福祉	共著	平成 25 年 3 月	一藝社	保育者養成シリーズの教科書である。第 12 章 「社会福祉と障害者」の章について社会福祉 (SW) の入門書をわかりやすく執筆した (pp. 161～172)。(A5, 総 223 頁) [監修] 林邦雄・谷田貝公昭 [編著] 山崎順子・和田上貴昭
12) 子どもの食と栄養	共著	平成 25 年 3 月	一藝社	保育者養成シリーズのテキストである。子どもの健康と食についてわかりやすく執筆した。担当は第 6 章の「成長と発達」(pp. 77～90), 第 9 章の「学童期・思春期の成長と発達」(pp. 117～130) である。(A5, 総 216 頁) [監修] 林邦雄・谷田貝公昭 [編著] 林俊郎

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 3) 生徒指導論	単著	平成 25 年 3 月	ふくろう出版	生徒指導・進路指導の諸問題について、いじめ、虐待、学級崩壊、授業崩壊、非行など、近年の生徒指導・生活指導・キャリア教育の研究の授業で活用できる実践的研究テーマに基づいて、そのテキストを作成した。また、SC や SSW の意義とその役割についても論究し、論考を展開している。(A4, 総 124 頁)
1 4) 保育と言葉	共著	平成 25 年 4 月	嵯峨野書院	専門職としての保育者、保育士や幼稚園教諭を目指し、子どもの教育や健康について学ぶ学生を対象とした、保育内容「言葉」領域の教科書として作成した。「第 10 章 小学校における「言語活動の充実」実践」(pp. 86～96) と、「第 11 章 これからの幼児教育の課題と保育内容「言葉」」(pp. 97～104) について執筆した。共編者：石上浩美・矢野正 (B5, 総 112 頁)
1 5) 改訂版 保育と健康	共著	平成 25 年 4 月	嵯峨野書院	専門職としての保育者、保育士や幼稚園教諭を目指し、子どもの教育や健康について学ぶ学生を対象とした、保育内容「健康」領域の教科書である。(担当部分概要) 第 4 章「幼児のこころの発達 (pp. 23～29)」について、精神的発達、知的能力の発達、社会性の発達について最近のデータをもとに紹介し、わかりやすくまとめて執筆した。 編者：三村寛一、安部恵子、分担執筆：原寛、三上聡子、 <u>矢野正</u> 、岸本みさ子、生田香明、内山明子、高木信良、岸本恵一、藤岡宏樹、西川泰行、大西英子、白紙友里子、原田健次、野中耕次、上田優人、浦光良、鉄口宗弘、喜多宣彦、上田真也、臼井達矢、三村達也 (B5, 総 124 頁)
1 6) 保育実践に生かす保育内容「環境」	共著	平成 26 年 4 月	保育出版社	領域「環境」の指導法の教科書である。第 2 章 5 節の「応答的環境とは」(pp. 36～37) について執筆し、保育者養成校教員としてのエールを記載した。(B5, 総 183 頁) 監修：高内正子、編著：上中修 共著者： <u>矢野正</u> ほか 38 名
1 7) 保育実践にいかす障がい児の理解と支援	共著	平成 26 年 4 月	嵯峨野書院	保育士養成講座の 1 つ「障がい児保育」の教科書である。最近増えつつある「気になる子ども」について解説している。第 10 章「気になる子どもの理解と援助」(pp. 81～90) について執筆した。 編者：小川圭子・ <u>矢野正</u> (B5, 総 150 頁)
1 8) 子どものいまと未来を考える教育課程・保育課程論	共著	平成 26 年 7 月	(株) みらい	専門職としての保育者、保育士や幼稚園教諭、小学校、中学校教諭などを目指し、子どもの教育課程・保育課程について学ぶ学生を対象とした教科書。第 15 章「教育課程の評価」(pp. 201～216) について執筆した。編者：田中保胤・三宅茂夫 (B5, 総 288 頁) 共著： <u>矢野正</u> ほか 14 名

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
19) 子育て支援のいまとこれから	共著	平成27年3月	ふくろう出版	大阪府下の保育所・幼稚園・認定こども園の実態調査に基づく「子育て支援論」や「保育者論」の総合保育双書シリーズのNo.1である。第3章の「調査の方法と結果」を担当(pp.11～58)と、巻末資料(pp.72～88)も作成した。監修：渡辺俊太郎 共著者：馬場住子・藤田朋己・佐伯知子・要要子・ <u>矢野正</u> ・石森弥生・木村美根子・坂上節子・大槻雅俊・小林陽之助・小西由紀子・小林芳郎
20) 保育と表現	共著	平成27年4月	嵯峨野書院	保育内容「表現」の指導法についての教科書である。第2章「子どもの発達と表現」について代表執筆した。編著者：石上浩美(B5, 総112頁)共著者： <u>矢野正</u> ・吉井英博・小松正史・長尾牧子・藤井真理・手良村昭子・澤田真弓・渕田陽子・宮前桂子・福山恵美子・池永真義
21) 教育心理学：保育・学校現場をよりよくするために	共著	平成28年4月	嵯峨野書院	教育心理学に関する学術専門書である。よりよい現場づくりのための理論的背景として教育心理学の知見をほめ込むことを試みた。保育者・教員を目指す学生や現場で勤務する人、様々な現場で子どもとかわっている多くの方々の必要とされる課題に対する問題解決のヒントとなる一冊。第2章「児童期の発達(pp.11～19)」と第6章「人格の形成(pp.52～59)」について解説した。編著者：石上浩美・ <u>矢野正</u> (B5, 総139頁)共著者：竹中美香・池田幸恭・芳田茂樹・水野正朗・高岡昌子・山口真希・室谷雅美・宮前桂子・竹内和雄・阿部海渡・鶴田利郎・高橋登
22) 新版 社会福祉	共著	平成29年1月	一藝社	保育者養成シリーズのテキストの続編である。第12章の「社会福祉と障害者」の章について社会福祉(SW)の入門書をわかりやすく解説及び執筆した(pp.160～174)。(A5, 総219頁)[監修]林邦雄・谷田貝公昭[編著]山崎順子・和田上貴昭[共著]伊藤陽一・稲葉光彦・今井慶宗・上岡義典・佐久間美智雄・田中卓也・隣谷正範・松井圭三・三ツ石行宏・宮沢和志・村上満・ <u>矢野正</u> ・山田昇・山田亮一・吉田仁美
23) 保育福祉小六法 2017年版	共著	平成29年4月	(株)みらい	保育に関する福祉法令全般の法律・法規の解説書を分担執筆した。主な収載法令は、日本国憲法、社会福祉法、児童福祉法、母子保健法、学校教育法、障害者基本法、障害者総合支援法、障害者虐待防止法などである。年に一回の改訂に即して意見を具申している。(B6, 総860頁)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
24) 改訂版 保育実践にいかす障がい児の理解と支援	共著	平成29年8月	嵯峨野書院	保育士養成講座の1つ「障がい児保育」の教科書である。最近増えつつある発達障害がうたがわれるような「気になる子ども」について解説している。第10章「気になる子どもの理解と援助」(pp.85～94)について執筆した。編者:小川圭子・矢野正(B5, 総157頁)[共著]和田薫・三木美香・池内昌美・石上浩美・杉田律子・小崎恭弘・松村朋子・葉山貴美子・鎮朋子・後藤浩子・伊藤博美・松尾寛子・西木貴美子・小林洋司
25) 保育と言葉[第2版]	共著	平成29年10月	嵯峨野書院	専門職としての保育者、保育士や幼稚園教諭を目指し、子どもの教育や健康について学ぶ学生を対象とした、保育内容「言葉」領域の教科書として作成した。「はじめに(p.1)」と、「第10章 小学校における「言語能力の確実な育成」の実践」(pp.88～98)と、「第11章 これからの幼児教育の課題と保育内容「言葉」」(pp.99～108)についてを、それぞれ執筆した。編者:石上浩美・矢野正(B5, 総112頁)
26) 医療福祉学総論	共著	平成29年12月	金芳堂	医療技術職(看護・技師・栄養士)などを対象とした医療福祉関連の学術専門書である。「第6章 子ども家庭と医療福祉」について代表して執筆した(pp.50～62)。(B5, 総108頁)[監修]日野原重明・間野忠明[編者]星野政明・岩瀬敏・土田耕司[共著者]内田富美江・葛西久志・柏倉秀克・河原宣子・近藤清彦・杉山克己・高内克彦・種市寛子・野島敬祐・堀尾拓之・森田城次・柳澤理子・矢野正・吉岡利忠
27) 新版障害児保育(コンパクト版保育者養成シリーズ)	共著	平成30年3月	一藝社	コンパクト版保育者養成シリーズである。「第1章 『障害』の理解」について(pp.9～16), 1章分を執筆した。(A5, 総147頁)[監修]谷田貝公昭・石橋哲成[編著者]青木豊・藤田久美[共著者]矢野正・近藤万里子・原子はるみ・土澤薫・堀江まゆみ・東俊一・橘川佳奈・嵩田貞子・関谷眞澄・加藤勝弘・遠藤清香・寺島明子・有村玲香・山本佳代子
28) 現代保育論(現代保育内容研究シリーズ1)	共著	平成30年3月	一藝社	専門職としての保育者、保育士や幼稚園教諭を目指し、子どもの教育や保育について学ぶ学生を対象とした専門的学術書である。「第3章 保育者論」(pp.28～39)について執筆した。編者:保育内容研究会(A5, 総130頁)共著者:前川知恵子・杉山喜美恵・矢野正・大倉眞壽美・小尾麻希子・佐久間美智雄・谷川友美・小山貴博・長谷秀揮・加藤達雄

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
29) 教育原理：保育・学校現場をよりよくするために	共著	平成30年3月	嵯峨野書院	専門職としての保育者、保育士や幼稚園教諭を目指し、子どもの教育や理論、歴史および思想について学ぶ学生を対象とした、教育原理の教科書として作成した。「第11章 学習指導要領の変遷」(pp.95～112)について執筆した。また巻末資料として、教職の科目改訂の指針を記載した(p.)。[編著者]石上浩美(B5, 総135頁)[共著者]矢野正・渡辺英之・作野友美・藤井奈津子・森岡伸枝・範衍麗・池内正史・住友剛・稲田達也・小野田正利
30) 保育実践に生かす保育内容「環境」[第2版]	共著	平成30年3月	教育情報出版	2017年告示の幼稚園教育要領等に対応。保育内容「環境」において必要な基礎・基本的な内容だけでなく、現場の先生方の実践研究にも応えられるよう工夫・構成している。また、章ごとに事例問題や演習問題などを盛り込んでいる。具体的内容には、「第2章第5節 応答的環境とは」(pp.40～41)について解説及び執筆している。(B5, 総190頁)[監修]高内正子[編著]上中修, 共著者：矢野正ほか38名
31) 保育福祉小六法 2018年版	共著	平成30年3月	(株)みらい	保育に関する福祉法令全般の法律・法規の解説書を分担執筆した。主な収載法令は、日本国憲法、社会福祉法、児童福祉法、母子保健法、学校教育法、障害者基本法、障害者総合支援法、障害者虐待防止法などである。年に一回の改訂にあわせて意見を具申している。(B6, 総888頁)
32) コンパス保育内容健康	共著	平成30年4月	建帛社	保育内容健康の教科書として執筆した。「第3章 子どものからだの発達と運動能力 (pp.41～48)」について解説している。身長と体重、体の比率、骨の形成、脊柱の湾曲、下肢の発達、生理的機能の発達について論述した。また演習課題を3問作成した。(p.50)[編著者]前橋明[共著者]泉秀生・佐野裕子・廣中栄雄・山梨みほ・矢野正・吉村眞由美・岡みゆき・金賢植・小石浩一・高橋功祐・森田陽子・松坂仁美・住本純・須田あゆみ・照屋真紀・永井伸人・松原敬子・浅川和美・森田清美・戸川俊・丸山絢華・宮本雄司・原田健次(B5, 総207頁)
33) 生徒指導・進路指導論	単著	平成30年12月	ふくろう出版	生徒指導・進路指導の諸問題について、いじめ、虐待、学級崩壊、授業崩壊、非行など、近年の生徒指導・生活指導・キャリア教育の研究の授業で活用できる実践的研究テーマに基づいて、そのテキストを執筆および作成した。また、SCやSSW、スクールロイヤー(SL)の意義とその役割についても論究し、論考を展開している。(B5, 総143頁)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1) 保育者養成校における「幼児体育」授業の研究：学生が作成した模擬保育指導案の検討	共著	平成 21 年 5 月	幼児体育学研究 第 2 号 1 巻	本研究の目的は、保育士や幼稚園教諭といった保育者養成校における「幼児体育」の教育方法の改善であり、幼児体育の発展を目指したものである。研究の方法は、「幼児体育」の授業で学生が作成した模擬保育指導案を分析し、幼児体育や運動あそびに対する学生の意識や傾向を検討した。その結果、物や施設を使った遊びよりも、体の動きだけでできる遊びの指導を好むという傾向が明らかとなった。そこから幼児体育指導の今後の課題を導き出した。(担当部分概要) 全文担当 共著者：矢野正，三村寛一 (pp. 13～22)
2) 臨海学校における児童の気分変容	共著	平成 21 年 6 月	教育医学 第 54 巻第 4 号	本研究の目的は、臨海学校中の児童の気分状態を泳力の違いにより検討することである。児童の気分の状態は良好に推移し、事前の緊張や不安感は緩和され、事後に怒りや敵意がやや増加することが明らかとなった。さらに泳力の低い児童は、気分の変化が少なく、泳力の高い児童のほうが気分の変化が大きく、否定的な感情が増加することが明らかとなった。したがって、臨海学校においては児童の泳力の違いにより、気分状態の変容にも違いのあることが示唆された。(担当部分概要) 全文担当 共著者：矢野正，三村寛一 (pp. 300～306)
3) 1 歳児における身体活動量と睡眠・覚醒に関する研究	単著	平成 22 年 2 月	大阪体育学研究 第 48 号	本研究は、1 歳児について、伝い歩き期と自力歩行期の日常の身体活動量および睡眠・覚醒時間を定量的に測定し、検討した。その結果、加齢にともない睡眠時間は減少することが明らかとなった。身体活動量は、自力歩行期よりも伝い歩き期のほうが高いことも明らかとなった。(pp. 147～155)
4) 保育士養成校における幼児体育指導の課題	単著	平成 22 年 3 月	保育士養成研究 第 27 号	M 短期大学の学生が幼児体育と総合演習の授業において模擬保育のために作成した保育指導計画を 2009 年度分の計 40 案についてねらい及び活動構成の視点から分析した。その結果、学生の幼児体育・総合演習指導においては「鬼あそび」を選択する割合が最も高く、次いで「用具を使った体育あそび」が高いことが明らかとなった。(pp. 37～43)
5) 小学生の自我状態の特徴と成績に関する検討	単著	平成 22 年 3 月	実践学校教育研究 第 12 号	本研究の目的は、エゴグラムを用いて小学生の自我状態の特徴を明らかにするとともに、自我状態と成績との関係を検討することである。小学 6 年生を対象とした平均エゴグラムの結果、FC(Free Child)が他の尺度よりも高い、FC 優位型を示すことが明らかとなった。さらに AC(Adapted Child)が、他の尺度よりも低い AC 低位型であることも明らかとなった。また成績が高くなるほど AC 尺度が低くなるという相関関係も認められた。(pp. 40～47)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6) 児童の健康な生活に関する研究	単著	平成22年8月	幼児体育学研究 第3号1巻	児童の生活状況を調査し、学校適応や家庭生活、自立との関わりにおいて小学校1年生の生活実態を分析し、健康な生活への留意事項を検討した。保育内容「健康」や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「健康な心と体」につながる生活習慣を調査した基礎的研究である。(pp. 93~99)
7) 2歳児における身体活動数と睡眠・覚醒に関する研究	単著	平成24年3月	大阪体育学研究 第49号	2歳幼児を対象に、身体活動量と睡眠および覚醒時間を3週間にわたり、アクティグラフで非侵襲的に調査研究を行った。その結果、大人により近い生活リズムを獲得していく過程やプロセスというものが見出され、多くの研究に役だつ知見を得た。(pp. 73~80)
8) 中学生の地域福祉に関する研究	単著	平成24年8月	幼児体育学研究 第4巻第1号	中学生の地域福祉に関するアンケート調査を、関西圏の中核都市において大規模に実施したものである。その結果、ボランティア活動等、地域福祉に関する中学生の傾向と実態を読み取ることができた。5年の福祉制度改正に合わせてをめぐり研究調査を継続していくことになっている。(pp. 61~66)
9) 共生社会を目指したインクルーシブ保育・教育制度構築に関する一考察	単著	平成25年6月	社会福祉科学研究 第2号	博士論文のための基礎論文として執筆した。日本における共生社会を目指したインクルーシブ教育システムの現状と課題について明らかにし、その後、博士論文としてまとめた。障害児教育や特別支援教育の歴史と思想について論究している。(pp. 12~18)
10) Problem and prospect for construction of inclusive instructional system	単著	平成26年2月	アジア幼児体育学研究 第3巻第1号	日本におけるインクルーシブ保育・教育システムの現状と課題について論考した国際学術論文である。近年の日本をめぐり障害児・者の教育と福祉について、教育の理念と、歴史及び思想について改めてその中で論じている。(pp. 9~20)
11) 養護教諭と中学保健免許の同時取得の有用性：生涯にわたる健康生活を目指す保健教育の推進のために	単著	平成26年3月	養成の歩み 第14巻第1号 全国私立大学・短期大学(部)養護教諭養成課程研究会誌	養護教諭免許状取得学生が、副免許状としての中学校(保健)の免許状を取得する意義について論究した論文である。中学保健のみ教えることができる免許状であっても、その学習の意義と必要性が、養護教諭免許状取得者には認められることを論じた。生涯にわたって健康生活を支援・指導する養護教諭の学びにとっても有用であることが示唆される。(pp. 9~14)
12) 臨海学校における遠泳教育の意義	単著	平成26年4月	海洋人間学雑誌 第2巻	日本における臨海学校の研究の代表者として、遠泳教育の果たす役割について、論究した招待論文である。近年、あまり行われなくなった臨海学校という学校行事の含有する教育的意義を、ここに再確認することができる。今後広く行われるように期待するものである。(pp. 34~36)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 3) 幼児期のこだわり行動に関する自我発達心理学的研究(2): 障害児認定をめぐる経緯から	単著	平成 26 年 6 月	社会福祉科学研究 第 3 号	博士論文のための基礎論文として執筆した。保育における人間関係について、幼児期の発達障害児のこだわり行動を、自我発達心理学的に検討した。研究の観察記録の途中に、障害児認定があり、その記録をたどり、その事例を詳細に分析した。(pp. 119~126)
1 4) 共存・共生の社会を目指して	単著	平成 26 年 9 月	地域福祉サイエンス 創刊号	日本の共生社会の在り方の是非を問う挑戦的論文である。厚生労働省からは「我が事・まるごと」の発送が展開されている。この時期に、教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想に焦点を絞り、真の共存・共生社会を目指して、健全者も障害者も共にいきる道を模索し、その展望を論考した。(pp. 189~191)
1 5) インクルーシブ保育・教育システムの構築に向けた今後の課題: 自我発達観点からみた「こだわり行動」の意味	単著	平成 26 年 9 月	地域福祉サイエンス 創刊号	インクルーシブ保育・教育システムの構築に関する、日本における教育課題について論究した。博士論文の基礎研究として、幼児期の人間関係の中で明らかとなった「こだわり行動」からみえてくる自我発達の教育的な意義についても考察している。(pp. 165~176)
1 6) こだわり行動の自我発達の意義と教育的支援の在り方に関する研究(博士論文)	単著	平成 27 年 3 月	大阪総合保育大学大学院	発達障害児や自閉症児のこだわり行動を通して、その自我発達心理学的意義を考究するとともに、新しい特別支援教育制度の中での教育的支援の在り方を考察した博士論文。障害児のこだわりこそ自我の本質であり、能力発達に加えて、自我発達の重要性が示唆された。特別支援教育が開始され 7 年が経過し、インクルーシブ教育システムの構築の途上である。そこで問われ始めた主要な問題が、特別支援教育の背景をなす教育風土の問題と特別支援教育を実践していく上での合理的配慮の問題である。特別支援教育では、こだわり行動をこれまでのような能力主義における負のイメージで捉えるのではなく、自我発達の観点から捉え直し、正のポジティブなエネルギーとして捉え、支援の方略を考えていくことが重要である。(A4, 総 166 頁)
1 7) A study on quantity of physical activity and sleep / awakening of three-year-old child	単著	平成 27 年 4 月	アジア幼児体育学研究 第 4 巻第 1 号	3 歳幼児の身体活動量及び睡眠・覚醒に関する実証的研究である。3 歳児の身体活動量は、幼稚園での生活の間に高低が認められ、睡眠および覚醒は徐々に大人に近づいていることが明らかとなった。本研究は、幼児期の運動・覚醒・睡眠などに関する基礎的研究である。(pp. 29~35)
1 8) 創造的で革新的な学校風土の構築に関する研究	単著	平成 27 年 7 月	社会福祉科学研究 第 4 号	教育の歴史及び思想に関する研究論文である。教育風土・学級風土・学校風土の問題を取り上げ、SSW の役割や校長のリーダーシップの重要性、チーム保育・学校という組織の中でできることを見出し、全員参加型の保育・教育とリーダーとなる人材の育成を考究した。(pp. 187~191)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
19) 日本におけるインクルーシブ教育システム構築における今後の課題	単著	平成 27 年 10 月	地域福祉サイエンス 第 2 号	インクルーシブ教育システム (Inclusive education system) とは「包容する教育制度」をさす言葉であり、障害者と健常者が共に生きる社会的基盤が現在広がりつつあることを物語っている言葉である。現代はまさに、共生社会が目指されているのである。障害のある子どもを取り巻く環境は、2007 年度より「特別支援教育」の実施に伴い、大きな転機を迎えている。そこで、今後の課題を展望した。(pp. 281～286)
20) 小学校における自己評価および教育改善に関する研究	単著	平成 28 年 2 月	発達人間学研究 第 16 巻 第 1 号	本研究では、いわゆる「パイロット」型の学校ではない、私立の小学校に在籍する子どもたちの保護者を対象とした質問紙調査をもとに、自律的な学校運営づくりと開かれた学校づくりを各学校が行っていく上で必要とされる事項について検討した。分析は、有名名門小学校の保護者に対して実施された質問紙調査をもとに、保護者の意見や要望をまとめたものである。調査対象者は P T A 役員 4 名と P T A 学級委員 36 名という、サンプルの偏りには留意が必要であるが、自由記述回答を中心に、多岐にわたる様々な要望や意見が学校に寄せられていることが分かった。こうしたデータは、保護者と学校の関係性・連携を知る上でも貴重なものであり、チーム学校が叫ばれる現場では、今後の学校改善に活かされるに違いない。(pp. 1～8)
21) 教職課程科目「特別活動の研究」における教育実践：レクリエーションに焦点を当てて	単著	平成 28 年 3 月	Leisure & recreation (自由時間研究) 第 41 号	本研究では、教員養成系大学での「特別活動の研究」の講義内容を紹介し、その在り方や問題点を考察し、アンケート調査の記述をもとに、今後の講義の運営に資することを目的に実施した。その結果、特別活動の範疇にとどまらない多くの意見が集約され、本授業の効果が十二分に示唆された。特に縦割りや複数学年による取り組みなど、学級集団にとらわれない全学年や全校での活動などの意識も多く認められた。(pp. 8～13)
22) Assessment of childcare environment in Japan	単著	平成 28 年 11 月	アジア幼児体育学研究 第 5 巻第 1 号	日本は現在、大きな保育・教育の制度改革の途上にある。日本で「幼児体育」の研究が積み重ねられて、およそ 10 年になる。これまでの教育・保育の歴史を顧みている。アジアでの国際研究交流も盛んになってきた。日本における保育の質や環境評価を確実にしながら、今後ますますの幼児体育の発展を期待したい。(pp. 11～14)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23) 臨海学校における教師・指導者のリーダーシップに関する研究	共著	平成29年2月	実践学校教育研究 第19号	本研究は、大阪府私立T小学校で行われた臨海学校に初めて参加した4年生児童110名を対象とし、指導する教師のリーダーシップが児童の達成感や泳力にもたらす教育効果を明らかにすることを目的とした。調査項目は、教師のリーダーシップを三隅のPM理論を参考に、今回新たに設問項目を作成した。結果として、泳力の向上について、臨海学舎実施前と臨海学舎実施後では、児童110名のうち76%にあたる84名の泳力が顕著な向上が認められた。そして泳力の向上が最も顕著だった学級担任のPerformance値およびMaintenance値が、共に高い値を示していた。逆に、M値が低かった学級担任のクラスは泳力の伸び率が低かった。本研究の結果、T小学校の臨海学舎において、児童の泳力向上や達成感に指導する教師のリーダーシップがもたらす効果は相当に大きいことが認められ、特に集団を維持する機能が重要であることが示唆された。(担当部分概要)考察部分担当 共著者：矢野正、吉井英博(pp.87～92)
24) レクリエーション科目における教育実践の研究：大学生のレクリエーションに関する意識調査	単著	平成29年3月	Leisure & recreation(自由時間研究)第42号	レクリエーションでの学生の意識を構成する指標について明らかにするため、計79の記述から収集した情報データをテキスト分析により検討したところ、概ね以下の知見を得た。1.「大人数での遊び」や「コミュニケーション活動」というクラスターに加えて、「ゲーム」という言葉が「レクリエーション」として分類された。2. 学生はレクリエーションを少人数ではなく大人数で楽しく遊ぶことをイメージしていることが確認された。3. レクリエーションはコミュニケーションを活性化させるものであると認識していることが示唆された。4. 学生にとってのレクリエーションは、氷おにやフルーツバスケットなどの身近なゲームであることが確認された。(pp.39～42)
25) 夏の行事・臨海学校における安全教育・危機管理(特集 子どもを危険から守るには)	単著	平成29年6月	教育と医学 第65巻第7号 通巻第769号(慶應義塾大学出版会)	夏季というのは、子どもの事故が増える時期である。本論文では、地域をはじめ学校や家庭で知っておいてほしい特別活動・学校行事の救急対応について特に、遠泳と臨海学校を取り上げ考察した。臨海学校の現状と課題や臨海学校中の健康管理・安全管理について、危機対応・危機管理の在り方についてわかりやすく論考し、解説を行った。近年の教育現場の改革やライフセービングの技術の導入及び安全教育の現場での活用法についても、論文の中で詳細に紹介している。(pp.640～649)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
26) 友達の良さを見つけ伝え合いながら共に成長する子どもの育成：小学3年生体育科「忍者屋敷でクルリンパ！」の実践を通して	共著	平成30年2月	実践学校教育研究 第20号	本研究では、「関わり合い、伝え合い、学び合う」ことで子どもたちの中に何が生まれ、何が育っていくのかを探り、「学び合い」を通して子どもたちに生きていくための21世紀型スキルを身につけさせたいと考えた。本研究の結果、3年生では体育科の「学び合う」学習の中で、「その技ができないのは、自分だけではない」と安心して取り組んだり、「みんながこの技をできるようにするにはどうしたらいいのか」と問題を自分たちで見つけるなど、能動的・主体的で対話的な深い学びとして解決していこうとしたことが確認できた。本研究は、アクティブ・ラーニングの先駆的取り組みとしてその実践が評価されたものである。(担当部分概要)研究の目的・考察を主に担当 共著者：矢野正、佐伯優斗 (pp.55～62)
27) 今後の特別支援教育の充実に向けた方策に関する検討：幼児期から成人期までのきれめのないサポート体制の構築に向けて	単著	平成30年8月	社会福祉科学研究 第7巻	教育は、充実した教育内容・方法・環境だけでなく、豊饒で健全な教育風土を必要としている。また、これまでの教育では教育内容・方法・環境の充実がもたら優先されてきたが、これからの教育では教育風土の健全化を図っていく必要がある。特別支援教育は、その教育にふさわしい教育風土を醸成していかなければならないと述べ、また同時に「特別支援教育の使命は、共生社会の実現を目指して、インクルーシブ教育システムにより障害のある子どもたちの生きる力を育んでいくと同時に、基盤となる教育風土を『競争一辺倒の教育風土』から『競争く共生の教育風土』に修正していくことにある。」今後の特別支援教育への新たな視座を提供した。発達人間学・人間教育学というものが今後の教育を明るく照らす世の中が来るのではないかと期待し、日本のインクルーシブ教育システムの到来を予想している。(pp.179-188)
(その他：紀要等) 1) 小学校における安全な臨海学舎の実践研究(V)：児童の生きる力に及ぼす影響	共著	平成22年2月	大阪教育大学紀要 第IV部門(教育科学)第58巻第2号	本論文では、臨海学校が参加者の「生きる力」に及ぼす影響について検討することを目的とし、「子ども IKR 評定用紙」を用いて、臨海学校前、臨海学校後、臨海学校一ヶ月後の計3回調査を行なった。その結果、参加児童の「生きる力」は、臨海学校実施前から実施後で有意に向上し、一ヶ月後までに有意な低下が認められた。(担当部分概要)全文担当 著者：矢野正、三村寛一(pp151～160)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2) 初年次教育「専門基礎」科目における教育実践：授業評価とFD研究を通して	共著	平成22年3月	湊川短期大学紀要 第46号	研究では、著者らが幼児教育保育学科で担当した「専門基礎Ⅰ」および「専門基礎Ⅱ」（ともに1年前期・自由選択科目）の教育実践の内容と成果について検討し、あわせて受講学生による授業評価の結果から、授業における学生の反応やその特徴を分析した。（担当部分概要）全文担当 著者：矢野正，浅井祐子（pp. 55～60）
3) 体育関連科目受講学生の体力と運動習慣に関する研究	共著	平成22年3月	湊川短期大学紀要 第46号	本研究では、本学体育関連科目の実技系授業を受講した学生を対象に体力測定を行い、体力水準の現状把握を行った。さらに得られた結果から、運動習慣との関連性から体力特性について検討を加えた。（担当部分概要）測定分析から考察までを担当 著者：大和晴行，矢野正，倉真智子（pp. 61～69）
4) 「幼児体育」模擬保育授業が学生の気分変容に及ぼす影響	共著	平成22年7月	西山学苑研究紀要 第5号	本研究では、「幼児体育」における模擬保育授業前後の学生の気分変容6尺度を包括的に捉え、調査及び検討を行った。その結果、「幼児体育」模擬保育の授業に参加した学生は、授業後に否定的な感情が解消されることが示された。（担当部分概要）全文担当 著者：矢野正，原田健次（pp. 17～32）
5) 小学校における安全な臨海学舎の実践研究（Ⅵ）：臨海学校参加児童の学びを構成する指標	共著	平成22年9月	大阪教育大学紀要第Ⅴ部門教科教育59巻1号	臨海学校中の子どもの学びの意味と目的について、テキストマイニングを用いて探索的に分析した。その結果、クラスターによる長期の臨海学校に関する教育的効果が確認され、学びの構成要素がそれぞれに見出された。（担当部分概要）全文担当 著者：矢野正，三村寛一（pp. 41～50）
6) 小学校における安全な臨海学舎の実践研究（Ⅶ）：保健室利用状況と保健室の役割	共著	平成23年9月	大阪教育大学紀要第Ⅴ部門教科教育59巻2号	特別活動である臨海学校の保健状況・管理調査の結果、10年間にわたっての発熱・怪我などの発生状況を研究および分析した。長期の臨海学校における保健管理の報告結果からは、初日から前半に集中することが見出された。今後の学校運営に生かすことができる特記すべき知見を得た。（pp. 41～51）
7) 通常学級における「気になる子ども」の心理的特徴：学校での生活意欲と学級満足度の学級経営的分析	単著	平成24年3月	湊川短期大学紀要 第47号	通常学級の担任教諭から人間関係の中で「気になる子ども」を抽出してもらい、他の児童との学級満足度調査を用い比較および検討を行った。学級担任やT2の評価からのQ～Uテストの結果、「気になる子ども」というのは学級に満足していない傾向が明らかとなった。フォロー体制を確立していくことで、今後の学級経営に活かしていきたい。（pp. 7～10）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8) 小学校における安全な臨海学舎の実践研究(Ⅷ): 臨海学校中の児童の体温変動	共著	平成 24 年 3 月	大阪教育大学紀要第Ⅴ部門教科教育 60 巻 1 号	小学校における長期の臨海学校における参加児童約 350 名の体温変動を追跡コホート調査し、健康把握及び管理を行った。その結果、臨海学校中に、発熱する児童もみられたものの、事前調査から正常に推移するといった傾向を示していた。(pp. 51~56) (担当部分概要) 全文担当 共著者: <u>矢野正</u> , 三村寛一
9) 幼児の睡眠・覚醒リズムと身体活動量(Ⅱ)	共著	平成 24 年 3 月	大阪教育大学紀要第Ⅳ部門教育科学 60 巻 1 号	1 歳から 3 歳の乳幼児の睡眠・覚醒リズムについて、非侵襲型のアクティグラフを用いることによって調査を行った研究である。加齢に伴う発達・成長によって、睡眠から覚醒へのリズムが大人へと定着していくことを見出した。(pp. 215~220) (担当部分概要) 全文担当 共著者: <u>矢野正</u> , 三村寛一
10) 個人体験から読み解く理想の教師像	単著	平成 24 年 3 月	湊川短期大学紀要 第 48 号	個人の教師との体験・経験レポートから、理想の教師像を探索した研究論文である。それぞれの教育実習などの個人体験や記録が、その後の教師像に与える影響の大きさについて追究した論文である。新しい教師論・保育者論・教職論に関する論考である。(pp. 21~25)
11) 教育相談実践研究センターにおける活動: 過去 3 年間の実践の評価と今後の活動について	共著	平成 24 年 3 月	湊川短期大学紀要 第 48 号	湊川短期大学における「教育相談実践研究センター」の活動の年間報告を行った。その中で実際に、保育者を対象に研修会の講師として登壇した。(担当部分概要) 研修の主担当として研修を指導、合わせて報告の概要を作成した。共著者: 河野淳子, 藤井保男, 若嶋清人, <u>矢野正</u> , 辻良子 (pp. 57~62)
12) 保育所における保育士の身体活動量と睡眠・覚醒リズム: Actigraph からみた平日と休日の比較	共著	平成 24 年 8 月	大阪教育大学紀要第Ⅳ部門教育科学 60 巻 2 号	保育所で働く保育士を対象に、睡眠・覚醒時間及び身体活動量などをアクティグラフを用いて定量的に測定し、休日と平日で比較及び検討した。その結果、平日の方が、活動数が減少する傾向が認められた。意外と動きが少ないといった保育者の姿が浮き彫りとなった。(担当部分概要) 全文担当。(pp. 121~126) 共著者: 矢野正, 三村寛一
13) 本学学生の体力と生活習慣に関する研究	単著	平成 25 年 3 月	白鳳女子短期大学紀要 第 7 号	体育科指導法の受講学生の体力及び運動能力を、新体力テストを主に用いて評価し、同時に文部科学省から出ている生活習慣などの質問項目との関連性を検討し、論考した。体育受講学生の理解に資する目的で調査を実施し、その結果を学生に往還した。(pp. 23~32)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14) 本学学生の福祉施設実習の評価と課題	単著	平成25年3月	湊川短期大学紀要 第49号	児童福祉施設実習の主担当として、保育実習(施設)を担当し、授業及び事後の学生のアンケートや成績などの相関から、児童福祉施設での実習や活動を総括した研究論文である。事後指導からは学生の総合的な学びのあり方が明らかとなった。本研究の結果は、今後の施設実習の充実に役立てることができる。(pp.23~26)
15) 小学1年生の清掃活動における情動知能の評価	単著	平成25年3月	大阪女子短期大学紀要 第37号	小学校1年生の掃除活動や特別活動において、情動知能がどのように高まるかを解明した研究論文である。担任、副担任による複数による情動的データの客観的データについて、1年間の縦断的研究により、児童の情動知能(こころの知性)を評価及び測定を行った。(pp.61~68)
16) 子どもにミクロな問いを持たせる体験的活動:小学校3年社会科「パン工場の見学」を通して	単著	平成25年8月	西山学苑研究紀要 第7号	小学校の社会科見学による「体験的な学び」に関する実践的研究である。具体的には、3年生社会科の地域・パン工場の見学を通して、ミクロな問いを持つことができるかどうかを検討し、論考した。総合的な学習の時間にもつながる体験的な学びが、小学生に有効であることが示唆された。(pp.51~66)
17) 障害児保育特論:発達人間学から考える	共著	平成26年3月	湊川短期大学紀要 第50号	障害児保育特論の授業の内容をまとめた論文である。障害児保育においてテーマを、発達人間学から考えると、それぞれが持ち寄ったレジュメを研究論文としてまとめた。(担当部分概要)授業担当者として、はじめとおわりにを担当し、総括のまとめを完成させた。共著者:矢野正、笠井康平、若松裕太(pp.51~56)
18) 小学校における安全な臨海学校の実践的研究:大阪府S市における臨海学習の指導実践とマニュアル	単著	平成26年3月	大阪女子短期大学紀要 第38号	小学校における安全な臨海学校に関する実証的研究である。大阪府のS市の臨海学習マニュアルを具体的に紹介し、安全な学校行事の計画と運営に資することを目的とし報告した。安全な臨海学校の運営には安全マニュアルは必携であり、危機管理上も重要な学校経営では必要な書類である。(pp.87~93)
19) 幼児期のこだわり行動に関する自我発達心理学的研究(1)発達障害の3歳児についての事例研究	単著	平成26年3月	大阪総合保育大学紀要 第8号	博士論文のための基礎論文として発達・行動のこだわりについてを執筆した。幼児期の発達障害児のこだわり行動を、自我発達心理学的に検討した。研究の事例の観察は主に3歳から5歳児にかけてであり、その記録を詳細に分析し、論考した。(pp.193~208)
20) 幼稚園教育実習に関する学生の意欲と現状に関する研究	単著	平成26年3月	西山学苑研究紀要 第9号	幼稚園教育実習の前後において、学生に学びの意欲と現状のアンケート調査を実施した。その結果、事前・事後指導及び実習における学生の課題や戸惑いが浮き彫りとなった。今後の幼稚園における教育実習の運営及び実施に生かすことのできる知見を得た。(pp.1~8)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 1) 聖ヨハネ・ボスコと予防教育法：ドン・ボスコの教育を知る	単著	平成 28 年 2 月	人文科学論集(名古屋経済大学) 第 95 号	今年、2015 年は教育者ドン・ボスコの生誕 200 周年のお祝いの年である。各地でその功績に対して祝いの集いが開催されている。本論で扱うドン・ボスコの教育手法は、「予防教育法」に集約される。筆者は、カトリック・ミッション・スクールで初等教育をしていたことがあり、この予防教育法に携わった経験がある。教育の理念や歴史及び思想について論考し、子どもを正しく教え導く教育方法は現在では、世界各地で広められており、本研究は相当に注目に値するものである。(pp. 51～56)
2 2) 聖ヨハネ・ボスコと予防教育法(Ⅱ)：ドン・ボスコの心で教育を	単著	平成 29 年 3 月	人文科学論集(名古屋経済大学) 第 96 号	日本の教育課程の中にドン・ボスコの教育実践がいかに位置づけられるのか、教育原理および教育方法からの課題の抽出を行った。具体的には、2014 年度の A 小学校の学校全体の教育目標の反省材料・資料を基に結果を記述し、その上で考察を加えた。近年の学校現場の問題、特に学校教育の諸課題、研究授業、生活指導等について検討を行ったものである。論文の中でその教育の原理を追究している。(pp. 63～69)
2 3) 小学校における発達障害が疑われる児童に対する行動論的アプローチ：トークン・エコノミー法を用いた連絡帳の試み	単著	平成 29 年 3 月	教育保育研究紀要(名古屋経済大学) 第 3 号	本研究は、通常の学級に在籍し、学習不適応状態を呈する小学校 3 年生男子 1 名に対して、トークン・エコノミー法による特別な連絡帳を使用し、その学習および適応における効果を検討した。その結果、男児は 2 学期から 3 学期にかけて目標の達成をみせ、徐々に自信をもつようになり、当該学級への学習などの適応も可能となった。したがって、トークン・エコノミー法を用いた連絡帳による行動変容・改善を企図した児童に対する支援の本研究の目的は、相当程度に到達できたものと推察される。人間関係の構築に有効な支援を行ったものであると示唆された。(pp. 43～50)
2 4) 今後の教員養成とキャリア教育に関する考察：進路指導の歴史と現状をふまえて	単著	平成 30 年 1 月	教職支援室報(名古屋経済大学) 第 1 巻第 1 号	近年、時代の要請にあわせて教員養成の在り方が大きく変化している。高齢のベテラン教員が退職していく一方で、新規の大量採用時代を迎えて、若手教員の育成が現場では急務である。これは、教育現場だけではなく保育や幼児教育においても同様である。本研究は、今後の教員養成についての動向をまとめたものである。また、新たに教職課程のある大学では、キャリア教育や進路指導の観点からの学校教育の質的転換もまさに図られようとしている。本論では、主に進路指導の歴史と現状、今後の展開について考察した。よって新学習指導要領や教職課程コアカリキュラムなどに沿った新たな教員養成というものが求められよう。(pp. 13～24)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
25) 社会見学を軸とした体感する社会科・総合的な学習の時間の考究：商店街の社会見学と教育実践を振り返って	単著	平成 30 年 1 月	教職支援室報(名古屋経済大学) 第 1 巻第 1 号	本研究の目的は、社会見学を中心とした学習展開により、児童の興味や関心を高め、体感できる社会科・総合的な学習の時間の在り方を考究することである。本研究では、子どもの興味・関心を高める教材研究を進める中で、方法として単元にできるだけ体験学習や主体的な学びの活動を取り入れることを目指し、「社会見学」を学習の中心に位置づけ、常に体感できる課題設定を進め、主体的・対話的で深い学びや学習に取り組んだ。その結果、「1. 事前学習」「2. 当日の見学」「3. 事後学習」という今回の学習展開を用いた、社会見学を中心とした体感する社会科・総合的な探究の学習の時間は、子どもたちの学習に有効であることが示唆される。(pp. 73～82)
26) 小学校における BLS 教育の有効性に関する検討:道徳的アプローチによる教育実践	共著	平成 30 年 1 月	教職支援室報(名古屋経済大学) 第 1 巻第 1 号	本研究の目的は、小学生を対象に BLS 教育を短時間かつ効果的に行う授業方法の展開の実践をすることである。BLS 教育を受けた児童にどのような教育的効果があるのか、またどう思考が変化したのかを調査および検討することで、改めて学校現場における BLS 教育の必要性を示し、普及拡大の一助とした。本研究は、2016 年 3 月に山梨県内の A 小学校で実施した。当日のプログラムは、小学 6 年生の児童 56 名に 90 分の授業を行った。まず、1 週間前に事前アンケート調査を行い、また授業後にアンケート調査をし授業実践を終えた。その結果、道徳的なアプローチや指導の実践によって子どもたちの命の重要性や救急救命に対する意識の向上が認められた。したがって、小学生を対象とした BLS 教育を保健体育の授業によっては十分指導可能であることが確認された。(担当部分概要) 研究のデザイン及び考察を担当した。(pp. 37～44) 共著者：吉井英博、矢野正
27) 総合的な学習の時間と英語活動の教育実践に関する研究：総合的な学習の時間と英語活動の連携	共著	平成 30 年 1 月	教職支援室報(名古屋経済大学) 第 1 巻第 1 号	平成 29 年に告示の小学校学習指導要領において小学校中学年に外国語活動が、小学校高学年には外国語科が導入された。移行期には小学校高学年の英語活動の時数が 15 時間増加し、教育現場ではその増えた時数をどのように生み出すのかが喫緊の課題である。学習指導要領の移行措置により、総合的な学習の時間を 15 時間削減して、外国語活動に充てることが認められると多くの小学校で総合学習を 15 時間削減して英語活動にあてる動きが起きた。大阪府 S 市に於いても総合的な学習の時間を削減し、増加した英語活動に充てることが決定された。懸念されるのは、授業時間を削減される総合的な学習の時間の質の低下である。英語活動と連携することで、総合も英語活動も充実することが大切であると考え、英語と総合学習のカリキュラム及び指導案を

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
28) 聖ヨハネ・ボスコと予防教育法(Ⅲ):1年間の教育実践の振り返りから	単著	平成30年3月	人文科学論集(名古屋経済大学) 第97号	作成することにし、S市立A小学校の事例を紹介した。(担当部分概要)研究のデザイン及び考察部分を担当した。(pp.83~94)共著者:宮前桂子,矢野正 ドン・ボスコの予防教育法は、世界の中に浸透してはいるものの、あまり研究の蓄積が多いとは言えないという側面が認められる。そこに本研究の意義と必要性がある。したがって、本研究では、1年間の聖ヨハネ・ボスコの学校の小学校2年生の学級経営案の考察と反省における教育実践を、振り返って整理し、まとめなおすことで、その教育法の教育の方法を具体的に評価および検討してみることにした。本実践は、2014年度に関西圏の私立A小学校で実施したものであり、ドン・ボスコの予防教育法をすすめる学校の教育原理や学級運営・経営の理念を具現化したものである。(pp.41~51)
29) 福祉施設実習の事前事後指導に関する一考察:学生による学びの記述内容からの検討	単著	平成30年11月	人間教育(奈良学園大学) 第1巻第9号	保育実習指導Ⅰの施設実習の事前・事後指導の在り方を考究した実践記録論文および資料である。保育士養成課程学生の事前課題・レポートや児童福祉施設実習後の考察から、今後の指導につながる示唆を得た。具体的な今後の保育実習指導に役立つ資料となった。また今後を見据えた保育士資格(保育所・施設)の在り方にも鋭く言及、提言を行っている。(pp.289~297)
(その他:学会発表等) 1) 崩壊を未然に防ぐ学級づくり:授業づくりと児童生徒理解からの学級経営	単著	平成21年8月	日本学校心理士会2009年度大会プログラム・発表論文集	学校心理学では一次的な予防的アプローチから三次的な対応が重要とされている。そこで、小学校における学級崩壊に陥らないための学級経営のあり方とその方法、学級崩壊・授業崩壊からの復帰法について整理し、新しい学級経営の在り方やSSWとの協働などについて報告を行った。保育者の在り方や教育者の姿勢について論考している。(pp.112~113)
2) 教師の気づきと学級アセスメントの関連性の検討	単著	平成21年9月	日本教育心理学会第51回大会総会発表論文集	Q-Uを用いた学級アセスメントの結果、教師からみて発達的に「気になる」児童というのは、被侵害とはあまり関連がなく、学級生活不満足群や非承認群に集約される可能性があり、発達的に「気になる」児童の承認得点は有意に低く、1%水準の差が認められた。したがって、担任教師からみて発達的に「気になる」という児童は、友達や教師から認められていないと感じており、教師の気づきを児童の承認感を向上させる手立てや対応につなげていく必要がある。担任教師の気づきは特別な支援の必要な子どもを見出す可能性がある。人間関係の見出しに有効な方略であった。(pp.75)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3) 新しい「学び」のあり方を考える：学校内外のフィールドから生成・成立する学び	共著	平成 21 年 9 月	日本教育心理学会第 51 回大会総会発表論文集	学会内の自主シンポジウムとして新しい学びを捉える枠組みとして学校内外における体験学習をテーマに企画し、話題提供を行った。本シンポジウムを企画するとともに、指定討論や話題提供者のコーディネートを行った。当日は、小学校の臨海学校・キャンプ活動における子どもの学びを、生きる力の向上を柱に話題提供を行った。企画者・話題提供者：矢野正／司会者・企画者・話題提供者：石上浩美／話題提供者：宮前桂子・文野洋／指定討論者：秋田喜代美・高橋登 (pp. S78～S79)
4) パラオの特別支援教育の現状と課題	単著	平成 21 年 10 月	日本LD学会 18回大会発表論文集	日本と親密国であるパラオ共和国の特別支援教育の動向について、さらにその現状と課題について現地調査を実施し、その結果を研究報告として行った。首都のコロールではメイン・オフィスが全校を網羅し、個別のニーズに基づき IEP が整備されて、専門家会議が開催されるなど日本に比べ、欧米に近い先進的な特別ニーズ教育が行われていることを発表した。(pp. 316)
5) 小学校における臨海学校の保健管理	単著	平成 22 年 6 月	日本野外教育学会第 13 回大会	本研究では、小学校における臨海学校の保健室の役割について考察整理し直し、長期にわたって宿泊を伴う体験的な活動や臨海学校などの運営及び保健管理に役立つ基礎的資料を得ることを目的とした。臨海学校では保健室が保健管理の中心として位置づけられるとともに、児童主体の保健教育に繋がる可能性がある。5泊6日の臨海学校では、けがは日を追って増える傾向を示し、発熱では多い3日目(中盤)に重点をおいた保健管理が重要である。(pp. 46～47)
6) 小学校における臨海学校の健康管理：高学年児童の体温変動に着目して	共著	平成 22 年 8 月	教育医学 第 56 巻第 1 号	本研究では、臨海学校中の起床時と夕方の児童の体温測定および毎日の生活調査を実施した。その結果、児童全体の実習中の平均体温は平常に比べて上昇を示した。また体温変動には差があり体温上昇した児童が最も多かったが、変化の見られなかった児童や体温が低下した児童も認められた。また日内リズムが消失した事例、低体温が上昇し改善した事例も見られ、先行研究同様に臨海学校は児童の心身に強く影響を及ぼすことが示唆された。(担当部分概要) 全文担当 共著者：矢野正、三村寛一 (pp. 89)
7) 小学校低学年における平仮名書字能力の習得時期の検討	単著	平成 22 年 9 月	日本教育心理学会第 52 回大会総会発表論文集	本研究では、2年間のコーホート研究をデザインし、平仮名の「単語聴写課題」を小学1年生時に実施し、同じ児童を対象に2年生でも実施し、その書字能力(聴写)習得における比較調査を行った。その結果、男児よりも女児の得点が高く、特殊音節の習得でその傾向が顕著であった。また1年生から2年生にかけて書字能力の多くが習得され、特に清音・濁音・半濁音・撥音・長音

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8) 教員は学校現場でどのように働き、何を学んでいるのか	単著	平成 22 年 9 月	日本教育心理学会第 52 回大会総会発表論文集	は 1 年生で概ね習得可能な音節である。拗音・拗長音・促音・拗促音の特殊音節は 2 年生の間に習得ができるものと推察された。(pp. 289) 教員は、日々の実践の場や状況の中でどのように働きながら何を学び、教員として発達しようとしているのか。また、SC や SSW などの学校内外の社会的リソースをどのように活用しながら、教員として熟達しようとしているのか。本シンポジウム企画では、現職教員と大学教員の立場からの話題提供を基に、教育現場の歴史～文化的状況の中で日々格闘する教員の学びと教員アイデンティティの発達について、教員養成の歴史性・時間性を含めた議論を行った。企画者・話題提供者：矢野正／司会者・企画者：石上浩美／話題提供者：宮前桂子、森田英嗣、荊木まき子／指定討論者：米山光儀、高橋登 (pp. 194～195)
9) 幼児の基礎的動作に関する研究：25m	共著	平成 22 年 9 月	日本幼児体育学会第 6 回大会研究発表抄録集	幼児の 25m 走を身体発達の観点から、基礎的動作に絞って論じた。25m 走を定点ビデオ撮影を行い、幼児の走力の判定を行った。その結果、身体発達の段階のモデル開発を行った。(担当部分概要) 共同研究により、測定の実施及び評価と分析を担当。共著者：喜多宣彦、矢野正、藤岡宏樹、三村寛一 (p. 26)
10) 通常学級における「気になる子ども」の評価と支援—学級アセスメントにおけるクラスでの視座—	単著	平成 22 年 9 月	日本LD学会19回大会発表論文集	通常の学級において担任からみて「気になる子ども」を評価し、Q～Uテストでの評価と比較した。その結果、学級不満足群に有意に位置していることを見出した。人間関係から教育・保育を見つめ直す良い機会となった。(pp. 266～267)
11) Quantity of physical activity and sleep / awakening of 3-year-old child	単著	平成 22 年 12 月	The Asian Society of Physical Education of Young Children / The 6th. A-PEC 2010 in Korea / Chung-Ang University, Seoul	幼児の中でも、特に 3 歳児の身体活動量と睡眠・覚醒について研究した論文である。アジア幼児体育学会で発表および報告を行った。3 歳児の身体活動量をアクティグラフを用いて詳細に測定・実験した挑戦的萌芽研究である。(pp. 49～56)
12) A Report of “Practical Seminar for the Teaching Profession”	単著	平成 23 年 4 月	The Asian Society of Physical Education of Young Children / The 7th. A-PEC 2011 in 台湾 / National Physical Education University, Taipei	幼稚園教諭取得のための教職実践演習における園児との実践型交流授業の取り組みについて、アジア幼児体育学会で発表した。小職の最終段階での授業として、教職実践演習で園児を招いての交流事業を、企画運営を学生主導で行ったものである。(pp. 101～105)
13) 園児との実践型交流授業に関する研究	共著	平成 23 年 8 月	日本幼児体育学会第 7 回大会研究発表抄録集	幼稚園教諭取得のための教職実践演習(保育)での取り組みを実践し報告した。特に、園児との実践型交流授業の取り組み事例を発表および報告した。(担当部分概要) 共同研究であり、実践型交流授業の企画運営及び実施までのすべてを担当した。(p. 29) 共著者：矢野正、原田健次、原寛、三村寛一

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14) 2歳から9歳における疾走能力に関する研究：25m	共著	平成23年8月	日本幼児体育学会第7回大会研究発表抄録集	2歳児から9歳児までの疾走能力の発達の経年的変化を、定点ビデオ録画によるデータ解析した研究である。(担当部分概要) 共同研究により、測定の実施及び評価と分析の考察を行なった。(p. 59) 共著者：谷口恵理・三村寛一、喜多宣彦、 <u>矢野正</u> 、北野裕大
15) 「気になる子ども」の理解と援助のあり方：他児とのかかわりにみるケーススタディ	単著	平成23年8月	2011年度日本学校心理士会大会プログラム・発表論文集	近年取り上げられることの多い「気になる子ども」といわれる発達障害児3名をターゲットに、特に他児とのかかわりや人間関係の評価を捉えて、事例的分析を行なった。気になる子どもに関しては注目されつつあり、最新のデータとして利用できる研究の知見を得た。(pp. 84～85)
16) 保育者とかかわりに見る「気になる子ども」への支援方法：保育場面の観察を通して	単著	平成23年9月	日本LD学会20回大会発表論文集	「気になる子ども」といわれる発達障害児3名をターゲットに、特に保育者、先生、SCとかかわりについての評価を捉えて、事例的分析を行なった。保育における人間関係の評価と改善に役立つ研究となった。(pp. 476～477)
17) 児童・生徒の実態と特別活動で付けたい力に関する研究	単著	平成24年7月	日本野外教育学会第15回大会研究発表抄録集	小中学校における児童生徒の実態と、特別活動で身につけたい力を調査した実証的研究である。学校行事における教育の実態と身につけたい力がかい離していることを問題として提起した。特別活動で身につけたい資質・能力を明確化したものである。(p. 120)
18) 心理学的にみた発達障害児像および幼児像	単著	平成24年8月	2012年度日本学校心理士会大会プログラム・発表論文集	幼児及び発達障害児に関する心理学的なイメージについて大規模なアンケート調査を大学生に実施した。幼児及び発達障害児について人間関係を考察した障害イメージに関する心理学的研究である。(pp. 92～93)
19) Study on Japanese childhood from a psychological viewpoint	単著	平成24年8月	The Asian Society of Physical Education of Young Children / The 8th. A-PEC 2012 in 北京 / Capital University of PE and Sports(Beijing China)	心理学的にみた日本の幼少期のイメージに関する研究について、アジア幼児体育学会で発表した。子どもに対する心理学的イメージを質問紙調査により、測定し考察した。その結果、日本の幼児期の特徴が見出された。(pp. 158～159)
20) 幼児期のイメージに関する自我発達心理学的研究	単著	平成24年9月	日本幼児体育学会第8回大会研究発表抄録集	幼児期のイメージについて大規模なアンケート調査を実施し、自我発達心理学的研究として発表および報告した。その中で、幼児期における特性がいくつか見出された。(p. 29)
21) 臨海学校における生きる力の向上に関する研究	単著	平成24年9月	日本海洋人間学会第1回大会プログラム抄録集	小学校における臨海学校の教育実践についてを、「生きる力」の向上への影響から論じた。結果として、児童の生きる力は総じて向上を示し、その教育的意義を見出した。その中では、教育の原理と方法を追究している。(p. 24)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 2) 発達障害児のイメージに関する心理学的研究	単著	平成 24 年 10 月	日本LD学会 21 回大会発表論文集	発達障害児のイメージについて大規模なアンケート調査を実施し、自我発達心理学的研究として発表および報告した。発達障害についての差別をなくし、インクルーシブな共生社会のための基礎的な研究である。(pp. 570～571)
2 3) 福祉施設実習における評価と課題	単著	平成 24 年 11 月	日本教育実践学会第 15 回大会総会発表論文集	保育士養成課程の児童福祉施設における実習の評価とその課題について研究発表を行った。本研究の報告者は、保育実習・施設実習指導の主担当者である。施設での学生の学びは大変深いものであったことが推察されている。(pp. 68～69)
2 4) インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進：共生社会の形成に向けて	単著	平成 25 年 8 月	2013 年度日本学校心理士会大会総会発表論文集	日本におけるインクルーシブ教育システムの構築に関する基礎的研究である。教育の原理を求め、共生社会の形成に向けて、特別支援教育のあり方を歴史及び思想から改めて問い直した研究である。(pp. 42～43)
2 5) 教員は学校現場で何を学んでいるのか：養成・採用・研修を通じた教職キャリア形成支援のあり方について考える	共著	平成 25 年 8 月	日本教育心理学会第 54 回大会総会発表論文集	「教員は学校現場で何を学んでいるのか」と題してシンポジウムを企画した。養成・採用・研修を通じた教職キャリア形成支援のあり方についてフロアの意見を交えて考えてみた。企画者(矢野正)／企画者・司会者(石上浩美)／話題提供者(古屋喜美代、島善信、菱田準子)／指定討論者(高橋登・杉江修治)(pp. 864～865)
2 6) Physical fitness test of infants in Japan	単著	平成 25 年 8 月	The Asian Society of Physical Education of Young Children / The 9th. A-PEC 2013 in Osaka / Osaka Seikei University (Osaka, Japan)	日本の幼児期における体力・運動能力テストの評価について発表を行った。日本の幼児期の運動指針に基づき、その特徴についての発表・報告が主であったが、他国との比較が今後の課題である。(p. 59)
2 7) A Study on exercise principle of infants in Japan	単著	平成 25 年 8 月	The Asian Society of Physical Education of Young Children / The 9th. A-PEC 2013 in Osaka / Osaka Seikei University (Osaka, Japan)	日本における幼児期の運動指針について、文科省の最近の政策・動向も踏まえて、発表および報告を行った。アジアでの幼児体育の発展に寄与する日本からのレポート研究である。(p. 68)
2 8) Present situation and problem of health and physical education of junior high school in Japan : For improvement of health and physical education class	単著	平成 25 年 8 月	第 15 回日・韓健康教育シンポジウム／第 61 回日本教育医学会／大韓民国、済州大学校	日本における中学校・保健教育の方法と内容について考究した報告である。中学校教員免許課程生の保健体育科の指導法の新たな方略や方法について提起し、発表を行ったものである。(pp. 67～68)
2 9) 小学校体育低学年(運動領域)の現状と課題	単著	平成 25 年 9 月	日本幼児体育学会第 9 回大会研究発表抄録集	小学校の低学年での体育科指導の在り方について、特に運動領域の紹介を行った。幼児期の運動あそびとの幼小接続を考える良い機会となった。小学校体育と幼児体育の異同を考究した。(pp. 70～71)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30) 臨海学校における教師のリーダーシップに関する研究	共著	平成25年9月	日本海洋人間学会第2回大会プログラム抄録集・海洋人間学雑誌第2巻第2号	臨海学校における教師のリーダーシップが児童の学習に及ぼす効果を測定し、発表を行った。(担当部分概要) 共同研究により、研究のデザインと報告の執筆を担当した。共著者：吉井英博、矢野正(p.46)
31) 臨海学校における遠泳教育の意義	単著	平成25年9月	日本海洋人間学会第2回大会プログラム抄録集・海洋人間学雑誌第2巻第2号	学会企画「マリンスポーツと教育」シンポジストとして、臨海学校における遠泳教育の意義について発表し、フロアとの意見交換を行った。(p.36)
32) PM理論からみた臨海学校の教育実践	共著	平成25年11月	日本教育実践学会第16回大会研究発表抄録集	PM理論をもとに、小学校における長期の臨海学校の教育実践を評価し、研究のデザイン発表を行った。(担当部分概要) 共同研究により、研究のデザインと報告の執筆を主に担当した。共著者：矢野正、吉井英博(pp.164～165)
33) 臨海学校における教師のリーダーシップに関する研究(2)	単著	平成26年3月	大阪体育学研究 第52号(Supplement)	臨海学校における教師のリーダーシップが児童に及ぼす影響について大規模に調査を行った。P値とM値の導き出す値から、教師の適切な関わりが子どもの力を発揮させるために必要な力動であることを見出した。(p.22)
34) 日本における幼児期の体力測定(2)：2年間にわたるコホート調査	単著	平成26年8月	日本幼児体育学会第10回大会研究発表抄録集	日本の幼児の運動能力・体力の測定と評価を縦断的研究によって行ったものである。本研究は、2年間のコホート研究によってデザインされ、子どもたちの「走・投・跳」について測定及び評価を得たものである。(p.64)
35) こだわり行動の自我発達の意義と教育的支援の在り方に関する一考察	単著	平成26年8月	日本教育医学会第62回大会抄録集	発達障害児の「こだわり」行動に焦点を当てた、自我発達心理学的研究である。これらは、博士論文の中間的な発表および報告として行った。特別支援教育における教育的支援のあたらなる視座を展開した。(pp.122～123)
36) こだわり行動の自我発達の意義と教育的支援の在り方に関する研究(2)	単著	平成26年11月	日本教育心理学会56回大会総会発表論文集	発達障害児のこだわり行動に焦点を当てた、自我発達心理学的研究であり、博士論文の中核的な発表および報告を行った。障害児保育の中でも子どもたちの人間関係やその指導法に焦点を絞った、事例的研究である。(p.780)
37) 保育士・教員養成の現状と課題：教育実習生を受け入れる園・学校からの声	単著	平成26年11月	日本教育心理学会56回大会総会発表論文集	保育士・教員養成の現状と課題と題して、教育心理学会において継続的な自主シンポジウムを開催した。教育実習生を受け入れる園・学校からの声をそれぞれの立場から発表し意見討議を行った。企画者(矢野正)/企画者・司会者(石上浩美)/話題提供者(宮前桂子・山本淳子・澤田真弓)(pp.148～149)
38) 保育者志望学生の身体特性	単著	平成26年11月	日本教育実践学会第17回大会研究発表抄録集	本研究は、保育者を目指す女子学生を対象に、形態、体力・運動能力の測定と評価、生活習慣の調査を行うことにより、幼児教育に携わる者の身体特性及び生活習慣について調査を行った。保育者志望学生の体力の現状の把握を行うことで、保育者の今後の課題を見出した。(pp.116～117)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
39) 第2学年算数科学習指導案「かくれた数はいくつ」	単著	平成27年3月	城星学園小学校平成26年度研究集録	本時は、数量の関係を絵図に表したり、テープ図にしたりすることによって、減る前の数を求める逆思考の問題を解くことができる。単元の目標は、テープ図の良さに気づき、問題解決の際に進んで用いようとする。逆思考を必要とする問題について、数量の関係をテープ図をもとに考えることができる。数量の関係をテープ図に表すことができる。加法や減法の用いられる場について理解する。(B5, 4p)
40) 日本における幼児期の体力測定(3): 2年間にわたるコーホート調査より	共著	平成27年8月	日本幼児体育学会第11回大会研究発表抄録集	幼児期の体力・運動能力調査のコーホート研究の第Ⅲ報である。幼児の「走・跳・投」の3項目の測定結果からそれぞれの相関関係を見出した。(担当部分概要) 研究の計画から測定、分析・解析までの全工程・全文を担当した。共著者: 矢野正, 三村寛一(p.83)
41) 特別活動論の挑戦的な授業実践: 野外教育学からの考察	単著	平成27年8月	日本特別活動学会第24回大会研究発表要旨集録	特別活動の研究における授業開発に関する研究。野外教育学の立場から15回を組み立て教授し、その結果、学生の学びにどうつながったのかを検討した。野外教育に特化せず、いろいろな視点から特別活動に取り組んできた学生の姿が改めて浮き彫りとなった。今後の日本における野外教育の進展を期待したい。(p.44)
42) Significance of infants' repetitive behaviors from the perspective of self development and appropriate educational support	共著	平成27年8月	第16回日・韓健康シンポジウム兼日本教育医学会第63回大会	2015年3月にまとめた博士論文の一端を、国際学会で紹介した。子どもの自我発達においてこだわり行動のもつ意味について研究及び発表した。博士(教育学)の学位を国際的にも認知するよい機会となった。(担当部分概要) 全文担当 共著者: 矢野正, 三村寛一, 守屋國光(pp.61~62)
43) 生きる力をはぐくむ特別活動・臨海学校	単著	平成28年6月	教科・領域内容研究学会第6回大会研究発表要旨集録	小学校における生きる力の育成に着目した臨海学校の実証的研究の報告。小学校において臨海学校前後で生きる力の変容を測った。その結果、3つの指標全てで向上が認められ、徳育的な能力よりも身体的能力や心理的社会的能力の向上が大きいことを見出すことに成功した。本研究では、児童の生きる力の向上に及ぼす臨海学校の影響が顕著であった。(Web公開, A4 4枚)
44) Significance of perseverative behaviors from the perspective of self development and educational support	単著	平成28年7月	The International Congress of Psychology 2016(ICP2016) / The 31th. ICP 2016 in Yokohama, Japan	2015年3月にまとめあげた博士論文の一端を、ICP2016国際心理学会で紹介および研究発表した。幼児期の子どもの自我発達や成長の過程において、こだわり行動のもつ意味について会議で発表し、特別支援教育の歩みから今日までの我が国の展開まで、教育的支援の在り方を追究した心理学的実践研究である。(p.146)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 5) 良いところを見つけ、伝え合う学習の有効性:マット運動の指導を通して	共著	平成 28 年 8 月	日本教育医学会第 64 回大会抄録集	本研究では小学校の児童に対して、「良いところを見つけ、伝え合う学習」を取り入れることで、子どもはどのように変わっていくのかを調査し、研究することとした。また、苦手意識を持っている子どもが多い「マット運動」にその活動を取り入れることで、マット運動に対する苦手意識が減り、得意の割合が増えるのかを分析すること、そして、普段の生活にも何らかの形で伝え合ったり、助け合ったりするのかどうかを分析することを主な目的とした。(担当部分概要) 共同研究により、研究のデザインと報告書の添削を担当した。共著者: 佐伯優斗, 矢野正, 星野政明 (pp. 71~72)
4 6) かけっこ指導における協調学習の有効性	共著	平成 28 年 8 月	日本幼児体育学会第 12 回大会研究発表抄録集	本研究では小学校の低学年児童に対して「速く走る指導」について、知識構成型ジグソー法によって学習し、どのように記録が変わるのかを研究した。また、どのような指導方法が子どもたちにとって分かりやすく、いわゆる「コツ」を掴むことに有効なのかを分析することを目的とした。今回の結果からはジグソー法を用いることで、子どもたちが持つ「走り」の知識や認識をお互いに学び合うことで記録を向上させることができることを示唆された。次期改訂の小学校学習指導要領では、このような協調学習や探究型学習、アクティブ・ラーニングに代表される能動的な学習が盛り込まれよう。(担当部分概要) 共同研究により、研究のデザインと報告の執筆を担当した。共著者: 吉井英博, 矢野正 (pp. 82~83)
4 7) 小学校低学年・マット運動の指導法: 良いところを見つけ、伝え合う学習の有効性	共著	平成 28 年 8 月	日本幼児体育学会第 12 回大会研究発表抄録集	本研究では小学校の児童に対して、「良いところを見つけ、伝え合う話し合い学習」をふんだんに取り入れることで、子どもはどのように変わっていくのかを調査し、研究した。また、苦手意識を持っている子どもが多い器械運動「マット」に主体的な学びの活動を取り入れることで、マット運動に対する苦手意識が減り、得意の割合が増えるのかを分析すること、さらに普段の生活にも何らかの形で伝え合ったり、助け合ったりするのかどうかを分析することを主な目的とした。(担当部分概要) 共同研究により、研究のデザインと報告の執筆を担当した。共著者: 佐伯優斗, 矢野正, 吉井英博 (pp. 80~81)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
48) 学生の作成した教職実践演習(保育)・幼児体育指導案の検討	共著	平成29年3月	日本保育者養成教育学会第1回大会研究発表抄録集	本研究では、教職実践演習につながる幼児体育分野の保育指導計画(保育指導案)の題材であるねらいと内容及び主な活動を、その指導形態について分類し、検討することを目的とした。保育者志望の学生が作成した模擬指導案は計82案であった。学生の指導観や保育観といった指導理念は、学生の作成する保育指導計画の題材における活動内容だけでなく、そのねらいや幼児に対する関わり方に少なからず反映されているものと考えられる。(担当部分概要) 共同研究により、研究のデザインと報告の全文を担当した。共著者：矢野正，吉井英博(p.87)
49) Fatigue change and health care of the children in summer seaside camp	単著	平成29年7月	2017 International Symposium on Teaching, Education, and Learning (ISTEL2017)/Hiroshima, Japan July 4-6, 2017	特別活動である長期の臨海学校中の児童の健康管理について、教育と医学の立場から、特に疲労感や気分の変容を、国際学会で報告した。毎日の睡眠時間の長い児童は疲労感が少なく、逆に睡眠時間の短い児童というのは疲労感が高まることが示唆された。特別活動期間中の疲労感の変動を測定し、合わせて児童の活動前後の気分プロフィールの変動を測定し、ISTEL2017 国際学会で報告した。(p.226)
50) ネイチャーゲームによる学習意欲づけと人間関係づくり	単著	平成29年8月	日本教育医学会第65回大会抄録集	本研究では、保育者養成校の「専門基礎」科目においてネイチャーゲームを導入した事例を報告した。保育者養成校の専門基礎の授業において、熱意を呼び起こすアクティビティを体験することにより、向社会的な意欲が向上するかどうか、受講学生の人間関係の構築や学習への動機づけに有効かどうかを検討とした。その結果、受講学生の向社会的目標得点が向上し、8項目中6項目では有意な向上が認められ、その影響が強く示唆された。受講学生の授業評価からは、自己評定では学習意欲の高さが窺われ、授業や教師に関する項目でも、ネイチャーゲームを取り入れた授業への満足度は大変高く人間関係力の向上に役立った。(pp.73~74)
51) 小学校における臨海学校の教師・指導者のリーダーシップに関する研究	共著	平成29年9月	日本海洋人間学会第6回総会論文集	本研究の結果、児童の泳力向上は、臨海学校実施前と実施後では、児童110名のうち76%にあたる84名の泳力に顕著な向上が認められた。そして、泳力の向上が最も顕著だった学級担任についてのPerformance値およびMaintenance値が、共に高い値を示していた。その一方で、M値が低かった学級担任のクラスでは、泳力の伸び率は低いという結果であった。したがって、本研究の結果、小学校の臨海学校において、児童の泳力向上や達成感に、指導する教師のリーダーシップがもたらす効果が相当に大きいことが確認され、特に集団を維持する機能(M値)が重要であることが示唆された。(担当部分概要) 共同研究により、研

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5 2) 小学校における BLS 教育の有効性に関する検討：道徳的アプローチによる実践	共著	平成 29 年 10 月	日本教育心理学会第 59 回総会論文集	究のデザインと報告書の主要な執筆を担当した。共著者：矢野正，吉井英博 (p. 45) 本実践では，学校において誰でも短時間に行える授業を目指した。それは，BLS 教育が普及しない要因が，指導者不足，指導時間の確保，教材教具の準備等にあるからである。児童の事前アンケートにもあるように，指導する側にも「失敗したらどうしよう」，「うまく指導できるか」等の消極的な思いが現場での実践を阻害しているのではない。今後，学校教育で重要になってくるのは，答えのないことに教師と児童が関わり模索し，自分たちなりの答えを導き出すことだと考える。また，90 分の授業全般で人の命の尊さ，勇気をもつこと，思いやりで何かできる事を考えることなど，道徳的なアプローチや声かけを多くしたことで，子どもたちが技能ありきの授業ではないということを感じた。(担当部分概要) 共同研究により，研究のデザインと報告の執筆を担当した。共著者：矢野正，吉井英博 (p. 307)
5 3) LET'S STUDY レク塾 第 7 回 特別活動とレクリエーション	単著	平成 30 年 4 月	公益財団法人日本リクリエーション協会 Recrew(レクルー) 第 682 巻 2018 年 4 月号	小学校における特別活動の現状とレクリエーション活用における課題について問題提起した論文。小学校の特別活動とレクリエーションの活動内容の現状と課題，かつ今後の展望を考究した。その中で，学校現場でのレクリエーションの活用方法の提案などを行っている。また，特別活動における先駆的な学校教育実践やモデルケースを 3 つ紹介した。(pp. 34～35)
5 4) 「子育ての支援」と「子育て支援」	単著	平成 30 年 6 月	日本幼児体育学会ニューズレター 第 12 巻第 2 号	幼稚園で行われるいわゆる「子育ての支援」と保育所保育指針で扱われる「子育て支援」の違いについて解説した。子育ての支援は教育課程に位置づいていないものであるのに対し，子育て支援は保育課程に位置付けられたものであることを明確に述べた。「の」が入るか入らないかで微妙に違うことを論考した。(pp. 6～7)
5 5) 小学校における食育実践に関する研究：管理栄養士・栄養教諭による 3 年保健「健康な生活」の単元開発	単著	平成 30 年 7 月	日本子ども食育学会第 2 回学術総会論文集	小学校 3 年の単元「健康な生活」を見つめることをテーマに，食べ物の栄養についての授業実践を行った。担任及び栄養教諭（管理栄養士）による共同実践であった。報告者は学級担任である。給食に使われているさまざまな食べ物を「あか」（体を作るもとになる），「きいろ」（体を動かすエネルギーになる），「みどり」（体の調子を整える）の 3 色に仲間分けし，それぞれの働きを学ぶことを主な目的とした。(p. 13)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
56) Practical study of educational effect by elementary school elementary school "assistance" elementary school	単著	平成30年8月	International School Psychology Association (ISPA2018) July 26-28, 2018 Tokyo Seitoku University, Tokyo, Japan	本研究はお手伝いをし、子どもが自立した家庭生活を送ることを目的に実践した。「お手伝いがんばりカード」を書かせ毎日行わせた。2018年10月から開始し12月まで実施した。対象は私立小学校の2年生42名、児童には「おてつだいアンケート」を、保護者には12月の懇談会時に「お手伝いに関するアンケート」を書かせた。その結果、お手伝いがんばりカードを導入することで、児童がお手伝いを率先して行い、保護者も肯定的に受け止めていることが明らかとなった。お手伝いすることは児童の生活の自立にとって有効である。(p.47)
57) A Study on Educational Practice by Locomo Exercise in Elementary School	共著	平成30年8月	The Asian Society of Physical Education of Young Children / The 14th. A-PEC 2018 in Japan / Waseda University (Saitama, Japan)	本研究では、小学生のロコモティブシンドロームの予防につながる保健体育分野の題材であるねらいと内容及び主な活動を、その実践および指導形態について分類し、検討することを目的とした。小学生1年から5年生が対象であった。(担当部分概要) 共同研究により、研究のデザインと発表及び報告の全文を担当した。共著者：矢野正、鈴木伸也(pp.76-77)
58) 小学校2年生生活科「お手伝い」挑戦による教育効果の検討	単著	平成30年8月	日本学校心理学会第20回学術総会論文集	本研究はお手伝いをし、子どもが自立した家庭生活を送ることを目的に実践した。「お手伝いがんばりカード」を書かせ毎日行わせた。対象は私立小学校の2年生42名、児童には「おてつだいアンケート」を、保護者には12月の懇談会時に「お手伝いに関するアンケート」を書かせた。その結果、お手伝いがんばりカードを導入することで、児童がお手伝いを率先して行い、保護者も肯定的に受け止めていることが明らかとなった。お手伝いすることは児童の生活の自立にとって有効であると結論付けられる。(p.47)
59) 学級活動「話し合い活動」の動画視聴を通じた教師の気づきについての研究 :小学校教師と教職課程履修学生の観点の違いに注目して	共著	平成30年8月	日本特別活動学会第26回大会研究発表要旨集録	本研究では、先駆的な学級会(2年生)の取り組みを、教師としての気づきの違いについて分析した。小学校教師の視点と教職志望学生へのインタビューからそれぞれ考察を行った。(担当部分概要) 共同研究により、研究のデザインと報告の全文を担当した。共著者：天野幸輔・山田真紀・清水克博・村瀬悟・玉木博章・矢野正(p.65)
60) 小学校におけるロコモ体操による教育実践	共著	平成30年8月	日本幼児体育学会第14回総会論文集	本研究では、ロコモティブシンドロームの予防につながる健康分野の題材であるねらいと内容及び主な活動を、その指導形態について分類し、検討することを目的とした。主に小学生5年生1クラスが対象であった。(担当部分概要) 共同研究により、研究のデザインと報告の全文を担当した。共著者：矢野正、鈴木伸也(p.76)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6 1) 小学校 2 年生生活科「お手伝い大作戦」による教育効果の実践	単著	平成 30 年 8 月	日本教育心理学会第 60 回総会論文集	本実践のように，お手伝いがんばりカードを導入し実践することで，児童がお手伝いを率先して行い，保護者も肯定的に子どもの行動を受け止めていることが明らかとなった．お手伝いをすることは，児童の生活の自立にとって有効であるものと考えられる．本単元は，保護者との協働の取り組みができたが，他の単元に汎化できるかどうかは，今後との研究課題である．新学習指導要領も告示されたので，小学校生活科の目的に沿った取り組みの見直しが求められよう．また，統計的なデータの補足も必要である．(p. 660)
6 2) 小学校における子どもロコモ予防の有効性に関する研究	共著	平成 30 年 12 月	日本教育実践学会研究大会論文集 21	本研究では，小学生のロコモティブシンドロームの予防につながる健康分野の題材であるねらいと内容及び主な活動を，その指導形態について分類し，検討することを目的とした．小学生 1 年から 5 年生が対象のコーホート研究であった．(担当部分概要) 共同研究により，研究のデザインと報告の全文を担当した．共著者：矢野正，鈴木伸也，吉井英博 (pp. 144-145)

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 阿尾 あすか

研 究 分 野	研究内容のキーワード	
中世文学および和歌文学の研究	中世文学、和歌、比較文学	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1) パワーポイントによる画像の表示や映像を取り入れた講義	平成 25 年 4 月 1 日～ 現在	摂南大学の非常勤講師として「古典文学に学ぶ」を、奈良学園大学の講師として「文学（日本の文学／文学の成立と展開）」を担当し、両講義において、作成プリントやパワーポイントを用いて、学生が古典文学の世界をイメージできるようにつとめた。また、古典文学に関わる映画やドラマ、演劇などの DVD を説明紹介し、その一部を鑑賞するなどして、学生が古典文学の世界を具体的にイメージできるようにつとめた。学生からの授業アンケートからも「DVD を見たりして分かりやすかった」との感想を得られた。
2) 講義終わりでの小テストや振り返りカードの記入による学生の理解度の把握	平成 25 年 4 月 1 日～ 現在	摂南大学の非常勤講師として「古典文学に学ぶ」を、奈良学園大学の助教・講師として「文学」「国文学入門」等国文学関連の講義を担当した。摂南大学では講義終わりに、その単元について小テストを行い、学生の理解度を確認した。場合によっては次週講義で再度その項目について補足説明を行った。また、奈良学園大学での講義では、講義の終わりに毎回振り返りカードを配付し、学生にその日の講義内容や自分の学びについての振り返りを書かせた。振り返りの内容は翌週の講義には必ず反映させ、補足説明を行ったり、そこから発展した問題を取り上げて新たな講義展開を行ったりなどし、学生の理解度が深まるように努めた
3) 講義中の調べ学習や、グループワーク、発表など学生の参加を取り入れた講義	平成 26 年 4 月 1 日～ 現在	奈良学園大学の助教・専任講師として「基礎ゼミナール」の初年次教育や「文学」「国文学入門」等国文学関連の講義を担当した。講義の時間を大きく三分割にして、学生が自分で調べ取り組むワークの時間を設けた。ワークの時間ではスマートフォンなどを用いて調べたり話し合ったりしてプリントに書き込ませた。また、ワーク後、その内容について全員の前で発表させたり、翌週の講義で紹介するなどして、ほかの学生とも意見を共有できるようにした。このような取り組みによって学生の授業への積極的な参加を促すことができ、授業内容についての理解度も深まった。
4) 意見交流・グループ発表など、学生のチームワーク、コミュニケーション力、発言力を高める講義	平成 26 年 4 月 1 日～ 現在	奈良学園大学の助教・専任講師として「人間教育実践力開発演習」の演習や、「基礎ゼミナール」の初年次教育、「国文学入門」「国文学Ⅰ」等国文学関連の教育を担当し、グループワークやペアワーク、意見交流などの活動を行った。これによって学生間のコミュニケーション力や発言力、授業態度が向上した。
5) ボランティア実習のコーディネートなど学生の実践的な活動を取り入れた講義	平成 26 年 4 月 1 日～ 現在	奈良学園大学の助教・専任講師として「人間教育実践力開発演習」の演習を担当し、教職志望の学生を学校支援ボランティアなどの学校園へのボランティア活動に派遣するコーディネートを行った。実際に教育委員会や学校園との交渉も行い、学生と受け入れ側双方の要望などを聴取し、実習中の見回りや事前事後の派遣学生の指導も行った。また学生の授業参観などのコーディネート、学生の引率および指導も行った。

6) 補助プリント、講義プリントの作成	平成 25 年 4 月 1 日～ 現在	摂南大学・京都大学の非常勤講師、奈良学園大学の助教・講師として国文学関連の講義を行ったが、講義レジュメを穴埋め式とし、学生が講義の内容を聴きながら重要な空欄を埋めるようにした。また、奈良学園大学の助教・講師として行った国文学関連および初年次教育の講義では、学生の実情に合わせたワークシートを作成し、学生が自分の考えを書き込みながら、講義での学びを深めていけるように努めた。
2 作成した教科書、教材 1) 伏見院	平成 25 年 4 月 1 日～ 現在	京都大学文学部での講義「東洋文化系ゼミナールⅡ」、奈良学園大学での講義「国文学入門」において、副次テキストとして使用した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 授業評価アンケート	平成 27 年 7 月～現在	奈良学園大学の助教・講師として、「文学」「国文学入門」「国文学Ⅰ」「国文学Ⅱ」の授業科目で授業評価アンケートを実施しているが、着任時の平成 27 年度は全体平均程度であったものの、その後の授業改善の努力により平成 28 年度以降はほぼ全科目で全体平均を上回る 3.5 以上の総合満足度である。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 日本学術振興会特別研究員 (RPD)「持明院統派皇族間での宮廷文化の相承と変容—京極派歌人伏見院を中心に」	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	平成 24 年 4 月から平成 25 年 3 月の期間は信州大学教育学部に、平成 25 年 4 月から平成 26 年 3 月までの期間は京都大学大学院文学研究科に所属して、日本学術振興会特別研究員 (RPD) としての研究活動を行った。この間の業績は、査読付論文が一本、注釈が四本、辞典の項目執筆が一冊 (共著) である。
2) 韓国学中央研究院「2012 年度グローバル時代韓国的価値と文明研究」採択プロジェクト、「高麗時代の公共性」における共同研究	平成 24 年 8 月～平成 25 年 11 月	韓国学中央研究院の採択研究プロジェクトにおいて、日本側の共同研究者として参画している。韓国で行われる学術会議に参加、発表を行い、報告書に論文を提出する。この間の業績は、研究発表および討議が二回である。平成 27 年 10 月刊行の報告書にも、論文を二本掲載した。
3) 市民大学等の講義講師 ・桜井市第三期市民大学講義講師 ・桜井市第四期市民大学講義講師 ・三宅町成人大学学習推進講座第 2 講座講師 ・平城東公民館記念講演講師 ・葛城市立図書館文学講座講師	平成 27 年 7 月 28 日・8 月 18 日・9 月 8 日／ 平成 28 年 9 月 19 日・10 月 17 日／ 平成 28 年 7 月 16 日／ 平成 28 年 11 月 11 日 平成 30 年 12 月 1 日	桜井市教育委員会主催の第三・四期市民大学の講師として、「桜井の観光名所」「和歌の中の桜井を楽しむ」をテーマに講義した。また、三宅町の成人大学学習推進講座で「大和の観光名所」と題して、三宅町と文学の関わりについて講義した。奈良市の平城東公民館の記念講演の講師として、「『大和名所図会』における名所の成立」をテーマに講義した。また、葛城市立図書館文学講座の講師として「古典文学世界からみる葛城」という題で講義を行った。
4) 大学公開講座講師 ・平成 26 年度り～べるカレッジ公開講座講師 ・奈良学園大学公開文化講座講師	平成 26 年 9 月 20 日／ 平成 28 年 9 月 17 日	大学・王寺町共催の公開講座「り～べるカレッジ」で、「大和の観光名所—古典文学との関わりから」と題して講演した。また、奈良学園大学の公開講座で、「『大和名所図会』における名所の成立」と題した講演を行った。

5) 科学研究費補助金基盤研究 (B) 「中世近世国文学における中国文学受容の研究—和漢聯句と抄物を中心として—」	平成 24 年 4 月～平成 29 年 3 月 (平成 27 年 4 月より参加)	京都大学大学院文学研究科の大谷雅夫教授を中心とする研究課題において、研究分担者として参加している。本研究課題では和漢聯句の紹介と翻刻および内容の検討に参加し、『慶長・元和 和漢聯句作品集集成』の翻刻作業を分担した。
6) 科学研究費補助金若手研究 (B) 「鎌倉時代後期の宮廷における王朝文化継承と新文化創出の再検討—伏見院の宮廷を中心に—」	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	研究代表者として科学研究費補助金を獲得。平成 24 年度～平成 26 年度に行った、日本学術振興会特別研究員 (RPD) の研究課題の研究内容を深化かつ継続するものである。この間の業績は、査読付論文が二本、著書が一本 (共著)、学会発表が一本である。
7) 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「宗教系団体等が所蔵する幻燈史料の記録化と分析による道徳観成立へのアプローチ」	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	奈良学園大学人間教育学部山本美紀教授を研究代表者とする課題において、研究分担者として参加している。研究分担者として、当時の史料のデータベース化および目録化に協力した。
8) 科学研究費基盤研究 (C) 「中世における漢故事のパラフレーズ」	平成 28 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日	南山大学森田貴之准教授を研究代表者とする課題において、研究分担者として参加している。当該の研究課題の成果として、平成 30 年秋期刊行の論集に論文を一本発表予定である。
5 その他 1) 摂南大学での古典文学史の講義	平成 25 年 4 月 1 日～平成 25 年 9 月 30 日	摂南大学経営学部の非常勤講師として、「古典文学から学ぶ」の講義を担当した。学部二回生を対象とし、物語文学を中心とする、古代から平安時代までの古典文学史について講義した。イラストやパワーポイントを多用して、学生の古典文学への興味関心を引き出すこと、古典文学への知識を身につけさせることを目標とし、実際に受講した学生からは「古典文学についての興味がわいた」などの声が寄せられ、目標を達成することができた。
2) 京都大学での和歌史の講義	平成 25 年 10 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日	京都大学文学部の非常勤講師として、リレー講義「東洋文化系ゼミナール」を担当した。学部全体を対象とし、古典文学史、特に勅撰和歌集史について講義した。勅撰和歌集の成立と性格、それに関わる研究を把握し、卒業論文の作成に向けて問題設定ができるように講義を行った。受講学生からのレポートも、勅撰和歌集の個々の性格を理解した上で問題設定を行うことができおり効果があった。
3) 奈良学園大学での文学の講義	平成 26 年 4 月 1 日～現在に至る	奈良学園大学の助教・専任講師として、国文学関連の講義を担当した。講義中には、学生にグループワークや発表をさせることで受身ではなく主体的に学習に取り組み、知識を身に付ける効果があった。
4) 奈良学園大学での人間教育実践力開発演習の講義	平成 26 年 4 月 1 日～現在に至る	奈良学園大学の助教・専任講師として、授業参観、学校園ボランティア実習の事前事後指導を担当し、学校園の教育目的を理解し、主体的に行動できる学生を育成することに効果があった。
5) 奈良学園大学での初年次教育の講義	平成 27 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学の助教・専任講師として、初年次教育を担当し、アカデミックスキル・ステディスキル、プレゼンテーション力やコミュニケーション力を身につけさせるのに効果があった。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 1) 高等学校教員免許 (国語 I 種)	平成 12 年 3 月	平 11 高一種第 511 号

2) 修士 (文学)	平成 14 年 3 月	京都大学第 3427 号、論文題目「嵐と鐘—「風雅和歌集」を中心として—」
3) 博士 (文学)	平成 20 年 3 月	京都大学第 445 号、論文題目「風雅和歌集の歌風と展開」
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 研究プロジェクトでの事務および報告書の編集作成	平成 20 年 7 月～平成 22 年 6 月	国文学研究資料館において、文学形成研究系の機関研究員として「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの研究会の事務及び報告書の編集作成に携わった。
2) 科学研究費補助金若手研究 (B) 「南北朝期和歌における王朝文化の継承と禪文化の流入」	平成 21 年 4 月～平成 22 年 9 月・平成 23 年 11 月～平成 24 年 3 月	国文学研究資料館において、機関研究員在籍時の平成 21 年 4 月から平成 22 年 6 月までの期間および特定研究員在籍時の平成 22 年 7 月から平成 24 年 3 月までの期間、科学研究費補助金若手研究 (B) に採用され、中世和歌とくに京極派和歌の表現に関する研究を行った。途中中断しているのは出産育児によって一年間研究を中止したためである。この間の研究業績は著書が三冊 (うち二冊は共著)、報告書が二冊 (いずれも共著)、注釈が二本 (いずれも共著)、図録が二冊 (いずれも共著) である。
3) 資料展示の企画参加および展示作業	平成 21 年 11 月～平成 23 年 12 月	国文学研究資料館において、文学形成研究系の機関研究員として「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの特別展示「物語の生成と受容」(平成 21 年 11 月 9 日～11 月 23 日) の企画に参加、展示にかかわった。また、特別展示「近衛家陽明文庫 王朝和歌文化一千年の伝承」(平成 23 年 10 月 8 日～12 月 4 日) の企画に参加、展示資料の調査、選定に関わった。同館企画連携部の機関研究員としては、初学者向けの展示「和書のさまざま」(平成 22 年 4 月 15 日～6 月 18 日) の展示作業を担当した。
4 その他 1) 科学研究費補助金若手研究 (B)	平成 21 年 4 月～平成 22 年 9 月・平成 23 年 11 月～平成 24 年 3 月	「南北朝期和歌における王朝文化の継承と禪文化の流入」(21720084) 代表阿尾あすか
2) 日本学術振興会特別研究員奨励費 (RPD)	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月 30 日	「持明院統派皇族間での宮廷文化の相承と変容—京極派歌人伏見院を中心に」(人文学・40200)
3) 韓国学中央研究院「2012 年度グローバル時代 韓国的価値と文明研究」採択プロジェクト	平成 24 年 8 月～平成 25 年 11 月	「高麗時代の公共性の研究」1 年目：鎌倉時代後期の宮廷文化と公共性、2 年目：天皇の記録を通して見た中世的公共性
4) 科学研究費補助金基盤研究 (B) : 分担	平成 27 年 4 月～平成 29 年 3 月	「中世近世国文学における中国文学受容の研究—和漢聯句と抄物を中心として—」(24320048) 代表大谷雅夫

5) 科学研究補助金若手研究 (B)	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	「鎌倉時代後期の宮廷における王朝文化継承と新文化創出の再検討―伏見院の宮廷を中心に」 (15k16691) 代表阿尾あすか
6) 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究: 分担	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	「宗教系団体等が所蔵する幻燈史料の記録化と分析による道徳観成立へのアプローチ」 (15k13194) 代表山本美紀
7) 科学研究費基盤研究 (C)	平成 28 年 4 月～平成 31 年 3 月	「中世における漢故事のパラフレーズ」 (16K02379) 代表森田貴之
8) 学術雑誌の学界時評における評価	平成 26 年 5 月	『リポート笠間』56 号 (平成 26 年 5 月・笠間書院) の学界時評「和歌」の項目において、論文「東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格―合点・丸印の意味するもの―」(『京都大学国文学論叢』30 号) が「古筆資料の博搜と考証から新たな見解が提示されている」研究として紹介・評価されている。
9) 過去に所属した国文学研究資料館でのプロジェクトの代表責任者の評価	平成 23 年 5 月 20 日	同館の「平安文学における場面生成研究プロジェクト」及び「陽明文庫展示研究プロジェクト」に機関研究員として従事し、主に研究や、研究成果報告書の編集作業及び研究会の運営の補助などを行っていた。前者のプロジェクトでは平安物語文学という申請者の専門外の分野を中心とする活動であったものの、中近世和歌に関する広範な知識を生かし、後世における平安物語文学享受について様々な研究提起してプロジェクトに貢献するところが大きかった。企画展示室にも勤務し、展示作業にも関わっていた。アルバイト学生などの協力者との関係も良好であり、業務と両立して自分の研究も行っていた。 今は古典研究者が減少する傾向にあるので、次代に向けて古典文化を担っていく者が積極的に求められる。今後さらに優秀な研究者として成長していく人物であるので、是非申請をお願いしたい。
10) 日本学術振興会特別研究員 (DC2) の受入研究者の評価	平成 23 年 5 月 21 日	専門的知識・技量については、京極派和歌はもちろん中世韻文学に関してもその知識は広範に及ぶ。また、前の勤務先において、平安王朝物語に関わったプロジェクトに参加していたこともあり、物語文学に関する知識も豊富である。表現研究だけではなく、資料研究も手堅く押さえられているところが、研究者としての強みである。
11) 日本学術振興会特別研究員 (RPD) の平成 25 年度受入研究者の評価	平成 26 年 4 月 18 日	研究員は近年、京極派歌壇の指導的存在であり、皇統である持明院統の領袖でもあった伏見院の歌人像を再構築するという大きなテーマに精力的に取り組んでいるが、当該年度において発表した論文、「東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格―合点・丸印の意味するもの―」は、伏見院の歌人としての実像を知るための大きな手がかりとなるものである。同詠草については、近年その存在が発見され、いまだその性格が明らかとなっていない。研究員は合点や丸印といった符号の付いた和歌について詳細な分析を行うことで、同詠草の実体を明らかにすることに成功した。同詠草の性格が判明することで、伏見院の歌風形成の過程がより明確なものになることが予想される。また、韓国の研究者との共同研究において、文学の立場から中世日本社会の「家」が公共的存在であることを提起しているが、これも中世の天皇家および歌の家と密接に関わる問題であり、持明院統皇統の性格を考える上で大変重要な研究と思われる。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1『伏見院』	単著	平成 23 年 6 月	笠間書院	中世の京極派和歌の庇護者であり、代表歌人でもある伏見院の和歌三十七首の解釈を通じて、院の和歌表現の特徴と和歌思想について論じた。伏見院の和歌は、王朝古典文学や漢詩文を積極的に摂取した表現、独自の思想に基づいた繊細な自然描写が特徴である。京極派和歌は、法相宗の唯識思想を基としているが、院の場合はそこに神道的な思想が加わる。伏見院には強烈な正統意識と隠遁願望があり、院の思想や歌風もこうした内面に由来すると思われる。 A6 判・全 113 頁
2『鳥獣虫魚の文学史 虫の巻』日本古典の自然観 3	共著	平成 24 年 1 月	三弥井書店	鳥獣虫魚のうち、虫を取り上げ、虫が日本古典文学においてどのように描かれてきたかを様々な視点から論じ、そこから日本人の自然観をあぶりだすことを目的とした論文集。 A5 判、373 頁 編者：鈴木健一 共著者：鈴木健一、田中仁、室田知香、大井田晴彦、西山秀人、坪井陽子、横田隆志、植木朝子、高柳祐子、山本啓介、横山太郎、天野総一、阿尾あすか、有賀夏紀、金子俊之、牧藍子、牧野悟資、井上泰至、小財陽平、吉丸雄哉、佐藤至子 本人担当部分：「蚊遣火を詠む和歌―「雅」と「俗」のはざままで」(p214-229) 「蚊遣火を詠む和歌―「雅」と「俗」のはざままで」を単著
3『中世詩歌の本質と連関』中世文学と隣接諸学 6	共著	平成 24 年 1 月	竹林舎	中世和歌における諸問題を扱った論文集。 A5 判、全 597 頁 編者：錦仁 共著者：阿尾あすか、赤木俊介、植木朝子、鏑武彦、加藤孝男、久保木秀夫、小林一彦、小山順子、志立正知、鈴木元、寺島恒世、内藤まりこ、中村文、中村成里、錦仁、久野俊彦、平田英夫、平林香織、堀川貴司、松本麻子、松本郁代、丸山陽子、安井重雄、山田尚子、吉野朋美 本人担当部分：「歌の家の継承と実践―京極為兼・二条為世を中心に―」(p511-535) 「歌の家の継承と実践―京極為兼・二条為世を中心に―」を単著 鎌倉時代後期、歌の家である御子左家は京極、二条の二家に分裂し、双方が正統性を主張した。京極為兼と二条為世の歌論を検討すると、為兼は詠歌態度についての庭訓を、為世は歌を詠む実践面での庭訓をそれぞれ継承している。歌学歌論の宗教的傾向を深化させたのが京極派、「道」の伝授を庶幾してゆくのが二条派であり、両者は中世文化を形成する表裏一体と捉えうる。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4『高麗時代の公共性1』	共著	平成28年6月	韓国学中央研究院出版部	韓国学中央研究院のプロジェクト「高麗時代の公共性」についての研究をまとめた報告書。 全207頁 編者：李禧柱 共著者：李禧柱, 申福龍, 李南姫, 丁善溶, 尹大植, 魯炳浩, 永原慶子, 阿尾あすか 「日本宮廷文学の公共性―「勅撰和歌集」という公共事業」(韓国語による翻訳) pp. 191-pp. 207 勅撰和歌集21代集の撰集作業を公共事業として捉えた時、それは日本の政治とどのような影響関係にあったのかを概説的に論じた。通史的に見た場合、勅撰和歌集には二つの大きなタームポイントがあった。それは撰集作業が国家事業として意識された『新古今和歌集』、武家の政権が京都に移った時に編纂された『新千載和歌集』である。中世からの勅撰和歌集事業は、武家と天皇家との共同政権のバランスの上に成り立っており、そのバランスが大きく武家に傾いた時に破綻を迎えることを指摘した。
5『高麗時代の公共性2』	共著	平成28年6月	韓国学中央研究院出版部	韓国学中央研究院のプロジェクト「高麗時代の公共性」についての研究をまとめた報告書。 全226頁 編者：李禧柱 共著者：李禧柱, 申福龍, 李南姫, 丁善溶, 尹大植, 魯炳浩, 永原慶子, 阿尾あすか 「「家」という日本の中世的公共性について―「歌の家」を中心に―」(韓国語による翻訳) pp. 203-pp. 226 「公共性」という言葉の定義に立ち戻った時、日本の中世の社会は「家」の結合体で成り立っており、「家」そのものが公共性を帯びたものであったといえる。本論ではその見解に立って、中世の歌の「家」の継承のシステムについて概説した。
6『日記で読む日本史1 日本人にとって日記とは何か』	共著	平成28年7月	臨川書店	歴史や文学における日本の日記文化について論じた論文集。 四六判・全276頁 編者：倉本一宏 倉本一宏, 松蘭斉, 石田俊, 佐野真由子, 奈良岡聰智, 久富木原玲, カレル・フィアラ, 井上章一, 富田隆, 阿尾あすか 「日記と和歌―『中務内侍日記』を例に」(pp201-230) 中世の女流日記『中務内侍日記』について取り上げ、同日記に果たす和歌の役割について論じた。同日記における和歌は、作者のつかえた伏見院の侍臣、女房達が、天皇に仕える者の集団としての精神的紐帯を確かめるツールとして機能している。結果的には私的、文芸的な記事とされる箇所においても、和歌は常に天皇を称揚するためにあり、これまで分裂的と評価されてきた同日記だが、和歌から読み解くと常に伏見天皇称揚ということで一貫している。
7『慶長・元和漢聯句作品集集成』	共著	平成30年2月	臨川書店	和漢聯句の翻刻 A5判・全316頁 著者：京都大学和漢聯句研究会。阿尾あすか・大谷雅夫・大山和哉・金光桂子・川崎美穂・河村瑛子・小林雄一・小山順子・竹島一希・中村健史・野澤真樹・長谷川千尋・楊昆鵬 慶長・元和年間に催行された和漢聯句作品のうち、すでに存在が確認されているもの74点の翻刻を共同で行った。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8『日本人と中国故事 変奏する知の世界』	共著	平成 30 年 9 月	勉誠出版	日本文学における漢故事の摂取と変容について論じた論文集。 A5 判・全 271 頁 編者：森田貴之・小山順子・蔦清行 大谷雅夫、黄一丁、濱中祐子、阿尾あすか、小山順子、瓦井裕子、黄昱、森田貴之、竹島一希、河村瑛子、三原尚子、中村真理、山本真由子、蔦清行、山中延之、堀川貴司、中村健史、中嶋謙昌、朴麗玉、クリストファー・リーブズ、木田章義 「中世和歌における『子猷尋戴』故事の変容」(pp48-58) 「子猷尋戴」は、和文学の世界では、伝統的な和歌の文脈で捉えなおされたり、原典の要素を一部切り捨てたりして変容して摂取されている。中世和歌においても、原典とは異なる、いにしへの風雅な交友の話として享受されてきた。漢故事も、歌人たちには、「王朝古典」として摂取されていったと考えられる。
(学術論文) 1 東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格—合点・丸印の意味するもの—(査読付)	単著	平成 25 年 9 月	『京都大学国文学論叢』(京都大学) 30 号 p37-54	東京国立博物館蔵「伏見院詠草」は近年伏見院自筆の歌稿と紹介された資料であるが、永仁の勅撰の際の撰集資料とされる「松木切」の一部と推定されたものの、その和歌表現や資料の性格については不明であった。合点・丸印の付いた和歌の表現を中心に検討を行ったところ、永仁期から京極派歌風確立以前の嘉元期以前までの詠草をまとめたものであり、合点・丸印のない継紙に関しては嘉元期以後のものであることが判明した。同詠草は「松木切」以後も、様々な段階でまとめられた伏見院の歌集の草稿の一部が切り継ぎされたものと考えられる。
2 日本文化における教養教育としての「古典文学」利用—『大和名所図会』での名所規定を例として—(査読付)	単著	平成 26 年 12 月	『人間教育 学 研究』(人間教育学会) 2 号, pp (一) ~ (一三)	近世の名所記『大和名所図会』は、先行する名所記『広和名勝志』を加筆修正する形で著されているが、古典文学に関わる名所の引用等においては独自の選択が見られる。筆写の秋里籬島は物語よりも和歌を優先的に引用しており、読者が現地に赴いて詠行ないし吟行することを想定して同書を編集していることが窺われる。同書からは当時の文人層の基礎教養が和歌にあったことが窺われる。
3 日本文学における母性観—今後の教育に資する一考察—	単著	平成 27 年 12 月	『人間教育 学 研究』(人間教育学会) 3 号 pp. (一) ~ pp. (一五)	平安時代から近現代までの文学において、母性がどのように描かれているかを概観し、各時代での母性観を考察した。現代日本にも根強く見られる抱擁的・自己犠牲的な母親の愛情が、望ましい母性として描かれるのは、明治・大正時代に完成した良妻賢母思想以降である。近代以前は親として子どもを扶養し安定した愛情を与えていれば問題ないものとされていた。家族形態も多様化した昨今、母性の在り方を考える上で近代以前の日本の母性観には示唆すべき点が多いと考えられる。
4 伏見院の和歌題と漢文学(査読付)	単著	平成 29 年 4 月	『国語国文』(京都大学) 86 巻 4 号 pp. 204-215	漢詩句から摂取したと思われる和歌題で詠まれた伏見院の和歌の検討を通して、伏見院とその時代の文芸における漢文学摂取の様相について明らかにした。典拠となった漢詩文の内容まで取って詠む場合、内容は全く含まず題のみ取る場合など様々な詠まれ方をしており、当時、漢詩句が和歌の修練の場で盛んに用いられ宮廷文化に深く浸透したものであったことを指摘した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他) 「報告書」 1『平成 21 年度研究成果報告書 物語の生成と受容 ⑤』	共著	平成 22 年 2 月	国文学研究資料館	国文学研究資料館の「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの平成 21 年度の研究成果をまとめた報告書。付録として平成 21 年 11 月に国文学研究資料館特別展示資料の調査報告と資料解説を付ける。 A5 判、全 235 頁 編集：「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：中村康夫、伊藤鉄也、江戸英雄、阿尾あすか、吉田小百合、岩城賢太郎、小川陽子、加藤昌嘉、金光桂子、高橋由記、中川照将、萩野敦子、松岡智之、横井孝、横溝博、安藤徹、武井協三、森田直美 本人担当部分：「一滴集」(p181-183)、「源氏物語わかさ」(p184-185)、「詠源氏物語和歌」(p186-189)、「源氏物語歌寄せ」(p190-193) 平成 21 年 11 月に国文学研究資料館特別展示で展示した、同館所蔵本についての調査報告及び資料解説。各資料の資料的性格と書誌的事項について執筆した。
2『陽明文庫王朝和歌集影』	共著	平成 24 年 1 月	勉誠出版	平成 23 年の国文学研究資料館の特別展示「近衛家陽明文庫王朝和歌文化一千年の伝承」の図録をもとに索引を付すなどして編集し、単行本化したもの。国文学研究資料館特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」(平成 21 年～平成 23 年度 代表者・中村康夫)の研究成果報告書でもある。 A4 判、全 252 頁 編者：国文学研究資料館 共著者：阿尾あすか、赤澤真理、海野圭介、久保木秀夫、寺島恒世、中村健太郎、中村康夫、名和修、後藤洋子、杉本まゆ子、日比野浩信、舟見一哉、山本登朗 本人担当部分：「詩懷紙(賦花迎文翰賓)」、「和歌懷紙(見花・折花)」、「和歌懷紙(梅近聞鶯)」、「広沢切(伏見院御集断簡)」、「和歌巻」、「和歌懷紙(侍行幸聚楽第)」、「詠草(立待月・渡月・月前松・寄月旅)」、「光厳院三十六番歌合」 室町後期から近世初期にかけての近衛家歴代当主の懷紙、持明院統派天皇の和歌巻を中心に資料解説を行った
3『『初中等学校における古典教育』日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画 国文研主導共同研究「青少年に向けた古典籍インターフェースの開発」報告書—初中等学校における古典教育—』	共著	平成 31 年 3 月	国文学研究資料館 リポジトリ	国文学研究資料館の共同研究の研究成果報告書。 全 142 頁 編者：小山順子 共著者：久保木秀夫、入口敦志、山下則子、平野多恵、富士ゼロックス京都 CSR グループ 文化推進室、小林一彦、阿尾あすか、石井倫子、山中延之、小山順子、 本人担当部分：「教員志望学生に向けての古典文学教育授業実践」pp.92～101 大学での古典文学、特に和歌文学についての講義での授業実践を報告した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「学界時評」 1「中世韻文 中世韻文研究の「未来」のために」	単著	平成30年 11月	『文学・語学』（全国大学国語国文学会）223号、pp. 48～51	平成28年度の学界、特に中世韻文学研究の動向について論じた。文学研究が危機的状況にあると言われて久しい。その中で学界が行うべきことについても提起した。
「実践記録」 1 教職をめざす大学生への「俳句の授業」	単著	平成30年 3月	『語り合う文学教育』第16号 p91-103	大学での国文学関連の講義のうち、俳句に関する授業実践の記録。俳句は様々な解釈が許される短詩形の文芸である。句会で合評し、相手の作品の内容を想像することで、互いに尊重しながら楽しむ空気が生まれた。手頃に創作でき楽しむことができる俳句は言語活動の一環だけでなく、学級経営にも生かせる活動なのではないか。
「注釈」 1『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年二月記（二）一訓読と注釈	共著	平成23年 3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）6号 p175-222	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年二月十一日～三十日条の本文について、宮内庁書陵部のコロタイプ複製を底本として、翻刻、訓読、注釈を加えたものである。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人 本人担当部分：二月十七日条 十七日条の翻刻、訓読、注釈を担当した。同日条では宮中行事についての注釈を主に加えたが、鎌倉後期の政治情勢を踏まえて記述した。
2『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年三月記一訓読と注釈	共著	平成24年 3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）7号 p241-304	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年三月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人 本人担当部分：三月二十二日条 観音院の仏事、観音院灌頂についての記事を中心に訓読・注釈を行った。
3『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記一訓読と注釈	共著	平成25年 3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）8号 p245-313	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当部分：四月十二日条、二十一日条、二十二日「衆議判」の項、二十八日条 二条為基や京極為子の略伝、和歌に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。
4『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年五月記（一）一訓読と注釈	共著	平成26年 3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）9号 p261-305	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年五月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当部分：五月十五日条 月蝕および月蝕に対応する宮廷行事に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年五月記（二）一訓読と注釈	共著	平成 27 年 3 月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）10 号 p 145 - 193	共著者：阿尾あすか、小橋慧子、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当分：五月二十九日条 花園院の日常生活に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。
6『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年六月記一訓読と注釈	共著	平成 28 年 3 月	『京都大学国文学論叢』（京都大学）35 号 p 113-146	編集：花園天皇日記研究会 共著者：坂口太郎、中村健史、阿尾あすか、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌、三角健、水嶋彩乃、田村亨 pp. 113-pp. 145 本人担当箇所：六月四日・五日条 京極為兼に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。
「翻刻」				
1「『蒙求和歌』第三類本文（二）一恋部から述懐部まで一」	共著	平成 25 年 3 月	『京都大学国文学論叢』（京都大学国文学研究室）28 号	『蒙求和歌』本文、三類本に分類される山口県立山口図書館蔵本を底本とし、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本と対校させながら翻刻を行ったもの。 共著者：阿尾あすか、小山順子、竹島一希、蔦清行、中島真理、濱中祐子、森田貴之、山中延之 本人担当部分：81～90 『蒙求和歌』恋部前半、「班女辞輦」から「宋女愈謹」までの翻刻を行った。
2「『蒙求和歌』第三類本文（三）一哀傷部から雑部まで一」	共著	平成 26 年 3 月	『京都大学国文学論叢』（京都大学国文学研究室）29 号	『蒙求和歌』本文、三類本に分類される山口県立山口図書館蔵本を底本とし、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本と対校させながら翻刻を行ったもの。 共著者：阿尾あすか、小山順子、竹島一希、蔦清行、中島真理、濱中祐子、森田貴之、山中延之 本人担当部分：151～160 『蒙求和歌』、「墨子悲糸」から「史魚黜殯」までの翻刻を行った。
3『蒙求和歌』片仮名本(第二類本)第二種本 本文	共著	平成 28 年 9 月	京都大学国文学論叢（京都大学国文学研究室）34 号	共著者：阿尾あすか、小山順子、竹島一希、蔦清行、南谷静香、濱中祐子、森田貴之、山中延之 本人担当部分：p107-113
「図録」「目録」「辞典」 1『特別展示「物語の生成と受容」』	共著	平成 21 年 11 月	国文学研究資料館	平成 21 年 11 月 9 日～23 日の期間、国文学研究資料館で開催した特別展示の解説図録。 A4 判、全 49 頁 編者：国文学研究資料館「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：中村康夫、伊藤鉄也、江戸英雄、阿尾あすか、吉田小百合、岩城賢太郎、小川陽子、加藤昌嘉、金光桂子、高橋由記、中川照将、萩野敦子、松岡智之、横井孝、横溝博、安藤徹、武井協三、森田直美 本人担当部分：p33-36 22「一滴集」、23「源氏物語わかくさ」、24「詠源氏物語和歌」、25「源氏物語歌寄せ」の解説。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2『図録展示 近衛家陽明文庫 王朝和歌文化一千年の伝承』	共著	平成 23 年 11 月	国文学研究資料館	平成 23 年 10 月 8 日～12 月 4 日に国文学研究資料館で行われた特別展示の図録。同館の特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」（平成 21 年～平成 23 年度 代表者・中村康夫）の研究成果報告書でもある。陽明文庫に伝わる歌合及び和歌に関する資料を中心に展示を行った。 A4 判、全 257 頁 編者：国文学研究資料館 共著者：阿尾あすか、赤澤真理、海野圭介、久保木秀夫、寺島恒世、中村健太郎、中村康夫、名和修、後藤祥子、杉本まゆ子、日比野浩信、舟見一哉、山本登朗 本人担当部分：「詩懷紙（賦花迎文翰賓）」、「和歌懷紙（見花・折花）」、「和歌懷紙（梅近聞鶯）」、「広沢切（伏見院御集断簡）」、「和歌巻」、「和歌懷紙（侍行幸聚楽第）」、「詠草（立待月・渡月・月前松・寄月旅）」、「光厳院三十六番歌合」 室町後期から近世初期にかけての近衛家歴代当主の懷紙、持明院統派天皇の和歌巻を中心に資料解説を行った。
3『和歌文学大辞典』	共著	ウェブ版：平成 25 年 4 月 書籍版：平成 26 年 12 月	株式会社古典ライブラリー	共著者：青木賜鶴子・青木太朗ほか 本人担当部分：或所紅葉歌合・摂津守有綱歌合・賭弓歌合・未詳歌合（年次不詳）・後伏見天皇・家親・清雅・経親・家雅・三十番歌合・金玉歌合・歌合（乾元二年五月四日）・正応三年九月十三夜歌会歌・正応二年三月和歌御会・北山御幸和歌・正中三年禁庭御会和歌・為兼卿和歌抄・京極家・伏見院三十首・公蔭・法守法親王・盛親・定宗・一万首作者・山王七社法楽和歌・貞和百首・木綿櫛・永仁勅撰議・伏見院宸記・理・風雅・京極派 B5 版、全 1352 頁
4 三室戸寺蔵文学関係資料目録	共著	平成 27 年 3 月	和泉書院	三室戸寺での歌書・物語等の文芸資料の調査結果をもとにした解題目録。 共著者：大谷俊太、小山順子、長谷川千尋、豊田恵子、舟見一哉、阿尾あすか、森本晋、龍池玲奈 本人担当部分： p6-7, 13-14, 17, 22-23, 27, 35, 50, 55, 90, 93, 100, 106-109, 117-121 A4 版、全 222 頁
「学会発表」				
1 日本宮廷文学の公共性—「勅撰和歌集」という公共事業	単独	平成 24 年 11 月	韓日国際学術会議—高麗時代の公共性—（於韓国ソウル・アサン政策研究院）	政治的な視点で見ると、勅撰和歌集は天皇の公共事業として捉えられる。勅撰和歌集の編纂事業は、天皇の治世と安定と繁栄を予祝、または記念する国家事業であり、特に中世においては和歌によって王権の正統性と権威を補完し、誇示するものであった。そこには武家の有り方が深く関わっており、足利幕府が京都に幕府を置いたことにより変容することとなった。勅撰和歌集の編纂事業は天皇家が権能の一部を幕府に与えながらも、政治と文化双方において権威権力を持つことによって成立したのである。
2「家」という日本の中世の公共性について—「歌の家」を中心に—	単独	平成 25 年 8 月	韓日国際学術会議—高麗時代の公共性—（於高麗大学）	「公共性」という言葉は様々な定義で用いることができ、時代によっては示す内容が異なってくる。当該発表では日本の中世独自の「公共性」の一つに、「家」があることを論じた。和歌の「家」の継承の正統性をめぐって争った二条家と京極家の様相に注目すると、細部の文学表現までもが「家」の継承の正統性の証左となったことが窺える。現代では「私」の領域にある表現や芸術活動が、中世日本では「公共」のものであったことがわかる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 ことばから広がる和歌の学習 ―ことば遊びと結び付けた和歌教育の提案―	単独	平成 28 年 8 月	奈良県国語教育研究協議会 第 312 例会（於いかるがホール）	中学校国語教育における和歌についての授業での、和歌の技巧の教授法について、教職を目指す大学生への授業実践を通して考察した。
4「音読」再考（講演）	単独	平成 28 年 9 月	語り合う文学教育の会（於奈良教育大学附属小学校）	国語科教育において音読は重視されてはいるものの、一方で目的が教師によって多様化しており、音読によって何を身につけるのか、学習の目標があいまいである。本講演では日本語の音の韻律やリズムに重点を置く、音読に特化した授業の提案を行った。
5 教員志望学生に向けての古典文学教育授業実践	単独	平成 29 年 3 月	機構内連携共同研究「青少年に向けた古典籍インターフェースの開発」・「初中等学校における古典教育」研究会（於日本女子大学百年館）	教員志望の学生であっても古典に苦手意識を持つ者は多い。教員を志す学生たちが、学校現場でどのように古典文学を小中学生たちに教えていくのか、ワークを中心とした講義を実際に学生に体験させることで、授業方法を提示していくことも有効な手段と思われる。本発表では、和歌の授業実践を通して、文字やことばへの興味から和歌へと引き付けてゆくことが、もっとも効果的であることを明らかにした。古典文学に興味を持ってないでいる学生の多くは、古典が難解な言葉で書かれた高尚な文芸であって、自分とはつながりのないものと感じることから学習意欲を喪失させるようである。そうした苦手意識を取り除き、古典へ興味関心を持たせる一方法として、ことば遊びと和歌を結び付けた学習は有効ではなかろうか。
6 感動と技巧―国語での俳句教育についての一提言～（講演）	単独	平成 29 年 7 月	語り合う文学教育の会（於奈良教育大学附属小学校）	小学校国語科では俳句は伝統的な言語文化の要項に含まれ、小学校三年生では俳句に親しむこと、小学校五年生で創作することが学習内容に含まれている。俳句は座の文学であり、もとは複数人で作る、世界にも類を見ない文芸形態である。句会では互いの句を尊重し、その詠もうとした真意をくみ取ろうとする。俳句で自分の思いを伝えることも大事ではあるが、何よりも他者の作った句とその思いを受け止めようとするところに句会の良さがある。本講演では、大学での講義の実践報告を通じて、俳句、特に句会を学級づくりに利用することを提案した。
7 伏見院の和歌における強調の句表現について	単独	平成 29 年 12 月	和歌文学会関西例会（於大阪市立大学）	伏見院の和歌には、「これ」や「それ」など指示詞で強い句切れを起こしながら、あとに続く叙述部分を受ける用法のものが散見する。『万葉集』や和漢混交文には、漢文訓読からの影響で強調表現としての「それ」の用例が見られ、伏見院も『万葉集』を通して摂取したと考えられる。また、強調の意で用いられる指示詞「これ」の句表現は、伏見院の場合、「～は（ぞ）これ、…」という話型で用いられるが、これも院政期以降に増加する漢文訓読調の表現である。和歌においては、新古今歌人に用例が散見し、伏見院はこの時代の実験的な表現を通して摂取したと考えられる。漢文訓読調の強調表現は、声調の強さを好んだ伏見院の個人的な志向によって摂取されたと考えられる。

教 育 研 究 業 績 書

平成31年3月31日

氏名 太田 雄久

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
教育学		教育方法(理科)・教科教育(理科)・学級経営
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 (1) 小学校理科レポート作成による科学的な思考力・表現力の育成	平成21年4月 ～平成26年3月	小学校理科の学習指導要領改訂の改善の具体的事項で示されている「児童の科学的な見方や考え方が一層深まるように、観察・実験の結果を整理し考察し表現する学習活動」の充実として、子どもに各単元の終末でのレポート作成に取り組みさせた。その結果、観察・実験の結果をグラフに整理したり、予想や仮説と関連づけて考察したりしたことを言語活動として表現する必要性を子どもに理解させることができるとともに、日々の授業での言語活動も充実することができ、相互に影響を与えつつ科学的な思考力や表現力を育成することができた。 (大阪教育大学附属天王寺小学校での実践)
(2) 「Aエネルギー・粒子」領域における見えないものを見えるようにする理科の教材開発	平成25年4月 ～平成26年3月	「Aエネルギー・粒子」領域における見えないものをする可視化する教材開発を3年生理科の単元で行った。具体的には、「磁石の性質」の単元において、見えない磁石の力の働き方を可視化するために、棒磁石を同極同士長く連結したものと異極同士を長く連結したものを作った。それらにつく鉄でできた物のつき方の違いから、子どもは同極同士および異極同士近づけたときの磁石の力の働き方の違いをとらえることができた。また、「同極同士を近づけると退け合い、異極同士を近づけると引き合う」という現象について、子どもは見えない磁石の力の働き方に触れながら、自分なりの表現で説明することができるようになった。これらの姿は、3年生の「エネルギー」についての見方や考え方が育っていると評価できるものである。また、小学校3年生での「エネルギー」についての評価規準として、提案性のあるものとなった。 (大阪教育大学附属天王寺小学校での実践)
(3) 汎用測定装置「SPARK」を用いた小学校理科の授業開発	平成23年4月 ～平成24年3月	大阪教育大学のイノベーション人材育成に向けたカリキュラムや教材・教授方法の開発とその実証を先導的に教育研究に取り組む「科学教育プロジェクト(通称)」において、小学校理科の目標の重点として挙げられている「児童が観察、実験などの結果を整理し、考察、表現する活動を行い、学びを生活とのかかわりの中で見直し、自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図る活動」を具体化した授業開発として、5年生「電磁石のはたらき」の単元で、汎用測定装置を使った授業開発を行った。その結果、電流の強さやコイルの巻き数の変化などによる電磁

		石のもつ磁力の変化を定量的に認識し、電磁石の磁力の強さを変化させる条件を理解させた。 (大阪教育大学附属天王寺小学校での実践)
(4) 子どもの感性を働かせ科学的な見方や考え方を育む理科の授業指導方法開発	平成 25 年 4 月 ～平成 26 年 3 月	理科の目標にある「科学的な見方や考え方」を育むために、3 年生理科の授業で、子どもの感性を働かせるような授業開発を、年間を通じて行った。例えば、3 年生はじめの「植物の体のつくり」の単元では、子どもの観察の視点（視線の向き、数、色、変化など）の意味付け、価値付けを指導者が行うことで、自然の事物・現象を見る際の視点を増やした。その結果、子どもの植物の観察の視点が増え、観察の質が向上した。また、以降の単元においても、初期事象の出会いや観察・実験の際に多様な気づきが生まれるようになり、子どもが主体的な問題解決を通して、科学的な見方や考え方を身に付けることができた。 (大阪教育大学附属天王寺小学校での実践)
2 作成した教科書、教材 (1)天王寺教育ノート 第 131 号（再掲） 大阪教育大学教育後援会	平成 21 年 12 月	「アサガオの観察～アサガオを好きにさせることで気づきの質を高める～」をテーマに生活科と理科の連続性について述べた。 理科での科学的な見方や考え方の育成のために、生活科で気づきの質を高める必要性を述べた。科学的な見方や考え方の基礎を養う授業実践についてレポートを行った。気づきの質を高めるためには対象との関わりを密にすること、観察カードの気づきを指導者が適切に意味付けたり価値付けたりした上で児童にフィードバックすることが重要であるということ論じた。 (兵庫県伊丹市立有岡小学校教員研修で使用)
(2)教育実習生パンフレット 大阪教育大学附属小学校理科部	平成 24 年 4 月	教育実習生の理科の授業づくりと指導の能力の向上を目的として作成した。具体的な内容は、理科室および理科準備室の環境整備、安全と危機管理、教材開発の仕方、板書の方法、教材や実験器具の特性、理科の目標、子どもの学習活動と指導者の支援、学習指導案の書き方などを述べた。さらに理科の授業づくり指導に関わる内容について、具体例や写真を多用し、教育実習生にとってわかりやすく理解できるように述べた。 A4 版 8 ページ (平成 24 年度、25 年度大阪教育大学附属天王寺小学校の実習生指導で使用)
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1)大阪教育大学非常勤講師としての学生による授業評価アンケート結果	平成 24 年 9 月	大阪教育大学非常勤講師として学生による授業アンケートによると、本人が担当の「初等理科授業研究」は、総合評価で 3.8 点（4 点満点中）高い評価を得ている。特に具体的な話で分かりやすい点で、学生の満足度が高い。また、授業の準備や工夫した教材の提示なども学生から好評であった。
	平成 25 年 9 月	前年度に引き続き大阪教育大学非常勤講師としての学生アンケート評価は総合評価で 3.9 点（4 点満点中）であり、学生の出席率の高さ、教員の例示の分かりやすさ、学生の内容の理解度の 3 つの項目で特に高い評価を得た。

(2)大阪教育大学附属天王寺小学校の副校長からの評価	平成26年2月	理科部では、科学教育プロジェクトの中心として大阪教育大学との連携を密にし、プロジェクト推進に寄与した。また、理科教育部の中心として新学習指導要領に基づいた研究を進めることにも貢献した。さらに、理科主任として、研究会議の場でも積極的に提案し、意欲的に新たな教材を開発し、研究推進に貢献した。学校および学年運営では、第3学年主任を務め、ミドルリーダーの役割を果たした。学年担任団をまとめ、児童への指導や保護者との連携を充実させ、学校を組織として機能させた。教育実習部では、教育実習主任を補佐し、教育基本実習、第2部4回生実習、1日教育実習、教育実習オリエンテーションなどの実習関連業務を滞りなく運営した。
(3)科研費獲得のための研究補助	平成26年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校教諭として、平成25年度科研費(奨励研究)に応募した。(研究協力者は、大阪教育大学科学教育センター特任准教授 仲矢史雄氏である。)テーマは「現場教員による一貫指導と授業収録システムによる教育実習生指導方法の開発」である。科研費としては不採用であったが、大阪教育大学の学内選考会より、科研費獲得に向けて継続的に研究を進める価値があるテーマであるとの評価を受けた。科研費獲得の研究補助(平成26年度)として10万円の研究補助費を獲得した。
(4)奈良学園大学人間教育学部採用に当たっの学長からの評価	平成26年7月	大阪教育大学附属天王寺小学校で理科教育を8年間担当し教育方法技術も豊かである。また大阪府下の小学校教員への指導歴も多く、理科が苦手な教員へ実験等の指導にも優れている。また、附属小学校で多くの教育実習生の指導経験もあり、本大学の教育実習指導にも力を発揮できると期待する。さらに、非常勤講師として大阪教育大学で理科教育において学生指導を担当した経験もあり、すでに非常勤であるが大学教員としての授業の経験がある。附属では担任や学年主任の経験もあり、学生指導においてもその経験を発揮できると考える。奈良学園大学の今後を支える若手研究者として期待できる。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1)大阪教育大学の教育実習生指導担当	平成21年4月～平成26年3月 毎年9月 (昼間部)	毎年、大阪教育大学附属天王寺小学校に勤務した8年間、大阪教育大学教育学部の昼間部の学生を9月の1ヶ月間を指導した。教育実習部としては、当該年度の全ての実習生を指導した。大阪教育大学附属天王寺小学校は毎年度100名程度の教育実習生を受け入れている。指導の内容は以下の通りである。 ・理科の授業づくりおよび指導案作成の指導(理科専科時) ・音楽科、図画工作科を除く、小学校全科および領域の授業づくりおよび指導案作成の指導、実習記録の仕方などの実習事務に関わる指導、学級経営などの学級担任としての心構えについての指導(学級担任時) ・教育実習生としての心構え、子どもとの関わり方、災害時などの教員の役割、守秘義務等学校教員としての規律などについての指導(教育実習部担当時)

	平成 21 年 4 月 ～平成 26 年 3 月 毎年 11 月 (夜間部)	大阪教育大学附属天王寺小学校に勤務した 8 年間、毎年、大阪教育大学教育学部の夜間部の学生約 40 名を 11 月に 2 週間指導した。教育実習部としては、当該年度の全ての実習生を指導した。指導の内容は以下の通りである。夜間部の学生はすでに小学校 2 種や他校種等の免許を取得している学生が多いので、一定の教職に対する知識を備えている。そのため特に以下の点について指導した。 ・指導案作成における観点別評価の規準の設定と実際の評価の方法について (理科専科時) ・学級づくりにおいて、特別に支援を要する児童への関わり方や、そのために組織として対応する必要性について (学級担任時) ・保護者や地域と連携し、児童を育てるための、教師としての心得や、保護者の苦情などを学級や学校づくりに生かす方法について (教育実習部担当時)
(2)大阪府下の小学校教員の指導力向上のための研修の指導助言	平成 21 年 8 月 【1 回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業 (地域貢献部門) の一環として実施した。目的は、大阪府下の教員の指導力向上である。 「観察・実験のアイデア! 高学年理科」、の内容で指導し具体的な実験の指導ポイントは好評であった。「予備実験の重要性に対する意識の向上」「理科に対する苦手意識の低下」に焦点を当てた指導を行った。指導の結果、理科授業に対する苦手意識がなくなったという受講者が多数であった。 (対象者: 大阪府下小学校教諭 20 名)
	平成 22 年 8 月 【2 回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業 (地域貢献部門) の一環として、昨年度に引き続き実施した。目的は、大阪府下の教員の指導力向上である。 「はじめての理科指導! 安心安全理科実験基礎講座 (初級編)」「理科実験基礎講座 (中級編)」の指導を行った。理科教育の苦手な教員が多い中、安全面に視点を置いた研修は歓迎された。観察・実験における留意点や基本的な実験器具の使い方、理科室および理科準備室の環境整備、教科書に載っていない効果的な実験方法、科学クラブで楽しめるネタなど、観察・実験の充実を目的としている。 (対象者: 大阪府下小学校教諭 20 名)
	平成 23 年 8 月 【3 回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業 (地域貢献部門) の一環として、連続講座 3 回目を実施した。目的は、大阪府下の教員の指導力向上である。 「初心者向け 観察・実験基礎講座」「子どもの科学的な見方や考え方を深める授業づくり」の指導を行った。「初心者向け 観察・実験基礎講座」は、安全面に視点を置いた研修である。具体的には、観察・実験における留意点や基本的な実験器具の使い方、理科室および理科準備室の環境整備、教科書に載っていない効果的な実験方法を指導し、参加教員の理科授業での観察・実験の充実を目的としている。「子どもの科学的な見方や考え方を深める授業づくり」は、子どもの目の付け所に着目した理科の授業づくりの研修である。具体的には、理科の内容で、子どもが興味するところを分析すること及び教材の特質を分析することの重要性を、授業実践を例にしながら指導した。研修参加者にとって、明日からの授業にとって有意義な研修となった。 (対象者: 大阪府下小学校教諭 20 名)

	平成 24 年 8 月 【4 回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として、連続講座 4 回目を実施した。目的は、大阪府下の教員の指導力向上である。 「科学的な見方や考え方を深める授業づくり」をテーマに研究を行った。子どもの自然の事物・現象に対する見方や考え方を科学的なものに変容させるための授業づくりの考え方や授業実践例を紹介することで、理科の授業力向上を目的としている。「子どもが主体的な問題解決を行う理科の授業づくりには、児童分析と教材分析が必要不可欠であることを実感したこと」「単元および本時の授業後の子どもの姿を設定したうえで授業づくりを行うことの重要性」を論じた。結果、深い教材分析と的確な児童理解の重要性を受講生は理解することができた。 (対象者：大阪府下小学校教員約 20 名)
(3) 大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」 実地講師としての授業を担当	平成 23 年 4 月 ～平成 24 年 3 月 【1 年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において、「高学年の理科指導」をテーマとして、授業づくり、児童分析、教材分析についての講義、授業実践の紹介、模擬授業を行った。具体的には、6 年生の「水溶液の性質」の授業実践例を、子どもの具体のノート記録を例に挙げながら、具体的な教材分析の仕方やノートの評価の仕方についても触れながら紹介した。6 年生「もののめえ方」の単元で、見えない空気の流れに子どもが注目する導入時のアイデアを紹介した。具体例を多く取り入れたため、理科の授業に対する見方が変わった学生が多かった (受講者：大阪教育大学 3 回生および 4 回生を中心に約 60 名)
	平成 24 年 4 月 ～平成 25 年 3 月 【2 年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において、「高学年の理科指導」をテーマとして指導した。まず高学年児童の発達段階と学習の特徴を説明した。さらに、授業づくり、児童分析、教材分析、及び目標と評価の観点についての講義を行った。授業実践の紹介とともに、模範授業も行った。具体的には、6 年生の「もののめえ方」の授業実践例について、子どもの具体のノート記録を例に挙げながら、教材分析の仕方やノートを評価する方法や視点について紹介した。5 年生「メダカのたんじょう」の単元では、子どもが「メダカを観察したい。」という願いをもつ導入時の授業を紹介した。授業実践例や模範授業を多く取り入れ、子どものノート記録も多数紹介したため、教育実習前の学生にとり、小学校現場での理科の授業や子どもの反応やその評価についてのイメージを持つことができ、有益な講義となった。 (受講者：大阪教育大学 3 回生および 4 回生を中心に約 60 名)
	平成 25 年 4 月 ～平成 26 年 3 月 【3 年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において、「高学年の理科指導」をテーマとして、授業づくり、児童分析、教材分析及び評価の観点とその手立てについての講義を行った。高学年児童の発達と学習傾向について説明した。さらに授業実践の紹介、模擬授業(単元はメダカ、豆電球)を行った。「知っているのにメダカが描けない」、「リード線付きソケットがなくなっただけで、豆電球に明かりをつけることができない」この事実気付かせたりする事例を紹介した。学生からは、「従来のメダカの見方が変わった。」「教材として豆電球の教育的な価値が分かった。」といった声が聞かれた。これにより深く幅広い教材分析や事前の予備実験の重要性を十分に理解した学生が多数であった。 (対象者：大阪教育大学 3 回生および 4 回生を中心に約 60 名)

平成 26 年 4 月 ～平成 27 年 3 月 【4 年目】		大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において、「小学校理科授業の実際」をテーマとして、模擬授業や実践事例の紹介を通して、児童分析、教材分析、評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では、リード線付きソケットを使わずに豆電球に明かりを付けることから、「見えない部分も含めて一続きの回路になっている」ことを理解させること、実践事例の紹介では、子どもの目線を動かすような課題設定や支援によって子どもの学びは深まることを指導した。学生からは、「目線が変わるだけで、ものの見方が変わることがわかった。」「自分たちが活動することで、学びがこれほど違うのかと驚きました。」などといった感想を得た。これらから、児童理解と教材分析をもとにした授業づくりの重要性を理解した学生が多数であったと言える。 （対象者：大阪教育大学 3 回生および 4 回生を中心に約 60 名）
平成 27 年 4 月 ～平成 28 年 3 月 【5 年目】		大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において、「小学校理科授業の実際」をテーマとして、模擬授業や実践事例の紹介を通して、児童分析、教材分析、評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では、何も見ずにメダカを描かせることから、「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では、ゴムの働きの学習における子どもの目線の変化を根拠に、児童分析と評価の方法について言及した。学生からは、「教師の教材研究や児童理解がどれほど重要かを再確認できた。」「子どもに新しい視点を、教師がいかに与えるかが大切だと思った。」などの感想を得た。これらから、児童分析、教材分析、評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者：大阪教育大学 3 回生および 4 回生を中心に約 60 名）
平成 28 年 4 月 ～平成 29 年 3 月 【6 年目】		大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において、「小学校理科授業の実際」をテーマとして、模擬授業や実践事例の紹介を通して、児童分析、教材分析、評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では、何も見ずにメダカを描かせることから、「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では、子どもに観察をさせる時の指導内容を紹介し、その後子どもがかいた観察記録を紹介した。また、数名の子どもの観察記録の変容から、観察時に必要な指導方法について言及した。学生からは、「子どもの記録の何を評価するかで、子どもの記録のかきぶりがこれほど変わるのかと驚いた。」「つい、何も指導をせずに観察記録をかきなさいと伝えてしまいがちになるが、教師の指導によって子どもの学びがこれほど深まるのかと感心した。」などの感想を得た。これらから、児童分析、教材分析、評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者 大阪教育大学 3 回生および 4 回生を中心に約 60 名）

	平成 29 年 4 月 ～平成 30 年 3 月 【7 年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において、「小学校理科授業の実際」をテーマとして、模擬授業や実践事例の紹介を通して、児童分析、教材分析、評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では、何も見ずにメダカを描かせることから、「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では、子どもに観察をさせる時の指導内容を紹介し、その後子どもがかいた観察記録を紹介した。また、数名の子どもの観察記録の変容から、観察時に必要な指導方法について言及した。学生からは、「体験授業を通して自分の記録の書きぶりが変わったことから、子どもの記録のかきぶりも変わることに納得した。」「どの単元でも指導者の綿密な指導計画や準備があるからこそ、子どもの学びにつながることを理解した。」などの感想を得た。これらから、児童分析、教材分析、評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 (対象者 大阪教育大学 3 回生および 4 回生を中心に約 60 名)
(4)伊丹市立有岡小学校での指導講師	平成 24 年 4 月 ～平成 25 年 3 月 【1 年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～問題解決学習における言語活動の系統性を考える～」という研究テーマのもとで、理科、生活科の教科研究および提案授業についての指導を行った。計画的継続的に年間 5 回（提案授業の指導講評 3 回、夏期研修会での内容および 2 学期以降の授業指導案の指導 1 回、年度末の研究の成果と課題についての指導講評 1 回）の指導を行った。当時の有岡小学校の教員は「言語活動＝話し合い活動もしくはワークシートへの記録」と言語活動を間違っている傾向が強かったが、「体験活動の充実がなければ言語活動の充実はあり得ないこと」「言語活動は単元や本時の授業の目標ではなく、思考のツールである」ことを指導した。体験活動と言語活動の双方向的な学習効果について指導し、授業での言語活動が、価値ある体験活動に裏付けられたもの変わっていった。 (対象者：伊丹市立有岡小学校教員約 40 名)
	平成 25 年 4 月 ～平成 26 年 3 月 【2 年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～体験活動を通して問題解決学習における言語活動の系統性を考える～」理科、生活科の教科研究および提案授業についての指導を行った。年間 7 回（提案授業の指導講評 3 回、年度初めの研究の方向性についての指導 1 回、夏期研修会での研究の内容および 2 学期以降の授業指導案の指導 1 回、伊丹市教育委員会指定の研究発表会での指導講評 1 回、年度末の研究の成果と課題についての指導講評 1 回）の指導を行った。指導の内容としては、子どもの思考が働くきっかけである体験活動の充実の必要性、授業後の具体の子どもの姿（発言、ノート記録など）を具体化してからその姿に変容させるための手立てを考えることの 2 点である。指導の結果として、「子どもの思考を働かせるきっかけとなる体験活動の充実を意識した授業提案が大幅に増えたこと」「形式的な言語活動が授業場面で減少したこと」「単元や本時の授業の目標を具体化して授業案を立てられる教員が増えたこと」が挙げられる。 (対象者：伊丹市立有岡小学校教員約 40 名)

平成 26 年 4 月 ～平成 27 年 3 月 【3 年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～自分の考えを持つための問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間 5 回（提案授業の指導講評 3 回，夏期研修会での研究の内容および 2 学期以降の授業指導案の指導 1 回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評 1 回）の指導を行った。今年度の指導の内容は，「子ども一人一人の生活経験や学習経験によって，子どもの自然の事物・現象を見る目は決まっていること」「その決まっている目線をずらすことで，子どもの問題意識は生まれること」「思考の多様な表現方法の意味付けや価値付けを指導者が的確に行うことで，子どもの学習に対する意欲はさらに高まり，子どもが主体的な問題解決に取り組むことができるようになること」の 3 点である。指導の結果として，「児童の実態を詳細に記録した学習指導案が多くなったこと」「授業時の子どもの姿やノート記録をもとにした討議を行うことが定着したこと」「子どもの意見や疑問をもとに授業を進める場面が研究授業において多く見られるようになったこと」が挙げられる。 (対象者：伊丹市立有岡小学校教員約 40 名)
平成 27 年 4 月 ～平成 28 年 3 月 【4 年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間 5 回（提案授業の指導講評 3 回，夏期研修会での研究の内容および 2 学期以降の授業指導案の指導 1 回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評 1 回）の指導を行った。今年度の指導の内容は「子どもに伝え合い深め合わせるためには，『ホンネの問題意識』を持たせる必要があること」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」の 2 点である。指導の結果として，『『ホンネの問題意識』を持たせるような事象の出会い合わせ方の工夫が多数見られたこと」「その工夫により子どもが自然と自らの伝え合うことができるようになったこと」が挙げられる。 (対象者：丹市立有岡小学校教員約 40 名)
平成 28 年 4 月 ～平成 29 年 3 月 【5 年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間 5 回（提案授業の指導講評 3 回，夏期研修会での研究の内容および 2 学期以降の授業指導案の指導 1 回，年度末の研究発表会での指導講評 1 回）の指導を行った。今年度の指導は，「子どもに伝え合い深め合わせるためには，『ホンネの問題意識』を持たせる必要があること」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」「その意味付けや価値付けを板書などでどのように可視化するかということ」「伝え合い深め合えるツールの活用法」の 4 点である。指導の成果として，年度末の研究発表会で，板書やホワイトボードを思考の可視化のためのツールとして活用した生活科の授業，「ホンネの問題意識」を誘発する理科の授業，各グループの実験データを根拠に深め合う理科の授業を公開することができたことが挙げられる。 (対象者：伊丹市立有岡小学校教員約 40 名)

	平成 29 年 4 月 ～平成 30 年 3 月 【6 年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い、深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間 5 回（提案授業の指導講評 5 回）の指導を行った。今年度の指導は、「子どもが主体的に伝え合い深め合えるような環境構成の仕方」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように、指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」の 2 点である。指導の成果として、内容の系統性をふまえた「学習マップ」を作成できたことや、発達段階や学習内容に応じたグループ学習を実践できたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約 40 名）
	平成 30 年 4 月 ～平成 31 年 3 月 【7 年目】	自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い、深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間 6 回（提案授業の指導講評 6 回）の指導を行った。今年度の指導は、「子どもが主体的に問題解決や課題解決を行うことができる授業デザインのあり方」「子どもが自ら問題解決や課題解決に向かえる教師の形成的評価のあり方」の 2 点である。指導の成果としては、昨年度の成果として挙げられた学習マップを子どもの学びの自覚化を促進させるものに改編できたこと、子どもの気付きや考えをつなぐ教師の発言のあり方について教職員全員で学び合えたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約 40 名）
(5)大阪府下の小学校教員の自由研究指導力向上のための研修の指導助言	平成 25 年 6 月 【1 年目】	大阪府教育センター主催の「自由研究指導力向上研修」で講話を行った。講話の内容は「自由研究の指導につながる理科の授業づくり」である。講話の目的は、日々の理科と自由研究を別物と考えるのではなく、日々の理科の授業を充実させることで、子どもが質の高い自由研究を行うことができるようにすることである。研修の結果として、「日々の授業で問題解決の道筋を子どもにたどらせることを繰り返すことが自由研究の質の向上につながることを参会者が実感したこと」が挙げられる。 （対象者：大阪府下小学校教員約 30 名）
	平成 26 年 6 月 【2 年目】	大阪府教育センター主催の「自由研究指導力向上研修」で講話を行った。講話の内容は「自由研究の指導につながる理科の授業づくり」である。講話の目的は、日々の理科の授業内容を充実させることで、子どもが質の高い自由研究を行うことを論じた。研修後「子どもの素朴な見方や考え方の分析の重要性」「日々の授業で問題解決の道筋を子どもにたどらせることを繰り返すことが自由研究の質の向上につながること」の 2 つを参会者が実感した。 （対象者：大阪府下小学校教員約 30 名）
(6)大阪教育大学 C S T 養成プログラム 実地講師	平成 25 年 8 月 【1 回目】	大阪教育大学科学教育センターが主催する C S T（コアサイエンスティーチャー）養成プログラムの学生プログラムである「理科教育法Ⅱ」で講義を行った。「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業」をテーマとし、中学年の授業づくり、児童分析、教材分析についての講義、授業実践の紹介、模擬授業を行った。結果、理科に関わる知識だけでなく、具体的子どもの姿をイメージできるようになったと好評であった。 （対象者：C S T 養成プログラム受講学生約 10 名）

	平成 26 年 3 月 【2 回目】	大阪教育大学科学教育センターが主催する C S T（コアサイエンスティーチャー）養成プログラムの学生プログラムである「理科教育法Ⅱ」で講義を行った。「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業」をテーマとし、高学年の授業づくり、児童分析、教材分析についての講義、授業実践の紹介、模擬授業を行った。結果、理科内容に対する深い理解のみならず、学習者の姿をイメージし教え込みではない理科の授業の魅力を感じることができたりした学生が大勢であった。 (対象者：C S T 養成プログラム受講学生約 1 0 名)
(7) 大阪教育大学教育学部「教職入門」実地講師	平成 26 年 7 月	大阪教育大学教育学部「教職入門」において、「理科を教える教師としての資質」をテーマとして、理科教師として学ぶこと、教育実習生を指導して感じたことを話した。さらに理科の目標内容とそのための授業づくりおよび実践事例についての講義を行った。特に、授業づくりおよび実践例では、小学校理科で取り扱う教材を学生一人一人に使用させ模擬授業を体験させた。その体験をもとに、実際の授業での子どもの様子を写真で紹介したり、ノート記録をもとに評価基準や評価方法を紹介したりした。指導の結果、「現場経験のある先生の授業は参考になる」「もっと実際の授業を受けて学びたい」「子どもの思考を姿やノート記録から教師が的確に見取り評価することがどれだけ重要かを実感した」などの声が多数挙がった。 (受講者：大阪教育大学 1 回生約 6 0 名)
(8) 教育課題研修指導者海外派遣プログラム 事前研修	平成 26 年 8 月	和泉市立国府小学校教諭として、独立行政法人教員研修センター主催の平成 2 6 年度教育課題研修指導者海外派遣プログラム事前研修に参加した。研修派遣先は、フィンランドである。派遣団の研究テーマは「P I S A 型学力の育成について」である。その中でも「科学的リテラシーを育成するための理科授業のデザイン」の研修を進める班に所属することとなった。本事前研修では、フィンランドの教育システムや現在の課題のみならず、日本の教育システムと比較しつつ視察するべき理科教育の項目をまとめた。さらに、研修報告書のまとめ方などの講義を受けた。
(9) 教育課題研修指導者海外派遣プログラム 海外研修参加 (独立行政法人教員研修センター主催)	平成 26 年 10 月	平成 2 6 年 1 0 月 1 4 ～ 2 5 日の間、和泉市立国府小学校教諭として、「P I S A 型学力の育成について」をテーマに、フィンランドでの海外研修に参加した。現地での主な研修先は、国家教育局、ユバスキュラ大学附属学校園、ヘルシンキ大学附属学校園および教員養成実習校など、計 1 2 カ所の機関および学校園である。研修先では、主に理科の授業見学と授業担当教員へのインタビューを行った。本研修で明らかになったことは、日本の学習指導要領は世界でも誇れる素晴らしい物であること、フィンランドでの I C T 活用の授業のレベルが高いこと、I C T に頼りすぎて本来授業で大切にすべき教材分析や板書、支援が十分に行われていないことなどが明らかになった。

(10) 伊丹市立有岡小学校初任者研修講師	平成 27 年 9 月	伊丹市立有岡小学校において、「理科室の環境整備と授業づくりの基本」というテーマで、平成 27 年度に採用された初任者に対して、理科室の環境整備、安全面の指導、授業づくりについて指導した。特に、安全面の指導では、中村重太の「自作 hazards drawing による児童・生徒の加熱実験操作に関する安全意識調査」で使用された図を用いて、安全指導が必要な部分を指摘させた。また、授業づくりの基本では、リード線付きのソケットを使用せずに豆電球に明かりを付ける活動から、絶縁体の価値、リード線付きソケットの構造と豆電球の構造の関連性について講義した。結果、「指導者として見えていないものへの安全意識も持つことが大切であることがわかった」「指導者が教材について深く理解することが子どもを引きつける授業に繋がることがわかった」などの感想を得られた。 (対象者：伊丹市立有岡小学校新任教員 4 名)
(11) 「保幼小接続期モデルカリキュラム(第 2 期)」検証のための幼稚園公開保育の指導講師	平成 28 年 2 月	伊丹市立こうのいけ幼稚園において行われた「保幼小接続期モデルカリキュラム(第 2 期)」アプローチカリキュラムに基づいた公開保育及び研究討議における指導講話を行った。指導の内容としては、「子どもの多様な気付きを誘発したり、思いや願いに向けて子どもがすぐに働きかけたりすることができる環境構成の重要性」「子どもの行動や発言他者とのつなげる支援の重要性」の 2 点である。これらを公開保育で見られた具体的な事例を根拠として述べた。指導の結果として、「生活科の学びは保育園や幼稚園のそれと繋がっており、保育から学んでいかなければならないと実感した小学校教員が増えたこと」「小学校での学びを見据えた保育が必要であると考えた保育園や幼稚園の教員が多数見られた」ことが挙げられる。 (対象者：伊丹市内の小学校教員、公立および私立幼稚園教職員、保育所職員、こども園職員 約 70 名)
(12) 八尾市立八尾小学校での指導講師	平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月【1 年目】	「アクティブ・ラーニングの実現に向けて」というテーマをもとに指導を行った。年間 5 回(夏季研修での指導講話 1 回、研究授業の事前指導及び事後指導を 3 回、年度末の研究の成果と課題についての指導講話 1 回)の指導を、理科と算数科を中心に行った。指導の内容としては、子どもの思考が働くきっかけである課題設定の重要性、課題設定のための教師の教材分析と内容の系統性の分析の 2 点である。指導の結果として、「教材の特性や内容の系統性を踏まえた課題設定を授業のきっかけとして提示する授業が増加したこと」「展開部分での子どもへの形成的評価の必要性に気付く教員が出てきたこと」が挙げられる。 (対象者：八尾市立八尾小学校教員約 40 名)
	平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月【2 年目】	「アクティブ・ラーニングの実現に向けて」というテーマをもとに指導を行った。年間 7 回(年度初めの指導講話 1 回、各学年の研究授業の指導講話 6 回)の指導を、理科と算数科を中心に行った。指導の内容としては、子どもの思考をつなぎ広げる指導者の役割、子どもの思考が表出するノートやワークシートの活用法の 2 点である。指導の結果として、「内容ではなく学び方を教える重要性」や「ノート記録の形成的評価やそれを考察部分で活用することの重要性」に気付く教員が出てきたことが挙げられる。 (対象者：八尾市立八尾小学校教員約 40 名)

	平成30年4月 ～平成31年3 月【3年目】	「子どもたちの考えをつなぎ・深める授業のあり方～自己の学びを見通し、振りかえることを大切に～」というテーマをもとに指導を行った。年間6回（各学年の研究授業の指導講話6回）の指導を行った。指導の内容としては、子どもの主体的な学びを保証する授業デザインについて、子どもの思考をつなげる形成的評価のあり方の2つである。指導の結果として、本時レベルだけでなく単元レベルでの授業分析が授業等議会で多く発言されたこと、教師のつなぐ発言や子どもに繰り返し発言を求める教師の姿が授業内で多く見られたことが挙げられる。 (対象者：八尾市立八尾小学校教員約40名)
(13) 第49回全国小学校理科研究大会大阪大会分 科会指導講師	平成28年11 月	堺市立浜寺石津小学校で行われた、第49回全国小学校理科研究大会大阪大会の代4学年分科会において、研究授業3本と実践報告2本の指導講評を行った。指導の内容としては、季節による動植物のくらしでは、季節ごとの気温や日照時間の変化と動植物のくらしを関連付ける指導の在り方について述べた。また、空気や温度変化など目に見えないものを扱う単元では、それらをイメージ図等で可視化しながら学習を進めていくことの重要性について述べた。参会者からは、グラフ化やサーモグラフィ画像など、可視化することの効果を感じられる実践発表や指導であったので、大変勉強になった。」「地域ごとによる夏の気温の上がり方の違いもあり、大阪府内と他の地域での学習のさせ方の違いを知ることができ、今後の指導の参考になった。」などという意見が多数挙がった。 (対象者 第49回全国小学校理科研究大会大阪大会 第4学年分科会 参会者 約40名)
(14) 公私立幼稚園・こども園・保育所(園)共同 研究会講師	平成29年1月 【1年目】	伊丹市立中央公民館で行われた第4回公私立幼稚園・こども園・保育所(園)共同研究会において、「次期学習指導要領に向けた就学前教育と小学校教育の滑らかな接続について」という演題で講演を行った。講演の内容として、伊丹市立有岡小学校で行われた生活科の授業をビデオで流し、対象授業を根拠として、子どもの学びの環境構成のあり方について講義をした。また、参会者にもグループ討議を行ってもらい、所属する校園の違いによる環境構成の考え方の違いから、保幼小の3校園の接続を念頭に置いた環境構成のあり方について考えてもらった。講演の成果として、「幼稚園や保育園の保育の実態を踏まえた生活科の授業づくりの重要性を実感した。」「小学校への接続や生活科と保育の系統性について改めて考えるいい機会となった。」という保育士や幼小教員の振り返りから、保幼小の接続期において、それぞれの校園での連携の重要性について気付いた保育士や教員が多数いたことが挙げられる。 (対象者：伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員 約70名)

	平成 30 年 2 月 【2 年目】	伊丹市立中央公民館で行われた第 5 回公私立幼稚園・こども園・保育所（園）共同研究会において、「就学前教育と小学校教育の滑らかな接続について～幼児期の終わりまでに育ってほしい姿～」という演題で講演を行った。講演の内容として、伊丹市立有岡小学校で行われた理科や生活科の授業実践から小学校教育での環境構成の有効性を論じると共に、保幼小の教育を滑らかに接続するために必要な条件や取り組みについて講義をした。また、参会者にもグループ討議を行ってもらい、所属する校園の違いによる環境構成の考え方の違いから、保幼小の 3 校園の接続を念頭に置いた環境構成のあり方について考えてもらった。「時間の無い中でも幼保の保育について学んで行かねばならないと感じた。」「幼稚園で行っている環境構成が小学校でも効果的であることを知って、さらに充実した実践を行っていこうと思うことができた。」という保育士や幼小教員の振り返りから、参会した保育士や教員によって学びのある会になったことが伺える。 （対象者：伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員 約 70 名）
(15) 伊丹市立有岡小学校研究発表会講演講師	平成 29 年 2 月	伊丹市教育委員会指定 平成 28 年度伊丹市立有岡小学校研究発表会において、「次期学習指導要領で求められる小学校理科・生活科の授業～有岡小学校の授業研究と「アクティブ・ラーニング」の視点から～」という演題で講演を行った。講演の内容として、平成 28 年 12 月の中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」の内容と登壇者の過去の授業実践を根拠に，次期学習指導要領で求められる小学校理科・生活科の授業像，およびその授業に必要な教師の指導の在り方について言及した。参会者のアンケートから「次期学習指導要領で求められる授業の具体が分かった。」「新学習指導要領が実施する前から授業の改善に取り組む必要性を十分に感じた。」といったアンケートの内容から，参会者の次期学習指導要領改訂に向けての学びが充実していたことが明らかとなった。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教職員，伊丹市内の学校教職員，伊丹市外の学校教職員，約 200 名）
(16) 伊丹市立ありおか幼稚園園内研究会指導講師	平成 29 年 3 月	「育ちと学びをなめらかにつなげる幼小接続～自然科学の分野に視点をあてて，遊びの中で学びを深めていくための環境構成を探る～」という研究テーマのもとで指導を行った。指導の内容としては，「保育の学びと生活科・理科の学びの関連」「生活科・理科の環境構成から見る保育の環境構成の意義」の 2 点である。指導の結果として，「保育と小学校教育の関連に気付いた教員が出てきたこと」「教員が現在行っている保育実践の意味や価値に気付けたこと」が挙げられる。 （対象者：伊丹市立ありおか幼稚園教員 6 名）
(17) 八尾市立亀井小学校での指導講師	平成 30 年 11 月	八尾市立亀井小学校において、理科の研究指導を行った。研究授業の指導講評の他、子どもの「ホンネの問題意識を生み出す授業デザイン」をテーマとして講演を行った。 （対象者：八尾市立亀井小学校教職員約 40 名）

(18) 第27回大阪府小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会研究大会中河内大会の事前の研究指導講師	平成30年9月～(継続中)	平成31年10月31日に八尾市立高安小学校で実施される第27回大阪府小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会中河内大会の総論、および授業研究の指導を行っている。平成30年度は「主体的・対話的で深い学びを目指す授業づくり」についての講演を2回、総論の内容指導を2回、研究授業の指導講評を1回行った。平成31年度も継続的に指導を行う予定である。
5 その他 (1)大阪教育大学教育学部における非常勤講師としての教育実績 「初等理科授業研究」担当	平成24年4月～平成25年3月	大阪教育大学教育学部の非常勤講師として担当の「初等理科授業研究」(専門科目, 3年次配当, 半期, 選択2単位)において, 小学校学習指導要領解説理科編の目標および内容についての講義, 学習指導案の書き方についての講義, 理科の教材研究と授業づくりの講義および実践事例の紹介, 学生による模擬授業の指導案検討および授業討議会の実施とその指導を行い, それによって, 教育実習を控えた学生に学習指導案の書き方, 理科の授業づくり(児童分析, 教材分析も含む)および授業分析の仕方を理解させる教育効果があった。
	平成25年4月～平成26年3月	大阪教育大学教育学部の非常勤講師として担当の「初等理科授業研究」(専門科目, 3年次配当, 半期, 選択2単位)において, 理科の教材研究と授業づくりの講義および実習, 学生による模擬授業の実施及び授業討議会での指導を行った。具体的には, 授業で使用する教材を実際に作り, それを使った模擬授業をさせることで, 教材の課題, 板書や発問, 支援などの課題を討議によって明らかにさせた。このような講義を通して, 学生は教材分析の重要性や子どもに合った支援を行うことの重要性を理解することができた。
職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 (1)小学校教諭1種免許状 (2)中学校教諭1種免許状家庭 (3)高等学校教諭1種免許状家庭 (4)小学校教諭専修免許状	平成14年3月 平成14年3月 平成14年3月 平成29年3月	平13小1第2367号(大阪府教育委員会) 平13中1第2474号(大阪府教育委員会) 平13高1第2633号(大阪府教育委員会) 平28小専第13号(大阪府教育委員会)
2 特許等 特記事項なし		
3 実務の経験を有する者について特記事項 (1)大阪教育大学 科学教育プロジェクト 実施委員	平成23年4月～平成24年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校のプロジェクト実施委員として, 理科室および理科準備室の実験器具の充実や環境整備, 二次元バーコードによる理科のノートデータの集積等に携わった。具体的には, 理科室および理科準備室の充実や環境整備として, 授業収録システムの導入, 超音波洗浄機, 大型乾燥機(実験器具用)の導入に携わった。また, 子ども一人一人の二次元バーコードを作成し, それを専用スキャナーで読み取ることで, 子ども全員の全てのノートデータを専用サーバーに蓄積することができた。

	平成 24 年 4 月 ～平成 25 年 3 月	大阪教育大学附属天王寺小学校のプロジェクト実施委員として、理科室および理科準備室の実験器具の充実や環境整備に携わった。実験器具の充実では、高さ 1.5 m のアクリルパイプを 10 本用意し、食塩の結晶 1 粒がどのように水に溶けるかを観察できるようにしたり、重い石と軽い砂の沈み具合の違いや地層のでき方を観察できるようにしたりした。環境整備としては、理科室への書画カメラ、スマートボードの導入およびその管理、子ども用いすの新調などに携わった。
(2) 大阪教育大学附属天王寺小学校 理科主任	平成 24 年 4 月 ～平成 25 年 3 月	大阪教育大学附属天王寺小学校の理科主任として、理科教材の開発を行った。また授業でイメージを使った思考の場を取り入れて子どもの思考の可視化を図り、それをもとにした教師の支援や形成的評価を充実させることで、子どもの科学的な見方や考え方を育む授業研究および実践に取り組んだ。その結果、理科部全体で、単元の学習を通して育みたい子どもの見方や考え方を設定した上での授業計画や実践を行うことができるようになり、授業時の板書や支援が子どもの実態に即したものが増えた。子どもの理科学習に対する興味・関心を高めたり、科学的な思考・表現を深めたりすることができた。理科主任として低学年生活科の気づきと 3 年生からの理科の科学的思考や知識理解の接続についてまとめることに貢献した。
	平成 25 年 4 月 ～平成 26 年 3 月	大阪教育大学附属天王寺小学校の理科主任として、理科部の若手教員の育成に取り組んだ。具体的には、週 1 回の教科論に関わる文献の輪読会の開催、月 1 回の若手教員が行う授業見学とその事後指導を、年間を通じて行った。その結果、若手教員の文献を読む力がつくとともに、主任と部員が同じ方向性を持って日々の授業研究および実践を行うことができるようになった。学年の異なる理科担当者同士で学習指導要領を学び、目標や内容の系統性を確認し合った。さらには、本年度の研究発表会では、「いい提案授業であった。」「こんな理科の授業を見せてもらえるなら来年もぜひ来たい。」といった高い評価を受けた。
(3) 大阪教育大学附属天王寺小学校 第 3 学年主任	平成 25 年 4 月 ～平成 26 年 3 月	学年の主任として、学年全員に「規律」「素直」「努力」の 3 つのキーワードを示して、学年全体経営、授業改善および生活指導にも取り組んだ。定期的に学年教材研究日を設ける等、教師としての資質を高める指導を行った。その結果、学年全体の子どもは落ち着いて授業を受けられるようになるとともに、保護者からの学校および学年教員団への信頼も大きくなった。
4 その他 特記事項なし		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 天王寺教育ノート 第130号	共著	平成21年9月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	新学習指導要領を理解するために、現行の教育課程を振り返り、成果と課題をまとめたもの。 B5判 全72頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩崎由紀夫，山手隆文，石川隆之，<u>太田雄久</u>，鈴木武司，康貴利，多田和彦，小林佐知子，森元貴子，川上康之，吉門妙子，風間寛，梅井大輔，西川理嘉，中野貴之，他2名 本人担当部分 「変わるものと変わらないもの」(p6－p9)部分を単著 平成20年の学習指導要領改訂に伴い，新旧学習指導要領の理科の目標および内容についての分析を行い，理科での不易と流行についての考察を行った。具体的には，これまで大切にされてきた基礎・基本の充実はもちろんのこと，科学的な思考力・表現力と実感を伴った理解に重点を置いて授業づくりを行うことの必要性を述べた。
2. 天王寺教育ノート 第131号	共著	平成21年12月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	新学習指導要領を理解するために、現行の教育課程を振り返り、成果と課題をまとめた。 B5判 全66頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：八木義仁，片山雅夫，森保，<u>太田雄久</u>，鈴木武司，小林佐知子，康貴利，川上康之，清水大，多田和彦，川端真由子，高井大輔，河野敬重，中野貴之，他5名 本人担当部分 「アサガオの観察～アサガオを好きにさせることで気付きの質を高める～」(p46－p49)部分を単著 理科での科学的な見方や考え方の育成のために，生活科の栽培活動の気付きの質を高める必要性を述べた。気付きの質を高めるためには対象との関わりを密にすること（栽培場所や一人一鉢など），観察カードの気付きを指導者が適切に意味付けたり価値付けたりすることが重要であるということを論じた。さらに生活科の気づきと理科の接続についても述べた。
3. 天王寺教育ノート 第133号	共著	平成22年6月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成22年2月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践の分析集である B5判 全84頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩崎由紀夫，山手隆文，石川隆之，片山雅夫，森保，<u>太田雄久</u>，鈴木武司，清水大，多田和彦，小林佐知子，森元貴子，高井大輔，吉門妙子，風間寛，他8名 本人担当部分 5年理科「電磁石のはたらき」(p44－p47)を単著 「電磁石のはたらき」の授業についての実践の振り返りとして分析と考察を行った。本授業で明らかになったことは，問題解決でのきっかけにあたる，自然の事物・現象への働き

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				かけから仮説設定までのイメージ思考の充実が重要であること。観察・実験を通して行われる考察時に、イメージの価値付けや意味付けにつながるということである。
4. 天王寺教育ノート 第135号	共著	平成23年2月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科の特性をふまえて、子どもの発想や教材の本質にせまるための「板書・ノート指導」をまとめたもの。 B5判 全66頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩崎由紀夫, 石川隆之, 森保, <u>太田雄久</u>, 清水大, 小林佐知子, 森元貴子, 吉門妙子, 川上康之, 高井大輔, 三浦聡子, 山本岳大, 那賀典仁, 梶井大輔 本人担当部分 「科学的な見方や考え方を養う授業～6年『てこの規則性』より～」(p36～p41)を単著 本研究の目的は、「科学的」の根拠である「実証生」「再現性」「客観性」を子どもが意識するような授業を実践することで、子どもの科学的な見方や考え方を育む効果的な指導手立てを明らかにすることである。明らかになったことは、手ごたえという個人差の大きい感覚をあらわすために、重さという客観的な数値を用いることの有効性を子どもに感じさせることである。
5. 天王寺教育ノート 第136号	共著	平成23年7月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成23年2月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践分析集である。 B5判 全87頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩崎由紀夫, 八木義仁, 山手隆文, 藤倉憲一, 稲葉正治, 森保, <u>太田雄久</u>, 鈴木武司, 多田和彦, 小林佐知子, 高井大輔, 森元貴子, 康貴利, 吉門妙子, 他8名 本人担当部分 6年「発電と電気の利用」(p32～p35)の部分単著 平成23年2月に行われた大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての実践報告および分析, 考察を行った。本授業で明らかになったことは、子どもが主体的な問題解決に取り組むためには、子どもが「何とかして知りたい。」「絶対にこの課題の答えを知りたい。」というような気持ちをもつために、導入時の指導者の課題設定や発問が重要であるということである。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
6. 天王寺教育ノート 第137号	共著	平成 23 年 10 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	学習指導要領完全実施による, 子どもの変容とどのように変えようとしているのかを各教科等で述べた。 B5判 全81頁 編者: 大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者: 早草寛, 山田良則, 服部敬一, 三島公德, 八木義仁, 山手隆文, 森保, 太田雄久, 鈴木武司, 多田和彦, 康貴利, 森元貴子, 風間寛, 竹上由希子, 栗生義紀, 他13名 本人担当部分 「子どもが変わる, 子どもを変える『科学的な表現力に着目して』(p14-p15)の部分」を単著 新学習指導要領で, 理科で子どもをどのように変えるのか, また子どもの変容の過程を, 授業実践を通して分析および考察を行った。評価の観点である「表現」が「科学的思考・表現」になったことで, 子どもの思考を表現活動によって可視化することが授業で多く取り入れられるようになったこと, また子どもが思考の可視化によって, 自分と他者の考えの比較を容易に行えるようになったことを述べた。
7. 天王寺教育ノート 第139号	共著	平成 24 年 7 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成 24 年 2 月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践の分析集である。 B5判 全78頁 編者: 大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者: 上東章, 前田三男, 八木義仁, 大仲政憲, 石川聡子, 森保, 太田雄久, 鈴木武司, 小林佐知子, 多田和彦, 松山雅子, 高井大輔, 森元貴子, 手取義宏, 吉門妙子, 柳本朋子, 竹上由希子, 石川聡子, 小島律子, 他18名 本人担当部分 「創造性を育成する理科の授業 5年『もののとけ方』の部分(p26, p31-p32)」を単著 大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての理科教科論と授業実践報告および分析, 考察を行った。明らかになったことは, 授業で子どもにイメージ図をかかせる活動を取り入れることで, 子どもの感性の働きを指導者が適切に見取ることができるようになったことである。イメージ図の教育的効果を明らかにした。
8. 天王寺教育ノート 第140号	共著	平成 24 年 10 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科・領域の視点から, 言語活動の充実について述べた。 B5判 全81頁 編者: 大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者: 八木義仁, 山手隆文, 森保, 太田雄久, 鈴木武司, 小林佐知子, 吉門妙子, 森元貴子, 川上康之, 栗生義紀, 松浦宏, 木下清司, 竹上由希子, 三浦聡子, 他11名 本人担当部分 「言語活動の充実『体験活動の充実が言語活動の充実につながる』(p10-p11)の部分」を単著 理科で行われている言語活動のとらえ方とその充実の指導方法について, 授業実践をもとに

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				述べた, 具体的には, 言語活動とは子どもの思考が可視化されたものであること, 言語活動は子どもの思考が働いてこそ行われること, 子どもの思考を働かせるためには体験活動の充実が必須であることを述べた。
9. 天王寺教育ノート 第141号	共著	平成25年2月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科・領域の視点から, 言語活動の充実について述べた。 B5判 全68頁 編者: 大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者: 八木義仁, 安井義和, 山手隆文, 森保, <u>太田雄久</u> , 鈴木武司, 牧郁子, 小林佐知子, 吉門妙子, 森元貴子, 川上康之, 梅井大輔, 高井大輔, 栗生義紀, 三浦聡子, 竹上由希子, 他9名 本人担当部分 「教材・教具の話『豆電球』」(p26-p27)の部分を単著 3年生等で取り扱う豆電球についての教材分析および授業実践例を紹介した。具体的には, なぜ3年生の電気の学習では豆電球を取り扱うのかということを, 小学校理科の内容の系統性を具体的に示して述べた。そして豆電球の内側の導線のつながりを理解させることは小学校理科で電気の学習を進める導入段階としては重要であることを論じた。
10. 天王寺教育ノート 第142号	共著	平成25年7月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成24年2月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践分析集である。 B5判 全76頁 編者: 大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者: 萩原武士, 大仲政憲, 石川聡子, 田中建司, 山手隆文, 森保, <u>太田雄久</u> , 吉門妙子, 高井大輔, 栗生義紀, 松山雅子, 手取義宏, 柳本朋子, 竹上由希子, 三浦聡子, 小島律子, 佐藤賢司, 入口豊, 金光靖樹, 山本岳大, 他9名 本人担当部分 「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業3年『ものと重さ』」(p18-p20)部分を単著 大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての理科教科論と授業実践報告および分析, 考察を行った。明らかになったことは, 体験活動を充実させることで子どもが言語活動の必要性を感じることである。子どもの素朴概念と授業の目標をもとに体験活動も言語活動も「何を」「どのように」の2つの視点を明らかにして設定することが大切であると述べた。体験に支えられた言語活動の重要性を論じた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 1. 天王寺教育ノート 第 1 4 3 号	共著	平成 25 年 12 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	思考力・表現力判断力の育成には, 何を大切に, どのように取り組むかを, 各教科・領域の視点で述べた。 B 5 判 全 6 7 頁 編者: 大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者: 矢谷健一, 山手隆文, 太田雄久, 吉門妙子, 高井大輔, 竹上由希子, 井上由香里, 田村真由子, 山本岳大, 吉森久展, 梶井大輔, 浜田美和, 武智康文, 角田浩太郎, 清水貴之, 他 7 名 本人担当部分 「思考力・表現力・判断力の育成とその評価『観察での思考力・表現力の育成とその評価』(p 8 - p 9) の部分を単著 理科での思考力・表現力の育成について, 観察という授業場面に焦点をあてて考察した。明らかになったことは, 体験活動の充実と言語活動での指導者の目標に合わせた適切な意味付け, 価値付けが思考力・表現力の育成につながるとことを論じた。
1 2. 科学的な見方や考え方を育む理科授業	単著	平成 26 年 12 月	株式会社 E R P	小学校理科の目標である「科学的な見方や考え方を育む」ための理科授業づくりについて述べた。具体的な授業づくりの視点として, 「児童理解」「教材分析」「単元目標の具体化」の 3 つをキーワードとして取り上げた。「児童理解」については, 子どもの先行経験と内容の系統性をもとに, 子どもが「知っていること」「知っているつもりになっていること」「全く知らないこと」の分析を行う「診断的評価」の重要性を述べた。「教材分析」は, 教材がもつ単元目標に迫ることのできることでの特質や価値を分析する目を養うことを述べた。さらに指導計画のなかに「形成的評価」をいかし, 児童のつまずきを発見しそれを指導の改善に活かすことを主張した。「目標の具体化」については, 「統合的な評価」を行うために目標達成に至った子どもの発言やノート記録を具体化することを述べた。3 つのキーワードをもとにした小学校 3 年生「電気の通り道」, 5 年生「天気の変化」など 6 年生までの授業実践例を述べた。 A 5 判 全 5 5 頁
1 3. 人間教育を視点にした教職入門	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	人間教育に視点を当てて, 教師を目指す学生に教育学の第一歩として, 教育の目的や内容や学校組織について論じたものである。 B 5 判 2 8 0 頁 編者: 中田正浩 共著者: 中田正浩, 鎌田首治朗, 松田智子, 中田律子, 金山憲正, 瀧明知恵子, 長居勘治, 本人担当部分 (1 0 頁) 第 6 章第 2 節「小学校の学級経営」(p. 1 7 2 ~ p. 1 8 0) の部分を単著 小学校は 6 歳から 1 2 歳までと, 担当する児童の成長及び発達の幅が広い。その発達に応じた特徴を把握し, 段階に応じた学級指導について, 1 年から 6 年まで具体的に述べた。また, 小学校学級担任の一日の仕事とその経営ポイントについて具体的に述べた。さらに, 学校教育目標から学級教育目標を立てる手立

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				てについて説明し, そのモデルとし6年生の例を示した。最後にPDCAサイクルで実践する学級経営の評価の重要性を論じた 本人担当部分(10頁) 第7章第1節「小学校の生徒指導」(p. 212～p. 222)部分を単著 小学校という児童の発達年齢上, 生徒指導は保護者及び地域の人々との連携なくしては, 達成できない。また思春期の早期発達により, 小学校高学年への対応は思春期初期の独特のプライドや自尊感情を傷つけないようにしつつも, 毅然とした対応する必要性を述べた。 小学校低学年・中学年・高学年の生徒指導のポイントを述べた。生徒指導の体罰・不登校・いじめなどが小学校でどのように解決するか方策を示唆した。また小1プロブレムや中1ギャップ等への対応には接続する幼稚園・中学校との連携が, 重要であることも述べた。
14. シリーズ新時代の学びを創る5 理科 指導の理論と実践	共著	平成29年8月	あいり出版	新学習指導要領で求められる理科の指導や授業の在り方について, 大学生や現役教員に向けて, 理論と実践から論じたものである。 A5判 298頁 編者: 石川聡子 共著者: 石川聡子, 秋吉博之, 畦浩二, 平田豊城, <u>太田雄久</u> , 仲矢史雄, 川上雅之他14名 本人担当部分(10頁) 第9章「小学校の実践事例」第2節「3年生『ゴムの働き』」(p. 164～p. 172)の部分を単著 3年生「ゴムの働き」の実践事例をもとに, 新学習指導要領で求められる理科の授業づくりの在り方について言及した。具体的には, これまでの小学校理科教育で求められる不易の部分にあたる児童理解, 教材研究などは, これまで通り大切にすべきであることを述べた。それと同時に, 子どもが学ぶ内容以上に, 学習に使うツールや環境構成など, 子どもの学び方をどのように構造化するかという流行にあたる部分についても事例を通して述べた。
(学術論文) 1. 創造性を育成する理科の授業	単著	平成24年2月	大阪教育大学附属天王寺小学校『研究紀要第33巻』 p81～p84	子どもの素朴な見方や考え方を「創造性が育成された姿」に変容させるために, イメージ図などを使って自分の考えを表現する場, 新しい科学概念を転用する場を設定する授業を提案した。「診断的評価」により児童の分析を行い, 教師の教材分析その2つのズレをもと予想や仮説を立て, 問題解決毎に子ども自身に結果を省察させた。そして, 問題解決で明らかになったことが, 生活化社会化され, 別の現象を解釈する際にも有効であることに気付かせ子どもの見方や考え方を妥当性の高いものに変容することを明らかにした。本論を通して, 子どもがイメージ図を使って自分の思考を可視化する言語活動を設定することで, 指導者が的確な形成的評価が行えることを論じた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 子どもの科学的な見方や考え方を育む授業	単著	平成 25 年 2 月	大阪教育大学附属天王寺小学校『研究紀要第 3 4 巻』 p 7 1 ~ p 7 6	授業において, 子どもの経験が再構成されたり, 子どもの感性が働いたりするような, 挑戦的もしくは発見的な課題の設定について述べた。さらにそのために必要な体験活動と言語活動の充実という手立てを論じた。具体的には子ども自身に自分の立てた予想や仮説と結果を考察させ比べさせ, 問題解決についての省察を行わせるとともに, 他の児童の考え方にも触れさせることで, 新たな気付きに導くことができる実践を述べた。適切な児童分析と教材分析をもとに行った挑戦的もしくは発見的な課題の設定により, 子どもの問題意識は生まれること, それにより子どもの感性は問題解決に向けて適切に働くようになることを明らかにした。また適切な感性が働くことで, 子どもが体験活動をもとに進んで考察や省察に取り組むようになることも述べた。
3. 多面的に観察させることで, 子どもの科学的な見方や考え方を育む	単著	平成 26 年 10 月	株式会社 E R P p 2 4 ~ p 2 7	理科学習においては, 子どものこれまでの先行経験によって, 子どもの自然の事物・現象についての見方は一面的になる傾向が強い。そのためには単元導入前に「診断的評価」を行う必要がある。この子どもの見方は無意識的なものであるため, 一面的な見方を変容するには, 指導者の指導および支援が必要になる。また, その変容や指導の成果を確認するために, 指導の全体計画に「形成的評価」を適宜設定しなければいけない。3 年生の「植物の体のつくり」「昆虫の体のつくり」での子どもの観察記録の変容を例に挙げ, このような変容に至った指導者の指導や支援及び目標と評価について述べた。さらには, 観察記録の変容を指導者が的確に価値付けたり意味付けたりすることで子どもにフィードバックするなど, 「指導と評価の一体化」を図ることにより, 子どもの観察する視点を多面的・科学的なものに変容させることができることを述べた。さらに, 評価を教師の指導改善に役立てる重要性についても論じた。
4. 理科教育と人間教育—自然の事物・現象についての視点を变えることを通して—	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究第 2 号 (人間教育学会) p 8 1 ~ p 8 8	人間教育とは, 子ども一人ひとりが個性的で主体的な存在として成長していくことを援助する教育である。この教育のための授業づくりの視点として, 子どもの内面世界に注目し, 授業実践を行うことである。理科教育で求められることは①主体的な問題解決を重視することである。特に小学校では子どもの発達段階を考慮して身近な自然現象を対象とし子どもが自ら問題を発見し, 見通しをもった観察・実験などを通して心を動かしながら問題解決の能力を育てることである。②言語力を重視することである。観察やレポートを作成する際に, 視点を明確にして事象の差異や共通点を捉えて報告することは, 人間としての基本的思考力育成となる。さらに比較や分類あるいは関連付けて思考すると言った「生きる力」の基本となる考え方を理科教育は育てる。③自然体験・科学体験の充実である。子どものこれらの体験不足が, 人間としての成長に少なからず影響を与えている。体験を通して科学的知識の定着を図るだけでなく, 学習

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				を基に自己の日常生活を振り返り, 生活に活用することができれば学習の意義は深まる。上記の視点で, 理科という教科を学ぶ意義と人間教育について, 具体的な単元をあげながら目標や内容, そして評価について実践事例をもとにして論じた。具体的には, 6年生「水溶液の性質」で「粒子の結合の変化」をとらえさせるために, 単元を通して自分の考えを図化して学習を進めさせた。考察の際に, 図と比べさせ考察させることで, 目には見えない「粒子の結合の変化」をとらえることができるようにした。3年生「ゴムの働き」では, ゴムの伸びによって変化するゴムが持つエネルギーをとらえさせるため, 決められた場所に車を止めるゲームを設定し, ゴムの伸びと車の進む距離の関係をドットシールでグラフ用紙に記録させた。完成した1次関数のグラフから「ゴムの伸びと車の進む距離にはきまりがある」ことに気付かせた。
5. 子どもの目の付けどころをもとにした小学校理科の授業づくりに関する一考察	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要 第3集 p 1 6 9 ~ p 1 7 6	見る人が自然の事物・現象の何を見るかによって, その捉え方は変わる。また, 同じ部分を異なる向きから見るかによっても, そのとらえ方は変わる。小学校理科の学習において, 子どもの目の付け所を変えるような手立てを行うことは, 自然の事物・現象を理解させたり見方を深めたりすることに非常に有効であると考えられる。このような想定の下で, 小学3年生の「植物育ちとつくり」の実践事例をもとにして小学校理科の授業において子どもの目の付け所を変える手立てを行った。その手立てが子どもの自然の事物・現象の理解の深まりや見方の変容に効果的であったかを, 子どものノート記録を根拠として論じた。授業実践を通して, 指導者が観察の仕方を綿密に根気強く指導し続ける必要があると同時に, 子どもの観察記録をもとに, その目の付け所を的確に意味付けたり価値付けたりする必要があることが明らかになった。また, このような指導を継続的に行うことで, 子どもは自身の学び方のよさに気付くとともに, 達成感を感じ, 理科の学習に対する自信を持つようになることが明らかになった。
6. 小学校理科教材「メダカ」の価値とその学習で獲得させたい「生命」についての見方や概念	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究第3号 (人間教育学会) p 1 1 5 ~ p 1 2 1	前の指導要領の改訂によって, 小学校理科の内容のうち, 「動物の誕生」が選択から必修に変更された。その前の改訂時に選択になったのにもかかわらず, すぐに必修に戻されたことは, 本内容には子どもに「生命」についての見方や考え方を養うための価値があると考えられる。このような考えのもとで, 過去の教科書と現行の教科書の記述を分析することによって, 「動物の誕生」の内容が持つ教育的価値について論じた。教科書の分析から, 子どもに獲得させたい「生命」についての見方や考え方は, メダカの雌雄によるひれの形の違いの持つ意味を理解し, 受精卵の育ちを観察し, さらにメダカを継続的に何世代にもわたって飼育するという体験を通して獲得される「生命の連続性」とであることが明らかとなった。また, 「動物の誕生」の内容が持

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				つ価値は、雌雄のひれの形の違いや受精卵の育ちという内容そのものが「生命の連続性」を意味していることであることが明らかとなった。
7. 子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果—小学校第5学年「電流の働き」の学習より—	単著	平成 29 年 3 月	平成 28 年度大阪教育大学大学院教育学研究科実践学校教育専攻修士論文 全 33 頁	これまでの日本の理科教育では、子どもが自然に働きかけたり自然から感じ取ったりすることは重要視されてきた。その根拠として、日置（2005）が論じている、我が国の理科教育のねらいは「子どもが素朴に自然を見つめて、自然に働きかけて、そこから得られた情報と自らの経験をもとにして、自分の考えをつくっていくこと」であること、「子ども独自の素朴な考え方をとりわけ重視しているので、理科の基盤には、子どもが自分で感じたことや考えたことが存在している」ことの2点を挙げることができる。また、平成 28 年 12 月の次期学習指導要領の改訂にむけての答申においても、育てたい子どもの姿として、子どもが豊かな感性を働かせながら新たな価値を創り出すことが明記されている。これらのことから、小学校理科で子どもの感性を育む授業を構想、実践することで、その効果を検証した。子どもの感性を育む授業を構想する前に、授業実践を行う子どものこれまでの自然体験と遊びの経験について、質問紙による調査を行った。その結果、授業実践を行う単元「電流の働き」の内容に関わる「乾電池を使ったおもちゃで遊んだことがある」「じ石を使ったおもちゃで遊んだことがある」の項目では、50%以上の子どもが「わりと経験がある」「かなり経験がある」ということが明らかとなった。一方で、「全く経験が無い」「あまり経験がない」子どもが、それぞれ 3.2%, 9.7% いることも明らかとなった。質問紙調査の結果を受け、これまでの遊びの経験の差を埋めるために、導入部分で全員が電磁石で鉄を引きつけるという場を設定した。そして、その後の一連の問題解決において、森本（2013）による「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」により、指導者が子どもの表出させた感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うという授業を構想し、実践した。授業プロトコルの分析から、指導者が子どもの感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことで、子どもは問題解決への見通しを持つことができるようになったり、実感を伴った理解へ至ることができるようになったりすることが明らかとなった。 この結果から、指導者が子どもの感性を意味付けたり価値付けたりすることで、子どもが「実感を伴った理解」に至るとともに、このような指導を繰り返し行うことで子どもの感性を育むことができるという知見が得られた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 理科の見方・考え方を働かせる小学校理科の授業づくりの一考察	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要第 7 集 p 15～p 22	平成 29 年 3 月に, 新しい『小学校学習指導要領』が, 同年 6 月に新しい『小学校学習指導要領解説理科編』が文部科学省より公示された。今回の改訂により, 理科の目標が大きく変化した。これまで養う対象であった「見方や考え方」が, 働かせる対象である「見方・考え方」となり, 実際の授業実践に少なからず影響を与えるものと思われる。そこで, 本稿では, 現行の指導要領下で実践された授業を, 新しい指導要領の考え方で分析し直し, 新しい指導要領下での小学校理科の授業づくりについて分析を行った。その結果, これまでの実践の全てを変える必要はなく, 子どもが「理科の見方・考え方」を働かせられるような教材や状況を, どのように作るかが重要であることが示唆された。
9. 子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果の検証ー小学校第 5 学年「電流の働き」の実践よりー	共著	平成 30 年 7 月	理科教育学研究第 59 号 1 巻 (日本理科教育学会) p 1～p 10	研究の目的は, 児童の感性を育てる小学校理科の授業を構想・実践し, その効果を検証することである。研究の方法として, これまでの児童の実態を把握し, 授業実践を行った。質問紙調査から, 児童の自然体験と遊びの経験が明らかとなった。特に, 本研究の授業実践の対象である「電流の働き」の内容に関わる「乾電池を使ったおもちゃで遊んだことがある」「じ石を使ったおもちゃで遊んだことがある」の項目では, 50%以上の児童が「わりと経験がある」「かなり経験がある」と回答した。その一方で, 「全く経験が無い」「あまり経験がない」と回答した児童は, それぞれ 3.2%, 9.7%であった。この児童の実態を踏まえて, 児童の感性を育てる理科授業を構想した。その特徴として, 次の 2 点が挙げられる。1 つ目は, これまでの遊びの経験の差を埋めるために, 導入部分で全員が電磁石で鉄を引きつけるという場を設定することである。2 つ目は, その後の問題解決の過程において, 指導者が児童の感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことである。実践した授業のプロトコルの分析から, 指導者が児童の感性を意味付けたり価値付けたりする支援を繰り返し行うことで, 児童は問題解決への見通しを持つことができたり, 「実感を伴った理解」へ至ったりすることが明らかとなった。本授業実践を通して, 指導者の児童の感性に対する意味付けや価値付けを繰り返し行うことで, 児童の感性を育てることができるという知見が得られた。 ※平成 28 年度大阪教育大学大学院教育学研究科実践学校教育専攻修士論文を『理科教育学研究』への投稿用に一部を改編した。 共著者: 太田雄久、栗生義紀、秋吉博之

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10. 子どもの感性を育てる小学校理科授業の提案	共著	平成31年2月	理科の教育 2019年2月号 (東洋館出版社)	『理科教育学研究』第59号1巻に掲載された「子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果の検証—小学校第5学年「電流の働き」の実践より—」で取り上げた「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」(森本, 2013)が子どもの感性を育てる効果があることを具体的実践事例を根拠に論じた。また、このような実践事例が新学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びの授業提案であることも合わせて論じた。 共著者: 太田雄久、栗生義紀、秋吉博之
11. 理科の見方を働かせる小学校理科授業の提案—時間的な視点で捉える状況を作る—	単著	平成31年3月	奈良学園大学紀要 第10集 p1～p8	本論文の目的は、「時間的な視点で捉える」という「理科の見方」を子どもが働かせる状況を指導者が作り出す授業を構想, 実践し, その授業で表出した子どものノート記録を分析することで, 実践した授業において子どもが「時間的な視点で捉える」という「理科の見方」を働かせることができたかを検証することである。指導の手立てとして「4コマ漫画の枠」を使った授業を実践し子どものノート記録を分析した結果、「4コマ漫画の枠」を使うことで、「時間的な視点で捉える」という「理科の見方」を働かせる状況を作ることができることが明らかとなった。その一方で、自然の事物・現象についてより細かな時間枠で捉えるミクロ的な視点を働かせる必要性や効果的に「4コマ漫画の枠」を使った学習ができる単元が他にもあるのかを検証する必要があることも示唆された。
(学会発表) 1. 創造性を育成する理科の授業	—	平成23年3月	第1回村山理科教育セミナー (アウリーナ大阪)	文部科学省初等中等教育局教科調査官村山哲哉氏を指導者とし, 大阪市, 堺市, 大阪教育大学附属小学校教員を中心にした理科教育研究会である。「創造性を育成する理科の授業」をテーマに, 授業づくりの考え方およびそれに基づいた実践発表を行った。内容は, 課題解決の過程において, よりよく科学的な思考力を発揮させることで, 子どもの素朴概念をより妥当性の高い科学概念へと変容させることである。それを6年生の「水溶液の性質」の単元で行った実践をもとに述べた。発表では, 子どもの感性を働かせる場の設定の工夫, 仮説設定時や考察時でのイメージ図などを使って自分の考えを表現させる場の設定の2つの手立てについて, 実践をもとに述べた。 A4, 5ページ分の資料添付。
2. 附属学校における科学教育研究実践の効果とその評価	—	平成23年8月	日本理科教育学会第61回全国大会 (於: 島根大学)	PISA2006調査に採択されたアンケートをもとに, 小学校4年生から高等学校2年生までの, 科学に対する認識や興味関心を分析するとともに, 附属学校の科学教育の取り組みがどのような影響をおよぼしているかを明らかにすることを目的とした研究である。明らかになったことは, 学年が進むにつれて科学に対する認識や興味関心は低下すること, 高等学校のSSHカリキュラムによって高校生の科学への関心が高い傾向にあること

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				である。 本人担当部分：小学校でのアンケート実施と分析補助 共同発表者：仲矢史雄, 炭谷優穂, 太田雄久, 栗生義紀, 小高大輔, 片桐昌直, 畦浩二 発表抄録：p. 441
3. 子どもの感性を働かせる理科の授業	—	平成 24 年 6 月	「NEW EDUCATION EXPO」 (大阪マーチャンドイズマート)	新しい理科教育の考え方と独自の授業実践事例」をテーマに開催された。子どもが主体的な問題解決の中で, 感性を適切に働かせることで, 子どもの科学的な見方や考え方を育むための授業実践を発表した。 実践は, 3 年生の「風やゴムのはたらき」と 6 年生の「ものの燃え方」の単元を取り上げた。発表での重点は, 見えない風やゴムの持つエネルギー, 燃えたときの空気の成分の変化に子どもの目が向くような事象との出会わせ方, 見えないものについての子どもの思考の可視化の方法, その思考の意味付けや価値付けの 3 つである。 担当部分：具体的な指導事例の提示 共同発表者 村山哲哉
4. 汎用測定装置を用いた小学校理科の授業開発	—	平成 24 年 8 月	日本理科教育学会第 62 回全国大会 (於：鹿児島大学)	汎用測定装置を取り入れた小学校理科の授業が, 科学的リテラシーの高い人材育成と実感を伴った理解につながるかを明らかにすることを目的とした。明らかになったことは, 汎用測定装置は子どもの目には見えないエネルギーの働き 方を数値の変化という視点で理解させることには有効であること, 一方で, 汎用測定装置を強調しすぎると小学校理科で大切な目の前の現象を観察したり関わったりすることに対して希薄になることである。 発表抄録：p. 296
5. 子どもの目のつけどころを意識した理科の授業	—	平成 25 年 6 月	「NEW EDUCATION EXPO」 (大阪マーチャンドイズマート)	「小学校の理科教育に求められること」をテーマに開催された。個々の生活経験や学習経験によって, 子どもの自然の事物・現象を見る目は決まっており, その目線をずらすことで, 問題意識は生まれることについて授業実践をもとに述べた。実践例は, 3 年生「植物の体のつくり」である。発表では, チューリップの絵を描かせたときに, ほとんどの子どもは横向きに書くことを例に挙げ, 観察する子どもの視線の向きを植物の上から, 葉の裏側から, 土の中へと変える手立てが, 植物の体のつくりやその工夫についての実感を伴って理解につながることを述べた。 担当部分：具体的な指導事例の提示 共同発表者 村山哲哉
6. 子どもの思考力を育成する理科の授業～子どもの目のつけ所を意識して～	—	平成 25 年 8 月	第 3 回村山理科教育セミナー (大阪市立苗代小学校)	文部科学省初等中等教育局教科調査官村山哲哉氏を指導者とし, 大阪市, 堺市, 大阪教育大学附属小学校教員を中心にした理科教育の研究会である。発表内容は子どもの生活経験や学習経験の違いによって, 子ども一人一人の自然の事物・現象への見方や感じ方が異なること。仮設定や考察時に, この違いを指導者が適切に意味づけたり価値づけたりしながら対話的に授業を進めることで, 科学的な思考力を育成するという考え方のもとで実践した具体例を述べた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 理科教育と命の教育	—	平成 26 年 8 月	第 1 回人間教育学会 (奈良学園大学)	理科の「B 生命」の内容を学習することを通して, 小学校道徳の目標の解説にある「自他の生命の尊さ」を自覚できるきっかけを作ることを目的として実践した。実践した単元は, 5 年生「植物の発芽と成長」ある。明らかになったことは, 理科の授業を通して「自然を愛する心情を育てる」こと, 「実感を伴った理解を図る」ことができれば, 「自他の生命の尊さ」を自覚できるきっかけを作ることができ, 理科と道徳教育連携を図る授業の一案としての提案である。
8. 理科教育と和 문화	—	平成 26 年 11 月	第 11 回 和文化教育学会 (東京都武蔵村山市)	天気の違いである観天望気を, 5 年生「天気の変化」の単元で詳しく学習することを通して, 天気を決定づける要因について実感を伴って理解させることを目的として実践した内容を発表した。具体的な内容としては, 単元の終末に, 教科書で紹介されている観天望気を調べる活動を設定し, 観天望気を成立させる要因を探る活動, さらに, オリジナル観天望気を作り, その信頼性を調べる活動を設定した。そして, その活動を設定することで, 子どもの天気の変化についての見方や考え方を科学的なものにしようとした授業実践の一案として提案した。
9. 子どもの視点の分析をもとにした小学校理科の授業開発とその実践	—	平成 28 年 3 月	日本教師学会第 17 回大会 (奈良学園大学)	小学校理科授業において, この視点を動かすことで, 子どもは「ホンネの問題意識」を持つことができ, 主体的に問題解決の活動に取り組むようになると考え, 授業実践を行った。実践の分析から, 子どもの視点を動かす手立てを行うことは, 子どもが実感を伴って理解すること, 科学的な見方や考え方に変容することにつながるということが明らかとなった。
10. 子どもの感性を育む支援のあり方～子どもの自然体験や遊びの経験をふまえて～	—	平成 28 年 8 月	日本理科教育学会第 66 回全国大会 (信州大学)	子どもの自然体験や遊びの経験の違いにより, 子どもの自然に対する感じ方や目の付け所に違いが出るという前提のもと, 子ども一人一人の感じ方や目の付け所を効果的に価値付けたり意味付けたりして, 子どもの感性を育もうとする授業を実践して, その効果を検証した。授業実践を通じた検証から, ども一人一人の感じ方や目の付け所を効果的に価値付けたり意味付けたりすることで, 子どもの感性が育むことにつながるという知見が得られた。 担当部分: 研究代表者として発表を行う。 共同発表者 秋吉博之, 栗生義紀 発表抄録: p. 256
11. 子どもの感性を活用した小学校理科授業の実践とその効果～小学校第 5 学年「電流の働き」の学習より～	—	平成 28 年 11 月	平成 28 年度日本理科教育学会近畿支部大会大阪大会 (大阪教育大学)	文部科学省 (2011) は, 感性に関する指導を行う際に「豊かな表現, より論理的で的確な表現を通して互いに交流する」ことに留意することを示している。そこで, 対話的な学びの場で指導者が子どもの感性を指導に活用する授業を構想, 実践し, その効果を検証した。授業実践による検証から, 指導者が子どもの感性を活用することで, 子どもは「実感を伴った理解」へ至ることが明らかとなった。 担当部分: 研究代表者として発表を行う。 共同発表者 秋吉博之, 栗生義紀 発表抄録: p. 37

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 2. 子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果～小学校第5学年「電流の働き」の学習より～	—	平成 29 年 8 月	日本理科教育学会第 67 回全国大会 (福岡教育大学)	これまでの日本の理科教育では, 子どもが自然に働きかけたり自然から感じ取ったりすることは重要視されてきた。その根拠として, 日置 (2005) が論じている, 我が国の理科教育のねらいは「子どもが素朴に自然を見つめて, 自然に働きかけて, そこから得られた情報と自らの経験をもとにして, 自分の考えをつくっていくこと」であること, 「子ども独自の素朴な考え方をとりわけ重視しているので, 理科の基盤には, 子どもが自分で感じたことや考えたことが存在している」ことの2点を挙げることができる。また, 平成 28 年 12 月の次期学習指導要領の改訂にむけての答申においても, 育てたい子どもの姿として, 子どもが豊かな感性を働かせながら新たな価値を創り出すことが明記されている。これらのことから, 小学校理科で子どもの感性を育む授業を構想, 実践することで, その効果を検証した。授業実践の検証から, 森本 (2013) による「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」により, 指導者が子どもの表出させた感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことで, 子どもの感性を育てることができるという知見が得られた。 担当部分: 研究代表者として発表を行う。 共同発表者 秋吉博之, 栗生義紀 発表抄録: p. 3 8 5

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 大淵 裕美

研 究 分 野		研究内容のキーワード
社会学・ジェンダー・ 生活科学		教育社会学、家族社会学、ジェンダー、 家族関係学、生活経営学
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
(1) 授業時間外における学習を促進する取り組み：e-mail での対応（天理看護学院助産学科「助産研究」科目）	平成 20 年 12 月～平成 26 年 3 月	助産学科は、各種実習に加えて年間 10 例の分娩介助が義務付けられており、授業の開講時期も 4～7 月、8 月、12 月と不定期開講であった。その為、授業時間外でもメールで随時進捗状況の報告や中間論文の提出を実施したり、相談に応じるなど、実習の合間でも効率よく論文を執筆できるよう工夫を行った。
(2) ワークショップ形式講義の導入 （大阪樟蔭女子大学学芸学部ライフプランニング学科「日本文化理解」科目・2 年次後期開講）	平成 23 年 10 月～平成 24 年 3 月	体験を通じた異文化理解や日本文化の理解を促すため、全 15 回の講義のうち 3 回（2 回は講師を招く）、ワークショップ形式の講義を行った。具体的には、心理学のシミュレーションを活用した異文化体験ゲーム「移民シミュレーションゲーム」の実施、日本の前衛芸術・舞踏の専門家である田中誠司氏を招いた「舞踏ワークショップ」、さらに元営業職の会社員で外国人観光客を意識した café を経営する中西弘之氏を招いた「日本の企業文化と名刺交換ワークショップ」を実施した。「移民シミュレーションゲーム」を実施した際には、受講者は仮想の状況でありながらも、異文化と接触した時のカルチャーショックや仲間意識を体験した。また、「舞踏ワークショップ」では、「まっすぐ歩く」というワークを通じて、一つ一つの物事に対して心身を最大限集中させて取り組む重要性を学修した。最後に、「名刺交換ワークショップ」では、名刺をツールとして、多角的に他者との会話の可能性を切り開く視点を得た。これらを通じて、学生たちに、生身の身体を持つ自分自身が文化を媒体するメディアであることを発見するように促した。
(3) 外部講師による特別講義の実施 （四天王寺大学社会学部社会学科「家族関係論」科目・2 年次後期開講）	平成 25 年 9 月～平成 27 年 3 月	社会学部社会学科 2 年後期配当選択必修科目。現代日本社会における家族関係をめぐる様々な事象の考察を通して、物事に対する多様な見方・考え方（複眼的思考法）の習得を目指した。その際に、特別講師を招いた講義を実施し、学生たちに実感を伴う理解を促すよう工夫した。平成 25 年度は 2 名の特別講師をお招きした。「家族と離れて暮らす子どもたち——児童養護施設」をテーマに、群馬県前橋市の児童養護施設「地行園」施設長・須田昭司氏に特別講義を行っていただいた。また、「出産と身体」をテーマに、マタニティヨガ講師・真鍋りょうこ氏をお招きし、講義とヨガ体験を行っていただいた。平成 26 年度は、「育児期女性の起業経験」をテーマに、奈良のママが仕事をつくる会（愛称：ナラマーシカ）代表・井上京子氏をお招きし、ご自身の起業体験をお話いただくとともに、商品開発ワークショップを実施した。いずれの特別講義においても、学生から好評を得るとともに、多様な社会現象を理解する一助となった。

(4) フィールドワークに基づくプレゼンテーションの実施（関西大学社会学部社会学科メディア専攻「基礎演習」科目・2年次前期開講）	平成26年 4月～平成26年9月	関西大学社会学メディア専攻には、新聞やテレビ、広告等に関心があるのみならず、これらメディア関連企業への就職を希望する学生が多く在籍している。しかしながら、受講者の大半は、大学と自宅とアルバイトといった自分たちの身近な空間で生活をしている。そこで、メディア関連企業等で必要とされる取材力や観察力の涵養を目指すべく、関西大学前の商店街と大阪市内の商店街（天神橋筋商店街、松屋町商店街、福島商店街、道具屋筋商店街）へのフィールドワークを実施し、比較検討する課題を出した。商店街のどのような側面に焦点を当てて調査するかについては、各グループの自由意思に任せた。最終講義では、フィールドワークの結果に基づいたプレゼンテーションを実施した。その結果、学生たちは、音楽や看板といったメディア利用の相違、インターネットにおける商店街のイメージ戦略と実際の相違、店舗の相違等に着目しながら、各商店街の特性を分析していた。このフィールドワークを通じて、学生たちは、人々の生業の相違について学修するとともに、情報収集能力、課題発見能力、情報発信能力の一端を習得した。
(5) 臨地講義の実施 （帝塚山大学文学部文化創造学科「現代日本の文化と社会」科目・1年次前期開講）	平成26年 4月～平成26年9月	「奈良×仕事×文化創造＝ブライダル＝ブライダル企業に何う奈良の魅力発掘・発信法―」というテーマで、奈良市内にあるブライダル企業・アトリエステディ株式会社にて臨地講義を実施した。アトリエステディは、ビジュアルイメージを多用した会社のブランディングや、ブライダルを通じた地域おこしを行っている。文化創造学科の教育目標と親和性が高いと判断し、初年次教育、キャリア教育もかねた講義を依頼した。講義は、3部構成で実施した。Ⅰ部は、「奈良×仕事×文化創造＝ブライダル＝ブライダル企業に何う奈良の魅力発掘・発信法―」と題して、アトリエステディの谷口裕純専務より自社での特徴的な取り組みについて講話いただいた。Ⅱ部は、「専務と話そう！―さまざまな壁を飛び越えながら文化を創る戦略を探る―」。学生による専務へのインタビューを実施した。Ⅲ部は、「アトリエステディ×文化創造学科＝ファッションショー―文化が創られる瞬間を体験する―」と題して、ブライダル企業の演出によるファッションショーを体験した。本講義に際して、事前・事後授業を行うと共に、専任教員2名と協力しながら、学生が多角的に学修できるよう最大限の工夫を行った。
(6) コメントシートの作成と利用 （四天王寺大学社会学部社会学科「家族関係論」、関西学院大学社会学部社会学科「臨床社会特論A」科目、神戸松蔭女子学院大学全学共通科目（教養系列）「女性とメディア」科目、大阪教育大学教員養成課程「家族関係学Ⅱ」科目、群馬大学社会情報学部情報行動学科「比較文化論」科目、関西学院大学全学科目（基盤・学際科目）「人権からみたジェンダーB」科目、奈良学園大学人間教育学部共通教育科目「社会学」「共生と社会」「共生と日本社会」科目）	平成26年 9月～平成28年9月	受講者とのコミュニケーションを重視した講義を行うために、独自に作成した「コメントシート」を活用している。コメントシートは15回分の欄が設けられており、毎回講義開始前に資料とともに配布し、講義終了後に回収している。全学生のコメントに毎回必ず目を通し、疑問や感想についての対応を直接コメントシートに書き込んでいる。また、コメントを踏まえ、学生の理解が不十分だと判断した内容については、翌週の講義の一部ないし全体を使って必ず補足説明を行うなど、受講者の理解度を確認しながら講義を進める工夫をしている。
(7) ワークシートを用いたアクティブ・ラーニングの実施（群馬大学社会情報学部情報行動学科「総合文化論」科目）	平成29年 1月	教育政策や学習指導要領の変遷、学習塾や予備校などの学校教育と学校外教育の関係、学力低下に関する学説等を学修した。さらに、ワークシートやグループワーク等のアクティブ・ラーニングを導入し、討議できるような発問を考え、社会学的な「問い」「仮説」「根拠」を導出する実践を行うなど、教育課題解決に資する複眼的思考力の醸成を目指した。

(8) 音声認識アプリ (UD トーク) を活用したユニバーサルデザイン授業の実施 (奈良学園大学人間教育学部共通教育科目「社会学」「共生と社会」「共生と日本社会」科目)	平成 30 年 4 月～現在	聴覚障害学生および留学生が同時に受講する講義において、音声認識アプリ (UD トーク) を活用した授業をおこなった。具体的には、2つのスクリーンを用意し、一方にパワーポイントの内容を提示し、他方に音声認識アプリによるリアルタイムな発話を提示した。リアルタイム発話には、ふりがなをふることのできる設定にして、難しい内容でもルビが表示されるようにした。このアプリを導入した結果、聴覚障害学生や留学生の授業支援になっただけでなく、他の受講生の学修促進に効果があった。
(9) 外部講師を招聘したワークショップ形式の授業実施 (奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「教職表現力演習 I」科目・1 年次通年開講)	平成 31 年 1 月～現在	教職表現力演習とは、教職 (幼稚園・小学校・中学校・高校教諭) に求められる表現力の習得を目指す科目である。平成 30 年 4 月より、幼稚園専修に所属する一回生向けの授業を担当している。保育者として特に必要とされる演技力・表現力を、プロの舞台人からご指導いただく特別講義を実施した。具体的には、元宝塚歌劇団花組副組長・紫峰七海先生をお招きして、「幼稚園教諭に必要な表現力を身につけよう～ペーパーサート台本を用いたワークショップ・発表会～」を開催した。特別講義を通じて、学生の演技力・表現力の醸成に寄与した。
2 作成した教科書, 教材 (1) 『教育社会学』(単著・(株) ERP)	平成 29 年 3 月 7 日	教育社会学とはなにか、教育社会学の考え方と学習方法、学校の社会的機能、学校教育をめぐる現代的課題、教育と家族、教育調査の方法論等を概説した。本書では、部活動問題や子どもの貧困などの教育課題をわかりやすく紹介している。本書を活用することで、受講学生は、学校教育にとどまらず、社会と教育の関係や、学校教育に影響を与える社会的状況等について、理解を深めることが可能となった。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 研究指導者としての評価 (天理看護学院) (2) 学科の方針に沿った臨地講義実施に対する学長・専任教員からの評価 (帝塚山大学)	平成 20 年 12 月～平成 26 年 3 月	天理看護学院助産学科では、受講者が「助産研究」科目でまとめた研究内容を卒業後に奈良県母性衛生学会等で発表してきた。私が在職期間に指導した学生の大半が、毎年学会発表を可能とした。とりわけ平成 24～26 年度は、雇用先の助産学科専任教員の推薦により、指導者という立場で卒業生の学会報告に名前を連ねた。雇用先の天理看護学院および教員より、研究指導者としての能力を認めていただいたことを示している。
	平成 26 年 4 月～平成 26 年 9 月	帝塚山大学文学部の新設学科である文化創造学科で担当した「現代日本の文化と社会」では、「奈良×仕事×文化創造＝ブライダル＝ブライダル企業に何う奈良の魅力発掘・発信法―」というテーマで、奈良市内にあるブライダル企業・アトリエステディ株式会社にて臨地講義を実施した。臨地講義に際して、①事前・事後授業の実施のみならず、②専任教員の牟田口章人先生、河川充勇先生との複数回にわたる打ち合わせや学生の担当箇所の検討、③臨地講義先のアトリエステディ様との 4 回以上にわたる綿密な打ち合わせと準備実施し、学生が多角的に学修できるような工夫を行った。さらに、当日の講義には、帝塚山大学学長・岩井洋先生がご参加くださった。岩井学長より、本臨地講義が「文化創造学科のコンセプトを具現化するもの」であると評価を頂いた。さらに、講義の様子が文化創造学科の HP や Facebook ページ「帝塚山大学学長のココロ」等にて紹介された。このことは、学科のコンセプトを的確につかむ能力や、地域の方々や専任教員の方々と連携した学外講義を実施する能力があることを示している。

(3) 学生による授業評価の結果（関西学院大学社会学部社会学科「臨床社会特論 A」科目・1 年次前期開講）	平成 27 年 4 月～平成 27 年 9 月	社会学部 1 年前期配当科目。本講義では、健康や病気、身体など、私たちにとってあたりまえで根本的な問題について、社会学、ジェンダー論の知見を用いて相対化してみると、どのように見えるのかを検討した。受講生の特徴として、社会学部の 1 年生～4 年生だけでなく、心理学、文学、法律学、経済学、社会福祉学といった他学部の 1 年生～4 年生が受講するという状況であった。そのため、社会学を知らない学生や 1 年生に基準を置くとともに、コメントシートを活用して学生の理解度を確認しながら丁寧な授業実施を心がけた。その結果、学生による「授業に関する調査」において、平均よりも高い評価を得た。特に、「担当者が学生の理解度を確認しながらこの授業を進める工夫をしていた」や「全体としてこの授業に満足している」という項目では、5 段階中「4.6」と評価された。このことは、講義科目であっても学生とのコミュニケーションをとりながらきめ細かく対応する能力を有していることを示している。
(4) 奈良学園大学人間教育学部採用にあたっての学長評価	平成 28 年 3 月	奈良学園大学には教育社会学の科目がないため、社会問題と教育課題を関連付けて考える場が少ないので、教育社会学的な視点に学生の視野を広げる役割を期待して採用された。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 「ケア・支援をめぐる現状と可能性—養護・保育・介護の視点から—」	平成 25 年 9 月	本企画は、二部構成で実施した。まず、第一部では、児童養護施設の施設長・須田昭司氏より、「家族と離れて暮らす子どもたちの未来」という題で基調講演をいただいた。第二部では、「ケア・支援の可能性～保育・介護・養護の視点を踏まえて～」と題して、2 名の学内教員からの話題提供と、須田氏を交えたパネルディスカッションを実施した。ケア労働や地域との交流について議論をした後、「保育・介護・養護について一般市民ができること」についての暫定的回答をいただいた。本企画は、奈良女子大学ポストドクター・キャリア開発事業との共催であった。登壇者：須田昭司・久木元美琴・井口高志・大淵裕美（セミナー企画・司会・コーディネーターを担当） 『奈良女子大学大学院人間文化研究科「キャリア開発のための院生自主企画」採択プログラム（奈良女子大学）』
(2) 「「命」のつながりを考える」	平成 26 年 3 月	出産という次世代を産み育てる営みを通して、生きること、家族とのつながり、医療現場との関わりなどについて検討する機会を設けた。具体的には、映画監督・河瀬直美氏ご自身の出産経験を映像化したドキュメンタリー映画『垂乳女』の上映会の後に、河瀬氏を交えながら、助産師・出産経験者・研究者によるクロストークを行った。 登壇者：河瀬直美・左古かず子・芝田和美・真鍋りょうこ・大淵裕美（企画協力ならびに司会・コーディネーターを担当） 『河瀬直美監督作品「垂乳女」上映会&クロストーク』（奈良女子大学）
(3) 「住民と共に取り組む健康づくり—聞き取り調査事業第 1 報—」	平成 26 年 6 月	吉野町の保健師による健康事業が、住民の健康活動に与えた影響の解明を目指した。具体的には、吉野町で活動する 3 つの団体へのヒアリングを実施し、健康事業が住民に与えた効果を分析し「吉野町モデル」を析出した。この作業を通じて、吉野町における「健康を核とした地域づくり」の方向性を示した。 『平成 26 年度吉野町第 1 回健康づくり推進協議会会議』（吉野町保健センター）

(4)「健康増進計画策定事業取組の現状と課題～住民が主役の健康づくりとは～」	平成 27 年 2 月	平成 26 年度の吉野町健康増進計画策定事業の実績と、次年度への展望を報告した。具体的には、平成 26 年度の調査を通じて、住民が主役となる「健康を核とした地域づくり」活動が一定程度なされていたことが確認された。それを踏まえ、次年度以降では、「住民主役型」地域づくりや、生活習慣病・介護予防の両側面において切れ目のない持続可能な「新・吉野モデル」の展開可能性を示した。 『平成 26 年度吉野町第 2 回健康づくり推進協議会会議』（吉野町保健センター）
(5) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「基礎ゼミナールⅠ」におけるアドバイザーとしての学生支援	平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月	高校から大学へのギャップで困惑する学生の退学防止のため、学生懇談を年 3 回行うとともに、リメディアル教育の参加を促進し、学力面や生活面での学生の支援を行っている。
(6) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「人間教育実践力開発演習」における学生の学校支援ボランティア参加事業サポート	平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月	文部科学省が推進している学校ボランティアを奈良学園大学人間教育学部では全学年で実施している。各市町教育委員会への教育的意義の説明や、受け入れ学校の調整等のサポートを行い、全体統括をしている。
(7) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における聴覚障害学生支援	平成 28 年 4 月～現在 に至る	聴覚障害 2 級の学生が人間教育学部に入学し、障害者差別解消法に基づき文部科学省が出した指導指針に基づき大学での聴覚障害学生支援責任者として関係機関との連携調整及び支援体制の構築、授業支援の運用、当該学生との面談の実施・記録・報告等を行っている。
(8) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科特別聴講生（留学生）の課題研究指導	平成 29 年 6 月～現在 に至る	蘇州科技学院（中国・江蘇省）からの特別聴講生の課題研究指導を担当している。これまで指導した特別聴講生は、日本国内における文化比較研究、日本女性の人生観に関する研究、日中の接客態度比較に取り組んだ。留学生の日本語力に合わせながら、ゼミ活動を通じてきめ細かい指導を行っている。
(9) 奈良女子大学オープンキャンパスにおける音声認識アプリを用いた聴覚障害学生支援の指導・助言	平成 30 年 7 月	奈良女子大学より依頼を受け、奈良女子大学オープンキャンパスの際に、音声認識アプリ（UD トーク）を使用した障害学生支援の指導・助言・技術支援をおこなった。具体的には、UD トークを用いて、聴覚障害の生徒が受ける入試説明会・模擬授業でリアルタイム情報保障を行った。また、今後音声認識アプリを導入する際の方法等についても助言した。
(10)「障害のある学生のチーム支援について」	平成 30 年 9 月	奈良学園大学における聴覚障害学生のチーム支援体制について、支援体制構築の経緯、現状、展望について 1 時間程度の講演を行った。 『なら発、障害学生を支援する仕組みづくり講座～産・福・学・医が連携した、大学支援ネットワーク～』（奈良学園大学）
(11)「奈良学園大学における聴覚障害学生支援の取り組みについて」	平成 30 年 12 月	四天王寺大学学生支援センター主催の障害学生支援に関する研修会で、奈良学園大学での聴覚障害学生支援の取り組みについて報告を行った。その際に、音声認識アプリ（UD トーク）を用いて、リアルタイムでの情報保障を実施した。研修会では、聴覚障害学生支援を行ううえでの体制構築や予算確保、必要な情報機器等の指導や助言を行った。

5 その他 (1) 天理看護学院助産学科における教育実績	平成 20 年 12 月～平成 26 年 3 月	天理看護学院助産学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「助産研究」(平成 20 年 12 月～平成 26 年 3 月) 天理看護学院助産学科の「助産研究」(専門科目、1 年次配当、通年、必修 2 単位)において、助産研究の理論及び実践、研究論文の執筆に関する内容の授業を行った。その結果、学生に助産師として必要とされる課題発見能力、文献収集、調査能力、論文執筆のための文章力等の技能を修得させる教育効果があった。
(2) 大阪樟蔭女子大学学芸学部ライフプランニング学科における教育実績	平成 21 年 10 月～平成 24 年 3 月	大阪樟蔭女子大学学芸学部ライフプランニング学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「生活文化論」(平成 21 年 10 月～平成 23 年 3 月) 大阪樟蔭女子大学学芸学部ライフプランニング学科の「生活文化論」(専門科目、1 年次配当、半期、選択必修 2 単位)において、衣食住やマンガ、女性用品等の現代の生活文化に関する内容の授業を行った。その結果、学生に日常生活の中に含まれる歴史性や文化的価値等のあり方について理解を促す教育効果があった。 「日本文化理解」(平成 21 年 10 月～平成 24 年 3 月) 大阪樟蔭女子大学学芸学部ライフプランニング学科の「日本文化理解」(専門科目、2 年次配当、半期、選択必修 2 単位)において、茶道をはじめとする伝統文化、年中行事、通過儀礼などの伝統的な日本文化や、舞踏、マンガやアニメなどの現代日本文化の特徴を紹介する授業を行った。その結果、学生に、日本文化の基礎的知識の修得や文化を多面的にとらえる力の醸成という教育効果があった。
(3) 四天王寺大学人文社会学部社会学科における教育実績	平成 25 年 9 月～平成 27 年 3 月	四天王寺大学人文社会学部社会学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「家族関係論」(平成 25 年 9 月～平成 27 年 3 月) 四天王寺大学人文社会学部社会学科の「家族関係論」(専門科目、2 年次配当、半期、選択必修 2 単位)において、家族に関する基本的な研究を紹介し、ペット、墓、結婚・出産・離婚、学校外教育、家族と離れてくらす人、LGBT など、現代における家族に関する様々な課題を検討する授業を行った。その結果、学生に対して、自らの常識に囚われず家族関係の多様性について柔軟にとらえる思考法や、家族に関する社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。
(4) 帝塚山大学文学部文化創造学科における教育実績	平成 26 年 4 月～平成 26 年 9 月	帝塚山大学文学部文化創造学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「現代日本の文化と社会」(平成 25 年 9 月～平成 27 年 3 月) 帝塚山大学文学部文化創造学科の「現代日本の文化と社会」(専門科目、1 年次配当、半期、選択必修 2 単位)において、「お客様社会」「文化財の遺産化」「心の教育」「ペットは家族か」「ブライダルを通じた新たな奈良文化の創造」などを事例に、現代日本をめぐる文化的・社会的現象に関する授業を実施した。その結果、学生に対して、身近な事例を通じた複眼的思考力や物事を多面的・多角的にとらえる力を育成するという教育効果があった。

(5) 関西大学社会学部社会学科における教育実績	平成 26 年 4 月～平成 26 年 9 月	関西大学社会学部社会学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「基礎演習」(平成 26 年 4 月～平成 26 年 9 月) 関西大学社会学部社会学科の「基礎演習」(専門科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位)において、文献講読を通じたメディア論・社会学に関する基礎知識の修得と実践(フィールドワークの実施、プレゼンテーション、レポートの作成)を行った。その結果、学生に対してアカデミックスキルの修得と社会人基礎力の醸成という教育効果があった。
(6) 京都文教大学総合社会学部総合社会学科における教育実績	平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月	京都文教大学総合社会学部総合社会学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「量的調査法」(平成 26 年 4 月～平成 27 年 9 月) 京都文教大学総合社会学部総合社会学科の「量的調査法」(社会調査士資格科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位、社会調査士 E 科目)において、社会学のデータ分析に用いられる多変量解析について、基本的な考え方および主要な分析方法に関する授業を実施した。その結果、学生に統計解析に関する知識と技能を修得させる教育効果があった。 「総合社会学実習 AⅠ」(平成 27 年 4 月～平成 27 年 9 月) 京都文教大学総合社会学部総合社会学科の「総合社会学実習 AⅠ」(社会調査士資格科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位、社会調査士 G 科目)において、社会調査の企画から報告書作成にまでの量的調査の全過程を実習を通じて体験的に学修した。特に本科目では、「総合社会学実習 AⅡ」の前段階として、問題意識の明確化や仮説構築の作業を行うとともに、既存研究の質問項目を参照しながら、調査票作成までを中心に実施した。その結果、社会調査データの扱いについての知識と方法、技術を身につけ、質問紙調査を計画・実行する力を修得させる教育効果があった。 「総合社会学実習 AⅡ」(平成 27 年 10 月～平成 28 年 3 月) 京都文教大学総合社会学部総合社会学科の「総合社会学実習 AⅠ」(社会調査士資格科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位、社会調査士 G 科目)において、社会調査の企画から報告書作成にまでの量的調査の全過程を実習を通じて体験的に学修した。特に本科目では、「総合社会学実習 AⅠ」に引き続き、調査の実施、データ作成および分析を行い、考察を深め、最終的に報告書を作成した。その結果、社会調査データの扱いについての知識と方法、技術を身につけ、質問紙調査を実行し報告書にまとめる力を修得させる教育効果があった。
(7) 関西学院大学社会学部社会学科における教育実績	平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月	関西学院大学社会学部社会学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「臨床社会特論 A」(平成 27 年 4 月～平成 27 年 9 月) 関西学院大学社会学部社会学科の「臨床社会特論 A」(専門科目、1 年次配当、半期、選択必修 2 単位)において、医療、教育、家族などの事例を中心に、社会学、ジェンダー学に関する知識やものの見方に関する授業を行った。その結果、学生に対して、自らの常識に囚われず社会現象をとらえる柔軟な思考法や、医療・教育・家族に関する社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。

(8) 神戸松蔭女子学院大学全学共通科目(教養系列)における教育実績	平成27年9月～平成28年3月	神戸松蔭女子学院大学全学共通科目(教養系列)の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「女性とメディア」(平成27年9月～平成28年3月) 神戸松蔭女子学院大学全学共通科目(教養系列)の「女性とメディア」(共通教育科目、1年次配当、半期、選択必修2単位)において、女性とメディアに関する基本的な研究を紹介しながら、報道番組、ディズニーアニメ、スーパーヒーロー番組、家族、LGBTなどを事例に、女性とメディアに関する諸課題を検討する授業を行った。その結果、学生に対して、メディアの情報を鵜呑みにするのではなく、様々な角度からメディアのメッセージをとらえる柔軟な思考法や、メディアとジェンダーをめぐる課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。
(9) 関西学院大学全学科目(基盤・学際科目)における教育実績	平成27年9月～現在に至る	関西学院大学全学科目(基盤・学際科目)の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「人権から見たジェンダーB」(平成27年9月～現在) 関西学院大学全学科目(基盤・学際科目)の「人権から見たジェンダーB」(共通教養科目、1年次配当、半期、選択必修2単位)において、ジェンダーの基本的知識及び、教育やアニメに描かれる男性性と人権問題に関する授業を行った。その結果、学生に対して、自らの行動や振る舞いに潜む人権侵害の可能性や、ジェンダーをめぐる社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。
(10) 大阪教育大学教育学部教員養成課程における教育実績	平成28年4月～平成28年9月	大阪教育大学教育学部教員養成課程の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「家族関係学」(平成28年4月～平成28年9月) 大阪教育大学教育学部教員養成課程の「家族関係学」(専門科目、3年次配当、半期、選択必修2単位)において、家族に関する基本的な研究を紹介し、ペット、墓、結婚・出産・離婚、家族と離れてくらす人、LGBTなど、現代における家族に関する様々な課題を検討し、家庭科教員としてどのように教育していくかを考察する授業を行った。その結果、学生に対して、将来家庭科教員として必要とされる家族関係の多様性について柔軟にとらえる思考法や、家族に関する社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。
(11) 群馬大学社会情報学部情報行動学科における教育実績	平成28年4月～平成30年3月	群馬大学社会情報学部情報行動学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「比較文化論」(平成28年4月～平成28年9月) 群馬大学社会情報学部情報行動学科の「比較文化論」(専門科目、2年次配当、半期、選択必修2単位)において、性と生殖(リプロダクション)やジェンダーを手がかりに、社会学の視点から文化比較を行う授業を実施した。具体的には、障害者と中絶、生殖補助医療のグローバル化、出産形態の多様性などを扱った。その結果、学生に対して、日本社会における現象を相対化し柔軟にとらえる思考法や、リプロダクションをめぐるグローバルな社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。 「総合文化論」(平成28年10月～平成30年3月) 群馬大学社会情報学部情報行動学科の「総合文化論」(専門科目、3年次配当、半期、選択必修2単位)において、教育をめぐる現代の文化現象(学校外教育と階層、見えないカリキュラム、家庭教育、いじめ、体

(12) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績	平成30年4月～現在	罰、教師文化)に着目した授業を実施した。その結果、学生に対して、自らの常識に囚われず教育のあり方について柔軟にとらえる思考法や、教育と文化をめぐる社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の専任講師として以下の科目を担当した。 「社会学」(平成30年4月～現在に至る) 奈良学園大学共通教育科目の「社会学」(1年次以上配当、半期、選択必修2単位)において、社会学に関する基本的な概念を紹介しながら、意図せざる結果論、感情労働論、メディアとジェンダー、家族、教育などを事例に、社会学の諸理論と現代社会の諸課題を検討する授業を行った。その結果、学生に対して、社会学に関する基本的な思考法や概念を身近な事例に当てはめて検討し考察する力を育てる教育効果があった。 「共生と社会」／「共生と日本社会」(平成30年4月～現在に至る) 奈良学園大学共通教育科目の「共生と社会」『共生と日本社会』(1年次以上配当、半期、選択必修2単位)において、マイノリティ(障害・セクシュアルマイノリティ)の視点から社会をとらえ、多くの人たちが公正に生きられる社会のあり方について検討した。具体的には、障害と社会について、聴覚障害、視覚障害、知的障害、色覚多様性などを事例として取り上げ、実践を交えながら「合理的配慮」や「障害の社会モデル」について考察した。また、ジェンダーの視点からは、セクシュアルマイノリティについて映像等で学修した。授業の成果として、セクシュアルマイノリティに関する新聞記事を「やさしい日本語」に書き換えて、小学生にもわかりやすいプレゼンテーションを行った。その際に、UDトークを活用しながら字幕付き映像として撮影し、合理的配慮の実践を行った。受講者に対して、様々な障害種に対して合理的配慮を実践するための基礎的能力と、セクシュアルマイノリティに対して基本的な知識を持って接する力の醸成に寄与する教育効果があった。 「情報と分析」(平成30年4月～現在に至る) 奈良学園大学共通教育科目の「情報と分析」(1年次以上配当、半期、選択必修2単位)において、社会調査に関する基本的な知識と分析方法に関する入門的な授業を実施した。具体的には、量的調査・質的調査の基本的な事項や、仮説形成、質問紙調査に関するワーディング等を取り扱った。その結果、学生に社会調査に関する知識と技能を修得させる教育効果があった。 「日本事情」(平成30年9月～現在に至る) 奈良学園大学人間教育学部専門科目の「日本事情」(3年次以上配当、半期、選択科目2単位)において、日本の社会や文化を巡る様々な事項を学修する授業を実施した。具体的には、社会状況、年中行事、食文化、伝統文化、ポピュラーカルチャーなどを取り扱った。グローバル社会における日本とは何かを分析・考察し、理解を深めるという教育効果があった。
--	-------------------	--

(12) 和歌山大学教育学部における教育実績	平成30年10月～平成31年3月	「教職表現力演習Ⅰ」(平成30年4月～現在に至る) 奈良学園大学人間教育学部専門科目の「教職表現力演習Ⅰ」(1年次配当、通年、必修1単位)を担当した。幼稚園専修を担当したため、保育者という「職能」に求められる「文章表現力」ならびに「実技力」といった表現力中心に学修すると同時に、その基礎的な能力を身につける授業を実施した。具体的には、文章表現、文書等の書き方をはじめ、児の発達を踏まえた表現力(絵本の読み聞かせ、ピアノの弾き歌い、ペープサートの実演)などを学修した。とりわけ、ペープサートの実演では、実技指導者として、特別招聘講師に元宝塚歌劇団花組副組長・紫峰七海先生をお招きしてご指導いただいた。これらを通じて、幼稚園教諭・保育士として、幼児をはじめとする他者に対して、物事をわかりやすく伝える表現力の基礎的な力を習得するという教育効果があった。 「教職表現力演習Ⅱ」(平成30年4月～平成31年3月) 奈良学園大学人間教育学部専門科目の「教職表現力演習Ⅱ」(2年次配当、通年、必修1単位)を担当した。幼稚園専修を担当したため、保育者という「職能」に求められる「文章表現力」ならびに「実技力」といった表現力中心に学修すると同時に、その応用的な能力を身につける授業を実施した。具体的には、文章表現、文書等の書き方をはじめ、児の発達を踏まえた表現力(絵本の読み聞かせ、ピアノの弾き歌い、ペープサートの作成・実演)などを学修した。これらを通じて、幼稚園教諭・保育士として、幼児をはじめとする他者に対して、物事をわかりやすく伝える表現力の応用的な力を習得するという教育効果があった。 「人間教育学ゼミナール(応用)」(平成30年4月～現在に至る) 奈良学園大学人間教育学部専門科目の「人間教育学ゼミナール(応用)」(4年次配当、通年、必修4単位)を担当した。文化メディアと教育の関係について社会学的視点から分析し、考察する授業を実施した。具体的には、特別支援教育の視点を織り交ぜながら、聴覚障害者をサポートするための音声認識アプリを使用した支援方法や、セクシュアルマイノリティに関する報道番組の分析等を実施した。その結果、物事を多角的に捉え、分析し、表現するという力の醸成という教育効果があった。 和歌山大学教育学部の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「家族関係学」(平成30年10月～平成31年3月) 和歌山大学教育学部の「家族関係学」(専門科目、1年次配当、半期、選択必修2単位)において、家族に関する基本的な研究を紹介し、ペット、墓、結婚・出産・離婚、家族と離れてくらす人、LGBTなど、現代における家族に関する様々な課題を検討し、家庭科教員としてどのように教育していくかを考察する授業を行った。その結果、学生に対して、将来家庭科教員として必要とされる家族関係の多様性について柔軟にとらえる思考法や、家族に関する社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。
-------------------------------	-------------------------	---

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 修士 (文学)	平成 17 年 3 月 24 日	奈良女子大学 修第 784 号 「日本バレエ界の構造と担い手」
博士 (社会科学)	平成 25 年 9 月 30 日	奈良女子大学 博課第 539 号 「妊婦の社会学—現代日本における健康の制度化と妊娠期女性の「食事实践」—」
専門社会調査士	平成 25 年 10 月 1 日	社会調査に関する問題点や妥当性の指摘、調査企画能力、運営管理能力、報告書執筆等の実践能力の獲得を示す資格である。
2 特許等 特記事項なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 奈良女子大学女性研究者支援事業本部・教育研究支援員	平成 23 年 2 月～平成 24 年 9 月	社会心理学を専門とする、奈良女子大学生活環境学部安藤香織准教授の下で、教育・研究の支援を行った。研究面では、先生の専門とする環境配慮行動の国際比較調査の研究支援、教科書作成のための作業支援、学会発表等の支援を行った。教育面では、授業の準備、学部生の卒業研究へのアドバイスを担った。支援業務の成果として、平成 23 年度には、国内学会・国際学会での共同報告の機会を得た。
(2) 関西学院大学社会学部・研究支援者	平成 24 年 5 月～平成 25 年 3 月	関西大学社会学部村田泰子准教授の下で、研究支援を行った。村田先生とは妊産婦と食という共通の問題関心を共有していたため、本支援制度の申請段階で、支援者兼共同研究者として従事する契約をした。具体的には、論文執筆に必要な文献・資料の収集や要約、図表の作成等に従事した。その結果、村田先生は 2 本の学術論文を公表された。村田先生の論文執筆作業の支援を通して、支援者である私自身も、論理構成力のみならず、説得的な文献・データの使い方を学修する機会となった。その成果として、2 本の論文掲載が可能となった。
(3) 研究協力者	平成 25 年 4 月～平成 28 年 3 月	科学研究費補助金基盤研究 (C)「過疎と災害に resilient な妊産婦支援ネットワーク構築のための基盤研究」(平成 25 年 4 月～平成 28 年 3 月:研究代表者・田間泰子) に研究協力者として従事している。具体的には、奈良県吉野郡十津川村への共同調査の企画・調整・実施や、奈良県生駒市で実施する「妊産婦のための災害セミナー」に際して、奈良県助産師会との調整やスタッフとして参加した。
(4) 滋賀大学環境総合研究センター・リサーチアシスタント	平成 25 年 7 月～平成 25 年 9 月	滋賀大学環境総合研究センターによる「統合的湖沼流域管理においてハートウェア (心・水文化・記憶) が果たす機能の研究」(文部科学省特別教育研究経費) の一環として実施された、環境 NP0 への質問紙調査の作成とデータ入力の補助業務を担った。
(5) 奈良女子大学大学院人間文化研究科・博士研究員	平成 25 年 10 月～平成 28 年 3 月	博士論文で行った研究を展開しながら、「現代日本における食を通じた妊婦と胎児の健康管理に関する社会学的研究」という研究課題に従事してきた。在籍期間中、9 本の口頭発表と 6 本の学術論文を発表した。

(6) 滋賀大学環境総合研究センター・プロジェクト研究員	平成25年 10月～平成 27年3月	リサーチアシスタントで従事した業務の継続として、「統合的湖沼流域管理においてハートウェア（心・水文化・記憶）が果たす機能の研究」（文部科学省特別教育研究経費）の一環として実施されている、環境 NPO への質問紙調査の作成、データ入力、分析、報告書執筆業務を担当した。
(7) 平成26年度吉野町健康増進計画策定に伴う基礎事業アドバイザー	平成26年 4月～平成 27年3月	奈良県吉野郡吉野町において、健康増進計画策定に伴うアドバイザー業務に従事した。具体的には、吉野町民の健康行動の実態と課題を把握するために、統括アドバイザーの奈良県立大学看護学部入江安子准教授と協力しながら、健康推進団体へのヒアリングや健康教室の開催への支援や助言を行った。この間、吉野町健康推進協議会で2回講演を行うとともに、本事業に関連する共著論文を発表した。
(8) 奈良女子大学研究推進プロジェクト「大学広報の研究——ニーズ把握からコンテンツ構築・発信まで」統括事務局	平成26年 7月～平成 27年3月	奈良女子大学研究院人文科学系小川伸彦教授が研究代表を務める、奈良女子大学研究推進プロジェクト「大学広報の研究」の統括事務局を担当。本プロジェクトは、全学横断的に実績のあるメンバーを集め、大学広報研究という領域を包括的に深化させ、その成果を検証しつつ還元すべく、奈良女子大学の広報実践との連携の可能性を探ることを目的とする取り組みである。具体的には、広報実績とニーズの研究、コンテンツ構築方法論と応用実践、社会連携型コンテンツ構築を通じた大学ブランディングの検討、入試広報の研究に取り組む。私は、本プロジェクトの統括事務局の一員として、議事録の作成や、運営・経理業務を担当するとともに、メンバーとして大学グッズ開発にも従事した。本プロジェクトの成果として、プロジェクトメンバーによる共同論文を発表するとともに、学生・教職員・生協職員とともに新たな大学グッズ（包装紙・ビニール製手提げ袋・クリアファイル・学章最中等）を開発した。
(9) はっぴい明日流 妊産婦の為の防災を考えよう」	平成26年 12月	妊産婦のための防災について、ワークショップを行った。具体的には、「新潟中越沖地震」で被災した妊婦の声や日本助産師会等が発行する防災マニュアルを紹介しながら、居住地域の特性を踏まえた平時からできる備え等について検討した。 『はっぴい明日（あーす）の会』（Women's Future Center）
(10) 社会に活かす 子育て経験者の力～ママの仕事、ママがつくり出す！」	平成27年 2月	奈良のママが仕事をつくる会＜愛称：ナラマーシカ＞代表・井上京子氏を講師に招き、子育て経験者の力を社会に活かすための起業体験談や商品開発ワークショップを行った。（企画協力ならびに当日の司会・コーディネーターを担当） 『奈良女子大学ポストドクター・キャリア開発事業ワークスタイルセミナー』（奈良女子大学）
(11) 奈良女子大学文学部・研究員	平成27年 5月～平成 28年3月	科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディンプリン再生はいかにして可能か——デュルケム社会学を事例として」（平成27年4月～平成30年3月：研究代表者・中島道男）の推進事務局を担当。具体的な業務としては、毎月1回科研メンバー向けに配信するメールマガジン「部内報」の編集・配信作業や、共同研究者・連携研究者の旅費等に関する経理・事務作業に従事した。

(12) 研究協力者	平成30年 4月～現在に至る	科学研究費補助金若手研究「知的障害者を中心とした言語的困難を抱える人々の情報保障のあり方に関する学際的検討」(平成30年4月～令和2年3月:研究代表者・打浪文子)に研究協力者として従事している。具体的には、聴覚障害学生や留学生へのわかりやすい情報提供に関する研究についての調査企画・調整・実施等に従事している。
4 その他		
(1) 奈良学園大学人権教育研究推進委員会 委員	平成28年 4月～平成29年3月	奈良学園大学にて人権教育研究推進委員会に所属し、委員として奈良県大学人権教育研究協議会の運営等に携わった。
(2) 奈良学園大学学生支援センター運営委員会・学生委員会 委員	平成28年 4月～平成31年3月	奈良学園大学にて学生支援センター運営委員会・学生委員会に所属し、委員として、聴覚障害学生への支援整備、学生生活の実態調査、保護者懇談会の運営、学部卒業アルバムの制作などについて従事した。
(2) 奈良学園大学演劇サークル 顧問	平成30年 4月～現在に至る	奈良学園大学演劇サークルの顧問となり、学生指導をしている。平成30年度は、学園祭の行事として元宝塚歌劇団花組副組長紫峰七海さんをお招きして、トークショーとワークショップを実施した。また、同日パーサート「ヘンゼルとグレーテル」を公演した。平成30年度の部員数は2回生5名である。
(3) 奈良学園大学有志プロジェクト CHAM 顧問	平成30年 10月～	奈良学園大学人間教育学部 有志によるプロジェクト「C&C(CHAM)」の顧問となり、学生指導・支援を行っている。本プロジェクトは、セクシュアルマイノリティを中心に、教育におけるジェンダー・セクシュアリティを中心とした個性の在り方について考える会である。週1回の茶話会を実施している。これまで茶話会に参加した人数は4名程度である。
「研究助成」		
(1) 「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ——現代日本の出産・育児に関する文化社会学的研究」(研究代表者)	平成21年 4月～平成22年8月	現代日本社会における妊娠・授乳期の女性たちは、何を嗜好品ととらえどのような意味を付与しているのか。嗜好品摂取に関する悩みと楽しみとはいかなるものかについて、近畿圏在住の妊婦・出産経験者へのインタビュー調査を通じて明らかにした。 『研究奨励事業(研究助成)』嗜好品文化研究会
(2) 「助産師のライフコース・キャリアに関する社会学的研究——奈良県・福井県の事例を手がかりに——」(研究代表者)	平成21年 6月～平成22年3月	福井県と奈良県に在住する開業助産師たちにインタビュー調査を実施し、彼女たちのライフコース・キャリアの一端を明らかにした。 『平成21年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学
(3) 「妊娠・出産期の食生活への認識と実践に関する社会学的研究——近畿圏都市部・農村部におけるインタビュー調査に基づく男女間・世代間比較を中心に——」(研究代表者)	平成23年 4月～平成24年2月	「医療機関への距離と受診機会の多寡という地理的制約が、妊娠期における食の規制をどの程度左右しているのか」という仮説を検証するために、近畿圏都市部・農村部在住の妊婦や出産経験者にインタビュー調査を実施した。 『笹川科学研究助成』日本科学協会
(4) 「医療過疎地における妊娠・出産期家族の生活戦略に関する社会学的研究——奈良県農山村地域における食生活の認識と実践を中心に——」(研究代表者)	平成24年 6月～平成25年3月	「地域的制約の中での食事管理の困難さ」に焦点を当て、奈良県の農山村地域を対象に、医療機関への距離という地理的制約が、食の規制をどの程度左右するのか、という問いの解明を目指した。 『平成24年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学

（５）「妊娠期女性をめぐる食を通じた健康管理と＜母＞の変容に関する社会学的研究—母子健康手帳・母子健康手帳副読本における栄養の記述の変遷に注目して—」（研究代表者）	平成 25 年 6 月 ～ 平成 26 年 3 月	国家がいかに妊娠期の女性たちに対して、「理想の＜母＞像」を提示してきたのかについて、主に栄養に関する記述の変遷に着目して検討した。具体的には、財団法人母性衛生研究会が発行する『母子健康手帳副読本』や、『母子健康手帳』を収集・分析した。 『平成 25 年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学
（６）「食を通じた妊婦の健康管理の科学化に関する社会学的研究—「妊産婦のための食生活指針」策定過程に着目して—」（研究代表者）	平成 27 年 6 月 ～ 平成 28 年 3 月	2000 年代以降における国家による妊婦の健康管理政策の形成過程に着目して検討する。具体的には、平成 18 年に発表され母子健康手帳にも反映された「妊産婦のための食生活指針」の策定過程に着目して、医師、助産師、栄養士などの専門家たちが、それぞれの専門領域を踏まえながらどのように妊婦へのメッセージを策定しようとしたのか、また国における他の政策（「食育」をめぐる政策）とどのように関連しながら形成されたのかを明らかにした。 『平成 27 年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学
（７）「女性の健康における社会的決定要因とライフスタイルに関する研究」（研究分担者）	平成 28 年 7 月 ～ 平成 29 年 3 月	研究分担者として、「困難な状況下でも良好なライフスタイルを実践する女性たちの発掘と問題解決法の解明に関する探索的検討」という研究テーマで、シングルマザーを対象にインタビュー調査を実施した（研究代表者：女子栄養大学・林芙美）。 厚生労働省：平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金（女性の健康の包括的支援政策研究事業）

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
（著書） 1. 『教育社会学』	単著	平成 29 年 3 月	（株）ERP	教育社会学とはなにか、教育社会学の考え方と学習方法をはじめ、学校の社会的機能（知識伝達、ジェンダー、隠れたカリキュラム）、子どもをめぐる現代的課題（いじめ、不登校、教育格差）、教育と家族について解説した。さらに教育社会学の研究の方法論について概説した。最後に、教育社会学の視点が学校現場の具体的な課題を分析する上でどのように活用できるかについて展望した。 判・全頁：A5・80 ページ
2. 『フードスタディー・ガイドブック』	共著	平成 31 年 3 月	ナカニシヤ出版	食と文化・社会、食の歴史、食の思想、食をめぐる現代の危機を知るための 49 冊を紹介するブックガイドの分担執筆をした。具体的には、家政学・社会学・ジェンダー論にまたがる 2 冊の著書（表真美『食卓と家族—家族団らんの歴史の変遷』、松島悦子『子育て期女性の「共食」と友人関係』）について、本の要約と限界、研究・教育に向けての展開可能性などを記載した。 安井大輔編（担当：分担執筆、範囲：表真美『食卓と家族—家族団らんの歴史の変遷』、松島悦子『子育て期女性の「共食」と友人関係』 p60-69） 判・全頁：A5・292 ページ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文)				
1. 「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ——現代日本の出産・育児に関する文化社会学的研究」	単著	平成 23 年 4 月	嗜好品文化研究会・『平成 21 - 22 年度嗜好品文化研究会研究奨励事業報告書』pp. 1-20.	妊娠中の「望ましい飲食物」という規範が、女性たちの情動にどのような影響を与えるかについて分析をした。具体的には、「自分は好きだが、胎児のためには良くない」という認知的不協和をどのように解決しているかを実証的に検証した。その結果、女性たちは、「自分たちが意識的・自発的に欲するもの」を摂取する場合に、罪悪感と満足感という両義的な情動を抱えることが明らかになった。加えて、逸脱的な摂取行動に対する罪悪感の解決方法として、飲食物の意味づけや摂取行動を柔軟に変化させていることが示唆された。
2. 「出産の医療化論再考——『妊婦中心の健診』と助産師教育・卒後研修にみる女性の抵抗の限界——」(査読付)	単著	平成 25 年 2 月	社会学研究会・『ソシオロジ』57(3) pp. 73-89.	ヘルシズム論および教育制度分析の視点から、助産師の再生産システムの検討を通して、従来の出産の医療化論を再考することを目指した。特に、助産師の教育内容の高度化や国家試験作成メカニズムと助産師による妊婦健診の増加との相関関係を分析した。その結果、助産師による妊婦健診は、正常な経過をたどる女性にとって「脱医療化」ではなく「医療化」を徹底する作用があると指摘した。
3. 「妊娠期女性の食事実践に関する研究——『パーフェクト妊婦』と情報収集——」(査読付)	単著	平成 25 年 3 月	奈良女子大学社会学研究会・『奈良女子大学社会学論集』20, pp. 83-101.	教育社会学の知見である「パーフェクトマザー論」を、妊娠期女性に当てはめて検討するために「パーフェクト妊婦」という概念を創出した。本概念を用いながら、妊娠期女性の食事を通じた胎児の養育責任の様相を、行動の判断となる情報収集や活用に着目して検討した。その結果、二つの知見がえられた。女性たちは、参照可能な情報を最大限収集しているだけでなく、自分にとって信頼できるという質を重視した情報収集を行っていた。また、高学歴女性であっても、収集した情報は胎児への自己犠牲のみならず、自分のニーズの根拠としても用いられる可能性が示唆された。女性たちは、各自の可能な範囲で「パーフェクト」な実践を行っていた。
4. 「妊婦の社会学——現代日本における健康の制度化と妊娠期女性の『食事実践』」(博士論文)	単著	平成 25 年 9 月	奈良女子大学	現代社会において妊娠という営みが、どのように位置づけられ、意味づけられているかの解明を目指した。特に、教育社会学の知見である「パーフェクトマザー論」を、妊娠期女性に当てはめて検討するために「パーフェクト妊婦」概念を創出し、妊婦の「食事実践」のあり方に焦点を当てた。複数の質的調査法を用いて調査研究を行なった結果、次の知見が示された。まず、胎児の養育責任の「個人化」の条件や仕組みと、「社会化」の可能性である。次に、妊婦という近代社会の個人概念から捨象されてきた存在の社会的位置づけや意味づけの重要性である。最後に、妊婦を中心に位置づけた人間社会の再構成を目指す理論的・実証的研究の可能性である。

判・全頁：A4・232 ページ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5.「奈良県山村における出産の施設化の様相——1960年代～1980年代に着目して——」	単著	平成 26 年 8 月	滋賀大学環境総合研究センター・『研究年報』11(1)pp. 89-97.	出産の施設化が地域によってどのように異なっているのかを、奈良県宇陀郡及び宇陀郡 A 村を対象に検討した。その結果、以下の三点が明らかになった。第一に、宇陀郡全体の出産の施設化は「病院出産型」施設化であることが示された。第二に、宇陀郡内においても施設化過程に地域差が見られた。具体的には、町部は「病院出産型」施設化であるのに対し、村部では「診療所出産型」施設化であった。第三には、A 村では、診療所と村内の有床助産所が出産の施設化をけん引していた。
6.「調理実践にみる妊娠期女性の経験と意識の変容 —ある初産婦の食事日記とインタビューを事例として—」(査読付)	単著	平成 26 年 11 月	日本女性学研究会・『女性学年報』35, pp. 1-26.	妊娠期の女性が、調理を通じてどのように胎児への配慮と家族への配慮を実践しているのか、についての解明を目指した。具体的には、パーフェクト志向の高い初産婦 1 名に実施した日記調査とインタビュー調査に基づきながら、彼女が直面した調理をめぐる困難とそれに伴う家族のサポートの変化、当人の認識の変容について検討した。その結果、(1) 妊娠期においては、自分の身体を通じた胎児への配慮と、夫をはじめとする眼前の他者への配慮の両立が、妊婦の悩みの要素になるという点や、(2) 妊娠期において望ましいとされる食生活の実現には、妊婦自身のみならず家族も、調理に関する知識の幅や技術の習得程度が重要な要素となる点が明らかになった。
7.「インターネットコンテンツによる大学広報—奈良県内諸大学を事例とした比較分析—」	共著	平成 26 年 12 月	奈良女子大学文学部・『奈良女子大学研究教育年報』11, pp. 9-33.	奈良県内諸大学におけるインターネットコンテンツによる情報発信の現状の検証を通して、諸大学の参考となる知見の提示と奈良女子大学が学ぶべき点の解明を目指した論考。担当節では、大学が地域社会からいかにイメージを得ながらブランディングを行っているかについて、地域連携とイメージ的側面としてのキャッチコピーや図像の活用に着目して検討した。その結果、奈良女子大学の特徴として、以下の点が明らかとなった。まず、地域連携に関する情報発信については、社会連携センターが独自のウェブサイトを通して積極的に行っていることが明らかとなった。次に地域イメージの活用については、「奈良」という地域性を活かしたキャッチコピーと、大学独自の資源である記念館(国重要文化財)イメージを融合した図像が用いられていた。地域性と大学独自のブランドを組み合わせた情報発信の可能性について指摘した。 共著者：小川伸彦、藤野千代、磯部敦、井口高志、吉田信也、松永光代、 <u>大淵裕美</u> 、 <u>宮路淳子</u> 本人担当部分：「8. 奈良と大学—地域連携とイメージ活用—」(単著) pp. 25-28. (論文執筆)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
8.「地域診断における GIS の活用」	共著	平成 27 年 3 月	奈良県立医科大学医学部看護学科・『奈良 県立医科大学医学部 看護学科紀要』 11, pp. 3-13.	奈良県吉野町保健センターでの地域診断 で試みた GIS 分析例を紹介し、今後の GIS の活用方法について解説した。その結果、 GIS は地域の健康情報を可視化し、住民 と協働できる地域診断づくりにつながる ことが分った。留意点としては、GIS を 用いて地域における地理的分布を解釈す るには、人口分布との関連で捉える必要 がある。また、GIS の活用により空間的 従属性を視覚化することが出来るので、 行政の区分けである小地域の分類だけ ではなく、隣接性(近接性)も考慮した地域 の区分けの必要性、及び空間演算ツール の活用が挙げられた。 共著者：入江安子、南由貴代、上浦千明、 山下延代、下迫由美、谷口葉那、 <u>大淵裕 美</u> （共同研究につき、本人担当部分抽出 不可能）
9.「女性の食生活をめぐる規定要因——子どもの 存在・社会的要因の効果——」（査読付）	単著	平成 27 年 10 月	平成 27 年 10 月 奈良 女子大学家政学会・ 『家政学研究』 62(1), pp. 1-11.	子どもの存在が女性の食生活を規定する 要因となりうるのかについて、女性の社 会的要因を考慮しながら検証した。NHK 放送文化研究所が 2009 年に実施した「健 康に関する世論調査」の個票データのう ち、20～49 歳の女性 663 名を分析対象と してロジスティック回帰分析を行った結 果、次の点が明らかになった。まず、子 どもの存在は、多様な女性の食生活の中 でも 1 日 3 食摂取するという食生活のリ ズムと、原産国や生産地に配慮するとい う食の安全性というごく限られた局面に 影響していた。それに対して、社会的要 因は女性の食生活の多方面に作用してい た。以上より、女性の食生活改善には、 社会的要因を考慮したアプローチが有効 である可能性が示された。
10.「妊婦にとって〈嗜好 品〉とは何か」（査読付）	単著	平成 28 年 3 月	嗜好品文化研究会・ 『嗜好品文化研究』 1, pp. 93-101.	妊娠を契機に、「胎児にとって良くない」 という理由から禁忌に分類される飲食物 に対して、女性がどのように認識や行動 を変化させるのかを検討した。その結果、 妊婦にとっての〈嗜好品〉とは、妊娠前 に常用していたもので、妊娠後は禁忌の 対象となるにもかかわらず、親近と疎遠 の間をゆらぎながらも当該期間中に断続 的に摂取し続ける飲食物であり、胎児に とっては良くないという点で罪悪感を覚 えつつも、自分の楽しみや気分転換のた めに摂取するものであることが明らかと なった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11. 「食を通じた妊婦と胎児の健康管理に関する歴史的変容－母子健康手帳における栄養の記述を中心に－」	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学・『奈良学園大学紀要』5, pp. 13-25.	公的メディアのひとつである母子健康手帳に着目し、国家による食と栄養を通じた妊婦と胎児の健康管理の変遷を検討した。その結果、以下の点が明らかとなった。第一に、国家が示す栄養を通じた望ましい妊婦像が、時代とともに高度化していた。第二に、記述内容の科学化は、妊婦間における理解の格差を引き起こす可能性がある。第三に、呼称の女性化は、栄養と女性の結びつきを強化するジェンダー化作用のみならず、妊婦や胎児の健康状態に影響する諸要因の複雑性や社会的責任を隠蔽し、妊婦の自己責任へと矮小化する作用がある。
12. 「なぜ学校に行く気がしないのか―『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査・2012』の分析」	単著	平成 29 年 3 月	奈良女子大学社会学教育研究会・『奈良女子大学社会学教育研究論集』1, pp. 7-16.	中等教育を受ける生徒の登校回避意識が何によって規定されているのかを、「中学生・高校生の生活と意識調査 2012」を用いて検討した。その結果、中等教育においては、中学生よりも高校生の方が有意に登校回避意識が高いことが明らかとなった。また、学校回避意識には学校環境要因を含めた複数の要因が影響していることが確認された。特に、子どもにとっては、学級や家庭という複数の人々によって構成される場の安定性の程度によって、登校回避意識が左右されることが示唆された。このような要因を考慮した、教育現場における生徒対応や、家庭における保護者の関りの重要性を指摘した。
13. 「困難な状況下でも良好なライフスタイルを実践する女性たちの発掘と問題解決法の解明に関する探索的検討」	単著	平成 29 年 3 月	『厚生労働科学研究費補助金 女性の健康の包括的支援政策研究事業 女性の健康における社会的決定要因とライフスタイルに関する研究 平成 28 年度 総括・分担研究報告書』, pp. 95-105.	困難な状況下でも主体的な健康づくりを実践する者（ポジデビ）の行動特性の解明を行った。 具体的には、身体的・精神的な主観的健康感が良好なシングルマザー15 名を対象にインタビュー調査を実施した。その結果、ポジデビ共通の特徴として、心身の健康を維持する行動、サポートネットワークの保持、経済的資源の確保が明らかになった。さらに、先鋭的なポジデビの特徴として、自らの力で問題解決する志向性、徹底的な情報収集に基づく意思決定、経済的資源の確保や節約法に関する知識・方法を保持し、暮らしを豊かにする行動の習慣化、確立されたライフスタイルと他者への発信が析出された。本研究を通じて、社会資源を生活資源に活用する行動特性が見られることが明らかとなった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14. 「「保育者・教員養成機関と『特別支援教育』—特別なニーズを持つ幼児・児童・生徒・学生のアクティブ・ラーニングを軸に」(査読付)	共著	平成 30 年 2 月	淑徳短期大学部・『淑徳大学短期大学部研究紀要』58, pp. 43-55.	幼児教育から大学教育までの各教育段階における特別支援教育を概観し、特別なニーズを持つ幼児・児童・生徒・学生のアクティブ・ラーニングの現状と課題を中心に考察した。その結果、当事者の視点を考慮した授業実践が全ての教育段階で求められることが明らかになった。加えて、学級経営、個別支援、専門家の育成、地域の専門機関との連携など総合的な支援が課題であることも指摘した。さらに、特別支援教育の方針を理解し普及を推進するにあたっての、これからの保育者および教員養成機関における課題を示唆した。 著者：打浪文子、大淵裕美 執筆担当：2-2「義務教育課程（初等・前期中等教育）における特別支援教育」、2-3「後期中等教育（高等学校）における特別支援教育」、2-4「高等教育（大学等）における特別支援教育」
15. 「多文化共生保育の実践に関する一考察—大阪府 A 保育園における先駆的事例から」	共著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学・『奈良学園大学紀要』8, pp. 21-31.	オールドカマーを対象とした保育実践に着目しながら、エスニシティの多様化が進む保育現場における保育者のあり方の一端を検討した。その結果、次の 2 点が明らかとなった。ひとつは、文化摩擦や保育者自身のアイデンティティに踏み込んだ園内研修の重要性である。このような園内研修の実施は、多様なエスニシティやアイデンティティをもつ保護者への支援にも有効であることが示唆された。もうひとつは、保育者間での意見の相違や対立などを踏まえた「聴きあう」経験の重要性である。この経験は、保育者にとってコミュニケーション能力の醸成に一定程度寄与する可能性が示された。 著者：大淵裕美、オチャンテ・村井・ロサ・メルセデス、土谷長子、高木悠哉 執筆担当：本文全文を執筆。
(その他) 1. 「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ——現代日本の出産・育児に関する文化社会学的研究」	—	平成 22 年 5 月	『第 8 回嗜好品文化フォーラム』（メルパルク京都）	現代日本社会における妊娠・授乳期の女性たちは、何を嗜好品ととらえどのような意味を付与しているのか。嗜好品摂取に関する悩みと楽しみとはいかなるものかについて考察した。
2. 「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ—『悪の魅惑論』を手がかりとした嗜好品概念の再検討—」	—	平成 22 年 12 月	『2010 年度奈良女子大学社会学研究会秋の例会』（奈良女子大学）	妊婦・授乳婦たちの食生活に注目して女性たちの逸脱的な摂取行動や欲望がどのようなメカニズムによって生じるのかを、「悪の魅惑論」を手がかりに検討した。

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
3.「妊娠と食事をめぐる悩み・楽しみ——ある初産婦の妊娠日記とインタビューを事例に——」	—	平成 23 年 7 月	『現代風俗研究会 2011 年度第 4 回例会』（徳正寺）	妊娠期の女性たちは、世相によって変化する食物規制や推奨にもまれながらどのような食生活を送っているのかについて、ある初産婦の妊娠日記とインタビューを手がかりに検討した。
4.「妊婦・授乳期女性の食生活に見る乳児・胎児への配慮と欲望との葛藤——近畿圏でのインタビュー調査を手がかりに——」	—	平成 23 年 9 月	『日本家族社会学会 第 21 回大会』（甲南大学）	妊娠期・授乳期の女性たちの食生活の実践を明らかにする。女性たちは妊娠・授乳をきっかけにどのようなコンテクストに置かれるのか。相互交渉の過程の中で、社会規範はいかに立ち現れるのか。女性の欲望が先鋭化した摂取状態である「過剰摂取」はなぜ発生するのか。これらの点について詳細に検討した。
5.「中国・日本における環境配慮行動の規定因の予備的分析：他者の実行度認知に着目して」	—	平成 23 年 9 月	『日本社会心理学会 第 52 回大会』（名古屋大学）	他者の実行度認知が環境配慮行動に及ぼす影響を、日本と中国との規定因の比較を通じて検討した。その結果、環境配慮行動の実行度については、日中間では大きな差は見られなかった。 報告者：安藤香織・大淵裕美・磯部香
6. ‘Determinants of Pro-Environmental Behaviors in China and Japan -The Role of Estimation of Others’ Behaviors’ （日中における環境配慮行動の規程要因—他者の実行度認知に着目して）	—	平成 23 年 12 月	“The Second International Conference of Indigenous and Cultural Psychology” (University of Udayana, Indonesia)	他者の実行度認知の中でも、友人の実行度認知と地域住民の実行度認知が、環境配慮行動に及ぼす影響について、日本と中国との規定因の比較を通じて検討した。その結果、環境配慮行動の実行度については、日中ともに、友人の+E21 実行度認知の方が強い影響がみられることが明らかとなった。 報告者：ANDO Kaori・OHBUCHI Yumi
7. ‘Practice of Eating Strategies among Pregnant Women: Accommodation and Resistance to Medical Knowledge’ （妊娠期女性の食事戦略に関する実践—医療知への順応と適応に着目して）	—	平成 24 年 2 月	“ANU Japanese Studies Graduate Summer School” (Australian National University, Australia).	妊娠期の女性たちがどのように医学的アドバイスに順応し、抵抗しているのかを、専門知—素人知の概念を用いながら、食生活の実践に注目して検討した。
8.「青年期における性教育方法の検討」	—	平成 24 年 7 月	『第 27 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	ピアカウンセリングに代表される、主体的な参加を可能とする性教育方法の実施度や有効性を、質問紙調査を通じて検討した。その結果、主体的な参加型性教育方法は取り入れられていないことが明らかになった。主体的に参加できる性教育方法導入（ピアやグループワーク）にあたり、個人の経験や羞恥心などを十分考慮した上で、方法を決定することの重要性が示唆された。 報告者：田中智子・新谷祐美・西上紫萌・中村喜代美・大淵裕美

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
9.「A市・B幼稚園における幼児期の性教育について—保護者の対応に関する実態調査—」	—	平成 24 年 7 月	『第 27 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	幼児期の性教育に関する実態調査を、幼稚園の保護者を対象に質問紙法を用いて行った。家庭での性教育の実際を知り、幼児期の性教育の改善点や助産師が出来る援助の方向性を明らかにすることを目指した。 報告者：友田果那・川口恵理・仲谷依世・中村喜代美・ <u>大淵裕美</u>
10.「妊娠期の母親から見た夫のサポートと求める内容の把握」	—	平成 24 年 7 月	『第 27 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	妊娠期の母親からみた夫のサポートの現状と母親の求める育児に注目し、実態調査を行った。助産学の立場から、早期から夫の育児参加行動を促進することが、どのように母親の良好な妊娠経過につながるのかについて模索した。 報告者：志賀加奈子・染川真美・神田菜々子・中村喜代美・ <u>大淵裕美</u>
11.「妊娠・出産研究における食のアプローチの意義」	—	平成 24 年 7 月	『第 14 回奈良女子大学社会学研究会』（奈良女子大学）	妊娠・出産に関する研究群のうち、主に家族社会学における研究の到達点と課題を整理したうえで、食という視点からアプローチする意義について検討した。
12.「出産の医療化論再考—『妊婦中心の健診』と助産師国家試験作成プロセスにみる女性の抵抗の限界—」	—	平成 24 年 9 月	『日本家族社会学会第 22 回大会』（お茶の水女子大学）	ヘルシズム論および教育制度分析の視点から、助産師の再生産システムの検討を通して、従来の出産の医療化論を再考することを目指した。特に、助産師の教育内容の高度化や国家試験作成プロセスを分析した。その結果、助産師による妊婦健診は、正常な経過をたどる女性にとって「脱医療化」ではなく「医療化」を徹底する作用があると指摘した。
13.「妊娠期女性の食事戦略—ある初産婦の食事日記を手がかりに—」	—	平成 24 年 10 月	『第 32 回家族関係学セミナー』（岡山大学）	妊娠期の女性に見られる「食事戦略」を、ある初産婦の食事日記とインタビューデータをもとに検討した。具体的には、妊娠中の食事選択や料理行動に影響を与えた「塩分制限」と「絶対安静」の二つの困難に着目し、彼女が置かれた状況のなかで、どのような戦略をとったのかを考察した。
14.「妊娠期女性の食事実践に関する研究 —『パーフェクト妊婦』と情報収集—」	—	平成 25 年 2 月	『2012 年度第 3 回生活経営学部会・関西地区会』（同志社大学）	妊娠期における女性たちの食事実践について、行動の判断となる情報収集や活用に着目しながら、女性たちによる胎児の養育責任の様相を、「パーフェクト妊婦」という概念を用いて明らかにした。
15.「出産経験と食事実践に関する検討—『NHK 健康に関する世論調査』の二次分析を手がかりに—」	—	平成 25 年 6 月	『2012 年度第 4 回生活経営学部会・関西地区会』（武庫川女子大学）	出産経験の有無が女性の食事実践にどのような影響を与えるのかについて、「健康に関する世論調査」の二次分析を通じて検討した。
16.「出産の医療化論再考」	—	平成 25 年 7 月	『第 15 回奈良女子大学社会学研究会大会』（奈良女子大学）	2013 年 2 月に『ソシオロジ』に掲載された論文の合評会を行った。具体的には論文の概要について説明した後、コメンテーター 2 名との質疑の後、フロアからの質問に回答した。

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
17.「妊婦健康診査の満足度に関する現状と課題―実施者・施設・環境に注目して―」	—	平成 25 年 7 月	『第 28 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	妊婦健診の内容、方法、実施者の違いが妊婦たちの満足度に与える影響と、満足度を高めるために必要な内容を明らかにするために文献研究を行った。 報告者：田中佐世・野井歩・村田ちか子・ <u>大淵裕美</u>
18.「子どもを亡くした親・家族への支援―向き合い・寄り添える看護を目指して―」	—	平成 25 年 7 月	『第 28 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	死産を経験した産婦や家族への支援の現状と課題を明らかにするために、文献検討を行った。その作業を通じて、今後必要とされる支援の可能性を示した。 報告者：南和弥・石原慶子・渡辺ひろみ・ <u>大淵裕美</u>
19.「医療過疎と少子化のエスノグラフィー―奈良県南部を事例に―」	—	平成 25 年 9 月	『第 20 回関西若手ルーラル研究会』（キャンパスプラザ京都）	少子化と医療過疎が進む農山村地域に住む妊婦たちの経験を検討した。具体的には、奈良県の東部・南部の県境にある宇陀郡御杖村、吉野郡野迫川村、吉野郡上北山村に在住する女性たちを取り上げる。村内出身者、都市部から村に移住した者、村から都市に移住した者の 3 つのタイプに分け、それぞれの経験の特徴を抽出する。その作業を通して、空間的制約と食事実践を通じた妊婦の実践についての知見の析出を試みた。
20.「妊婦をめぐる食を通じた健康管理と＜母＞の変容―母子健康手帳における栄養の記述の変遷を中心に―」	—	平成 25 年 10 月	『第 33 回家族関係学部会セミナー』（奈良大学）	国家による妊婦の管理の歴史的変遷について検討した。具体的には、母子健康手帳における栄養に関する記述の変化と栄養行政の変遷の分析を通して、食を通して胎児への配慮がどのように強化されていくのかを明らかにした。その作業を通じて、国家が示す理想的な食事を行う妊婦像＝＜母＞のイメージがどのように変化してきたのかについて考察した。
21.「戦時下における身体を通じた少国民の形成―島田豊・児童舞踊・愛国行進曲―」	—	平成 25 年 12 月	『2013 年度奈良女子大学社会学研究会例会』（奈良女子大学）	戦時下（日支事変前後）における子どもの国民化の一側面を明らかにする。具体的には、大正中期より勃興し、昭和初期から終戦にかけて発展をとげた児童舞踊に着目する。特に、「児童舞踊」を公称したとされる島田豊（1900-1984）に焦点を当てながら、「愛国行進曲」「少国民愛国歌」を事例に検討する。以上を通して、「非常時」に備えた子どもの身体形成が、メディアによる児童舞踊の産業化とともになされた点を指摘した。
22.「若年層男女における食の安全性配慮に関する規定要因―「健康に関する世論調査 2009」の分析―」	—	平成 26 年 1 月	『2014 年第 2 回生活経営学部会関西地区会』（武庫川女子大学）	20～30 代の若年層は、出産・育児などの次世代の育成を担う世代である。この世代層が、主体的な生活者となるためには、どのような点に考慮して支援していけばよいのだろうか。本報告では、その前段階として、若年層における食品の安全性に配慮した行動にどのような要因が影響しているのかを量的手法を用いて検討した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23. ‘Influence of Childcare Experience on Women’s Dietary Habits: Analysis of Public Opinion Poll on Health’ (女性の食生活への育児経験の影響―「健康に関する世論調査の分析」)	—	平成 26 年 7 月	“XVIII ISA World Congress of Sociology” (パシフィコ横浜)	出産経験の有無が女性の食事実践にどのような影響を与えるのかについて、NHK「健康に関する世論調査」の二次分析を通じて検討した。その結果、「三食抜かずに食べる」という食事回数のみが出産経験の有無によって有意な差が見られた。
24. ” Acquisition of Ballet Technique: Collective Teaching in the Ballet Studio and Social Control (バレエ技術の習得―バレエ教室での集団指導と社会的コントロールを中心に)	—	平成 26 年 7 月	“XVIII ISA World Congress of Sociology” (パシフィコ横浜)	日本のバレエ教室を事例として、集団学習の際に生じる、他者に向けられた指導を、生徒たちはどのようなきっかけやプロセスを通して、自分の技術の向上へと結びつけていくのかについて検討した。その結果、集団でバレエを学習する生徒たちは、他の生徒に対する教師の指導を過大に理解するだけでなく、他者の身体の変化を観察して分析するという知覚や思考と、自らの身体の動作を結びつける訓練を繰り返しながら、技を獲得していることが示唆された。
25. 「助産師が行う性教育のあり方～思春期におけるピアエデュケーションでの助産師の介入」	—	平成 26 年 7 月	『第 29 回奈良県母性衛生学会』(奈良県医師会館)	思春期の性教育の実態や方法に関する文献検討を行った結果を報告した。具体的には、近年効果的な教育方法と言われているピアエデュケーションに着目しながら、助産師が行う性教育の有効性や意義について検討した。 報告者：秋月志保・岩本理沙・野口玲菜・梶間敦子・ <u>大淵裕美</u>
26. 「出生前診断を受検する妊婦と家族へのケア―文献検索による研究―」	—	平成 26 年 7 月	『第 29 回奈良県母性衛生学会』(奈良県医師会館)	出生前診断を受ける妊婦や家族の意思決定を支える支援の現状と課題を明らかにするために、文献レビューを行った。その作業を通じて、今後の支援の方向性を検討した。 報告者：飯塚望水・奥田恵美・小崎美智代・梶間敦子・ <u>大淵裕美</u>
27. 「外国人の日本での出産における問題点とその関わり」	—	平成 26 年 7 月	『第 29 回奈良県母性衛生学会』(奈良県医師会館)	在日外国人女性の妊娠・出産・育児に対するニーズや心理、外国人に対する母子保健、その他の医療制度や医療者側のケアの必要性に関する文献検討を行った。在日外国人女性が抱える課題を明らかにし、今後のケアやかかわりに活かす視点の析出を試みた。 報告者：谷口侑子・桑原萌・吉本有里・梶間敦子・ <u>大淵裕美</u>
28. 「現代日本における妊娠期女性の調理実践と意識の変容」	—	平成 27 年 2 月	『フィールドネット・ラウンジ企画「フィード(feed)×フィールド(field)：食べさせる／られる行為から社会関係を読み解く」』(東京外国語大学)	妊娠期女性の調理に注目し、家族との相互作用の結果が食卓のメニューにどのように現れるのかを検討し、その作業を通して、食べさせる／食べられる行為と社会関係との関連について考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
29.「システム活用で形成したキャリアー奈良女子大学大学院博士課程での経験を通じてー」	—	平成 31 年 1 月	『博士のキャリアデザイン』（奈良女子大学）	科学技術・学術政策研究所と奈良女子大学の共催ワークショップ「博士のキャリアデザイン」に招聘され、講演およびパネリストとして登壇した。博士課程時代ならびにポストドクター時代に、学内外の制度等を活用しながらいかにキャリアを形成したかについて講演した。
30.「知的障害者向けのわかりやすい情報の応用可能性に関する予備的検討ー留学生・聴覚障害を有する学生等を対象にー」	—	平成 31 年 3 月	『第 43 回社会言語科学会研究大会』（筑波大学）	知的障害者が編集委員となって編集・作成に参加していた情報媒体を用いて、知的障害者向けに作成されたわかりやすい情報媒体が留学生や聴覚障害学生など日本語に関する困難を抱える人々にとって有効かどうか、および対象者らの「ステージ」のような形態による視覚的・文章の双方に配慮されたわかりやすい情報へのニーズや、わかりやすさに関する意識の相違を明らかにした。 報告者：打浪文子・大淵裕美
「書評論文」 1.「食制研究の手引書としての「三度の食事」」	単著	平成 24 年 3 月	奈良女子大学民俗学研究会『柳田國男を読むー女性研究者による 柳 田 再 読 ー』pp.17-20.	柳田國男『村と学童』に所収されている「三度の食事」に関する書評論文。「三度の食事」を柳田の食制研究のエッセンスとしてとらえ、稲作労働と民俗語彙に注目して紹介した。さらに、後続の研究者からの評価についても指摘した。
「その他論文」 1.「教育社会学といじめ経験ー『考え、議論する道徳』に生かす可能性」	単著	平成 29 年 2 月	(株) ERP『教育 PRO』47(3), pp. 20-21.	「いじめ」の要因について、「家庭格差論」について紹介するとともに、教育社会学で行われている教育調査の手法である、徹底的な議論による自らの仮説の構築と、アンケートやインタビュー調査に基づく実証的な検証方法について概説した。教育社会学の視点や方法の導入は、新学習指導要領の「考え、議論する道徳」に寄与する可能性を指摘した。
2.「教育社会学の教育実践に関する一考察ー『高校生の中途退学』を手がかりに」	単著	平成 29 年 3 月	奈良女子大学社会学教育研究会『奈良女子大学社会学教育研究論集』1, pp. 1-6.	高校生の中途退学を事例とした、教育社会学の教育実践について論じた。具体的には、高校生の中途退学に関する実態や学校教育内在的要因仮説、社会階層仮説等を概観し、主体的な学習を行うためのアクティブ・ラーニング型授業の提案を行った。その作業を通じて、高等教育における教員養成課程での学生指導の重要性を示すと共に、中等教育における社会学教育の可能性も展望した。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 岡 本 恵 太

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
教育学、教科教育学		国語科教育、教育実践学、言語活動、論理的思考力、言葉とコミュニケーション
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 (1)「つけたい力を明らかにして思考力を育てる授業～見通しと振り返りを位置づけて」	平成 26 年 4 月 ～平成 27 年 3 月	三田市教育委員会の委嘱を受けた「三田市教育研究グループ」として、教師と学習者がともに、学習を通して「つけたい力」を明確にして思考力を高める授業の筋道を研究した。また、研究の成果を「三田市教育研究グループ研究集録」の国語部会の章（各年度 4 頁分、本人担当分 27 年度 4 p 分）として発表するとともに、国語部会として独自に『実践事例集』（平成 26 年度は総頁数 48p 本人担当 8p 分・平成 27 年度は総頁数 54p 本人担当分 10p・平成 28 年度は総頁数 48p 本人担当分 8 p）を編集、発行し若い教員が日々の実践に取り組む際の手がかりとなるようにした。 研究における「言語活動」については、「学習者の願いや目的を言語を用いて具現化するプロセス」としてとらえている。ここにおける「願い」には達成したい活動の成果物とともに、学習者自身が「つけたい力」も含まれる。こうした「言語活動」を「学習者の願いや目的」に向けて導く資質・能力となる「論理的思考力」を育てるための言語活動の工夫改善に関する研究を継続している。 「論理的思考力」を育てるための、授業における具体的な手立てとしては、第一に「めあて」と「ふりかえり」を位置づけることである。第二に、思考の過程をワークシートなどを通して具現化することが有効である。第三に、児童が自らの「PDCA サイクル」を意識して学習に取り組むことである。これは、児童がプランをたて、実行し、その過程を評価して、計画を修正する一連のプロセスを指す。この際、教師は学習資料・ワークシート・教室掲示などを通して「言語活動のゴール」「言語活動を通してつけたい力」「言語活動の方法」を目に見える形で提示する。児童は、こうした支援を手がかりに、主体的・協働的に自分の言語活動をよりよくしていくことができる。具体的な言語活動としては「ランキングノート」「フィッシュボーンシート」など思考ツールを活用した授業実践の提案を継続して行っている。

(2)「ともに学び合い高め合う子に～伝え合う場の設定～」	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	現任校において、国語科における思考力や伝え合う力を育てるために全校で取り組んでいる実践研究である。学習者一人ひとりが主体的に課題を持って探求し、協同でその課題に挑戦しながら高め合っていく資質・能力を身につけた児童を育成することを主題に掲げている。各年度 2 月に公開研究発表会を実施するとともに、研究紀要を発行している。研究授業として、平成 27 年度は「世界で一番美しいぼくの村（東京書籍）・4 年生」、平成 28 年度は「町の幸福論-コミュニティデザインを考える-（東京書籍）・6 年生」、平成 29 年度は「木龍うるし（東京書籍）・4 年生」を公開し、その成果については、研究紀要にまとめている。 「言語活動の充実」を中心とした実践研究においては、様々な言語活動に含まれる言語能力を抽出し、分類整理を行った。さらに、経験年数の浅い教員も実施することができる「共に学び合い高め合う」ことを具現化するための言語活動に関するモデルプランを提案し続けている。成果として「ランキングノート」が挙げられる。これは学習者が「自分の読み取りたい項目」について柱をたて、ランキング形式で特徴的な叙述を取り出し、自分の解釈を書く活動である。「ランキング」という形式をとることで、学習者の選択・判断・吟味という思考がはたらくとともに、「自分の読み取りたいこと」を簡潔に表すことができるようになっていく。この活動は、主に中学年で取り組まれている。また、従来から取り組まれてきた「人物紹介」を書くことを通して人物像と特徴的な叙述を結びつけた実践も、低学年から中学年で実施されるようになってきた。
2 作成した教科書・教材 (1) 『ひとり学びへの手引き』	平成 29 年 4 月	三田市教育委員会が市内の高学年児童に向けて発行している「ひとり学びへの手引き」の国語科に関する章のうち「パネル討論をしよう」「新聞記事を書こう」の項目を分担執筆した。 「ひとり学びへの手引き」は市内の児童が自分自身で問題を持ち、解決する力を育てることを目指した学習資料である。国語・社会・理科・算数・情報のそれぞれの分野ごとに、家庭学習の手法や児童が自ら調べ方・表現の仕方を解説している。 「パネル討論をしよう」では〈論点をどのように探るか〉〈どのような視点で議論を組み立てればいいのか〉について児童が一人で学習が進められるよう記述した。これは、〈述べようとする事柄〉について「メリット」「デメリット」および「デメリットの解決方法」の三点から情報の整理や意味づけを行うことである。具体的な手法として「メリット」「デメリット」「デメリットの解決方法」を表にまとめることを提案した。 「新聞記事を書こう」では、まず新聞記事の特徴が「情報を客観的にとらえるための文章」であることを説明し、さらにその書き方について解説した。例えば、委員会の活動に

		ついて「新聞記事」としてまとめるにあたっては、客観的な「記者の目」で書く必要がある。そのためには、正確な日付や数量表現、主語や文末などの文体上の工夫が必要になる。具体的な文例を提示しながら、高学年児童が学校行事などを題材にして、一人で新聞記事を書くことができるように記述した。 (総頁数 92 頁、本人担当分 4 頁)
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 兵庫教育大学大学院「小学校英語活動プログラム(小学校英語活動指導者ユニット)」履修	平成 26 年 3 月	兵庫教育大学大学院において小学校英語活動の指導者育成を目的としたプログラムを履修した。プログラムの一環として現任校(当時:志手原小学校)における研究授業「オリジナルカレンダーを作ろう」を実施した。ここで目指したことは、「動きを通して〈考える〉英語活動」である。これは、英語活動で取り組まれるアクティビティの中に、選択・判断・吟味といった思考の要素を導入しようとするものである。「動きを通して〈考える〉英語活動」を具現化するために、即興演劇の手法を活用した「プレゼントゲーム」や、友だちに英語でインタビューする時の手順を絵(ピクトグラム)で目に見える形にしたワークシートを開発した。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 なし		
5 その他 特記事項なし		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1. 免許・資格 (1) 小学校教諭 1 級普通免許 (2) 中学校教諭 1 級普通免許(社会) (3) 高等学校教諭 2 級普通免許(社会) (4) 小学校教諭専修免許 (5) 中学校教諭専修免許(社会)	昭和 61 年 3 月 昭和 61 年 3 月 昭和 61 年 3 月 平成 26 年 4 月 平成 26 年 4 月	昭 60 小 1 普第 1028 号(大阪府教育委員会) 昭 60 中 1 普第 4361 号(大阪府教育委員会) 昭 60 高 2 普第 5063 号(大阪府教育委員会) 平二六小専修第 11 号(兵庫県教育委員会) 平二六中専修第 10 号(兵庫県教育委員会)
2 特許等 特記事項なし		
3 実務の経験を有する者について特記事項 (1) 三田市教育研究グループ研究員(国語)	・平成 16 年～平成 23 年 3 月 ・平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月	三田市教育委員会の委嘱を受けて、国語科における思考力の育成を軸に実践研究を行った。各年度の 3 月、各教科・領域の研究グループ交流会でその成果を発表するとともに、『活動報告』の冊子をまとめている。また、三田市の児童に自分自身の力で学ぶ力を育成することを目指して『一人学びへの手引き』(平成 29 年 4 月発行)の国語の項目の執筆も分担した。 本グループが一貫して研究主題に掲げているのは「つきたい力を明らかにして思考力を育てる授業-見通しと振り返りを位置づけて-」である。ここでいう「つきたい力」には、「教師にとっての子どもにつけさせたい力」という側面と「子どもにとっての、自ら身に

(2)『柿の実詩集』編集委員 (3) 三田市人権を考える会理事	平成 27 年度 平成 28 年 4 月～ 平成 30 年 3 月	つけたい力」の二つがある。両者を授業の中で統合していくことが研究主題を具現化するために必要である。そのためには、言語活動に取り組むにあたって、学習者自身が「活動のゴール（何を実現したいか）」「活動の意味（何ができるようになるか）」「活動の方法（どうすればいいか）」の三つを具体的にとらえる必要がある。 グループ員で、実践を集積し、整理した結果、現在次のような手立ての有効性が立証されつつある。まず第一に、学校行事や他教科と連携し、学習者にとって「必要性」「やりがい」が実感できる場の設定である。第二に、これまでの学習をもとに「目のつけどころ」や「方法」を取り出し、次に生かすようにすることである。第三に、思考の筋道を目に見える形にすることである。例えば思考ツールの活用や操作活動の導入が考えられる。第四に、自己評価や相互評価、あるいは地域に人や保護者など具体的な他者の評価を生かすことである。また、こうした手立てが有効に働くためには、年間計画に位置づけた指導が必要である。 『柿の実詩集』は、三田市教育委員会が毎年発行している児童詩集である。市内の各校から作品を募り、代表作をまとめて刊行している。（平成 27 年は 3 に月発行）編集委員として原稿の集約・審査、および編集作業に従事した。 三田市人権を考える会は、地域における人権啓発を推進する組織である。三田市人権を考える会理事として、主に三輪地区において、人権研集会の企画・運営に従事している。研集会の内容は講演、DVD 視聴と話し合い、児童の人権兵庫の発表である。
4 その他 特記事項なし		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1.『小学校国語科重点指導事項の実践開発』	共著	平成 22 年 1 月	明治図書	平成 20 年度版指導要領の重点指導事項である「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」等について具体的な実践事例をもとに解説した共著。 「PISA 型読解力の育成」「全国学力調査」から明らかになった「実践に生きる言語力」という課題をふまえて「指導のアイデア」を提案している。 編著者：小森 茂 共著者：阿部秀高・岡本恵太・野村美由紀・横山仁美・伊崎一夫・水戸部修治・湯浅るみ・成瀬真弓・岩澤正和・安 淳子・橋本浩志・駒井康宏・岡部千草・高木輝夫・石田直栄・高野浩男・増川秀一 本人担当部分：「『図鑑』や『事典』の考え方と指導のアイデア」(pp. 76-77) 「『まとめ』の考え方と指導のアイデア

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				ア」(pp.92-93)を単著。 「『図鑑』や『事典』の考え方と指導のアイデア」では、〈図鑑から調べる〉活動と〈調べたことを「図鑑」としてまとめる活動〉を一続きのものとして取り組むプランを提案した。 「『まとめ』の考え方と指導のアイデア」は、小学校5年「話すこと」領域の指導に関する工夫改善について論じている。スピーチの構成を考え、結論を「まとめる」ためには、情報の取り出しと効果的な組み立てが必要になる。情報をカード化することによって、取捨選択や整理、配列を目に見える形にすることの有用性を検証した。
2.『「見方・考え方」を鍛える小学校国語科の「思考スキル」』	共著	平成30年2月3日	東洋館出版社	平成29年に告示された学習指導要領の柱の一つである「思考力・判断力・表現力等」について「思考スキル」の観点から解説した共著。 具体的な実践事例をもとに、「思考スキル」の分類と、その育成の筋道について解説している。 編著者：伊崎一夫 共著者：岡本恵太 遠藤陽子 小玉直人 中島朱美 羽瀧みな子 濱村憲二 細見博友 峯山 淳 山口 映 本人担当分：第Ⅱ章「思考スキル」の分類(pp23-42) 「思考スキル」について、比較・順序・理由・要約・定義・類別・課題解決・推論・評価の九つに分類し、それぞれについて、基本的な考え方と、育成に向けての筋道を解説した。 「問題解決のあらすじを書くためには」(pp.80-83) 物語「はりねずみと金貨(東書3年)」について、あらすじを整理し、人物の気持ちの変化についてまとめるための実践を提案した。 「知識を本物にするには」(pp.96-99) 説明文「夢のロボットを作る(東書4年)」について、思考ツールを活用して読み取る実践を提案した。
3.『ケースから学ぶ言葉による見方・考え方を育てる授業づくり』	単著	平成29年9月	株式会社ERP ERPブックレット	新学習指導要領の鍵概念である「言葉による見方・考え方」について基本的なとらえ方について小中9年間を見通して述べるとともに、その育成のための手立てを具体的な事例をもとに解説した単著。教師が、国語科の授業において、実際に会うことが想定される場面を「ケース」として設定し、その背景にある〈言葉による見方・考え方〉について解説するとともに具体的な手立てを示している。新学習指導要領の方向性をふまえ、「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」のそれぞれの領域に共通して働く「言葉による見方・考え方」について〈効果〉〈正しさ〉〈整合性〉の三つの項目に整理し

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				た。 最終章では、「言葉による見方・考え方」を育成するための手立てが、〈ゴールの明確化〉〈方法・筋道の可視化〉〈他者との伝え合いによる言語活動の吟味〉にあることを指摘した上で、「主体的・対話的で深い学び」を具体化することの重要性とその視座を総括的に提示している。 A5判 全60頁
(学術論文) 1.『「ゆる」概念からさぐる地域コミュニティ再構築への取り組み—加東市の事例をもとに—』	共著	平成25年9月	兵庫教育大学研究紀要第43巻 p.1～p.8	兵庫県加東市の事例をもとに、児童を中心とする新たな地域コミュニティづくりの過程について研究した論文。 共著者：宮元博章・中間玲子・有吉美咲・<u>岡本恵太</u> 全9頁 本人担当部分：「1.問題意識」(pp.1-2)「2.総合考察」(pp.6-8) 内容：「1.問題意識」では「平成の大合併」以後のコミュニティ作りの問題点について論述した。「2.総合考察」では「地域で子どもを育てる」ことがこれからのコミュニティづくりの柱となることを論じた。 「ゆるキャラ」事業は、その未完成さゆえに地域住民の自由な参加を促すものである。地域コミュニティ作りにおいては「わかもの」「よそもの」が参加することの重要性が認められている。つまり、同事業は多様な住民の多様な参加を可能にしたため効果的だったのである。地域における「子ども」という存在も、その未完成さゆえに、多様な参加を引き出しうることを指摘した。 コミュニティの中における学校の位置づけを考える事は、新学習指導要領の鍵概念である「社会に開かれた教育課程」とも重なり合うものである。
2.『授業がゆらぐ時、何が起こり、何が生み出されているか—「カーニバル化」と「危機」の観点から—』(修士論文)	単著	平成26年3月	兵庫教育大学	本研究は、教室談話を分析することを通して、思考力の育成に促進的に働く談話構造を探究することを目指したものである。主題としたのは、授業において、教師の意図から外れつつも一定の秩序が成立している状態である。本研究では、こうした「教師の意図から外れた場面」を授業の「ゆらぎ」として規定した。一見、こうした意図からの逸脱は、教育にとって阻害要因である。一方、こうした「ゆらぎ」をも包み込む安定した構造が、思考力の育成にとって促進的だという考え方もある。本研究は、ミハイル・バフチンの「カーニバル」概念やヴィゴツキーの「危機」概念を手がかりに、授業の「ゆらぎ」における「体験の論理」の解明を目指した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				兵庫県の公立小学校において、地域における指導的な役割を担う教員の授業を分析した結果、たしかに「ゆらぎ」のある場面においても、児童の思考が活性化していることが明らかになった。ここでは、児童自身が確かに〈問題意識〉を持って授業に参加していたのである。また、教師がこれまでに提示してきた定型的な発言形式も、授業の持つ「問題」に応じて多様に使用されていることも明らかになった。さらに「ゆらぎ」のある場面も無秩序ではなく、新たな秩序が発生していた。例えば、1年生の「ひらがな学習」で子供たちは教師の意図とは違う転にこだわっていた。一方、この場面では、入学後1月の児童が、教師の指示を待たずに、順番に黒板の前に出て、友だちに考えを述べるという行動をしていたのである。教師は「ゆらぎ」の場面であっても、今後につながるような児童の行動や発言を促進していた。教師による吟味と支援は、たとえ自らの意図しない場面においても働き続けていたと言える。 本研究では、思考力の育成にあたって、常に長期的な「ねらい」を意識しつつ、短期的には児童の動きに柔軟に対応する教師の働きかけが必要だということを明らかにした。
3.「学校における児童の新たな行動様式はどのように成立するか―教師の意図から外れた場面の談話分析―」	単著	平成27年11月	日本教育社会学会編『教育社会学研究第97集』p. 67～86	「言葉による見方・考え方」の育成を促進する談話の構造を「新たな行動様式を生み出す『共演』の場」としてとらえた論考。 本研究では、小学校1年生の入学後一ヶ月後に実施された「ひらがな学習」における教室談話の分析を行っている。この「ひらがな学習」の授業において、児童は教師の書いた「ひらがな」の「まちがい」を指摘し、授業のねらいとははずれた部分にこだわっている事例に着目し、児童が新たな行動様式による学習行為を創出する過程とその価値について論じた。 教室談話を分析してみると、この教室では、教師にとって予想外の出来事をも包み込む談話構造が見られた。すなわち、教師の意図から外れているような場面において、教師と児童の間の「共演」といえる関係が成立していたのである。すなわち、児童たちが教師の「まちがい」を指摘しようとしたのは「先生の模倣」であり、教師もまたこうした「模倣」を促進する働きかけ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 「新学習指導要領における『言葉による見方・考え方』の三側面-小中9年間を見通す学習指導の方向性-」	共著	平成 29 年 9 月	『奈良学園大学紀要』 p. 1 ～ p. 13	をしていた。こうした「共演」の中で、児童たちは一定の「ルール」を創り出していったのである。 これは、ヴィゴツキーが「遊び」についての研究で明らかにした、演じることによる「ルール」の成立と重なる事態である。国語教室に強制に依らない秩序を生み出すものは、教師と児童がその時々状況を共に演じることだと言える。 「言葉による見方・考え方」の育成を促進する談話構造の形成は、小中9年間はもちろん高等学校においても必要であること、さらなる事例の収集と談話の分析を通して明らかにすべき課題について指摘した。 平成 29 年に出された学習指導要領の鍵概念である「言葉による見方・考え方」の要素と構成およびその育成の筋道について述べた論文。 全 13 頁 VI 章構成 (IV、V、VI 章を分担執筆) 共著者：伊崎一夫・岡本恵太 本研究では「言葉による見方・考え方」を三つの側面に分類している。すなわち〈言葉と主体〉の関係に着目する「語用論的側面」、〈言葉と世界〉の関係に着目する「意味論的側面」、および〈言葉と言葉〉の関係に着目する「統辞論的側面」である。こうした三側面に基づいて新学習指導要領の指導事項を整理し、小中9年間を貫く系統性を明らかにした。 また「言葉による見方・考え方」の育成に当たっては言葉の〈効果・適切さ〉に関わる「語用論的側面」を中心に位置づけることが重要であることについて、小学校での実践をもとに考察している。 「ことわざ」(4年生)、「自分の『提言』を考えながら読もう」(6年生)等の実践事例をもとに、具体的な「めあて」や「意図」の設定が、「場面」や「語用論的側面」の認識を強め、「言葉による見方・考え方」の活用を促すことを明らかにした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 「小学校国語科における「わざ言語」を活用した思考力の育成—談話分析からのアプローチ—」	単著	平成 31 年 3 月 10 日	『奈良学園大学紀要』第 10 集 p. 39～p. 48	本研究は「わざ言語」の観点から、思考力育成の道筋を明らかにしようとするものである。 「わざ言語」とは、子どもたちの具体的な言葉として表れた、思考力や「言葉による見方・考え方」である。 事例として、物語「ゆうすげ村の小さな旅館（東書 3 年）の授業を取り上げた。談話の分析により、「見出し先行型発言」という特徴的な発言形式を抽出するとともに、この形式が感想の提示、問題の提示、問題の解決、教師への提案という機能を持つ「わざ言語」であることを示した。 本研究では「わざ言語」を活用した思考力育成の段階を次のようにとらえた。初期の段階では一定の話型を導入する。中期では、話型を用いつつ、目的に応じて、授業における発言形式を再構成する。そして、最終的には「わざ言語」を意識し、体系的に使う段階に至るのである。
（その他） 1. 平成 21 年度 三田市立志手原小学校研究紀要	共著	平成 22 年 2 月	三田市立志手原小学校 全 72 頁	学校として継続して取り組んでいる食育の授業事例をまとめた冊子。 B5 判 本人担当分 4p 分担：「野菜の栽培活動から、食生活の見直しへ」 内容：小学校 3 年生の食育の取り組みをまとめた。栽培活動から、自らの「食」に目を向けていく学習について述べている。国語科で学んだ、情報の収集・整理や表現手法を総合的な時間に生かすことを目指した。例えば、2 年生では学校の畑でピーマンを育てている。この栽培活動から、ピーマンそのものについて調べたり、ピーマンを使った料理を調べて、実際に調理する活動に結びついた。こうした活動により、食生活への意欲が高まるとともに、情報を集め、表現する力も高まった。こうした力は国語科でも生かされた。国語科で育てた力と、食育で培った力が相互作用した事例であり、その価値について考察している。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 平成 22 年度 三田市立志手原小学校研究紀要	共著	平成 23 年 2 月	三田市立志手原小学校 全 76 頁	学校で取り組んできた食育の取り組みを生かして、児童の表現力・発進力を高めようとする取り組みをまとめた。B5 判 本人担当分 10p 分担「食育を通して表現力を育てる」(p. 3～p. 12) 内容：食育で取り組む栽培・調理などの体験を「ことば化」することで、児童の「問い」はより明確になり、調べたり表現したりする活動も活性化する。さらに表現力を高めるためには、地域の方々や保護者による評価が有効である。学校をあげて、児童が表現する場を位置づけることの大切さについて考察した。 具体的な取り組みとしては、6 年生の「これからの食生活をシナリオで提案しよう」がある。これは、自分たちの目指す食生活が実現された「暮らし」をシナリオで描く活動である。児童は「栄養バランス」「伝統を生かす」などのテーマに基づいて、シナリオを書き、互いに評価し合った。シナリオを書くにあたっては、食生活に関する情報を調べ、整理する必要もある。この実践を通して児童は、食に関する正しい情報の求め方・生かし方を学ぶことの重要性を強調している。
3. 子どもの心の動きによりそうことで	単著	平成 25 年 7 月	三田市広報『伸びゆく三田』 No. 147	志手原小学校における「人権の木」の実践を紹介。子どもたちの日々のつぶやきから、大人も学ぶべき「人権の芽」を探ることの重要性を指摘している。(執筆 2 ページ、総ページ 14 ページ)
4. 平成 26 年度 三田市立志手原小学校研究紀要	共著	平成 26 年 11 月	三田市立志手原小学校 全 72 頁	「歯の健康教育」についての取り組みをまとめた研究冊子。 B5 判 本人担当分 6p 分担：「授業作りの基本的な考え方と筋道」(p. 5～p. 10) 内容：歯の健康教育における「ヘルスリテラシー」の概念について論述するとともに、この資質を高める学習のあり方を提案した。 健康教育においては、単に知識を学ぶだけでなく、具体的な行動につながる学びが重要であることや、知識と行動を結びつける資質・能力を「ヘルスリテラシー」としてとらえることの有効性を指摘している。「ヘルスリテラシー」の育成にあたっては、言語活動の導入が効果的であることを、2 年生の「歯磨き日記」の継続が半ば無意識に行われてきた日々の歯磨きの新たな価値への気づきと、「これからも丈夫な歯でいたい」という意欲の高まりを保障することを検証している。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 平成 26 年度三田市教育研究グループ実践事例集	共著	平成 27 年 3 月	三田市教育研究グループ国語部会（三田市教育委員会委嘱） 全 48 頁	思考力を高める授業事例を市内の若い教員に向けて提案した。 A4 判 本人担当分 8p 分担：「思考力を育てる筋道」（pp. 3-10） 内容：PDCA サイクルを子ども自身が意識することが「批判的思考」や「論理的思考」を育てるために有効であることを論述した。 本研究グループでは、言語活動を目的に向けて導くための資質・能力を「思考力」としてとらえている。この思考力を育てるためには、活動をとおして常に「目的に適しているか・もっといいやり方はないか」を問う必要がある。そのために、ゴールの可視化や相互評価の充実が必要である。また、単元を年間計画に位置づけ、「見通し・見取り・見直す」ことを繰り返していくことが大切になる。考えの筋道が「目に見える形になる」ワークシートの工夫や、カード操作などの具体的な活動の導入により、「見通し・見取り・見直す」学習が具現化することを強調した。
6. 三田市教育研究グループ研究集録	共著	平成 27 年 3 月	三田市教育研究グループ（三田市教育委員会委嘱） 全 256 頁	三田市教育研究グループの各部会の取り組みをまとめた研究冊子。 A4 判 本人担当分 4 p 分担：「国語部会の取り組み」（pp. 5-8） 内容：本年度の国語部会における「思考力を高める授業づくり」の取り組みおよび成果と課題について整理した。 本グループで以前から取り組んでいる、子ども自身が「PDCA サイクル」を意識する授業の具体化について、単元（授業）のはじめにしっかりと「めあて」を見通し、さらに「めあて」に基づいた振り返りを行うことの重要性について解説した。
7. 平成 27 年度三田市教育研究グループ実践事例集	共著	平成 28 年 3 月	三田市教育研究グループ国語部会（三田市教育委員会委嘱） 全 54 頁	国語科の授業で、思考力を高める筋道について授業事例を市もとに内の若い教員に向けて提案した研究冊子。 A4 判 本人担当分 10p 分担：「授業研究入門」（pp. 43-52） 内容：子どもの見取りから教材解釈のあり方、授業構想までの筋道を若い教員に向けて解説した。 まず、言語活動を「言葉を用いてその子の願いや思いを実現する過程」としてとらえ、一人ひとりがゴールを具体的にとらえることの必要性を述べた。次に子ども自らが、プランを立て、実行し、評価し、修正する過程、つまり自らの「PDCA サイクル」を意識することについて解説した。そのための手立てとして「学習内容を自分のものにする（自分化）」「思考を見える形にする（可視化）」「学びの仕組みを確立する（仕組み化）」を具体的な事例をもとに論じている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 平成 28 度三田市教育研究グループ 実践事例集	共著	平成 29 年 3 月	三田市教育研究グループ国語部会（三田市教育委員会委嘱） 全 48 頁	若い教師に向けて、思考力を育てる国語科授業の具体的な筋道を提案した事例集 A4 判 本人担当分 8p 分担：「思考力を育てるために」（pp35-42） 内容：コンピテンシーベースの考え方にもとづいた、これからの国語授業を提案した。思考力の育成にあたっては、学習者自らが「つきたい力」を意識する必要がある。そのためには「活動のゴール（何が実現したいか）」「活動の意味（何ができるようになるか）」「活動の方法（どのようにすればよいか）」を学習者にとって明確にする働きかけが必要である。そのための具体的な手立てとして、他者からの評価を生かすことや、これまでの学習から「目のつけ所・やり方」を取り出し、活用することが有効である。また思考の過程について、ワークシートなどを通して目に見える形にすることも必要である。 以上の観点からグループ員の実践の意味づけを行った。
「学会発表等」 1. 教育実践の記述に表れた教師の自己認識について	—	平成 24 年 11 月	日本教育心理学会第 54 回総会ポスター発表	共同研究者：宮元博章・ <u>岡本恵太</u> ・藤原由香里 若い教師向けの教育書の記述に含まれる授業場面の談話分析を行い、教師と児童の関係性および教師の自己了解が記述に含まれることを明らかにした。
2. 偶発的・即興的に生起する学びの探究—明日の教育をパフォームする実験的発表—	—	平成 26 年 11 月	日本教育心理学会第 56 回総会自主企画シンポジウム	共同研究者：藤原由香里・今井裕之・宮元博章・三野宮春子・長谷川和代・ <u>岡本恵太</u> ・大島秀子 内容：はじめから教育内容を固定してしまうのではなく、即興的対話的に展開する授業の可能性について研究発表した。アメリカの心理学者ルイス・ホルツマンの研究をもとに、教育における偶発性や即興性をどう生かすかについて、英語教育、心理学、国語教育の立場から検討した。 国語教育の視点から即興的対話的に展開する授業の可能性に関する提案発表を担当した。1 年生の「ひらがな学習」において、教師の意図から外れた場面で、児童の新たな行動様式が生じた事例から、「ルール生成」について述べた。1 年生の児童は、学校における行動様式を獲得するにあたって、教師の模倣を積極的に行っている。こうした模倣に対して教師が「共演」することによって児童の創造性が引き出されることを提案した。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 加奥 満紀子

研 究 分 野		研究内容のキーワード
幼児教育		幼児理解・保育者論・保育内容総論
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
・ 学校評価を生かした保育内容の改善	平成元年 4 月～現在に至る	毎年年度末に、教育評価を保護者や教員で行い、保育課程や具体的な保育内容が適正であったかを評価した。評価に基づいて、次年度の保育課程と保育内容を見直して、改善を重ねて行った。 (大和郡山市立郡山西・片桐西・郡山北・矢田南幼稚園での実践)
・ 子ども理解から始まるスタートカリキュラムの編成	平成 10 年 4 月～現在に至る	スタートカリキュラムの編成には地域の小学校や就学前組織の実態の違いや子どもの実態を理解し可能な方法で編成する必要がある。制度や子ども理解の違いを理解し、無理なく実践していった。 (大和郡山市立郡山西・矢田南・郡山北幼稚園での実践)
2 作成した教科書、教材		
・ 教育実習の手引き 大和郡山市立矢田南幼稚園発行 (共著) 【再掲】	平成 21 年 4 月	年大学と短期大学から教育実習生を 5 名以上受け入れ、実習の手引き冊子を準備し実習生に幼稚園教育の目標と幼稚園教育要領に基づいた保育内容の具体的な姿と、幼児を理解する視点について指導した。さらに週案や保育案の作成の方法や、保育後に振り返り幼児の実態に合わせて保育改善する意味も指導した。 (大和郡山市立矢田南幼稚園教育実習生指導に使用)
・ 教育実習の手引き 大和郡山市立郡山西幼稚園発行 (共著) 【再掲】	平成 26 年 4 月	毎年大学と短期大学から教育実習生を 5 名以上受け入れ、実習の手引き冊子を準備し実習生に幼稚園教育の目標と幼稚園教育要領に基づいた保育内容の具体的な姿と、幼児を理解する視点について指導した。さらに週案や保育案の作成の方法や、保育後に振り返り幼児の実態に合わせて保育改善する意味も指導した。 (大和郡山市立矢田南幼稚園教育実習生指導に使用)
・ 教育実習の手引き 大和郡山市立郡山西幼稚園発行 (共著) 【再掲】	平成 26 年 4 月	大学と短期大学から教育実習生を 5 名以上受け入れ、冊子を作成し実習生に幼稚園教育の意義と幼稚園教育要領に基づいた保育内容の 5 領域について具体的に指導した。さらに週案や保育案の作成の方法も狙いを明確にして指導した。幼児の状況を把握する視点を指導するとともに、幼児の実態に合わせて保育案を作成する意味についても指導をした。 (大和郡山市立郡山西幼稚園教育実習生の指導に活用)
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
・ 奈良学園大学学生による授業評価アンケートにおける評価	平成 30 年 1 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の専門ゼミナールで、幼稚園に就職する学生に対し、幼稚園教員に求められる資質と能力について講話した。幼稚園に就職する学生は、実際の課題等について満足度が高く、4 点満点 3.8 で非常に高い評価であった。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
・ 幼稚園での教頭経験 大和郡山市立郡山北幼稚園 大和郡山市立矢田南幼稚園	平成 17 年 4 月～25 年 3 月	8 年間公立幼稚園の教頭を務めた。園長を補佐し、教育実習生の毎年約 10 人受け入れ、その実習の企画運営を行った。保育の各期の意味月案、週案、当日案などの作成園内研修を年 3 回実施した。

・幼稚園の園長経験 大和郡山市立矢田南幼稚園 大和郡山市立郡山西幼稚園 5 その他 ・奈良県健康教育研究会安全部会幼稚園部会における指導助言 対象：幼小中教諭、養護教諭 約 50 名	平成 25 年 4 月～現在にいたる 平成 28 年 12 月（奈良県立教育研究所）	3 年間園長を務め、幼稚園教育要領等の改訂を受け、スタートカリキュラムの本格実施に尽力した。教育実習生を毎年数人受け入れ、保育課程と保育内容の関連、児童理解、教育公務員の法的遵守について講話と指導を行った。 幼稚園の雨の日の登降園の方法や、安全に行動しようとする防犯訓練や避難訓練の際の教師の役割にについて指導助言をした。さらに固定遊具の使い方を園児が話しあい安全に使用する支援について幼児理解の視点で指導助言した。
・奈良県幼稚園等新規採用研修講座及び公立幼保連携型認定こども園新規採用保育教諭研修講座 講師 対象：新規採用保育教諭約 80 名	平成 29 年 5 月（奈良県立教育研究所）	幼稚園教育の目標から始まり、幼稚園教育要領の 5 領域と、その具体的な保育内容の様子と関連付けて子どもの写真等を通して具体的に語った。さらに幼稚園教員として子どもを理解する上で大切にしたい子ども理解の視点や、幼稚園で働く上で求められる資質や能力について 5 点を話した。
・大和郡山市立郡山南幼稚園園内研究会の講師	平成 30 年 10 月 24 日	研究主題「主体性を育む」ー子どもの「したい」「やってみよう」をみつめてーのもと、三歳児の研究保育を参観し、三歳児の遊びにおける主体性について協議し、研修を深めた。
・大和郡山市立郡山西幼稚園園内研究会の講師	平成 30 年 11 月 6 日	研究主題「心弾ませ主体的に生活する子どもをめざして～心と体をほぐしながら～」の研究主題のもと、5 歳児の研究保育を参観し、表現活動において主体的に活動している姿について協議し、研修を深めた。
・大和郡山市立矢田南幼稚園教育講演会講師及び保育カンファレンス	平成 31 年 1 月 30 日	保護者対象に演題「子育てで大切なこと」について講演した。子どもを取り巻く社会の変化の中での子どもの様子から、親として何が大切かについて約 30 人の保護者の方々に提案した。午後より、各クラス的生活発表会に向けての保育で大切にしたいことを提案し、研修を深めた。
・三郷町立西部保育園園内研修の講師	平成 31 年 2 月 6 日	各クラスの保育を参観し、「教育的環境」について子どもの実態から話し合い、研修を深めた。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 ・幼稚園 1 種普通免許状	昭和 55 年 3 月	大阪府教育委員会（昭 54 幼一普第 296 号）
・小学校 1 種普通免許状	昭和 55 年 3 月	大阪府教育委員会（昭 54 小一普第 335 号）
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 ・奈良県公国立幼稚園・こども園園長会副会長	平成 28 年 4 月～29 年 3 月	副会長として会長を補佐し、新たな幼稚園教育要領の保育内容についての追加事項の徹底に努めた。新規採用教員の研修会の見直しを行い時代に対応した児童理解の方法を提案した。

・奈良県公国立幼稚園・こども園園長会会長	平成 29 年 4 月 ～現在 に至る	会長として就学前 3 施設が入学までに求められる 10 の力を反映し、小学校に送付する指導抄録の在り方を提案した。
4 その他 ・全国幼児教育研究大会奈良大会を副委員長として運営	平成 28 年 7 月 (なら 100 年会 館)	「幼児教育の新と真一夢中になって遊ぶ力を引き出す保育力」のテーマで全国から 1356 人の参加者で開催した。未来をたくましく生きる子どもを育てるために絆が深められた。
・関西幼稚園・こども園連合会研究大会奈良大会を実行委員長として企画実行	平成 29 年 11 月 (やま と郡山 城ホー ル)	「未来に向かって育ちをつなぐ幼児教育」のテーマで関西 2 府 4 県から 622 人の参加を得て開催した。平成 30 年度全面実施に向けての幼稚園教育要領等について、更に研修を深めた。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文)				
1. 大和郡山市教育委員会指定研究会紀要 テーマ 「幼児期に言葉の力を育む援助の在り方」	共	平成 22 年 10 月	大和郡山市立矢田南幼稚園発行 A4 (全 8 頁)	聴く、語る、伝え合う内容を保育全体の中にどう位置づけるかを、5 領域の幼児の姿で明確にした。 <u>レディネス調査を行い、幼児の発達理解に基づいて取り組んだ。発達に応じた指導の在り方も系統的に示した。幼児観察の方法、個と集団の関係の捉え方、保護者との連携の重要性も論じた。</u> 共著者：蔵田準子、加奥満紀子、植田ゆかり、田平知子、他 5 名 担当部分：共同研究につき抽出不可、研究の全体構成、 <u>幼児の発達によるレディネス調査の分析、研究を振り返ってのまとめと成果部分を執筆</u>
2 大和郡山市教育委員会指定研究園研究紀要 テーマ「コミュニケーションの力を育む」	共	平成 26 年 11 月	大和郡山市立西幼稚園発行 A4 版 (全 50 頁)	平成 25、26 年の 2 年間に及ぶ保育内容と幼児の変容の実践記録。 <u>コミュニケーションは、園での生活＝遊び総体の中で育成すること、そのため感情体験の 2 面性を捉えた保育者の視点が重要であること、教員の事例分析視点を、幼児の発達に応じて養う必要があることを論じた。</u> 共著者：加奥満紀子、内野和寿乃、安井典子、上田良美、他 7 名 担当部分：p1－p6 研究主題の意味と方法、p9－10「3 歳児・幼稚園大好き・先生大好き・友達大好き」p21－p22「4 歳児、自分を思い出して友達や先生と一緒に」p35 - 36「5 歳児、自信をもって」すべての頁で <u>幼児の活動体験とその意味付け、発達を踏まえつつ解説した。</u>
3 奈良県健康教育研究会研究紀要	共	平成 29 年 3 月	奈良県健康教育研究会編集発行 (全 70 頁)	学校保健、学校安全、学校給食の関係者が一堂に会した健康増進の研究会紀要。 編集者：奈良県健康教育研究会 共著者：門口和興、三好智子、境美德、加奥満紀子、他 8 名 本人担当部分（p38－p39 の安全部会の幼稚園の研究協議の指導助言記録「 <u>一人一人が安全な生活</u> 」

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 保育内容の意義及び今後の課題と展望 —奈良県の幼稚園の実践を通し—	共	平成 30 年 2 月	奈良学園大学人間教育学部 「人間教育」第1巻2号 (p65～76)	保育課程の歴史と保育内容の意味と保育内容の歴史を述べた。その後、具体的な5領域の狙いと内容とともに、その全体構造が保育内容にどのように反映しているか、幼児の具体的な姿と理論を連携させて論じた。幼稚園や保育園の保育内容は環境を通して5領域を横断的・総合的に扱い、一人一人の良さや過程を評価することを指導の留意点と共に示した。さらに、就学前までに育成したい10の力と小学校教育とのつながりを提案した。更に、指導案の中で、5領域のどの力を育てているか教師自身が意識的に構想することの重要性を論じた。 共著者：加奥満紀子、土谷長子 担当部分：p 70～76 <u>奈良県の実践部分分析と各年齢児の発達と保育内容と保育内容の今後の課題と展望部分を単著</u>
5 幼児理解に基づく教師の関わりについて	共	平成 30 年 2 月	奈良学園大学人間教育学部「人間教育」第1巻2号 (p53～65)	幼児教育3施設が明確に位置づき、それらの教育・保育の基本が就学前教育として一致したことを踏まえ、 <u>幼児理解を深め、環境を通して行う教育であることを確認した。奈良県の幼稚園の実践事例を取り上げ、幼児理解に基づく、教師の関わりと幼児の主体的な活動について具体的に例示した。日常の幼稚園生活での取組が行事を中心に、幼児主体の活動が展開されていることを確認した。その上で、幼児期に育みたい資質・能力と、5歳後半までに育ってほしい姿について、幼児理解に基づいた評価と連動させて考察を加えた。</u> 著者：加奥満紀子、土谷長子 担当部分：pp54～60 <u>奈良県の幼稚園の実践と幼児理解を深めるエピソードとそれについての省察部分を単著</u>
(その他) 1. 教育実習の手引き	共	平成 21 年 4 月	大和郡山市立矢田南幼稚園発行 (全8頁)	<u>幼稚園教育に必要な資質や能力を具体的に示した。実習生に幼稚園教育の目標と幼稚園教育要領に基づいた5領域に意味と全体構想と保育内容の具体的な姿を示した。幼児を理解する視点、週案や保育案の作成の方法や、保育後の評価の方法も指導した。評価後に、幼児の実態に合わせて保育改善の意味も指導した。</u> 共著者：加奥満紀子、中島道代、植田ゆかり他、2名

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
2 教育実習の手引き	共	平成 26 年 4 月	大和郡山市立郡山西 幼稚園発行 (全 10 頁)	求められる幼稚園教員、幼稚園教育の意義と幼稚園教育要領に基づいた保育内容の 5 領域について示した。さらに週案や日案の作成方法も狙いを明確にして指導した。幼児理解の視点を指導し、幼児の実態に合わせて保育案を作成する意味も指導をし、さらに評価方法とその活用も示した。 共著者：加奥満紀子、内野加寿乃、安井典子、上田良美、他 3 名
3 たのしい幼稚園ー子どもが初めて出会う学校それは幼稚園ー	単	平成 29 年 5 月	奈良県幼稚園長会研究部作成 A4 版 15 頁	奈良県幼稚園等新規採用研修講座及び公立幼保連携型認定こども園新規採用保育教諭研修講座の指導資料として冊子。 <u>幼稚園教育の目標と、幼稚園教育要領の説明を 5 領域ごとにその意義と</u> <u>総合的に指導する必要性を論じた。さらに育む資</u> <u>質・能力の 3 つの柱を、5 領域と関連付けて論じ</u> <u>就学前までに育てたい 10 の力について説明した。そのために教員の子ども理解力と評価力と保育内容の改善の必要があることを論じた。</u>
4 これからの幼稚園教員に求められる資質・能力とは	単	平成 30 年 1 月	奈良学園大学教育学部 A4 版 8 頁	幼稚園教員志望者 20 人に講話した資料冊子。 <u>環境を通して教育する意味、教師は最大で意味ある環境であること、幼児理解の能力を付けるための方策、それに基づいて保育内容を改善する評価力</u> などを論じた。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 西江なお子

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
教育学		家庭科教育、食育、授業づくりの方法技術	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項			
事項	年月日	概 要	
1 教育方法の実践例 (1)高光源特殊ライトを用いた快適な住まいの指導法の実践	平成 23 年 2 月	特別活動と総合的な学習の授業として、日常の清掃活動への取り組みの問題点を振り返らせ、清掃の意義を実感させるための手段として、「見える化」をはかって授業を行った。一見汚れないと思われる場所を、高光源特殊ライトを用いて照らし、拭いきれていないごみや汚れを見せ、自分たちの清掃態度を根底から考えさせる実践研究である。この活動により、清掃の必要性を実感した児童は其の後の清掃活動への取り組みが大きく変容すると同時に、家庭での実践へとつながった。 (大阪教育大学附属池田小学校の実践)	
(2)節電の効果とその意義を、実感を伴った理解へと導く「見える化」を図る実践	平成 25 年 2 月	家庭科と総合的な学習の実践である。東日本大震災後、節電という言葉聞くが、継続するのは難しい。節電の意義を理解し実践する児童を育てることは重要である。そこで、課題を見出し、節電の方策を考え、自分にできることをする力を養う授業を行った。労力と電気の関係を実感するため、自転車発電機で実際に発電させる。また待機電力を測定し、その電力を年間に換算してどれほどの節電に繋がるのかをデータ化する。こうした実際に体を動かしたり数値化したりするなど様々な「見える化」のアプローチを経て、節電を実感させた。児童は校内の無駄な電気の消灯などに積極的になった。 (大阪教育大学附属池田小学校の実践)	
(3)住環境の汚れに対し、意識下から意識化へと児童を変容させる指導法の実践	平成 26 年 2 月	家庭科の実践である。ドアノブや電気スイッチなど不特定多数の人が触れる場所や、一見きれいに見える壁や机まわりなどにも、拭いきれていない汚れが付着していることを光線の特殊なブラックライトを用いて照射し「見える化」する。そしてそれが人体に与える影響を考え、「きれいなはず」という意識を覆しどうすれば見えない汚れを取り除き、気持ちの良い環境づくりが実現するかを考えさせた。実際に自分の身近な物を雑巾等で拭き汚れを実感させることで、其の後の清掃態度が激変すると同時に家庭でも同じような報告を保護者から受け、家庭での実践に繋がった。 (大阪教育大学附属池田小学校の実践)	

(4)生活実践力向上を目指した小学校家庭科指導法の実践	平成 26 年 5 月 ～平成 27 年 3 月	小学校第 5、6 学年生を対象に、児童・教員の最も関心の低い分野である清掃学習において、本授業モデルによる実践を通して生活実践力がいかに高まるかを検証・考察した。その際、授業モデルの有効性を検証する目的で診断的評価・総括的評価を行い、児童の意識、態度の変容を調査した。また、家庭科の教科目標に対する評価も行った。教科の目標に対する評価においては 4 観点全てにおいて 4 段階評価の上位 4、3 が 85%以上を占め、概ね達成している結果となった。授業のまとめとして授業対象学年以外の児童に清掃の必要性のプレゼンを 5・6 年生が行い、学校全体で清掃の取り組みが活発となり活動が定着し成果を得ることができた。 (池田市立石橋南小学校の実践)
(5)大学生の衣食住の知識・技能の向上を目指した講義の実践	平成 28 年 4 月 現在に至る	大学生を対象に、衣食住の知識・技能のレディネステストを行い、実態を把握した。結果、個人差が大きく小学生からの家庭科の学びが定着していない学生が多く見られた。この実態を受け、毎時に知識・技能の小テストを行い、課題解決に向けての具体的な対策を考えさせた。学びの定着と実践の日常化を図るために、家庭科新聞の作成及び家庭での取り組みシートを継続的に書かせることで、学生自身に知識・技能の定着の成果を実感させることが出来、結果として成績が上昇する学生が増加し、ある一定の成果を得ることが出来た。 (奈良学園人間教育学部「衣食住の理解」での実践)
(6)大学における学生主体とした指導法の実践発表	平成 29 年 7 月	大学における学生主体の講義の在り方についての実践発表を、本学教員行った。使用教材・教具の選定、グループ活動方法、学修ノートの記録の取らせ方、また 90 分の時間配分や課題の出し方など、学生が積極的に講義に参加し、学修するための様々な手立てを具体的に発表した。学生たちを能動的に講義に参加させる方法であり、取り入れてみたいという教員の声を聞くことが出来、ある一定の成果を得ることが出来た。 (奈良学園大学人間教育学部「衣食住の理解」「家庭科指導法」での実践)
(7) 家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」の実践	平成 30 年 10 月 ～平成 31 年 3 月	家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」を、動物愛護の視点を取り入れることによる有効性の実証に向けて実践した。児童の身近な存在としてペット（特に犬・猫）のいのちに注目し、「犬に名前を付ける日」の映画監督である山田あかね氏、動物保護に携わる NPO 法人「犬猫みなしご救援隊」代表中谷百合氏を招き、児童、保護者、地域住民を対象とした「いのちの教育」を実施した。朝日新聞社及び大阪北摂地域のマスメディアの取材を受け、いのちの教育の取り組みを広く発信することが出来た。本実践研究により、いのちについて大人と子どもが語り合うと共に、児童のいのちにたいする意識が大きく変容し、教育効果があった。 (池田市立石橋南小学校の実践)

(8) 家庭科における「防災教育」の実践	平成 30 年 4 月 ～平成 31 年 3 月	家庭科を基盤とした教科横断的な「防災教育」の可能性を探り、その有効性の実証に向けて実践した。児童の防災意識と行動の不整合の検証を通して、防災意識の向上に加え具体的な防災の在り方についての知識・技能の習得の必要性を明らかにした。そこで、地域住民に対し、防災の取り組みや避難時等に抱く不安について聞き取り調査を実施し、小学生が地域の防災リーダーとして実践可能な事項について検討した。加えて、学習発表会においては、「釜石の奇蹟」を題材に演じ、震災時の様子を調べ、災害を自分事として捉え、下級生はじめ地域住民など多くの人に防災の必要性について発信した。これら一連の取り組みにより、実践前と比較した際、児童の防災意識はもとより、各家庭での防災の取り組みの質・量ともに向上し、本実践の有効性が示された。 (池田市立石橋南小学校の実践)
2 作成した教科書・教材 (1)学級通信の役割と留意点 (大阪教育大学池田附属小学校家庭科部会発行) (2)教育実習生指導のてびき (大阪教育大学附属池田小学校発行) 【再掲】 (3)小学生夏休みの家庭学習用教材編集 (文溪堂) 【再掲】 (4)消費者教育のてびき (大阪教育大学附属池田小学校家庭科部会発行)	平成 21 年 4 月 平成 22 年 4 月 平成 22 年 4 月 平成 22 年 5 月	学級通信を出す意義と、掲載する内容について述べた。児童の状況を知らせるだけでなく、学習の狙いや学級担任の方針を保護者等に伝え、地域や家庭と連携して児童を育成する懸け橋となる、教育的な効果を狙うものであることを記載した。そして読み手の視点や挿絵の効果的な使用方法とか、技術的な面についても示唆した。大阪教育大学から受け入れた実習生を対象に学級運営について指導する際に使用し、具体的であると好評であった。 A4 判 8 頁 大阪教育大学の学生向けに教育実習時に必要な教員としての資質能力や授業づくりのポイント、指導案の書き方などを家庭科の視点から具体的に示した。特に家庭科の指導案作成の際に注意すべき点として、家庭科で求められている児童に育ませたい力とは何かを具体的事象を交えて提示するとともに、児童の実態把握の仕方や体験活動の効果的な取り入れ方、児童の興味・関心の向上を図り学習意欲を喚起する手立ての在り方を解説した。大阪教育大学の学生からは、指導案の書き方は元より実習への心構えとして把握しておくべき重要点が網羅されており、活用しやすいと好評を得ている。 事前に児童の実態調査を行い、長期休暇に行うべき学習課題を明確化し、各教科ごとの重要項目を簡潔にまとめ、児童のつまづきやすい内容を吟味し、問題作成し教材会社文溪堂に提示した。小学校 1 年～6 年までの全学年の学習用教材の企画と編集に関わった。全国の小学校で、使用されて使いやすくと好評を得ている。 A4 判 26 頁 消費者教育の授業を、生活科・社会科・家庭科の視点から分析し、それぞれの特徴と学校現場で実際に行われている学習内容を記載した。各教科間で学習内容が重複する部分や児童につけたい力を整理することにより、発達段階に応じた消費者教育の在り方を具体的に示した。大阪教育大学から受け入れた実習生を対象に家庭科における消費者教育について

(5)家庭科で行う清掃のてびき (大阪教育大学附属池田小学校家庭科部会発行) (6)家庭科指導法における指導案作成の手引き (奈良学園大学 人間教育学部発行) (7)衣食住の理解における技能向上のための手引き	平成 23 年 6 月 平成 28 年 11 月 平成 29 年 6 月	指導する際に使用し、具体的であると好評であった。 A4判 8 頁 家庭科の清掃の授業において、児童自らが清掃の意義や具体的な清掃方法について学び考え、意見交流を行った概要をまとめた。大阪教育大学から受け入れた実習生を対象に家庭科で行う清掃学習の意義を指導する際に使用し、具体的であると好評であった。 A4判 2 頁 家庭科指導法の受講生を対象に、家庭科指導案作成における重要点を明確に提示した。題材設定の理由や指導上の留意点の書き方などを、実際の指導案を示し具体性を重視した。学生からは、指導案の書き方が明確になり、重要点が示されているため書き漏れや書き損じを防ぐことができ好評であった。 A4判 2 頁 衣食住の理解の受講生を対象に、技能向上を目的としてその重要点を明確に提示した。ミシンの操作方法、安全な扱い方、児童への適切な指導法といった小学校教員として必要な技能を、基礎から応用までを詳細に記し、安心して児童に指導できるようにまとめた。児童への指導ポイントが分かりやすいと好評であった。 A4判 2 頁
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1)奈良学園大学学長からの「家庭科教育法」「衣食住の理解」を担当する非常勤講師として採用時の評価 (2)奈良学園大学「衣食住の理解」授業終了時における学生アンケートによる評価 (3)奈良学園大学「家庭科指導法」授業終了時における学生アンケートによる評価	平成 25 年 4 月 平成 27 年 8 月 平成 29 年 3 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、非常勤講師として採用時の評価は以下の通りである。 『該当教員は、大阪教育大学池田附属小学校に家庭科主任として 4 年間勤務し、毎年全国発表会を行い具体的な教材開発や指導方法などを熟知している。また、毎年多くの家庭科教師を志望する大学生を実習生として受け入れ、大学生に対しての指導の経験も豊かである。実践だけでなく研究紀要や、現職教員対象の「教員免許更新」の教科書を作成するなど、研究に対する意欲も高い。学会での活動も開始し、豊かな実践だけでなく、理論面でも大学教員としての資格を備えていると判断する。』 授業改善のために設定した 5 項目と自由記述による学生アンケートを行った。授業内容を実生活に活用できる項目の満足度は 4 点満点中 3.8 と高評価であり、多くの割合の学生が満足 of いく授業となった。 授業改善のために設定した 5 項目と自由記述による学生アンケートを行った。第 1 回目の講義においては家庭科に対する興味関心が低い傾向が事前調査で分かったが、学生が能動的に講義に参加し学びが深まるよう、アクティブラーニングを取り入れ、小学校現場で即活用できる力を身に付けさせた。講義の満足度は 4 点満点中 3.8 という高評価であり、学生に深い学びを保証することが出来た。

(4) 奈良学園大学「衣食住の理解」授業終了時における学生アンケートによる評価	平成 30 年 3 月	全 15 回授業終了時におけるアンケートによる授業評価は、「授業時間の有効な使い方」は 4 点満点中 3.83、「授業に対する熱意や意欲」は 3.78、「説明のわかりやすさ」は 3.7 といずれも高評価であった。授業において、小学校家庭科教育の目標及び内容について実感を伴って理解できるよう、アクティブラーニングを取り入れ、リフレクションを図りながら学生の理解を確認し、適宜フィードバックして授業を進めることを心掛けた。その結果、学生の深い学びを保証し、満足度の高い授業とあり、先の評価を得ることが出来た。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
(1) 大阪教育大学附属池田小学校における学年主任としての学年教員指導と調整	平成 21 年 4 月 ～平成 26 年 3 月	5 年間学年主任として、管理職や他学年との連絡調整を綿密に行い、児童の教育に尽力した。年間学習カリキュラムを作成し、学年の目標到達に向けて各教員と話し合いを密に行い、児童の教育にあたった。また、各学級の児童の実態把握に努め、個別対応を要する児童についての会議を定期的に行い、学年全体で情報を共有し児童の指導を行い、安定した学年経営が実現し、保護者からの高い評価も得た。
(2) 大阪教育大学附属池田小学校における家庭科主任として教育実習生の指導	平成 21 年 4 月 ～平成 26 年 3 月	平成 21 年から家庭科の主任を 5 年間担当し、毎年教育実習生を、年 2 回受け入れ、家庭科教員希望者を複数名実習指導した。実習指導の内容は、家庭科の学習指導要領に基づく教材内容の解釈、年間指導計画の立案、学習指導案の作成、効果的な実技指導の方法、安全な実習のための留意点、高学年児童の理解等におよんだ。さらに実際の授業をさせて、課題を指摘して、再挑戦させることで、実践力をつけさせ、学生からは課題が明確となる的確な指導であるとの評価を得た。
(3) 近畿附属小学校連合会家庭科支部役員としての教育研究	平成 21 年 4 月 ～平成 26 年 3 月	役員として家庭科教育に関しての成果と課題を毎年分析し、他の附属校との意見交流を図る中で、PDCA サイクルを積極的に行い、研究会の成功に尽力した。
(4) 大阪府家庭科教育研究会家庭科部会役員としての教育研究	平成 21 年 4 月 ～平成 26 年 3 月	平成 21 年から家庭科部会役員として、毎年実施される研究会の開催に向けて会長の指示のもと連絡調整を綿密に行い、教員の希望アンケートを集約し講師の選出など研究会の成功へと尽力した。
(5) 大阪府家庭科研究会役員	平成 21 年 4 月 ～平成 26 年 3 月	役員として研究会開催に向けて関係機関と研究目的について検討し、会の成功に尽力した。また、日ごろの家庭科学習の取り組みを他市と情報交換する会を行い、池田市の家庭科教育の発展に尽力している。
(6) 池田市家庭科教科書採択委員	平成 26 年度	池田市教育委員会からの委嘱により、平成 27 年度からの使用となる家庭科教科書採択委員として、教科書の採択を行った。各社の教科書の特徴を分析し、特に児童の実態を鑑みて採択することができた。

(7)池田市家庭科研究協議会指導助言者	平成 28 年度～ 29 年度	池田市家庭科研究協議会指導助言者として、池田市の家庭科教育担当者に授業づくりのポイントや教材について助言した。特に 27 年 10 月に大阪府家庭科教育研究会において池田市から授業代表者を選出し授業提案した際は、消費者教育の授業の在り方について助言し、池田市の家庭科教育の発展に尽力した。研究会所属教員並びに授業代表者所属長から、的確な指導により提案性のある授業が出来たとの評価を得た。
(8) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「基礎ゼミナールⅠ」におけるアドバイザーとして学生支援	平成 28 年度	1 回生のアドバイザーとして、年 3 回の面談および適宜個別指導を実施し、大学生活に順応できるよう支援し、学生の主体的な学びの実現に向けて尽力した。
(9) 「奈良学GT担当者」として、1期生教職志望学生の学生支援	平成 28～29 年度	1 期生教職志望学生を対象とした「奈良学GT」担当者として、担当者間で連携を図りながら学習会の計画・運営、面談等を実施し、学生支援を行ってきた。各学生の実態把握と適切な指導を心掛けるとともに、各自治体の動向を分析し、個々に応じた教授対策計画の相談に応じるなど、全体と個別指導を適宜行ってきた。
(10)奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「基礎ゼミナールⅡ」におけるアドバイザーとして学生支援	平成 29 年度	2 回生のアドバイザーとして、年 3 回の面談および適宜個別指導を実施し、単位履修や学修計画、生活指導など、大学生活全般に関わる指導を行い、学生の主体的な学びの実現に向けて尽力した。
(11)奈良学園大学人間教育学部人間教育学科中国人留学生指導	平成 29 年度	平成 29 年度入学の中国人留学生指導担当として、日本と中国の食に関する比較から、地理的、文化的背景による食の相違点を見出し、分析・考察し、論文作成までの指導を行った。論文発表会において会場からは、食について多角的に研究を進めているとの評価を得ることが出来た。当該学生は、本研究を通して中国と日本の食に対する知見を深めることが出来たとともに、更なる研究を目指して今後中国での大学院進学を視野に入れており、研究への意欲喚起を図ることが出来た。
(12)「人間教育力開発演習Ⅲ」において教職志望学生を対象に指導	平成 29 年度～ 現在に至る	教職志望者を対象に教員に必要な資質・能力の育成を図ることを目的に、教育課題や教育指針等法規に基づいた取り組みの現状などを提示するとともに、学生個々が設定した課題の解決に向けて講義を進めた。学生からは、本講義受講により、教職志望の意思が確固たるものとなったことに加え、教員に必要な資質・能力を深く理解することができたとの評価を得ることが出来た。
(13) 兵庫教育文化研究所協力研究所員	平成 29 年度～ 現在に至る	兵庫教育文化研究所協力研究所員として、家庭科・技術家庭科部会における、家庭科教育の授業構築に関するアドバイザー業務に従事した。

(14)「奈良学GT主担当者」として、3期生教職志望学生の学生支援	平成 29 年度～ 現在に至る	3 期生教職志望学生を対象とした「奈良学GT」主担当者として、キャリアセンターと連携を図りながら学習会の計画・運営、面談、業者との打ち合わせ等を実施し、学生支援を行ってきた。各学生の実態把握と適切な指導を心掛けるとともに、個々に応じた教授対策計画の相談に応じるなど、全体と個別指導を適宜行ってきた。このことから、学生の学修意欲向上を図ることができ、模試等において成果が表れており、学生自身が課題に向き合い、取り組む力を育てる教育効果を上げることが出来た。
(15) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「基礎ゼミナールⅡ」におけるアドバイザーとして学生支援	平成 30 年度	2 回生のアドバイザーとして、年 3 回の面談および適宜個別指導を実施し、単位履修や学修計画、生活指導など、大学生生活全般に関わる指導を行い、学生の主体的な学びの実現に向けて尽力した。
(16)三宅町フードフェスティバル実行委員	平成 30 年度～ 現在に至る	三宅町主催のフードフェスティバルの実行委員として、会の企画・運営について助言を行いアドバイザー業務に従事した。
(17)関西大学文学部における教育実績	平成 30 年度～ 現在に至る	関西大学文学部における家庭科教育法として、小学校における主体的・対話的で深い学びを実現するための家庭科指導の在り方について授業を行った。家庭科教育における指導計画の作成及び内容の取扱いについて、学習指導要領に則り学生の理解度を随時把握しながら進めることを心掛けた。また、毎時リフレクションシートに体得した学びと課題、疑問点等を記入させ、全学生が指導者としての知識・技能を身に付けられるようにし、自身の授業評価と改善を行った。その結果、学生からは、小学校家庭科教育の目的と教育方法が明確となったと高評価を得ることが出来た。
5 その他 特記事項なし		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1. 免許・資格 (1)小学校教諭一種免許 (2)幼稚園教諭一種免許 (3)食育インストラクター2 級 (4)応急手当普及員 (5)小学校教諭専修免許	平成 7 年 3 月 平成 7 年 3 月 平成 22 年 9 月 平成 22 年 8 月 平成 28 年 3 月	平 6 小一第 794 号（兵庫県教育委員会） 平 6 幼一第 368 号（兵庫県教育委員会） DP-0900856 第 F4056006 平 28 小専第 16 号（大阪府教育委員会）
2 特許等 特記事項なし		
3 実務の経験を有する者について特記事項		
(1)協同出版教員採用試験対策講座講師 【1 回目】 会場：大阪府社会福祉会館 対象：平成 22 年度採用試験受験者 50 人	平成 21 年 8 月	小学校教員採用試験に臨む受講生を対象に、教員採用試験合格を目的に対策講座の講師として講義した。特に教育基本法に述べられている、教職の意義や、それにふさわしい教員の姿について、実際の面接場面を想定して指導を行った。具体的な指導だと好評だった。

(2)「今求められている食育」 P T A 主宰における保護者対象教育講演会講師 会場：大阪教育大学附属池田小学校 対象：保護者、教職員 150 人	平成 22 年 6 月	大阪教育大学附属池田小学校の児童の食の実態調査結果をもとに、今求められている食育についての概要を全校保護者に向け講演を行った。レジメを用意し話した。講演会後のアンケートでは、児童の好き嫌いが減ったと感想が出て、児童の食生活の改善を図ることが出来た。
(3)協同出版教員採用試験対策講座講師 会場：大阪府社会福祉会館 対象：平成 22 年度採用試験受験者 50 人	平成 22 年 8 月	小学校教員採用試験に臨む受講生を対象に、教員採用試験合格を目的に対策講座の講師として講義した。模擬授業やロールプレーに対応できるように、学校現場で起きている実際の事例や、模擬授業における授業規律の必要性なども指導した。模擬授業の指導は、具体的だと好評だった。
(4)大阪府池田市教育委員会主催 ふくまる教志塾 講師 会場：池田市教育センター 対象：教員採用試験受験希望者	平成 24 年 7 月	池田市教育委員会主催の平成 25 年度教員採用試験突破を目指す大学生等を対象の講習講師を行った。採用試験に向けての学習法はじめ、家庭科など各教科授業づくりのポイント、保護者・児童への対応の仕方などを講義した。講習後のアンケートには、実際の小学校教員の生の声の影響は大きく、教職に対しての職務遂行能力の理解を促した。
(5)家庭科教育学会関西支部役員としての貢献	平成 24 年 8 月	日本家庭科教育学会第 43 回近畿地区会 大会を役員として成功させた。さらに西江本人も、実践・研究発表デザートのプレゼンを通して、望ましい消費者生活を提示した。
(6)大阪府豊能地区家庭科新任教員研修講師 会場：池田市立石橋南小学校 対象：平成 24 年度豊能地区新規採用教員	平成 24 年 8 月	平成 24 年度新規採用教員が対象の家庭科教育についての研修講師を行った。レジメを用い、家庭科の目的や、生涯学習での位置づけなどの学習指導要領の説明をした。また、45 分の授業の組み立て方を例示し、師範授業も行った。発問・板書・ノート指導・教材選定などを例示した。研修後のアンケートでは、教師の目線はじめ、言葉かけ、授業の組み立て方など参考にする要素が多いと評価を得た。
(7)「食卓を囲むことから始まる食育」 P T A 主宰における保護者対象教育講演会講師 会場：池田市立石橋南小学校 対象：池田市立石橋南小学校保護者 20 人	平成 26 年 10 月	孤食が取りざたされている現状を踏まえ、各家庭で会話をしながら食事をするものの意義と、身近にできる台所菜園についての講演を全校保護者向けにレジメを用意し行った。そして、今求められている食育についての概要を伝え、食を通しての人間形成について話をした。講演会後のアンケートでは、家族と食卓を囲むことの重要さに気付いたと感想が出て、保護者の食への関心を高めることができた一定の成果を生むことができた。
(8)池田市家庭科研究会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 5 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、小学生対象の消費者教育をどのように進めていく必要があるのかを講師として指導助言を行った。具体的な指導だと好評だった。

(9)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 6 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成及び発問や板書計画について具体的な指導を行った。消費者教育についての資料なども多種用意し、具体的な指導だと好評だった。
(10)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 7 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成及び発問や板書計画について具体的な指導を行った。
(11)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 8 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成の最終調整を行うと共に、7 月に行われた授業のビデオ視聴による授業検討を行った。
(12)奈良学園大学オープンキャンパス模擬授業 会場：奈良学園大学 対象：オープンキャンパス参加高校生・保護者 30 名	平成 28 年 8 月 21 日	大学の講義を体験するオープンキャンパスにおいて、高校生・保護者を対象に節電を考える家庭科教育を行った。実感を伴った理解を図るため体験活動を取り入れた講義は、大学の講義に興味・関心を持つ一助となったとの感想が聞かれた。
(13)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：豊中市立東丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 10 月	大阪府家庭科研究会大会において、5 月から行われてきた授業検討をもとに、小学校家庭科における消費者教育の授業実践を行った教員の指導助言を行った。
(14)食育講座 会場：三宅町立三宅小学校 対象：三宅町立三宅小学校保護者・教員 25 名 ・三宅町食育指導	平成 28 年 12 月	「小学生の体力向上に向けた食事のあり方」と題して、小学生に必要な栄養素を中心に、その適切な摂取方法や調理例を挙げ、保護者が家庭で行える食事のあり方について指導助言を行った。調理例や好き嫌いのある児童への対処の仕方など、無理なく行える食育として参会者に好評であった。
4 その他 特記事項なし		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 「とごころ」創刊号	共著	平成 23 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5 判 全89 頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：松井典夫、岩井陽介、能川正人、原田朋哉、垣内幸太、西村恭美、土師尚美、 <u>西江なお子</u> 、坂下剛 他 7 名 本人担当部分：「実感を伴った理解へとつないでいくための手立て」(p58～62)を単著 小学校理科教育を例に挙げ、実感を伴った理解へと児童を導く授業法の研究をまとめた。 1. 自然に親しませる。 2. 言語活動を充実させる。 3. 実験観察の仕方を工夫する。 4. 機器を活用する。 以上、児童に真の学びの場を用意し、実感を伴った理解へと導くための授業の在り方を研究実践として提案した。
2. 「とごころ」第 3 号	共著	平成 24 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5 版 63 頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：佐々木靖、岩井陽介、垣内幸太、坂下剛、小林秀訓、升村誠志、井上伸一、樋口万太郎、荒川真一、 <u>西江なお子</u> 、他 9 名 本人担当部分：「家庭科における言語活動」の実践 (p44～45) を単著 家庭科における体験的な活動を通して言語活動を充実させる授業法の研究をまとめた。 1. 児童の実態把握。 2. グループワークでの学習。 3. 異学年交流。 4. 振り返り活動。 以上、体験的な活動を学習に効果的に組み込むことを通して、言語活動の充実が図れていくことを教育実践として提案した。
3. 「とごころ」第 4 号	共著	平成 24 年 10 月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5 判 全 63 頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：松井典夫、岩井陽介、佐々木靖、加藤いつき、 <u>西江なお子</u> 、平野憲、津田一司、西田まなみ、孕石泰孝、井上伸一 他 7 名

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4.「教師も子どもも“楽しい”と思える授業づくり教職実践演習テキスト」	共著	平成 25 年 3 月	大阪教育大学	本人担当部分:『「家でもやってみたい」 と思える授業づくりを目指して』(p 50 ～53) を単著 家庭科での学びがその場だけではなく、 家庭での実践へとつながるための 授業法の研究をまとめた。 1. 学ぶ楽しさを感じる授業展開の工夫。 2. 児童の実態に適した教材選択の必要性。 3. 意識化するためのアプローチとしての「見える化」の提案。 4. 客観的思考での課題に迫る授業のアプローチ法。 5. データ分析による事実把握。 6. 学びを家庭実践へと生かす方法。 以上、学びが児童の意識に根を強くおろし、家庭での実践へと継続していく研究実践として提案した。また、家庭科教育が児童の自立の過程における役割についても論じた。 大阪教育大学における家庭科教育法の授業における教職実践演習に使用するテキストとして、執筆されたものである。 A5判 全 52 頁 編者：大本久美子 共著者：瀧野聡平、川口綾、吻那啓子、<u>西江なお子</u> 本人担当部分： 1. 「授業づくり・子どもとのかかわりのヒント」高学年児童との関わり方 はじめ、家庭科授業の組み立て方の工夫や板書計画、教材研究方法、教室環境整備のポイントなど、教師を目指す学生の指針となるよう項目だてし、理論と実践をまとめた。 2. 「魅力的な家庭科の授業例」実際の教材を 2 つ提示して、学校で家庭科の授業で使いやすいようにポイントを述べた。 ①「かしこい消費者になろう ～家族の一員として、わたしにできること～」と題し、買い手と売り手の双方を経験しながら消費者としてのあるべき姿を学ぶ授業展開を述べた。 ②「快適な住まい方 ～今の私にできること～」と題し、自分のまわりの環境に興味・関心を持ち、そこから課題を見つけ、快適という概念を自分なりに模索しよりよい環境を作り出すにはどうすればよいか考え、実行するという住環境を考える住環境について学ぶ授業展開を論じた。(p 18～24、p 40～45) を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5.「家庭科におけるアクティブ・ラーニングへの試み」	単著	平成 27 年 12 月	株式会社 EPR 教育プロ 第 45 巻 第 27 号 通巻 1796 号	最新の教育情報や斬新な実践等をまとめ、教育関係者並びに児童・生徒の保護者を対象に広く告知するために執筆されたものである。 本人担当部分:「家庭科におけるアクティブ・ラーニング」(p 18～19)を単著 ①清掃意識の実態把握。 ②見える化の体験による概念砕き。 ③言語活動による意識化と共有化。 ④メタ認知を行う。 ⑤学びを深化する。 以上、小学校家庭科教育において住まいの授業をアクティブ・ラーニングの方法で行うことにより、児童が自分の課題と向き合い、家族の一員としての自覚を持って生活し、主体的に生活する力が育成されると仮説を立て、研究実践として提案した。
6. 3 年目教師 勝負の学級づくり ーマンネリの毎日を脱却する極め付きの指導技術 56ー	共著	平成 29 年 9 月	明治図書 授業力 & 学級づくり研究会	小学校 3 年目までの教員を対象に、学級経営や授業づくりの基礎・基本を明確に解説した。 A5 判 全 126 頁 共著者: 垣内幸太、樋口万太郎、日野英之、小林秀訓、<u>西江なお子</u>、他 20 名 本人担当部分: 1.「給食準備・後片付け」と題し、低学年でも安全で早く準備ができるよそい方や、おかわりの仕方について明確な数値で児童に指導することの重要性を解説した。 2.「給食指導の裏にある 3 つのねらい」では、安全・衛生面、社会性の構築、食文化への関心向上の 3 点の重要事項について解説した。 給食を単に昼食として捉えるのではなく、食育という指導の一つとしての位置づけについて述べ、教員の食への意識向上について論じた。(p 20～23)を単著
7.「とごころ」第 9 号	単著	平成 30 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5 判 全 62 頁 編者: 大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者: 樋口綾香、佐野洋平、吉田崇之、渡辺貴裕、<u>西江なお子</u> 他 13 名 本人担当部分:『「生活実践力」育成を目指した家庭科授業デザイン』(p 56～59)を単著 「主体的・対話的で深い学びを」の実現に向けて、家庭科における授業デザインについて「生活実践力」育成に着目し授業法を述べた。次期学習指導要領解説家庭科編によると、家庭科教育の課題の一つは、家庭での実践に繋がっていないことであると挙げられている。そこで清掃学習における体験活動・交流活動・評価活動の往還により課題

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				解決を図る生活実践力育成をめざした授業デザインを構築した。この学習を通して、実践前後における児童の取り組みと意識に変容が見られた。このことから、生活実践力育成における一つの取り組みとして体験・交流・評価活動の往還は有効であることが明らかとなった。
8. 新指導要領準拠 小学校家庭科教育の基礎基本	単著	平成 30 年 9 月	株式会社 ERP	平成 31 年度実施の新学習指導要領に準拠し、小学校家庭科教育の変遷並びに指導計画の作成及び内容の取扱い、また、授業づくりについて、小学校教員を目指す学生や家庭科を初めて指導する教員を対象に作成したブックレットである。授業づくりの項目においては、児童を取り巻く状況を具体のデータを提示、分析し、必要な支援の在り方や授業構成について詳細に述べている。加えて、授業実践も適宜掲載し、授業づくりの在り方を解説した。本著は、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「家庭科指導法」、関西大学文学部「家庭科教育法」において使用しているが、学生からは小学校家庭科の課題や児童の実態、及び指導案の書き方などが明確に分かると高評価を得ている。
(学術論文等) 1. 消費者教育における効果的な授業方法に関する研究	単著	平成 22 年 8 月	大阪教育大学附属池田小学校教育振興会 第 16 号 p83～86	食の安全が問われる現状を踏まえ、食品表示を見て商品を購入することの意義と必要性を考え、実践力へとつなげていく教材研究と授業法の検証の研究のまとめである。教材は、広告を考え、売り手側の心理に迫り、宣伝広告と食品表示の違いを知ることから、商品の本質を知ることの意義を考えさせる。そして、家族の一員として自分に出来ることを考え、実践へとつないでいく。成果として、売り手の立場で商品を見ることにより、商品をより深く観察することが出来ると同時に、今までの自身の商品選択の視点に気づき、これからの自分を意識することが出来るようになったことである。本研究を通して、児童が家庭で家族の安心・安全を守るために食材選定のポイントを提案したり、実際に買い物場面で学びを生かした発言をしたりしたという保護者の報告を受け、一定の成果を得ることが出来た。この実践を本著により、消費者教育における効果的な授業方法に関する研究として発信した。
2. 快適な住まい方～今の私にできること～	単著	平成 24 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 p101, 102	まわりを取り巻く環境に興味・関心を抱き、課題点を見出し、改善するための方策を考え、自分に出来ることをみつけ実践する力を養うことをねらい

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 私は我が家の節電大臣 ～今の私にできること～	単著	平成 24 年 11 月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 p50～53	とした授業実践と理論の記録である。授業では「快適」の定義を児童個々にイメージさせ定義づけし、めざす快適像を確立させる。そしてそれにむかうためにどのようなアプローチを踏めば実現可能となるのかを検証させ、実践へとつないだ。この学びを生かして冬場の教室における空気の循環を効率よく行うよう窓の開け方を工夫したり、臭いや色彩といったものに着目したりしてより快適な環境づくりに励み、家庭でも実践したことを保護者から報告を受けた。住生活における「快適」の定義を理解し、その環境を創造するための研究である。 節電という言葉メディア等で目にするものの、何をどれだけ行えばよいかが分からないままでは、継続した節電は難しい。しかし、節電は現在の日本の重要課題と言っても過言ではなく、その意義を知り意識して取り組むことが出来る児童を育てることが必要である。そこで、節電の今ある課題を見出し、節電に繋がる様々な方策を考え、自分にできることを見つけ、実践する力を養うことをねらいとして授業を実践したまとめである。 労力と電気の実感するため、自転車発電機で実際に発電させる。また待機電力を測定し、その電力を年間に換算してどれほどの節電に繋がるのかをデータ化する。こうした実際に体を動かしたり数値化したりするなど様々な「見える化」のアプローチを経て、節電を実感させた。この学びから児童は校内の待機電力を省き、無駄な電気の消灯などに積極的に取り組むとともに、家庭でも実践を続け、一定の成果を得ることができた。
4. 私は我が家のコーディネーター ～「見える化」をめざした家庭科の授業～	単著	平成 25 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 p50～51	「汚れが見えていない＝清潔」という既成概念を覆し、清掃の在り方を見直し、清掃の意義を考え実践につないでいく授業の理論と実践のまとめである。ドアノブや電気スイッチなど不特定多数の人が触れる場所や、一見きれいに見える壁や机まわりなどにも、拭ききれいでいない汚れが付着していることを光線の特殊なブラックライトを用いて照射し「見える化」する。それが人体に与える影響を考え、「きれいなはず」という意識を覆し、見えない汚れを取り除き、気持ちの良い環境づくりが実現する方策を考えさせる授業記録である。実際に自分の身近な物を雑巾等で拭き汚れを実感させることで、その後の清掃態度が激変すると同時に家庭でも掃除機での掃除のみならず、拭き掃除も取り入れたという報告を保護

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. ビブリオバトル～読んで聞いて話して～	単著	平成 27 年 2 月	池田市立石橋南小学校研究紀要 p19～20	者から受け、学びが家庭での実践に繋がりが一定の成果を得ることができた。 住環境の汚れに対し、意識下から意識化へと児童を変容させる適切な指導法の研究を発信した。 国語科でビブリオバトルというゲームの要素を持つ書評を行い、読む力・話す力・聞く力を身につけさせる指導法の在り方を研究した。初めは本の概要を説明する際、下書きをして読む練習を重ねていた児童も、回を重ねるうちに原稿を読むことなく与えられた時間内で、要点をつかみ聞き手に分かりやすく話すことができるようになった。また、聞く側も何を質問すればよいのか視点を絞りながらメモを取ることができまでの力をつけることができた。この活動を通して聞く力と話す力、読む力を育てることができ、他の様々な場面でもその力を活用することができるようになり、成果を得ることができた。
6. 内面に働きかける小学校家庭科教育 一意味ある体験活動を通して— 【査読付き】	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学会 人間教育学研究 第 3 号 p123～132	体験活動を積極的に取り入れることにより、児童が自分の課題と向き合い、家族の一員としての自覚を持って生活し、主体的に生活する力が育成されると仮説を立てて、家庭科教育の授業実践を行ったまとめである。 実践 1：品質表示に注目する意義を体験活動を通して児童に意味づけし、家庭生活で実践することにより主体的な生活者の育成を目的として行った。 実践 2：身近な活動であるにも関わらず、児童の興味・関心が低く積極的な取り組みが継続されにくい清掃活動の学習において、快適な環境とはどのようなものかを実感させ、家庭での実践へとつないでいくことを目的として行った。 見える化の活動や、消費者と売り手の両者の視点を経験させ、実感を伴った理解へと導く活動など、いずれも体験活動を通して児童の概念砕きを行った結果、児童の学習意欲の喚起につながり、自ら調査・分析したり、新たな課題を見つけそれを解決する方法を模索したりするなど、まさに学びの過程である「感覚→思考→実践」を一連の学習の中で行い、学びを深化させていくことができる、適切な指導法の研究を発信した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 他社との出会いによる自己変容	単著	平成 28 年 3 月	大阪教育大学実践学校教育講座 実践教育学論集 2015 ―現代の教育問題を考える 20― 特集: ◇私を変容に導いた受苦的「経験」 p42～45	自分自身を変容へと導いた受苦的経験を高橋橋勝の理論に基づいてメタモルフォーゼする過程とその要因について分析した。本分析をもとに、教員の在り方について考察した。
8. 生活実践力の育成を目指した小学校家庭科モデル開発に関する研究 ―実感を伴った理解へと導く体験活動を通して―	単著	平成 28 年 12 月	奈良学園大学研究紀要 第 4 号 p133～139	小学校家庭科教育における課題の一つとして、学習した知識や技術などが実生活で十分に活かされていないことが挙げられる。そこで、学びを生活の中で継続して実行し、生活をよりよくしようとする態度や技能を「生活実践力」と定義づけ、授業での学びを生活実践力に結び付けていくモデル開発を行い、体験活動による動機づけの教育的な効果について論じた。
9. 「生活実践力の育成による人間教育 ―家庭科授業モデルの構築―」 【査読付き】	単著	平成 28 年 12 月	人間教育学会 人間教育学研究 第 4 号 p107～114	小学校家庭科において、生活実践力を図るうえで重要な要素である体験、交流、評価についてそれぞれ検証し、その意義をまとめると共に、それら三つの往還による生活実践力向上を図る授業モデルを開発し、その有効性を検証した。
10. 「生活実践力を高める小学校家庭科のプログラム開発 ―「体験・交流・評価」の往還を手がかりにして―」 (修士論文)	単著	平成 29 年 2 月	大阪教育大学大学院 実践学校教育専攻 修士論文	「実践力を高める小学校家庭科教育のモデル開発 ～家庭での実習を組み込んだ『ふり返し活動』の実践を手掛かりにして～」という研究テーマに沿って、家庭科教育の課題の一つである「実践力」を育成するための手立てを実践研究したまとめである。清掃学習に振り返り活動と家庭での学習を移動計画に組み込むことにより、継続した実践が行われた結果を分析し、実践力を高める授業モデルを開発、提案する。 A4判 142 頁
11. 「家庭科における可視化を通じた実践力育成に関する一考察」	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第 6 号 p 83～89	小学校家庭科において、可視化を授業に取り入れることにより実践力向上を図ることができるという仮説を立て、実践研究を行い、その成果と課題をまとめた。サーモグラフィーで体内の熱分布を、ルームランナーで電気を可視化し、節電の意義と必然性を実感を伴って理解させ、節電について考えさせた。本実践を通して節電が児童の生活で日常化する成果が見られ、可視化の有効性を検証することが出来た。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12.「家庭科における見えない汚れを可視化する掃除学習の有効性」	単著	平成30年6月	奈良学園大学学術雑誌論文 1巻第4号 P113~121	家庭科の目標の一つは実践力を身に付けることであるが、掃除学習は定着に困難が見られる。そこで、定着を図ることを目的に、見えない汚れの可視化を図ることにより、日常の住まい方への関心を高め、住まい方に関する基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、快適な住まい方を考え工夫する能力を育成することができるという仮説を立て、授業モデルを作成し、その有効性を検証した。その結果、実践後一定期間経過後も緩やかな現象はあるものの、家庭において継続して掃除を実施する児童が確認できた。以上より、掃除学習に可視化を取り入れることは、児童の実践力向上に有効であることが明らかとなった。
13.「動物介在・愛護を通して考える「いのちの教育」に関する文献研究」	単著	平成30年9月	奈良学園大学研究紀要 第9号 P127~136	家庭科におけるいのちの教育の研究及び実践事例を調査すると共に、学校現場や学校現場外における動物介在教育や動物愛護教育についての研究及び実践事例を概観することを目的とした。関連する文献を検索したところ20件が抽出され、内容を整理した。家庭科におけるいのちの教育は保育領域や食と関連付けているものが多いことが明らかとなった。また、動物介在教育は学校において実践する際には、十分な知見や教員間の共通理解と共に、専門家の助言を取り入れる必要があること、また動物愛護教育の実践事例及び研究は数少なく、行政が中心となって取り組んでいることが明らかとなった。
(その他) 「依頼原稿等」 1.小学生夏休みの家庭学習用教材編集	単著	平成22年4月～平成24年4月	(株)文溪堂	事前に児童の実態調査を行い、長期休暇に行うべき学習課題を明確化し、各教科ごとの重要項目を簡潔にまとめ、児童のつまづきやすい内容を吟味し、問題作成し教材作成会社文溪堂に提示した。小学校1年～6年までの全学年の学習用教材の企画と編集に関わった。執筆者は池田附属小学校の各教科の教師である。西江は教材全体の構成と、各教科等のバランスを調整校正を担当した。 A4判 p14~18
2.保護者対象教育講演会資料冊子 「今求められている食育」	単著	平成22年6月	大阪教育大学池田附属小学校 PTA主催	大阪教育大学池田附属小学校 PTA を対象に、孤食が取りざたされている現状を踏まえ、各家庭で会話をしながら食事をするものの意義と、身近にできる台所菜園についての講演を全校保護者向けに行った際の資料であり、今求められている食育についてアンケート結果を盛り込みながらまとめた。 A4判 6頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3.大阪府豊能地区新規採用家庭科教員研修会資料冊子	単著	平成 24 年 8 月	豊能地区教育委員会 大阪教育大学附属池田小学校家庭科教育部会	平成 24 年度新規採用教員が対象の家庭科教育についての研修講師を行った。その際、家庭科教育の目的や生涯学習での位置づけなどの学習指導要領の説明を行う際の小冊子を作成し、それをもとに講義を行った。また、45 分の授業の組み立て方を例示し、師範授業も行い、発問・板書・ノート指導・教材選定の仕方などを例示した。 A4 判 6 頁
4.「第八回シンポジウム『アクティブラーニングを通して考える道徳をどうすすめるか』」	単著	平成 29 年 2 月	株式会社 EPR 教育プロ 第 47 巻 第 4 号 通巻 1829 号	平成 29 年 1 月 22 日開催の「いのちの教育研究会 第 8 回シンポジウム」におけるリポートを執筆した。アクティブラーニングを通して考える道徳をどうすすめるかをテーマに、基調提案・講演が行われ、それを受けて「子どもが命の大切さを実感するには」をテーマとして、グループ討議を行われたが、そこでの参加者の声やアンケート結果をもとに、いのちの教育についてまとめた。P8～9
「学会発表等」 1. デザートのプレゼンを通して、望ましい消費者生活を考えた 授業実践	—	平成 24 年 8 月	平成 24 年度日本家庭科教育学会 第 43 回近畿地区会 実践・研究発表抄録 (p 4) (大阪府、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究所 大阪サテライト)	類似品が数多く並ぶ中、商品に記載されている多種多様な情報を見極め、必要とする商品を購入する力は、食品の安全がとりざたされている昨今、児童にとっても必要不可欠な力である。食品表示は食品の重要な情報であり、これを見て購入する習慣をつけることは、自分や家族の健康を守る上で大切なことである。本題材は、意識的に商品を見る姿勢を児童に芽生えさせ情報を取捨選択する力をつけさせることを目的として行い、この実践と支える理論を学会で発表した。 A4 判 p 4
2. 生活実践力の向上を図る小学校家庭科教育のプログラム	—	平成 29 年 3 月	日本教師学学会 第 18 回大会 実践研究発表	小学校家庭科教育の課題として、学習内容が定着しておらず実生活で活かされていないことが挙げられる。そこで、実践力を体験活動・評価活動・交流活動の往還によって育成することが出来るという仮説を立て、実践モデルを開発し、その成果と課題を発表した。 A4 判 p8
3. 小学校家庭科における生活実践力育成の授業モデル構想	—	平成 29 年 8 月	日本家庭科教育学会近畿地区会 研究発表	小学校家庭科における課題の一つとして学習した知識や技術などが実生活で十分生かされていないことを文部科学省は指摘している。この現状を受け、児童の生活実践力の育成を図る授業モデルを構想し、研究実践を行い成果と課題を発表した。 A4 判 p9

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(取材)				
1. 家庭科における「いのちの教育」の取り組みについて		平成 30 年 11 月	朝日新聞社	家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」の可能性を探り、その有効性の実証に向けの実践が、朝日新聞社に取材を受け発信された。本研究により、動物のいのちについて考えることにより、児童のいのちに対する意識が大きく変容することが明らかとなった。また、保護者、地域住民、児童が一堂に会し、いのちについて考え、語ることの意義も見出すことができ、その有効性を新聞により広く告知された。 (池田市立石橋南小学校)
2. 家庭科における「いのちの教育」の取り組みについて		平成 30 年 11 月	ケーブルテレビ (大阪北摂版)	家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」の可能性を探り、その有効性の実証に向けの実践が、ケーブルテレビ(大阪北摂版)に取材を受け発信された。会場には地域住民、保護者、児童計約 200 名が集まり、映画「犬に名前をつける日」を鑑賞、その後、NPO 法人「犬猫みなしご救援隊」代表中谷百合氏、映画監督山田あかね氏の講演を聞き、いのちについて考えた。授業後、本研究の趣旨並びに授業についての取材を受け、いのちの教育についての取り組み、児童の変容を語った。以上から、いのちの教育への関心の高さと必要性を実感するとともに、本研究の有効性を検証することが出来た。 (池田市立石橋南小学校)
3. 保護者と歩む情報誌 Partner		平成 30 年 12 月	ブンブンどりむ	家庭における「お手伝い」の意義と、児童の「お手伝い」への意識改革について取材を受けた。小学校における今までの実践事例をもとに、主体的・能動的な活動へと導く工夫として、汚れの視覚化やゲーム性の導入、フィードバックと称賛など、家庭で実践可能な取り組みを多く紹介した。加えて、小学校教員志望学生への、家庭科指導法における「家庭の仕事」の分野の授業法についても触れ、家庭と学校の連携の必要性も述べた。以上より、情報誌作成者からは、具体的で明確な事例であり、実践可能であると高評価を得ることが出来た。

教 育 研 究 業 績 書		
平成 31 年 3 月 31 日		
氏名 原口 忠之		
研 究 分 野	研究内容のキーワード	
Algebraic Topology, Diffeology	Diffeological space, Homotopy theory, smooth CW complex	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1. E-Learning を用いた数学の基礎学力の定着と管理運営を実施した。	平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月	環太平洋大学の学生支援係に所属しており、大学 1 年生に、国語、数学、英語の基礎学力の定着を促すため、E-Learning を導入し、主に数学を担当した。また、導入した年度であったため、管理運営も担当し、1 年生の全学生に対して、国語、数学、英語のノルマを達成させ、最後の確認試験では、全員が合格点を取得した。
2. 大志会の夜の勉強会	平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月	環太平洋大学の教員採用試験合格を目標にしている学生が集まる大志会という組織に所属し、毎週 1 回から 2 回、採用試験に向けた数学の授業を 17 時～21 時まで実施し、学生の採用試験合格に貢献した。
3. 数学道場	平成 30 年 4 月～現在に至る	教員採用試験合格を目指し、数学検定準 1 級合格を目指し、週に 3 回実施している。その他にも学生のレベルに合わせた補修計画をたてている。
2 作成した教科書、教材 1. 環太平洋大学通信教育課程中等教育数学専攻設置において、単位認定のレポート作成	平成 24 年 6 月	数学基礎 I, 数学基礎 II, 集合・位相 I, 集合・位相 II, 幾何学 I, 幾何学 II, 幾何学 III の設置審査にむけて、各教科に対してレポートを 2 部作成し、全ての教科において審査を通過した。
2. 環太平洋大学通信教育課程中等教育数学専攻単位認定試験の作成	平成 25 年 1 月	数学基礎 I, 数学基礎 II, 集合・位相 I, 集合・位相 II, 幾何学 I, 幾何学 II, 幾何学 III の試験問題を各教科につき複数部作成した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 「採用時における評価」 1. 環太平洋大学次世代教育学部助教の採用にあたっての学長評価	平成 24 年 3 月	高等学校の現場での教育経験を生かして、環太平洋大学のリメディアル教育、および通信教育課程の立ち上げへの期待があり採用された。
2. 大分工業高等専門学校一般科理系講師の採用にあたっての校長評価	平成 26 年 3 月	私立大学・高等学校での教育経験を生かして、高専における数学教育を期待され採用された。とくに面接時の模擬授業は、過去最高の内容と評価された。
3. 奈良学園大学人間教育学部講師の採用にあたっての学長評価	平成 30 年 3 月	私立大学・高専・高等学校での様々な数学教育の経験があり、また環太平洋大学所属時に通信教育課程の数学を管理運営した経験を期待され採用された。
「授業評価アンケート」 1. 環太平洋大学教務課による学生授業評価アンケート	平成 25 年 2 月	平成 24 年度の授業評価アンケートの平均が 4 段階中で 3.29 であった。

2. 大分工業高等専門学校教務主事室による学生授業評価アンケート（通年科目）	平成 27 年 2 月	大分高専において平成 26 年度は授業を 4 クラス担当し、5 段階で平均が 4.23 であった。また、情報工学科 1 年の基礎数学 I では 4.44、電気電子工学科 2 年の線形代数では 4.21 であり、それぞれのクラスの全ての授業の中で、一番よい成績であった。 ※通年科目のみ担当
3. 大分工業高等専門学校教務主事室による学生授業評価アンケート（通年科目）	平成 28 年 2 月	大分高専において平成 27 年度は授業を 4 クラス担当し、5 段階で平均が 4.29 であった。機会工学科 1 年の基礎数学 I では 4.65、情報工学科 2 年の微分積分 I では 4.02、都市環境工学科 3 年の微分積分 II では 3.98、電気電子工学科 3 年の微分方程式は 4.51 であった。 ※通年科目のみ担当
4. 大分工業高等専門学校教務主事室による学生授業評価アンケート（通年科目）	平成 29 年 2 月	大分高専において平成 28 年度は授業を 4 クラス担当し、5 段階で平均が 4.35 であった。情報工学科 1 年の基礎数学 I は 4.4、機会工学科 2 年の微分積分 I は 4.24、情報工学科 3 年の微分積分 II は 4.53、電気電子工学科 3 年の微分方程式は 4.23 であった。 ※通年科目のみ担当
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 公開授業（岡山県立岡山朝日高等学校）	平成 22 年 10 月	岡山県立朝日高等学校にて、県内の中学校・高等学校を対象に公開授業を実施した。
2. 公開授業（岡山県立岡山朝日高等学校）	平成 23 年 10 月	岡山県立朝日高等学校にて、県内の中学校・高等学校を対象に公開授業を実施した。
3. 特別公開授業（環太平洋大学）	平成 24 年 11 月	岡山県内の高等学校をはじめ、環太平洋大学の教員を対象とした「数の理解」の研究授業を発表し、検討会を実施した。
4. 科研費獲得へ向けた講演の世話人	平成 25 年 9 月	環太平洋大学において、科研費獲得に向けた講演を文科省を通じて依頼し、当日に向けた準備、講演会での司会を担当した。
5. 岡山大学オープンキャンパス体験講義の特別講師	平成 28 年 8 月	岡山大学のオープンキャンパスの理学部数学科において、特別講師として、「オイラー標数の幾何学」というタイトルで体験授業を実施した。
6. 奈良学園大学オープンキャンパス ミニ講義	平成 30 年 6 月	「代数方程式～3 次方程式の解の公式」というタイトルでミニ講義を実施した。
7. 奈良学園大学オープンキャンパス ミニ講義	平成 30 年 8 月	「オイラー標数～正多面体の個数」というタイトルでミニ講義を実施した。
5 その他		
1. 該当なし		
職 務 上 の 実 績 に 関 す		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許		
1. 高等学校教諭一種免許状（数学）取得	平成 19 年 3 月 23 日	岡山県教育委員会，平 18 高一第 965 号
2. 高等学校教諭専修免許状（数学）取得	平成 21 年 3 月 23 日	岡山県教育委員会，平 20 高専第 67 号
2 特許等		
1. 該当なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

1. 環太平洋大学大志会	平成24年4月～平成26年3月	環太平洋大学の教員を目指す学生に対して、教員採用試験用の数学の指導だけでなく、夜の勉強会の監督や、学生の相談に対応した。
2. 環太平洋大学学習支援室	平成24年4月～平成26年3月	環太平洋大学で主に低学年の基礎学力の定着を図る組織として学習支援室があり、E-Learning の管理運営だけでなく、新入生300人に対するオリエンテーションの企画、段取り等の運営に積極的に取り組んだ。また、就活生に対して、SPI の指導も実施した。
3. 環太平洋大学次世代教育学部クラス担任	平成24年4月～平成25年3月	学生30名のクラス担任を担当した。
4. 環太平洋大学次世代教育学部クラス担任	平成25年4月～平成26年3月	学生30名のクラス担任を担当した。
5. 環太平洋大学 FD 委員	平成25年4月～平成26年3月	環太平洋大学の教員の授業力向上や学生指導方法のワークショップの企画・運営を行った。
6. 環太平洋大学紀要編集委員	平成25年4月～平成26年3月	環太平洋大学研究紀要に掲載するにあたり研究内容が論文、研究ノート等に適切かどうかを判断し編集、とりまとめを行った。
7. 大分高専図書館運営委員	平成26年4月～平成28年3月	明野通信の作成、学生の図書館の利用の管理を行った。
8. 大分高専弓道部	平成26年4月～平成28年3月	2年間担当し、管理運営をした。
9. 大分高専囲碁将棋部顧問	平成26年4月～平成30年3月	10年ほど趣味にしている将棋の経験を生かして、4年間担当した。、平成26年度は大分県高校選手権大会で団体戦・個人戦で準優勝する実績をあげ、個人戦は全国高校将棋選手権大会に出場した。また、平成27年度は全国高専大会でベスト4に入賞した。
10. 大分高専奨学金資金等委員	平成27年4月～平成28年3月	学生の奨学金の申請を審議する。
11. 大分高専学生部委員会	平成27年4月～平成28年3月	学生の処分に関することを協議・決議する。
12. 大分高専オープンキャンパス副委員長	平成27年4月～平成28年3月	大分高専のオープンキャンパス副委員長として、段取りの精査や当日の司会進行等を務めた。
13. 大分高専広報委員会	平成27年4月～平成29年3月	大分高専のHPの掲示内容、広報活動について計画する。
14. 大分高専学生主事補	平成27年4月～平成29年3月	平成27年度は、学生の車両通学に関する指導が主な業務であり、本年度は特に学生の車両に関する管理を担当し、大分自動車学校における安全講習会の段取り、大分中央警察署と連携をとり安全講習の講演会を企画した。 平成28年度は、新入生オリエンテーション、高専祭等のイベントを運営し、学生会の予算案の作成を担当する等、学生会の運営管理を主な仕事とした。

15. 大分高専教務部委員	平成28年4月～平成30年3月	教員の授業カリキュラムの構成、年間行事を管理するだけでなく、中学校訪問を企画、実施する。また、Web シラバスを大分高専に導入する際に、学科を代表して取りまとめる業務を担当した。		
16. 大分高専ソフトテニス部顧問	平成28年4月～平成30年3月	ソフトテニスの経験が10年ほどあったことを生かして、強化に努めた。とくに九州・沖縄地区高専大会では36年ぶりに個人戦優勝、全国高専大会では開学以来、初めてとなる団体戦・個人戦ともにベスト4の実績をあげた。また、高校総体でも新人戦で大分県ベスト8に入るなど九州大会の出場権を得た。		
17. 大分高専機械工学科1年クラス担任	平成29年4月～平成30年3月	43名のクラスの担任を1年間務めた。学力が低いため11月からは、時間の都合がつく限り放課後に数学の補修を実施するなどして、基礎学力の向上に貢献した。		
18. 奈良学園大学人間教育学部数学専修コース1年②のクラス担任（17名）	平成30年4月～平成31年3月	学生の出席状況の確認・面談等を適宜行う。また、数学の学力の向上を図るため、補修等を実施している。		
19. 奈良学園大学人間教育学部企業公務員①のクラス担任（24名）	平成30年4月～平成31年3月	学生の出席状況の確認・面談等を適宜行いながら、クラス運営を実施している。		
20. 奈良学園大学人間教育学研究会運営委員（研究会・講演会等の事業）	平成30年4月～平成31年3月	「卒業生から聞こう、教わろう」、「学生シンポジウム」、「卒業研究発表」の運営		
21. 奈良学園大学人間教育学研究会運営委員（会報・研究会誌の発行事業）	平成30年4月～現在に至る	会報・研究会誌の審査等をし、発行の準備をする。		
22. 奈良学園大学人間教育学部広報委員	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学オープンキャンパスにおいて、学生のプレゼン指導等をはじめ運営に携わっている。		
4 その他 1. 該当なし				
研 究 業 績 等 に 関 す る				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 該当なし				
(学術論文) 1 微分空間と位相空間（修士論文、査読無）	単著	平成21年3月	岡山大学大学院修士論文（数学）pp.148-163	微分空間と位相空間の関係についてまとめた論文である。とくに、位相空間の可微分多様体を一般化した空間が微分空間になっているため、微分空間と位相空間は似た性質を持つことが予測できる。例えば、部分空間や直積、直和、商空間といったものは位相空間で定義できる。同様に微分空間でも定義できる。さらに写像空間も定義でき、何の制限もなしに微分空間の圏はデカルト閉圏になっていることが証明があることが知られている。これらの事についてまとめた。（16項）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 位相空間と微分空間のホモトピー群について（査読無）	単著	平成 24 年 10 月	環太平洋大学研究紀要第 6 号，pp. 77-80	位相空間 X に対して、ユークリッド空間の開集合から X への連続写像をプロットとすることで自然に微分空間 DX を誘導する。圏 Top と圏 $Diff$ とするとき関手 $D : Top \rightarrow Diff$ を定義することができる。このとき関手 $D : Top \rightarrow Diff$ はホモトピーを保つことを証明している。つまり、位相空間 X から誘導される n 次元ホモトピー群と微分空間から誘導される n 次元ホモトピー群は同型であることを証明した。この結果はホモトピー論を展開する上で重要な結果となる。（4 項）
3 A homotopy theory of diffeological and numerical generated spaces（学位論文，査読なし）	単著	平成 25 年 3 月	岡山大学学術成果リポジトリ	位相空間の圏を Top で表すとき、圏 Top は有限生成モデル構造をもつことが知られている。本論文では微分空間の圏を $Diff$ で表すとき、圏 $Diff$ は有限生成モデル構造を持つことを証明する。さらに数値的生成空間からなる圏 Top の充満部分圏を NG で表すとき、圏 NG は有限生成モデル構造をもつことを証明し、圏 Top と圏 NG は Quillen 同値であることを証明し、圏 $Diff$ から圏 Top 、圏 NG への Quillen 随伴関手が存在することを証明し、これらの結果をまとめた。（54 項）
4 A model structure on the category of diffeological spaces（査読無）	共著	平成 25 年 11 月	arXiv:1311.5668	位相空間の圏 Top には有限生成モデル構造を持つことが知られている。この導入方法をもとに、微分空間の圏 $Diff$ に有限生成モデル構造を導入することに成功した。関手 $T : Diff \rightarrow Top$ と $D : Top \rightarrow Diff$ が存在し、 T は D の左随伴関手である。これらの関手を用いて、圏 $Diff$ と圏 Top の性質を比較することができる。とくに、 $(T, D) : Diff \rightarrow Top$ は Quillen 同値を誘導することが証明できた。この結果により圏 $Diff$ と圏 Top で展開されるホモトピー論は一致することが分かった。（30 項） （担当部分） 第 2 章「Diffeological spaces」～第 5 章「Model category of diffeological spaces」P. 2～P. 20 〔共著者〕 島川和久

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
5 Long Exact Sequences for De Rham Cohomology of Diffeological Spaces (査読付)	単著	平成 26 年 9 月	Kyushu Journal of Mathematics. Vol. 68 (2014) No. 2, pp. 333-345.	微分空間にコンパクトサポートが備わった微分形式を定義し、この微分形式を用いてコンパクトサポートが備わったド・ラム・コホモロジーを定義した。また、ド・ラム・コホモロジーの完全系列が存在する微分空間についての条件を言及し、具体的な例として、1 の分割が存在する diffeological subcartesian space を定義した。これにより、既存のド・ラム・コホモロジー理論の拡張に繋がるだけでなくホモトピー論とコホモロジー理論の融合に繋がる結果を得た。(13 項)
6 On model structure for coreflective subcategories of a model category (査読付)	単著	平成 27 年 1 月	Mathematical Journal of Okayama University, 57 (2015), pp. 79-84.	有限生成モデル圏の部分圏に有限生成モデル構造を導入する手法を構成し、条件を制約することによりもとの圏のモデル構造と Quillen 同値になることを証明した。この定理の具体的な例として、数値的生成空間からなる位相空間の圏 Top の充滿部分圏 NG、コンパクト生成空間からなる圏 Top の充滿部分圏 CG に対して圏 Top の有限生成モデル構造を圏 NG、圏 CG にそれぞれ導入し、さらに、圏 Top、圏 NG、圏 CG のモデル圏構造は Quillen 同値であることを証明した。(6 項)
7 オイラー標数を用いた初等幾何へのアプローチについて (査読無)	単著	平成 30 年 7 月	人間教育第 1 巻第 5 号, pp. 157-161	初等幾何の代表的な問題として知られる“正多面体が 5 つしかない”という性質を、大学で学ぶ抽象的な概念の 1 つのオイラー標数を利用して、中学生が理解できるように指導方法をまとめた。この手法を用いることにより、中学生でも大学で学ぶような抽象的な数学的概念に触れることができ、数学への興味関心を深めることが期待できる。(5 項)
8 Homology and cohomology via enriched bifunctors (査読付)	共著	平成 30 年 8 月	Kyushu Journal of Mathematics. Vol. 72 (2018) No. 2, pp. 239-252	圏 Diff の圏 Top の間にある関手 $T: \text{Diff} \rightarrow \text{Top}$ と $D: \text{Top} \rightarrow \text{Diff}$ において T は D の左随伴関手である。 TDX と X が同相になるような位相空間を数値的生成空間とよぶ。数値的生成空間からなる圏 Top の充滿部分圏を NG とするとき、圏 NG は極限、余極限に関して閉じており、デカルト閉圏であることを証明した。さらに、スマッシュ積に関してモノイドであることを示した。とくに原口は圏 NG がデカルト閉圏となることを証明することを担当した。(14 項) (担当部分) 第 2 章「Nmerically generated spaces」～第 3 章「Exponentials in NG」P. 2～P. 6 〔共著者〕 島川和久、吉田耕平

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9 微分空間 I (査読無)	単著	平成 30 年 10 月	人間教育第 1 巻第 8 号, pp. 261-266	Zemmour の著書 ``Diffeology`` を参考にして、diffeological space (微分空間) の解説を試みた論文である。微分空間の公理を導入し、例としてユークリッド空間の具体的な微分構造を紹介した。また、微分空間の間の射 (滑らかな写像) を定めた。この性質を利用して、微分構造を写像によって引き戻すことで、集合に微分構造を導入する inductive 性を紹介した。この性質を利用することで、微分空間の部分集合に自然に微分構造を導入することができることも紹介している。(6 項)
10 微分空間 II (査読無)	単著	平成 30 年 10 月	人間教育第 1 巻第 8 号, pp. 267-272	Zemmour の著書 ``Diffeology`` を参考にして、diffeological space (微分空間) の基本的な性質について、微分空間 I の継続として解説を試みた論文である。本稿では、微分空間の微分構造を、写像を利用して、押し出すことによって、集合に微分構造を与えることを紹介した。この性質を利用して、微分空間の直和空間・直積空間・商空間を定義する。これらのことから、微分空間の圏は極限・余極限に関して閉じていることを紹介した。(6 項)
11 Homotopy structures of smooth CW complexes (査読無)	単著	平成 30 年 11 月	arXiv:1811.06175	微分空間の圏 Diff 上において、滑らかな CW 複体を構成し、その性質を調べた。Tame 性の概念を導入することでホモトピー拡張性質を滑らかな CW 複体上で利用することができる。この条件をりようすることで、胞体近似定理、ホモトピー同値に関する Whitehead の定理を証明することができた。また、2 つの滑らかな CW 複体の直積は CW 複体であり、位相空間の圏 Top 上の CW 複体よりも扱いやすい面もあることを発見した。(19 項)
(その他) 「報告書」 1 微分空間と位相空間	単著	平成 21 年 9 月	空間の代数的・幾何的モデルとその周辺 2009 報告集, pp. 82-91	微分空間は近年、注目を浴びだした分野であり可微分多様体を一般化した空間として知られており、微分空間の間の写像は無限回微分可能となる構造をもつ。そのため、位相空間では取り扱えない理論を構成することが期待できる。本講演では、この微分空間が価値のある研究であることを、具体的な例をあげながら紹介する。とくに、微分空間は直積、部分空間、直和、商空間が定義することができ、デカルト閉圏であることを報告集にまとめた。(10 項)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 微分空間と位相空間	単著	平成 24 年 3 月	日本数学会 2012 年度年会総合分科会総合分科会トポロジー分科会アブストラクト	可微分多様体を一般化した概念として知られる diffeological space が導入された。近年、この空間が注目され始めた。この diffeological space の基本的な性質を紹介している。とくに微分構造をもつ写像であるにも関わらず、直和や商空間の概念を導入することができ、極限・余極限に関して閉じている。また写像空間の概念も導入でき、これがデカルト閉圏であることも紹介している。(2 項)
3 Model structure of numerically generated spaces	単著	平成 24 年 9 月	日本数学会 2012 年度秋季総合分科会総合分科会トポロジー分科会アブストラクト	位相空間の特殊な空間として数値的生成空間の性質を紹介する。数値的生成空間は、任意のユークリッド空間の開集合から集合 X への写像が連続な写像になるような最も弱い位相が導入されている。この数値的生成空間の圏は極限・余極限に閉じており、デカルト閉圏である。さらに、モデル構造を導入でき、位相空間の圏 Top のモデル構造と Quillen 同値であることを紹介している。(2 項)
4 Long exact sequences for de Rham cohomology of diffeological spaces	単著	平成 25 年 3 月	日本数学会 2013 年度年会総合分科会トポロジー分科会アブストラクト	任意の微分空間には de Rham コホモロジー群を定義できることが知られている。このコホモロジー群を計算するための有用な道具として完全系列を利用できる条件を紹介している。(2 項)
5 微分空間の性質とその応用について	単著	平成 26 年 3 月	第 10 回数学総合若手研究集会～多分野間の交流による発展・発見を目指して～北海道大学数学講究録，pp. 181-184	任意の微分空間 X は X のプロットを用いることで微分形式を定義することが可能であり、この微分形式を用いてド・ラム・コホモロジーを構成できることが可能であり、ホモトピー不変であることが知られている。この理論の発展として、コンパクトサポートが備わった微分形式を構成し、これを用いてコンパクトサポートが備わったド・ラム・コホモロジーを構成することに成功した。これらの理論を整備するにあたり微分空間から誘導される位相空間の性質について調べた。(4 項)
6 数値的生成空間の圏へのモデル構造の導入とその一般化について	単著	平成 26 年 3 月	日本数学会 2014 年度年会総合分科会トポロジー分科会アブストラクト	圏 D を圏 C の充満部分圏とする。圏 C が有限生成モデル構造をもち、圏 D から圏 C への包含関手 $i:D \rightarrow C$ がある条件を満たすときに圏 C のモデル構造を圏 D に導入することができる。その具体的な例として、次のことを紹介している。位相空間の圏 Top は有限生成モデル構造をもつ。数値的生成空間からなる圏 Top の充満部分圏を NG とする。このとき、包含関手 $i:\text{NG} \rightarrow \text{Top}$ によって圏 Top のモデル構造を圏 NG に導入することができる。また、これらのモデル構造は Quillen 同値であることも紹介している。(2 項)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
7 微分空間のホモトピー論とその周辺について	単著	平成 26 年 7 月	第 61 回トポロジーシンポジウム講演集 pp. 37-46	微分空間における n 次元球体、 n 次元球面の微分構造を境界上では微分係数が常に 0 になるような微分構造を入れなおすことで、滑らかな道の端点を無限回微分可能でつなぐことを可能にした。この条件を使うことで、位相空間で展開されるホモトピー論と同じような理論を構成できることに成功した。これらの概念を用いて、ファイブレーション、胞体複体、ホモトピー群を構成し、これらを利用することで圏 Diff に有限生成モデル構造を導入することに成功した。(10 項)
8 微分空間のモデル構造について	単著	平成 28 年 9 月	日本数学会 2016 年度秋季総合分科会	微分空間の圏 Diff 上にモデル構造を導入する手法の一つを紹介している。とくに、ファイブレーション、コファイブレーション、弱同値の定義に触れる。また位相空間の圏 Top との間には関手 $T: \text{Diff} \rightarrow \text{Top}$ 、 $D: \text{Top} \rightarrow \text{Diff}$ が存在し、随伴関係である。この性質を利用して圏 Diff の圏 Top のモデル構造が Quillen 同値であることを紹介する。(2 項)
9 滑らかな CW 複体のホモトピー構造	単著	平成 30 年 9 月	日本数学会 2018 年度秋季総合分科会トポロジー分科会アブストラクト pp. 75-76	滑らかな CW 複体を構成する上で必要となる概念を紹介した。とくに微分空間の公理、微分空間の間の滑らかな写像を紹介した。また、可微分構造を用いてホモトピー論を展開する上で重要となる性質の tame 性を与えている。この性質を利用することで基本的なホモトピー拡張性質が成り立つことを紹介している。(2 項)
「学会発表等」 1 微分空間と位相空間	単 独 発表	平成 21 年 9 月	空間の代数的・幾何的モデルとその周辺 2009, 信州大学理学部講義棟 1 番講義室	微分空間は近年、注目を浴びだした分野であり可微分多様体を一般化した空間として知られており、微分空間の間の写像は無限回微分可能となる構造をもつ。そのため、位相空間では取り扱えない理論を構成することが期待できる。本講演では、この微分空間が価値のある研究であることを、具体的な例をあげながら紹介する。とくに、微分空間は直積、部分空間、直和、商空間が定義することができ、デカルト閉圏であることを証明した。
2 微分空間のモデル圏構造について	単 独 発表	平成 24 年 1 月	福岡ホモトピー論セミナー、福岡大学セミナーハウス セミナー室 A	微分空間は可微分多様体を一般化した空間として知られており、微分空間の間の写像は滑らかな構造を保つように定義される。微分空間の圏 Diff は極限・余極限に関して閉じており、デカルト閉圏であることが知られており、都合のよい圏である。しかし、圏 Diff はモデル構造をもつかどうかは知られていない。本講演では、圏 Top に導入されているモデル構造の手法をベースに圏 Diff にモデル構造を導入する方法について紹介する。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 Diffeological space and Topological space	単 独 発 表	平成 24 年 1 月	平成 23 年度日本数学会中国・四国支部例会，岡山大学環境理工学部 104 教室	位相空間の圏 Top の射は連続写像で定義され，微分空間の圏 Diff の射は滑らかな構造を保つ写像で定義される。とくに微分空間は可微分多様体を一般化した空間として知られていることから，圏 Top と圏 Diff の間には深い関係性がある。本講演では圏 Top と圏 Diff の性質を確認すると同時に異なる点に焦点をあてる。具体的には微分空間においてもホモトピー群を定義できる。関手 $D: \text{Top} \rightarrow \text{Diff}$ はホモトピーを保つが関手 $T: \text{Diff} \rightarrow \text{Top}$ は保たない等の紹介をする。
4 微分空間と位相空間	単 独 発 表	平成 24 年 3 月	日本数学会 2012 年度年会，東京理科大神楽坂キャンパス	微分空間の圏を Diff 、位相空間の圏を Top とするときこれらの圏の間には関手 $T: \text{Diff} \rightarrow \text{Top}$ と $D: \text{Top} \rightarrow \text{Diff}$ が存在し、 T は D の左随伴関手であることを証明しており、微分空間と位相空間の間には深い関係性があることが分かる。とくに本講演では、この 2 つの関手を用いて、微分空間と位相空間の性質の違いを比較すると同時に、これらの関手 T と D が保存する性質について紹介する。とくに T は商空間、直和空間を保ち、 D は直積空間、部分空間を保つことについて触れる。
5 Model structure of numerically generated spaces	単 独 発 表	平成 24 年 9 月	日本数学会 2012 年度秋季総合分科会，九州大学伊都キャンパス	ある特殊な条件を満たす位相空間を構成し、これを数値的生成空間とよぶ。数値的生成空間からなる位相空間の圏 Top の充満部分圏を NG で表す。本講演では、この圏 NG に有限生成モデル構造を導入する方法として、圏 Top から圏 NG に自然に存在する関手 $F: \text{Top} \rightarrow \text{NG}$ を用いて、圏 Top の有限生成モデル構造を写す方法で証明できることを紹介する。さらに、包含関手 $i: \text{NG} \rightarrow \text{Top}$ は Quillen 同値を誘導することを証明した。これにより、圏論上でホモトピー論を一般化することが可能となった。
6 Long exact sequences for de Rham cohomology of diffeological spaces	単 独 発 表	平成 25 年 3 月	日本数学会 2013 年度年会，京都大学吉田キャンパス	任意の微分空間に対して、微分形式が定義できド・ラム・コホモロジーが存在して、ホモトピー不変であることが Zemmour によって証明されている。本講演ではこのド・ラム・コホモロジーに対して、マイヤー・ビエトリス完全系列が存在する条件について言及する。とくに 1 の分割が存在する微分空間に関しては存在することが分かった。具体的な例の空間として 1 の分割が存在する diffeological subcartesian space を構成した。これにより、コホモロジー理論のさらなる応用が期待できる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7 de Rham cohomology of diffeological spaces	単 独 発 表	平成 25 年 5 月	トポロジー金曜セミナー，九州大学伊都キャンパス伊都図書館 3F 中セミナー室 1	任意の微分空間には微分形式が定義可能であり、ド・ラム・コホモロジーを構成することが可能であり、ホモトピー不変であることが知られている。本講演ではこの理論の拡張として、コンパクト・サポートが備わった微分形式を定義し、この概念を用いてコンパクト・サポートが備わったド・ラム・コホモロジーを構成することに成功したことを紹介した。さらに、ホモトピー不変であることも証明し、コホモロジー理論の発展に貢献した。
8 微分空間におけるコンパクト性とド・ラム・コホモロジーについて	単 独 発 表	平成 25 年 6 月	信州トポロジーセミナー，信州大学数理攻研究室（理学部 A 棟 427）	1 の分割が存在するような空間で可微分多様体よりも弱い条件で subcartesian space が知られている。本講演では微分空間における diffeological subcartesian space を紹介し、この空間を用いることで、多様体よりも多くの空間を de Rham cohomology の概念を用いて代数的な計算が可能であり、既存の理論の拡張に繋がることを紹介した。また D-Topology において、コンパクト性・局所コンパクト・パラコンパクト、ハウスドルフ性を構成し、コンパクト・サポートが備わった de Rham cohomology を構成できることを紹介した。
9 De Rham cohomology with compact support in respect to diffeological spaces	単 独 発 表	平成 25 年 11 月	2013 年度ホモトピー論シンポジウム，岡山大学創立五十周年記念館 2 階大会議室・小会議室	微分空間から誘導される位相に対して、分離公理、コンパクト性を構成することに成功した。さらに、これらの概念を用いて、1 の分割が存在する diffeological subcartesian space を定義した。この空間は多様体よりも条件が弱い空間である。また 1 の分割が存在するような微分空間に対してはド・ラム・コホモロジーにおいて、マイヤー・ビエトリス完全系列が存在することについて言及した。これらの結果から多様体より条件の弱い空間においても計算可能となり理論の拡張に成功した。
10 微分空間における微分形式とその周辺について	単 独 発 表	平成 25 年 12 月	Diffeology in Karatsu, 唐津市民交流プラザ	微分空間から誘導される位相は特殊であり、この位相を用いて、分離公理やコンパクト性を定義することに成功した。この性質を用いることで、任意の微分空間に対して、コンパクト・サポートが備わった微分形式を定義することに成功した。またこの概念を用いてハウスドルフをもつ微分空間に対して、コンパクト・サポートが備わったド・ラム・コホモロジーを構成することができた。さらにマイヤービエトリス完全系列の存在性について言及した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
11 モデル構造を持つ圏 の部分圏へのモデル構造 の導入方法と，その例につ いて	単 独 発 表	平成 26 年 1 月	平成 25 年度日本数学 会中国・四国支部例 会，島根大学総合理工 学部 1 号館 2 階 21 教 室	有限生成モデル構造を持つ圏 D の部分 圏 C に対して、包含関手 $i: C \rightarrow D$ とある 関手 $G: D \rightarrow C$ が存在し i は G の左随伴関 手であるとき、ある条件を満たすとき D の有限生成モデル構造を関手 G で写すこ とで部分圏 C に有限生成モデル構造を導入 することができる。さらに、条件に制 約を加えると圏 D と圏 C のモデル構造は Quillen 同値になることを紹介した。ま た、この具体的な例として数値的生成空 間の圏 NG とコンパクト生成空間の圏 CG を紹介した。
12 微分空間の性質とそ の応用について	単 独 発 表	平成 26 年 3 月	第 10 回数学総合若手 研究集会～多分野間 の交流による発展・発 見を目指して～，北海 道大学学術交流会館	任意の微分空間 X は X のプロットを用 いることで微分形式を定義することが 可能であり、この微分形式を用いてド・ ラム・コホモロジーを構成することが 可能であり、ホモトピー不変であること が知られている。この理論の発展とし て、コンパクトサポートが備わった微分 形式を構成し、これを用いてコンパクト サポートが備わったド・ラム・コホモロ ジーを構成することに成功した。これら の理論を整備するにあたり微分空間か ら誘導される位相空間の性質について 調べた。
13 数値的生成空間の圏 へのモデル構造の導入と その一般化について（研究 発表）	単 独 発 表	平成 26 年 3 月	日本数学会 2014 年度 年会，学習院大学	圏 $Diff$ と圏 Top の間には関手 $T: Diff \rightarrow Top$ と $D: Top \rightarrow Diff$ が存在して、 T は D の左随伴関手になることが知られている。 TDX と X が同相になる位相空間 X を数値的生成空間とよぶ。また数値的生成空間からなる圏 Top の充満部分圏を NG とするとき、圏 NG は CW 複体を含み、極限・余極限に関して閉じており、さらに有限生成モデル構造を導入可能であり、圏 Top のモデル構造と Quillen 同値であることを紹介した。さらに、これらの理論を圏論上で一般化可能であることを示した。
14 微分空間のホモトピー 論とその周辺について	単 独 発 表	平成 26 年 7 月	第 61 回トポロジーシ ンポジウム，東北大学 片平キャンパスさくら ホール	微分空間における n 次元球体、 n 次元 球面の微分構造を境界上では微分係数 が常に 0 になるような微分構造を入れな おすことで、滑らかな道の端点を無限回 微分可能でつなぐことを可能にした。こ の条件を使うことで、位相空間で展開さ れるホモトピー論と同じような理論を 構成することに成功した。これらの概 念を用いて、ファイブレーション、胞体 複体、ホモトピー群を構成し、これら を利用することで圏 $Diff$ に有限生成モ デル構造を導入することに成功した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
15 微分空間のホモトピー論について	単 独 発 表	平成 27 年 11 月	ホモトピー論シンポジウム姫路・西はりま 地場産業センター（じ ばさんびる）6 階 601 会議室	微分空間の圏 Diff にモデル構造を導入する上で、新たな手法を発見した。とくに tame-写像の概念を導入し、この概念を用いて胞体複体、コファイブレーション、ファイブレーションを構成する。これらの3つの条件を使って、有限生成モデル構造とは異なるが似た性質をもつモデル構造を導入することに成功した。圏 Top は有限生成モデル構造をもつことが知られている。このとき、圏 Diff と圏 Top のモデル構造は Quillen 同値であることを証明した。
16 微分空間のモデル構造について	単 独 発 表	平成 28 年 9 月	日本数学会 2016 年度 秋季総合分科会，関西 大学千里山キャンパス 第4学舎3号館4階 3401	微分空間の圏において，ホモトピー論を展開するために，ファイブレーション，コファイブレーション，ホモトピーゲンを導入し，これらが相互に関係する性質を調べた。この結果を利用して，微分空間の圏 Diff にモデル構造を導入する事に成功した。また，位相空間の圏 Top のモデル構造とを比較する方法を発見した。この手法を用いて，圏 Diff と圏 Top のモデル構造は Quillen 同値になることを示した。これらの結果から，位相空間と微分空間において，ホモトピー論を同様に展開する事が可能となった。
17 微分空間のモデル構造とその周辺について	単 独 発 表	平成 28 年 10 月	第 135 回日本数学会 九州支部例会，長崎 大学工学部 1 号館 5 番教室（文教キャンパス）	微分空間の圏 Diff にホモトピー論を展開する上で必要となる胞体複体の性質について調べた。とくに微分空間における CW 複体は，微分空間，位相空間においてそれぞれで定義されるホモトピー群が同型になることを証明することに成功した。これは，可微分多様体で知られる「Whitney Approximation property」の一般化と捉えることができる。そのため，微分構造をもつ空間においても連続的な扱いをすることが可能となる。
18 微分空間のホモトピー論に関すること	単 独 発 表	平成 28 年 12 月	群作用と位相，城崎健 康福祉センター	位相空間と微分空間のホモトピー論を比較するための方法を構成した。とくに， n 次単位区間 I^n から CW 複体への連続写像は，ある滑らかな写像とホモトピックになるという性質を証明した。この結果を利用する事で微分空間と位相空間で展開されるホモトピー論は一致することがわかる。また，微分空間の圏 Diff においてモデル構造を導入する手法に改良を加え議論をスムーズに構成する事に成功した。
19 微分空間の CW 複体の構成とその性質について	単 独 発 表	平成 29 年 3 月	小研究集会「安定ホモ トピー論とその周 辺」，岡山大学理学部 2 号館 3 階「数学合同演 習室」	微分空間における CW 複体の構成方法を紹介した。とくに，構成するにあたり，weak diffeology の概念を導入し，直積空間と相性が良いことを示した。これは，位相空間の CW 複体よりも扱いやすい性質をもっている。また，Whitney approximation property が成り立つことを紹介した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
20 Whitney approximation property on smooth cell complexes of diffeological spaces	単 独 発 表	平成 29 年 10 月	第 15 回北九州数理科 学セミナー，北九州工 業高等専門学校 1 号館 3 階大講義室	可微分多様体の間の任意の連続写像は、ある無限回微分可能写像とホモトピーの関係で近似できることが、Whitney の近似定理として知られる。可微分多様体を一般化した概念の微分空間にこの性質を導入する。その 1 つの例として、滑らかな CW 複体上では、Whitney の近似定理が成り立つことを証明し、この定理を CW 複体上に拡張することに成功した。
21 微分空間上における滑らかな CW 複体上のホモトピー構造について	単 独 発 表	平成 30 年 9 月	日本数学会 2018 年度 秋季総合分科会，岡山 大学津島キャンパス	微分空間の対象のクラスとして、滑らかな CW 複体を構成する。そして、この CW 複体上で基本的なホモトピー論を展開する。その重要な性質として、ホモトピー拡張性質、胞体近似定理、ホワイトヘッドの定理等を紹介する。
22 Homotopy properties of smooth cubical cell complexes	単 独 発 表	平成 30 年 11 月	京都大学代数トポロ ジーセミナー，京都大 学理学部 6 号館 609	微分空間の圏上で、滑らかな CW 複体を定義する。そして、この滑らかな CW 複体上でホモトピー論を展開するために必要となる性質を紹介し、具体的な方法について紹介した。とくにホモトピー拡張性質の導入方法について触れ、N 連結や N 同値についての性質を紹介した。
「国際学会等の講演」 1 A homotopy structure of diffeological spaces	単 独 発 表	平成 31 年 3 月	Building-up Differential Homotopy Theory, D-413 IMI Auditorium West 1 Bld., Kyushu University	微分空間の圏上でホモトピー論を展開する際に必要と考えられる“tame”性という概念を導入し、この性質を利用したホモトピー論を紹介した。また、この tame 性と相性の良い対象として、滑らかな CW 複体を紹介し、ホモトピー構造を調べた。最後にこれらの性質を利用して、微分空間の圏上のモデル構造を導入する方法を紹介し、証明のアウトラインを解説した。
「世話人を務めた研究集」 1 小研究集会「安定ホモトピー論とその周辺」	共同	平成 29 年 3 月	岡山大学理学部 2 号 館 3 階「数学合同演習 室」	本研究集会を世話人として、講演者を募集し当日の運営を行った。 「その他の世話人」 鳥居猛、奥山慎吾、吉田耕平

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 正木 友則

研 究 分 野		研究内容のキーワード
教育学、教科教育学		国語科教育法、学習方法、発達
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 教育・学習活動支援センター窓口における学習相談 (創価大学)	平成 24 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	相談窓口において、学習と部活や通学、アルバイト等との両立や「学習・読書の方法」「ノートを取り方」といった学習方法についてのコーチングを中心とした支援を行った。とりわけ初年次の学生は高校とのギャップに戸惑うことが多く、初年次の早い段階で解消することが重要であるため、「学習方法」「生活」「ライティング」に関するセミナーを昼休みと授業後の時間帯に開講した。「大学での学び」が充実するように願い、学生支援に携わった。(創価大学教育・学習活動支援センター(CETL)においての実践)
2 作成した教科書、教材 (1)『物語の「脇役」から迫る全員が考えたくなるしかける発問 36』(平成 28 年、東洋館出版社)(再掲) (2)『「判断のしかけ」を取り入れた小学校国語科の学習課題 48』(平成 28 年、明治図書)(再掲)	平成 28 年度 平成 29 年度 平成 29 年度	帝京平成大学「児童文学」で使用 創価大学「国語科教育」で使用 従来とは異なり「脇役」に焦点を当て、心情を直接問わない「しかける」発問により、文学教材の新たな学習指導の可能性を示した。 創価大学「国語科教育」で使用 判断で仕掛ける学習課題によって、主体的・対話的で深い学びを促す方法や考え方を、文学・説明文教材を用い、具体的に提示した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 環太平洋大学採用時の学部長評価 (2) 学生による授業評価アンケート (環太平洋大学：平成 25 年度) (3) 帝京平成大学採用時の学科長及び学部長評価 (4) 学生による授業評価アンケート (創価大学：平成 27 年度) (5) 奈良学園大学採用時の学部長評価	平成 25 年度 平成 25 年度 平成 27 年度 平成 27 年度 平成 30 年度	創価大学教育・学習活動支援センターにて初年次教育に携わっていることと教科教育法(国語)の業績を有していることを評価され採用。 環太平洋大学における授業評価 「日本語表現Ⅱ」×3 クラス 学生満足度平均評定(3.7/4 段階評価) 「言葉の理解」×2 クラス 学生満足度平均評定(3.6/4 段階評価) 創価大学教育・学習活動支援センターにて初年次教育に携わったこと、環太平洋大学にて教員採用試験対策に携わっていること、教科教育法(国語)と幼稚園教育要領(言葉)に関する科目を担当できる業績を有していることの三点を特に評価され採用。 創価大学文学部(非常勤講師)における授業評価 「国語科教育法Ⅰ」 学生による学習能動性平均評定(4.92/5 段階評価) 学校現場に立脚した実践および理論研究の業績を有していること、教科教育法(国語)を担当する能力を有することの二点を特に評価され採用。

(6) 奈良学園大学における教育実績	平成 30 年度	「国語科教育法Ⅰ～Ⅳ」「教育実習Ⅰ」「教育実習事前事後指導」「教職実践演習」「教育方法・技術論（初等）」「教育方法・技術論（中等）」「ことばとコミュニケーション」の担当については、平成 31 年 3 月に教職課程認定審査に合格。「子どもと言葉」の担当については、平成 31 年 3 月に指定保育士養成施設教員審査に合格。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) ライティング支援（創価大学）	平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月	学生の大半は、文章を書くことが苦手である。そのため、学生が自主的に補習できるよう、「レポートの書き方」に関するセミナーを昼休みと授業後に開講し、さらに、「レポート診断」と呼ばれるサービスを行った。 教員が添削するのではなく、学生が「なぜそこを修正すべきか」を考える機会を提供した。さらに、初年次の学生の「書く力」の実態を見極めるテストを開発し、結果分析することで、新たな支援の戦略を練った。
5 その他 (1) 教職課程認定大学実地調査（文科省による授業見学） (2) 東京国語教育探究の会 第 6 回国語教育実践研究大会 ワークショップ（説明文）講師 (3) 国語教育探究の会・中国支部 第 19 回国語教育実践研究大会 ワークショップ（説明文）講師 (3) 名古屋国語教育探究の会発起人会 講師 (4) 九州国語教育探究の会 第 6 回国語教育実践研究大会 (5) 第 1 回文学・説明文のチャレンジセミナー ワークショップ（説明文）講師 (6) 第 2 回文学・説明文のチャレンジセミナー ワークショップ（説明文）講師 (7) 東京国語教育探究の会 第 9 回国語教育実践研究大会 ワークショップ（説明文）講師 (8) 第 3 回文学・説明文のチャレンジセミナー	平成 25 年 7 月 平成 25 年 8 月 1 日 平成 26 年 8 月 3 日 平成 27 年 6 月 20 日 平成 27 年 8 月 19 日 平成 27 年 8 月 23 日 平成 27 年 12 月 23 日 平成 27 年 12 月 27 日 平成 28 年 3 月 16 日	教職課程認定大学実地調査において、「国語科教育法」の第 15 回目の授業の見学指定を受けた。 「説明文教材を意欲的に読む学習の実際—『筆者を読む』学習の具体を通して—」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。 「説明文学習が好きになる！—主体的に思考・表現する『自然のかくし絵』（東書 3 年）の授業—」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。 「説明文教材で、学習者に「判断」をうながす「しかけ」のバリエーション—『どうぶつ園のじゅうい』（M 社 2 年）を通して—」を主題として、発問のバリエーションについて提案を行った。 「『思考をゆさぶる』三つの『ゆさぶり』！—説明文教材『千年の釘にいどむ』を例に—」を主題に説明的文章のゆさぶり発問の意義についてワークショップを行った。 「『ゆさぶり』で仕掛ける説明文の学習指導—小学 3 年『こまを楽しむ』の実践を通して—」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。 「『シンプル』に扱い、思考を『深める』説明的文章の学習」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。 「説明文の学びをぐっと深める発問づくり」を主題に、発問づくりについて体験的な学びをめざし、ワークショップを行った。 「3 つの『力』を意識する説明文学習の具体—『宇宙時代を生きる』を通して—」を主題に、特に説明的文章の授業で育成したい力についての捉え直しを試み、ワークショップを行った。

(9) 小学校における校内研修指導助言（東京都八王子市立松枝小学校）	平成 29 年 4 月 27 日	「読み取る力をつける『説明文の指導』アクティブラーニングの指導—3 年教材「すがたをかえる大豆」等を通して—」と題し、校内研究を進めるための理論についてワークショップ形式で提案した。
(10) 小学校における校内授業研究指導助言（埼玉県鶴ヶ島市立藤小学校）	平成 29 年 6 月 8 日	主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導の具体—『お手紙』を例に一—と題し、校内研究を進めるための理論についてワークショップ形式で提案した。
(11) 中国・国語教育探究の会 第 22 回国語教育実践研究大会 説明文分科会指導助言	平成 29 年 7 月 29 日	説明的文章教材「こまを楽しむ」の分科会提案において指導助言者を務めた。
(12) 名古屋・国語教育探究の会 第 2 回国語教育実践研究大会 ワークショップ（説明文）講師	平成 29 年 8 月 9 日	「主体的・対話的で深い学びを実現する説明文学習—小学校低学年教材の場合—」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
(13) 八王子市パワーアップ研修講師（東京都八王子市立松枝小学校）	平成 29 年 8 月 28 日	読み取る力をつける「説明文の指導」アクティブラーニングの指導—2 年教材「ビーバーの大工事」を例に一—
(14) 小学校における校内研修講師（神奈川県小田原市立下曽我小学校）	平成 29 年 8 月 30 日	実践にいかせる指導法～学び合い、高め合うために～文学教材「お手紙」を例に
(15) 小学校における校内授業研究指導助言（東京都八王子市立上川口小学校）	平成 29 年 10 月 5 日	文学的文章教材「くじらぐも」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(16) 小学校における校内授業研究指導助言（埼玉県鶴ヶ島市立藤小学校）	平成 29 年 11 月 16 日	文学的文章教材「ごんぎつね」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(17) 小学校における校内授業研究指導助言（埼玉県鶴ヶ島市立藤小学校）	平成 29 年 12 月 7 日	説明的文章教材「しかけカードの作り方」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(18) 東京・国語教育探究の会 第 10 回国語教育実践研究大会 説明文分科会指導助言	平成 29 年 12 月 27 日	説明的文章教材「おにごっこ」の分科会提案において指導助言者を務めた。
(19) 小学校における校内授業研究指導助言（東京都八王子市立松枝小学校）	平成 30 年 1 月 18 日	文学的文章教材「海の命」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(20) 国語科授業上達セミナー ワークショップ（説明文）講師	平成 30 年 3 月 3 日	「言語生活に開く、説明的文章の授業づくり」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
(21) 小学校における校内授業研究指導助言（東京都八王子市立松枝小学校）	平成 30 年 6 月 27 日	説明的文章教材「時計の時間と心の時間」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(22) 生駒郡教育研究会 国語部会（中学校の部）講師	平成 30 年 7 月 30 日	「主体的・対話的で深い学びをめざす授業づくりのポイント—中学校・文学教材『走れメロス』を例に一—」を主題に、中学校の文学的文章教材の授業づくりについてワークショップを行った。
(23) 大阪・国語教育探究の会 第 25 回国語教育実践研究大会 説明文分科会指導助言	平成 30 年 8 月 8 日	説明的文章教材「時計の時間と心の時間」の分科会提案において指導助言者を務めた。

(24) 九州・国語教育探究の会 第9回国語教育実践研究大会 実践提案指導助言	平成30年8月10日	中学校における実践提案「深い学びの実現をめざした国語科の授業～『読むこと』の実践を中心に～」の指導助言者を務めた。
(25) 小学校における校内研修講師（神奈川県小田原市立下曽我小学校）	平成30年8月23日	「『みんなで学ぶ・みんなで創る』深い学びをめざす授業づくりー小学2年『ビーバーの大工事』を例にー」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
(26) 八王子市パワーアップ研修講師（東京都八王子市立松枝小学校）	平成30年8月24日	「『物語』の本質に迫る！深い学びをめざす授業づくりー小学4年『ごんぎつね』を例にー」を主題として、文学的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
(27) 小学校における校内授業研究指導助言（東京都八王子市立松枝小学校）	平成30年9月13日	説明的文章教材「うみのかくれんぼ」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(28) 小学校における校内授業研究指導助言（東京都八王子市立松枝小学校）	平成30年10月26日	文学的文章教材「ごんぎつね」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(29) 小学校における校内授業研究指導助言（奈良県大和郡山市立矢田小学校）	平成30年11月14日	「グラフや表を引用して書こう」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(30) 平成29・30年度八王子市研究指定校研究発表会 講演講師	平成31年1月25日	「深い学びを促すゆさぶり発問の工夫」を演題として、これからめざすべき「深い学び」を促すために、ゆさぶり発問の開発が重要であることを、ワークショップ形式で提案した。
(31) 小学校における校内授業研究指導助言（奈良県大和郡山市立矢田小学校）	平成31年1月30日	「クラブ活動リーフレットを作ろう」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(32) 小学校における校内研修講師（奈良県大和郡山市立矢田小学校）	平成31年3月6日	「確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ子どもの育成～言語力の向上を図り、表現する楽しさを味わえる指導の在り方～」という研究主題に基づき、説明的文章における「読み」と「書き」の接続について、ワークショップ形式で提案した。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 (1) 小学校教諭一種免許状	平成22年3月	東京都教育委員会平二一小一第一七〇〇号
(2) 修士（教育学）	平成24年3月	「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討ー筆者概念の萌芽期を中心にー」（創価大学 修第二〇二号）
(3) 博士（教育学）	平成31年3月	「『筆者』概念に着目した説明的文章の学習指導に関する研究」（広島大学 第7816号）
2 特許等 なし		

3 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 教職センターの運営業務 (帝京平成大学)	平成 28 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	「教職センター」において、実習先への依頼・実習中での巡回指導・実習後の謝礼手続きといった実習事務や、保育士・幼稚園教諭志望者への公務員試験対策講座（小論文）、大学内外に向けて発信する「教職センターニュース」（年 2 回発刊）の編集責任者としての取材・編集活動を行った。 また、大学内における教職課程委員会の委員、また、文部科学省から設置要請のある「教職センター」のあり方ワーキング・グループ委員を務めた。
(2) 教員採用試験対策講座の運営 (環太平洋大学)	平成 25 年 4 月 ～ 平成 27 年 3 月	2 年生以上で選抜試験を通過した学生は、教員採用試験突破を目的にした「大志会」と呼ばれる組織で、特に一般・教職教養を中心とした学習に取り組む。その学習支援を行った。また、東京都教育委員会主催の説明会に参加する「東京都バスツアー」の企画・運営も行った。 さらに、教員採用試験の模擬授業対策を見据えた「青年教師塾」と呼ばれる 2 年生以上の選抜組織で、国語科の教材研究・授業構想・指導技術力の育成のため、企画・運営に携わった。
(3) 初年次教育部の運営 (環太平洋大学)	平成 26 年 4 月 ～ 平成 27 年 3 月	初年次学生が抱える基礎学力の問題を解決する初年次教育部という組織において、きめ細やかな学習支援を行った。国語担当として、学力の把握、問題集の作成、毎週 2 コマ開かれる学習会の運営に携わった。 また、スポーツ推薦や A0 入試で合格した受験生に対し、入学前に学生同士の親睦を深めること、大学の教育指針を理解すること、現在の自分の学力状況を理解することを目的とした「入学前研修会」（1 泊 2 日）の企画・準備・運営を行った。
4 その他 なし		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) (1) 「さけが大きくなるまで」（教育出版・小学 2 年・説明文教材）	共著	平成 24 年 4 月	長崎伸仁・石丸憲一・大石正廣編著『思考力・判断力・表現力を育てる文学・説明文の授業展開 低学年編』学事出版 pp. 126-127	「思考力・判断力・表現力」を育てるための、説明文教材「さけが大きくなるまで」（小学 2 年）の授業展開例の提案である。 授業の要点は、「さけが『大変だな』『すごいな』と思うところはどこか」という問いを軸に、学習者が「さけ」と同化し、さけの一生（産卵→誕生→成長→産卵…）をイメージ豊かに捉えるため、学習者が「さけ」と「インタビュー」と分かれての対話活動を構想した。豊かな表現活動が期待される。 松本佳子・ <u>正木友則</u> （p. 126 の単元構想を担当）
(2) 「黄色いバケツ」（光村図書・小学 2 年・文学教材）	共著	平成 24 年 4 月	長崎伸仁・石丸憲一・大石正廣編著『思考力・判断力・表現力を育てる文学・説明文の授業展開 低学年版』学事出版 pp. 80-81	小学 2 年文学教材「黄色いバケツ」の授業展開である。キツネの期待感と不安感、学習者が同化して読むことに適している。そこで、登場人物（キツネ）の心情を直接問わず、自分の言葉で「思い」や「考え」を表現することで学習活動—他者の音読をどう聴いたかを交流する「読み声交流」とキツネの「絵日記」を書く—を設定した。キツネの行動に表れる心情への同化を促し「思考力・判断力・表現力」を楽しく育むことを目指している。吉岡奈緒・ <u>正木友則</u> （p. 80 の単元構想を担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(3) 「ないた赤おに」(教育出版・小学2年・文学教材)	共著	平成24年4月	長崎伸仁・石丸憲一・大石正廣編著『思考力・判断力・表現力を育てる文学・説明文の授業展開 低学年版』学事出版 pp. 104-105	小学2年文学教材「ないた赤おに」の授業展開である。教材を横断的に捉える工夫として、「願いがなかったのに赤鬼はどうして泣いたのか」と問う。 そして、その「願いがなかったのに」という点をクローズアップさせるために、赤鬼の「願い」に寄り添う形で、「この先、物語がどうなしてほしいか」という学習者自身の「願い」にも似た「考え」を持ち、先を予想しながら読むことで、「思考力・判断力・表現力」の育成を意図している。吉岡奈緒・ <u>正木友則</u> (p. 104の単元構想を担当)
(4) 「こわれた千の楽器」(東京書籍・小学4年・文学教材)	共著	平成24年4月	長崎伸仁・石丸憲一・大石正廣編著『思考力・判断力・表現力を育てる文学・説明文の授業展開 中学年版』学事出版 pp. 78-79	小学4年文学教材「こわれた千の楽器」の授業展開である。登場人物や会話文が多い特性から「他者の音読を自分はどうのように聴くか」という「読み声交流」を行う。物語の行間や空白を補うための「挿話」を作る学習活動—①物語が始まる前の空白部分を考えて書くこと、②楽器たちが練習し、音楽を奏でるまでの空白を考えて書くことである。他者との交流や物語に「ひたる」ことを通して「思考力・判断力・表現力」の育成が期待される。 <u>鯨井文代</u> ・ <u>正木友則</u> (p. 78の単元構想を担当)
(5) 「説明的文章指導で『読解』と『表現』をつなぐ手立て—『筆者を読む』学習を中心に—」	単著	平成25年3月	長崎伸仁・吉川芳則・石丸憲一編著『読解と表現をつなぐ文学・説明文の授業』学事出版 pp. 98-101	小・中学校・高校段階までの説明的文章指導を視野に入れ、「読解」と「表現」をつなぐ手立てとして、「筆者を読む」学習活動に着目し、歴史的考察を加えた上で、「筆者を読む」学習指導を三つに類型化し、「読解」と「表現」がうまく連動するための諸要素を三点(ア:「『表現力』の育成までを見据える」イ:「筆者に対する『自分の考え』を持つ過程を設定する」、ウ:「『読解』過程の中で『表現』する場を設定する」)提起した。
(6) 「『新たな学び』を支える『授業研究』のあり方を考える」	共著	平成25年5月	中瀬正堯監修、吉川芳則・長崎伸仁・尾川佳己編著『新たな学びを支える国語の授業 下巻—思考力・判断力・表現力の育成を目指して—』三省堂 pp. 122-127	授業研究において「『何を』『いかに』教えるか」「どう学んだか」の三者が機能するため、「教育方法・技術論」という視点から「学習指導論」「授業力(教材研究力・指導技術・板書・ノート指導・人間性等)」「学習方法論(学習内容・学習方法)」「単元の目標・本時の目標(学習指導案作成)」「学習者研究」と、授業研究の要素を構造化し、教員養成で「授業を『つくる』こと」と「授業を『ふりかえる』こと」の重要性を示した。 長崎伸仁・ <u>正木友則</u> (pp. 123-125の第2節を担当)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(7) 「『鳥獣戯画』を読む」(光村図書6年)	共著	平成28年6月	長崎伸仁監修、石丸憲一・神部秀一・鯨井文代編著『アクティブ・ラーニングを取り入れた国語授業』東洋館出版社 pp. 114-121	「アクティブ・ラーニング」を説明的文章教材で実践化した記録である。教材「『鳥獣戯画』を読む」の特性を、筆者である高畑勲の述べ方や主張に見出し、いかに学習者が筆者に対して、意欲的・主体的に自分の考えを表現できることを重視した。絵に対する学習者の解釈を作った上で、筆者の解釈を学習者に合わせ、学習者の解釈と筆者の解釈とを比較させるという学習活動を設定することで意欲的・主体的に学習を進めることができた。 高橋達哉・正木友則 (pp. 114-115 の教材解釈とアクティブ・ラーニングへのポイントを担当)
(8) 「おおきなかぶ」	共著	平成28年8月	長崎伸仁編著、長崎ゼミナール著『物語の「脇役」から迫る全員が考えたくなるしかける発問36』東洋館出版社 pp. 42-49	「おおきなかぶ」では、「なぜまごは、犬を呼びに行ったのでしょうか？」と直接問うのではなく、「『ねことねずみ』はこのお話をどうおもしろくしたのでしょうか？」と問う、また「引っ張る人は、どういう順番で変わっていったのでしょうか？」と直接問うのではなく、「もしねずみの時でもかぶが抜けなかったら、ねずみは誰を呼んできたと思いますか？」という、絵本の読み聞かせや学習指導における問いかけおよび発問の開発を試みた。 下村柚・宮西紀子・正木友則 (pp. 43-44 の教材解釈部分を担当)
(9) 『「判断のしかけ」を取り入れた小学校国語科の学習課題48』	共編著	平成28年12月	明治図書	次期、学習指導要領の柱となる「アクティブラーニング」を機能させ、深い学びを実現するのか、という問いに対して、「良質な学習課題」をもって答えようとするのが本書の主眼である。小学校1年生から6年生まで、文学・説明文教材を網羅し、「判断」の仕掛けを取り入れた学習課題と、単元計画および授業内の教師と学習者のやりとりを示しながら、アクティブラーニング型授業を成功させるための具体的方法を理論とともに提案した。
(10) 「説明文教材の学習課題とアクティブ・ラーニング」	単著	平成28年12月	中洸正堯監修、長崎伸仁・三津村正和・正木友則編著『「判断のしかけ」を取り入れた小学校国語科の学習課題48』明治図書 pp. 72-77	松下佳代(2015)が「『外化のない内化』がうまく機能しないのと同じように、『内化のない外化』もうまく機能しない」(p. 9)と指摘することから、教科の領域(とりわけ説明文の学習指導)固有の「内化」や「外化」のあり方が検討される必要がある。 そこで、説明文の学習指導における「筆者」概念と「判断の仕掛け」を視座として「主体的・対話的で深い学び」を実現するための学習課題の要件と類型を示し、実践事例について検討した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(11) 「読むことの授業過程における二つの『ゆさぶり発問』—『広げる』ゆさぶり発問と『深める』ゆさぶり発問—」	共著	平成 30 年 10 月	桂聖編著・N5 国語授業力研究会著『「めあて」と「まとめ」の授業が変わる 「Which 型課題」の国語授業』東洋館出版社 pp.112-120	近年では、「ゆさぶり発問」の「ゆさぶり性」ないし「否定性」を踏まえつつも、授業者が学習者の読み・解釈や認識・思考を「否定」する「ゆさぶり発問」のタイプではなく、新たなタイプの「ゆさぶり発問」が開発されるようになった。本稿では、新たな「ゆさぶり発問」のタイプに着目し、具体的な読むことの授業過程において、学習者の読みや思考を広げて、深めるための二つの「ゆさぶり発問」についての考え方を示した。
(学術論文) (1) 「あまん作品の教材・学習材としての価値に迫る」	単著	平成 22 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 23 号 pp. 80-83	あまんきみこ氏の作品（「ちいちゃんのかげおくり」「おにたのぼうし」「白いぼうし」）の教材・学習材としての価値を、あまん氏の生い立ちや原体験を基にしながら「作家論」的に考察した。
(2) 「表現力育成を見据えた説明的文章の教材研究試論—『筆者を読む』から表現活動へ—」	単著	平成 23 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 24 号 pp. 58-65	あまん作品の教材・学習材としての価値は、①「読者に言葉のイメージや広がりを実感させる」②「多様な読みを保障し、他者との交流を促進する」要素が豊かなところにある。学習指導では言葉から広がる解釈やイメージを促すことが求められる。
(3) 「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討—児童言語研究会・小松善之助の場合—」	共著	平成 24 年 3 月	創価大学教育学部『教育学論集』第 63 号 pp. 77-97	中学校・高校の説明文指導を見据え、表現力を育成するためには、「教材の特性」を生かしつつ、①表現する場を設定する、②表現する「内容」として学習者が「自分の考えをもつ」過程が必要になる。ここでは、中学校教材「モアイは語る—地球の未来—」への接続を意識し「イースター島にはなぜ森林がないのか」（小 6）を例に、「筆者を読む」学習を仕掛けとして、表現活動へ連動するための教材研究の視点と学習活動の類型を提示した。
				小松は、説明的文章指導研究が本格的に始まったとされる 1960 年代から、説明的文章が持つとされている客観性を否定し、説明的文章は「筆者の認識過程」という主観性が入るものとした。小松の論は、小学校から高校段階までの批判的読みの学習指導理論の礎となるものである。
				1960 年代に、「筆者概念」に着目して「批判的読み」を提唱した点は評価できるが、批判の範囲を「筆者の認識」に拡大すると恣意的な想定になることに課題があった。長崎伸仁・正木友則（pp. 77-94 までの主な考察を担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(4) 「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―秋田喜三郎の場合―」	単著	平成 24 年 3 月	創価大学教育学会『創大教育研究』第 21 号 pp. 1-27	説明的文章指導における「筆者を読む」学習の淵源は、大正期の秋田喜三郎が提唱した「創作的読方教授」にあることを示した。 小・中学校、高校段階の国語の教材文の作者は、学習者に近い生活環境、背景を持つ人間であるという意識を学習者にもたせ、その教材文を「書き手」の立場から吟味させることで、読方と綴方との関連指導を意図している。読解と表現の接続のために「作者」という概念が大正期に出ていることを示すものである。
(5) 「教育学研究と教科教育学研究の接点―国語科教育学と構成主義に立つ学習論を視座として―」	単著	平成 24 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 25 号 pp. 76-83	教育学と教科教育学との接点はどうあるべきかについて教育原論的に考察し教育方法やその指導技術について述べた。教育学では、構成主義的なアプローチから、学習者や学習の捉え直しが始まり、教科教育学においても、教育学の流れを汲み取り、構成主義に立つ学習論を導入しようという動きも見られる。教科教育学は「善くなろうとする学習者」という観点から、「授業」を中心に学問領域が相互に往還し合う関係が望ましいことを指摘した。
(6) 「『教えること』と『学ぶこと』に関する検討―村井実の教育学を視座として―」	単著	平成 24 年 12 月	創価大学大学院紀要編集委員会『創価大学大学院紀要』第 34 集 pp. 223-242	教育という営みを、「善くなろうとする人間をより善くしようすること」と捉え、二項対立的に用いられる「教えること」や「学ぶこと（教えることの否定）」の統合の可能性を探るため、「教えて考えさせる授業」を提案する市川伸一と「学びの共同体」を提案する佐藤学の論考を比較、考察した。 結果、教育方法・技術論といった「授業」を構成する要素は、あくまでも「授業」という場を介して、教育学の各領域が統合される必要性を提案した。
(7) 「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―『筆者想定法』論に見られる筆者概念を中心に―」	共著	平成 25 年 3 月	創価大学教育学部『教育学論集』第 64 号 pp. 31-52	1970 年代に倉澤栄吉を中心に実践研究を進めた青国研と香国研が提唱した「筆者想定法」論に見られる「筆者概念」を考察した。「筆者想定法」は、主に中学校から高校段階での評論文や随想的文章で主に扱われ、学習効果が見出される実践理論といえる。 倉澤栄吉が提示した理論と青国研のメンバーによる実践との関係や、青国研と香国研の「筆者想定法」論やその具体の関係、また「筆者想定法」論が提起した有効性と問題点について論じた。 長崎伸仁・正木友則 (pp. 31-48 の主な考察を担当)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(8) 「森田信義の『評価読み』に見られる筆者概念の検討」	単著	平成 25 年 3 月	創価大学教育学会『創大教育研究』第 22 号 pp. 15-33	説明的文章指導研究において、森田信義は、1980 年代から「筆者概念」に着目し、説明的文章の「内容」や「形式」に偏るのではなく、また、文章の内容を確認する読みだけでなく、「筆者の工夫を『評価』する『評価読み』を提唱した。批判的読みが重視される小学校から高校までの説明的文章指導研究では避けては通れないものとなっている「評価読み」に見られる「筆者概念」の変容（1984 年から 2011 年まで）とその意義について考察を行った。
(9) 「説明的文章指導における『筆者を読む』学習指導論の検討—1990 年以降の論考を中心に—」	単著	平成 25 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 26 号 pp. 50-57	小・中学校、高校段階における説明的文章の「筆者を読む」学習指導の端緒は、主に 1980 年代とすることができ、その後 1990 年代から実に多様な実践が展開され、「筆者概念」に関する議論も多く行われるようになった。その 1990 年以降に提起された実践理論に関する論述—森田信義、長崎伸仁、河野順子、阿部昇、吉川芳則の五氏—を中心に、「筆者を読む」学習指導論という視点から、それぞれの立場や目標、考え方を四点から整理・考察し、教材研究や具体的な学習方法として類型化した。
(10) 「NIE を取り入れた教育実践研究—大学 2 年生を対象にした時事教養 I の授業実践を通して—」	共著	平成 26 年 3 月	『平成 25 年度環太平洋大学研究紀要』第 8 号 pp. 147-154	NIE を大学教育の場で行った教育方法・技術の実践報告である。「本実践の研究的位置づけ」を担当し、愛知教育大、実践女子大などでの実践を踏まえ、NIE 実践の仮説的な類型—「教材／学習材」セクション—①時事問題②新聞記事③新聞社との連携・協働—を縦軸に、NIE が行われる校種セクション—①小・中・高②大学教育（教職、一般教養、その他）③現職教育—を提示しつつ、一般教養から教育実践方法へと移行すべきであると論じた。渡邊規矩郎・仲田輝康・三木澄代・木戸和彦・岡野聡子・ <u>正木友則</u> （pp. 151-152 の第 3 章第 2 節を担当した）
(11) 「説明的文章の学習指導の『系統性』と『教材の特性』との結節点—中学校説明的文章教材を例に一—」	単著	平成 26 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 27 号 pp. 26-33	国語科教育の課題として、教科内容の系統性を見出しにくい点をあげることができる。そこで、教科内容に関して、系統化することの意義と危険性を踏まえつつ、「教えたいことのリスト化」につながりやすい「結果としての系統」ではなく、教師によって付加・修正・更新可能な「過程像としての系統」を提案した。その上で、中学校段階の説明的文章教材を例にして、「教材の特性」が、どのように系統化できるのか、その試案を提起した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(12) 「説明的文章の教材研究に関する原理的考察—『教材の特性』に着目して—」	単著	平成 27 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 28 号 pp. 42-49	1990 年代に提起された説明的文章の批判的読みを支える「教材研究」論を原理的に解明するために「教材の特性」という概念に着目した。「教材の特性」という概念は、小学校から高校段階における批判的読みを実現するための教材研究の基礎として位置づけることができる。長崎（1997）、吉川（2002、2013）、香月（2006）らを踏まえ、「教材の特性」の概念を明らかにしつつ、「教材の特性」を捉え、学習指導に生かすための要件と観点をまとめた。
(13) 「説明的文章における学習指導の類型化—学習者による価値判断を中心に—」	単著	平成 27 年 12 月	創価大学大学院紀要編集委員会『創価大学大学院紀要』第 37 集 pp. 111-128	学習者に「認知的コンフリクト」を起こすための発問研究や、「限定・比較・否定」といった形の「ゆさぶり発問」研究は、教授学においても長く議論されてきたことを踏まえ、学習者の思考の契機とされる「発問」の具体として「選択式発問」と「ゆさぶり発問」に着目した。「ゆさぶり発問」の機能を発展的に、説明的文章指導の文脈で、「学習者による価値判断」と捉え直し、学習者の「価値判断」を軸とした学習指導の類型化を試みた。
(14) 「説明的文章における『筆者』概念に関する考察—『筆者』概念を捉えるための仮説的枠組みの提示を通して—」	単著	平成 28 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 29 号 pp. 34-41	説明的文章の学習指導論における「筆者」概念論の課題は、「『筆者』概念の定義の曖昧さ」「読者論的議論との接続性の薄さ」「学習指導理論や実践における『筆者』概念の位置づけの不明確さ」の三点にある。 これら三点の課題を解決するため、また、「筆者」概念の理論的枠組みの構築の端緒とするため、まず、「『筆者』概念」という術語の意味範囲を規定する「仮説的枠組み」をエーコに見られる文学理論の知見を援用し、構築した。
(15) 「説明的文章の批判的読促す授業構想の工夫—『「鳥獣戯画」を読む』（小学 6 年）の実践を通して—」	共著	平成 28 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 29 号 pp. 58-67	「『鳥獣戯画』を読む」の実践を、説明的文章の批判的読みの学習指導論や「筆者」概念論の理論的枠組みから考察した。批判的読みにおいては、筆者と学習者では知識や経験の量にギャップが見られる。このギャップを考慮しないで批判的読みを実現しようとしても、学習者の方が立場は弱く、「批判」が単なる揚げ足取りに陥ることがある。そこで、学習活動の順序の工夫や、「筆者」概念の導入の仕方について検討した。高橋達哉・正木友則（pp. 58-60 の第 1 節・2 節を担当）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(16) 「絵本の教材性に関する一考察—アーノルド・ローベル『おてがみ』を中心に—」	単著	平成 29 年 3 月	『帝京平成大学児童学科研究論集 第 7 号別冊』 pp. 61-68	近年、重要視されている読解力は義務教育段階だけでなく、就学以前の家庭や幼児教育の「問いかけ」から始まるものである。 本稿では、小学校就学以前における読解力育成の基盤づくりとして、絵本の読み聞かせに着目し、幼稚園から小学校における連携を視野に入れ、絵本として刊行され、かつ、教科書教材に採録されているアーノルド・ローベル [著] 三木卓 [訳] 「おてがみ」（『ふたりはともだち』所収）の教材性について考察した。
(17) 「説明的文章の学習指導における『筆者』概念の検討—『想定のパラドクス』を中心に—」 〔査読付〕	単著	平成 29 年 6 月	解釈学会『解釈』第 63 巻 5・6 月号 pp. 2-10	「筆者」という存在は、特に、中学校から高校段階において重点的に学習指導に取り入れられることになる。「筆者」概念に関する議論には、学習者による「筆者」の「想定」を開放的に認めれば、学習者の「想定」は、恣意的で拡散的になる一方、学習者による「想定」の正しさを閉鎖的に「筆者」に求めれば、「筆者」からの意味の受容へと逆戻りする—学習者の主体性を保障しない—「想定のパラドクス」という問題を見出し、検討した。
(18) 「特別支援学級において物語を意欲的に読むための学習指導の工夫」	共著	平成 29 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 30 号 pp. 112-119	特別支援学級における知的障害を抱える学習者にとって、読みを深めることができ、楽しく意欲的に学ぶことはどう可能となるのかという問題意識を基にして、「ごんぎつね」の実践研究を行った。障害の特性上、他者との交流や登場人物の変容を文章全体から捉えることが難しい。そこで、具体的場面を描き出し、ごんや兵十の表情を描き出す活動を丁寧に進めることで、登場人物への同化を促し、イメージ豊かな読みの形成が可能となった。 正木翔子・ <u>正木友則</u> （p112. の問題設定、p. 119 の考察部分を担当）
(19) 「国語科・教授=学習過程における『ゆさぶり発問』の検討—説明的文章の学習指導への展開を見据えて—」 〔査読付〕	単著	平成 29 年 9 月	全国大学国語教育学会『国語科教育』第 82 集 pp. 33-41	多様化・高次化した国語科学力や学習指導内容を学習者に獲得させるため、教育方法学にて歴史的にも研究されてきた「ゆさぶり発問」に着目し、説明的文章の学習指導の場における展開について検討した。特に、説明的文章の批判的読みでは、教材(文章)を介した「学習者(読者)」と「筆者」との相互作用を機能させるため、主要発問や授業内における即時的応答といった授業者の教授行為(指導=「ゆさぶり発問」)の重要性を示した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(20) 「『探究』としての古典教材の学習指導に関する一考察—書き手との対話に着目して—」	共著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学編『奈良学園大学紀要』第 8 集 pp.79-85	本稿は、言語生活力の向上を見据えた「探究」を観点に、古典教材の学習指導についての考察を目的とする。「探究」活動へと有機的に連関させる授業論を構築する上で、村井実や中刈正堯の論を踏まえつつ、古典教材の特質・特性として、竹村信治による言説論で示される「書き手」や〈発話主体〉の問題領域に対する「対話」という発想について、また、古典教材を「探究」することに開いた具体的実践について考察した。 正木友則・渡邊規矩郎（問題設定と考察の全般を担当）
(その他) 学会発表 (1) 「説明的文章指導における筆者概念の検討—秋田喜三郎の場合—」	単独	平成 22 年 10 月 31 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 119 回鳴門大会研究発表要旨集』pp. 160-163	説明的文章指導における「筆者を読む」学習の源流を、大正期、秋田喜三郎が提唱した「創作的読方教授」に見出した。秋田は、「作者想定法」と「表現法・構想の吟味」という二つの学習活動を基に、「仮想の作者」を想定し、文章をイメージ豊かに読むことを目指した。特に「作者想定法」は、1970 年代に倉澤栄吉が提唱した「筆者想定法」の源流でもあり、読解指導の中で、「作者」をいかに扱うのかという問題を提示した点で評価できる。
(2) 「説明的文章指導における筆者概念の検討—小松善之助の場合—」	単独	平成 23 年 5 月 29 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 120 回京都大会研究発表要旨集』pp. 227-230	児童言語研究会の小松善之助の論考に見られる「筆者」概念を考察した。小松の「筆者」概念には時期ごとに少しずつ変化が見られるために、その論を四期に分け整理した。中でも、Ⅱ期にあたる 1969 年の「データ吟味の読み」の提唱は、「評価読み」を提唱した森田信義をはじめ、小・中学校、高校段階の説明的文章の批判的読みを構想する上で多く引用されるなど、その後の教材研究や指導方法の研究に大きな影響を与えた実践理論といえる。
(3) 「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討—倉澤栄吉の場合—」	単独	平成 23 年 10 月 29 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 121 回高知大会研究発表要旨集』pp. 33-36	倉澤栄吉が提唱した実践理論「筆者想定法」に見られる「筆者概念」を考察した。倉澤の用いる「筆者」という用語法には、実際に文章を書いた①「現実の筆者」と、読み手が想定した（読み手の数だけ存在する）②「想定される筆者」が混在している。 中学校において自伝的随想を用いた実際の授業記録からは、「現実の筆者」から学ぶ姿勢が強く、理論と実践との乖離がみられる。倉澤の論考から提示される「筆者概念」の課題を指摘した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(4)「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―筆者概念の萌芽期を中心に―」	単独	平成 24 年 5 月 26 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究 第 122 回筑波大会研究発表要旨集』pp. 67-70	説明的文章指導において、1980 年代から「筆者」に着目されるようになった背景を、①「指導の画一化・硬直化」②「学習者の尊重」と捉えた。また、1970 年までの「筆者」に関わる論考を時期的に、「筆者概念の萌芽期」に提出されたものと位置づけ、成果と課題を示した。 萌芽期の成果は、①「筆者観の転換」が起こった点、②「筆者の位相」が分けられた点である。一方、①「筆者の位相」の曖昧さや②「想定する筆者」の範囲に課題がある。
(5)「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―1980 年代を中心に―」	単独	平成 24 年 10 月 27 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究 第 123 回富山大会発表要旨集』pp. 85-88	「筆者概念」論に関わる多くの論考が提起された 1980 年代を中心に引き上げ、筆者概念の輪郭を描き、歴史的に価値づけを行った。1980 年代は、説明的文章指導の転換を推進した実践理論が提出された時期であり、「筆者概念」論は、その転換を支えた要素であることを示した。小・中学校、高校段階の説明的文章指導を見据えた際に「筆者概念」を用いる課題は、「表現活動へ連動しない」「自分の考えを持つ過程がない」ことにあると指摘した。
(6)「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―学習過程の類型化を中心に―」	単独	平成 25 年 5 月 18 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究 第 124 回弘前大会発表要旨集』pp. 45-48	大正期から 1990 年代までの「筆者概念」論をおさえ、「筆者」の位相として、①「現実に文章を書いた筆者」、②「読み手が文章から想定・推論・推察する筆者」、③「学習活動の『仕掛け』としての筆者」という三つを提起した。 特に、③「学習活動の『仕掛け』としての筆者」は、「筆者を読む」学習過程に大きく関わる。1990 年代の実践記録から「仕掛け」となる「筆者の役割」を抽出し、実践理論に関する論述とあわせて類型化を行った。
(7)「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―学習過程での連動性に着目して―」	単独	平成 25 年 10 月 26 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究 第 125 回広島大会発表要旨集』pp. 145-148	小・中学校、高校段階の説明的文章指導（特に、批判的読み）における学習過程に関わる「筆者概念」について、学習方法論を観点に、次の二点について示した。第一は「筆者の位相」を議論する場を、テキスト論上の議論と教授学上との議論に分けて整理した点である。第二は、「学習過程内での連動性」について、「学習者の反応」にある「筆者の位相」の種類と「批判的読み」の際に対象となる「筆者」の範囲について考察した点である。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(9) 「説明的文章の教材研究に関する検討—『教材の特性』を『生かす』という観点から—」	単独	平成 26 年 5 月 18 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 126 回名古屋大会発表要旨集』pp. 221-224	教職課程在籍の学生が授業づくりで悩むことの多くは、説明的文章の教材研究で、どの観点で読めばよいのか分からず、学習指導要領記載の指導事項（順序、段落、要旨等）を観点に授業づくりを行った結果、画一的で硬直化した指導になりやすいことである。この課題を解決するために、「教材の特性」を「生かす」ことの原理的考察を行った。その上で、具体的教材を用いて、「教材の特性」を捉えるための観点を「問い」の形で提示した。
(10) 「説明的文章の教材研究に関する検討—教材の特性と学習指導の諸要素との関わりから—」	単独	平成 26 年 11 月 8 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 127 回筑波大会研究発表要旨集』pp. 65-68	教育実習の事前・事中・事後での教材研究や指導案作成に関する学生のつまずきは、「どの観点で教材研究を行えば、発問や学習活動、指導案を作ることができるかよく分からない」あるいは、教材の特性を捉えることの重要性は理解しつつも、「『教材の特性を捉え、生かすこと』と『目標やつけたい力など』とのつながりが見えにくい」といったことである。そこで本発表では、教材の特性と学習指導の諸要素との関わりについて検討した。
(11) 「説明文教材で、学習者に『判断』をうながす『仕掛け』のバリエーション」	共同	平成 27 年 5 月 30 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 128 回兵庫大会研究発表要旨集』pp. 75-78	思考力・判断力・表現力を育成する学習指導の具体を提示するため、授業づくりにおいて重要な要素となる「発問（学習課題）」について検討した。 方法論として「判断」で仕掛けることと「発問」との関係性を明らかにした上で、「『判断』で仕掛ける」という切り口から、「教材の特性を生かす」ための教材研究のあり方を示した。また、具体的な説明文教材を用いて、系統性を踏まえつつ、学習者に「判断」を促す仕掛けの類型を提示した。長崎伸仁・正木友則 (p. 75 の問題設定部分を担当)
(12) 「説明的文章指導における『ゆさぶり』発問の整理と検討」	単独	平成 27 年 10 月 24 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 129 回西東京大会研究発表要旨集』pp. 23-26	特に「ゆさぶり発問」は、「授業の理論と実践にとって重要なもの」とされ、教授学研究や教科教育学研究における必須のテーマとされる。しかし、深澤 (2014) は「教材解釈」「発問（発問研究）」「ゆさぶり」といった「これらの『用語』が後退している」と捉え、問題提起した。この提起を受け、本発表では、これまで歴史的に蓄積されてきた「ゆさぶり発問」に関する議論の整理・検討から、深澤発言に対する仮説的回答の提出を試みた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(13) 「解決志向アプローチ (SFA) を取り入れた説明文の発問研究」	共同	平成 28 年 10 月 16 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 131 回東京大会研究発表要旨集』pp. 301-304	国語科教育の読むことの分野において、考えさせたい内容は研究者によって提案され、確立されつつあり、学習者の実態を捉え「どのような発問をするか」という研究も進んでいる。しかし、「考えさせたい内容」と「問い」との関係性の研究はあまり進んでいるとは言えない。本発表では、双方の関係性に迫るため、森俊夫が実践した解決志向アプローチ (Solution Focused Approach: SFA) という心理療法を援用し、説明文指導での発問研究に新たな地平を開こうとした。 (p. 301 の問題設定部分を担当) 増田英夫・長崎伸仁・ <u>正木友則</u>
(その他) 雑誌論文 (1) 「登場人物を書くー基本の指導と応用ワザー」	単著	平成 26 年 9 月	『教育科学国語教育第 777 号』9 月号明治図書 p. 24	一般的に、「登場人物を書く」活動は、文学教材における登場人物の心情のみに焦点が当たりやすい。そこで、文学教材の場合は、登場人物の心情、心情の変化、人物像の三種類があり、教材「やまなし」を用いて、心情の変化を文章全体から考えることの重要性を示した。また、教育方法論を見据えた応用として、説明的文章教材「千年の釘にいどむ」を用い、登場人物の「白鷹さん」の台詞に込められた思いを表現する学習活動を提案した。
(2) 「説明文指導に必要な『学習用語』と活用のポイント」	単著	平成 27 年 2 月	『教育科学国語教育第 783 号』3 月号明治図書 pp. 28-29	「学習用語」の獲得は、「学習用語」をただ覚えさせるのではなく、その「学習用語」が意味する概念を具体的な説明文教材の学習と関係づけ、実感的に理解させることによって可能となる。そのポイントは、学習者が文章全体を視野に入れ、「思考・判断・表現する場」をいかに設定するかにある。そこで説明文学習における「題名」「問いー答え」「事例」「段落」「要旨・要約」といった 16 の学習用語を具体的な実践事例として提示した。
(3) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (4 月・小 6)」	共著	平成 29 年 3 月	『教育科学国語教育第 808 号』4 月号明治図書 pp. 102-103	「『ぼく』は子どもか、大人か？」という刺激的な課題は、白黒つけ難い「思春期」がキーとなる。そのため、そのまま問うと学習者の思考が滞りかねない。そこで、問い方を工夫し、五段階のスケールリングを用いることで、学習者に「どちらかと言えば…」や「〇〇寄り…」といった判断を促す。スケールリングは「①と②」や「④と⑤」といった微妙な違いまで可視化できる。学びを深める学習課題かどうか、問い方で変わる事例である。 高橋達哉・ <u>正木友則</u> (p. 103 の「AL のポイント」欄を担当)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(4) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (5月・小6)」	共著	平成 29 年 4 月	『教育科学国語教育第 809 号』5 月号明治図書 pp. 102-103	従来の説明文学習は内容や形式への偏重が多く見られた。学習者の「情」を切り口にすることで、内容・形式の偏重を避け、主体的・意欲的に学習できる特長をもつ。 深い学びは☆印で表す主張への納得度や共感する事例について、学習者の「実感」に根ざした「判断」を「根拠」「理由づけ」と共に交流することで実現する。学習者の「実感」と「事例と主張の関係」とをつなぐ「判断を促す問い」と学習者の判断の「可視化」が重要である。 高橋達哉・正木友則 (p. 103 の「AL のポイント」欄を担当)
(5) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (6月・小6)」	共著	平成 29 年 5 月	『教育科学国語教育第 810 号』6 月号明治図書 pp. 102-103	「初めて知ったことのランキング」づけは、学習者に「読者としての実感」の自覚化や集団としての合意形成を促す。「自分の考え」を交流し、「集団の考え」へと高めた上で、筆者による「題名と内容」との論理的整合性を中心に評価へと移る。学習者の「読者としての実感」を「筆者への評価」に生かすための工夫といえる。教材を基にしながら、「読者と筆者」相互の視点からの交流を通して、ダイナミックで深い評価活動が期待できる。 高橋達哉・正木友則 (p. 103 の「AL のポイント」欄を担当)
(6) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (7月・小6)」	共著	平成 29 年 6 月	『教育科学国語教育第 811 号』7 月号明治図書 pp. 102-103	「ゆさぶり」は教師が「本当にそういえるか？」と問うことや学習者の思考に対立・葛藤を促す「AかBか」という学習課題にも見出せる。他者との交流を通して、読みは多様であることを学習者が実感し、描写と心情との関わりに着目した読み方を獲得できる。そのためには「A・B」複数の読みの成立が必要となり、叙述の空白や描写・心情の関わりに着目し、学習者が思わず考えたくなる学習課題へつなげる教材研究の鋭さが重要となる。 高橋達哉・正木友則 (p. 103 の「AL のポイント」欄を担当)
(7) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (8月・小6)」	共著	平成 29 年 7 月	『教育科学国語教育第 812 号』8 月号明治図書 pp. 102-103	「せんねん まんねん」という題目から意外と思われる「みじかい」をあえて空白にすることで、学習者は詩全体を視野に入れ、文脈を読むことになる。ここで、一年という時間を、授業時間 (四十五分) 何時間分に相当するか計算する活動を入れることで、学習者は「せんねん まんねん」の「ながさ」について、より実感的に理解できるだろう。作者の表現を問う場面では「長い」と「永い」の違いなど、国語辞典を用いる学びへと展開できる。 高橋達哉・正木友則 (p. 103 の「AL のポイント」欄を担当)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(8) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (9月・小6)」	共著	平成 29 年 8 月	『教育科学国語教育第 813 号』9 月号明治図書 pp. 102-103	教材の特性を生かし、「ぼく」の「語り」に着目する。物語世界における場面や登場人物の心情に関する学習課題とは異なり、「ぼく」という視点から「よい思い出か・嫌な思い出か・その他」という判断を促すことで、「ぼく」の心情や行為に関する解釈に加え、「きつねの窓」という物語を「『ぼく』の語りによる物語」と捉え直すことができる。 「語り」に着目する読み方を、学習者に獲得させ、他の物語に応用することが重要といえる。 高橋達哉・正木友則 (p. 103 の「AL のポイント」欄を担当)
(9) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (10月・小6)」	共著	平成 29 年 9 月	『教育科学国語教育第 814 号』10 月号明治図書 pp. 102-103	学習者は「五月」と「十二月」との「比較」と、続きの物語があるとの「仮定」を通して、作品構造全体を視野に入れることができる。作品構造や叙述の言葉から「クラムボンの自分なりの解釈」「疑問や不思議」といった「ひとりの読者」としての考えの形成を経て、作品世界に浸ることで「自分の主題」を自分の言葉で紡ぎ出すことにつながる。「かにの兄弟には何が見える・聞こえる？」といった暗黙知を援用した手立てにも注目である。 高橋達哉・正木友則 (p. 103 の「AL のポイント」欄を担当)
(10) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (11月・小6)」	共著	平成 29 年 10 月	『教育科学国語教育第 815 号』11 月号明治図書 pp. 102-103	一般的に、アニメは「見る」もので、マンガは「読む」ものといえる。筆者は鳥獣戯画を「アニメの祖」と捉えることから、「鳥獣戯画を『見る』」と言えないか、という題名読みによって教材・筆者に対する吟味・評価が始まる。本実践での順序は後者である。筆者が著名なアニメ作家という特性に応じた工夫であり、そのことで単元全体を通して自分の考えを形成し、表現・交流する過程の保障が実現できている。 高橋達哉・正木友則 (p. 103 の「AL のポイント」欄を担当)
(11) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (12月・小6)」	共著	平成 29 年 11 月	『教育科学国語教育第 816 号』12 月号明治図書 pp. 102-103	中学校段階を見据えて配列される小学校高学年の論説文教材で、学習者が要旨や筆者の主張を捉えることは容易ではない。そこで、高橋実践では「筆者の言いたいことは何か」という内容を選択肢形式で問い、学習者がそれぞれの選択肢を「比較・否定」することで、より深い思考を促す。筆者への共感度や「それなりに」の割合といった具体化・可視化する学習活動も工夫されている。いかに学習者の頭の中をスッキリできるかが鍵といえる。 高橋達哉・正木友則 (p. 103 の「AL のポイント」欄を担当)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(12) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (1月・小3)」	共著	平成 29 年 12 月	『教育科学国語教育第 817 号』1 月号明治図書 pp. 96-97	「分かったつもり」を打破する実践である。実は、教材にある「おしりのところから、とくべつのえきを出すこと」と、そのえきは「においのある、じょうはつしやすい」ものと明らかにただけでは、「ありの行列のできるわけ」がわかったとは言い切れない。小学生の読者には分かりにくい箇所であるため、筆者による説明が付加されている。土居実践の中核は「論の進め方」と「結論」のあり方の吟味にある点が特長といえる。 土居正博・ <u>正木友則</u> (p. 97 の「AL のポイント」欄を担当)
(13) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (1月・小4)」	共著	平成 29 年 12 月	『教育科学国語教育第 817 号』1 月号明治図書 pp. 98-99	第一次の「新聞記事」を用いた活動は、説明的文章教材に書かれている世界と、実際に私たちが生活する世界とをリンクさせようとする意図がある。読者の立場から「一番すごい考え(推理)はどれか」という判断を促している。実際の「新聞記事」を用いた活動や読者の立場からの判断は、後に行う新聞記者と筆者になりきってのインタビュー活動や新聞にまとめる活動へと展開される。第一次から第三次まで、活動が見事に接続している事例といえる。 土方大輔・ <u>正木友則</u> (p. 99 の「AL のポイント」欄を担当)
(14) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (1月・小6)」	共著	平成 29 年 12 月	『教育科学国語教育第 817 号』1 月号明治図書 pp. 102-103	説明的文章の学習指導研究では、「分かりやすさ」や「納得度」など、学習者の内面にある価値基準をもとに評価する学習が提唱されるようになった。高橋実践では、「理解できたかどうか」と「賛同できるかどうか」という二段階の評価活動である。筆者の意見が理解できなければ、評価は難しい。抽象的になりやすい評価活動を、ポジショニングマップを用いて可視化している。「評価」という学習用語の獲得を促すところにも注目である。 高橋達哉・ <u>正木友則</u> (p. 103 の「AL のポイント」欄を担当)
(15) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (2月・小3)」	共著	平成 30 年 1 月	『教育科学国語教育第 818 号』2 月号明治図書 pp. 96-97	まず教師の発表を聴き「なるほど」という実感を含んだ「よさ」を学習者からあげさせるところから学習指導がスタートする。教師が最初から話し方を提示しないところにポイントがある。その上で、相手が「面白そうだな」「なるほど」と思うことを話す内容とするよさに気づかせる。「話し方」や「話す内容」のどちらかに傾斜せず、話し手が相手意識を持ち、話す「内容」と「タイミング」を学習内容とするところも特長である。 土居正博・ <u>正木友則</u> (p. 97 の「AL のポイント」欄を担当)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(16) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (2月・小4)」	共著	平成 30 年 1 月	『教育科学国語教育第 817 号』1 月号明治図書 pp. 98-99	学習者の生活経験や既有知識を学習指導に活用することは重要である。それは、生活と説明的文章の世界とを結びつけながら「読む」ためだけでなく、生活の見方や考え方といった世界観を更新することにもつながるためである。「便利」であることは「誰にとって良いのか」という筆者の問いを学習者が実感的に認識することが重要である。そこで授業者は「ゆさぶり」をかけることで、新たな（筆者の）見方・考え方の実感を促す。「AかBか」という対立型の学習課題から、新たな「C・D…」といった考えや気づきを促し、学びを深めたい。 神野佳子・ <u>正木友則</u> (p. 99 の「AL のポイント」欄を担当)
(17) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (2月・小6)」	共著	平成 30 年 1 月	『教育科学国語教育第 818 号』2 月号明治図書 pp. 102-103	読者（学習者）の立場や登場人物（太一）の立場から、登場人物の心情や人物像、関係性、また全体の作品構造を考える学習活動のバリエーションに富む単元である。心情を「直接問う」ことを避け、これまで学習指導で正面から扱われることのなかった「脇役」にまで焦点に当てることで、読者による作品の解釈を豊かにしようとする意図が見られる。授業者がもつ学習指導論や教材研究、そこから構想される学習課題が、学習者が参加でき、他者の考えに刺激を受け、交流する中で学びを深める目的のためにすべて連動していることがわかる。 高橋達哉・ <u>正木友則</u> (p. 103 の「AL のポイント」欄を担当)
(18) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (3月・小3)」	共著	平成 30 年 2 月	『教育科学国語教育第 819 号』3 月号明治図書 pp. 96-97	読者は「おくびょう」でない豆太を目の当たりにするものの、「弱虫でもやさしけりゃ」という小見出しと最後の三行によって、「おくびょうのままか」「豆太は変わったのか」という問いが生まれる。「必要か・必要でないか」という学習課題は、説明的文章教材において「段落相互の関係性」を考える際に活用されることもあるが、本実践では、読者が生活経験やこれまでの学習で獲得した知識を基に「自分の考え」を表現するために用いられる。 土居正博・ <u>正木友則</u> (p. 97 の「AL のポイント」欄を担当)
(19) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり (3月・小4)」	共著	平成 30 年 2 月	『教育科学国語教育第 819 号』3 月号明治図書 pp. 98-99	学習指導要領記載の「思考力・判断力・表現力等」の「等」には、イメージ豊かに読むための「想像力」も含まれるであろう。物語の授業において、叙述から離れ、空想の読みを避けることはイメージを広げる可能性を捨てることは同じではない。「がんばれ、がんばれ」という台詞について、正答の存在を前提とする学習課題ではなく、「誰の、どのような声で音読したいか」という、「読者として」の思いや願いを重視する点に特徴がある。 土方大輔・ <u>正木友則</u> (p. 99 の「AL のポイント」欄を担当)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(20) 「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（3月・小6）」	共著	平成 30 年 2 月	『教育科学国語教育第 819 号』3 月号明治図書 pp. 102-103	学習者の主体的な学びを促すために、学習者自らが「問い（学習課題）」をつくることは、青木幹勇氏「問題を持ちながら読む」実践理論が代表的である。高橋氏の意図は、これまでに積み上げてきた学習者自身の学びを「振り返る」ところにある。「確認」にあたる学習課題が多くなりがちであるため、いかに、これまで獲得した知識を想起させ、「何が、どのように」の「確認」から「評価」まで、学習者が意識化できるかが重要である。 高橋達哉・正木友則（p. 103 の「AL のポイント」欄を担当）
(21) 「『ゆさぶり発問』を意識的に」	単著	平成 30 年 6 月	「教師のチカラ」編集委員会編『子どもを「育てる」教師のチカラ』季刊 34 号日本標準 p. 44	発問には、「『何』について『どう』考え、表現し、『何のため』に『どこに』もっていくか」が含まれる。学習者は「『何』について『どう』考え、表現するのか」を教師の言葉によって応答を試み、教師は、授業の目的に沿い、学習者の発言を整理し、方向づける。こうした発問の連鎖的な構造をおさえた上で、文学教材における具体例を交えながら、思考をゆさぶることで、心情を直接問う時とは異なる発言を引き出す方法を示した。
(22) 「説明的文章の学習指導におけるゆさぶり発問—集団思考の深化・拡充を図る現代的展開—」	単著	平成 30 年 6 月	日本授業 UD 学会編集委員会編『授業 UD 研究』第 5 号 pp. 16-19	近年、授業者ではなく、学習者による「否定」を促す実践や具体案が提出されるようになった。そこで、説明的文章教材の「事例の順序性」に焦点を当てた実践記録を基に、「ゆさぶり発問」の現代的展開について検討した。佐藤実践では、学習者が授業者の提案を「否定」する方法が採られたが、高橋実践では、小学校 3 年生という学習者の発達段階を踏まえて、「筆者」が「授業者」の提案を「否定」という仮想的な学習活動を設定したと結論付けた。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日
氏名 山田 明広

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
哲学、文学、文化人類学		漢文学、中国哲学、中国文学、文化人類学
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
(1) 問題解決能力を養わせるための授業の実践	平成 22 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成22年4月～平成24年3月に担当した「中国学演習」(専門教育科目、3 年次配当、通年、必修 2 単位)において、先に基礎的な知識を講義し、その上で大まかなテーマを与えて受講生に順番に発表させ、そして、全体で討論させることにより、受講生に自ら問題を発見して考え、調査し、解決するという能力を養わせた。
(2) 画像・映像資料を活用した分かりやすい授業の実践	平成20年4月1日～平成 24 年 3 月 31 日・平成 26 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 20 年 4 月～平成 23 年 9 月に担当した「東洋比較文化論」(専門教育科目、1 年次以降配当、春学期、選択 2 単位)、平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月に担当した「中国学演習」(専門教育科目、3 年次配当、通年、必修 2 単位)、平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 1」(専門教育科目、2 年次以降配当、春学期、選択 2 単位)および「現代アジアと日本 2」(専門教育科目、2 年次以降配当、秋学期、選択 2 単位)、平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」(専門教育科目、2 年次以降配当、春学期、選択 2 単位)および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」(専門教育科目、2 年次以降配当、秋学期、選択 2 単位)において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」(講義科目、1 年次配当、前期、必修 1 単位)において、本人が現地で撮影した写真および映像を用いて中国・台湾の宗教事象を中心とする諸文化を解説することにより、学生が授業内容について理解しやすくなっているとともに、興味を持つようになった。
(3) リアクションペーパー使用による授業改善の工夫	平成26年4月1日～平成 30 年 3 月 31 日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 1」(専門教育科目、2 年次以降配当、春学期、選択 2 単位)および「現代アジアと日本 2」(専門教育科目、2 年次以降配当、秋学期、選択 2 単位)、平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」(専門教育科目、2 年次以降配当、春学期、選択 2 単位)および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」(専門教育科目、2 年次以降配当、秋学期、選択 2 単位)において、花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「中国文学史Ⅰ」(講義科目、1 年次以降配当、前期、選択 2 単位、中高 1 種国語科教員免許取得のための科目)および「中国文学史Ⅱ」(講義科目、1 年次以降配当、後期、選択 2 単位、中高 1 種国語科教員免許取得のための科目)において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化

(4) 効果的な漢文教育法の実践	平成26年4月1日 ～平成30年3月31日	論」(講義科目、1年次配当、前期、必修1単位)において、適宜リアクションペーパーを使用して受講生から授業に対する感想・要望・質問を聞き、授業改善に生かした。また、寄せられた質問については、後の授業にて可能な限り回答するなど、学生との意思疎通を図った。 花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成26年4月～平成30年3月20日にかけて担当した「漢文学Ⅰ」(講義科目、1年次以降配当、前期、選択2単位、中高1種国語科教員免許取得のための科目)および「漢文学Ⅱ」(講義科目、1年次以降配当、後期、選択2単位、中高1種国語科教員免許取得のための科目)において、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科非常勤講師として平成28年4月～平成28年8月にかけて、また、同大学同学部同学科の特任講師として平成29年4月～平成29年8月にかけて担当した「漢文学入門」(専門科目、2年次以降配当、前期、選択2単位、中高1種国語科教員免許取得のための科目)、および同大学同学部同学科の特任講師として平成28年9月～平成29年3月にかけて担当した「漢文学Ⅰ」(専門科目、2年次以降配当、後期、選択2単位、中高1種国語科教員免許取得のための科目)において、漢文法および漢文句法を受講生に一通り網羅的に解説し演習問題を解かせて理解・定着させた上で漢文の文章読解を行わせることにより、受講生が比較的正確で安定的に漢文を読解することが可能となった。
(5) パワーポイントの効果的活用による分かりやすい授業の実践	平成26年11月27日・平成27年11月30日・平成28年4月～平成30年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成26年4月～平成28年3月に担当した「現代アジアと日本2」(専門教育科目、2年次以降配当、秋学期、選択2単位)のうち「台湾の道教式死者救済儀礼」についての講義において、平成28年9月～現在にかけて担当している「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」(専門教育科目、2年次以降配当、秋学期、選択2単位)の全講義において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成28年4月～平成28年9月に担当した「アジア文化論」(講義科目、1年次配当、前期、必修1単位)の全講義において、パワーポイントで作成したスライドを全面的に活用することにより、学生にとって視覚的に見やすくまた理解しやすい授業を実践している。その結果、奈良県立医科大学の講義において実施したリアクションペーパーにおいては、見やすく分かりやすいといった類の意見が多数寄せられた。
2 作成した教科書、教材 (1) オリジナルプリント教材の作成	平成20年4月1日 ～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成20年4月～平成23年9月に担当した「東洋比較文化論」(専門教育科目、1年次以降配当、春学期、選択2単位)、平成20年4月～平成22年3月にかけて担当した「中国学講義a」(専門教育科目、2年次以降配当、春学期、選択2単位)および「中国学講義b」(専門教育科目、2年次以降配当、春学期、選択2単位)、平成22年4月～平成23年3月に担当した「アジア文化研究1」(専門教育科目、2年次以降配当、春学期、選択2単位)および「アジア文化研究2」(専門教育科目、2年次以降配当、秋学期、選択2単位)、平成23年4月～現在にかけて担当している「中国思想文化論1」(専門教育科目、2年次以降配当、春

		学期、選択2単位) および「中国思想文化論2」(専門教育科目、2年次以降配当、秋学期、選択2単位)、平成24年4月～平成25年9月に担当した「漢字・漢文論1」(専門教育科目、2年次以降配当、春学期、選択2単位)、平成26年4月～平成28年3月に担当した「現代アジアと日本1」(専門教育科目、2年次以降配当、春学期、選択2単位) および「現代アジアと日本2」(専門教育科目、2年次以降配当、秋学期、選択2単位)、平成28年4月～平成30年3月にかけて担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」(専門教育科目、2年次以降配当、春学期、選択2単位) および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」(専門教育科目、2年次以降配当、秋学期、選択2単位) において、花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成26年4月～平成30年3月にかけて担当した「中国文学史Ⅰ」(講義科目、1年次以降配当、前期、選択2単位、中高1種国語科教員免許取得のための科目) および「中国文学史Ⅱ」(講義科目、1年次以降配当、後期、選択2単位、中高1種国語科教員免許取得のための科目) において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部の非常勤講師として平成28年4月～平成28年9月に担当した「アジア文化論」(講義科目、1年次配当、前期、必修1単位) において、毎時間、事前に要点をまとめたオリジナルのプリントを作成し、そのプリントを使用して講義することで、学生の理解に資している。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 近畿大学経済学部国際経済学科平成24年度後期における学生による授業評価アンケート	平成25年3月	「中国語コミュニケーション2」 および「基礎中国語Ⅱ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目においても「授業内容に満足」ないし「ほぼ満足」と答えた学生が8割以上を占めていたほか、学生から「説明が丁寧で分かりやすい」などといったコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
(2) 関西大学文学部総合人文学科平成26年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成26年9月	「中国思想文化論1」 および「現代アジアと日本1」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目もほとんどの項目において評価平均が4.0(満点5.0)以上であった。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、「中国思想文化論1」では評価平均が4.1に、「現代アジアと日本2」では評価平均が4.1となり、いずれも全学の平均である4.0を超えることができた。
(3) 関西大学文学部総合人文学科平成26年度秋学期における学生による授業評価アンケート	平成27年3月	「中国思想文化論2」 および「現代アジアと日本2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目についての評価平均が「中国思想文化論2」では4.1に、「現代アジアと日本2」では4.2となり、いずれの科目においても全学の平均4.0を超えることができた。
(4) 関西大学文学部総合人文学科平成27年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成27年9月	「中国思想文化論1」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、多くの項目においてその評価平均が全学平均および文学部平均を超えた。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、評価平

(5) 関西大学文学部総合人文学科平成27年度秋学期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	均が 4.2 となり、全学平均 4.0 および文学部平均 4.1 を超えることができた。
(6) 近畿大学法学部平成27年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国思想文化論 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目においてその評価平均が全学平均および文学部平均を超えた。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、評価平均が 4.2 となり、全学平均 4.0 および文学部平均 4.1 を超えることができた。
(7) 花園大学文学部日本文学科平成27年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国語総合 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「この教員の授業を 10 点法で評価して下さい」という項目についての平均値が 8.6 となり、全科目平均の 8.3 を超えることができた。また、「とても分かりやすかった」や「説明が丁寧であった」といった類のコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
(8) 奈良県立医科大学医学部看護学科平成27年度における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「漢文学Ⅱ」および「中国文学史Ⅱ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目もほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。特に、「先生の授業に対する取り組みに熱意や情熱を感じられますか」という項目については、前者が 4.0 (満点 5.0)、後者が 4.28 といずれも比較的高い評価が得られた。
(9) 奈良教育大学平成28年度前期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 9 月	「中国語」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「総合的に満足できる授業であった」という項目についての平均値が 4.57 (満点 5.0) となり、全体平均 4.1 を大きく超えるなど、高い評価が得られた。
(10) 奈良県立医科大学医学部看護学科平成28年度における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 9 月	「中国語」および「漢文学特論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、両科目ともほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。また「わかりやすい授業であった」といった類のコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
(11) 奈良学園大学平成29年度における学生による授業評価アンケート	平成 29 年 9 月	「アジア文化論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。特に、「授業を受けることでテーマについてより興味・関心を持てた」および「総合的に満足できる授業であった」という項目の平均値がともに 4.0 近くなるなど比較的高い評価が得られた。
		「漢文学入門」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目において当該科目の平均値が全体の平均値を超えることができた。特に、「授業に対する熱意や意欲」および「有効な時間の使い方」の項目について、4 段階中 3.6 という高い評価が得られ、全体平均を大きく上回った。そして、その結果、総合評価でも 4 段階中 3.5 という全体平均を大きく上回る高評価が得られた。

(12) 関西学院大学社会学部平成 29 年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 29 年 9 月	「中国語Ⅰ」および「中国語Ⅲ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目においてその評価平均が全学平均および学部平均を超えていた。特に、「あなたは、全体としてこの授業に満足していますか」という項目については、前者が 4.6、後者が 4.9（いずれも満点 5.0）といずれもかなり高い評価が得られた。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 〔社会人対象の講演〕 (1) 台湾の道教の現状と道教儀礼について 〔展覧会の解説の翻訳〕 (1) 「道教信仰文化特展」の解説の日本語訳	平成 27 年 9 月 11 日 平成 28 年 11 月 5 日 ～平成 29 年 2 月 19 日	大阪日中友好協会の支援の下で設立された「くらしの智慧：道教に親しむ会」の第 3 回会合において、当会の要請により一般向けに行った講演。まず、中国道教の歴史について触れることで道教とはいかなる宗教か紹介した後、台湾では現在いかなる道教信仰が行われているか儀礼を中心に説明した。 台湾台南市鄭成功文物館で行われた「道教信仰文化特展」における李豊楸教授による中国語の解説文を日本語に翻訳した。
5 その他 〔科目担当実績〕 (1) 関西大学における中国思想史に関する講義 (2) 関西大学における現代の東アジアの宗教文化に関する講義 (3) 近畿大学における初級中国語に関する講義	平成 20 年 4 月 1 日 ～現在に至る 平成 20 年 4 月 1 日 ～平成 23 年 9 月 20 日・平成 26 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 20 日 平成 21 年 4 月 1 日 ～平成 28 年 9 月 15 日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成 20 年 4 月～平成 22 年 3 月に「中国学講義 a, b」を、平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月に「アジア文化研究 1, 2」を、平成 23 年 4 月～現在にかけて「中国思想文化論 1, 2」を担当し、中国思想史に関する講義を行っている。いずれの科目においても、先秦から明代までの中国思想・宗教について儒教・仏教・道教の三教を基軸に通史的に講義しているが、思想・宗教のみならずその背景にある社会的文化的事象についても説明するなどして、受講生が理解しやすくなるよう工夫している。 関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成 20 年 4 月～平成 23 年 9 月に「東洋比較文化論」（春学期のみ開講科目）を、平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に「現代アジアと日本 1, 2」を、平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月に「アジアの伝統文化と現代Ⅰ、Ⅱ」を担当し、主として現代の東アジアの宗教文化に関する講義を行った。本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料を用いたり講義のテーマに関わる映画を見せたりして、受講生の興味を喚起できるよう工夫した。授業において行うリアクションペーパーには、画像・映像資料が用いられていて分かりやすいとの反響が多数見られた。 近畿大学経済学部国際経済学科の非常勤講師として専門科目「基礎中国語Ⅰ、Ⅱ」（平成 21 年 4 月～平成）を、経営学部・法学部・理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として外国語科目「中国語総合 1, 2」（経営学部：平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月、法学部：平成 24 年 4 月～現在、理工学部：平成 28 年 4 月～現在）を担当し、大学 1 年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。

(4) 関西大学における中国学専修3年次生に対する演習科目	平成22年4月1日 ～平成24年9月 20日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成22年4月～平成24年3月に「中国学演習」(通年)を、平成24年4月～平成24年9月に「中国学専修ゼミ3」(春学期のみ担当)を担当し、中国学専修3年次の学生に対して卒論執筆に必要な情報・知識を教えるとともに、必要な能力を養わせた。文献検索の仕方、辞書の引き方、中国思想・宗教に関する基礎知識を講義して卒論執筆に必要な知識を身に付けさせ、その後、漢文読解を行って卒論執筆に必要な文献読解力を養わせ、最後に論文の書き方について講義してから受講生の関心あるテーマについて発表させ、全体で討論させることで問題意識を喚起させた。
(5) 近畿大学における中級中国語に関する講義	平成22年4月1日 ～平成28年3月 31日	近畿大学生物理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として平成22年4月～平成23年3月に「中国語応用Ⅰ,Ⅱ」を、理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として平成23年4月～平成24年3月に「中国語総合3,4」を、文芸学部基礎教育部門非常勤講師として平成23年4月～平成28年3月に「中国語総合C,D」を担当し、2年次以上の学生に対して中級中国語を講義した。生物理工学部には中国語会話に関する授業がないため、「中国語応用Ⅰ,Ⅱ」では聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするといった授業を行ったが、他の学部には別に「中国語コミュニケーション」という中国語会話に関する授業が存在するため、「中国語総合3,4」および「中国語総合C,D」では、読む・書くといった能力の向上に焦点を絞り、教科書と演習問題を中心とした授業を行った。
(6) 近畿大学における中国語会話に関する講義	平成23年4月1日 ～平成28年9月 15日	近畿大学経済学部国際経済学科の非常勤講師として外国語科目「中国語コミュニケーション1,2」を担当し、中国語会話に関する講義を行った。中国語の基本文法の確認を行ってから、その文法事項を会話の上でどのように用いるか講義するなど、種々の表現が可能となるような授業を行っている。また、教科書のみならずリスニング教材を用いるなど、「話す」だけでなく「聞く」という方面の能力も身に付くよう工夫した。
(7) 関西大学における漢字論・漢文講読に関する講義	平成24年4月1日 ～平成26年3月3 1日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成24年4月～平成26年3月に「漢字・漢文論1,2」を担当した。本科目では、最初に、漢文を構成する漢字の歴史や変遷について講義した後、漢文の作品の講読を行った。訓点付きの漢文の読解から始めて次第に訓点のない漢文の読解へと移行するなど、無理なく高度な漢文の読解ができるよう工夫した。
(8) 奈良県立医科大学における初級中国語の講義	平成24年4月1日 ～平成28年3月 31日	奈良県立医科大学医学部看護学科非常勤講師として「中国語」を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。

(9) 奈良教育大学における初級中国語の講義	平成24年4月1日 ～平成28年9月 30日	奈良教育大学教育学部教育学科非常勤講師として「中国語」を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。
(10) 花園大学における漢文学に関する講義	平成26年4月1日 ～平成30年3月 20日	花園大学文学部日本文学科非常勤講師として、平成26年4月～現在にかけて「漢文学Ⅰ、Ⅱ」を、平成26年9月～平成27年3月に「漢文学基礎」（後期のみ開講科目）を担当し、漢文読解に関する講義を行った。前者においては、漢文法・語法を網羅的に解説した後、訓点付きの漢文の作品の講読を行った。後者においては、訓点付きの漢文の作品の読解から開始し、次第に訓点のない漢文の作品の読解へと移っていくなど、読解中心の授業を行った。
(11) 花園大学における中国文学史に関する講義	平成26年4月1日 ～平成30年3月 20日	花園大学文学部日本文学科非常勤講師として「中国文学史Ⅰ、Ⅱ」を担当し、中国文学史に関する講義を行った。先秦から明代までの中国文学の歴史について、毎回テーマを定めできる限り作品にも触れつつ通史的に概観した。毎回、ただテーマについて説明を行うだけではなく、その背後にある歴史的・社会的・文化的事象についても触れ、その作品や事象が起こった原因と結果についても考えていくよう工夫した。
(12) 奈良学園大学における漢文学に関する講義	平成28年4月1日 ～現在に至る	平成28年4月～8月までは奈良学園大学人間教育学部人間教育学科非常勤講師として、平成28年9月～平成30年3月にかけては奈良学園大学人間教育学部人間教育学科特任講師として、また、平成30年度4月～現在は奈良学園大学人間教育学部人間教育学科専任講師として、前期に「漢文学入門」および「漢文学Ⅱ」を、後期には「漢文学Ⅰ」および「語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）」を担当した。前期の「漢文学入門」においては、訓点付きの漢文を独力で読むための基礎学力を養生することを目標として、漢文の基礎事項・文法を講義し、「漢文学Ⅱ」においては、「漢文学Ⅰ」から一步進めて抽象的・思想的内容を含んだ文章でも主体的に読み進めることができることを目標に、難易度の高い散文作品をその背景なども説明しつつ読解した。後期の「漢文学Ⅰ」においては、比較的平易な訓点付きの漢文の作品の講読し、「語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）」においては、「漢文学Ⅱ」よりもさらに進めて、返り点のない文章の読解を試みた。いずれの科目も教員免許取得のための科目であるため、いかに漢文を教えるべきかといった漢文教育という視点からの講義も行った。
(13) 奈良県立医科大学におけるアジアの文化に関する講義	平成28年4月1日 ～平成28年9月 20日	奈良県立医科大学医学部教養教育部門非常勤講師として「アジア文化論」（リレー講義、前期のみ開講）を担当し、本人は中華文化圏の諸文化について講義している。中華文化圏の地理と言語・飲食・年中行事・祭祀・喪葬のそれぞれをテーマとする5回に渡る授業を3クラスにおいて講義している。本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料を用いるなど受講生が少しでも興味を持てるよう工夫した。

(14) 奈良教育大学における中国文学史に関する講義	平成28年4月1日～平成28年9月30日・平成30年10月1日～平成31年3月31日	奈良教育大学教育学部教育学科非常勤講師として「漢文学特講」(集中講義)を担当し、中国文学史に関する講義を行った。先秦から現代までの中国文学および芸能の歴史について、可能な限り作品にも触れつつ通史的に概観したが、特に中国の芸能の歴史については、画像・映像資料を用いるなどして、受講生にとって分かりやすく興味を持ちやすい授業となるよう工夫した。
(15) 奈良学園大学における教職者として必要な表現力に関する講義	平成28年9月20日～現在に至る	平成28年9月～平成30年3月にかけて奈良学園大学人間教育学部人間教育学科特任講師として、平成30年度4月～現在は奈良学園大学人間教育学部人間教育学科専任講師として、「教職表現力演習Ⅰ」および「教職表現力演習Ⅱ」を担当している。「教職表現力演習Ⅰ」は主として1年生を対象とした、「教職表現力演習Ⅱ」は主として2年生を対象とした科目で、いずれも、教職者としてふさわしい「文章表現力」を身につけることに主眼をおく。テキストのみならず、毎回小テストを行うなど、現代日本語の知識と運用能力の向上を目指すべく工夫した授業を行っている。
(16) 関西学院大学における初級中国語に関する講義	平成29年4月1日～現在に至る	関西学院大学社会学部の非常勤講師として外国語科目「中国語Ⅰ,Ⅱ」を担当し、主に中国語未習の大学1年生に対して初歩的な中国語を講義している。中国語を母語とする教員とペアで1つのクラス授業を担当し、1週間に各1コマずつ、合計2コマ授業を行っている。申請者は、主として、教科書各課における新出の文法・語法について説明するということを担当しており、日本人が中国語を学ぶ上では何が問題となるのかというポイントを捕らえた、日本人だからこそできる授業を展開している。
(17) 関西学院大学における中級中国語に関する講義	平成29年4月1日～現在に至る	関西学院大学社会学部の非常勤講師として外国語科目「中国語Ⅲ,Ⅳ」を担当し、すでに1年間中国語を学んだことのある2年次以上の学生に対して、中級中国語を講義している。中国語を母語とする教員とペアで1つのクラス授業を担当し、1週間に各1コマずつ、合計2コマ授業を行っている。申請者は、主として、教科書各課における新出の文法・語法について説明するということを担当しており、日本人が中国語を学ぶ上では何が問題となるのかというポイントを捕らえた、日本人だからこそできる授業を展開している。
(18) 奈良学園大学におけるゼミナール形式の演習科目	平成30年4月1日～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科専任講師として、演習科目「基礎ゼミナールⅠ」および「人間教育学ゼミナールⅠ(基礎)」を担当している。「基礎ゼミナールⅠ」では、1年次生に対してアカデミックスキル習得を目指した内容の授業を行い、「人間教育学ゼミナールⅠ(基礎)」では、「国際理解に向けての中華文化研究」というテーマの下、3年次生に対して、前期は知識を得るべく中華圏の文化についての講義を行い、後期は学生個人が個別にテーマを設定して調べ、まとめて、発表するというを行っている。

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 (1) 博士 (文学)	平成 20 年 3 月 31 日	関西大学文博第110号、論文題目「道教齋儀の研究」
2 特許等 なし。		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 〔共同研究実績〕 (1) 京都大学人文科学研究所「三教交渉の研究 (Ⅱ)」 共同研究班に参加	平成17年4月～ 平成22年3月	京都大学人文科学研究所において麥谷邦夫教授 (現・名誉教授)を班長として平成 17 年 4 月～平 成 22 年 3 月の 5 年間に渡って運営された「三教交 渉の研究 (Ⅱ)」共同研究班に班員として加わっ た。本研究班は、上記「三教交渉の研究」共同研 究班の後を承けたものであり、本人は主として定 期的に開かれた研究会に参加して陳垣『道家金石 略』に収められている唐以前の金石資料の会読を 行った。
(2) 文部科学省学術フロンティア推進拠点・関西大 学アジア文化交流研究センターにおける共同研究プロ ジェクトに参画	平成 18 年 4 月～ 平成22年3月	平成 17 年 4 月に文部科学省学術フロンティア推進 拠点として設置された関西大学アジア文化交流研 究センターの「東アジアにおける文化情報の発信と 受容」をテーマとする 5 年間の共同研究プロジェ クトに、平成 18 年 4 月～平成 20 年 3 月にはリサ ーチアシスタントとして、平成 20 年 4 月～平成 22 年 3 月にはポスト・ドクトラル・フェローとして 参画した。 思想・儀礼研究班に所属し、台湾の道教儀礼を中 心に宗教儀礼の研究に従事するとともに、センタ ーの事務作業や研究会・シンポジウムの運営にも 携わった。本研究プロジェクトに関わる研究業績 として、共著書 4 冊、論文 4 本、学会発表 4 回、 翻訳 1 本がある。
(3) 関西大学グローバルCOE「文化交渉学教育研究拠 点」(ICIS)の「ICIS『朱子語類』研究会」に参加	平成19年12月～ 平成21年3月	関西大学グローバルCOE「文化交渉学教育研究拠 点」(ICIS)の進める書院・教育研究の一環とし て組織された「ICIS『朱子語類』研究会」に参加 し、主として『朱子語類』巻 89・礼六・喪の訳注 の作成に従事するとともに、定期的に行われた 研究会に参加し、各メンバーが作成した訳注の検 討を行った。本研究課題に関わる研究業績とし て、研究報告書 1 冊 (共著)がある。
(4) 文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「浙 江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀 礼調査」に参加	平成20年4月～ 平成22年3月	関西大学・二階堂善弘教授を研究代表者として平 成 17 年 4 月～平成 22 年 3 月にかけて行われた文 部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「浙 江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭 神・儀礼調査」(研究課題番号 17083038)に平成 19 年 4 月より研究協力書として参加し、主として 台湾の道教儀礼についての調査・研究を行った。 本研究課題に関わる研究業績として、学会発表 1 回がある。
(5) 文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 (A)「東 アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的 研究: 書院・私塾教育を中心に」に参加	平成21年4月～ 平成25年3月	関西大学・吾妻重二教授を研究代表者として平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月にかけて行われた文部科 学省科学研究費補助金・基盤研究 (A)「東アジア における伝統教養の形成と展開に関する学際的研

(6) 関西大学東西学術研究所「日本仏教研究班」に参加	平成22年4月～平成23年3月	究：書院・私塾教育を中心に」に研究協力書として参加し、主として『朱子語類』巻89・礼六・喪の訳注の作成に従事するとともに、定期的に開催された研究会に参加し、各メンバーが作成した訳注の検討を行った。本研究課題に関わる研究業績として、研究報告書3冊（いずれも共著）がある。 関西大学・原田正俊教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「日本仏教研究班」に非常勤研究員として参加し、主として台湾の道教儀礼についての調査・研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行った。本研究班参加に関わる研究業績として、共著1冊、論文1本がある。
(7) 慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容－『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」に参加	平成23年4月～平成26年3月	慶應義塾大学東アジア研究所において慶應義塾大学・野村伸一教授を研究代表者として進められた高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容－『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」に研究協力者として参画し、主として中国および台湾の道教・民間信仰の調査・研究に従事するとともに、不定期的に開催された研究会に参加し、日本・中国・韓国の基層文化に関する研究報告を聞き、討論した。本研究課題に関わる研究業績として、共著1冊がある。
(8) 関西大学東西学術研究所「東アジアにおける規範と学芸研究班」に参加	平成23年4月～平成25年3月	関西大学・二階堂善弘教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジアにおける規範と学芸研究班」に非常勤研究員として参加し、主として中華文化圏と日本の喪葬儀礼の比較研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行った。本研究班参加に関わる研究業績として、論文1本がある。
(9) 関西大学東西学術研究所「東アジア宗教儀礼研究班」に参加	平成25年4月～平成28年8月・平成29年4月～平成31年3月	関西大学・原田正俊教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジア宗教儀礼研究班」に平成25年4月～平成28年8月にかけては非常勤研究員として、平成29年4月～は客員研究員として参加し、主として中華文化圏の道教の死者救済儀礼についての調査・研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行っている。本研究班参加に関わる研究業績として、論文1本がある。
(10) 慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「慰霊供養と神格化から見る台湾人の歴史認識－民衆史学の構築をめざして」に参加	平成30年4月～現在に至る	慶應義塾大学東アジア研究所において慶應義塾大学・三尾裕子教授を研究代表者として進められている高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「慰霊供養と神格化から見る台湾人の歴史認識－民衆史学の構築をめざして」に慶應義塾大学東アジア研究所研究員（非常勤）として参画し、主として台湾で祀られている日本人神に対する道教式の儀礼について、中華系の神に対する道教式の儀礼との相違という観点から調査・研究に従事している。
4 その他 〔論文の引用実績〕 (1) 『唐前道教儀式史綱』が「塗炭齋考－陸修靜の三元塗炭齋を軸として－」を引用。	平成20年12月	呂鵬志『唐前道教儀式史綱』（中華書局、2008年）、223頁の注1において、塗炭齋法に関する参考文献として学術論文「塗炭齋考－陸修靜の三元塗炭齋を軸として－」が引用されている。また、292頁において、「参考文献」のうちの「近人論著」の一つとして同論文が再度引用されている。

(2)「南臺灣靈寶道派放赦科儀之研究」が「道教齋儀の研究」を引用。	平成22年6月	姜守誠「南臺灣靈寶道派放赦科儀之研究」(南華大學宗教學研究所『世界宗教學刊』第15期、2010年)、172頁において、「参考文献」の一つとして博士論文「道教齋儀の研究」が引用されている。
(3)「淡水靈寶道壇の功德儀式：以混玄壇為核心的探討」が「道教齋儀の研究」を引用。	平成23年9月	蕭進銘「淡水靈寶道壇の功德儀式：以混玄壇為核心的探討」(財團法人施合鄭民俗文化基金會『民俗曲藝』173号、2011年)、239頁～240頁の本文および注16において、博士論文「道教齋儀の研究」が引用され、本人の台湾南部靈寶派拔度儀式に関する研究について、日本の数名の先学の研究を引き継いでいるが、功德儀礼中の専門的テーマについてより深く検討していると評されている。
(4)「練形與鍊度：六朝道教經典當中的死後修練與亡者救度」が「道教齋儀の研究」を引用。	平成24年12月	謝世維「練形與鍊度：六朝道教經典當中的死後修練與亡者救度」(中央研究院歷史語言研究所『中央研究院歷史語言研究所集刊』第83本第4期、2012年)、741頁の本文において、本人の現代の道教式功德儀礼に関する研究は台南地域と高雄・屏東地域の儀礼の次第を比較することで異なる道壇による功德儀礼の相違を考察したものであると紹介され、同注12で博士論文「道教齋儀の研究」が引用されている。
(5)「塗炭齋之後：道教民俗中首過儀式的扮犯表演」が「塗炭齋考—陸修靜の三元塗炭齋を軸として—」および「道教齋における自虐的行為の効能およびその衰退について——塗炭齋を中心として」を引用。	平成25年5月	李豊楸「塗炭齋之後：道教民俗中首過儀式的扮犯表演」(李豊楸、廖肇亨編『沉淪、懺悔與救度：中國文化的懺悔書寫論集』、中央研究院文哲所、2013年)、81頁の本文において、塗炭齋が次第に衰退した原因はすべてその自虐的行為に帰せられていると述べられており、同頁注16において、そのことを明確に述べた文献として、学術論文「塗炭齋考—陸修靜の三元塗炭齋を軸として—」および「道教齋における自虐的行為の効能およびその衰退について——塗炭齋を中心として」が引用されている。
(6)『臺南傳統道壇研究』が「塗炭齋考—陸修靜の三元塗炭齋を軸として—」および「道教齋儀の研究」を引用。	平成25年12月	洪瑩発、林長正『臺南傳統道壇研究』(臺南市政府文化局、2013年)、16頁の注10において、南朝劉宋の道士・陸修靜が整備した齋儀礼が現在の台南地域の功德儀礼にもある程度の影響を与えていることを述べた文献として、学術論文「塗炭齋考—陸修靜の三元塗炭齋を軸として—」および博士論文「道教齋儀の研究」が引用されている。また、19頁において、博士論文「道教齋儀の研究」、8頁掲載の表「台湾道教各教派の淵源および台湾における分布」が引用されている。
(7)「援法入道：南宋靈寶傳度科儀研究」が「臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討」を引用。	平成26年12月	張超然「援法入道：南宋靈寶傳度科儀研究」(謝世維主編『經典道教與地方宗教』、政大出版社、2014年)、132頁の注1において、台湾の道教儀礼に関する研究の中でも異なる時代の文献を比較することで儀礼の変遷をたどった研究の一つとして、学術論文「臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討」が引用されている。
(8)「産難の予防、禳除と拔度：台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として」が「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異—高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に—」および「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異—高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に—」を引用。	平成 27 年 3 月	謝聡輝著、山田明広訳「産難の予防、禳除と拔度：台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として」(野村伸一編著『東アジア海域文化の生成と展開—〈東方地中海〉としての理解—』、風響社、2015年)、355頁注28において、台湾道教の異常死者救済に関する参考文献として、学術論文「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異—高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に—」が引用されている。

				一」および「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」が引用されている。
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 道教と共生思想	共著	2009 年 平成21年10月	大河書房	2008 年 12 月 17 日～19 日に東洋大学にて開催された「第三回日米道教研究会議」の報告論文集。 (A5 判・全 404 頁) 編者 田中文雄・テリークリーマン 共著者 山田利明・テリークリーマン・ <u>山田明広</u> ・森由利亜・丸山宏・ほか 19 名 本人担当部分 十三「台湾正一道紅頭道士の午朝科儀」(249 頁～272 頁) 現在の台湾の正一道紅頭道士が行う儀礼のうち、高位の神々に謁見して表疏文を上奏し祈願するという意義を持つ朝科、中でも最も複雑とされる午朝科儀について、まず、本人が現地調査を行い収集した漢文体による文字資料と画像・映像資料とを読解・分析することで、その儀礼構造や内容、使用される儀礼文書の内容を詳細に解明した。そして、その上で、紅頭道士の行う他の朝科とも相互に比較し午朝科儀特有の特色を洗い出すことで、午朝科儀が最も複雑とされる理由についても考察した。
2. 東アジアにおける文化情報の発信と受容	共著	2010年 平成22年2月	雄松堂出版	2005 年 4 月～2010 年 3 月の 5 年間に渡り「東アジアにおける文化情報の発信と受容」をテーマに研究活動を行ってきた関西大学アジア文化交流研究センターの研究報告論文集。 (A5 判・全 544 頁) 編者 松浦章 共著者 藤田高夫・沈国威・三浦國雄・ <u>山田明広</u> ・徐興慶・ほか 16 名 本人担当部分 思想・儀礼研究班「台湾道教の異常死者救済儀礼について―台湾南部地域を中心として―」(331 頁～362 頁) 台湾南部地域において見られる道教の異常死者救済儀礼について、いかなる場合にいかなる特殊な儀礼が行われるのか紹介したもの。まず、台湾における正常死と異常死の定義を述べ、それから、台湾道教では亡魂がいかなる異常死を遂げた場合に道士はいかなる特殊な儀礼を行うべきだと考えられているか紹介、その後、道教の異常死者救済儀礼それぞれの儀礼構造や内容、機能について分析し、最後に、これらの作業を通して、人々はなぜこのような特殊な儀礼を必要とするのか考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
3. 次世代国際学術フォーラム第2集・文化交渉による変容の諸相	共著	2010年 平成22年3月	関西大学文化交渉学教育研究拠点	2009年12月12日～13日に関西大学にて関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）主催で举行された「第2回次世代国際学術フォーラム」の報告論文集。 （A5判・全357頁） 編者 篠原啓方・井上光幸・黄蘊・氷野善寛・孫青 共著者 ジョセフ・ボスコ・<u>山田明広</u>・井黒忍・川端泰幸・崔元硯・ほか13名 本人担当部分 セッション1「台湾の道教儀礼に見られる「水」」（53頁～74頁） 現在の台湾の道教儀礼の中から実際に「水」を使用する「救水禁壇」などといった科儀や「嘔水」などといった動作を抽出し、それらはいかなる目的の下、いかにして行われるのか紹介するとともに、それらにおいて「水」はいかなる意義を持ち、またいかに作用して儀礼の効能が発生しているのか、本人が台湾にて現地調査を行い収集した漢文体による文字資料や『道蔵』等道教関連文献に収められた儀礼関連の漢文資料などを読解することにより考察した。
4. 日本古代中世の仏教と東アジア	共著	2014年 平成26年3月	関西大学出版部 全345頁	関西大学東西学術研究所の日本仏教研究班の研究成果報告論文集。東アジアにおける仏教史の総合的な様相を提示する書。 （A5判・全345頁） 編者 原田正俊 共著者 原田正俊・西本昌弘・長谷洋一・<u>山田明広</u>・上川通夫・ほか6名 本人担当部分 第二部第四章「現代台湾の鬼月における無縁死者救済儀礼について―道教の普度法会と仏教の盂蘭盆会の比較―」（207頁～240頁） 台湾の鬼月において無縁仏救済のために行われる「普度法会」および「盂蘭盆会」という祭祀・儀礼について、まず、現地調査により得た事例を用いてその現状を紹介し、その上で、仏教儀礼および道教儀礼関連の漢文資料を読解することを通じて、「中元」、「盂蘭盆」、「施餓鬼」（放焰口）という関連する事項の原義を示し、さらに、これらの事項の歴史的変遷を追うことで、「普度法会」および「盂蘭盆会」の成立と展開を明らかにした。
5. 台湾道教における斎儀―その源流と展開―	単著	2015年 平成27年2月	大河書房	漢文文献の読解と現地調査を有機的に組み合わせた研究方法を用いて、過去の道教儀礼と現在の台湾の道教儀礼の両方について分析することにより、道教の斎儀が現在に至るまでにいかに変容したのか、また反対に今なお古い斎儀の伝統がどれほど保存されているのか示そうとした書。三部七章より成る。本書を著すことにより、現在台湾で見られる道教儀礼の中には、歴史的意味での斎儀と現在的意味での斎儀の両方が並存しているということを明らかにした。 （A5判・全260頁） 平成26年度科学研究費補助金研究成果公開促進費助成図書（交付額1,100,000円）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
6. 東アジア海域文化の生成と展開—〈東方地中海〉としての理解—	共著	2015年 平成 27 年 3 月	風響社	慶應義塾大学東アジア研究所の研究プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容」（2011 年度～2012 年度）の研究報告論文集。 （A5 判・全 750 頁） 編者 野村伸一 共著者 野村伸一・葉明生・謝聡輝・<u>山田明広</u>・鈴木正崇・ほか 7 名 本人担当部分 第二部第四章「福建泉州地域の寺廟・宗祠調査報告：王爺および観音信仰を中心に」（359 頁～393 頁）を藤野陽平と共著 2011 年 12 月 27 日～2012 年 1 月 2 日に福建泉州地域の寺廟や宗祠などを現地調査し見聞したもののについて報告するとともに現地で見られた 王爺信仰と観音信仰の特徴について考察したもの。福建泉州地域のいくつかの村落では観音信仰と王爺信仰が結合しているかと思われる祭祀が行われていること、および台湾では今なお行われている送王船の伝統が多く、の廟において断絶してしまっていることを指摘した。本人は報告部分のおよそ 7 割（担当部分抽出不可能）および考察部分の全般（384 頁～390 頁）を担当した。 本人担当部分 第二部第五章第六節 6「鹿港天后宮における普度法会次第」（435 頁～445 頁） 2013 年 8 月 21 日（旧暦 7 月 15 日）に台湾彰化県の鹿港天后宮において施宣熹道長率いる保真壇により実施された道教の普度法会（無縁死者救済儀礼）の調査報告。本人が行った現地調査およびこれまでの先行研究に依拠しつつ主に法会の次第について解説した。また、本法会が一方で死者救済儀礼であるとともに、一方で生者救済儀礼でもあるということを示した。
（学術論文） 1. 台湾道教に見られる二種類の午朝科儀—儀礼構造の比較を中心として— 2. 臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討（査読付）	単著 単著	2010 年 平成 22 年 2 月 2010 年 平成22年12 月	アジア文化交流研究（関西大学アジア文化交流研究センター）第 5 号、355 頁～369 頁 成大歴史學報（台湾・国立成功大学歴史学系）第 39 号、177 頁～207 頁	台湾道教で見られる紅頭道士の午朝科儀と烏頭道士の午朝科儀という二種類の午朝科儀について、まず、儀礼構造を中心に相互に比較することで両者の間の共通性と差異性を明らかにし、続いて、道教儀礼関連の漢文文献所載の関連のある儀礼と比較することによって、紅頭道士と烏頭道士はいずれも正一系の道士であるに関わらずなぜこれら二種類の異なる朝科が存在するのかという問題について考察し、併せて両儀礼の成立過程について一仮説を示した論文。 現在の台湾道教の功德儀礼を構成する科儀の一つである「合符童子科儀」に関して、まず、その内容と構造および使用される儀礼文書について検討し、続いて、道教儀礼関連の漢文文献の中から関連のある儀礼を抽出し、その内容と構造および使用される儀礼文書について分析し、最後に、中でも特にこの科儀との関連性が高いと判明した南宋『王氏大法』所載の「童子合牒」を取り上げ、その内容を現在の合符童子科儀で使用する「童子符」の内容と相互に比較し考察を加えることで、台湾の合符童子科儀がいかにして成立したのかを示した。

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
3. 台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異—高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に—	単著	2011 年 平成23年4 月	東西学術研究所紀要 （関西大学東西学術研 究所）第 44 輯、109 頁 ～119 頁	現在、台湾の高雄・屏東地域と台南地域において見られる道教の縊死者に関する儀礼、すなわち抽檻放索科儀と絞台放索科儀の台湾における地域的差異について考察した論文。本人がそれぞれの地域において現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料を用いてそれぞれの儀礼の儀礼構造や内容、目的、意義などを詳細に描写し、さらに、両者を相互に比較して、両者の間にはいかなる相違性や共通性が見られ、それらはいかなる意味を有するのか検討した。
4. 台湾道教の水死者救済儀礼とその文書	単著	2012 年 平成24年4 月	東西学術研究所紀要 （関西大学東西学術研 究所）第 45 輯、253 頁 ～277 頁	台湾道教の水死者救済儀礼である転水藏科儀について、まず、本人が台南地域と高雄・屏東地域で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料を用いて各地域の転水藏科儀の構造や内容、目的、意義を解明してから両者を比較し、さらに、使用される文書についても、いかなるものが存在し、いかなる効能を有するか、地域ごとに考察してから相互に比較することで、転水藏科儀とその文書はいかなるものであり、それらにはいかなる地域差が見られるか考察した。
5. 道教血湖儀礼の初歩的考察—台湾南部地区を例として— （査読付）	単著	2014 年 平成26年3 月	関西大学中国文学会紀 要（関西大学中国文学 会）第 35 号、113 頁～ 137 頁	道教において女性が難産死した場合に行われる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、まず、その淵源および歴史の変遷を道教儀礼関連の漢文文献を読解することによって検討し、その後、台湾で現地調査を行って収集した台湾南部地域の道教血湖儀礼に関する画像・映像資料および漢文体による文字資料を用いて、その儀礼構成や内容など具体的様相を明らかにするとともに、さらに、地域的差異、通常死の場合に行われる功德儀礼との間の差異、歴史的位置づけなどを考察した論文。
6. 台湾道教の異常死者救済儀礼	単著	2015 年 平成27年8 月	アジア遊学（勉誠出 版）第 187 号「怪異を 媒介するもの」、249 頁 ～258 頁	台湾道教で、縊死、溺死、難産死などの異常と認められる死因により人が亡くなった場合に行われる「抽檻放索」、「転水藏」、「血湖」などといった特殊な儀礼について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した論文。最初に、通常死の場合に行われる死者救済儀礼はいかなるものか検討した後、異常死者救済儀礼のうち「抽檻放索」、「転水藏」を取り上げ、その実施法を具体的に描写することで、その意義や効能について考察した。
7. 台湾鹿港地域の道教式功德儀礼について （査読付）	単著	2016 年 平成28年3 月	関西大学中国文学会紀 要（関西大学中国文学 会）第 37 号、297 頁～ 317 頁	本人が 2013 年 9 月 6 日に台湾彰化県鹿港鎮にて道教式功德儀礼を調査したその報告論文。まず、調査した功德儀礼の基本データおよび儀礼のプログラムを提示し、その後、提示したプログラムの順に従って功德儀礼を構成する各科儀についてその実施方法や効果、意義、使用された文書などを叙述し、最後に、ここまでの考察および本人のこれまでの経験を踏まえて台湾中部地域の道教式功德儀礼の特徴であると言えそうなことを提示した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 道教実践者としての李白—李白の詩を通しての考察—	単著	2016 年 平成28年3月	奈良教育大学 国文 研究と教育（奈良教育大学国文学会）第 39 号、19 頁～31 頁	盛唐の詩の大家・李白が道教信者としていかなる道教的実践を行い、それは彼の漢詩の中ではどのように表現されているのか、李白の漢詩を分析することにより考察した論文。まず、李白の事績について述べ、それから、李白の漢詩の分析を通じて李白が授籙、煉丹服餌、存思といった道教的実践を行っていたことを提示し、最後に、これまでの考察を踏まえて、李白が天宝三年に長安の宮廷から放逐されたという挫折経験は、彼の道教信仰の上で、また詩作および人生の上で、大きなターニングポイントとなる出来事であったと結論付けた。
9. 大学での漢文教育における問題点（１）—学生側の問題点：何が学生の漢文読解の妨げになっているか—	単著	2016 年 平成28年5月	教育PRO（株式会社ERP）第 46 巻 10 号、14 頁～15 頁	大学の授業で学生が漢文学を学習するに当たって、何が学生の理解の妨げになっているか、本人のこれまでの大学における漢文教育経験を踏まえて述べた論文。考察の対象を訓点付きの漢文を読解する場合のみに絞り、その場合、書き下し文から現代語へと翻訳するのが学生にとって最も困難であるとし、その上で、その原因は①漢文の読みと字義に対する知識の不足、②漢文の文法に対する理解の不足、③日本語の古典文法に対する理解の不足の三点にあるとして、各点について詳細に論じた。
10. 大学での漢文教育における問題点（２）—教員側の問題点：いかにして学生に漢文読解力を身に付けさせるべきか—	単著	2016 年 平成28年5月	教育PRO（株式会社ERP）第 46 巻 11 号、14 頁～15 頁	学生が漢文学を学習するに当たって困難を覚える原因として①漢文の読みと字義に対する知識の不足、②漢文の文法に対する理解の不足、③日本語の古典文法に対する理解の不足の三要素が考えられるとした上で、教員はこれらの問題を解決して学生に漢文読解力を身に付けさせるために授業ではどのように取り組むべきか、また、学生に漢文に興味を持たせ継続的に学習させるにはどうすべきか、本人のこれまでの大学における漢文教育経験を踏まえて述べた論文。
11. 台湾道教打城科儀についての初歩的考察	単著	2017 年 平成29年9月	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）、第7集、97～109頁	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した論文。台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について考察を加え、さらに台南地域のものとは高雄・屏東地域のものを相互に比較することで地域的差異という点についても検討を加えた。
（その他） 〔国際会議等発表〕 1. 臺灣道教的救済異常死者之儀	—	2009 年 平成 21 年 5 月	台北大龍峒保安宮2009 年「台灣道教與民間信仰神譜」國際學術會議（於台湾・台北大龍峒保安宮）	人が溺死や難産死、縊死といった特殊な死因により死去した場合に亡魂を地獄から救済するために行われる道教式の特殊な儀礼について、その種類や実施方法、儀礼を行うに至る条件、儀礼の目的などを台南地域と高雄・屏東地域に分類して考察した中国語による研究発表。発表持ち時間約20分、コメンテーターによるコメント約10分、討論約20分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 臺灣道教合符童子科儀之成立的初步探討	—	2009 年 平成 21 年 11 月	宗教傳播與宗教衝突：第二屆東亞歷史變遷國際學術研討會 (於台湾・国立成功大学)	現在の台湾道教の功德儀礼を構成する科儀の一つである「合符童子科儀」に関して、まず、その内容と構造および使用される儀礼文書について検討し、続いて、道教儀礼関連の漢文文献の中から関連のある儀礼を抽出し、その内容と構造および使用される儀礼文書について分析し、最後に、中でも特にこの科儀との関連性が高いと判明した南宋『王氏大法』所載の「童子合牒」を取り上げ、その内容を現在の合符童子科儀で使用される「童子符」の内容と相互に比較し考察を加えることで、台湾の合符童子科儀がいかにして成立したのか示した。発表持ち時間約 20 分、コメント約 10 分、討論約 20 分。
3. 台湾の道教儀礼に見られる「水」と龍神信仰	—	2009 年 平成21年12月	関西大学 ICIS 第 2 回次世代国際学術フォーラム「文化交渉による変容の諸相—自然信仰、エスニック要素と宗教実践、言語概念と言語教育を手がかりに—」 (於関西大学)	台湾の道教儀礼において見られる「噴水」や「救水禁壇」などといったその名前に「水」を含み、また実際に「水」を使用する科儀や動作について、それらはいかなる目的の下、いかに行われるのか紹介するとともに、それらにおいて「水」はいかなる意義を持ち、またいかに作用して儀礼の効能が発生しているのか分析することにより、台湾の道教儀礼と「水」との関わりについて考察した研究発表。発表持ち時間約 25 分。討論約 15 分。
4. 玄天上帝在臺灣道教儀式中的特徵	—	2010 年 平成 22 年 4 月	An International Symposium: Divinity and Society: The Cult of Zhenwu in Imperial and Modern China (中國歷史社會中的真武崇祀國際學述研討會) (於アメリカ・ラトガース大学)	道教の中でも高位の神に位置づけられ、台湾道教においては北極四聖の代表として特に尊崇されている玄天上帝が、台湾の道教儀礼中のいかなる場面においていかなる形で登場するか、主として儀礼空間および科儀といった二つの側面から教派ごとに分類して検討し、その結果を用いて台湾の道教儀礼に見られる玄天上帝の特徴について考察した中国語による研究発表。発表持ち時間約 20 分。討論約 30 分。
5. 臺灣道教血湖儀式之初步探討	—	2011 年 平成 23 年 6 月	第 7 届国际道教学術研討会 (於中国・湖南省衡山神龍寿岳国際大酒店)	道教において女性が難産死した場合に行われるとされる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、現在の台湾ではそれがいかなる条件のもとで行われ、具体的にいかなるものであるのか、本人が台湾で行ってきた現地調査の経験にもとづいて述べ、さらに、通常死の場合に行われる功德儀礼と比べるといかなる差異が見られるのか、また、歴史的にはどのように位置づけられるか考察した研究発表。発表時間 10 分。討論なし。
6. 台湾道教の難産死者救済儀礼とその地域的差異—台湾道教の伝承系統考察の手がかりとして—	—	2011 年 平成 23 年 9 月	洪沢栄一記念財団寄付・次世代国際フォーラム「世界の中の東アジア—多元文化交渉の諸相」 (於関西大学)	台湾において行われる道教の異常死者救済儀礼のうち、難産死の場合に行われる「血湖」と呼ばれる功德について、それがいかなる条件のもとで行われ、具体的にいかなるものであるのか、台南地域と高雄・屏東地域との間の地域的差異という観点から検討し、さらに、なぜこのような異常死者救済儀礼を特別に行わなければならないのか考察した研究発表。発表時間 15 分、討論時間 10 分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 道教血湖儀礼の現状について—台湾南部地域の血湖の功德を例として—	—	2013 年 平成 24 年 5 月	東アジア文化交渉学会第 5 回年次大会「描かれる新しい世界：東アジアの歴史・文化と未来」（於香港城市大学）	道教において女性が難産死した場合に行われるとされる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、まず、その淵源について道教儀礼関連の漢文文献を用いて検討した後、本人が台湾で行ってきた現地調査の経験にもとづき、台湾南部地域の道教血湖儀礼を例として、その具体的様相、地域的差異、通常死の場合に行われる儀礼との間の差異などについて考察した研究発表。発表時間 15 分、討論時間 10 分。
8. 道教血湖科儀の初歩探討—以臺灣南部地區為例—	—	2013 年 平成 24 年 7 月	經典道教與地方宗教國際研討會（於台湾・国立政治大学）	台湾道教において主として女性が難産死した場合に行われる血湖功德について考察した中国語による研究発表。まず、道教儀礼関連の漢文文献を用いて難産死者が堕ちるとされる血湖地獄とはいかなるものか確認し、その後、現在の台湾で行われている「血湖功德」について、本人が台湾南部地域で現地調査を行い得た漢文体による文字資料および画像・映像資料にもとづきつつその実施方法や一般の功德儀礼との差異、使用される文書などについて検討した。発表時間 20 分、討論時間 30 分
9. 台湾道教的救済異常死者の儀式——以台南地區的對縊死者及溺水死者之儀式為主	—	2016 年 平成 28 年 7 月	中国人民大学-羅格斯大学首届國際道教文化前沿論壇（於中国・湖南省陽光大酒店）	台湾道教の異常死者救済儀礼について、縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例として考察した中国語による研究発表。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている科儀書、筆記小説などによって検討した。発表時間 20 分、討論時間 10 分。
10. 福建晉江地區的王爺信仰之初步探討	—	2017 年 平成 29 年 10 月	2017臺灣王爺信仰文化國際學術研討會（於台湾文化部文化資產局文化資產保存研究中心）	2011年12月27日～2012年1月2日に福建泉州地域の寺廟や宗祠などについて現地調査を行ったが、その際に調査したもののうち王爺廟および王爺信仰に関するものを抽出し考察を加えることで、当該地域の王爺信仰の特徴を描き出そうとした中国語による研究発表。福建泉州地域のいくつかの村落では観音信仰と王爺信仰が結合しているかと思われる祭祀が行われていること、および台湾では今なお行われている送王船の伝統が多く、の廟において断絶してしまっていることを指摘した。発表時間20分、討論時間20分。
11. 臺灣道教打城科儀之地方性差異—以臺南地區與高雄・屏東地區為例	—	2018年 平成 30 年 10 月	道教与地方文化國際學術研討會（於中国・浙江大学）	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した中国語による研究発表。台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について考察を加え、さらに台南地域のもの、高雄・屏東地域のものとを相互に比較することで地域的差異という点についても検討を加えた。発表時間20分、討論時間30分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
〔国内学会発表〕 1. 台湾道教の異常死者救済儀礼で使用される文書について	—	2011 年 平成 23 年 3 月	日本中国学会第 1 回若手シンポジウム「中国学の新局面」 (於東京大学)	台湾道教の中でも功德儀礼が比較的盛んに行われている台湾南部地域の道教を主たる考察の対象として、まず、当該地域において異常死が発生した場合に行われる功德儀礼や科目にはいかなるものが存在するか列挙し、その上でその際に使用される特殊な儀礼文書にはいかなるものがあり、その内容はいかなるものであるのか、台南地域と高雄・屏東地域の地域差にも留意しつつ考察した研究発表。事前審査あり。発表時間 20 分。討論時間 10 分。
2. 道教では縊死者をいかにして救済するのか—台湾南部地域を例として—	—	2014 年 平成 26 年 3 月	東アジア恠異学会第 90 回例会 (於園田学園女子大学)	台湾道教の異常死者救済儀礼のうち、人が縊死した場合に行われる特殊な儀礼について考察した研究発表。台南地域の縊死者救済儀礼である「抽檻放索」と高雄・屏東地域の縊死者救済儀礼である「絞台放索」を取り上げ、両者を相互に比較して両者の間に見られる相違について検討することで、「絞台放索」には死者を地獄から救済するという効能があるが、「抽檻放索」にはそのような効能はなくむしろ、縊死の原因である悪煞を祓うことに重点が置かれているという見解を示した。発表時間 60 分、討論時間 60 分。
3. 伝統や文化に関する教育から国際理解へ—漢字・漢文教育を例として—	—	2017 年 平成 29 年 2 月	日本人間教育学会第 2 回大会 (於奈良学園大学)	教育によって、日本人の中華文化圏の人々に対する理解を増進させるべきことを主張した研究発表。まず、伝統や文化に関する教育と国際理解教育の現状および相互の関係性について振り返り、その上で、中華文化圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏の人々に対する理解が足りないため、彼らに対する対応に不適切な点があるといった問題点を指摘した。そして、旧字体や漢文といった伝統や文化に関する教育に力を入れることで、中華文化圏の人々に対する理解増大につながるのではないかと提言した。発表時間 20 分、討論時間 10 分。
4. 台湾道教打城科儀についての初歩的考察	—	2017 年 平成 29 年 7 月	関西大学東西学術研究所第 8 回研究例会 (於関西大学)	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した研究発表。台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について考察を加え、さらに台南地域のものと高雄・屏東地域のものとを相互に比較することで地域的差異という点についても検討を加えた。発表時間 20 分、討論時間 10 分。
5. 伝統や文化に関する教育から中華圏に対する理解へ—国語科・社会科を中心に—	—	2017 年 平成 29 年 9 月	第 25 回日本グローバル教育学会全国研究大会 (於国際基督教大学・小田原キャンパス)	学校教育の中で中華圏に対する理解を促進させる教育を行うべきことを主張した研究発表。まず、中華圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏に対する理解が足りないため、対応に不適切な点があるといった問題点を指摘し、その上で、伝統や文化に関する教育の一環として旧字体や台湾人・香港人アイデンティティーの問題について国語科や社会科の時間に教え、中華圏に対する正しい理解へとつなげるべきことを主張した。発表時間 20 分、討論 10 分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. 道教の血湖地獄とその救済儀礼	—	2017 年 平成29年12月	東アジア権衡学会第114回定例研究会 (於園田学園女子大学)	道教の数ある地獄の中でも、主としてお産により亡くなった女性の亡魂が囚禁されると考えられている「血湖」とその救済儀礼について考察した研究発表。まず、道教の血湖地獄がいかなるものであるのか、仏教の血盆地獄と比較しつつ概観し、その後、主として現在の台湾で行われているものを例として、そこから救済するための儀礼はいかなるものであり、通常死の場合の儀礼とはいかなる違いが見られるのか、また地域によりいかなる違いが見られるのかといったことについて考察した。
〔翻訳〕 1. 転経—古霊宝派の宣教方法—	共訳	2009 年 平成21年10月	道教と共生思想（大河書房）、76 頁～86 頁	原著者 Stephan R. Bokenkamp 原題 “Turning the Scriptures”: A Lingbao Proselytizing Technique アリゾナ州立大学教授 Stephan R. Bokenkamp 氏が著した英語の論文を日本語に翻訳し、訳者注を付したもの。これまで多種多様に研究され、道教研究において極めて重要な古霊宝経について、従来までの論に疑問を投げかけ、新ためて如何なる宗教集団が如何なる目的のもと作成するとともに、如何にしてそれを使用していたのかが考察されている。 共著者 酒井規史・山田明広
2. 中国北方農村における民間宗教の復興とその策略	単訳	2010 年 平成 22 年 9 月	東アジアの思想と宗教（丸善出版）、293 頁～318 頁	原著者 范麗珠 原題 「中国北方乡村民间宗教的复兴及其策略」 復旦大学教授・范麗珠氏が、関西大学の渋沢栄一記念財団寄付講座「日中関係と東アジア」の一環として 2009 年 11 月 26 日に講演を行うために著した中国語による論文「中国北方乡村民间宗教的复兴及其策略」を日本語に翻訳したもの。共産党政権の下、迷信・俗信が禁止されている中国において、近年、民間宗教がどのような方法を用いて復興しつつあるのか社会学的視点から論じられている。
3. 書院—近世中国における教育の中心	共訳	2011 年 平成23年10月	泊園記念会創立 50 周年 記念論文集（関西大学出版部）、53 頁～71 頁	原著者 李弘祺 原題 「書院：近世中國教育的中心」 台湾国立交通大学教授・李弘祺氏が 2010 年 10 月 23 日に行われた平成二十二年度（第 50 回）泊園記念講座国際シンポジウム「東アジアの伝統教育と泊園書院」において基調報告を行うために著した中国語による論文「書院：近世中國教育的中心」を日本語に翻訳したもの。 共著者 山田明広・吾妻重二
				本人担当部分 全文の下訳を分担したため抽出不可能

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 異議の意義—東アジアの反理学思潮を論ず—	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、236 頁～288 頁	原著者 楊儒賓 原題 「異議的意義——論東亞的反理學思潮」 台湾国立精華大学教授・楊儒賓氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア—テキストをふまえたアプローチ—」において基調報告を行うために著した中国語の論文「異議的意義——論東亞的反理學思潮」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。荻生徂徠・丁若鏞・阮元などといった東アジアの反理学を主張する儒者の観点およびその理念について考察されている。
5. 朝鮮・丁若鏞と日本古学派	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、379 頁～414 頁	原著者 蔡振豊 原題 「朝鮮丁若鏞與日本古學派」 国立台湾大学教授・蔡振豊氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア—テキストをふまえたアプローチ—」において報告を行うために著した中国語の論文「朝鮮丁若鏞與日本古學派」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。朝鮮実学の集大成者・丁若鏞の著作を通じて、朝鮮の学者が日本との長年に渡る儒学交流の後、日本古学に対していかなる評価を下したのか考察されている。
6. 佐久間象山と張之洞	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、415 頁～446 頁	原著者 張崑將 原題 「佐久間象山與張之洞」 国立台湾師範大学教授・張崑將氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア—テキストをふまえたアプローチ—」において報告を行うために著した中国語の論文「佐久間象山與張之洞」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。日本幕末の朱子学者・佐久間象山の思想と中国清末の政治家・張之洞の思想を比較することにより、中国と日本との間の西洋の学問を受け入れるに当たっての認知の差異について考察されている。
7. 朱熹『白鹿洞書院揭示』の日本における流伝およびその影響	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、518 頁～536 頁	原著者 張品端 原題 「朱熹《白鹿洞书院揭示》在日本的流传及其影响」 国福建省武夷学院・中国社会科学院哲学研究所宋明理学研究センター秘書長・張品端氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア—テキストをふまえたアプローチ—」においてポスターセッションを行うために著した中国語の論文「朱熹《白鹿洞书院揭示》在日本的流传及其影响」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。朱子が再建し経営した白鹿洞書院の精神を記した『白鹿洞書院揭示』がいかに日本に流伝し、そして影響したかといったことが考察されている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 産難の予防、禳除と拔度—台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として—	単訳	2015 年 平成 27 年 3 月	東アジア海域文化の生成と展開—〈東方地中海〉としての理解—（風響社）、299 頁～357 頁	原著者 謝聰輝 原題 「産難の預防、禳除與拔度：以南臺灣與泉州地區所見道教科法為主」 台湾師範大学教授・謝聰輝氏が著した中国語の論文を日本語に翻訳し、漢文文献や漢文体による儀礼書からの引用文については書き下し文に改めたもの。中国や台湾に伝わる女性の難産予防に関わる種々の儀礼やまじない、宗教医療について、主として文献を用いて詳細に分析するとともに、併せて、現今なお実施されている「血湖」と呼ばれる難産関連の道教儀礼について、台湾南部と泉州地区における現地調査を踏まえて仔細に論じている。
9. 現代上海道教の宮觀および道士についての簡単な紹介	単訳	2015 年 平成 27 年 6 月	東方宗教（日本道教学会）第 125 号、127 頁～132 頁	原著者 姚樹良 原題 「当代上海道教宮觀、道士現狀簡介」 2014 年 11 月 8 日に開催された日本道教学会第 65 回大会において、上海市道教教会副会長・姚樹良氏により行われた中国語による講演の原稿を日本語に翻訳したもの。最初に文化大革命以降の中国道教の状況について紹介するとともに、中国道教の教派について説明し、その上で、上海の道教の現況について、宮觀、儀礼、道士の養成方法、宮觀と民衆とのかわり、布教などといった側面から紹介されている。
〔研究報告〕 1. 『朱子語類』礼関係部分訳注 2	共著	2013 年 平成 25 年 5 月	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究代表者・吾妻重二）	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究課題番号 21242001）の平成 21 年度の研究成果報告書。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986 年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者 『朱子語類』研究会 共著者 吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか 4 名 本人担当部分 巻 89・礼六・喪、第 7 条（96 頁～100 頁）
2. 『朱子語類』礼関係部分訳注 3	共著	2011 年 平成 23 年 1 月	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」研究代表者・吾妻重二	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究課題番号 21242001）の平成 22 年度の研究成果報告書。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986 年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者 『朱子語類』研究会 共著者 吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか 6 名 本人担当部分 巻 89・礼六・喪、第 8 条～第 9 条（89 頁～92 頁）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3.『朱子語類』礼関係部分訳注 4	共著	2012 年 平成 24 年 1 月	科学研究費基盤研究 (A) (一般)「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」研究代表者・吾妻重二	科学研究費基盤研究 (A) (一般)「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」(研究課題番号 21242001)の平成 23 年度の研究成果報告書。『朱子語類』(南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986 年)を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者 『朱子語類』研究会 共著者 吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか 6 名 本人担当部分 巻 89・礼六・喪、第 10 条～第 19 条 (77 頁～85 頁)
4. 台湾道教の縊死者および溺死者救済儀礼に関する二、三の考察—台南地域を例として—	単著	2016 年 平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要 (奈良学園大学) 第 5 集、213 頁～219 頁	台湾道教の異常死者救済儀礼について、縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例として考察した研究報告。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている科儀書、筆記小説などによって検討した。
5. 伝統や文化に関する教育から中華圏に対する理解へ—国語科・社会科を中心に—	単著	2018 年 平成 30 年 3 月	奈良学園大学紀要 (奈良学園大学) 第 8 集、149 頁～154 頁	学校教育の場で中華圏に対する理解を促進させる教育を行うべきことを主張した研究報告。まず、中華圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏に対する理解が足りないため、対応に不適切な点があるといった問題点を指摘し、その上で、伝統や文化に関する教育の一環として旧字体や台湾人・香港人アイデンティティーの問題について国語科や社会科の時間に教え、中華圏に対する正しい理解へとつなげるべきことを主張した。
〔書評〕 1. 志賀市子著『〈神〉と〈鬼〉の間—中國東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』	単著	2013 年 平成 25 年 5 月	東方宗教 (日本道教学会) 第 121 号、93 頁～99 頁	茨城キリスト教大学教授・志賀市子氏の著書『〈神〉と〈鬼〉の間—中國東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』(風響社、2012 年)に対する書評。中国東南部、特に広東省東部沿海の潮汕および海陸豊地域における無縁死者の埋葬と祭祀を主な研究対象とし、その諸相および歴史の変遷を明らかにすることを目的として書いた本書について、その内容を簡単に紹介した上で、その研究方法および内容について評し、さらに問題点を指摘した。
〔辞書〕 1. 岩波世界人名事典	共著	2013 年 平成 25 年 12 月	岩波書店 全 3586 頁	全世界の国・地域について、神話・伝説上の人物から現存者までを網羅した総合的な人名辞典。 編者 岩波書店辞典編集部 共著者 山田明広・吾妻重二・二階堂善弘・酒井規史・三浦國雄他 550 名 本人担当部分 中国の道教および民間信仰の神・神仙に関する項目のうち以下の 11 項目。安期生 (145 頁)、王爺 (484 頁)、玉皇大帝 (734 頁)、元始天尊 (924 頁)、黄初平 (950 頁)、三茅真君 (1126 頁)、東華帝君 (1839 頁)、保生大帝 (2641 頁)、媽祖 (2743 頁)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
〔解説・総説・雑記等〕 1. 屏東の林徳勝道長との出会いと交流—台湾道教のあり方を学ぶ—	単著	2014 年 平成 26 年 9 月	日本台湾学会ニューズレター（日本台湾学会）第 26 号、13 頁～14 頁	日本台湾学会のニューズレターにおける特集「記憶の中の台湾—思い出の場所、思い出の人—」に寄せた文章。本人が台湾留学中に知り合い、道教儀礼を調査させていただいたほか多くの資料を提供していただくなど非常にお世話になった台湾屏東県在住の道士・林徳勝道長との出会いとこれまでの交流、および林道長の道教儀礼や信仰に対する態度についてエッセー形式で紹介するという内容のもの。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏 名 山 田 均

研 究 分 野		研究内容のキーワード
教育学		社会科教育法・教科社会・地域と学校との連携
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 (1) 目標と指導と評価を一体化する授業づくりの実践	平成 24 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	学校評価において、授業づくりについての評価を特に力を入れて実践した。各教員の授業を参観しその後面談指導し、再度授業について検討会を行うなど校内授業研究を活性化させた。 (王寺南小学校現職教育の取組としての実践) 学校評価において、授業づくりについての評価を特に力を入れて実践した。各教員の授業を参観しその後面談指導し、再度授業について検討会を行うなど校内授業研究を活性化させた。 (王寺南小学校現職教育の取組としての実践)
(2) 見方・考え方を働かせる教材の在り方について実践	平成 30 年 12 月	児童が社会的な見方・考え方を働かせて学修を進める上で、教材の果たす役割を検証するため、王寺南小学校の 6 年生を対象に、教材研究、学習指導案作成、授業実践を行った。 (「児童の学習を深める教材研究」の実証研究を行うための実践)
2 作成した教科書、教材 (1) 「学校を地域に開く 情報発信と施設開放」 (奈良県小・中学校長会)	平成 24 年 3 月	地域に向けた情報発信や学校施設の開放、学校支援ボランティアの導入など開かれた学校づくりが進んでいるが継続する条件を述べた。奈良学園大学人間教育学部の「特別活動の指導法」のゲストティチャーとしての授業で活用した。
(2) 「小学社会 6 年上」文部科学省検定済教科書小学社会科用 (日本文教出版)	平成 26 年 4 月	平成 27 年度版小学社会科教科用図書 著作者 池野範男、的場正美、安野功 他 32 名 B 5 版 全 8 冊
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 奈良学園大学人間教育学部でゲストティチャーとして「特別活動の指導法」指導の際の学生の授業アンケート	平成 28 年 7 月	特別活動(初等)で学校行事に焦点をあて、目標と内容と指導する際の留意点等を話した。学校の行事 1 年間を視覚的に提示した。学生の満足度は 85%。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 教育実習生指導と学校ボランティアの大学生指導	昭和 59 年 6 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良県黒滝村立黒滝東小学校・奈良県吉野郡大淀町立大淀北野小学校・奈良県北葛城郡王寺町立王寺南小学校・奈良県磯城郡田原本町立田原本小学校田原本町立田原本小学校で毎年教育実習生を指導した。特に社会科の指導を例にとり指導案や児童理解の視点等を指導した。その後は、管理職としての立場から統括的に指導を行った。

(2) 奈良県小学校社会科研究大会 3 年生分科会指導助言 テーマ 「社会的な見方・考え方を深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」 大会会場：奈良県田原本町立田原本小学校	平成 25 年 11 月	「古くから続く地域の祭り」を題材に、祭りに込められている人々の願いや祭りを保存する人々の思いの理解を重視し、児童自身の祭りへの参加について考えさせる実践報告について、人々の営みや願いについて、具体的な事実認識をした上で、共感的に理解することは地域の一員としての意識を育てることにつながるということなどについて助言した。
(3) 全国小学校社会科研究協議会研究大会 5 年生分科会指導助言 テーマ 「社会的な見方・考え方を深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」 第 3 会場：奈良県南風原町立翔南小学校	平成 27 年 2 月	「工業の発達と私たちの暮らし」を題材に、教材の在り方「ねりあい（児童一人一人の見方・考え方を交流し合う場面での話し合い）」を重視した実践について、社会的な事象について確かな根拠に基づき自分なりの考えを持つことが、社会参画の基礎となる力であることなどについて助言した。
(4) 近畿小学校長協議会研究大会滋賀大会 分科会指導助言 テーマ 「新しい時代を主体的に生きる子どもを育む教育環境・教育条件」 会場：大津プリンスホテル	平成 27 年 11 月	第 6 分科会「教育環境・教育条件」指導助言 学校支援ボランティアの活用を図りながら、校舎の修繕や掃除などを通じ児童が安心して勉学に励める教育環境の実現を図ったという発表について、学校と地域がウィン・ウインの関係になるように校長が心がけることの重要性や地域に開かれた学校にするために情報発信、施設開放、地域の人材活用の三点がポイントなること等について助言した。
(5) 近畿小学校社会科教育研究協議会大阪大会 3 学年課題研究分科会指導助言 テーマ 「社会に参画する力の形成を図る」 大会会場：大阪市立聖和小学校	平成 27 年 11 月	「昔の暮らし」を題材に、道具のうつりかわりの背景には、よりよい暮らしの実現を願う人々の思いあり、そして、人々の願いが現在の暮らしに結びついているということを理解することを重視した実践発表であった。社会参画の基礎として、小学校では、社会的事象についての知識の習得、世の中全体で考えなければならないものの存在に気付くこと、そして、学習した社会的事象について関心を持ち続けることが重要であることを助言した。
(6) 奈良県小学校社会科研究大会 3 年生分科会指導助言 テーマ 「自らの学びを深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」	平成 28 年 11 月	「くらしの変化」を題材に、道具のうつりかわりの背景には、よりよい暮らしの実現を願う人々の思いあり、そして、人々の願いが現在の暮らしに結びついているということを理解することを重視した実践発表であった。社会参画の基礎として、小学校では、社会的事象についての知識の習得、学習したことを基に自分自身の考えをもつことその考えを話し合い、より深め合う重要性を助言した。
(7) 大和郡山市立片桐小学校授業研究会 校内研修指導助言 テーマ 「生き生きと自ら学ぶ子どもの育成 ～自分の思いを表現し、伝え合い、ひろげる力をつける～」	平成 29 年 7 月	「発表する」場面となると苦手意識から十分に話し合い活動に参加できないという児童の実態をふまえ「生き生きと自ら学ぶ子どもの育成～自分の思いを表現し、伝え合い、ひろげる力をつける～」という研究主題の下「国語科を要しつつ各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実すること。」という共通認識で授業実践に取り組んでいる学校に対して、次期学習指導要領の趣旨をふまえ、「主体的・対話的で深い学び」「何ができるようになるか」の明確化等の視点から助言した。
(8) 奈良市富雄第三小中学校第 55 回全国小学校社会科研究協議会研究大会会場校としての授業公開並びに授業研究会提案 授業構想、指導案作成、研究発表等に関する指導 テーマ 「豊かな心を持ち、生き生きと学び合う児童・生徒の育成 一聴き合い つながり合い 学び合う授業の創造」	平成 29 年 7 月、 8 月	学校の研究主題である「豊かな心を持ち、生き生きと学び合う児童・生徒の育成 一聴き合い つながり合い 学び合う授業の創造」の実現に向けて、指導案の立案、授業構想の検討、研究紀要の作成、研究発表等にかかわり指導、助言を行った。

(9) 第 55 回全国小学校社会科研究協議会研究大会 学年別授業研究会(3 年生部会)並びに課題別研究会 (3 年生部会)指導助言 テーマ 「自らの学びを深め、よりよい社会の形成に参画 する力を育てる社会科学習 一人の営みに学び、ね り合う学習を通して」	平成 29 年 10 月	「自らの学びを深め、よりよい社会の形成に参画する力 を育てる社会科学習 一人の営みに学び、ねり合う学習 を通して」の大会の研究テーマに基づき、社会の形成 に参画する力を養うために必要なこととして、社会を支 えている人との出会い、そしてその人の営みに対しての 共感的な理解が重要であることとその営みが自分自身 の生活と大きなかわりがあることへの気付きを生み 出すための学習、とりわけ、対話的な学びにもつながる 字十つに依拠した考えを基に話し合いを深めるねり合 いの重要性について指導した。
(10) 王寺町立王寺北小学校授業研究会 校内研修指導助言 テーマ 「アクティブラーニング」	平成 29 年 11 月	次期学習指導要領でも提案されている「主体的、対話的 で深い学び」いわゆるアクティブラーニングについて学 習指導要領に示されている改訂のポイントや内容を中 心に、アクティブラーニングについて一定の学習方法を 取り入れることが実現の十分条件ではないということ について理解を図るよう指導した。特に、主体的な学習、 対話的な学習は児童主体の学習が前提であり、これまで 以上に教材研究や児童理解を深めることが必要である ことを説明した。
(11) 生駒市家庭教育講座講師 テーマ 「子ども成長と環境 ー想像してみよう 子ども たちが大人になるころの世の中ー」	平成 29 年 11 月	少子高齢化の急速な進展や人生 100 年時代の到来、A I の進歩などにより、子どもたちが迎えるであろう未来は 私たち大人が経験したこともない、想像を遥かに超える 社会になっていると未来予測を研究している学者たち が提唱している。そのような未来予測を踏まえ、いった いどのような力を子どもたちに身に付けさせればよい のか。次期学習指導要領では未来予測を視野に入れた改 訂がなされている。そのような予想される未来社会や文 部科学省が考える子どもたちへの教育の方向性、そして それらを踏まえた家庭での教育について様々な数値を 元に考えていこうという提起を行った。
(12) 奈良県小学校校長会役員研修会講師	平成 30 年 8 月	「これからの教育について考える」というテーマの下、 新学習指導要領の目指しているもの、学校や教員を取り 巻く状況、働き方改革、Society5.0などを切り口に、 学校を経営するという視点からの提起を行った。
(13) 奈良市家庭教育講座講師	平成 30 年 11 月	少子高齢化の急速な進展や人生 100 年時代の到来、A I の進歩などにより、未来は想像を遥かに超える社会にな っていると未来予測を研究している学者たちが提唱し ている。そのような未来予測を踏まえ、いったいどのよ うな力を子どもたちに身に付けさせればよいのか。未来 を生きる子どもたちの幸せを考え、家庭でどのような子 育てを行って行けばよいのか、データを基に参加者と主 に考える講演会を行った。
(14) 生駒郡校長会研修会講師	平成 30 年 12 月	「新学習指導要領を見据えた学習指導と評価の在り方」 のテーマの下、新学習指導要領のポイントである社会に 開かれた教育課程、カリキュラム・マネジメント、資質 能力の 3 つの柱、教科等で育成される見方・考え方、主 体的・対話的で深い学びの具現化について、学校経営の 視点から提起を行った。
(15) 奈良県青少年健全育成協議会講演会講師	平成 30 年 12 月	「イマドキの子ども事情について考える」という演題を 設定し、青少年の健全育成に携わっている奈良県内の各 団体の代表者に、子どもを取り巻く環境、とりわけ SNS などの状況、いじめや不登校の状況、子ども成長スピー ドの加速化などの切り口から現在の子どもの状況 について理解を深める講演を行った。
5 その他 特記事項なし		

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 ・ 中学校教諭一級普通免許(社会) ・ 高等学校教諭二級普通免許(社会) ・ 学芸員資格 ・ 小学校教諭二級普通免許 ・ 小学校教諭一種免許	昭和 55 年 3 月 昭和 55 年 3 月 昭和 55 年 3 月 昭和 56 年 3 月 平成 6 年 6 月	昭 54 中 1 普め第 4405 号 京都府教育委員会 昭 54 高 2 普め第 4519 号 京都府教育委員会 同博第 94 号 同志社大学 昭 55 小 2 普第 397 号 奈良県教育委員会 平 6 小 1 種第 47 号 奈良県教育委員会
2 特許等 特記事項なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 奈良県小学校教科等研究会社会科部会 昭和 62 年度 専門委員 平成 5 年度～11 年度 3 年生部会部長 平成 23 年度～28 年度 理事・指導部	昭和 62 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	昭和 23 年 6 月に設置された「奈良県作業単元基底設定委員会」を母体とし、昭和 30 年に「奈良県社会科教育研究協議会」を設立した。その後、奈良県では各教科等の研究団体を一つに統合して運営することとしたため、「奈良県小学校教科等研究会社会科部会」となり、奈良県の小学校社会科指導の牽引車としての役割を担った。
(2) 公益社団法人日本教育会会員 平成 25、26 年度 奈良県支部評議員 平成 27 年度 奈良県支部理事	昭和 62 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	日本の文化と伝統を重んじ、かつ、時代の要請に応ずる教育の確立を目指し、教育関係団体並びに広く教育に関心をもつ者の協力の下に教育の調査研究活動及びその普及活動等を行卯ことを通して、我が国の教育の正常にして健全な発展に寄与することを目的とした公益社団法人。
(3) 奈良県北方領土問題教育者会議副委員長	平成 23 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	これからの我が国を担う児童生徒が、我が国の領土について正しく理解することが重要であるという観点に立ち、北方領土教育の充実・強化を図るため独立行政法人北方領土問題対策協会内に平成 15 年から設置された組織。
(4) 奈良県王寺町子ども・子育て会議委員	平成 25 年 3 月 ～ 平成 27 年 3 月	王寺町が安心して子どもを産み育てることができる町づくりを進めるために策定する「王寺町子ども・子育て支援事業計画」に対する諮問を受け、その目的や内容等について検討、答申を行うことを目的(座長 小西藤司 白鳳短期大学教授)
(5) 公益法人奈良県学校給食会評議員	平成 26 年 4 月 ～ 平成 28 年 6 月	学校給食に対し、学校給食用物資の安定供給及び学校給食の普及充実に関する事業並びに学校給食を通じた食育の支援を行うことを目的した公益法人。
(6) 奈良県王寺町教育ビジョン策定懇話会委員	平成 26 年 9 月 ～ 平成 27 年 12 月	今後 10 年間にわたる王寺町教育振興計画策定するための機関(座長 吉田明史奈良学園大学奈良文化女子短期大学部学長)
(7) 奈良県子どもの貧困対策会議委員	平成 27 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	貧困状態にある子どもの支援の在り方についての検討を行うために設置された会議(座長 神原文子神戸学院大学教授)

(8) 奈良県人権教育研究会副会長	平成 27 年 5 月 ～ 平成 28 年 5 月	部落問題をわが国の人権問題の重要な課題として捉え、その解決を図る取組を通して、人権尊重の精神を涵養する教育研究推進を目的とした研究団体
(9) 奈良県放課後児童対策推進委員会委員長職務代理者	平成 27 年 10 月 ～ 平成 29 年 3 月	放課後児童クラブと放課後子ども教室の一体的な運営について検討し、放課後の児童対策の推進を図ることを目的として設置された委員会（委員長 岡田龍樹天理大学教授）
(10) 奈良県いじめ防止基本方針検討協議会委員	平成 28 年 2 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良県いじめ防止基本方針策定のための委員会（座長 森田洋司大阪市立大学名誉教授）
(11) 奈良県社会教育委員	平成 28 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	社会教育法に基づいて設置され、県教育委員会の諮問に応じ、社会教育に関して意見を述べる社会教育委員会議の委員
(12) 奈良県N I E推進協議会副会長	平成 28 年 6 月 ～ 平成 29 年 6 月	奈良県内の新聞界と教育界が協力し、新聞を活用する社会科を中心とした各教科の学習を普及させることにより、児童・生徒の学習意欲を高め、情報活用能力を啓発することなどを目的とした協議会（会長 小柳和喜雄奈良教育大学教職大学院教授）
(13) 奈良県ユニセフ協会評議員	平成 28 年 5 月 ～ 平成 29 年 5 月	子どもたちの命と健康を守るために活動しているユニセフの日本ユニセフ協会と協力協定を締結し奈良県におけるユニセフ活動の推進を図ることを目的とした協会（会長 甘利治夫奈良新聞社代表取締役）
(14) 次世代教員養成プログラム策定委員会委員	平成 28 年 10 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良県の教員を志望する学生・生徒に、奈良県教育を担う資質・能力を育成することを目的として、次世代教員養成プログラムの内容について協議することを目的とした委員会。会長等は置かず、奈良教育大学（副学長、事務局長等）奈良県教育委員会事務局（教育次長、政策推進室課長補佐等）奈良県小学校長会会長をメンバーとしている
(15) 奈良県公立小学校長会本部委員 平成 25、26 年度会計 平成 27 年度 副会長 平成 28 年度 会長	平成 25 年 5 月 ～ 平成 29 年 5 月	小学校教育の充実と発展を目的に、奈良県公立小学校長により組織された団体。研究大会や定例の役員会などを通じて小学校経営についての資質の向上を図り、県教育委員会との協議を通し手今日的な教育課題の強雨を図るなど野活動を行っている。また、近畿各府県の校長会とは近畿小学校長会協議会で、全国の校長会とは全国連合小学校長会に加盟し連携を図っている。
(16) 王寺町いじめ対策調査委員会委員	平成 29 年 4 月 ～ 現在 に至る	いじめ防止対策推進法に規定に基づき、いじめの防止等のための対策に関する調査研究、いじめ防止対策事業の実効性の検証、重大事態にかかる事実関係を明確にするための調査及び未然防止のために必要な措置についての提言等を行う委員会。
(17) 奈良県教育振興会理事	平成 29 年 4 月 ～ 現在 に至る	青少年問題に対する県民の関心と理解を深め、青少年健全育成のための正しい世論の形成につとめることや人間形成における家庭の役割を再認識し、家庭教育のいっそうの改善・充実・振興をはかること、青少年教育に関する保護者並びに教職員の研修活動に協力し、その援助につとめることなどを目的に 1980 年(昭和 55 年) 4 月に設立された教育団体。事務局を奈良県総合庁舎内に置く。

(18) 公益財団法人日本教育公務員弘済会奈良支部 監査	平成 29 年 4 月 ～ 現 在 に至る	将来社会に貢献し得る有為の人材を育成するため、奈良 県在住の子のうち、優秀な学徒に対し奨学金を貸与、教 育一般、特に有益な研究に対する助成及び教育関係者の 福祉向上をはかり、もって奈良県における人材の養成並 びに社会教育文化の向上発展に寄与することを目的と する公益財団法人		
(19) 王寺町義務教育学校推進委員会 副委員長	平成 29 年 5 月 ～ 現 在 に至る	平成 34 年度開校予定の町立義務教育学校の教育課程、 校舎建築、その他学校運営全般について、町、町教育委 員会からの諮問を受け、それに対して協議し、検討を加 えて、提言等を行う委員会。		
(20) 三郷町産官学地域活性化連絡協議会常任委員	平成 30 年 5 月 ～ 現 在 に至る	三郷町の行政、商工会、大学等の学校が連携し、それぞ れの持ち味を生かしながら地域の活性化について協議 し、取り組みを進める委員会。		
4 その他				
特記事項なし				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文) 1「学校を地域に開く 情 報発信と施設開放」	単著	平成 28 年 9 月	平成 23 年度奈良県 小・中学校長会研究紀 要	作成・編集：奈良県小学校校長会・中学 校校長会 地域に向けた情報発信や学校施設の開 放、学校支援ボランティアの導入など開 かれた学校づくりが進んでいるが継続 するには、学校と地域の双方にとってウ ィン・ウィンの関係が必要である。子ど もの成長を願って協力し、地域に信頼さ れ愛される学校を目指し以下のことを 提案した。 (担当 p46～p48)
2 生活科と社会科の連携へ の一考察 ー防災教育を視点に一	共著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学研究紀 要 第 5 集	日本の国土は災害大国であるというリス クを述べるとともに、反面、居住する 人々の危機意識は低いことを内閣府の 調査を基に論じた。特に防災教育の目的 と義務教育の防災教育に果たす役割に ついて述べた。生活科から社会科への学 習指導要領の連続性と「自助・共助・公 助」の考えを位置づけ、現在の教科書を 分析した。生活科の学習は「自助」中心 に「共助」を学ぶことであり、社会科で は、「共助+公助」の公民的資質として 災害についての知識獲得意欲を中心に 据えている。また、命を守る一時避難に 有効な空間的認知の獲得に社会科は貢 献していることを論じた。 共著者：松田智子、山田均 担当：論文後半の社会科と防災教育との 関連の部分 (p146～p150) 単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 社会科指導における地域の教材化	単著	平成 28 年 12 月	日本人間教育学会	社会科は戦後の民主主義教育の中核をなすものとして設立された。その目的は青少年に社会生活を理解させ、青少年がより良い社会を創造する能力と意欲を持つことである。この目的を達成するためには、地域を学ぶことを大切にしなければならない。現在、次期学習指導要領の検討において「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」が重視されている。それは未来の創り手となるために必要な資質・能力の育成ということが重視されているからである。そこで小学校社会科教育において社会的事象を自分ごととして捉え、具体的に観察・調査を行うことが可能であり、背後の人の営みや願いが見える地域教材を活用することが極めて重要であると考える。そして、改めて子供たちに未来の創り手となるための資質・能力を育てる上で、地域を取り上げることの有効性について考察した。（p75～p83）
4 生活者としての基礎的な能力の育成をめざす生活科	共著	平成 29 年 11 月	日本人間教育学会大会第 3 回 研究発表要旨集	1989 年（平成元年）に生活科が誕生して間もなく 30 年を迎える。生活科設置は、小学校教育において、低学年児童がより主体的に学習に取り組み、その活動の過程で友達や地域の人々、自然の事物などと対話し、自分の生活について考えるとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付け、自立への基礎を養っていくことにその意義がある。これはまさに、今次の学習指導要領改訂の趣旨である「主体的・対話的で深い学び」が位置付けられていると言える。そこで、「主体的・対話的で深い学び」を成立させる要因として教師の支援に着目し、「学習内容を構造的にとらえる力」と「教材を開発する力」に視点を当てて具体的な実践を基に考察した。 共著者：中道奈都美、山田均（p14～p15）
5 「方向と現状の共通理解が学校を強くする」	単著	平成 29 年 3 月	別冊教職研修 教育開発研究所	いじめ・不登校などの課題や特別支援教育の充実への対応、貧困問題への対応など、学校の抱える課題が複雑化・多様化し、学校に求められる役割が拡大している。また、中教審からは「校長のリーダーシップの下、カリキュラム、日々の教育活動、学校の資源が一体的にマネジメントされ、教職員や学校内の多様な人材が、それぞれの専門性を生かして能力を発揮し、子供たちに必要な資質・能力を確実に身に付けさせることができる学校」いわゆる「チーム学校」の推進が答申されている。これまでから「鍋蓋型」と言われる学校組織のありようを改善し、校長のリーダーシップと情報等の教職員間の双方向的な共有し、組織文化としての同僚性等を重視する協働化による学校組織マネジメント図るため、学校通信の活用を通じた取組について報告した。（p60～p61）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6 社会科教育における見方・考え方とは 一見方・考え方を育てる社会科から見方・考え方を働かせる社会科へー	単著	平成 30 年 2 月	奈良学園大学紀要 第 8 集	平成 29 年 3 月告示の学習指導要領に示された「見方・考え方」の捉えの変容が社会科教育に関係する者に与えたインパクトは大きいものがある。平成 29 年 10 月に開催された全国社会科教育学会第 66 回研究大会では『「見方・考え方」論で社会科は変わるのか?』というシンポジウムが開催され、社会的な見方・考え方は社会科の教科としてのあり方を見直すものとなり得るのか議論している。そこで、社会科教育は「見方・考え方」の捉えとともに変容していくのか、考察した。(p109～p117)
7「これからの社会科教育～資質・能力を全面に～」	単著	平成 30 年 3 月	やまと (奈良県教育振興会)	平成 29 年 3 月に告示された次期小学校学習指導要領の社会科について、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る上でポイントなる点や改訂された主な内容について考察した。(p8～p11)
8 社会的な見方・考え方とは-小学校社会科における社会的事象の見方・考え方の一考察-	単著	平成 30 年 8 月	オンラインジャーナル「人間教育」第 1 巻	次期学習指導要領では、各教科等の目標や内容を資質・能力の三つの柱である「知識・技能」、「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に基づいて再整理され、資質・能力が明確になった。小学校社会科においては「社会的事象の見方・考え方」を働かせて、公民としての資質・能力の基礎を養うこととされている。そこで、実際の社会科の実践を通して、児童がどのように「社会的事象の見方・考え方」を働かせ、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考察し、社会に見られる課題や社会への関わり方を選択・判断することができるのか考察する。
8 義務教育学校についての一考察-王寺町が目指す義務教育学校の取組を通して-	単著	平成 30 年 9 月	オンラインジャーナル「人間教育」第 1 巻	2015 年に学校教育法が改正され、新たに小中一貫教育を行う義務教育学校が加えられた。このことは、戦後の教育改革によって設けられた「6・3 制」の小学校、中学校という義務教育制度の見直しにつながるものである。現在、奈良県王寺町では義務教育学校設置への取組を進めている。筆者はその推進委員の一人として参画している。そこで、「6・3 制」に見直しが行われてきた経緯や義務教育学校創設の背景について考察するとともに、王寺町の義務教育学校設置への取組の状況等について検証する。
9 生活者としての基礎的な能力の育成をめざす-社会とのかかわりへの気付きを生かした学習をめざして-	共著	平成 30 年 9 月	奈良学園大学紀要 第 9 集	本稿では「児童が『学習の主人公』になり得る教育機会」が保障されるべき生活科の学習において、教師がどのように支援することで、教科の特性を生かしつつ、その目標、特に「生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」2) ことを達成することにつながるのかということを王寺町立王寺南小学校中道教諭の実践をもとに考察していくこととする。 共著者：中道奈都美、山田均

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(その他) 特記事項なし				

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 川野 雅資

研 究 分 野		研究内容のキーワード
精神看護学		看護カウンセリングの会話分析
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 ロールプレイングを用いた授業の実践	平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	東京慈恵会医科大学医学部看護学科で精神看護学教育にロールプレイングをもちいたコミュニケーション技術教育を行った。後に、模擬患者をライフプランニングセンターに依頼し、模擬患者によるコミュニケーション技術教育に発展させた。
2 作成した教科書、教材 精神看護学Ⅰ 精神保健学 第5版	平成 22 年 2 月	「精神保健」を現在の視点でとらえ、今の社会状況に即した内容に変更した。「看護師のメンタルヘルス」、「地域精神保健活動」、「リエゾン精神看護」の内容を充実させ、新しく「倫理」の章を設けた。精神保健の基本的な考え方と、その具体的な活用を解説し、さらに臨床・社会の場での各々のメンタルヘルスを事例を入れて解説。看護師国家試験出題基準の項目を網羅している。全 300 頁 編集：吉松和哉、小泉典章、<u>川野雅資</u> 共著者：揚野裕紀子、天谷真奈美、雨宮洋子、荒木田美香子、宇佐美しおり、奥山則子、勝山せつよ、<u>川野雅資</u>、小泉典章、近藤浩子、立花良之、田中隆志、橋本佳美、早川圭子、堀川直史、前田日登美、松本功、武藤隆、山本麻美、山元直樹、吉川領一、吉松和哉 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 156-137 心理・社会的反応
精神看護学Ⅱ 精神臨床看護学 第5版	平成 22 年 2 月	精神医療の実際を目に見える様に表現し、最新の内容を網羅し、国家試験の出題基準に対応できるように企画した。第Ⅱ章でし、精神を病む人の理解と対応として入院から退院までの患者と家族の状態と看護を詳説した。全 446 頁。 編集：<u>川野雅資</u> 共著者：アリマ美乃里、石川幸代、石川純子、一ノ山隆

精神看護学Ⅰ 精神保健学 第6版	司、宇都宮智、大谷恵、岡崎祐士、小口万里、小熊朝子、小澤浩、河岸光子、<u>川野雅資</u>、岸珠江、葛岡千郁子、国生拓子、鈴木啓子、関井愛紀子、田島治、中島香澄、滑川さやか、長谷川麻紀子、八田勘司、古谷圭吾、堀川直史、牧岡あずさ、明神一浩、森千鶴、藪下祐一郎、山根美智子 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 3-11 精神臨床看護の考え方 pp. 13-48 精神を病む人の理解と対応 共著：宇都宮智、川岸光子、岸珠江、滑川さやか、古谷圭吾、藪下祐一郎 pp. 65-70 人間関係論 pp. 86-95 日常生活援助 pp. 103-107 ロールプレイング pp. 108-111 面接 pp. 112-115 カウンセリング pp. 137-156 精神看護の看護過程 共著 石川幸代、石川純子 pp. 278-285 症状アセスメントとケアプラン 幻覚、妄想の患者と看護 pp. 286-288 せん妄の患者の看護 pp. 401-403 <事例>幻覚・妄想の急性期 pp. 406-407 <事例>興奮状態の急性期 pp. 421-425 精神看護学の今後の展望 平成 27 年 3 月 精神看護学の考え方を明確にし、新たにメンタルウェルネスを重要な視点に置いて、心が病むことから生きる力が湧くことを重視して企画した。更に、精神保健医療福祉の法制度に関して内容を豊かにした。全 332 頁編集：吉松和哉、小泉典章、<u>川野雅資</u>：秋山剛、揚野裕紀子、荒木田美香子、安藤満代、大澤栄実、大塚耕太郎、大野美香、景山隆之、梶井文子、上別府圭子、<u>川野雅資</u>、久保恭子、栗原佳代子、小泉典章、後藤雅博、近藤浩子、清水徹男、鈴木幸子、曾谷貴子、竹島正浩、中筋美子、野中英雄、橋本理恵子、服部希恵、半場有希子、藤田潔、前野有佳里、松本功、武藤隆、吉松和哉本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。pp. 1-3 序 精神看護学の考え方 pp. 70-75 第2章 リエゾン精神看護 2. 病気と心理社会的反応 pp. 126-130 看護職員の精神の健康
-------------------------	---

精神看護学Ⅱ 精神臨床保健学 第6版	平成 27 年 3 月	国家試験の動向を配慮し、看護過程の内容を縮小して、最新のリハビリ志向を重視した書籍に企画した。全 378 頁 編集：川野雅資 共著者：石川幸代、一ノ山隆司、伊藤桂子、宇都宮智、大西恵、岡崎祐士、小熊朝子、河岸光子、川野雅資、岸珠江、木田ゆかり、近藤浩子、下里誠二、鈴木啓子、関井愛紀子、多喜多恵子、田島治、土屋朋子、富田元、鳥山美鈴、永井翔、中島香澄、中島篤正、滑川さやか、萩典子、藤沢希美、古谷圭吾、堀川直史、松枝美智子、森千鶴、柳田崇姉、藪下祐一郎 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp1-8 序章 精神臨床看護の考え方 pp. 9-19 第 1 章 精神看護援助の基本と技術 患者—看護師関係 pp. 31-43 セルフケアの援助 pp. 44-53 精神看護の看護過程 pp. 54-60 生きる強さと力 pp. 106-108 第 2 章 精神疾患の理解と治療、精神科作業療法 pp. 171-183 第 4 章 入院から社会生活の継続までの看護 pp. 203-222 急性期から回復期、慢性期の看護 pp. 224-232 第 5 章 症状アセスメントとケアプラン 幻覚、妄想の患者と看護 pp. 232-235 せん妄の患者の看護 pp. 251-257 引きこもり状態の患者の看護 pp. 258-267 操作をする患者の看護 pp. 353-358 精神看護学の今後の展望
3 教育上の能力に関する大学等の評価 東京慈恵会医科大学大学院	平成 20 年 8 月	大学設置・学校法人審議会教員資格審査にて東京慈恵会医科大学大学院医学研究科看護学専攻（修士課程）の教授として判定可 担当科目：「コンサルテーション論」「国際医療論」「地域連携保健学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「地域連携保健学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」M可判定 「看護学特別研究Ⅰ・Ⅱ」M○合判定

山陽学園大学	平成 24 年 9 月	大学設置・学校法人審議会教員資格審査にて山陽学園大学大学院看護学研究科精神看護学 CNS コースの教授として判定可 担当科目：「看護理論」「コンサルテーション論」「国際医療論」「精神看護学特論Ⅰ」「精神看護学特論Ⅱ」「精神看護学特論Ⅲ」「精神看護学特論Ⅳ」「精神看護学特論Ⅴ」「精神看護学特論Ⅵ」「精神看護学演習Ⅰ」「精神看護学演習Ⅱ」「精神看護学演習Ⅲ」「精神看護学演習Ⅳ」「精神看護学実習」M可判定 「課題研究」MO合判定
奈良学園大学	平成 29 年 2 月	大学設置・学校法人審議会教員資格審査にて奈良学園大学保健医療学部看護学科の教授として判定可 担当科目：「精神看護学概論」「精神看護学援助論」「卒業研究Ⅱ」「精神看護学実習」「統合看護学実習」
奈良学園大学大学院（平成 30 年 4 月開設）	平成 29 年 4-5 月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において奈良学園大学大学院看護学研究科看護学専攻（修士課程）専任教授 「国際医療特論」「看護倫理特論」「精神看護学特論Ⅰ（歴史・法制度）」「精神看護学特論Ⅱ（精神・身体状態の評価）」「精神看護学特論Ⅲ（精神科治療技法）」「精神看護学演習Ⅰ（精神科治療技法）」「精神看護学実習 アセスメント」「看護研究特論」「コンサルテーション論」「看護理論特論」「精神看護学特論Ⅳ（精神看護理論、援助技法）」「地域移行支援精神看護学特論」「急性期精神看護学特論」「精神看護学演習Ⅱ（精神看護理論、援助技法）」「精神看護専門看護師役割実習」「直接ケア実習」「上級直接ケア実習」は M 可、「課題研究」「特別研究」は MO 合の資格有りと判定
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター 看護研究 指導 2) 東京都立大塚病院 看護部 看護科 基礎コース レベルⅡ「コミュニケーション」4 時間 講師 3) 一般社団法人 上尾中央医科グループ協議会キャ リアサポートセンター 認定看護管理者（ファース トレベル） 講師	平成 18 年 6 月 から現 在 平成 22 年 から 現在 平成 23 年 7 月 から現 在	臨床看護師の看護研究指導、看護研究発表会参加。年間 6 回 臨床看護師の対人関係技術をロールプレイングで学習 する。年間 2 回、3 時間 人材育成論、15 時間、科目レポート責任者

4) 東京都福祉保健財団公益財団法人 認定看護管理者(ファーストレベル) 運営委員会 委員長、講師	平成 24 年 6 月から現在	運営委員長として、議事の運営にあたる。講義は、看護サービス提供論 9 時間とディベート演習 6 時間、科目レポート責任者
5) 独立行政法人 国立病院機構 神奈川病院 看護研究 指導	平成 24 年 6 月から現在	臨床看護師の看護研究指導、看護研究発表会参加。年間 4 回
6) 東京女子医科大学 女性医療人キャリア形成センター 認定看護管理者(ファーストレベル) 教育委員会 委員長、講師	平成 27 年 5 月から現在	教育委員会委員長として、議事の運営にあたる。講義、看護サービス提供論 9 時間、ディベート演習 6 時間
5 その他 1) 東京慈恵会医科大学大学院 修士論文指導	平成 23 年 3 月 平成 24 年 3 月 平成 25 年 3 月 平成 25 年 3 月 平成 26 年 3 月	指導論文題目『思春期青年期精神障害者の隊員支援における看護師の判断―地域連携の視点から―』 指導論文題目『子どもを児童思春期精神科病院に入院させた母の体験』 指導論文題目『精神疾患を有する性同一性障害患者の精神科病棟入院体験の語り』 指導論文題目『ひきこもり支援者が語る地域連携の現状』 指導論文題目『精神科デイケア利用者におけるデイケアの意味』
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 1) 看護師	昭和 51 年 5 月 12 日	厚生省 2090 号
2) 日本欧州共通サイコセラピー資格認定	平成 17 年 12 月 1 日	日本サイコセラピー学会 066 号
2 特許等 該当なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 看護学実践 -Science of Nursing- 在宅看護論	共著	平成 20 年 4 月	PILAR PRESS	カリキュラム改正に伴い在宅看護論という新たな領域を地域看護学とは別の視点で作成することを意図し、在宅看護論の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全 347 頁 監修： <u>川野雅資</u> 編集：伊藤千代子 共著者：明石悦子、伊藤千代子、黒田淳子、小林文子、山口直美 本人担当部分：本書の企画、編集者への助言、最終的な文章の校正を行った。
地域連携精神看護学研究 実践 英・米・日 3 カ国の地域精神看護	共著	平成 20 年 12 月	第 1 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	英国・米国ならびに日本における関係者の考え方、手法の事例発表の中から、この分野に携わる関係者の質の向上に資する実践例を紹介し、地域が精神障害者と共に成長しあう社会を形成する方法を明する。 編 著： <u>川野雅資</u> 共著者： <u>川野雅資</u> 、長岡和、一ノ山隆司、村上満、舟崎起代子、上野栄一、Michael Galbraith, Joann Hopkins, Mindy reynolds, Ramona Chinn, Michael coffey, Ben Hannigan, 前川早苗、岩佐貴史、栗田弘二、中村友喜、濱幸伸、原田雅典、薬師寺正美、明神一浩、吉田通子、青柳繁子、宍倉正子、町田正信、萩典子、高村光幸、横山和仁、牧岡あずさ、揚野裕紀子、日下知子、曾谷貴子、清塚厚子、久保田文雄、古澤圭、関井愛紀子、石川幸代 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。下記を単独で執筆した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
エビデンスに基づく精神看護看護ケア関連図『	共著	平成 20 年 12 月	中央法規出版	pp. 2-3 序文 pp. 6-8 実践からみた地域連携精神看護学 pp. 17-26 地域連携精神看護学の実際 pp. 97-103 精神科病院における長期入院患者に対する退院支援の取り組み 精神科看護の臨床で出会う代表的な 15 の症状と 9 の疾患のケア、4 の治療についてエビデンスに基づいて関連図を作成した。定義と具体的な症状、成り立ち、心理社会的反応、診断・検査、治療、看護の観察ポイント、治療段階に基づいた看護ケアを詳解する。全 243 頁 編集：<u>川野雅資</u> 共著者：浅沼瞳、石川幸代、石川康博、一ノ山隆司、伊藤圭子、猪俣健一、上野栄一、宇都宮智、大迫哲也、大迫允江、<u>川野雅資</u>、北野進、小西奈美、下里誠二、高岡裕美、高橋寛光、高間さとみ、瀧口宗宏、田中留伊、土谷朋子、福山なおみ、藤森里実、舟崎起代子、松本賢哉、明神一浩、村上満、森千鶴、山田洋 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 2-3 はじめに pp. 10-15 妄想 pp. 16-25 幻覚 pp. 42-49 強迫 pp. 162-167 パニック障害 pp. 115 自傷行為 pp. 115 自我防衛機制 pp. 119 機能の全体的評価尺度 pp. 235 退院支援 pp. 236 地域連携・継続ケア

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
現代看護の探求者たち一人の思想ー	共著	平成 21 年 10 月	日本看護協会出版会	ジーン・ワトソン博士から直接学んだこと、コロラド大学看護学部を訪問してその資料から学んだこと、これまでの翻訳とワトソン先生の講演の通訳を通して学んだことをライフヒストリーと学問の視点からまとめた。全 296 頁共著者：小林富美栄、樋口康子、小玉香津子、高橋絹子、荒井蝶子、兼松百合子、千野静香、稲田八重子、池田明子、藤枝知子、小野寺杜紀、舟島なをみ、松本光子、井上智子、 <u>川野雅資</u> 本人担当部分：pp. 251-281 ジーン・ワトソン Jean Watson-21 世紀の看護論ー
地域連携精神看護学研究実践 英・米・日 3 カ国の地域精神看護	共著	平成 21 年 12 月	世論時報社	英国・米国ならびに日本における関係者の考え方、手法の事例発表の中から、この分野携わる関係者の質の向上に資する実践例を紹介し、地域が精神障害者と共に成長しあう社会を形成する方法を明する。全 159 頁 編 著： <u>川野雅資</u> 共著者： <u>川野雅資</u> 、長岡和、一ノ山隆司、村上満、舟崎起代子、上野栄一、Michael Galbraith, Joann Hopkins, Mindy reynolds, Ramona Chinn, Michael coffey, Ben Hannigan, 前川早苗、岩佐貴史、栗田弘二、中村友喜、濱幸伸、原田雅典、薬師寺正美、明神一浩、吉田通子、青柳繁子、宍倉正子、町田正信、萩典子、高村光幸、横山和仁、牧岡あずさ、揚野裕紀子、日下知子、曾谷貴子、清塚厚子、久保田文雄、古澤圭、関井愛紀子、石川幸代 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 2-3 序文 pp. 6-8 実践からみた地域連携精神看護学 pp. 17-26 地域連携精神看護学の実際 pp. 97-103 精神科病院における長期入院患者に対する退院支援の取り組み

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
精神看護学Ⅰ 精神保健学第5版	共著	平成 22 年 2 月	ヌーヴェルヒロカワ	「精神保健」を現在の視点でとらえ，今の社会状況に即した内容に変更した。 「看護師のメンタルヘルス」，「地域精神保健活動」，「リエゾン精神看護」の内容を充実させ，新しく「倫理」の章を設けた。精神保健の基本的な考え方と，その具体的な活用を解説し，さらに臨床・社会の場での各々のメンタルヘルスを事例を入れて解説。看護師国家試験出題基準の項目を網羅している。全 300 頁 編集：吉松和哉、小泉典章、<u>川野雅資</u> 共著者：揚野裕紀子、天谷真奈美、雨宮洋子、荒木田美香子、宇佐美しおり、奥山則子、勝山せつよ、<u>川野雅資</u>、小泉典章、近藤浩子、立花良之、田中隆志、橋本佳美、早川圭子、堀川直史、前田日登美、松本功、武藤隆、山本麻美、山元直樹、吉川領一、吉松和哉 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 156-137 心理・社会的反応
精神看護学Ⅱ 精神臨床看護学 第5版	共著	平成 22 年 2 月	ヌーヴェルヒロカワ	第5版の改訂に伴い、精神医療の変遷に伴う看護の実際を目に見えるように表現し、最新の内容を網羅すること、国家試験の出題基準を意識し、試験で出題された問題の解答が役立つように項目の再編と内容の刷新をはかった。全 446 頁 編集：<u>川野雅資</u> 共著者：アリマ美乃里、石川幸代、石川純子、一ノ山隆司、宇都宮智、大谷恵、岡崎祐士、小口万里、小熊朝子、小澤浩、河岸光子、<u>川野雅資</u>、岸珠江、葛岡千都子、国生拓子、鈴木啓子、関井愛紀子、田島治、中島香澄、滑川さやか、八田勘司、藤田由美、古谷圭吾、堀川直史、牧岡あずさ、明神一浩、森千鶴、藪下祐一郎、山根美智子 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
新看護観察のキーポイントシリーズ精神科Ⅰ	共著	平成 23 年 4 月	中央法規出版	pp3-12 精神臨床看護学 精神看護の考え方 pp. 13-48 精神を病む人の理解と対応 pp. 65-70 精神看護に用いる理論、人間関係論 pp. 85-95 日常生活援助 pp. 103-115 活用する技法 pp. 137-156 精神看護の看護過程 pp. 278-285 幻覚、妄想の患者と看護 pp. 286-289 せん妄の患者の看護 pp. 401-404 事例 幻覚・妄想の急性期 pp. 421-426 精神看護学の今後の展望 観察のための具体的な方法、観察したことが何を意味するのか、どの程度の危険を予測できるか、そしてどう対応すべきかといったナースにとっての実践上の問題解決方法を掲載した。初学者がイメージつきやすいように、実際の場面の写真とイラストを多用した。全 347 頁 編集：川野雅資 共著者：相原則章、朝倉真奈美、阿部貴子、一ノ山隆司、猪野美晴、今中和恵、岩崎三津子、浦川加代子、大須賀美紀、大谷恵、大場信子、小笠原寿枝、鬼塚愛彦、蔭山正子、川野雅資、岸珠江、北島謙吾、倉田みゆき、小瀬古隆、櫻井尚子、鈴木啓子、鈴木利枝、田口敦子、土田幸子、徳永勲、中川志穂、中村富美、中山千代子、西川恵子、平井元子、藤野ヤヨイ、前川早苗、真玉珠美、村上有加利、村松仁、望月由香、藪下祐一郎、山田巧、 下記内容を記述した。pp. ii - iii 編集者序文、pp. 35-42 精神面、pp. 140-148 拒食、pp. 149-155 拒薬、pp. 296-306 訪問看護

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
新看護観察のキーポイントシリーズ精神科Ⅱ	共著	平成 23 年 4 月	中央法規出版	上記と同様の編集方針に基づき、看護観察に重点を置き、最新の知見から構成を改変した新版。全 277 頁 編 集：川野雅資 共著者：朝倉真奈美、内野博子、浦川加代子、大迫哲也、大沢美幸、大谷恵、鬼塚愛彦、川野雅資、楠本重信、小瀬古隆、斎藤百合枝、鈴木和代、関井愛紀子、関根理絵、立花睦子、玉城久江、辻脇邦彦、土谷朋子、塘祐樹、豊田美穂子、東和弘、人見加津子、福田浩美、堀切晶子、前川早苗、松枝美智子、松本文彦、森千鶴、若浦さおり 本人担当部分 pp. ii-iii 編集者序文 pp. 7-13 急性期 pp. 75-85 摂食障害 pp. 264-268 インフォームド・コンセント
看護実践研究・学会発表ポイントQ & A 上巻 研究テーマの選択から学会発表へ	共著	平成 24 年 5 月	日本看護協会出版会	看護研究を始めて行い始めて学会発表をする看護職者が理解しやすいように執筆した。全 72 頁 編集：日本看護協会 著者：洪愛子、荒木暁子、根岸准子、梶井文子、佐藤みつ子、川野雅資、渋谷美香、眞弓浩子、向田明子、橋目智子、小川有貴、佐藤智恵 序章 利益相反について Q10 利益相反とはなんですか?(pp. 24-25) 第2章 演題の採択が決まるまで Q21 査読者はどんなところを見ているのですか?(pp. 41-43)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護実践研究・学会発表ポ イントQ & A 下巻 研 究テーマの選択から学会 発表へ	共著	平成 24 年 5 月	日本看護協会出版会	始めて発表した看護研究を論文に記述 する看護職者が理解しやすいように執筆した。全 68 頁 編集：日本看護協会 著者：洪愛子、荒木暁子、根岸准子、河 野あゆみ、国府浩子、小寺栄子、中村美 鈴、水戸優子、渋谷美香、梶井文子、佐 藤みつ子、 <u>川野雅資</u> 、渋谷美香、眞弓浩 子、向田明子、橋目智子、佐藤智恵 序章 論文を書き始める前に Q1 自分の書いた論文は、他の人の看護実 践に役立つのでしょうか?(pp. 2-3) Q2 査読者はどんなところをみているの ですか?(pp. 4-5) Q3 過去の優秀論文はどこがよかったの ですか?(pp. 6-8)
『精神症状のアセスメン トとケアプランナー32 の症 状とエビデンス集』	共著	平成 24 年 11 月	メヂカルフレンド社	エビデンスに基づく精神看護のケアが 重要視されている。本書は、「精神障害 者のクリニカルケア 症状の特徴とケ アプラン」の著書をエビデンスを元に看 護が展開できるように企画して新たに 作成した。全 366 頁 編 集： <u>川野雅資</u> 共著者： <u>川野雅資</u> 、横井志保、杉原正美、 佐々木章倫、高橋寛光、山本祐子、島崎 みゆき、児野愛未、大柄昭子、樋田香織、 熊地美枝、佐々木愛、斎藤香菜香、北野 進、大嶺靖子、畑由美子、緑川綾、篠木 由美、煤賀隆宏、塩月玲奈、荒川好美、 新澤安江、竹花令子、柳田崇姉、石川博 康、西田多美子、馬場華奈巳、岩切真砂 子、高木明子、安田妙子、片山典子、拓 殖三昌、佐藤雅美、一ノ山隆司、安永薫 梨、松枝美智子、鈴木啓子、吉野淳一、 曾谷貴子、揚野裕紀子、宮野香里、伊礼 優、浅井初、平上久美子、坂田志保路 本人担当部分：本書の企画、すべての文 章の校正を行った。 〔序論〕(pp. 1-5)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
コンサルテーションを学ぶ	単著	平成 25 年 1 月	クオリティケア	「幻覚」(pp. 6-13) 「うつ」(pp. 58-66) 「身体化」(pp. 165-171) 本書は、コンサルテーションの大切な機能は、コンサルティの人間的な潜在能力を促進し、一人ひとりのコンサルティ個々の中に自己回復の能力を醸成することであることに主眼を置き、その内容を9章に構成して、コンサルテーションの開拓者であるカプランとリピットとリピットの原著を読み込み、又、筆者の実線体験をもとに執筆した。全 50 頁
精神看護学 I 精神保健学 第6版	共著	平成 27 年 3 月	ヌーヴェルヒロカワ	精神看護学の考え方を明確にし、新たにメンタルウェルネスを重要な視点に置いて、心が病むことから生きる力が湧くことを重視して企画した。更に、精神保健医療福祉の法制度に関して内容を豊かにした。全 332 頁 編集：吉松和哉、小泉典章、<u>川野雅資</u> 共著者：秋山剛、揚野裕紀子、荒木田美香子、安藤満代、大澤栄実、大塚耕太郎、大野美香、景山隆之、梶井文子、上別府圭子、<u>川野雅資</u>、久保恭子、栗原佳代子、小泉典章、後藤雅博、近藤浩子、清水徹男、鈴木幸子、曾谷貴子、竹島正浩、中筋美子、野中英雄、橋本理恵子、服部希恵、半場有希子、藤田潔、前野有佳里、松本功、武藤隆、吉松和哉 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 1-3 序 精神看護学の考え方 pp70-75 第 2 章 リエゾン精神看護 2. 病気と心理社会的反応 pp. 126-130 看護職員の精神の健康

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
精神看護学Ⅱ 精神臨床 看護学 第6版	共著	平成 27 年 3 月	ヌーヴェルヒロカワ	国家試験の動向を配慮し、看護過程の内容を縮小して、最新のリカバリ志向を重視した書籍に企画した。全 378 頁 編集：川野雅資 共著者：石川幸代、一ノ山隆司、伊藤桂子、宇都宮智、大西恵、岡崎祐土、小熊朝子、河岸光子、川野雅資、岸珠江、木田ゆかり、近藤浩子、下里誠二、鈴木啓子、関井愛紀子、茅喜多恵子、田島治、土屋朋子、富田元、鳥山美鈴、永井翔、中島香澄、中島篤正、滑川さやか、萩典子、藤沢希美、古谷圭吾、堀川直史、松枝美智子、森千鶴、柳田崇姉、藪下祐一郎 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp1-8 序章 精神臨床看護の考え方 pp. 9-19 第 1 章 精神看護援助の基本と技術 患者—看護師関係 pp. 31-43 セルフケアの援助 pp. 44-53 精神看護の看護過程 pp. 54-60 生きる強さと力 pp. 106-108 第 2 章 精神疾患の理解と治療、精神科作業療法 pp. 171-183 第 4 章 入院から社会生活の継続までの看護 pp. 203-222 急性期から回復期、慢性期の看護 pp. 224-232 第 5 章 症状アセスメントとケアプラン 幻覚、妄想の患者と看護 pp232-235 せん妄の患者の看護 pp251-257 引きこもり状態の患者の看護 pp. 258-267 操作をする患者の看護 pp. 353-358 精神看護学の今後の展望

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護学実践-Science of Nursing-看護研究	共著	平成 27 年 3 月	PILAR PRESS	全 102 頁 監修：川野雅資 共著者：安藤満代、一ノ山隆司、伊藤桂子、辻川真弓 看護学生のように看護研究の初学者からある程度看護研究に精通した看護師が参考になるように企画した。本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 P8-10 看護研究の開始 pp. 34-36 フォーカスグループインタビュー pp. 38-40 会話分析 pp. 40-44 介入研究 pp. 50-55 調査の実施 pp. 97-98 研究の倫理的配慮 利益相反
知る・活かす看護管理学	共著	平成 27 年 5 月	PILAR PRESS	看護管理学の基本が学習できる教科書を企画した。全 181 頁 監修：川野雅資、網野寛子 編集：黒田美喜子 共著者：賀沢弥貴、菊池睦、小坂智恵子、高澤喜代美、田代麻里江、吉田愛子、細野百合子、前田久代、山佐瞳、山田聡子 本人担当部分：本書の企画、文章の校正を行った

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護学実践 -Science of Nursing- 精神看護学	共著	平成 28 年 2 月	PILAR PRESS	本シリーズは、元来コンパクトな教科書を意図していたが、網羅すべき内容が多くなり、十分な内容を記述することに企画方針を変更した。精神看護学の内容は、DSM-5 を元に技術することにした。 全 259 頁 監修・編集：<u>川野雅資</u> 共著者：間雅子、揚野裕紀子、宇都宮智、<u>川野雅資</u>、岸清次、北野進、坂田志保路、高橋寛光、高間さとみ、多喜田恵子、塘祐樹、萩典子、佐々木郁子、服部朝代、平松悦子、本間寿博、前川早苗、松枝美智子、松下年子、宮崎初、宮野香理、緑川綾、安永薫梨 担当部分：本書の企画、文章の校正を行った。下記を単独で執筆した。 pp. 10-32 これからの精神看護学 pp. 45-47 ヒューマニスティックナーシング pp. 48-50 ヒューマンケアリング pp. 50-59 看護過程 pp. 63-67 看護カウンセリング pp. 118-120 退院を困難にしている要因
コンサルテーションを学ぶ 改訂版	単著	平成 29 年 2 月	クオリティケア	本書は、平成 25 年の初版を改訂したものである。初版のコンサルテーションの大切な機能は、コンサルティの人間的な潜在能力を促進し、一人ひとりのコンサルティ個々の中に自己回復の能力を醸成することであることに主眼を置き、その内容を 9 章に構成して、コンサルテーションの開拓者であるカプランとリピットとリピットの原著を読み込み、又、筆者の実線体験をもとに執筆した。と言う視点に、この 4 年間に実施したコンサルテーションの内容を追記し、初版の表現不足を補った。全 50 頁

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
精神看護キーワード	共著	平成 29 年 5 月	日本看護協会出版会	精神看護領域で称する用語を多職種専門家が正確に理解し、共通言語となるために頻出用語の解説をエビデンスに基づいて記述することを企画した。用語の抽出を行い、編者の選出・依頼をした。すべての文章の校正を行った。又、「女性管理職のメンタルヘルス」を除き下記を単独で執筆した。全 239 頁 pp. 14-15 EE(感情表出)， pp. 32-33 カウンセリング， pp. 48-49 共感， pp. 84-85 コンサルテーション， pp. 96-97 自殺， pp. 112-113 女性管理職のメンタルヘルス， pp. 116-116 身体表現性障害， pp. 122-123 スーパービジョン， pp. 144-145 性同一性障害， pp. 148-149 せん妄， pp. 158-159 地域移行機能強化病棟， pp. 178-179 トラウマインフォームドケア， pp. 182-183 人間関係論(日本看護協会出版会) 総編集：川野雅資 編集：安藤満代、下里誠二、萩典子、森千鶴 共著者：安藤愛、安藤満代、池田智、石川博康、伊藤桂子、大熊恵子、太平肇子、川野雅資、木戸芳史、熊本勝治、下里誠二、菅原裕美、瀬戸屋希、高橋寛光、高橋理沙、多喜田恵子、田中留伊、谷多江子、中村裕美、萩典子、八谷美絵、益子友恵、松枝美智子、松本敦子、水野正延、宮崎初、森千鶴、山本智之

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) うつ病患者への職場復帰へのサイコセラピー（査読付）	共著	平成 20 年 12 月	日本サイコセラピー学会 雑誌 9 巻 1 号 pp. 103-106	共著者：川野雅資、片山典子 30 代半ばのメランコリー親和型うつ病男性に、精神科医の薬物療法に併用して、サイコセラピーを実施した。本人担当分：サイコセラピーの実施、資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
幻聴のある患者に対する心理教育的アプローチの方法（査読付）	共著	平成 21 年 3 月	富山大学看護学会誌 8 巻 2 号 pp. 33-40	共著者：明神 一浩、一ノ山 隆司、上野 栄一、舟崎 起代子、川野 雅資 本研究は、幻聴のある患者に対して、心理教育的アプローチの介入が幻聴に苛む患者の自己対処能力の獲得によって、幻聴の軽減にどのように影響したかについて、その効果を検証する目的で研究を行った。本人担当分：データの分析・考察・文章の校閲を行った。
幻聴に苛む患者の自己対処行動を支えるための心理教育的アプローチ（査読付）	共著	平成 21 年 3 月	共創福祉 4(1)1-10.	一ノ山隆司、村上満、舟崎起代子、牧野かおる、明神一浩、上野栄一、川野雅資 本人担当分：データの分析・考察・文章の校閲を行った。本研究は、統合失調の患者が幻聴で苦しんでいることを心理教育の手法を用いて対処行動を獲得した経過を分析した。
地域で生活する精神障がい者を支える家族の思い（査読付）	共著	平成 22 年 1 月	日本看護学会論文集 精神看護 40 号 pp. 143-145	共著者：一ノ山 隆司、村上 満、舟崎 起代子、川野 雅資 地域で生活する精神障害者の家族 273 名にアンケートを行い、「日頃から気になっていること」について自由記載してもらい、その内容を質的帰納的に分析した。本人担当分：データの分析・考察・文章の校閲を行った。
精神臨床看護師が捉える急性期看護における患者の暴力行為の予見要因（査読付）	共著	平成 22 年 7 月	日本看護研究学会 雑誌 33 巻 3 号， pp. 146	明神一浩、一ノ山隆司、村上満、舟崎起代子、上野栄一、川野雅資 本人担当分：資料の分析・考察・文章の校閲を行った。精神科の臨床看護師が患者の暴力行為を予期する時の視点を調査から明らかにした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
うつ病からの回復に当事者の力を発揮するサイコセラピーの考察（査読付）	共著	平成 23 年 12 月	日本サイコセラピー学会 雑誌 12(1)， pp. 69-76	共著者：川野雅資、片山典子、石川純子 本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。サイコセラピーを受けているうつ病の患者がサイコセラピーの影響と共に自己の力を発揮して回復していくプロセスを分析した。
精神障害者が農村地域で暮らす生活に関する語りの分析（査読付）	共著	平成 23 年 9 月	山陽看護学研究会 山陽看護学研究会誌 Vol. 2 No. 1 2012 (pp. 13)	揚野裕紀子、川野雅資、曾谷貴子、福川京子、中田涼子 本人担当分：研究の企画、資料の分析・考察・文章の執筆を行った。0 県の農村地域に暮らす精神障害者にインタビューを行い、生活する上で感じていることを明らかにし、かごの役割を明確にした。
会長講演 「精神科早期介入と連携の実際と課題」（査読付）	単著	平成 24 年 2 月	日本地域連携精神看護学研究会 会誌 第 3 巻 pp. 1-2	事例に基づいた地域の立場からみた早期治療における連携の実際の報告、課題の明確化と今後の方策提案。
タイ王国の地域連携精神看護－タイにおける精神保健福祉と農村部の現状報告（査読付）	共著	平成 24 年 2 月	日本地域連携精神看護学研究会 会誌 第 3 巻 pp. 39-46	共著者：揚野裕紀子、中田涼子、片山典子、川野雅資、櫻井尚子、塩月玲奈、朝倉真奈美 退院後の患者は全員が働いていると言うタイにおける、精神科病院、医療機関、医療従事者、精神障がい者の生活を支える制度、法律、予算、農村部に暮らす精神障がい者の生活から、地域精神医療の実際を学ぶことを目的に視察を実施。精神保健福祉と農村部の現状を報告した。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメント退院準備用紙の作成から活用まで（査読付）	共著	平成 24 年 2 月	日本地域連携精神看護学研究会 会誌 第 3 巻 pp. 47-53	共著者：寺田祐治、一ノ山隆司、舟崎起代子、上野栄一、川野雅資 患者と看護師が共同で作成した退院準備用紙を活用し、統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメントの維持・促進を支える援助過程で、患者の自己および自己を取り巻く現実に関する認識が改善されたかを明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題（査読付）	共著	平成 24 年 2 月	日本地域連携 精神看護学研究会 会誌 第 3 巻 pp. 82-87	共著者：松浦純平、一ノ山隆司、上野栄一、京谷和哉、植木健康、 <u>川野雅資</u> 自記式無記名質問紙調査を用いて、A 県内に本拠地があるがん患者会員が考えるサロンに対する認識および現状を明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
長期入院患者の退院支援に関する看護師の意識調査－看護師へのインタビュー分析からの課題－（査読付）	共著	平成 24 年 2 月	日本地域連携 精神看護学研究会 会誌 第 3 巻 pp. 94-100	明神一浩、前川哲弥、森下憂一、一ノ山隆司、上野栄一、 <u>川野雅資</u> 精神科看護歴が 10 年以上ある看護師にインタビューを実施し、質的帰納的記述研究を行い、長期入院患者の退院支援において看護師が抱える課題を明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
会長講演「グローバルに学んで、ローカルに展開する」（査読付）	単著	平成 24 年 7 月	日本地域連携 精神看護学研究会 会誌 第 2 巻 pp. 1-4	地域連携を推進するには、海外の状況も見ながらグローバルな視点を持つのと同様にその地域の特性を把握するローカルな視点が重要であることを解説する。
神奈川県における児童、青年精神医療の連携で看護師の役割を考える（査読付）	共著	平成 24 年 7 月	日本地域連携 精神看護学研究会 会誌 第 2 巻 pp. 71-77	編 者： <u>川野雅資</u> 編集協力者：片山典子 著 者：佐々木郁子、 <u>川野雅資</u> 、山根美智子、久保恭子、アリマ美乃里、佐藤和子、鈴木実、田崎千恵子、土谷朋子、寺島和子、萩典子、一ノ山隆司、村上満 神奈川県における児童、青年期精神医療の実態と、連携形成に関する調査を行い、現状を明確にした。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
ストレングスモデルに基づく職業訓練を受けた精神障害者の心理面と必要とされる支援（査読付）	共著	平成 24 年 9 月	聖マリア学院大学 紀要 3, pp. 55-62	著者：安藤満代、 <u>川野雅資</u> 本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。職業訓練を受けた精神障害者の心理的側面でレジリエンスに影響する支援者の役割を調査から明らかにした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護が研究する意味	単著	平成 24 年 12 月	山陽看護学研究会誌 2(1), pp. 4-9	看護において、感謝が研究することの意味を真理の探索以上のものがあることを概説した。
カウンセリングの治療的意味に関する研究 統合失調症患者のカウンセリングにおける治療関係と認知の変容への働きかけ (査読付)	共著	平成 25 年 2 月	精神看護におけるディスコース分析 研究会誌 第 1 巻 pp. 22-31	伊藤佳子、 <u>川野雅資</u> カウンセリングの場面を録音・録画し、クライアントの非合理的信念の変容は、セラピストのどのような介入によって促進されているのかを明らかにし、継続するカウンセリングの中でセラピストとクライアントの間にはどのような相互作用があるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失聴症患者の会話分析－妄想に対する治療的かかわりに焦点を当てて－第 1 報 会話レベルによる分析 (査読付)	共著	平成 25 年 2 月	精神看護におけるディスコース分析 研究会誌 第 1 巻 pp. 32-39	揚野裕紀子、曾谷貴子、日下知子、 <u>川野雅資</u> 研究は、専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、「会話レベル」を用いて分析を行い、精神障がいをもつ患者にとって、どのようなカウンセリング技法が有効であるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者の会話分析－妄想に対応する治療的かかわりに焦点を当てて－第 2 報 対人間圧力とフレーム対応による分析 (査読付)	共著	平成 25 年 2 月	精神看護におけるディスコース分析 研究会誌 第 1 巻 pp. 40-45	曾谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、 <u>川野雅資</u> 専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、ジェームズ・F・T・ブーゲンダール：「サイコセラピストの意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』と問題の焦点化を目指す『フレーム（構図）の対応』を用いて分析・解釈を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
統合失調症患者との看護面接の場面の分析 ースピリチュアリティに焦点をあててー（査読付）	共著	平成 25 年 2 月	精神看護における ディスコース分析 研究会誌 第 1 巻 pp. 46-56	安藤満代、 <u>川野雅資</u> 精神看護の専門教育を受けた看護師が行っている看護面接において、どのようなスピリチュアリティ向上に関する内容があるのかを明らかにするために、村田のスピリチュアル・カウンセリングシートを用いて分析・考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術（査読付）	共著	平成 25 年 2 月	精神看護における ディスコース分析 研究会誌 第 1 巻 pp. 57-68	片山典子、一ノ山隆司、 <u>川野雅資</u> 専門教育を受けた看護師と慢性統合失調症のクライアントの間におこる会話場面を、環境要因も含めて分析を行い、看護師が用いているカウンセリング技術を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
精神障害者が地域で生活するためのソーシャルキャピタルと支援（査読付）	共著	平成 25 年 4 月	インターナショナル Nursing Care Research	著者：安藤満代、 <u>川野雅資</u> 、廣瀬真也 統合失調症の患者が地域で生活していくための阻害要因と促進要因が何かを探索するために5名の患者にインタビュー調査を行った結果をまとめた。本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。
精神看護学実習を通じた精神障害者に対する対人違和感とイメージの肯定的変化（査読付）	共著	平成 25 年 4 月	インターナショナル Nursing Care Research, 12, pp. 115-124.	安藤満代、 <u>川野雅資</u> 学生のスティグマが患者と触れることで減少することが予想された。その結果、患者への対人違和感が肯定的に変化していた。本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。
職業訓練を受けた精神障害者の自己効力感、自尊感情と首尾一貫性（査読付）	共著	平成 25 年 4 月	インターナショナル Nursing Care Research 12 pp. 75-83	著者：安藤満代、 <u>川野雅資</u> 精神障害者でありながら職業訓練校で訓練を受けている方の自己効力感、自尊感情と SOC の関連について調べ、正の相関があることを示した。本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
アルコール依存症の回復を促進するために設立したグループ「酒害者回復クラブ」の取り組みから見た今後のアルコール依存症者地域支援の検討（査読付）	共著	平成 25 年 10 月	アディクション看護 10(1) pp. 73-74	伊藤佳子、 <u>川野雅資</u> 、大谷一義 本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
『うつ病を体験した人のサイコセラピー—心理社会的な職場復帰プロセスの視点から—』（査読付）	共著	平成 25 年 12 月	日本サイコセラピー学会 学会誌第 14 巻 1 号 pp. 107 - 113	片山典子、 <u>川野雅資</u> 本研究では、「職場復帰リハビリテーション」を受けた事例を通し、心理社会的な職場復帰のプロセスを記述することを目的とした。分析の結果、うつ病により長期休業した労働者 A 氏の心理社会的な職場復帰プロセスとして、【違和感を気づきながらも社会人として頑張る】【休職の焦りと安堵に浸る】【治療の苦痛と期待】【職場復帰に向けて模索する】【現実と直面する】【病気体験の意味づけをする】【現実の中で再適応する】という 7 つのカテゴリと、27 のサブカテゴリが抽出された。 本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
身体表現性障害のクライアントに対する初回サイコセラピーの手法に関する検討（査読付）	共著	平成 25 年 12 月	日本サイコセラピー学会 学会誌第 14 巻 1 号 pp. 114 - 120	<u>川野雅資</u> 、緑川綾、佐々木章倫 本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
講会長演 ディスコース研究から見えてくるもの	単著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析 研究会誌 第 2 巻 pp. 1-3	妄想に支配されているクライアントへのサイコセラピー、気分障害（うつ病）のクライアントが徐々に仕事復帰する段階のカウンセリングについて RIAS を用いて、セラピストのカウンセリング技術の考察を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
うつ病および統合失調症患者と看護師の会話のRIASによる分析（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 25-32	野呂幾久子 <u>川野雅資</u> 3 つの実際のカウンセリング場面の会話を RIAS で分析し、その結果からコミュニケーションの特徴について考察することを試みた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
テキストマイニングによるカウンセラーとクライアントの会話の特徴（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 33-49	上野栄一、 <u>川野雅資</u> カウンセリングの場面についてカウンセラーとクライアントの会話内容をテキストマイニングを用いて分析し、会話の特徴を明らかにするとともに、クライアントとカウンセラーの会話をテキストマイニングで分析することの妥当性の検証を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
カウンセリングにおけるコミュニケーション技術の構造と手法 気分障害患者の認知バイアスへの介入場面の分析（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 50-59	伊藤桂子、 <u>川野雅資</u> 看護師と気分障害をもつクライアントとの会話を分析し、看護師が用いるコミュニケーション技術の構造と手法の考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のあるクライアントとの看護面接場面の会話分析 —『対人間圧力』の典型的反応レベル 32 スキルを用いた分析—（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 60-67	曾谷貴子、日下知子 揚野裕紀子、 <u>川野雅資</u> 専門教育を受けた看護師が、妄想のあるクライアントとの面接場面において、意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』の典型的な反応レベル 32 スキルを、どのように用いて会話を行っているのか、会話分析を行い『対人間圧力』として影響の度合いと会話パターンを明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリングにおけるスピリチュアルケア（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 68-73	安藤満代、 <u>川野雅資</u> 統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリング場面をスクリプト表記し、村田のスピリチュアリティ・カンファレンス・サマリーシートを部分的に利用し分析を行い、看護カウンセリングにおけるスピリチュアルケアについて検討を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のある慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術—ジェファンソンの記号システムによる検証—（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 74-84	片山典子、 <u>川野雅資</u> 地域で生活している妄想のある統合失調症者と看護師の対話場面を、ジェファンソンの記号システムに基づきデータとし、会話分析から統合失調症者の妄想に対して看護師が用いているカウンセリング技術を抽出した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
ひきこもり青年との看護面接場面の分析—行動療法的アプローチに焦点を当てて—（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 85-93	柳田崇姉、 <u>川野雅資</u> ひきこもりの青年と専門教育を受けた看護師の看護面接場面の会話分析を行い、看護師がどのような行動療法的アプローチ技術を用いているのかを明らかにし、自尊感情の回復援助に効果的なケアについて考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析—ユーマニスティック看護論を用いて—（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 94-101	佐々木郁子、 <u>川野雅資</u> ヒューマニスティック看護論の概念図化し、著書より「人間」「看護」「看護師」キーワードとして、センテンスを抜き出し、カテゴリに分類し、統合失調症患者との看護面接場面でクライアントが看護師に自分の否定的な気持ちを率直に伝えていた場面を抜き出し、分析・考察を行った。本人担当部分：研究の企画、

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
米国コロラド州デンバーにおける精神看護学の研修報告：ジーン・ワトソン博士の特別セミナー（査読付）	共著	平成 26 年 3 月	山陽看護学研究会誌 4(1) pp. 24-29	データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。 <u>川野雅資</u> 、揚野裕紀子、井田裕子、緑川綾、植木健康、佐々木章倫 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
農村地域で暮らす統合失調症患者への支援の検討：地域生活継続の促進要因と阻害要因の視点から（査読付）	共著	平成 27 年 10 月	新潟大学保健学雑誌 12(1) pp. 1-9, 20	関井愛紀子、飯田亘、五十嵐正徳、 <u>川野雅資</u> 本人担当部分：研究の企画、データ分析・考察・文章の執筆の校閲を行った。 N 県の農村地域に暮らす精神障害者にインタビューを行い、生活を継続していく要因と困難になる要因に分けて分析した。
会長講演 妄想状態にある統合失調症患者に対する熟練看護師の対話技法の一考察	単著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 1-4	熟練看護師と妄想のある統合失調症患者との面接 6 場面の会話内容を、ボランニの記述から全体を量的に整理するとともに、ある特定の妄想場面について、話題、発話の回数、話題の始まり方、コミュニケーションのレベルについて分析を行った。
精神看護面接における看護師の発話機能、技法、意図の関係ー統合失調症患者の面接を対象としたパイロット研究ー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 13-26	野呂幾久子、 <u>川野雅資</u> 、伊藤桂子、片山典子、佐々木郁子 熟練した精神看護師と統合失調症患者との面接場面を、RIAS を用いて、看護師の会話の意図、技法、発話機能の関係について考察を行い、効果的な精神看護面接の会話構造を明らかにした。 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリングの手法と構造（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディ スース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 27-38	伊藤佳子、 <u>川野雅資</u> カウンセラーと気分障害患者との会話を分析し、気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリング技法の手法と構造を明確化した。 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のある慢性期統合失調症患者への看護カウンセリング技術ー「言いかえ」における自己修復・他者修復の関連ー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディ スース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 39-46	片山典子、 <u>川野雅資</u> 地域で生活している妄想のある慢性統合失調症者と専門教育を受けた看護師の対話場面をデータとして会話分析を行い、看護師が用いるカウンセリング技術を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析ヒューマニスティックナーシングを用いてー看護師と患者の「間」についての一考察ー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディ スース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 47-56	佐々木郁子、 <u>川野雅資</u> 看護面接場面における「間」の存在について、人間的看護論を用いて会話分析し、人間的看護論の実践について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者とうつ病患者の看護面における会話分析の比較ー看護師の対人間圧力 32 スキルの活用比較ー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディ スース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 57-66	曾谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、 <u>川野雅資</u> 妄想のある統合失調症患者とうつ病の回復期にある患者との看護面接における会話を比較し、対人間圧力 32 スキルの活用状況の特徴を明らかにした。 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
うつ病患者の看護面接場面の会話分析ークライアントの反応からみたセラピストの技法の活用ー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディ スース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 67-76	曾谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、 <u>川野雅資</u> 看護カウンセリングにおけるクライアントの会話パターンの特徴を把握し、セラピストのコミュニケーション技法の活用について考察を行った。
気分障害をもつ患者と看護師との会話分析ーロイ適応看護モデルを用いてー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディ スース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 77-86	安藤満代、 <u>川野雅資</u> 、日高艶子 気分障害（うつ病）をもったクライアントとの看護カウンセリングの中で、ロイ適応看護モデルに基づいてどのようなケアが行われているのか分析・考察を行った。本人担当部分：データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングを用いたセラピストとクライアントの会話分析（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディ スース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 87-94	松浦純平、 <u>川野雅資</u> 統合失調症患者のクライアントとカウンセリング時のセラピストの発語内容についてテキストマイニングを用いて分析し、高度実践看護技術の構造化につなげる基礎研究の一助として、カウンセリング時の特徴を明らかにすることに主眼に置いた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
わが国の地域在住統合失調症者における自己管理の概念構造に関する文献学的研究（査読付）	共著	平成 28 年 3 月	梅花女子大学看護保健 学部紀要	山元恵子、藪脇健司、 <u>川野雅資</u> 統合失調症者が地域で生活することを可能とする自己管理の概念構造を明確にした結果、6 つの要素「病名告知を受け、症状悪化の兆候を自分で察知し、治療に参加する」、「治療と疾病・服薬・心理教育を受け、主体的に服薬を継続する」、「これからの生き方を明らかにするために自分らしさを保持する」、「自分らしい生活をするために、自らを統制し、周囲の環境に適応する」、「互恵的な関

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
70 Response and results to ethical problems by psychiatric nurses in Japan(日本の精神科看護の倫理的葛藤に対する反応と結果)(査読付)	共著	平成 28 年 4 月	Archives of Psychiatric Nursing(30)2016 527-530	係を保つために，ストレス・悲観的な感情に対処する」，「生活の枠組みを作り，自信をもって生活することで自分の価値を実感する」が抽出できた。本人担当部分：研究の企画の助言、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
会長講演 「会話のもとになるもの」	単著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 1-2	Michiyo Ando, <u>Masashi Kawano</u> (130 名の日本人の精神看護師に自由回答の調査を行い、質的研究方法で分析した。その結果「行動しないし変化しない」「誤りを指摘して傷つく」などの 7 つのカテゴリが抽出された。) 本人担当部分:研究計画の共同作成、調査対象の抽出、依頼、論文の校正。
うつ病患者のカウンセリング回復期と増悪期の比較ー(査読付)	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 13-20	野呂幾久子、 <u>川野雅資</u> うつ病患者のカウンセリング 2 場面の RIAS を分析を行った。看護師のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「患者教育」が多いこと。患者のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「社会情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「接統語」が多いこと、「社会的会話」および「信頼関係の発話」が少ないことが明らかになった。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
ロイ看護適応モデルを用いた自殺念慮を呈する患者と看護師との会話分析（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 21-28	安藤満代、 <u>川野雅資</u> 本人担当部分：うつ病の増悪気にあるクライアントが自殺を考えている場面でのカウンセラーの会話をシスター・カリスタ・ロイの帝王理論で分析した。研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
自殺に傾いたクライアントへの支援－クライアントとセラピストの相互関係の中で行われる自殺予防の関わり－（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 29-42	伊藤桂子、 <u>川野雅資</u> カウンセラーと自殺に傾いたクライアントとの会話を分析し、カウンセリングの相互作用の中で行われる自殺予防の手法について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
うつ状態の悪化期にある患者との看護面接場面の会話分析－うつ状態の回復期と悪化期の対人間圧力 32 スキルの活用比較－（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 43-50	曾谷貴子、日下知子、 <u>川野雅資</u> うつ状態の悪化時にある患者との看護面接場面を会話分析することにより、症状の悪化時にどのようにコミュニケーション技術を活用し、看護面接を行っているのかを分析・考察した。また、先行研究のうつ病の回復期の看護面接での対人間圧力 32 スキルとの比較を行い病状に違いによるコミュニケーション技術の特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングによるうつ病の患者とカウンセラーとの会話分析（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 51-66	上野栄一、 <u>川野雅資</u> うつ病患者とカウンセラーの両者の会話の特徴を明らかにすることを目的とし、会話の中で出現する沈黙に注目し、カウンセラーとクライアントのコミュニケーションの特徴をテキストマイニングソフト Studio®を用いて、単語頻度解釈、係り受け頻度解釈、共起分析し、考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング時の会話分析（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディ スコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 67-74	松浦純平、 <u>川野雅資</u> カウンセリングを定期的に受けている うつ病患者と看護師との会話内容から 逐語録を作成し、計量テキスト分析ソフト KH Coder を用いて、記述統計、階層的 のクラスター解析、共起関係ネットワーク 分類、多次元尺度法を実施。熟練セラ ピストとうつ病患者とのカウンセリング 場面の会話分析から、セラピストのカ ウンセリングにおける特徴を明らかに した。本人担当部分：研究の企画、デー タ収集、データ分析、考察、文章の執筆 の校閲を行った。
看護学生の精神科患者への関わりに関する研究— 模擬患者を用いたシュミ レーションのディスコ ース分析（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディ スコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 75-89	山元恵子、伊藤桂子、村上茂、 <u>川野雅資</u> 看護学生と統合失調症模擬患者との対 話場面で、両者間で何が起きているの かを文脈の中で分析し、学生の内面的な 変化を促すための効果的な学生指導の あり方を検証した。本人担当部分：研究 の企画、データ収集、データ分析、考察、 文章の執筆の校閲を行った。
Relationships among moral distress, sense of coherence, and job satisfaction of Japanese psychiatric nurses. (日本 における精神看護師の倫 理的葛藤と職業満足度の 関連)（査読付）	共著	平成 28 年 8 月	Nursing Ethics ページなし	Michiyo Ando , <u>Masashi Kawano</u> 精神科勤務の看護師を対象として、倫理 的悩み、首尾一貫感覚、職業満足度との 関連について調べ、職業満足度には倫理 的悩みと首尾一貫感覚の下位尺度が強く 影響していることが示された。 本人担当部分：研究の企画、データ収集、 データ分析、考察、文章の校閲を行った。
Association between moral Distress and job satisfaction of Japanese psychiatric nurses (日本 の精神科看護師の倫理的 葛藤と職業満足度の関連) （査読付）	共著	平成 28 年	Asian/Pacific Island Nursing Journal Volume 1, Issue 2 (2016) 55-60	Michiyo Ando , <u>Masashi Kawano</u> 上記の論文の 2 次的分析として、倫理的 悩みと職業満足度の下位尺度との関連 について相関分析によって明らかにし た。本人担当部分：研究の企画、データ 収集、データ分析、考察、文章の校閲を 行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
会長講演 臨床精神看護学研究会	単著	平成 29 年 11 月	第 2 回臨床精神看護学研究会誌	p.1 Evidence Based Practice と Practice Based Evisence を比較しながら、臨床の知を実践のモデルにする意義を述べた。
長期入院患者のアパートへの退院支援	単著	平成 29 年 11 月	第 2 回臨床精神看護学研究会誌	p. 29-30 アパートを建築し、大家さんと病院との橋渡しをして長期入院患者 4 名の退院を支援した実践を報告した。そこで必要なのは、丁寧なアセスメントと患者の状態に合わせた入院中からの支援であった。
長期入院患者の退院後の食事会を通じた支援	共著	平成 29 年 11 月	第 2 回臨床精神看護学研究会誌	p. 31-33 共同研究者:柳田崇姉、 <u>川野雅資</u> 、伊藤桂子 長期入院患者 4 名が退院した後に毎月 1 回大家さんと病院スタッフ、ボランティアが集まって食事会をすることで支援を続けた。次第に温泉旅行、クルージング、ホテルのレストランでの食事会などを取り入れて支援した実践を報告した。支えることとささえられることが成り立つ関係が重要であることが分かった。本人担当部分:研究計画の立案、プログラムの実施、評価、文章の校閲
A2 病棟における心理教育の工夫と効果会長講演 臨床精神看護学研究会	共著	平成 29 年 11 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	p. 60-64 共同研究者:知念史子、大西恵、 <u>川野雅資</u> 、谷村美夏、濱岡景子、山本賢一、前田綾奈 入院中の長期入院患者に対して心理教育を実践した。これまでの体験から、プログラムを隔週で行い、スタッフの力量を高めることを隔週で取り入れる、という工夫を行い、その効果を検討した。本人担当部分:研究計画の立案、プログラムの実施、評価、文章の校閲

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
TIC 研修における看護師等への意識調査－看護実践の土台となるもの－(査読付)	共著	平成 29 年 11 月	第 2 回臨床精神看護学研究会誌	p. 85-95 共同研究者：山元恵子、徳永薫、山之内優子、 <u>川野雅資</u> TIC の研修に参加した対象者に任意でアンケートを配布し、その結果を質的統合法で分析した。その結果、全人的かかわり、わかる説明、神対応、患者視点のケア、強制しないケア、TIC 理念の浸透という 6 要素が抽出された。この事を報告した。本人担当部分：研究計画の助言、データ収集、文章の校閲
集中治療室におけるケアリングエレメントの探求－	共著	平成 21 年 1 月	臨床看護 35(7) pp. 1097-1108	患者・看護師の捉える「ケア」「こころ」からケアリングをみつけるという視点から執筆を行った。田中綾子、 <u>川野雅資</u>
精神臨床看護検討レポート (case11)	共著	平成 21 年 2 月	臨床看護 36 巻 3 号 pp. 370-373	共著者：掛川葉子、佐々木喜代、伊藤英明、 <u>川野雅資</u> 精神科訪問看護の現状と課題を、精神科訪問看護を利用する患者と家族を対象に実施したアンケート調査から検討した。本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
児童・思春期精神医療を支える地域ネットワークを考える	共著	平成 21 年 6 月	小児看護 32(9) pp. 1239-1242	特集 児童・思春期精神看護の臨床実践・荻典子、佐々木郁子、 <u>川野雅資</u> 本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
精神臨床看護検討レポート (case 4)	共著	平成 22 年 3 月	臨床看護 35 巻 5 号 pp. 811-815	共著者：一ノ山隆司、舟崎起代子、 <u>川野雅資</u> 「患者の安寧は看護師の言葉だけではない」ことの経験知－自己の癒し体験をケアに生かすケアリングを検討した。本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
精神臨床看護検討レポート(case 6)	共著	平成 22 年 4 月	臨床看護 35 巻 9 号 pp. 1394-1399	共著者：千英樹、一ノ山隆司、 <u>川野雅資</u> 統合失調症患者の誰にも表現することのできない心の叫びに対する援助；大声で叫べる空間を提供することの検討をした。本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
イギリスにおける地域精神医療の最新動向	共著	平成 22 年 5 月	インターナショナルナースィング・レビュー 日本看護協会出版会 34(5) pp. 102-107	共著者： <u>川野雅資</u> 、片山典子 本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。英国における地域精神医療の実際を見聞して、様々な対象と状態に応じたチームの活動の実際を紹介する。
精神臨床看護検討レポート(case 15)	共著	平成 22 年 8 月	臨床看護 36 巻 10 号 pp. 1350-1355	共著者：渡辺富美子、一ノ山隆司、 <u>川野雅資</u> 著しい視力・聴力低下をともなった高齢のアルコール精神病患者への看護の検討。 本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
地域精神保健のための教育と訓練（特集 地域精神科医療に取り組む）	単著	平成 22 年 9 月	精神科 17(3) pp. 291-294	地域精神保健を推進するために必要な連携を狩る看護師の教育と訓練の手法を解説する。
世界へ飛ぶ精神科看護師 イギリスの「地域精神科看護師」とは	共著	平成 23 年 5 月	精神看護 14(6)， pp. 55-58，	共著者： <u>川野雅資</u> 、片山典子 本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。英国研修で学んだ地域精神看護師の教育内容と、活動の実際を紹介する。
ハワイ州における地域精神看護	共著	平成 23 年 11 月	月刊 ナースィング 32(10)， pp. 101-103，	共著者： <u>川野雅資</u> 、緑川綾 本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。ハワイ州の精神科病院・病棟であるクイーンズメディカルセンター、カヒモハラの精神看護の実際を報告する。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
ロールプレイングを用いたコミュニケーション教育（特集 コミュニケーション力を育む：実習前に教員としてできること）	共著	平成 24 年 9 月	看護教育 53(10), pp. 844-849	共著者：川野雅資、石川純子 本人担当分：教育方法の開発、実施を行い、データの分析・考察・文章の執筆を行った。学生のコミュニケーション技術向上のためにロールプレイングを用いた教育を行った結果をまとめた。教室内学習として演習で身に付けられる技術に関して検討を加えた。
書評 『看護学生のためのクリティカルシンキングと書き方ー基本的な考え方と活用』	単著	平成 24 年 10 月	看護実践の科学 39(5)pp. 84	監訳者の神郡博先生の依頼を受け、看護師の職業的 3 つの技能「クリティカルシンキング、振り返ること、書くことを高める充実した内容の書籍とした。
欧米での精神看護研修 (01) ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 1)Mr. Charles St. Louis	単著	平成 26 年 5 月	看護実践の科学 39(11) pp. 74-77	ハワイ州の精神看護の領域で CNS および APRN(上級実践看護師)として活躍している、Charles St. Louis (チャールズ・セントルイスさん)の看護実践と The Queen's Medical Center の児童・思春期病棟の看護を報告した。
欧米での精神看護研修 (02) ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 2)Ms. Connie Mitchell	単著	平成 26 年 10 月	看護実践の科学 39(12) pp. 70-74	ハワイ州のホームレスの人のシェルター The Institute for Family Enrichment (TIFFE) で施設長をしている精神科専門看護師、Ms. Connie Mitchell (コニー・ミッチェルさん)の看護実践と TIFFE の取り組み、コニーさんが行っているホームレスの人の診断と治療計画アセスメント (ASAM PPC Dimensions: American Society of Addiction Medicine, Patient Placement Criteria) を紹介した。
欧米での精神看護研修 (03) ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 3)Joseph Giovannoni	単著	平成 26 年 11 月	看護実践の科学 39(13) pp. 56-59	開業看護師として性犯罪者の治療を行いながら、ジーンワトソン博士と共に世界中のヒューマン・ケアリングの講演に取り組んでいる Joseph Giovannoni (ジョセフ・ジオバノーさん) 博士の看護実践を紹介した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
精神科臨床評価マニュアル[2016年版]	単著	平成 26 年 12 月	アークメディア 全 631 頁	依頼されて「ケアとアウトカム」(pp. 585-596) について記述した。著者：「臨床精神医学」編集委員会 医療の質を評価する必要性と意義について論説し、有効な評価尺度として、筆者が翻訳した Perception of Care を紹介し、併せて、HCI と PSI を紹介した。これらの評価尺度の使用方法和限界を解説した。
欧米での精神看護研修 (04) ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 4)Mr. Wailua Brandman	単著	平成 27 年 1 月	看護実践の科学 40(1) pp. 56-60	ハワイ州の精神看護の領域でナースプラクティショナーとして活躍している Mr. Wailua Brandman (ワイルワ・ブランドマンさん) が、実践以外にどのようなことを行っているのか、精神科でどのような実践を行っているのか、実践していることの治療的背景、技法、信念にはどのようなものがあるのかについて紹介した。
欧米での精神看護研修 (05) ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 5)Mr. Michael Palazzo	単著	平成 27 年 1 月	看護実践の科学 40(2) pp. 68-72	ハワイ州の精神看護の領域で CNS および APRN(上級実践看護師)として活躍している、Mr. Michael Palazzo (マイケル・パラゾさん) の開業看護師としての実践、米国の保険支払い制度、今後の精神看護についての考えを報告した。
欧米での精神看護研修 (06) ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 6)Ms. Christine	単著	平成 27 年 2 月	看護実践の科学 40(3) pp. 66-71	非営利団体の精神科病院 Kahi Mohara Behavioral Health で取り組まれている治療プログラム(急性期児童プログラム・レジデンス型児童治療プログラム・急性期成人治療プログラム・思春期部分入院プログラム・摂食障害サービス・ECT サービス・Ropes プログラム)、同病院で CNS および APRN として人材開発コーディネーターとして活躍している、Ms. Christine Mathuura (クリスティーン・マツウラさん) の人材開発教育実践について報告した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
欧米での精神看護研修 (07) ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級 実践看護師)(その 7) Mary Jane Amundson	単著	平成 27 年 3 月	看護実践の科学 40(4) pp. 44-47	子ども、家族、地域に対して訓練、教育、相談、治療を行い、個人、家族、地域の質の向上及び専門家の育成に力を注いでいる「The Institute for Family Enrichment (TIFFE)」のプログラム、同施設の設立、運営に携わってきたハワイ大学看護学部・精神看護学教授 Mary Jane Amundson (メアリー・ジェーン・アマンソン) 博士看護実践について報告した。
欧米での精神看護研修 (08) 英国の精神看護：実践と研究 Mr. Michael Coffey	単著	平成 27 年 4 月	看護実践の科学 40(5) pp. 44-48	ウェールズの精神看護について、臨床の場と教育に焦点を当てて報告した。Swansea University 准教授 Michael Coffey 博士が共同責任者として携わる大学院終了後の認定プログラム Approved Mental Health Professional (AMHP) の教育内容、非合意入院の判断方法の変化と AMHP 導入の背景、精神科医および GP(家庭医) と AMHP との連携についてまとめた。
寄り添う看護：看護師の対話力	単著	平成 27 年 5 月	看護実践の科学 40(5) pp62-74	寄り添う看護とは、患者様と家族の気持ちに寄り添い、さらに必要なケアを実践することである。寄り添う看護と添えていない看護の違いについて、入院患者様が体験した具体例の幾つかを紹介した。
欧米での精神看護研修 (09) 英国の精神看護：実践と研究(その 2) DPP (DProf) Program	単著	平成 27 年 5 月	看護実践の科学 40(6) pp. 54-59	英国 Swansea University の Doctor of Professional Practice (DPP, 専門実践者博士；通称 Dprof) 課程の内容と Michael Coffey (マイケル・コフィ) 博士が受け持つ博士課程の大学院生について紹介した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
欧米での精神看護研修 (10) 英国の精神看護：Michael Coffey 博士を招聘して(その 1)	単著	平成 27 年 6 月	看護実践の科学 40(8) pp. 70-74	2015 年に日本に招聘した Michael Coffey (マイケル・コフィ) 博士の 3 つの特別講演(有馬高原病院・東京女子医科大学看護職キャリア支援センター・第 4 回日本地域連携精神看護研究会)の要点を紹介した。 (英国の精神看護，英国の地域精神看護師，ケアコーディネーション，研究からみた地域精神保健チーム活動，研究からみた認定精神保健専門職)
欧米での精神看護研修 (11) 英国の精神看護：Michael Coffey 博士を招聘して(その 2)	単著	平成 27 年 7 月	看護実践の科学 40(9) pp. 56-60	前号に引き続き、2015 年に日本に招聘した Michael Coffey (マイケル・コフィ) 博士の特別講演(有馬高原病院)の要点を紹介した。
43 修(12)コロラド州での精神看護 Michael E. Galbraith 博士	単著	平成 27 年 8 月	看護実践の科学 40(10) pp. 40-44	筆者が 10 年以上交流を続けている、コロラド大学の Michael E. Galbraith 博士から伺った、コロラド州の精神看護について紹介した。(コロラド州の精神医療に係る人材，対人関係と現代の精神看護，ホームレス，地域でのフォローアップ)
欧米での精神看護研修 (13) ヒューマンケアリング：Dr. Jean Watson	単著	平成 27 年 9 月	看護実践の科学 40(11) pp. 58-61	コロラド大学 Jean Watson (ジーン・ワトソン) 博士に伺った、精神看護とヒューマンケアリングのお話をワトソン博士が話された言葉で紹介した。(ヒューマンケリング，個人的体験とヒューマンケアリング，エクササイズ)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
欧米での精神看護研修 (14) 高齢者サービスを提供するカハラ・ヌイを訪ねて	単著	平成 27 年 10 月	看護実践の科学 40(12)pp. 36-40	ハワイの Kahala（カハラ）にある、Hi'olani Care Center in Kahala Nui（ヒオラニアケアセンター；通称、カハラヌイ）で提供されている 3 つのサービス（Assisting Living；手助け付住居，Memory Support；認知の支援，Comprehensive Nursing；包括的看護）について報告した。
Understanding the Mind of Mentally Handicapped Persons about Returning from Hospital to the Community（精神障がい者が病院から地域へ移行する思いの理解）	共著	平成 27 年 11 月	インターナショナル nursing care research 14(1) pp. 81-88	共著者：安藤満代、 <u>川野雅寛</u> 、谷多江子 本人担当部分：研究の計画、研究方法の検討、論文の記述と監修を行った。研究内容は、精神障がい者が病院から地域へ移行することを看護師が支援するために、1) 患者が大切にしていること、2) 地域への移行が意味すること、3) 今後の希望、について明らかにすることであった。13 名の精神障がい者が質問に対して回答した。「大切なこと」は、【病気のコントロールと健康維持】，【人間関係を良好に保つこと】，【自分を認めてくれる人の存在】，【生活を上手くしていくための技術】，【人生を楽しむこと】，【自己の成長】であった。「病院から地域に移行することの意味」として【仕事をすること】，【自宅に戻って生活すること】，【病院生活の継続】，【地域への移行の障害】，【居住地に関係なし】であった。さらに「今後の希望」は、【病気の治癒と健康維持】，【社会参加と就労】，【他者の負担の軽減】，【人生を楽しむこと】，【他者からの評価】であった。地域への移行を促進するためには、看護師が、患者が大切にしていること、移行への思い、今後の希望を理解し、患者のもっている強さを支援することが有効な一つの方法と考えられる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
欧米での精神看護研修 (15)カヒ・モハラで行なう 軍人のPTSD治療のCPT	単著	平成27年12月	看護実践の科学 40(13) pp. 46-52	ハワイの精神科病院 Kahi Mohara Behavioral Health で取り組まれている治療方法の1つであるCPT（認知処理方法）について紹介した。
欧米での精神看護研修 (16)Trauma Informed Care(トラウマ・インフォームド・ケア)	単著	平成28年1月	看護実践の科学 41(1)pp. 52-59	Sutter Health Kahi Mohara で取り組まれている trauma Informed Care(トラウマ・インフォームド・ケア)について報告した。
イギリスの入院精神看護を訪ねて	共著	平成28年1月	看護 67(1) pp99-103	川野雅資、佐々木愛、川野良子 地域精神看護の「先駆的地域」と言われるイギリスでの精神看護研修・視察を、入院精神看護に焦点を当て、精神看護において重要なファクターとなる「喫煙」の事情を加え報告した。本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
欧米での精神看護研修(最終回)欧米の精神看護研修での学び	単著	平成28年2月	看護実践の科学 41(2)pp. 71-76	海外研修での学びの最終回として、海外から学ぶことの利点について総説した。ポイントは、分かりやすい、気づきやすい、臨床に応用できる、自分の研究のヒントになる、模倣したくなる、取り入れたくなる、ことをまとめた。何回同じことを聴いても、その都度理解できることが異なるので、新鮮であった、という気づきを報告した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
カウンセラーの視点	単著	平成 28 年 2 月	看護実践の科学 41 (4) pp. 6-12	精神保健上の課題や困難を抱える児童 思春期の子どもたち（クライアント）が、 どのようなことを体験しているのか、何 を感じているのか、どのように考え、知 覚しているのかについて、看護カウンセ リングの経験から紹介し、成長発達の視 点から検討した。また、現在わが国にあ る児童思春期のサービス提供に係る機 能と活動についてふれた。
トラウマインフォームド ケアとは何か？	単著	平成 29 年 2 月	精神科看護 44 通巻 293 号 2, 2017 pp. 004-016	トラウマインフォームドケアの定義、海 外の文献、トラウマインフォームドケア が生じた背景、トラウマインフォームド ケアと非トラウマインフォームドケア の対比を、これまでの研修、講演、文献 検索から理解した事をまとめた。
トラウマインフォームド ケア	単著	平成 29 年 6 月	精神科看護 44 通巻 297 号 6. 2017 pp025-032	トラウマインフォームドケアの定義、3 つの E、4 つの R、6 つの原理について、 例示して詳説した。
トラウマインフォームド ケア	単著	平成 29 年 7 月	精神科看護 44 通巻 298 号 7. 2017 pp041-050	トラウマインフォームドケアの 10 のガ イダンスについて記述し、海外のトラウ マインフォームドケアに係る研究報告 を紹介した。
トラウマインフォームド ケア	単著	平成 29 年 8 月	精神科看護 44 通巻 299 号 8. 2017 pp048-051	トラウマ体験をすることで、被る侵入症 状、陰性気分、解離症状、回避症状、覚 醒症状、そして社会面の影響について詳 述した。
トラウマインフォームド ケア	単著	平成 29 年 9 月	精神科看護 44 通巻 300 号 9. 2017 pp042-047	トラウマインフォームドケアとトラウ マインフォームドでないケア (Non-TIC) の具体例を提示し、トラウマインフォー ムドケアに必要な感性を醸成する区題 的な方法とその反応を記述した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他②)－研究報告書 精神看護における癒しと ケアリング効果の有効性 に関する研究	—	平成 20 年 11 月	第 28 回日本看護科学学会学術集会講演集 (福岡)	明神一浩、一ノ山隆司、上野栄一、 <u>川野雅資</u> 本人担当分：ケアリングの定義を提示し、癒しとの関係性に関する考察・文章の執筆を行った。
Japanese Concept of Amae 日本の概念「甘え」	—	平成 21 年 8 月	The First East West Nursing Conference, Honolulu	甘え理論の看護婦－患者関係への応用。
精神障がい者を支える家族の負担	—	平成 21 年 11 月	第 29 回日本看護科学学会学術集会講演集 (福岡)	一ノ山隆司、舟崎起代子、明神一浩、上野栄一、 <u>川野雅資</u> , pp. 501 本人担当分：共同研究者として家族が抱える負担感の分析・考察・文章の執筆を行った。
会長講演「グローバルに学んで、グローバルに展開する」	—	平成 21 年 11 月	第 2 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 (東京)	会長として、地域連携に重要なグローバルな視点と同時に地域の特性を把握したグローバルな視点の重要性を論じた。
神奈川県における児童、青年精神医療の連携で看護師の役割を考える	—	平成 21 年 12 月	第 2 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 (東京)	編 者： <u>川野雅資</u> 編集協力者：片山典子 著 者：佐々木郁子、 <u>川野雅資</u> 、山根美智子、久保恭子、アリマ美乃里、佐藤和子、鈴木実、田崎千恵子、土谷朋子、寺島和子、萩典子、一ノ山隆司、村上満 神奈川県における児童、青年期精神医療の実態と、連携形成に関する調査を行い、現状を明確にした。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
就労支援としての職業能力開発校での訓練を受けた精神障がい者の心理面と必要とされる支援	—	平成 21 年 12 月	第 30 回日本看護科学学会学術集会講演集 (東京)	安藤満代、長尾秀美、 <u>川野雅資</u> ，pp. 280、能力開発校を利用する精神障がい者に調査をして、必要とされる支援を明らかにした。本人担当分：共同研究者としてデータ分析結果の検討、考察・文章の検討を行った。
精神科看護師のケアリング実践に関する研究(第 2 報) 個人の内的過程に焦点をあ	—	平成 22 年 12 月	第 30 回日本看護科学学会学術集会講演集 (東京)	石川純子、 <u>川野雅資</u> ，pp. 549、東京。本人担当分：精神科で働く看護師にインタビューを行い、その看護師の生育過程の中から、現在どのようなケアリングの要素が生まれたのかについて分析した。共同研究者としてデータの分析・考察・文章の検討を行った。
会長講演 「精神科早期介入と連携の実際と課題」	—	平成 22 年 12 月	第 3 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 (東京)	事例に基づいた地域の立場からみた早期治療における連携の実際の報告、課題の明確化と今後の方策提案。
タイ王国の地域連携精神看護ータイにおける精神保健福祉と農村部の現状報告	—	平成 22 年 12 月	第 3 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 (東京)	共著者：揚野裕紀子、中田涼子、片山典子、 <u>川野雅資</u> 、櫻井尚子、塩月玲奈、朝倉真奈美 退院後の患者は全員が働いていると言うタイにおける、精神科病院、医療機関、医療従事者、精神障がい者の生活を支える制度、法律、予算、農村部に暮らす精神障がい者の生活から、地域精神医療の実際を学ぶことを目的に視察を実施。精神保健福祉と農村部の現状を報告した。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメント退院準備用紙の作成から活用まで	—	平成 22 年 12 月	第 3 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	共著者：寺田祐治、一ノ山隆司、舟崎起代子、上野栄一、 <u>川野雅資</u> 患者と看護師が共同で作成した退院準備用紙を活用し、統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメントの維持・促進を支える援助過程で、患者の自己および自己を取り巻く現実に関する認識が改善されたかを明らかにした。 本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題	—	平成 22 年 12 月	第 3 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	共著者：松浦純平、一ノ山隆司、上野栄一、京谷和哉、植木健康、 <u>川野雅資</u> 自記式無記名質問紙調査を用いて、A 県内に本拠地があるがん患者会員が考えるサロンに対する認識および現状を明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
長期入院患者の退院支援に関する看護師の意識調査－看護師へのインタビュー分析からの課題－	—	平成 22 年 12 月	第 3 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	明神一浩、前川哲弥、森下憂一、一ノ山隆司、上野栄一、 <u>川野雅資</u> 精神科看護歴が 10 年以上ある看護師にインタビューを実施し、質的帰納的記述研究を行い、長期入院患者の退院支援において看護師が抱える課題を明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
カウンセリングの治療的意味に関する研究 統合失調症患者のカウンセリングにおける治療関係と認知の変容への働きかけ	—	平成 22 年 12 月	第 1 回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	伊藤佳子、 <u>川野雅資</u> カウンセリングの場面を録音・録画し、クライアントの非合理的信念の変容は、セラピストのどのような介入によって促進されているのかを明らかにし、継続するカウンセリングの中でセラピストとクライアントの間にはどのような相互作用があるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
統合失聴症患者の会話分析－妄想に対する治療的かかわりに焦点を当てて－第1報 会話レベルによる分析	—	平成 24 年 3 月	第 1 回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	揚野裕紀子、曾谷貴子、日下知子、 <u>川野雅資</u> 研究は、専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、「会話レベル」を用いて分析を行い、精神障がいをもつ患者にとって、どのようなカウンセリング技法が有効であるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者の会話分析－妄想に対応する治療的かかわりに焦点を当てて－第2報 対人間圧力とフレーム対応による分析	—	平成 24 年 3 月	第 1 回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	曾谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、 <u>川野雅資</u> 専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、ジェームズ・F・T・ブーゲンダール：「サイコセラピストの意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』と問題の焦点化を目指す『フレーム（構図）の対応』を用いて分析・解釈を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接の場面の分析 ースピリチュアリティに焦点をあてて－	—	平成 24 年 3 月	第 1 回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	安藤満代、 <u>川野雅資</u> 精神看護の専門教育を受けた看護師が行っている看護面接において、どのようなスピリチュアリティ向上に関する内容があるのかを明らかにするために、村田のスピリチュアル・カウンセリングシートを用いて分析・考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術	—	平成 24 年 3 月	第 1 回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	片山典子、一ノ山隆司、 <u>川野雅資</u> 専門教育を受けた看護師と慢性統合失調症のクライアントの間におこる会話場面を、環境要因も含めて分析を行い、看護師が用いているカウンセリング技術を明らかにした。 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
看護の視点から見た性同一性障害の文献検討	—	平成 24 年 3 月	第 38 回日本看護研究学会学術集会 （宜野湾）	佐々木愛、 <u>川野雅資</u> 性同一性障害の人が入院時に体験する様々な感情に関する文献を調査した。本人担当分：研究計画の助言、データ分析、考察の助言、文章の校閲を行った。
夫婦の語りからみたうつ病による休職から職場復帰までの支えとなった事柄	—	平成 24 年 7 月	第 44 回日本看護学会精神看護学術集会 （群馬）	塩月玲奈、 <u>川野雅資</u> うつ病患者の夫婦療法を実践した記録か、発症から社会復帰までの経過を分析した。本人担当分：研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の校閲を行った。
講会長演 ディスコース研究から見えてくるもの	—	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学（岡山）	妄想に支配されているクライアントへのサイコセラピー、気分障害（うつ病）のクライアントが徐々に仕事復帰する段階のセラピストのカウンセリング技術の考察を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
うつ病および統合失調症患者と看護師の会話のRIASによる分析	—	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 (岡山)	野呂幾久子、 <u>川野雅資</u> 3 つの実際のカウンセリング場面の会話を RIAS で分析し、その結果からコミュニケーションの特徴について考察することを試みた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
テキストマイニングによるカウンセラーとクライアントの会話の特徴	—	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 (岡山)	上野栄一、 <u>川野雅資</u> カウンセリングの場面についてカウンセラーとクライアントの会話内容をテキストマイニングを用いて分析し、会話の特徴を明らかにするとともに、クライアントとカウンセラーの会話をテキストマイニングで分析することの妥当性の検証を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
カウンセリングにおけるコミュニケーション技術の構造と手法 気分障害患者の認知バイアスへの介入場面の分析	—	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 (岡山)	伊藤桂子、 <u>川野雅資</u> 看護師と気分障害をもつクライアントとの会話を分析し、看護師が用いるコミュニケーション技術の構造と手法の考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のあるクライアントとの看護面接場面の会話分析 —『対人間圧力』の典型的反応レベル 32 スキルを用いた分析—	—	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 (岡山)	クライアントとの面接場面において、意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』の典型的な反応レベル 32 スキルを、どのように用いて会話を行っているのか、会話分析を行い『対人間圧力』として影響の度合いと会話パターンを明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリングにおけるスピリチュアルケア	—	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 (岡山)	安藤満代、 <u>川野雅資</u> 統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリング場面をスクリプト表記し、村田のスピリチュアリティ・カンファレンス・サマリーシートを部分的に利用し分析を行い、看護カウンセリングにおけるスピリチュアルケアについて検討を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のある慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術—ジェファンソンの記号システムによる検証—	—	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 (岡山)	片山典子、 <u>川野雅資</u> 地域で生活している妄想のある統合失調症者と看護師の対話場面を、ジェファンソンの記号システムに基づきデータとし、会話分析から統合失調症者の妄想に対して看護師が用いているカウンセリング技術を抽出した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
ひきこもり青年との看護面接場面の分析—行動療法的アプローチに焦点を当てて—	—	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 (岡山)	柳田崇姉、 <u>川野雅資</u> ひきこもりの青年と専門教育を受けた看護師の看護面接場面の会話分析を行い、看護師がどのような行動療法的アプローチ技術を用いているのかを明らかにし、自尊感情の回復援助に効果的なケアについて考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析—ユーマニスティック看護論を用いて—	—	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 (岡山)	佐々木郁子、 <u>川野雅資</u> ヒューマニスティック看護論の概念図化し、著書より「人間」「看護」「看護師」キーワードとして、センテンスを抜き出し、カテゴリに分類し、統合失調症患者との看護面接場面でクライアントが看護師に自分の否定的な気持ちを率直に伝えていた場面を抜き出し、分析・考察

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
ひきこもり支援者が語る地域連携の現状に関する研究	—	平成 25 年 9 月	第 33 回日本看護科学学会学術集会 (大阪)	を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
ロイ看護適応モデルに基づいたがん患者のスピリチュアリティのアセスメント	—	平成 25 年 12 月	第 40 回日本看護研究学会 (奈良)	柳田崇姉、 <u>川野雅資</u> pp. 645 ひきこもりの若者を支援する人々へのインタビュー調査を行った。本人担当分：研究計画の助言、データ分析、考察の助言、文章の校閲を行った。
会長講演 妄想状態にある統合失調症患者に対する熟練看護師の対話技法の一考察	—	平成 26 年 8 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会福井大学 (福井)	安藤満代、 <u>川野雅資</u> 、日高艶子 本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。がん患者が体験するスピリチュアリティについて、シスター・カリスタ・ロイの適応モデルを用いて分析した結果、どのように適応していくのかを明らかにした。
精神看護面接における看護師の発話機能、技法、意図の関係ー統合失調症患者の面接を対象としたパイロット研究ー	—	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 (福井)	熟練看護師と妄想のある統合失調症患者との面接 6 場面の会話内容を、ボランニの記述から全体を量的に整理するとともに、ある特定の妄想場面について、話題、発話の回数、話題の始まり方、コミュニケーションのレベルについて分析を行った。
				野呂幾久子、 <u>川野雅資</u> 、伊藤桂子、片山典子、佐々木郁子 熟練した精神看護師と統合失調症患者との面接場面を、RIAS を用いて、看護師の会話の意図、技法、発話機能の関係について考察を行い、効果的な精神看護面接の会話構造を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリングの手法と構造	—	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 (福井) 福井大学	伊藤佳子、 <u>川野雅資</u> カウンセラーと気分障害患者との会話を分析し、気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリング技法の手法と構造を明確化した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のある慢性期統合失調症患者への看護カウンセリング技術ー「言いかえ」における自己修復・他者修復の関連ー	—	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 (福井)	片山典子、 <u>川野雅資</u> 地域で生活している妄想のある慢性統合失調症者と専門教育を受けた看護師の対話場面をデータとして会話分析を行い、看護師が用いるカウンセリング技術を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析ヒューマニスティックナーシングを用いてー看護師と患者の「間」についてのー考察ー	—	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 (福井)	佐々木郁子、 <u>川野雅資</u> 看護面接場面における「間」の存在について、人間的看護論を用いて会話分析し、人間的看護論の実践について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者とうつ病患者の看護面における会話分析の比較ー看護師の対人間圧力 32 スキルの活用比較ー	—	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 (福井)	曾谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、 <u>川野雅資</u> 妄想のある統合失調症患者とうつ病の回復期にある患者との看護面接における会話を比較し、対人間圧力 32 スキルの活用状況の特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
うつ病患者の看護面接場面の会話分析ークライアントの反応からみたセラピストの技法の活用ー	—	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 (福井)	曾谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、 <u>川野雅資</u> 看護カウンセリングにおけるクライアントの会話パターンの特徴を把握し、セラピストのコミュニケーション技法の活用について考察を行った。
気分障害をもつ患者と看護師との会話分析ーロイ適応看護モデルを用いてー	—	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 (福井)	安藤満代、 <u>川野雅資</u> 、日高艶子 気分障害（うつ病）をもったクライアントとの看護カウンセリングの中で、ロイ適応看護モデルに基づいてどのようなケアが行われているのか分析・考察を行った。本人担当部分：データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングを用いたセラピストとクライアントの会話分析	—	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 (福井)	松浦純平、 <u>川野雅資</u> 統合失調症患者のクライアントとカウンセリング時のセラピストの発語内容についてテキストマイニングを用いて分析し、高度実践看護技術の構造化につなげる基礎研究の一助として、カウンセリング時の特徴を明らかにすることに主眼に置いた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
精神看護学における会話分析の手法と活用	—	平成 26 年 12 月	第 25 回日本精神保健看護学会学術集会 (つくば)	伊藤桂子、片山典子、 <u>川野雅資</u> 、野呂幾久子、上野栄一 精神看護学領域における会話分析に関するこれまでの知見をまとめた。本人担当分：研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の執筆を行った。
精神科看護師の倫理的悩みと職業満足度、SOC および精神健康度との関連	—	平成 27 年 6 月	第 35 回日本看護科学学会学術集会 広島国際会議場	安藤満代、 <u>川野雅資</u> 精神科看護師の倫理的悩みと職業満足度、SOC および精神健康度との関連を調査した。本人担当分：共同研究者として研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
会 長 講 演 「会話のもとになるもの」	—	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 (東京)	会話を形成しているのは、その会話をするときの意図であり、意図を実現化するコミュニケーション技術である。更に、意図のもとになる人間性が肝要であることを論じる。
うつ病患者のカウンセリング回復期と増悪期の比較—	—	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 (東京)	野呂幾久子、 <u>川野雅資</u> うつ病患者のカウンセリング 2 場面の RIAS を分析を行った。看護師のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「患者教育」が多いこと。患者のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「社会情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「接続語」が多いこと、「社会的会話」および「信頼関係の発話」が少ないことが明らかになった。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
ロイ看護適応モデルを用いた自殺念慮を呈する患者と看護師との会話分析	—	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 (東京)	安藤満代、 <u>川野雅資</u> 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。うつ病の増悪期にある患者へのカウンセリングをロイの適応モデルで分析した。
自殺に傾いたクライアントへの支援—クライアントとセラピストの相互関係の中で行われる自殺予防の関わり—	—	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 (東京)	伊藤桂子、 <u>川野雅資</u> カウンセラーと自殺に傾いたクライアントとの会話を分析し、カウンセリングの相互作用の中で行われる自殺予防の手法について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
うつ状態の悪化期にある患者との看護面接場面の会話分析ーうつ状態の回復期と悪化期の対人間圧力 32 スキルの活用比較ー	—	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 (東京)	曾谷貴子、日下知子、 <u>川野雅資</u> うつ状態の悪化時にある患者との看護面接場面を会話分析することにより、症状の悪化時にどのようにコミュニケーション技術を活用し、看護面接を行っているのかを分析・考察した。また、先行研究のうつ病の回復期の看護面接での対人間圧力 32 スキルとの比較を行い病状に違いによるコミュニケーション技術の特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングによるうつ病の患者とカウンセラーとの会話分析	—	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 (東京)	上野栄一、 <u>川野雅資</u> うつ病患者とカウンセラーの両者の会話の特徴を明らかにすることを目的とし、会話の中で出現する沈黙に注目し、カウンセラーとクライアントのコミュニケーションの特徴をテキストマイニングソフト Studio®を用いて、単語頻度解釈、係り受け頻度解釈、共起分析し、考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング時の会話分析	—	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 (東京)	松浦純平、 <u>川野雅資</u> カウンセリングを定期的に受けているうつ病患者と看護師との会話内容から逐語録を作成し、計量テキスト分析ソフト KH Coder を用いて、記述統計、階層的クラスター解析、共起関係ネットワーク分類、多次元尺度法を実施。熟練セラピストとうつ病患者とのカウンセリング場面の会話分析から、セラピストのカウンセリングにおける特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護学生の精神科患者への関わりに関する研究－模擬患者を用いたシュミレーションのディスコース分析	—	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 (東京)	山元恵子、伊藤桂子、村上茂、 <u>川野雅資</u> 看護学生と統合失調症模擬患者との対話場面で、両者間で何が起きているのかを文脈の中で分析し、学生の内面的な変化を促すための効果的な学生指導のあり方を検証した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
How psychiatric nurses behave when they confronted ethical problems (精神科看護師が倫理的問題に直面したときの対処)	—	平成 27 年 12 月	International Behavioral Health Conference (Hong Kong)	Michiyo Ando , <u>Masashi Kawano</u> 精神科看護師が倫理的な問題に直面したときに、どのように自分自身をコントロールするかを調査研究で明らかにした。本人担当分：共同研究者として研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の執筆を行った。
蘇った記憶（妄想）のあるクライアントへの支援	—	平成 28 年 1 月	第 8 回日本「性とこころ」関連問題学会学術集会 (東京)	伊藤桂子、 <u>川野雅資</u> 統合失調症患者がカウンセリング場面で語る性に係る発言を分析した。本人担当分：研究を計画し、データ収集を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
認知症を知ろう	—	平成 28 年 5 月	第 1 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	北島文子、藤井ショーン、小宮智子、高浜佑、長島愛、彦坂予友子、 <u>川野雅資</u> 有馬高原病院で取り組まれている認知症の家族教室の活動内容を認知症の家族の心理を用いて考察した。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
いかに歩くかー精神科作業療法での治療としての“歩く習慣”定着への取り組みー	—	平成 28 年 5 月	第 1 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	長島愛、山口裕子、越智健義、 <u>川野雅資</u> 先行研究で推奨された歩行「歩行の健康増進には 1 日 8000 歩以上、中等度強度以上の歩行を 20 分以上」の精神科臨床応用についての臨床感、経過、定着のための工夫について考察した。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
心理教育リーダー・コリーダーを体験して気づいたこと	—	平成 28 年 5 月	第 1 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	濱岡景子、山本賢一、谷村美夏、鳥羽法子、 <u>川野雅資</u> 、大西恵 心理教育に係るスタッフの問題点・課題克服を目的としたリーダー・コリーダー体験の結果の分析・考察を行った。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
不本意な入院をした患者の移送に関する体験と思いーA氏の語りからー	—	平成 28 年 5 月	第 4 回日本地域連携精神看護学研究会 横浜市大（横浜市）	佐々木愛、石川純子、 <u>川野雅資</u> 不本意な入院をした患者にインタビューで体験を語って頂き、その体験を質的に分析し、今後の課題を検討した。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
討論会「拡大する地域連携」	—	平成 27 年 5 月	第 4 回日本地域連携精神看護学研究会 横浜市大（横浜市）	報告者が取り組んだ地域移行支援プログラムと多職種連携について考察し、地域定着に不可欠な第三者（回復者とともに生活を分かち合うボランティア・慈悲団体）の必要性を明らかにした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
青年期統合失調症患者の臨界期における訪問ケア実践	—	平成 27 年 12 月	第 36 回日本看護科学学会学術集会(東京国際フォーラム、東京)	片山典子、荒木田美香子、 <u>川野雅資</u> 訪問看護を実施した体験がある看護職者に、臨界期にある統合失調症の青年期の対象に実施した看護とその根拠を調査した。その中から、訪問看護師が必要とする看護技術の要素を抽出した。本人担当部分：研究モデルの検討、調査協力者の推薦、結果の分析、考察。
会長講演 臨床精神看護学研究会	—	平成 28 年 6 月	第 1 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	「暗黙知と形式知」「知の三分類」「フロンセス（実践的知恵）を継承する場」についての会長講演をまとめた。
Examination of Self-management construct validity of Structure for Community-dwelling People with Schizophrenia in Japan 日本における待機で暮らす精神障害者の自己管理能力	—	平成 29 年 3 月	Asian American Pacific Islander Nurses Association's th Annual Conferece (Honolulu)	Keiko Yamamoto, <u>Masashi Kawano</u> 我が国のディケアを利用している地域で暮らす 163 名の統合失調症患者に調査した結果、治療、治療継続がもとにあり、そのうえで自己の質、環境があり、そしてしこ調整力が生まれて信頼感が増すことが明らかになった。本人担当部分：調査協力のディケアの開拓。データの考察。
A pilot study of developing of spirituality scale for mentally handicapped persons in community dwelling 精神障害者のスピリチュアリティを測定する尺度の開発に関するパイロット研究	—	平成 29 年 3 月	The 3rd International Society of Caring and Peace Conference in Kurume (Fukuoka, Japan)	P.128. Michiyo Ando, <u>Masashi, Kawano</u> , Eiichi Ueno 24 項目の精神障害者のスピリチュアリティを測定する尺度を開発し、ディケア利用者を対象として 80 名の調査を行い、因子分析を行った。本人担当部分：研究計画の立案、調査対象者の依頼、調査の実施、データ分析の考察。論文の校閲を行った。
会長講演 臨床精神看護学研究会	—	平成 29 年 5 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	Evidence Based Practice と Practice Based Evisence を比較しながら、臨床の知を実践のモデルにする意義を述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
長期入院患者のアパートへの退院支援	—	平成 29 年 5 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	アパートを建築し、大家さんと病院との橋渡しをして長期入院患者 4 名の退院を支援した実践を報告した。そこで必要なのは、丁寧なアセスメントと患者の状態に合わせた入院中からの支援であった。
長期入院患者の退院後の食事会を通じた支援	—	平成 29 年 5 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	共同研究者：柳田崇姉、 <u>川野雅資</u> 、伊藤桂子 長期入院患者 4 名が退院した後に毎月 1 回大家さんと病院スタッフ、ボランティアが集まって食事会をすることで支援を続けた。次第に温泉旅行、クルージング、ホテルのレストランでの食事会などを取り入れて支援した実践を報告した。支えることとささえられることが成り立つ関係が重要であることが分かった。
A2 病棟における心理教育の工夫と効果会長講演 臨床精神看護学研究会	—	平成 29 年 5 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	共同研究者：藤原史子、大西恵、 <u>川野雅資</u> 、谷村美夏、濱岡景子、山本賢一、前田綾奈 入院中の長期入院患者に対して心理教育を実践した。これまでの体験から、プログラムを隔週で行い、スタッフの力量を高めることを隔週で取り入れる、という工夫を行い、その効果を検討した。
TIC 研修における看護師等への意識調査一看護実践の土台となるもの一	—	平成 29 年 5 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	共同研究者：山元恵子、徳永薫、山之内優子、 <u>川野雅資</u> TIC の研修に参加した対象者に任意でアンケートを配布し、その結果を質的統合法で分析した。その結果、全人的かかわり、わかる説明、神対応、患者視点のケア、強制しないケア、TIC 理念の浸透という 6 要素が抽出された。この事を報告した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他⑤)－編及び監修 慢性期看護：緩和・ターミナルケア：成人看護学	共著	平成 20 年 4 月	日本放射線技師会出版会	緩和・ターミナルケアに焦点を当てた成人看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全 382 頁 監修：川野雅資 編集：伊藤まゆみ 共著者：伊藤まゆみ、入江慎治、井原緑、秋月百合、高橋正子、高宮有介、下條奈己、黒子幸一、中村英子、村瀬麻樹子、近藤ふさえ、小竹久実子、塚本友栄、佐藤満、佐田浩行、吉田正子、平野真澄、縄田修一、荒添美紀、山室八潮、岩崎和代、鳥原真紀子、菊池麻由美 本人担当部分：本書の企画、文章の校正を行った。
看護学実践 -Science of Nursing- 看護管理学	共著	平成 20 年 8 月	PILAR PRESS	看護看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全 180 頁 監修：川野雅資 編集：平井さよ子 共著者：平井さよ子、賀沢弥貴、飯島佐知子、山田聡子 本人担当部分：本書を新たな視点で企画し、編者に依頼し最終的な文章の校正を行った。
看護学実践 -Science of Nursing- 小児看護学	共著	平成 22 年 8 月	PILAR PRESS	小児看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全 336 頁 監修：川野雅資 編集：中村伸枝 共著者：荒木暁子、出野慶子、遠藤数江、小川純子、金丸友、白畑範子、中村伸枝 本人担当部分：本書の企画、編集者への助言、最終的な文章の校正を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
家族看護学（看護学実践 -Science of Nursing-）	共著	平成 22 年 11 月	PILAR PRESS	家族看護学という新しい学問領域に添 うように、そして家族看護学の最新の知 識と技術が学べるコンパクトな教科書 を企画した。全 280 頁 監修：<u>川野雅資</u> 編集：櫻井しのぶ 共著者：安藤直美、大石ふみ子、大倉美 佳、加藤欣子、金岡緑、間裕美子、間文 彦、櫻井しのぶ、佐藤敏子、庄村雅子、 杉浦絹子、近森栄子、茅野裕美、中西唯 公、乗松貞子、旗持智恵子、三村博美、 森田恵子、丸山明美、薬師神裕子、横尾 京子、横内光子、吉田和枝 本人担当部分：本書の企画、編集者への 助言、最終的な文章の校正を行った。
老年看護学（看護学実践 -Science of Nursing-）	共著	平成 22 年 12 月	PILAR PRESS	老年看護学の最新の知識と技術が学べ るコンパクトな教科書を企画した。全 284 頁 監修：<u>川野雅資</u> 編集：守本とも子 本人担当部分：本書の企画、編集者への 助言、最終的な文章の校正を行った。
看護学実践 -Science of Nursing- 地域看護学	共著	平成 24 年 4 月	PILAR PRESS	地域看護学の最新の知見をもとに編集 するよう、編者に依頼し、最終原稿の監 修を行った。全 251 頁 監修：<u>川野雅資</u> 編集：豊島泰子 著者：豊島泰子、石井栄子、彌永和美、 山下智香、山崎律子、後藤由紀、畑中純 子、山村江美子、今村桃子、新堂愉香子、 佐藤博美、福本美津子、多田羅紀子、西 地令子、鈴木みちえ、伊藤薫、井上清美、 鷺尾昌一、寺文文恵、小川正子

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 辻下 守弘

研 究 分 野	研究内容のキーワード	
外科系臨床医学	理学療法学、運動器リハビリテーション学	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価 学生による授業評価	平成 21 年 9 月	甲南女子大学において、全教員を対象に授業科目ごとに学生による授業評価を行った。 質問内容「あなたはこの授業を受講して総合的に満足していますか?」 [理学療法概論] 5 点満点で 4.3 点 [内部障害系運動療法学] 5 点満点で 4.8 点 [脳血管障害理学療法学] 5 点満点で 4.3 点 [理学療法行動科学] 5 点満点で 4.1 点
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他 奈良学園大学社会連携センター長	平成 28 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学社会連携センター長として、大学と地域社会との連携をスムーズにするためのコーディネーターとしての役割を果たした。具体的には、大学が立地する市町村との連携事業である公開講座の企画運営、大学シーズと地域ニーズとのマッチング、産官学連携による共同研究の推進と実施などに関して実施責任者としての活動を行った。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許		
(1) 理学療法士免許（厚生労働省）	昭和 60 年 5 月	国家資格免許である理学療法士免許を取得(第 13729 号)
(2) 認定健康心理士資格取得（日本健康心理学会）	平成 13 年 4 月 24 日	日本健康心理学会が認定する認定健康心理士資格を取得（第 246 号）
(3) 専門健康心理士資格取得（日本健康心理学会）	平成 18 年 2 月 2 日	日本健康心理学会が認定する認定健康心理士資格の習得から 5 年間が経過し、昇格審査に合格して専門健康心理士資格を取得（第 246 号）

(4) 専門理学療法士資格取得（日本理学療法士協会）	平成 18 年 2 月 2 日	公益社団法人日本理学療法士協会から脳卒中(第 3-102 号)、運動器(第 3-562 号)、内部障害理学療法(第 4-323 号)の 3 分野に対する専門理学療法士の資格を取得
(5) 認定理学療法士資格取得（日本理学療法士協会）	平成 18 年 2 月 2 日	公益社団法人日本理学療法士協会から神経(第 2-481 号)、運動器(第 7-79 号)、代謝(第 13-25 号)の 3 領域に対する認定理学療法士の資格を取得
(6) 専門理学療法士資格更新	平成 29 年 4 月 1 日	公益社団法人日本理学療法士協会から神経(2017S-02-000033)と運動器(2017S-03-000043)の 2 分野に対する専門理学療法士資格を更新認定を取得
2 特許等 (1) 特許申請中 「リハビリテーション用用具」	平成 12 年 3 月	本発明は、身体の動作機能を正常に発揮し得ない障害者や高齢者等に当該機能の回復と発現を容易にならしめるためのリハビリテーションに用いられる器具およびその利用プログラムに関するものである。この発明用具は、リハビリテーション医療や健康増進の場面において、音楽を利用した運動療法に使用する目的で開発された。内容としては、複数本の棒を結合させ枠を形成した構造物と片端に固着用部を持つ可撓性アームを備えた複数個の楽器からなり、該楽器を前記構造物の任意の位置、方向に取付けてなるリハビリテーション用用具である。 出願番号 特願 2000-114436
3 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 平成 16 年度福山市運動普及推進事業調査研究および「健康ふくやま 21」さわやか運動教室事業への参加	平成 16 年 4 月 ～ 現在に至る	福山市では、「健康ふくやま 21」の具体的活動として、福山市民の運動習慣を増進することを目的とした運動普及推進事業を展開している。平成 16 年度からは、「さわやか運動教室」を福山市内の小学校区単位で開催している。事業内容としては、小学校体育館を使用して、運動の必要性についての啓発と具体的な運動方法としてウォーキングの基本と実技指導を行っている。また、各小学校区から 10 名の希望者を集め、より具体的な運動習慣の形成とそれによる効果を検証する疫学研究も同時進行させている。福山市内の成人では、その 77%が運動不足を感じており、本事業によりその割合を 50%までに抑えることを目標にしている。事前にアンケート調査を実施し、その結果に基づいて健康心理学の知識と各種技法を用いた介入により、目標を効果的に達成するよう取り組んでいる。

(2) 厚生労働省理学療法士・作業療法士国家試験委員会委員としての活動 (3) 重度認知症高齢者の感情反応と行動を手がかりにした基本的な生活支援技術の開発	平成 18 年 4 月 ～ 平成 18 年度 ～ 平成 20 年度 科学研究費 補助金研究 成果報告書 (基盤研究 B)	厚生労働省の理学療法士作業療法士国家試験委員会の委員として国家試験作成に従事した。 重度認知症高齢者の基本的な日常生活支援技術の開発を行い、その教育・研修プログラム開発により重度認知症高齢者の QOL の向上を図ることが研究の目的である。研究の結果、①認知症高齢者へのケア場面のビデオテープ分析から固有の感情反応・行動のレベルの存在を明らかにし、その尺度を用いてケアの質が測定可能である。②重度認知症高齢者に対する小集団回想法の有効性を明らかにした。③手織りプログラムの生活活性化に与える効果を明らかにした。④重度認知症高齢者とのコミュニケーションの具体的方法を明らかにした。以上の成果からコミュニケーションの糸口を探索する方法、重度認知症高齢者のサインを読解する方法等の具体的な援助技術研修プログラムを作成し、研修を実施し、概ね良好との評価を得た。 研究代表者：臼井キミカ 共同研究者：上西洋子、辻下守弘、佐瀬美恵子、白井みどり、佐々木八千代、兼田美代、津村智恵子、後藤由美子、山本美輪、山本裕子、川井太加子、鷹居樹八子、柴田幸子 担当部分：主に③の手織りプログラムの生活活性化に与える効果について、近赤外線分光法による脳イメージングを用いた高齢者の脳機能に及ぼす影響に関する研究を担当した。
(4) 性差と加齢を考慮した労働者の睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの開発	平成 24 年度 ～ 平成 26 年度 科学研究費 補助金研究 成果報告書 (基盤研究 C)	本研究の目的は、労働者の睡眠の質における性差と加齢の影響を明確にし、性別と加齢に応じた睡眠の質改善のプログラムを開発することである。研究対象者は中規模事業場で働く 35 歳以上の男女であった。研究期間中の健康診断時期に調査を実施した。1 年目の調査結果では、男性の睡眠の質には運動習慣、女性の睡眠の質には教育歴や喫煙状況が関連していた。2 年目には、23 項目の睡眠チェックリストを作成した。3 年目には、睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの効果評価を行った結果、介入群において 3 項目に改善が認められた。今後は産業保健スタッフが睡眠改善指導にどのように活用するかを検討する必要がある。 研究代表者：廣川空美 共同研究者：藤井保人、谷口敏代、辻下守弘 担当部分：男女の睡眠の質に関する睡眠チェックリストの作成と睡眠改善指導ビデオの作成および運動習慣が睡眠に及ぼす影響に関する研究を担当した。

(5) 介護老人保健施設でのパソコンを用いた介護職員指導に関する研究－行動分析学の枠組みによる移乗介助指導－	平成 26 年度～ 平成 28 年度 科学研究費 補助金研究 成果中間報 告書（挑戦 的 萌 芽 研 究）	介護老人保健施設において良質なサービスを提供することは入所高齢者の生活の質を高めるだけでなく、早期の在宅復帰を促す重要な事項である。本研究では、パソコンを用いた e ラーニングシステムを構築し、職場や家庭で場所を選ばずに介護職員の移乗介助指導を可能とすることとその効果について検証することである。1 年目では、介護老人施設における介護指導の実態を調査し、移乗介助指導において職員間の達成度が異なることを明らかにした。現在 2 年目の研究では、この結果に基づき行動分析学の枠組みを用いた e ラーニング教材の作成を行っており、現場における検証を準備している。3 年目ではこのシステムの効果を検証する。 研究代表者：小林和彦 共同研究者：<u>辻下守弘</u> 担当部分：介護老人保健施設での介護状況を調査するとともに移乗介助指導における e ラーニングシステムの開発を担当した。3 年目では、開発したシステムの検証も担当する予定である。
4 その他 (1) 京都市立芸術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程の博士論文審査委員	平成 27 年 12 月 ～ 現在に至る	京都市立美術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程において、美術作品をリハビリテーション医療に活かす研究を博士論文の課題としている学生に対して、リハビリテーション医療に携わる研究者として博士論文の審査を行っている。平成 28 年 2 月には第 1 回の博士論文報告会があり、発表論文への試問を実施し、博士論文審査委員会において論文への評価と今後の課題について報告を行った。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 腰痛の理学療法	共著	平成 20 年 5 月	三輪書店	近年、医療のみならず産業面にも多大な経済負担を与え、また高齢社会到来でますます増加傾向中の腰痛は、国の財政や産業基盤をも脅かす問題となっている。このような現状を踏まえ、本書ではいまだ解決策が見出されたとはいえない「腰痛」について、その最前線で活躍する研究者および臨床家が近年明らかになった知見を中心に科学的根拠に基づいて解説した。 (編者：伊藤俊一、鶴見隆正 分担執筆者：関口美穂、内田賢一、白土修、矢吹省司、辻下守弘、甲田宗嗣、岡崎大資、他 18 名) 担当部分：第 3 章第 7 節「労働従事者における腰痛とその指導」 労働従事者に生じる職業性腰痛を定義し、その実態について職業別、作業姿勢別に整理した。職業性腰痛の発症リスク因子をこれまで報告されている文献をレビューしながらまとめた。リスク因子は身体・人間工学的因子と心理・社会的因子に分け、自験例も含めて解説を行った。特に、心理・社会的因子についてはタイプ A 行動という行動特性や日常苛立ち事というストレス源が腰痛発症リスク因子として重要なことを指摘した。さらに、職業性腰痛に対する理学療法として応用行動分析学と行動指向型段階的活動プログラムを紹介した。 (pp. 168～178、単著) 担当部分：第 4 章第 4 節「慢性腰痛に対する認知行動療法」腰痛における痛みの認知と痛みの行動について解説し、認知行動療法の重要性と意義について論述した。また、認知行動療法の基礎理論である応用行動分析学に基づいて慢性腰痛患者の腰痛発症メカニズムを解明した。さらに、慢性腰痛に対する認知行動療法を導入する上での評価と技法について詳細に解説し、その実際については症例を供覧した。 (pp. 234～244、共著)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の	概要
筋電図バイオフィードバック療法	共著	平成 22 年 6 月	金芳堂	リハビリテーション医療における筋電図バイオフィードバック療法について基礎から臨床までを解説した。本全体の編集を担当した。 (監修：エリック・ペパー、編者：辻下守弘、中川 朋 分担執筆者：エリック・ペパー、中川 朋、甲田宗嗣、平山秀和、工藤弘行、井川英明、鳥谷部太、辻下守弘、他 10 名) 担当部分：第 1 章「バイオフィードバックとは何か」 バイオフィードバック療法の歴史からリハビリテーション医療における位置づけを解説した上で、筋電図バイオフィードバック療法の応用例や普及の状況、そしてリハビリテーション医療に導入する利点などを解説した。 (pp. 1～4、単著)
バイオフィードバック入門	単著	平成 23 年 12 月	秀和システム	腰痛、頭痛などの痛み、失禁・便秘から老い、ADD、うつなどといったきわめて広い範囲の病を、薬を使わずに自己コントロールでなおす「バイオフィードバック」治療法について解説した。バイオフィードバックとは、心拍計などの医療器具を使って心拍数、血圧、呼吸数、皮膚温、筋緊張、脳波などをモニタリングし、病状や症状を初期段階で発見し、呼吸法や瞑想など適切な対応をする治療法である。本書では、バイオフィードバックの理論とその実践を基礎から解説し、頭痛や腰痛、排泄トラブル、パニック障害、うつ状態、さらには集中力向上やメンタルトレーニングの方法などを解説しています。
医療福祉学の道標	共著	平成 24 年 3 月	金芳堂	本書は、「健康と病気」という問題に社会科学の側面からアプローチした。健康は医学だけでは守ることができないため、学際科学的，統合的，総合的視野から，「医療福祉学」という新しい学問が必要となること

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
日常生活活動学・生活環境学	共著	平成 24 年 9 月	医学書院	を言及した。 （編者：星野政明、高内克彦、土田耕司 分担執筆：秋山智久、天野博之、安藤詳子、石村由利子、<u>辻下守弘</u>、他 43 名） 担当部分：第 8 章 B「身体障害者への医療福祉の実践と課題」 身体障害者の定義と法的根拠、その実態などを概説した上で、身体障害者および身体障害児に対する医療福祉サービスの現状と課題について論説した。 （pp. 100～104、単著） 本書は、「日常生活活動学」と「生活環境学」の二部構成である。「日常生活活動学」は、総論で ADL の歴史、概念、評価などの基本事項を解説し、各論で疾患別の評価方法と ADL 指導を具体的に提示し、「生活環境学」では、概念や法的諸制度、住宅改修や生活支援機器について解説した。 （編者：鶴見隆正、隆島研吾 分担執筆：秋若山佐一、林 克郎、<u>辻下守弘</u>、他 25 名） 担当部分：第 1 章第 4 節「ADL の運動学的分析」 運動学の基本事項を整理した上で、日常生活動作を運動学的に分析するための基礎を詳細に解説した。また、起き上がりや立ち上がりなどの動作に対する運動学的分析を具体例も上げながら論述した。 （pp. 36～51、単著）
脳卒中理学療法の理論と技術	共著	平成 25 年 6 月	メジカルビュー社	本書は、臨床の場で用いられる実践的な理学療法と、その基礎となる解剖学・生理学の知識をはじめ、病態生理の知識、理学療法評価の技術、運動処方および生活指導のための理論的背景と技術を解説した。 （編者：原 寛美、吉尾雅春 分担執筆：渡辺雅彦、中村 元、<u>辻下守弘</u>、他 22 名） 担当部分：第 V 章「理論と理学療法」の中の「バイオフィードバック療法」を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
生活支援の基礎理論	共著	平成 27 年 4 月	光生館	バイオフィードバック理論の基礎となる学習理論を解説した上で、バイオフィードバックが使う各種モダリティーや国内の代表的な機器について紹介した。また、脳卒中片麻痺患者に対するバイオフィードバックとニューロフィードバックについても論述した。 (pp. 445～456、単著) 本書は、地域での生活を支援する介護福祉士として必要な基礎知識を、保健、心理、栄養、居住環境、家族支援などの関連分野から体系的に学習できるように解説している。 (編者：上之園佳子、谷口敏代、鈴木聖子、分担執筆者：本名靖、太田貞司、土室修、<u>辻下守弘</u>、他 16 名) 担当部分：第 5 章「介護福祉の基礎となる心理学」の中の「学習」を担当した。 学習の定義と介護福祉領域で必要となる重要事項を解説した上で、認知心理学的な考え方と行動分析的な考え方に分けて各理論を具体例を入れながら解説した。 (pp. 98～102、単著)
痛みのケア	共著	平成 29 年 3 月	ピラールプレス	本書は、看護現場で求められる痛みのケアについて、哲学・倫理学的理解と痛みの理論からはじまり、痛みの治療と看護ケアについて解説した上で、看護実践事例について検討されている。 (編者：守本とも子 分担執筆者：池辺寧、沖本克子、梶村郁子、<u>辻下守弘</u>、他 15 名) 担当部分：第Ⅱ部「痛みの理論」第 5 章「痛みの行動科学的理解」を担当した。 看護現場における痛みの生物医学的アプローチの問題点を指摘した上で、慢性的な痛みを行動科学的にアプローチすることの重要性について解説している。また、痛みの社会的強化により出現する痛み行動に対する理解と看護現場での具体的なケアの方法

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				論について提案している。 (pp. 34～41、単著)
(学術論文) 疼痛を有する対象者の包括的理学療法 [筆頭論文] (査読付)	共著	平成 20 年 2 月	理学療法ジャーナル第 42 巻 平成 20 年 2 月 pp. 113～121	疼痛を有する対象に対して身体的アプローチだけでなく心理・社会的アプローチも含めた包括的理学療法を行うことの意義を論述した。まず、慢性痛の多面的理解について解説し、疼痛とパーソナル・コントロール、痛み行動と随伴性といった鍵概念を解説した上で、理学療法士が果たす役割を論述した。この中では特に応用行動分析学を用いた慢性疼痛のアプローチを紹介した。また、応用行動分析学に基づいた包括的理学療法の方法論を解説した上で、具体的なアプローチについては事例を供覧しながら説明を加えた。(9 頁) (分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣、鶴見隆正、川村博文) 担当部分：症例への介入および論文の構成と論文の大部分の執筆を担当した。
運動行動変容段階および運動態度が女性の更年期症状に及ぼす影響 (査読付)	共著	平成 20 年 3 月	甲南女子大学研究紀要 第 1 号 平成 20 年 3 月 pp. 53～60	閉経前後女性事務員 335 名(平均年齢 51.0 ± 8.2 歳)に対してアンケート調査を行い、運動行動変容段階(運動段階)および運動態度が更年期障害に及ぼす影響を検討した。年齢、体格、月経状態、更年期症状、運動段階、運動態度、うつ傾向の調査結果より、運動段階と運動態度が良好であれば更年期症状は軽症であり、運動の習慣化は更年期症状の発症を抑制する可能性が示唆された。また、閉経前ではうつ傾向が、閉経後では運動態度が更年期症状を強めることが判明し、多重ロジスティック回帰分析でも更年期症状を発症させる有意なリスク要因として運動態度の不良とうつ傾向ありが挙げられた。更年期症状の発症と重症化の予防には、運動段階を維持期にステップアップさせる介入や、うつ傾向の緩和と運動態度の改善を促すアプローチが必要と考えられた。(8 頁)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
高コレステロール血症の運動療法の効果とその阻害因子に関する検討 (査読付) 運動行動変容段階および運動態度が女性の更年期症状に及ぼす影響 (査読付)	共著	平成 20 年 3 月	理学療法の臨床と研究 第 17 号 平成 20 年 3 月 pp. 25～28	(分担執筆：永田昌美、青田絵里、辻下守弘) 担当部分：調査票の作成と配布及び回収とデータの多変量解析を担当した。 空腹時血清総コレステロール値が 200mg/dl 以上の運動習慣のない中年者 40 例を対象として、運動強度 90%AT、運動頻度を週 2 回で、3 ヶ月間、有酸素運動、柔軟性運動、筋力運動を組み合わせた運動を実施し、高コレステロール血症に対する運動療法の効果を検証した。また同時に、運動療法の阻害因子についても検討した。血清総コレステロール値は、初診時に比較して 3 ヶ月後には有意な減少が認められた。運動療法の阻害因子としては、高血糖のみに有意な関連性が認められた。以上の結果により、高コレステロール血症に対する運動療法の有効性が認められたが、高血糖を合併している場合は運動療法の効果を得がたい可能性が考えられた。(4 頁) (分担執筆：仁田靖彦、辻下守弘、藤村宜史、沼田義弘、丸橋暉) 担当部分：運動負荷試験の実施と統計処理及び論文執筆の一部を担当した。
理学療法を取り巻く「認知」の最前線	単著	平成 20 年 10 月	理学療法ジャーナル 第 42 巻第 9 号 平成 20 年 10 月 pp. 791～798 (査読あり)	脳科学が進歩し、理学療法士も「認知」という言葉をよく使うようになったが、「認知」という言葉の定義があいまいなまま使われていることも多くなっている。本論文では、認知とは何かを理学療法学の立場から定義した上で、認知領域、認知障害、認知症、認知リハビリテーション、認知療法と認知行動療法、そして認知運動療法などリハビリテーション領域で認知とつく用語を論説した。最後には、理学療法学において認知および認知的アプローチが抱える課題や方向性について論述した。(8 頁)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
骨関節疾患の理学療法とバイオメカニク日常生活動作、応用動作を中心に	共著	平成 20 年 11 月	理学療法ジャーナル 第 42 巻第 9 号 平成 20 年 10 月 pp. 821～827 (査読あり)	本研究の目的は、バイオメカニクス研究に基づいて骨関節疾患に対する理学療法を検討することである。日常生活動作や応用動作におけるバイオメカニクスについて、2 例の健常者を対象として炊事動作中の膝関節角度をホルター電気角度計を持ちて測定した。その結果、2 例であっても動作中の膝関節角度は異なり、動作のバイオメカニクスには個人差のあることがわかった。また、高齢者を対象として、椅子からの立ち上がり動作を三次元動作解析装置で分析した結果、転倒経験によって身体重心の移動に有意な違いのあることを明らかにした。(7 頁) (分担執筆者：甲田宗嗣、辻下守弘、川村博文、鶴見隆正、新小田幸一、山田直樹) 担当部分：高齢者を対象とした三次元動作解析装置での解析を担当した。
理学療法士のための行動分析学入門	単著	平成 20 年 12 月	理学療法兵庫 第 14 号 平成 20 年 12 月 pp. 1～7	本論文では、理学療法士に必要な行動分析学の知識と技法について論述した。まず、行動分析学の理論について、スキナーが提唱した随伴性という考え方を中心に解説し、理学療法における応用可能性を言及した。さらに、臨床場面で遭遇する様々な問題を呈した患者に対する具体的な行動分析学的アプローチの有効性について、事例報告を通して検証した。最後に、行動分析学に基づく人間観についてエコロジカルな視点から論述した。(7 頁)
座位作業を主体とした女性従事員の職業性腰痛と心理・社会的要因および生活習慣との関連性について (査読付)	共著	平成 21 年 3 月	甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 第 2 号 平成 21 年 3 月 pp. 89～97	本研究の目的は、座位作業を主体とする女性従事員の職業性腰痛と生活習慣および心理・社会的なストレスとの関連を明らかにすることである。対象は、某公共遊技場にて座位作業を主体とした労務に従事する女性 1326 名であり、最終的には 1324 名(採択率 99.8%)のデータを分析に用いた。多変量解析の結果、オッズ比が有意であった項目は、BMI の「肥満体重」がオッズ比 1.43、頸肩腕症状の「陽性」がオッズ比 6.46、日常苛立ち事の「陽性」がオッズ比 1.63、そ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
特別養護老人ホーム入所者における車いす座位の問題点に関する検討 (査読付)	共著	平成 21 年 3 月	甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 第 2 号 平成 21 年 3 月 pp. 99～106	して不健康な生活習慣の「(1) 不規則な生活」がオッズ比 1. 51、「(5) 飲酒習慣」がオッズ比 1. 34 であり、これらの項目が腰痛と有意に関連していることがわかった。(9 頁) (分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣、田辺暁人) 担当部分：調査票の作成から統計処理と論文作成の全般を担当した。 高齢者が長時間快適に座るために必要な車いすの機能を検討する目的で、車いす座位に問題のある特別養護老人ホーム入所者と 30 代女性を対象に、車いす着座中の座面および背もたれの圧力分布測定を行った。高齢者では座面において坐骨と仙尾骨に高圧力部が観察され、背もたれにおいては接触面積が狭く、胸椎、肩甲骨、腰椎、骨盤のいずれかに限局して高圧力部が観察され、高齢者特有の円背、骨盤後傾が圧力分布に大きく影響していることが分かった。これらの結果から、高齢者の車いすを検討する際には、座面における圧力分布を均等にすること、および背もたれの接触面積を広くして体幹をサポートすることに配慮する必要性が示唆された。(8 頁) (分担執筆者：永田昌美、辻下守弘、甲田宗嗣、吉田正樹) 担当部分：高齢者の背部座圧分布の計測とデータ処理、論文作成の一部を担当した。
リハビリテーション医療現場における BF の応用可能性について (査読付)	単著	平成 21 年 10 月	バイオフィードバック研究 第 36 巻第 2 号 平成 21 年 10 月 pp. 173～177	リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック療法の意義や位置づけを論じた上で、バイオフィードバック療法の使用実態について検討した。また、一般的に使われている筋電図バイオフィードバック療法の神経疾患や整形外科疾患に対する適用と問題点、そして最近注目されている平衡機能障害に対するバイオフィードバック療法の方法論と効果について検討した。最後に、センサーとアンプの技術革新により可能となったマルチチャンネルバイオフィ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
モチベーションを高める行動分析学的アプローチについて	単著	平成 21 年 12 月	理学療法兵庫 第 15 号 平成 21 年 12 月 pp. 18～24	ードバック療法についての可能性を論じた。(5 頁) 本論文では、理学療法士の臨床において避けることのできない患者のモチベーションに関して考察した。まず、行動分析学の立場から理学療法臨床におけるモチベーションの機能を検討した上で、患者のモチベーションを高めるための具体的な行動分析学的アプローチを提示し、実際に介入した事例の分析を通して、行動分析学的アプローチの有効性についても論述した。最後に、理学療法臨床における行動分析学的アプローチは、エコロジカル（生態学的）アプローチつまり環境調整による行動変容介入であることに言及して、今後の理学療法臨床への応用可能性を考察した。(7 頁)
女性公共遊技場従業員の腰痛発症における心理・社会的要因および生活習慣に関する縦断的研究 (査読付)	共著	平成 22 年 3 月	甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 第 4 号 平成 22 年 3 月 pp. 59～67	本研究は、女性従業員の腰痛発症における心理社会的要因および生活習慣に関する縦断研究である。対象は、某公共遊技場に勤務する女性従業員を対象として、1997 年 (n=1326 名、以下基本調査) と 2001 年 (n=910 名、以下追跡調査) に腰痛と頸肩痛および生活習慣に関する質問紙調査を実施した。研究の結果、頸肩痛の粗オッズ比が 1.94 (95%CI 1.24-3.04)、調整オッズ比が 1.82 (95%CI 1.21-3.83)、日常いらいち事の粗オッズ比が 2.39 (95%CI 1.22-4.67)、調整オッズ比が 2.13 (95%CI 1.13-4.32)、コーヒー等の摂取習慣の粗オッズ比が 0.59 (95%CI 0.36-0.94)、調整オッズ比が 0.64 (95%CI 0.42-0.96) であった。以上の結果から頸肩腕痛や日常いらいち事存在およびコーヒー等の摂取習慣が腰痛発症のリスク要因となることがわかった。(9 頁) (分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣) 担当部分：調査票の作成から統計処理および論文作成の全般を担当した。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Relationship between life satisfaction and sympathovagal balance in healthy elderly males at home at night (夜間在宅における健常老年者の生活満足度と交感神経バランスとの関連性) (査読付)	共著	平成 24 年 10 月	Health Vol. 4 No. 11 pp. 1068-1072	本研究の目的は、老年者における夜間在宅での生活満足度が交感神経バランスと関連するかを検討することであった。健常老年者 39 名を対象として、アクティブトレーサーにより 72 時間の心拍変動と身体活動量を計測した。測定の結果、生活満足度と交感神経バランスとの間には-0.47 の有意な相関関係を認めた。(5 頁) (分担執筆者: 吉野公三、守本とも子、板垣孝弘、池谷茂隆、永田昌美、 <u>辻下守弘</u>) 担当部分: データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。
Effects of a hardness discrimination task in failed back surgery syndrome with severe low back pain and disturbed body image: case study (身体像の認知課題作業が背部の術後症候群による重度な腰痛症に対する影響: 事例研究) (査読付)	共著	平成 24 年 10 月	Journal of Novel Physiotherapies 2012 Open Access	本研究では背部の術後に重度な腰痛を発症した 20 歳の女性に対して認知課題による疼痛緩和のアプローチを行った。初期の疼痛は NRS で 10 と最大の痛みを訴えていた。また、身体像の認知に障害を持っていた。介入として 1 日 20 分、週 6 日の認知課題のトレーニングを 4 週間にわたり行ったところ、痛みが NRS で 5 と半分に緩和され、歩行や日常生活動作能力も改善していた。(6 頁) (分担執筆者: 西上智彦、奥埜裕之、中野英樹、大村裕、清水ミッシェルアイズマン、 <u>辻下守弘</u> 、壬生彰、牛田孝博) 担当部分: 症例の理学的評価と訓練および論文の結果部分を担当した。
運動器疾患を有する高齢者の生活機能に対する理学療法の取り通所リハビリテーション利用者の心理・社会的側面に着目して (査読付)	共著	平成 26 年 4 月	理学療法 第 31 巻第 4 号 平成 26 年 4 月 pp. 376~382	1. 運動器疾患を有する高齢者の生活機能の改善には、高齢者の身体活動の開始と継続に関する要因を理解する必要がある、心理・社会的要因が大きく関連している。2. どのような治療を選択するにしても、高齢者個々の心理・社会的要因を認識し、オーダーメイドの治療を実施することが必要である。3. 高齢者の心理・社会的要因を認識するための第一歩は、対象者とのコミュニケーションである。単なるコミュニケーション技法を用いるのではなく、対象者を支えている信念や認識に触れる関わり方がオ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Central neural mechanisms of interindividual difference in discomfort during sensorimotor incongruence in healthy volunteers: an experimental study (健康対象者における感覚運動不一致による不快感が個人差に関する中枢神経メカニズムについて：実験的研究) (査読付)	共著	平成 26 年 10 月	Rheumatology 2014 Open Access	一ダーメイドの治療を実施できた。(7 頁) (分担執筆者：大門恭平、米田大人、<u>辻下守弘</u>、川村博文) 担当部分：高齢者の運動機能に関する要因の分析と論文の一部執筆を担当した。 本研究の目的は、感覚運動認知の不一致に関する個人差に関して、その中枢神経メカニズムを明らかにすることである。対象は、18 名の健常若年女性であり、感覚運動認知の不一致課題を独自に作成し、その認知課題中における脳波を分析し、脳内メカニズムを LORETA 法によって解析した。その結果、不一致の個人差は前部帯状回および後部帯状回の活動状況の違いと一致していることがわかった。(8 頁) (分担執筆者：分担執筆者：西上智彦、中野英樹、大住道弘、<u>辻下守弘</u>、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。
バイオフィードバックの発展に向けての日本バイオフィードバック学会企画委員会からのアンケート結果報告 (査読付)	共著	平成 26 年 10 月	バイオフィードバック研究 第 41 巻第 2 号 平成 26 年 10 月 pp. 95～102	2012 年の第 40 回学術総会においてアンケート調査を実施した。学術総会に参加した 25 人の学会員から回答を得た。その結果、 1. 医学・工学・心理学の研究面の連携に関して学会の存在意義を認める回答が多かった。 2. 学会に望むことについては、次世代を担う若い研究者・学生が積極的に参加できる環境づくりを指摘する意見が目立った。 3. 会員以外には、バイオフィードバックについて正しく分かりやすく理解してもらう情報提供の必要性を訴える意見が多かった。 以上の結果に基づいて今後学会の方向性に関する提案を行った。(8 頁) (分担執筆者：中尾睦宏、大須賀美恵子、廣田昭久、佐久間春夫、志和資朗、竹林直紀、<u>辻下守弘</u>) 担当部分：アンケート調査の作成からデータ整理と統計分析および考察の一部の執筆を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
高齢者に対する視覚誘導性到達課題を用いた音楽運動療法の開発とその効果に関する研[筆頭論文] (査読付)	共著	平成 27 年 3 月	医療福祉情報行動科学研究 第 3 号 平成 27 年 3 月 pp. 27～32	本研究では、視覚誘導性到達運動課題を用いた音楽運動療法を開発することとこれが高齢者のバランス能力に及ぼす影響を明らかにすることであった。対象は 70 歳以上の健常高齢者 16 名であり、実施群 8 名と対照群 8 名の 2 群に割り付けた。評価は機能的バランス尺度 (BBS)、TUG、FRT および静的重心動揺計と動的姿勢制御検査とした。5 回の練習後、BBS、FRT そして動的姿勢制御検査の有意な改善を認めた。(6 頁) (分担執筆者：辻下守弘、川村博文、永田昌美、前田吉樹) 担当部分：研究全般を実施し論文全体の執筆を担当した。
Kinect センサーを使った仮想環境が高齢者の運動機能に及ぼす影響について (査読付)	共著	平成 27 年 4 月	バイオフィードバック研究 第 42 巻第 1 号 平成 27 年 4 月 pp. 57～62	Microsoft 社により開発された Kinect センサーを使った風船割りゲーム「キネリハシステム」を使って高齢者にゲームを定期的に行ってもらい、仮想環境が高齢者の運動機能にどのように影響を及ぼすかを検討した。デイケアに週 2 回以上通う高齢者 23 名に対しキネリハシステムを週 2 回以上 4 週間実施した。この前後に (1)10m 歩行 (2)TUG (3)5StepTest を測定し 4 週間完遂した者について結果を比較した。その結果、継続してゲームを行い施行期間の最後まで継続してやり遂げ (1)～(3) を測定できた者は 7 名だった。ゲーム後の結果が (2) と (3) において有意に向上していた ($p<0.05$)。(6 頁) (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
介助者による介助の経時的変化に基づいた介助評価方法の検討－認知症を有する高齢障害者への介護職員による移乗介助場面の行動論的分析－ (査読付)	共著	平成 27 年 12 月	理学療法科学 第 30 巻第 6 号 平成 27 年 12 月 pp. 933-937	車椅子からベッドへの移乗課題を用い、介助を基準に被介助者の遂行レベルを査定する評価法の妥当性を行動論の視点から検討した。対象は施設介護職員および入所中の認知症を有する高齢障害者とした。介助者の 4 段階の介助系列をもとに 6 段階の遂

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
生体センシング技術を使った仮想現実によるゲームが高齢者の運動機能に及ぼす影響について (査読付)	共著	平成 27 年 12 月	理学療法科学 第 30 巻第 6 号 平成 27 年 10 月 pp. 811-815	行レベルを設定し、各単位行動が遂行されたときの介助を遂行機会ごとに図示し、介助の経時的変化を被介助者の遂行レベルの推移の視点から分析した。その結果、被介助者による遂行過程は単位行動ごとに異なった遂行レベルを推移しており、従来 ADL 評価法とは視点の異なる情報が得られた。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：症例の評価と介入指導および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
中年女性に出現する肩こりと腰痛の重複症状の実態とその関連要因に関する研究 (査読付)	共著	平成 28 年 3 月	甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 第 10 号 平成 28 年 3 月 pp. 1-10	生体センシング技術を使ったゲームを高齢者に行わせ仮想現実を利用したゲームが高齢者の運動機能にどう影響を及ぼすかを予備的調査した。高齢者 23 名に対しゲームシステムを週 2 回以上 4 週間実施した。4 週間実施前後の①10m 歩行②TUG③5StepTest の 3 つのパフォーマンステストの結果及びゲームの測定機能を利用したゲームに対する平均反応速度とゲームの成功率について比較した。その結果、②と③及び平均反応速度・成功率に於いて施行後が施行前に比べ有意に向上していた。またゲーム完遂者に運動習慣があるものが有意に多かった。 (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の一部の執筆を担当した。
本研究では、パソコン操作を主体とした作業に従事する中年女性従業員 335 名を対象として、肩こりと腰痛の重複症状が出現する実態を明らかにするとともに、その身体的、心理的、社会的な要因との関連性について検討した。症状なし群、肩こり単独群、腰痛単独群、そして両者重複群という 4 群間において各要因を比較したところ、分散分析により有意な主効果を認めたのは、年齢、運動態度、食行動、K6、そしてクーパーマン指数であった。多重ロジスティック回帰分析の結果、肩こりと腰痛の両者重				

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
心身のストレスおよび作業量からみた体圧移動で座面が変化する ER チェアの健常成人女性および高齢者を対象としたプレテストの結果から (査読付)	共著	平成 28 年 3 月	甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 第 10 号 平成 28 年 3 月 pp. 19-28	複と関連する要因は、低い BMI、高い K6 スコア、そして高いクッパーマン指数であった。 (分担執筆者：辻下 守弘、永田 昌美、芝 寿実子、前田 吉樹、川村 博文、小貫 睦巳) 担当部分：データ収集から統計処理および論文執筆を担当した。 本研究は、高齢者用に開発した ER チェアと通常の椅子を比較し、対象者の心身のストレスにどのような影響をもたらすかを検証することとした。被験者は、参加条件を満たした健常成人女性 6 名と高齢者 8 名の計 14 名である。研究デザインはクロスオーバー・デザインとし、被験者には ER チェアと通常の椅子の 2 種類の椅子に座った際に 5 つの課題を課した。分析の結果、主観的疲労感の全身倦怠感において、被験者全体の操作実施前後の平均値は ER チェアが減少したが、通常の椅子は増加し、平均値の差の比較で統計的に有意な差が認められた ($p=.04$)。また、唾液アミラーゼ量において、高齢者の操作実施前後の平均値は ER チェアがやや減少し、通常の椅子が増加して統計的に有意な差が認められたが ($p=.04$)、交互作用が認められた。 (分担執筆者：丸尾 智実、兼田 美代、臼井 キミカ、辻下 守弘、速水 裕子) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の執筆を担当した。
骨盤臓器脱術後の便失禁症状に骨盤底筋の筋電図バイオフィードバック療法が奏効した症例 (査読付)	共著	平成 28 年 4 月	バイオフィードバック研究 第 43 巻第 1 号 平成 28 年 4 月 pp. 19-26	今回、骨盤底筋の選択的筋収縮が困難であった便失禁を有する症例に対して、骨盤底筋の筋放電を確認しながら筋収縮を確認し、筋収縮を調整する筋電図バイオフィードバック療法が症状の改善に有効であったので報告した。症例は、膀胱瘤により骨盤臓器脱術を受けた 70 歳の女性である。骨盤臓器脱の症状は手術により改善したが、運動時にガス程度の便失禁が 4~5 回以上認められた。評価および介入は、Thought

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
行動分析学の枠組みを用いたコンピューターシミュレーション教材による介護老人保健施設介護職員への介助- 高齢障害者に対するベッドから車椅子への移乗介助指導効果の- (査読付)	共著	平成 28 年 8 月	行動療法研究 第 42 巻第 2 号 平成 28 年 8 月 pp. 201-213	Technology 社製の Myotrac3 を用い、骨盤底筋と腹筋を分離して筋収縮させることを目的として実施した。10 セッション実施の結果、持続的収縮においては 8 セッションから骨盤底筋のみを収縮させることが可能となった。運動時の失禁頻度は 6 セッション時から減少した。 (分担執筆者：松谷 綾子、青田 絵里、西上 智彦、<u>辻下 守弘</u>、服部 耕治、木村 俊夫) 担当部分：症例の評価と治療および論文の症例報告と考察の一部の執筆を担当した。 本研究においては、行動分析学の視点から理論および介助の方法論を解説したパソコン上で作動する教材を開発し、介護職員 3 名に自己学習とセルフチェックを行ってもらい、介護老人保健施設入所者に対するベッドから車椅子への移乗介助技能への効果を、単一事例実験計画法を用いて検証した。その結果、3 名とも適切な介助の頻度が増加(平均 46.2%)し、彼らが日頃介助している入所者も、より少ない介助で移乗が行えるようになった。また、移乗介助指導の効果が同じ入所者の脱衣介助に反映されることも確認された。さらに、指導プログラムの内容や意義に関しても比較的良好な受け入れや評価が得られた。以上から、従来の指導方法によるデメリットを補完する役割を果たすことができ、本教材が介護職員指導における効果的な方法論として位置づけられる可能性が示唆された。 (分担執筆者：小林和彦、<u>辻下守弘</u>) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。
疼痛に対する物理療法・運動療法	共著	平成 28 年 8 月	The Japan Journal of Rehabilitation Medicine 第 53 巻第 8 号 平成 28 年 8 月	本論文では、疼痛に対する治療としての物理療法、運動療法について、有効性に関わる理論的な裏付けから臨床のエビデンスを交えて検討した。その結果、急性痛と慢性痛とでは、対応が異なり、急性痛には過度な不活動を避け、原因となる組織損傷の

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
インタラクティブ・メトロノーム法の紹介とリハビリテーションへの応用可能性	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要 第 5 集 平成 28 年 9 月 pp. 1-9	治療を下級の早期に進めることと、可能な限り疼痛を抑制し長期化を阻止することが重要であることが分かった。また、慢性痛では、感覚面に着目する以外に、情動面や認知面などの多面的、複合的な側面での特性の認識理解が不可欠であり、ADL や QOL 向上を目的として、TENS などの物理療法、運動療法、学際的集学的治療を導入することが重要であることがわかった。 (分担執筆者：川村博文、西上智彦、伊藤健一、大矢暢久、辻下守弘) 担当部分：文献収集と整理および論文の慢性疼痛に関する部分の執筆を担当した。 本論文では、運動・認知機能のリハビリテーションに欠けていた脳内時計と時間情報処理能力を高めるというコンセプトを導入した新しいトレーニング方法であるインタラクティブ・メトロノーム法 (Interactive Metronome®:以下 IM と略す) について、その歴史、原理と方法、トレーニングの手順、そして科学的根拠を概説した上で、リハビリテーションへの応用可能性について解説した。IM の利点は、リズム音に手と足の動きを同調させてタイミングをとるといった非常にシンプルなトレーニングであり、2 歳程度の幼児から高齢者まで適用範囲が広く、生体への侵襲も全くないため、従来のリハビリテーションへ併用して使用可能なことである。ただし、現在の問題点は、科学的根拠を裏付ける IM の臨床研究が国際的にも不足していることや IM システムが日本における医療機器の薬事承認を得てないことであった。
バーチャルリアリティ (VR) 技術を用いた高齢者のリハビリテーションに関する文献的研究	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要 第 7 集 pp. 75-81	コンピュータサイエンスの発展によってバーチャルリアリティ (VirtualReality: VR) 技術が身近になった。一方で、わが国は急速なスピードで超高齢社会が進行し、要介護状態の高齢者が急増する中で、高齢者のリハビリテーションが注目されている。そこ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
タイ王国の周産期－チェンマイ大学看護学部の視察を通して－	共著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要 第 7 集 pp.179-185	で、本論文では、VR の定義と特徴を解説した上で、主に Wii と Kinect センサーを用いた高齢者リハビリテーションへの応用に関する国内外の現状と課題を文献的に考察した。その結果、Wii と Kinect センサーを用いたトレーニングが高齢者の心身機能に及ぼす影響を明らかにした良質の無作為化比較対照試験（RCT）は少ないものの、高齢者の機能的なバランス能力を改善させる効果のあることが多くの論文で示唆されていた。VR を用いた高齢者のリハビリテーションには課題もあるが、より没入感の強いヘッドマウントディスプレイが普及することで、今後は高齢者リハビリテーションへの応用可能性が拡大すると考えられた。 タイ王国北部にあるチェンマイ大学を視察し、タイ王国における周産期看護の現状についての現状把握を行った。共働きの家庭が多いタイ王国では、仕事を持つ母親たちの多くが授乳のための環境が整っていないために母乳で育児を行うことは困難であり、母乳育児率の低下が問題視されていた。こういった社会的背景から、母乳育児の重要性についての啓発活動と環境を改善するための王室によるプロジェクトが発足し、企業の事業所内の授乳コーナー設置や無料での母乳輸送サービスの提供などが現在では行われていた。日本においても母乳育児の利点については知られてはいるが、タイ王国のようなサービスの整備までには至っていない状況なため、タイ王国の周産期看護についての現状を把握することは、日本の周産期看護の質改善のための示唆を得ることにつながると考えられた。 （分担執筆者：田中和奈、守本とも子、<u>辻下守弘</u>）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック 一脳卒中片麻痺に対する応用可能性について	単著	平成 29 年 9 月	バイオフィードバック研究 第 44 巻第 2 号 pp. 70-75	本研究の目的は、各種の生体情報を音や光などの人間にわかりやすい情報へ変換し、その情報に基づいて自己の状態を調整するバイオフィードバック（以下 BF）に対するリハビリテーション医療（以下リハ医療）への応用可能性を検討することであった。リハ医療の特徴は、一般的な医療が手術や投薬など医療者に依存した受動的治療であるのに対して、残存機能の回復や健常機能への代償など患者自身による能動的治療が主体となることであり、患者の学習過程への介入が重要なアプローチとなる。本論文では、その効果的な介入方法としての BF に関して、その治療メカニズムについて学習理論を用いた解説を行った。また、脳卒中片麻痺に対す表面筋電図 BF について、コンパクトな BF 機器である MyoTrac の操作方法と治療手続きとその効果および臨床応用上の課題について論説した。最後に、EEG（脳波計）や HEG（近赤外線方式脳血流計）を用いたニューロフィードバックトレーニングが脳卒中だけでなく他の神経系障害および運動器障害へのリハビリテーションに応用されていく可能性を検証し、多様なモデリティを使った BF がリハ医療に応用されていく必要性について論説した。
Comparison of the pain-relieving effects of transcutaneous electrical nerve stimulation applied at the same dermatome levels as the site of pain in the wrist joint （手関節部の疼痛に対する頸部と対側手関節および両者の同一皮膚分節知覚帯への経皮的膚電気刺激が疼痛軽減に及ぼす影響の比較）	共著	平成 29 年 11 月	Journal of Physical Therapy Science Vol. 29 No. 11 pp. 1996-1999	本研究の目的は、手関節部の疼痛に対する対側同一皮膚分節知覚帯への経皮的電気刺激 (Transcutaneous Electrical Nerve Stimulation: 以下 TENS) が疼痛緩和にどのような影響を及ぼすかを検討することであった。対象は 15 名の健康な成人女性 (21.9 ± 0.3 歳 [21-22 歳]) であった。実験手続きは、まず 30 秒間の安静後に左手関節背側部へ 47℃ で 60 秒間の温熱刺激にて疼痛を生じさせ、その後に頸部 (N) と対側手関節部 (CW) および両者 (CWN) への TENS (周波数: 15Hz・波長: 200 μs) を実施した。その結果、TENS

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				を行わない対照群を含んだ4条件の分散分析では視覚的アナログ尺度（VAS）の違いに有意な主効果を認めたが、N条件、CW条件、CWN条件間には有意差を認めなかった。本研究の結果、疼痛部位と同一の皮膚分節知覚帯へのTENSには有意な効果があるものの、TENS部位間での有意差は認められなかった。 （分担執筆者：川村博文、西上智彦、山本綾子、<u>辻下守弘</u>、伊藤健一、大矢暢久、高木峰子） 担当部分：被験者への疼痛評価とTENSの実施および統計処理と論文の結果に関する部分の執筆を担当した。
（その他） 手織りプログラムへの参加が認知機能の活性化に与える影響 [口頭発表]	—	平成22年1月	第14回日本在宅ケア学会学術集会（東京） p.94	Sシルバー人材センターに登録中の58歳から77歳の女性で、手織り機を用いて作品を作成するプログラム参加者43人を対象に、週1回1クール3ヶ月間のコースを2回実施した結果、事象関連電位P300と近赤外線分光法を用いた脳イメージングによる測定で、前頭前野の左側部が有意に活性化していることが明らかとなった。 （共同研究者：臼井キミカ、中川知音、丸山麻衣、佐瀬美恵子、兼田美代、<u>辻下守弘</u>、山口道弘、佐々木八千代、白井みどり、上西洋子、津村智恵子） 担当部分：事象関連電位P300と近赤外線分光法による脳イメージング測定を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
膝蓋大腿関節機能不全に対する筋電図バイオフィードバック療法の一経験 [口頭発表]	—	平成 25 年 4 月	第 41 回日本バイオフィードバック学会学術集会（神奈川） バイオフィードバック研究第 40 巻第 1 号 2013 年 p. 88	交通事故により膝蓋腱損傷を受傷し，再建術後に膝蓋大腿骨腎機能不全となった症例に対して筋電図バイオフィードバック療法（以下 BF と略す）を実施し，歩行障害の改善に著効を認めたので，その実施方法と経過について報告した。退院時には，不安定性や疼痛もなく，階段昇降やスクワット動作も問題なくスムーズに可能となっていた。 （共同研究者：辻下守弘、西上智彦、笹田朋香、山本昇吾、孫 康基、梶原沙央里、田辺暁人） 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
高齢者に対するキネクトセンサーを用いたインタラクティブ・リハビリテーションの効果 [口頭発表]	—	平成 26 年 4 月	第 42 回日本バイオフィードバック学会学術集会（東京） バイオフィードバック研究第 41 巻第 1 号 2014 年 p. 50	本研究の目的は，高齢者を対象としてキネリハを用いた運動トレーニングを実施し，全身の機能的身体運動能力やバランス能力に及ぼす影響および認知脳機能に対する効果について検討することであった。対象は，認知症や中枢神経系疾患のないことが確認された健常高齢者 3 名であった。キネリハの所要時間は休息も入れて約 15 分とし，週 3 回の頻度で 2 週間継続した。キネリハの結果 3 名ともに FRT はリーチ距離が改善し，TUG は所要時間が短縮していた。ファイブ・コグテストは手先の運動スピードと注意分割機能が 3 名とも向上していた。 （共同研究者：辻下守弘、川村博文、西上智彦、松谷綾子、井上悦治） 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
認知症患者に対するインタラクティブ・メトロノームの症例報告 [口頭発表]	—	平成 27 年 3 月	第 1 回認知症の早期発見、予防・治療研究会（東京）抄録集 p. 14	本研究では，認知機能の改善を目的とした IM トレーニングが，高齢者の認知症に対しても同様の効果が期待できると考え応用を試みたので報告する。対象は，IM トレーニングを 3 ヶ月間継続できた認知症高齢者 2 名とし，認知症の評価には，改訂長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）と IM の専

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
タイミング誤差のフィードバックトレーニングが時間認知に及ぼす影響 [口頭発表]	—	平成 27 年 4 月	第 43 回日本バイオフィードバック学会学術集会（つくば） バイオフィードバック研究第 42 巻第 1 号 2015 年 p. 85-86	用ソフトに内蔵されているミリ秒単位でタイミング誤差を測定する評価ツールを使用した。IM は、1 セッション約 20 分とし、提示される 1 分間 54 のテンポに対して正確にタイミングを合わせて両手、左右片手といった 3 種類のリズム運動を週 3 回、3 ヶ月間実施した。被験者 2 名は、IM に対する意欲が 3 か月間維持され、トレーニング開始時に比較して、タイミング誤差が大幅に短縮し、それに伴って HDS-R の改善も認められた。IM は、認知症の認知機能の改善にも効果が期待できる。 本研究では、注意欠陥多動性障害（ADHD）と認知症といった代表的な認知機能障害に対してタイミング誤差のフィードバックトレーニングを継続的に実施する機会を得た。対象は、ADHD の中学生 1 名とアルツハイマー型認知症の高齢者 1 名であった。トレーニングには、インタラクティブ・メトロノーム法（IM）を用いた。IM は、1 セッション約 30 分とし、提示されるテンポに対して正確にタイミングを合わせてリズム運動を行う課題を 8 週間で合計 56 セッション実施した。その結果、ADHD ではセッション中期以降でタイミング誤差が小さくなり、認知症ではセッション中期で急激にタイミング誤差が小さくなっていた。 （共同研究者：辻下守弘、西上智彦、松谷綾子、青田絵里） 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。

教育研究業績書

平成31年3月31日

氏名 中馬 成子

研 究 分 野	研究内容のキーワード	
看護学	基礎看護学, 臨床看護学（慢性期）	
教育上の能力に関する事項		
事項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 宝塚大学 1) 基礎看護学Ⅰ（概論）講義の工夫	平成24年4月～ 平成26年3月	24年度から、ナイチンゲールの「看護覚え書き」とヘンダーソンの「看護の基本的となるもの」をグループで読み合わせ、要約を発表する機会をつくった。読むこと、要約することが苦手とする学生像から、看護の本質を捉えることを目的にアカデミックスキルズも体得できるように演習とした。学生の評価では、看護について考えを深めたことやグループによる学びもあり、有意義な講義・演習と評価できた。 25年度からは、実習中の言動や倫理的な態度が十分ではない学生もいたことから、上記のグループワークに加え、実習中の身だしなみおよび言動、実習生の倫理的ジレンマの場面を取り上げた事例を使い、グループワークと成果発表会を行った。実習態度に関する発表では、看護学生としてのあるべき態度について共通理解ができた。倫理的問題については、事前に倫理の原則を講義したこともあり、原則を踏まえた考察と行うべき態度が発表できていた。1年次とはいえ、これらのテーマの必要性を十分認識し、グループワークを行っていたことから、学習テーマ、学習方法として適切であったと評価できた。
2) 基礎看護学Ⅵ（看護過程）演習の工夫	平成26年4月～ 平成27年3月	西南女学院大学において成人看護学で看護過程を教授した経験がある。その経験を生かし、2年次生への理解を深められるように教授内容を考案した。事例展開で用いる病態を骨折という比較的理解しやすい病態を用いた。また、問題点を日常生活に焦点化し、病態の理解よりも看護過程の思考過程を踏めることを重要視した。看護過程の各ステップを丁寧に教授し、学生の反応を見ながら次のステップへと進めている。特にアセスメントすることの理解が最も困難であることから、個人課題、グループワーク、模範解答の提示など繰り返し教授する中で理解を深めるように工夫した。アセスメントのグループワークの発表では、予想以上の成果がみられた。しかし、グループメンバー全員で取り組んだグループとそうではないグループもあり、個人の能力が問われるが、仲間評価を行い、グループワークの効果を高めることもねらいとしている。そこで、学生の危機感と個人の看護過程展開能力を高めるために、期末試験の中での事例展開を計画している。
2 作成した教科書、教材 なし		

事項	年 月 日	概 要
西南女学院大学 宝塚大学看護学部 1) 学生による授業評価	平成25年7月 平成25年7月 平成26年2月 平成26年2月	基礎看護学Ⅰ（概論） 4.2、全科目平均4.0 基礎看護学実習Ⅰ（対象理解）担当学生（17名）による総合評価：大変良い14名、良い3名、やや悪い0、悪い0 基礎看護学実習Ⅱ（看護過程）全学生（116名）による総合評価 大変良い73名、良い40名、やや悪い1名、悪い2名 成人看護学Ⅲ（慢性期・終末期援助論）3.9、全科目平均3.8
4 実務家教員についての特記事項 関西看護医療大学 1) セミナー講師 宝塚大学 2) 講演 3) 講演	平成19年5月 平成21年11月～12月 平成26年11月、12月	兵庫県淡路市の住民を対象に、生活習慣を見直し、再構築することを目的に、5回シリーズの健康教育セミナーを開催した。成人看護学、老年看護学を専門とする教員3名で担当した。生活習慣に関する講義および自宅で行える運動を組み入れた。 兵庫県川西市立病院（兵庫県川西市）看護部からの依頼により看護スタッフを対象に、「看護診断の学びのための中範囲理論」というテーマで講演を行った。臨床で適切な看護診断を確定するには、基盤となる中範囲理論の理解が必要と考え3回シリーズで中範囲理論と看護診断の関係を中心に講義した。 関西電力病院（大阪府大阪市）看護部からの依頼により看護スタッフを対象に、「看護過程と看護記録」というテーマで2回にわたり講演を行った。看護過程の一般的な考え方に加え、看護記録との関連および看護記録の法的な側面から講演した。
5 その他 なし		
職務上の実績に関する事項		
事項	年 月 日	概 要
1 資格、免許 看護婦免許証 修士（経営学） 修士（看護学） 博士（看護学）	昭和56年5月 平成13年3月 平成19年3月 平成27年3月	（第412077号） 九州産業大学経営学部経営学科博士前期課程 第001130号 大阪府立大学大学院看護学研究科博士前期課程 第13号 大阪府立大学大学院看護学研究科博士後期課程 甲第1590号 看第23号
2 特許等 なし		
3 実務家教員についての特記事項 宝塚大学看護学部看護学科学科長 宝塚大学看護学部看護学科学研究倫理委員会副委員長	平成23年4月～平成26年3月 平成24年4月～平成26年3月	宝塚大学看護学部看護学科学科長として、学部長を補佐し学科の運営に携わった。 宝塚大学看護学部看護学科学科看護学科の研究倫理に関して、副委員長とした携わった。

事項	年 月 日	概 要
宝塚大学看護学部看護学科教務委員長	平成26年4月～平成27年3月	宝塚大学看護学部看護学科看護学科の教務に関する業務に委員長として携わった。
奈良学園大学保健医療学部看護学科教務部会長	平成28年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の教務に関する業務に委員長として携わった。
4 競争的研究資金獲得 科学研究費助成金	平成29年度～平成31年度	研究課題「父親への育児支援情報を多角的に発信するサービスシステムの普及に関する研究」基盤C 研究代表者：宝塚大学看護学部 上山直美、分担者 田中祐子、子安恵子、松尾博哉、堀陽子、中馬成子、丸上輝剛
奈良学園大学共同研究費	平成29年4月～平成30年3月	研究課題「グループワークを主とした看護過程演習に電子カルテを導入することによる教育効果およびグループワークと社会人基礎力との関係」研究代表者 中馬成子、共同研究者 北島洋子、丸上輝剛、瀬山由美子
5 その他 なし		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 2018年要点がわかる出題傾向がみえる基礎看護学（看護師国家試験対策）	共著	平成29年11月	ピラールプレス社	看護師国家試験科目の「基礎看護学」について、過去問を読み解くための要点について説明している。受験生が過去問の要点の学びから知識を広げたり深めたりしながら、看護師国家試験合格のための学力向上の支援を目的としている。 監修：守本とも子 編著：中馬成子 共著：北島洋子、丸上輝剛、瀬山由美子、澤田京子、平野加代子
(学術論文) 1. 2型糖尿病患者のインスリン療法に対する心理的行動的反応の変遷（査読付）	共著	平成23年12月	日本看護研究学会雑誌、第34巻、第5号、59-69.	2型糖尿病患者のインスリン療法に対する心理的行動的反応を明らかにするために、インスリン療法を1年以上継続していえる20名を対象とした。インタビュー内容から質的帰納的に分析した。その結果、インスリン療法の告知時は、【インスリン療法に対し否定的感情】をもっていたが、その後【インスリン療法の知識による認識の変化】がもたらされ、【インスリン療法の開始を決意】し、インスリン自己注射を実施し体験する過程を経て、【インスリン自己注射に対する安心感を獲得】しており、【インスリン療法を維持する意志と行動】という肯定的な態度へと変遷していた。治療開始時の心理的行動の問題を焦点化したうえで、早期から正しい知識と安心感が得られる情報を提供し、肯定的認識と行動をとるための援助が重要であることが示唆された。 共著者：中馬成子、土居洋子（主たる研究遂行者）
2. 標準化死亡比の高い地域における2型糖尿病患者の療養行動の実態-療養行動の継続の看護支援に向けて-（査読付き）	単著	平成24年3月	大阪府立大学看護学部紀要、第18巻、第1号、97-106.	糖尿病の標準化死亡比の高い地域の治療中断の経験を有する2型糖尿病患者の療養行動の実態を調査した。10名に半構成的面接を行い質的帰納的に分析した。療養行動を左右する病状の認識は【目標値と現在の血糖値を比較して病状を理解している】【病状はわからない】【合併症は怖いから回避したい】【合併症は自分のこととして考えられない】病気の管理に関する理解は【食事療法が基本である】【自己管理により病状が改善する】【生活に生かせるほど理解していない】が抽出された。実践している療養行動は【食事内容・量を変更した】【運動療法を継続している】など、実践できていない療養行動は【適切な食事量を継続できない】【教育後すぐには療法行動がとれない】などが抽出された。医療・生活環境を考え、患者が生活の中で療養行動を継続するためのセルフレギュレーションへの支援が必要であると示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 2型糖尿病患者の療養行動の継続を促すセルフレギュレーションに基づく介入効果（博士論文）	単著	平成27年3月	大阪府立大学大学院看護学研究科	都市部と異なりへき地では糖尿病の専門職が少なく，必要な療養指導が実施されていない現実がある。今回，へき地の一つである農漁村地域における2型糖尿病患者を対象に，その療養行動を明らかにし，自立をうながすと考えられるセルフレギュレーション（以下，SR）に基づく支援プログラムを作成し患者に用い，統計解析しその効果を明らかにした。その結果，糖尿病に関する知識と自己管理下位尺度（フットケア，規則正しい生活）について介入後の変化量に有意差がみられた。摂取カロリーも介入群の方が減少傾向にあった。SR過程（目標設定，療養行動のセルフモニタリング，療養行動についての自己判断，療養行動の結果の自己反応）を達成した患者は，19名中14名であった。達成できなかった5名の患者の理由は，農作業や介護ストレス，友人等の地域の付き合いなどの環境的要因により適切な療養行動がとれず，否定的な自己反応を示していた。地域とのつながりが強い農漁村地域では，療養行動と地域との付き合いや家業・介護との折り合いをつけるための支援の強化が重要であることが示唆された。 A4 全87頁
4. 基礎看護学における看護過程演習のグループワークによる主体的な学習態度の変化と看護過程の習得状況	共著	平成31年3月	奈良学園大学紀要第10集	看護系大学に在籍する2年次生を対象に、グループワークを導入することによる教育効果を明らかにすることを目的にアンケート調査を行った。その結果、主体的な学習態度をしめす授業プロセス。パフォーマンス尺度の9項目のうち、有意差が「単位さえもらえればいいという気持ちで授業にでる（逆転項目）」であった。平均値ではすべての項目が演習終了時に高値を示していた。最も低かったのは「プレゼンテーションの際、何を質問されても大丈夫なように十分調べる」であった。看護過程の理解度は看護問題の理解をしめす「複数ある看護問題の優先順位の理由が説明できる」、続いて看護計画の理解の項目である「達成可能な目標が立てられる」、「分析の結果から看護問題を明確にできる」の順であった。看護過程にグループワークを導入することは看護過程の理解や主体的学習にとっては意義のある事が示唆された。 共著者：中馬成子、北島洋子、丸上輝剛、瀬山由美子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他) 1. 看護学生のドメスティック・バイオレンスの捉え方ーリプロダクティブ・ヘルス/ライツを踏まえてー	—	平成21年8月	第1回日中韓看護学会、北京	ジェンダーの視点の導入と学生の生き方や生きる力の形成の一助となることをねらいとして、看護学生に対して性の現状と問題を踏まえたドメスティック・バイオレンスに対する講義を組み入れている。看護大学生92人対象の講義内で視聴したドメスティック・バイオレンス教材の感想を自由記載させたものを分析した。その結果、13のカテゴリーが抽出された。①『DVに対する支援・対策』②『加害者におけるDVの要因』③『DVの実態に対する思い』④『被害者におけるDV被害の要因』⑤『加害者によるDV行為への思い』⑥『DVに対する疑問』⑦『DV防止の願望』⑧『被害者の苦痛』⑨『DVの性質・構造・要素』⑩『被害者にとってほしい行動』、⑪『愛することの意味』⑫『被害者の立場に立った思い・考え』⑬『被害者の気持ちの理解』が抽出された。これらの結果から、学生はドメスティック・バイオレンスの本質を捉えながら、被害者である女性を支援し、保護することを考え、暴力に対して非難する立場をとっていた。そして、人を愛することの意味を考え、女性の権利について、被害者および加害者の立場に立って客観的に思考していた。 共同発表者：上山直美、中馬成子、小出水寿英、内山和美
2. Discontinued Consulting Behavior of Patients with Type-2-Diabetes Mellitus in an area having Less-Number of Health Service Facilities (糖尿病専門職の少ない地域における2型糖尿病患者の療養行動の中断について)	—	平成21年9月	The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, p.141.	Purpose:To clarify discontinued consulting behavior of type-2 diabetes patients living in an area having less-number of health service facilities. Method:Data were obtained from 10 type-2 diabetes patients by using a structured or semi-structured interview. Results:1) Reasons why discontinued consulting a doctor were ; (1) work or community activity was more prioritized,(2) not able to pay for consulting,etc 2) In terms of difficulty in consulting a doctor regularly, the following responses were obtained ; no problem because of being able to reserve the consulting day,etc.3) What patients perceived about diabetes were; I don't understand well, complications never happen to me, complications are dreadful, etc.4) Major Problems with Self-Care Behavior Following Diabetes Education (1)Inability to acquire accurate knowledge (2)Unable to implement proper self-care behavior despite having knowledge of that behavior (3)Implementation of incorrect self-care behavior. Conclusion: It is important to provide diabetes knowledge according to what patients perceived about diabetes, what makes them feel fear, and how they handle their inconvenience for consulting. <u>Nariko Chuman</u>

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				本研究の目的は糖尿病専門職の少ない農漁村地域における2型糖尿病患者の療養行動を明らかにし、主体的な療養行動の継続を目指したセルフレギュレーション(以下、SR)に基づく支援プログラムを作成すること、支援プログラムの実践によりその効果を明らかにすることである。1.対象:成人期以降の2型糖尿病患者 2.研究デザイン:準実験研究 3. 調査内容と尺度 (1) 患者特性:基本属性、療養状況など (2)自己管理状況:糖尿病の知識(糖尿病治療手引きより作成)、簡易的自記式食事歴法質問表、歩行数、目標達成度、糖尿病自己管理行動尺度、認知行動的セルフモニタリング尺度、生理学的データ(BMI、HbA1c)(3)自己効力感:慢性疾患患者の健康行動に関するセルフエフィカシー尺度 (4)SR過程:SR評価基準 5)データ収集方法:介入前、介入3か月後に質問紙調査を行い、面談や電話による介入時にSR状況を聴取した。両群の自己管理に関する介入前と終了後の変化量は、介入群の知識 ($p=0.001$)、糖尿病自己管理下位項目(フットケア等) ($p=0.048$) が有意に高まり、摂取カロリーは減少傾向にあった($p=0.080$)。糖尿病専門職の少ない農漁村地域において、患者自身が療養行動をコントロールする過程を支援するSRを基盤にした支援プログラムは、自分の病状や療養行動の問題点を評価するための一般的な知識や生活管理するための実践的知識の獲得を促進し、行動変容とその継続へ肯定的な反応をもたらしており、その有効性が確認できた。
3. 農漁村地域におけるセルフレギュレーションに基づく介入後悔ーセルフレギュレーションの未達成要因の分析から -	—	平成27年8月	第10回日本ルーラル・ナーシング学会 口演発表	2型糖尿病患者に対し、セルフレギュレーション(SR)に基づく支援プログラムを実践し、SR過程が達成できなかった要因を明らかにすることを目的に成人期以降の2型糖尿病患者5名を対象とした。BanduraのSR過程をもとに評価基準を作成し対象者の発言と照合し質的に分析した。面接回数は計7回であった。各過程の発言は目標の進捗については、友人と会っている時は過食する、忙しくて目標を守れない、我慢の反動で過食する、など。規則性は、農繁期は忙しいから間食しないが農閑期は過食する、ボランティア・親の介護・農作業で忙しい、など。療養行動を実践する価値については、間食が悪いのはわかっているが止められない、友人にダイエットをしていると話すと笑われるから断れない、など。行動の原因帰属については、友人といっていると断れない、農作業や孫の世話で忙しい、仕事が忙しい、など。自己反応については、計画はするものの行動が伴わないから困る、実行できたりできなかったりと落ち着かない、実行しなくてはと思いながらできなかった、などであった。3世代家族における女性は、近隣の人々との付き合い、農作業や介護の負担などから自己管理の優先度が低くなり自己管理の帰属を自分と考えることには困難が伴い、生活上の価値を自身の療養行動よりも人間関係の維持に置いていた。

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の 別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
4. 2型糖尿病に対するセルフ レギュレーションに基づく介 入効果－糖尿病専門職の少な い地域における3か月間の面 談結果の分析－	—	平成27年9月	第20回日本糖尿病看護・ 教育学会 口演発表	2型糖尿病患者に対し、セルフレギュレーション(SR)に基づく支援プログラムを実践し、SR過程が達成できた要因を明らかにすることを目的に成人期以降の2型糖尿病患者14名を対象とした。BanduraのSR過程をもとに評価基準を作成し対象者の発言と照合し質的に分析した。面接回数は計7回であった。各過程でも発言は、食事はカロリーを減らす調理法に変えた、食事量を抑えた、野菜を増やした、など。運動は遠回りして歩数を増やした、足の調子により歩行時間を変えた、正月休みも歩いたなど。自己判断の過程は、歩行により血糖値が下がり、運動により体重が落ち、友人から体重減少を賞賛された、歩数の増加に達成感をもち、目標に向けた実施が励みになり、生活習慣が問題だから自分で努力する、など。最終の自己反応は、療養行動を継続する、元の生活に戻らないようにする、療養行動に自信がついた、などであり、最終の過程では、療養行動を変えたことで体重が減量し、HbA1c値も改善したので今後も努力する、といった肯定的反応を示す発言が多かった。SRの過程を支援することにより、SRのセルフモニタリングの段階で自分の行動を振り返り、行動を継続し、体重とHbA1c値の改善がみられた者が多かった。その結果、目標に向けた行動の価値を見出し、療養行動を自分のこととして考え始めた。そこで認知変容が生じ、行動変容を引き起こしたと考えられた。
5. 2型糖尿病に対するセルフ レギュレーションに基づく介 入効果－専門職の少ない地域 における自己管理－	—	平成27年12月	第35回日本看護科学学会 口演発表	本研究の目的は、セルフレギュレーション(SR)に基づく支援プログラムを実践し、その効果を明らかにすることであった。データは介入前、介入3か月後に糖尿病の知識(糖尿病治療手引きより作成)、簡易的自記式食事歴法質問表、歩行数、目標達成度、糖尿病自己管理行動尺度、認知行動的セルフモニタリング尺度、自己効力感、慢性疾患患者の健康行動に関するセルフエフィカシー尺度を用いて調査した。生理学的データは診療録、目標実行度はセルフモニタリングノートから収集した。対象者の概要は、介入群19名(年齢 59.8 ± 6.1 歳)、対照群10名(年齢 64.3 ± 3.9 歳)であった。介入前の両群間には年齢($p=0.048$)を除き有意差はなかった。支援プログラムの効果として、両群の自己管理に関する介入前と終了後の変化量は、介入群の知識($p=0.001$)、糖尿病自己管理下位項目(足の観察と清潔を保つ、規則正しい生活)($p=0.048$)が有意に高まり、摂取カロリーは減少傾向にあった($p=0.080$)。SRを基盤にした支援プログラムは、自分の病状や療養行動の問題点を評価するための一般的な知識や生活管理に関する実践的知識の獲得を促進していた。その結果、食事摂取量を減らし、足の清潔と生活を整え、糖尿病の自己管理の基本的な療養行動に影響していた。合併症を防止し、患者のQOLを維持するための教育的支援の質を担保する教育方法が示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. Intervention effect based on self-regulation to promote the continuation of self-care behavior of patients with type-2 diabetes mellitus (2型糖尿病患者の療養行動の継続を促すセルフレギュレーションに基づく介入効果)	—	平成28年3月	19th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) (Poster)	The purpose of this study was to clarify the self-care behaviors offered to type 2 diabetes patients in rural areas with an insufficient number of diabetes specialists, to create a support program based on self-regulation that aimed at continuing self-care behaviors, and to clarify the effect by implementing the support program. 1. Subjects: Adult patients with type 2 diabetes. 2. Study Design: Quasi-experimental design 3. Data Collection Methods and Outcome Measures 1) Patient Characteristics: medical treatment situation, etc. 2) self-care : Self-care knowledge of diabetes, Brief-type self-administered diet history questionnaire, Scale of diabetes self-care behaviors, Cognitive behavioral self-monitoring scale, and physiological data (BMI, HbA1c) 3) self-efficacy Questionnaire was answered before intervention and 3 months after intervention. The difference of change regarding self-care in both groups before and after intervention showed that the knowledge ($p=0.001$), Diabetes self-care behaviors subscale(foot care) ($p=0.048$) of the intervention group increased significantly, and the calorie intake showed a tendency to decrease ($p=0.080$). This programs supported the process of controlling self-care behaviors by patients themselves in rural areas with an insufficient number of diabetes specialists are significant in acquiring and managing concrete knowledge for patients in order to understand the condition of the disease and to identify the problems in their daily lives. <u>Nariko Chuman</u> 本研究の目的は糖尿病専門職の少ない農漁村地域における2型糖尿病患者の療養行動を明らかにし、主体的な療養行動の継続を目指したセルフレギュレーション(以下、SR)に基づく支援プログラムを作成すること、支援プログラムの実践によりその効果を明らかにすることである。1.対象:成人期以降の2型糖尿病患者 2.研究デザイン:準実験研究 3. 調査内容と尺度 (1)患者特性:基本属性、療養状況など (2)自己管理状況:糖尿病の知識(糖尿病治療手引きより作成)、簡易的自記式食事歴法質問表、歩行数、目標達成度、糖尿病自己管理行動尺度、認知行動的セルフモニタリング尺度、生理学的データ(BMI、HbA1c)(3)自己効力感:慢性疾患患者の健康行動に関するセルフエフィカシー尺度 (4)SR過程:SR評価基準 5)データ収集方法:介入前、介入3か月後に質問紙調査を行い、面談や電話による介入時にSR状況を聴取した。両群の自己管理に関する介入前と終了後の変化量は、介入群の知識($p=0.001$)、糖尿病自己管理下位項目(フットケア等) ($p=0.048$)が有意に高まり、摂取カロリーは減少傾向にあった($p=0.080$)。糖尿病専門職の少ない農漁村地域において、患者自身が療養行動をコントロールする過程を支援するSRを基盤にした支援プログラムは、自分の病状や療養行動の問題点を評価するための一般的な知識や生活管理するための実践的知識の獲得を促進し、行動変容とその継続へ肯定的な反応をもたらしており、その有効性が確認できた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7.Changes in Eating Behavior of patients with Type 2 Diabetes Mellitus – Comparison based on Degree of Achievement of Self-Regulation in Rural areas- 農漁村地域における食事行動の変容－セルフレギュレーション過程の達成別による比較－	単著	平成29年11月	The 5th International Nursing Reserch Conference (第5回世界看護科学学会)	Objectives: This study was conducted for the purpose of implementing a support program based on self-regulation (SR) targeted at type 2 diabetes patients residing in rural areas, and to identify differences in eating behavior between those patients who were able to successfully achieve SR and those who were not. Methods: 1) Subjects: Nineteen type 2 diabetes patients of adult 2) Intervention: A support program based on SR was developed and the program was used to provide intervention through SR over the course of 3 months. 3) Analysis: Analysis consisted of a questionnaire survey (consisting of a self-administered nutrition survey) and interviews relating to SR. Results: Fourteen of the patients were able to have successfully achieved SR (achieved group ; AG) while 5 patients were not (unachieved group ; NAG). Patients of the NAG were observed to have eating habits exhibiting higher levels of energy intake (1,765 vs 2,300Kcal), sweets intake (50 vs 87g) and fruit intake (65 vs 151g) than in the AG prior to intervention. Energy intake (1,765 vs 1,714Kcal) in the NAG following intervention was nearly the same as that of the AG prior to intervention, while sweets (49 vs 63g) and fruit intake (96 vs 97g) levels exceeded those of the AG prior to intervention. Conclusion: The findings of this study indicated the difficulty in encouraging diabetes patients with a tendency towards overeating to change their eating behavior.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				【目的】農漁村地域に在住する2型糖尿病患者に対し、セルフレギュレーション(SR)に基づく支援プログラムを実施し、SR過程が達成できた者と達成できなかった者の食事行動に関する相違点を明らかにする。【方法】 1) 対象：成人期以降の2型糖尿病患者19名。 2) 介入方法：SRに基づく支援プログラムを作成し、3か月間にわたりSRに働きかける介入を行った。 3) 分析：アンケート調査(自記式栄養調査，糖尿病自己管理行動尺度、認知行動的セルフモニタリング尺度、自己効力感尺度)，生理学的データ(BMI、HbA1c値)，SRに関するインタビューを基に分析した。 【結果】 SR過程が達成できた者は14名(達成群)，達成できなかった者は5名(未達成群)であった。介入前の未達成群の摂取エネルギー量，菓子類，果物の摂取は達成群より多く摂る習慣がみられた。未達成群の介入後の摂取エネルギー量は，達成群の介入前とほぼ変わらず，菓子類，果物類は達成群の介入前を上回っていた，両群において，介入前のベースラインおよび介入前後の変化量の有意差はなかった。農漁村地域では近隣との密着性が高く，付き合いを優先し，会食の誘いがあれば断れない傾向にあった。 【考察】 過食する傾向にある糖尿病患者の食事行動を変容させることの困難さが示された。
8. Development and Utilization of an Electronic Chart Training System for Nursing Process Education 看護過程演習における教育用電子カルテ導入による効果と有用性	共著	平成29年11月	The 5th International Nursing Research Conference (第5回世界看護科学学会)	Objectives: The present study aimed to develop the electronic chart training system to foster students' intellectual abilities during nursing process exercises.Methods: We developed the electronic chart training system using Excel VBA, a programming language that is used to develop software.Results: The electronic chart training system developed in the present study was found to be highly effective, and it slightly surpassed the effectiveness of the actual electronic chart system used in hospitals. Additionally, the new system covered almost all functions of the electronic chart system that is used currently.Conclusion: It is apparent that, during nursing education, students' thinking skills improved by using the new electronic chart training system. We sincerely hope that this system will be used widely in nursing colleges. Terutaka Marukami , Yumiko Seyama , <u>Nariko Chuman</u>

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				目的:本研究は、看護過程演習中に学生の看護過程展開能力を育成するための教育用の電子カルテのシステムを開発することを目的とした。 方法:ソフトウェアを開発するためのプログラミング言語であるExcel VBAを用いて本システムを開発した。本システムは、現在使用されている電子カルテシステムのほとんどすべての機能をカバーしている。結論:看護教育では、新しい電子カルテシステムを作成し、学生の演習で活用できた。 共著者:丸上輝剛、瀬山由美子、中馬成子
9. 看護過程演習における社会人基礎力の変化と学習効果	共著	平成30年3月	第28回日本医学看護学教育学会学術集会	【目的】 演習用電子カルテを活用した看護課程演習におけるグループワークの活用による社会人基礎力の変化と看護過程の教育効果を明らかにする 【方法】 対象：看護系大学2 年次配当科目の看護過程演習受講生79 名。調査方法：無記名自記式質問紙調査。看護過程演習全15 回のうち看護過程の情報収集終了時(第1 回調査)と全講義終了時(第2 回調査)に調査した。調査内容：社会人基礎力尺度(北島ら，2011)36 項目、主体的な学修態度尺度9 項目(畑野，2014)、自作の電子カルテ操作の理解10 項目、自作の看護過程の理解24項目(情報収集12 項目、分析～看護計画12 項目)。分析方法：SPSS Ver. 25 を用い記述統計量、Wilcoxon 符号付順位検定、Spearman の相関係数を算出した。 【結果】 第1 回の回収25 名、回収率31. 6%、第2 回の回収20 名、回収率25. 3%、そのうち連結不可能匿名化により第1 回と第2 回の照合が可能であった12 名を分析対象とした。社会人基礎力は第1 回(中央値135. 5)と第2 回(中央値154. 0)の間に有意差があることが示された。また社会人基礎力と看護過程の理解の相関係数は第1 回0. 82、第2 回0. 87 を示し有意な正の相関を認めた。 【考察】 看護過程演習の前後比較において社会人基礎力が伸長されることが明らかとなった。また、社会人基礎力を伸長させることにより看護過程の理解も促進されることが推察された。 共著者：北島洋子、丸上輝剛、瀬山由美子、中馬成子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10.Behavioral Changes in Type 2 Diabetes Patients Achieving Self-Regulation	単著	平成30年11月	The 12th International Diabetes Federation Western Pacific Region Congress (第12回国際糖尿病学会会議)	Objective The objective of this study was to intervene in the self-regulation (SR) of type 2 diabetes patients in order to determine the effects of intervention based on language and behavior as related to behavioral changes in a group that achieved SR. Method : Subjects: The subjects consisted of 14 patients who underwent intervention during the course of SR and who had successfully achieved SR. Intervention: A support program was prepared based on SR and used in intervention for promoting SR for 3 months. Analysis: Language and behavior representing behavioral changes were analyzed in self-monitoring, self-judgment and self-reaction during the course of SR in the group that successfully achieved SR. Results : Self-monitoring: The patients could achieve their goals by recording their actions and adopted behavior such as increasing the amount of walking and adjusting meal contents. Self-judgment: The patients experienced the importance of diet and understood the value of recuperative behavior based on statements indicating that they were praised by friends for having lost weight or that their blood sugar levels had gone up due to the amount of food eaten and meal contents. They also had a sense of achievement an experienced success when the number of steps on their pedometer increased, and all patients led their lives with an awareness of changes in body weight and HbA1c levels. Self-reaction: The patients found value in striving towards a goal and adopted recuperative behavior through internal attribution in the form of behaving in a certain way for one's own benefit. Changes in Hb1Ac Level: Hb1Ac level was observed to improve by 0.1% to 2.1% in 10 of the 14 patients. Discussion: There were many members of a group of patients who achieved SR who succeeded in improving Hb1Ac levels as a result of reflecting back on their behavior at the stage of self-monitoring, and this is thought to have resulted in a successful experience that caused the patients to find value in their recuperative behavior while also obtaining the positive self-reaction of taking responsibility for controlling their own Hb1Ac level.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				目的 2型糖尿病患者のセルフレギュレーション（SR）に対する介入を行い、達成群の行動変容に関する言動から介入の効果を明らかにする。 方法 対象）2型糖尿病患者のSR過程の介入を受けた患者のうちSR過程を達成できた患者14名。 介入）SRに基づく支援プログラムを作成し3か月間にわたりSRに働きかける介入を行った。分析）SR達成群のSR過程の中のセルフモニタリング、自己判断、自己反応における行動変容を表す言動を分析した。 結果 セルフモニタリング：実践したことを記録することで目標達成度がわかり、歩行数を増やし食事内容を調整するなどの行動をとっていた。 自己判断：友人から体重減少を賞賛され、食事量や内容で血糖値が上がったという発言から食事の重要性を体験し歩行計の歩数が増えることに達成感を持ち成功体験を経験し全員が体重とHbA1cの変化を意識しながら生活していた。 自己反応：目標に向け行動することに価値を見出し、行動は自分のために行うという内的帰属により療養行動をとっていた。 HbA1cの変化：14名中10名のHbA1cが0.1～2.1%改善が見られた。 考察 SRの達成群はセルフモニタリングの段階で行動が振りかえられHbA1cの改善があった者が多く、これが成功体験となり療養行動に価値を見だし自分の責任でコントロールできたことにより肯定的な自己反応が得られたと考える。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 服部 律子

研 究 分 野		研究内容のキーワード
看護学(生涯発達看護学)		母性・女性看護、助産学
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 大学院 (1) 双方向授業	平成 15 年 10 月 ~ 平成 21 年 3 月	名古屋市立大学大学院看護学研究科「性・生殖看護学演習」(大学院博士前期課程 1 年次配当、半期、2 単位)は文献のクリティークによる研究疑問の設定を行う科目である。学生が興味をもったテーマ、なかでも周産期を中心とした女性の健康に関するテーマを担当し、双方向的授業を試みた。学生が興味をもっているテーマや疑問を抱えている内容を出してもらい、それに関する国内外の文献を紹介しクリティークを行う。社会人学生がほとんどであるので、時には e-mail を活用しながら演習を進めている。双方向的に進めることにより、研究疑問の設定や研究方法の検討の過程において、学生の興味や疑問が明確になり、それを発展させたり解決できるよう工夫した。
大学院(助産学の科目)・看護学部・看護短期大学部・専門学校 (2) ロールプレイの活用	平成 8 年 4 月 ~ 平成 27 年 7 月	名古屋市立大学看護短期大学部専攻科助産学専攻講義・演習科目「助産診断・技術学Ⅱ」(半期、必修科目、3 単位、専攻科生 15 人クラス)、名古屋市立大学看護学部演習科目「助産診断・技術学Ⅰ」(4 年次配当、半期、選択科目、2 単位、助産選択科目履修生 8 人クラス)ならびに「助産診断・技術学Ⅱ(4 年次配当、半期、選択科目、3 単位、助産選択科目履修生 8 人クラス)、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程(助産師国家試験受験資格取得コース)講義・演習「助産実践演習Ⅰ」(1 年次配当、半期、必修科目、2 単位、コース選択学生 11 名、2 単位)、愛知県医師会立名古屋助産師学院講義・演習科目「助産診断・技術学Ⅰ」(通年、必修科目、1 単位、助産学生 20~22 名)ならびに「助産診断・技術学Ⅱ」(通年、必修科目、2 単位、助産学生 20~22 名)、相山女学園大学看護学部演習科目「母子支援看護論演習Ⅱ(母

(3) 課題による学習内容の統合	平成 8 年 4 月 ～平成 27 年 7 月	性)」(半期、必修科目、1 単位)において実践してきた。 これらの科目の中でも、学生が特に苦手とする観察技術や保健指導技術の教育において、ロールプレイを取り入れた。学生は妊産婦役と看護師・助産師役に分かれ、提示された場面設定・条件を基に診察や保健指導を展開し、終了後全体でディスカッションする。 このことにより、看護師としての行動を客観的に観察するだけでなく、妊産婦の気持ちを理解することができるようになり、講義で学習した技術を自らの行動レベルで理解できるようになり、少ない実習場面でその技術を習得できるようになった。さらに、実習への移行をスムーズにした。 名古屋市立大学看護短期大学部専攻科助産学専攻「助産診断・技術学Ⅱ」(半期、必修科目、3 単位)名古屋市立大学看護学部専門科目「助産診断・技術学Ⅱ」(4 年次配当、半期、選択科目、3 単位)、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程(助産師国家試験受験資格取得コース)「助産診断技術特論Ⅰ」(1 年次配当、半期、必修科目、2 単位)、愛知県医師会立名古屋助産師学院「助産診断・技術学Ⅱ」(通年、必修科目、2 単位)、椋山女学園大学看護学部講義・演習科目「母子支援看護学概論」(半期、必修、2 単位)「母子支援看護論Ⅱ(母性)」(半期、必修、1 単位)「母子支援看護論演習Ⅱ(母性)」(半期、必修、1 単位)において実施してきた。 これらの科目は、産科学の講義内容を基に助産診断と助産技術または看護診断と看護技術について学習する科目である。学生は母体の生理的変化や胎児の発育などと、妊産婦に現れる症状や身体的変化、そして助産診断内容を理解する過程において、それらを統合して理解することに困難を生じる。そこで、妊娠や分娩の時期毎に、講義・演習終了後に時期にそってそれらを一覧表にまとめる課題を課し、誤りや不足している点などについて指導し、追加・修正を行った後再提出させる。このことにより、学生自身が理解不十分な点が認識できるようになり、関連する複数の科目の学習内容を統合させて助産診断と助産実践に活用できる知識として整理できるようになった。学生は実習中にも返却された課題を携帯し、実習に活用すると共に、さらに実習で学習した内容を追加しており、このことから、課題による学習効果はあったものと考えられる。また、この課題を通して教員側で
-------------------------	--	--

(4) シラバスの活用	平成 11 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	も学生個々の理解が不十分な点を把握することができ、実習においてその点を重点的に指導することができるようになった。 名古屋市立大学看護短期大学部専攻科助産学専攻「助産診断技術学Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ」（全て半期、必修科目、計8単位）、名古屋市立大学看護学部専門科目「周産期看護学」（3年次配当、半期、必修科目、2単位）「助産診断・技術学Ⅱ」（4年次配当、前半期、選択科目3単位）、「助産管理」（4年次配当、半期、選択科目、1単位）、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程（助産師国家試験受験資格取得コース）の担当のすべての必修科目、愛知県医師会立名古屋助産師学院「助産学概論」（通年、必修科目、1単位）、「助産診断・技術学Ⅰ」（通年、必修科目、1単位）、「助産診断・技術学Ⅱ」（通年、必修科目、2単に）において実施した。 統一した様式で作成されているシラバスに加え、単元毎に到達目標を提示したシラバスを独自に作成し、学生に提示し、これらに沿って授業を進めている。授業では単元毎の到達目標を提示する以前に比べ、各単元終了時に学生が質問するようになり、学習内容の整理を試験直前まで持ち越さないよう努力する学生が増えた。
(5) 総合演習の導入	平成 15 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	名古屋市立大学看護学部専門科目「助産診断・技術学Ⅱ」（4年次配当、半期、選択科目、3単位）、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程（助産師国家試験受験資格取得コース）「助産実践演習Ⅰ」（1年次配当、半期、必修科目、2単位）、愛知県医師会立名古屋助産師学院「助産診断・技術学Ⅱ」（通年、必修科目、2単位）において、妊娠期や分娩期の助産過程の総合的な演習を実施している。事例を提示し、その所見から助産診断を行い、助産方針・計画を決定し、それに基づく保健指導や分娩介助技術の実践までを演習し、最後に助産診断や助産計画の妥当性を検討する。この一連の演習を3事例程度繰り返す。総合演習を導入したことによって、学習内容を統合し、助産実践に活用できる形へと整理できるようになった。また、総合演習は課題による学習内容の統合の段階では学生の取り組みにかなりの差が生じること、整理した知識を助産診断の過程でどう使用するかについて十分に理解できない学生がみられるが、学内でシミュレーションすることにより、ある一定のレベルまで到達させることができるようになった。このことに

(6) 産後の母子の看護過程学習におけるアクティブラーニングの導入	平成 25 年 4 月 ～ 平成 28 年 3 月	より、実習における助産診断がスムーズにできるようになったことや、助産診断や計画の立案の段階で知識が整理できるようになったこと、そして事例に応じた保健指導や分娩介助技術について考えられるようになるなどの効果を上げている。 相山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（3年次配当、半期、必修科目、1単位）において、産後の母子の看護過程の授業でアクティブラーニングを導入している。臨床場面で経験する状況に沿って事例を提示し、看護過程の段階ごとにグループワークと発表、解説等を相互に繰り返しながら展開している。このことにより、学生たちからは実践的思考と看護過程の展開の流れが理解できるようになったと評価が得られている。
(7) 周産期の看護過程学習におけるロールプレイ形式での演習の導入	平成 26 年 4 月 ～ 平成 27 年 7 月	相山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（3年次配当、半期、必修科目、1単位）において、実践的な技術の習得を目的に、ロールプレイ形式での実践的な技術の演習を導入している。 設定に基づいて教員が妊婦・褥婦を演じ、学生は看護師として臨床場面に即した観察を行う。このことにより、学生はコミュニケーション技術とフィジカルアセスメント技術を統合させ、看護行為としての観察技術が学習できるようになったと評価を得ている。
(8) クリッカーの活用	平成 26 年 4 月 ～ 平成 28 年 2 月	相山女学園大学看護学部「母子支援看護学概論」（2年次配当、半期、必修科目、2単位）において、授業内でクリッカーを活用し、学生の意見をきいたり、授業への導入の小テストを行った。
(9) 母性看護技術演習における反転授業の導入	平成 27 年 4 月 ～ 平成 27 年 7 月	相山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（3年次配当、半期、必修科目、1単位）において、母性看護技術部分を反転授業で実施した。事前にVTRで事前学習した技術を、授業では“声掛け”やその時に観察すべきこと、留意点などと統合して「看護行為」として組み立てることができ、学生は、実習場面でも一連の行為としてスムーズに実施できるようになった。

(10) 観察に基づく理論の学習の試み	平成 27 年 9 月 ～ 平成 30 年 2 月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（2 年次配当、半期、必修科目、2 単位）において、母性看護学の基本となる理論の理解を促すため、日常生活場面で母子の観察結果をグループで理論に基づいて分析しながら理論の理解と看護場面への理論の活用方法の理解を促す取り組みを行った。実際に自分が観察してきた具体的な場面と理論が結びつくことにより理解が深まっていた。
(11) ジグソー法やペアワーク、グループワークの導入	平成 29 年 9 月 ～ 平成 30 年 2 月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（2 年次配当、半期、必修科目、2 単位）の各回の授業において、学生たちの能動的な学習を促し、学習内容の理解を深めたり、多様な考えに触れ多角的な理解を促すことを目的として、ジグソー法やシンク・ペア・シェア、ペアワークやグループワーク等アクティブラーニングの手法を取り入れた。 学生たちは次第にいろいろな学生ともワークに取り組みディスカッションできるようになり、私語もほとんどなく積極的に学習に取り組むようになっていった。
(12) 課題評価へのルーブリックの導入	平成 29 年 9 月 ～ 平成 30 年 2 月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（2 年次配当、半期、必修科目、2 単位）の課題評価にルーブリックを導入した。作成したルーブリックを課題提示時から学生と共有することにより、学生自身が取り組むべき課題を具体的に理解すると共に、求められている水準も理解できたことで低い評価のレポートが減少した
2 作成した教科書、教材		
(1) インターネット上で利用できる復習用教材の作成	平成 24 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	愛知県医師会立名古屋助産師学院において、基礎助産学系科目と助産診断・技術学系科目とを統合し、周産期の助産診断について段階的に復習ができる教材を作成した。モジュール学習の考え方を基本に、周産期の助産診断を導き出すための知識の整理、アセスメントの統合を段階的に行える教材を作成し、インターネット上で利用できるようにした。在学生はいつでも、どこからでもアクセスして学習できるため、試験のための復習だけでなく、実習中にも閲覧して診断プロセスを復習できるようになり、繰り返しの学習が可能となった。
(2) 母性看護技術の V T R	平成 27 年 4 月 ～平成 27 年 7 月	反転授業用に、授業内容に沿った技術の V T R を作成した。要点はキャプチャーを入れるなど、授業と連動する内容とした。学生からは「眠くならない」「実習前の復習にも使え思い出しやすい」などの評価を得た。

3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 学生による授業評価 (2) 授業の教員の相互評価	平成 25 年 7 月 平成 27 年 7 月 平成 27 年 12 月	平成 25 年度に相山女学園大学で実施された授業アンケートでは、看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」ABCD クラス、EFGH クラスにおいて、総合的にみて満足であった学生は、「その通りである」が 86.5～77.1%「どちらかといえばそのとおりである」20.8～13.5%という結果であった。授業の理解のしやすさは「その通り」が 73.1～77.1%、「どちらかといえばその通り」が 22.9～26.9%となっていた。平成 27 年の授業評価でもほぼ同様の結果で、満足度の高い授業と評価された。 相山女学園大学での教員の授業相互評価において授業デザインの明確さとグループワークのファシリテートで学生の主体的取り組みと学びが整理されていると評価された。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 特記すべき事項なし		
5 その他 (1) 博士論文・修士論文指導	平成 15 年 10 月 ～平成 21 年 3 月	副指導教員として博士論文・修士論文の指導を行った。 〔博士論文〕 「母乳保育をする女性の自己効力感尺度開発に関する研究」 〔修士論文〕 「会陰切開がバースライツに及ぼす影響」 「母親の出産に立ち会った子どもの体験と助産ケア」 「家庭での性教育における親役割達成に向けた看護支援」 「母子相互作用の発達に関する研究」 「産後の精神状態と育児に関する縦断的研究」
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 (1) 看護師免許 (2) 助産師免許	昭和 63 年 6 月 15 日 平成 元 年 4 月 28 日	登録番号第 642045 号（添付 1） 登録番号第 91302 号（添付 2）
2 特許等 該当なし		

3 実務の経験を有する者についての特記事項					
(1) 思春期の健康教育講師等		平成 5 年 4 月 ～ 平成 29 年 2 月	神戸山手女子高等学校 (6 年間)、神戸市立本庄中学校 (3 年間)、愛知県立小坂井高等学校 (3 年間)、ノートルダム女学院中学校 (13 年間)、北名古屋市立師勝中学校 (2 年間)、奈良県葛城市立北新庄小学校などにおいて、男女のからだのしくみや妊娠・出産のしくみ、性行動と性感染症など、性と生殖に関する内容を中心に、思春期の健康教育の講師を務めている。また、平成 22 年度より、栃木県における思春期ピアカウンセラー養成に携わっている。平成 25 年度からは椋山女学園大学において、主になって思春期ピアカウンセラー養成と活動支援を行っている		
(2) 病院での看護研究指導		平成 12 年 1 月 ～ 現在 に至る	愛知県厚生連海南病院 (15 年間) 及び稲沢厚生病院 (8 年間)において、院内看護研修の一環として行われている看護研究の研修会 (クリニカルラダー・レベル 2 並びに 3) の講師を務めクリニカルラダー看護研究指導を行うと共に、院内で実施されている看護研究の指導を行っている。		
(3) 女性やセクシュアリティへの健康支援活動		平成 24 年 4 月 ～ 現在 に至る	平成 24 年度から週末に愛知県助産師会女性の健康なんでも相談、思春期電話相談の相談員としての活動を行っている。平成 28 年 1 月からは SANE (性暴力被害者支援看護師) の認定を取得し、名古屋第二赤十字病院性暴力救援センターで被害者支援の臨床活動に携わっている。		
4 その他					
(1) 県看護協会における理事・委員会活動		平成 24 年 4 月 ～ 平成 30 年 6 月	平成 24 年度から愛知県看護協会において教育委員、平成 26 年度からは教育委員長、平成 28 年 6 月から教育委員長・理事として、主に県内の看護職を対象とした教育計画の立案、研修会の企画・運営を行った。理事としては県看護協会の運営に参画し、主に、クリニカルラダーに沿った卒後教育の整備に携わった。		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項					
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要	
(著書) 1. 周産期ナースング改訂 第 2 版	共著	平成 23 年 3 月	ヌーヴェルヒロカワ	「ハイリスク妊娠」の章を担当し、妊娠中に起こりやすい異常の病態と看護の基本を解説し、事例を示して看護について説明した。B5 版全 428 頁本人担当部分：総頁数 428 頁中 32 頁を担当 (パートⅢ－Ⅳ章) 村本淳子, 高橋真理編集, 石原昌, 今田葉子, 大関信子, 大森智美, 上澤	

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
2. 主体的な生き方を支えるピア・カウンセリング実践マニュアル改訂新版	共著	平成 27 年 4 月	小学館	悦子，岸田佐智，崎山貴代，塩野悦子，島袋香子，清水清美，常磐洋子，鳥越郁代， <u>服部律子</u> ，永山くに子，野澤美江子，春名めぐみ，福井トシ子，古田祐子，村本淳子，和智志げみ 「ピア活動の有効性」の章を担当し、先行研究と筆者らの研究結果を踏まえて、中高生とピアカウンセラー自身へのピア活動の有効性について解説した。 B5 版全 143 頁 本人担当部分：総頁数 143 頁中 19 頁を担当 (4-1, 4-2) 高村寿子編集，高村寿子，江角伸吾，堀内成子，前田ひとみ，渡辺純一，安達久美子，沼尾歩，小川正美，岩間薫，遠藤明希，高田昌代，川崎由紀子，井戸修一，堀井千華子，渡辺恵美子，船橋悠希，渡邊至，篠澤侃子，佐々木明子，池田悦子， <u>服部律子</u>
3. セクシュアリティがわかる本	共著	平成 27 年 7 月	一般社団法人日本家族計画協会	避妊法、性感染症、ネゴシエーション、トピックス (月経痛、マスターベーション、性的犯罪、レイプ、リベンジポルノ、カレシ・カノジョより友達?) を担当し、解説した。 B5 版全 57 頁 本人担当部分：総頁数 57 頁中 26 頁を担当 (5 章～7 章) 高村寿子編著、安達久美子、 <u>服部律子</u>
4. 看護教育実践シリーズ 3 授業方法の基礎	共著	平成 29 年 7 月	医学書院	看護学教育において、1 回の授業をどう組み立てるかやアクティブラーニングを導入した授業の方法などについて解説した本である。第 11 章「授業時間外の学習を促す」を共著し、授業時間外の学習の重要性や課題の出し方などについて解説した。 A5 版全 184 頁 本人担当部分：総頁数 143 頁中 12 頁 (11 章) を共著者と共に担当 中井俊樹・小林忠資編、中井俊樹、小林忠資、清水栄子、内藤佐知子、根岸千悠、

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
5. 看護教育実践シリーズ 2 授業設計と教育評価	共著	平成 30 年 3 月	医学書院	根本淳子、 <u>服部律子</u> 、森千鶴 看護教育における授業設計から、評価、授業の改善方法までを解説した本である。全体に編者として関わり、10 章「評価基準を可視化する」を担当して執筆した。担当部分では、評価基準を可視化し学生と共有することの必要性やルーブリックなどの評価指標の作成について解説した。A5 版全 184 頁本人担当部分：編集・総ページ数 184 頁中 13 頁（10 章）中井俊樹・ <u>服部律子</u> 編、中井俊樹、 <u>服部律子</u> 、岡田聡志、加地真弥、小林忠資、嶋崎和代、高植幸子、中島英博、肥田武
（学術論文） 1. 足浴が分娩第 1 期の経過にもたらす効果 （査読付き論文）	共著	平成 19 年 12 月	愛知母性衛生学会誌 第 25 巻	分娩期の助産ケアとして日常的に実施されている足浴について、その効果と安全性を検証することを目的に、正常な経過の産婦 60 名を、無作為に足浴群と非足浴群に分け、陣痛の変化、胎児心拍数の変化、産婦の体温の上昇等についてデータを収集し分析した。結果、足浴により陣痛持続時間の短い産婦では持続時間が平均持続時間程度に延長することが明らかとなり、分娩の正常な経過を維持するために効果があることが示唆され、足浴を実施しても胎児心拍数の変化や産婦の体温の上昇は認められず、安全なケアであることも示唆された。 論文掲載：pp55～P59 本人担当部分：研究計画の立案、結果の分析とまとめを行った。 共同執筆者：武田亜子、水本安由美、船木智子、 <u>中嶋(服部)律子</u>
2. 大学生男女の親になることへの意識 （査読付き論文）	単著	平成 20 年 6 月	思春期学 26 巻 2 号	近い将来親になる可能性のある大学生男女が親になることをどのように捉えているのかを明らかにするため、人文社会学系学部の学生 153 名を対象に自由記述式と文章完成法による質問紙調査を実施し、88 名から回答を得た。KJ 法で

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
				分析した結果、親になるということは「家庭をつくる」や「子どもの養育」といった機能があり、子育てへの自覚と責任感を持ち、人間的に成長している、精神的ゆとりと強さを備えている、子育ての協力者や環境が整っているなどの親になるための要件が必要で、親になることの意味・価値と親になることへの回避感情を相対的に評価しながら子どもをつくるということについて考えていることが明らかとなった。また、現代青年の個人化志向などの強まりから、子どもをもつことへの不安感や親になることによって生じる制限や制約、負担を考え親になることに対して負担感を抱いていることが示唆された。 pp261～267
3. 親準備性尺度作成のための因子抽出の試み（査読付き論文）	単著	平成 20 年 12 月	思春期学 26 巻 4 号	現代の青年自身が親になることについてどのように意識しているかという観点から親準備性を捉え、「親準備性尺度」の因子の抽出を試みた。大学生の親になることへの意識を明らかにした先行研究で得られたカテゴリーを基に、4 段階のリッカート尺度を作成し、大学生男女 802 名を対象に調査を実施し、491 の有効回答を得た。因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行い、第 1 因子[子どもの養育]($\alpha = .89$)、第 2 因子[親になることの意義]($\alpha = .89$)、第 3 因子[親になることへの負担感・不安感]($\alpha = .84$)、第 4 因子[親になるための要件]($\alpha = .80$)、第 5 因子[世代の継承]($\alpha = .70$)の 5 つの下位尺度が抽出された。 pp428～432
4. 青年期の親準備性－子育て経験者との比較－（査読付き論文）	共著	平成 21 年 3 月	名古屋市立大学看護学部紀要 8 巻	子育て経験者との違いから、近い将来親になる可能性のある青年期男女の親になることへの意識の特徴を明らかにすることを目的に調査を実施した。結果、子育てを経験している男女にくらべ、青

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 青年期における親準備性の形成 (博士論文)	単著	平成 21 年 3 月	名古屋市立大学大学院	年では子育てへのイメージから親になることへの意識が形成されているために、親になることの意義よりも、子どもの養育や親になることへの要件への意識が高く、親になることへの負担感や不安感を抱いているという特徴が明らかになった。また、アイデンティティの基礎となる基本的信頼や自律性が十分に確立されていない男女では子育てへの負担感や不安感が強くなることが示唆された。 論文掲載：pp9～15 本人担当部分：研究全体を主になって行った。 共同執筆者：中嶋(服部)律子，後藤宗理 青年期に親準備性の形成について、その関連要因や、変容について明らかにした。またその過程において、親準備性尺度を開発した。青年の親準備性は、親にの役割に関する認識だけでなく、親になることへの意義や、親になることへの負担感と不安感、さらに、親になる要件や世代の継承といった要因によって構成されていることが明らかになった。親になることへの負担感・不安感には基本的信頼が関連していることや、家庭の形成や子育てイメージの形成には被養育体験が関連していることが明らかとなった。 総頁数：136 頁
6. 大学生男女が親になることについて考えるきっかけ	共著	平成 21 年 3 月	椋山女学園大学看護学研究 1 巻	青年期男女がどのようなことをきっかけに親になることについて考えているかについて明らかにし、親準備性を促す支援のあり方について検討するため、半構造化面接を行い、質的帰納的に分析した。その結果、「親子モデルの観察による子育てイメージの形成」、「子どもとの接触によって引き出された子どもへの好感情」、「子どもや子育ての学習」、「親

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 愛知県助産師会による電話相談事業 10 年間のまとめ (査読付き論文)	共著	平成 23 年 12 月	愛知母性衛生学会誌 第 29 号	からの影響」、「親密な異性との家庭形成の空想」、「就職活動をきっかけとしたライフデザインの模索」の категория が抽出された。 論文掲載：pp97～105 本人担当部分：研究の計画、データ収集等研究全体を主になって行った。 共同執筆者：服部律子，後藤宗理，中嶋文子，大久保摩里子 愛知県助産師会が実施している女性の健康に関する電話相談事業について、過去 10 年間の相談内容と相談者の傾向とその推移について分析した。電話相談では精神的問題や思春期の悩みの相談が多く、次いで妊娠中の各種症状、母乳、育児、月経に関することとなっていた。妊娠や育児に関する相談では出産年齢の高齢化に伴い相談者の年齢も高くなっていた。また、少数ではあるが虐待に関する相談も認められ、他機関とどのように連携するかが今後の課題であることが明らかとなった。 論文掲載：pp37～44 本人担当部分：研究計画を立案し、分析とまとめを主になって行った。 共同執筆者：石川真奈美，服部律子，若山正代，岩田勝子
8. 小規模病院、有床診療所に勤務する助産師の学習ニーズ (査読付き論文)	共著	平成 25 年 1 月	愛知母性衛生学会誌 第 30 号	わが国の出産の約半数を担う小規模病院および有床診療所で勤務する助産師の学習ニーズの特徴を明らかにするため、愛知県内の分娩を取り扱っている小規模病院および有床診療所で勤務する助産師を対象に自己記入式質問紙調査を実施し、記述内容を質的に分析した。その結果、これらの施設で勤務する助産師の約 7 割が学習希望を有しており、助産実践の中で困ったり不安を感じた経験のある助産師のほうがその割合が有意に高かった。学習ニーズはステップア

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9. 分娩を取り扱う小規模病院、有床診療所に勤務する看護師の学習ニーズ (査読付き論文)	共著	平成 26 年 1 月	愛知母性衛生学会誌 第 31 号	アップへの欲求から生じており、スキルアップと知識のブラッシュアップのニーズがあることが明らかとなった。 論文掲載：pp72～77 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，石川真奈美，若山正代，鈴木明日香
10. 青年期女子のライフデザインと親準備性	共著	平成 27 年 3 月	椋山女学園大学看護学研究 7 巻	分娩を取り扱う小規模病院や有床診療所では助産師よりも看護師の勤務者数のほうが多く、看護師が周産期の様々なケアに携わっている現状を踏まえ、これらの施設に勤務する看護師を対象に自己記入式質問紙調査を実施し、記述内容を質的に分析した。その結果、調査対象者の約半数が学習希望を有しており、仕事の中で困難感や不安感を抱いた経験のある者のほうが希望する割合が多かった。これは、「仕事上不足している知識の補充」や、「知識や技術の発展」「自己実現への欲求」からくるものであることが明らかとなった。 論文掲載：pp52～60 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，中嶋文子，奥川ゆかり，水信真美子，石川真奈美，鈴木明日香，若山正代
				女性を対象としたライフデザイン教育のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的に、A 大学 1 年生 510 人を対象に青年期女子のライフデザインや親準備性について明らかにした。結果、約 6 割の学生は将来の職業を決めて 1 年次から準備をしており、約 8 割の者が将来結婚を、約 7 割の者が出産を考えており、その予定平均年齢はそれぞれ、26.3 歳、27.7 歳であった。また離職のタイミングとしては第 2 子出産時が最多であった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				論文掲載：pp41～49 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，後藤宗理
(その他) —報告書— 1. より効果的な妊娠出産 包括支援事業としての産 後ケアのあり方に関する 研究	共著	平成 28 年 3 月	公益社団法人日本助 産師会 平成 27 年度子ども・ 子育て支援推進調査 研究事業報告書	厚生労働省の補助金を得て産後ケアの 実態について調査し、今後のあり方につ いて提言した。 論文掲載：pp59～90 本人担当部分：「有床助産所ならびに病 院・診療所で行っている産後ケアならび に産後ケア事業に係わる実地調査」を分 担研究し、その結果を主になってまとめ た。 共著者：島田真理恵, 佐藤香, 安達久美 子, 稲田千晴, 服部律子, 葛西圭子, 相良 有紀, 市川香織, 國分真佐代
2. 本学看護学部における クリッカー導入の評価	共著	平成 28 年 3 月	椋山女学園大学看護 学研究 8 巻	アクティブラーニングの一貫として新 たに導入したクリッカーの効果につい て、学生の質問紙調査とグループインタ ビューの結果から分析した。その結果ク リッカーの使用による「ライブ感」が学 生の授業への積極的参加を促している、 他学生との類似点や相違点を見出した ことが学習への動機づけとなっている という効果が明らかとなった。 論文掲載：pp47～55 本人担当部分：評価 の計画、データ収集、分析、まとめの全 般を主になって実施した。共著者：服部 律子, 和田貴子, 佐原弘子, 竹井留美, 又 吉忍, 後藤宗理
3. 健やか親子 21(第 2 次) を推進するための思春期 の母性保健の向上を目的 とした効果的な保健指導 のあり方についての調査 研究	共著	平成 29 年 3 月	厚生労働省平成 28 年 度子ども・子育て支援 推進調査研究事業報 告書	厚生労働省の補助金を得て、思春期の母 性保健の向上を目的とした効果的な保 健指導のあり方について提言し、研究結 果に基づき保健指導媒体として 「Asolescence わからないことがここ にある」を作成した。 本人担当部分：研究計画、調査用紙の作 成、4 校におけるデータ収集、考察を共

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
				に担当し、「性の自己受容(多様性)・gender identity に対する保健指導」について文献レビューを行った (pp127-129 に掲載)。保健指導媒体では、「からだの性、こころの性 ～これって変?～(p18)を執筆した。 共著者：永光信一郎、安達久美子、石井隆大、内山有子、岡明、岡永真由美、葛西圭子、片岡弥恵子、川名敬、熊谷智子、小林順子、小柳憲司、齋藤伸治、鍋田夏子、永山美千子、二宮啓子、野々山未希子、<u>服部律子</u>、松岡美智子、松寄くみ子、三牧正和、村上佳津美
— 講演 —				
1. 母と子のメンタルヘルスのために助産師ができること、助産師がすべきこと	—	平成 28 年 5 月	第 2 回母と子のメンタルヘルスフォーラム (於名古屋市)	青年期の親準備性形成に関する研究成果と、前年度に取り組んだ「より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究」の結果から、そして現代の若者の特徴などから、親となる人々の特性を理解し、妊娠中から子育て期までを包括したケアのあり方について概観し発表した。
2. 母と子のメンタルヘルスのために助産師ができること、助産師がすべきこと	—	平成 28 年 10 月	第 57 回日本母性衛生学会総会・学術集会教育講演 (於東京)	平成 27 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究」成果を基に、産後の母親の特徴を解説するとともに、親準備性研究の成果に基づいて妊娠前から子育て期までの継続的で包括した支援の必要性について講演した。
3. 子育て支援と社会資源の活用	—	平成 28 年 11 月	平成 28 年度奈良県アウトリーチ型子育て支援モデル事業子育て支援者研修会	親準備性研究や産後ケアのあり方に関する研究での結果を踏まえ、子育て支援の対象の特性について解説し、子育て支援者に求められる姿勢などについて講演した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 妊娠期からの包括支援に向けて～対象を理解する～	—	平成 29 年 8 月	平成 29 年度第 1 回養育支援訪問事業推進研修会	青年期の親準備性研究や産後ケアのあり方に関する研究の結果から、妊婦やそのパートナーの心理的特性や子育て環境について解説し、妊娠期からの包括支援のための対象理解のあり方について講演した。
5. 虐待予防～妊娠期からの取り組みについて～	—	平成 30 年 2 月	平成 29 年度葛城地区保健衛生担当課長会保健師部会全体研修会	子ども虐待防止に向け、妊娠期からのリスクの早期発見や予防のための寄り添いや支援のあり方について講演した。
—学会発表— 1. 家庭での性教育における親役割達成に向けた看護支援	—	平成 20 年 3 月	第 22 回日本助産学会学術集会(於神戸市)	親と子どもの性教育に関する認識を明らかにし、家庭での性教育に対して親が果たすべき役割とそのための看護支援を探究することを目的に、中学 1 年から 3 年までの男女とその親 224 組に対する質問紙調査と、その中から面接調査に同意の得られた親子 10 組に対する半構造化面接を行った。質問紙調査では、子どもは性教育を学校で受けることを望んでいるが、親は学校だけでは不十分であり家庭でも性教育が必要と考えていることや、親は家庭での性教育の必要性を認識しているものの、半数の親は性教育に自信がないことなどが明らかとなった。面接調査から性教育で親が果たすべき役割の認識に関して 46 のカテゴリーが抽出され、親自身が親としての役割を達成するためには学校と親との間の情報伝達等、調整役が必要であることが示唆された。本人担当部分：分析・まとめの指導を行った。 共同発表者：小倉由紀子, 北川真理子, <u>中嶋(服部)律子</u>

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. Experience of children present at birth of youngersibling, and midwifery care (きょうだいを主産する母親の出産に立ち会った子どもの体験と助産ケア)	—	平成 20 年 6 月	International Confederation of Midwives 28th Triennial Congress (於 連 合 王 国 ・ グ ラ ス ゴ ー)	母親の出産に立ち会った子どもの体験を明らかにするため、参加観察法により調査を行った。その結果、感情のゆらぎを引き起こす体験、生・性への豊かな感情をはぐくむ体験、出産への参加から思いやりを高める体験、自我を脅かすストレスフルな体験、親密な他者の存在を実感する体験、母子の関係性をゆるがされる体験、新たなきょうだい関係を構築する体験という 7 つのカテゴリーが抽出された。 本人担当部分：研究計画、データの分析とまとめについて指導した。 共同発表者：NOHATA (KURAMOTO) Naoko, KITAGAWA Mariko, <u>NAKAJIMA (HATTORI) Ritsuko</u>
3. 親準備性尺度作成の試み	—	平成 20 年 8 月	第 27 回日本思春期学会学術集会 (於 千 葉 市)	現代青年の親になることへの意識やその発達に影響を及ぼす要因を検討するための第 1 段階として、親準備性尺度の作成を試みた。大学生男女を対象とした自由記述式と文章完成法によって得られた内容から 4 段階のリッカート尺度を作成し、大学生男女に質問紙調査を実施した。因子分析の結果、「子どもの養育」「親になることの意義」「親になることへの負担感・不安感」「親になるための要件」「世代の継承」の 5 因子 (43 項目) が抽出された。今後、基準関連妥当性の検討が必要である。
4. 青年期の親準備性-子育て経験者との比較	—	平成 20 年 9 月	日本ヒューマン・ケア心理学会第 10 回大会 (於 京 都 市)	子育て経験者と比較することにより、青年期の親準備性の特徴を明らかにすることを目的に、18 歳から 25 歳までの大学生や社会人 684 名と保育所や小学校に通う子どもをもつ男女 923 名を対象に親準備性尺度とアイデンティティ尺度からなる質問紙調査を実施した。結果、子育て中の親のほうが「親になることの意義」が高かった一方、青年では「親になることへの負担感・不安感」や「親にな

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
5. 青年期の親準備性とその関連要因	—	平成 22 年 11 月	第 51 回日本母性衛生学会学術集会 (於金沢市)	る要件」、「子どもの養育」、「世代の継承」が有意に高かった。親になることをイメージしている段階の青年では親としての機能や親になる要件に対する意識が高い一方、負担感や不安感も強く、親になることへの意義が感じられないでいることが明らかとなった。本人担当部分：研究全体に関わり、中心になって研究を実施した。共同発表者：<u>中嶋(服部)律子</u>，後藤宗理 青年期の親準備性とそれに関連する要因を明らかにすることを目的に青年期の男女 867 名を対象に質問紙調査を実施し、519 名から回答を得た。その結果、青年期の親準備性には、基本的信頼や自律性などアイデンティティ確立の基礎となる部分と、親との信頼感、家庭への満足度、子どもへの関心や好感情、子どもと接した経験が影響していることが明らかとなった。 本人担当部分：研究全体に関わり、中心になって研究を実施した。共同発表者：<u>服部律子</u>，後藤宗理，石川真奈美，西富代
6. 思春期ピアカウンセラー養成の現状と課題	—	平成 25 年 8 月	第 32 回日本思春期学会学術集会 (於和歌山市)	日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会認定プログラムを用いた過去 6 年間の思春期ピアカウンセラー養成数の推移や受講者の受講後の感想等から実態を分析した。その結果、若者気質の変化により友人に相談できなくなっていることなどから思春期ピアカウンセラーへのニーズは高まっているものの、同じ若者気質の変化により自らが思春期ピアカウンセラーになろうという若者は減少しているという課題が存在していることが明らかとなった。本人担当部分：研究全体に関わり、特にデータの分析とまとめを主になって行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
7. 助産所・病院・診療所で 行われている産後ケアの 実態	—	平成 28 年 10 月	第 75 回日本公衆衛生 学会総会 (於大阪市)	共同発表者：服部律子，高村寿子，石田 登喜子，渡辺純一 わが国における産後ケアのあり方を検 討するための基礎資料として、助産所、 病院、診療所計 9 施設において、インタ ビュー調査を行った。結果、母親が育児 技術を獲得し、自信をもって家庭生活へ のスタートが切れるよう支援すること が求められていた。また、産後ケア施設 を提供するためには経済面、感染対策と 癒しの空間の確保など施設面での課題 があることが明らかとなった。 共同発表者：市川香織，服部律子，國分 真佐代，稲田千晴，相良有紀，島田真理 恵
8. Baseline survey with the purpose of developing adolescent peer activities related to reconstruction support in the wake of the Great East Japan Earthquake: For developing peer activities designed to support the ability to lead active lives in affected areas	共著	2017. 8	The 21st International Epidemiological Association (大宮市)	南相馬市における中学生へのピアサ ポートの実施に向けた中学生対象の ベースライン調査の結果を報告し た。将来の夢をもっていない群はも っている群に比べて自尊感情が低 く、自分自身の心身への関心が低い ことが明らかとなり、自尊感情を高 める取り組みであるピアサポート活 動の必要性が示唆された。 共同研究者：Hattori R, Takamura H, Nakamura Y
9. Prevalence and prediction of suicide ideation in Japanese adolescents: result from a population-based questionnaire survey	共著	2017. 1	American Academy of Child and Adolescent Psychiatry (Washington DC, USA)	全国の各地方に在住する中高生を対 象に心身の健康状態について調査し た結果から、希死念慮を抱く割合と 自殺率を中心に精神健康状態に焦点 をあてて報告した。 共同研究者：Nagamitsu S, Mimaki M, Koyanagi K, Tokita N, Kobayashi Y, Hattori R, Yamashita Y, Yamagata Z, Igarashi T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10. 健やか親子 21（第2次）：思春期の保健課題の克服—中高生 2 万人のアンケート調査から—	共著	2017. 8	日本思春期学会第 36 回学術集会	全国の各地方に在住する中高生を対象に健やか親子 21(第2次)に盛り込まれている思春期の保健課題を中心に調査した結果の概要を報告した。 共同研究者：永光信一郎、三牧正和、 <u>服部律子</u> 、小柳憲司、鴫田夏子、小林順子、五十嵐隆
—その他— 1. 看護・介護・福祉の百科事典	共著	平成 20 年 4 月	朝倉書店	看護、介護、福祉に関する基本的事項を広く集めた事典である。この中で、母性看護学の褥婦への支援について解説した。 A5 版全 633 頁本人担当部分：総頁数 633 頁中 3 頁を担当（第 1 編—3-6） 糸川嘉則総編集，交野好子，成清美治，西尾祐吾編集，著者 139 名。 母性看護学の著者；遠藤俊子，伊藤幸子，森谷美智子，岩谷澄香，黒田緑， <u>中嶋(服部)律子</u> ，関島英子，島袋香子
2. 外来通院糖尿病患者の治療行動に影響を及ぼす要因	共著	平成 25 年 11 月	へるす出版 月刊「臨床看護」	外来で通院治療を受けている、研究への協力に同意の得られた糖尿病患者 19 人に対して半構造化面接を実施し、保健行動理論に基づいて質的に分析した。結果、治療行動には病気の悪化への危機感や治療行動による効果の自覚、知識が影響していることが明らかとなった。また、糖尿病患者は治療行動の必要性の認識と同時に逃避欲求も抱いて逃避するための理由を探していることが明らかとなった。今後は、自己効力感にも着目し、今回明らかとなった要因との関連性を明らかにする必要がある。 論文掲載：pp1941～1947（「投稿」の中の 1 編） 本人担当部分：専門としている健康行動の観点から、研究の各プロセスと論文執筆について指導を行い、専門とする保健行動の観点から結果の分析、考察を共に行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 新・青年心理学ハンドブック	共著	平成 26 年 1 月	福村出版	共同執筆者：吉田和恵、<u>服部律子</u>、伏屋小夜子、牧田久仁子 青年心理学に関する事項を広く解説したハンドブックである。この中で、トピック「青年期の親準備性」を担当した。B5 変形(27cm)版全 714 頁 本人担当部分：総頁数 714 頁中 1 頁 (Topic32)を担当。 後藤宗理, 二宮克美, 高木秀明, 大野久, 白井利明, 平石賢二, 佐藤有耕, 若松養亮 編著, ほか 114 名著。Topic32 <u>服部律子</u>。
4. 周産期のメンタルヘルスの動向と助産師に求められるかかわり	単著	平成 29 年 4 月	医学書院 「助産雑誌」	周産期のメンタルヘルスケアについて、施策の動向、筆者が取り組んできた今までの研究から明らかとなった親になる人々の特性、若者研究の成果などを踏まえて、対象の理解を中心に助産師に求められる関わりについて概説した。 論文掲載：pp262～267（特集 「周産期のメンタルヘルスのために助産師ができること、すべきこと」の中の 1 編）
文部科学省科学研究費およびその他の研究助成 1. 青年期女子の親準備性とキャリアデザイン、ライフデザインの関連性	—	平成 25 年 6 月	椋山女学園大学学園研究費助成(B)	妊娠に伴い身体的変化を来す女性を対象とした、妊孕性や家庭形性、妊娠・出産・子育てと仕事の両立なども含めた女性ならではのライフデザイン、キャリアデザインへの支援のあり方を検討するため、青年期女子に対する女子大学生 510 人を対象に、親準備性と現在描いているライフデザインについて実態について研究した。

教育研究業績書		
平成 31 年 3 月 31 日		
氏名 三浦 康代		
研究分野	研究内容のキーワード	
看護学、健康・スポーツ科学	地域看護学、公衆衛生看護学、在宅看護、健康教育	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 1. 学内演習で男子学生に妊婦体験指導 3. 丹波マンガン記念館の見学 4. 乳幼児健診の演習で実際の乳幼児の身体計測、発達検査を実施	平成 22 年 7 月 平成 26 年 10 月 平成 28 年 5 月	男子学生に半日間、腹部におもりをいれた妊婦体験をさせ、妊娠中の心身の状況を理解させることができた。 故日吉町保健婦吉田氏が結核のマッピングをしたことから鉱山で働く人のじん肺をみつけるまでの実話を聴き、マンガン鉱山の坑道を見学することを通して、労働や生活から地域の人々の健康問題や産業保健の課題について考えることができた。 乳幼児健診の演習で実際の 4 か月児、1 歳 6 か月児、3 歳児の母子に協力していただき、65 名を 3 つのグループに分けて身体計測、発達検査の演習を実施し、3 人を比較しやすく、育児の悩み等も聞くことができ、発達には個人差が大きいことを学ぶこともできた。
2 作成した教科書、教材 1. 乳児健診、「小児保健」「健康教育論」「地域看護活動論」「公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）」の授業で 4 人分の本物の乳歯を貼ったポスターを展示 2. 「小児保健」でパネルシアター用のパネル「うんちの話」 3. 「子どもの保健」「公衆衛生看護活動論」「疫学」「公衆衛生看護学概論」で穴埋め式の配付資料を作成し、毎講義ごとに前回講義内容についての確認テストを実施 4. 「公衆衛生看護活動論」で地区把握の資料作成時における情報収集項目についてパワポで画面を示しながらスマートフォンで検索体験	平成 3 年 1 月 ～平成 30 年 10 月 平成 23 年 1 月 平成 23 年 4 月 ～平成 27 年 11 月 平成 26 年 4 月 ～平成 27 年 8 月	自分の子ども 4 人分の本物の乳歯合計 80 本を貼ったポスターを作成展示することで、保護者や学生に齲蝕予防について強いインパクトで啓発することができた。 食物が消化器の中で便に変化する状態を立体的に作成 穴埋めをするためには教科書に目を通したり、毎回の講義をきちんと聴く必要がある。また、穴埋め部は重要ポイントということが学生にわかる。 地区把握の情報収集の際に、インターネットを使用した場合の検索先を具体的にパワポで示し、スマートフォンで検索させた結果、情報を把握しやすくなった。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1. 授業アンケート	平成 20 年 4 月 ～現在	学生授業アンケートでは毎回「大変良い」「ほぼ良い」の評価
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1. 奈良県健康生きがいづくりアドバイザー協議会主催「いきいき塾」で講演「おいしい話」「減塩食のメニューづくり」 2. 橿原市みみなし地域学級にて講義「健康づくりの話」「栄養の話」 3. 高校の校内進路ガイダンスにて血圧測定の体験と減塩のメニューづくりの授業	平成 26 年 8 月 ～ 平成 27 年 8 月 平成 24 年 3 月 ～ 平成 27 年 3 月 平成 27 年 3 月	長続きする減塩のコツについて具体的に指導 中高齢者に「そのまんま料理カード」を使用してグループで 1 日のメニューづくりをし、総カロリーと塩分量を算出し、減塩への動機づけを行った。 高校生に「そのまんま料理カード」を利用した減塩食メニューづくりを実施し、若年から薄味に慣れるよう促し、ふだんの食事の塩分量に興味をもってもらった

4. 大学オープンキャンパスにおいて参加者（高校生や保護者、高校の進路指導担当者）にリラクゼーション体験講座実施	平成24年8月～ 平成26年8月	参加者にリラクゼーション体験をしていただいたところ、眠ってしまう方もおられ、リラックスできた様子
5. 奈良県健康生きがい協議会主催認知症予防講座にて年2回講演「認知症予防のための食生活」	平成26年8月～ 平成28年8月	認知症予防のための食生活についての最新情報の提供と、楽しく継続できる方法について考えていただいた。
6. 明治国際医療大学看護学部リカレント学習講座 看護研究の基礎において講演「文献検索の実践」	平成25年～ 現在	現場の看護師を対象とした研修において、医中誌等の文献検索をしながら、研究の枠組みについても考えていただいた。
7. 南丹市地域連携事業として「ロコモティブシンドロームの予防と対策」のうち「食生活」について出前講座年5回	平成27年8月	日吉、美山地区に出向き、地域の高齢者を対象にロコモティブシンドロームの予防と対策について指導。
8. 広陵町、奈良市、下北山村等の各自治会にて講演「認知症予防のための食生活」	平成27年8月	認知症予防のための食生活について、奈良県下の各地域に出向いて認知症予防ゲームもまじえて講演
9. 奈良県共済組合主催「認知症予防講座」にて講演「認知症予防のための食生活」	平成28年3月	奈良県職員とその家族を対象に認知症予防のための楽しく継続できる食生活について提案した。
10. 一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会主催「健康生きがいづくりアドバイザー養成講座」にて講義「健康づくりのための食生活」	平成28年3月	アドバイザーになる予定者を対象に、高齢社会の課題の動向から、自分の健康は食生活の改善からという動機づけをした。
11. NPO 法人認知症サポートネット主催「頭の体操」にて講演（於尼崎市立福祉センター和楽園）	平成28年8月	地域の高齢者20名を対象になつかしい虫食いソングを15曲準備し、グループごとに歌詞の穴埋めがおわったら黒板に記入し、みんなでキーボードの生演奏で歌う。
12. 奈良県共済組合主催「認知症予防講座」にて講演「認知症予防のための食生活」（於橿原公苑）	平成28年8月	前回好評だったため、南部でも開催。奈良県職員とその家族を対象に認知症予防のための楽しく継続できる食生活について提案した。
13. 一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会主催「健康生きがいづくりアドバイザー養成講座」にて講義「中高年と健康（食生活）」（於奈良女子大）	平成29年7月	アドバイザーになる予定者を対象に、認知症予防やロコモティブシンドローム、サルコペニア予防のための食生活のポイントについて動機づけをした。
14. 一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会主催「健康生きがいづくりアドバイザー養成講座」にて講義「中高年と健康（健康寿命と生活習慣病）」	平成29年7月	アドバイザーになる予定者を対象に、生活習慣病の基礎知識と健康寿命の延伸のための生活習慣の見直しについての動機づけをした。
15. 一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会主催「百歳塾」（於大和高田市民交流センター）	平成29年9月12月 平成30年9月12月	大和高田市民を対象に、健康寿命の延伸を目的として百歳塾を開始し、「脳トレゲー」「いきいき百歳体操（徳島版）」「マイノートを書いてみよう」「誰でもできるラフターヨガ」を指導した。
16. 一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会主催「笑って学ぶ頭と体のほっこり講座」（於河合町まほろばホール内コミュニティカフェつどい）	平成29年10月	河合町民を対象に、認知症予防を目的としてコグニサイズと虫食いソングを指導した。
5 その他		
1. 全国保健師教育機関協議会主催秋季教員研修第2分科会において情報提供 「看護師教育課程における地域看護学教育の取り組み」	平成28年10月	天理医療大学での看護師教育課程における地域看護学教育の取り組みは、保健・医療・福祉の包括的視点で看護実践できることを目標においており、画期的な科目立てとなっている。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格, 免許 1. 看護師 2. 保健師 3. 産業保健指導者 4. 第1種衛生管理者 5. 健康生きがいづくりアドバイザー 6. 心理相談員 7. いのちの電話相談員 8. 介護支援専門員 9. 学士(教養)の学位 10. 地球温暖化防止活動推進員 11. 学士(看護学)の学位 12. 健康運動実践指導者 13. 保育士 14. 修士(学術)の学位 15. リラクセーション看護講座修了認定 16. ラフターヨガリーダー 17. ラフターヨガアンバサダー	昭和49年4月 平成2年6月 平成2年11月 平成2年12月 平成5年9月 平成5年3月 平成7年5月 平成12年3月 平成14年3月 平成15年4月 平成18年2月 平成18年9月 平成22年1月 平成25年3月 平成26年3月 平成30年9月 令和元年7月	免許証番号 251658 号取得 免許証番号 66248 号取得 中央労働災害防止協会認定 奈良労働基準局免許証番号第 29000022271 号取得 一般財団法人健康生きがい開発財団認定 中央労働災害防止協会認定 S293-0318 号 社会福祉法人奈良いのちの電話協会任用書第 668 号 奈良県第 1497 号取得 放送大学学位記 第 19941 号取得 奈良県生活環境部認定 奈良県知事委嘱 独立行政法人大学評価・学位授与機構第 17551 号取得 財団法人健康・体力づくり事業財団台帳登録番号第 40662014 号取得 保育士証登録番号 奈良県-014151 取得 放送大学大学院学位記 第 003590 号取得 リラクセーション看護講座(レベル1, 2, 3) 認定証 第 034 号取得 ラフターヨガ養成講座 ラフターヨガインターナショナルユニバーシティー
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1. 大和高田市地域新エネルギー・省エネルギービジョン策定委員会委員 2. 大和高田市男女共同参画審議会委員 3. 東日本大震災支援活動 4. 橿原市情報公開・個人情報保護制度運営審議会委員	平成20年7月～平成23年6月 平成22年4月～現在 平成23年3月～平成23年4月 平成28年7月～現在	大和高田市内の事業所等における省エネ対策について検討し、太陽光発電の推進状況について調査 大和高田市の行政や事業所を中心とした男女共同参画の進捗状況を審議、進言している。 東日本大震災後、岩手県県央保健所の要請を受け保健師のボランティアとして県央保健所スタッフとともに山田町の避難所や家庭を巡回 橿原市の情報公開・個人情報保護について審議し、中立公平なパブリックコメントを進言している。
4 その他 なし		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
1. 「認知症予防に役立つ脳エクササイズのしおり」 社会福祉法人社会福祉研究開発基金の「認知症予防のための脳エクササイズ実施事業」助成金による	共著	平成 27 年 10 月	N P O 法人認知症サポートネット	福田章 三浦康代 上田綾子 上田桂子 黒崎輝美 小池玲子 小西忠勝 田中句子 土林由美子 寺田郁子 東田昌子 平田和美 松原緋紗子 村上誠二 森山宣子 山本真由美 竹村健一 地域でいつでのどこでもだれでもが認知症予防のための音楽や体操やゲームに取り組めるように編集。第 1 章：脳はつらつゲーム 第 2 章：身体を使って脳を元気に 第 3 章：手指体操で脳はイキイキ 第 4 章：音楽で脳が若返る (1) 1 字抜き歌 (2) 早口言葉 (3) 棒と三角体操 (4) 交互唱・同時唱 (5) 虫喰いソング (6) 音の聴き分けゲーム (7) リズムウォーキング (8) リズムパーカッション 第 5 章：懐かしい思い出で脳が元気に～回想法～ 第 6 章：お口の体操 第 7 章：何でもアートのうち、第 4 章担当
2. 八幡校区敬老会(尚齒會) 「100 回の歩みと人々の暮らし」	監修 共著	平成 30 年	八幡地区連合自治会 (姫路市地域資源保存継承助成事業による)	三浦康代 伊賀崎香木 八幡校区敬老会 100 回記念誌編集委員会
(学術論文)				
1. 「看護学生が描く卒業前のキャリアデザイン」 (査読付)	単著	平成 24 年 3 月	白鳳女子短期大学紀要 第 6 巻 25-34	卒業前の看護系女子短大生を対象にキャリアマップの記載を含む質問紙調査を実施したところ、対象者は多様なキャリアデザインを描いていた。就職しない者は皆無で、7 割強が仕事継続型、2 割が中断再開型を予定し、全体の 75% の者が最終の退職予定年齢を 60 歳以上としていた。看護職が仕事を継続するために必要としている支援として育児支援や再雇用教育の充実、将来展望を計画的に描くというキャリアデザイン教育の充実が求められている。
2. 「薬害 HIV 感染被害者の二次感染の予防状況と性生活満足度およびそれらの関連要因の検討」～「2010 年 HIV・HCV 重複感染血友病患者の長期療養に関する患者参加型研究」による「生活実態と新たな問題に関する調査」データの分析を通じて～ (査読付) (修士論文)	単著	平成 25 年 3 月	放送大学大学院修士論文 文集	2010 年にはばたき福祉事業団が薬害 HIV 感染被害者を対象に実施した質問紙調査の二次分析を行った結果、薬害 HIV 感染被害者では、「セーフターセックス群」や「アンセーフターセックス群」や「性交渉なし群」より、有意に性生活満足度が高く、精神的状況を良好に保っていた。HIV 感染症であるために今も性生活を抑えている者や、育児に関する情報を希望する者が多いことより、性生活や育児についての情報提供をはじめとするセクシュアル支援のアプローチが必要であると考えられた。
3. 「子育て支援ボランティア活動の実態と世代間交流について」 (査読付)	共著	平成 26 年 7 月	日本健康医学会雑誌 23 巻 2 号 136-141 (ISSN 1343-0025)	小石真子 佐藤裕見子 三浦康代 子育てボランティアは支援を提供するだけでなく、自分のためのサポート提供があった。また、地域で子ども世代・親世代・祖母世代の人々をつなぐ活動であった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4.「釜ヶ崎における高齢者特別清掃事業就労者及びシェルター利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査の報告」原著（査読付）	共著	平成 27 年 1 月	社会医学研究 32 巻 1 号 39-47 (ISSN 0910-9919)	三浦康代 井戸 武實 田中義則 上田裕子 山本 繁 高島毛敏雄 原著である。釜ヶ崎の結核罹患率を効率よく減少させる手立てとして、シェルター利用者への結核健診受診の義務化、特掃登録更新時における結核健診の強化、HEPA フィルター付循環式の空調設備完備のシェルターの建設、地域の人が集まる施設内における禁煙・分煙も含めた換気的重要性についての啓発が求められた。
5.「高齢者に対するロコモティブシンドローム予防のための取り組みー介護予防・生きがい支援通所事業における健康教育を実施してー」（査読付）	共著	平成 28 年 6 月	第 46 回（平成 27 年度）日本看護学会論文集ヘルスプロモーション 2016 年 136-139 (ISSN 1347-8184)	小石真子 佐藤裕見子 三浦康代 村上久恵 高田美子 河原照子 地域の高齢者にロコモティブシンドロームの予防のための運動や栄養の講義や実践をしたところ、理解できた方が多かった。今後、生きがい活動支援通所事業の中での継続をすることにより、ロコモの予防につながるだろう。
6.「女子大学生のアイメイクの実態～アイメイクの使用状況と症状出現状況について～」（査読付）	共著	平成 29 年 3 月	明治国際医療大学誌第 16 号 27-37	三浦康代 片岡美穂 揚本裕貴 アイメイクは、女子大学生に心理的にポジティブな影響を与えていることが多く、女子大学生にとって日常的に欠かせないものとなっていた。アイメイクを続けていくには、正しいアイメイク法を見直し、症状が現れた時には早期の眼科受診をして悪化を防止することや、安全な化粧品・化粧方法を選択するという認識を持つことが必要であるといえる。
7.「認知症予防地域ボランティアが関わった認知症予防講座受講者の運動と食生活習慣についての行動変容」（査読付）	共著	平成 29 年 5 月	日本認知症予防学会誌 Vol. 6 No. 1, 2017 39-44 (ISSN 2187-3798)	三浦康代 福田章 上田裕子 認知症予防地域ボランティアが関わった認知症予防講座受講後の運動習慣と食生活習慣についての行動変容は、「変化なし」が最も多かった。ついで、食生活習慣については、「改善」が「悪化」より多く、運動習慣については「悪化」が「改善」より多かった。受講後に新たな生活習慣に取りくもうとしていた者の割合は、食生活習慣については 2 割、運動習慣においては 1 割であった。今後、地域において、認知症予防地域ボランティアが活動の中心となって、特に運動習慣に関する継続した取り組みが望ましいと考えられた。
8.「過疎地域における生きがい支援通所事業についての一考察」（査読付）	共著	平成 29 年 6 月	大阪青山大学看護学ジャーナル 2017, Vol. 1, 55-58	小石真子 佐藤裕見子 三浦康代 村上久恵 河原照子 松岡みどり 高田美子 過疎地域の生きがい支援通所事業に従事する援助員に対して活動実態と互助実態を把握した結果、過疎地域では。地域の課題・地域福祉について住民に認識させ、主体的に行動させることや、地域に拠点をつくり民生委員やボランティアおよび近隣とのつながりを綿密につくることが必要であり、専門的な研修やきめ細かい支援体制が求められていることが示唆された。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9.「中高年者における身長短縮と肥満度の関連についての検討」（査読付）	共著	平成 30 年 1 月	社会医学研究 35 巻 1 号 (ISSN 0910-9919)	三浦康代 志野泰子 身長短縮は呼吸機能や消化器機能の低下および、腰痛等の諸症状を起こし、QOL の低下につながることに着目し、50 歳以上の健康な男女 972 名を対象に、身長短縮割合と肥満度との関係を検討した結果、女性では肥満群が正常群より有意に身長短縮割合が大きいことが明らかになり、肥満は身長短縮の重要な因子となることが示唆された。身長短縮を予防改善し、予測するための最も簡便にできる方法として、肥満度測定は意義があると考えられた。
(その他)				
報告書				
1.「はーとふる」 日本学術振興会科学研究費補助金研究事業（課題番号 22614010）「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究」 平成 22 年度研究報告書	共著	平成 23 年 3 月	研究代表者 逢坂隆子	逢坂隆子 高島毛敏雄 嵯峨嘉子 中田信昭 福原宏幸 黒田研二 加美嘉文 鍛冶葉子 小椋芳子 山本繁 井戸武實 大宮陽子 三浦康代 北尾千沙 (P63～P67, P78～P83) あいりん地域で野宿者や高齢要介護者を支援する 16 民間支援団体に対する聞き取り調査を実施。うち野宿者ネットワークと陽だまりⅡについて担当。① 活動の理念 ②活動の対象 ③活動の内容 ④活動従事者 ⑤その支援が健康づくりや命や健康を守ることにつながる可能性 ⑥活動が仲間づくりにつながる可能性 ⑦活動の成功事例と失敗事例についてまとめた。
2.「はーとふるⅡ」 日本学術振興会科学研究費補助金研究事業（課題番号 22614010）「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究」 平成 22・23・24 年度研究報告書	共著	平成 25 年 3 月	研究代表者 逢坂隆子	逢坂隆子 高島毛敏雄 嵯峨嘉子 中田信昭 黒田研二 加美嘉文 福原宏幸 鍛冶葉子 三浦康代 小椋芳子 山本繁 井戸武實 大宮陽子 小林由美子 難波邦子 高田佐土子 梅田道子 (P34～P49) 第 1 部：あいりん地域で野宿者や高齢要介護者を支援する民間支援団体やボランティア計 6 団体に対する聞き取り調査の結果をまとめたものである。うち、こどもの里と西成市民館についてインタビューを担当しまとめた。支援団体が支援した成功例からの聞き取りをもとにして、都市貧困高齢者に対する住居と生活、生きがいの支援に関する検討を行った報告である。
学会発表				
1.「卒業後の将来展望－看護短大生の場合－」	共著	平成 22 年 11 月	第 2 回日本看護学生キャリア教育学会抄録集 於神戸	竹元恵子 三浦康代 坂上由美 秦るみ子 卒業後の将来展望について、短大看護科の学生と 4 年制大学一般学生を比較したところ、短大看護科の学生のほうが 4 年制大学一般学生より有意に子育て後の再就職を予定する者が多かった。このことより、看護学生は看護職免許を生かした将来展望をもっていると考えられる。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2.「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究（その 1）一釜ヶ崎における支援団体の聞き取り調査から」	共著	平成 23 年 1 月	第 52 回日本社会医学学会講演集 社会医学研究特別号 102 - 103 (ISSN 0910-9919) 於富山	北尾千沙 逢坂隆子 高島毛敏雄 黒田研二 鍛冶葉子 井戸武實 <u>三浦康代</u> 日雇い労働者の街・釜ヶ崎では、野宿を余儀なくされる者や生活保護受給者が急増している。このような状況下で活動している 16 の民間支援団体に聞き取りを行ない、その活動内容から、釜ヶ崎における労働者や生活保護受給者の課題について考察した。「健康、安全対策」は人間の基本的欲求であり、支援を通じてその他支援団体、ボランティアとの相互のやりとりにつながる。このつながりを維持するのが重要である。
3.「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究（その 2）一釜ヶ崎における 19 支援団体の聞き取り調査から」	共著	平成 23 年 7 月	第 52 回日本社会医学学会講演集 社会医学研究特別号 104 - 105 (ISSN 0910-9919) 於富山	大宮陽子 松田光恵 山本繁 井戸武實 逢坂隆子 高島毛敏雄 黒田研二 鍛冶葉子 嵯峨嘉子 村岡茉莉子 北尾千沙 清水多實子 <u>三浦康代</u> 1960 年代は日雇い労働者の労働問題、1970 年代は失業問題が大きくなり暴動が起り、一方で野宿者への襲撃など新たな問題への対応が必要になった。1990 年代は高齢者問題と不況による就労者支援問題が混在し高齢者特別清掃事業などの制度ができた。そして釜ヶ崎のまちづくりの視点が入り、2000 年からは健康、子ども、文化も視点に入れた、全人的支援と人間性回復の取り組みが大きくなり、釜ヶ崎が大きく変貌しようとしている姿が見える。
4.「釜ヶ崎における支援団体の聞き取り調査」	共著	平成 23 年 10 月	日本公衆衛生雑誌 第 70 回日本公衆衛生学会総会抄録 58 巻 10 号 P349 (ISSN 0546-1766) 於秋田	北尾千沙 逢坂隆子 高島毛敏雄 黒田研二 鍛冶葉子 井戸武實 <u>三浦康代</u> 釜ヶ崎で聞き取り調査を行った 3 つのサポーターティプハウスの主たる支援内容は日常生活支援、健康支援、福祉支援、地域生活支援であった。サポーターティプハウスでは、生活支援を通してスタッフとの信頼関係を構築し、行動の範囲を広げ地域で落ち着いて安心した生活を維持するための支援を提供していた。
5.「釜ヶ崎の支援団体から紹介された元野宿者への聞き取り調査～社会的包摂の支援とは～」 日本学術振興会科研事業「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究」（課題番号 22624010・研究代表者・逢坂隆子）の一部として実施	共著	平成 24 年 12 月	日本公衆衛生雑誌 第 71 回日本公衆衛生学会総会抄録 59 巻 10 号 P410 (ISSN 0546-1766) 於山口	<u>三浦康代</u> 逢坂隆子 高島毛敏雄 黒田研二 鍛冶葉子 井戸武實 釜ヶ崎で活動している 7 民間支援団体より「うまくいった事例」として紹介された 13 名の元野宿者に聞き取り調査を実施した。現在の安全で安心できる生活に至った要因として、「定住と金銭管理」3 名、「生きがいと居場所づくり」7 名「心を動かす言動」3 名で、釜ヶ崎で安心・安全に生活している被支援者は、支援団体との信頼関係のもとに、そのセルフケア力に応じた、多様で日常的、包摂的な支援を受け、人間性を取り戻していた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6.「ピアエジュケーションとしての看護学生 HIV 予防行動への意識変容」	共著	平成 25 年 11 月	日本公衆衛生雑誌 第 72 回日本公衆衛生学会総会抄録 60 巻 10 号 P553 (ISSN 0546-1766) 於三重	佐藤裕見子 三浦康代 小石真子 細野幸代 HIV/エイズ普及啓発活動においてピアエジュケーションを体験した学生と体験しなかった学生の 2 群間で、HIV 予防行動への意識変化を比較した結果、知識・行動ともに介入群のほうが有意に改善していたという結果を得、ピアエジュケーションは有効であると考えられた。
7.「釜ヶ崎における高齢者特別清掃事業就労者及びシェルター利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査の報告」	共著	平成 26 年 7 月	社会医学研究第 55 回日本社会医学会総会講演集 171 - 172 (ISSN 0910-9919) 於名古屋	三浦康代 井戸 武實 田中義則 上田裕子 山本 繁 高島毛敏雄 釜ヶ崎の結核罹患率を効率よく減少させる手立てとして、シェルター利用者への結核健診受診の義務化、特掃登録更新時における結核健診の強化、HEPA フィルター付循環式の空調設備完備のシェルターの建設、地域の人が集まる施設内における禁煙・分煙も含めた換気的重要性についての啓発が求められた。
8.「認知症予防啓発劇の効果の分析」	共著	平成 26 年 9 月	第 4 回日本認知症予防学会学術集会プログラム抄録 127 - 128 (ISSN 2187-3798) 於東京	三浦康代 福田章 素人の劇団が 2 府県 7 会場で公演した 45 分間の劇「ぼけたらあかん」の観劇者を対象に、質問紙調査を行った結果、回収数 228 で、認知症予防啓発劇は観劇者の認知症予防行動の動機づけと、また認知症を地域で支援するという意識の向上に有効であった。
9.「認知症予防啓発劇の効果の分析～観劇者と演劇者の比較～」	単著	平成 26 年 11 月	日本公衆衛生雑誌 第 73 回日本公衆衛生学会総会抄録集 61 巻 10 号 P453 (ISSN 0546-1766) 於宇都宮	三浦康代 素人の劇団が 2 府県 7 会場で公演した 45 分間の劇「ぼけたらあかん」の観劇者 228 名と演劇者 7 名を対象に、質問紙調査を行った結果、演劇者は観劇者より、認知症についてよく知っており、「人との交流」を希望していた。認知症予防啓発劇の演劇と観劇はともに地域での認知症予防や認知症支援に有効であった。
10.「釜ヶ崎で暮らす現野宿者および元野宿者の現在歯数の状況」	単著	平成 27 年 7 月	社会医学研究第 56 回日本社会医学会総会講演集 P119 (ISSN 0910-9919) 於久留米大学	三浦康代 釜ヶ崎の現野宿者および元野宿者計 38 名の平均現在歯数は 40 歳代 26.0 本、50 歳代 16.6 本、60 歳代 8.4 本、70～80 歳 4.8 本であり、全国男性平均より 50 歳代で全国の 6 割、60 歳代で 4 割、70 歳代で 3 割の本数しかなく、入れ歯を装着している者も皆無であったことより、対象者の口腔機能の低下が著しいと推測された。今後、専門家による口腔指導の必要性が示唆された。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11.「『認知症予防に熱心な町づくり』をめざした『認知症予防地域ボランティア養成講座』受講後のボランティア認定状況」	共著	平成 27 年 9 月	第 5 回日本認知症予防学会学術集会プログラム抄録集 P149 (ISSN 2187-3798) 於神戸国際会議場	三浦康代 福田章 認知症予防に熱心な街づくりをめざした大阪市住吉区における「認知症予防地域ボランティア養成講座」受講後のボランティア希望や認定状況を分析した結果、受講後にボランティアを希望した群は地元住民であり、「認知症予防ボランティア/認知症や認知症予防に関心がある」「頼まれた」というきっかけが多かった。地域で目的を共有できる人材を育成するには、広報段階から区民の主体性を活かし、参加の輪を広げることが有効である。
12.「高齢者に対するロコモティブシンドローム予防のための取り組みー介護予防・生きがい支援通所事業における健康教育を実施してー」	共著	平成 27 年 11 月	第 46 回日本看護学会ーヘルスプロモーションー学術集会 抄録集 (2015)P274 (ISSN 1347-8184) 於富山	小石真子 佐藤裕見子 三浦康代 村上久恵 高田美子 河原照子 地域の高齢者にロコモティブシンドロームの予防のための運動や栄養の講義や実践をしたところ、理解できた方が多かった。今後、生きがい活動支援通所事業の中での継続をすることにより、ロコモの予防につながるだろう。
13.「認知症予防地域ボランティアが関わった認知症予防講座受講者の受講後の行動変容」	共著	平成 28 年 9 月	第 6 回日本認知症予防学会学術集会プログラム抄録集 P131 (ISSN 2187-3798) 於東北大学	三浦康代 福田章 上田裕子 NPO 法人と住吉区社協の協働により新たにグループとして活動することになった認知症予防地域ボランティアがお手伝いした「認知症予防講座」の受講者の受講前後における各種生活習慣の行動変容について検討した結果、運動習慣を変容させることは困難であるが、食生活習慣・趣味や生きがいづくり・地域での活動・ストレス等については、受講がきっかけとなって改善する余地があった。今後、地域においてボランティアが活動の中心となって、参加体験型の、特に運動習慣に関する継続した取り組みが望ましいと考えられた。
14.「地域住民の睡眠障害と生活リズム健康法の関連」	共著	平成 28 年 10 月	日本公衆衛生雑誌 第 75 回日本公衆衛生学会総会抄録集 63 巻 10 号 P384 (ISSN 0546-1766) 於大阪グランフロント	佐藤裕見子 三浦康代 小石真子 村上久恵 特定健診受診者から睡眠障害の疑いのある者をスクリーニングして快眠講座を実施し、基礎講座受講者とリラクセーション受講者を講座前後において質問紙調査とアクティブグラフを実施した結果、睡眠障害の改善には、生活リズム健康法と組み合わせたりリラクセーションは有効であることが示唆された。
15.「防災に対する住民の意識と地域づくりー総合防災訓練の参加者の調査結果ー」	共著	平成 28 年 10 月	日本公衆衛生雑誌 第 75 回日本公衆衛生学会総会抄録集 63 巻 10 号 P572 (ISSN 0546-1766) 於大阪グランフロント	小石真子 佐藤裕見子 三浦康代 村上久恵 防災訓練参加者の防災意識や家庭での防災対策の実態を把握した結果、災害時の備えは意識しているが、実行に移していないことがわかった。そのため適宜確認をしながら行動につながる支援が必要である。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
16.「身長短縮を予防するための中高年における運動方法についての考察」	共著	平成 30 年 7 月	社会医学研究第 59 回日本社会医学会総会講演集 P94 (ISSN 0910-9919) 於獨協医科大学	三浦康代 志野泰子 文献レビューの結果、身長の短縮を予防するためには、姿勢を保つ骨格筋量と骨量の双方の維持、及び関節の変形を防ぐための肥満の予防が必要と考えられ、中高年の運動方法としては、低強度の筋力トレーニングを含む有酸素運動の継続が重要であることが示唆された。
17. Association among the factors in conjunction with Height Loss of females by the literature review.	First author	2019. 1	22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference. (Furama-Riverfront Hotel in Singapore)	Yasuyo Miura, Yukari Shibata, Kiyoshi Yoshimizu, Yohko Inouye As a result of the literature review, it was revealed that the "Height Loss" was related to the four factors of "Spinal deformation (including vertebral fracture)", "Bone density loss", "Muscle Mass loss", and "obesity". It was suggested that prevention of factors in these categories could be used as a basic material to prevent height loss by aging. In the future, it is necessary to examine the bone density, muscle mass, body mass index, body fat percentage, exercise situation, and degree of height loss of the same person
18. Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease	Research collaborator	2019. 1	22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference. (Furama-Riverfront Hotel in Singapore)	Yohko Inouye, Yukari Shibata, Kiyoshi Yoshimizu, Yasuyo Miura The difficulty in eating habits related to life skills and the problems were clarified on classifying the research trends on life skills focusing on the eating habits of the IBD patients through content analysis and basic data reviewing ways of support were suggested.

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 守本 とも子

研 究 分 野		研究内容のキーワード	
看護学		在宅脳卒中患者，在宅酸素療法患者，介護者，QOL	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事項		年月日	概 要
1 教育方法の実践例 視聴覚教材のための資料作成		平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	関西学院大学人間福祉学部人間福祉研究科の非常勤講師として視聴覚教材のための資料を作成した。具体的には人体解剖・人体機能，疾病や加齢について，難解な用語の解説や重要事項のまとめなどを資料として作成し，各授業ごとに資料の配布を行った。
2 作成した教科書，教材 —教科書— 系統看護学講座 専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第 14 版第 6 刷 （再掲）		平成 20 年 4 月 医学書 院 全 348 頁	第 5 部第 1 章 A「生活環境を整える」 P. 64-P. 74 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメイキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第 5 部第 1 章 C「衣服を用いる」 P. 121-P. 127 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
系統看護学講座 専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第 15 版第 1 刷（再掲）		平成 21 年 2 月 医学書 院 全 495 頁	第 2 部 第 1 章 B「病床環境の調整」 P. 22-P. 32 本章では生活環境を整えるための技術の習得を通して，病床環境を多角的にとらえ，患者の安全・安楽への配慮を具体的な行為として実践できる力を養う。同時に，患者の病床環境に対していつも自然に目配りができ，安全や安楽を阻害する因子を早期に発見し，即座に対応できる感性を養う。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第 2 部 第 5 章 C「病床での衣生活の援助」 P. 185-P. 192 本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義，社会的意義，心理的意義があることを理解する。ま

		た，対象に応じた衣生活をアセスメントし，適切な援助ができるための方法を習得する。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
国際看護への学際的アプローチ（再掲）	平成 21 年 3 月 日本放 射線技 師会出 版社 全 211 頁	第 1 章「異文化理解のための看護理論」P. 7-P. 18 世界でトピックとなっている健康課題とその背景を国際保健医療活動の実例を交えながら紹介し，看護の国際的な活動に必要な知識や思考について述べた。 単著
新・QOL を高める専門看護，介護を考える（再掲）	平成 21 年 3 月 中央法 規出版 (株)全 204 頁	第 2 章 「高齢者の痛みへのアプローチ」P. 61-P. 80 第 1 節「高齢者の痛みについて」高齢者の痛みの特徴を述べた。 第 2 節「痛みの特定」痛みの特定方法について主訴，動作，疾患との関連について述べた。 第 3 節「痛みのアセスメントスケール」痛みの質と強さのアセスメントについて著者らが作成したVAS スケールを紹介した。 第 4 節「痛みの治療とケアプラン」非薬物，薬物的介入と痛み治療薬の主要なタイプ，ケアプランについて述べた。 第 5 節「倫理的責任」痛みの治療におけるガイドラインと倫理的課題について述べた。単著 第 3 章「高齢者の嚥下困難へのアプローチ」P. 81-P. 94 第 1 節「嚥下障害とは」嚥下の生理，嚥下障害のタイプと原因，観察のポイントとチームアプローチについて述べた。 第 2 節「嚥下療法の工夫と技術」食物形態の改善，嚥下方法，筋肉強化訓練，緊急時の対処について述べた。 第 3 節「スタッフの役割」嚥下・食事評価スケールを紹介した。 単著 第 5 章「QOL を高める日常生活動作への援助」 P. 113-P. 123 第 1 節「認知症高齢者の入浴テクニック」入浴中の不穩を低下させるプロトコールと安全策について述べた。 第 6 章「認知症高齢者への安全テクニック」P169-P. 177

		を 1 節「認知症高齢者について」認知症についての概要と特徴について述べた。 第 2 節「認知症高齢者の行動特性と対策」認知症高齢者の特徴的な行動とそれに対する対処方法を述べた。 単著 第 7 章「QOL を高める高齢者の遊び療法」P179-P. 201 第 1 節「遊び療法とボランティア活動」ボランティアの集め方、活動の説明について述べた。 第 2 節「遊びマニュアルの使い方」レクリエーション遊具のつくり方と使い方及び遊具を紹介する際の注意点について述べた。 単著
介護の基本・コミュニケーション技術 (再掲)	平成 22 年 9 月 黎明書 房 全 202 頁	本書は介護の考え方について理解するとともに、介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ、介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的とする。 編者：守本とも子，星野政明
生活支援技術・介護過程（再掲）	平成 22 年 6 月 黎明書 房 全 219 頁	第 10 章「終末期の介護」P. 159-P. 168 終末期における介護の意義と目的，対象者のアセスメント，医療との連携，ブリーフケアについて述べ，終末期にある高齢者の最も安楽で威厳に満ちた死を可能にする方法を探る。 単著 編者：守本とも子，星野政明（編著）
老年看護学 Geriatric Nursing (再掲)	平成 22 年 12 月 PILAR PRESS 全 288 頁	第 2 章 2. 高齢者の理解 「加齢と老化」P. 2, P. 57-P. 65 を単著。 高齢者の生理的機能の変化，疾患の特徴，感覚機能の変化（視覚，聴覚，味覚，嗅覚，触覚，痛覚）また，その他の諸機能として，加齢による心臓，血管，血液，外皮系について述べた。そして，加齢がもたらす精神的変化と社会的変化についても述べた。 単著 編著：守本とも子

医療福祉学の道標（再掲）	平成 23 年 1 月 金芳堂 全 200 頁	第 2 章 C 生活の変化と保健・医療・福祉の統合 P. 23-P. 26 を単著。 生活の変化として家計の動向，家族形態の変化，介護問題について解説したうえで生活を支える保健・医療・福祉の統合の意義について述べた。 第 13 章 A 少子高齢社会での医療福祉 P. 163-P. 165 を単著。 今日抱える医療福祉の課題として少子高齢化社会での医療福祉のあり方について述べた。特に高齢者の一人暮らしに焦点をあて，現状と対策について考察した。 C 介護福祉から医療介護福祉へ P. 170-P. 172 を単著。 介護福祉から医療介護福祉へのパラダイムシフトの必要性について述べた。特に介護の専門性について再度考察し，今後の介護福祉士のあり方と課題について考察した。 G 情報化社会における医療福祉 P. 184-P. 185 を単著。 情報化社会における医療福祉について，特に医療福祉と IT（Information Technology）との関連で述べた。今後，医療福祉のどの分野において IT がどのように活用されていくのか，その意義について考察した。
子ども家庭のウェルビーイング（再掲）	平成 23 年 3 月 金芳堂 全 128 頁	第 1 章 A 「少子化の進行と家庭・地域の変容」 P. 1-P. 5 第 3 章 B 「子ども家庭福祉の実施体制」 P. 39-P. 41 現代社会における子どものウェルビーイングを迫及するため，子供を取り巻く社会福祉的問題や今日の課題を明らかにするとともに，子ども家庭福祉のあり方と支援策について解説する。 単著

系統看護学講座 専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第 15 版第 8 刷 (再掲)	平成 24 年 2 月 医学書 院 全 495 頁	第 2 部 第 1 章 B「病床環境の調整」P. 22-P. 32 本章では外部環境を病床環境に限定し、「病床環境の調整」と「ベットメーカー」「リネン交換」についての技術を習得する。病床環境の調整には、病床の温度と湿度。光と音、病室の色彩、空気の清浄性とにおいて、人的環境の調整のほか、ベットのマットレスやまくらなどの寝具も含まれる。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第 2 部 第 5 章 C「病床での衣生活の援助」P. 185-P. 192 本章では本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義，社会的意義，心理的意義があることを理解する。また，対象に応じた衣生活をアセスメントし，適切な援助ができるための方法を習得する。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
介護実習入門（再掲）	平成 24 年 3 月 黎明書 房 全 128 頁	本書において対象者への実際的な福祉的援助の方法を学び，専門職としての基盤を構築することが可能であると考える。 編集：守本とも子，星野政明
系統看護学講座 専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第 16 版 (再掲)	平成 25 年 2 月 医学書 院 全 508 頁	第 1 章 A「環境調整技術」P. 9-P. 21 本章では療養生活の環境を構成する要素を理解し，病室・病床のアセスメントと調整について学ぶ。また，ベット周囲と病床の環境整備，ベットメーカー，リネン交換の実際について学ぶ。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第 6 章 B「清潔・衣生活援助」P. 192-P. 200 衣類を用いることの生理的・社会的・心理的意義を理解する。また，衣生活に関するニーズのアセスメントや援助の実際について学ぶ。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世

高齢者のせん妄 安心をとどけるケアと介護の心得（再掲）	平成 26 年 10 月 すびか 書房 全 140 頁	第 3 章「せん妄を起こしやすい状況-こわれやすい心へのおもいやり」 P45-72 本章では、せん妄を起こしやすい状況を紹介している。高齢者の心は壊れやすく、とても脆くなっている。高齢者に対しては身体的な援助とともに心のケアが重要な課題となる。高齢者ケアにかかわる人にとって、せん妄の知識は必須だと言える。 単著 第 4 章「せん妄が起きてしまったら」 P73-86 せん妄の症状は特定の病気のあらわれではなく、さまざまな要因によって引き起こされた異常な状態である。意識障害であることを理解し、症状への適切な対応を学ぶ。 単著 編者：<u>守本とも子</u>
これからの国際看護学 国境を越えた看護実践のために（再掲）	平成 26 年 11 月 ピラー プレス 全 163	第 3 節「国際協力機関の取り組み」 P22-28 国際協力のいくつかの方法について知り、世界中のすべての人々がより良く生きられる未来を目指す。 単著 監著：<u>守本とも子</u>
看護職をめざす人の社会保障と社会福祉（再掲）	平成 27 年 4 月 みらい 全 211 頁	本書は看護職（看護師・保健師・助産師）をめざす読者が社会保障・社会福祉について学ぶテキストである。また、すでに医療現場で看護職やコメディカルとして活躍している方々の学びのふりかえり等にも十分対応できる内容である。 編者：<u>守本とも子</u>

シリーズ 看護・介護・福祉のための「教育学」 教育心理をふまえた患者教育指導実践の手引き 1 看護のための『教育学』（再掲）	平成 27 年 12 月 あいり 出版 全 151 頁	第 2 章 3「教授理論」 P22-25 第 2 章 4「現代の教授理論」 P25-28 教授理論とは教授者が学習者に知識・技能をさずけるために有用な理論である。具体的な教授理論を学ぶ前に、教授（指導）するためのよりどころとする原理について述べたのち（第 2 章 3）、主要な教授理論について説明する（第 2 章 4）。 単著 第 2 章 5「人格」 P28-P29 教育はたんに知識や技術を習得させるためのものではなく、全人的形成が目標となる。したがって教育は人格形成過程の一環として行われなければならない。 単著 第 2 章 6「教育心理学と患者指導」 P29 本章で学んだ内容が患者指導に生かされることを目的に構成しているが、教育心理学がどのように患者指導に有用か、例をあげて考える。 単著 編者： <u>守本とも子</u>
系統看護学講座 専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第 17 版 （再掲）	平成 29 年 1 月 医学書 院 全 520 頁	第 2 部 第 1 章 B「病床環境の調整」 P. 10-P. 24 本章では外部環境を病床環境に限定し、「病床環境の調整」と「ベットメイキング」「リネン交換」についての技術を習得する。病床環境の調整には、病床の温度と湿度。光と音、病室の色彩、空気的清浄性とにおいて、人的環境の調整のほか、ベットのマットレスやまくらなどの寝具も含まれる。 共著者： <u>守本とも子</u>，吉村雅世 第 2 部 第 5 章 C「病床での衣生活の援助」 P. 153-P. 211 本章では本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義，社会的意義，心理的意義があることを理解する。また，対象に応じた衣生活をアセスメントし，適切な援助ができるための方法を習得する。 共著者： <u>守本とも子</u>，吉村雅世

痛みのケア 第1版 (再掲)	平成 29 年 3 月 ピラ ール プレ ス 全 180 頁	第 9 章 「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」 P. 36 ーP. 49 慢性的な高齢者の痛みについて、痛みと動作について説明し、痛みに関する観察の力を養う。そして高齢者の痛みの主訴の特徴を述べ、痛みの原因となる疾患または治療について述べる。また、痛みのアセスメントツールを紹介し看護者が利用できる一般的な痛みのアセスメントスケールを学ぶ。代表的な痛みのツールは Visual Analogue Scales (VAS)である。さらに本書では痛みの有無に焦点をしばる pain VASを紹介し、看護ケアの実践として痛みの治療とケアプランについて述べる。 単著 編者：守本とも子
―事典― 介護福祉学事典 (再掲)	平成 26 年 10 月 ミネ ル ヴァ 書 房 全 829 頁	「障害児に対する介護福祉」 障害児の定義・概念・考え方について述べ、障害児に関する介護、福祉の実践や制度の現状を明らかにした。また、障害児に対する介護について、近現代史から、ノーマライゼーションの浸透までの背景や経過を説明し、障害のある子どもも社会の中で他の人々と同じように生活でき、活動することができるための展望と課題について考察した。 P546-547 分担執筆
3 教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 ―海外研修学生引率― タイ チェンマイ市 チェンマイ大学看護学部 学術交流	平成 20 年 8 月	奈良県立医科大学医学部看護学科 海外研修学生引率 プログラムオリエンテーション レクチャー: Elderly in Thailand, Health status of children in Thailand, Health care service and health promotion of children in Thailand 他 スタディビジット: Elderly club at Faculty on nursing, Day care center FON CMU, Pediatric Units, Pediatric Intensive Care Unit, Nursery, and Well baby clinic at university hospital, Traditional Thai Massage Center 他

—講演— (財)健康管理・開発センター 講演会 講師	平成 21 年 2 月 24 日	(財)健康管理・開発センター主催の講演会で講師を務め、「たばこの害について」と題した講演を行った。 会場：住之江競艇場（大阪市住之江区）
日本保健医療行動科学会 講師	平成 24 年 6 月	日本保健医療行動科学会主催の講習会において、「医療系大学におけるチーム医療教育の実際—医療のパラダイムシフトに向けて—」についての講義を行った。 会場：じゅうろくプラザ（岐阜県岐阜市）
奈良学園大学 公開講座 講師	平成 26 年 6 月 28 日	奈良学園大学 公開講座で講師を務め、「高齢者のうつ」と題した講演を 90 分行った。 対象：地域住民 60 名 会場：リーベール王寺西友（奈良県北葛城郡王寺町）
日本サーモロジー学会 第 33 回大会 講師	平成 28 年 5 月	日本サーモロジー学会 第 33 回大会で講師を務め、「がん看護と体温」について招待講演を行った。 対象：200 名 会場：奈良学園大学登美ヶ丘キャンパス（奈良県奈良市）
—講習会— 社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会 講師	平成 20 年 9 月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター（奈良県橿原市） 時間：3 時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会 講師	平成 21 年 9 月 8 日	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター（奈良県橿原市） 時間：6 時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会 講師	平成 22 年 9 月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター（奈良県橿原市） 時間：6 時間

社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会 講師	平成 23 年 9 月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6 時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会 講師	平成 24 年 6 月 13 日 ～7 月 11 日	社団法人岐阜県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護理論」の講義および演習指導を行った。 専任教員養成講習会受講生：30 人 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい会館第 1 棟 5 階（岐阜県岐阜市） 時間：15 時間（講義），15 時間（演習指導）
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会 講師	平成 24 年 9 月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6 時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会 講師	平成 25 年 8 月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6 時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会 講師	平成 26 年 8 月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6 時間
—教員養成講座講師— 大阪府看護協会 大阪府看護教員養成講習会 講師	平成 22 年 4 月 ～平成 22 年 7 月	大阪府看護協会主催の大阪府看護教員養成講習会において、「看護論演習」の講義を行った。 受講生：79 人 時間：30 時間 大阪府看護協会桃谷センター（大阪市天王寺区）

社団法人岐阜県看護協会 岐阜県看護教員養成講習会 講師	平成 23 年 6 月 13 日 ～7 月 27 日	社団法人岐阜県看護協会主催の岐阜県看護教員養成講習会において、「看護論」「看護論演習」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：30 人 時間：15 時間（講義），15 時間（演習指導） 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい会館第 1 棟 5 階（岐阜県岐阜市）
社団法人岐阜県看護協会 岐阜県専任教員養成講習会 講師	平成 25 年 5 月 20 日～ 6 月 4 日	社団法人岐阜県看護協会主催の岐阜県専任教員養成講習会において、「専門領域別看護論演習・老年看護学」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：19 人 時間：18 時間 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい福寿会館第 1 棟 5 階（岐阜県岐阜市）
社団法人奈良県看護協会 奈良県専任教員養成講習会 講師	平成 25 年 7 月 29 日平 成 25 年 12 月 4 日～12 月 12 日	社団法人奈良県看護協会主催の奈良県専任教員養成講習会において、「専門領域別看護論演習・老年看護学」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：30 人 時間：14 時間 会場：奈良県看護研修センター，奈良県看護協会ホームナースィングセンター（奈良県橿原市）
5 その他 —担当教科— 「老年看護学概論」の担当	平成 16 年 4 月 ～ 平成 22 年 3 月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「老年看護学概論」を担当した。「老年看護学概論」は必修科目で 2 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は「加齢に伴う変化」と老年期の人々の QOL の向上をめざす理論と技術についてである。
「老年看護学援助論」の担当	平成 17 年 4 月 ～ 平成 22 年 3 月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「老年看護学援助論」を担当した。「老年看護学援助論」は必修科目で 2 単位（2 時間×30 回）の通年科目である。講義内容は老年期にある人の健康の増進，疾病の予防といった看護実践の理論と技術についてである。

「社会福祉学」の担当	平成 17 年 4 月 ～ 平成 22 年 3 月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「社会福祉学」を担当した。「社会福祉学」は必修科目で 2 単位（2 時間×30 回）の通年科目である。講義内容は社会保障・社会福祉の理念や原理及び障害者・高齢者の生活問題の現状を把握し、それに対する社会福祉制度と最近の政策動向についてである。
「国際看護論」の担当	平成 17 年 4 月 ～ 平成 22 年 3 月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は選択科目で 2 単位（2 時間×30 回）の通年科目である。講義内容は学際的視点から世界で展開する看護活動について理解を深め、実際に外国での看護教育・看護活動の演習を通して、新しい看護の視点と可能性を探る。
「看護研究概論」の担当	平成 18 年 4 月 ～ 平成 22 年 3 月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「看護研究概論」を担当した。「看護研究概論」は必修科目で 1 単位（2 時間×7 回）の半期科目である。講義内容は看護研究を進めていく上での基礎的能力を育成するとともに研究的態度および看護観及び研究の意義、研究課題の立て方、研究方法、研究結果のまとめ方、考察、発表の方法についてである。
「看護学特論」の担当	平成 18 年 4 月 ～ 平成 22 年 3 月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「看護学特論」を担当した。「看護学特論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は国内外における看護研究の動向と課題及び国内外で関心のある看護問題や課題についての研究計画書を作成する方法についてである。
「介護概論」の担当	平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「介護概論」を担当した。「介護概論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、介護の主たる対象となる高齢者を理解しながら、介護の目的、方法、専門職としての役割を学ぶ、また、それらを基に実践と自己研鑽を積むことのできる専門性を育てることを目的とする。
「介護技術」の担当	平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「介護技術」を担当した。「介護技術」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、障害や疾病あるいは加齢により、他の人の支援を必要とする対象者の QOL を高める介護上の援助技術について、その考え方および身体的状況に応じたよりよい介護技術を学ぶ。授業は講義と演習であり、全体の 1/2 は体験的学習で構成する。

「からだのしくみと生活」の担当	平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	関西学院大学人間福祉学部 of 学生を対象に「からだのしくみと生活」を担当した。「からだのしくみと生活」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、対象の自立支援にむけて必要なこととからだの基礎的な知識を学び、適切な介護の実践ができる能力を養うことを目的とする。
「加齢と障害の理解」の担当	平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	関西学院大学人間福祉学部 of 学生を対象に「加齢と障害の理解」を担当した。「加齢と障害の理解」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、人間の成長と発達における心理や身体機能の変化を学び、それらが日常生活に与える影響について理解することを目的とする。
「看護学原論」の担当	平成 22 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 of 学生を対象に「看護学原論」を担当した。「看護学原論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、看護学における主要概念を理解し、看護の本質と専門職としての役割を学ぶ。そのために、看護の対象である人間を全人的にとらえる知識と感性を養う。また、自己の看護観を形成し、発展させる能力を養うことを目的とする。
「国際看護論」の担当	平成 22 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 of 学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、国際社会の動向を知り、グローバルな視点で活動できる教養を養うことを目標とする。それぞれの国の分化、資源、環境など、多角的な視点について考え、異文化を持つ人々への看護の在り方に対する理解を深めていく。
「ターミナル看護」の担当	平成 22 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 of 学生を対象に「ターミナル看護」を担当した。「ターミナル看護」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、ターミナルケアの意味を理解し、看護者自身の生死観が確立できる基礎を養う。また、ターミナルケアを実践するうえでの知識と技術を学ぶ。

「看護理論」の担当	平成 22 年 4 月 ~ 平成 25 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護理論」を担当した。「看護理論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、看護の見方・考え方の基礎として、様々な看護理論が現れてきた社会背景を知り、看護理論を学ぶ。代表的な理論家の理論が看護実践の根拠になることや、その活用方法を知る。さらに、理論を研究に活用するための方法について理解する。
「チーム医療論」の担当	平成 22 年 4 月 ~ 平成 25 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「チーム医療論」を担当した。「チーム医療論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義は 3 学科の教員で行う。チーム医療における協調性、責任感、コミュニケーション能力の向上は必須である。また専門分野以外の学習も「学際性」を伸ばすために必要である。3 学科共通の科目を持ち学科の壁を越えて本科目を履修することにより医療現場において必要とされる資質を習得することを目的とする。
「看護学概論」の担当	平成 25 年 4 月 ~ 平成 25 年 9 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護学概論」を担当した。「看護学概論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、看護学における主要概念を理解し、看護の本質と専門職としての役割を学ぶ。そのために、看護の対象である人間を全人的にとらえる知識と感性を養う。また、自己の看護観を形成し、発展させる能力を養うことを目的とする。
「保健医療学概論」の担当	平成 26 年 4 月 ~ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「保健医療学概論」を担当した。「保健医療学概論」は必修科目で 1 単位 15 時間の半期科目である。講義内容は、全人的ケアに主眼をおいた保健医療学について、その背景や基本的な考え方、諸外国及び日本における現状と実践例、クオリティ・オブ・ライフ（QOL）の視点を含む医療と看護の原点などについて幅広く学び、その後の主体的な学習の礎とする。
	平成 26 年 4 月 ~ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「看護理論」を担当した。「看護理論」は必修科目で 1 単位 15 時間の半期科目である。講義内容は、代表的な理論家の理論がどのような医療環境や社会背景のもとに構築されてきたかを知る。また、それらの理論が看護実践の根拠となることを理解し、看護過程の展開に有効に活用する方法を学ぶ。

「チーム医療論」の担当	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「チーム医療論」を担当した。「チーム医療論」は必修科目で 1 単位 15 時間の半期科目である。講義内容は、チーム医療の重要性、看護領域におけるチーム医療の変遷について学ぶ。そして現在のチーム医療のなかでの看護師の位置づけおよび看護師が果たす役割について理解する。また、チーム医療における看護の在り方および今後の課題について考察する。
「成人看護学概論」の担当	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「成人看護学概論」を担当した。「成人看護学概論」は必修科目で 2 単位 30 時間の半期科目である。講義内容は、人間の成長発達課題における成人期の特質について、身体的・精神的・社会的側面から理解する。また、成人期にある人々の様々な健康障害の原因や要因を学び、健康の回復、あるいは健康の保持増進に向けての看護援助の方法について学ぶ。
「社会福祉」の担当	平成 26 年 6 月 ～ 平成 26 年 9 月	大和高田市立看護専門学校の学生を対象に「社会福祉」を担当した。「社会福祉」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、社会保障・社会福祉の理念や原理及び障害者・高齢者の生活問題の現状を把握し、それに対する社会福祉制度と最近の政策動向について学ぶ。
「ターミナルケア論」の担当	平成 26 年 10 月 ～ 平成 27 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「ターミナルケア論」を担当した。「ターミナルケア論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、ターミナルケアの意味を理解し、看護者自身の生死観が確立できる基礎を養う。また、ターミナルケアを実践するうえでの知識と技術を学ぶ。
「国際看護論」の担当	平成 26 年 10 月 ～ 平成 27 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は、国際社会の動向を知り、グローバルな視点で活動できる教養を養うことを目標とする。それぞれの国の分化、資源、環境など、多角的な視点について考え、異文化を持つ人々への看護の在り方に対する理解を深めていく。

—実習指導— 老年看護学実習	平成 18 年 10 月 ～ 平成 22 年 3 月	奈良県立医科大学医学部看護学科の3年次学生を対象に「老年看護学実習指導」（指導人数 95 人，指導期間 10 週）を担当した。指導内容は老年期にある人の看護，主に高齢者施設における老年看護の視点とその方法を実践的に学び，老年看護の役割・機能を理解させる。
総合実習	平成 19 年 5 月 ～ 平成 22 年 3 月	奈良県立医科大学医学部看護学科の4年次学生を対象に「総合実習指導」（指導人数 11 人，指導期間 10 週）を担当した。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格，免許 1) 幼稚園教諭 2 級普通免許	昭和 53 年 3 月 31 日	昭 52 幼 2 普第 3230 号
2) 保母資格	昭和 53 年 3 月 21 日	第保 755
3) 看護婦免許	昭和 61 年 5 月 14 日	第 568532 号
4) 養護学校教諭 1 級普通免許	昭和 63 年 9 月 25 日	昭 63 養学 1 普め第 10 号
5) 看護教員資格	平成 3 年 11 月 29 日	第 946 号 平成 3 年度厚生省認定による看護教員養成講習会
6) 修士（学術）	平成 9 年 3 月 25 日	大阪教育大学第 2090 号
7) 博士（社会福祉学）	平成 15 年 10 月 15 日	関西学院大学（甲社第十四号）
2 特許等 特記事項なし		

3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他				
岐阜医療科学大学 研究倫理審査委員長		平成 22 年 4 月 ～ 平成 24 年 9 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科，放射線技術 学科，臨床検査技師学科合同の研究倫理審査委員会にお いて研究倫理審査委員長を務めた。	
奈良学園大学 国際交流センター長		平成 29 年 3 月 ～ 平成 30 年 3 月	大学の委員会組織において、国際交流センター長に就任 し、友好協定締結校から特別聴講留学生を受け入れるた め、協定校との交流を行った。また短期留学生の海外研 修に取り組んだ。看護学生のマハサラカム大学への研修 に向けての調整に取り組んだ。	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
系統看護学講座 専門分 野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看 護学[3]」 第 15 版第 1 刷	共著	平成 21 年 2 月	医学書院	本書は看護技術の教科書として最新 の方法を紹介している。単なる手順の方 法ではなく看護職者が最も重要と考え る「臨床判断」の過程を含めて解説し， 卒業までのすべての領域実習で手引書 として活用できる内容としている。 B5 判，全 495 頁 共著者：守本とも子，藤崎 郁，任和子， 有田清子，井川順子，石賀奈津子，岡本 啓子，尾崎章子，小林優子，茂野香おる， 竹林直紀(他 10 名) 本人担当部分： 第 2 部 第 1 章 B「病床環境の調整」 P. 22-P. 32 を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境な ど）のアセスメントと調整及びベットメ ーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅 世 第 2 部 第 5 章 C「病床での衣生活の援 助」 P. 185-P. 192 を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
国際看護への学際的アプローチ	共著	平成 21 年 3 月	日本放射線技師会出版社	本書は世界でトピックとなっている健康課題とその背景について，国際保健医療活動の実例を紹介し，今後の国際的な活動に必要な知識や思考を深める機会を提供することを目的とした。 B5 判，全 211 頁 監修：守本とも子 編者：堀内美由紀 共著者：守本とも子，中園直樹，宮本和子，伊達卓二，馬場雄司，川端眞人，中谷香，堀内美由紀，田瀬和夫，岡崎悦子，正楽藍，瀧尻明子 本人担当部分：（部分執筆） 第 1 章「異文化理解のための看護理論」P. 7-P. 18 を単著。 世界でトピックとなっている健康課題とその背景を国際保健医療活動の実例を交えながら紹介し，看護の国際的な活動に必要な知識や思考について述べた。
新・QOL を高める専門看護，介護を考える	共著	平成 21 年 3 月	中央法規出版(株)	本書は高齢者への理解を深めるため，加齢が及ぼす身体的・心理的变化を学び，加齢が高齢者にどのような影響を及ぼすのか，また，結果としてどのような障害が起こってくるのかを理解する。そして高齢者の QOL を高める日常生活援助について学ぶ。 B5 判，全 204 頁監修：アンドレア・ストレイト・シュライナー編者：守本とも子，星野政明 本人担当部分：（部分執筆）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				第2章 「高齢者の痛みへのアプローチ」 P. 61-P. 80 を単著。第1節「高齢者の痛みについて」高齢者の痛みの特徴を述べた。第2節「痛みの特定」痛みの特定方法について主訴，動作，疾患との関連について述べた。第3節「痛みのアセスメントスケール」痛みの質と強さのアセスメントについて著者らが作成したVAS スケールを紹介した。第4節「痛みの治療とケアプラン」非薬物，薬物的介入と痛み治療薬の主要なタイプ，ケアプランについて述べた。第5節「倫理的責任」痛みの治療におけるガイドラインと倫理的課題について述べた。 第3章「高齢者の嚥下困難へのアプローチ」 P. 81-P. 94 を単著。 第1節「嚥下障害とは」嚥下の生理，嚥下障害のタイプと原因，観察のポイントとチームアプローチについて述べた。第2節「嚥下療法の工夫と技術」食物形態の改善，嚥下方法，筋肉強化訓練，緊急時の対処について述べた。第3節「スタッフの役割」嚥下・食事評価スケールを紹介した。 第5章「QOL を高める日常生活動作への援助」 P. 113-P. 123 を単著。 第1節「認知症高齢者の入浴テクニック」入浴中の不穏を低下させるプロトコールと安全策について述べた。 第6章「認知症高齢者への安全テクニック」 P169-P. 177 を単著。 第1節「認知症高齢者について」認知症についての概要と特徴について述べた。 第2節「認知症高齢者の行動特性と対策」認知症高齢者の特徴的な行動とそれに対する対処方法を述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				第7章「QOLを高める高齢者の遊び療法」P179-P.201を単著。 第1節「遊び療法とボランティア活動」ボランティアの集め方，活動の説明について述べた。第2節「遊びマニュアルの使い方」レクリエーション遊具のつくり方と使い方及び遊具を紹介する際の注意点について述べた。
介護の基本・コミュニケーション技術	共著	平成22年9月	黎明書房	本書は介護の考え方について理解するとともに，介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ，介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的とした。 A5判，全202頁 編著：守本とも子，星野政明 共著者：三浦辰哉，原田理恵，溝上五十鈴，土田耕司，羽柴香恵，河野喬，新谷奈苗，吉村雅世，西園貞子，西元康世，甲田宗嗣，上本野唱子，石崎利恵，川百合子 本人担当部分：編集
生活支援技術・介護過程	共著	平成22年6月	黎明書房	専門職としての基盤を構築することを目的とした。心身の状況に応じた介護を実践するための生活支援の方法とそれらを展開していくための一連の過程として「介護過程の展開」について具体的な内容を盛り込んだ。 A5判，全219頁 編著：守本とも子，星野政明 本人担当部分： 第10章「終末期の介護」P.159-P.168を単著。 終末期における介護の意義と目的，対象者のアセスメント，医療との連携，ブリーフケアについて述べ，終末期にある高齢者の最も安楽で威厳に満ちた死を可能にする方法を探った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
老年看護学 Geriatric Nursing	共著	平成 22 年 12 月	ピラールプレス	本書は高齢者の身体的・心理的特徴を十分把握したうえで高齢者の QOL の向上を目指した看護実践を意識的に取り上げた「老年看護学」（監修：川野雅資，編集：<u>守本とも子</u>，2007 年）の改訂版である。国家試験対策のテキストとしても活用されてきた旧版の内容をさらに掘り下げ，高齢者の疾病構造の変容，健康に関連した高齢者のニーズの多様性などを考慮して，老年看護の実践に向けて，看護学生の必携のテキストとなっている。 A5 版 全 285 頁 監修：川野雅資 編者：<u>守本とも子</u> 共著者：今村美幸，上平悦子，岡崎大資，岡本啓子，奥百合子，川口ちづる，甲田宗嗣，新川泰弘，新谷奈苗，土田耕司，富永堯史，船瀬孝子，三宅美恵子，溝上五十鈴，<u>守本とも子</u>，山形力生，吉村雅世 本人担当部分：編著 第 2 章 2. 高齢者の理解 「加齢と老化」 P. 2，P. 57-P. 65 を単著。 高齢者の生理的機能の変化，疾患の特徴，感覚機能の変化（視覚，聴覚，味覚，嗅覚，触覚，痛覚）また，その他の諸機能として，加齢による心臓，血管，血液，外皮系について述べた。そして，加齢がもたらす精神的変化と社会的変化についても述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
医療福祉学の道標	共著	平成 23 年 1 月	金芳堂	本書は社会福祉学の視点から現代医療の課題を探究，解決していこうとすると同時に医療というフィールドにおける社会福祉的視点の意義への接近を試みた。医療の分野における社会福祉的なものとは何か，という課題に迫ろうとしている。①クライアントの心身の健康，②クライアントの住む時代と社会の状況，③クライアント個人（家族）の生活実態と生活背景と地域の状況，④医療と福祉の援助専門職の理論と技術，⑤医療と福祉の援助専門職の価値観，⑥援助専門職の連携について，の道標を明示することを目的としている。 B5 判，全 200 頁 監修：日野原重明，西三郎，前原澄子，秋山智久 編集：星野政明，高内克彦，土田 耕司 共著者：守本とも子，天野博之，安藤祥子，石村由利子，伊藤健次，伊藤孝治，井上真人，石崎利彦，牛津信忠，大山朝子（他 32 名） 本人担当部分： 第 2 章 C 生活の変化と保健・医療・福祉の統合 P. 23-P. 26 を単著。 生活の変化として家計の動向，家族形態の変化，介護問題について解説したうえで生活を支える保健・医療・福祉の統合の意義について述べた。 第 13 章 A 少子高齢社会での医療福祉 P. 163-P. 165 を単著。 今日抱える医療福祉の課題として少子高齢化社会での医療福祉のあり方について述べた。特に高齢者の一人暮らしに焦点をあて，現状と対策について考察した。 C 介護福祉から医療介護福祉へ P. 170-P. 172 を単著。 介護福祉から医療介護福祉へのパラ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				ダイムシフトの必要性について述べた。特に介護の専門性について再度考察し，今後の介護福祉士のあり方と課題について考察した。 G 情報化社会における医療福祉 P. 184-P. 185 を単著。 情報化社会における医療福祉について，特に医療福祉と IT (Information Technology) との関連で述べた。今後，医療福祉のどの分野において IT がどのように活用されていくのか，その意義について考察した。
子ども家庭のウェルビーイング	共著	平成 23 年 3 月	金芳堂	近年，子どもの成長，発達を阻害する社会的因子や子どもへの虐待問題など，多くの課題が明らかになっている。子どものウェルビーイングを旨とした子ども家庭福祉のあり方と支援策について解説している。 B5 判，全 128 頁 編集代表：星野政明 編集：真鍋顕久，三友雅夫 共著者：守本とも子，荒木照子，伊藤博美，大熊信成，大谷恵，大塚弘子，河合由嘉，川添公仁，木村由美，嶋田芳男（他 19 名） 本人担当部分： 第 1 章 A 少子化の進行と家庭・地域の変容 P. 1-P. 5 を単著。 少子化の現状と家庭・地域の変容について概説した。また，現代社会における家庭・地域で生活する子どもの生活課題と対策について考察した。 第 3 章 B 子ども家庭福祉の実施体制 P. 39-P. 41 を単著。 子ども家庭福祉について，どのような目的でどのような施策が実施されているのか，その現状について述べるとともに，今後の課題についても考察した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
系統看護学講座 専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ 基礎看護学[3]」 第 15 版第 8 刷	共著	平成 24 年 2 月	医学書院	本書は「第 1 部 看護技術総論」「第 2 部 16 領域の看護技術」の 2 部構成としている。第 1 部では看護技術の 4 つの基本原則とその優先順位について説明を行い，第 2 部では看護技術を 16 の領域に分けて説明している。改定にあたっては，それぞれの技術についてできるだけ，最新の方法を紹介し，その根拠を示すように心がけている。 B5 判，全 495 頁 本人担当部分： 第 2 部 第 1 章 B「病床環境の調整」P. 22-P. 32 を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーカーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第 2 部 第 5 章 C「病床での衣生活の援助」P. 185-P. 192 を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
介護実習入門	共著	平成 24 年 1 月	黎明書房	本書は介護の現状について述べ，介護の倫理，介護の原則についてわかりやすく説明している。また，介護施設の概要と入所者の特徴について述べている。次にそれらの知識を踏まえ，介護実習前の基礎知識として，まず，介護実習の意義と目的について述べ，介護を専門職とする人のための姿勢，そしてコミュニケーションの基本とコミュニケーションの実際について知識と技術が同時に学ぶことができるように工夫されている。最後に介護過程について事例をもとにわかりやすく解説し，介護に必要な援助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				技術について述べている。 A5 判，全 128 頁 編集：守本とも子，星野政明 共著者：横井賀津志，川口ちづる，真辺一範，土田耕司，奥百合子，辻下守弘，守本幸次，大山末美，新谷奈苗，真辺一範，岡崎大資，甲田宗嗣，山形力生，長島万弓，石井和 本人担当部分：編集
系統看護学講座 専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ 基礎看護学[3]」 第 16 版	共著	平成 25 年 1 月	医学書院	本書は，多くの写真やイラストによって看護技術の手順をわかりやすく解説した。また，主な看護技術の手順については，動画で見られるように工夫し，動画の活用によって技術習得が容易となり，より効率的・効果的に技術レベルが向上することが期待される。 B5 判，全 528 頁 共著者：有田清子，有田秀子，井川順子，岡本啓子，尾崎章子，小林優子，坂下貴子，茂野香おる，立野淳子，田中靖代，田村富美子，内藤知佐子，任和子，林静子，比田井理恵，平松八重子，三富陽子，<u>守本とも子</u>，屋宜譜美子，山勢博彰，吉村雅世 本人担当部分： 第 1 章 A 「環境調整技術」 P. 9-P. 21 を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーカーキングについて述べた。 共著者：<u>守本とも子</u>，岡本啓子，吉村雅世 第 6 章 B 「清潔・衣生活援助」 P. 192-P. 200 を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
				び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者： <u>守本とも子</u> ，岡本啓子，吉村雅世
高齢者のせん妄 安心をとどけるケアと介護の心得	共著	平成 26 年 10 月	すびか書房	本書のテーマは「高齢者の」せん妄である。治療者の視点ではなく生活援助者の視点で，「安心をとどける」ためにどうすべきかを述べた。 A5 判 全 140 頁 編者：<u>守本とも子</u> 共著者：<u>守本とも子</u>，野中浩幸，酒井千知，奥百合子，川口ちづる，大谷須美子，川田美和，鎗内希美子，大西恵，横嶋清美，山田ゆきこ，亀山紀代美 本人担当部分： 第 3 章「せん妄を起こしやすい状況-こわれやすい心へのおもいやり」P45-72 を単著。 本章では，せん妄を起こしやすい状況を紹介している。高齢者の心は壊れやすく，とても脆くなってきている。高齢者に対しては身体的な援助とともに心のケアが重要な課題となる。高齢者ケアにかかわる人にとって，せん妄の知識は必須だと言える。 第 4 章「せん妄が起きてしまったら」P73-86 を単著。 せん妄の症状は特定の病気のあらわれではなく，さまざまな要因によって引き起こされた異常な状態である。意識障害であることを理解し，症状への適切な対応を学ぶ。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
これからの国際看護学 国境を越えた看護実践の ために	共著	平成 26 年 11 月	ピラールプレス	本書では，発展途上国の現状，リプロダクティブヘルスと母子保健のほか，我が国に滞在する外国人への看護についても取り上げている。また，学生が将来勤務地として希望するであろう発展途上国，および先進国への就業のほか，欧米諸国への就職についても紹介している。 B4 判 全 163 頁 監著：守本とも子 編著：田中和奈 共著者：城戸口友香，高嶋愛里，高橋里沙，田中和奈，長谷川恵介，溝尾朗，<u>守本とも子</u>，龍現寺素子 本人担当部分： 第 3 節「国際協力機関の取り組み」P22-28 を単著。 国際協力のいくつかの方法について知り，世界中のすべての人々がより良く生きられる未来を目指す。
看護職をめざす人の社会 保障と社会福祉	共著	平成 27 年 4 月	みらい	本書は看護職（看護師・保健師・助産師）をめざす読者が社会保障・社会福祉について学ぶテキストである。また，すでに医療現場で看護職やコメディカルとして活躍している方々の学びのふりかえり等にも十分対応できる内容である。 B4 判 全 211 頁 編者：守本とも子 共著者：虎杖真智子，井上深雪，小澤香，鍵本由起子，黒野伸子，新谷奈苗，鈴木久美子，高林新，玉井純子，土屋昭雄，富永堯史，松浦信，真鍋顕久，三宅美恵子，村山くみ，森田隆夫，守本幸次，山口佳子 本人担当部分：編集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
シリーズ 看護・介護・福祉のための「教育学」 教育心理をふまえた患者教育指導実践の手引き 1 看護のための『教育学』	共著	平成 27 年 12 月	あいり出版	本書では看護専門職者が患者への健康面での教育指導を実践するにあたって，学すべき教育原理・教育心理学を踏まえた患者教育指導のノウハウを読者に伝え，日常の看護実践のスキルアップに繋げていきたい。 B4 判 全 151 頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，松田智子，虎杖真智子，鎌田首治朗，松浦純平，中尾友美，武富由美子，山口曜子，佐々木千恵，新谷奈苗，東中須恵子，岡本響子 第 2 章 3「教授理論」P22-25 を単著。 第 2 章 4「現代の教授理論」P25-28 を単著。 教授理論とは教授者が学習者に知識・技能をさずけるために有用な理論である。具体的な教授理論を学ぶ前に，教授（指導）するためのよりどころとする原理について述べたのち（第 2 章 3），主要な教授理論について説明する（第 2 章 4）。 第 2 章 5「人格」P28-P29 を単著。 教育はたんに知識や技術を習得させるためのものではなく，全人的形成が目標となる。したがって教育は人格形成過程の一環として行われなければならない。 第 2 章 6「教育心理学と患者指導」P29 を単著。 本章で学んだ内容が患者指導に生かされることを目的に構成しているが，教育心理学がどのように患者指導に有用か，例をあげて考える。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
系統看護学講座 専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ 基礎看護学[3]」 第 17 版	共著	平成 29 年 1 月	医学書院	本書は，多くの写真やイラストによって看護技術の手順をわかりやすく解説した。また，主な看護技術の手順については，動画で見られるように工夫し，動画の活用によって技術習得が容易となり，より効率的・効果的に技術レベルが向上することが期待される。 B5 判，全 520 頁 共著者：有田清子，有田秀子，井川順子，今井宏美，尾崎章子，後藤奈津美，小林優子，坂下貴子，茂野香おる，立野淳子，田中靖代，辻守栄，内藤知佐子，任和子，林静子，比田井理恵，平松八重子，三富陽子，<u>守本とも子</u>，屋宜譜美子，山勢博彰，吉村雅世 本人担当部分： 第 1 章 A 「環境調整技術」P. 10-P. 24 を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメイキングについて述べた。 共著者：<u>守本とも子</u>，吉村雅世 第 6 章 B 「清潔・衣生活援助」P. 153-P. 211 を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：<u>守本とも子</u>，吉村雅世
痛みのケア	共著	平成 29 年 3 月	ピラールプレス	本書は看護職が患者への最善の痛みケアを提供できるよう，第Ⅰ部で「痛みと人間」をテーマに「痛みと性」，「痛みの意味」，「痛みと倫理」「痛みと医療」について述べ，人間と痛みの関係を理解する。そして第Ⅱ部 5 章～8 章で「痛み理論」を紹介し，痛みに関する理論をもとに痛みについての理解を深める・第Ⅲ部では「痛みと看護」をテーマに「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」，「検査

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
				に伴う痛みの看護」，「治療に伴う痛みの看護」「ターミナルケアと緩和医療」といった臨床の場面を想定した痛みのケアを学ぶ。そして，第Ⅳ部では「痛みケアにおける看護実践例」として，術後疼痛，癌性疼痛，急性・慢性疼痛，出産に関連した痛みの看護，小児に関連した痛みの看護といった主な疾患や状況における痛みケアの展開事例を紹介する。 B5 判 全 180 頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，池辺寧，辻下守弘，前田吉樹，篠原百合子，棚橋千弥子，田中登美，梶村郁子，立川茂樹，新谷奈苗，小池恵理子，澤田京子，横山美菜，室津史子，高垣麻衣 本人担当部分： 「第 9 章 高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」 P36－P49 を単著 慢性的な高齢者の痛みについて，痛みと動作について説明し，痛みに関する観察の力を養う。そして高齢者の痛みの主訴の特徴を述べ，痛みの原因となる疾患または治療について述べる。また，痛みのアセスメントツールを紹介し看護者が利用できる一般的な痛みのアセスメントスケールを学ぶ。代表的な痛みのツールは Visual Analogue Scales (VAS) である。さらに本書では痛みの有無に焦点を絞る pain VAS を紹介し，看護ケアの実践として痛みの治療とケアプランについて述べる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) Factors Relating to Life Satisfaction and Subjective Healthy Feelings in Respiratory Patients During Home Oxygen Therapy (在宅酸素療法中の呼吸不全患者における主観的健康感と生活満足度の関連因子) (査読付)	共著	平成 21 年 3 月	Journal of Information and Behavioral Science for Health and Welfare 日本医療福祉情報行動科学学会誌 vo.1 No.1 March 2010 P.5-P.12	在宅酸素療法中の呼吸不全患者（32名）を対象に面接と Baseline Dyspnea Index(BDI), Geriatric Depression Scale (GDS), Modified Barthel Index (MBI) などの質問紙票調査を行い，主観的健康感と生活満足度に有意相関を持つ項目を探索した。主観的健康感には自信，呼吸困難感，疲労感と有意相関を示し，生活満足度は収入，呼吸困難感，日常抱える課題と有意相関を示した。GDS 平均値は 7.6 と高値を示し鬱傾向にあった。以上より主観的健康感の低下は自信喪失とうつ状態を惹起し，呼吸困難は主観的健康感と生活満足度の両者に影響することが示唆された。症状軽減が在宅酸素療法患者の健康関連 QOL を向上させると考えられた。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者：<u>守本とも子</u>，下内章人，馬場隆明
精神学的障害者の気分アセスメント～ヴィスアルアナログ気分スケールの日本語版の妥当性～ (査読付)	共著	平成 21 年 5 月	日本福祉工学会誌 11(1) P.42-P.48	本研究の目的はヴィスアルアナログ気分スケールの日本語版(VAMS)の妥当性を調べることにある。VAM スケールは，脳卒中，アルツハイマーあるいは外傷脳などの神経学的障害をもつ患者の気分を調べるために開発された。典型的な心の健康と気分を測定するスケールは被験者の言語能力を基礎にしている。しかし，これらの検査は神経学的障害者にはしばしば不適切である。したがって，VAM スケールはこの母集団の気分を評価するために開発されたものであり，被験者の認識能力および/あるいは発言能力に依存しているスケールよりも，いくつかの点において有利である。 VAM スケールの妥当性は高齢者の二つの母集団を対象に調査された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				対象は 1. ある民間の精神病院から抽出した重症あるいは軽症の鬱病と診断された高齢者（37 人）と，2. 地域のレクリエーションセンターから抽出した精神病の既往歴のない高齢者（74 人）であった。 担当部分：統計解析と考察をおこなった。 共著者：<u>守本とも子</u>，Andrea S. Schreiner，早川浩，馬場孝明
部屋の住み心地に及ぼす物理的・感覚的因子の組み合わせ解析 —ファジィニュートラルネットワークによる住居環境解析— (査読付)	共著	平成 21 年 6 月	日本感性工学会論文誌 Vol. 9 No. 1 P. 97-P. 102	本研究により，住居環境，すなわち住居に関する物理的因子(室内環境や室内空間)や感覚的因子(部屋から受ける情感)が住む人の満足感に深く関連していることが明確となった。今回 FNN 解析により選択された項目から，住居環境を工夫して整えること(例えば，新しいカーテンを取り入れて部屋の色彩を変える，寝室用のフロアライトやテーブルライトの購入により夜間照明を変え，くつろげる雰囲気を作るなど)が，住む人の QOL を高めるために重要な要因であることを示唆していると考えられる。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者：牛田泰徳，加藤竜司，<u>守本とも子</u>，本多裕之

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Restraint Plus Water-immersion Stress (RWIS)-induced Stomach Ulcers in Mice are Depressed by a Conditioning Heat Treatment (あらかじめの温熱環境 曝露による水浸拘束誘発 マウス胃潰瘍の抑制) (査読付)	共著	平成 21 年 9 月	Japanese Journal of Hyperthermic Oncology 日本ハイパーサーミア 学会誌 Vol. 25, NO. 3. September, 2009 P81-P87	温熱耐性として，あらかじめの温熱処理が重篤な温熱誘導生物影響を抑制することはよく知られている。本論文において，われわれはあらかじめの温熱処理が水浸拘束ストレス (RWIS) による胃壁の損傷を抑制するかどうかを確かめた。RWIS による胃潰瘍は 42% 発生したのに対して，あらかじめ 37℃ で温熱処理をすると 9% に抑制された。さらに，胃における RWIS 誘導アポトーシス頻度は 13% であったのに対して，あらかじめ温熱処理をすると 8% に抑制された。温熱ショックタンパク質 (HSP) 誘導剤のグラニルグラニルアセトン (GGA) も胃潰瘍の発生を抑制したことから，あらかじめの温熱による HSP がアポトーシス誘導の抑制を介して RWIS による胃壁の損傷を抑制していることが示唆された。 本人担当部分: 統計解析及び研究の総括を行った。 共著者: Rikio Yamagata, Akihisa Takahashi, Xiaoming Su, <u>Tomoko Morimoto</u>, Takeo Ohnishi
Effects of a Stuffed Animal Designed for Nursing Care (介護用“動物の縫いぐるみ”の効用) (査読付)	共著	平成 22 年 9 月	Proceedings of 6th International Conference of Health Behavioral Science 日本保健医療行動科学会 第 6 回国際会議論文集 P. 260-P. 262	本研究は高齢者の癒しと QOL の向上のための温かい介護用縫いぐるみを考案し，認知症高齢者が実際に縫いぐるみを使用した後，どのような変化が見られたかをコーエンマンズフィールド (CMAI) スケールを使用して検討した。縫いぐるみを使用する前後 1 週間の観察をもとに比較検討した。変化の見られた行動は，同じことを繰り返し質問する，机を何度も叩く，といった行動が有意に減少した。高齢者が温かい縫いぐるみを身近におくことは高齢者の癒しに効果をもたらすことが示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				本人担当部分：データーの解析，研究の総括を行った。 共著者：Tomoko Morimoto, Nanae Shintani
Discussion of emergency notification device for elderly people (高齢者のための緊急通報機器の検討) (査読付)	共著	平成 22 年 11 月	Ergonomics for All : Celebrating PPCOE' S 20years of excellence — Lin & Chen(eds) P. 495-P. 501	高齢者の緊急時の不安を軽減し安心して暮らせる社会を実現すべく，各市町村では家庭用緊急通報機器の貸与による支援をおこなっており，これにより高齢者の不安解消と安全確保，QOL 向上を目指している。しかしながらますます需要の拡大が予測されているにも関わらず実際は低い普及率である。本研究では H 市に居住する在宅高齢者を対象に聞き取り調査をおこない，緊急通報機器の使用状況を明らかにし，高齢者にとって活用しやすい機器の開発や，運用方法の改善につなげることを目的とした。その結果，緊急通報機器の使い方の理解や緊急通報機器の形状について改善すべき点が明確になった。 本人担当部分：調査および結果の考察を行った。 共著者:Nanae Shintani, Hiroyasu Nagaoka, Kazuko Horiguchi, Tomoko Morimoto

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
A questionnaire to determine Nursing and Child care students' Understanding of welfare equipment (看護と保育を学ぶ学生の福祉用具の認識についての認識) (査読付)	共著	平成 22 年 11 月	Ergonomics for All : Celebrating PPCOE' S 20years of excellence — Lin & Chen(eds) P. 529-P. 532	子どもと大人の主要な福祉用具への認識について，看護と保育を学ぶ学生間の比較を目的に調査を行った。その結果，認識の違いはカリキュラム等の教育の内容によって影響を受けていることが考えられた。また，因子分析の結果により，双方とも「遊び」が重要なキーワードであることが考えられた。 本人担当部分：研究の企画および結果の考察をおこなった。 共著者:Tomoko Morimoto, Shoko Kamimotono, Nanae Shintani
Study of quality of life (QOL) in home oxygen therapy patients and related factors of actual life situation (在宅酸素療法患者の生活実態と QOL の関係) (査読付)	共著	平成 23 年 10 月	East Asian Ergonomics Federation Symposium 2011 (EAEFS 2011) Ergonomics In Asia:Development, Opportunities, and Challenges P. 295-P. 300	在宅酸素療法は種々の在宅医療の中で最も普及し，その効果は単に患者の生命予後を延長するばかりでなく，人間的な生活と Quality of Life (QOL) を保証するものとして高く評価されている。しかし反面，社会的・精神的・身体的煩わしさのため，社会活動が制限され，閉じこもりがちとなることで抑うつ症状となり，急性増悪を招くという報告もある。そこで生活実態と QOL との関係をより深め明らかにするため，患者の QOL に影響を及ぼす生活実態の関連要因を検討することを本研究の目的とした。結果，「患者活力」と「患者心の健康」が「肺理学療法理解度」に有意に関連していた。肺理学療法の理解度が高い者は，認知能力も高く自己管理ができており，これが自分の疾患を前向きに受けとめ，活力を維持することにつながっていると考えられ，自己管理能力を身につけるための患者教育を繰り返し行ない，普及させていくことの必要性が示唆された。 本人担当部分：研究の総括を行った。 共著者：Nanae Shintani, Tomoko

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
医療系大学におけるチーム医療の実践—医療のパラダイムシフトに向けて— (査読付) 単著	単著	平成 24 年 6 月	日本保健医療行動科学会雑誌 Vol. 28 No. 1 2013 P. 2-P. 6	チーム医療教育は岐阜医療科学大学の建学の精神である「人間性」「学際性」「国際性」の向上を目的とし、本学の特色を活かした独自のプログラムである。 チーム医療に最も必要とされる資質を担保し、現在の医療現場で通用する”医療人”となることを目標とした教育の充実について考察した。
Relationship between life satisfaction and sympathovagal balance in healthy elderly males at home at night (健康高齢男性の夜間における交感神経バランスと生活満足度との関連) (査読付)	共著	平成 24 年 10 月	Health Vol. 4 No. 11 2012 P. 1068-P. 1072	夜間自宅で起床中の健康高齢男性 39 名の心拍変動 (RR 間隔) と身体加速度を計測した。 身体加速度の低い時間についてのみ、心拍変動データの高周波帯域パワーの規格値 (値が高いほど副交感神経優位) を算出した。その値と質問紙より点数化した生活満足度との間に統計的有意な負の相関を確認した。この結果より、生活満足度の高い健康高齢男性ほど、夜間自宅で起床安静時に交感神経系優位にあることが示唆された。 本人担当部分: データ解析と論文の構成を担当した。 共著者: Kohzoh Yoshino, 守本とも子, Takahiro Itagaki, shigetaka Iketani, Masami Nagata, Morihiro Thujishita
The Factors that Inhibit the Health Behaviors of Adulthood Women (成人女性の保健行動を抑制する因子について) (査読付)	共著	平成 27 年 3 月	医療福祉情報行動科学研究 第 3 号 2015 P. 1-P. 8	本研究では、初発の乳がん患者で、手術療法の後に化学療法の 2 回目を終了した以降の患者から、仕事を継続している患者を対象とし、「仕事を継続してく上での困難」について個別に半構造的インタビューを行った。 この結果、7 つのカテゴリー、「治療の副作用からくる身体的苦痛」「仕事に穴をあけることに対する申し訳なさ」「再発への不安から仕事をセーブする」「職場の配慮不足」「受診のしにくさ」「治療の副作用から仕事の能力が落ちているのではないかという不安」「病名告知に

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
				より同僚に気を遣われる辛さ」で構成されていた。 本人の担当：研究の総括を行った。 共著者：新谷奈苗，小池恵理子，<u>守本とも子</u>
身体拘束一時的中断に関する看護師のアセスメントの視点についての考察 (査読付)	共著	平成 27 年 3 月	医療福祉情報行動科学 研究 第 3 号 2015 P.13-P.19	本研究の目的は，精神科病棟で身体拘束中患者のケアに携わる看護師が，日常生活援助場面において，拘束一時中断が可能かどうかのアセスメントをどのような視点で行っているかを明らかにすることである。 その結果，「疎通が図れる」「約束が出来る」「興奮・大声がない」「暴力がない」「緊張がない」「穏やかである」「食事が食べられる」「夜間睡眠がとれる」「自傷がない（うつ状態の患者）」の 9 つのカテゴリーが見出された。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。 共著者：上山千恵子，<u>守本とも子</u>
認知症高齢者を介護する娘介護者の体験 —介護生活の中で体験する困難と，介護生活の支えとなるもの—	共著	平成 28 年 10 月	奈良学園大学紀要第 5 集 p. 67-79	在宅認知症高齢者の介護者（娘）が体験する困難と，介護者の介護生活での支えとなっている要因について明らかにした。調査対象は在宅娘介護者 15 名で半構成的面接調査をおこなった。その結果，介護者が体験する困難として「親の現状を受け止める難しさ」「役割の両立から生じる困難」「自分がやらなければ」「介護協力者との間に生じるずれ」などの 7 カテゴリーが，生活の支えとなっているものとして「変わっていく親を共有できる存在」「介護を分担してくれる家族」「介護効果の実感」などの 4 つのカテゴリーが抽出された。このような娘介護者特有の状況を理解したうえでの支援が重要であることが示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				本人担当部分：調査と研究の総括をおこなった。 共著者：上山千恵子，田場真理，<u>守本とも子</u>
Influence of Job Stressor on Coping Behavior （仕事ストレスが対処行動に与える影響） （査読付）	共著	平成 29 年 2 月	Journal of Information and Behavioral Science for Health and Welfare 医療福祉情報行動科学研究 Vol 4. 2017 p. 51-60.	食品製造業者に勤務する従業員 168 人を対象とし，仕事ストレス因子が対処行動にどのように結びついているかを検証した。重回帰分析の結果，計画的対処行動と要求度，裁量度，技能活用に有意な関連性があり，自己管理能力が高く，目標達成まで自分なりに計画を立て行動する傾向にある者が計画的対処を採用する傾向にあることがわかった。また，積極的協力依頼行動と，サポート・技能活との間に有意な関連性があり，周囲とコミュニケーションが良好でサポートティブな状況が背景にあり，また課題を整理し他者に伝えられる知識や技術のある者が，積極的協力依頼を採用する傾向にあることがわかった。計画的対処，積極的協力依頼といったポジティブな対処を実行するためには，本人の知識や技術を活用できる仕事に就かせることや，普段からのサポートティブな組織作りが大事であると考えられる。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。。 共著者：Nanae Shintani, Hiroyasu Nagaoka, <u>Tomoko Morimoto</u>

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他) —事典— 介護福祉学事典	共著	平成 26 年 10 月	ミネルヴァ書房	本書は「介護福祉学」の構築のためのエビデンスを確立することを主たる目的としている。隣接領域の学問を学びつつ介護福祉学特有の学問体系を構築することが重要である。 「介護福祉学事典」は介護の社会的ニーズに対して，専門的な知識を持って対応できる人材の育成とサービスの向上に寄与するため，教育の根拠となる「介護福祉学」に関する知識・技術の共通理解のツールとして活用できる内容とした。 B5 判 全 829 頁 共・編者：日本介護福祉学会事典編纂委員会 本人担当部分：P546-547 を単著。 「障害児に対する介護福祉」 障害児の定義・概念・考え方について述べ，障害児に関する介護，福祉の実践や制度の現状を明らかにした。また，障害児に対する介護について，近現代史から，ノーマライゼーションの浸透までの背景や経過を説明し，障害のある子どもも社会の中で他の人々と同じように生活でき，活動することができるための展望と課題について考察した。
—研究報告書— 「健常高齢男性の住居内 QOL と自立神経活動との関連性」	共著	平成 21 年 3 月	平成 21 年度住居医学共同研究成果報告集 奈良県立医科大学住居医学大和ハウス寄付講座 P. 115-P. 116	本研究の目的は，健常高齢男性の暮らし・部屋全般や各住居内環境因子に対する主観的評価度と生活の自立神経活動との間の関連性を明らかにすることである。研究結果より，「くらし・部屋」全般に関する項目の中では生活に満足している被験者ほど，HFnu の値が低い傾向が確認された。「住居内環境因子」に関する項目と心拍変動指数との間には統計的有意な相関を示す組み合わせは

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				なかった。これらの結果から，生活に満足している健常高齢男性ほど，夜間 20:00 時から 20:50 までの在宅・覚醒・低運動時に交感神経系有意（精神的にアクティブな状態）にある傾向が示唆された。 本人担当部分：統計解析および研究の総括をおこなった。 共著者：<u>守本とも子</u>，吉村雅世，吉野公三，上平悦子，三毛美恵子，板垣孝寛，池谷茂隆，永田昌美，辻下守弘
「乳がん患者のワーク・トリートメントバランスを支える患者支援プログラムの開発」	共著	平成 26 年 3 月	文部科学省学術振興会 文部科学省科学研究費助成金（基盤研究 C） 研究成果報告書 （平成 23 年～平成 25 年） A4 判，全 27 頁	本研究では，乳がんを患い外来で化学療法を受けているものの就労を継続している者を対象として，対象者の抱えている苦悩や課題をインタビューにより明らかにした。またその結果をもとに，患者支援の関係機関が集まり，援助のあり方についての検討を行った。 本人担当部分：統計解析および研究の総括をおこなった。 共著者：新谷奈苗，<u>守本とも子</u>，立川茂樹，岩永誠，堀口和子，中村百合子，小池恵理子，永岡裕康，新谷昌也
— 総説 — アルツハイマー病患者 家族介護者へのサポート グループを用いた対処技 術指導について	共著	平成 20 年 9 月	看護実践の科学 看護の科学社 VOL. 33 NO. 10 P. 72-P. 80	対処技術を指導する上でのサポートグループ利用法に注目し，支援グループを指導する看護師のグループセラピーの方法について述べる。特に支援グループを始める前のグループセラピー理論とその技術の必要性を述べる。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
				共著者：アンドレア・S・シュナイザー， 佐伯あゆみ， <u>守本とも子</u>
地域で生きるデンマークの高齢者住居	単著	平成 22 年 5 月	大阪保険医雑誌 大阪府保険医協会 第 38 巻 522 号 P. 30-P. 35	北欧諸国のなかでも「高齢者住居」について独自の発展を遂げ，1987 年に施設建設を凍結するという政策転換に踏み切ったデンマークの高齢者住居と日本の画期的な高齢者共生住宅の事例を取り上げ，新しいステージに突入した日本の今後の高齢者住居の在り方を検討した。
終末期透析についての意識と実態調査報告書	共著	平成 28 年 3 月	ばんび NPO 法人奈良県腎友会 2016 年 春号 No. 87 P. 3-P. 12	終末期医療についての関心の高まりとともに終末期腎不全医療のありかたについての議論も高まりをみせている。透析患者の終末期の意思決定を支える医療・ケアは転換期を迎え，今まさにその実現に向けて大きく動きは始めている。しかし，透析患者は生きるため，命を繋ぐために透析を選択しているのであつて，終末期のことを主体的に考えることは，健康な人がそれについて考えるほど容易なものではない。 そこで，平成 27 年 8 月下旬～9 月下旬にかけて奈良県腎友会事務所の協力を得て，会員の皆様を対象に「終末期透析についての意識と実態調査」を実施し，その結果をまとめた。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者：<u>守本とも子</u>，田場真理
地域で生活する高齢者の災害時非難状況に関する文献検討	共著	平成 29 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究 vol. 4 P. 19-P. 25	世界各地で自然災害が増加している。高齢者人口の割合が世界で比較的高い国々での自然災害が増加しているという現状がある。このような状況にありながら近年，わが国の高齢化は加速しており，高齢者人口の割合は世界で最も高い。東日本大震災では死者うち 60 歳以

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
				上の比率はおよそ 6 割であった。そこで，2006 年から 2016 年までの文献を検討することで，高齢者の防災の実態を分析し，今後の課題を明らかにすることを目的とした。その結果，現在，国などの関係機関が防災対策に多く取り組んでおり，高齢者の防災意識も高い一方で，実際の防災行動が十分に取れていないといった結果が得られた。災害が続発する中，早急に防災行動が迅速かつ適切に行えるための対策を検討する必要があることが示唆された。 共著：丸上 輝剛，新谷 奈苗，<u>守本 とも子</u>。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。
—国際会議発表— Effects of a Stuffed Animal Designed for Nursing Care (介護用ぬいぐるみの効果)	—	平成 22 年 9 月	6th International Conference of Health Behavioral Science Sustainable Health Promotion: Dialogue on Well-being & Human Security in Environmental Health (Kuala Lumpur, Malaysia)	本研究の目的は，施設入居高齢者の癒しと QOL の向上を考慮した「温かい介護用縫いぐるみ」の効用を検討することである。コーエンマンスフィールド (CMAI) 調査票をもとに縫いぐるみ使用前・後の高齢者の行動の変化を比較した。結果として「同じことを繰り返し言う（質問する）」に有意な差がみられた。 担当部分：研究の総括を行った。(P. 86) 共同発表者：<u>守本とも子</u>，新谷奈苗
Study about quality of life(QOL) of home oxygen therapy patient and related factors of actual life situation (在宅酸素療法患者の QOL と生活実態との関連について)	—	平成 23 年 10 月	Proceeding of the 2nd East Asian Ergonomics Federration Symposium (EAEFS 2011) National Tsing Hua University, Hsinchu Taiwan, 4-8 October 2011 P. 48	在宅酸素療法患者の生活実態と QOL の関連を明らかにするために，患者の QOL に関連する生活実態の要因を検討した。その結果，患者の活力や心の健康に肺理学療法の理解度が高いことが明らかになった。肺理学療法の理解度が高い患者は認知能力も高く，自己管理ができており，疾患があっても前向きな生活を送っていることが明らかになった。自己管理能力を身につけるためにも理学療法な

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				どを積極的に行う患者教育の重要性が示唆された。 本人担当部分：研究データの解析，総括を行った。 共著者：Nanae Shintani, <u>Tomoko Morimoto</u>
Difficulty in continuing job for breast cancer patients getting chemotherapy (化学療法後の乳がん患者が仕事を続ける上での困難)	—	平成 24 年 3 月	30th Congress of the International Commission on Occupational Health (ICOH 2012), Cancun center (Mexico)	乳がんの治療は化学療法を含むことから，副作用による身体的苦痛を伴う。しかし外来通院で治療を受けながら仕事をこなしている患者が多いことから，通院により化学療法を受けている乳がん患者の仕事と治療を継続していく上での困難を明らかにすることを研究の目的とする。 A 県内のがん拠点病院で乳がんと診断され，化学療法を受けている患者で仕事を継続している患者 6 名を対象とし，「仕事を継続していく上での困難」について半構造的インタビューを行った。結果から 7 つのカテゴリが抽出された。カテゴリは【治療の副作用からくる身体的苦痛】【仕事に穴をあけることに対する申し訳なさ】【再発への不安から仕事をセーブする】【職場の配慮不足】【病院のシステム上の不便】【治療の副作用から仕事の能力が落ちているのではないかとという不安】【病名告知により同僚に気を遣われる辛さ】で構成されていた。 本人担当部分：研究の総括を行った。 共同発表者：Nanae Shintani, <u>Tomoko Morimoto</u>

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Remote Fitness System Advantages with Exercise Classes for Community-dwelling Older People (地域在住高齢者の運動教室に遠隔フィットネスシステムを使用する利点)	—	平成 29 年 4 月	32nd International Conference of Alzheimer's Disease International, Kyoto, Japan	自宅で生活する地域在住高齢者を対象とした運動教室に遠隔フィットネスシステムを用いることの可能性を明らかにすることを本研究の目的とした。 奈良県内の特別養護老人ホーム 1 施設に遠隔フィットネスシステムを設置し，遠隔フィットネスシステムを使用した運動教室を週 1 回 30 分間自宅で生活する 65 歳以上の地域高齢者 10 名に対して 1 ヶ月間開催した。その結果，対象者の属性は女性 9 名，男性 1 名。平均年齢は 81.5 歳 (SD=5.8) であった。 分析の結果，遠隔フィットネスシステムを使用した運動に参加して悪かったことについての訴えはなく，利点についての意見のみであった。 遠隔フィットネスシステムの利点として，32 コード，8 サブカテゴリー，4 カテゴリーが抽出された。地域高齢者は運動内容を覚えていることができないため，自宅にて一人で運動を行うのは難しいと感じていたが，遠隔フィットネスシステムを使用すれば運動指導者の動きを実際に見ることができ，指導者からの指示をその場で受けながら運動を行えるため，真剣に運動に取り組むことができ，効果的な運動の実施につながっていると感じていたことが明らかとなった。これらのことから，遠隔フィットネスシステムを使用すれば，認知症など記憶障害がある高齢者に対しても効果的な運動指導が行える可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画書の立案と調査結果の分析をおこなった。 共同研究者：田中和奈，吉村雅世，吉村昌子，東中須恵子，守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
—国内学会発表— 住居における快適性評 価スケールの開発	—	平成 20 年 11 月	日本福祉工学会第 12 回学術講演会講演論 文集 山梨大学（甲府市）	本研究では，住居環境要因と心理的・身体的 QOL の関係性を分析するための基礎資料として住居の快適性評価スケールを作成した。その結果，3 因子が抽出され，第 1 因子は“空間”，第 2 因子は“光”，第 3 因子は“情緒”と解釈された。また信頼性の検討のため，クロンバックの α 係数を算出したところ，各下位尺度とともに 0.78 以上の内部一貫性がみられた。(P. 89-P. 90) 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：<u>守本とも子</u>，青山美智代，浅見恵梨子，上平悦子，岡本啓子，勝井伸子，三毛美恵子，吉村雅世，星野政明
看護・保育学生の福祉用 具に対する認識の検討	—	平成 20 年 11 月	日本福祉工学会第 12 回学術講演会講演論 文集 山梨大学（甲府市）	福祉用具に対する認識状況を知るため，保育学生（専門課程 110 名，短大生 110 名），看護学生（大学 3 年次 80 名）に対し，質問紙調査により福祉用具，離乳食，調理された食品及び遊び道具について高齢者，小児どちらに使用する認識が高いかについて検討した。看護と保育専門課程の学生は類似の傾向を示し，ほとんどの項目において高齢者が使用するという認識が高かった。保育短大生においては遊びに関して子どものものと認識していた。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：上本野昌子，<u>守本とも子</u>

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
在宅酸素療法患者と介護者の QOL ～ 国民標準値との比較～	－	平成 21 年 3 月	日本医療福祉情報行動科学会 第 4 回大会抄録集 (兵庫県 甲南女子大学)	患者と介護者の在宅生活をよりよい健康生活へ導く方策を検討するために，SF-36v2 質問紙をもちいて，患者と介護者の QOL を把握し，性，年代それぞれの国民標準値と比較した。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。(P. 15) 共同発表者：新谷奈苗， <u>守本とも子</u>
脳血管障害患者の心理適応面の数量化について ～障害受容スケールの作成と臨床的応用～	－	平成 21 年 3 月	日本医療福祉情報行動科学会 第 4 回大会抄録集 (神戸市)	医療者の経験などによらない客観性の高い，簡便な評価法の検討が必要と考え，脳血管障害患者について障害受容スケールによる数量化の可能性と臨床的応用について述べた。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。(P. 16) 共同発表者：山形力生， <u>櫻井秀雄</u> ， <u>守本とも子</u>
QOL of home oxygen therapy patients and caregivers comparison with standard value (標準値を用いた在宅酸素療法患者と介護者の QOL の比較)	－	平成 21 年 8 月	第 13 回日韓健康教育シンポジウム 兼 第 57 回日本教育医学会大会抄録集 (ソウル市)	本研究では，患者と介護者の在宅生活をよりよい健康生活へ導く方策を検討するために，SF-36V2 質問紙をもちいて，患者と介護者の QOL を把握し，性別，各年代それぞれの 0-100 得点標準値と比較し検討した。 対象者は 40 歳以上で広島県 T 市の訪問看護ステーションと H 市の総合病院に通院している在宅酸素療法患者とその介護者 30 組であり，訪問による面接調査を実施した。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。(P. 77) 共同発表者：新谷奈苗， <u>守本とも子</u>

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
あらかじめの温熱刺激によるストレス防御効果について	－	平成 23 年 3 月	日本医療福祉情報行動科学会第 6 回大会抄録集 (岐阜市)	精神的ストレスの一種として，マウス個体に対する水浸拘束ストレスによる胃潰瘍発生モデルを用い，あらかじめの温熱刺激がその後のストレス暴露への防御効果を示すことを検討した。免疫染色法の解析結果で，あらかじめの温熱処理群では 8.2%のアポトーシスの減少がみられた。(P. 11) 本人担当部分：結果の分析をおこなった。 共同発表者：山形力生，高橋昭久，<u>守本とも子</u>，大西武雄
地域における福祉講演「QOL を高める高齢者の生き方」(1) — 「ストレスに関する学びの検討を中心に—	－	平成 23 年 6 月	日本保険医療行動科学会 第 26 回学術大会抄録集 (大阪府高槻市)	本研究の目的は QOL を高める高齢者の生き方をテーマとした地域住民のために企画した福祉講演への参加による地域住民の学びの成果を検討した。福祉講演での学びを今後の生活の中で具体的に活用していこうと考えているとともに，福祉講演会に参加したことが今後の生きる糧になっていたことが推測された。 本人担当部分：福祉講演会の講師であり，講演後のアンケートの分析を行った。 共同発表者：新川泰弘，<u>守本とも子</u>
在宅酸素療法患者の QOL に影響を与える介護者の支援方策の検討	－	平成 24 年 3 月	日本医療福祉情報行動科学会第 7 回大会抄録集 (大阪市　メルパルク大阪)	不可逆的に進行する肺病変がある慢性呼吸不全患者の在宅療養生活を維持するためには，気道感染の予防や日常生活活動の適切な制限といった患者自身の自己管理に加え，それを支える介護者の役割が重要である。本研究では，患者の QOL に影響を及ぼす介護者への支援方策を検討することを目的とした。(P. 12)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
				本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：新谷奈苗，<u>守本とも子</u>
看護師国家試験の出題基準に沿った講義内容の検討	－	平成 24 年 6 月	日本保健医療行動科学会 第 27 回 抄録集 (岐阜市)	本研究では，看護師国家試験出題基準に沿った小項目に対する講義の有無を明らかにし，教授内容の過不足や効果的な教授について検討することを目的とした。(P.78) 本人担当部分：研究の総括を行った。 共同発表者：渡邊美幸，奥百合子，小平由美子，箕浦文枝，<u>守本とも子</u>
高齢者を対象とする調査研究の評価について －介護老人福祉施設でアクティビティケアとして遠隔フィットネスシステムを用いる研究から－	－	平成 29 年 6 月	日本保健医療行動科学会雑誌 (千葉県鴨川市)	本研究の目的は特別養護老人ホームに入所する高齢者に対し遠隔地フィットネスシステムを用いた運動療法の実施から，要介護高齢者を対象とする調査研究の方法について示唆を得ることである。対象は介護老人福祉施設入所の高齢者 9 名(女性 1 名、男性 8 名)。調査期間は平成 28 年 5 月～6 月。平均年齢 86.6 歳，要介護度 1～4 (平均 2.4) であった。フィットネス運動は 1 回 30 分，週に 1 回火曜日の 13:00～13:30 の時間で計 4 回実施した。実施の初回と終了後、健康感と生活の満足感を VAS スケールで評価した。終了後グループフォーカスインタビューにより感想を聴取した。インタビュー内容の分析を行い，VAS スケールは統計的処理を行った。その結果、実施前後で健康感が数値的に低下していた。このことは「思うように動かない身体を実感する」ことになり健康感に影響するものであったと考えられる。高齢者の感想からは，ただ運動するだけでなく個別な対応を受けることを心地よく感じていると考えられた。介護に関わる職員の言動は効果があったと判断できるもので

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
				あった。 本人担当部分：研究計画の策定と分析をおこなった。(P.67) 共同発表者：吉村雅世、田中和奈、守本とも子、東中須恵子、吉村昌子
—シンポジウム— 第 23 回日本保健医療行動科学会学術大会	—	平成 20 年 6 月	主催：日本保健医療行動科学会事務局 山梨県甲府市 山梨学院大学	一般演題発表 座長
第 56 回教育医学会学術大会	—	平成 20 年 8 月	主催：教育医学会 大阪府柏原市 大阪教育大学	一般演題発表 座長
第 25 回 日本保健医療行動科学会学術大会	—	平成 22 年 6 月	主催：日本保健医療行動科学会 群馬県前橋市 前橋 プラザ元気 21	一般演題発表 座長
第 41 回日本看護学会 老年看護 学術集会	—	平成 22 年 9 月	主催：日本看護学会 奈良県奈良市 なら 100 年会館 大ホール	演題：「高齢者の QOL を追及する—今果たすべき看護の役割」 コーディネーター
6th International Conference of Health Behavioral Science (第 6 回国際保健医療行動科学会議)	—	平成 22 年 9 月	主催：International Conference of Health Behavioral Science マレーシア クアラルンプール	演題：“Religious Hypnosis” ファシリテーター
第 26 回 日本保健医療行動科学会 学術大会	—	平成 23 年 6 月	主催：日本保健医療行動科学会 大阪府高槻市 大阪医科大学看護学部	基調講演：「災害とリスクコミュニケーション」座長 ポスター発表 座長

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
第 27 回 日本保健医療行動科学会 学術大会	—	平成 24 年 6 月	主催：日本保健医療行動科学会 岐阜県岐阜市 じゅうろくプラザ	基調講演：「医療系大学におけるチーム医療教育の実際—医療のパラダイムシフトに向けて—」 講師
第 9 回 日本フットケア学会 岐阜セミナー	—	平成 24 年 9 月	主催：日本フットケア学会 岐阜県岐阜市 じゅうろくプラザ	一般講演：「フットケアのための足の解剖とケアそして歩行」 座長
日本サーモロジー学会 第 33 回大会	—	平成 28 年 5 月	主催：日本サーモロジー学会 奈良県奈良市 奈良学園大学登美ヶ丘キャンパス	招待講演：「がん看護と体温」 講師
—マスコミ—				
新聞	—	平成 20 年 8 月	奈良新聞社 ならリビング	高齢者の住まいに関する記事。これから必要なのは、生きる主体として高齢者を考えることであり、自分の人生は自分でデザインすることが大切である。
	—	平成 20 年 9 月	毎日新聞	介護用縫いぐるみの効用についての研究結果に関する記事。認知症高齢者に遊び療法の必要性を述べた。
文部省科学研究費およびその他の研究助成金 大和ハウス「住居医学」研究奨励金	—	平成 20 年	大和ハウス	研究題名：高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価 研究助成金：1,300 千円 研究代表者：守本とも子
大和ハウス「住居医学」研究奨励金	—	平成 21 年	大和ハウス	研究題名：高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価 研究助成金：1,500 千円 研究代表者：守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
文部科学省科学研究費 補助金 基盤研究 C	—	平成 23 年～ 平成 25 年	文部科学省	研究題名：乳がん患者のワーク・トリー トメントバランスを支える患者支援プ ログラムの開発 研究助成金：4,200 千円 研究代表者：新谷奈苗 分担者：守本とも子
文部科学省科学研究費 補助金 基盤研究 C	—	平成 26 年～ 平成 28 年	文部科学省	研究題名：乳がん患者の就労を支える Job recovery path の開発 研究助成金：4,550 千円 研究代表者：新谷奈苗 分担者：守本とも子
奈良学園大学保健医療 学部共同研究費	—	平成 28 年	奈良学園大学	研究題名：看護学生と進める健康づくり 支援キャラバン隊ー奈良県内過疎地域 を対象に一【2015 年度継続課題】 研究助成金：500 千円 研究代表者：東中須恵子 分担者：守本とも子
奈良学園大学保健医療 学部共同研究費	—	平成 28 年	奈良学園大学	研究題名：照度アップ窓のブライトケア の可能性の研究ー認知症高齢者の睡眠 支援ー 研究助成金：400 千円 研究代表者：吉村雅世 分担者：守本とも子

教 育 研 究 業 績 書		
平成31年3月31日		
氏名 吉村 雅世		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学	高齢者、老年看護学、QOL、物語、人間行動科学	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 —講義— 1) 奈良県立医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学Ⅱ」(援助論)		奈良県立医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学Ⅱ」(援助論) (2年次生80名、通年2単位60時間)で講義内容と進行計画及び評価方法等を示すことで、学生に授業の概要を周知すると共に、予習・復習できる内容を示すことで学習効果を高めることを目的とした。
①シラバスの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	①授業概要、評価方法、教科書・参考図書を示した。学生の授業評価は、「シラバスに沿った授業である」、「資料の量は適当であった」という評価が高かった。
②プロジェクターを用いたスライドの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	②教科書の中で重要事項はパワーポイントを用いてスライドにして示した。スライドは資料として印刷し配付した。学生の授業評価は、「シラバスに沿った授業である」、「資料の量は適当であった」という評価が高かった。
③教科書以外に講義用資料を作成し活用	平成16年4月 ～平成17年3月	③最新の統計や教科書にない情報、最新の情報などはその都度、別資料を作成し配布して活用した。学生の授業評価は、「シラバスに沿った授業である」、「資料の量は適当であった」という評価が高かった。
④「出席表」によるミニレポートの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	④学生の理解した内容・程度、授業の感想を知るために活用した。同時に、学生自身が記述することで自己の学びを確認・強化することを支援する方法として活用した。 毎回、出席表として、学び・感想、時にはテーマを示し、学生のコメントを書かせた。学生は熱心に記入していた。学生の記述から学習の程度や状況を確認できた。また、次の時間に一部を紹介したり、補足したり、質問に答えたりすることでフィードバックを行うことができた。その1つに、初講の時に高齢者のイメージを色にたとえて記述してもらい、次の講義で学生が何色を示しているか傾向を統計でフィードバックする方法を活用している。学生は次の出席表の感想で、自分たちが高齢者をどの色でイメージしているか、他の学生はどのようにイメージしているかを知ることができたと感想をのべている。この方法は、後述の「老年看護概論」「介護概論」と、援助の対象が高齢者となる科目を学ぶ学生達に活用している。学生の色イメージの傾向は、灰色、茶 深緑、オレンジをイメージする傾向にあった。この結果を学生に示すことで、自分たちが高齢者をどのように色イメージしているかに気づき、今後の授業を通して、これからの高齢者を心身社会的に理解することに役立つと考える。出席票のコメントから高齢者を肯定的に見ようとする姿勢が感じられた。

事項	年月日	概要
⑤事例による看護過程のペーパーシュミレーションの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑤疾患を抱える高齢者理解を深める、また、看護過程をリアリティに考える能力を高める学習方法として活用した。 高齢者に特徴的な疾患の事例を多用し、看護過程の展開を、1人で、又はグループでペーパーシュミレーションする演習に活用した。演習では、グループで立案した看護計画を実演・発表し、クラスでの共通理解を図った。事例は、脳梗塞、大腿骨頸部骨折、肺炎、パーキンソン病、認知症、COPDといった高齢者に特徴的な疾患を持つ事例とした。
⑥講義用教科書の作成と授業への活用 一部執筆（再掲）	平成16年4月 ～平成17年3月	⑥授業する内容を1冊のまとめた教科書を作成し活用した。 「老年看護学」の一部を執筆し講義用の教科書を作成した。著書の項目を参照。B5版で、国家試験の老年の領域に関する問題に対応している。疾患を抱える高齢患者看護の知識・事前学習として活用できるものである。特に、事例の演習や実習で活用できる図書であると確信している。
⑦グループワークと発表を活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑦自己の学びを表出する場、他者の意見を聞く場として活用した。 他者の考えや力を借りて自己の考えを発展させることを目的とした。毎回10分程度3～4人の学生同士で話し合い、発表する時間を作った。特に、学生が対話し意見を交換することで、人の話が聞ける、自己の思考を外在化する、他者の意見を取り入れる、自己の学びを発展させる、学びを共有する、といった学習効果をねらった。実施後のレポート・感想より学生は他の学生の意見が聞けた、自分と同じ意見の人がいることで自己を肯定できた、自分とは違う意見が参考になった、看護について考えを発展できたといった感想があり、短時間のグループワークは効果があると評価できた。
⑧課題レポートの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑧学生が、自ら課題を持って高齢者理解に取り組むことの支援として活用した。また、45時間の学習時間を効果的に使う方法として活用した。 約3000字程度で、老年看護で特に学びを期待したい点をテーマにした。（例：貴方の高齢者イメージ、老年看護の特徴等）レポートから学生は個々に高齢者の特徴を掴んでいると判断でき、高齢者について記述する機会を作ることは教育的効果があると評価できた。

事項	年月日	概要
⑨高齢者体験の活用 市販の高齢者・障害者体験装具の活用 学生と共にOHPシートを用いて高齢者眼鏡を作成し、体験学習で活用する。	平成16年4月 ～平成17年3月	⑨学生が経験したことのない運動機能・視聴覚機能の低下した高齢者を理解することの支援として活用した。 高齢者体験装具、白内障眼鏡を活用し、学生にとって、加齢による視聴覚機能と運動機能の障害という未知の世界を体験することで、高齢者に対する看護の必要性を理解し、看護の方法を検討し実施する創意工夫と行動力が養われることをねらいとしている。 体験内容は視力、聴力、皮膚の触覚、四肢の関節拘縮等である。生活体験を取り入れることで、生活機能のアセスメントにも役立っている。体験レポートには看護学生として体験した加齢に対する驚きや看護の必要性が記述されていた。学生は体験を高齢者理解に役立て、老年看護の目的を理解することで実践に向けて創意工夫がなされると評価している。
⑩視聴覚教材の活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑩高齢者をイメージしにくい環境に暮らす学生に、よりアクチュアリティな高齢者理解を支援するため活用した。高齢者の実際や加齢による身体機能の低下を動画（ビデオ・DVD）で見せることで、より現実的な高齢者理解を図ろうとした。
⑪ビデオ・DVD映像の活字化 資料作成、活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑪DVD・ビデオの内容を活字にして印刷資料として作成し、高齢者理解の学習支援として活用した。視聴中は映像に集中し、後で資料を確認することで学びを深めることを期待した。 授業評価で映像は効果的に使われていたと言う評価であった。また、出席表の感想でも映像の資料がよかったという記述があった。
⑫アクティビティケアの企画・実践を演習として実施する。	平成16年4月 ～平成17年3月	⑫レクリエーション実践方法・技術を獲得することで、アクティビティケアの能力を高めることを目的とした。グループでレクリエーションを企画し学生同士で実践・演習を行う。 演習では、企画書を作成し、目的・目標、方法、注意事項を明らかにしておく。実施後は目標の達成状況をまとめ次回の課題まで検討する。アクティビティケアは介護老人保健施設での実習で活用できる援助技術の能力を高める。また、企画書を用いた実践は、問題解決思考の訓練であり、看護過程の実践練習も意図している。学生には企画・アイデア・発想の力があり、アクティビティケアを企画し実践することを通して、看護の企画力・行動力の向上を図れると考えた。学生は自分たち学生が相手であるが、できるだけ高齢者をイメージしようと高齢者体験装具を活用するなど積極性と行動力が見られた。次年度の老年看護実習（特別養護老人ホーム、介護老人保健施設）で実際の入所者に対して実践するときその成果が発揮できていると自己評価している。 また、看護過程の展開を指導する歳、学生が教室で経験した出来事も実在性を持つ経験として学びを助けていると考え、学生の体験・経験の機会を作る工夫をしている。

事項	年月日	概要
⑬ナラティブアプローチの視点を取り入れたグループワーク	平成16年4月 ～平成17年3月	⑬前述の「⑦グループワーク」をより効果的に実施できる方法として、学生の姿勢を明確にするために「ナラティブ」論を活用した。 テーマについて語り合い、語られたものを発表する機会を「ナラティブ」の考え方で指導した。全体で10～15分のナラティブ・アプローチといえるもので、「学生は発表しなければ」という気持ちから「自分の意見を語る」という気分の転換があると考えている。感想では、「グループ内での語り合いは、他の学生の意見や思いを知ることができ、考えを広げることができた」「全体での発表も様々な考えがあることがわかった」と好評であった。
⑭福祉パーク 体験見学の活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑭奈良県立福祉パークが保持する、介護具、自助具、住宅設備を活用し、学校で保持するものよりさらに多くの用具を用いて高齢者体験や生活体験を行い、高齢者理解を深めることを目的とした。奈良福祉パークは学校から車で15分の場所にある介護実習室を持つ施設である。 ここでは、高齢者体験装具を装着して、介護住宅体験、各種車椅子・トイレ・浴室・自助具の体験をおこなう。また、車椅子の自走・他走や視覚障害者として運動公園、模擬交差点などを散策・歩行体験をおこなう。実施後のレポートから、学内ではできない、より生活に近づいた体験ができたという感想があった。
⑮アセスメントツールの冊子の作成・活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑮看護過程を展開する際、多様で個別的な高齢者の情報収集とアセスメントを助けるツールとなることを目的に作成した冊子である。領域責任者と共同で作成し活用した。（片面印刷32頁） 高齢者の「日常生活行動」、「感覚器」、「栄養」、「認知機能」をアセスメントすることを助けるもので、観察とアセスメントの視点を示し、実際に記述できるシートを綴った。改良長谷川式認知症簡易スケールや褥瘡のスケール、転倒スケール等も使用した。その後の、「老年看護学実習」で実際に活用し、高齢者理解を深め高齢者の多様性と個別性の理解に役立てることができていたと評価している。
⑯看護の実際をリアリティにシュミレーションするための事例の工夫・活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑯高齢者の健康レベルに応じた看護過程の展開を学習できる事を目的に事例を作成した。 事例は転倒・骨折の発症から、搬送、入院、治療、リハビリ、施設入所、在宅へと一連の経過を持つ事例を作成した。学生は各健康レベルに取り組み、看護過程の展開をペーパーシュミレーションしていった。⑦⑬のグループワーク・発表を併用した。

事項	年月日	概 要
⑰「昭和を生きた高齢者」をテーマにグループワーク、スライドで成果発表の活用。	平成16年4月 ～平成17年3月	⑰自分たちとは違う世代の高齢者の理解を深めること、また、積極的な高齢者理解を行うことを目的に「昭和を生きた高齢者」というテーマで6～7名のグループワーク・発表を課題として計画した。 各グループで食事、生活、道具、音楽、娯楽、ファッション、流行、医療、戦争といったテーマを決め、グループワークをおこなった。グループワークの概要は初講時に示し、発表は終講時に行った。成果はパワーポイントでスライドを作成し発表した。発表内容は学生達が体験したことのない、今まで直接関わったことのない、高齢者（後期）の生きてきた社会についてであった。スライドは発表資料として冊子にした。学生に配布するとともに、実習施設へも学生のレディネスとして配布した。レポートでは高齢者の活きた時代に近づけたという感想があった。これらの活動・学びは、次の年の各論実習に生かされ、高齢者の視点で生活を考えることができていると自己評価している。学生の発表内容は一部学生達の同意を得て、オープンキャンパスで掲示している。参加している学生より付き添いの父母から「懐かしい」と好評である。
	平成17年4月 ～平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学概論」（2年次生80名、前期30時間中、4～6時間）において左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫・活用した。
	平成22年4月 ～平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学概論」（2年次生80名、前期30時間）において左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫・活用した。
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「看護学概論」（2年次生100名、後期30単位）で左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫・活用している。
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」（3年次生100名、前期60単位）で左記①～⑰を工夫・活用している。
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科、臨床検査学科選択科目「看護概論」（3年次生100名、後期15単位）で左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫・活用している。
⑱デジタル教科書の活用	平成24年12月 ～平成23年3月	ナーシンググラフィカ全34冊の電子教科書を活用している。特に「高齢者の健康と障害」「高齢者看護の実践」を講義中では、図表や映像をスライドとして活用している。岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」「老年臨床看護実習」で活用している。

事項	年月日	概要
2) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学概論」(2年次 後期 80名) 「老年看護学援助論」(3年次 前期 80名)	平成27年10月 ～現在に至る 平成28年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科「老年看護学概論」(2年次 後期 80名)「老年看護学援助論」(3年次 前期 80名)では授業計画を作成し、授業計画に沿って15回の講義を行っている。前述の①～⑤、⑦～⑫、⑯～⑳是一部変更し継続した。②での 毎回スライドは16枚とし、ファイルしやすいように工夫した。④の毎回の小レポートでは、必要時フィードバックし共有している。学生が誤った理解している場合の対応、学生の質問に答える機会にもなっている。授業初日の小レポートには「高齢者のイメージを色で示すことを促す」。毎年ではあるが灰色、茶色、オレンジが多い。これは介護学生も、放射線科の学生も同じ傾向にある。⑥作成に関わった教科書は使用せず、ナーシンググラフィカシリーズ(メディカ出版)と看護学講座(医学書院)をデジタル版と併に活用した。⑨高齢者体験装具は部分的装着型の「老いたろう」からスーツタイプに変更した。高齢者体験めがねの材料を透明クリアホルダと黄色セロファンに変更した。⑭福祉パーク見学は地域的に活用困難となり、その代わり学内演習に組み込み継続している。⑮アセスメントツールは規模を縮小して活用している。⑯では⑥と重複するが医学書院のデジタル版を併用し活用している。
⑲ 動画の作成 ipadで活用 ・高齢者体験の方法 ・呼吸器検査の看護	平成27年10月 ～現在に至る	⑲動画 ipadで学生が視聴できる動画を作成した。訳10分 高齢者体験用装具の装着、歩行や階段昇降、見え方、巧緻作業の困難等を順を追って経験できるように工夫した。学生は個々にipadから実際の映像で予習をして、演習に望むことを期待している。
⑳認知症サポーター養成講座 1コマを使い認知症とケアの理解を深める。認知症サポーターとして認知症患者と関わる動機付けも期待している。	平成28年4月 ～現在に至る	⑳授業の中で大学の所在地の地域包括支援センターに依頼し、学生を対象に認知症サポーター講座を開催した。既習の認知症ケアの認知症サポーターではあるが認知症患者と関わる動機付けが期待した。学生はサポーターという役割に興味を持っていた。
—実習— 3) 奈良県医科大学看護短期大学部「成人看護学実習」(3年生次、4単位 180時間、1グループ8名5グループ計40名を担当し、以下の取組を行った。	平成9年4月 ～平成13年3月	実習調整、学生への実習指導を実施した。指導の内容は、実践の見守り、実習環境の整備・調整、相談、学習支援、看護モデル、安全確保、カンファレンス等である。臨地実習において学生が自己の実習目標を達成できる環境を作る為に、教材や方法に工夫した。実習は、血液・呼吸器内科病棟において、1人の成人期の患者を学生に受け持ち看護過程の展開を実施するもので、成人慢性期の実習であった。
①毎日、実習開始～終了時間を実習指導の時間とした。学生が必要とするときに必要な指導を行う。	平成9年4月 ～平成13年3月	①学生の実習中は共に病棟で過ごし、常時指導できる体制をとることを目的に行った。
②看護過程の展開を中心に看護を実践する	平成9年4月 ～平成13年3月	②看護過程を展開ができることを目的に、実習方法は1人の患者を受持つ方法を用いた。
③実習マニュアル(要項)の作成、活用	平成9年4月 ～平成13年3月	③学生が実習に望む際に可能な限り不安や心配を取り除き、実習目標を理解し、実習行動が取れることを意図して作成した。実習要項は、実習の目的、到達すべき目標、具体的な実習方法、注意事項を内容とし「要項を読めば口頭説明は不要」というスタンスで作成した。
④実習記録用紙の作成、活用	平成9年4月 ～平成13年3月	④学生が実習目標を達成できる方法と手順として、項目を吟味して実習記録用紙を作成した。データベースは単位認定者の助言を下に「科学的看護論」をベースして作成した。記録用紙の項目に沿って記述すれば実習目標が達成できることをねらい作成した。

事項	年月日	概 要
⑤実習計画ワークシートの作成、活用	平成9年4月 ～平成13年3月	⑤学生の実習目標を達成できる環境を作ることを目的に実習計画ワークシートは作成した。指導教員、臨地指導者用の記録である。ワークシートにより担当する8名の学生の行動をは把握すると共に、実習指導者との連携や、他のスタッフとの調整に役立てた。
⑥実習において毎日カンファレンスをおこなう	平成9年4月 ～平成13年3月	⑥1日をまとめ、明日の計画を立案する機会を設ける環境として、毎日、カンファレンスを実施した。
⑦実習前にバイタルサインの測定についての技術チェックを行う	平成9年4月 ～平成13年3月	⑦実習に際しての技術確認、基本的看護技術の確認のためバイタルサイン測定の技術チェック、必要な観察事項の事前学習を行った。実習が始まるまでにチェックをして実習に望んだ。 受持患者はほとんどが肺がん、血液のがん患者であった。学生はがん患者との対話に悩みながら徐々に良い関係性を築き、ほとんどの学生が実習最終日までには受け入れられる存在となり、必要な情報が得られ、慢性期看護、がん看護の特徴を学んでいた。
4) 奈良県医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学実習」		奈良県医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学実習」3年次生通年4単位180時間1グループ8名4週間の実習期間は「介護老人福祉施設実習1週間、介護老人保健施設実習1週間」、「病院実習2週間」で構成されていた。そのうち、「病院実習」、10グループ計80名を担当した。今までの成人慢性期の実習から、学生にとって患者、家族、実習指導者、病棟看護師との人間関係が学生の学びに少なからず障害になっていると感じた。そこで、指導では以下の2つ⑧⑨を追加し工夫活用した。前述の①～⑦に以下を加えた。
⑧実習施設における学生の出迎え	平成13年4月 ～平成17年3月	⑧実習初日は、学生が病棟で受け入れられる存在であることを感じることを期待して、病棟で学生を出迎えるようにした。 学生にとって、その実習場所で自分たちが尊重して受け入れられているか否かで実習成果に影響を及ぼすと考える。実習指導者と協力しながら、共に学生を待ち受ける姿勢を示す工夫をした。学生は病院実習、スタッフへの緊張感を和らげ、持てる力を発揮できたと評価している。

事項	年月日	概 要
⑨実習指導に際し、ナラティブ・アプローチを活用。	平成13月4月 ～平成17年3月	⑨実習指導の個別面接の方法としてナラティブ・アプローチを活用した。 整形外科病棟での実習で、加齢による関節の変形により運動障害から生活障害を抱え手術治療を受ける高齢者が主な対象であった。寝たきりになる不安を抱える高齢者であるが、若い学生には実感が薄いと考えられた。特に工夫したのは、学生の語りをカンファレンスや面接から意図的に「聴く」機会を設け、語られた「実習の物語」から、学生が自己を振り返り看護の学びを深めていくことをねらい、実習記録を見ながらナラティブアプローチによる指導（聴き取り）を実践した。学生の物語では、自分の看護の力たらず、知識の未熟さ、看護への思い、コミュニケーションの困難さ、自分の対応に対する患者の反応でうれしかったこと等が語られていた。また、自分の学習不足やどのように学んでいこうかという気持ちの表出もあり、学生のさまざまな思いを看護の指導に活かしていった。同時に、学生には受け持ち患者の「病の物語」を聞くことの効果や活用することの有効性を指導している。実際に体験することで「語ること」「聞くこと」の効果を実感する学生もいた。
5) 公立学校法人奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学実習」	平成17年4月 ～平成23年3月	公立学校法人奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学実習」（3年生次後期、2単位90時間必修）1グループ8名 5グループ計80名担当1週間の介護老人福祉施設、1週間の介護老人保健施設の計2週間の実習を計画した。前述の①～⑨に以下の2つ⑩⑪を加えた。
⑩介護老人保健施設でアクティビティケアを実習項目とした。	平成17年4月 ～平成23年3月	⑩アクティビティケアは、高齢者の健康を守る、QOLを高める、認知症高齢者へのアプローチ、といった高齢者支援の方法を学習することを目的に実習方法に加えた。 方法は、学生は実習グループで受け持ち高齢者を含む入所者の集団にレクリエーションを実施することを企画し実践することとした。目的、目標、方法、注意点をまとめた企画書を作成する事から始め、準備し、施設のスタッフの協力を仰ぎながら実施した。看護過程の展開でも、アクティビティケアを積極的に取り入れ、高齢者とのコミュニケーションや人間関係の醸成につなげ、施設における高齢者看護の能力を修得していると評価できた。実施後の反省会で、目標とした利用者の活発な参加や、自発的行動、積極性や笑顔が見られた、できないと思っていた人があんなに体を動かせることがわかった、といった意見が上がり、実施したケアの効果を実感することで、学びにつながったと評価できる。
⑪高齢者のアセスメントツールの冊子制作と活用。	平成17年4月 ～平成23年3月	⑪アセスメントツールは、「一講義一」の項で述べたとおり領域責任者と共同開発した。学内の演習で使用し、実習では生活機能のアセスメントのための道具として用いた。 学生の実習に対する授業評価は全体で平均3.5（5点満点）であった。教員の自己評価としては、疾患と加齢による身体機能の低下の両方から生活機能のアセスメントすることに活用できていると評価している。

事項	年月日	概 要
6) 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護学実習」3年生次後期4単位180時間1グループ5名 10グループ計50名担当、4週間の実習期間を「介護老人保健施設2週間」「病院2週間」と計4週間の実習を行っている。前述の①～⑪に以下を加えた。 ⑫看護過程の展開で、データベースを身体の系統的分類（循環器、呼吸器等）から、ゴードンの11項目の分類を活用した。	平成23年4月 ～平成26年3月	⑫老年看護の学習の視点として生活機能のアセスメントに注目することがもとめられている。従来の系統的分類のアセスメントでは学生に生活や心理面のアセスメントにとまどいが見られていた。そこで、ゴードンの11項目を用いて、身体・心理・社会の3側面から高齢者を捉える方法に変更した。学内演習で事例を用いて十分ペーパーシュミレーションを行い、実習で活用している。「病院実習」「施設施設」とも同じ方法で看護過程の展開を実践できるように工夫した。
7) 奈良学園大学保健医療学部看護学科「基礎看護学技実習Ⅱ」 2年次前期 80名	平成27年4月 ～現在に至る	担当者の一人として実習計画を把握し、オリエンテーションに参加している。実習進行上の教員の相談にのる、あるいは、教員を支援して臨地で実習指導を行った。平成28年度は学生4名を担当し、実習指導、実習環境調整、評価等を行った
8) 奈良学園大学保健医療学部看護学科「基礎看護学技実習Ⅰ」 1年次後期 80名	平成27年4月 ～現在に至る	担当者の一人として実習計画を把握し、オリエンテーションに参加している。実習進行上の教員の相談にのる、あるいは、教員を支援して臨地で実習指導を行った。
9) 奈良学園大学保健医療学部看護学科「老年看護学概論」 2年次 前期 80名	平成27年4月 ～現在に至る	基礎看護学技術演習の内、食事の援助、通常の食事の援助、経管栄養を受ける患者の援助、輸液を受ける患者の援助の講義を実施し演習を計画した。実際の演習を統括し、教員指導と学生の学習支援を行った。
10) 奈良学園大学保健医療学部看護学科「基礎看護学技術演習」 2年次 後期 80名	平成27年4月 ～現在に至る	基礎看護学技術演習の内、排泄の援助を担当し、排泄の援助 導尿 浣腸 排便の講義を実施し、演習を計画した。実際の演習を統括し、教員指導と学生の学習支援を行った。
11) 奈良学園大学保健医療学部看護学科「老年看護学実習Ⅱ」病院実習 3年次 後期 80名	平成28年9月 ～現在に至る	医療機関における臨地実習を計画した。 全5施設で1クール4グループが実習を行う。 全体の統括 各教員の指導 実習調整、全学生の単位認定に関わる。前述の①～⑨⑫を実施、活用した。⑪⑫は規模を縮小し必要時活用した。
12) 奈良学園大学保健医療学部看護学科「老年看護学実習Ⅰ」 介護老人保健視閲 デイケア等 3年次 後期 80名	平成28年9月 ～現在に至る	介護老人保健施設における臨地実習を計画した。 6施設で1クール6～2グループが実習を行う。 全体の統括 各教員の指導 実習調整を主な業務とするが、学生を担当し実習指導も行う。28年度は2施設で計25名の学生を担当し実際に指導し評価単位認定に関わった。残りの学生も含む全体の単位認定に関わった。前述の①～⑨⑫を実施、活用した。⑪⑫は規模を縮小し必要時活用した。

事項	年月日	概 要
—その他— 1) 看護専門学校生の講義に関するもの - 診療科に特徴的な診察用具、包帯材料を実際に扱う。 - 出席表による学びの確認 - 補助教材の準備（文献、他の図書の資料等）	平成3年4月 ～平成5年3月 平成7年4月 ～平成8年3月	奈良県医師会看護専門学校看護学校進学コース「耳鼻咽喉科の疾患と看護」（2年持後期：2コマ）において、解剖学的な特徴（感覚器、粘膜、外界とつながっている）と病理学的な特徴（炎症、腫瘍）から、看護の特徴（必要性）・方法について講義した。診療科に特徴的な診察機具・材料（ピンセット ガーゼ類）を提示し、触れることでリアリティのある学びを工夫した。自由記載の感想から「学びがあった」との記述がみられた。 奈良県立医科大学附属看護専門学校（1年次6コマ）「基礎看護技術」（環境、衣服、清潔）において、教科書のみでは技術を実施する根拠が不足していると考え、複数の根拠を学生に提示できるように補助教材を作成し使用した。学びの記述がみられた。自由記載の感想から「学びがあった」との記述がみられた。
2 作成した教科書・教材 1) 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科実習要項（実習の手引き）編集総括 2) 事例教材 3) 老年看護学アセスメント・ツールとしてのマニュアル教材（冊子）	平成23年4月 ～平成26年3月 平成17年4月 ～平成23年3月 平成17年4月 ～平成23年3月 平成23年4月 ～平成26年3月	4年間のすべての実習における、実習マニュアルとして作成した。岐阜医療科学大学保健科学部看護学科実習委員会委員長として編集を行った。 加齢に起因する疾患と看護、成人期から抱える慢性病と加齢が及ぼす生活機能の障害と看護等が学習できる事例を考案した。 ① 脳梗塞に罹患し介護老人保健施設に入所する高齢者 ② パーキンソン病を抱える高齢者の看護 ③ 慢性閉塞性呼吸器疾患を抱える高齢者の看護 ④ 生活者としての高齢女性の転倒・骨折救急搬送、周手術期、回復期、慢性期、在宅復帰までの健康障害のレベルを追った看護 奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学援助論」で作成し、現在に至る。毎年見直しながら、学生の特性に応じて修正して使用している。 高齢者の身体・精神機能を評価するツールとしてアセスメントマニュアルを共同で作成した。高齢者の感覚機能、栄養状態、認知状態、日常生活機能を評価する方法として、既存の尺度を用いた冊子である。奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学援助論」で作成した。 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」において、高齢者を総合的に評価する視点から改正した。

事項	年月日	概要
4) 授業毎に授業内容のポイントをまとめたスライドの教材を作成し授業に活用した。(パワーポイントを用いる)	平成16年4月 ～平成26年3月	担当する講義の要点をスライドにまとめ講義の教材とした。制度の変更や新しい視点、知見等、変更しながら作成し、活用している。 奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護概論」「老年看護学援助論」で作成し、活用した。 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護概論」「老年臨床看護」において、作成し活用した。 岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科・臨床検査学科「看護概論」において、作成し活用した。 関西学院大学社会学部社会福祉学科「介護概論」において活用した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」「介護技術」において作成し活用した。
5) 「生活支援技術・介護過程」教科書、一部執筆（再掲）	平成24年4月 ～平成24年9月	介護福祉士養成を目的にした教科書であるが、老年看護では介護施設も看護の場である。老年看護として看護学生が学ぶ内容になるように工夫した。 「介護者の倫理」の執筆を担当した。高齢者ケアに携わる職種の倫理としてまとめたもので、看護職にもあてはまるものである。特に、個人情報、電子情報、実習学生の守秘義務など、近年の社会情勢を考慮した内容を工夫した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」「介護技術」で使用した。
6) 「介護の基本 コミュニケーション技術」教科書 一部執筆（再掲）	平成24年4月 ～平成24年9月	「睡眠と援助」の執筆を担当した。看護学生も学ぶ内容になるように工夫した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」で使用した。
・奈良学園大学 保健医療学部看護学科 実習要綱の作成	平成26年5月 ～現在に至る	開学申請時に作成した実習要綱を再確認した。新たに追加が必要な内容を挿入した。 (例) 気象警報発令時の対応区域、個人情報保護について
・奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技術演習Ⅱ」2年次 前期 80名 排泄の援助 演習計画書の作成 演習評価表の作成 模擬便の作成	平成27年4月 ～現在に至る	演習計画書は 便器・尿器の取り扱い方 寝たままでの便・尿器の介助、寝たままでのオムツ交換モデルを用いた導尿（男女）、モデル人形による浣腸・摘便、からなる。よりリアリティな演習になるよう、模擬便を作成しオムツ交換の演習を計画した。絵具、洗濯用化学のり、ケイ砂によるスライムを模擬便として作成した。
・奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技術演習Ⅱ」 2年次 前期 80名 食事の援助 演習計画書の作成 演習評価表の作成	平成27年4月 ～現在に至る	演習計画は 形態の違う食物の摂取と介助、食事摂取を支援する自助具・介助具の実際、モデル人形を用いた経管栄養法からなる。

事項	年月日	概要
・奈良学園大学 保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 DVD学習資料の作成	平成27年9月 ～現在に至る	身体に加齢変化を説明するDVDのナレーションを筆記し活字としてA4用紙にDVD資料を作成した。全6ページ。文章中、特に学んでほしい単語には白地で隠し、学生が映像を見ながら記入できるように工夫した。学生は全部埋めることが出していないことがわかり、次の授業初めに正解を口頭で説明した。
・奈良学園大学 保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 呼吸機能の変化 体験	平成27年9月 ～現在に至る	スパイロメーターを用い、肺活量、1秒量から肺年齢を測定した。全員は体験できなかったが、一部の学生が実施できた。時間的制約で全員が体験できない現状から、後にDVD作成に至った。
・奈良学園大学 保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 見え方の変化体験グッズ作成	平成27年9月 ～現在に至る	透明でない曇りのあるクリアフォルダーを高齢者の眼球の水晶体に見立て、白内障の体験とした。クリアフォルダーに、黄色セロハンをはさみ、水晶体が変性した高齢者の見え方を体験できるようにした。クリアフォルダーは学生各1枚を配布した。黄色のセロファンは、10×3センチほどにカットしたものを学生に配布した。
・奈良学園大学 保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義資料作成 1 講義スライド16枚 A3用紙	平成27年9月 ～現在に至る	講義資料は1コマスライド16枚とし、A3用紙に裏表で印刷するようにし、半分に折るとA4冊子としてファイルできるよう工夫した。高齢者の加齢変化では、スライド中の重要語句を白字で書き、学生と一緒に回答しながら、進めた。国家試験の老年看護領域で問われやすい問題であることを印象付けたかった。中間期授業評価で、スライド、資料で見にくいという意見はなかった。「スライドに対応する教科書のページを入れてほしい」といった希望など、学習上必要と思われる希望には掻痒に努めた。
・奈良学園大学 保健医療学部看護学科 老年看護学概論 演習用動画制作 高齢者体験	平成28年3月 ～現在に至る	学内演習用に、高齢者体験についての動画を制作し、授業に活用している。動画は奈良学園大学のipadを使った学習支援の一環のなかで、専用のアプリを用いて閲覧できる。シナリオ作成、撮影監督 編集に関わった。吉村雅世、田中和奈
・奈良学園大学 保健医療学部看護学科 老年看護学概論 演習用動画制作 呼吸器検査の看護	平成28年3月 ～現在に至る	高齢者の呼吸器系のアセスメントとして、呼吸器検査を受ける高齢者の看護の動画を作成した。シナリオ作成、撮影監督 編集に関わった。吉村雅世、田中和奈
・奈良学園大学 保健医療学部看護学科 老年看護学実習Ⅰ 実習要項、記録用紙の作成	平成28年5月 ～現在に至る	老年看護学領域の他2名の教員と共に作成した。実習の目的、方法、注意事項等、「本冊子を読むことで、学生は実習の行動目標が立てられる」という目的を持って作成した。実習記録は、学生が容易にコピーできないようにあらかじめ必要な枚数を綴じた冊子を作成した
・奈良学園大学 保健医療学部看護学科 老年看護学実習Ⅱ 実習要項、記録用紙の作成	平成28年5月 ～現在に至る	老年看護学領域の他2名の教員と共に作成した。実習の目的、方法、注意事項等、「本冊子を読むことで、学生は実習の行動目標が立てられる」という目的を持って作成した。実習記録は、学生が容易にコピーできないようにあらかじめ必要な枚数を綴じた冊子を作成した

事項	年月日	概要
・奈良学園大学 保健医療学部看護学科 老年看護学概論 授業教材 ①授業スライド ②DVD資料 ③高齢者の視覚体験用具	平成28年10月 ～現在に至る	①授業資料のスライド資料 平成28年度版で、今年度発表の人口動態の統計をもとに作成した。②27年度のものに今年度の統計を補足した。③クリヤホルダーと黄色のセロファンを用い、授業の中で学生各自が水晶体の混濁と色覚の異常が体験できることを狙った。クリヤホルダーは3種類の透明度になるようにした。
・奈良学園大学 保健医療学部看護学科 老年看護学概論 授業教材 グループワーク資料	平成29年1月 ～現在に至る	グループワークの成果として学生が作成したスライドを発表用資料として冊子を作製した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 学生の授業評価アンケート結果	平成19年3月 平成20年3月 ～平成23年3月 平成24年3月	関西学院大学社会学部社会福祉学科非常勤講師「介護概論」で授業評価を行った。学内LANを使用した評価で、5名の学生が評価に参加していた。結果は平均4.2（5段階評価）であった。 奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学援助論」「老年看護学実習」で授業評価を行った。 平成20年の「結果は、援助論平均4.0（5段階評価）、実習は3.9であった。評価の高かった項目は「シラバスに沿った内容」「授業への取り組み」であり、低かった項目は「レポート課題が多い」という結果であった。 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護学概論」「老年臨床看護」「老年看護学実習」学生評価を行った。 「老年看護学概論」の評価は平均4.0であった。良かった点では教材がわかりやすかったといったコメントがあった。改善点ではマイクを使っているが聞き取りにくかったと言ったコメントがあった。 「老年臨床看護」の評価は平均40.15であった。良かった点と改善点では資料が見やすかった。もっとパワーポイントを使ってほしいと言ったコメントがあった。 老年看護学実習では平均4.25であった。丁寧に教えてもらった、もう少し関わってほしかったといったコメントがあった。 岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科、臨床検査学科「看護学概論」の学生評価を行った。平均4.77であった。
大学業務評価	平成24年度	岐阜医療科学大学保健医療学科期末評価 前年度と比べ評価に変化はなかった。
大学業務評価	平成25年度	岐阜医療科学大学保健医療学科期末評価 前年度と比べ評価に変化はなかった。

事項	年月日	概 要
・ 学生の授業評価アンケート結果	平成27年10月	奈良学園大学保健医療学部 「老年看護学概論」 授業4回目で中間評価を行った。大きな改善の必要な項目はなく平均と考えられた。学生には結果と改善するところを伝えた。改善の必要なところスライドに対応する教科書のページを追加する
・ 学生の授業評価アンケート結果	平成28年2月	奈良学園大学保健医療学部 「老年看護学概論」 学生評価 授業終了時、資料、内容 シラバスとの整合性など 特に意見はなかった。
・ 学生の授業評価アンケート結果	平成28年10月	奈良学園大学保健医療学部 「老年看護学概論」 授業4回目で中間評価を行った。大きな改善の必要な項目はなく平均と考えられた。学生には次の授業で、評価の結果と改善するところを伝えた。改善の必要な項目では、資料についてで、資料の内容に教科書の該当ページを追加した。

事項	年月日	概 要
4. 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 高校生に対する講義「看護学」	平成17年 ～平成18年	奈良女子大学附属中等学校 キャリアガイダンス 講師 看護学 高校生の新路決定のための模擬講 義
	平成18年	県立橿原高等学校 「橿高大学」 ミニ講義 講師 看護学
	平成26年10月	奈良文化女子高等学校学校見学におけるミニ講義 高齢者の身体的加齢について
	平成28年8月	オープンキャンパスミニ講義 2回 高齢者の身 体的加齢について
2) 研修会講師	平成19年	第67回日本保健医療行動科学会 近畿支部研究会 講師 「老年看護と物語」
	平成19年 ～平成22年	奈良県看護協会臨地実習指導者講習会講師 「老年看護学実習」
	平成22年5月	平成22年度高取町地域法活支援センター研修会講 師 「高齢者ケアとナラティブアプローチ」
	平成24年3月	平成24年「養成期間と医療機関の連携」事業研修 会 講師 「実習指導に望むこと」
	平成24年9月	平成24年中濃地区特別養護老人ホーム看護職能研 修会 講師 「高齢者体験から理解する高齢者」
	平成25年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習 4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演 習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導 展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。 指導者の役割を知る。
	平成26年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習 4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演 習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導 展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。 指導者の役割を知る。
	平成27年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習 4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演 習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導 展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。 指導者の役割を知る。
	平成28年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習 4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演 習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導 展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。 指導者の役割を知る。

事項	年月日	概要
3) ワークショップ 講師	平成18年6月	第21回日本保健医療行動科学大会、ワークショップにおいて講師を務めた。 コーディネーター：森岡正芳 「ナラティブとは、研究と実践の現実」において「4つの学問領域から見たナラティブ・アプローチ」というタイトルで、混乱するナラティブの考え方を看護者の視点からまとめ、今後の看護実践においてナラティブの概念を活用することの可能性を話題として提供した。
4) シンポジウム 講師	平成19年9月	第3回日本質的心理学会自主シンポジウム「臨床看護におけるナラティブ：現場における時間性と生の現実」において、高齢看護の立場から「高齢者患者におけるナラティブ（古い・病いの現実）と時間性」というテーマで話題を提供した。 コーディネーター：紙野雪香 高齢者が語る言葉の中に古いの現実が現れてくる過程を聞き手の視点から描き出した事例を発表した。 臨床看護の場でナラティブの考え方やナラティブ・アプローチをどのように使うかという視点から、高齢看護の場では「高齢者は語ること」で古いの現実を表出している。そして、「看護者が聴くこと」が臨床での看護の実践であることを伝えることを意図した。
5) 会員企画シンポジウム 講師	平成25年8月	第10回日本質的心理学会 一般企画シンポジウム「今あらためて質を問う」にて、話題を提供した。テーマは「高齢者の語り場面の「質感」の記述 ―看護場面の会話から到達する看護師の「聴く」こと―である。 コーディネーター：森岡正芳 質的データを量的データに変換し分析する傾向にある質的研究をについて、現場の質をもう一度考え直そうとする趣旨で企画された。心理学、社会福祉学、教育学の立場から話題提供される中で、看護学の立場から現場を質感豊かに描き出すかていを紹介した。平成24年3月の博士論文（奈良女子大学）の一部を加筆修正した。
6) フェスタ出典 けいはんな体感フェア2016 「来て・見て・感じて学研都市のテクノロジー」 ―光の不思議や生命の神秘・・・等最先端の研究内容を体験してみよう！―	平成28年11月20日	フェスタに出展者として参加した。 テーマ：「年を取ると見え方聞こえ方動きはどくなるの」 高齢者体験をメインに体感イベントとした。約300名の一般の参加者（子供から成人まで）の入場があり、約50名ほどが高齢者体験に参加した。 場所 グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル
7) 研究会 講師 シーズ紹介講演 超高齢社会における生活支援にむけら地域産業創出を考える研究会	平成28年12月1日	超高齢社会における生活支援にむけら地域産業創出を考える研究会 テーマ：高齢者看護・介護とアクティブティケア ― 高齢者の気分転換活動の不足に対するケアや付き合い方― 高齢者ケアの現状と活性化の支援の必要性を老年看護学教育の中から経験したことを踏まえ講演とした。

事項	年月日	概要
5 その他		
1) 公立学校法人奈良県立医科大学医学部後看護学科における教育実践	平成17年4月 ～平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科講師として「老年看護学援助論」（専門科目、2年次配当通年、必修2単位）において、老年看護の実践論について授業を行った。これにより、学生は老年看護の方法について理解を深め、臨地実習に大いに活用して、老年看護の学びを得ていた。「老年看護学実習」（3年次配当通年 必修2単位）において実習指導を行った。「卒業研究」（4年通年配当）において研究計画書作成、論文作成の指導をおこなった、これにより、学生は実習で経験したを出来事を理論的に説明し、今後の可能性・課題を見出していた。「看護研究特論」（3年次前期）において、研究計画書作成について指導した。
2) 関西学院大学社会学部社会福祉学科における教育実績	平成18年4月 ～平成20年3月	関西学院大学社会学部社会福祉学科非常勤講師として「介護概論」（2・3年次春期 選択2単位）において、社会福祉士受験資格としての介護概論の授業を行った。介護の目的論、対象論、実践論について理解を深めた。
3) 岐阜医療科学大学 保健科学部看護学科における教育実績	平成23年4月 ～平成26年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科教授として「老年看護学概論」（2年次後期、2単位 専門必修）、「老年臨床看護（演習）」（3年次前期、2単位 専門必修）、「老年看護学実習」（3年次後期、4単位専門必修）、「卒業研究」（4年次通年、2単位専門必修）、「アカデミック技法」（1年次前期2単位一般必修）において授業、演習、実習をおこなった。保健科学部放射線学科、臨床検査学科の「看護概論」（3年次後期、2単位 専門選択）において授業を行った。
4) 岐阜医療科学大学 保健科学部看護学科実習調整の実績	平成23年4月 ～平成26年3月	実習部会長として、実習全体の統括を行った。医療機関との連携や実習調整を行っている。
5) 関西学院大学人間福祉学部における教育実績	平成24年4月 ～平成24年9月	関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科非常勤講師として「介護概論」（1～4年次春期 選択2単位）、「介護技術」（1～4年次春期 選択2単位）において社会福祉士国家試験内容に基づき介護の目的論、対象論、実践論について授業を行った。文学部、法学部の学生も若干選択していた。学生それぞれが学ぶ目的を持ち、様々な感想を持って学習を深めていた。
6) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における実習調整の実績	平成26年4月 ～現在に至る	実習部会長として、実習全体の統括を行った。医療機関との連携や実習調整を行っている。
7) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成26年 7 月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「早期体験演習」（1年次、1単位 専門必修）複数の実習場所をラウンドし、実習の進行を支援した。時に指導の必要な学生の実習指導を行った。
8) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年2月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「基礎看護学実習Ⅰ」（1年次、後期 2単位 専門必修）複数の実習場所をラウンドし、学生や教員を支援した。時に指導の必要な学生の実習指導を担当した。

事項	年月日	概要
9) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年4月 ～平成27年7月（前期）	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の授業を行った。「基礎看護技術演習Ⅱ」（2年次、2単位専門必修）
10) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科教授として以下の科目の企画・実施に関わった。「基礎看護技術演習Ⅱ」「基礎看護技術演習Ⅲ」「基礎看護実習Ⅰ」「早期体験演習」
11) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の授業を行った。「老年看護学概論」（2年次 後期 2単位 専門必修）「老年看護学援助論」年次、2単位専門必修）
12) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の演習を行った。「老年看護学援助論」3年次、2単位 専門必修）3名の教員と共同した。
13) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「基礎看護学実習Ⅱ」（2年次、前期 2単位 専門必修）学生1グループを担当し、実習指導を行った。
14) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「老年看護学実習Ⅰ（施設）」（3年生 後期 2単位）「老年看護学実習Ⅱ（病院）」3年生後期 2単位 専門必修）実習の企画、臨地調整、学生オリエンテーション、実習指導を行った。領域教員の実習指導能力の向上に関わった
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許 1) 看護師免許 2) 修士（看護学） 3) 博士（学術）	昭和55年4月 平成15年3月 平成24年3月	第389473号 国立学校法人香川医科大学大学院医学系研究科看護学専攻了 修士（看護学）（香修第十九号） 修士論文題目：ナラティブを看護ケアに導入した老年患者の語りの構造と変化の研究 国立学校法人奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程 社会生活環境学専攻 人間行動科学講座 博士（学術）（博課第501号） 博士論文題目：看護における「聴き取り」の生態－ナラティブ・アプローチの可能性と限界
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

事項	年月日	概 要
学会誌の編集 日本保健医療行動科学会 学会誌 拡大編集委員	平成24年6月 ～平成25年12月	日本保健医療行動科学会雑誌の拡大編集委員として、依頼論文の原稿の編集を行った。2013Vol28 No.1～No.2 執筆者の意向を確認しながら、原稿に図表を配置し、雑誌用の原稿を作り上げた。
学会誌の査読 日本保健医療行動科学会 学会誌 拡大編集委員	平成25年11月 ～平成28年6月	日本保健医療行動科学会雑誌の拡大編集委員として、論文査読を行った。雑誌は年2回発行され1刊に2編ほど査読を行った。投稿論文を担当し、学会誌の質を保証できる研究論文になるように査読を行った。研究方法の整合性や論文としての論旨に疑問がある場合には掲載不可の判定もやむなしの場合もあった。通常の査読者は2名であり他の査読者と査読の判定が大きく異なることはなかった。2014～2017年前期まで年2冊 計7冊にの雑誌の査読を行った。
研究会への参加・運営 臨床看護実践ナラティブ研究会	平成26年10月 ～現在に至る	臨床看護実践ナラティブ研究会メンバーとして、臨床看護の場において、ナラティブ・アプローチを実践することの意味、実際の実践について、研究・勉強会を行っている。自己の研究の報告、メンバーの研究についての意見交換、海外の研究者の論文についての意見交換を行っている。月1回の定期的な研究会である。輪番で話題を提供し討議する。ブルーナの意味論、ベイトソンの学習理論、リクルの物語と時間などを担当した。成果の一部は 商業雑誌の特集に組み込まれた。「『病の語り』 会話の産物と現実 看護実践と社会構成主義」：N：ナラティブとケア. 第7号. 看護実践におけるナラティブ. 紙野雪香 野村直樹 編. 参照
研究助成金の獲得	平成28年4月	平成28年度 奈良学園大学保健医療学部看護学科研究助成制度において以下のタイトルで助成金を獲得した「照度アップ窓のブライトケアの可能性の研究—認知症高齢者の睡眠支援—」
学会誌の査読編集 日本保健医療行動科学会 理事 学会誌 編集委員 査読と編集	平成28年 7 月 ～現在に至る	日本保健医療行動科学会 理事、編集委員に就任し、学会雑誌の編集を行っている。
4 その他 —学内委員会活動— 1) 奈良県立医科大学医学部看護学科 学生生活部会員 2) 奈良県立医科大学医学部看護学科 実習部会委員 3) 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 実習部会長 4) 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 領域実習ワーキング長	平成16年4月 ～平成20年3月 平成20年4月 ～平成23年3月 平成23年4月 ～平成27年3月 平成23年4月 ～平成27年3月	学生生活について関わった。健康診断、保健室管理、1年生研修旅行等を担当した。 実習に関して関わった。各論実習の実習配置表の作成、学生のグループ分け、統合実習の計画、その他、メンバーで実習に関する問題対応の情報交換、協議していった。 1年生から4年生までの実習を統括する。 実習施設からの相談の窓口となり対応する。 各論実習の統括を行う。特に、実習病院・施設への実習依頼や計画配置の相談等、領域をとりまとめて実習施設との窓口となる。

事項	年月日	概要
5) 岐阜医療科学大学保健科学部	平成23年4月 ～平成27年3月	学内教員の研究の倫理審査にあたる。
6) 岐阜医療科学大学保健科学部	平成23年4月 ～平成27年3月	学内教員の研究活動を支援する。学内で定める研究推進費について審査を行う。教員の学内研究発表や講演等を企画・運営する。
7) 岐阜医療科学大学保健科学部 生涯教育委員会副委員長	平成23年4月 ～平成27年3月	委員会活動として、年6回ほど地域のイベントで地域住民に健康教育を実施している。 シンポジウムやセミナー等を同窓会と協力して企画・運営し卒業生を対象に研究発表の場を設ける活動をしている(25年度から)
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 実習部会長	平成26年4月 ～現在に至る	実習全体の統括 年間の実習計画の枠組み 企画 各実習施設への依頼 実習協議会の企画・開催 など 月1回定例会議を主催し、実習に関する協議を行う。基礎実習 領域実習 統合実習 課程選択実習に関する報告をまとめ調整する。実習場での感染症対策や事故などの危機管理等も行う。
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 領域実習ワーキング長	平成26年4月 ～現在に至る	3年生領域実習に関する、企画調整 月1回定例会議を企画し討議を行う。成人 老年など各領域実習からの報告をまとめ、協議し実習部会に上申する。
奈良学園大学における教員組織活動 学生生活委員会メンバー	平成26年4月 ～現在に至る	奈良学園全体の、学生生活に関する協議を行っている。主に学生の奨学金 表彰等について協議した。
奈良学園大学における教員組織活動 学生支援センター委員会メンバー	平成26年4月 ～現在に至る	学生の健康診断、学校祭について協議した。
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 学生生活ワーキングメンバー	平成26年4月 ～平成27年3月	学生生活について協議した。学生の健康管理を担当した。
奈良学園大学保健医療学部新入生宿泊研修の企画 担当	平成26年9月 ～平成27年3月	4月に行われる1年生宿泊研修を企画し実施した。
奈良学園大学保健医療学部新入生宿泊研修の企画 責任者	平成27年4月 ～現在に至る	4月に行われる1年生宿泊研修を企画し実施した。企画実行の責任者として運営していった。
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 教務ワーキングメンバー	平成27年4月 ～現在に至る	主に実習での単位修得や実習履修の要件について担当している。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 基礎看護技術Ⅱ基礎看護学〔3〕 系統看護学講座専門分野Ⅰ	共著	平成18年6年第14版 平成21年2月第15版 平成24年6月第16版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 A4版 全490頁 編集：藤崎郁、任和子 執筆者：岡本啓子、守本とも子、吉村雅世（執筆者全21名） 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術 第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P. 22-P. 32 第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助」P. 185-P. 192 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方等、資料収集・イラストの作成をおこなった。病床での衣生活援助では点滴を行っている人の寝衣交換を、モデル人形を用いて写真撮影し文章を作成した。基本を前提にしながらも臨床での安全で安楽な寝衣交換の工夫を盛り込んだ。
2. 介護福祉士養成シリーズ2「生活支援技術・介護過程」	共著	平成22年6月	黎明書房	介護福祉士を目指す学生用教科書。 A5版 全219頁 編著：守本とも子、星野政明 執筆者：川口ちづる、山形力生、今村美幸、大崎大資、横井加津志、高畑進一、新谷奈苗、三毛美恵子、石崎利恵、山田多賀子、吉村雅世、木村洋子、その他5名 本人担当部分：以下を担当した。 第9章 「高齢者の睡眠の援助」P. 151-P. 157 自立を促す睡眠の必要性、爽快な目覚めの援助、自立を促す睡眠の介助の実際、について執筆した。日常生活のリズムを整える基本的方法や不眠の際の援助の方法が理解できることを意図して具体的な方法を示した。看護の基礎技術「睡眠の援助」を基本にしている。
3. 介護福祉士養成シリーズ1「介護の基本 コミュニケーション技術」	共著	平成22年9月	黎明書房	介護福祉士を目指す学生用教科書。 A5版 全202頁 編著：守本とも子、星野政明 執筆者：三浦辰哉、原田理恵、溝上五十鈴、土田耕司、羽柴香恵、河野蕎、新谷奈苗、吉村雅世、その他7名 本人担当部分：以下の章を担当した。 第8章「介護従事者の倫理」P. 118-P. 124 国家資格を持つ者の責任と責務の視点から信用失墜行為の禁止、守秘義務、人権擁護の重要性、及び実践の内容を具体的に示していった。看護の概論となる看護師の倫理を基本としている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ 基礎看護学Ⅲ	共著	平成24年6月 第16版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 A4版 全490頁 編集：藤崎郁 任和子 執筆者：岡本啓子、守本とも子、吉村雅世（執筆者全20名） 改定の為、内容の見直し文言の変更を行った。 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術 第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P. 22-P. 32 第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助」P. 185-P. 192 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方等、資料収集・イラストの作成をおこなった。 病床での衣生活援助では点滴を行っている人の寝衣交換を、モデル人形を用いて写真撮影し文章を作成した。基本を前提にしながらも臨床での安全で安楽な寝衣交換の工夫を盛り込んだ。
5. 系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ 基礎看護学Ⅲ	共著	平成29年2月 第17版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 大幅な改定が行われた。写真・図票の充実と動画の追加が大きな改定内容。 A4版 全505頁 編集：任和子 執筆者：守本とも子、吉村雅世（執筆者全21名） 16版を改正した。内容の洗練化、イラストを写真に変更、動画を追加等の改正を行った。ページ数も増えた。 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術 第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P. 22-P. 32 第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助」P. 185-P. 192 今回の改定では、ページ数が増えたこと、今までのイラストを写真、あるいは動画として追加した。 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。第17版では、新たにイラストを映像に変更、動画を制作した） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方等、資料収集・イラストの作成をおこなった。新たに、療養にふさわしくない病室環境の写真を追加し、療養にふさわしい環境調整の根拠を強化した。 病床での衣生活援助では点滴を行っている人の寝衣交換を、イラストから実写の写真に変更し、文章も見直した。動画も追加した。基本を前提にしながらも臨床での安全で安楽な寝衣交換の工夫を盛り込んだ。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. 「2018年 看護師国家試験対策 要点がわかる 出題傾向が見える老年看護学」	共著	平成29年10月	PILAR PRESS	過去4年間の看護師国家試験の内容で、老年看護学に関する問題について解説した。担当は国家試験出題基準の目標Ⅰと目標Ⅲについて担当した。
(学術論文)				
1. 看護の場における「聴く姿勢」に関する文献研究 (査読付)	単著	平成20年1月	公立大学法人奈良県立医科大学 医学部看護学科紀要 Vol. 5 P. 37-44	看護者が「聴くこと」についてどのように研究・実践されてきたか動向と課題を明らかにした文献研究。ほとんどが特定の疾患を抱える患者の心理面の結果から、その支援として「聴くこと」「傾聴」が必要であると示唆するにとどまり、具体的な「聴くこと」の技術に関する研究は極めてすくないことが明らかになり、「聴くこと」の技能を研究する意義につなげることができた。
2. 看護者のための“聴き取り”技能の開発に向けて 一対話場面の意味生成過程と看護者の自己内対話による物語化— (査読付)	単著	平成21年3月	日本保健医療行動学会年報 Vol. 25 P. 218-P. 234	78歳女性患者へのナラティブ・インタビューの場面を「聴き手」であるインタビューアー（筆者）の自己内対話として描き出し、聴き取りの場面を可視化した。自己内対話では、高齢者の特徴とも言える聴き取りつらさ（話し語尾が途切れる、同じ話を繰り返す、代名詞が多い）のなかで、意味を作り出しながら聴き取っていることを明らかにした。この時の看護師の姿勢に「物語化」があると推察し、高齢者看護において日常看護の対話をナラティブ・アプローチとして検討することの可能性を示唆した。
3. 看護場面の4つの対話における「聴き取り」の特徴—「物語化」を実践する看護師— (査読付)	共著	平成22年6月	公立学校法人奈良県立医科大学医学部看護学科紀要 Vol. 7 P32-44	高齢者の看護において看護師が「物語化」を実践していることを明らかにすることを目的に、実際の看護の場における「聴き取り」の実際を聴取し、可視化した「聴き取り」の特徴を検討した。 76歳と78歳の高齢女性に対する看護場面で、患者と看護師がどのような思いで相手の言葉を受け取り会話をしていたかを、双方へのナラティブ・インタビューから聴取し、高齢者と対話する看護師の「聴き取り」の特徴を明らかにした。その結果、「質問の意味を持つ言葉による対応」が聞き取りの特徴にあることを示唆した。看護師は経験年齢の異なる4名の看護師とした。 本人担当部分：研究計画、データまとめ、論文作成を担当した。 共著者：吉村雅世、永野由美子、寺山美由紀、豊田真千子、叶祐子、齋籐和博

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 看護における「聴き取り」の生態 ーナラティブ・アプローチの可能性と限界ー (博士論文)	単著	平成23年3月	国立学校法人奈良女子大学大学院人間文化研究科社会生活環境学専攻行動科学講座	高齢者看護において、発語に特徴を持つ高齢者の話を聴き取る技能として「物語化」に注目した。従来から言われる「傾聴」の技能が看護の場では「物語化」であると考え、高齢者看護における「聴き取り技能」としてナラティブ・アプローチの可能性を論じた。 76歳女性、78歳女性、67歳男性の3名の高齢者との看護において看護者がどのように患者の言葉を受けとめ、対話を行っているか、また、患者もどのように看護師の言葉を受けとめ対話を継続しているかを双方へのナラティブ・インタビューから可視化した。患者の気持ちが出表されている場面では、看護師は語尾が途切れる、言葉を繰り返す、代名詞で省略するといった加齢が及ぼす発語の特徴に対し、相手の視点から意味を作り出し「物語化」を実践する傾向があった。この時の看護師は「相づち」や「うなずき」といった対応をしていた。しかし、高齢患者の思いを横に置き、健康回復をめざす看護師の視点から対応することもあった。このことは、看護師は「老いの物語」や「病の物語」を聴き取り、高齢者の多様性や個別性を理解しようとするが、対応は看護師の視点からされる傾向があると考えられた。経験年数の長いベテラン看護師にその傾向があった。高齢患者と対話する看護師の「聴き取り」は1つの「ナラティブ・アプローチ」といえるが、必ずしも「傾聴」といえないことに、高齢者看護において「ナラティブ・アプローチ」を活用することの限界があるとした。 A4判 全131頁
5. 高齢者の語り場面の「質感」の記述 ー看護場面の会話から到達する看護師の「聴く」こと (査読付)	単著	平成25年12月	質的心理学フォーラム, 2013 Vol.5 P24-31	平成25年9月に開催された、第10回質的心理学学会シンポジウム「今あらためて質を問う」の内容が加筆修正され特集として編集されたもの。前23の博士論文研究を一部、加筆した論文である。ここでは、「特集 現場の質感をどう記述するか」という大きなテーマのもと、言葉と思考が相互に絡み合い新しい物語が生成される会話の場面から、看護師の「聴く」ことを分析するために、会話場면을質感豊かに描き出す過程を紹介した。看護の質的研究でも、看護場면을質感豊かに記述し可視化し分析することの必要性を述べた。
6. 病院実習における高齢者に対する個別アクティビティケアの効果に関する看護学生への調査	共著	平成25年3月	岐阜医療科学大学紀要 第8号75-85	高齢者介護の場である施設で実施されることが多いアクティビティケアを、医療が行われている病院で看護師が実施することの可能性を明らかにしようとした。今回は、対象を看護学生とし、実習におけるケアをアクティビティの視点から調査研究した。講義科目講義、実習指導と実習後のデータ収集、論文作成を分担して行った。 藤吉恵美、和田裕子、吉村雅世

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 通所サービスを利用している要介護高齢者の健康づくりのための対処行動	共著	平成26年3月	岐阜医療科学大学紀要 第9号33-39	通所サービスを受ける高齢者の健康観を調査した。介護を受ける高齢者であっても骨折や転倒予防が健康に対する認識であった。研究計画書の作成、データ収集を担当した。藤吉恵美、和田裕子、田中和奈、吉村雅世
8. 「病の語り」会話の産物と現実 -看護実践と社会構成主義- (査読付)	単著	平成28年1月	N：ナラティブとケア 第7号47-53	「看護実践におけるナラティブ」というタイトルの特集の中の「進化、これからどうしていきたいか」をテーマにした章の中で看護実践と社会構成主義について論じたものである。実際の看護場面の患者との会話を例に挙げることで看護の場は社会構成主義の実践で場であることを論じた。
10. 地域包括ケアにおける要介護高齢者とのコミュニケーション -加齢変化から考える尊厳を守る会話のスキル-	単著	平成29年6月	日本保健医療行動学会雑誌 2017. Vol. 32 No. 1 p. 1-6	「地域包括ケアと行動科学」という特集で執筆した。地域包括ケアの対象はほとんどが要介護高齢者であり、超高齢社会の現在、介護する家族も65歳以上の高齢者の域にある人たちである。視覚・聴覚・神経系の変化は、聞く、考える、言葉にすることに影響する。加齢変化がコミュニケーションに与える影響と、ケア提供者の会話のスキルについて、聴く、考える、語ることから述べ、地域包括ケアでの支援者のコミュニケーションの姿勢について述べた。
11. 地域在宅高齢者を対象とした運動教室の効果の検証 -遠隔フィットネスシステムを使用して-	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究 第5巻, P53-58	要介護高齢者及び生き生き高齢者を対象に遠隔フィットネスシステムを用いて、体操に参加してもらい、遠隔から運動アクティビティを実施することの可能性を検証した。施設との調整、調査の実施、データ分析、論文作成に参加した。田中和奈、吉村雅世、東中須恵子、守本とも子。
12. 高齢者の「老人皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケアの効果の検証	共著	平成31年3月	アビサル・ジャパン委託研究報告書	老人ホーム入所の高齢者を対象に、シュガースクラブの効果を検証した。毎日の入浴と清拭の後にシュガースクラブを使用した群と、使用しない群とに分け、入浴・清拭後の唾液アミラーゼ値、油分、水分を測定した。その結果、シュガースクラブを使用することで水分値が上昇することがわかった。 分担は：老年看護学領域の専門知識で調査責任者として施設での職員との対応、調査の進行調整、高齢者からの唾液採集、聞き取り等を行った。山口求、守本とも子、吉村雅世、佐藤郁代、高橋寿奈、採用英夫、井上昌子、野口寿美子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 日常看護の会話の中で実践される「傾聴」の研究―経験と聴き取りの特徴―	―	平成23年6月	第26回保健医療行動科学会	看護の対象は高齢者が多く、高齢者と会話する機会が多く「傾聴」を必要とする機会も多くなっている。看護師は日常看護の会話の中でどのような「傾聴」を行っているか、看護師経験の違いから検討した。博士論文研究の一部である。 経験年数の2年未満と4年以上の看護師各2名が、76歳と78歳の女性患者の看護を実践する中で「傾聴」していると判断できる部分を取り出し、そのときの思いを看護師・患者から聴取し「聴き取り」の特徴を明らかにした。その結果、経験年数の多い看護師ほど医療的な専門職としての視点で聴き取り、経験年数の浅い看護師ほど、医療的な視点でなく生活者の視点で聴き取る傾向があった。経験の少ない看護師のほうが、看護師としての力量は未熟であるが患者の気持ちに働きかける「傾聴」に近い聴き取りを実践していると考えた。 本人担当部分：研究計画書の段階からすべてに担当した。データ収集。分析を共同で行った。 共同発表者：吉村雅世、永野由美子、寺山美由紀、豊田真千子、叶祐子、齋藤和博
6. 地域に住む高齢者の為のエクササイズ教室を使った遠隔フィットネスシステムの長所	―	平成29年4月	第32回国際アルツハイマー病協会国際会議	地域で生活する高齢者のエクササイズ教室で遠隔フィットネスシステムを使用し、その効果を検証し長所を検討した。東京と奈良をネット回線で繋ぎ、インストラクターは東京から映像を見ながら指導し、高齢者は奈良で運動し、その様子は相互モニターで音声を入れ会話しながら奈良県で
7. 高齢者を対象とする調査研究の評価について―介護老人福祉施設でアクティビティケアとして遠隔フィットネスシステムを用いる研究から―	―	平成29年6月	第32回日本保健医療行動科学会学術大会	高齢者に対するケアの有用性を調査する研究で、高齢者の反応を測定する方法を検討した。高齢者の言葉による感想やVASスケールを用いて直接高齢者から評価を得る方法よりも、実際に介護する施設職員からの情報のほうがより妥当な評価が得られると考えた。 本人担当部分：計画・立案・データ収集を分担して行った。 共同発表者：吉村雅世、田中和奈、守本とも子、東中須恵子、吉村昌子

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 梶間 敦子

研 究 分 野		研究内容のキーワード
助産学		地域・いのち・性・生
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
助産学科 助産学概論 助産の歴史の授業方法	2009～2014	学生と共に奈良県内外在住の助産師（70 歳代、80 歳代）にインタビューをし、今日の助産師に求められることは何かを考察する授業展開を行った
助産学科 地域母子保健 母親参加型の授業展開	2009～2014	子育て中の母親の協力を得て、ディスカッション、ワークショップをし、サービスを受ける側の女性と家族の理解に勤める。助産師としてのモチベーションを高める授業の工夫
助産学科 地域母子保健 国際看護の授業方法	2009～2014	在日外国人への助産ケアの配慮について、まず海外での出産経験者を招いて、体験談を聞いたり、お産・子育て用品の紹介等を通して、異文化における出産・育児について理解を深める授業を行った。徐々に在日外国人女性の協力も得ることができた。
助産診断・技術学 外国人研修生との交流授業	平成 21 年	ケニアからの研修生受け入れ、現在日本では使用しない教材を使用しての診断技術の指導、異文化における助産に必要な技・態度についてのディスカッションを日本人学生とともに実施した。
プリセプターシップを導入した、基礎実習の指導	2009～2014	助産基礎実習にプリセプターシップを導入。指導者、学生が共に学びながら、以降の実習でのコミュニケーションの向上にもつながった。
2 作成した教科書、教材		
手作り教材 性教育用教材の作成	2009～2014	性教育、マザークラス用教材、乳幼児用衣類、未熟児用衣類等の作成。学生だけでなく、地域の住民の協力を得ながら作成。子どもたちや受講者が興味を示し、手作りのぬくもりから、生命尊重の心を養う態度の育成にもつながっている。

助産学実習実習記録用紙の作成	2009～2014	従来の記録用紙を評価し改善を加える。効率よい実習ができるよう、授業内容を復習を兼ねた、スタンダードプランを示した。
性教育教材の作成	2016～2019	人形、パネルシアター、ペープサートなど、女性や子どもたちの発想を取り入れて共に作成、考案を重ねている。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
個人情報保護法に基づく「患者等個人情報記載用紙の取扱い方法」マニュアルの作成	2009～2014	個人情報保護法について研修会等で学習および情報収集、委員会で作成したガイダンスをもとに、実習で活用する「患者等個人情報記載用紙の取扱い方法」マニュアルを作成、使用。
実習中における学生の針刺し・血液暴露事故対処規定の素案作成	2009～2014	学生が実習中に針刺し事故および血液による暴露事故に遭遇した場合の対処法について、実習病院、校医に相談しマニュアルの素案作成、危機管理検討会で検討し活用。
5 その他（講演活動）		
平成 29 年度 天理市女性教育推進連絡協議会「いのちをどう伝えるか」 (天理市)	2017.05.27	平成 29 年度天理市 男女共同参画プラザ事業、天理市女性教育推進連絡協議会総会、記念講演。
青少年の自立を支える奈良の会 こころと命をつなぐ 「助産師による『いのち』のおはなし」 (奈良市)	2017.09.18	青少年の自立を支える奈良の会、青少年の性に関するチャレンジ事業において、ワークと講座、体験的性教育の提案として、助産師による体験授業の紹介を行った。
平成 30 年度 近畿特別支援学校知的障害教育研究協議会健康安全部会研修会 「助産師による『いのち』のおはなし」 ー体験授業が心を生かすー (大和郡山市)	2018.08.10	近畿特別支援学校知的障害教育の養護教諭を対象に、助産師が考えるいのち、性教育のあり方、教材活用の実際等について、演習を中心に講演を実施した。
平成 30 年度 奈良県看護協会保健師職能研修会 「其々の力を発揮できる子育てネットワークを考える」 ～専門職それぞれの強み。弱みをふまえた支援の在り方～ (橿原市)	2018.09.29	妊娠期から子育て期の各ステージのニーズに応じた支援を行うために、出産や育児にかかわるそれぞれの専門職の持つ強みや弱みを共有し、その力を発揮することで、切れ目ない支援を目指すことを目標にした講演。
広陵町立真美ヶ丘中学校 「性といのちの講演会」 (広陵町)	2018.12.10	中学 3 年生 173 名対象に、「生命の神秘」「思春期の心とからだ」「出産・育児」「性被害から守る」などについて、ピアカウンセラーの協力を得て、VTR や模擬体験を交えながらの講演を実施した。

韓国日本文化学会総合国際学術大会 討論者 (韓国 全南大学校)		2018.12.22		日本文化における妊娠・出産・育児や出産習俗における女性と子どもの身体等の発表に続き、現代の日本の助産師としての見解を述べた。	
職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項					
事項		年月日		概 要	
1 資格, 免許 1)准看護師 2)看護師 3)助産師 4)受胎調節実地指導員（大阪府認定） 5)保育音楽検定 2 級 6)保育技能検定 2 級		昭和 45 年 4 月 1 日 昭和 51 年 5 月 19 日 昭和 52 年 5 月 16 日 昭和 51 年 3 月 10 日 昭和 48 年 9 月 26 日 昭和 50 年 3 月 18 日		第 2025 号（奈良県） 第 296880 号 第 74567 号 第 885 号 音検証 10696 号 保検証 302345 号	
2 特許等					
3 実務の経験を有する者についての特記事項					
4 その他					
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項					
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要	
(著書) 1 出産の民俗学・文化人類学	共著	2014. 5	勉誠出版	助産師として 40 年の雑感	
(学術論文) 1. 先輩助産師から受け継ぐ、助産師の技・心～T 市における支援～ 2. 看護学生の清潔に対する意識調査, 第二報	共著 共著	2008. 7 2008. 11	第 23 回 奈良県母性衛生学会 平成 20 年度 奈良県看護研究学会	戦後から、現在も活躍中の助産師からの聞き取りを通しての学び 看護教育は、若者の清潔感に影響を与えているか	

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 分娩介助技術教育のプロセスの検討	共著	2009. 3	第 23 回 日本助産学会（東京）	助産学科開設後 3 年間の分娩介助教育のプロセスについて考察、報告
4. 妻の妊娠・出産を経験した父親の思い －意識変化の要因－	共著	2009. 5	第 65 回 日本助産師学会（奈良）	妻の妊娠・出産時の夫の姿勢が、父性にどのような影響を与えているかの調査
5. 先輩助産師と学ぶフリースタイル分娩	共著	2009. 7	第 24 回 奈良県母性衛生学会（奈良）	先輩助産師と助産学生が共に学ぶことでの効果
6. 助産基礎実習におけるプリセプターシップ導入の効果 第 1 報	共著	2010. 3	第 24 回日本助産学会（つくば）	実習指導にプリセプターシップを導入しての、学生・指導者の学び
7. 出生後の父性意識形成における助産師のかかわり －父親自身のニーズの把握－	共著	2010. 7. 1	第 25 回 奈良県母性衛生学会（奈良）	助産師のかかわりが、父性意識向上に、どのように影響するか
8. 在日外国人母子への出産前後のサポート体制に関する一考察 －N 県内外国人市民にむけての国際協力－	単著	2011. 1	吉備国際大学大学院 連合国際協力研究科 修士論文	在日外国人 14 名（12 か国）の女性より聞き取り調査をし、支援における課題の明確化
9. 里帰り分娩を経験した母親の育児不安について －産後 1 ヶ月健診後－	共著	2011. 7	第 26 回 奈良県母性衛生会（奈良）	里帰りすること、産後の生活にもたらず問題が多い。
10. ケニア共和国母子保健の現状報告第一報 －マタニティセンターを視察して－	共著	2012. 5. 1	第 26 回 日本助産学会 学術集会（札幌）	マタニティセンターと、村での生活を視察し、ケニアの母子保健の現状把握
11. ケニア共和国母子保健の現状報告第二報 －出産準備教育のプレゼンテーションを実施して－	共著	2012. 5. 1	第 26 回 日本助産学会 学術集会（札幌）	ケニアの医療スタッフへ、出産準備教育の紹介
12. 在日外国人母子への出産前後のサポート体制に関する一考察 －A 県での聞き取り調査より－	単著	2012. 7. 14	第 27 回 奈良県母性衛生会（奈良）	在日外国人の出産・育児の困難さとサポートの重要性

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
13. 国際助産を身近に学ぶ 授業の工夫 ー海外で出産した日本人 の体験談から学ぶー	単著	2013. 5. 2	第 27 回 日本助産学会 学術集会 (石川)	国際看護を、身近かなことと捕える授業 の工夫を紹介
14. 助産師が行う性教育の あり方 ～思春期におけるピアエ デュケーションでの助産 師の介入～	共著	2014. 7	第 29 回 奈良県母性衛 生学会 (奈良)	ピアエデュケーション有効性について 検討
15. 出生前診断を受検する 妊婦と家族へのケア ー文献検索による研究ー	共著	2014. 7	第 29 回 奈良県母性衛 生学会 (奈良)	出生前診断を受ける妊婦と家族の意思 決定について文献レビュー
16. 外国人の日本での出産 における問題点とその関 わり	共著	2014. 7	第 29 回 奈良県母性衛 生学会 (奈良)	日本で出産する外国人女性の不安や問 題点を明確にし、今後の関わりに活かす
17. 奈良県助産師活動の 90 年 (中間報告)	共著	2015. 7	第 30 回 奈良県母性衛 生学会 (奈 良)	助産師会 90 年の歴史を聞き取り調査、 先輩助産師の心と技を次代に伝えたい
(その他)				

教 育 研 究 業 績 書

平成31年3月31日

氏名 播金 ヤスミ

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
基礎看護学、母性看護学		
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
なし		
職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 資格、免許		
看護師	昭和53年5 月23日	第344379号
助産師	昭和54年12月20日	第77915号
日本周産期・新生児医学会 新生児蘇生法「専門コース」(Aコース) 修了	平成27年11月1日	認定番号A-15 42181
2 特許等		
なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称 (学術論文)	単著・ 共著の 別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
1. 1看護系の大学及び専門 学校で用いられている 基礎看護学実習評価表の 内容分析による構成概念 の抽出とルーブリック形 式の評価表の作成	単著	平成25年3月	畿央大学 修士論文	
2. 看護学生の産石位体験 前後の産婦人科診察台に 対するイメージと羞恥心 の変化	共著	平成27年	畿央大学紀要 第12巻、第1号、 P15-30	仲居由美子、小笠原知枝、 <u>播金</u> <u>ヤスミ</u> 、他
3. 基礎看護学実習評価項 目の内容分析によるパ フォーマンス評価のため のルーブリックの作成	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究 第5巻 2018年2月	<u>播金</u> ヤスミ、小笠原知枝、中居 由美子、河合まゆみ、小林由 里、對中百合、新井祐恵、大田 容子、伊藤明子
4. 新人看護師のクリ ティカルシンキング能力 と情報活用能力の特徴と その関連性	共著	平成31年3月	医療福祉情報行動科学研究 第6巻 2019年3月	小林由里、小笠原知枝、河合ま ゆみ、中居由美子、 <u>播金</u> ヤス ミ、他
(学会発表)				
看護職員離職経験者の離 職要因に関する実態調査 ー離職時の状況と現在の 心境からみた働き続ける ための職場環境ー		平成25年	第42回日本看護学会論文集（看護管 理）P187-190	飯尾美和、土井理久實、田岡眞 由美、 <u>播金</u> ヤスミ、他
Image of gynecological examination in young women. (若い女性の産婦 人科診察台イメージ)		平成25年	WANS（世界看護科学学会）ポスター 発表	YumikoNakai, Jong·SeongMoon, <u>YasumiHarikane</u> 他
学生カンファレンスの現 状と今後の指導課題		平成26年	第45回日本看護学会（看護教育）学 術集会、P37 ポスター発表	城使紀子、 <u>播金</u> ヤスミ、丸野由 美
基礎看護学実習評価項目 の内容分析による実習評 価の構成概念		平成26年	第24回日本看護学教育学会学術集会 （口演）	<u>播金</u> ヤスミ、小林由里、中居由 美子、他
新人看護師のクリティカ ルシンキング能力と情報 活用能力の関連性とその 特徴		平成26年	第24回日本看護学教育学会学術集会 （口演）	小林由里、河合まゆみ、 <u>播金</u> ヤ スミ、他
看護専門学校における高 校新卒学生と社会人経験 学生の学習意欲に関する 要因		平成27年	第25回日本看護学教育学会学術集会 （口演）	河合まゆみ、小笠原知枝、中居 由美子、 <u>播金</u> ヤスミ他

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 嶋田 理博

研 究 分 野		研究内容のキーワード	
天文学、科学教育		光学赤外線天文学、恒星物理学、自然科学教育（理科、地学、情報）	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事項		年月日	概 要
1 教育方法の実践例			
2 作成した教科書，教材			
3 教育上の能力に関する大学等の評価			
4 実務の経験を有する者についての特記事項			
5 その他			
1) 少年宇宙教室「太陽をさぐる」講師		平成 20 年 8 月 23 日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動 推進事業 平成 20 年度 地域活動支援企画 No. 20183 後援：三郷町教育委員会 地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。過去の太陽黒点数の変化から、太陽黒点が 11 年周期で変化していることを紹介し、現在、そして参加者の誕生年には太陽がどのような状態にあったかを考察してもらった。また、過去の太陽表面のスケッチや撮像写真を公開データベースから取得し、参加者や家族の生まれた頃の太陽がどのような状況であったかを印刷した簡単な冊子を制作してもらった。
2) 奈良県公共図書館・大学図書館 横断検索システムの制作と管理・運営		平成 20 年 9 月 ～現在	本学情報学部 中尾准教授（当時）とともに、ゼミ学生を指導し、奈良県内の公共図書館・大学図書館を串刺しにして検索するシステムを開発・公開した。当時、公共図書館だけの横断検索や大学図書館だけの横断検索は例があったが、両方を横断する検索はほとんど例がなく、先駆的であった。また、 GoogleMaps と連携し、図書館の所在が地図上に示されるのも特徴である。 http://www.nara-su.ac.jp/~rihaku/library/search.html

3) 少年宇宙教室「星の光のふしぎ」講師	平成 20 年 10 月 18 日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動 推進事業 平成 20 年度 地域活動支援企画 No. 20183 後援：三郷町教育委員会 地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。レプリカグレーティングと紙箱を使い、簡易分光器の製作を指導した。製作した分光器を通して、身近にある様々な光源を観察し、光源によってスペクトルが違うこと、太陽（青空）のスペクトルには吸収線が見えることに気づいてもらい、分光観測によって、対象の物理状態を知ることが出来ることを解説した。
4) 教職員のための公開講座 2008「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成 20 年 12 月 25 日	主催：奈良産業大学後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンには Linux をインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
5) 奈良県高等学校体育連盟テニス専門部ウェブサイトの制作と管理・運用	平成 20 年 12 月 ～現在	平成 21 年に奈良県で高校総体（「近畿まほろば総体」、テニス競技開催地は奈良県）が開催されるにあたり、奈良県高体連テニス部から、テニス競技のウェブサイトを開設したいとの要請を受けた。ゼミ学生を指導し、サーバレンタル契約やドメイン名取得から始め、ウェブサイトをゼロから構築した。現在も更新業務を行い、維持・管理中である。 http://hsaf.nara-tennis.org/
6) 教職員のための公開講座 2009「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成 21 年 8 月 5 日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンには Linux をインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
7) 少年宇宙教室「手作り望遠鏡で観測する木星とその衛星」講師	平成 21 年 10 月 24 日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域の科学舎推進事業 平成 21 年度 地域活動支援企画 No. 21120 世界天文年 2009 公認イベント No. 2900601 後援：三郷町教育委員会 地域の小学生（主に低学年）とその保護者を対象とした科学

		教室を開催した。「世界天文年 2009」の公認イベントの 1 つとして、400 年前にガリレオ・ガリレイが天体観測に用いたのと同口径の口径 4cm の望遠鏡の製作を指導した。あいにく曇天だったため、天体は観測できず、ポインティング、ピント合わせなど望遠鏡の操作法を練習した。あわせて、ガリレオが発見した木星の 4 大衛星の運行について、模型を用いて解説した。
8) 少年宇宙教室「手作り望遠鏡で観測する夜空の星々」講師	平成 21 年 11 月 28 日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域の科学舎推進事業 平成 21 年度 地域活動支援企画 No. 21120 世界天文年 2009 公認イベント No. 2900602 後援：三郷町教育委員会 「世界天文年 2009」の公認イベントの 1 つとして、10 月に開催した「少年宇宙教室」に引き続き、参加者が製作した望遠鏡を用いて、月、木星とその衛星の観測を行った。あわせて、望遠鏡の結像の仕組みを数十 cm サイズのフレネルレンズを使った模型を使って解説した。また、星座早見盤も製作した。
9) 教職員のための公開講座 2009「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成 21 年 12 月 25 日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンには Linux をインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
10) 教職員のための公開講座 2010「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成 22 年 8 月 4 日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンには Linux をインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
11) 少年宇宙教室「探査機『あかつき』でさぐる宇宙」講師	平成 22 年 8 月 21 日	主催：奈良産業大学、後援：三郷町教育委員会 地域の小学生（主に低学年）とその保護者を対象とした科学教室を開催した。金星探査機「あかつき」の打ち上げに関連し、地球とは全く異なる金星の物理状態・気象状態、そして金星探査機「あかつき」のミッションと期待される観測成果について紹介した。また、金星がなぜ満ち欠けして見えるかを理解するために、太陽・地球・金星とそれらの位置関係を再現する模型

		の製作を指導し、地球の位置から見た金星が満ち欠けし、大きさも変化することを解説した。
1 2) 教職員のための公開講座 2010「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成 22 年 12 月 27 日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンには Linux をインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
1 3) 奈良学園登美ヶ丘小中高 天体観望会 講師、 講演「星の一生と星雲・星団」	平成 23 年 3 月 12 日	主催：奈良学園登美ヶ丘小中高 奈良市、生駒市、木津川市、精華町在住の小学生と保護者対象の公開講座において、天体観望会に先立って講演を行った。当日参加者が望遠鏡で観望する星雲・星団は星の生死と関係があり、それらを観測することによって星が誕生してから最期を迎えるまでの物理が分かることを紹介した。
1 4) 少年宇宙教室「太陽を回る星々」全 3 回 実施主担当者	平成 23 年 8 月 7 日 平成 23 年 8 月 20 日 平成 23 年 10 月 16 日	独立行政法人 科学技術振興機構 科学コミュニケーション連携推進事業 平成 23 年度 機関活動支援 企画 No. 2300217 後援：三郷町教育委員会 地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。「太陽を回る星々」をテーマに、 ・太陽系の 8 惑星 ・海王星以遠の小天体 ・太陽系外の惑星 のそれぞれを実験や体験を通じて学ぶ全 3 回の科学教室を実施責任者として企画・実施した。
1 5) 少年宇宙教室「300 年ぶりの天文ショー 金環日食を見よう」講師	平成 24 年 5 月 19 日	主催：奈良産業大学 後援：三郷町教育委員会 地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。奈良県下では 282 年ぶりに見られる平成 24 年 5 月 21 日の金環日食について、日食の起こる原理や観測方法を解説し、日食観測用のサングラスを製作した。あわせて、近年活発になりつつある太陽活動のダイナミズムを、太陽観測衛星「ひので」や「SDO」の画像を交えて紹介した。当日の活動は奈良新聞 5 月 20 日版にて取り上げられた。

16) 王寺町リーバーカレッジ「宇宙の誕生と加速膨張」講演	平成24年9月1日	主催：王寺町、共催：奈良産業大学 人類が歴史上どのように星や銀河までの距離を測り、宇宙の大きさを測ってきたのか、について紹介し、宇宙膨張が発見された経緯や当時の宇宙観への影響について解説した。また、2011年にノーベル物理学賞を受賞した宇宙の加速膨張の発見とその意義について論じた。
17) 王寺町リーバーカレッジ「もう一つの地球を探す」講演	平成24年9月15日	主催：王寺町、共催：奈良産業大学 1995年に初めて発見されて以降、現在、700個以上の太陽系外惑星が発見されている。これら太陽系外惑星を発見する観測手段を解説するとともに、見つかった太陽系外惑星の特徴や、地球に似た惑星が存在する可能性について論じた。
18) 教職員のための公開講座2010「プレゼンテーションツールPrezi 講座」講師	平成24年12月25日	主催：奈良産業大学、後援：奈良県教育委員会 PowerPointのような紙芝居的なプレゼンではなく、キャンバス上に二次元的に配置された素材の間を移動・ズームインしてプレゼンするツールとして脚光を浴びているPreziの講習を行った。Preziのアカウント取得方法を始め、基本的な活用から、グループワークへの応用までを実習を交えて解説した。
19) 少年宇宙教室「宇宙を調べるモノづくり」実施主担当者および講師	平成25年8月10日 平成25年8月31日 平成25年10月12日	主催：奈良産業大学 情報学部 後援：三郷町教育委員会 助成：独立行政法人 科学技術振興機構（平成25年度 科学技術コミュニケーション推進事業：企画No. 250068） 地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。「宇宙を調べるモノづくり」をテーマに、 ・惑星探査車 ・ロケット ・天体望遠鏡 のそれぞれを実験や体験を通じて学ぶ全3回の科学教室を実施責任者として企画・実施した。また第3回の望遠鏡をテーマに取り上げた回では、講師を務めた。
20) 少年宇宙教室「レンズのふしぎと望遠鏡」	平成26年11月29日	主催：奈良学園大学 社会連携センター 地域の児童の宇宙や科学への関心を高めるため、工作や観測などの体験を通じて楽しく学べる科学教室を開催した。 レンズが結ぶ2種類の像、実像と虚像の仕組みと、その2つを組み合わせた望遠鏡の原理について解説し。参加者に、市販の紙筒とプラスチックレンズを組み合わせた望遠鏡を製作してもらい、ピント合わせ等の操作練習した後、屋外で月のクレーターを観測した。

2 1)「けいはんな科学フェスティバル 2015」出展 ～けいはんな子ども天文クラブ～星の光のひみつ～	平成 27 年 2 月 7 日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：(公財)関西文化学術研究都市推進機構、京都大学(COC 事業)、奈良教育大学 「けいはんな科学フェスティバル 2015」の中で、1 ブース展示を担当した。 レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を展示し、白熱電球や蛍光灯、ナトリウムランプ、LED など様々な光源によるスペクトルの違いを、参加者に観察してもらった。目に見える光は、様々な色の成分が合成されて出来ていること、発光する物質によってそのスペクトルのパターンが異なることを解説した。さらに、望遠鏡で撮影した恒星や銀河のスペクトルの写真を展示し、遠く離れた天体でも、スペクトルを観測することにより、天体に含まれている元素の量や、温度や密度などの物理状態、運動状態を知ることが出来ることを解説した。
2 2) けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～星の光のひみつ～」実施主担当者および講師	平成 27 年 10 月 31 日 平成 27 年 11 月 7 日 平成 27 年 12 月 5 日 平成 27 年 12 月 19 日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 地域の小学生向けの天文教室を開催し、分光観測をテーマとして取り上げた。分光観測は、太陽をはじめ、天体に含まれている元素の量や、物理状態、運動状態を知ることが出来る手段である。参加者は、分光観測に必要な光の性質や分光器の原理について学び、レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を製作し、太陽の分光観測を行った。観測結果から太陽の元素組成を調べ、天文学者がどのように天体からの情報を引き出しているのかを、体験を通じて学習した。光を分光することによって、手に取れない遠くの天体でもその物理状態を知ることが出来ること、そして、その情報を活用して宇宙の成り立ちについて知ることが出来ることを、工作と実験・観察を通して体験した。
2 3)「けいはんな科学フェスティバル 2016」出展	平成 28 年 2 月 6 日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、奈良教育大学、(公財)関西文化学術研究都市推進機構 「けいはんな科学フェスティバル 2016」の中で、1 ブース展示を担当した。 レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を展示し、白熱電球や蛍光灯、LED など家庭にある光源、水素、ヘリウム、ネオン、水銀の各放電管のスペクトルの違いを、参加者に観察してもらった。目に見える光は、様々な色の成分が合成されて出来ていること、発光する物質によってそのスペクトルのパターンが異なること、水素やヘリウムのスペクトルが天文学の研究とどのような関係にあるかを解説した。

24) けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～手作り望遠鏡で星を見よう～」実施主担当者および講師	平成 28 年 9 月 10 日 平成 28 年 10 月 8 日 平成 28 年 11 月 5 日 平成 28 年 12 月 10 日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いて、月、土星から、明るい星雲・星団までを対象とした観測指導を行った。
25) けいはんなサイエンスプログラム in KICK「太陽の光を調べよう」講師	平成 29 年 1 月 8 日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク グレーティングシートと工作用紙を使った簡易分光器の製作を指導した。また、それを用いた、白熱電球や蛍光灯、LED など家庭にある光源、水素やヘリウムなど各種元素の放電管スペクトルの観察を行った。発光する物質によってスペクトルのパターンが異なることを学び、分光が天文学の研究でどのように使われているかを解説した。
26) けいはんな科学フェスティバル 2017「けいはんな子ども天文クラブ 2016 年活動報告」「太陽・月を観測しよう」出展	平成 29 年 2 月 4 日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、(公財) 関西文化学術研究都市推進機構、奈良教育大学、京都府立大学 「けいはんな科学フェスティバル 2017」の中で、「けいはんな子ども天文クラブ 2016 年活動報告」「太陽・月を観測しよう」の 2 ブースの展示・体験コーナーを担当した。前者では上記 25) の活動成果を報告した。後者では、H α ナローバンドフィルタを備えた太陽観測望遠鏡を用いた太陽表面プロミネンス、プラージュの観測、通常の日体望遠鏡を用いた月表面のクレーターを観測を行なった。
27) けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～手作り望遠鏡で星を見よう～」実施主担当者および講師	平成 29 年 8 月 26 日 平成 29 年 8 月 30 日 平成 29 年 9 月 2 日 平成 29 年 10 月 7 日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いて、月、土星や二重星を対象とした観測指導を行った。

28) けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～流れ星を観測しよう～」実施担当者および講師	平成 29 年 12 月 12 日 平成 29 年 12 月 13 日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。12 月 14 日に極大を迎えるふたご座流星群の眼視による観望、および、電波によるエコ観測を行った。
29) けいはんな科学フェスティバル 2017「けいはんな子ども天文クラブ 2016 年活動報告」「太陽・月を観測しよう」出展	平成 30 年 2 月 3 日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、(公財) 関西文化学術研究都市推進機構、奈良教育大学、けいはんな科学共育デザインラボ、京都府立大学 「けいはんな科学フェスティバル 2018」の中で、「けいはんな子ども天文クラブ 2017 年活動報告」「太陽を観測しよう」の 2 ブースの展示・体験コーナーを担当した。前者では上記 27) 28) の活動成果を報告した。後者では、H α ナローバンドフィルターを備えた太陽観測望遠鏡を用いた太陽表面プロミネンス、プラージュの観望を行なった。

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項

事項	年月日	概 要
1 資格、免許 1) 修士（理学）	平成 3 年 3 月	京都大学 第 3900 号 論文題目「B 型主系列星の線輻射圧と質量放出現象」
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他 1) けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク サイエンス・サポーター 2) けいはんな科学共育デザインラボ 会員	平成 26 年 9 月～現在 平成 29 年 4 月～現在	けいはんな学研都市で実施する科学イベントや科学体験プログラムについて企画・参加・支援している。(宇宙分野担当) けいはんな地域の子どもたちの科学に対する興味・関心・意欲を高め、科学的探究心の育成に重点をおいた教育プログラムの開発・運営及び科学イベントの企画・運営を行っている。(宇宙分野担当)

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 2 3				

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1) The Anisotropy of Cosmic Ray Pursued with Chaos Analysis	共著	平成 23 年 8 月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing, 2011, Vol.1, 70.	エアシャワーサイズ時系列のカオス解析において、カオス性に寄与する宇宙線を選別し、その到来方向の分布を求めた。その結果、Crab, Mrk421, Cyg-X など、特定の活動銀河が高エネルギーガンマ線宇宙線源である可能性を示すことができた。 共著：S. Ohara, T. Konishi, A. Mukai, M. Shimada, A. Iyono, H. Matsumoto, I. Yamamoto, N. Takahashi, T. Nakatsuka, K. Okei, S. Tsuji, N. Ochi
2) Searching for cosmic ray nuclei above the KNEE energies through the Gerasimova-Zatsepin effect with the LAAS experiments	共著	平成 23 年 8 月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing, 2011, Vol.1, 170.	Gerasimova-Zatsepin 効果による原子核宇宙線の崩壊過程を考慮して、大広域エアシャワーデータを解析し、Knee 領域以上の宇宙線について考察した。 共著：A. Iyono, H. Matsumoto, K. Okei, S. Tsuji, S. Ohara, N. Ochi, T. Konishi, N. Takahashi, I. Yamamoto, T. Nakatsuka, A. Mukai, M. Shimada
3) 情報学部プロジェクト演習における「フィジカルコンピューティング」教育の実践	単著	平成 25 年 2 月	情報学フォーラム 紀要 (奈良産業大学), 8, 131-140.	2009 年度から 2012 年度の 4 年間、情報学部「ラジコン製作プロジェクト」において、「フィジカルコンピューティング」教育を実践した。教材として Sun SPOT または Arduino を主に使い、合計 7 つのシステムを製作し、各年度の学園祭に出展した。自らハードウェアとソフトウェアの設計を行い、部品の選定・購入から始めてシステムを完成させる体験は、学生にとって有意義な学修であったと考える。
4) 太陽系外惑星発見と情報学	単著	平成 25 年 2 月	情報学フォーラム 紀要 (奈良産業大学), 8, 159-164.	1995 年に初めて発見されて以降、700 個以上発見されている太陽系外の惑星について、それらが発見する観測手段や、見つかった惑星の特徴、地球に似た星が存在する可能性について論じた。これらの成果には、CCD などの受光素子の技術革新による性能向上や、コンピュータによる自動観測、画像の自動解析など、情報技術の進展による寄与が大きい。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
5) 奈良県 公共図書館・大学図書館横断検索システムの構築	共著	平成 25 年 3 月	奈良産業大学紀要，29，69-75.	平成 20 年度、奈良県図書館協会大学・専門図書館部会の依頼を受け、奈良県内の公共図書館および大学・研究所図書館の蔵書を検索できるシステムを開発し、インターネット上に公開した。従来の検索システムと異なり、地図上で図書館の位置が確認できることと、専門図書館を含めた大学図書館と公共図書館を一括して検索できるのが特徴である。 共著：嶋田理博、中尾泰士
6) 地域における地学教育の実践と課題	共著	平成 25 年 3 月	奈良産業大学紀要，29，185-191.	現在、地域に根差した理科教育として、サイエンスカフェや実験教室が各地で実施されている。本学でも地元住民向けの公開講座や小学生を対象とした科学教室を実施し、学外においても積極的に理科教育の振興に取り組んできた。こうした取り組みへの参加者は常に一定数を見込むことができるが、その多くはもともと科学に興味・関心を抱いていたリピーターであり、理科に関心をもたない住民の目を向けさせる工夫が必要である。 共著：向井厚志・嶋田理博
7) 少年宇宙教室 ―宇宙を調べるモノづくり―	共著	平成 26 年 9 月	奈良学園大学紀要，1，173-179.	平成 25 年度に奈良産業大学（現・奈良学園大学）情報学部が主催した公開講座「少年宇宙教室 ～宇宙を調べるモノづくり～」の報告である。宇宙を探査・観測する機器・装置をテーマに、計 3 回の講座を開催し、参加者数は小学生児童とその保護者を中心に 153 名を数えた。参加者の感想はおおむね好評で、地域における科学コミュニケーション活動に一定の役割を果たせたと考える。 共著：嶋田理博・向井厚志・中尾泰士
8) グループ方式によるアンケート分析演習の実践と課題	共著	平成 27 年 12 月	神戸山手短期大学紀要，58，41-56	2015 年度前期に開講された「アンケート演習 (1)」はアンケート分析を主目的とした必修科目であった。授業を終えて、本科目の教育方法や成果を検討すると同時に、本科目で採用されたグループ方式によるアンケートの計画・実施・分析・発表の利点と問題点を考察した。 共著：渡辺卓也、飯田一郎、本多佐知子、嶋田理博

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他) 「学会発表」 1) プロジェクト型演習を通じたアプリケーション開発の学習	共同	平成 20 年 12 月	平成 20 年度 情報教育研究集会 (於福岡県北九州市)	共同発表者：嶋田理博、中尾泰士、向井厚志 情報学部プロジェクト型演習「IT システム構築プロジェクト」において、平成 19 年度に行った、ウェブサーバと RDBMS の構築、それらを連携させた掲示板、ストリートビューシステム、教室使用状況表示システムの制作について報告した。
2) 小学生を対象とした天文教育活動「少年宇宙教室」の報告	共同	平成 21 年 9 月	日 本 天 文 学 会 2009 年秋季年会 (於山口大学)	共同発表者：中尾泰士、嶋田理博、向井厚志 地域の小学生を主たる対象とした地球・宇宙分野の体験型講座「少年宇宙教室 ～ロケット・太陽・スペクトル～」を企画し、科学技術振興機構の「平成 20 年度 地域科学技術理解増進活動推進事業 地域活動支援」の支援活動の 1 つとして採択された。参加した子供達とその保護者に対して行ったアンケートなどをもとに、われわれの活動について報告した。
3) 小学生向け体験型天文教室「少年宇宙教室」の報告 2：「宇宙を調べる」	共同	平成 22 年 9 月	日 本 天 文 学 会 2010 年秋季年会 (於金沢大学)	共同発表者：嶋田理博、向井厚志、中尾泰士 2009 年度には科学技術振興機構の支援を得て開催した体験型講座「少年宇宙教室」について報告した。「宇宙を調べる」をテーマとした全 4 回の講座は、望遠鏡の製作とそれを使っての月・木星の観測を行い、観測の楽しさや宇宙に対する興味を感じてもらえるなど、参加者の満足度の高いものだったと考える
4) 小学生向け科学教室『少年宇宙教室』の活動	共同	平成 22 年 11 月	第 54 回 宇宙科学技術連合講演会 (於静岡県静岡市)	共同発表者：嶋田理博、向井厚志、中尾泰士 2008 年度から地域の小学生を対象として開催している科学教室「少年宇宙教室」について報告した。子ども達が楽しみながら学べるよう、講義ではなく、工作や実験などの体験を中心とした内容は、科学や宇宙に関心のある参加者に対してはもちろん、初参加の子供や、関心のなかった保護者に対しても興味を引き出すことに成功していると言える。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
5) The Anisotropy of Cosmic Ray Pursued with Chaos Analysis	共同	平成 23 年 8 月	Proceedings of 32nd International Cosmic Ray Conference, Vol.1 , 70-71. (at Beijing, China)	共同発表者：大原莊司、小西健陽、向井厚志、嶋田理博、伊代野淳、松本宏樹、山本勲、高橋信介、中塚隆郎、桶井一秀、辻修平 越智信彰 宇宙線時系列データについて、観測粒子密度分布より一次宇宙線エネルギーを算出し、エネルギー時系列データ約 5 万イベントのカオス解析を行った。エネルギー範囲に対応するカオスの出現頻度の解析から、 $5.0 \times 10^{15} \sim 7.5 \times 10^{15} \text{eV}$ の範囲のエネルギーをもった一次宇宙線が、300 イベント連続する時系列データのカオス性の出現にもっとも寄与していることが見出された。
6) 看護教育 IT 化の一考察：教える側教わる側の思いとサービスデザイン	共同	平成 27 年 7 月	情報処理学会 第 47 回ユビキタスコンピューティングシステム・第 2 回高齢社会デザイン合同研究発表会 (於 立命館大学 大阪いばらきキャンパス)	共同発表者：笹嶋宗彦、高岡良行、嶋田理博、吉岡隆之 看護教育における教材の電子化においては、単純に教科書を電子書籍や補助教材で置き換えるのではなく、教える側と教わる側の双方の要望に応える形で教材とサービスをデザインすることが重要である。筆者らは看護知識と技術を教育するためのタブレット型ツールを新設の看護学科に導入し、設立準備期間を含めて約 2 年間運用してきた。本発表では、その過程で得られた知見を報告した。

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 芝田 ゆかり

研 究 分 野		研究内容のキーワード
公衆衛生看護学, 地域看護学		保健・医療・福祉の連携
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 看護学生のための初年次教育の教育方法作成	平成 24 年 12 月 ～26 年 4 月	飯田女子短期大学看護学科の教授就任前から看護学生のための初年次教育の教育方法を「キャリアデザイン」として新講義を作成した。具体的には, 就任前本学科は留年する過年度生が多いため, 看護師になるための動機づけを先駆けて行い, 「聴く」「読む」「調べる」「書く」ための教育方法を新たに作成・実施した。
2) 地域基盤型ボランティア教育方法の作成	平成 27 年 4 月～ 28 年 3 月	朝日大学保健医療学部看護学科准教授として, 地域基盤型ヘルスボランティア教育方法を作成した。具体的には多世代交流を目的とした利他的行動の体験型学習であり, 岐阜県瑞穂市地域包括支援センター・介護予防サポーターと連携し, 地域基盤型のボランティア教育を作成・実施した。
2 作成した教科書, 教材 1) 2018 年要点がわかる出題傾向がみえる小児看護学 (看護師国家試験対策)	平成 29 年 11 月	「看護師国家試験出題基準 (平成 30 年版)」準拠。中項目別にみた要点と過去問題集を作成した。第 97 回～第 106 回看護師国家試験問題収録。PILAR PRESS 共著: 守本とも子 (監修) <u>芝田ゆかり</u> , 田場真理, 瀬山由美子 (編著)
2) 2019 年出題傾向がみえる健康支援と社会保障制度 (看護師国家試験対策)	平成 30 年 5 月	「看護師国家試験出題基準 (平成 30 年版)」準拠。中項目別にみた要点と過去問題集を作成した。第 91 回～第 107 回看護師国家試験問題収録。PILAR PRESS 共著: 守本とも子 (監修) 新谷奈苗, <u>芝田ゆかり</u> , 井上智栄子, 大浜恵美子他
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 1) 外国語 (フランス語) 中学校教諭 1 級教諭普通免許 2) 外国語 {フランス語} 高等学校教諭 2 級教諭普通免許 3) 養護学校教諭 1 級普通免許 4) 国語科中学校教諭 1 種普通免許 5) 国語科高等学校教諭 1 種普通免許 6) 看護婦免許 7) 保健婦免許 8) 養護教諭 2 種免許 9) 第 1 種衛生管理者免許	昭和 57 年 3 月 平成元年 3 月 平成 3 年 3 月 平成 9 年 4 月 平成 11 年 5 月 平成 11 年 10 月 平成 11 年 10 月	

事項		年月日	概 要	
10) 介護支援専門員 11) 精神保健福祉士免許 12) 健康運動実践指導者 13) 文部科学省による大学設置審議会の教員組織審査において, 朝日大学保健医療学部看護学科専任准教授: 適格と認定		平成 12 年 2 月 平成 15 年 6 月 平成 15 年 10 月 平成 25 年 8 月	科目名:「公衆衛生看護学概論」「公衆衛生看護活動論Ⅰ」「公衆衛生看護活動論Ⅱ」「公衆衛生看護活動論Ⅲ」「公衆衛生看護学実習」「看護研究演習Ⅰ」「看護研究演習Ⅱ」「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」担当可と判定	
14) 学位授与機構・文部科学省「大学設置審議会教員審査」において, 飯田女子短期大学専攻科養護教育専攻 兼担教授: 適格と認定		平成 25 年 12 月	科目名:「看護学特論」担当可と認定	
15) 文部科学省による AC 教員審査において, 奈良学園大学保健医療学部看護学科専任准教授: 適格と認定		平成 29 年 2 月	科目名:「公衆衛生看護学概論」「公衆衛生看護学Ⅰ(地域活動)」「公衆衛生看護方法論Ⅰ」「公衆衛生看護方法論Ⅱ」「公衆衛生看護学実習」「看護研究Ⅱ」「公衆衛生看護診断演習」「在宅看護学実習」「基礎看護学実習Ⅰ」「基礎看護学実習Ⅱ」「統合実習」担当可と判定	
16) 文部科学省による大学院設置の教員組織審査において, 奈良学園大学保健医療学部看護学科准教授: 適格と認定		平成 29 年 8 月	科目名:「在宅看護学特論Ⅰ(在宅看護学)」担当可と判定	
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他 1) 東大阪市まちづくり助成金 2) 2015(平成 27)年度教育改革推進事業助成金		平成 21~22 年 平成 27~28 年	東大阪大学, 東大阪短期大学 研究共同分担 朝日大学 2015 年度教育改革推進事業 研究代表者	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(学術論文) 1 市町村合併後の集団健康教育(運動)プログラムの評価—総合型地域スポーツクラブにアウトソーシングした事例の検討—	単著	平成 21 年 12 月	東大阪大学教育研究紀要 第 7 号:25-30	市町村合併前後の集団健康教育(運動)プログラム評価への示唆を得ることを目的に, 総合型地域スポーツクラブにアウトソーシングした事例を検討した. その結果, 集団健康教育の実施において「運動の機会や時間がない者や参加者の性別・年齢に応じたアプローチとその評価システムが必要であることが示唆された.
2 総合型地域スポーツクラブを活用した運動啓発事業の評価	単著	平成 22 年 3 月	日本福祉大学大学院社会福祉学研究科「社会福祉学研究」, 第 5 号, 55-63	中高年者の運動不足といった課題から経年・長期的に継続した運動啓発事業を実施するために, 総合型地域スポーツクラブを活用した事業の多面的な評価を検証した. その結果運動啓発事業の評価において, 参加実人数を用いて評価を行うことで, 実施回数が増えても, 男性や運動を継続する実参加人数が増えるとは限らないことが明らかになった.

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達度」における学生の自己評価：実習形態の違いによる到達度の比較	共著	平成 26 年 3 月	大阪市立大学看護学雑誌, (10) 1-10	行政 3 週間実習(行政実習), 行政 1 週間と産業 2 週間の計 3 週間実習(産業実習), 行政 1 週間と学校 2 週間の計 3 週間実習(学校実習)という実習形態で学生の到達度の違いがあるか否かを検討した。2012-2013 年度に地域看護学実習を履修した計 124 名に調査票を配布, 104 名(回収率: 83.9%) から回答を得た。調査は「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」(厚生労働省, 2010) の項目を用いた。実習という臨地の特性により経験しにくい項目については, 実習運営のさらなる工夫が必要であることを考察した。 担当分: 調査, 統計解析 著者: 林知里, 横山美江, 藤村一美, 村井智郁子, <u>芝田ゆかり</u>
4 看護基礎教育における保健師教育	単著	平成 27 年 3 月	朝日大学保健医療学部看護学科紀要, (1) 44-52	看護基礎教育における保健師教育について, ①学士課程(大学 4 年間)の看護基礎教育における保健師教育の変遷, ②朝日大学保健医療学部看護学科の保健師教育の考え方, ③今日の社会に求められる保健師の役割を概観した。
5 2015 年度教育改革推進事業: 介護予防プロジェクト報告ー地域と大学が連携した地域基盤型のボランティア教育システムー	共著	平成 29 年 3 月	朝日大学保健医療学部看護学科紀要, (3) 59-66 2015 年度教育改革推進事業助成金報告書	現在の日本における看護学教育において, 介護予防における地域包括システムを目指した地域基盤型のボランティア教育の取り組みは少ない。そこで我々は, 2015 年度教育改革推進事業: 介護予防体操作成プロジェクトに取り組み, 本事業の目的達成を目指した。地域連携協定を結ぶ A 市をはじめ, A 市社会福祉協議会・A 市地域包括支援センター・みずほ生き活きサポーター等関係機関の協力のもと, 「介護予防体操作成プロジェクト: 地域と大学が協働したボランティア教育システム」を実施した内容を報告した。 本人担当部分: 研究代表者・統計解析, 結果, 考察, 総括 著者: <u>芝田ゆかり</u> , 高橋直美, 名和めぐみ, 北端恵子
(学会発表) 1 学生による「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」の自己評価ー行政保健実習・学校保健実習・産業保健実習による比較・検討ー	共著	平成 25 年 1 月	第 1 回日本公衆衛生看護学会(首都大学東京), 2013. 1. 14-15, 第 1 回日本公衆衛生看護学会講演集, 第 1 号, 75	2012 年度 4 年制大学の保健師課程学生への調査から, 保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度を明らかにし, 行政・学校・産業実習による自己評価の比較・検討を行った。担当分: 調査, 統計解析, 結果 著者: 藤村一美, <u>芝田ゆかり</u> , 横山美江

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 Effect of Caregiver's Smile for Comfortable in Older Adult with Alzheimer's Disease	共同発表	平成 27 年 10 月	The 10th International Association of Gerontology and Geriatrics-Asia/Oceania 2015 Congress 19-22 October 2015 Chiang Mai, Thailand	In patients with advanced Alzheimer's disease, showing various expressions, such as "surprise face" photo "smile", "crying", see how it feels this person? " I heard. Then see the surprise face"so not recognize the"angry face", "smile"could recognize most people. Slow dementia, and the ability to feel from people's facial expressions. But smile, that capability to read or see someone happy, or happier not learned unabated to the end. This time, evaluate effects caregiver's smile in a saliva test for older Alzheimer diseases objective. 本人担当部分抽出不可能 共著：大塚静香，濱畑章子， <u>芝田ゆかり</u> ，小松美砂
3 児童・生徒等におけるう蝕有病状況の年齢特性比較—学校保健統計調査結果からの検証—	単著	平成 27 年 1 月	第 3 回日本公衆衛生看護学会(神戸)第 1 回日本公衆衛生看護学会講集, P205	学校保健統計調査結果を用いてう蝕有病状況について，経年的に年齢特性の傾向を明らかにした。
4 Collaboration between University and Community Volunteers in a Nursing-Care Prevention Exercise Project	共同発表	平成 28 年 6 月	The 3rd Korea-Japan Joint Conference on Community Health Nursing (KJJCCHN) July 1-3, 2016 Busan, South Korea 2015 年度教育改革推進事業助成金	This study develops an education program with community participation as part of a new project that utilizes a regional partnership between the university and community volunteers through intergenerational exchange and allows volunteers to participate with residents and government officials. The subjects were nine students who applied to participate in the nursing-care prevention exercise project and were recruited from the 87 students in the university's two-year nursing program. The subjects were studied for six months (June-December 2015). In Workshop and two gatherings of elderly people who live in the community, it was content analysis of Reflection and impressions of the student. By content analysis, we were able to extract the concept of individual and collective. 本人担当部分：研究の総括，統計解析，結果，考察 共著： <u>芝田ゆかり</u> ，北端恵子，高橋直美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
5 地域と大学が連携した地域基盤型のボランティア教育プログラムの展開ー2015 年度教育改革推進事業：介護予防体操作成プロジェクトー		平成 28 年 8 月	日本地域看護学会第 19 回学術集会(栃木)講演集，(19)111 2015 年度教育改革推進事業助成金	本研究の目的は，住民や行政等関係者と共にボランティアとして参加する機会を利用した世代間交流を通して，地域と大学との地域連携協定を活用した介護予防体操作成プロジェクトへ参加する地域基盤型のボランティア教育プログラムを展開することである．学生は①高齢者やボランティア・関係機関の専門職とコミュニケーションを持ち，世代間交流を図り，他者を理解することの必要性を学び，②介護予防体操を作成・披露することでの達成感や喜び等を得たことを報告した．また地域の人々からも今後の学生ボランティア活動の継続希望の声が聞かれ，大学としての地域貢献への一歩となり，地域基盤型のボランティア教育プログラムを展開することができた． 本人担当部分：研究の総括，統計解析，結果，考察 共著：芝田ゆかり，北端恵子，名和めぐみ，高橋直美
6 地域基盤型のヘルスボランティア教育プログラムに参加した学生のリフレクション・プロセス	単著	平成 29 年 1 月	第 5 回日本公衆衛生看護学会学術集会(仙台)，2017.	地域基盤型のヘルスボランティア教育プログラムに参加した学生のリフレクション・プロセスを質的研究で明らかにした．
7 介護予防体操作成ボランティアの活動が学生に与えたものー高齢者との関わりで学んだ人権擁護についてー	共同発表	平成 29 年 5 月	日本看護倫理学会第 10 回年次大会(大分) 2017.	今回介護予防体操作成のボランティアの活動を 2 年生 9 名の学生と実施した．学生は介護予防体操を行ううちに，高齢者にとって意味のある内容や，コミュニケーションの取り方を学び，体操作成自体の過程が学びになっていること等多くの学びを得ていた．高齢者の立場であればどうか考えることや，人間としての共感に近づく大切さを考えさせられていた． 本人担当部分：統計解析，結果，考察 共著：北端恵子，芝田ゆかり，高橋直美
8 国内におけるソーシャルサポート受領についてのベネフィット・ファインディングに関する文献研究	単著	平成 30 年 1 月	第 6 回日本公衆衛生看護学会(大阪)，2018.	国内におけるソーシャルサポート受領についてのベネフィット・ファインディングに関する文献研究を行った．
9 Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease	共同発表	平成 31 年 1 月	22nd East Asian Forum of Nursing Scholars 2019EAFONS 東アジア看護学研究者フォーラム シンガポール大会，2019.	We will clarify the trend of research on life skills focusing on the diet of patients with IBD and use our results as the basic data to consider supporting methods. 本人担当部分：統計解析，結果，考察 共著：井上葉子，芝田ゆかり他
10 Association among the factors in conjunction with Height Loss of females by the literature review	共同発表	平成 31 年 1 月	22nd East Asian Forum of Nursing Scholars 2019EAFONS 東アジア看護学研究者フォーラム シンガポール大会，2019.	We examined the several factors related to the height loss of female and relations among those factors to provide basic resources to prevent height loss. 本人担当部分：統計解析，結果，考察 共著：三浦康代，芝田ゆかり他

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 西本 美和

研 究 分 野		研究内容のキーワード
看護学		精神看護、地域・老年看護
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) 視聴覚教材の教育利用	平成 21 年 4 月 ～平成 26 年 7 月	園田学園女子大学人間科学部人間看護学科「成熟看護援助論(精神)」の講師として担当し実践した(専門科目、2 年次配当、必修 1 単位)。 担当科目の履修者およそ 90 名に対して、対象理解のために、DVD などの視覚教材を使用した。実際の対象者の体験や声を聞くことで、対象理解を深めることができた。学生からも、対象理解が深まったという感想が多くみられた。
2) ペーパーペイシエントの利用による PBL 演習	平成 21 年 4 月 ～平成 26 年 7 月	園田学園女子大学人間科学部人間看護学科「成熟看護援助論(精神)」の講師として担当し実践した(専門科目、2 年次配当、必修 1 単位)。 担当科目履修者 90 名に対して、ペーパーペイシエントによる PBL 方式による看護過程の展開を演習にて実施した。グループ及び、個人にて、実施した。これを行うことで、実際の実習前のシュミレーションにもなった。
3) 卒業論文のプレゼンテーションの導入	平成 22 年 12 月 ～平成 25 年 12 月	園田学園女子大学人間科学部人間看護学「経験値統合研究」の講師として担当し実践した(専門科目、4 年次配当、選択 3 単位)。 担当した学生は 1 から 4 名で、看護研究で研究した内容を毎年、まとめて、研究発表形式のプレゼンテーションを実施した。学生は研究発表を経験できることやまた、卒後教育の一環で経験を生かして、看護研究を進めている。そのためか、卒後の研究への取り組み態度に関しても、現場からの評価が高い。
4) 体験型学習の導入	平成 24 年 2 月 ～平成 26 年 2 月	園田学園女子大学人間科学部人間看護学「こころのケア論」の講師として担当し実践した(専門科目、2 年次配当、選択 1 単位)。 担当科目の履修者およそ 90 名に対して、呼吸法、自律訓練法、アロマセラピーの実演の体験をすることで自身の精神的健康を保つ方法を実践し、生活にとりいれられるようにした。学生は「まちの保健室実習」などに取り入れて利用していた。
5) 小テスト、レポート課題の評価のフィードバックの利用	平成 25 年 4 月 ～平成 26 年 7 月	園田学園女子大学人間科学部人間看護学科「成熟看護援助論(精神)」の講師として担当し実践した(専門科目、2 年次配当、必修 1 単位)。 担当科目履修者およそ 90 名に対して、授業開始直後に前回の授業内容の確認のために、小テストを実施した。また、その結果を返却し、学生にフィードバックした。学生はテスト前に授業の復習をすることになり、学習機会を作るとともに、学習習慣を作ることにも役立った。また、レポート課題に関して、添削し、フィードバックすることで、学生は早めに復習に結びついた。

6) ペーパーペイシェントの利用による PBL 演習及びプレゼンテーションの導入	平成 27 年度 ～平成 28 年度	関西国際大学保健医療学科看護学科「精神看護援助論」（専門科目、2 年次配当科目、必修 2 単位）の講師・准教授として担当し、実践した。 担当科目履修者に対して、2 パターンのペーパーペイシェントを用意し、6 人程度のグループにて PBL 方式の演習を実施した。そして、その結果をパワーポイントにまとめ、プレゼンテーションを行なった。学生は実際にまとめることで、精神看護のアセスメントについて学ぶことができた。そして、この演習を利用することが実際の実習に結びついた。また、プレゼンテーションを行うことで、学生間同士の意見交換が活発で、情報を統合する力や他者の意見に対して、クリティカルに考える機会にもなった。
7) オフィスアワーでの学習支援	平成 27 年度 ～平成 28 年度	関西国際大学保健医療学科看護学科にて、「精神健康看護学概論」（専門科目、2 年次配当科目、必修 2 単位）の補講をオフィスアワーを利用して、実施した。 中間テストにおいて、成績不良者を対象として学習支援を実施した。その結果、学生の授業の不明点などの解決に役立つとともに、成績向上に繋がった。
8) 「妄想かるた」の演習への活用	平成 27 年度 ～平成 28 年度	関西国際大学保健医療学科看護学科「精神看護援助論」（専門科目、2 年次配当科目、必修 2 単位）の講師・准教授として担当し、実践した。 担当科目履修者に対して、「妄想かるた」を利用して、演習を実施した。「妄想かるた」は精神障がい者が作成したもので、対象理解には良い材料であると考えた。そして、実際にかるたを実施し、その後、作成した経緯などの DVD をみることで対象者のイメージすることに役立つと考える。現在、学生の精神障がいのイメージの変化について研究を実施している。
9) 予習および小テストの導入による学習支援	平成 29 年度	関西国際大学 2 年生配当科目「精神健康看護学概論」（必修 2 単位）において、予習を取り入れた小テストを実施した。学内 FD での関西大学・森朋子先生の講演より「学習の内化と外化に向けたアクティブラーニング」から予習学習が復習学習よりも効果が高いことを知り、取り入れた。事前に学生に予習範囲を知らせ、その後、予習範囲の授業を行い授業後に小テストを行った。その際に学生には、予習ノートを見てよいとのことで試験を実施した。多くの学生の意見では、「自分が理解できたかどうか分かりやすい。」「学習範囲がわかりやすくてよい」があった。しかし、予習が不十分な学生は成績があがらなかった。予習が継続できる仕組みを吟味する必要がある。たとえば、毎回、ノートまとめを提出
10) アクティブラーニングによるコミュニケーション演習	令和元年	奈良学園大学 3 年生配当科目「精神看護援助論」(必修 1 単位)においてコミュニケーション演習を実施した。2 人から多人数グループへと場を変化させながら、その中で、聴くことや伝えることを体験させた。そして、怒りや悲しみ、冷たいなどの態度が話す人に与える影響や話を十分に聴いてもらうことの効果などに経験してもらい、どのような態度が効果的であるかを実感できた。
1) 「成熟看護学援助論（精神）」演習におけるペーパーペイシェントの作成	平成 23 年 4 月 ～平成 23 年 7 月	園田学園女子大学人間看護学科 3 年次配当科目「成熟看護学援助論（精神）」の演習において、急性期と慢性期の精神科疾患をもつペーパーペイシェントを作成した。演習において、オレム・アンダーウッド理論を用い看護アセスメントを実施できるように、アセスメント、問題点、健康的側面セルフケアレベル、総合アセスメント等が書き込めるように工夫し作成した。成果としては、急性期と慢性期の特徴をアセスメントできたため、学習範囲が広がった。

）「精神看護援助論」におけるペーパーペイシェントの作成 3）「精神看護援助論」におけるペーパーペイシェントの作成	平成 27 年度 ～平成 28 年度 令和元年 5 月	関西国際大学保健医療学部看護学科 2 年次配当科目（必修 2 単位）の演習においてペーパーペイシェントを作成した。統合失調症、アルコール依存症の 2 種類のペーパーペイシェントを作成し、アセスメント、統合アセスメント、問題抽出、計画立案ができるように作成した。学生には、記入例を示し、書き方例も示した。その結果、実習において、アセスメント方法や手順などを見ながら、学生は自主的に実習において看護展開ができていた。 奈良学園大学看護学科 3 年生配当科目（必修 1 単位）の演習において、オレム・アンダーウッド理論に基づいたアセスメント演習を行うためのペーパーペイシェント（統合失調症）教材を作成した。以前のものよりも基本情報に関する内容を整理しやすいように、各項目のアセスメントができるように工夫した
3 教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1）学生への実習指導 精神看護実習における実習指導 2）兵庫県看護協会 園田学園女子大学「まちの保健室」への出務 3）看護師への教育・研修 日本精神科看護技術協会兵庫県支部新人研修「看護過程の展開」の講師 4）公開講座等の企画 兵庫県看護協会阪神南支部教育委員の委嘱 5）シンポジウムの開催 日本看護科学学会学術集会における交流集会開催 6）看護学生への実習指導 精神看護学実習での実習指導 7）看護学生への実習指導 統合看護実習における実習指導 8）公開講座の企画・開催 「心の健康について「ストレス対処方法」」 9）第 2 回臨床精神看護学研究会の企画・開催	平成 20 年 9 月 ～平成 27 年 2 月 平成 20 年度 ～平成 26 年度 平成 22 年 11 月 平成 24 年度 ～平成 25 年度 平成 25 年 12 月 平成 27 年 5 月 ～平成 28 年 12 月 平成 28 年 6 月 ～平成 29 年 7 月 平成 28 年度 10 月 平成 29 年 5 月	園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科 3 年次配当科目必修 2 単位の学生指導を実施した。病棟実習とともに、社会福祉施設への実習も含み、地域での支援のあり方に関しても考えさせた。 拠点型まちの保健室、園田学園女子大学（園田キャンパス）とイベント型まちの保健室への出務を年に 5 回程度実施した。 精神科に勤務する看護師 30 名を対象として、看護過程の展開を実施した。オレム・アンダーウッド理論を用いてペーパーペイシェントを実施した。 看護協会支部の教育委員として、研修会の企画運営を実施した 「精神科におけるプラセボ与薬の使用法の検討」に関する交流集会を開催した。研究概要、研究結果に関して、説明後に会場より、実施状況やプラセボに関する意見をあつた。なんらかの社会的合意は必要 関西国際大学保健医療学部看護学科 3 年次配当科目必須 2 単位 5 名から 6 名のグループを 6 クール担当した。患者 1 名を受け持ち、看護実践の指導を実施した。 関西国際大学保健医療学部看護学科 3 年次配当科目必須 4 単位 5 名の学生を担当した。学生が主体的に計画立案をし、看護実践を行えるように、指導・助言を行った。 関西国際大学看護学科主催として、一般市民を対象とした公開講座の企画運営を行った。講師選定および広報活動を行い、100 人ほどの市民が参加した。内容もストレス対処という身近なもので好評を得た。 第 2 回臨床精神看護学研究会の開催に対して、執行委員として司会、進行などの役割を果たした

10) 看護学科 FD の企画・開催 第2回「実習指導にあたる教員のためのFD企画について：多様化する実習に対応するために」 11) 看護学科 FD の企画・開催 第3回「コーチング・ティーチング技術を活用した効果的な実習指導のあり方」	平成 29 年 10 月 平成 29 年 12 月	関西国際大学看護学科教員 25 名を対象とした FD を開催した。「実習指導にあたる教員のためのFD企画について：多様化する実習に対応するために」という題名で、日頃の実習指導での困難さ、課題の共有を図った。また、FD 事例から 1 つを選択し、それを今後自分たちが実施したい FD 企画を企画してもらった。日頃、一緒に話をすることがない教員同士がお互いの困難さを共有し、また、実習に向けての課題を明確にできた。 関西国際大学看護学科教員 30 名を対象とした FD を開催した。第2回FDでのテーマから出された課題を取り入れて、FD 企画・運営を実施した。講師を依頼し、「ティーチング・コーチングについて」説明をしてもらい、提示された事例についてコーチング・ティーチングを使用して実習指導を考えた。具体的にどのように支援するのかを考えることが
5 その他 「教育実績」 1) 大学院 修士論文審査（副査） 2) 大学院 修士課程「精神看護学特論」での講義 3) 大学院 修士課程「精神看護学演習」での講義 4) 大学院 CNS 養成課程・修士課程での「精神看護学特論Ⅰ～Ⅳ」講義 5) 大学院 CNS 養成課程・修士課程での「精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ」での講義	平成 29 年 2 月 平成 29 年 4 月～7 月 平成 29 年度 4 月～11 月 平成 30 年度 平成 30 年度	関西国際大学修士論文審査にて副査を担当した。審査では、看護学実習における学生の状況に関するもので、研究方法及び結果及び課題について確認をした。 関西国際大学修士課程において、1 年次配当科目での学生 1 名の授業を担当した。内容は、精神保健福祉の歴史・施策の歴史的な動向や精神障害者への処遇、精神看護における倫理的問題や障害者の人権擁護などの現在の精神医療の課題や今後の展望について、精神力動理論・人間発達論・ストレス対処、精神科看護理論（オレム・アンダーウッド、ストレングスモデルなど）、災害や犯罪などの心的外傷とケアなどを、学生が事前に文献をクリティークし、プレゼンテーションを行った。学生自身が興味ある内容も入れて、ディスカッションを行いながら、教 関西国際大学修士課程において、精神看護領域受講学生 1 名に対して、精神看護学に必要な研究方法について学んだ。主に参加観察方法、インタビュー方法、質問紙調査方法などのデータ収集方法や質的分析方法などを中心に、学生のプレゼンテーションやディスカッションを行った。また、学生自らが日頃感じている看護課題に関して、文献を検索、クリティーク、ディスカッションを行い看護研究について理解を深めた。 奈良学園大学 CNS 養成課程・修士課程での講義を担当し、学生 2～3 名に対して授業を担当した。歴史・法制度、精神・身体状態の評価、治療技術、精神看護理論・援助技術などの内容をゼミ形式にて授業を実施した。また、文献を取り入れて、クリティークやディスカッションを行い理解を深めた。 奈良学園大学 CNS 養成課程・修士課程での講義を担当した。援助技法やコミュニケーション演習などのロールプレイや実際のアセスメントツールの利用を実施したことに対して、スーパーバイズを行なった。また主に精神科訪問看護での場面を想定して、計画を立案してもらい、それに関するスーパーバイズを行なった。

6)) 園田学園女子大学人間看護学科1年次 「こころのケア論」での講義	平成20年度 ～平成26年度	園田学園女子大学1年次配当科目「こころのケア論」において、毎年1年生90名前後程度の学生を対象に講義を実施した。講義では、実際に日頃取り入れられそうなこころの健康を保つ方法を実施した。呼吸法、自律訓練法、アロマセラピーなどの理論から実施までをオムニバス形式で講義した。
7) 園田学園女子大学人間看護学科での「成熟連携支援実習（精神）」での実習指導	平成20年度 ～平成22年度	3年次配当科目「成熟連携支援実習（精神）」において、3年生72名を対象に精神科デイナイトケア、訪問看護での実習指導を実践中。地域リハビリテーション活動に参加する人々との交流を通して、対象者の現状と課題を理解できるように助言、指導を行った。また、カンファレンスを通じて、地域連携支援における看護師の役割について、地域で暮らす当事者の視点をふまえ、考えていけるように助言、指導を行った。
8) 園田学園女子短期大学部幼児教育科2年生次配当科目「精神保健」での講義担当	平成20年度 ～平成21年度	短期大学部幼児教育科2年生次配当科目「精神保健」で学生120名2クラスに対して講義を担当した。保育士として必要と思われる子どもの精神保健について、発達理論、母親と子どもの関係、子どもの精神的問題、発達障害などについて、講義を実施した。理解が進むように、パワーポイント、ビデオ等の視聴覚機材を積極的に利用した。また、授業後に学生から授業の感想を書いてもらい自身の授業の評価とし、次回授業に生かすように努めた。
9) 園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科での3年次「成熟看護学実習（精神）」での実習指導	平成20年4月 ～平成25年9月	3年次配当科目「成熟看護学実習（精神）」において、3年生70名から90名程度の学生を対象に、1グループ約15名～20名で5カ所の精神科病院での実習指導を実践した。単科の精神科病院において、学生は精神保健上の問題を持つ患者を1名受け持ち、対象者および自己への理解を深めるように、プロセスレコード、実習記録やカンファレンス等で指導を実施した。また、オレム-アンダーウッド理論を用い患者の生活面に着目させ、アセスメントをすすめていけるように、個人指導を実施し、患者理解を図っている。また、グループで集団に対して、何らかの援助ができるように計画書作成し実施できるように指導を実践している。また、平成23年度からは地域の社会福祉施設である作業所、デイケアなどを実習先に加え、病院での生活だけでなく、地域での実際の生活を見てもらう機会を作った。それによって、地域で利用者がどのような思いで生活を送っているのかの一端を理解してもらうようにした。
10) 園田学園女子大学人間看護学科での2年次「まちの保健室実習」での実習指導を担当	平成20年4月 ～平成26年7月	2年次配当科目「まちの保健室実習」2年生6名から7名を担当、大学拠点のまちの保健室にて実習指導を実践した。まちの保健室に入室する人々や地域で暮らす比較的健康レベルの高い人々の健康や生活状況が理解できるように、学生の気づきを大切に関わった。また、2年生であるため、言葉づかいや礼節に関する基本的技術も事前に演習を実施し、実習に望めるように指導を行った。また、実際に健康教育を計画、実施、評価する中で健康づくりが推進できるように、教育、指導を実践した。

11) 園田学園女子大学人間看護学科での3年次「成熟看護学援助論（精神）」での講義を担当	平成20年4月～平成26年7月	3年次配当科目「成熟看護学援助論（精神）」において3年生72名を対象に、講義を実施した。主に、精神科で扱う疾患の看護の講義を実施した。主に、精神科で扱う疾患の看護の講義を実施した。場面がわかりやすいように、資料、ビデオ等を利用し授業をすすめた。また、ペーパーペイシメント資料を作成し、グループ毎にアセスメントがすすむようにグループワークで助言、指導を行ない、グループ発表をサポートした。事前に授業資料を作成し、講義が円滑にすすめられるように配慮し、パワーポイントなど視聴覚教材を活用しながら講義を実施した。実際の看護場面の紹介や課題提示しながら、学生自身が疾患や看護をイメージし、学んでいけるようにグループ討議などを実施した。また、授業後は、学生から授業の感想を書いてもらい自身の授業の評価とし、次回授業に生かすように努めた。
12) 園田学園女子大学人間看護学科での「経験値統合実習」での実習指導	平成21年4月～平成26年9月	4年次配当科目であり、卒業研究をもとに研究計画書に基づいて、実習施設と調整し、経験値統合研究の内容を含んだ実習を実施している。学生が希望する看護が実践できるように事前に病棟と打ち合わせし、患者選定を行い、計画書に基づいて看護ケアを実施できるようにした。また、4年生の就職前でもあるので、学生が主体的に実践できるように学生主体の実習を行っている。
13) 園田学園女子大学人間看護学科での「成熟看護学対象論（精神）」「精神看護学対象論」での講義	平成22年4月～平成26年5月	2年生配当科目において80名程度の学生に対して、精神看護学の概論について7コマ中3コマの講義を実施した。講義内容としては、精神的な健康と障害、心のしくみや人格の発達である。内容が抽象的であるので、資料を作成したり、パワーポイント等を活用しながら工夫した。
13) 園田学園女子大学人間看護学科での「ステップアップ基礎実習」での実習指導	平成22年7月～平成25年12月	2年生配当科目「ステップアップ基礎実習」において、1グループ4名から5名の学生を受持ち、2週間の病院実習指導を実施した。この実習では看護過程を踏まえて、日常生活の維持、健康上の問題解決に向けた看護援助を考え、実践できるように支援した。日々、カンファレンスにて、自分の看護を振り返り、次の実践に生かせるように指導した。また、このあたりより自身の進路に関しても、悩むことがあるので、よく学生の思いを聞き、学生自身が考えていけるように助言を行った。
14) 科学研究費補助金（基盤研究C）研究経費総額507万円「精神科医療におけるプラシーボ使用の実態と適切な使用手続きの検討」研究代表者：西本美和、研究分担者：大西香代子、小松明、田中美穂、木村聡子（平成23年度担当）	平成23年度～平成25年度	精神科におけるプラシーボ使用実態について精神科看護師および精神科医師を対象とした質問紙調査を行なった。多くの精神科プラシーボ使用に関して、肯定的な態度が見られ、倫理的な、批判的な意見は少なかった。その背景には日本の多剤併用である薬物治療の影響が考えられた。責任者として、全般を担った。
15) 共同研究 研究費総額70万円「終末期における意思決定の実態と看護師の支援モデルの確立」研究代表者：大西香代子	平成25年度～平成26年度	終末期患者についての家族の意思決定の実態と意思について明らかにすることを目的とし、家族の一員をなくした家族に対してインタビュー調査を行った。終末期の意思決定にはほとんどのケースで治療方針についての説明はされ、同意は得られているが、ほかの選択肢や治療をしないとどうなるかといった説明までされているケースはほとんどなかった。しかし、延命についてはほぼ全例で家族の意思決定を求められていた。看護師はほとんどのケースであまり役割を果たしていない現状がみられた。調査研究のデータ収集とその分析に携わった。

16) 関西国際大学学位保健医療学部看護学科での「精神看護学実習」での実習指導	平成 27 年 6 月	3 年生配当科目「精神看護学実習」において 6 グループ (1 グループ 5 名から 6 名) の学生を受け持ち、病院実習を 2 週間実施した。この実習では、精神障害を持つ患者を 1 名受け持ち、看護計画を立案し、看護過程の展開を実施する。また、地域移行への視点を持っていけるように、社会福祉施設などの見学も実施している。学生は日々の記録、プロセスレコードなどから自己の振り返りを実施し、看護に反映できるようにするとともに、カンファレンスで疑問点などを解決できるようにしている。また、集団に対するレクリエーションなどの計画立案をし、集団への何らかの支援を実施している
17) 関西国際大学保健医療学部看護学科での「精神看護学援助論」での講義	平成 27 年 11 月～平成 30 年 1 月	2 年生配当科目「精神看護学援助論」において、94 名の学生に対し、演習科目 2 単位 30 コマの授業を実施した。授業内容としては、主に実際の看護支援に関する講義と、看護過程のペーパーペイシェント、プロセスレコードの記入、コミュニケーションなどのグループワークなどを取り入れた。学生に興味を持ってもらえるように、楽しみの要素も入れながら演習を実施した。
18) 関西国際大学保健医療学部看護学科での「卒業研究」での論文指導	平成 27 年 11 月～平成 29 年 11 月	4 年次配当科目「卒業論文」において、毎年 4 名～5 名の学生を担当し、指導を行った。統合看護実習で持ったケーススタディを行う学生が多いが、中には、学生インタビューによる質的帰納的分析による研究もある。学生は自分でテーマを設定し、研究計画書を作成し、倫理的配慮を行いながら、自主的にまとめ、ゼミ形式で発表し、他学生の意見も取り入れながら、卒業論文に反映させている。
事項	年月日	概 要
1 資格、免許		
1) 看護師免許	昭和 59 年 5 月	看護師免許取得 (第 491874 号)
2) 認定心理士 (財団法人日本心理学会)	平成 11 年 6 月	財団法人日本心理学会認定心理士取得 (登録番号第 3382 号)
3) 臨床心理士	平成 19 年 4 月	財団法人日本臨床心理士資格認定協会 臨床心理士取得 (登録番号 17086)
4) The Joanna Briggs Institute Comprehensive Systematic Review 資格者ライセンス取得	平成 29 年 12 月	Certificate 授与
5) 公認心理師免許	平成 31 年	公認心理師免許取得
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 なし		
4 その他 「学内業務」		

1) 園田学園女子大学人間看護学科 3 年次配当科目 「成熟看護学実習（精神）」、「成熟連携支援 実習（精神）」の実習要綱および記録作成	平成 20 年 4 月 ～平成 26 年 7 月	3 年次配当科目「成熟看護学実習（精神）」、「成 熟連携支援実習（精神）」での実習要綱および実習 記録を作成した。学生自身が実習を振り返り、自己 を理解し、また、対象を理解できることを目標とし、 実習要綱、記録用紙を作成した。また、オレム・ア ンダーウッド理論を用いアセスメントが書きやす いように用紙を工夫した。H24 年からは、問題点だ けではなく、患者の健康的側面にも眼が向けられる ように記録用紙を変更した。毎年、学生の声や学生 の学習状況をふまえ、縦から横へ変更したり、個人 情報保護を踏まえ、個人が特定されないように、患 者情報の用紙を変更した。
2) 園田学園女子大学人間看護学科実習要綱係担当 として「人間看護学科実習要綱」の改訂	平成 25 年 10 月 ～平成 26 年 2 月	人間看護学科で使用する共通の実習要綱の改訂を 行った。各領域、カリキュラム委員会での検討をう けて、実習要綱係と実習充実委員長でさらに話し合 いを持ち内容を決定した。内容としては、身だしな み、感染予防、賠償保険への加入や妊娠など実習実 施が困難である学生に関することなど教員の指導 が統一できるようにより細かな内容を盛り込んだ。
3) 関西国際大学保健医療学部看護学科 2 年次配当科目精神 看護学実習での「精神看護学実習実習要項」	平成 27 年 5 月 ～平成 29 年 3 月	3 年次配当科目「精神看護学実習要項」を作成した。 実習における学習目標及び目的、実習概要、注意事 項について記載した。記録に関しては、オレム・ア ンダーウッド理論を基に作成し、セルフケアを中心に 情報収集できるようにした。また、毎年、改正した ほうがよいところを少しづつ修正をし、現在に至っ ている。
4) 関西国際大学保健医療学部看護学科 4 年配当科目統合看 護実習での「統合看護実習（概要）」を作成	平成 29 年 3 月	4 年次配当科目「統合看護実習（概要）」を作成し た。実習の実習目的・目標などを検討した。また、 各領域の統合実習に関する概要を一覧にし、学生に わかりやすく、利用しやすい内容にした。
5) 関西国際大学 教育改革委員として「卒業研究ルーブリ ック」を作成	平成 29 年 9 月	看護学科の卒業研究ルーブリックを学内の他学科 と同様に評価をおこなえるように、他学科と看護学 科の視点を合わせて、ルーブリックを作成した
6) 関西国際大学 看護学科 学科長補佐	平成 29 年度	学科長補佐として、学内運営が滞りなく運ぶよう に、学科長と相談の上業務を遂行した。主に、事務 作業での学科長補佐や学内での学科長運営の FD な どの業務を実施した。
7) 関西国際大学院 看護学研究科大学院教務担当	平成 29 年度	関西国際大学看護学研究科においての教務業務を 担当し、学生や教員の希望を聞きながら時間割を作 成した。また、少人数の科目に関しては、隔年開講 とするなど改定を行った。そして、変更箇所を履修 要項へ改定した。また、非常勤講師への依頼や常勤 講師などの希望を聞きながら運営を行った。

研 究 業 績 等 に 関 する 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1				
2				
3				
:				
(学術論文)				

1 近畿圏内における精神科訪問看護師の看護支援（第2報）（査読付）	共著	平成21年11月	甲南女子大学研究紀要看護学・リハビリテーション学編(3), 79-85 頁	近畿圏内の精神科病院母体の訪問看護ステーション46施設と一般科の訪問看護ステーション360施設の精神科訪問看護師を対象に信頼関係づくりに対する質問紙を郵送し、有効回答は117であった。質問紙の内容は信頼づくり、家族との関係づくり、他機関との連携に関するものであった。信頼関係づくり41項目を因子分析した結果、信頼関係づくりにおけるかかわりの技法として「受容的な対応」「ほめる・喜ぶ」「自主性の尊重」など10因子を抽出した。家族との関係づくりでは全体としてキーパーソンを把握した、家族関係を把握したが高い値を示し、他職種との連携では一般科訪問ステーションのほうが幅広く連携をしている健康が現れた。 川口優子，西本美和，三木智津子 担当箇所：主にインタビュー、データ分析を担当した。 共同研究につき本人担当部分抽出不可能
2 精神科におけるプラシーボ使用実態について（査読付）	共著	平成26年10月	日本病院・地域精神医学会 2014, 巻57, 号1	精神科病院看護師に対してプラシーボの使用実態、意識について調査し、報告した。全国の精神科病院のうちランダムに抽出し、了承を得た29施設の看護師1529名中、948名から回答があった。（回収率62%）プラシーボの経験のある人は94%であった。また、主に「不眠」、「不定愁訴」などに使用していた。看護師は包括的指示で看護師がその場に合わせて判断し、使用していた。また、多くの看護師はプラシーボに対して肯定的にとらえていた。p57～59 共著者：西本美和，大西香代子，小松明，田中美穂 担当箇所：責任者として全般を担当し、全般の執筆を行なった。

3 人生の最終段階における医療 についての家族の意思決定の実 態と思い	共著	平成 29 年 2 月	日本健康医学会雑誌 第 25 巻 第 4 号 p282-291	人生の最終段階における医療につ いての意思決定の実態及びそれに関 する思いを明らかにするとともに、看 取りに関して抱いている家族の思い を明らかにすることを目的とした。 研究方法：家族の一員を 0.5－3 年以 内に亡くし、その人生の最終段階に おける医療についての意思決定に関 わった 11 人（亡くした家族は 13 ケ ース）を対象に行った個別面接を質 的に分析した。 結果及び考察：いずれのケースも病 状及び治療についての説明は、本人 や家族に行われていたが、多くは治 療法についての説明に終始してお り、よくわからないまま同意した家 族も多かった。予後については、明 確に説明されたケースから、かなり 遅くなるまで話されなかったケース まであった。 延命治療については、ほとんどのケ ースで家族に選択の機会が与えら れ、意向が確認されていたが、主治 医と家族との話し合いで決定されて いるケースがほとんどであった。ま た、患者が意思決定できる状態であ ったにも関わらず、患者本人の希望 を訊かず、家族に意思決定が求めら れたケースもあった。 共著者：大西香代子 大島弓子 西 本美和 窪田好恵 担当箇所：主に研究計画、調査票の 作成、調査実施、集計、分析につい て積極的に関わった。 共同研究につき本人担当部分抽出不 可能
--	-----------	------------------------	--	--

4 精神科医師の考えるプラシーボ使用について	共著	平成 29 年 11 月	第 2 回臨床精神科看護研究会誌 p57 - 59	第 2 回臨床精神科看護研究会で発表した内容をまとめた。研究では全国の精神科医師に対して、臨床におけるプラシーボ使用の実態調査を実施した調査用紙の自由記載欄に書かれていたプラシーボに対する意見を質的研究で分析し、精神科医師がプラシーボ使用について、どのような考えを持っているのかを知ることが目的とした。研究方法は質的帰納的調査方法とした。結果はプラシーボの使用現状について、認知症、高齢者、依存症の患者に対してはやむを得ず使用しているや患者の要望が強い場合や副作用の強い場合に使用しているなどがみられた。また、プラシーボに対する態度としては大きく 3 つに分かれた。プラシーボ賛成派は「上手に使うと効果が高い」と効果があると感じている。次にやむを得ず使用する派は「使わないほうが良いと思うが執拗な訴えや実際には必要な患者もいる」という意見がみられた。最後に、否定派は「薬物療法がすべてではない」「すべての訴えに対し、薬で対処するのではない」などの意見がみられた。考察として、これら意見の背景には精神科医療の抱えている「多剤大量併用療法」の影響がみられている。 共著者：西本美和、大西香代子、田中美穂 担当部分：研究責任者として、すべての計画立案、実施、分析に関わり、全面的に執筆し、共同研究者の意見を得た。
(その他) 『学会発表』 1 Actual conditions placebo use by psychiatric nurses in Japan」(日本における精神科看護師のプラシーボの使用実態について)		平成 25 年 9 月	19th International Network of mental Health Nursing Research, 開催地：University of Warwick (UK)	この研究の目的は日本の精神科看護師によるプラシーボの使用実態について調査することである。およそ 94% の看護師が過去にプラシーボを使用したことがあったが、27% の看護師は、1 年以上プラシーボの使用経験がなかった。日本の精神科医療においては、多剤併用による薬物への依存や副作用を防ぐために、プラシーボを使用している。患者の倫理面に関する意見が少ないことが懸念される。 共著者：西本美和、大西香代子、田中美穂、小松明 担当部分：研究責任者として、すべての計画立案、実施、分析に関わり、全面的に執筆し、共同研究者の意見を得た。

2 「精神科部における看護師のプラシーボ使用実態について」	-	平成 25 年 10 月 12, 13 日	第 56 回日本病院・地域精神医学会, 開催地：かでの 2・7 (北海道立道民活動センター)	日本の精神科におけるプラシーボ使用実態について知ることを目的に量的研究を実施した。その結果、プラシーボ使用は 948 名中「実薬よりもプラシーボを試す価値がある」557 名 (58.8%), 「患者によっては、依存性をたけめるために実薬よりもプラシーボを使用する方がよい。」428 名 (45.1%) など肯定的意見が多く「業務のためとはいえ抵抗がある」136 名 (14.3%) などの抵抗を示す意見は少なく、倫理的問題に関しては関心が薄かった。P49 共著者：西本美和、大西香代子、田中美穂、小松明 研究責任者として、研究の計画、データ収集、分析、執筆を中心となって行なった。
3 「精神科におけるプラセボ与薬の使用方法の検討」	-	平成 25 年 11 月	第 33 回日本看護科学学会学術集会, 開催地：大阪国際会議場	本交流集会では初めに、プラセボ治療の孕む問題点とともに、これらの調査結果を示して一般科でのプラセボ治療の状況を報告する。プラセボは患者に説明すると効果は期待できなくなるため、インフォームド・コンセントを得ることは難しく、患者の知る権利を侵すなど倫理的な問題が生じる。一般科でのプラセボ使用とは異なり、精神科ではプラセボは薬物依存や過剰な薬物投与による副作用の防止など、患者もメリットを得られる。精神科でのプラセボ使用は許されるか、許されるとしたらどのような状況かについて、調査結果を提示し参加者と一緒に意見交換をした。 西本美和、大西香代子、田中美穂、小松明 研究責任者として、研究の計画、データ収集、分析、執筆を中心となって行なった。

4「終末期患者についての家族の意思決定の課題」	-	平成26年11月	第34回日本看護科学学会学術集会, 開催地:名古屋国際会議場	終末期において、家族の意思決定の実態及び意思決定する家族の思いを把握することを目的に、病院に対し不信感の強い家族1例を紹介した。研究方法は同居の母親を亡くした60歳代の女性A氏に面接を行い、受容から看取りまで行った意思決定について質的機能的に内容の分析を行った。意思決定での実態では受診時にA氏が同意しないまま母親に侵襲的な検査が行われ、「医療者への否定的感情」申し訳なさなどの「亡き母への思い」その中でもA氏の支えとなった人々への「揺れる思い」の3カテゴリーが抽出された。意思決定への前提として、家族が納得できる説明が必要であるが本ケースではそれが不十分で最期の心肺蘇生以外、家族が意思決定を行う機会を与えられていない。このことが、愛する母を失ったことへの怒りと相まって、医療者への不信感を高めたと考えられる 共著者：大西香代子，大島弓子，西本美和，窪田好恵 担当部分：主に研究計画、調査票の作成、調査実施、集計、分析について積極的に関わった。 共同研究につき本人担当部分抽出不可能
5「精神科医師の考えるプラシーボ使用について」	-	平成29年5月	第2回臨床精神科研究会, 開催地:有馬高原病院	精神科医療において、プラシーボは患者の知る権利や治療同意を尊重すべきという「自律の尊重」に反するが、「仁恵」や「無危害」の原則に合致するという倫理的ジレンマが生じることとなる。このように、倫理的ジレンマが生じる背景がプラシーボには存在する。そのようなプラシーボに対して、精神科医師はどのような考えを持っているのか、精神科医師へのプラシーボ使用に関するアンケートのコメント欄に多くの意見をいただいたので、紹介した。 共著者：西本美和、大西香代子、田中美穂

教 育 研 究 業 績 書

平成31年3月31日

氏名 松浦 純平

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
成人看護学		急性期看護、周手術期看護、術後せん妄、テキストマイニング	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項			
事項	年月日	概 要	
1 教育方法の実践例 1) ストーマ造設術を受ける患者の看護」講義・演習に模擬ストーマを装着させて患者体験を実施した。	平成21年5月 ～ 平成25年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」、近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」のストーマ造設術を受ける患者の看護の講義を担当した。講義後の学生アンケートでは、ストーマの写真の初めて見て非常に勉強になった。講義内容が分かりやすく良かったなどの感想が書かれていた。講義後の演習にて、学生へ模擬ストーマを装着させて半日過ごすことでストーマ造設患者の体験をさせた。演習後の評価として、ほぼ全員の学生からストーマ造設患者の心理状況がよく理解できたとの感想が聞かれた。	
2) 卒業研究にて1名の学生の卒業研究を指導した。	平成23年4月 ～ 平成24年2月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて4年生1名の卒業研究を指導した。研究テーマは「臨床看護師が考えるレジリエンスについて」であった。	
3) 卒業研究にて4名の学生の卒業研究を指導した。	平成25年4月 ～ 平成26年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて4年生4名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後せん妄に関する文献検討」、「術後の足浴実施のリラクゼーション効果について」、「術後せん妄発症の要因と対策に関する文献検討」、「乳がん患者の手術を受ける意思決定に関する文献検討」であった。	
4) 講義内容の知識の定着を確認する目的にて、担当講義中に講義内容に合った看護師国家試験の過去問題を提示し解答させた。解答後、解説をした。	平成25年5月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の毎講義の残り5～10分間で、講義内容に見合った過去に看護師国家試験に出題された問題を提示し、解答させた。解答後、解説を行った。学生からは、講義の内容をふまえて実際の国家試験問題を解答することができて良かったとの感想が聞かれた。	
5) 看護過程の展開を学習するために成人期の術後患者の事例を作成してグループ演習を行った。	平成25年5月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、胃がん患者と大腸がん患者の事例を作成して、グループワークにて紙上での看護過程の展開を行った。学生からは実習に向けて看護過程が良く理解できたとの感想が多く聞かれた。	

事項	年月日	概 要
6) 生体シミュレーターモデル「シムマン」を使用して異常呼吸音および異常心音の聴取の演習を行った。	平成25年6月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、生体シミュレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。
7) 心肺蘇生法練習用人形モデルとAEDを使用して一次救命処置（BLS）の実際の演習を行った。	平成25年6月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の救命処置の講義後の翌週に心肺蘇生法練習用人形とAEDを使用して一次救命処置を実際に行う演習を行った。学生からは救命処置の実際を経験できて学びが深まったとの感想が聞かれた。
8) 術前呼吸訓練として「トリフロー」と「トライボール」を使用して体験する演習を行った。	平成25年10月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の中の術前呼吸訓練の講義後の演習として、トリフローとトライボールの2種類の器具を使用して演習を行った。学生からは術前呼吸訓練の実際を経験することができて勉強になったとの感想が聞かれた。
9) 周手術期の講義中に、イメージがつきやすいように挿管時に使用する気管チューブ、喉頭鏡などの器具を実際に手に取り見せて説明した。	平成25年10月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の周手術期の講義の中で挿管時に使用する気管チューブ、スタイレット、喉頭鏡の実物を手に取り見せて説明した。学生からは実物を見ることができて挿管時のイメージが理解できたとの感想が聞かれた。
10) 卒業研究にて6名の学生の卒業研究を指導した。	平成26年4月 ～ 平成27年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて4年生6名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後せん妄予防のための音楽療法の効果について」、「せん妄の発症と予防に関する文献検討」、「術後患者に対する音楽療法の効果について」、「足浴実施によるリラクゼーション効果の検証」、「術後せん妄発症の要因に関する文献検討過去5年間の文献より」、「乳がん患者の治療方法決定に関する自己決定に関する文献検討」であった。
11) 卒業研究にて3名の学生の卒業研究を指導した。	平成27年4月 ～ 平成28年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて4年生3名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後の音楽療法の効果に関する文献検討」、「看護師の考える感情労働に関する現状と課題」、「看護系大学生の考える性教育に関する現状と課題」であった。
12) 生体シミュレーターモデル「フィジコ」を使用して異常呼吸音および異常心音の聴取の演習を行った。	平成28年6月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「ヘルスアセスメント」の講義後の演習にて生体シミュレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。

事項	年月日	概 要
13) 術前呼吸訓練の講義後にインセンティブスパイロメトリーを使用した術前呼吸訓練の演習を実施した。	平成28年12月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の術前呼吸訓練の講義後にインセンティブスパイロメトリーを演習にて実際に使用して術前呼吸訓練を実施した。学生からは実際に実施したことで難しさがよく理解できたとの感想が数多く聞かれた。
14) 一次救命処置の講義後に演習にて救命蘇生用トレーニング人形とAEDを使用して一次救命処置の練習を実施した。	平成28年12月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の一次救命処置の講義後に演習にて救命蘇生用トレーニング人形とAEDを使用して一次救命処置の練習を実施した。演習後、学生からは講義で学んだだけでは大変さが分からなかったが、実際に演習で実施することで胸骨圧迫の深さや難しさが理解できたとの声が多く聞かれた。
15) 術後離床の講義後に演習にて点滴チューブ、ドレーン、尿道留置カテーテル等を付けて術後離床時の看護援助の演習を実施した。	平成28年12月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の術後離床の講義後に演習にて点滴チューブ、ドレーン、尿道留置カテーテル等を付けて術後離床時の看護援助の演習を実施した。実施後、学生からは術後の患者の具体的な状況や心理が分かったやまた看護師がいかに安全・安楽に離床を進める必要があるか理解が深まったとの意見が多く聞かれた。
2 作成した教科書、教材 1) 成人看護学演習サブテキスト開発（ストーマサイトマーキング）	平成21年5月 ～ 平成25年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」、近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」の講義後の演習にてストーマサイトマーキングの部位が分かるような資料を作成した。演習後、学生からはストーマ造設時の位置決めが分かりやすかったとの意見が聞かれた。
2) 成人看護学知識確認資料	平成25年5月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の毎講義の残り5～10分間で、講義内容に見合った過去に看護師国家試験に出題された問題を提示し、解答させた。解答後、解説を行った。学生からは、講義の内容をふまえて実際の国家試験問題を解答することができて良かったとの感想が聞かれた。
3) 看護過程アセスメントサブマニュアル（ゴードンの枠組み）開発	平成25年5月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、胃がん患者と大腸がん患者の事例を作成して、グループワークにて紙上での看護過程の展開を行った。アセスメント実施時の分類のための資料を作成し活用した。学生からは実習に向けて看護過程が良く理解できたとの感想が多く聞かれた。

事項	年月日	概 要
4) 異常呼吸音および異常心音サブテキスト開発	平成25年6月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、生体シュミレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。
5) 一次救命処置（BLS）サブマニュアル資料開発	平成25年6月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の救命処置の講義後の翌週に心肺蘇生法練習用人形とAEDを使用して一次救命処置を実際に行う演習を行った。演習時に胸骨圧迫の部位、速さ、深さなどを書いた資料を見ながら演習に取り組んだ学生からは救命処置の実際を経験できて学びが深まったとの感想が聞かれた。
6) 術前呼吸訓練サブマニュアル開発	平成25年6月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の中の術前呼吸訓練の講義後の演習として、トリフローとトライボールの2種類の器具を使用して演習を行った。学生からは術前呼吸訓練の実際を経験することができて勉強になったとの感想が聞かれた。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
1) 近大姫路大学看護学部学生授業評価	平成27年2月	私が担当した「症状マネジメント論」「看護援助論Ⅱ」講義後の学生からの感想として、「とても理解しやすかった。国試に出やすいと先生が言う」と集中して覚えようとしします。」「分かりやすかったです。」などの感想が多く記載されていた。
2) 大学設置・学校法人審議会教員組織審査	平成28年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科専任講師「早期体験演習」「ヘルスアセスメント」「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」「成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期・回復期・終末期）」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」可と判定。
3) 大学設置・学校法人審議会教員組織審査	平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科准教授「早期体験演習」「ヘルスアセスメント」「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」「成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期・回復期・終末期）」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」可と判定。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 三重大学医学部附属病院にてプリセプターとして1年目の看護師の教育指導した。	平成19年 4月1日 ～ 平成20年 3月31日	三重大学医学部附属病院耳鼻咽喉頭頸部外科病棟にて、1年間1年目の新卒看護師の教育指導をした。1年間指導することで新人看護師と共に私自身の成長にもつながった。

事項	年月日	概 要
2) 三重大学医学部附属病院にて院内BLS（一次救命）講習を受けBLSインストラクターとして指導に関わった。	平成19年 4月1日 ～ 平成21年 3月31日	院内の一次救命処置の講習を受講し、BLSインストラクターとして他の看護師の指導に関わった。院内の急変時にも冷静に対応することができた。
3) 三重大学医学部附属病院にて院内看護研究の代表者として他3名の看護師と看護研究に取り組んだ。	平成20年 4月1日 ～ 平成21年 3月31日	院内看護研究として、喉頭がん患者の喉頭摘出手術を受ける意思決定の過程に関する研究に取り組み院内看護研究発表会で発表した。
4) 奈良県立医科大学医学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成21年9月 ～ 平成25年2月	奈良県立医科大学医学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
5) 国立病院機構敦賀医療センター主催「2012年度院内看護研究発表会」へ招聘	平成23年12月	院内看護研究発表会にて総評を述べた。
6) 2013年度福井大学医学部看護学科公開セミナー「質的研究と量的研究のコラボレーション」招聘講演	平成24年8月	福井大学医学部看護学科公開セミナーにて「質的研究と量的研究のコラボレーション」をテーマとしてテキストマイニング手法に関する講演を行った。
7) 第6回Project AKI全国集会「テキストマイニングの紹介」招聘講演	平成25年1月	Project AKI全国集会にて「テキストマイニングの紹介」に関する講演を行った。
8) 近大姫路大学看護学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成25年9月 ～ 平成28年2月	近大姫路大学看護学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
9) 奈良学園大学保健医療学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成28年9月 ～ 平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
5 その他		
1) 奈良県立医科大学医学部看護学科助教として講義担当	平成21年4月 ～ 平成25年3月	「ヘルスアセスメント」「フィジカルアセスメント」「看護援助論Ⅰ」「看護援助論Ⅱ」「成人看護学実習Ⅰ（急性期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期）」「看護研究特論」「看護研究」
2) 近大姫路大学看護学部看護学科専任講師として講義担当	平成25年4月 ～ 平成28年3月	「看護対象論Ⅰ」「症状マネジメント論」「看護援助論Ⅱ」「治療看護技術論」「看護展開実習Ⅰ（急性期）」「看護展開実習Ⅱ（慢性期）」「統合看護学実習」「看護課題ゼミ」「補完代替療法と看護」

事項	年月日	概 要
3) 奈良学園大学保健医療学部看護学科専任講師として講義担当	平成28年4月 ～ 平成29年3月	「ヘルスアセスメント」「成人看護学援助論Ⅰ」「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」
4) 奈良学園大学保健医療学部看護学科准教授として講義担当	平成29年4月 ～ 現在に至る	「基礎演習Ⅰ」「ヘルスアセスメント」「成人看護学援助論Ⅰ」「感染症看護論」「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」「卒業研究Ⅱ」「統合看護学実習」
5) 奈良学園大学大学院看護学研究科准教授として講義担当	平成30年4月 ～ 現在に至る	「看護研究特論」「病態生理学」「フィジカルアセスメント」「臨床薬理学」「在宅看護学特論Ⅰ（在宅看護学）」「在宅看護学特論Ⅱ（慢性期）」「在宅看護学特論演習」「特別研究」
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 1) 看護師国家資格	平成16年4月	(第1272430号)
2) 修士号（看護学） (四日市看護医療大学大学院第22号)	平成27年3月	四日市看護医療大学大学院看護学研究科看護学専攻修士課程を修了した。「修士論文題名：術後せん妄の発現を予測するスクリーニングツール開発のための基礎的研究」
3) BLS（一次救命処置）ヘルスケアプロバイダー免許（日本ACLS協会0392-5404-2329-2177）	平成30年6月	アメリカ心臓協会（AHA）主催のアメリカをはじめ世界各国で開催されている医療専門家・救命のプロフェッショナルのための世界最高水準の一次救命処置（BLS：Basic Life Support）教育訓練プログラムを修了。
3) ACLS（二次救命処置）プロバイダー免許（日本ACLS協会0392-5404-2329-2177）	平成30年8月	アメリカ心臓協会（AHA）主催のアメリカをはじめ世界各国で開催されている医療専門家・救命のプロフェッショナルのための世界最高水準の二次救命処置（ACLS：Advanced Cardiovascular Life Support）教育訓練プログラムを修了。
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 三重大学医学部附属病院にて感染予防リンクナースとして活動した。	平成16年 4月1日 ～ 平成20年	三重大学医学部附属病院耳鼻咽喉頭頸部外科病棟および第1外科病棟（肝胆膵外科）にて、感染予防リンクナースとして病棟内の感染予防対策に取り組んだ。
2) 三重大学医学部附属病	平成3月31日 ～ 平成21年12月	三重大学医学部附属病院主催の就職希望者向けの病院説明会にて、男性看護師としての院内での業務および活動を紹介した。参加者から分かりやすく是非三重大学医学部附属病院で働きたいとの声が聞かれた。

事項	年月日	概 要
4 その他		
1) 助成団体名：ダイワハウス工業株式会社病室環境研究助成	平成21年5月 ～ 平成22年3月	本研究は、がん患者サロンに関する認識と現在の利用状況を明らかにすることを目的として研究に取り組んだ。対象はA県がん患者会会員430名を対象とした。研究方法は、質問紙調査法とした。回収率は158名、有効回答数は148名であった。本研究結果からサロンのニーズは非常に高いこと、立地場所としては公共交通機関から近いことサロン利用者は臨床心理士の配置を希望していることが明らかになった。 研究代表者氏名：松浦純平 研究題目：がん患者が求める『患者サロン』活用への支援の検討患者サロンに関する認識と活用の実際
2) 助成団体名：日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究C）	平成22年5月 ～ 平成25年3月	本研究の目的は看護学生の話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系に与える影響を明らかにすることを目的とした。研究方法は3つの看護系大学の看護学生710名を対象とし有効回答372名を分析対象とした。看護学生のコミュニケーション技報はポジティブな内容は副交感神経に優位に働き、ネガティブな内容は交感神経に優位に働いていたことが明らかになった。 研究代表者氏名：上野栄一 研究題目：話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系に与える影響
3) 助成団体名：日本学術振興会科学研究費助成事業（若手研究B）	平成24年5月 ～ 平成27年3月	本研究の目的は術後せん妄アセスメントスケールを開発することである。本研究は、文献検討、面接調査、質問紙調査、質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した。全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした。相関分析、I-T相関分析、天井・床効果の検討、尖度と歪度の検証、因子分析を実施した。結果10因子40項目からなるアセスメントツールを開発した。 研究代表者：松浦純平 研究題目：我が国史上初の術後せん妄を早期発見するためのアセスメントスケールの開発
4) 助成団体名：大阪ガスグループ福祉財団	平成25年5月 ～ 平成26年3月	本研究は、手術後の高齢者に高確率で発症する術後せん妄の発症前駆症状に関して、臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントツール開発につなげるための基盤とすることである。研究方法は質問紙調査とし、対象は全国20病院に勤務する臨床看護経験年数5年以上を有し外科病棟での臨床経験3年以上の看護師300名を対象とした。回収数は71通、有効回答数は66通であった。記述統計分析の結果、行動、混乱、陰性症状、睡眠、妄想、排泄の6つのカテゴリーが抽出された。 研究代表者：松浦純平 研究題目：高齢患者の術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケールの信頼性に関する予備的検討
5) 近大姫路大学臨地実習委員会委員	平成25年 4月1日 ～ 平成26年 3月31日	臨地実習委員会メンバーとして、実習病院との日程および受け入れ可能人数等の調整、実習病院の新規開拓などに取り組んだ。

事項	年月日	概要
6) 近大姫路大学入試委員会委員	平成25年 4月1日 ～ 平成27年 3月31日	入試委員会メンバーとして、本学および地方会場（高知・豊岡・岡山・大阪）の入学試験の準備および試験監督として入試業務に携わった。またオープンキャンパスの企画、運営に取り組んだ。
7) 近大姫路大学地域貢献活動委員会委員	平成25年 4月1日 ～ 平成27年 3月31日	地域貢献活動員会メンバーとして、年2回大学周囲の清掃美化に取り組んだ。また9月にエイズ予防キャンペーンを学生と共に企画運営しJR姫路駅前にて開催した。
8) 近大姫路大学倫理審査委員会委員	平成25年 4月1日 ～ 平成26年 3月31日	研究倫理審査員会のメンバーとして、毎月1回開催された研究倫理審査に携わった。
9) 助成団体名：三重大学新研究プロジェクト	平成27年10月 ～ 平成28年10月	本研究の目的は、頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する因子は何かを明らかにすることである。マウスを使用した実験の結果、受傷早期にIgGを投与することにより嗅覚障害が改善される可能性が示唆された。 研究代表者：松浦純平 研究題目：頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する研究
10) 奈良学園大学倫理審査委員会委員	平成28年 4月1日 ～ 平成29年 3月31日	研究倫理審査員会のメンバーとして、毎月1回開催されている研究倫理審査に携わった。
11) 奈良学園大学学生生活委員会委員	平成28年 4月1日 ～ 平成29年 3月31日	生活委員会メンバーとして、毎月1回開催されている会議にて保護者会、3者面談等の計画、運営に携わった。
12) 奈良学園大学FD委員会委員	平成28年 4月1日 ～ 現在に至る	FD委員会メンバーとして、毎月1回開催されている会議に出席して、年2回開催のFD講演会の企画、運営等に携わっている。
13) 奈良学園大学スポーツ振興委員会委員	平成28年 4月1日 ～ 平成29年 3月31日	スポーツ振興委員会メンバーとして、毎月1回開催されている委員会会議に出席して、スポーツ振興活動に関する協議に携わった。
14) 奈良学園大学実習部会委員会委員	平成29年 4月1日 ～ 現在に至る	実習部会委員会メンバーとして、毎月1回開催されている委員会会議に出席して、実習に関する協議に携わっている。

事項	年月日	概要
15) 助成団体名：岡三加藤文化振興財団	平成28年 4月1日 ～ 平成31年 3月31日	本研究の目的は、頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する因子は何かを明らかにすることである。マウスを使用した実験の結果、受傷早期にIL-6を投与することにより嗅覚障害が改善される可能性が示唆された。 研究代表者：松浦純平 研究題目：外傷性嗅覚障害患者のQOL向上を目指した嗅神経の再生に関する基礎的研究
16) 奈良学園大学学内広報委員会委員	平成30年 4月1日～ 同年9月2日	学内広報委員会メンバーとして、オープンキャンパス、高校出前講義、大学案内パンフレット、シンポジウム等の企画、準備、運営に携わっている。
17) 奈良学園大学学内広報委員会副委員長	平成30年 9月3日～ 現在に至る	学内広報委員会副委員長として、オープンキャンパス、高校出前講義、大学案内パンフレット、シンポジウム等の企画、準備、運営に携わっている。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 身体拘束の適切な考え方と看護記録	共著	平成23年2月	株式会社日総研出版 (看護きろくと看護過程2・3月号)	ケアの根拠が見える記録を効率よく書けるようになることを目的とする。A4変型判 全104ページ 編者：岸田良平共著者：一ノ山隆司、松浦純平、舟崎起代子、上野栄一、滝内香里、山本美千代、高野悦子。本人担当部門：p52-61を単著。認知症高齢者に対する適切な身体拘束、倫理に即した看護記録の記載方法について事例を通して検討した。身体拘束は必要な医療と患者の安全のためにやむを得ず行動制限を行う場合がある。その場合は倫理的配慮を行い家族の理解と協力を得て必要最低限に留めチームとして治療計画を再検討する必要性を解説した。
2. 看護師が遭遇する倫理的ジレンマとは	共著	平成24年3月	株式会社日総研出版 (主任&中堅+こころサポート3・4月号)	管理・教育・業務の実践とスキルを強化することを目的とする。B5変型判 全120ページ編者：岸田良平、共著者：一ノ山隆司、舟崎起代子、松浦純平、上野栄一。本人担当部門：p48-52を単著。看護師が臨床で遭遇する倫理的ジレンマについて原因と対応について具体的な場面を想定して検討した。その結果、看護師が倫理問題に冷静に向き合う姿勢が大切であることを解説した。
3. 看護のための『教育学』	共著	平成27年10月	株式会社あいり出版 (看護・介護・福祉のための「教育学」第1巻)	患者教育指導において看護師に必要な視点を、心理学・教育学の成果を生かして主要な疾患についての概要と実際の事例を紹介した。B5判 全158ページ(看護・介護・福祉のための「教育学」第1巻) 編者：守本とも子、共著者：松田智子、虎杖真智子、鎌田首治朗、松浦純平、中尾友美、武富由美子、山口曜子、佐々木千恵、新谷奈苗、東中須恵子、岡本響子。本人担当部門：第4章「糖尿病」p43-58を単著。生活習慣病(糖尿病)患者の主に薬物療法と運動療法を中心とした健康維持・増進・回復に向けた援助方法について解説した。具体的には、服薬自己管理に向けたアドヒアランス獲得を目的とした教育原理・教育心理を踏まえた患者の服薬指導実践の展開事例と在宅での薬物療法を継続できるように援助および薬物治療時の低血糖出現時や有害事象出現時の対処方法について、教育理論を用いて具体的な事例を2例提示して図・表を入れて解説した。
4. 看護職・看護学生のための「痛みケア」	共著	平成29年3月	株式会社ピラールプレス	看護職と看護学生を対象に痛みについてのケアの概要と実際の事例を紹介した。B5判全175ページ 編著：守本とも子、共著者：池辺寧、沖本克子、梶村郁子、片山康子、小池恵理子、澤田京子、篠原百合子、新谷奈苗、高垣麻衣、立川茂樹、田中登美、棚橋千弥子、辻下守弘、西上智彦、前田吉樹、松浦純平、室津史子、守本とも子、横山美菜。本人担当部門：第15章「慢性疼痛のある患者の看護」p134-148を共著。
5. 2018年看護師国家試験対策要点がわかる出題傾向がみえる成人看護学 上	共著	平成29年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に成人看護学分野の要点編と過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントについて紹介した。B5判全139ページ 監修：守本とも子、編著：松浦純平、著：明神一浩。本人担当部門：p10-52, p104-127を単著。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. 2018年看護師国家試験対策 要点がわかる出題傾向がみえる成人看護学 下	共著	平成29年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に成人看護学分野の要点編と過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントについて紹介した。B5判全146ページ 監修:守本とも子, 編著:松浦純平, 著:大山末美, 梶村郁子, 田場真理. 本人担当部門: p10-146を単編著。
7. 2018年看護師国家試験対策 要点がわかる出題傾向がみえる精神看護学	共著	平成29年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に精神看護学分野の要点編と過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントについて紹介した。B5判全110ページ 監修:守本とも子, 編著:松浦純平, 明神一浩。
8. 出題基準平成30年版準拠 2019年出題傾向がみえる精神看護学	共著	平成30年5月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に精神看護学分野の要点編と解説付過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントについて紹介した。B5判全123ページ 監修:守本とも子, 編著:松浦純平, 明神一浩。
9. 出題基準平成30年版準拠 2019年出題傾向がみえる成人看護学 上	共著	平成30年7月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に成人看護学分野の要点編と解説付過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントについて紹介した。B5判全207ページ 監修:守本とも子, 編著:松浦純平, 著:明神一浩。
10. 出題基準平成30年版準拠 2019年出題傾向がみえる基礎看護学	共著	平成30年8月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に基礎看護学分野の要点編と解説付過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントについて紹介した。B5判全179ページ 監修:守本とも子, 編著:松浦純平, 著:北島洋子, 澤田京子, 瀬山由美子, 平野加代子, 中馬成子, 丸上輝剛。
11. 出題基準平成30年版準拠 2019年出題傾向がみえる成人看護学 下	共著	平成30年11月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に成人看護学分野の要点編と解説付過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントについて紹介した。B5判全189ページ 監修:守本とも子, 編著:松浦純平, 著:明神一浩。
12. 出題基準平成30年版準拠 2019年出題傾向がみえる必修問題	共著	平成30年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に必修問題の要点編と解説付過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントについて紹介した。B5判全189ページ 監修:守本とも子, 編著:松浦純平, 著:井上昌子, 斉藤英夫, 溝口みちる, 明神一浩。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1. わが国のせん妄に関する看護研究の動向と課題 一文献検討を通して— (査読付)	共著	平成22年4月	日本看護学会論文集看護管理第40号. p264-266. 2010.	本研究の目的は、我が国における看護分野でのせん妄に関する研究について、文献検討により研究の動向と課題を明らかにし、患者のケアへの示唆を得ることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と看護とした。その結果、178編の文献の中から31編の文献を抽出し分析対象とした。結果、研究の動向としては2004年を除き年間20編程度の研究がなされていた。研究デザイン別では量的研究が91編、質的研究は14編、事例研究は15編であった。研究対象者は患者であるものが105編であった。筆頭研究者は臨床看護師が94件、看護系大学教員は17編、両者の共同研究が9編であった。フィールド別では整形外科17編、外科病棟12編、ICU5編、CCU4編、一般外科4編であった。せん妄発症要因について研究されたのは31編であった。せん妄評価尺度は日本語版ニーチャム混乱・錯乱状態スケールが11編であった。本研究結果から予防に関する研究が少なかったため、今後はせん妄発症予防ケアの充実を図るための研究が期待されることが明らかになった。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：松浦純平，上平悦子。
2. 外科領域における術後せん妄発症予測要因 (査読付)	単著	平成23年11月	医学生物学155巻11号. P825-829. 2011.	経験豊富な看護師が直観的に感じる術後せん妄発症の前駆症状は何かを明らかにする目的で、2病院外科病棟に勤務する看護師20名へ半構成的面接を実施した。逐語録を分析し、カテゴリ化した。せん妄予測項目の名詞78個を分類した結果、【時間感覚】，【置かれた環境】，【対象者】，【認識】，【情意】，【対象物】，【表情】，【コミュニケーション】，【患者の反応】など12カテゴリが生成された。経験豊富な看護師は、表情、失見当識、看護師の説明に対する認識、反応等から術後せん妄発症予測し、前駆症状として捉えていた。これらの観察視点は、経験の浅い新人看護師が気付きにくい観察項目である。今後、この重要観察項目の共通理解を深めることで術後せん妄の早期発見・早期対応につながる事が示唆された。
3. がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題 (査読付)	共著	平成24年2月	日本地域連携精神看護学研究誌第3巻p82-88. 2012.	本研究の目的は、A県内のがん患者会会員が考えるサロンにおけるメンタルヘルスに関する認識および現状を明らかにすることである。研究対象はA県がん患者会会員400名。調査方法は、対象者に本研究の主旨と自記式無記名質問紙調査を同封し郵送した。調査項目は、基本的属性、サロンの認識、サロン立地条件、サロン利用者、サロンに必要なと考える医療従事者、サロンへの期待の6項目。分析方法は、PASW Statistics18.0を用いて単純集計を行った。結果、以下の3点が明らかとなった。1. 地域に暮らす患者にとってサロンのニーズ・期待度は、非常に高い。しかし、実際にサロンを利用している人は少ない。2. サロン設置場所として通いやすい立地条件であることを望んでいた。3. サロン内にメンタル面のフォローができる専門職の配置を望んでいた。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：松浦純平，上野栄一。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. テキストマイニングによる看護師の考える術後せん妄発症予測について ―経験豊富な看護師へのインタビューの分析― (査読付)	共著	平成24年3月	日本看護学会論文集成人 I 第42号p62-65. 2012.	研究の目的は外科病棟に勤務する看護師が考える術後せん妄発症予測につながる前駆症状を明らかにすることである。調査対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名である。研究方法は術後せん妄発症前の段階でアセスメントをどのような視点で実施しているかについて半構成的面接を実施した。分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析、コロケーション解析を実施した。データ解析ソフトは、WinCha, KWIC Finderを使用した。結果、せん妄発症アセスメント項目は「行動」「コミュニケーション」「行動対象」「表情」「睡眠」「訴え」など9カテゴリが生成された。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：松浦純平、喜田加奈子、福田弘子、上野栄一、水野正延。
5. 頭頸部外科領域における術後せん妄発症要因の検討 ―内容分析、セブン・クロス(7×7)法の分析より― (査読付)	共著	平成24年3月	富山大学看護学会学会誌 11巻1号p9-18. 2012.	本研究の目的は、頭頸部外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症要因は何かを明らかにすることである。対象は、A病院頭頸部外科病棟に勤務する看護師5名。術後せん妄発症要因について半構成的面接を実施、結果はKrippendorfffの内容分析手法およびセブン・クロス法にて分析した。内容分析の結果から【性格特性】、【理解力不足】、【長期安静】、【高齢】、【不眠】、【男性】、【独居】の7つのカテゴリが生成された。セブン・クロス法の結果から優先順位が高い順に【不眠】、【性格特性】、【高齢】、【長時間手術】、【術中出血量】、【眠剤の影響】、【術前不安】の7つのカテゴリが生成された。内容分析とセブン・クロス法の両方に含まれていたのは【高齢】、【不眠】、【個人特性】の3カテゴリであった。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：松浦純平、喜田加奈子、上野栄一。
6. 異なる血圧測定技術教育方法による技術習得状況の違い (査読付)	共著	平成25年3月		本研究は血圧測定の教育方法として、測定手技の手順を教授する方法と主に測定手技の根拠を教授する方法のどちらが血圧測定技術の習得状況により影響をもたらすのかを検討した。結果、測定手技の根拠を教授した方が患者役に対して測定に伴う苦痛を減少させることや正しく測定できることが明らかになった。 (調査実施、データ分析、考察の論文執筆を担当した。) 共著者：吉岡一実、一ノ山隆司、石井秀美、大川智恵子、菊地淳、有馬義貴、松浦純平、吉岡多美子。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 患者情報から看護問題を抽出する際の脳活動に関する研究-近赤外分光法による看護学生の前頭葉賦活状況について- (査読付)	共著	平成25年4月	医学と生物学157巻4号 p450-454. 2013.	本研究は、患者情報から看護問題を抽出する際の前頭葉の賦活状況を、学年のことなる看護学生計2名を対象に比較検討したものである。患者情報を5枚のスライドで提示したあとに、看護問題を抽出する課題を与えた。前頭葉の賦活状況は近赤外分光法を用いて測定し、22か所で酸素化ヘモグロビン濃度により評価した。測定終了後には、それぞれのスライド提示時にどのようなことを考えたのかを質問紙で調査した。その結果、前頭葉の賦活状況には被験者間で差がみられ、これが看護問題を抽出する際の思考の違いであると示唆された。 (データ分析、考察の論文執筆を担当した。) 共著者：吉岡一実、菊地淳，平野大輔，入江裕子，一ノ山隆司，石井秀美，大川智恵子， <u>松浦純平</u> ，有馬義貴，吉岡多美子。
8. 血圧測定時における前頭葉の賦活の様相—看護学生と看護師との比較検討— (査読付)	共著	平成25年5月	医学生物学157巻5号 p565-568. 2013.	本研究は血圧測定時における測定者の前頭葉の賦活状況を、近赤外分光法を用いて看護学生と看護師とで比較検討した。その結果、前頭葉の21部分で賦活状況を比較したところ、両手技とも手技前に比べて看護学生は看護師の2倍の部位で有意に酸素化ヘモグロビン濃度が上昇していた。このことは血圧測定技術の習得度と前頭葉の賦活状況が反比例していることを示しており、初学者は前頭葉をより賦活化させて測定していることが明らかになった。 (データ分析、考察の論文執筆を担当した。) 共著者：吉岡一実，菊地淳，平野大輔，入江裕子，一ノ山隆司， <u>松浦純平</u> ，有馬義貴，石井秀美，大川智恵子，吉岡多美子。
9. 看護師が実践している術後せん妄発症予防について—テキストマイニングを利用した分析— (査読付)	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1372-1376. 2013.	本研究は術後せん妄発症予防のために看護師が取り組んでいる看護実践を明らかにすることである。2施設の外科病棟に勤務する看護師20名を対象に半構成的面接調査を実施した。分析は形態素解析にて分析した。その結果，頻出名詞はせん妄，患者，説明などが多かった。説明に関するコロケーション解析の結果「見当識障害予防を意識した説明をすること」や「本人・家族へ術後はせん妄発症の可能性あることを説明する」などであった。「予防」に関する結果から「昼夜逆転予防を意識した早期離床の援助の実施。」などの文脈が抽出された。本研究結果から以下の4点が明らかになった。術前より患者本人へ術後の状況について説明を実施していた。術後はサーカディアンリズムを整えるために積極的な早期離床を行っていた。見当識障害予防のため日時を伝えるなどを実施していた。術後疼痛緩和の援助を実施していた。 (本研究の代表者として研究に取り組んだ。) 共著者： <u>松浦純平</u> ，一ノ山隆司，吉岡一実
10. 臨床看護師が実践している術後せん妄発症予防の取り組み (査読付)	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1377-1381. 2013.	本研究は、臨床看護師の術後せん妄発症予防に対する取り組みを明らかにすることである。テキストマイニング手法の共起関係ネットワーク分類の結果から、次の4点が明らかになった。1点目は、術後の生活リズムの再構築を意識した積極的な早期離床を実施していること。2点目は、体位変換に生じる身体的苦痛の除去に努めていること。3点目は、手術前には具体的な説明を実施していること。4点目は、環境整備の実施や術後疼痛の緩和に対する援助に取り組んでいることであった。 (データ分析、考察の論文執筆を担当した。) 共著者：一ノ山隆司， <u>松浦純平</u> ，吉岡一実

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11. 在宅で精神障がい者と生活する家族の負担に関する研究 (査読付)	共著	平成25年6月	医学と生物学157巻6号 p1382-1386. 2013.	本研究の目的は、在宅で精神障がい者と生活する家族の負担要因を明らかにし、今後の家族支援への示唆を得ることである。A県内の11の地域家族会に所属している精神障がい者と同居する家族236人の「日頃から気になること」への記述を分析データとした。データ分析は、内容分析の手法を参考に形態素解析、コロケーション解析を行った。結果、【病気に関する不安】、【家族自身の体調の心配】、【将来の生活に対する焦り】、【社会や周囲および身内からの理解不足に関する苛立ち】、【責任を持ってケアする重圧】、【同居することで生じる束縛感】、【地域の施設が整わないことへの不満感】の7つのカテゴリーを生成し、家族が精神障がい者のケアの担い手であっても、家族はケアの対象者である観点から地域連携の精神看護に反映させていく有効な知見が示唆された。 (データ分析、考察の論文執筆を担当した。) 共著者：一ノ山隆司、松浦純平
12. 精神科臨床経験3年未満の看護師が抱く陰性感情の特徴 (査読付)	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1387-1392. 2013.	本研究は、精神科病棟に勤務する精神科臨床経験3年未満の看護師3人対象として、彼らが抱く陰性感情の特徴を把握することが目的である。半構成的面接法により陰性感情に関する調査を行った結果、陰性感情として8カテゴリー生成することができた。患者に対しては否定的な捉え方によって生じる【不安感】、患者から被害を受けるといった【恐怖心】、患者との対応における未熟さから生じる【困惑】、どこにもぶつけることができない感情から生じる【怒り】、患者に自分の思いが受け入れてもらえないことによる【苛立ち】、患者とのかかわりから生じていく落胆から引き起こされる【疲弊感】、患者の対応を他の看護師と比べることによって生じる【劣等感】、患者との関係性や対応を振り返ることから生じる【自責感】であった。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：松浦純平、一ノ山隆司、菊地淳、吉岡一実
13. FACTORS RELATED TO THE USE OF HOME CARE SERVICES BY STROKE PATIENTS UNDER JAPAN' S LONGTERM CARE INSURANCE SYSTEM (日本における長期間の介護保険システム下の脳卒中患者による在宅ケアサービス使用要因) (査読付)	共著	平成26年12月	International Journal of Medical Research & Health Sciences 4 (1) p103-109. 2014.	脳卒中患者は、在宅ケア看護サービスを利用者数の中では最も多い。本研究の目的は、日本の介護保険システムの下で在宅ケア・サービスの使用状況との利用者の関係を決定するために脳卒中患者の鍵となる要因と主な介護者の関係を明らかにすることである。研究方法は東海と近畿地域で14の主題と彼らの介護者を対象とした。質問紙調査票が主な介護者のために使用した、データ分析方法は、一変量分析により分析した。結果、バルテル Index (BI) 得点より高い脳機能障害が、長期の介護保険の使用率と関連があることが明らかになった。またBI得点低下と在宅ケア率は増加した。結論：脳卒中患者の2つの特徴が長期の介護保険の使用率に関連することが明らかになった。 (質問紙票作成、データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。) 共著者：Kazuya Ikenishi, Jumpei Matsuura 2015年度インパクトファクター：0. 18

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14. 術後せん妄の発現を予測するスクリーニングツール開発のための基礎的研究（修士論文）	単著	平成27年3月	四日市看護医療大学大学院看護学専攻修士課程 p1-36. 2015. A4版 総頁数 36	本研究の目的は経験年数を問わず臨床看護師が簡便に使用できる術後せん妄スクリーニングツール開発に向けての予備的研究として術後せん妄発症前駆症状の構成因子を明らかにすることである。本研究は、調査Ⅰの文献検討、調査Ⅱの面接調査、調査Ⅲの質問紙調査、質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した。調査Ⅲは全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした。相関分析、I-T相関分析、天井・床効果の検討、尖度と歪度の検証、因子分析を実施した。PASW 18を使用した。因子分析の結果【妄想支配による精神的訴え】、【活動意欲の減退】、【意味のない行動】、【認識機能の低下】、【外見的興奮】、【理解力の違和感】、【恐怖・心配の訴え】、【失見当識】、【排尿に関する愁訴】、【睡眠覚醒サイクルの障害】10因子40項目を抽出した。本研究で明らかになった新しい知見は【外見的興奮】、【理解力の違和感】の2因子であった。
15. Early detection and treatment : an examination of prodromal symptoms of post operative delirium in elderly patients （早期発見と処置：高齢患者の術後せん妄の前駆症状について） （査読付）	単著	平成27年4月	International Journal of Clinical and Biomedical Research. 1 (2) p1-6. 2015.	研究目的は、臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケール開発のための基盤とすることである。対象は看護師300名とした。結果、看護師が術後せん妄前駆症状として考えている症状は「看護師へ遠慮して何も言わない」「自分で寝返りを打たない」であった。術後せん妄前駆症状を症状別に類似するカテゴリー別に分類した。その結果「行動」「混乱」「陰性症状」「睡眠」など6カテゴリーに分類された。 2015年度インパクトファクター：3.3
16. Initial development of a screening tool for postoperative delirium prodrome （術後せん妄スクリーニングツールの開発） （査読付）	共著	平成27年6月	International Journal of Current Advanced Research. 4(7)p165-167. 2015.	本研究の目的は、術後せん妄発症を早期に発見するためのアセスメントツールを開発することである。全国の国立大学医学部附属病院の看護師725名を対象に質問紙調査を実施した。結果、10因子38項目からなる術後せん妄アセスメントツールを開発した。（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno 2015年度インパクトファクター：5.438
17. The needs of post-operative delirium assessment tool for clinical nurses （臨床看護師の考える術後せん妄スクリーニングツールの必要性に関する研究） （査読付）	共著	平成27年6月	RA Journal of Applied Research. 1(6)p219-226. 2015.	本研究の目的は、臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールについてのニーズを明らかにすることである。対象は全国の大学病院19病院の外科系病棟に勤務する看護師725人である。アセスメントツールの必要性について「必要である」、「やや必要である」と回答した対象者の割合は全体の85.5%であった。このことからアセスメントツールの必要性について、非常に受容があることが明らかになった。（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno 2015年度インパクトファクター：3.62

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
18. The Relationship Between Work-Life Balance And Nwi-R Score Among Unmarried Nurses Working For Less Than Two Years In Hospital. (病院の勤務年数2年以下の未婚看護師におけるワークライフバランスとNwi-R得点との関連) (査読付)	共著	平成27年7月	International Journal Of Medical Science And Clinical Invention. 2(7)p1120-1125. 2015.	近年、ワークライフバランスに関する研究が増加している。本研究の目的は経験年数が2年以下の看護師についてワークライフバランス（WLB）とNWI-R得点の関連を明らかにすることである。調査対象者は東海地区と関東地区の病院に勤務する看護師とした。収集したデータは年齢、性別、経験年数、ワークライフバランス、NWI-Rとした。回答者は117人だった。経験年数が1年未満の看護師は61人、1年以上2年以下は56人だった。WLBでは、満足と回答したのは37人、不満足は36人、どちらとも言えないは44人だった。クラスカルウォリス検定の結果、この3群間ではNWI-R得点に有意差を認めた(p=0.0013)。結果、育児や家事以外の私生活に関する時間を有効に活用できるように職場の改善が必要ことが示唆された。 (質問紙票作成、データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。) 共著者：Kazuya Ikenishi, Jumpei Matsuura 2015年度インパクトファクター：3.301
19. テキストマイニングを用いたセラピストとクライアントの会話分析 (査読付)	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第3巻p87-94. 2015.	本研究の目的は、うつ病患者へのカウンセリング場面を会話分析にてカウンセラーの援助の特徴を明らかにして今後のうつ病患者へのカウンセリングに活用することである。カウンセラーが話した「思う」についてコロケーション解析を実施した結果、ポジティブな発言内容は10回中6回であった。ネガティブな発言内容は10回中1回であった。このカウンセラーのクライアントへの関わり方は意図的にクライアントの積極的な発語を引き出す重要な手法であるのではないかと推察する。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：松浦純平, 川野雅資
20. テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング時の会話分析 (査読付)	共著	平成28年5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第4巻p67-74. 2016.	本研究の目的はうつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からセラピストの援助の特徴を明らかにすることである。対象はうつ病患者へのカウンセリングを実施したセラピストとクライアントの発語とした。分析はセラピストとクライアント別に記述統計、階層的クラスター分析、多次元尺度法、共起ネットワーク分類を行った。セラピストの発語内容を多次元尺度法にて分析した結果、同調や促しの「うん」以外は、非常にバランスが取れた発語であったことが明らかになった。共起ネットワーク分類にて分析した結果、「調整」と「気分」と「楽観」の3つに関する話題に分類された。 クライアントの発語内容を多次元尺度法にて分析した結果、A氏、先生に関する発言が多いことが明らかになった。共起ネットワーク分類にて分析した結果、「A氏と先生との会話」と「雇用に関する将来の不安」と「休職したことへの自責の念」の3つに関する話題に分類された。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：松浦純平, 川野雅資

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21. スライディングシート導入後の現状と課題 トラウマインフォームドケア (TIC) の観点より (査読付)	共著	平成28年9月	第1回臨床精神看護学研究会誌2016年. p77-79. 2016.	本研究の目的は、TICの観点に基づき対象者と医療スタッフのそれぞれの立場から移送用スライディングシートの導入後の現状と課題は何かを明らかにすることである。対象は、X病棟に入院中の対象者5名と同病棟にて勤務する医療スタッフ5名。データ収集方法は研究者がスライディングシートの導入前と導入後の使用後の感想をそれぞれに直接聞き取り調査を実施した。対象者の肯定的意見は、「抱えられるよりは全然怖くないね。」、「安心感があるよ。」などの意見が聞かれた。否定的意見は「ゆっくりとしないと勢いよくすると滑り過ぎる時があるね。」との意見が聞かれた。医療スタッフの肯定的意見は「腰への負担が少なくなった。」、「僅かな力でも簡単にシートがよく滑るから使いやすい。」などであった。ノーリフトの基本理念は、対象者を抱えずに滑らせて移動する方法である。TICの基本的な考え方は、対象者にいかにトラウマ体験をさせないかである。スライディングシート導入後、対象者と医療スタッフからは肯定的意見が多く聞かれた。このことからスライディングシート導入による患者へ恐怖心を与えない看護の提供が出来たことで看護の質の向上など一定の効果はあったのではないかと考える。 (データ収集、データ分析、結果、考察の論文執筆を担当した。) 共著者：西木一美、香田美帆、 <u>松浦純平</u>
(その他) 「研究費助成報告書」 1. がん患者が求める「患者サロン」活用への支援の検討—「患者サロン」に関する認識と活用の実例—	共著	平成21年3月	平成21年度病室環境研究成果報告集奈良県立医科大学住居医学大和ハウス寄付講座. p17-23. 2009.	本研究は、がん患者サロンに関する認識と現在の利用状況を明らかにすることを目的として研究に取り組んだ。対象はA県がん患者会会員430名を対象とした。研究方法は、質問紙調査法とした。回収率は158名、有効回答数は148名であった。本研究結果からサロンのニーズは非常に高いこと、立地場所としては公共交通機関から近いことサロン利用者は臨床心理士の配置を希望していることが明らかになった。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者： <u>松浦純平</u> 、瀬川睦子 全ページ104ページ
2. 高齢患者の術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケールの信頼性に関する予備的検討	単著	平成25年5月	大阪ガスグループ福祉財団研究報告書26号. p111-116. 2013.	本研究は、手術後の高齢者に高確率で発症する術後せん妄の発症前駆症状に関して、臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントツール開発につなげるための基盤とすることである。研究方法は質問紙調査とし、対象は全国20病院に勤務する臨床看護経験年数5年以上を有し外科病棟での臨床経験3年以上の看護師300名を対象とした。回収数は71通、有効回答数は66通であった。記述統計分析の結果、行動、混乱、陰性症状、睡眠、妄想、排泄の6つのカテゴリーが抽出された。 全146ページ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
3. 我が国史上初の術後せん妄を早期発見するためのアセスメントスケールの開発	単著	平成26年8月	日本学術振興会科学研究費助成事業若手B研究報告書. 2014.	本研究の目的は術後せん妄アセスメントスケールを開発することである。本研究は、文献検討、面接調査、質問紙調査、質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した。全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした。相関分析、I-T相関分析、天井・床効果の検討、尖度と歪度の検証、因子分析を実施した。結果10因子40項目からなるアセスメントツールを開発した。 全6ページ
「国際学会発表抄録」 1.Examination of nurse's communication skills in role playing. (看護師のコミュニケーションスキル向上を目指したロールプレイングの効果の検証)	—	平成23年1月	The 3rd Korea-China-Japan Nursing Conference, p239. 2011.	本研究は統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる示唆を得ることを目的とした。対象はα県内精神病院に勤務中の看護師5名である。面接内容は同意が得られた場合のみICレコーダーにて録音し、逐語録を作成した。分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析、コロケーション解析を実施した。データ解析ソフトは、WinCha, KWIC Finderを使用した。結果、統合失調症患者との対話場面においての看護師が患者に対して話した発語項目の中から名詞のみを対象とした。その結果688個の構成要素を抽出した。コミュニケーション (120) 沈黙 (114) 相手 (110) 時間 (74) などの6カテゴリが生成された。本研究から統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる要因として看護師の配慮がスキルアップにつながる可能性が示唆された。 (逐語録作成、データ分析、考察の論文執筆を担当した。) 共著者：Ryuji Ichinoyama, Kiyoko Funasaki, <u>Jumpei Matsuura</u>
2.The characteristis of nursing literature on the family nursing during 15 years past. (過去15年間の世界における家族看護に関する研究の特徴)	—	平成23年6月	The 10th International Family Nursing Conference, p243. 2011.	本研究の目的は、世界における家族看護に関する研究の特徴を明らかにすることである。文献検索は、PubMedを用い、キーワードは「characteristis」「Family」「Care」「Nursing」で検索した。遡及期間は1995年～2010年の過去15年間とした。対象は抽出された文献126件を分析対象とした。方法は126件の文献に含まれるキーワードに注目して類似するキーワードからカテゴリ化を行い、記述統計を実施した。結果、6個のカテゴリと26個の項目を導き出した。カテゴリは、それぞれ家族、ケア、関係など6種類であった。項目では、家族、患者、父親、高齢者、老人、母など26個であった。対象は、家族が一番多い結果であった。傾向は、分野別では、在宅ケア、高齢者などが多い結果であった。システム理論を発展させ更に家族療法を組み合わせた考え方の家族システム看護の視点から分析するとコミュニケーションについて伝達内容だけでなく家族の関係性も重要であることが明らかになった。また家族成員の変化が発生した場合は家族メンバー間で認知変化を注意して観察していく必要があると考える。 (データ収集、データ分析、考察の一部執筆を担当した。) 共著者：Eiichi Ueno, <u>Jumpei Matsuura</u>

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3.Trend and problem of research on family nursing in the world from the review of the literature for past 15 years. (世界における家族看護に関する研究の現状と課題 過去15年間の文献検討)	—	平成23年6月	The 10th International Family Nursing Conference, p251. 2011.	本研究の目的は、世界における家族看護に関する研究の動向と課題を明らかにすることで今後の家族看護に対する研究の方向性の示唆を得ることである。文献検索は、文献検索オンラインデータベースPubMedを用い、キーワードは「Family」, 「Care」, 「Nursing」で検索した。遡及期間は1995年～2010年の過去15年間とした。対象は抽出された文献106件を分析対象とした。方法は106件の文献に含まれるキーワードに注目して類似するキーワードからカテゴリ化を行い、記述統計を実施した。結果, 8個のカテゴリと33個の項目を導き出した。カテゴリは、それぞれ対象, 関係, 分野など8種類であった。項目では、家族, 患者, 親族, 年配, 子供新生児, 老人, 母, 看病など33個であった。対象は、家族が一番多い結果であった。傾向は、新生児・子供から高齢者まで多岐に渡り幅広かった。分野別では、集中, 救命が多い結果であった。種類では、看護, 医療, 介護, 研究, 教育の順で幅広い結果であった。家族看護学には、看護とシステム理論と家族療法を組み合わせた考え方の家族システム看護という考え方がある。このことから、変化が起こった場合には、家族間での知覚の変化を注意して観察していくことが必要ではないかと考える。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno
4. The caring concerns of the reducing the incidence of postoperative deliria in the field of head and neck. (ケアリングの視点に基づく外科病棟における術後せん妄発症率を減らすための方略)	—	平成24年3月	International Hiroshima Conference on caring and Peace, p196. 2012.	本研究は、外科病棟における術後せん妄発症予防のために病棟看護師が実践しているケアリングについてを明らかにすること。対象者は病院外科病棟に勤務する看護師の看護師7名について半構成的面接を実施した。分析方法は逐語録を文脈内容から意味のある内容を単一記録として区切り帰納的分類を実施してカテゴリ化を実施した。10個項目と41個のカテゴリを導き出した。項目は時間, コミュニケーションなどであった。カテゴリは現在, 時間などであった。分析結果から術後せん妄発症予防に関して、看護師は、術後患者に対して「認知」, 「睡眠」に関するケアを特に注意して実施している事が明らかになった。ケアリングの概念の中の「関わり」「交流」をベースとして「支持的態度」「コミュニケーション」「情報提供」「患者へ安楽の提供」に当てはまると推察する。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno
5. The desired nursing students' ability of communication from the caring standpoint. (ケアリングの見地から見た看護学生のコミュニケーション能力)	—	平成24年3月	International Hiroshima Conference on caring and Peace, p263. 2012.	本研究の目的はケアリングの視点から見た看護学生のコミュニケーション能力について明らかにすることである。対象A大学看護学部学生120名とした。段階別コミュニケーション能力評価尺度を用いて学年別に評価した実施した。ケアリングの視点としては相手への思いやりである。結果、相手が話すまで待つや相手が話すことを真剣に聞くなどが多項目よりも高い結果であった。これらの視点はケアリングの考えに基づくコミュニケーションであると推察する。今後はこの部分を更に伸ばすような指導を授業、演習、実習を通して行っていく必要性が示唆された。 (データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。) 共著者：Eiichi Ueno, Jumpei Matsuura

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. The present conditions and problem about professionalism and the stress on the nurse in the world (世界における看護師のプロフェッショナリズムとストレスに関する現状と課題)	—	平成28年7月	The 6th Asian Congress of Health Psychology2016	本研究の目的は、世界の看護師のプロフェッショナルリズムとストレスに関する研究の現状と課題を明らかにすることである。PubMedを使用してキーワードは「professionalism」、「nursing」、「stress」とした。結果、抽出された17編の論文の中から内容を精査した結果15編の論文を対象にした。国別に分類した結果、USA 3編、Swedish 2編、Germany 2編、Australia 2編、Taiwan 2編、France1編、Canada1編、UK 1編、Spanish 1編であった。研究デザイン別は、質的研究6編、量的研究7編、報告1編、文献研究1編であった。研究目的別は、成人のがん病棟の患者と看護師間の相互作用のユーモアの使用について、プロ意識とチームワークの関係についてなどであった。研究対象者別分類は、臨床看護師10編と最多であった。研究フィールド別分類は、臨床8編で最多であった。日本では取り組みがなされていないかったため今後取り組む必要性が示唆された。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno
7. The characteristic on the past paper concerns of mental health caused when a disaster strikes (災害発生時における精神衛生に関する文献研究)	—	平成28年7月	The 6th Asian Congress of Health Psychology2016	本研究の目的は、災害発生時の精神衛生に関する動向と課題を明らかにすることである。対象はPubMedを使用した1973年から2015年の894論文である。 分析方法は内容分析である。ソフトはKH Coderを使用した。結果、ハリケーンのような多くの災害地震と津波について研究されていた。災害は、個人とコミュニティにおいて精神衛生で最も重要であり優先度が高い問題である。今後はプログラム開発など多くの種類の災害への適切な支えとなる方法を提供する必要がある。 (テキストマイニングソフトを使用しての分析、考察の執筆、スライドの一部作成を担当した。) 共著者：Eiichi Ueno, Nobuaki Maegawa, Jumpei Matsuura, Sanae Naruse
「国内学会発表抄録」 1. わが国のせん妄に関する看護研究の動向と課題 一文献検討を通して—	—	平成21年5月	第40回日本看護学会学術集会看護管理抄録集. p119. 2009.	本研究の目的は我が国における看護分野でのせん妄に関する研究について、文献検討により研究の動向と課題を明らかにし、患者のケアへの示唆を得ることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と看護とした。結果、31編の文献を対象とした。研究デザイン別では量的研究が91編、質的研究は14編、事例研究は15編。研究対象者は患者105編。筆頭研究者は臨床看護師94編、看護系大学教員17編、共同研究9編。フィールド別では整形外科17編、外科病棟12編、ICU5編、CCU4編。せん妄発症要因については31編。せん妄評価尺度はニーチャム混乱・錯乱状態スケール11編。本研究結果から予防に関する研究が少なかつたため、今後はせん妄発症予防ケアの充実を図るための研究が期待されることが明らかになった。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：松浦純平, 上平悦子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 看護学生のコミュニケーション能力からみたカリキュラムの開発	—	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集. p49. 2010.	本研究の目的は看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度を用いて、効果的な授業プログラムを開発することを目的とした。研究方法は3つの看護系大学の看護学生710名を対象とし有効回答372名を分析対象とした。看護学生の段階別コミュニケーション能力評価制度を用いた学生のコミュニケーション能力を測定した。結果、4学年が多く項目で高得点を示したが2学年になるとコミュニケーション能力が低下する傾向であった。今後は看護学生のコミュニケーション能力を向上させるために各学年別に客観的指標を基に重点項目を教授することが大切である。そのためには各学年にコミュニケーションを教授する科目を効果的に配置するカリキュラムが必要である。 (データ入力、データ分析、スライド作成の一部を担当した。) 共著者：上野栄一, 明神一浩, 松浦純平
3. 術後せん妄発症要因と予防に関する文献検討 ―過去5年間の国内文献より―	—	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集. p51. 2010.	本研究の目的は文献検討から国内におけるせん妄発症要因と予防について明らかにすることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と術後と要因と予防とした。その結果、202編の文献の中から31編の文献を抽出し分析対象とした。結果、要因に関する論文は18編、予防に関する論文は10編であった。要因としては認知症、65歳以上などが多い結果であった。予防目的の取り組みとしてはビデオメッセージ、リアルオリエンテーションなどがあった。本研究から以下の2点が明らかになった。1点目は発症要因としては「消化器外科病棟」、「認知症」「65歳以上」が多い結果であった。予防については「環境の変化」「睡眠障害」など誘発因子への介入が発症予防に効果があることが分かった。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：松浦純平, 上野栄一
4. 患者の暴力に対する看護師の予測マネジメントの研究	—	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集. p55. 2010.	本研究の目的は精神科病棟におけるベテラン看護師の危険予測について語りを振り返り臨床現場での実践に示唆を得ることを目的とした。研究方法はα県内の精神科病院に勤務する精神科臨床経験10年以上の看護師6名を対象とした。研究方法は半構成的面接法より得られたデータを質的帰納的に分析した。結果、患者の暴力に対する予測過程を抽出した。結果、「患者の行動パターンの把握」、「過去に起こった場面の想起」、「患者の話す内容の整合性」の3つのカテゴリーが生成された。今後は精神病患者の暴力を予測するための客観的評価についても更に量的・質的に検証するため必要がある。 (逐語録作成、データ分析、スライド作成の一部を担当した。) 共著者：明神一浩, 上野栄一, 松浦純平

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 高齢男性介護者の介護に対する自己の構え	—	平成22年7月	日本看護研究学会学術集会プログラム・抄録集. p113. 2010.	本研究の目的は高齢男性介護者の介護に関わる介護者の構えについて明らかにすることである。対象は高齢男性介護者の介護に関わる介護者4名を対象とした。対象者へ半構成的面接を実施した。結果、「喜び」「孝行」「負担」「責任」の4カテゴリが抽出された。今後は男性介護者の気持ちを大事にして関わっていく必要性が示唆された。（逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上平悦子， <u>松浦純平</u> ，船瀬孝子，明神一浩，上野栄一
6. 看護師のコミュニケーションスキルをレベルアップするための方略	—	平成22年9月	第17回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集. p60. 2010.	本研究の目的は、看護師のコミュニケーションスキルをレベルアップする要因を明らかにすることである。看護系大学α大学の看護学生1学年～4学年まで各学年70名、合計280名を対象に調査を実施した。方法は「看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度」を中心にそれぞれの技法の場面設定の質問紙を作成し5段階評定で、それぞれのコミュニケーション場面で、その時の感情について評価した。分析は対応のあるt-test、一元配置分散分析を実施した。看護学生236名の回答があった学年別のコミュニケーション技法の平均値は 2.88 ± 0.28 であった ($p < 0.0001$)。得点の高かったコミュニケーション技法は情報提供 4.31 ± 0.82 、協同提言 4.26 ± 0.91 であった。治療的技法の場面で非治療的技法の場面よりも快度は有意に高い結果であった。これらの結果を今後のコミュニケーションに活用していくことでスキルアップにつながる事が示唆された。（データ入力、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩，上野栄一， <u>松浦純平</u> ，一ノ山隆司
7. がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題	—	平成22年12月	第3回日本地域連携精神看護学研究学術集会会誌, p4. 2010.	本研究の目的は、A県内のがん患者会会員が考えるサロンにおけるメンタルヘルスに関する認識および現状を明らかにすることである。研究対象はA県がん患者会会員400名。調査方法は、対象者に本研究の主旨と自記式無記名質問紙調査を同封し郵送した。調査項目は、基本的属性、サロンの認識、サロン立地条件、サロン利用者、サロンに必要と考える医療従事者、サロンへの期待の6項目。分析方法は、PASW Statistics18.0を用いて単純集計を行った。結果、以下の3点が明らかとなった。1. 地域に暮らす患者にとってサロンのニーズ・期待度は、非常に高い。しかし、実際にサロンを利用している人は少ない。2. サロン設置場所として通いやすい立地条件であることを望んでいた。3. サロン内にメンタル面のフォローができる専門職の配置を望んでいた。（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者： <u>松浦純平</u> ，上野栄一

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 福島第一原発事故に起因する食品と安全と消費行動に対する実態調査	—	平成23年1月	第70回日本公衆衛生学会総会抄録集, p418. 2011.	本研究の目的は福島第一原発事故に起因する食品と安全と消費行動を明らかにすることである。対象はインターネットで研究参加に同意をした成人男女450名を対象とした。設問項目は食品産地を見て買うかどうか。福島第一原発事故の前後で食品産地を見てから購入するかどうか。結果、原発事故の前後では事故後が生産地を見てから買うようになった項目で有意差がみられた。このことは報道が消費行動に影響を与えている可能性が示唆された。 (データ入力、データ分析を担当した。) 共著者：御興久美子, 守田貴子, 水野静枝, 松浦純平, 濱田美来, 尾花尚弥, 今村知明
9. 看護師の就労継続をエンパワメントする因子についての研究	—	平成23年1月	第70回日本公衆衛生学会総会抄録集, p492. 2011.	本研究の目的は、看護師の就労継続をエンパワメントする因子を明らかにすることである。調査対象はα・β県内の病院施設の看護師であり、研究参加への同意が得られた250名。記述データは自記式質問紙の自由記載項目とした。データ分析方法は文脈の意味内容を精読し、その内容の類似性にに基づき分類し、カテゴリー化した。スーパーバイザーに指導を受けてカテゴリー化した。分析の結果【看護職としてのやりがい】【家族を支えるために必要な経済的資源】【看護職への誇り】【帰属意識の高さ】の4カテゴリーリーが生成された。看護師不足である現状の中継続して就労している看護師が継続している要因は様々なであるが、患者家族からの感謝の気持ちの表明、家族の支援などが就労継続に影響している結果となった。今後、この結果を基に看護師の就労継続の可能性が示唆された。 (逐語録作成、分析を担当した。) 共著者：加藤礼識, 伊藤雪絵, 水野静枝, 松浦純平, 御興久美子, 今村知明
10. 看護体制の違いによる職務満足の検討	—	平成23年1月	第42回日本看護学会精神看護抄録集, p49. 2011.	本研究は統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップに向けて示唆を得ることを目的に取り組んだ。対象はα県内精神病院に勤務中の看護師5名。面接内容から逐語録を作成。分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析, コロケーション解析を実施した。データ解析ソフトは, WinCha, KWIC Finderを使用した。結果、統合失調症患者との対話場面においての発語項目に該当する名詞に着目し, 718個の構成要素を抽出した。コミュニケーション行動 (130)][行動 (123)][対象 (120)][陰性症状 (76)]などの8カテゴリーが生成された。形態素解析で最頻度名詞の『気遣い』25個に着目しコロケーション解析した結果, 「活動量増加 (19) 」「体動増加 (12) 」などであった。本研究から統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる要因としてなど看護師の配慮がスキルアップにつながる可能性が示唆された。 (逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。) 共著者：明神一浩, 上野栄一, 松浦純平

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11. 統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルに関する研究	—	平成23年1月	第42回日本看護学会精神看護抄録集，p49. 2011.	本研究は統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップに向けて示唆を得ることを目的に取り組んだ。対象はα県内精神病院に勤務中の看護師5名。面接内容から逐語録を作成。分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した。データ解析ソフトは，WinCha，KWIC Finderを使用した。結果，統合失調症患者との対話場面における発語項目に該当する名詞に着目し，718個の構成要素を抽出した。コミュニケーション行動（130）][行動（123）][対象（120）][陰性症状（76）]などの8カテゴリが生成された。形態素解析で最頻度名詞の『気遣い』25個に着目しコロケーション解析した結果，「活動量増加（19）」「体動増加（12）」などであった。本研究から統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる要因としてなど看護師の配慮がスキルアップにつながる可能性が示唆された。 （逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩，上野栄一，松浦純平
12. 頭頸部外科領域における術後せん妄発症要因に関する看護師の視点について	—	平成23年3月	第10回富山大学看護学会学術集会会誌 10（1），p30. 2011.	本研究の目的は，頭頸部外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症要因は何かを明らかにして，臨床での術後せん妄発症患者に対する看護実践への示唆を得ることである。対象は，A大学医学部附属病院頭頸部外科病棟に勤務する看護師5名。術後せん妄発症要因について半構成的面接を実施，結果内容分析手法およびセブncross法にて分析した。内容分析の結果から【性格特性】【理解力不足】【長期安静】【高齢】【不眠】【男性】【独居】の7つのカテゴリーが生成された。セブncross法の結果から，優先順位が高い順に【不眠】【性格特性】【高齢】【長時間手術】【術中出血量】【眠剤の影響】【術前不安】の7つのカテゴリーが生成された。内容分析とセブncross法の両方に含まれていたのは，【高齢】【不眠】【個人特性】の3つのカテゴリーであった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，上野栄一+F59
13. 一般外科領域における術後せん妄発症予測要因の検討—経験豊富な看護師へのインタビューより—	—	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集，p178. 2011.	本研究の目的は一般外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が直観的に判断している術後せん妄の発症予測につながる患者の前駆症状を明らかにすることである。対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名とした。半構成的面接を実施した。逐語録を形態素解析分析し，抽出した名詞を類似性に基づき分類し，意味内容の共通性に基づきカテゴリー化した。類似性により分類した結果【表情】【認識】【患者の反応】【置かれた環境】【コミュニケーション】【時間感覚】【失見当識】【行動】，【対象者】【対象物】【情意】【直観】，【患者特性】【不安】【睡眠】の15のカテゴリが生成された。本研究結果から経験豊富な看護師の術後せん妄発症予測につながる前駆症状の観察視点としては，患者の眼に代表される表情，失見当識，看護師の説明に対する認識とその反応等から術後せん妄の発症を予測していた。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，福田弘子，上野栄一。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14. 内容分析による最近の診療報酬の特徴	—	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集，p227. 2011.	本研究では過去1年間の診療報酬に焦点を当ててその特徴を明らかにすることを目的とした。過去1年間の診療報酬の看護に関する記事を抽出してカテゴリー化した。結果、1236件の記事が検索された。記事内容を分類した結果、120種類のカテゴリーに分類された。最も多かったのは診療報酬（222）介護保健（192）DPC（68）などであった。これらのことから診療報酬についてDPC制度導入、診療報酬改正などを視野に入れて取り組みがなされていた。今後も診療報酬改定に注目して動向を注視していくことが重要であると考ええる。（逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，松浦純平，上平悦子。
15. 認知症高齢者および家族の地域生活を阻害する困難要因	—	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集，p339. 2011.	本研究では介護保険適応施設の従事者が認知症高齢者およびその家族を地域で支えていく困難性をどのように捉えているのかを把握することを目的とした。対象は介護保険施設の従事者27人。記述データは自記式質問紙の自由記載項目。データ分析方法は内容の類似性に基づきカテゴリー化した。結果，【認知症に対する理解不足と偏見】【支えるために必要な経済的資源の欠如】【職種間の連携と情報不足】【行動心理症状の理解と対応困難】4カテゴリを抽出した。認知症高齢者に対して家族や地域住民，介護保険適応施設の従事者が，認知症の種類や中核症状・行動心理症状に関して理解不足が偏見を助長し，さらに理解不足が対応の困難性を高める原因になっており，職種間の連携にも影響を及ぼしていたことが明らかになった。（逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：京谷和哉，一ノ山隆司，舟崎起代子，松浦純平。
16. データマイニングによる看護師の考える術後せん妄発症予測について —経験豊富な看護師へのインタビューの分析—	—	平成23年8月	第42回日本看護学会学術集会成人Ⅰ抄録集，p60. 2011.	本研究目的は外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症予測につながる前駆症状を明らかにすることである。調査対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名。研究方法は術後せん妄発症前の段階でアセスメントをどのような視点で実施しているかについて半構成的面接を実施した。分析方法は逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した。データ解析ソフトはWinCha，KWIC Finderを使用した。結果、718個の構成要素を抽出。[行動][コミュニケーション][行動対象][表情][睡眠][訴え][時間][幻覚][認知]の9カテゴリが生成された。（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，福田弘子，上野栄一，水野正延。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
17. 看護理論にみるカウンセリング技法の特徴	—	平成23年9月	第18回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集, p48. 2011.	本研究では、カウンセリング技術にはどのようなものがあるかを明らかにし、さらにカウンセリング理論との関係について明らかにすることを目的とした。ナイチンゲールは、優れた看護師の能力として、患者にどのようなことを感じているか読み取れ、患者の顔に現れる変化についての意味を理解できると確信が持てる研究をすべきと明言している。ヘンダーソンは、完全に成熟した優れた看護師とは患者に同情を寄せ、かつ敏感に反応する能力、自分の情緒的な反応と技術的な対応を活用する機会をもつと述べている。看護理論にはコミュニケーション技術、カウンセリング技術に関する独自の看護論が存在していた。それらは、治療的コミュニケーション技術をベースに傾聴、受容、共感的理解、自己決定へと看護過程を展開する中で展開していることが明らかとなった。 (文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。) 共著者：上野栄一, 松浦純平, 明神一浩.
18. 看護学生のコミュニケーション技法と感情との関係	—	平成23年9月	第24回健康心理学会抄録集, p89. 2011.	本研究の目的は看護学生の学年別コミュニケーションの技法がどのように感情に影響を与えているかについて明らかにする。対象は看護系大学α大学の看護学生1学年～4学年280名。方法は看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度を使用し技法の場面設定の質問紙を作成し5段階評定でコミュニケーション場面で、その時の感情(快—不快)について評価した。分析は、対応のあるt-test、一元配置分散分析を実施した。看護学生236名の回答があった1学年58名、2学年60名、3学年55名、4学年63であった。治療的技法の平均値は 2.88 ± 0.28 、非治療的技法の平均値は 2.5 ± 0.43 であった($p < 0.0001$)。治療的技法で快得点の高かったコミュニケーション技法は情報提供 4.31 ± 0.82 、協同の提言 4.26 ± 0.91 であった。平均治療的技法の得点と非治療的得点の学年別にみた比較を一元配置分散分析した結果、平均治療的技法($F=4.35$; $p < 0.05$)では平均治療的技法得点は1学年 2.95 ± 0.28 2学年 2.92 ± 0.28 3学年 2.83 ± 0.27 4学年 2.80 ± 0.25 であり1学年と4学年($p < 0.05$) 1学年と3学年($p < 0.1$) 2学年と4学年($p < 0.1$)との間に有意な差を認めた。 (データ収集・入力、データ分析を担当した。) 共著者：上野栄一, 松浦純平.
19. 医療政策の中での看護の動向	—	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p29. 2011.	本研究では過去1年間の医療政策の中で、看護の政策に焦点を当ててその特徴を明らかにすることを目的とした。過去1年間の医療政策の中の看護に関する記事を抽出してカテゴリー化した。結果、2291件の記事が検索された。記事内容を分類した結果、225種類のカテゴリーに分類された。最も多かったのは診療報酬(302)介護保健(292)インフルエンザ(222)などであった。看護に注目すると「看護教育」「外国人看護師」「人材養成」「訪問看護」などのカテゴリーが抽出された。これらのことから看護政策においては看護教育、カリキュラム改正、特定看護師に関するものが多くまた外国人看護師への支援策も具現化されていた。多くの施策が提示される中、今後看護教育、看護サービスを充実させるために看護施策の情報をいかに取り入れ教育施設、各病院での取り組みを考えることが重要であると考えた。 (文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。) 共著者：上野栄一, 一ノ山隆司, 明神一浩, 松浦純平, 上平悦子, 八塚美樹.

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
20. 頭頸部外科領域における術後せん妄発症予測要因の検討 ―経験豊富な看護師へのインタビューより―	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p34. 2011.	本研究の目的は、外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が直観的に感じている術後せん妄発症予測につながる前駆症状は何かを明らかにすることである。調査対象者は外科病棟に勤務する看護師7名を対象とした。看護師へ、外科領域における認知症を併発していない術後せん妄患者への関わりを想起してもらい、外科領域における術後せん妄発症予測についてのアセスメントをどのような視点で実施しているかについて、半構成的面接を実施し、逐語録を作成した。術後せん妄発症予測アセスメント項目に該当する名詞に着目した結果718個の構成要素を抽出した。意味内容の類似性に基づき分類した結果、9カテゴリーが生成された。結果から得られた観察ポイントは、経験豊富な看護師の長年の経験に基づく熟練の技に該当する部分だと考える。経験の少ない新人看護師が気付きにくい観察項目であると考えため、この部分に注目し、共通理解を深めることでせん妄の早期発見・早期介入が可能となるため重要なポイントだと推察した。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平、上野栄一、一ノ山隆司、明神一浩、福田弘子。
21. 過去10年間の職務満足の研究タイトルの分析による研究動向の検討	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p48. 2011.	本研究の目的は看護師の職務満足度に関する研究について形態素解析を行うことにより職務満足に関する研究の動向を明らかにし今後の研究に示唆を得ることである。対象は医学中央雑誌で過去10年間に発表された研究タイトル895件を分析対象とした。解析方法は内容分析法を使用した。結果、新人看護師、中堅看護師、職員定着、キャリア、看護体制、自律性などが抽出された。看護体制が職務満足度にどのように影響をしているのかをみた研究が増加傾向である。新人看護師の離職予防について職場に愛着を持たせるような帰属意識も重要であることが本研究から示唆された。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩、前川哲弥、森下憂一、松浦純平、上平悦子、上野栄一。
22. わが国における術後せん妄発症予測に関する研究の動向 ―過去27年間の文献検討より―	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p57. 2011.	研究目的は、看護分野におけるせん妄発症予測に関して患者ケアに示唆を得ることである。文献検索は、医学中央雑誌を用い、キーワードは「せん妄」、絞り込み検索は「看護」、「原著論文」とした。遡及範囲：1983年～2010年の27年間とした。対象は12件の文献とした。分析方法はデータの示す傾向や性質を把握ため、12件の文献を各フィールド別、予測項目別に記述統計の手法で分析した。結果、予測項目のカテゴリー別分類では、「認知力障害」20件、「ルート類」19件、「環境の変化」15件、「患者属性」11件、「活動抑制」・「性格」・「薬剤」10件、「身体症状」・「周手術期」9件であった。看護師の術後せん妄発症予測項目には、同じことを何度も聞く、指示動作困難等、点滴刺入部、心電図電極を不必要に触る、緊急入院、個室への移動、70歳以上、身体拘束、几帳面な性格、麻薬・精神薬服用中、脱水、疼痛、5時間以上の手術等があり、術後せん妄発症予測を行っていることが明らかとなった。今後、上記の項目を重視して術後の患者のケアに活かしていく必要性が示唆された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平、上野栄一、一ノ山隆司、明神一浩、福田弘子。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23. 臨床看護師が考える術後せん妄発症予防に関する看護実践について ―KH Coderを利用した分析―	―	平成23年12月	第11回富山大学看護学会学術集会抄録集 11 (1)， p38. 2011.	本研究目的は，外科病棟に勤務する看護師が術後せん妄発症予防のために取り組んでいる看護実践は何かを明らかにすることである．対象は病院外科病棟に勤務する看護師20名．調査方法は半構成的面接法を実施した．分析は記述統計，対応分析，階層的クラスター分析，共起ネットワーク分類を実施した．術後せん妄発症予防についての取り組みは「説明」「術前」「自分」「家族」などであった．階層的クラスター分析結果から，疼痛除去，十分な睡眠の確保，積極的離床に基づく生活リズムの再構築など8つのクラスターに分類された．抽出名詞の出現パターンの類似性を線で結んだ共起ネットワーク分類の結果から，看護師は術前に患者家族へ十分な説明の実施，術後における十分な睡眠確保などの看護実践に取り組んでいた．本研究結果から看護師は術前の段階より患者家族へ術後の環境および状況の変化について十分な説明を実施し理解を促す様に努めていたことが明らかになった． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一，一ノ山隆司，京谷和哉，上平悦子，梅林かおり．
24. 経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症予測要因の検討 ―データマイニングを用いたインタビューの分析―	―	平成23年12月	第31回日本看護科学学会学術集会講演集 , p393. 2011.	本研究の目的は，外科病棟での臨床経験豊富な看護師が考える術後せん妄の発症予測につながる前駆症状とは何かを明らかにすることである．対象者は2病院の外科病棟に勤務する経験豊富な看護師21名である．調査対象者へ認知症の併発がなく術後にせん妄を発症した患者を想起してもらい，術後せん妄発症予測に関するアセスメント内容について半構成的面接を実施し逐語録を作成した．分析方法は逐語録の言語すべてについて形態素解析分析を行い，記述統計および抽出した名詞について形態素間の共起関係を検証するため対応分析を実施した．術後せん妄発症前駆症状に関する発言を形態素解析した結果，総単語数33,447個より2,249個1,806種類±27.08 (mean±SD) の名詞を抽出．結果，70歳以上の高齢であることを前提とした上で眼に代表される【表情】言語・非言語的コミュニケーションを含む【コミュニケーション】家族のことを気にする，家族への面会要求等の理由により【安静保持不能】尿意，術後創部痛があるが対処できていないことによる【不快感】ガーゼ・ルート・ドレーン類が気になる等の【術後処置に伴う影響】の5つのカテゴリが生成された． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，上野栄一

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
25. 看護学生の授業における3e-Analyzer による学習効果	—	平成24年3月	日本看護研究学会 第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p37. 2012.	本研究の目的は新しい看護学生の授業における3eAnalyzerを用いての看護学生の授業における3eAnalyzerによる学習の効果を明らかにすることである。研究方法はα大学の授業で3eAnalyzerを用いて学生60名に調査を実施した。3eAnalyzerで答えることのできる質問を10項目設定した。分析方法はテキストマイニングによる単語解析、ことばのネットワーク分析、対応分析を実施した。結果、回収は49名、有効回答は44名であった。頻出単語は良い、楽しい、面白いなどの肯定的表現が上位を占めた。ことばのネットワークでは楽しい、良いという単語に参加できる、凄いいといった単語と連動していた。対応分析では「楽しい、参加できる」と「良い、授業、刺激」が抽出された。3eAnalyzerの使用した授業の感想について自由記載を分析したところすべてが肯定的な回答であった。3eAnalyzerの特徴である教員と学生が双方向でリアルタイムで回答表示でき学生へのフィードバックが即時にできることが学生の学習意欲を上げて高い肯定的評価を得た。 (データ収集・入力、データ分析を担当した。) 共著者：上野栄一、松浦純平、上平悦子。
26. テキストマイニングによる看護管理の研究の動向 — 過去 10年間の文献より —	—	平成24年3月	日本看護研究学会 第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p47. 2012.	本研究の目的はテキストマイニングを用いて看護管に関する国内文献の研究タイトルの分析から看護管理に関する研究の動向と今後の示唆を明らかにすることである。調査対象は検索結果から抽出した368文献の研究タイトルとした。分析方法は形態素解析、記述統計とコロケーション解析を行った。結果、368文献の研究タイトルを形態素解析した結果、総抽出語数は4250語、2226種類であった。高頻度に出現した単語に着目した結果、管理(22)管理者(18)看護部(10)新人看護師(6)研修(5)などが抽出された。早期離職予防に関する研究が多い結果であった。管理の単語に注目し、管理の先行と後続文脈(前後文脈)を抽出するため、コロケーション解析した結果、新人看護師を対象にした研修の研究、離職予防に関する研究が実施されていた。研修の前後文脈からはラダー制度や能力別研修などの文脈が得られた。本研究結果から今後、新人看護師の早期離職予防のための研修内容の充実を図りその後の評価を検証していく必要性が示唆された。 (文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。) 共著者：上野栄一、松浦純平、上平悦子、安東則子、八塚美樹、神保浩子。
27. 過去10年間の医療機関における暴力に関する研究の動向	—	平成24年3月	日本看護研究学会 第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p55. 2012.	本研究の目的は過去10年間におよぶ暴力に関する文献の特徴を明らかにして今後の暴力に対する看護への示唆を得ることである。対象は医学中央雑誌で過去10年間に発表された研究タイトル1700件を分析対象とした。分析方法は内容分析法を使用した。結果、暴力に関する研究は1508タイトルであった。対象をクラスター解析結果から「暴力の実態」「暴力予防」「暴力場面」「暴力防止」「DV被害」「暴力認知」「暴力の危機介入」の7つのクラスターを抽出した。暴力の実態を明らかにした研究や事例を通じて暴力行為に至る過程やせん妄による暴力を認知できない患者による暴力が問題になっていることが明らかになった。 (文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。) 共著者：明神一浩、上野栄一、松浦純平、上平悦子。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
28. テキストマイニングを用いた術後せん妄に関する研究論文タイトルの分析	—	平成24年3月	日本看護研究学会 第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p57. 2012.	本研究の目的は，我が国における術後せん妄に関する研究論文タイトルから研究の動向と課題を明らかにすることである。調査方法は医学中央雑誌を使用してキーワードは「術後せん妄」，絞り込みは看護と原著論文として，期間は1982年以前～2011年とした。調査対象は検索結果より抽出した129文献とした。分析方法は計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用した。記述統計，階層的クラスター解析，共起ネットワーク分類にて分析した。結果129本の論文タイトルを分析可能な意味をなす最小単位である形態素に解析した結果，総抽出語数は2,043語，420種類であった。そのうち抽出された名詞774個の中から高頻度に出現した名詞に着目した結果発症（44）要因（33）検討（30）予防（28）術前（16）分析（15）などであった。階層的クラスター解析の結果「関連分析」「リスク評価」，「実態調査」「予防効果の検討」の5個のクラスターに分類された。共起ネットワーク分類にて分析した結果，せん妄発症予防を重視した研究，患者の状態を日本語版NEECHAM混乱・錯乱スケールを用いて分析した研究に取り組んでいることが明らかになった。（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，梅林かおり，植木健康，安東則子，八塚美樹，上野栄一。
29. 臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールに関する分析	—	平成24年8月	第38回日本看護研究学会学術集会抄録集，p127. 2012.	本研究の目的は，術後せん妄アセスメントツールに関するニーズについて明らかにすることである。対象者は全国の19病院の外科病棟勤務の看護師725人。看護経験年数別に5群に分け，アセスメントツールの必要性，使用希望，項目数，所要時間を一元配置分散分析にて分析した。ツールが必要と回答した割合は85.5%，使用希望割合は82.5%，全体のアセスメントツール項目平均数は10.4項目，経験年数20年以上の群が平均21項目であった。経験年数別のアセスメントツール必要性，使用希望，所要時間に関する5群間の多重比較では有意差がなく，項目数の群間比較において，経験年数20年以上の群が他4群の全てと比較して有意な差が生じた。（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，梅林かおり，石澤美保子，京谷和哉，一ノ山隆司，上野栄一。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30. テキストマイニングを用いた周手術期における皮膚トラブルに関する 研究の動向と課題ー過去29年間の論文タイトルの分析ー	ー	平成24年8月	第38回日本看護研究学会学術集会抄録集, p141. 2012.	本研究の目的はテキストマイニング手法を用いて我が国における周手術期における皮膚トラブルに関する研究の動向と課題を論文タイトルから明らかにすることである。調査方法はWeb版医学中央雑誌を使用。検索キーワードは「手術室」「手術体位」とした。調査期間は1982年以前～2011年とした。調査対象は検索結果より抽出した93編。分析方法は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した。93編の論文タイトルについて形態素解析を実施し記述統計、階層的クラスター解析、共起ネットワーク分類を行った。形態素解析より総抽出語数1465語253種類を抽出した。抽出された名詞575語の名詞に関して記述統計の結果頻度順に手術（36）使用（24）体位（20）検討（13）などが抽出された。階層的クラスター分析より「発赤予防のための物品の工夫」「仰臥位時の皮膚調査」「褥瘡発生予防」「術中体位の工夫」「術中体位固定についての効果の検討」の5カテゴリーに分類された。周手術期看護において、褥瘡発生に代表される皮膚障害が問題視されている。本研究の分析結果から、術中同一体位による褥瘡発生予防に関して、物品を用いて様々な工夫を行い研究に取り組んでいた。 （文献収集、データ分析、考察の一部、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：西山和成, 松浦純平, 上野栄一.
31. 話し手の治療的コミュニケーション技法と非治療的コミュニケーション技法が聞き手の感情に与える影響ーPOMSを用いた調査からー	ー	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集, p33. 2012.	話し手のコミュニケーション技術が聞き手の感情にどのような影響を与えているかPOMSを用いて感情の変化を調べた。調査期間は平成23年10月。対象はα看護系大学学生20名に実施。方法は聞き手が治療的技法群と非治療的技法群に分けて実施した。質問は半構成的面接を用いた。治療的技法を用いた群は、非治療的技法を持ちいた群に比較して、D（抑うつー落込み）、A-H（怒りー敵意）、F（疲労）、C（混乱）の得点は有意に下がり、V（活気）の得点は逆に有意に上昇した（ $p<0.05$ ）。受容的態度をとる治療的コミュニケーション技術は、話し手の内容を聞き手が認めることを意味する。聞き手にとり自分の話す内容を話し手が受けとめてくれることは自分を理解してくれているという気も落ちが生じ心に快の状態を作り出すと考えられる。 （文献収集、データ分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一, 松浦純平.

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
32. コミュニケーションにおける話し手と聞き手の発話量の比較	—	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集, p51. 2012.	本研究では、コミュニケーションにおける話し手と聞き手の発話量の比較をし、特徴を明らかにすることを目的とした。調査期間は平成23年8月。対象は看護系大学の学生10名に実施した。方法は聞き手が治療的技法を用いる群と非治療的技法を用いる群に分けて実施した。2人の間の相互交渉内容を分析した。会話の内容について逐語録を作成後、両者の文字数をカウントして会話量とし、両者の会話量をMann-Whitney U-testにて分析した。治療的技法で話を聞いた聞き手は、非治療的技法を用いた聞き手よりも有意に高い発話量の変化を示した。また、非治療的技法では、話し手の治療的技法を用いた発話量に比べて少ない発話量の変化であった。話し手が治療的技法を用いた場合は、聞き手は、受容的な接し方に共感的理解が深まり、自分から話すモチベーションが高まったと考えられる。逆に話し手が非治療的技法を用いた場合は、聞き手は自分の意見を拒否されるため不快な感情が生じ話す気にはなれない気持ちになったと推察する。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：松浦純平、上野栄一。
33. EBNに基づいた会話分析とは何か	—	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集, p52. 2012.	本研究では、会話分析の方法について研究者らが用いている方法についてその特徴を明らかにすることを目的とした。会話分析の種類について、これまでの方法について、会話を分析するという視座にたち、その特徴を明らかにし、EBNに基づいた会話分析について示唆を得ることとした。テキストマイニングソフトを用いると、言葉とことばの関係性が一目瞭然にビジュアル化できる。たとえば「看護師はである」「看護師は優しい」といった会話例を分析すると次のようなスキーマに表わすことができる。これは共起分析とも呼ばれ、言葉のネットワークとして図式化できるので会話を可視化することができるので会話の構造を調べるのに適していると考ええる。最近では、コンピュータを利用したテキストマイニングのソフトが開発されている。電子化テキストの最小構成単位としての文字について、文字連鎖の出現頻度、あるいは文字の次に生起する文字の確率が算出できる。また、クラスター解析が可能となる。従来の質的研究と併用することにより信頼性のある精度の高い分析が可能になると期待される。 (文献収集、考察およびスライド作成の一部を担当した。) 共著者：上野栄一、松浦純平。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
34. 話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系と感情に与える影響	—	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会講演集, p206. 2012.	本研究の目的は、話し手のコミュニケーション技術が聞き手の感情にどのような影響を与えているか自律神経測定装置を用いて感情の変化を明らかにすることである。対象はα看護系大学学生20名に実施。方法は聞き手が治療的技法群と非治療的技法群に分けて実施した。質問票はPOMSで「気分の状態」を6尺度で測定治療的技法を用いた群は、非治療的技法を持ちいた群に比較して、D（抑うつ－落込み）、A-H（怒り－敵意）、F（疲労）、C（混乱）の得点は有意に下がり、V（活気）の得点は逆に有意に上昇した（ $p<0.05$ ）。受容的態度をとる治療的コミュニケーション技術は、話し手の内容を聞き手が認めることを意味する。聞き手にとり自分の話す内容を話し手が受けとめてくれることは自分を理解してくれているという気も落ちが生じ心に快の状態を作り出すと考えられる。 （文献収集、データ入力、データ分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一、松浦純平.
35. テキストマイニングによる術後せん妄アセスメントツールのニーズに関する自由記述の分析	—	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会講演集 p288. 2012.	本研究の目的は、臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールのニーズに関する自由記述内容をテキストマイニング手法から明らかにすることである。対象は全国の19病院の外科病棟に勤務する看護師725人。データ分析方法は記述内容を形態素解析、記述統計、コロケーション解析、クラスター分析、共起ネットワーク分類した。分析対象は、自由記述回答数51部。記述統計結果の頻出名詞は、せん妄、術後、アセスメントツール、使用、発見、対応、判断、必要、早期発見であった。アセスメントツールの前後文脈の意味内容を読み取る解析から「活用したい」「便利である」「リスク管理としても効果的」「術前から使用可能」などの文脈を得た。クラスター分析では「発症の早期発見」「予防」「臨床での活用」など5個のクラスターを抽出し共起ネットワーク分類から「予防効果」「リスクアセスメント」など7カテゴリーに分類された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平、一ノ山隆司、上野栄一.
36. テキストマイニング分析について	—	平成25年1月	第6回Project AKI全国集会p2. 2013.	大阪府内に勤務する臨床看護師を対象にした研修会にて新しい研究手法であるテキストマイニング法について事例に基づき説明した。具体的には、日本看護研究学会で口演発表したスライドを使用し具体的なポイントを示しながら実施した。結果、参加者から具体的な質問が出て本研究手法の興味の高さが明らかになった。 （本研究の代表者として研究に取り組んだ。）著者：松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
37. スピリチュアルケアに関する研究の動向	—	平成25年1月	日本がん看護学会誌 27 (1) , p269. 2013.	本研究の目的はテキストマイニングを用いてスピリチュアルケアに関する国内文献の研究タイトルの分析からスピリチュアルケアに関する研究の動向と今後の示唆を明らかにすることである。調査対象は検索結果から抽出した457文献の研究タイトルとした。分析方法は形態素解析，記述統計とコロケーション解析を行った。結果，457文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は4250語，2226種類であった。高頻度に出現した単語に着目した結果，スピリチュアルケア (42) 看護 (18) がん (10) ターミナル (6) 看護 (5) などが抽出された。スピリチュアルケアの精神面に関する研究が多い結果であった。スピリチュアルケアの単語に注目し，先行と後続文脈（前後文脈）を抽出するため，コロケーション解析した結果，スピリチュアルケアを対象にした研修の研究，スピリチュアルケアの実践に関する研究が実施されていた。本研究結果から今後，スピリチュアルケアのための研修内容の充実を図りその後の評価を検証していく必要性が示唆された。（逐語録作成，データ分析，考察の一部，スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，長光代，松浦純平。
38. テキストマイニングを用いたせん妄とメラトニンに関する研究の分析	—	平成25年8月	第39回日本看護研究学会学術集会抄録集, p267. 2013.	本研究目的はせん妄とメラトニンに関する英語文献の研究タイトルの分析から研究の動向と今後のせん妄看護への示唆を明らかにすることである。PubMedを使用しDelirium, Melatoninのキーワードとした。対象は検索結果から抽出した42文献の研究タイトルである。分析方法は研究タイトルをKH Coderを使用し形態素解析，記述統計，コロケーション解析を行った。結果，せん妄とメラトニンに関する研究は，1969年の1件から2004年の2件で増加傾向であった。42文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は870語，226種類であった。高頻度に出現した単語はDelirium (22) Melatonin (18) Postoperative (10) Patients (10) Sleep (6) など。Melatoninの単語に注目しMelatoninの先行，および後続文脈を抽出するためコロケーション解析した結果術前，術後におけるメラトニン分泌量の研究，サーカディアンリズムとメラトニン分泌量に関する研究が実施されていた周手術期におけるMelatoninの使用についてサーカディアンリズムとMelatonin分泌についての研究やMelatoninの分泌を促すことで患者を落ち着かせることができたなどの文脈が得られた。（本研究の代表者として，中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，吉岡一実。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
39. NANDA- I 看護診断における「急性混乱」の変遷およびその特徴について	—	平成26年7月	第20回日本看護診断学会学術大会抄録集, p112-113. 2014.	本研究の目的は、NANDA-Iの急性混乱の定義および診断指標・関連因子の各項目の記載内容を分析することです。せん妄の早期発見につながる観察の視点やケアへの示唆を得ることである。対象はNANDA- I 看護診断名の急性混乱とした。対象期間は1997-1998から2012-2014までとし、年度区分別に定義・診断指標・関連因子の各項目についてまとめた。結果、急性混乱の定義の変遷は、1997-1998から2012-2014までの間に3回変更されていた。1回目は1997-1998の「障害のクラスターの突然の発生」から1999-2000には「障害がひとかたまりになった」へ変更された。2回目は2005-2006の「注意，認知，精神運動性活動，意識レベル，そして／または睡眠／覚醒周期の包括的で一過性の変化および障害がひとかたまりになった突然の発生」から2007-2008「短時間で発達する，意識・注意・認知および知覚の可逆的な混乱の突然の発生」へ変更された。3回目は2009-2011「短時間で発達する，意識・注意・認知および知覚の可逆的な混乱の突然の発生」から2012-2014「短時間に進行する，可逆的な障害が意識・注意・認知・知覚に突然発症した状態」へ変更された。本研究では、看護診断を使用する看護師が共通認識の元で使用しやすいように定期的に見直しされており年々完成度が高まっていることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一。
40. Text miningを用いたディスコース分析	—	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集, p118. 2014.	テキストマイニング手法の紹介をした。本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである。研究対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語。方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した。分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した。具体的方法は記述統計，共起関係ネットワーク分類，コロケーション解析を実施した。結果はカウンセラーの発語総数は520種類，2,583語であった。カウンセリング中に高頻度に発語されていた単語に着目した結果，「うん」（50），「そう」（43），などが抽出された。関連の強い語同士を視覚的に表した共起関係ネットワーク分類の結果，会話中にカウンセラーは「うん」，「そう」，「ああ」という特徴的な相槌を多用していた。カウンセラーが話した「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」，「それだけでも十分だと思う」，「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった。ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった。 （本研究の代表者として研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，川野雅資。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
41. テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析	—	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集, p302. 2014.	本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである．研究対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語．方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した．分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した．具体的方法は記述統計，共起関係ネットワーク分類，コロケーション解析を実施した．結果はカウンセラーの発語総数は520種類，2,583語であった．カウンセリング中に高頻度に発語されていた単語に着目した結果，「うん」（50），「そう」（43），などが抽出された．関連の強い語同士を視覚的に表した共起関係ネットワーク分類の結果，会話中にカウンセラーは「うん」，「そう」，「ああ」という特徴的な相槌を多用していた．カウンセラーが話した「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」，「それだけでも十分だと思う」，「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった．ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，川野雅資，上野栄一．
42. テキストマイニングによる休職した看護師の復職に対する支援の実際	—	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集, p303. 2014.	メンタルヘルス不調によって休職した病院看護師の復職支援に関する実際を明らかにすることを目的とした．研究対象はA圏内の200床以上の総合病院102施設の看護管理とした．データ収集方法は質問紙調査票の自由記載項目である「看護師のメンタルヘルス不調者の復職において，どのような援助を行っているのか」に記述された内容である．データ分析方法は記述内容をKH Codeを使用して，形態素解析後，共起関係ネットワーク分析を実施した．記載内容を形態素解析した結果，総抽出語数は3,168語，675種類に分類された．共起関係ネットワーク分析の結果，[復職，本人，プログラム，支援，業務，職場]，[看護，勤務，調整]，[体制，サポート，休職，姿勢，相談，面談]，[専門，面接，必要，メンタル，不調]の語句の結びつきなどが明らかになった．そして，「職場復職支援プログラム」，「面談・相談」，「勤務調整」，「専門職によるフォロー」の4因子に分類された． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，大津聡美，遠藤加奈子．

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
43. メンタルヘルス不調によって休職した看護師への復職支援	—	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集, p328. 2014.	本研究の目的はメンタルヘルス不調によって休職した看護師の復職に関して看護管理者がどのような援助を行なっているのかを明らかにすることである。研究対象は某地方の精神科病院を除く200床以上の総合病院350病院とし、全体的に看護職員のことを把握している看護部長および管理職とした。データ収集方法は質問紙調査票の一部の自由記載文であり、「看護職のメンタルヘルス不調による休職後の復職に関してどのような援助を実施しているのか」についてである。データ分析方法は回答が得られた102件の記述内容をKH Codeにて分析した。記述内容を形態素解析した結果、総抽出語数は3,168語、675種類に分類された。高頻度に出現した単語に着目し記述統計を実施した結果、頻出順に「復職」(27), 「サポート体制」(25), 「本人」(23), 「休職」(19), 「プログラム」(16), 「メンタルヘルス」(16)等が抽出された。階層的クラスター分析では、5つのクラスターに分類され、看護管理者の復職支援に対する傾向が明らかになった。 (逐語録作成、データ分析、考察の一部、スライド作成の一部を担当した。) 共著者：一ノ山隆司, 松浦純平, 大津聡美, 遠藤加奈子.
44. テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング場面におけるカウンセラーの会話分析	—	平成26年12月	第3回ディスコース分析研究会抄録集, p28. 2014.	本研究の目的は、うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである。対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語。方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した。分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した。具体的方法は記述統計、共起関係ネットワーク分類、コロケーション解析を実施した。結果カウンセラーの発語総数は520種類、2,583語であった。「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果、ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」、「それだけでも十分だと思う」、「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった。ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった。本研究の結果よりうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴として以下の2点が明らかになった。1点目はカウンセラーのカウンセリング時のコミュニケーション技法としては効果的な相槌を打っていた。2点目は意図的にクライアントへポジティブな発言を投げ掛けることで承認をしていた。 (本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。) 共著者：松浦純平, 上野栄一, 川野雅資.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
45. 看護政策に関わる研究の動向について	—	平成27年2月	第28回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, P21. 2015.	本研究の目的は、過去の看護政策に関連する文献を分析し、その特徴を明らかにすることである。医学中央雑誌（Web版）にてキーワードとして看護政策も含む「医療政策」（1976～2014）（原著論文）とし検索した1030件の研究タイトルを対象とした。抽出された研究タイトル名を抽出し、テキストマイニングStudioにて、単語頻度分析、係り受け分析、共起分析、対応バブル分析をした。解析文章は、延べ単語数6593件であった。1) 単語解析では、頻度順に、日本80、研究66、現状62、検討61と続いた。係り受け頻度解析では、頻度順に18年度-診療報酬改定12、診療報酬改定-影響7と続いた。共起分析では、影響と診療報酬、「介護政策」「医療」が「実証的検証」と連動していた。「医療政策」と「転機」、「日本」と「米国」、「日本食品標準成分表」などが連動していた。対応バブル分析では、「医療政策、診療報酬改定、食事栄養基準」と「取り組む」、「検討」、「展望」の4つに分類された。 （データ分析、考察、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，成瀬早苗，増田安代， <u>松浦純平</u> ，内田真紀，山本勝也。
46. テキストマイニングを用いた看護診断に関する研究の分析	—	平成27年7月	第21回日本看護診断学会学術大会抄録集，p102-103. 2015.	本研究目的は、国内における看護診断に関する研究についてどのような視点で取り組まれているのかを明らかにすることである。検索データベース医学中央雑誌Web版Ver. 5を使用し、遡及期間は1976年以前から2015年とした。対象は看護論文，原著論文のみとした。検索キーワードは「看護診断」とした。検索結果から抽出した1,022文献の研究タイトルを対象とした。分析方法は研究タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し，形態素解析，記述統計，出現パターンの類似性を解析する目的にて，階層的クラスタ分析と共起関係ネットワーク分類を実施した。1,022文献の研究タイトルを形態素解析した結果，高頻度に出現した単語とし看護診断（792），看護（724），患者（280），などが抽出された。階層的クラスタ分析の結果，「標準計画ケア」，「看護診断」，「実習における看護診断」，「アセスメントの診断パターン」，「実態調査」の5つのクラスターに分類された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者： <u>松浦純平</u> ，上野栄一。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
47. テキストマイニングによる「先制医療」の視点からみたせん妄発症予防の実践	—	平成27年8月	第41回日本看護研究学会学術集会抄録集, p239. 2015.	本研究目的は、先制医療に基づいたせん妄に関する国内文献の研究タイトルを分析することで研究の動向と今後のせん妄看護への示唆を明らかにすることである。調査方法医学中央雑誌Web版Ver. 5を使用し、原著論文を対象にした。キーワードは「先制医療」、「せん妄」とした。調査対象は検索結果から抽出した196文献の研究タイトル。分析方法は研究タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し、形態素解析、記述統計、コロケーション解析、階層的クラスター分析、共起関係ネットワーク分類にて分析した。結果、196文献の研究タイトルを形態素解析した結果、総抽出語数は3682語、648種類であった。記述統計の結果、高頻度に出現した単語として、予防（90）、看護（86）、検討（32）、要因（27）などが抽出された。「ケア」と「取り組み」の単語に注目してコロケーション解析を行った結果、「ケア」については24編中9編が予防ケアに特化した関わりであった。「取り組み」については18編中10編が予防に関する取り組みであった。階層的クラスター分析の結果、6つのグループに分類された。（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平, 足日和美, 中上昌代, 上野栄一。
48. テキストマイニングによる日本国内における災害時の透析看護に関する研究の動向と課題	—	平成28年11月	第35回 日本看護科学学会学術集会講演集, p521. 2015.	本研究の目的は、先制医療に基づいた災害時の日本における透析看護に関する研究の動向と課題を明らかにすることである。対象は75文献とした。75文献を計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し、形態素解析、記述統計、コロケーション解析、階層的クラスター分析、共起関係ネットワーク分類にて分析した。結果「透析患者の災害発生時の具体的対策」、「災害発生時の対策に関する意識調査」の2つのカテゴリーに分類された。（文献収集、テキストマイニングでの分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：足日和美, 松浦純平。
49. 世界における嗅覚障害看護の現状と展望 —テキストマイニングによる定量的分析—	—	平成28年12月	第36回日本看護科学学会学術集会プログラム集, p91. 2016.	世界における嗅覚障害に関する看護論文の分析より本研究の目的は、嗅覚障害看護の現状と展望を明らかにすることである。対象は検索データベースPubMed。を使用し、キーワード検索はNursing, Olfactory Dysfunctionとした。調査対象は看護分野以外の論文11編を除いた25編とした。領域別分類では、老年15編、小児4編、母性3編、精神2編、成人1編であった。研究者の国別では、U. S. A 6編、JAPAN 4編、ITALY 3編、FRANCE 2編、AUSTRALIA 2編、CANADA 2編であった。テキストマイニングにて形態素解析の結果、総抽出語数1,449語、404種類、平均出現回数1.76回、標準偏差3.54であった。高頻度出現した単語は、Disease〈7〉, Older 〈6〉, Parkinson 〈6〉, Factors 〈4〉などであった。疾患別ではパーキンソン病が5編と最多であった。語の関係性を可視化する共起関係ネットワーク分類の結果、Disease, Older, Factorsがキーワードとして抽出された。抽出語を類似した語句に分類したクラスター解析の結果、4クラスターに分類された。看護の視点での介入についてはケアリングの観点に基づく看護に関する研究が1編であった。このことから今後は、有効的かつ具体的な看護援助に関する研究に取り組む必要がある。（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平, 上野栄一。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
50. テキストマイニングによる一次救命処置に関する看護の研究に関する動向と課題	—	平成31年3月	第32回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, P40. 2019.	本研究の目的は国内における一次救命処置に関する研究の動向と課題を明らかにすること。検索データベースは医中誌Webを使用。検索キーワードは「一次救命処置」, 「看護」とした。絞り込み条件は「看護文献」, 「原著論文」とした。遡及期間は1983年から2018年の35年間とした。対象は結果から得られた一次救命処置に関する論文261編のタイトルとした。分析方法は論文タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し多変量解析を実施した。総抽出語数63,775であった。異なり語数4,814であった。品詞別出現頻度は, 「看護」 (出現数1,177), 「看護師」 (400), 「教育」 (389), 「救急」 (349), 「心肺蘇生」 (307), 「BLS」 (258), 「救命処置」 (152), 「AED」 (120) などの順番であった。クラスター分析の結果, 「急変対応」, 「BLS受講」, 「学生演習」など6つのクラスターに分類された。共起関係ネットワーク分類の結果, 知識と技術, 対象と実施と結果, 看護師と調査, 調査と意識, 心肺蘇生と教育と救急と質問および評価の関係性が強い結果となった。自己組織化マップ分類の結果, 「患者・家族への急変対応」, 「心肺蘇生の教育と評価」など8つのクラスターに分類された。一次救命処置に関する研究は, 臨床看護師を対象とした研究と教育機関での教育として学生を対象とした研究に大別された。医療現場において救命処置が必要な場面に遭遇する確率は高い。救急処置の技術習得は, 非常に重要である。アメリカ心臓協会は, 医療従事者について一次救命処置の研修は2年に1回必ず受講するように提言している。技術習得は反復学習とシミュレーションとデブリーフィングが極めて重要であることが示唆された。共著者: 松浦純平, 守本とも子, 上野栄一。(本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。)
51. テキストマイニングを用いた災害看護における教育に関する研究の動向と課題	—	平成31年3月	第32回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, P44. 2019.	【目的】国内における災害看護教育に関する研究の動向と課題を明らかにすることである。 【方法】検索データベースは医中誌Webを使用した。検索キーワードは「災害看護」, 「教育」とした。絞り込み条件は「看護文献」, 「原著論文」とした。遡及期間は1983年から2018年までの35年間。対象は結果から得られた災害看護学に関する論文289編のタイトルとした。分析方法は論文タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderにて解析した。倫理的配慮として, 本研究で対象とした論文について, 個人名等が全て匿名化されていることを確認して研究に取り組んだ。COIは該当なし。 【結果】総抽出語数18,848であった。異なり語数7,537であった。品詞別出現頻度は, 「看護」 (出現数648), 「看護師」 (400), 「教育」 (389), 「救急」 (349), 「心肺蘇生」 (307), 「BLS」 (258), 「救命処置」 (152), 「AED」 (120) などの順番であった。クラスター分析の結果, 「比較研究」, 「学生対象の防災訓練」, 「災害の教育と調査」など4つのクラスターに分類された。共起関係ネットワーク分類の結果, 知識と技術, 対象と実施と結果, 看護師と調査, 調査と意識, 心肺蘇生と教育と救急と質問および評価の関係性が強い結果となった。自己組織化マップ分類の結果, 「患者・家族への急変対応」, 「心肺蘇生の教育と評価」など8つのクラスターに分類された。一次救命処置に関する研究は, 臨床看護師を対象とした研究と教育機関での教育として学生を対象とした研究に大別された。 【考察・結論】医療現場において救命処置が必要な場面に遭遇する確率は高い。救急処置の技術習得は, 非常に重要である。アメリカ心臓協会は, 医療従事者について一次救命処置の研修は2年に1回必ず受講するように提言している。技術習得は反復学習とシミュレーションとデブリーフィングが極めて重要であることが示唆された。共著者: 溝口みちる, 松浦純平。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
52. ト라우マに関する研究の特徴ーテキストマイニングの分析からー	—	平成31年3月	第32回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, P44. 2019.	本研究の目的はトラウマに関する研究の特徴を明らかにすることである。医中誌Web版にて1998年～2018年の文献について「トラウマ」「ケア」をキーワードに検索した。テキストマイニングを用い過去の143文献の抄録について単語解析、共起ネットワークにて分析した。単語頻度解析の名詞ではケア110、精神108、被害104、症状102、対象102、トラウマ89、心理89、ストレス85、家族80、災害73、子ども71、患者70、職場51、目的50、外傷47尺度44、要因41、障害40、職員40、保健40、暴力39事故35、心身34、長期32、リスク31、遺族31、医療31、傾向31、状態31、地域31と続いた。 サ変名詞では、調査138、支援126、影響112、研究95、実施76、体験73、関係70、関連67、被災63、看護62、検討61、治療59、活動51、示唆47、行動46、報告46、経験45、生活44、援助42、養育42、介入38、質問36、経過35、自殺32、分析32、評価31と続いた。共起ネットワークについて、【実態調査と対象者への影響と健康への支援】 〔ケア、支援、調査を中心に、精神、対象、精神、健康、実施、必要、目的など〕、【トラウマ体験とその症状】〔ケアは、心理、トラウマ、PTSD、症状、結果、体験、外傷、症状、PTSDなど〕、【子供の養育と虐待】〔子ども、虐待、養育が結びついていた〕、【地域保健活動】〔地域、保健、活動〕が結びついていた。本結果からは、トラウマに対する実態調査が進められ、その特徴としては、子供の虐待に関する研究、トラウマの影響としての症状、外傷、そして地域保健活動の取り組みが特徴となっており、トラウマとなっている対象者の理解と支援、また地域ぐるみの支援が必要であることが示唆された。 共著者：上野栄一, 藤本ひとみ, 松浦純平.

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 美甘 祥子

研 究 分 野		研究内容のキーワード	
母性看護学		妊娠期の看護支援、出生前診断	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事項		年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1. 母性看護学援助論		2017 年 ～現在	産褥期・新生児期の対象について、最近の動向を踏まえながら、具体的な援助方法について解説を行った。国家試験対策も兼ねた小テストを行うことで知識の定着を促し、実習につながるような演習を行うことで補完した。
2. ウィメンズヘルス学		2017 年 ～現在	女性のライフサイクル各期の特徴、健康問題・課題、健康に影響を及ぼす要因を、健康を支援するための基礎となる理論を用いながら解説を行った。エビデンスとなるデータを用い、対象の理解が深まるように工夫した。一方的な講義とならないように、学生が発言する場面を設けたり、グループワークを行うことで参加型の講義とした。
3. 助産診断・技術学Ⅱ		2017 年 ～現在	産婦の分娩経過や胎児の状態が、正常であるか否かについて独自に判断するための基礎的知識に関しては、学生が理解しやすいように独自の資料を作成し授業を展開した。娩期の助産過程の展開では、産婦や家族にとって安全で満足度の高い分娩となるためには、どのような助産ケアを行うと良いのかを考える機会を持つようにした。正常分娩の介助方法では、技術のエビデンスを具体的に説明するようにした。
4. 助産診断・技術学演習		2017 年 ～現在	分娩期の対象の事例展開と分娩介助技術習得のための技術演習を行った。実践にそくした具体的な事例を用い、エビデンスに基づいた助産診断展開能力を養うようにした。さらに、グループ討議を行い、知識の定着と問題解決能力の向上を目指すようにした。
5. 卒業研究Ⅱ		2017 年 ～現在	ゼミ形式で、学生同士が意見交換をし、知識や看護観が深まるようにしている。
6. 育成看護学特論Ⅱ		2018 年	教員 3 名でのオムニバス形式で 2 コマを担当した。今までの看護経験をもとに次世代育成のための看護実践を考えることができるように参加型の講義を行った。
2 作成した教科書、教材 1. 生命倫理 教科書		2014 年	将来人間とかかわるコメディカル領域の職業や子供たちの教育にあたる教員職に就く学生とともに生命倫理について考えるための教材として作成した。
2. 助産学実習要綱・要項・記録		2014 年	畿央大学助産学専攻科で既存の実習要綱・要項・記録を見直し、学生の特徴をふまえて、有効な学びができるように作成した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1. 厚生労働省看護研修研究センター 看護教員養成課程 修了		2006 年	看護教育に必要な知識・技術・態度に関して研修を受けた。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1. 大和高田市立看護専門学校 非常勤講師		2014 年～ 現在	母性看護方法Ⅰ 遺伝相談について 1 コマの講義を行った。
2. 看護教育課程研修会（京都） 非常勤講師		2012 年	母性看護教育計画 実習計画について 2 コマの講義を行った。
3. 学校法人古沢学園広島都市学園大学 看護学科 非常勤講師		2011 年～ 2013 年	発達看護学-リプロダクティブ・ヘルスと看護理論-において 15 コマの集中講義を行った。
5 その他			

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 資格, 免許 1. アドバンス助産師 CloCMIP レベルⅢ 認証 2. ALSO 認定 3. 新生児蘇生法 A コース 認定 4. 保健師免許 5. 助産師免許 6. 看護師免許		2016 年 2016 年 2015 年	助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）レベルⅢの認証を受けた。 周生期医療支援機構でプロバイダーコースを受講し認証を受けた。 日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法 A コースの修了認定を受けた。	
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1. 科学研究費助成事業 基盤研究 C 研究分野：生涯発達看護学 2. 科学研究費助成事業 若手 (B) 研究分野：生涯発達看護学		2015 年～2018 年 2012 年～2015 年	出生前診断を希望する妊婦と夫への意識調査（2015 年 4 月～2018 年 3 月） 母体血清マーカー検査で陰性と判定された妊婦の不安に関する研究（2012 年 4 月～2015 年 3 月）	
4 その他 1. 奈良県看護協会 助産師職能委員 2. 第 32 回日本助産学会学術集会プレコンgres 実行委員 3. 第 19 回日本母性看護学会学術集会 実行委員 4. 第 40 回日本看護研究学会学術集会 拡大実行委員		2018 年～2018 年 2017 年 2014 年	助産師職能委員として委員会に参加し、研修の企画・運営を行った。 プレコンgres 3「子育て世代包括ケアシステム時代に求められる助産の力ー助産実践能力育成を考えるー」の運営をサポートした。 学術集会において学会運営をサポートした。 学術集会において学会運営をサポートした。	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 学生と考える生命倫理	共著	2014 年 4 月	ナカニシヤ出版	第 2 部各論 いのちに関する倫理 4 生殖に関する倫理を担当した。 ◎金子章道, 金内雅夫, 河野由美, 美甘祥子(pp34-46), 他 11 名
(学術論文) 1. 妊婦と夫への出生前診断の認知度に関する調査研究 (査読付き)	共著	2018 年 2 月	医療福祉情報行動科学, 5, pp27-34.	妊娠 22 週以降の妊婦と夫 192 組を対象に, 出生前診断の認知度と情報源を調査した。出生前診断に関する具体的な知識を持つ者は少なかった。夫は出産前診断に関する情報源を「パートナーから」と回答した割合が高かった多かった。妊婦も夫も情報源で医療者と回答した割合は 1 割以下であった。妊婦だけではなく, 妊婦と夫の両方に, 知識の程度を確認しながら出生前診断に関しての情報提供をする必要がある。 ◎美甘祥子, 中塚幹也
2. (2017) : Non-invasive prenatal testing (NIPT) 受検時の心理カウンセリングに対する妊婦の意識調査 (査読付き)	共著	2017 年 5 月	インターナショナル Nursing Care Research, 16 (2) , pp1-9.	妊婦 557 人を対象に, NIPT を受検する際の心理カウンセリングの希望を調査した。NIPT を受検する際に, 心理カウンセリングを 7 割が希望し, 検査前や検査結果説明時だけではなく, 全ての期間で心理カウンセリングを希望していた。助産師は, 研修などにより遺伝に関する知識を高めるとともに, 心理カウンセリングができることを妊婦に周知することも必要である。 ◎美甘祥子, 中塚幹也

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. フリースタイル分娩の分娩体位が産婦に与える影響と助産師の見解に関する文献検討	共著	2017 年 3 月	奈良県母性衛生学会雑誌, 30, pp35-37	フリースタイル分娩に助産師が感じている困難感について 10 件の原著論文を検討した。病院に勤務する助産師は、フリースタイル分娩について、【教育】 【設備・環境】【人的問題】に困難感を感じていた。病院でフリースタイル分娩を促進していくために、助産師の学ぶ意欲を高め、知識を向上させ、妊娠期から継続的な関わりが重要である。 ◎藤井智子, 池田実瑠, 美甘祥子
4. A 県における小児訪問看護の受け入れの実態と課題 (査読付き)	共著	2017 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究 4, pp37-42	小児訪問看護を実施する 34 施設を対象に、小児訪問看護の実施状況と課題を明らかにすることを目的に調査を行った。小児訪問看護の依頼元で「家族」は 3 割であった。小児訪問看護を行う上で「家族のサポート」に最も困難さや大変さを感じていた。小児訪問看護を実践する看護師の育成とサポート体制の構築が必要である。 ◎美甘祥子, 原朱美
5. A 県における小児訪問看護の受け入れ拡充に向けた検討 (査読付き)	共著	2017 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究 4, pp3-9	訪問看護ステーションの施設長 110 名を対象に、小児の訪問看護の受け入れが困難な施設の実態と課題を明らかにすることを目的に調査した。小児訪問看護を受け入れていない理由は、「小児看護の経験のある看護師がいない」が最も多かった。小児訪問看護の拡充に向けて必要な支援で「家族との対応」は訪問なし群に有意に高かった。家族との対応を含めた小児看護技術の習得とマンパワーの確保が課題である。 ◎原 朱美, 美甘祥子
6. 生後 4 か月までの児を持つ父親の育児・家事行動と育児ストレスに関する文献レビュー (査読付き)	単著	2016 年 11 月	インターナショナル nursing care research, 15(3), pp143-151	生後 4 か月までの児を持つ父親の育児参加の促のための支援について 16 文献を検討した。父親の育児ストレスの要因に、【育児の大変さと疲労】【育児不安】【戸惑い・困惑】【父親責任】【夫婦関係】【経済的・社会的状況】が抽出された。父親の育児参加を促すためには、心身へのサポートが重要である。 ◎美甘祥子
7. 日本人妊婦における障がいを持つ子どもへの意識と非侵襲的出生前遺伝学的検査 (Non-invasive prenatal testing; NIPT) への意識との比較 (査読付き)	共著	2016 年 7 月	母性衛生, 57(2), pp323-331	NIPT への意識と障がいを持つ子どもへの意識との関連を検討し、495 部を分析した。NIPT が陽性であった場合に「羊水検査を受けずに妊娠をあきらめる」と回答した率は、障がいを持つ方が「近親者にいる」群に高かった。障がいを持つ子どもへの意識は、NIPT 受検やその後の対応への意識に関連することを念頭にサポートを行う必要がある。 ◎美甘祥子, 中塚幹也
8. 母体血清マーカー検査の結果が陰性であった褥婦の胎児への不安や検査への認識 (査読付き)	共著	2016 年 5 月	インターナショナル nursing care research, 15(2), pp23-32	母体血清マーカー検査で陰性と判定された褥婦が、どのような不安や認識を抱いていたのかを明らかにした。12 名に半構造的面接を行ったデータを自動言語解析した。「思う」と係り受けの関係にある単語は、「大丈夫」「マーカー検査」「不安」の順に多かった。予想する結果と異なる場合は心理的負担が大きいと推測され、サポートが必要である。 ◎美甘祥子, 杉山智春, 谷口光代

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9. 助産師が妊婦健康診査で用いる超音波検査におけるケアの概念分析 (査読付き)	共著	2015 年 10 月	インターナショナル nursing care research, 14(3), pp97-103	助産師が用いる超音波検査におけるケアについて Walker らの概念分析を用い 10 件の原著論文を分析した。「胎児や妊娠経過の診断」「保健指導」「胎児への愛着形成へのケア」「精神面へのケア」「コミュニケーションの手段」と再定義した。助産師は、母児の健康状態の診断と、検査結果をもとに保健指導を行っていた。 ◎美甘祥子, 杉山智春, 谷口光代
10. 母体血清マーカー検査の結果が陰性であった女性の思い (査読付き)	共著	2015 年 9 月	ヒューマンケア研究学会誌, 7(1), pp45-5	母体血清マーカー検査受検時の思いを明らかにすることを目的に、女性 12 名に、半構造化面接法を行い、質的帰納的に分析した。【結果による安心感】【安易な動機】【家族と同じ価値観】の 3 つのカテゴリーと、それを構成する 8 つのサブカテゴリーが抽出された。女性と家族の価値観が異なる場合にも、十分なサポートが必要である。 ◎美甘祥子, 井田歩美
11. Knowledge and attitude with regard to non-invasive prenatal testing among pregnant Japanese women (査読付き)	共著	2015 年 6 月	Acta Medica Okayama, 69(3), pp155-163	Non-Invasive Prenatal Test (NIPT) に関してどのような知識や意識を持っているかを明らかにすることを目的に、妊婦に無記名自記式質問紙調査を施行し、557 部を分析した。NIPT の導入に賛成の妊婦は高率であったが、知識は十分ではなかった。NIPT を受けてから、その結果の重大性に気づくことがないように情報提供を十分に行う必要がある。 ◎Mikamo S., Namatuka M.
12. 医療施設で働く助産師への業務拡大に関する意識調査 (査読付き論文)	共著	2014 年 3 月	インターナショナル nursing care research, 13(2), pp9-18	医療施設で働く助産師の医療処置に関連した業務拡大への意識を明らかにすることを目的に、助産師に、無記名自記式質問紙調査を施行し、331 部を分析した。会陰切開・縫合の施行に積極的ではなかった。助産師教育で助産に必要とされる医療処置に関して教授し、業務拡大のメリットが認識できるようにし意識改革を行う必要がある。 ◎杉山智春, 谷口光代, 内田みさと, 美甘祥子, 丸山幸三
13. 女子大学生の子宮頸がん予防に関する調査-性交経験と、知識、子宮頸がん予防行動との関連- (査読付き)	共著	2013 年 3 月	近代姫路大学紀要, 5, pp75-84	女子大学生の性交経験の有無と、子宮頸がんに関する知識や、子宮頸がん検診受検、HPV ワクチン接種の関連を明らかにすることを目的に無記名自記式質問紙調査を実施し 217 人を分析した。HPV 感染リスクが高いことを自覚してもらい、性交経験がある者には子宮頸がん検診の受検を、性交経験がない者には HPV ワクチンの接種を勧める必要がある。 ◎美甘祥子, 杉山智春

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
14. 妊娠前の20～30歳代就労女性の食習慣、やせに関する知識、価値観の実態 やせ体型群と普通体型群の比較 (査読付き)	共著	2013年1月	母性衛生, 53(4), pp522-529	妊娠前の20～30歳代就労女性の食習慣と、やせに関する知識、食事及び健康に関する価値観の実態を明らかにすることを目的に、無記名自記式質問紙を用い調査し、448部を分析した。やせの影響に関する知識の普及と、自身の健康と次世代の健康のために食習慣が大切であるという価値に働きかける健康教育が効果的であることが示唆された。 ◎美甘祥子, 町浦美智子, 佐保美奈子
15. 妊娠前の看護師のやせの影響や葉酸に関する知識と食習慣の実態 妊娠前の一般職との比較 (査読付き)	共著	2012年2月	日本看護学会論文集:母性看護, 42号 pp92-95	妊娠前の20～30代の看護師のやせの影響に関する知識と食生活の実態を把握することを目的に、一般病棟に勤務する20～30代の看護師133名を対象に質問紙調査を行い、同年代の就労女性474名と比較検討した。看護師も一般就労女性も全体の2割がやせ体型であり、栄養バランスを考えている者の割合は高かったが、食行動が必ずしも伴っていなかった。 ◎美甘祥子, 町浦美智子
(その他)				
1. 運動に関するソーシャルメディアへの書き込みの分析	共著	2019年3月	第33回日本助産学会学術集会, 福岡	運動に関する妊婦保健指導の実践に向けた妊婦の情報ニーズを明らかにすることを目的に、妊婦の発言内容764件を分析した。運動に関しての情報ニーズは妊娠10カ月以降に高まっていた。運動の効果や方法だけでなく、運動をしても良いかの身体的状態かの判断へのニーズがあることが明らかとなった。 ◎美甘祥子, 井田歩美
2. 日本最大ウェブサイトにおける妊婦の情報発信の実態 レスポンスの多い話題の分析	共著	2019年3月	第33回日本助産学会学術集会, 福岡	ウェブサイトコミュニティでの発言117,160件でレスポンスの多い話題を分析し、妊婦の情報発信の実態を明らかにすることを目的とした。マタニティハラスメント事案やドメスティックハラスメント事案などがあつた。妊婦同士の井戸端会議の場としての利用が専門職者による介入の必要性があるものより多いことが明らかとなった。 ◎井田歩美, 美甘祥子, 片岡久美恵, 川崎千春
3. 妊婦と夫の出生前診断を受けるか否かの話し合いに関する実態調査	共著	2018年12月	第38回日本看護科学学会学術集会, 松山	出生前検査を受けるか否かの話し合いで話した内容明らかにすることを目的に妊娠22週以降の妊婦と夫178組を調査した。検査の詳細や検査後の対応について話し合った割合は低かった。医療職者は、検査の詳細や検査後の対応について十分に話し合う機会を設ける支援が必要である。 ◎美甘祥子, 中塚幹也

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. ソーシャルメディアにおける予定帝王切開に関連した発言内容の分析	共著	2018 年 12 月	第 38 回日本看護科学学会学術集会, 松山	ソーシャルメディア上の予定帝王切開術に関する 242 件の発言内容を分析し情報ニーズを概観した。前回帝切となった経産婦が今回の出産で予定帝切を選択したものの不安や疑問が生じ、それを軽減、解決を図るために情報提供を求めている実態が明らかとなった。予定帝切を受ける女性に特有の不安に寄り添い、個別性に応じた情報を提供する必要性が示唆された。 ◎井田歩美, 美甘祥子, 片岡久美恵, 藤井弓加
5. 出生前診断を受けるか否かの話し合いに必要な知識の程度に関しての妊婦と夫の比較	共著	2018 年 10 月	第 59 回日本母性衛生学会学術集会, 新潟	妊婦と夫の出生前診断を受けるか否かの話し合いで必要な知識を明らかにすることを目的とし、妊娠 22 週以降の妊婦と夫有効回答は 179 組に調査をした。出生前診断の受検経験がある 3 割の妊婦、半数の夫は話し合いをするための知識が不十分と思っていた。妊娠初期までに、妊婦と夫が正しい知識を持つことができる教育・情報提供のシステム作りが必要である。 ◎美甘祥子, 中塚幹也
6. ソーシャルメディアにおける緊急帝王切開に関連した発言内容の分析	共著	2018 年 10 月	第 59 回日本母性衛生学会学術集会, 新潟	妊婦・褥婦がソーシャルメディア上で発言した緊急帝王切開に関する内容 104 件を分析した。予定されている帝王切開術に対する不安を挙げて、同様の体験をした人からの体験談やアドバイスを求めている。緊急帝王切開となった場合に、出産の肯定的受容促進への支援の必要性が示唆された。 ◎井田歩美, 美甘祥子, 片岡久美恵, 川崎 千春, 藤井弓加
7. 妊婦と夫への出生前診断に関する認知度と知識の実態調査	単著	2018 年 3 月	第 32 回日本助産学会学術集会, 横浜	出生前診断の認知度と知識について明らかにすることを目的に、192 組の妊婦と夫に調査をした。妊婦と夫の出生前診断の認知度は高いが、具体的な知識を持っている者が少なく、医療者から情報を得ている割合が低かった。 ◎美甘祥子
8. 妊娠後期にある妊婦の情報ニーズに関する研究 日本最大ウェブサイトにおける発言の分析	共著	2018 年 3 月	第 32 回日本助産学会学術集会, 横浜	ウェブサイト上で妊娠後期の妊婦が発言した内容 3,799 件を分析し情報ニーズの可視化を目的とした。妊婦は一定の情報では判断しきれないことに対して、自分以外の妊婦の意見を参考にして、疑問の解決や不安の軽減に努めていることが明らかとなった。医療者は、より具体的に個別性に配慮した情報提供を行うとともに、妊婦の不安に寄り添う姿勢の重要性が示唆された。 ◎井田歩美, 美甘祥子, 片岡久美恵
9. 妊婦の無痛分娩に関するソーシャルメディアへの書き込みの分析	共著	2017 年 12 月	第 37 回日本看護科学学会学術集会, 仙台	無痛分娩に関する妊婦のソーシャルメディア上での発言 125 件を、情報ニーズを明らかにすることを目的に分析した。無痛分娩を選択するための情報だけではなく、無痛分娩時への不安の対処方法に関して情報を求めている。無痛分娩の具体的な方法だけではなく、精神的な援助も必要であることが示唆された。 ◎美甘祥子, 井田歩美

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10. 妊娠中期にある妊婦のソーシャルメディアにおける発言内容から分析した不安の可視化	共著	2017 年 12 月	第 37 回日本看護科学学会学術集会, 仙台	ソーシャルメディアで発言された妊娠中期にある妊婦の不安 284 件を分析し、可視化することを目的とした。妊娠中期の妊婦がソーシャルメディアの利用により解決したい不安は、切迫早産、妊娠糖尿病や感染症といった妊娠異常に関するものが多かった。妊婦健診では、健診結果について、妊婦が十分に理解、納得できているのかを確認する必要性が示唆された。 ◎井田歩美, 美甘祥子
11. 妊娠中期にある妊婦の情報ニーズに関する研究 ソーシャルメディアにおける発言内容の分析	共著	2017 年 9 月	第 58 回日本母性衛生学会学術集会, 神戸	妊娠 5～7 か月の妊婦がコミュニティサイト上で発言した内容 4,876 件の情報ニーズを可視化するために分析を行った。妊娠中期の妊婦の情報ニーズは腹部緊満や胎動に関して不安や疑問を感じていることが明らかとなった。具体的な情報提供とともに、妊婦の不安に寄り添う姿勢の重要性が示唆された。 ◎井田歩美, 美甘祥子, 片岡久美恵
12. Visualization of Child Care Information Needs of Mothers with Infants—Comments’ Analysis on Japan’ s Largest Website—	共著	2017 年 6 月	31ST ICM Triennial Congress , Canada.	The purpose was to visualize the child care information needs of mothers with young children. It is important to increase the health literacy and enable mothers to assess the quality of child care information and select what they need as this allows for better development in child-rearing behavior. ◎Ida A., Mikamo S.
13. 高年妊婦における出生前診断に関する情報ニーズの明確化—初産婦と経産婦の比較—	共著	2017 年 6 月	第 19 回日本母性看護学会学術, 西宮	高年妊婦がソーシャルメディア上で発言した出生前診断に関しての内容 182 件を分析し、初産婦と経産婦が求めている情報ニーズを明らかにすることを目的とした。初産婦と経産婦では検査方法によって発言頻度が異なっており、医療者は対象に応じた情報提供が必要であることが示唆された。 ◎美甘祥子, 井田歩美
14. Qualitative analysis of material posted to social media on prenatal diagnosis by mid-life expectant mothers,	共著	2017 年 3 月	20th EAFONS, Hong Kong	母体血清マーカー検査で陰性と判定された 12 名の女性の不安や認識を明らかにすることを目的としてインタビューを行った。検査でわかる確率よりも、医療者の「大丈夫」という言葉を判断の基準にしていた。比較的年が若い女性に、結果が判明するまでに不安を抱く者もいたことから、年齢、背景に関係なく精神的なケアを行う必要がある。 ◎Mikamo S., Ida A.
15. 高年妊婦の出生前診断に関するソーシャルメディアへの書き込みの分析	共著	2017 年 3 月	第 31 回日本助産学会学術集会, 徳島	高年妊婦が、ソーシャルメディアを利用して出生前診断に関して発言した内容 181 件を分析し、出生前診断に関する関心やその内容を明らかにすることを目的とした。「羊水検査」「胎児ドック」「NIPT」への関心が高かった。出生前診断を希望する妊婦の個々のニーズを十分に把握し、適切な情報を提供する必要がある。 ◎美甘祥子, 井田歩美

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
16. 妊娠初期にある妊婦の情報ニーズに関する研究 日本最大ウェブサイトにおける発言の分析	共著	2017 年 3 月	第 31 回日本助産学会学術集会, 徳島市	妊娠初期にある妊婦の情報ニーズを可視化することで, 具体的な妊婦保健指導の実践に向けた基礎的資料とすることを目的に妊娠 4 か月までの妊婦の発言 2,837 件を分析した。妊娠初期における妊婦の情報ニーズは, 病院選び, つわり, 悪阻, 切迫流産など不定愁訴や妊娠異常に関するものが多くみられた。 ◎井田歩美, 美甘祥子, 片岡久美恵
17. 高齢出産となる女性の情報ニーズ -ソーシャルメディアにおける発言のテキストマイニングによる分析-	共著	2016 年 10 月	第 57 回日本母性衛生学会, 東京	高齢妊婦の情報ニーズを明らかにすることを目的に, 2013 年 1 月~2015 年 12 月の発言タイトル 1,242 件を Text Mining Studio を使用し分析した。単語の出現頻度は, 「病院」が最も多く抽出された。医療職者は, 高齢妊婦に, 適切な時期に情報を提供する必要がある。 ◎美甘祥子, 井田歩美
18. ソーシャルメディアによる意見交換が及ぼす乳児をもつ母親の育児への効果	共著	2016 年 10 月	第 57 回日本母性衛生学会, 東京	ソーシャルメディアでの意見交換が母親の心理状況に及ぼす影響を明らかにする。2011 年 4 月~2012 年 3 月の発言 31,801 件を, Text Mining Studio5.2 で分析した。「良い」「参考」「頑張る」が多く抽出された。母親のコミュニティを有効な育児支援へと活用する必要がある。 ◎井田歩美, 美甘祥子
19. Anxiety about the fetus and awareness of testing in puerperal women with negative results on the maternal serum screening	共著	2016 年 3 月	19th EAFONS, Chiba, Japan	マーカー検査で陰性と判定された褥婦の認識を明らかにすることを目的とした。12 名の半構造的面接を自動言語解析した。年齢が若く「大丈夫」と思い検査を受ける者もいた。結果判明までに「不安」を抱く者もあり, 年齢や背景に関係なく精神的なケアを行う必要がある。 ◎Mikamo S., Sugiyama C., Taniguchi M.
15. Awareness survey of pregnant Japanese women towards psychological counselling during non-invasive prenatal testing (NIPT)	共著	2015 年 7 月	ICM, 2015, Yokohana, Japan	妊婦が希望する心理カウンセリングの内容とその時期を明らかにすることを目的とし, 妊婦 557 人を調査した。NIPT を受検する際に, 心理カウンセリングを 69.8%が希望していた。助産師は NIPT に関する知識を深め, 心理的なサポートを行っていくことが必要と考える。 ◎Mikamo S., Nakathuka M.
16. Changes in the Image of Examination Table and Sense of Shame of Female University Students Before and After Experiencing the Lithotomy position on Gynecological Examination Tables	共著	2015 年 7 月	ICM, 2015, Yokohana, Japan	看護学生 80 名が砕石位を体験し, 診察台のイメージや羞恥心の変化を検討した。産婦人科診察台イメージは「情動イメージ」「体感イメージ」「緊張的イメージ」「見た目イメージ」の 4 因子が抽出された。産婦人科診察台に対してマイナスイメージが強い場合は, 羞恥心が強くなる傾向にあり, 配慮が必要である。 ◎Nakai Y., Mikamo S.

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17. 助産師の業務拡大に対する医療施設で働く助産師への意識調査（第2報）	共著	2014年11月	第34回日本看護科学学会，名古屋	医療施設で働く助産師が，会陰切開や縫合，等の医療処置等の業務の拡大に対して，肯定的に考えているのかを明らかにすることを目的に，無記名自記式質問紙調査を行い，701部を分析した。助産師教育で助産に必要とされる医療処置に関して教授し，業務拡大することのメリットが認識できるようにし意識改革を行う必要がある。 ◎杉山智春，内田みさと， <u>美甘祥子</u>
18. 無侵襲的出生前遺伝学的検査（NIPT）と羊水検査に対する妊婦の意識調査	共著	2014年9月	第55回日本母性衛生学会，幕張	NIPTで陽性と判定された場合に，羊水検査を受けるかどうかの意思決定に影響する要因を明らかにすることを目的に，妊婦に質問紙調査を行った。有効回答557人であった。NIPTの検査前の説明には，妊婦だけでなく夫にも同席してもらい，陽性と判定された場合に羊水検査で診断を行なう必要があることが明らかとなった。 ◎ <u>美甘祥子</u> ，中塚幹也
19. 女子大学生の産婦人科診察での載石位体験前後の羞恥心比較と対人恐怖との関連	共著	2014年3月	第28回日本助産学会，長崎	砕石位をとることで生じる羞恥心の程度と，羞恥心の要因の内である対人恐怖の関連を明らかにし，産婦人科診察台に關しての看護への示唆を得ることを目的とした。看護学生80人に準実験研究を行った。産婦人科診察台での砕石位体験前後の状態羞恥感情測定尺度の総数に変化はないこと，対人恐怖が強い場合は羞恥心も強いことが明らかとなった。 ◎中居由美子， <u>美甘祥子</u> ，鷺尾弘江
20. 母体血を用いた新しい出生前遺伝学的検査に対する妊婦の意識調査	共著	2013年10月	第54回日本母性衛生学会，大宮	妊婦がNIPTに関してどのような知識や考えを持っているかを明らかにし，必要な援助の示唆を得ることを目的に，無記名自記式質問紙調査を行い，271名から有効回答を得た。妊婦のNIPTへの関心は高いが，検査内容や結果についての知識は十分とは言えず，正しい情報へアクセスできるように支援することが必要であることが明らかとなった。 ◎ <u>美甘祥子</u> ，片岡久美恵，中塚幹也
21. 招待講演 新型出生前検査：日本人妊婦の意識調査	単著	2013年7月	公開シンポジウム「生と死の倫理」，岡山	研究協力の同意が得られた施設において妊婦健診を受けている妊婦に無記名自記式質問紙調査を行った結果をも発表した。 ◎ <u>美甘祥子</u>
22. 女子大学生の子宮頸がん予防に関する調査(第2報) 性交経験と知識および子宮頸がん予防行動との関連	共著	2012年11月	第53回日本母性衛生学会，福岡	女子大学生の子宮頸がん細胞診受検およびHPVワクチン接種の実態と，子宮頸がんに関する知識，性的自己意識・性的リスク対処意識を明らかにすることを目的に自記式質問紙調査を行い217人を分析した。8割の女性がHPVに感染するが，子宮頸がんは予防できる癌であるということを周知し，さらに，自身の性に関する意識を高める性教育を行うと効果的であることが示唆された。 ◎杉山智春， <u>美甘祥子</u>

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23. 女子大学生の子宮頸がん予防に関する調査(第1報) 予防行動と知識および性的リスク対処意識との関連	共著	2012 年 11 月	第 53 回日本母性衛生学会，福岡	女子大学生の性交経験の有無と，子宮頸がんに関する知識や，子宮頸がん細胞診（細胞診）受検，HPV ワクチン接種の関連を明らかにすることを目的に自記式質問紙調査を行い 217 人を分析した。HPV ワクチンを初交前に接種することが有効であることを周知する必要がある。さらに，性交経験者には，細胞診の方法や費用の助成など具体的な内容を説明する必要があることが示唆された。 ◎ <u>美甘祥子</u> ，杉山智春
24. BMI やせの 20～30 歳代就労女性の食習慣，やせと葉酸に関する知識，価値観の実態	共著	2011 年 9 月	第 52 回日本母性衛生学会，京都	妊娠前 20～30 歳代就労女性の食習慣，やせと葉酸に関する知識，食事に対する価値観及び自身の健康や次世代の健康に関する価値観について質問紙調査を行った。BMI やせ 95 人と普通 339 人を比較した。食習慣を整えることは次世代の子どもの健康だけでなく，自身の健康にも影響するという価値に働きかける必要があることが示唆された。 ◎ <u>美甘祥子</u> ，町浦美智子
25. 妊娠前の看護師のやせの影響と葉酸に関する知識，価値観と食習慣との関連	共著	2012 年 8 月	第 42 回日本看護学会母性看護，東京	妊娠前の 20～30 歳代の看護師を対象とし，やせと葉酸に関する知識と食習慣の関連，食習慣に対する価値観と食習慣について質問紙調査を行った。看護師が妊娠前や妊娠中のやせや低栄養が次世代の健康に影響するという知識を持っている割合は低かった。知識を持つことで，実際に妊娠したときや，妊娠を希望したときに食習慣の改善の動機付けとなる可能性がある。 ◎ <u>美甘祥子</u> ，町浦美智子
26. 妊娠前の 20～30 歳代就労女性のやせと葉酸に関する知識，価値観と食習慣との関連	共著	2011 年 6 月	第 13 回日本母性看護学会学術集会，宇都宮	妊娠前の 20～30 歳代就労女性 474 人を対象に質問紙調査を行った。20～30 歳代の就労女性は，食習慣に改善の余地があり，やせの影響や葉酸に関する知識を持っていた割合は低く，健康は大切という価値を持っている割合が高かった。食習慣を整えることは次世代の子どもの健康だけでなく，自身の健康にも影響するという価値に働きかける必要があると考えられた。 ◎ <u>美甘祥子</u> ，町浦美智子

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日
氏名 北島 洋子

研 究 分 野		研究内容のキーワード	
看護教育学		社会人基礎力、新人看護師、職場適応、尺度開発 臨床学習環境、協同学習	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事項		年月日	概 要
1 教育方法の実践例			
1) グループディスカッション、ブレインストーミング、マインドマップを活用した思考過程の開発支援		平成 24 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護学概論」1 年次配当、30 時間 2 単位のうち 6 時間(クリティカルシンキング、看護過程)担当した。看護過程は問題解決型思考を看護に応用したものであり、クリティカルシンキングを基盤としている。対象学生は 1 年次生であり、看護の初学者の思考回路を刺激し看護専門職としての考え方を開発する必要がある。まずブレインストーミングを活用し批判非難の無い環境で自由にテーマに関する意見を述べあう機会を提供した。これによりグループワークを通して今日のチーム医療に求められる協働する力の素地が培われた。また、与えられたテーマについてマインドマップを活用し思考を深める作業を行い、学生は自己の内面に気づくことができ充実した学びとなったとの声が聞かれた。
2) グループディスカッション、ディベートを活用した倫理的意思決定の思考過程の開発支援、および授業アンケート、フィードバックの活用		平成 24 年 10 月～ 平成 24 年 12 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護倫理」4 年次配当、30 時間(1 単位)のうち 10 時間(看護倫理、関連する倫理概念)担当した。看護倫理の学習を通して学生は看護専門職としての自己のあり方を考え、様々な倫理的意思決定の支援を行えるようになる必要がある。グループディスカッションやディベートはメンバーの多様な考えに触れ価値の多様性を学習する好機となり、多様性に触れることで自己への気づきも促進された。グループで倫理的意思決定のプロセスを緻密に踏み思考を深め、倫理原則に従った判断をする基礎を身につけることができた。毎時ごとの授業アンケート、フィードバックを活用し次回の講義に反映することで、学生の理解度を確認しながら授業を進め、学生のつまずいているところに戻った指導を行い、学生の理解を深めることができた。
3) PBL(Problem Based Learning)チュートリアルを活用した自己主導型学習の支援		平成 24 年 6 月～ 平成 24 年 7 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「コミュニティヘルスケア実習」(1 年次配当、1 単位)は 1 年次生の初回の実習であり、学生が地域に赴きコミュニティで生活する人々の健康問題について考察する実習である。実習指導においては、情報収集、問題抽出、対応策の検討等を学生主体で行い、教員はチューターとしてアドバイスを行った。学生は高校でこのような学習を行ったことがなく、大学生らしい学習方法だとの感想を述べ、どの学生もいきいきと積極的に実習に取り組んだ。また、実習後の学習成果の発表会でも有意義な学びが多数報告された。

事項	年月日	概要
4) PBL(Problem Based Learning)チュートリアル、ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成 24 年 5 月～ 平成 24 年 6 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「総合実習」(4 年次配当 4 単位)は、4 年次生のこれまでの学習を統合し将来の看護専門職としての活動につなげるという目的がある。したがって実践に近い形の実習となり、より一層学生の自律性が求められる。ポートフォリオを活用し日々自己の目標を明確にしたことにより、学生は目的的に学習を行い、最終的に自己の変化を実感することができた。実習開始前にアンドラゴジーに関する講義を組み込み本実習は自己主導型を標榜することを示した。学生の学習姿勢は 4 年生であっても受動的な学生がほとんどであったが、4 週間の実習を終了するところには個人差はあるものの能動的な実習を行い学習成果をあげることが可能となった。PBL の活用により、クリティカルシンキング、問題解決型の思考を磨くことができた。
5) ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成 26 年 7 月～ 平成 29 年 2 月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の早期体験演習、1 年次配当 (1 単位) において実習の企画、運営、実習指導を担当した。学生は初めて臨地に赴き医療の現場に触れるため、看護の学習者としての準備性を高め、主体的な学習態度を身につける必要がある。事前の学習課題としてマナー、コミュニケーション方法を学び、実習中はポートフォリオにより省察的姿勢を養うように工夫した。
6) 反転授業を取り入れた看護技術演習の工夫	平成 26 年 9 月～ 平成 30 年 2 月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の基礎看護技術演習Ⅰ、1 年次配当 60 時間 (2 単位) のうち清潔の援助 16 時間を担当した。学生には穴埋め型のドリル形式の事前学習課題のプリントを配布し、テキストを参考に清潔の援助に関する基礎知識を習得した上で講義に臨むよう指導した。講義では事前に習得した基礎知識を活用しグループワークで演習計画書を作成し、実習室における技術演習の準備性を高めることを目指した。学生からは主体的に事前学習課題を行うことにより知識の記憶に効果的であったとの評価を得た。
7) ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成 26 年 7 月～ 平成 30 年 2 月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の基礎看護学実習Ⅰ、1 年次配当 (1 単位) において実習の企画、運営、実習指導を担当した。学生にとっては早期体験演習に続き 2 回めの臨地実習であるが、半年以上期間が開いているため、実習における主体的な学習姿勢を改めて意識付けることが必要となる。そこで、ポートフォリオを活用し自己の目標設定や目標達成を自己管理し、学生が自分の成長を確認しながら実習できるよう工夫した。

事項	年月日	概 要
8) 協同学習、アクティブ・ラーニングを活用した協同学習の支援	平成 30 年 4 月～	奈良学園大学保健医療学部看護学科の基礎看護技術演習Ⅰ、1 年次配当 (2 単位)、および基礎看護技術演習Ⅱ、2 年次配当 (2 単位) において、アクティブ・ラーニングの手法を活用した講義・演習を実施している。デジタルコンテンツを利用した事前学習課題の提示により自己学習を促進する仕組みを構築し、学生の主体的に学習する姿勢の習得に貢献している。
2 作成した教科書, 教材		
1) 講義用補助教材	平成 24 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護学概論」1 年次配当、30 時間 2 単位のうち 6 時間(クリティカルシンキング、看護過程)担当した。看護過程の展開のための事例を複数例作成し、事例展開に活用した。また、事例展開のプロセスを詳細にパワーポイントで示し、学生の理解がスムーズになった。
2) 講義用補助教材	平成 24 年 10 月～ 平成 25 年 3 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護倫理」4 年次配当、30 時間(1 単位)のうち 11 時間(看護倫理、関連する倫理概念)担当した。倫理的意思決定の練習のための事例を複数例作成した。事例の登場人物の背景や状況を詳細に加えることで、学生の状況理解が深まり、文脈を読み解く能力が高まった。
3) 講義用補助教材	平成 26 年 4 月～	奈良学園大学保健医療学部看護学科の基礎看護技術演習Ⅰ、1 年次配当 (2 単位)、および基礎看護技術演習Ⅱ、2 年次配当 (2 単位) における、エビデンスに基づく基礎看護技術と主体的学習態度の習得を目的とした事前学習課題の工夫と改善により、学生間のディスカッションの活発化、有意義な学びの共有が可能となった。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
1) 兵庫県立大学看護学部教員評価委員会による、平成 23 年度教員活動報告書、平成 23 年度の目標に対する成果・実績、平成 23 年度領域別評価表、平成 24 年度目標設定に基づく評価	平成 24 年 9 月 27 日	総合評価として、科目群の一部分担していること、他領域などへの支援も積極的にしていることを評価された。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許		
1) 看護師免許(第 597138 号)	昭和 62 年 5 月	
2) 日本心理学会 認定心理士(第 17799 号)	平成 18 年 8 月	
3) 日本選択理論心理学会 准選択理論心理士(第 23 号)	平成 18 年 11 月	
4) 修士 (看護学)	平成 21 年 3 月	大阪府立大学大学院 第 6 6 号 修士論文題名「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と関連要因」
5) 博士 (看護学)	平成 28 年 9 月	大阪府立大学大学院 第 3 2 号 博士論文題名「新人看護師の社会人基礎力が職場適応に与える影響」

事項	年月日	概要
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 兵庫県立大学看護学部 実習調整委員会	平成 22 年 4 月	実習調整委員として、学生の実習環境の調整、実習教育セミナーの企画運営にあたった。
2) 兵庫県立大学看護学部 生涯学習委員会	平成 23 年 4 月	生涯学習委員として、社会貢献の一環として公開講座の企画運営にあたった。
3) 兵庫県立大学看護学部 入試委員会	平成 24 年 4 月	入試委員として、入試関連データの入力業務等に携わった。
4) 科学研究費助成金（基盤研究C）課題番号 25463333	平成 25 年 4 月	研究代表者として、研究題名「新人期看護師の社会人基礎力と関連要因の検討」科学研究費助成金を獲得し研究遂行し、現在に至る。
5) 奈良学園大学 社会連携センター運営委員会	平成 26 年 4 月	社会連携センター運営委員として、社会連携推進の企画、運営に携わった（平成 28 年 3 月まで）。
6) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 実習部会	平成 26 年 4 月	実習部会の委員として、実習要綱作成、実習要項作成、その他実習関連業務に携わった（平成 28 年 3 月まで）。
7) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 教務部会	平成 26 年 9 月	教務部会の委員として、業務等に携わった（平成 28 年 3 月まで）。
8) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 学生会部会	平成 28 年 4 月	学生会部会の委員として、業務等に携わった（平成 29 年 3 月まで）。
9) 奈良学園大学 人権教育研究推進委員会	平成 28 年 4 月	人権教育研究推進委員会の委員として、業務等に携わった（平成 30 年 3 月まで）。
10) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 実習部会	平成 29 年 4 月	学生会部会の委員として、業務等に携わり、現在に至る。
11) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 学生会生活部会	平成 30 年 4 月	学生会部会の学年主担当（1 年生）として、業務等に携わり、現在に至る。
12) 奈良学園大学 図書館運営委員会	平成 30 年 5 月	図書館運営委員会の委員として、業務等に携わり、現在に至る。
4 その他		
1) 論文の引用実績 学術論文「学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題」の引用	平成 24 年	坂下玲子(2012). 研究モデルの提案. 看護研究, 45(7), 679-685. において引用。
2) 論文の引用実績 学術論文「学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題」の引用	平成 25 年	坂下玲子, 北島洋子, 西平倫子, 宮芝智子, 西谷美保, 太尾元美(2013). 中・大規模病院における看護研究に関する全国調査. 日本看護科学学会誌, 33(1), 91-97. において引用。
3) 論文の引用実績 学術論文「学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題」の引用	平成 26 年	井上知美, 中野宏恵, 東知宏, 池原弘展, 坂下玲子, 川崎優子, 岡田彩子, 山村文子, 森舞子, 太尾元美, 谷田恵子, 森本美智子, 内布敦子(2014). 看護研究における臨床看護師が抱える困難. 兵庫県立大学看護学部紀要, 23-35. において引用。
4) 論文の引用実績 学術論文「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」の引用	平成 27 年	糸嶺一郎, 高山裕子, 山本貴子, 松浦利江子, 鈴木英子(2015). 新卒看護師の社会人基礎力に関する尺度の妥当性と信頼性の検討. 日本保健福祉学会誌, 22(1), 23-32. において引用。
5) 論文の引用実績 学術論文「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」の引用	平成 27 年	市原裕美子(2015). 看護学生の実習前後における社会人基礎力の自己評価. 八戸学院短期大学研究紀要, (41). 39-49. において引用。

事項	年月日	概 要
6) 論文の引用実績 学術論文「看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係」の引用	平成 27 年	中村真理子, 山崎不二子, 吉武美佐子, 前田三枝子 (2015). A 看護大学卒業生の看護技術および社会人基礎力修得の現状と課題. 福岡女学院看護大学紀要, 5, 1-8. において引用。
7) 論文の引用実績 学術論文「学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題」の引用	平成 27 年	池原弘展, 永山博美, 井上知美, 中野宏恵, 山村文子, 森舞子, 東知宏, 森本美智子, 小西美和子, 谷田恵子, 岡田彩子, 川崎優子, 坂下 玲子, 内布敦子 (2015). 臨床看護研究の質向上を目指したオーダーメイド型支援の評価. 兵庫県立看護大学紀要, 22, 107-116. において引用。
8) 論文の引用実績 学術論文「学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題」の引用	平成 28 年	戸ヶ里泰典, 米倉佑貴, 井出訓 (2016). 放送大学の保健・看護系の修士課程大学院生における統計解析の学習— 院生のニーズ調査と学習プログラムの構築の試み. 放送大学研究年報, 33, 11-25. において引用。
9) 論文の引用実績 学術論文「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」の引用	平成 28 年	廣川佳子, 大嶋玲未, 宮崎弦太, 芳賀繁 (2016). 大学生の社会人基礎力における因子不変性の検討. 立教大学心理学研究, 58, 1-11. において引用。
10) 論文の引用実績 学術論文「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」の引用	平成 29 年	大岡裕子, 吉永純子, 鈴木英子 (2017). 大学病院に勤務する看護師の社会人基礎力に関連する要因の分析. 21 (2), 87-97. において引用。
11) 論文の引用実績 学術論文「看護系大学生の社会人基礎力及び自己教育力と自己調整学習方略との関係」の引用	平成 29 年	大岡裕子, 吉永純子, 鈴木英子 (2017). 大学病院に勤務する看護師の社会人基礎力に関連する要因の分析. 21 (2), 87-97. において引用。
12) 論文の引用実績 学術論文「看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係」の引用	平成 29 年	大岡裕子, 吉永純子, 鈴木英子 (2017). 大学病院に勤務する看護師の社会人基礎力に関連する要因の分析. 21 (2), 87-97. において引用。
13) 論文の引用実績 学術論文「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」の引用	平成 30 年	市原裕美子 (2018). 看護学生の社会人基礎力の学年別自己評価と変化. 八戸学院大学紀要第, 56, 161-166. において引用。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1) 出題傾向がみえる「基礎看護学 2018 年度版」	共著	平成 29 年 10 月	ピラールプレス	北島洋子，丸上輝剛，瀬山由美子，澤田京子，平野加代子，中馬成子 編集，守本とも子 監修 B 5 版 全 160 頁 (3. 看護における基本技術 B. 学習支援、4. 基本的日常生活援助技術 F. 清潔と衣生活、5. 診療に伴う看護技術 A. 呼吸・循環・体温調節、C. 与薬、D. 輸液・輸血管理 約 24 頁)
2) 出題傾向がみえる「基礎看護学 2019 年度版」	共著	平成 30 年 10 月	ピラールプレス	北島洋子，松浦純平 編集，守本とも子 監修 B 5 版 全 160 頁 (3. 看護における基本技術 B. 学習支援、4. 基本的日常生活援助技術 F. 清潔と衣生活、5. 診療に伴う看護技術 A. 呼吸・循環・体温調節、C. 与薬、D. 輸液・輸血管理 約 24 頁)
(学術論文) 1) 看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係 (修士論文)	単著	平成 22 年 3 月	大阪府立大学大学院	看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、社会人基礎力と関連要因との関係を明らかにし、現状を把握する目的で、看護系大学生 1043 名に質問紙調査を実施した。社会人基礎力の構成要素は共分散構造分析による確認的因子分析と多母集団分析により、3 分類 12 能力要素から構成されるひとつのまとまりある概念であることが示された。社会人基礎力の関連要因は Spearman の相関係数、Mann-Whitney の U 検定、多重ロジスティック回帰分析による検討を行った。社会人基礎力と看護実践力は有意な正の相関関係にあった。社会人基礎力の 3 分類すべてに対し影響していたのは看護実践力の「自己の学習課題の解決に向けた取り組みをしている」と、日常生活経験の「授業時間以外に自己学習する」であった。 A4 判 全 68 頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2) 看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討 (査読付)	共著	平成 23 年 3 月	大阪府立大学紀要第 17(1)，13-23	看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、属性による相違の検討を目的に看護系大学 8 施設の 1 年次と 4 年次の学生 1043 名を対象に、社会人基礎力を問う 36 項目の質問紙調査を実施した。社会人基礎力の構成要素は経済産業省の定義に基づく構造のまとまりある一つの概念であることが示された。学年別と性別の多母集団同時分析において、このモデル構成は学年および性別による母集団の相違に対応していることが示された。社会人基礎力合計得点は Mann-Whitney の U 検定において、社会人未経験者より経験者、1 年次生より 4 年次生、女子学生より男子学生が有意に高値を示した。看護学基礎教育における社会人基礎力の伸長の可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
3) 学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題（査読付）	共著	平成 24 年 3 月	兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要，19，1-15	臨床看護職による学会誌掲載論文の現状を把握し、EBP の推進に寄与できる看護研究の実践に向け課題を明らかにする目的で論文 1545 編の記述内容を検討した。質的研究のうち事例研究は Research Question が明確でない文献が多かった。実態調査・量的記述的研究のほとんどは標本の代表性に関する記述がなく、便宜的サンプリングが実施されていた。臨床看護職による研究は看護のエビデンスの構築に充分寄与していないことが示唆され、緻密な研究のプロセスを踏む必要があると考えられた。本人担当部分：データ整理、論文執筆共著者：北島洋子，西平倫子，西谷美保，太尾元美，宮芝智子，坂下玲子，
4) Critique 看護学生の看護の認識：4 学年群についての記述的研究	共著	平成 24 年 6 月	インターナショナルナースングレビュー，135(4)，23-27	原文：Safadi RR，Saleh MY，Nassar OS，Amre HM，Froelicher ES(2011):Nursing students' perceptions of nursing: a descriptive study of four cohorts.Int Nurs Rev. ；58(4):420-7. 上記論文のクリティークを実施し解説した。本人担当部分：対象論文の分析、クリティークと論文の執筆を行った。 共著者：北島洋子，坂下玲子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5) 看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係 (査読付)	共著	平成 24 年 7 月	日本看護学教育学会誌， 22(1)，1-12	看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係を明らかにする目的で、看護系大学 4 年次生に質問紙調査を実施し、看護学基礎教育において社会人基礎力は看護実践力と相互作用的な関係にあり、看護学基礎教育による伸長の可能性が示唆された。日常生活経験における多様な人々との関わり、相互作用的な教授－学習活動、授業外学習を取り入れた授業設計が社会人基礎力の伸長に効果的と考えられた。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
6) 臨床から発表される論文の検討	単著	平成 24 年 12 月	看護研究，45(7)， 649-658, 医学書院	臨床において看護職によって行なわれている看護研究は看護学の知の創造に結びついていけるのか、またどのようにすれば知の創造に結びつけていけるのかをテーマに、臨床の看護職が学会誌に投稿し掲載されている論文から臨床における看護研究の現状を明らかにし、課題を分析した。さらに臨床から発表される論文が一層価値あるものとなるために、臨床の看護研究に比較的多く見られる課題をとりあげ、ケースごとに研究方法や取り組み方に関する改善のヒントを示し、新たな知の創造に向けた臨床の看護研究の具体的なあり方について考察した。
7) 看護系大学生の社会人基礎力及び自己教育力と自己調整学習方略との関係（査読付）	単著	平成 25 年 2 月	医 学 と 生 物 学 ， 157(2)，222-228	看護系大学生の社会人基礎力と自己教育力に影響する自己調整学習方略を明らかにし、看護学基礎教育への示唆を得ることを目的に、質問紙調査を実施した。学生の社会人基礎力と自己教育力は、自己調整学習方略を多く使用するほど高くなり、特にモニタリング方略の使用は効果的と考えられた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8) 中・大規模病院における看護研究に関する全国調査（査読付）	共著	平成 25 年 3 月	看護科学会誌，33(1)，91-97	臨床の看護職に適した看護研究のあり方を検討するため、臨床の看護研究の現状を明らかにする目的で質問紙調査を実施し、データ分析や研究法の知識・技術に関する臨床のニーズに対し、組織外のリソースを活用した研究支援の必要性が示唆された。 本人担当部分：データの整理、分析、論文とりまとめを行った。 共著者：坂下玲子，北島洋子，宮芝智子，西平倫子，西谷美保，太尾元美
9) 新人看護師の社会人基礎力が職場適応に与える影響（博士論文）	単著	平成 28 年 9 月	大阪府立大学大学院	新人看護師の職場適応尺度を開発し、社会人基礎力が職場適応に与える影響について明らかにすることを目的に、①新人看護師の職場適応の質的帰納的研究により半構成的面接法を用いてデータを収集しアイテムプールを作成した。②新人看護師の職場適応尺度項目の表面妥当性・内容妥当性の検討実施し、尺度項目を洗練した。③新人看護師の職場適応尺度項目の内容妥当性指数を用いた検討を実施し、職場適応行動 82 項目と職場適応状態 51 項目を内容妥当性を有する項目として採択した。④新人看護師の職場適応尺度の信頼性・妥当性の検討実施し、職場適応行動尺度は 5 因子 34 項目、職場適応状態尺度は 4 因子 26 項目が抽出され、信頼性と妥当性が確認された。⑤社会人基礎力尺度の新人看護師への適用可能性の検証を実施し、社会人基礎力尺度は新人看護師への適用可能と考えられた。⑥新人看護師の社会人基礎力が職場適応に与える影響の検討を実施し、共分散構造分析により社会人基礎力から職場適応への影響を確認しモデル適合度は良好であった。社会人基礎力は職場適応に影響を与えることが確認され、新人看護師の円滑なトランジションに資する能力のひとつとして、社会人基礎力を伸長させることは効果的であることが示唆された。 A4 版 全 244 頁。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10) アクティブ・ラーニングの手法による思考力・判断力の高め方	単著	平成 29 年 4 月	看護人材育成, 14(1), 70-5	アクティブ・ラーニングの手法による思考力・判断力の高め方について、(1) 看護学生を取り巻く環境と生活体験、基礎力の変化・現場、臨床でのニーズとの解離 (2) アクティブ・ラーニングの主な目的と効果・主体的な学修態度の育成・クリティカルな思考力・思考力・思考力・判断力の育成 (3) 学生の問題発見（自己の課題）と目標設定の明確化を支援するプロセス・ラウンドロビン等を活用した実際の授業構成と支援例 (4) アクティブ・ラーニングの注意点の 4 つの視点から実例を交えた解説を記述した。
11) 新人看護師の社会人基礎力と関連要因の検討	共著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要, 7, 35-44	社会人基礎力尺度の新人看護師への適用可能性を検証し、新人看護師の社会人基礎力に関連する要因を明らかにする事を目的に、新人看護師 473 名に質問紙調査を実施し、回収率 32.6%、分析対象 131 名。社会人基礎力と看護実践力は有意な相関関係にあり、多重ロジスティック回帰分析により新人看護師の社会人基礎力は学生時代の日常生活経験の影響を受けていた。社会人基礎力尺度はアセスメント指標として使用するにあたり、看護系大学生にも新人看護師にも適用可能と考える。科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆 共著者：北島洋子、細田泰子
12) Qualitative and inductive research on the workplace adaptation of new nurses (新人看護師の職場適応に関する質的帰納的研究)	共著	平成 30 年 9 月	奈良学園大学紀要, 9, 69-82.	本研究は新人看護師の職場適応について質的帰納的に明らかにすることを目的とし、新卒後 2 年目の看護師 16 名を対象に、新人看護師の職場適応行動と職場適応状態について半構成的面接を実施し、質的帰納的に分析した結果、職場適応行動は 269 コードから 96 サブカテゴリー、35 カテゴリー、5 コアカテゴリー、職場適応状態は 130 コードから 53 サブカテゴリー、14 カテゴリー、4 コアカテゴリーが生成され、新人看護師の職場適応の基礎的資料として活用可能な結果を得た。科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆 共著者：北島洋子、細田泰子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13) 基礎看護学における看護過程演習のグループワークによる主体的な学修態度の変化と看護過程の習得状況	共著	平成 31 年 3 月	奈良学園大学紀要, 10, 89-97.	看護過程演習にグループワークを導入することによる主体的な学修態度の向上と看護過程の理解の深化を検討することを目的とし、授業プロセス・パフォーマンスの変化と看護過程の各プロセスの理解度について調査した。主体的な学修態度はすべての項目が演習終了後に高値を示し、看護過程の理解は事例についての発達段階、疾患の病態、検査・治療・看護に関する理解度の平均値が低かった。 本人担当部分：研究準備、研究遂行 共著者：中馬成子、 <u>北島洋子</u> 、丸上輝剛、瀬山由美子
14) 教育指導者が行う新人看護師と看護学生への学習支援の共通性と差異		平成 31 年 3 月	大阪府立大学紀要, 25 (1), 33-41.	本人分担部分：研究準備、研究遂行 共著者：長野弥生、細田泰子、片山由加里、土肥美子、 <u>北島洋子</u> 、根岸まゆみ
15) 看護過程演習における演習用電子カルテ活用時の社会人基礎力の変化と学習効果	共著	平成 31 年 3 月	医療福祉情報行動科学研究, 49-53.	演習用電子カルテを使用した看護過程演習における、学生の社会人基礎力の変化とグループワークの活用による影響および看護過程の学習効果について検討し、看護過程演習の前後比較において社会人基礎力が伸長されることが明らかとなった。また、社会人基礎力を伸長させることにより看護過程の理解も促進されることが推察された。 共著者： <u>北島洋子</u> 、丸上輝剛、瀬山由美子、中馬成子
16) 新人看護師の「職場適応行動尺度」と「職場適応状態尺度」の尺度項目の表面妥当性と内容妥当性の検討	共著	平成 31 年 3 月	医療福祉情報行動科学研究, 6, 21-28.	新人看護師の職場適応について適応行動と適応状態の側面から質的帰納的に抽出された項目の尺度化に向け、表面妥当性と内容妥当性を検討し尺度項目として洗練するため、5名の専門家会議において表面妥当性を検討し、9名の研究者により内容妥当性の検討を実施した。新人看護師の職場適応行動尺度は 82 項目、職場適応状態尺度は 51 項目に整理され、表面妥当性と内容妥当性を有する尺度項目として洗練された。さらに妥当性と信頼性の確保された尺度項目として精錬する必要がある。 共著者： <u>北島洋子</u> 、細田泰子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他) 学会発表 1) 看護系大学生の社会人基礎力の構成要素	一	平成 22 年 8 月	第 20 回日本看護学教育学会学術集会（大阪）	看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、社会人経験の有無、学年、性別による社会人基礎力の相違についての検討を目的に、質問紙調査を実施し、看護系大学生の社会人基礎力は、企業の管理者と若手就労者による実践的知見に裏付けられたモデル構成と良好な適合度により、まとまりのあるひとつの概念であり、社会人基礎力は就労経験や学年の進行に伴い伸長すると考えられた。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
2) 看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力の関係	一	平成 22 年 8 月	第 36 回日本看護研究学会学術集会（岡山）	看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力の関係を明らかにする目的で、質問紙調査を実施し、社会人基礎力と看護実践力は相互作用的な関係で伸長し、看護学基礎教育において看護学を学習していくことは、同時に社会人基礎力を身につけていくことにも寄与していると考えられた。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
3) 院内看護研究の実施状況に関する全国実態調査	一	平成 22 年 12 月	第 30 回日本看護科学学会学術集会（北海道）	100 床以上の病院の看護部が行っている看護研究の実態を明らかにする目的で質問紙調査を実施した。臨床看護職による研究は学問領域で考えられている新しい看護知識の提示をめざした研究とは異なり、教育の側面が強いことが明らかになった。今後臨床で看護研究という言葉で表現されている活動の目的や内容をさらに明確にし、臨床看護職が取り組む看護研究の意義について検討する必要があることが考えられた。 本人担当部分：データ整理 共著者：坂下玲子，宮芝智子，高谷嘉枝，北島洋子，若村智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4) 看護系大学生の社会人基礎力と日常生活経験の関係	一	平成 23 年 3 月	第 21 回日本医学看護学教育学会学術学会 (出雲)	看護系大学生の社会人基礎力に関連する日常生活経験を明らかにする目的で質問紙調査を行い、看護系大学生の社会人基礎力の育成にあたり、ロールプレイやディスカッション、グループワークを組み込んだ教授－学習活動、課外学習を取り入れたインストラクショナル・デザイン等が効果的であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子、星和美
5) 新人看護師の職場適応行動	一	平成 26 年 12 月	第 34 回日本看護科学学会学術集会 (名古屋)	新人看護師の職場適応について、適応行動の側面から質的帰納的に明らかにする目的で半構成的面接法によりインタビューを実施し、質的記帰納的に分析した。Piaget の説明する適応と同様に、新人看護師は、新規参入した職場において新たな行為や思考を取り入れたり、自己のそれまでの考え方を変容させたりして職場に適応する行動をとっていることが明らかになった。科学研究費助成事業 (研究課題番号: 25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
6) 高齢者のための認知機能低下予防教室「脳いきいき教室」への継続参加の評価	一	平成 26 年 12 月	第 34 回日本看護科学学会学術集会 (名古屋)	認知機能低下予防教室への継続参加による認知機能への効果を明らかにする目的で 65 歳以上の認知症がなく自力歩行が可能な高齢者 164 名 MMSE とファイブ・コグを用いた調査を実施し、8 年間の取り組みである「脳いきいき教室」への継続参加による認知機能の評価を行なった。継続参加の効果が示されたことは、高齢者の認知機能が訓練により維持・改善できる可能性が示唆された。 本人担当部分：教育プログラムの実施、データ収集、データ整理 共著者：中村裕美子、深山華織、北島洋子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7) 新人看護師の認識する職場適応状態	—	平成 27 年 3 月	第 25 回日本医学看護学教育学会学術学会 (出雲)	新人看護師の職場適応状態について質的帰納的に明らかにする目的で、2 年目の看護師 16 名を対象に半構成的にインタビューを実施し質的帰納的に分析した。本調査の結果は新人看護師自身の認識によるものであり、新人看護師の職場適応の自己評価尺度として活用可能なデータと考えられる。科学研究費助成事業 (研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
8) 新人看護師における社会人基礎力の関連要因の検討	—	平成 27 年 8 月	日本看護研究学会第 41 回学術集会	新人看護師における社会人基礎力の関連要因を明らかにすることを目的とし質問紙調査を実施し、社会人基礎力尺度は内的整合性が認められ、新人看護師を対象としても信頼性のある尺度と考えられた。社会人基礎力は看護実践力と相互作用的に伸長していく。学生時代の日常生活経験は新人看護師の社会人基礎力に影響を与え、職場で多様な人々と協働する上で必要な力を養うには、学生時代に色々な経験を積み、主体的に学習することが大切であることが示された。 科学研究費助成事業 (研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
9) Assessing content validity of the workplace adaptation scale for new graduate nurses. (新人看護師の職場適応尺度の内容妥当性の検討)	—	平成 28 年 3 月	19th East Asian Forum of Nursing Scholars. (Chiba)	新卒看護師の職場適応尺度項目の項目妥当性を評価する目的で看護教育研究者を対象に郵送法による質問紙調査を実施し I-CVI を分析した。全体で 19 項目の妥当性が低いと判断されたため質問項目から削除した。最終的に看護師の職場適応尺度は、職場適応行動は 82 項目、職場適応状態は 51 項目に構成された。今後は尺度の十分な信頼性と有効性を確保するために、尺度項目をさらに精錬させていく必要がある。科学研究費助成事業 (研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10) 新人看護師の職場適応行動尺度の信頼性・妥当性の検討.	一	平成 28 年 8 月	日本看護研究学会第 42 回学術集会（筑波）	新人看護師の職場適応行動をアセスメントする「職場適応行動尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を確認するため、質問紙調査を実施した。新人看護師の職場適応行動尺度は、内的一貫性、基準関連妥当性、安定性が確認され、職場適応行動尺度は新人看護師の職場適応行動を測定するにあたり有用性のある尺度と考えられた。 科学研究費助成事業（研究課題番号:25463333）。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
11) 新人看護師の職場適応状態尺度の信頼性・妥当性の検討.	一	平成 28 年 8 月	日本看護学教育学会第 26 回学術集会（東京）	新人看護師の職場適応状態をアセスメントする「職場適応状態尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を検討する目的で質問紙調査を実施した。職場適応状態尺度の 4 因子 26 項目は内的一貫性および安定性を有することが確認された。職場適応状態尺度と職務満足測定尺度の相関係数から、職場適応状態尺度の基準関連妥当性が確認された。職場適応状態尺度は新人看護師の職場適応の状態を測定するにあたって活用可能であり有用な尺度が作成された。 科学研究費助成事業（研究課題番号:25463333）。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12) The Effects of New Nurses' Fundamental Competencies for Working Persons on Workplace Adaptation (社会人基礎力が職場適応に与える影響)	一	平成 29 年 3 月	20th East Asian Forum of Nursing Scholars. (Hong Kong)	新人看護師の職場適応に及ぼす社会人基礎力の影響を明らかにすることを目的に、1,964 人の新人看護師に質問紙調査を実施した。調査票は社会人基礎力尺度、職場適応行動尺度、職場適応状態尺度、およびから構成された。613 名を分析対象とし、本研究の概念枠組に基づく多重指標モデルを作成し共分散構造分析を実施した。社会人基礎力の職場適応へのパス係数は 0.77 であり、決定係数は 0.59 であった。モデルの適合度指数は、GFI = 0.990、AGFI = 0.962、CFI = 0.993、および RMSEA = 0.070 であった。社会人基礎力が職場適応に影響することが確認された。 科学研究費助成事業（研究課題番号:25463333）。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
13) 看護過程演習における社会人基礎力の変化と学習効果	一	平成 30 年 3 月	日本医学看護学教育学会 (広島)	演習用電子カルテを活用した看護課程演習における、グループワークの活用による社会人基礎力の変化と看護過程の教育効果を明らかにすることを目的に、質問紙調査を実施した。第 1 回と第 2 回の照合が可能であった 12 名を分析対象とし、社会人基礎力は第 1 回(中央値 135.5)と第 2 回(中央値 154.0)の間に有意差があることが示され、社会人基礎力と看護過程の理解の相関係数は第 1 回 0.82、第 2 回 0.87 を示し有意な正の相関を認めた。看護過程演習の前後比較において社会人基礎力が伸長されることが明らかとなり、社会人基礎力を伸長させることにより看護過程の理解も促進されることが推察された。 本人担当部分：調査票作成、調査実施、データ分析、学会発表 共著者：北島洋子、丸上輝剛、瀬山由美子、中馬成子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14) 教育指導者が行う新人看護師と看護学生への学習支援に共通する構成要素		平成30年1月2月	第38回日本看護科学学会学術集会（愛媛）	教育指導者が行う新人と学生への学習支援に共通する構成要素を明らかにするため1153名の教育指導者対象に質問紙調査を実施し、新人と学生への学習支援に共通する構成要素として、＜実践支援＞＜思考支援＞＜精神支援＞が抽出され、共分散構造モデルの適合度は許容水準を満たし、新人と学生への学習支援それぞれの内的整合性が確認された。これらの構成要素は、学習段階が異なる新人と学生への教育指導者が行う共通の学習支援であることが示唆された。 JSPS 科研費 JP20592505 助成。 本人担当部分：データ分析 共著者：長野弥生、片山由加里、土肥美子、<u>北島洋子</u>、根岸真由美、細田泰子
15) Effects of experiential learning and nursing competency of educational instructors on the clinical learning environment (教育指導者の経験学習とコンピテンシーが臨床学習環境に及ぼす影響)		平成31年1月	22th East Asian Forum of Nursing Scholars. (Singapore)	臨床学習環境は学生の臨床経験の質を決定するための 教育指導者の経験学習とコンピテンシーが臨床学習環境に及ぼす影響を明らかにするため教育指導者1153名を対象とし質問紙調査を実施し、教育指導者の経験学習とコンピテンシーは、学生の臨床学習環境に影響を与えることが示唆されたが、説明力はあまり高くないため、他の関連要因を探索する必要があった。 JSPS 科研費 JP20592505 助成。 本人担当部分：データ分析 Yasuko Hosoda, Yayoi Nagano, Yukari Katayama, Yoshiko Doi, Mayumi Negishi, <u>Yoko Kitajima</u>

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
16) 実習指導者のカンファレンス指導への認識に関するアンケート調査		平成 31 年 3 月	第 29 回日本医学看護学教育学会学術学会（鳥取）	実習指導者講習会への受講者の学生指導におけるカンファレンスに関する認識を明らかにし、実習指導者の学習ニーズと必要な支援を検討するため、受講者 72 名リアルタイム投票・投稿・アンケートツールを活用した調査を実施。52 名から回答を得た。発問の方法、指導する側のあり方、まとめ方、指導者の立ち位置などが参考になったと受講者のリアルな反応を得ることができた。今後、実習指導者のカンファレンスに関する具体的な学習ニーズを明らかにし、適切な支援モデルを構築する必要がある。

教 育 研 究 業 績 書

平成31年3月31日

氏名 小林 由里

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
看護教育		クリティカルシンキング 新人教育 現任教育
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 医療事故事例のシミュレーション体験を用いた授業方法 多重課題を用いたリスクアセスメント力と判断力の育成演習 看護管理の考え方を学ぶ事例を用いたグループ討議	平成15年12月 ～平成29年10月 平成28年1月 平成28年4月～ 平成29年6月	「医療安全」の講義において学生の自己モニタリングやリスクアセスメントを高め、事故防止行動がとれることを目的にシミュレーション教育を実施した。学生一人ずつ誤薬のシミュレーション体験とリフレクションを実施した。体験後レポートの記述から、学生はどのような状況で事故につながるのかや、自分の行動特性について理解できたという結果が得られた。また、実習においても事故防止の意識につながった。 統合分野「看護の統合と実践」の科目として、卒業前に多重課題を用いたリスクアセスメント力と判断力、対応力を育成することを目的に演習を実施した。病室に呼吸不全の患者、転倒リスクのある患者、嚥下困難のある患者などを設定し、学生は、グループでディスカッションして患者への援助計画を立案しておく。教員が患者役を演じ、ロールプレイを行い、患者の状況に対応しながら、リスクアセスメントや優先度の判断を行う体験学習とした。このメリットとして、学生は、臨場感のある患者の反応にどう対応しようかと思 統合分野「看護の統合と実践」の科目である、看護管理では、看護管理の定義やマネジメントプロセス、病院・看護部の組織体制などについて教授した。また、倫理的問題のある事例を用いて、自らがミドルマネージャーとしてどのように倫理的判断を行うかのディスカッションや、複数の様々な状況にある患者のケアが必要な事例に対し、チームでケアを実施する際のリーダーシップのあり方についてのディスカッションを取り入れた。
2 作成した教科書，教材 なし		
3 教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 神経内科病棟管理（2年間）、教育担当（5年間）および臨床実習指導	平成19年4月～ 平成24年3月	神経内科病棟看護師長として病棟の看護管理を担当した。この間、年間を通して、国立病院機構大阪医療センター附属看護学校3年生、国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校3年生、白鳳短期大学の1年生、3年生などの基礎看護学実習や、成人、老年看護学実習、小児看護学実習を受け入れた。受け入れに対して以下の点に留意した。 ・実習指導者を育成するために実習指導者会の内容を検討した。（例えば実習記録の学習会などの実施、実習指導案の作成など） ・実習受け入れ態勢を整えるため、実習期間中の実習指導者の勤務調整、看護計画や看護記録の充実を図る。 ・実習オリエンテーション内容を検討し、学生の実習への導入を助けるものとした。 ・担当教員との連携に留意し、受け持ち患者選定や実習指導の方向性を調整するようにした。 ・スタッフの実習指導の資質向上を目指し、研修会への参加を促し動機づけを行った。 ・実習指導者とともにカンファレンスに出席し、学生の実習目標到達度の評価および実習指導の評価を行い、次の指導に活かすようにした。

事項	年月日	概 要
教育担当（5年間）として看護師の看護実践力向上のための現任教育の企画・運営	平成19年4月～平成24年3月	院内看護職（看護師、療養介助員、看護助手）の育成を図るため、経年別、役割別研修の企画・運営を担当した。毎年、新人看護師は毎月1回、2年目、3年目、4、5年目は2か月に1回程度、6年目以上は半年に1回程度、実習指導に関すること、褥瘡予防、摂食嚥下などの専門分野の研修などを実施した。経年別研修は、OJTを重視し、それぞれの経験年数での課題をOJTにより達成できるよう取り組み、集合研修ではその補填となるよう位置付けた。その結果、各部署で実践を通して、看護職員同士でお互いを育てあう意識ができた。新人看護師の研修テーマは主に看護技術や看護倫理に関すること、2年目はケーススタディ、3年目は組織におけるリーダーシップ・メンバーシップ、4年目以上は業務改善など組織における管理とし、業務改善につなげた。
教育担当（5年間）として看護師長・副看護師長の看護管理能力向上のための研修の企画・運営	平成20年9月	看護師長・副看護師長として病棟運営について管理的な視点の育成、病棟運営を円滑にしていくために、相互のコミュニケーションを図り連携を強化することや、各々の管理的能力の向上を目的に、研修を企画・運営した。 「私が管理を実践する上で大切にしていること」をテーマに看護師長による病棟管理の実際のプレゼンテーションや、各病棟での問題について管理的視点でディスカッションした結果、解決に向けての具体的行動を見出すことができた。
教員に対する指導・教育、教員の教育実践力向上のための研修の企画・運営	平成25年～平成30年3月	看護専門学校の教育主事として看護学校管理を担当した。近畿内国立病院機構附属看護学校の1、2年目教員を対象とし、教育実践力向上を目的とした研修や、中堅看護教員を対象とし、学校運営・管理の視点の育成を目的とした研修を実施した。
国立病院機構近畿グループ主催実習指導者講習会講師、施設内実習指導者研修の講師	平成26年6月～平成29年6月	国立病院機構近畿グループ主催実習指導者講習会にて「基礎看護学」や「実習評価」について担当し講義を行った。また、国立病院機構舞鶴医療センター附属看護学校、京都医療センター附属看護助産学校、敦賀医療センターでの実習指導者研修において、教育課程、実習指導の意義、実習評価、実習指導案の作成などについて講義を実施した。
5 その他 国立病院機構舞鶴医療センター附属看護学校における教育実績	平成25年4月～平成28年3月	「看護学概論」「老年看護学概論」「医療安全」などの講義を担当した。また、「基礎看護学実習」「小児看護学実習」「成人看護学実習」「在宅看護論実習」の実習指導を行った。効果的な実習となるよう、実習施設への実習依頼や調整を行った。院外講師へは学生の講義評価結果をフィードバックし、講義依頼を行った。また、看護教員の指導、実習施設の実習指導者対象研修の講師などを行った。
国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校 看護学科における教育実績	平成28年4月～平成30年3月	「看護管理」「医療安全」の講義を担当した。また、「基礎看護学実習」「小児看護学実習」などの実習指導を行った。効果的な実習となるよう、実習施設への実習依頼や調整を行った。院外講師へは学生の講義評価結果をフィードバックし、講義依頼を行った。また、看護教員の指導や実習施設の実習指導者対象研修の講師などを行った。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許	平成元年4月26日	看護婦免許（646987号）
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

事項	年月日	概要
国立病院機構奈良医療センター看護師長	平成19年4月～ 平成21年3月	神経内科病棟看護師長として病棟管理を行った。神経・筋難病患者の薬物療法、リハビリテーション看護、レスパイト入院の受け入れを実施した。病床管理や医療事故防止対策、感染防止対策などの患者管理、職員に対する労務管理、目標管理、経営への参画などの管理業務を行った。また、難病看護を担う看護職の育成を目的に内外に向けた研修を企画・運営した。
国立病院機構奈良医療センター教育担当看護師長	平成21年4月～ 平成24年3月	教育担当として看護職の現任教育の企画・実施を行った。また、医療安全管理係長とともに全職員対象の研修を実施した。人材確保対策事業として、看護職募集活動、復職支援研修や中途採用者研修の企画・運営を実施した。また実習受け入れ態勢整備等の役割を果たした。看護師長会のワーキンググループの取り組みでは、勤務時間管理、固定チームナーシングなどのマニュアル作成、看護管理基準の作成においてリーダーシップをとり取り組んだ。
4 その他 なし		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) なし				
(学術論文) 1. 新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性とその特徴 (修士論文)	単著	平成25年3月	畿央大学	新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性を明らかにすることを目的とした。看護師712名に質問紙調査を実施した。質問紙は属性、批判的思考態度尺度(常盤ら, 2010), 情報活用の実践力尺度(高比良ら, 1999)で構成した。分析方法は記述統計, Spearmanの相関係数, 重回帰分析を用いた。結果、クリティカルシンキング能力は、協同的態度が高く、看護師との比較では、探求心が高く、論理的思考への自信が低かった。情報活用能力では、収集力、発信・伝達力が高く、看護師との比較では表現力が高かった。新人看護師および看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性は、双方とも有意な正の相関が認められ($r = .449, p < 0.1$)、両能力は有意に関連していることがわかった。両能力に影響を与える諸要因では、新人看護師は看護基礎教育課程がクリティカルシンキング能力に影響していた。クリティカルシンキング能力を高めるには情報活用能力の判断力、創造力、処理力を育成する必要性が示唆された。 A 4 判 全64頁
2. 看護学生の碎石位体位前後の産婦人科診察台に対するイメージと羞恥心の変化 (査読付)	共著	平成27年6月	畿央大学紀要p19～P30	看護学生が産婦人科診察台で碎石位を体験することで、体験前後の診察台のイメージや羞恥心の変化を検討することを目的とした。先行分権やアンケートからキーワードを抽出し15項目の産婦人科診察台イメージ尺度を作成した。羞恥心は樋口の状態羞恥心感情測定尺度で碎石位体験前後に調査した。参加者は80名。産婦人科イメージは、因子分析の結果「情動イメージ」「体感イメージ」「緊張的イメージ」「見た目イメージ」の4因子が抽出された。体験前は13項目がマイナスイメージであったが、体験後5項目がプラスに有意に変化した。体験後の羞恥心尺度の高値群は、診察台イメージの「高く」「嫌な」の項目でマイナスに有意に変化した。以上から産婦人科診察台に対してマイナスイメージが強い場合、羞恥心が強くなることが示唆された。 本人担当部分：データの分析、結果の考察を行った。 共著者：中居由美子, 小笠原知枝, 播金ヤスミ, 小林由里, 河合まゆみ, 文鐘聲, 伊藤明子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
3. 基礎看護学実習評価項目の内容分析によるパフォーマンス評価のためのルーブリックの作成 (査読付)	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究第5巻P43～P51	基礎看護学実習の評価に用いられた項目から、パフォーマンス評価のためのルーブリックを作成することを目的とした。10校の基礎看護学実習評価表の評価項目を基礎データとし、Berelsonの内容分析を参考にカテゴリー化した。445記録単位数をコード化し、110サブカテゴリー、25カテゴリー、6コアカテゴリーを抽出した。6コアカテゴリーは、看護過程展開力、クライアント理解力、自己学習力、チーム医療における看護師役割の認識力、倫理的態度に基づく実践力、コミュニケーション力と命名し、基礎看護学実習の実践力とした。これに基づき、縦軸に25カテゴリーの評価規準、100サブカテゴリーの評価基準から構成され、かつ4段階尺度で評価できる評価表を作成した。教員は客観的で効率的なパフォーマンス評価ができる、学生にとっては学生自身の自己評価を容易にし、基礎看護学実習の行動目標を立てる手段として活用が期待できる。 本人担当部分：データの分析、結果の考察を行った。 共著者：播金ヤスミ，小笠原知枝，中居由美子，河合まゆみ，<u>小林由里</u>，<u>對中百合</u>，新井祐恵，太田容子，伊藤明子
4. 新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性 (査読付)	共著	平成31年2月	医療福祉情報行動科学研究第6巻P3～P11	新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性を明らかにすることを目的とした。看護師712名に質問紙調査を実施した。質問紙は属性、批判的思考態度尺度(常盤ら，2010)、情報活用の実践力尺度(高比良ら，1999)で構成した。分析方法は記述統計、Spearmanの相関係数、重回帰分析を用いた。結果、クリティカルシンキング能力は、協同的態度が高く、看護師との比較では、探求心が高く、論理的思考への自信が低かった。情報活用能力では、収集力、発信・伝達力が高く、看護師との比較では表現力が高かった。新人看護師および看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性は、双方とも有意な正の相関が認められたが、新人看護師は看護師より関連性が低かった。両能力に影響を与える諸要因では、新人看護師は看護基礎教育課程がクリティカルシンキング能力に影響していた。今回の調査結果から、クリティカルシンキングには、懐疑的態度、探求心、論理的思考への自信が重要であり、その能力と関連している情報活用能力の、処理力や創造力、判断力、発信・伝達力を高める教育が必要である。その教育方法として、文章の批判的読解、事例分析、映像視聴によるメディアの解説、レポートや論文などにより分析的思考や創造性を高めることができる教育についてさらに明らかにすることが課題である。 (修士論文をもとに作成) 本人担当部分：質問紙の作成と調査及び統計解析、研究の総括を行った。 共著者：<u>小林由里</u>、小笠原知枝、河合まゆみ、中居由美子、播金ヤスミ、<u>對中百合</u>、新井祐恵、伊藤明子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(その他) 1. 新人看護師を対象とした病棟ローテーション研修の効果	—	平成21年10月	国立病院看護研究学会	新人看護師の職場適応を目的とした病棟ローテーション研修の実施とその効果を検討した。A病院の平成20年度卒後1年目看護師20名を対象に、希望診療科の病棟名と未経験、あるいは習得したい技術・看護を調査した。ローテーション研修を実施し、研修前と研修後の技術経験状況を比較、研修終了後のアンケート調査結果や事後レポートよりデータ収集、評価した。結果、「未経験」だった48項目のうち35項目(73%)が経験できた。また、65項目(74%)は、「根拠をもって一人で行える」が研修後増加していた。反対に、「根拠をもって一人で行える」が減少した項目は、13項目(15%)あり、減少した理由として、同じ技術でも経験を重ねることで、患者の症状アセスメントが加わり、患者の個別性を重視した援助の判断が必要であることを学んだためと思われる。事後レポートでは、「フィジカルアセスメントを身につけていくことが課題である」「一人一人異なる患者の状況に合わせた援助の実施の必要性」についての記述が多かった。このことから今まで実施していた技術への考え方の浅さを実感し、「根拠に基づいた実施」の思考過程が深まったと思われる。他病棟での経験は、今までの技術を振り返る機会となり、自己の課題を明確にすることができた。
2. アセスメント能力向上に向けての継続的関わりによる研修者の変化	—	平成23年2月	日本医療マネジメント学会奈良支部会	卒後2年目看護師19名を対象とし、アセスメント能力の向上に向けて継続的に関わったことにより、変化した研修者の意識と行動を明確にした。アセスメントの集合研修を実施し、1か月後、3か月後にアセスメントに関する症例カンファレンスをOJTで実施。6か月後にアンケート調査した。調査表は鎌田ら1)の「看護過程の構造」を参考に、「Ⅰ.問題意識」「Ⅱ.情報収集」「Ⅲ.アセスメント」「Ⅳ.自分の分析の確認」「Ⅴ.根拠にもとづく看護判断」の5項目について研修後の意識と行動の変化を問う14の小項目で構成し4段階で評価する独自の調査票を作成した。結果、患者の病態や実施されている治療に対して疑問を感じ、情報の解釈や分析、判断について自分で考え、先輩看護師に指導を受け理解していた。アセスメント研修は、事前課題の内容をグループで共有しあい、また、模擬患者が次々に提示する訴えやデータについてアセスメントできていた。6か月間、意図的に継続的に関わったことにより卒後2年目看護師は、①問題意識を持ったアセスメントを意識するようになった②客観的な情報収集の必要性を感じ、五感を使って観察するようになった③自己のアセスメントや判断の不十分さを自覚し、信頼性を高めるために先輩に確認・相談するようになった。今後こうした確認の積み重ねにより、情報収集能力やアセスメント能力の向上が期待できると考える。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
3. 長期療養型病院における中堅以上の看護師に必要な教育内容の検討	—	平成23年6月	日本医療マネージメント学会	長期療養型A病院における中堅以上の看護師の看護技術修得状況調査から、今後の教育内容を明らかにすることを目的とした。対象はA病院看護師126名（看護師長を除く）とし、国立病院機構看護職員能力開発プログラム「看護実践における技術的側面」の大項目8項目、小項目76項目について5段階評価の自記式質問紙により調査した。看護必要度、超重症児（者）・準超重症児（者）評価結果と対比し、教育内容を抽出した。結果、看護必要度評価では、「呼吸ケア」が必要な患者が全体の43%を占めている。技術修得状況調査結果では「根拠に基づき一人で実施」の修得度が低かったのは「救命救急処置技術」「創傷管理技術」であり、具体的には「人工呼吸器装着中患者の観察と管理」「ドレナージの管理」など「呼吸管理技術」に関するものが低く、中堅以上の看護師に必要な教育内容は「呼吸管理技術」「救命救急処置技術」である。
4. A Study of Young Women's Images of the Gynecological Examination Chair (若い女性の婦人科診察台のイメージに関する研究)	—	平成25年10月	International Nursing Conference & World Academy of Nursing Science	若い女性が婦人科診察台に対して、どのようなイメージをしているのか判明することを目的とした。婦人科診察台のイメージの15項目のスケールを作成した。80人の女子大学生に婦人科診察台で診察を受けるポーズをとってもらった。結果、診察ポーズ前の婦人科診察台のイメージは、「緊張する」67.0%、「恥ずかしい」58.0%、「親しみにくい」50%「こわい」43.3%、「嫌い」32.7%であった。診察ポーズ後の婦人科診察台のイメージは、「高い」61.7%、「嫌い」45.3%、「緊張」42.7%、「こわい」28.0%、「恥ずかしい」27.7%に変化した。 診察ポーズ後50名の学生が婦人科診察台のイメージはマイナスイメージからプラスイメージに変化した。このことから若い女性は診察前は婦人科診察台に対してマイナスイメージをもっているが体験後プラスイメージに変化した。子宮がん検診率を上げるために、ヘルスケア・プロバイダーは、若い女性の婦人科診察台の否定的なイメージを減少させることが必要である。 本人担当部分：データの分析、結果の考察を行った。 共同発表者：Yumiko Nakai, Jong-Seong Moon, Yasumi Harikane, <u>Yuri Kobayashi</u> , Mayumi Kawai, Midori Takagi, Akiko Ito

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
5. 新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性とその特徴	—	平成26年8月	日本看護学教育学会第24回学術集会	看護師1,075名を対象に自記式質問紙法による調査を行った。質問紙は高比良ら(1999)による情報活用の実践力尺度、常盤ら(2010)による批判的思考態度尺度を使用。分析対象者は新人看護師158名、看護師583名。新人看護師と看護師のクリティカルシンキング能力および情報活用能力の平均値の比較では、「協同的態度」と「探究心」が新人看護師が高く、「懐疑的態度」と「論理的思考への自信」は低かった。情報活用能力では<表現力>のみが有意に高かった。3) 新人看護師および看護師の「クリティカルシンキング能力」と<情報活用能力>の関連性は、双方とも有意な正の相関が認められた。本研究から、新人看護師の両能力は関連していることが示唆された。クリティカルシンキング能力では「懐疑的態度」や「論理的思考への自信」、情報活用能力では<判断力>や<処理力>などの能力を高める教育が必要であると考ええる。(修士論文の一部を発表) 小林由里, 河合まゆみ, 播金ヤスミ, 中居由美子, 伊藤明子, 小笠原知枝 本人担当部分：質問紙の作成と調査及び統計解析、研究の総括を行った。 共同発表者：小林由里, 河合まゆみ, 播金ヤスミ, 中居由美子, 伊藤明子, 小笠原知枝
6. 看護専門学校における高校新卒学生と社会人経験学生の学習意欲に関与する要因	—	平成27年8月	日本看護学教育学会第25回学術集会	専門学校における高校新卒学生と社会人経験学生の学習意欲に関与する要因を明らかにすることを目的とした。看護専門学校3年課程(4校)の1~3年生445名を対象に、自記式質問紙調査を実施。質問紙は永嶋らの学習意欲尺度、斎藤らの志望動機尺度、菅原らの自意識尺度と学習活動で困った場面・学校生活での人間関係・相談の気兼ねなど6項目とした。結果は、社会人が学習意欲全体で有意に高く、学習意欲に関与する要因とした高校卒は「志望動機」のみであったが、社会人は「志望動機」「自意識」「学校生活の相談」が関与していることが示唆された。さらに高校卒は看護職への憧れと自分に適性があると感じているほど演習・実習に期待が大きいたことが推察された。 本人担当部分：データの分析、結果の考察を行った。 共同発表者：河合まゆみ, 小笠原知枝, 中居由美子, 小林由里, 播金ヤスミ, 伊藤明子

教 育 研 究 業 績 書		
平成31年3月31日		
氏名 高田 勝子		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学	母性、助産学、脳神経メカニズ	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
・ 母性看護学 1) 母性看護学Ⅰ 概論 母性看護学Ⅱ 各論 母性看護学Ⅲ（看護技術） 母性看護学Ⅳ（看護過程） 2) 母性看護学演習	2014年4月～ 現在	学生のクラス特徴として年齢層が18歳～育児中の学生、社会人経験のある学生で構成されており、グループワークや討論を取り入れ、学生同士の意見交換が効果的となるような配慮を実施した。母性看護学概論では、生きることの意味を考え、命と向き合っていく専門職であることを考える機会を作る工夫をおこなっている。授業の最後には振り返りを行い、各自の目標達成、課題を明確にしていく取り組みをしている。
	2014年4月～ 現在	講義で学んだ内容を技術演習を通して、行動実践できるようにした。さらに実習へとつなげていけるような工夫をしている。自主的に自己学習できるような教材を作成している。
・ 助産学 1) 助産診断技術学 2) 助産診断技術学演習	2015年4月～ 現在	少人数グループワークを授業の中に取り組み、他者と学習することで1つの実践を生み出せるプロセスを取り入れている。また、知識を活用・応用できるように具体的な事例を取り上げ、分析し、実践できるような設定の工夫をしている。
	2015年4月～ 現在	シナリオを作成し、提示し、学生はそのなかから課題を見つけ、実践することをおこなっている。また、学生が調べたことをプレゼンテーションし、自らの学習成果を他の学生と共有し、新たな学習課題を見つけ出すという展開を取り入れている。
2 作成した教科書、教材		
1) 分娩介助技術手順法	2015年2月	1) 分娩直接介助と分娩間接介助の手順本を作成。
2) 母性看護学実習指導要綱作成	2017年4月	2) 効果的な実習が出来るように、従来の指導要綱の全体見直しと記録の変更を実施。
3) 新生児沐浴と新生児フジカルアセスメントのチェックリスト作成	2018年5月	3) 演習、自己学習で活用でき、実践できるレベルになるように手順書を作成した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
アドバンス助産師 CLoCMiPレベルⅢ認証	2016年12月	
5 その他		

多言語プレゼンテーション国際コンテスト出場 国際シンポジウムのシンポジストとして招聘			2017年4月 2017年10月	入賞 早稲田大学大学院
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項			年月日	概 要
1 資格, 免許 看護師免許 介護支援専門員 助産師免許			1998年 2003年 2010年	
4 その他				
ベビーマッサージインストラクター資格 ヘッドスパ・エステインストラクター資格 リフレクソロジーインストラクター資格 新生児蘇生法Jインストラクター資格			2007年 2008年 2008年 2015年	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
運動は脳を介して食意欲・ 行動にどう影響を与えるか	共著	2016年	日本末病システム学会雑誌 Vol. 22 No3	担当部分:「運動が食欲に与える影響 食・動・脳関連」 共著者: 高田勝子、吉川貴仁
未来のノーベル賞はここに ある! イチオシ研究発掘メ ディア	共著	2018年	Academist Journal	担当部分:「食べる意欲や我慢は無意識 に働く脳活動と関係するか」 共著者: 高田勝子、吉川貴仁
(学術論文)				
助産師を志す看護専攻3年 生の進学意識と教員の関わり	単著	2015年	白鳳短期大学研究紀要 第10号 P49-58	助産師を志す学生の進学動機からの進学 意識の詳細とモチベーションの高さ、そ れに関わる教員の関わりについての質的 研究。
死産ケア教育のとりくみ	共著	2016年	白鳳短期大学研究紀要第11号 P169-178	死産ケア教育は学生にとって誕生と死の 両方の命をケアしていくことの大切さに 気づき、看護対象へのより細やかな配慮 と判断、柔軟な対応が求められることを 新たに認識した 共著者: 高田勝子、吉川貴仁
The brain science of exercise-eating linkage for improvements of modern human health.	共著	2017年	Journal of Physical Fitness and Sports Medicine. 2017;6(5):295-300.	単回運動や継続的運動習慣が、食 意欲・食行動を制御する脳神経の 仕組みにどのように働きかけるの かを解説した。 共著者: 吉川貴仁、上田真也、 石井聡、高田勝子
Neural activity induced by visual food stimuli presented out of awareness:a preliminary magnetoencephalography study	共著	2018年	Scientific Reports8,Article number:3119	食刺激による神経活動に関連する 無意識下の脳活動の役割を、脳磁 図を使用して解明した。 共著者: 高田勝子、吉川貴仁、 石井聡、松尾貴司、中村千華

Relationship between Stress Response and Stress Tolerance Characteristics for Midwife Students	単著	2019年	奈良学園大学紀要第10集p63-73	唾液コルチゾールとハーディネスとの関係を調べ助産師学生のストレス反応とストレス耐性特性との関係について調査分析し考察した。
--	----	-------	--------------------	---

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 吉水 清

研 究 分 野		研究内容のキーワード
医歯薬学（看護学）		国際保健，災害保健
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1) インタビューや地区踏査等における自己評価制の導入	平成 21 年 4 月～ 現在に至る	佐賀大学医学部看護学科の「地域看護・地域看護活動論」において、地域住民とのインタビューや地区踏査等、学生の自己評価を基礎として実施するようにした。このことにより、学生が地域との関わりを具体的な行動レベルで理解することが可能となり、自らの到達状況や次の学習課題を明確に理解しながら実施することできた。 到達目標を学生の自己評価と比較しながら実践することにより、学習状況が明らかになり、教育方法の意義および課題について、学生が自らのものとして理解できるように、地域看護における実践能力向上および看護実践能力の向上をめざした。
2) 基礎ゼミナール及び卒業論文指導における自己表現の強化	平成 21 年 4 月～ 現在に至る	佐賀大学医学部看護学科の基礎力総合ゼミナールおよび卒業研究の指導において、パワーポイントおよび論文でのプレゼンテーション訓練、地域踏査等の本人による事前調整等を通じ、自らを表現できるよう指導を行った。この結果、学生本人が主張したいことを効果的に伝える能力が向上した。 コミュニケーション能力は看護実践能力の重要な柱であるが、地域全体を有機的に機能させ続けることが要求される地域看護（公衆衛生看護）領域においては特に重要な能力である。
3) 科目間連携の実践	平成 21 年 4 月～ 現在に至る	佐賀大学医学部看護学科の地域看護（公衆衛生看護）領域の授業科目の構成作成及び講義において、科目間連携を重点に据えた指導を行った。これは限られた講義時間を効果的に活用するだけでなく、各科目が看護実践に密接につながることを効果的に見せるためである。 地域看護（公衆衛生看護）は様々な知識、データおよび地域リソース等を総合して実践するものであり、地域看護（公衆衛生看護）の各科目において自ら実践して伝えることが効果的である。
4) 公衆衛生看護学における地域保健活動の実践に則した理解の強化		同大学保健医療学部看護学科の講師として、公衆衛生看護学Ⅰ、公衆衛生看護学Ⅲ、公衆衛生看護学方法論Ⅰ、公衆衛生看護学方法論Ⅱ、公衆衛生看護学診断演習、公衆衛生看護学実習Ⅰ、公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）、公衆衛生看護学実習Ⅲ（産業保健）の公衆衛生看護学領域の教育、また、感染症論、災害看護論、卒業研究Ⅱ、基礎看護学実習Ⅱ、成人看護学実習Ⅰ、看護倫理（大学院）に対する指導を担当している。 公衆衛生看護学Ⅰにおいて、主には健康危機管理としての感染症、災害対策の基本を中心に映像および事例を活用して公衆衛生活動の基礎から実践に結び付く内容を示している。そのほか、成人保健、高齢者保健においても実際の保健師活動の場をイメージできるよう具体的な資料や DVD を用いている。 公衆衛生看護学Ⅲにおいて、主に産業看護診断でアセスメントシートを活用して演習を行い、実習に結び付く展開を行っている。

事項	年月日	概要
		公衆衛生看護学方法論Ⅰおよび公衆衛生看護学方法論Ⅱにおいては、感染症の基礎、集団発生時の対応、集団への保健指導に関してデモンストレーションを実施しながら根拠に基づき学生に対しわかりやすく伝えている。 公衆衛生看護学診断演習では、罹患率等の基本的な計算問題から年調整死亡率の算出法を確実に計算できるように指導した。また、国民衛生の動向をもとに、近年の統計動向等を図表などにわかりやすく示したことで理解が得やすいよう工夫を凝らした。 また、地区踏査の手法でコミュニティアズパートナーモデルを使いわかりやすく示した。また地域の地区踏査やインターネットや統計資料などを活用し、その地域の状態を把握させ分析できるように理解させることができています。また、母子訪問指導時の身体計測、保健指導、成人の動機づけ支援および積極的支援の保健指導、学校保健診断、アセスメントシートを活用した産業保健診断、など実習時においても活用できるよう理解を促している。 基礎看護学実習Ⅱでは、リハビリテーション回復期病棟における基礎看護技術の実践を受持ち患者に行い、療養生活における看護技術の理解を高めている。 成人看護学実習Ⅱでは、急性期総合医療センターにおける消化器外科病棟で周手術期の看護実践を看護過程の展開により、術前、術中および術後の看護実践を受持ち患者に行い、手術室および集中治療室における看護ケアの理解を高めている。看護倫理（大学院）では、事例をもとにディスカッションを行い、様々な領域における倫理的問題について、討論を行い、理解を高めている。
2 作成した教科書、教材 1) 2018 年 看護師国家試験対策 要点がわかる 出題傾向がみえる必修問題 2) 2018 年 看護師国家試験対策 要点がわかる 出題傾向がみえる看護の統合と実践	平成 30 年 1 月 5 日 平成 30 年 6 月 3 日	第 6 章 薬物の作用とその管理（112 頁～116 頁，189 頁～190 頁） 第 3 章 国際化と看護（45 頁～47 頁，83 頁～86 頁）
3 教育上の能力に関する大学等の評価		勤務していた教育機関では全てにおいて FD 委員会があり、講義終了する最終回には学生に対し授業アンケートを取っていた。その結果は、病院勤務やまちの保健室での保健師活動、災害保健師としての保健師活動を踏まえ、具体的な事例をもとに概説することで、点が面につながる部分が多く、わかりやすかったとの評価を得た。

事項	年月日	概 要
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 佐賀大学医学部看護学科における教育実績	平成 20 年 5 月 ～ 平成 26 年 3 月	同大学医学部看護学科の助教として「地域保健」「地域看護学総論」「地域看護学方法論Ⅰ」「地域看護学方法論Ⅱ」「地域・在宅演習」「地域看護実習」「在宅看護実習」「看護の統合と実践（実習）」「看護研究」を担当した。 地域看護学方法論Ⅰでは、罹患率等の基本的な計算問題から年調整死亡率の算出法を確実に計算できるように対応した。また、国民衛生の動向をもとに、近年の統計動向等を図表などにわかりやすく示したことで理解に結び付けることができた。 地域・在宅看護演習では、地区踏査の手法でコミュニティアズパートナーモデルを使いわかりやすく示した。また地域の地区踏査やインターネットや統計資料などを活用し、その地域の状態を把握させ分析できるように示した。また、災害時においても実施できるように理解を促した。実習においては、保健所、政令市、市町村保健センター等の機能共に法的根拠とそれぞれの保健事業の展開法を示した。在宅看護実習においても法的根拠に基づいた地域連携機能を示した。 地域看護実習では、企業における介入研究を事例にて示すことで産業保健活動をわかりやすく理解させることができた。 では、文章の書き方、パワーポイントの作成法や色使い、発表方法等を指導し、プレゼンテーションスキルを高めた。 看護研究に関しては、研究計画書の書き方や文献検索を通し、研究方法を深め論文作成のための基本的能力を理解させることができた。
2) 佐賀県医療センター好生館における教育実績	平成 26 年 4 月 ～平成 27 年 3 月	同病院看護部管理室の教育専任看護師長として、「新人教育研修」「中堅者研修」「リーダー研修」の企画および運営を担当した。各病棟との情報共有ならびにスタッフ間の連携を図り、個人および研修の目標達成に結び付く実施を行うことができた。
3) 大川看護福祉専門学校における教育実績	平成 27 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	同学校の専任教員として、「基礎看護学方法論Ⅰ」「基礎看護学方法論Ⅱ」「基礎看護学方法論Ⅵ看護研究」「成人看護学方法論Ⅳ（腎・代謝・内分泌）」「保健学」「精神看護学概論」「看護の統合と実践Ⅱ（災害看護・卒業研究）」「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」「成人看護学実習Ⅰ」「老年看護学実習」「精神看護学実習」「在宅看護学実習Ⅰ（地域）・Ⅱ（在宅）」担当していた。 基礎看護学方法論Ⅰおよび基礎看護学方法論Ⅱにおいては、基礎となるバイタルサインのチェック、血圧測定、ベッドメイキング等デモンストレーションを実施しながら根拠に基づき学生に対しわかりやすく理解させることができた。 保健学では、罹患率等の基本的な計算問題から年齢調整死亡率の算出法を確実に計算できるように対応した。また、国民衛生の動向をもとに、近年の統計動向等を図表などにわかりやすく示したことで理解させることができた。 在宅看護学実習Ⅰ（地域）では、地区踏査の手法でコミュニティアズパートナーモデルを使いわかりやすく示した。また地域の地区踏査やインターネットや統計資料などを活用し、その地域の状態を把握させ分析できるように示した。また、災害時においても実施できるように示した。また保健所、政令市、市町村保健センター等の機能と共に法的根拠とそれぞれの保健事業の展開法を理解させることができた。在宅看護実習Ⅱ（在宅）においても法的根拠に基づいた地域連携機能を理解させることができた。

事項	年月日	概要
4) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成 30 年 4 月 ~ 現在に至る	看護の統合と実践Ⅱ(卒業研究)では、文章の書き方、パワーポイントの作成法や色使い、発表方法等を指導し、プレゼンテーションスキルを高めた。 卒業論文に関しては、研究計画書の書き方や文献検索を通し、研究方法を深め論文作成のための基本的能力を理解させることができた。 同大学保健医療学部看護学科の講師として、公衆衛生看護学Ⅰ、公衆衛生看護学Ⅲ、公衆衛生看護学方法論Ⅰ、公衆衛生看護学方法論Ⅱ、公衆衛生看護学診断演習、公衆衛生看護学実習Ⅰ、公衆衛生看護学実習Ⅱ(学校保健)、公衆衛生看護学実習Ⅲ(産業保健)の公衆衛生看護学領域の教育、また、感染症論、災害看護論、卒業研究Ⅱ、基礎看護学実習Ⅱ、成人看護学実習Ⅰ、看護倫理(大学院)に対する指導を担当している。 公衆衛生看護学Ⅰにおいて、主には健康危機管理としての感染症、災害対策の基本を中心に映像および事例を活用して公衆衛生活動の基礎から実践に結び付く内容を示している。そのほか、成人保健、高齢者保健においても実際の保健師活動の場をイメージできるよう具体的な資料やDVDを用いている。 公衆衛生看護学Ⅲにおいて、主に産業看護診断でアセスメントシートを活用して演習を行い、実習に結び付く展開を行っている。公衆衛生看護学方法論Ⅰおよび公衆衛生看護学方法論Ⅱにおいては、感染症の基礎、集団発生時の対応、集団への保健指導に関してデモンストレーションを実施しながら根拠に基づき学生に対しわかりやすく伝えている。 公衆衛生看護学診断演習では、罹患率等の基本的な計算問題から年調整死亡率の算出法を確実に計算できるように指導した。また、国民衛生の動向をもとに、近年の統計動向等を図表などにわかりやすく示したことで理解が得やすいよう工夫を凝らした。 また、地区踏査の手法でコミュニティアズパートナーモデルを使いわかりやすく示した。また地域の地区踏査やインターネットや統計資料などを活用し、その地域の状態を把握させ分析できるように理解させることができています。また、母子訪問指導時の身体計測、保健指導、成人の動機づけ支援および積極的支援の保健指導、学校保健診断、アセスメントシートを活用した産業保健診断、など実習時においても活用できるよう理解を促している。 公衆衛生看護学実習Ⅰにおいては、保健所、政令市、市町村保健センター等の機能共に法的根拠とそれぞれの保健事業の展開法を示している。 感染症論では、基本となる感染の三原則および標準予防策から法律、現場に結び付く演習を取り入れ、理解を促している。災害看護論では、参加した災害支援活動の実際を伝達し、防災センターの見学に同行し、災害看護の必要性と果す役割について伝えている。 卒業研究Ⅱでは、研究計画書の書き方や文献検索を通し、研究方法を深め、論文作成のための基本的能力の理解を高めている。 基礎看護学実習Ⅱでは、リハビリテーション回復期病棟における基礎看護技術の実践を受持ち患者に行い、療養生活における看護技術の理解を高めている。 成人看護学実習Ⅱでは、急性期総合医療センターにおける消化器外科病棟で周手術期の看護実践を看護過程の展開により、術前、術中および術後の看護実践を受持ち患者に行い、手術室および集中治療室における看護ケアの理解を高めている。 看護倫理(大学院)では、事例をもとにディスカッションを行い、様々な領域における倫理的問題について、討論を行い、理解を高めている。

事項	年月日	概 要
5) 大和高田市立看護専門学校における教育実績	平成 29 年 12 月 ～ 現在に 至る	同学校の非常勤講師として、「国際保健・看護」を担当している。 国際保健・看護においては、異文化の理解、地域診断、健康課題の抽出を画像や事例を活用して学生に対しわかりやすく理解を促している。 国際保健では、感染症の予防や対策など実践に対応できるように工夫している。また、世界の動向をもとに、近年の保健統計の動向等を図表などにわかりやすく示したことで理解に結び付けている。
5 その他 なし		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 看護師免許 臨床工学技士免許 日本看護協会 認定看護管理者ファーストレベル 保健師免許 第一種衛生管理者資格 養護教諭二種免許 日本移植コーディネーター協議会ドナー移植コーディネーター資格 看護学修士	平成 3 年 5 月 24 日 平成 4 年 7 月 31 日 平成 13 年 3 月 1 日 平成 19 年 4 月 20 日 平成 19 年 8 月 8 日 平成 19 年 8 月 15 日 平成 19 年 9 月 16 日 平成 21 年 3 月 24 日	看護師免許番号 第 11549 号 厚生省 臨床工学技士免許番号 第 7712 号 厚生省 日本看護協会 認定看護管理者ファーストレベル 第 880 号 保健師免許番号 第 145776 号 厚生労働省 第一種衛生管理者番号 第 43000243121 号 熊本労働局 養護教諭二種免許番号 平 19 第 13 号 熊本県教育委員会 日本移植コーディネーター協議会ドナー移植コーディネーター資格 看護学修士 佐賀大学 第 136 号 「修士論文題目：大学生の国際保健・国際看護のイメージおよび国際保健医療協力に関する意識調査」
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 災害支援ナース活動（熊本県看護協会） 災害時の保健師活動を主に活動を展開 2) まちの保健室活動（熊本県看護協会） 健康相談・保健指導 3) 佐賀 DMAT（災害派遣医療チーム）活動 佐賀 DMAT の設立準備を担当	平成 8 年 4 月 ～ 平成 26 年 3 月 平成 19 年 4 月 ～ 平成 26 年 3 月 平成 20 年 4 月 ～ 現在に 至る	熊本県看護協会の災害看護研修を受講し、災害支援ナースに登録、平成 23 年の東日本大震災時、支援活動で宮城県仙台市に滞在し保健活動を行った。平成 24 年の北部九州豪雨災害（激甚災害指定）に災害支援ナースとして熊本県阿蘇市の避難所にて保健活動を実施した。 熊本県熊本市内のデパートおよび大型ショッピングモールにおいて、毎月 1 回土曜日に保健室を設置し、血圧測定および体脂肪測定、健康相談を行い、地域における保健活動を実施した。 佐賀県 DMAT 設立時より、佐賀大学チームメンバーとして東京 DMAT からの引継ぎおよび設置準備にかかわり、佐賀県の災害拠点病院としての研修会および運営にリーダーとして携わっている。

事項	年月日	概要
4) がん予防推進委員活動（佐賀県） がん予防のための健康教育・保健指導・健康相談を実施	平成 25 年 4 月 ～ 現在に至る	佐賀県が開催するがん予防講習会を受講し、がん予防推進員に登録、健診受診の推進、がん患者の集い、がん予防に関する研修会で保健活動を行う。大型ショッピングモールやイベント会場において、がん予防の啓発を地域に向けて発信し、地域における保健予防活動を実施している。
5) 災害支援ナース活動（奈良県看護協会） 災害支援ナースとして登録し上司の許可を得て災害時の保健活動に備える	平成 30 年 9 月 ～ 現在に至る	奈良県看護協会の災害看護研修を受講し、災害支援ナースに登録、災害時の保健活動に備えている。平成 30 年度は西日本地区の平成 30 年 7 月豪雨災害で被災した広島県呉市に 2 回赴任し、保健師活動を行った。
4 その他 1) ユネスコ持続可能な開発のための教育・国際協力と相互理解の促進を目的とした国際保健プログラム 「フィジー・ツバルでの国際的な保健師活動」と「国際保健の研究データ収集」	平成 20 年 3 月 9 日 ～ 平成 20 年 3 月 25 日	持続可能な開発のための実践エコツアーリズムとして、生態系の維持と保護を意識し、地域社会の発展への貢献を考慮した活動において、地球温暖化の環境問題を始め、様々な国際的問題を考えさせられる切実な現場のフィジーおよびツバルの現状を通して、国の歴史と文化、社会、人々の生活様式を学ぶとともに進行する環境変化の現状について、保健師として公衆衛生的な視点での視察を行い、健康問題の抽出、対策を検討し、地域診断および母子に対する食習慣の指導などの保健活動を実施した。また、現地 USP（南太平洋大学）において、質問紙による国際保健の意識について調査を実施した。
2) モルディブにおける国際的な保健師活動と地球温暖化の調査協力	平成 20 年 9 月 21 日～ 平成 20 年 9 月 28 日	地球温暖化の環境問題、自然災害および人為災害の切実な現場のモルディブの現状を通して、国の歴史と文化、社会、人々の生活様式を学ぶとともに進行する環境変化の現状について、保健師として公衆衛生的な視点で視察を行い、健康問題の抽出、対策を検討し、地域診断および成人期の肥満予防に関する保健活動を実施した。
3) NIRS(国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所) 被ばく医療セミナー受講	平成 20 年 11 月 18 日～ 平成 20 年 11 月 20 日	放射線医学総合研究所で開催された放射線による被ばくもしくは放射性物質による汚染事象が起きた際の医療施設での被災者の受入れ対応などについて知識と技能を習得し、各機関での中心的役割を担える人材を養成することを目的としたセミナーを受講した。
4) 第 5 回 佐賀 DMAT 研修会受講	平成 21 年 7 月 11 日～ 平成 21 年 7 月 12 日	佐賀大学医学部で開催された災害時派遣医療チーム(DMAT) の研修会を受講した。
5) 第 24 回 全国保健師教育機関協議会教員研修会受講	平成 21 年 8 月 1 日	東京大学で開催された「保健師教育の拡充の方向性についての検討」をテーマとする研修会を受講した。
6) 平成 21 年度 全国保健師長会研修会受講	平成 21 年 8 月 26 日～ 平成 21 年 8 月 28 日	愛媛県松山市で開催された「生涯にわたって健康の安心・安全を保障する地域保健の役割」をテーマとする研修会を受講した。
7) 平成 21 年度 第 2 回佐賀県産業保健研究会研修会受講	平成 21 年 9 月 7 日	佐賀産業保健推進センターで開催された「これから始める職場環境改善」をテーマとする研修会を受講した。
8) 平成 21 年度 全国保健師教育機関協議会九州ブロック研修会受講	平成 22 年 3 月 22 日	佐賀県鳥栖市サンメッセ鳥栖で開催された「コーチング」をテーマとした研修会を受講した。
9) 平成 22 年度 全国保健師長会佐賀県支部研修会受講	平成 22 年 6 月 5 日	佐賀県立総合看護学院で開催された「これからの保健師教育のあり方」をテーマとした研修会を受講した。

事項	年月日	概要
10) 平成 22 年度 第 25 回 全国保健師教育機関協議会教員研修会受講	平成 22 年 7 月 31 日	東京大学で開催された「保健師教育の限らない発展と飛躍のために」をテーマとした研修会を受講した。
11) 平成 22 年度 第 3 回 全国保健師教育機関協議会スキルアップ研修会受講	平成 22 年 8 月 1 日	東京大学で開催された「ここまでできる保健師教育の実際」、「卒業時到達目標を評価できる試験問題の作成の具体的方法」、「第 96 回 保健師国家試験の分析—卒業時到達目標との関連」をテーマとした研修会を受講した。
12) 平成 23 年度 全国保健師教育機関協議会教員研修会ワークショップ参加	平成 23 年 12 月 17 日	東京大学で開催された「保健師教育におけるミニマム・リクワイアメンツ」の活用、「動きだした保健師課程選択制～教育の質保証と今後の方向性を考える～」をテーマとしたワークショップに参加した。
13) 平成 23 年度 地域保健福祉従事者研修会受講	平成 24 年 1 月 12 日～平成 24 年 1 月 13 日	佐賀県庁で開催された「保健情報の活用の手順」をテーマとした研修会を受講した。
14) 平成 23 年度 第 2 回 全国保健師長会佐賀県支部研修会受講	平成 24 年 2 月 18 日	佐賀県立総合看護学院で開催された「新たな保健師活動の実践指針に向けて」をテーマとした研修会を受講した。
15) 平成 24 年度 第 1 回 佐賀県産業保健研究会研修会受講	平成 24 年 4 月 26 日	佐賀県産業医学協会で開催された「健康経営に直結する肝炎対策～職域から肝がんを減らすために～佐賀県独自の対策、ウイルス性肝炎から脂肪肝炎まで」をテーマにした研修会を受講した。
16) 平成 24 年度 佐賀県立病院好生館緩和ケア研修会受講	平成 24 年 5 月 13 日、平成 24 年 5 月 20 日	佐賀県佐賀市好生館で開催された「すべてのがん診療に携わる医療者が研修等により、緩和ケアについての基本的な知識を習得する」を目標とした研修会を受講した。
17) 平成 24 年度 全国保健師教育機関協議会講演会受講	平成 24 年 6 月 2 日	東京工科大学蒲田キャンパスで開催された「大学における新カリキュラムの概要と保健師教育への期待」をテーマにした講演会を受講した。
18) WHO 看護協力センターネットワーク会議・第 9 回 学術集会参加	平成 24 年 6 月 30 日～平成 24 年 7 月 1 日	神戸ポートピアホテルで開催された「想定外の状況に備え、健康を支える看護の挑戦—災害を始め、日々の生活を脅かす出来事が増えつつある中で、基本的な医療ケアでさえも予期出来ないことに備える必要がある。本学会は、看護界から災害への挑戦である—」をテーマにしたネットワーク会議に参加した。
19) 平成 24 年度 全国保健師教育機関協議会九州ブロック研修会受講	平成 24 年 8 月 23 日～平成 24 年 8 月 24 日	ホテル福岡ガーデンパレスで開催された「新しい公衆衛生看護学教育の基盤を固める」をテーマにした研修会を受講した。
20) 国際保健師ネットワーク Pre Conference 参加	平成 24 年 8 月 27 日～平成 24 年 8 月 29 日	JNA ホールおよび仙台国際ホテルで開催された「保健師の国際ネットワークの構築をめざして」をテーマにしたカンファレンスに参加した。
21) 平成 24 年度 兵庫県立大学公開講座災害看護の教え方 3 受講	平成 24 年 9 月 9 日～平成 24 年 9 月 10 日	兵庫県立大学地域ケア開発研究所で開催された「災害による人々の反応と看護活動」、「災害時の要配慮者への理解と看護」、「シミュレーションを用いた看護教育方法」をテーマとする講座を受講した。

事項	年月日	概要
22) 平成 24 年度 地域保健福祉従事者研修会受講	平成 25 年 1 月 8 日 ～ 平成 25 年 1 月 9 日	佐賀県庁で開催された「地区活動のあり方とその推進体制について」をテーマとした研修会を受講した。
23) 第 45 回 全国保健師活動研究集会参加	平成 25 年 1 月 19 日～ 平成 25 年 1 月 20 日	愛知県名古屋市「ダイテックサカエ」で開催された「一国民の生存権をも否定する“社会保障制度の改悪”と公衆衛生の課題を学ぶ」他をテーマとした研究集会に参加した。
24) 平成 25 年度 全国保健師教育機関協議会講演会受講	平成 25 年 6 月 1 日	東京都千代田区 日本教育会館で開催された「実践能力を重視した保健師教育について理解を深め、併せて保健師教育の将来について推考すること、国家試験問題へのブラッシュアップ力を高め、問題作成への意欲を持たせ、併せて保健師 教育におけるミニマム・リクワイアメンツの意義を理解すること」をテーマとした講演会を受講した。
25) 平成 25 年度 全国保健師教育機関協議会九州ブロック研修会受講	平成 25 年 8 月 22 日～ 平成 25 年 8 月 23 日	九州大学病院キャンパスで開催された「卒業時の質保証ができる保健師教育～高度専門職業人としての保健師の養成を目指して～」をテーマとした研修会を受講した。
26) 平成 25 年度 全国保健師教育機関協議会秋季教員研修会受講	平成 25 年 10 月 22 日	三重県津市津センターパレスホールで開催された「実践力を重視し、着実に保健師教育の質向上を図ろう」をテーマにした研修会を受講した。
27) 平成 25 年度 地域保健福祉従事者研修会受講	平成 26 年 1 月 9 日 ～ 平成 26 年 1 月 10 日	佐賀県庁で開催された「何をしたい？地域包括支援センター ～直轄の魅力～」をテーマとした研修会を受講した。
28) 平成 30 年 7 月豪雨災害 災害保健活動（広島県呉市社会福祉協議会からの派遣）	平成 30 年 8 月 10 日	広島県呉市の災害現場において、保健師として災害医療ボランティアの保健活動（熱中症予防および傷病者対応など体調管理、被災住民の訴えの傾聴を中心とした健康支援）を実施した。
29) 平成 30 年 7 月豪雨災害 災害保健活動（広島県呉市社会福祉協議会からの派遣）	平成 30 年 8 月 20 日	広島県呉市の災害現場において、保健師として災害医療ボランティアの保健活動（熱中症予防および傷病者対応など体調管理を中心とした健康支援、高齢者の健康管理）を実施した。
30) 平成 30 年度 全国保健師教育機関協議会 第 1 回 東海・近畿北ブロック、北陸・近畿南ブロック合同研修会受講	平成 30 年 10 月 14 日	大阪市淀川区 CIVI 新大阪研修センターで開催された「公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラムの理解」をテーマとした研修会を受講した。
31) 平成 30 年度 日本私立看護系大学協会研修会受講	平成 30 年 11 月 11 日	大阪市淀川区 TKP 新大阪ビジネスセンターで開催された「グローバルな人材育成～地域における活動を中心に～」をテーマとした研修会を受講した。
32) 第 39 回 奈良県公衆衛生学会参加	平成 30 年 11 月 15 日	奈良県橿原市奈良県医師会館で開催されたシンポジウム「健康長寿を目指して～糖尿病対策の現状と展望～」をテーマとした学会に参加した。
33) 日本災害医学会 第 3 回 愛知 BHELP(Basic Health Emergency Life Support for Public) 標準コースを受講、プロバイダー認定	平成 30 年 11 月 15 日	愛知県長久手市愛知医科大学で開催された BHELP 標準コース「地域保健・福祉関連業務に従事する者が助かった生命を守るために災害対応の標準化を理解し、多職種との協働による災害対応能力の向上」を目的としたコースを受講し、プロバイダー認定を受けた。
34) 地域公衆衛生活動指導、協力	平成 30 年 12 月 8 日	奈良県奈良市二名公民館で開催されたもちつき会で地域住民に対する感染予防のための手指衛生の指導を行った。

事項	年月日	概 要
35) 日本災害医学会 MCLS (Mass Casualty Life Support) 大量殺傷型テロ対応セミナー受講	平成 30 年 12 月 15 日	大阪府泉佐野市りんくう総合医療センターで開催された「多数傷病者への対応標準化トレーニングコース」を目的としたセミナーを受講した。
36) 平成 30 年度 全国保健師教育機関協議会 第 2 回 東海・近畿北ブロック、北陸・近畿南ブロック合同研修会受講	平成 30 年 12 月 23 日	愛知県名古屋市ウインクあいちで開催された「熊本地震からの教訓～大学での教育保証と備えの大切さ～」をテーマとした研修会を受講した。
37) 平成 30 年度 奈良県保健師ネットワーク全体会議参加	平成 31 年 1 月 31 日	奈良県橿原市リサイクル館かしはらで開催された「災害時における行政保健師の役割・機能について」をテーマとした会議に参加した。
38) 日本災害医学会 第 137 回 近畿 MCLS (Mass Casualty Life Support) 標準コースを受講, プロバイダー認定	平成 31 年 2 月 16 日	大阪府大阪市千船病院で開催された「災害現場で実施すべき医療について理解を深めること」を目的とした多数傷病者への医療対応標準化トレーニングコースを受講し, プロバイダー認定を受けた。
39) 環太平洋島嶼国における地球の文化に則した全人的災害時保健活動 第 2 回 公開検討会参加	平成 31 年 2 月 17 日	東京都千代田区フラクシア東京ステーションで開催された「イスラエル, フィリピンおよびニュージーランドにおける災害時保健活動」をテーマとした検討会に参加した。
40) 奈良県看護協会 平成 30 年度 教育研修 災害支援ナーススキルアップ研修Ⅰ参加	平成 31 年 2 月 22 日～平成 31 年 2 月 23 日	奈良県橿原市奈良県看護研修センターで開催された「災害支援に必要な災害医療・看護の基礎知識および災害発生時の対応から長期支援について学ぶ」ことをテーマとした研修会に参加した。
41) 第 37 回 日本国際保健医療学会 西日本地方会参加	平成 31 年 3 月 2 日	福岡県福岡市第一薬科大学で開催された「自発性を促し, 持続性のある国際協力を目指して」をテーマとした学術大会に参加した。
42) 平成 30 年度 市立東大阪医療センター 合同災害訓練参加	平成 31 年 3 月 12 日	大阪府東大阪市の市立東大阪医療センターで開催された災害訓練に模擬患者区として, 学生を引率して参加した。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 2018 年 看護師国家試験 対策 要点がわかる 出題傾向がみえる必修問題	共著	平成 30 年 1 月 平成 30 年 1 月	ピラールプレス	薬物治療の反応について、他科目との整合性を踏まえて具体的な用語を見直し、過去の問題は新しい問題を選定し、さらに国家試験出題基準の中項目ごとに解答するために必要な関連する知識について、要点を絞り解説を行った。 共著者：新谷奈苗，井上智栄子，金城夏樹，今野理恵，佐佐木智絵，佐藤郁代，津田智子，土井一浩，中尾美幸，日野徳子，本庄美香，室津史子，山口扶弥，吉水清 担当部分：第 6 章 薬物の作用とその管理（112 頁～116 頁，189 頁～190 頁）
2. 2018 年 看護師国家試験 対策 要点がわかる 出題傾向がみえる看護の統合と実践	共著	平成 30 年 1 月	ピラールプレス	国際化と看護について、多様な文化と看護および国際協力活動と看護の問題を選定し、さらに国家試験出題基準の中項目ごとに解答するために必要な関連する知識について、要点を絞り解説を行った。 共著者：井上智栄子，梶村郁子，洲崎好香，佐藤郁代，新谷奈苗，立川茂樹，丸山輝剛，吉水清 担当部分：第 3 章 国際化と看護（45 頁～47 頁，83 頁～86 頁）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1. 佐賀県における看護師の自殺について－同僚の自殺についての実態調査－（査読付き）1. 佐賀県における看護師の自殺について－同僚の自殺についての実態調査－（査読付き）	共著	平成 21 年 8 月	心身医学 第 49 巻 7 号 827 頁-837 頁	佐賀県における看護師の自殺の実態を調査し、自殺のリスク要因を明らかにし、予防対策に取り組むことを目的として、今回の研究を実施した。看護師の自殺予防のために、就職後の早い時期からメンタルヘルス対策に取り組む必要性があると思われた。 共著者：◎児玉豊彦、川原一恵、新地浩一、池田倫子、吉水清、新地豊香 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した。
2. 大学生の国際保健・国際看護のイメージに関する意識調査－日本・台湾・フィジーにおける比較－	共著	平成 23 年 5 月 平成 23 年 11 月	日本国際保健医療学会雑誌 第 26 巻 1 号 21 頁-28 頁	「国際保健」や「国際看護」のイメージは国により異なる。本研究は、2007 年から 2008 年において、「国際保健」と「国際看護」のイメージについて、自記式質問紙調査票により検討を行った。今後の国際保健に関する教育や人材育成が重要であることが示唆された。 共著者：◎吉水清、児玉豊彦、小栗清佳、藤本裕二、神崎匠世、梅崎節子、賀加貝、新地浩一 本人担当部分：研究に関する計画、対象者への調査、データ分析、論文作成を担当した。
3. 国際緊急援助活動における救済医療者のメンタルストレスについて	共著	平成 23 年 11 月	心身医学 第 51 巻 11 号 1025 頁-1034 頁	国際緊急援助活動 (IDR) においては、救済医療スタッフは限られた医療資材やマンパワーのもとで、かなり厳しい労働を強いられる。それゆえに、IDR に従事する救済医療スタッフのメンタルヘルスマネジメントは、効果的な救済医療活動のためにもきわめて重要である。しかし、わが国において、このようなメンタルヘルスマネジメントのシステムの構築はまだなされていない。本研究においては、IDR の時期を 3 つに区分して検討した。将来の IDR の成功のためにも効果的なストレスマネジメントのシステムを構築することが必要であると考えられた。 共著者：◎高田清佳、新地浩一、児玉豊彦、吉水清、梅崎節子 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した。
4. 笑いを取り入れた保健師活動－健康教育の導入について－	共著	平成 23 年 11 月	日本健康医学会雑誌 第 20 巻 3 号 206 頁-207 頁	地域住民約 100 名を対象に健康教育を実施した。その際、健康教育の一部に「笑い」を取り入れることにしその効果を調査した。その結果、笑いを取り入れることで、健康教育が対象者自身に入り込みやすく、記憶として鮮明に残るのではないかと考えられた。健康教育も非常に効果的となり QOL 向上へとつながることが示唆された。 共同発表者：◎山下理恵子、中村登志子、吉水清、洲崎好香、有吉浩美 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 国際緊急援助活動における実践的な診療記録の開発研究－IDR Medical Record 2012 の提案－ :	共著	平成 24 年 7 月	日本国際保健医療学会雑誌 第 27 巻 2 号 129 頁-140 頁	近年、大規模な自然災害が世界中で頻発しており、わが国は積極的に国際緊急援助活動（IDR）に参加している。効率的で効果的な IDR を行うためには、被災地の混乱した状況の中でも受診患者の特徴や実際の医療活動を記載し、評価・分析できるような診療記録が必要不可欠である。IDR において使用する診療記録の具備すべき条件について調査し、効果的な IDR のための診療記録のフォーマットを提案することを目的として研究を実施した。IDR における医療活動に役立つ実践的な診療記録である IDR Medical Record 2012 を提案した。 共著者：◎川原一恵，新地浩一，池田倫子，吉水清，新地豊香 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した。
(その他) 補助金，学会発 1. 国際緊急援助活動における効率的な医療・看護記録の開発（研究代表者）	共著	平成 23 年 7 月	国際緊急援助活動における効率的な医療記録の開発研究報告書（平成 22 年度） 1 頁-37 頁 文部科学省科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）	本研究は、挑戦的萌芽研究の研究代表者として、国際緊急医療援助活動（IDR）における医療・看護記録のモデルを作成して、効果的な国際緊急援助活動が行われることに貢献しようとするものである。IDR 経験者および災害医療の専門家を対象として、IDR における医療活動に役立つ実践的な診療記録の形式の調査を行い、IDR Medical Record 2012 を開発した。 共著者：◎吉水清，新地浩一，矢野潔子 本人担当部分：研究代表者のため、研究に関する計画、対象者への調査、データ分析、論文作成のすべてにおいて担当した。
2. ツバルにおける国際保健・医療の現状と課題	共同	平成 20 年 10	第 23 回日本国際保健医療学会学術大会（於：新宿区）	南太平洋の国ツバルは、人口約 1 万人で 9 つの島からなる島嶼国で、ポリネシア系住民が暮らす後発開発途上国である。首都フナフチにあるプリンセス・マーガレット病院がツバル唯一の病院である。この病院は 1978 年イギリスの支援により建設されたが、施設の老朽化に伴い 2001 年に日本の ODA による出資で再建された。50 床の病床をもつこの病院には、医師 7 名と看護師 16 名および数名の助産師、看護助手、衛生員が従事する。医療施設や従事者、医薬品不足の中、さまざまな保健医療に関する問題を抱えている。 共同発表者：◎吉水清，児玉豊彦，小栗清佳，川原一恵，賀加貝，神崎匠世，新地浩一 本人担当部分：研究に関する計画、対象者への調査、データ分析、論文作成を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
3. 「国際保健」に関する 大学生の意識調査につ いてー日本，台湾，フィ ジー諸島共和国におけ る国際間比較について ー	共同	平成 20 年 10 月	第 23 回日本国際保健 医 療 学 会 学 術 大 会 (於：新宿区)	「国際保健」や「国際看護」のイメ ージは国により異なる。本研究は、「国際 保健」と「国際看護」のイメージについ て、自記式質問紙調査票により検討を行 った。今後の国際保健に関する教育や人 材育成が重要であることが示唆された。 共同発表者：◎児玉豊彦，吉水清，小栗 清佳，川原一恵，神崎匠世，新地浩一 本人担当部分：対象者への調査、データ 分析を担当した。
4. 国際緊急援助活動にお ける新しい保健・医療記 録の開発	共同	平成 20 年 10 月	第 23 回日本国際保健 医 療 学 会 学 術 大 会 (於：新宿区)	大規模な自然災害が世界中で頻発し ており、わが国は積極的に国際緊急援助 活動（IDR）に参加している。効率的で 効果的な IDR を行うためには、被災地の 混乱した状況の中でも受診患者の特徴 や実際の医療活動を記載し、評価・分析 できるような診療記録が必要不可欠で ある。IDR において使用する診療記録の 具備すべき条件について調査し、効果的 な IDR のための診療記録のフォーマット を提案することを目的として研究を実 施した。IDR における医療活動に役立つ 実践的な診療記録である IDR Medical Record 2012 を 提 案 し た 。 共同発表者：◎川原一恵，新地浩一，小 栗 清 佳 ， 児 玉 豊 彦 ， 吉 水 清 本人担当部分：対象者への調査、データ 分析を担当した。
5. Image of “International Health” and “Disaster Relief” in College Students in Fiji and Japan, The 9th Asia Pacific Conference on Disaster Medicine. (和 訳:フィジーと日本の大 学生における「国際保 健」と「災害援助」のイ メージ)	共同	平成 20 年 11 月	The 9th Asia Pacific Conference on Disaster Medicine (Korea Seoul)	「国際保健」や「国際看護」のイメ ージは国により異なる。本研究は、「国際 保健」と「国際看護」のイメージについ て、日本とフィジーにおいて、自記式質 問紙調査票により検討を行った。今後の 国際保健に関する教育や人材育成が重 要であることが示唆された。 共同発表者：◎Yoshimizu K, Kodama T, Oguri S, Kanzaki N, Shinchi K 本人担当部分：研究に関する計画、対象 者への調査、データ分析、論文作成を担 当した。
6. Educational Effects of Practical Disaster Medical Training and Future Problem(和訳:防 災医療実習の教育効果 と今後の課題)	共同	平成 20 年 11 月	The 9th Asia Pacific Conference on Disaster Medicine (Korea Seoul)	国際緊急援助活動を含む災害保健・医 療の教育は、極めて重要であり、国際的 な医療救援活動に参加する人材の育成 は、必要不可欠である。しかし、わが国 においては大学院における災害医療の教 育体系は、いまだ確立していないのが現 状である。このような実際に発生した大 災害をモデルとしてのシミュレーショ ン実習は、国際緊急医療援助活動の学 生教育に有用であり、教育的、効果的 であることが実証された。 共同発表者：◎Kodama T, Mizota R, Maekawa A, Yoshimizu K, Oguri S, Taki K , Okumura T , Shinchi K 本人担当部分：対象者への調査、データ 分析を担当した。

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
10. アルコールと夫婦関係についての保健師活動報告	共同	平成 22 年 3 月	九州アルコール関連学会沖縄大会（那覇市）	企業においては、人員削減とともに社員への労働密度が非常に増加している。気軽にストレスを発散できるアルコールへ依存するケースは少なくない。アルコール依存者は個人の問題に留まらず、企業の社会的責任を厳しく迫及する風潮がある。企業の損失を防ぐと共に、問題を抱える社員に対して、きめ細かい対応をすることが重要である。そこで、Bさんのケースを通して3年にわたる職場と夫婦への保健師活動を振り返った。 共同発表者：◎有吉浩美，洲崎好香，高山直子，分島るり子，吉水清 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した
11. 10. Proposal of a New Type of Medical Record for International Disaster Relief Operations(和訳：国際的な災害救援活動のための新しいタイプの医療記録の提案)	共同	平成 22 年 8 月	The 10th Asia Pacific conference on Disaster Medicine (Japan Sapporo)	本研究は、国際緊急医療援助活動(IDR)における医療・看護記録のモデルを作成して、効果的な国際緊急援助活動が行われることに貢献しようとするものである。IDR 経験者および災害医療の専門家を対象として、IDR における医療活動に役立つ実践的な診療記録の形式の調査を行い、IDR Medical Record 2012を開発した。 共同発表者：◎Koichi Shinchi, Kazue Kawahara, Setsuko Umezaki, Kiyoko Yano, Kazuyuki Akinaga, Kaoru Shibayama, Nobuko Yonemitsu, Hitomi Matsunaga, Toyoka Shinchi, Kiyoshi Yoshimizu 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した。
12. Simulation exercise for disaster relief operations for graduate students in Saga University(和訳：佐賀大学大学院生の災害救援活動のためのシミュレーション演習)	共同	平成 22 年 8 月	The 10th Asia Pacific conference on Disaster Medicine (Japan Sapporo)	2004年12月26日に実際に発生したインド洋津波災害をモデルに、国際緊急医療援助活動のシミュレーション実習を実施した。このような実際に発生した大災害をモデルとしてのシミュレーション実習は、国際緊急医療活動・保健活動の学生教育に有用であり、教育的、効果的であることが実証された。 共同発表者：◎K, Shibayama K, Yonemitsu N, Matsunaga H, Shinchi T, Yoshimizu K 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した。
13. 大学院生に対する国際緊急援助活動・保健活動の実践的教育	共同	平成 22 年 9 月	第 25 回日本国際保健医療学会学術大会（宗像市）	国際緊急援助活動を含む災害医療の教育は、極めて重要であり、国際的な医療救援活動に参加する人材の育成は、必要不可欠である。しかし、わが国においては大学院における災害医療の教育体系は、いまだ確立していないのが現状である。このような実際に発生した大災害をモデルとしてのシミュレーション実習は、国際緊急医療援助活動の学生教育に有用であり、教育的、効果的であることが実証された。 共同発表者：◎梅崎節子，矢野潔子，秋永和之，川原一恵，吉水清，松永妃都美，柴山薫，米満伸子，新地豊香，新地浩一 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した。

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
14. 国際緊急援助活動・保健活動における効率的な医療記録の提言	共同	平成 22 年 9 月	第 25 回日本国際保健医療学会学術大会（宗像市）	本研究は、国際緊急医療援助活動（IDR）における医療・看護・保健記録のモデルを作成して、効果的な国際緊急援助活動が行われることに貢献しようとするものである。IDR 経験者および災害医療の専門家を対象として、IDR における医療・保健活動に役立つ実践的な診療記録の形式の調査を行い、IDR Medical Record を開発した。 共同発表者：◎新地浩一，川原一恵，梅崎節子，矢野潔子，新地豊香，吉水清，松永妃都美，秋永和之，米満伸子，柴山薫，石丸律子，西尾美登里 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した。
15. Proposal of the IDR Medical Record 2010 for International Disaster Relief Operations (和訳：国際災害救援活動のための IDR 医療記録 2010 の提案)	共同	平成 23 年 11 月	The 26nd Annual Meeting of Japan Association for International Health (Japan Nagasaki)	本研究は、国際緊急医療援助活動（IDR）における医療・看護・保健記録のモデルを作成して、効果的な国際緊急援助活動・保健活動が行われることに貢献しようとするものである。IDR 経験者および災害医療の専門家を対象として、IDR における医療活動に役立つ実践的な診療記録の形式の調査を行い、IDR Medical Record 2010 を開発した。 共同発表者：◎Kazue Kawahara, Koichi Shinchichi, Toyoka Shinchichi, Setsuko Umezaki, Kiyoko Yano, Hitomi Matsunaga, Kazuyuki Akinaga, Kiyoshi Yoshimizu 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した。
16. ポリオ撲滅をめざしたペットボトルキャップの回収活動	共同	平成 23 年 11 月	第 21 回日本健康医学会（東京）	近年、日本の高校生の学力低下は診療情報管理士教育においても深刻である。そのため、学習環境における知的活動の高質化となる記憶・集中力の維持に向けた取り組みを行った。本研究では、講義中の学習環境要因（香り、深呼吸）の変化が記憶探索課題を中心とした学習者の心理面への影響について報告する。 共同発表者：◎中村登志子，山下理恵子，吉水清，有吉浩美 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した。
17. 学習環境の変化が高校生の心理に及ぼす影響について	共同	平成 23 年 11 月	第 21 回日本健康医学会（東京）	近年、日本の高校生の学力低下は診療情報管理士教育においても深刻である。そのため、学習環境における知的活動の高質化となる記憶・集中力の維持に向けた取り組みを行った。本研究では、講義中の学習環境要因（香り、深呼吸）の変化が記憶探索課題を中心とした学習者の心理面への影響について報告する。 共同発表者：◎中村登志子，山下理恵子，吉水清，有吉浩美 本人担当部分：対象者への調査、データ分析を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
18. Proposal of the IDR Medical Record 2012 for International Disaster Relief Operations (和訳: 国際災害援助活動のための IDR 医療記録 2012 の提案)	共同	平成 25 年 12 月	第 7 回異分野融合地域防災研究シンポジウム (福岡市)	本研究は，国際緊急医療援助活動 (IDR) における医療・看護・保健記録のモデルを作成して，効果的な国際緊急援助活動・保健活動が行われることに貢献しようとするものである。IDR 経験者および災害医療・保健の専門家を対象として，IDR における医療・保健活動に役立つ実践的な診療記録の形式の調査を行い，IDR Medical Record 2012 を開発した。 共同発表者：◎Kiyoshi Yoshimizu, Kazue Kawahara, Koichi Shinchi 本人担当部分：研究に関する計画、対象者への調査、データ分析、論文作成を担当した。
19. 国際緊急援助活動・保健活動の際の診療記録 (IDR Medical Record 2012) の提案	共同	平成 25 年 12 月	第 64 回聖マリア医学会 (久留米市)	本研究は，国際緊急医療援助活動 (IDR) における医療・看護・保健記録のモデルを作成して，効果的な国際緊急援助活動・保健活動が行われることに貢献しようとするものである。IDR 経験者および災害医療・災害保健の専門家を対象として，IDR における医療活動に役立つ実践的な診療記録の形式の調査を行い，IDR Medical Record 2012 を開発した。 共同発表者：◎吉水清，川原一恵，新地浩一 本人担当部分：研究に関する計画、対象者への調査、データ分析、論文作成を担当した。
20. 体温とストレスとの関係 ー予防的な健康管理を目指してー	共同	平成 30 年 7 月	日本サーモロジー学会 第 35 回大会 (鹿児島市)	健康診断時に体温測定や質問紙調査を実施し，体温とストレスの関連性を検討した。72 名を対象とし，低体温者に対するストレス因子 12 尺度から解析を行った。 共同発表者：◎洲崎好香，新谷奈苗，吉水清 本人担当部分：研究に関する計画、データ分析を担当した。
21. 訪問看護師の働く環境 と使いーケアマネジメント業務についてー	共同	平成 30 年 10 月	産業保健人間工学会 (東大阪市)	本研究は，訪問看護師のケアマネジメント業務に関する現状を医療保険および介護保険の制度による視点や介護支援専門員の業務連携から分析を行い，ケアマネジメント業務の実施状況および今後の展望について検討するものである。 共同発表：◎佐藤郁代，新谷奈苗，吉水清，丸上輝剛，日高佑都 本人担当部分：研究に関する計画、データ分析を担当した。
22. Verrification of the effect of hand massage on autonomic nervous syste (和訳: 自律神経系に対するハンドマッサージの効果の検証)	共同	平成 31 年 1 月	The 22nd EAFONS Conference (East Asian Forum of Nursing Scholars : Singapore)	ハンドマッサージにより自律神経系の変化を明らかにする目的に 20 人の健康な成人を対象にハンドマッサージを行い，自律神経系の評価に Check My Heart (Tritech) を使用して心拍数変動を測定、その前後の神経機能、気分における心理評価を行った。 共同発表者：◎Ikuyo Sato, Nanae Shintani, Yukiko Minegishi, Mariko Nakamura, Kiyoshi Yoshimizu 本人担当部分：研究に関する計画、データ分析を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
23. Review of the Literatures on factors related to height loss and relationship among the factors(和訳:身長減少に関連する要因およびそれらの要因間の関係に関する文献レビュー)	共同	平成 31 年 1 月	The 22nd EAFONS Conference (East Asian Forum of Nursing Scholars : Singapore)	学校保健の現場において、低身長に関連する要因およびそれらの要因間の関係に関する文献レビューを行った。 共同発表者：◎Miura Y, Shibata Y, Yoshimizu K, Inouye Y 本人担当部分：研究に関する計画、データ分析を担当した。
24. Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease(和訳:炎症性腸疾患患者の食生活に焦点を当てたライフスキルに関する文献調査)	共同	平成 31 年 1 月	The 22nd EAFONS Conference (East Asian Forum of Nursing Scholars : Singapore)	難病患者である炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてた生活スキルと保健指導に関する文学的研究を行った。 共同発表者：◎Inouye Y, Shibata Y, Yoshimizu K 本人担当部分：研究に関する計画、データ分析を担当した。

教 育 研 究 業 績 書		
平成31年3月31日		
氏名 井上 葉子		
研究分野	研究内容のキーワード	
看護学	公衆衛生看護学	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
家族援助論 専門学校大阪医専 (専任教員)	平成17年4月～ 平成19年3月	学校法人・専門学校大阪医専看護保健学科の専門科目「家族援助論」(2年次配当、1単位、40人クラス)において実践した。家族への援助は人間関係の成立が第1要件である。このことをふまえて、家族援助論の講義の中では、簡単な事例を設定して、ロールプレイの演習を取り入れ、コミュニケーション技術および保健指導技術の習得に努めた。
地域看護学方法論Ⅲ(健康教育論) 専門学校大阪医専 (専任教員)	平成17年4月～ 平成19年3月	学校法人・専門学校大阪医専看護保健学科の専門科目「地域看護学方法論Ⅲ(健康教育論)」(2年次配当、1単位、40人クラス)において実践した。すべての人々が自らの健康を保持・増進し、QOLを高めていくことができるように、健康教育の理論と方法を学ぶ事を目的としている。各ライフステージでの健康問題を持つ事例をとりあげ、4～5人ずつのグループワークによって企画から評価までの一連の過程を体験する。学生は実施者、観察者の両方の役割をとることによって、保健指導技術が相手に与える影響について体験を通じて学習を深める機会とした。
基礎看護学実習Ⅰ 専門学校大阪医専 (専任教員)	平成17年4月～ 平成19年3月	学校法人モード学園専門学校大阪医専看護保健学科での臨地実習「基礎看護学実習Ⅰ」(1年次配当)において病院での実習指導から評価までを担当した。
基礎看護学実習Ⅱ 専門学校大阪医専 (専任教員)	平成17年4月～ 平成19年3月	学校法人モード学園専門学校大阪医専看護保健学科での臨地実習「基礎看護学実習Ⅱ」(2年次配当)において病院での実習指導から評価までを担当した。
地域看護学実習Ⅰ(訪問看護ステーション実習) 専門学校大阪医専 (専任教員)	平成17年4月～ 平成19年3月	学校法人モード学園専門学校大阪医専看護保健学科での臨地実習「地域看護学実習Ⅰ」(3年次配当の科目責任者として、訪問看護ステーションにおける実習全ての指導と評価までを担当した。
地域看護学実習Ⅱ-1(事業所実習) 専門学校大阪医専 (専任教員)	平成17年4月～ 平成19年3月	学校法人モード学園専門学校大阪医専看護保健学科での臨地実習「地域看護学実習Ⅱ-1」(4年次配当)の一部を担当し、事業所における保健師活動について実習指導と評価を行った。
地域看護学実習Ⅲ(保健所・保健センター実習) 専門学校大阪医専 (専任教員)	平成17年4月～ 平成19年3月	学校法人モード学園専門学校大阪医専看護保健学科での臨地実習「地域看護学実習Ⅲ」(4年次配当)の一部を担当し、保健所・保健センターにおける保健活動について、実習指導と評価を行った。
看護研究 専門学校大阪医専 (専任教員)	平成17年9月～ 平成19年3月	探求心をもって研究に取り組み自己研鑽に努めることは専門職業人として必要なことである。このことをふまえ、大阪医専看護保健学科4年生が取り組んだ、母親の育児力を支えるための地域ネットワークづくりにおける看護職の役割をテーマにした調査研究の指導を担当した。学生は研究目的・方法の設定、調査地区の選定、データの収集・分析の一連の過程を体験し、研究的態度・姿勢および論理的思考についての学習を深めることができた。

事項	年月日	概要
基礎看護技術演習Ⅰ 関西学研医療福祉学院 (専任教員)	平成23年4月～ 平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護技術演習Ⅰ」(1年次配当、1単位、40人クラス)において実践した。看護技術は人間関係の成立が第1要件であるといっても過言ではない。このことをふまえて、基礎看護技術演習Ⅰでは、簡単な事例を設定して、ロールプレイの演習を取り入れ、コミュニケーション技術および日常生活援助を中心とする看護技術の習得に努めた。
看護研究指導 関西学研医療福祉学院看護学科 (専任教員)	平成23年4月～ 平成24年8月	探求心をもって研究に取り組み自己研鑽に努めることは専門職業人として必要なことである。このことをふまえ、学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科3年生が取り組んだ、実習で担当した患者についてのケーススタディの指導を担当した。学生は研究目的・方法の設定、データの収集・分析の一連の過程を体験し、研究的態度および論理的思考についての学習を深めることができた。
基礎看護技術演習Ⅱ 関西学研医療福祉学院 (専任教員)	平成23年4月～ 平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護技術演習Ⅱ」(1年次配当、1単位、40人クラス)において実践した。看護技術は人間関係の成立が第1要件であるといっても過言ではない。このことをふまえて、基礎看護技術演習Ⅰでは、簡単な事例を設定して、ロールプレイの演習を取り入れ、コミュニケーション技術および診療の補助に関する援助を中心とする看護技術の習得に努めた。
基礎看護学実習Ⅰ 関西学研医療福祉学院 (専任教員)	平成23年4月～ 平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科での臨地実習「基礎看護学実習Ⅰ」(2年次配当)の科目責任者として実習の全てを担当した。
基礎看護学実習Ⅰ 関西学研医療福祉学院 (専任教員)	平成23年4月～ 平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科での臨地実習「基礎看護学実習Ⅱ」(2年次配当)の科目責任者として全てを担当した。
在宅看護論実習 宝塚大学 (非常勤講師)	平成25年4月～ 平成26年3月	科目責任者である教授とともに実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、次年度の実習依頼を行った。
地域看護学Ⅴ 宝塚大学 (非常勤講師)	平成25年4月～ 平成26年3月	科目責任者である教授とともに、地域診断演習時の指導、地区踏査の指導を行った。
地域看護学実習 宝塚大学 (非常勤講師)	平成25年4月～ 平成26年3月	科目責任者である教授とともに実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。
在宅看護概論 白鳳女子短期大学 (常勤講師)	平成26年4月～ 平成27年3月	科目責任者として全てを担当した。
在宅看護論 白鳳女子短期大学 (常勤講師)	平成26年4月～ 平成27年3月	科目責任者として全てを担当した。
在宅看護論演習 白鳳女子短期大学 (常勤講師)	平成26年4月～ 平成27年3月	科目責任者として全てを担当した。
家族看護論 白鳳女子短期大学 (常勤講師)	平成26年4月～ 平成27年3月	科目責任者として全てを担当した。
基礎看護学実習Ⅰ 白鳳女子短期大学 (常勤講師)	平成26年4月～ 平成27年3月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個性性を尊重し展開できるよう、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。

事項	年月日	概要
基礎看護学実習Ⅱ 白鳳女子短期大学 (常勤講師)	平成26年4月～ 平成27年3月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。また看護過程については、苦手意識を克服できるよう個々の学習進度を理解した上で指導するように配慮した。
在宅看護論実習 白鳳女子短期大学 (常勤講師)	平成26年4月～ 平成27年3月	科目責任者として実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、次年度の実習依頼を行った。実習においては、小児から高齢者を対象とする在宅看護を行う中で、対象の年齢や疾患、障害による身体の変化、対象をとりまく環境、社会資源の活用、他職種との連携における看護職の役割について同時に考えられるように指導を行った。対象の心に寄り添う看護が行えるよう、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、対象と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患児の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動） 奈良学園大学 (常勤助教)	平成27年10月～ 平成28年3月	科目責任者である非常勤講師と助教1人とともに講義を進めた。井上は3コマを担当し、地域保健活動計画における保健師の役割、地域保健活動の目標と計画の策定、在宅看護のためのシステム・ケアマネジメント、人材管理、健康危機時の管理の内容について教授した。
公衆衛生看護学概論 奈良学園大学 (常勤助教)	平成28年4月～ 平成28年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は2コマを担当し、地域保健活動計画における保健師の役割、地域保健活動の目標と計画の策定、在宅看護のためのシステム・ケアマネジメント、人材管理、健康危機時の管理の内容について教授した。
公衆衛生看護学Ⅲ（産業保健） 奈良学園大学 (常勤助教)	平成28年4月～ 平成28年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は1コマを担当し、職業性疾病の原因と予防・看護（アスベスト、振動障害、感音性難聴、VDT症候群）について講義した。
公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健） 奈良学園大学 (常勤助教)	平成28年4月～ 平成28年9月	科目責任者である非常勤講師と教授と講師とともに講義を担当した。井上は1コマを担当し、学校環境衛生について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ 奈良学園大学 (常勤助教)	平成28年4月～ 平成28年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は3コマを担当し、母子保健施策と保健師の活動、乳幼児期の成長発達と保健指導、難病保健の動向について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅱ 奈良学園大学 (常勤助教)	平成28年4月～ 平成28年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は2コマを担当し、家庭訪問における保健指導、新生児訪問についての講義と新生児訪問ロールプレイの演習を行った。
基礎看護学実習Ⅱ 奈良学園大学 (常勤助教)	平成28年9月～ 平成28年12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。

事項	年月日	概要
小児看護学実習 奈良学園大学 (常勤助教)	平成28年9月～ 平成28年12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、重症心身障害児を対象とする看護を行う中で、障害による身体の変化と成長発達の順序性、他者との愛着形成、遊びの意義と必要性について同時に考えられるように指導を行った。また、障がい児をとりまく環境、他職種との連携における看護職の役割についても指導した。患児の心に寄り添う看護が行えるよう、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患児と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患児の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
老年看護学実習 奈良学園大学 (常勤助教)	平成28年9月～ 平成28年12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、高齢者を対象とする看護を行う中で、加齢による身体の変化と家族関係と社会的な役割の変化、介護保険制度、福祉サービス利用について同時に考えられるように指導を行った。また、高齢者をとりまく環境、他職種との連携における看護職の役割についても指導した。また人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、高齢者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
成人看護学実習 奈良学園大学 (常勤助教)	平成29年1月～ 平成29年2月	単位認定者の講師とともに実習指導を行った。実習においては、成人の急性期、周手術期看護を行う中で、手術侵襲による身体の変化とや手術に対する不安、就労生活、家庭生活の中断による家族や生活状況の変化における看護の役割について同時に考えられるように指導を行った。また、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
統合看護学実習 奈良学園大学 (常勤助教)	平成29年4月～ 平成29年6月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、急性期にある複数の患者に対して、援助の優先順位を考え、病棟のケア計画に則った援助計画を立案し、チームの一員として援助を行うよう留意して指導を行った。また、師長やチームリーダー、メンバーのシャドウイングを通して、リーダーシップ、メンバーシップと看護管理の実際を学ぶとともに専門外来の見学を通して他職種との連携の実際と医療チームにおける看護の役割を学ばせた。
卒業研究 奈良学園大学 (常勤助教)	平成29年4月～ 平成29年10月	担当学生の論文作成の全てにおいて担当した。2名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。

事項	年月日	概要
成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期） 奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年10月～平成30年3月	科目責任者である准教授とともに、看護過程演習の指導を担当した。
成人看護学実習 奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年4月～平成30年3月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、来年度の実習調整を行った。実習においては、成人の急性期、周手術期看護を行う中で、手術侵襲による身体の変化とや手術に対する不安、就労生活、家庭生活の中断による家族や生活状況の変化における看護の役割について同時に考えられるように指導を行った。また、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ 奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は4コマを担当し、母子保健施策と保健師の活動、乳幼児期の成長発達と保健指導、難病保健の動向について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅱ 奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は2コマを担当し、家庭訪問における保健指導、新生児訪問についての講義と新生児訪問ロールプレイングの演習を行った。
公衆衛生看護学実習Ⅰ（地域活動） 奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに保健所・市町村における実習を担当し、健康教育、家庭訪問、地区診断等の指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健） 奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに学校（中学校・高等学校）における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅲ（産業保健） 奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに事業所における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動） 奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年10月～平成31年3月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに講義を進めた。井上は2コマを担当し、成人保健の動向、成人期の保健活動・保健師動の内容について教授した。
卒業研究 奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年11月	担当学生の論文作成の全てにおいて担当した。2名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。
2 作成した教科書、教材		
地域看護学実習Ⅰ（在宅看護）実習指導要項	平成18年3月	学校法人モード学園専門学校大阪医専看護保健学科の専門科目「地域看護学実習Ⅰ（在宅看護）」（3年次配当）における実習目的、実習目標、行動目標、実習内容について、学生にどのような思考過程を経て学習させ、実習目的と実習目標に到達させるための具体的な指導についてまとめた冊子を作成した。
地域看護学実習Ⅰ（在宅看護）実習の手引	平成18年4月	学校法人モード学園専門学校大阪医専看護保健学科の専門科目「地域看護学実習Ⅰ（在宅看護）」（3年次配当）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。

事項	年月日	概要
住まい学習のデジタル教材「おかあさん お家の中でもご用心！！—赤ちゃんとの暮らしの中に潜む危険—」	平成23年1月	保健指導の教材の見本として、乳幼児の家庭内での窒息、転落、熱傷、誤飲などの事故防止を保護者に啓発するための教材として、絵本のデジタル教材を作成した。
平成23年度基礎看護学実習Ⅰ実習要項	平成23年5月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅰ」（2年次配当）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
平成23年度基礎看護学実習Ⅱ実習要項	平成23年10月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅱ」（2年次配当）で学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
平成24年度基礎看護学実習Ⅰ実習要項	平成24年5月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅰ」（2年次配当）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
在宅看護論実習の手引き	平成25年8月	宝塚大学看護学部の「在宅看護論実習」（3年次配当）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
在宅看護論実習の手引	平成26年4月	白鳳女子短期大学看護学専攻「在宅看護論実習」（3年次配当）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
成人看護実習Ⅰ（急性期・周手術期）実習記録用紙ガイドライン	平成29年4月	成人看護学Ⅰ（急性期・周手術期）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点などについてまとめた冊子を作成した。
成人看護学のデジタル教材：「一次救命（病室編）」、「一次救命（廊下編）」、「段階的離床」	平成29年11月	成人看護学の学内演習・臨地実習時のイメージがつくように、心肺蘇生法、AEDの使用法、緊急時の協力要請、手術後の段階的離床についてのデジタル教材を作成した。

事項	年月日	概要
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
白鳳女子短期大学FD委員会	平成26年4月～ 平成27年3月	講義最終回において大学が作成した授業アンケートを実施したところ、話の分かりやすさ、授業の内容のわかりやすさ、板書や資料のみやすさ等すべてにおいてわかりやすかったという結果であった。単独での講義実施だったため、自信につながった。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
シリクス株式会社 研究補助員	平成20年4月～ 平成20年5月	国際電気通信基礎技術研究所において行われていた看護師の業務に関する調査研究のデータ収集・分析作業に従事した。
奈良県看護協会 保健師職能委員会 平成28年度研修会	平成28年9月	奈良県看護協会 保健師職能委員会主催による平成28年度研修会「乳幼児の運動発達の観察のポイントと支援」開催において委員として、研修の企画、運営を担当した。
奈良県看護協会 保健師職能委員会 平成28年度交流会	平成28年9月	奈良県看護協会 保健師職能委員会主催による平成28年度交流会「思春期保健対策～若年妊婦へのアプローチを考える～」開催において委員として、研修の企画、運営を担当した。
奈良県看護協会 保健師職能委員会 平成29年度研修会	平成29年9月	奈良県看護協会 保健師職能委員会主催による平成29年度研修会「妊産婦のメンタルケアの重要性～チームでの育児支援～」開催において委員として、研修の企画、運営を担当した。
奈良県看護協会 保健師職能委員会 平成29年度交流会	平成30年2月	日本看護協会による平成29年度保健指導支援事業保健指導ミーティング開催にあたって、委員として、奈良県保健予防課、保健所、保健センターと協力し、企画、運営を担当した。
日本看護協会平成29年度保健指導支援事業 奈良県看護協会「保健指導ミーティング」事例検討会 ファシリテーター	平成30年2月	日本看護協会による平成29年度保健指導支援事業保健指導ミーティングにおいて、事例検討会のファシリテーター役として、保健指導ミーティング（事例検討会）参加者の新人保健師の意見が活発にできるように雰囲気作りやきっかけ作りに努め、とても勉強になったとの参加者の感想が聞かれた。
奈良県看護協会 保健師職能委員会 平成30年度研修会	平成30年9月	奈良県看護協会 保健師職能委員会主催による平成30年度研修会「各々の力を発揮できる子育てネットワークを考える～専門職それぞれの強み・弱みをふまえた支援の在り方～」開催において委員として、研修内容の企画、講師との調整、運営を担当した。 参加者からは、看護職それぞれの支援の方向性や取り組みが聞けてよかった等の感想が聞かれた。
奈良県看護協会 保健師職能委員会 平成30年度交流会	平成30年11月	日本看護協会による平成30年度保健指導支援事業保健指導ミーティング開催にあたって、委員として、奈良県保健予防課、保健所、保健センターと協力し、企画、運営を担当している。
5 その他 なし		

事項	年月日	概要
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1) 看護師免許	平成4年5月13日	
2) 養護教諭一種免許	平成6年3月31日	
3) 保健師免許	平成6年5月19日	
4) 第一種衛生管理者免許	平成6年8月10日	
5) 受胎調節実地指導員免許	平成8年2月24日	
6) Laughter Yoga Leader	平成29年6月11日	
7) 日本心理学会 認定心理士	平成30年4月21日	
2 特許等		
特記事項なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
奈良県立医科大学附属病院 常勤看護師	平成4年4月～ 平成5年3月	結核病棟に勤務。感染症看護を中心とする看護に従事した。旧結核予防法による入院患者に対し、確実な服薬管理の方法、食事・休養を中心とした生活習慣改善指導に携わった。また、継続看護の取り組みとして保健所保健師との連携を図ることに努めた。
斑鳩町役場保健センター 常勤保健師	平成6年4月～ 平成7年6月	奈良県内にある人口2万5千人程度の町の保健センター保健師として勤務。老人保健法に基づく機能訓練「リハビリ教室」では、企画・実施に携わり、病気をきっかけとして自宅に閉じこもりがちな高齢者が外出し、気分転換、他者との交流をはかることを目的とした活動を行った。また、「子宮がん検診」の主担当者として事業の企画・実施・評価といった一連の業務に従事するとともに、「胃がん検診」、「乳がん検診」、「肺がん・結核検診」についても主担当保健師と協力して実施を行った。また、母子保健法に基づく各種の健診、保健指導の業務に従事するとともに、特に妊婦を対象とした「母親教室」の主担当者として、妊娠・出産・育児の時期を安心して過ごせるよう、情報提供、啓発活動に取り組んだ。また必要に応じて担当地区の住民に対して家庭訪問を行い、個別対応での問題解決に努めた。さらに、住民が安全に安心して健やかに過ごせるような町づくりを目指し、食生活改善推進員養成講座の実施、観光課主催の町民マラソンへの救護員としての協力、社会福祉協議会と共催の「斑鳩町健康まつり」の企画・運営にも携わった。また、寝たきり状態で歯科受診できない住民に対して、「訪問歯科診療」事業の実施にも携わり、町歯科医師会と協働での訪問歯科診療を行った。
くさち耳鼻科 非常勤看護師	平成8年2月～ 平成8年8月	奈良県内にある耳鼻科の診療所の非常勤看護師として勤務。耳鼻科外来における診療の補助を中心とした看護活動を行った。
奈良県国民健康保険団体連合会生駒総合病院健康管理センター 常勤保健師	平成8年8月～ 平成14年3月	人間ドックや各種健康診断の業務の担当者として従事した。また、患者指導として「糖尿病教室」、「高脂血症教室」、「高尿酸血症教室」の企画・運営・評価に携わった。特に糖尿病教室では、教室受講者を中心とした糖尿病患者会「虹の会」を立ち上げ、医師、薬剤師、管理栄養士と協力しながら療養者の生活の質の向上に努めた。そのほか、小児科外来での予防接種業務や育児相談、総合案内所における健康相談にも携わった。
三宅町立三宅小学校 非常勤講師	平成16年5月～ 平成17年2月	不登校・長期欠席児童が増加しつつある小学校において、教職員よりも身近な相談窓口となる「親と子の相談員」として、保護者および児童に対する相談業務に従事した。育児に悩む保護者の相談やコミュニケーションが困難な児童に対しては遊びを中心とした関わりを行い相談に応じた。

事項	年月日	概要
シリックス株式会社 非常勤看護師	平成20年4月～ 平成20年5月	国際電気通信基礎技術研究所において行われていた看護師の業務に関する調査研究のデータ収集・分析作業に研究補助員として従事した。
奈良県 医療政策部 保健予防課 母子・保健対策係 石綿ばく露健康リスク調査担当 非常勤保健師	平成24年10月～ 平成25年6月	環境省からの委託で行っている奈良県内の住民に対する石綿ばく露健康リスク調査担当の非常勤保健師として従事し、問診から結果通知、データ管理などの一連の業務を担った。問診では生後から現在までの数十年におよぶ住環境、生活状況、石綿ばく露の状況を本人より聴き取る必要がある。そのため、年代ごとの写真やイラストを用いた媒体を作成し過去の状況を思い起こせるように工夫をし問診を行った。また石綿の製品、石綿ばく露の危険がある状況について写真やイラストを用いた媒体を作成し石綿ばく露健康リスク調査の意義や目的について住民の方に理解していただけるように努めた。
奈良県難病相談支援センター 難病専門相談員 (非常勤保健師)	平成27年4月～ 平成28年3月	奈良県難病相談支援センターの難病相談専門員として、難病患者・家族等の療養生活上の相談業務に従事した。特に、難病患者の就労支援のための相談体制づくりとして、就労相談票の作成、相談内容のデータベースのフォーマット作成、ハローワークの難病患者就職サポーターとの定期的な打ち合わせを行った。また、難病専門医による医療相談の実施、難病患者患者会活動への支援、難病に関する講演会の企画や準備、難病相談支援センターの広報誌の作成にも関わった。さらに、全国難病センター研究会に出席し、奈良県難病相談センターの現状を伝えと共、他府県の先進的な取り組みについて情報収集し、担当者同士のつながりを作ることに努めた。
奈良県職員研修	平成27年5月	情報セキュリティ研修 受講
一般社団法人日本家族計画協会 研修会	平成27年12月	第17回自己効力感（セルフエフィカシー）を高め主体的な行動変容を支える健康教育セミナー 受講
全国保健師教育機関協議会 研修会	平成28年8月	第31回全国保健師教育機関協議会夏季教員研修会 受講
全国保健師教育機関協議会 研修会	平成28年10月	第5回全国保健師教育機関協議会秋季教員研修会 受講
全国保健師教育機関協議会 研修会	平成28年10月	平成全国保健師教育機関協議会東海・北陸・近畿ブロック研修会 受講
奈良県保健師ネットワーク会議	平成28年11月	平成28年度第4回なんとかせんと保健師ちから（保健師ネットワーク会議）：講演「地域ケアからみる保健師の役割」、パネルディスカッション「災害支援における保健師の役割～熊本地震の経験を通して～」参加
日本保健師連絡協議会 研修会	平成29年3月	平成28年度活動報告・集会：報告「母子保健における虐待予防の基軸～寄り添う支援としての健康診査～」への参加
全国保健師教育機関協議会 研修会	平成30年8月	第33回全国保健師教育機関協議会夏季教員研修会－公衆衛生看護の躍進－ 受講
全国保健師教育機関協議会 研修会	平成30年10月	平成30年度全国保健師教育機関協議会東海・近畿北ブロック、北陸・近畿南ブロック合同研修会 受講
4 その他 特記事項なし		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 2018年看護師国家試験対策要点がわかる出題傾向がみえる在宅看護論	共著	平成29年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験科目の「在宅看護論」について、看護師国家試験出題基準の中項目に基づいた要点編と過去問題編の2部構成とし、過去問の要点の学びから知識を広げたり深めたりしながら、看護師国家試験合格のための学力向上の支援が図れるものとなっている。 担当部分：目標Ⅰ 在宅における安全と健康危機管理p22～p24、目標Ⅱ4在宅療養生活を支える看護（食事・栄養、排泄、清潔、移動）p35～p37、目標Ⅲ6在宅療養において特徴的な疾病がある療養者への看護（小児、難病）p42, p45、7在宅における医療管理を必要とする人と看護（膀胱留置カテーテル、褥瘡管理）p48, p51～p52 守本とも子監修、安藤邑恵編著、川口ちづる、井上葉子
(学術論文) 1. 生活経験からみた看護専門学校学生の看護技術力に関する研究	共著	平成26年3月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」	著者名：井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 3年課程の看護専門学校4校の1年生147名に生活経験に関する質問紙調査を実施し、生活経験の自己評価結果と1年で学習する4つの基礎看護技術の実技調査結果との対応関係を検討した。第51巻、P. 33～P. 41
2. 在宅看護論における生活経験の重要性を再認識するための授業実践—ワークショップを用いた教育プログラムの検討—（査読付）	単著	平成27年2月	白鳳女子短期大学研究紀要	短期大学看護学専攻学生2年生122名を対象に、生活経験を再認識するための講義とワークショップを組み合わせた授業実践を行い、学生の認識の変化と教育的効果について検討した。第9巻、. 47～P. 54
3. 避難生活体験とポスターセッションを取り入れた学内演習の実践と評価—生活環境を主体的に理解することを目指した在宅看護論の授業展開—	共著	平成28年1月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」	著者名：関谷まり・井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 短期大学看護学専攻学生2年生122名を対象にした、在宅看護論の学内演習での避難生活環境の体験演習の学習効果と、体験演習の学習のまとめとしてポスターセッションを活用したことによる共同学習の効果と課題を検討した。第53巻、P. 57～P. 67
4. 訪問看護ステーション実習での看護計画立案による学習効果について—実習目標の到達度の比較からの分析—（査読付）	共著	平成28年4月	第46回日本看護学会論文集 看護教育	著者名：西村和子・田村和子・井上葉子・松村あゆみ・北畠昭弥・北出千春 3年課程の看護専門学校3年生36名を対象に、訪問看護ステーション実習において、看護計画立案の有無によって学習効果に違いがあるかどうかを質問紙調査の結果から比較検討した。 P. 23～P. 26

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業の学習効果【第1報】—授業振り返りシートの分析から—（査読付）	共著	平成30年2月	第48回日本看護学会論文集 看護教育	在宅看護論において実践したモデル授業「難病患者の職業生活を支援する看護」について、授業振り返りシートの記載内容を分析し難病患者の就労支援の内容を看護基礎教育に組み入れたことによる学習の効果を検討した。論文集 P. 3～P. 6 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて関わった。 共著者：西村和子・井上葉子・松村あゆみ
6. 在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業の学習効果【第2報】—クローン病の事例を用いたワークシートの分析から—（査読付）	共著	平成30年2月	第48回日本看護学会論文集 看護教育	看護専門学校2年生の学生を対象に在宅看護論の授業で『職業生活を支援する看護』のモデル授業での難病患者のクローン病患者の事例ワークシートの分析から学生が難病患者の生活について就労を含めた視点で理解することについての学習効果について検討した。論文集 P. 7～P. 10 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて関わった。 共著者：松村あゆみ・井上葉子・西村和子
7. 臨地実習における看護学生のストレスとレジリエンスについての実態（査読付）	共著	平成30年2月	第48回日本看護学会論文集 看護教育	看護専門学校学生2年生を対象に時期の異なる2つの臨地実習前後で調査した、気分プロフィール検査（POMS2）とストレス自己統制評定尺度（SSI）の2つの調査結果を基に、学生個別のストレス反応とレジリエンスの状態の変化を把握し、学生個々への適切な介入方法の必要性について検討した。研究の方法、分析、論文作成についての助言・指導を行った。 論文集 P. 75～P. 78 担当部分：分析、論文の作成、論文投稿指導に関わった。 共著者：山崎陸世・平山亜矢子・井上葉子・丸田裕子・高原 恵・後藤 恵・岡田和江・葦原佐衣・加納由紀子
8. 在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業の学習効果【第3報】—闘病記の感想文の分析から—	共著	平成30年3月	奈良学園大学紀要第8集	在宅看護論において実践したモデル授業「難病患者の職業生活を支援する看護」の課題としての、難病患者による就労についての闘病記を読んだ感想文の分析から教材として闘病記を用いたことによる学習の効果を検討した。 P. 13～P. 19 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて行なった。 共著者：井上葉子・西村和子・松村あゆみ・奥西志穂・駒井由美子・大谷未来
9. ラフターヨガ（笑いヨガ）の実際と今後の可能性	共著	平成30年12月	日本保健医療行動科学会雑誌（33）No.2	ラフターヨガの実践結果から身体面と精神面への効果について検討した。 共著者：井上葉子・安藤和子 P. 46-48
10. 臨地実習における看護学生のレジリエンス育成に関する文献研究（査読付）	共著	平成31年2月	第49回日本看護学会論文集 看護教育	臨地実習における学生のレジリエンス育成に関する文献検討を行い、個別支援のあり方について検討した。研究の方法、分析、論文作成についての助言・指導を行った。 論文集 P. 75～P. 78 担当部分：分析、論文の作成、論文投稿指導に関わった。 共著者：山崎陸世・井上葉子・平山亜矢子・葦原佐衣・後藤 恵

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他) 1. 看護専門学校学生の生活経験からみた看護技術力に関する研究 —療養上の世話に関する看護技術に着目して— (修士論文)	単著	平成25年1月	大阪教育大学大学院	3年課程の看護専門学校4校の1年生147名に生活経験に関する質問紙調査を実施しその傾向をまとめた。また、看護専門学校1校の1年生を対象に4つの基礎看護技術の習得状況と生活経験の程度についての関係性を検討した。さらに、3年課程の看護専門学校1年生を対象に、生活経験を補完するためのワークショップを用いた授業を試行し、その教育効果についても論じた。 A4判 全102頁
(学会発表) 1. 地域看護学実習における学生の看護の視点の広がりに関する検討 —在宅療養者の社会資源活用に関する学びを分析して—	-	平成19年8月	第38回日本看護学会—看護教育— (於 千葉県千葉市)	4年制の統合カリキュラムの専門学校の3年次に行われる在宅看護実習での学生29名の記録を分析することにより、看護の視点を地域レベルで捉えるという実習の教育効果を検討した。 抄録集 P. 46
2. 看護学生の生活経験と看護技術力の対応関係	-	平成24年9月	第43回日本看護学会—看護教育— (於 岩手県盛岡市)	3年課程の看護専門学校4校の1年生147名に生活経験に関する質問紙調査を実施し、1年で学習する4つの基礎看護技術の習得状況との関係性を検討した。 共同発表者：碓田智子・井上葉子 抄録集 P. 36
3. 基礎看護学実習におけるフィジカルアセスメント技術の活用の実態	-	平成24年9月	第43回日本看護学会—看護教育— (於 岩手県盛岡市)	3年課程の看護専門学校4校の学生196名を対象に基礎看護学実習でのフィジカルアセスメント技術に関する質問紙調査を実施し、講義と実習との連動を強化した教育プログラムのあり方について検討した。 共同発表者：山崎陸世・中川利子・田畑典子・中瀧雅子・丸野由美・村川まゆみ・井上葉子 抄録集 P. 85
4. 看護学生による災害看護演習の評価に関する考察 —避難生活の看護活動を考える演習について—	-	平成27年8月	第17回日本災害看護学会 (於 宮城県仙台市)	短期大学看護学専攻学生2年生122名を対象にした、在宅看護論における避難生活体験を題材とした演習の方法と学習効果についてを検討した。 共同発表者：関谷まり・井上葉子 抄録集 P. 160
5. ポスターセッションを活用した在宅看護論演習の学習展開—「避難生活支援演習」の実践事例—	-	平成27年8月	第46回日本看護学会—看護教育— (於 奈良県)	短期大学看護学専攻学生2年生122名を対象にした、在宅看護論の学内演習での避難生活環境の体験演習の学習効果と、体験演習の学習のまとめとしてポスターセッションを活用したことの効果と課題を検討した。 共同発表者：関谷まり・井上葉子 抄録集 P. 107
6. 訪問看護ステーション実習での看護計画立案による学習効果について—実習目標の到達度の比較からの分析—	-	平成27年8月	第47回日本看護学会—看護教育— (於 奈良県)	3年課程の看護専門学校3年生36名を対象に、訪問看護ステーション実習において、看護計画立案の有無によって学習効果に違いがあるかどうかを質問紙調査の結果から比較検討した。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・田村和子・北畠昭弥・北出千春・井上葉子 抄録集 P. 85

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 看護基礎教育における難病患者の就労支援に関する教員の認識	-	平成28年10月	第75回日本公衆衛生学会総会 (於 大阪府)	看護専門学校教員129名を対象にした質問紙調査から、難病患者の就労支援についての認識を明らかにし、難病患者の就労支援を教育に取り入れる上での課題について検討した。 共同発表者：西村和子 松村あゆみ 内田 勇人 抄録集 P. 539
8. 看護基礎教育における難病看護に関する教育の実態	-	平成28年12月	第37回奈良県公衆衛生学会 (於 奈良県)	看護専門学校教員129名を対象にした質問紙調査から、難病患者の就労支援についての教育の実情を明らかにし、難病患者の就労支援を教育に取り入れる上での課題について検討した。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・奥西志穂・早味妙・駒井由美子・ <u>井上葉子</u> 抄録集 P. 7
9. 在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業効果【第1報】—学生による授業振り返りシートの分析から—	-	平成29年8月	第48回日本看護学会—看護教育—学術集会 (於 香川県)	3年課程看護専門学校学生2年生77名を対象に「難病患者の就労支援」を題材として行った授業実践の教育効果と課題について、授業後の学生による「授業振り返りシート」の内容から分析と検討をした。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・ <u>井上葉子</u> 抄録集 P. 148
10. 在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業効果【第2報】—事例ワークシートからみた学習内容の分析—	-	平成29年8月	第48回日本看護学会—看護教育—学術集会 (於 香川県)	3年課程看護専門学校学生2年生77名を対象に「難病患者の就労支援」を題材として行った授業実践の教育効果と課題について授業内で用いた教材「事例ワークシート」の内容から分析と検討をした。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・ <u>井上葉子</u> 抄録集 P. 149
11. 臨地実習における看護学生のストレスとレジリエンスについての実態	-	平成29年8月	第48回日本看護学会—看護教育—学術集会 (於 香川県)	3年課程看護専門学校学生2年生42名を対象に時期の異なる2つの臨地実習の実習前後で、学生のストレス反応とレジリエンスの状態を調査し、その結果からストレス反応とレジリエンスには個別性があり学生の特性を理解した支援の必要性を示した。 共同発表者：山崎陸世・平山亜矢子・丸田裕子・高原恵・佐藤則子・定政美香・ <u>井上葉子</u> 抄録集 P. 114
12. 要介護者が暮らす住環境を理解することを目指した在宅看護論の授業展開—住居の提案とポスターセッションを取り入れた演習の実践と評価—	-	平成30年8月	第49回日本看護学会—看護教育—学術集会 (於 広島県)	看護短大2年生122名を対象に、在宅看護論演習において要介護者が暮らす住居の見取り図の作成を行い、授業の学習効果について授業後の学生の学びと感想の内容から分析を行った。学生が積極的な関心を持ち、能動的に学習する上で一定の効果があることが明らかとなった。 共同発表者： <u>井上葉子</u> ・西村和子・松村あゆみ・奥西志穂・大谷未来・駒井由美子 抄録集 P. 86
13. 看護学生のレジリエンスに関する文献研究	-	平成30年8月	第49回日本看護学会—看護教育—学術集会 (於 広島県)	看護基礎教育における臨地実習での学生のストレスへの対応を方法を検討するため、学生を対象としたレジリエンスの介入方法に関する研究の動向を検討した。 共同発表者：山崎陸世・ <u>井上葉子</u> ・平山亜矢子・芦原佐衣・丸田裕子 抄録集 P. 205

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14. 在宅看護論実習における事例を用いたグループワークによる学生の学び使える社会資源を調べるグループワークを実施してー	－	平成30年8月	第49回日本看護学会－看護教育－学術集会（於 広島県）	3年課程看護専門学校学生42名を対象に在宅看護論実習の最終日に、事例の社会資源を調べる学習を行い、その学習効果を検討した。 共同発表者：西村和子・北出千春・ <u>井上葉子</u> 抄録集 P. 206
15. Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease		2019年2月	the 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS). (in Singapore)	炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する研究の動向を明らかにし、支援方法のあり方について検討した。 共同研究者：Inouye Y, Shibata Y, Miura Y, Yoshimizu K Abstract No: ABS2427
16. Review of the literatures on factors related to height loss and relationship among the factors		2019年2月	the 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS). (in Singapore)	身長短縮を予防するための身長短縮に関連する因子とその因子間の関連について検討した。 共同研究者：Miura Y, Shibata Y, Yoshimizu K, <u>Inouye Y</u> Abstract No: ABS2253
17. テキストマイニングを用いた精神看護学実習における学生の学びの分析	－	平成31年3月	日本看護研究学会第32回近畿・北陸地方学術集会	3年課程看護専門学校学生42名を対象に精神看護学実習の最終日に提出したレポート「精神看護学実習を終えて」の内容分析を行い実習における学びの内容を検討した。 共同発表者：山崎陸世・溝口みちる・ <u>井上葉子</u> 抄録集 P. 43
（学会等への貢献） 日本サーモロジー学会学術集会 第33回大会 実行委員				平成28年6月 奈良市で行われた第33回学術集会の実行委員を担った。
第33回日本保健医療行動科学学会学術集会 実行委員				平成30年6月 沖縄県那覇市での第33回日本保健医療行動科学学会学術集会の実行委員として準備等の運営に携わった。
第33回日本保健医療行動科学学会学術集会 体験学習ワークショップ 講師				平成30年6月 沖縄県那覇市での第33回日本保健医療行動科学学会学術集会での体験学習ワークショップの講師として「ラフターヨガ（笑いヨガ）」の講演と実施を担った。
日本看護研究学会第45回学術集会 実行委員				令和元年8月 大阪市で開催される日本看護研究学会第45回学術集会の実行委員として開催準備等に携わっている。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（公的貢献） 奈良県看護協会 ナースセンター事業推進委員		平成28年4月～平成29年3月		奈良県看護協会ナースセンター推進委員として看護職の復職支援、看護学校ガイダンス、看護職のPR活動に従事した。
奈良県看護協会 保健師職能委員会委員		平成28年4月～現在に至る		奈良県看護協会保健師職能委員会として研修会の企画、保健師職のネットワーク作りに活動している。
生駒市立生駒北小中学校育友会 副会長		平成29年4月～現在に至る		生駒市内にある小中一貫校の小学部のPTA役員として、教育活動の充実、学校、地域、保護者との連携に向けて活動した。
生駒市PTA協議会理事		平成29年4月～現在に至る		理事として生駒市内の教育について他の理事や役員とともに話し合い、よりよい教育を目指し活動した。

教 育 研 究 業 績 書		
平成31年3月31日		
氏名 高橋 寿奈		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
教育学	看護教育学 基礎看護学 老年看護学 エイジズム ブライトケア	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) 講義と演習授業 白鳳短期大学 非常勤講師 「基礎看護概論」 「基礎看護方法論Ⅰ」 「基礎看護方法論Ⅱ」 「基礎看護方法論Ⅳ」 「基礎看護方法論Ⅴ」 ① P P Pを使用したデジタル教材の作成 ②演習時に患者の想定がしやすいように、 ボディイメージ資料作成使用 ③演習時の研究課題資料の作成使用	平成26年5月～ 平成29年3月	白鳳短期大学の非常勤講師として「基礎看護学概論」の授業の一部を担当した。主に看護の変遷として日本の看護や関係法規の歴史変遷、世界の看護の歴史についての授業とテスト作成をした。近代看護の基礎となる事柄や今後の看護の方向性などを写真や経験、ドラマを使って、親しみやすい内容にし、学生が習得しやすいように努めた。(1年次配当、1単位、学生150名) 「基礎看護方法論Ⅰ」の授業を担当した。活動と休息・感染予防・滅菌物品の無菌操作・食と排泄・移動と移乗・効率的な動きの講義を行い、人間が健康に向かうための看護援助の在り方について指導を行った。それぞれの授業で、実際に実技で学生に体験させることにより、よりイメージしやすいように、感染の仕方のモデルや重心変化の仕方の教具の作成を行い、学生に実施させ、わかりやすく習得できるように努めた。 「基礎看護学方法論Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ」(1年次配当各1単位)の演習授業全般について実施し、フィジカアセスメント・看護イグザミネーション技術・点滴・投薬・採血・排泄管理包帯法・ポジショニング・創傷管理・電法の技術について、指導と実技テスト教官を行った。学生がイメージしやすいように研究課題を与え、その課題に沿って資料と実技を行った。
2) 学内研究発表会指導	平成28年2月	白鳳短期大学の基礎実習Ⅱでの実習指導教員として担当学生の学内研究発表の指導を行った。 主に、日常生活援助での関わり方による対象高齢者の言動の変化についての気づきについて自信をもって発表できるように指導した。
3) 演習授業(学内)	平成29年4月～ 3月	「老年看護学」の学内授業、演習授業のサポートを行っている。老年期の看護展開では、学生の個別指導も行い看護展開成果物の採点も行っている。
4) 実習指導(非常勤講師) 「基礎看護実習学Ⅰ」「基礎看護学実習Ⅱ」 「成人看護学Ⅰ」「成人看護学Ⅱ」 「統合看護学」 「精神看護学」 「老年看護学」	平成26年5月～ 平成29年3月	白鳳短期大学非常勤講師としての実習指導を行った。 統合看護学実習では、要項説明と実習オリエンテーション、実習調整を行った。[基礎看護学]では、看護の仕事の実際や病院施設の概要について疑問点などを起こさないように指導した。また学生が達成感が持てるようにそれぞれの学生が苦手とするところの克服できるように配慮しながら行った。根拠をもって看護し、患者に寄り添い、生活者として視点も忘れず、看護の先にあるものについても意識して指導した。 「成人看護学」では急性期・慢性期での成人の療養上における問題について看護性について指導した。学生が、急性期の看護展開のスピードについていけるように、事前課題を確認し不足するところの指導を行った。周手術期の指導では、疾患の理解・術後侵襲・生活や社会人としての患者の役割・精神的な不安なども指導した。 「統合看護学実習」では、要項説明と事前の実習調整も行った。タイムスケジュールを学生が出来るようにあ、学生同士でのカンファレンスを多く持ち、チームで看護を行うことを重視いた指導をした。病院の組織の在り方や他職種連携の重要性や実際についてより多くの経験が出来るように調整配慮した。

事項	年月日	概 要
事項	年月日	概 要
5) 講義と演習授業 奈良学園大学 専任教員 「老年看護学援助論」 「卒業研究Ⅱ」 「基礎演習Ⅱ」 「演習実技指導」 ① P P P を使用したデジタル教材作成 ② 高齢者の介助時の注意点資料作成 ③ 演習時の研究課題作成と添削 ④ 各授業開始時に前回授業の課題総括と説明・資料作成	平成30年4月～	「老年看護学援助論」の基本的な高齢者への援助、活動・休息・食事・排泄などの技術全般についての講義と演習を担当した。演習時には作成ボディイメージと看護をつなぐ資料を作成し、与えた研究課題の元授業を行った。その振り返りでは、学生自身でグループワークを行い、検討内容を板書説明することで内容の定着に努めた。臨地実習前には、学生を個別に基本的な技術指導を行った。高齢者体験・オムツの容量の研究演習・片麻痺体験の演習では、学生に体験させることにより、高齢所イメージがしやすいようにし、看護に必要な内容を考えさせる機会とし、看護の視点の指導定着を図った。「卒業研究Ⅱ」では、卒業延期性には個別にさらに時間を作り指導を行った。「基礎演習Ⅱ」では、基本的な大学生活での学習方法や時間・単位制について指導した。グループワークで、基本的なレポートの書き方、グループワークについて指導し、レポートはその都度添削した。また図書館の有効利用。インターネットを津科tt亜情報リテラシーの方法なども学生に理解の程度に合わせて具体的な指導を行い、学生が大学での学習方法について積極的に行えるように指導した。
6) 老年看護学実習指導（奈良学園大学）専任教員	平成30年4月～現在	事前に、実習先の全施設と実習説明内容のために訪問調整し、学生の実習目的・目標・スケジュールなど詳しい説明を行った。実習開始からは、「老年看護学Ⅰ・Ⅱ」（3年次配当 4単位）で、学生が老年看護の基本的な考え方に基づいて看護展開の方法の実際を個別に指導し、実技指導と評価指導を行った。また、緊張緩和に努め実習で対象者の個性に合う実習内容になるように一緒に考えアドバイスし、指導した。すべての実習に同行し、精神的配慮として個別の面談を交え学内では学習などの指導も行った。
2 作成した教材等		
1) 老年看護学実習要項・記録用紙	平成30年4月～現在	学校奈良学園大学保健医療学部看護学科の専門科目「老年看護学Ⅰ・Ⅱ」（3年次配当 4単位）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習方法と内容、実習の進め方、実習の心得、健康管理の方法などについてまとめた冊子を作製した。
2) 統合看護学実習要項（老年領域）・記録用紙	平成30年5月～現在	学校奈良学園大学保健医療学部看護学科の専門科目「統合実習」（4年次配当 1単位）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習方法と内容、実習の進め方、実習の心得、健康管理の方法、領域実習で実習できなかった経験技術の実習の仕方についてまとめた冊子を作製した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
1) 奈良学園大学法人広報委員会	平成30年4月～平成31年3月	学外広報誌作成の参画と調整、広報誌の内容の修正 オープンキャンパス参画運営と教員への周知徹底、内容や物品の調整を行った。リハビリテーション学科開設の伴う広報活動として、外部向けシンポジウム運営調整を行った。当日はオープンキャンパスとの同時開催があり、教員と学生に対し企画説明・役割や時間調整等を行い運営した。また、学外広報としての高校への派遣授業の教員への意見聴取ととりまとめを行い教員派遣の調整をした。広報活動企画報告書の作成を行った。
2) 実習部会 実習協議会担当	平成29年～現在	老年領域実習担当として会議と学生配置調整 実習協議会参画運営
3) 学外宿泊研修担当	平成30年4月～平成31年3月	学外宿泊研修で新一年生の大学生活が順調にスタート開始できるように、プログラムの参画から参加した。当日の宿泊では、市内散策では事故防止のために学生のグループ誘導や点呼、体調不良者のチェックなどを行い、学生と一緒に宿泊を行った。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		

事項	年月日	概要
職務上の実績に	関する事項	
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1) 看護師免許 第684127号	平成2年5月	
2) 厚生労働省専任教員養成課程修了	平成27年3月	
3) 次世代教育学 学士	平成27年3月	
4) 学術修士	平成29年3月	
2 特許等		
1) なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 四天王寺病院看護師 院内教育担当 新人教育講習参画 講師 実施	平成10年5月～ 平成15年3月	病院内での新人教育において看護方法の基礎的な技術について資料作成とともに講義し、実技指導を行った。
2) 四天王寺病院主任看護師 療養型病棟 設立参画	平成17年6月～ 平成18年4月	院内再編成があり、療養病棟立ち上げのために病院・病棟内基準の参画を行った。病棟内基準では病棟メンバーをチームごとに編成し、基準委についての講習を行った。十分周知したところで各割当てごとの基準を作成した。院内での基準は作成したものがそのまま基準となった。
3) 四天王寺病院看護師 院内教育プログラム参画実施	平成18年8月～ 平成19年3月	院内教育プログラムが導入されておらず、ラダー制に準じたステップアップ方式の院内境域プログラムを研究し構築した。合わせて院内で実施し面談やスキル指導に役立て
4) 四天王寺病院・東大阪病院 臨地実習指導者 大阪府保健師助産師看護師実習指導者講習会修了	平成10年5月～ 平成23年9月	2つの病院にわたって、臨地実習指導を行った。 平成19年頃から2年間は、学生の実習指導とともに、新人の臨地実習指導者の指導を行った。 平成22年8月に実習指導講習会（長期）も修了し、院内での活用計画を作成実施した。
4 その他		
1) 療養病棟基準手順 マニュアル、フローチャート作成	平成17年7月	療養病棟立ち上げのあたり、入院のための基準、病棟内の看護手順書、マニュアルの作成を行った。また、フローチャートを作成し、ケアワーカーに対しても観察箇所やポイント、急変時や異常時の対応について、簡潔に漏れや判断ミスが無く行えるように、指導に活用した。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
2018年看護師国家試験対策 出題傾向が見える老年看護学	共著	平成29年10月	ピラールプレス社 B5判 109頁	全109ページ 主に急性期看護、社会参加、セクシャリティについて執筆した。また合わせて国家試験問題より老年看護学分野についての問題抽出を行った。執筆はP25～33 高齢者の周手術期についての特徴、社会参加の動向、セクシャリティについての傾向について、を行った。 監修：守本とも子、吉村雅世 共著：吉村雅世、田中和奈、高橋寿奈
(学術論文)				
高齢者の健康状態の多様性を理解するための看護教育に関する研究	単著	平成29年3月	大阪教育大学大学院教育学研究科 修士論文要旨集 第17号 平成29年3月	目的：老年看護学での教授による看護学生へのエイジズムの影響について調査した。学生の観察課題においてエイジズムが是正されるか実施調査した。 調査方法：A短期大学3年生110人を対象とし、地域で活動している高齢者の観察を行った群と統制群で、実習開始前後にパルモアのクイズを使用しエイジズム調査し、群間比較した。結果：高齢者の特徴について学ぶうちにエイジズムが発生していた。それらを改善するため、戸外での高齢者観察課題を実施は効果的であったと言える。しかし、「大多数の高齢者は社会的に孤立している」、「ほとんどの医療専門家は高齢者を軽視する傾向にある」は理解できなかった。実習時に内容理解できるように改善していく必要があることを考察した。 全 p 159 掲載 P 135
受け持ち患者とのコミュニケーションにおける看護学生の自己評価-老年看護学実習でのアンケート調査より-	共著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 2017.9 P121～126	目的：ゆとり世代の看護学生が老年看護学実習で受け持ち患者とのコミュニケーションについての自己評価を行い、実際の高齢者の感じるコミュニケーションとの乖離の状態を調査した。 調査方法：A市在住で地域のスポーツクラブや文化会で活動している65歳以上のアクティブな高齢者に対してのアンケート調査を行った。結果：看護学生は努力は90%以上できたが、高齢者は看護学生のことを66%以上は不快だと感じているとし、乖離している実態を明らかにした。 主担当として実施調査し論文執筆した。 共著：高橋寿奈・瀬山由美子
「老人性皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケア効果の検証 (査読付)	共著	平成31年3月	医療福祉情報行動科学研究会誌 第6巻 2019.3 p 65～72	目的：「老人性皮膚掻痒症」に対して、皮脂量の増加効果のあるシュガー・スクラブを使用したスキンケアによって改善が認められるか検証した。調査方法：老健施設でケア群と統制群で1日目と5日目でケア前後に皮膚の油分・水分、唾液中のIgAを採取しt検定で比較検討した。結果：油分値は初日から全ての計測時に有意に上昇を認めた。水分値は初日のケア後に増加したが他は変化見られなかった。これらより皮膚バ
「老人性皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケア効果の検証 アビサルジャパン委託研究報告書	共著	平成31年4月	アビサルジャパン委託研究報告書冊子	「老人性皮膚掻痒症」に対して、皮脂量の増加効果のあるシュガー・スクラブを使用したスキンケアによって改善が認められるか検証した。結果皮脂量の増加と皮膚バリア機能の促進により水分保持能力が上昇し、スキンケアとして効果的であることが示唆された。 担当部分：調査実施・分析 執筆：山口求・高橋寿奈他7名
(学会発表)				
「アクティブシニアと看護師との言語的コミュニケーションでの不快体験について」		平成30年6月	日本保健医療行動科学会 第34回学術大会 ポスター発表	アクティブシニアがかかりつけ医で看護師とのコミュニケーション時に不快な体験を起した内容と、その割合をアンケート調査した結果をプレゼンテーションした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他)				
(学会等への貢献) 日本保健医療行動科学会第33回学術大会実行委員		平成30年4月～8月	日本保健医療行動科学会第33回学術大会実行委員	日本保健医療行動科学会第33回学術大会実行委員として、事前打ち合わせ、当日会場運営参加した。
(公的貢献)				
大阪天王寺区スポーツクラブ保健医療担当		平成28年9月～平成29年11月	スポーツ大会で救護担当参加	地域貢献として大阪市天王寺区のスポーツクラブでの定例会での救護担当を行う。また参加者のメディカルチェックとして事前に血圧測定を行い当日の事故防止と健康啓蒙活動に努めた。

教 育 研 究 業 績 書 平成 31 年 3 月 31 日 氏名 田場 真理			
研 究 分 野		研究内容のキーワード	
臨床看護学(透析看護)		血液透析 終末期 抑うつ 意思決定	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
	事 項	年 月 日	概 要
	1 教育方法の実践例		
	2 作成した教科書, 教材		
	3 教育上の能力に関する大学等の評価		
	4 実務の経験を有する者についての特記事 1) 認定・日本重症心身障害看護師研修会 看護研究アシスタント講師	H29 年 7 月 ～ H30 年 9 月	近畿地区日本重症心身障害心身障害福祉協会の依頼により認定研修の看護研究アシスタント講師として研究指導を行った
	5 その他 1) 「基礎看護技術Ⅱ・Ⅲ」教育実績 2) 「小児看護学援助論」教育実績 3) 「基礎・成人・老年・小児看護学実習」教育実績	H25 年 4 月 ～ H27 年 3 月 H26 年 4 月 ～ H27 年 3 月 H25 年 4 月 ～ H27 年 3 月	関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、基礎看護技術Ⅱ（栄養、排泄、活動・休息、創傷、BLS・ALS、エンゼルケア等）についての講義・演習を担当した。講義ではグループワーク、ロールプレイングを取り入れ、学生が主体的に学べる機会を作る一方で、定期的に小テストも行い、学生自ら基礎知識の確認ができるよう工夫した。演習では、DVD の視聴や教員自らデモンストレーションを行いながらも、日常生活援助技術に関しては、学生のこれまでの生活体験を活かしよりよい援助の方法を考え実施できるよう工夫した。 関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、小児看護学援助論についての講義（全 15 コマ 30 時間）・演習（全 7 コマ 14 時間）を担当した。講義・演習では、グループワークやロールプレイングをとりいれた。その際、子どもの発達段階の理解とともに、子どもの最善の利益を守る事の重要性を伝えつつ、子どもと家族に必要な看護について学生自ら考えられるよう指導を行った。 関西学研医療福祉学院看護専任教員として、基礎・成人・老年・小児実習指導を行った。実習前には事前学習を課し実習での学びの準備を整えた。臨地では指導者と協力しながら、学生がより多くの気づき（学び）ができるよう関わった。

	事項	年月日	概 要
	4) 「統合看護学実習」教育実績	H25 年 11 月 H26 年 11 月	関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、統合看護学実習指導を行った。実習前には事前学習を課し実習での学びの準備を整えた。統合実習では領域実習では体験できない管理実習や夜勤帯での実習も取り入れより深い学びが得られるようかかわった。
	5) 看護研究指導	H25 年 4 月 ～ H27 年 3 月	関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、看護研究（ケーススタディ）指導にあたった。実習中の自身の看護をふりかえり
	5) 「小児看護学概論・小児看護学援助論」教育実践	H28 年 4 月 ～ H29 年 3 月	奈良学園大学（助手）にて、講義・演習の補助的指導を行った。
	6) 「小児看護学実習」教育実績	H28 年 9 月 ～ H29 年 3 月	奈良学園大学（助手）にて、小児看護学実習指導を行った。
	7) 「基礎看護技術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」教育実績	H29 年 4 月 ～ H30 年 3 月	奈良学園大学（助手）にて、主に看護技術演習の指導を行った。
	8) 「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」教育実績	H29 年 9 月 H30 年 3 月	奈良学園大学にて基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ実習指導を行った。
	9) 「成人看護学援助論Ⅱ」教育実績	H30 年 4 月 ～ H31 年 3 月	奈良学園大学にて、成人看護学援助論Ⅱ、全 15 コマのうち、循環器機能障害患者の看護と慢性腎臓病患者の看護の 2 コマを担当した。
	10) 「基礎演習Ⅰラーニングスキルズ」教育実績	H30 年 4 月 ～ H30 年 7 月	奈良学園大学にて、1 年次生担当の基礎演習Ⅰラーニングスキルズ、全 15 コマのうち、11 コマを担当した。（4 回は統合実習のため交代）
	11) 「卒業研究」教育実績	H30 年 6 月 ～ H30 年 10 月	奈良学園大学にて卒業研究Ⅱの研究指導を行った。
	12) 「成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ」教育業績	H30 年 9 月 ～ H31 年 2 月	奈良学園大学にて、成人看護学実習（Ⅰ・Ⅱ）指導を行った。
	13) 「統合看護学実習（成人）」教育実績	H30 年 5 月 ～ H30 年 6 月	奈良学園大学にて、統合看護学実習指導を行った。
	14) 「基礎看護学実習Ⅱ」教育実績	H30 年 5 月 ～ H30 年 6 月	奈良学園大学にて、統合看護学実習指導を行った。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項			
	事項	年月日	概 要
	1 資格、免許 看護師免許（第 1396705 号）	H19 年 4 月	
	修士（学術）	H29 年 3 月	放送大学文化科学研究科生活健康プログラム 修士論文名：透析患者の抑うつにソーシャルサポートが与える影響と支援の在り方—医師、看護師、ピアサポートに関する考察—

	事項	年月日	概要
	2 特許等		
	3 実務の経験を有する者についての特記事 1) 国家試験対策 WG メンバーとしての活動 2) FD 委員としての活動 3) 学生生活部会メンバーとしての活動 4) キャリア委員としての活動	H27 年 4 月 ～ H29 年 3 月 H28 年 4 月 ～ H30 年 3 月 H31 年 4 月 ～ 現在 H30 年 4 月 ～ H31 年 3 月 H29 年 4 月 ～ H31 年 3 月	奈良学園大学保健医療学部国試対策 WG メンバーとして確認試験の問題作成、模試の試験監督などを行った 奈良学園大学保健医療学部 FD 委員として、定期的な研修の企画運営などを行った 学生生活部会メンバー（3 年次生担任）として保護者懇談会、卒業式、新入生宿泊研修などに関する活動を行った。 キャリア委員として、就職説明会、就職ガイダンス、卒業生に対するウェルカムデーなどの企画運営をおこなった。
	4 その他		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
1 2018 年看護師国家試験対策 要点がわかる 出題傾向がみえる小児看護学	共著	H29 年 11 月	ピラールプレス	看護師国家試験科目の「小児看護学」について、過去問を読み解くための要点をまとめた。 共著者：守本とも子（監修）、芝田ゆかり、 <u>田場真理</u> 、瀬山由美子（編著） 本人担当部分：目標Ⅰ「子どもと家族を取り巻く環境」「子どもの成長・発達」「小児各期における健康増進のための子どもと家族への看護」の部分の執筆を担当した。
2 2018 年看護師国家試験対策 要点がわかる 出題傾向がみえる成人看護学（下）	共著	H29 年 11 月	ピラールプレス	看護師国家試験科目の「成人看護学」について、過去問を読み解くための要点をまとめた。 共著者：守本とも子（監修）、松浦純平（編著）、大山末美、梶村郁子、 <u>田場真理</u> （著） 本人担当部分：「内部環境調節機能障害のある患者の看護」「排尿機能障害のある患者の看護」の部分の執筆を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(学術論文)				
1 認知症高齢者を介護する娘介護者の体験—介護生活の中で体験する困難と、介護生活の支えとなるもの—	共著	H28 年 9 月	奈良学園大学紀要 5 : 67-79, 2016.	認知症高齢者である親の介護経験を有する娘介護者を対象に、介護の中で体験する困難と介護生活の支えとなっているものについて半構成的面接を行った。その結果、娘介護者が体験する困難として《親の現状を受け止める難しさ》など 7 つのカテゴリーが、介護生活が続ける中で支えになるものとして《変わってゆく親を共有できる存在》など 4 つのカテゴリーが見いだされた。共著者：上山智恵子、 <u>田場真理</u> 、守本とも子 本人担当部分：半構成的面接によるデータ収集および、コーディング、カテゴリー化を行った。
2 外来透析患者の服薬コンプライアンス不良に至る因子の検討（査読付）	単著	H29 年 3 月	日本医療福祉情報行動学研究 4:25-30, 2017.	外来透析患者の服薬コンプライアンス不良に至る因子について、薬物に関する知識や理解度のほか、視力障害や指先の動きなど身体的側面の影響、ストレスなど心理・精神的側面の影響、そして薬物管理に関する家族のサポート状況など社会的側面の影響など軽 11 項目について検討した。その結果、服薬コンプライアンス不良に至る因子としては、患者の服薬に対する意識の低さが最も影響することが明らかとなった。
3 透析患者の抑うつにソーシャルサポートが与える影響と支援の在り方—医師、看護師、ピアサポートに関する考察—（修士論文）	単著	H29 年 3 月	放送大学修士論文	透析患者の抑うつに対する効果的な援助について示唆を得るため、ソーシャルサポートとしての医師・看護師・（患者仲間）ピアの援助について検討した。その結果、透析患者の抑うつを軽減させるために効果がある援助とは、身体症状を改善させるための看護師からの保健情報の提供であることが明らかとなった。
4 看護師のサポートが透析患者の抑うつに与える影響（査読付）	共著	H30 年 8 月	日本腎不全学会誌 20 (2) , 74-84, 2018.	看護師のサポートが透析患者の抑うつに与える影響について明らかにし、透析患者の抑うつに効果的な看護師のサポートについて検討した。結果は、透析患者が抑うつになる最大の原因は身体症状の悪さであり、それを自己管理により軽減させるための看護師の保健情報提供的サポートが、身体症状を改善させることで精神面である抑うつを軽減する効果があることが示唆された。 共 著 者 : <u>田 場 真 理</u> 、井 出 訓 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
5 Support for Decision-making Regarding Continuing or Suspending Terminal-Stage Dialysis. (査読付)	共 著	H31 年 3 月	Japan Information and Behavior Science for Health and Welfare, 6, 13-19, 2019.	透析患者の終末期透析の意思決定支援について示唆を得るため終末期透析に対する透析患者の思いを質的量的に分析した。量的データからは、透析患者の多くは自らの死について考えたり、医療者や家族と話し合いをしていないことが明らかとなった。また質的データからは、透析患者には生への希望がある一方で家族への遠慮により延命への諦めがあることが明らかとなった。しかしながら、尊厳死への願いは共通しており、最期まで自分がどのように生きたいかを医療者・家族としっかり話し合いの場を持てるよう調整することが重要であることが示唆された。 共 著 者： <u>田場真理</u> 、守本とも子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った
6 認知症高齢者と家族の生活支援への検討 ―認知症高齢者の気になる行動の分析より― (査読付)	共著	H31 年 3 月	医療福祉情報行動科学 研究 ,6, 55-63, 2019.	認知症高齢者家族の支援を検討するため、認知症高齢者の気になる行動を中心に、認知症高齢者と家族の抱える問題をインタビューより明らかにし、KJ 法により分類した。その結果、認知症高齢者と家族の抱える問題は「もの忘れ」「怒りっぽい」「排泄の問題」など 8 つの問題に分類された。これらの問題はいずれも生活問題としてそれなりに重要ではあるが、なかでも「弄弁」は家族が抱える最も困難な事象であることが明らかとなった。また、これらの問題はいずれも認知症という疾患に起因するものであることから、介護者の精神的負担を軽減するためには、認知症という疾患の理解を促すことが重要であることが示唆された。 共著者：守本とも子、 <u>田場真理</u> 、川口ちづる、新谷奈苗、永岡裕康
(学会発表) 1 透析室における患者満足度調査―患者の声から現状の問題点と課題について考える―		H24 年 2 月	奈良県医師会透析部会 (奈良県医師会透析部会誌 18:1, 92.)	外来透析患者に対し、既存の透析患者用満足度尺度を用いて看護師に対する満足度を測定した。その結果、態度に関する満足度は高かったが、患者自身が疼痛を伴う穿刺技術に関する満足度は低いものであることが明らかとなった。共同発表者： <u>田場真理</u> 、米澤麻理、森村美保 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・発表を行った

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 透析患者の抑うつに対する看護の実態	共著	H31 年 3 月	日本看護研究学会第 32 回近畿・北陸地方会学術集会（於 福井）	透析室で勤務する看護師が、日常的に患者の抑うつ症状についてどの程度観察を行っているか、その実態について明らかにした。結果は、経験豊富な看護師でさえも、ほとんど観察できていないことが明らかとなった。 発表者：田場真理、石垣恭子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・発表を行った
(その他雑誌)				
1 終末期透析についての意識と実態調査報告書	共著	H28 年 3 月	NPO 法人奈良県腎友会発行雑誌ばんび春号. 3-12, 2016	外来透析患者とその家族を対象に、終末期透析についての意識と実態を調査した。その結果、意思決定能力のあるうちに、自身の終末期医療について書面で提示しておきたいと考える患者が約半数、そうしてもらいたいと考える家族は半数いることがわかった。しかしながら、医療者とそういった話し合いの場は、ほとんどもたれていない現状が明らかとなった。 共著者：田場真理、守本とも子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った
(講演)				
1 奈良県腎友会女性部会での講演		H28 年 7 月		腎臓病患者会である NPO 法人奈良県腎友会より依頼があり、終末期の維持透析と事前指示書に関する講演を行った。（於 桃谷楼）
2 奈良県腎友会北和地域健腎会での講演		H30 年 2 月		NPO 法人奈良県腎友会（北和地域腎友会）より依頼があり、「豊かな人生の総仕上げのために－自らの人生の先に思いを馳せて語り合おう－」のテーマで新年のつどいの講演を行った。（於 生駒市南コミュニティセンターせせらぎ）
3 奈良県腎友会北和地域健腎会での講演		H31 年 2 月		NPO 法人奈良県腎友会（北和地域腎友会）より依頼があり、「寝たきりにならないための日常生活で気をつけること」のテーマで新年のつどいの講演を行った。（於 生駒市福祉センター）
(学会等への貢献)				
1 日本サーモロジー学会学術集会第 33 回大会		H28 年 6 月		奈良市（奈良学園大学）で開催された第 33 回日本サーモロジー学会学術集会の実行委員を担った。
2 奈良県腎不全看護研究会世話人		H30 年 4 月 ～ 現在		日本腎不全看護学会の下部組織である奈良県看護研究会の世話人として、研究会の管理運営（年 2 回の研究会）を行っている。

教 育 研 究 業 績 書

平成31年3月31日

氏名 西出 順子

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
看護学、心理学		自己心理学、共感、患者－看護師関係、相互作用
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) 通信制教育でのレポート添削における工夫	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神援助論」（専門分野Ⅱ、必修2単位）「精神看護学演習」（専門分野Ⅱ、必修1単位）において、通信制システムを通して、複数の課題項目に従ったレポートが送られてくる。学生の理解力に応じたコメントの工夫として、理論の簡略的な解説やレポートの書き方や考え方の筋道、具体例等、学生のレポートにワードの校閲機能を用い、学生の記述の文脈の中でコメントを返すように心がけた。学生からの感想として、「躓いているところ等のポイントでコメントをもらい、わかりやすかった」等の評価を得た。
2) 課題・レポートの活用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野、1年次配当、半期、必修1単位）「精神看護特性論」（専門分野、2年次配当、半期、必修1単位）「精神援助論」（専門分野、3年次配当、半期、必修2単位）において、次回の講義内容の予習として、他の科目で習得した内容が講義内容と関連する場合、レポートにまとめたうえで受講する形をとっている。例えば、講義内容が「向精神病薬の副作用に対する援助」であれば、解剖学・生理学等で既習した錐体外路や副交感神経の作用について、有害反応の根拠となる基本をレポートにまとめ、授業に挑むようにしている。「精神看護学概論」や「精神看護特性論」は、「精神援助論」につながる基本をおさえているので、既習した内容が「精神援助論」の授業内容に関連する場合、既習の知識をレポートとしてまとめた上での受講としている。定期試験において、レポートと関連させた内容のところは正答率がやや高い結果となっている。学生の意欲の差はあるが、既習得の授業内容とリンクさせ学生にまとめさせることによって、授業に向かう動機付け及び順序立てた理解につながると考えられる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学 保健科学部 看護学科において、1年次配当「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、予習としてポイント箇所をまとめ授業前に発表する形をとっている。3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、授業後にポイントをノートにまとめ、授業最終日に提出するようにしている。これらにより、単位習得試験以外において、最低限、授業内容についてまとめ考える機会を設けることになっている。

事項	年月日	概要
3) 演習・実習の効果的な活用	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所 CNSコースの精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ(専門科目、半期、各2単位)において、授業内容に応じたテーマで日頃の看護実践場面をまとめたものを持参してもらい、授業素材とし、実践に応じた助言を行っている。
	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程 専任講師の講師「精神看護学実習」(専門分野Ⅱ、必修1単位)において、帰納的学習法をとっている。2日間の見学実習の後、3日間のスクーリング授業を行う。見学した内容をスクーリングで援助の根拠づけを行い、さらに内容を深化させていく帰納的学習法を実施している。スクーリングでは講義やグループワーク、個別指導等の方法をとる。グループワークでは見学したことについて、対象理解や援助方法、治療的環境という観点で話し合い理解を深めていく。また、学んだことを統括するために、看護過程をイメージできる事例(発症から入院～退院後の経過を追った事例)を選択し、精神状態のアセスメントをしながら患者の内的体験のイメージを膨らませ、精神看護の基本的な姿勢を患者の自我を支えるという視点でおさえる。また、2日間の病院実習ではなかなか機会が得られない退院支援については、DVDや新聞の切抜きなどを活用し、そのつど学生に問いかけながら理解を求める。授業終了後のアンケートでは、レポート学習から見学したことまで、すべてがつながる内容だったと評価を得ている。
	平成21年4月～平成27年3月	兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科 非常勤講師「ヘルスカウンセリング」(2年生 45人クラス)において、行動の変容をはかるということとカウンセリングの関係性についての概説。心理学の視点から人の心について理解した上で、傾聴の基本姿勢、関係性から生じる厄介な問題(転移・逆転移)、医療現場でのコミュニケーションの流れについて説明する。授業開始前に臨地実習で実際の患者とのコミュニケーション場面のプロセスレコードを課題とし提出、その中からいくつかの場面を抜粋し、患者の話す言葉の意味や対応を考える。グループワークで事例検討を行い、対象理解とコミュニケーション方法について考え、ロールプレイを行う。授業後の感想で、学生の実際の実習場面でのプロセスレコードを教材として用いるため、学生の関心が高まったという内容が多く聞かれた。

事項	年月日	概要
	平成23年4月～平成27年3月	神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科の専門科目「こころと歯科衛生ケアプロセス」（2年生 約90名それぞれABクラスに分けて行った）において、演習形式で行った。人を理解するための理論と、様々な対象者と関係を築くための基本的な知識を学習し、医療現場に適したコミュニケーションを実践できる能力を身につける。対象者の心を様々な角度から理解する意味について解説。演習として、話をきく基本姿勢について学生同士、意識をしてロールプレイをする。好ましい態度と好ましくない態度。歯科衛生士と患者の関係性の中で生じる厄介な問題について事例を用いて解説。人を理解するための心理学の理論や障害のある患者の概説。演習で歯周疾患患者（成人）と高齢者の患者の2事例で、対象理解とコミュニケーション方法についてグループワークをし、考える場を設けた。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神援助論」（専門分野、3年次配当、半期、必修2単位）において、IBL(inquiry-based learning)方式のアクティブラーニングとロールプレイングを導入している。IBLは、①目的に沿った事例を作成（統合失調症、うつ病性障害等）②事例から数行の情報が入ったパートを3から4作成。パートごとに＜事実＞＜仮説＞＜必要な情報＞＜調べる項目＞に分けて進行していく。＜調べる項目＞では学生が次の授業までに分担して調べる。③②に続くグループワークでは、①で作成した事例を学生に提示し、病院実習で用いる記録用紙に情報を記入、治療薬について調べ、精神のアセスメント、セルフケア項目順に沿ってのアセスメント、全体図、看護計画を作成していく。④③で作成した看護計画をロールプレイングで実施する。また、ロールプレイングでは他に「かかわりを拒絶する患者」や「幻覚のある患者」等、病院実習でよく遭遇する場面を設定し行っている。IBL方式の少しずつの情報提供は、病院実習での情報のとり方を想定し、少しずつイメージを膨らませ、患者に問いかけられるようにと言う意図も含み行っている。学生からは、この方式に馴染めない者もいるが、情報から、考えを進めていく筋道がわかるとの評価ももらっている。ロールプレイングでは、患者像のイメージを掴むのが難しく、双方向のコミュニケーション効果までは望めないが、「このような場面に遭遇した時はどうすればいいのか」と意識することにはなっていると思われる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において3年次配当、「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）ペーパーペイシェントを用い、情報の収集の仕方、収集した情報の記録の仕方、アセスメント方法と看護援助の導き方について、順次一緒に記録用紙に書き込みながら解説し、そのうえで、別事例（ペーパーペイシェント）で情報の収集からアセスメント、援助の方向性までグループで検討しながら展開をはかる。自分で考えたうえでグループで検討しあうことは、思考過程を広げ深めていくことができると考える。

事項	年月日	概要
4) 視聴覚教育技術その他教材の利用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」(専門分野、1年次配当、半期、必修1単位)「精神看護特性論」(専門分野、2年次配当、半期、必修1単位)「精神援助論」(専門分野、3年次配当、半期、必修2単位)において、精神障がい者の生きづらさや苦悩について、理解をはかるためにドキュメンタリーのDVDを活用している。「精神看護学概論」では、映画「精神」から統合失調症の女性のヒストリーを語る場面を視聴、後に解説をすることで、成育歴や生活環境が患者の精神状態や心理にいかに関与を及ぼすのかについて理解を図る。「精神看護特性論」では、自閉症の患者のDVDを用い、障害の特性や苦悩の理解を図る。「精神看護特性論」と「精神援助論」では、COMHBO地域精神保健福祉機構の作成するDVDを用い、SSTや訪問看護、心理教育など地域で暮らす障がい者の様々な治療やサポートについて患者の心理の描写とともに理解を図る。後の感想・評価からは、いずれも精神障がい者に対して、共感的にイメージ化が図れている一助となっていることがわかる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて「精神看護学援助論」(専門科目、3年次配当、半期、必修2単位)で、抗精神病薬の有害反応や、閉鎖病棟のイメージ化を図るためにドキュメンタリーの映像を活用している。また、妄想や幻覚などの病的体験のイメージを広げ共感的理解の促進を図ることを目的に、当事者グループが作成した妄想幻聴かるたを活用している。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所 精神看護学特論Ⅳ・精神看護学演習Ⅱ(専門科目、1年次配当、後期、各2単位)でSSTの実践について、流れやポイントを理解するためにDVDを活用している。
5) 双方向授業の実践	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程 専任講師の講師「精神看護学実習」(専門分野Ⅱ、必修1単位)では、2日間の見学実習の後、3日間のスクーリング授業を実施する。スクーリングでは講義やグループワーク、個別指導等の方法をとる。グループワークでは見学したことについて、対象理解や援助方法、治療的環境という観点で話し合い、話し合ったことを発表する形ですすめている。グループワークに適度に入り、質問や助言を行うことや、その後の発表では各グループの発表直後に質問や助言をしている。その後のレポートから、その場その時のやりとりは、学生に理解の深まりや広がりにつながっていることが読み取れる。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、講義形式をとる場合、適宜発問をし、周囲の学生と2分ほど話し合い、意見を発言してもらおう。これらを1回の授業で4回～5回設けることで、学生の注意を喚起し、居眠りが減る傾向にある。

事項	年月日	概要
7) ディスカッションの導入		神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」（専門分野、3年次配当、半期、必修2単位）では、8日間の病院実習と半日の学内実習を行っている。病院での実習と学内実習では、学生に付き添い、対象者の背景から読み取る理解やコミュニケーションを通しての理解、精神状態や心理状態の把握、コミュニケーションの取り方や実施した援助についてなど、その場その時に応じた質問や助言を行っている。実習学生から返ってくる内容や感想、提出物の内容の充実さから効果が認められる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において担当の1年次配当「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、ゼミ形式にて、常時間いかけと発言を繰り返して行っており、学生が自分の考えを発言する機会を多く持つようにしている。3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、講義形式の際は発問を取り入れ、演習の際には、巡回し、質問ができる環境を整えている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所 精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ（専門科目、1年次配当、半期、各2単位）では、理論や知識の説明後、臨床経験を有する学生の現場での体験を話してもらいながら関連付けて授業を進めている。
	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程 専任講師の講師「精神看護学実習」では、3日間のスクーリングは主にグループワークのディスカッションですすめられていく。学生の年齢層が20代後半から60歳代まで幅広く、人生経験も豊かなため、ディスカッションも活発である。ただし、個性も豊かで、他者の発言を聞き入れられなかったり、内容に偏りが見られることもあり、適宜介入が必要である。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」「精神援助論」において、隔離・拘束について“人権を守る”ということはどういうことなのかについてディスカッションをしている。ディスカッションをすることで精神障がい者の人権を守る意義について意識化を図る。また、精神状態やセルフケアのアセスメントをする際、まずグループで事例を用いて討議することからはじめ、個人作業に移行させている。グループによっては、討議までにはなかなか至れず、発言する者にグループが引っ張られる傾向も見られるが、学生同士が質問し教え合う場にはなっている。

事項	年月日	概要
8) プレゼンテーションの導入	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、少人数の中でさらにグループに分け、テーマに応じてディスカッションする時間を複数設けている。その時の約束事として、相手の意見を積極的に聞く・否定しない・話の腰を折らないなどを設け、自分の考えを発言し、他者に受け入れてもらえる体験を強化している。3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、幻聴妄想かるたをグループで行った後、患者の気持ちの推測や、似たような体験、どう関わると安心できるかについて討議し、理解を深める機会としている。また、ペーパーペイシェントの演習を通して、根拠を相手に伝えながら、グループで一つのをまとめていくことを狙いとしている。自分の意見も主張しつつ、他者の考えも受け入れる態度を学習する機会としている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所 精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ（専門科目、1年次配当、半期、各2単位）では、社会で自立し仕事をしている者同士のディスカッションを通して、さらに建設的な学びになるように時には、教員はファシリエータの役割を担いながら、ディスカッションを促進する。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」において、他の授業で既に授業を受けた発達課題についてグループでまとめ、発達段階ごとにプレゼンテーションを行う。また評価は、各グループの成員同士が互いのグループワークの参加度について5段階で評価し、平常点として加算することになっている。ほとんどの学生が4～5の評価をしており、グループワークの参加に対する意欲が高いと考える。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」において、実習の最終日に各実習病棟ごと（1クール：10～18名、1病棟3～6人、実習病棟は2～4病棟）に各病棟の紹介と実習で看護展開をした2事例を取り上げ、援助の流れと学び・感想を模造紙にまとめて発表している。プレゼンテーションを通して、他病棟での実習内容を共有することで学びの巾を広げている。実習最終日でもあり、様々な思いを抱く中、プレゼンテーションに対する内容の質疑・応答、感想などの発言も比較的活発であり、主体的な参加が認められる。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「課題別総合実習」（専門分野、4年次配当、半期、必修4単位）において、実習を終えた後、実習病院で全実習病棟の看護部長・師長・指導者・かかわりのあった看護師に向けて、パワーポイントを用い、実習の成果を発表し、評価を受ける。自己の成果について実習病院で発表し評価を得ることは、学生にとって緊張度も高いが、また達成感も大きく、その後の自信につながっていくと考えられる。

事項	年月日	概要
8) 小テストの活用	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、グループで話し合った内容を模造紙やパワーポイントを活用して、プレゼンテーションを行っている。学生は、初めて体験するものも多いが、グループで要点をまとめ、分担しながら行っている。3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、グループワークの成果である看護過程の経過と援助の方向性について、決められたパワーポイントの枚数内と制限時間内で発表をしている。制限のある中で、メンバーが協力し合い、おのおののマンパワーを生かしつつ成果を発表する場は、学生にとって達成感を得、自信を得る機会となっている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所 精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（専門科目、半期、各2単位）において、授業内容について、あらかじめ各自で調べプレゼンテーションを行うことで、主体的な授業参加、学習となっている。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、軸となる理論については、小テストを実施し、理解の定着を図っている。小テストの項目としては自我防衛機制、エリクソンの発達論、精神の症状、薬の有害反応、ペブロウとトラベルビーの関係性の進捗等がある。これらの知識を臨地実習において活用していることから、繰り返しの学習効果によるものと考えられる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、精神看護学の重要な内容の授業が続く、内容は多岐にわたり、その都度の予習復習が求められるが、この時期、他科目も同じように進行しているため、学生は学ぶことが多く、能力を超えるものも多い。小テストをこまめにすることで、要所要所でいやおうでも、振り返り学習機会を持つことで、ポイントは抑えられると考える。
2 作成した教科書、教材		
1) 各授業、レジュメを作成し配布する。	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野Ⅱ、必修1単位）「精神看護学実習」のスクーリングにおいて、講義の要点の理解と、復習に活用するために、授業のアウトライン及びポイントを1回ごとに作成し、そのプリントを毎回の授業で配布している。内容は、複数のテキストから一部抜粋しまとめたものや、また対象を理解するための理論については、精神分析関連（フロイト・コフート等）の本の一部をまとめたもの、傾聴や共感の意味などについては、教員の様々な経験を統合し、文章化したものを使用。実習スクーリングでは、社会福祉に関する文献や新聞の切り抜き等を活用し、実際の場面に近い形の内容になるように心がけた。授業後には、ポイントがわかりやすいなどの感想を得ている。

事項	年月日	概要
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、講義の要点の理解と、復習に活用するために、授業のアウトライン及びポイントを1回ごとに作成し、そのプリントを毎回の授業で配布している。「精神看護特性論」「精神援助論」では、精神状態のアセスメントについては他の授業で馴染みがなくイメージしにくいことを受け、DVDで視聴した事例について、学生が考えた後に、教員が精神状態をアセスメントしたプリントを配布し、比較し考えるようにしている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、レポートの書き方、要約の仕方のところで、朝日新聞の天声人語を学生が興味を持ちやすいと思われるテーマを8つほど選び教材を作成した。その中からさらに、学生が選び、グループで内容の精読や要約を行っている。3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、毎回講義内容のポイントをまとめ配布している。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 神戸常盤大学学生による授業評価		神戸常盤大学において平成27年度に実施された学生による授業評価によると、「精神看護学概論」では、授業内容 4.2, 授業方法 4.3, 学習成果 4.2, 総合評価 4.5 「精神看護特性論」では、授業内容 3.4, 授業方法 3.4, 学習成果 3.5, 総合評価 3.3 「精神援助論」では、授業内容 3.6, 授業方法 3.5, 学習成果 3.8, 総合評価 3.7であり、2年・3年次の授業においては満足度が高いとは言えない。
2) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における学生による授業評価		平成30年度は、授業最終日に評価表が間に合わず行えていない。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) なし		

事項	年月日	概要
5 その他		
1) 神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程における教育実績	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の専任教員（講師）として、以下のような科目を担当した。
	平成19年4月～平成27年3月	「精神看護学概論」（平成19年4月～平成27年3月） 神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野Ⅱ、必修1単位）において、精神の健康の基本的概念と精神看護の目的、精神の機能、パーソナリティの発達と阻害要因、精神障害の概説、援助の方法論、ストレスと対処行動、精神医療と看護の歴史的動向や精神看護の役割と課題についての概要の内容の授業を行った。対象理解のために精神力動的視点で心理を推察することや精神状態をアセスメントしていく方法と、精神援助として傾聴・共感がどうして重要になってくるのか等、ドキュメント映画「精神」のDVDを視聴し、関連付けながら解説することで、精神看護の概要を理解させる効果があった。
	平成19年4月～平成27年3月	「精神援助論」（平成19年4月～平成27年3月） 神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神援助論」（専門分野Ⅱ、必修1単位）では、様々な精神障害の学習に加えて、精神障害を有する人の精神機能上の問題やセルフケアに及ぼす影響について理解し、患者の苦悩を理解したうえで、基本的な援助のありかたを理解することを目的とした。テキスト学習でおさえるべきポイントを“学習の要点”として提示、テキスト学習をしたうえでレポート課題に取り組む。レポートの設題は、統合失調症・感情障害（鬱）、施設症の患者の理解（疾患・治療・心理）と看護援助に関する内容を設定した。添削のポイントとして、テキストを丸写しにするのではなく、基本をおさえたうえで、障害の理解や解釈、看護上の問題、障害からひきおこる患者の心理状態等を推察したうえでの援助等、学生自身の考察等を含むことを求めた。添削と再提出を複数回繰り返すことによって、個人に合わせた進捗で理解が図れた。

事項	年月日	概要
2) 神戸常盤大学保健科学部看護学科における教育実績	平成19年4月～平成27年3月	「精神看護学演習」(平成19年4月～平成27年3月) 神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学演習」(専門分野Ⅱ、必修1単位)では、対象を総合的に理解し、効果的な看護実践ができることをねらいとし、レポート添削による指導をおこなった。＜統合失調症急性期＞＜感情障害(鬱)＞＜アルコール依存症＞の事例から設題を提示し、テキストや文献を活用し、対象理解をすすめる、状況に合わせた根拠のある援助を考えさせた。添削と再提出を複数回くりかえし、学生に応じた理解をはかった。
	平成19年4月～平成27年3月	「精神看護学実習」(平成19年4月～平成27年3月) 神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学実習」(専門分野Ⅱ、必修1単位)では、2日間の見学実習の後、3日間のスクーリング授業を行った。見学した内容を、スクーリングで援助の根拠づけを行い理解させていく帰納的学習法を実施した。講義やグループワーク、個別指導等の方法をとった。主にグループワークで見学したことについて、対象理解や援助方法、治療的環境という観点で話し合った。これらを通して、精神の病からひきおこる様々な生きづらさを抱える患者の理解と援助、精神科病棟の特殊性等、精神看護についての理解を深化させた。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の専任教員(講師)として、以下のような科目を担当している。
	平成27年4月～平成30年3月	「精神看護学概論」(平成27年4月～平成30年3月) 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」(専門分野、1年次配当、半期、必修1単位)において、精神の機能と精神の健康・不健康に関する基本概念、および様々な成長・発達段階にある人の精神・心理状態を理解するための基礎的な理論の概要、精神看護実践に活用する理論の基礎的知識の内容の授業を行い、精神看護を支える基本的な知識の修得をはかっている。
	平成27年4月～平成30年3月	「精神看護特性論」(平成27年4月～平成30年3月) 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」(専門分野、2年次配当、半期、必修1単位)においては、ライフサイクルにおける危機と心と精神の問題、精神障害を有する人の精神機能上の問題や苦悩、セルフケアに及ぼす影響、各種療法と看護援助に関する基礎的な知識、精神保健福祉施策の変遷や精神障がい者に向けられる偏見の問題等を理解する内容となっており、グループワークや演習等を行い、医療・福祉・看護における現状の理解と課題を意識化させている。

事項	年月日	概要
	平成27年4月～平成30年3月	「精神援助論」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神援助論」（専門分野、3年次配当、半期、必修2単位）においては、精神ならびに身体の病をもつ人を総合的に理解し、適切な看護援助を組み立てる基礎的能力を培うことを狙いとした内容となっている。講義・グループワーク・IBL(inquiry-based learning)方式のアクティブラーニングとロールプレイング等の演習を通して、代表的な精神の病と生活への影響、精神の病をもつ人に対する看護展開の基礎、精神の病をもつ人と家族への看護援助の基礎、適切な社会資源の活用を理解させている。また、リエゾン精神看護の役割及び機能や精神看護における倫理についての理解も図っている。
	平成27年4月～平成30年3月	「健康支援実習Ⅲ（精神）」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」（専門分野、3年次配当、半期、必修2単位）では、一学生につき8日間の精神科病院での実習と半日の学内実習を行っている。精神の病をもつ人を生物学的・心理的・社会的側面から総合的に理解するとともに、良好な治療的関係を構築し、セルフケアニーズとストレングス視点に基づく看護実践能力の基礎を培うことを目的とした実習内容になっている。その場その時に応じた指導内容によって、精神看護の統合を図る効果がある。計14週/年の精神科病院（急性期・回復期・慢性期）において学生指導を行う。
	平成27年4月～平成30年3月	「課題別総合実習」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学の講師として担当の「課題別総合実習」（専門分野、4年次配当、半期、必修4単位）では、自己の課題を明らかにし、課題を達成するために精神科病院での実習を希望する学生が対象となる。学生自身が実習計画を立て実習を行うことで、総合的な実践能力を高め、自己の将来の看護展開能力へとつなげる実習となっている。13日間の病院実習と2日間の学内実習から成り、病院実習最終日に成果を発表することでさらなる学習効果を得ている。
	平成27年4月～平成30年3月	「看護研究」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「看護研究」（専門分野、4年次配当、通年、必修2単位）では、研究方法の基礎力と研究的態度を身につけることを目標としている。精神看護学に関連する研究課題を選択した学生を対象に、一緒に研究過程をたどることを通して論文をまとめ上げ、目標を達成している。
	平成27年4月～平成30年3月	「看護活動基礎実習」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「看護活動基礎実習」（専門分野、1年次配当、半期、必修1単位）では、看護専門職の実際の活動場面の見学実習を通して、看護の対象と機能・役割について学ぶ内容となっている。実習形態の学習に不慣れな学生のフォローと、実習場面でのポイントをその場その時におさえながら実習を進めることで成果を得ている。

事項	年月日	概要
3) 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科における教育実績	平成23年4月～平成26年9月	神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科の兼任講師として、以下の科目を担当した。
	平成23年4月～平成26年9月	「こころと歯科衛生ケアプロセス」（平成23年4月～平成26年9月） 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科の兼任講師として担当の「こころと歯科衛生ケアプロセス」（専門分野、2年次配当、半期、必修1単位）においては、人を理解するための理論と、様々な対象者と関係を築くための基本的な知識を学習し、医療現場に適したコミュニケーションを実践できる能力を身につける内容となっている。演習形式の授業を通して、心のメカニズムを理解し、歯科衛生ケアプロセスの場面に応じた対応能力を身につけ、それを基礎に対象者、あるいはその支援者への対応ができる基本が習得できた。
4) 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科における教育実績	平成18年4月～平成30年3月	兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として以下の科目を担当している。
	平成18年4月～平成18年9月	「カウンセリングの基礎」 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として担当の「カウンセリング論」（2年次、4時間）においては、歯科衛生士として対象者を理解するための基本的知識として、心を理解するための理論とコミュニケーション技術の基本知識についての内容となっている。ロールプレイなどを用いて対人援助技術の基本を習得した。
	平成19年4月～平成20年3月	「カウンセリング」 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として担当の「カウンセリング」（2年次、14時間）においては、医療現場でのコミュニケーションの流れ、心の理論、相互作用に関する理論、対人援助技術についての内容の授業を行い、ロールプレイや実習であらかじめとってきたプロセスレコードを活用し、対人援助技術の基本と応用を習得した。
	平成21年4月～平成28年3月	「ヘルスカウンセリング」 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として担当の「ヘルスカウンセリング」（2年次、14時間）においては、臨地実習前に行動変容とカウンセリング技術の関係性、心の理論、相互作用に関する理論、医療現場でのコミュニケーション技術についての内容の授業を行い、実習後に学生が実習でとってきたプロセスレコードを素材に、演習を行う。これらのことを通して、人の心の成り立ちと関係性についての理論的な観点をおさえた上で、実習で体験したケースから、関わり方の基本と応用を習得した。
	平成28年4月～平成30年3月	「健康心理学」 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として担当の「健康心理学」（2年次、4時間）においては、オムニバスで演習部分を担当した。臨地実習後に学生が実習中にとってきたプロセスレコードを素材に、対象者の思いに寄り添ったコミュニケーションの理解を図った。

事項	年月日	概要
5) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の専任教員（助教）として、以下のような科目を担当している。
	平成30年4月～現在に至る	「基礎演習Ⅰ」（ラーニングスキルズ） 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年次前期配当、必修1単位）においては、1年生が大学の学習に慣れ、4年間の大学生活を有意義に送るための基礎を習得することを目的としている。講義ノートのとおり方、文献資料の検索、学術的な文章の読み方、グループワークの進め方などについてゼミ形式の演習を通じて学習する。慣れたグループの中で、自分の意見を発言し他者に受け入れられる体験を通して、自己発信する基礎的な力を培っている。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学援助論」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護学援助論」（専門科目、3年次前期配当、必修2単位）においては、他教員と分担・協力して授業を展開している。様々な精神疾患や精神障がい者を理解し、精神看護学の基礎的知識と看護を学ぶことを目標としている。例えば、治療的な患者－看護師関係を成立させる方法、精神障がい者の観察の方法と治療について、精神科医療現場における身体合併症の看護について、精神症状や問題行動とその援助について、精神科リハビリテーション及び地域におけるサポートシステムの現状・課題について習得する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学実習」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護学実習」（専門科目、3年次後期配当、必修2単位）においては、精神の健康上の問題を有する人とその家族について、身体的・精神的・社会的側面から総合的に理解するとともに、治療的な関係を築き、精神看護における看護実践能力の基礎を培うことを目的に精神科病院にて実習を行う。実習時間中は実習場にて、その場その時に応じて助言を行う。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅰ（歴史・法制度）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にノーマライゼーションの概念と実際について担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅱ（精神・身体状態の評価）」 奈良学園大学大学院看護学研究科講師として主に心理機能評価・身体機能評価を担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅲ（精神科治療技法）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主に治療技法（精神療法）について担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。

事項	年月日	概要
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅳ（精神看護理論、援助技法）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にSSTについて担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学演習Ⅰ（精神科治療技法）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にカウンセリングの基本技法について担当し、各々の実践による経験による検討や模擬演習をしならすめる。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学演習Ⅱ（精神看護理論、援助技術）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にSSTについて担当し、計画立案と模擬演習を行う。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1) 看護師免許証	昭和60年5月9日	第532000号
2) 修士（人間文化学）	平成15年3月	甲子園大学大学院人間文化学研究科人間文化学専攻 修了 人間文化学 修人第9号 論文題目「看護師の共感性に関する認識と特徴」
3) 臨床心理士資格認定	平成16年3月20日	第11561号
4) 公認心理師登録	平成31年2月5日	第14522号
2 特許等		
1) なし		

事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 公立学校共済組合近畿中央病院看護師	昭和60年4月～平成4年3月	循環器・内科一般病棟に勤務。癌を告知された終末期の患者と家族に対し、カウンセリング手法を用い死の受容過程を意識した援助を行う。心疾患・腎疾患・肝硬変・糖尿病に罹患した患者とその家族に対し、ケアリングを行い、病とともに生活していくためにセルフコントロール力を強化するために心身のケアを行った。
	平成4年4月～平成9年3月	外科病棟に勤務。消化器・肺・乳腺等の癌患者・家族に対して病期（その時の心身の状態）に応じ、ケアリング理論を用いて関わった。患者・家族がそれぞれの不安をコントロールし、その人らしく生活が送れるように支援した。また、肝・胆・膵逆行造影検査後に状態が悪化した患者と家族に危機理論を活用し心理状態を把握しながら心身のケアを行った。
	平成7年4月～平成9年3月	外科病棟主任看護師として勤務。病棟の年間目標と月間目標を師長とともに立て、目標に向けての具体案を考え実施した。病棟看護スタッフの教育として学習会の計画と運営、他部門との連携、看護スタッフ間のチームワークの向上など意識して働きかけた。
2) 伊丹市立養護学校に非常勤看護師として勤務	平成12年10月～平成16年3月	重症心身障碍児のケアにあたる家族や教員に対し、カウンセリング手法を用いて話を聴き、日々生じる不安や葛藤等の対処について必要に応じコンサルテーションを行った。
3) 大阪市児童通所ルーム・パル指導員	平成13年4月～平成15年3月まで	不登校児童（中学生対象）の通う通所施設。不登校児童に対し精神分析的な心理療法、箱庭療法などの個人心理療法を行った。関係性の中で抱える思いや感情を表出し、環境や自身に生じていることを認識したうえで、対処方法について一緒に考えた。また、集団療法としてSST（社会技能訓練）、レクリエーション療法、作業療法等を通して、児童が社会や他者との関係の中で生きぬいていくための支援を行った。児童の中には発達障害や境界性人格障害、のちに統合失調症を発症した者も含まれ、関係性の中で個人の状況に合わせてつ強みに焦点を当てた援助を行った。
4) 甲子園大学大学院人間文化学研究科に在籍（修士～研究生）	平成13年4月～平成16年3月まで	大学の発達・心理臨床センターにおいて情緒障害児（幼児）を対象に1回1時間の枠組みで、プレイルームにおいて継続的にプレイセラピーを行った。守られた空間で、セラピストとの関係性の中で自由に表現し、相互作用の中で自己観を形成しつつ情動を調節する術や関係性のとり方を成熟させていった。また、生きづらさを抱えた成人を対象に1回1時間の枠組みで心理療法を行った。
5) 大北耳鼻咽喉科 非常勤心理士	平成15年6月～平成16年3月まで	心身症（喉がつまる、めまい、耳鳴等）と医師が判断した患者でカウンセリングを希望する対象者に1回/ 1～2週間1時間の枠組みで精神分析的な心理療法を行った。関係性の中で、感情の自覚と表出を促し、自己の抱える葛藤や問題についての対処と一緒に考え、振り返りを行った。

事項	年月日	概要
6) 医療法人朗源会おおくまりハビリテーション病院（常勤3年間、非常勤5年間）	平成16年4月～平成25年3月	脳梗塞・脳出血発症後、ギランバレー症候群等の回復期で後遺症（四肢麻痺や失語等）から抑うつ状態、否認、強い悲嘆反応等の心理的問題を持つ患者と家族に対し、ベッドサイドやダイニングで対話やコラージュを用いた心理療法を行い、障害を受容していく過程に寄り添った。JR福知山線で電車事故に巻き込まれリハビリを要する患者の心的外傷に対して心理療法を行った。他には多系統萎縮症（難病指定）で極度の起立性低血圧や全身の筋力低下が著しく進行し悲嘆にくれる患者に対し、対話で心理療法を行い生きる意味を模索した。外科病棟で医師・看護師から依頼のある癌末期で抑うつ状態の患者に対して心理療法を行った。医療スタッフ（看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・医療ソーシャルワーカー・医師）に対し、心理的問題を持つ患者の精神・心理状態についての情報提供や関わり方のコンサルテーションを行った。職場に馴染めない新人スタッフや職場・家庭内で問題を抱えるスタッフに対しカウンセリングを行った。
4 その他		
1) 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究C（課題番号：24593282） 研究代表者 武ユカリ 研究題目「在宅看護における対応困難事例、暴言、暴力の現状と対策に関する研究」	平成24年度～平成27年度	在宅看護の臨床現場に特化した暴言、暴力に関する調査はまだ少なく、現状も明らかになっていない。本研究では在宅看護における暴言、暴力の発生状況、対応の現状と、それらの発生する背景や要因や対応困難事例について、明らかにした。困難事例、暴言・暴力についての訪問看護師への個別面接調査や訪問看護ステーションに対する郵送質問紙調査、グループ対話による困難事例の困難に関する検討を行った。在宅看護におけるリスクマネジメントや、療養者と家族に対する支援の在り方について検討した。
2) 常盤大学テーマ別研究助成金 研究代表者 西出順子 研究題目「在宅で生活する精神障がい者と家族のストレングスに焦点を当てた支援方法の検討ー訪問看護師のストレングスへの着目点とケアの成果ー」	平成28年5月～平成29年2月	訪問看護師が在宅で生活する精神障がい者と家族（以下、対象者とする）に対して行っているストレングスに着目した支援方法とその成果を明らかにした。対象者を訪問する看護師に半構造化面接を行い、得られた結果から意識化されず実施されているストレングスに着目した支援内容をカテゴリ化にて明らかにし、成果について検討した。

事項	年月日	概要
3) FD委員会 委員	平成19年4月～平成27年3月 平成28年4月～平成30年4月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程在籍中と神戸常盤大学保健科学部看護学科において、FD委員として活動を行っている。大学教職員の能力開発を目標とし、平成19年度から全教員に向けて年2回の研修を行っている。平成28年度は 1. 教育改革を進めようとする当大学の教職員の理解を進めるために最近の教育改革の動向を文科省の大学改革官から聞く機会を企画する。 2. 主体的かつ深く志向する学生を育成するための教育技能を学ぶためにディープアクティブラーニングのワークショップを開催する。 3. 学科内のFD活動を計画的に進める 4. 公開授業を促進し、教員相互の教育技法を向上させるを目標に進めている。学科内FDでは、全体のディープアクティブラーニングのワークショップの前に、学科内で活発にアクティブラーニングを行っている教員に依頼し、模擬授業を実施、そのあとグループワークを行い、アクティブラーニングの効果的な方法について検討を行った。
4) 国家試験対策委員会 委員	平成19年4月～平成26年3月 平成28年4月～平成30年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程在籍中と神戸常盤大学保健科学部看護学科において国家試験対策委員をしている。看護師国家試験対策として、学科教員の講座や業者の模擬試験や講座を組み入れたプログラム作り、模擬試験成績の振るわない学生へのフォロー、学生主体の学習会のサポート等を行っている。平成27年度生の看護師国家試験の合格率は95.1%であった。
5) 第三者評価委員会 委員	平成24年4月～平成26年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の自己点検・評価報告書の作成に携わった。
6) 入試委員会 委員	平成26年4月～27年3月	兵庫県、京都府、滋賀県、関東地域等で入試広報を行った。また、受験生の書類審査、合否判定の資料作成等を行った。神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制過程において、学習から遠ざかっていた学生が入学後すぐにテキスト学習にとりくめることを目的に入学前教育を行った。内容はテキストの活用の仕方、レポートの書き方、また、模擬のレポート設題を設け、テキストを活用しレポートをまとめていく過程について解説を行った。参加は任意であったが、地方からも参加があり、参加率は70%と学生の意欲の高さがうかがわれた。
7) 入学試験の出題 看護学 委員	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学 保健科学部 看護学科 編入試験の精神看護学に関する問題を作成した。
8) 公立学校共済組合近畿中央病院においてラダーⅢ研修の講師として「カウンセリング」の研修会を行った。	平成20年6月～12月	公立学校共済組合近畿中央病院の看護師教育ラダーⅢ研修において、対象理解のための理論と臨床においての対人援助技術の基本についての講義を行った。次に参加者に対応困難事例を用意してもらい、患者－看護師関係の視点で事例検討し、スーパーバイズを行った。
9) 朗源会大隈病院にて全職員対象の研修会の講師として「クレーム対応」についての研修会を行った。	平成24年1月	朗源会大隈病院にて全職員対象の院内研修会の講師として「クレーム対応」を行った。患者・家族の心理とクレーム対応の基本知識について講義を行い、あらかじめ外来対応で困った事例を準備していただき、患者と職員関係間で生じていることを解説し、望ましい対応について説明を行った。

事項	年月日	概 要
1 0) 一般社団法人 日本精神分析的自己心理学協会の運営する精神分析的心理療法家養成のための訓練研究所による通年の研修を受講 「現代自己心理学Ⅰ」「現代自己心理学Ⅱ」 「フロイトの著作」	平成24年4月～26年3月	自己心理学はコフートが生み出した理論であり、自己愛に問題を抱え（自己観の問題を抱え）生活の中での生きづらさを体験する患者への精神分析的アプローチの一つ。「現代自己心理学Ⅰ・Ⅱ」では、自己心理学・間主観性理論・関係性理論の考え方と臨床の中で活用する方法を学んだ。クライアントとセラピストとの治療的な関係性の中で、その場その時に生じている事象を捉え、目指す方向性を定める指針となる理論について学ぶとともに各自の臨床事例を持ち寄り、グループスーパービジョンを受けた。この理論は患者―看護師関係においても、関係性の鍵概念・アセスメントと治療的なアプローチにおいて十分に活用できる理論である。 「フロイトの著作」では、神経症水準（不安障害・恐怖症等）の患者の捉え方、治療的な関りについて古典を理解し、自己心理学と比較しながら差異を理解する内容となっていた。フロイトは一者心理学であり、自己心理学は二者心理学といわれるが、その差異を理解することができた。
1 1) イギリス研修旅行（トラウマ・インフォームドケア研修）に参加	平成28年9月18日～9月25日	医療法人寿栄会有馬高原病院主催の研修旅行に参加。イギリスを訪問し、認知症の方が利用する施設・病院の視察を行い、またスウォンジー大学で研修を受けた。認知症を患った方が利用する施設や病院を見学し、トラウマ・インフォームド・ケアの観点から日本との差異を認識し、よりよいケアのありかたについて考える機会を得た。患者―看護師関係は平等であり、患者の意思と尊厳が最大限に守られる理念のもと物理的・人的環境が作られていた。スウォンジー大学では当事者（てんかん）から治療による有害反応から生活障害を引き起こした体験や、治療の弊害を訴え発言する場を確保する活動について話を聴いた。また、研究者からはメンタルヘルスシステムが細分化されすぎ、ケアの評価が患者個人の思いや願いが重視されず、数値のみに頼る弊害を明らかにしたうえで見直すための研究や、患者目線からみたケアの評価の検討等の研究について聞く機会を得た。
1 2) 第2回 臨床精神看護学研究会 準備事務局員	平成29年1月～5月	平成29年5月20日 有馬高原病院で開催予定。発表会の運営と準備に関する役割を担う。
1 3) FD委員会 委員	平成30年4月～平成31年3月	奈良学園大学において『教育力をあげるようなFD活動』をテーマに2回/年の研修会を企画運営に携わった。8月頃頃の指導の中での困難さや課題を出し合い次回FDプログラム作成につなげるためのワーク、3月コーチング
1 4) 人権教育研究推進委員会	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学において、奈良県大学人権教育研究協議会の企画する研修会に参加するとともに、1回/年の研修会を企画運営する。30年度は「ハラスメントを防止するために」の企画運営に携わった。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
1. コミュニケーション力UP! 歯科衛生士のためのカウンセリング講座 (No. 1 p. 80～p. 84) (No. 2 p. 90～p. 95) (No. 3 p. 84～p. 89) (No. 5 p. 84～p. 89) (No. 6 p. 94～p. 100)	共著	平成19年1月～6	雑誌 歯科衛生士 ク インテッセンス出版 雑誌名 歯科衛生士 Volume31 (No. 1 p. 80～p. 84) (No. 2 p. 90～p. 95) (No. 3 p. 84～p. 89) (No. 5 p. 84～p. 89) (No. 6 p. 94～p. 100)	6回連載のうちの5回執筆。対象を理解するための精神分析の基本的な知識と対人関係にかかせないカウンセリングの基本技術の紹介をしたうえで、臨床で関係性に問題を抱えているケースについてスーパーバイズし、問題を解決していく過程を解説した。 A4変型 全30頁 (図・絵込) 編者：溝部潤子 共著者：溝部潤子、西出順子、三村文子、荻野美砂穂、石村乃々美 本人担当部分：「Chapter1: コミュニケーションを図るうえで大事なもの」(p. 80～84) を単著。 < 1. はじめに > では、医療職に心のケアが必要な理由について説明。< 2. なぜカウンセリング手法が必要とされるのでしょうか > では、医療現場においてカウンセリング手法が求められる理由について< 3. 医療現場でのコミュニケーション > < 4. ラポールの形成がよい関係の鍵 > < 5. 基本だけど難しい傾聴と共感 > < 6. 第一印象はやっぱり大事 > の流れで傾聴共感とを中心としたコミュニケーション方法と関係性の構築についての概説を行った。 本人担当部分：「Chapter2: 理論を足掛かりにして人を理解する」(p. 90～95) を単著。 < 1. はじめに > では、対象を主観的感覚のみで捉えるのではなく、理論を活用する必要性について説明。< 2. 意識と無意識とは? ～フロイトの局所論～ > < 3. エス・超自我・自我とは? ～フロイトの構造論～ > < 4. 自我の機能 > < 5. 自我の防衛機能について > < 6. 不安はどこから湧いてくるのだろうか? ～自己心理学の視点から～ > の項目において、対象を理解するための精神分析の基本的な知識についてなるべく平易な言葉で解説した。 本人担当部分：「Chapter3: 共感のポイントを押さえて傾聴しよう」(p. 84～89) を単著。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				<1. はじめに>では、対象者の話を聴き自己に生じた感情を意識し、コントロールしながら対応をしていくことの必要性について説明。<2. 私たちも患者さんと同じ心の仕組みを持っている><3. 転移と逆転移について><4. 共感について><5. 共感性を分類しよう><6. 共感できないのは大切なこと><7. 話を聴くときの基本スキルとは><8. おわりに>の項目において、相互作用によって引き起こる心の現象について解説したうえで、自己の感情を意識化させながらコントロールする必要性と基本姿勢について解説した。 「Chapte5: カウンセリングを臨床で実践してみよう①」を共著。3人の歯科衛生士に臨床で迷ったり悩んだりしている事例を挙げてもらい、問題解決を図ってく流れて構成した。今回は自己主張の強い患者さんのペースに巻き込まれて困っているという内容。 本人担当部分：患者と歯科衛生士間の相互作用についてアセスメントを行い解説した。<4. 患者さんと向き合う際の3つのポイント>として、①ラポールの形成には時間がかかること②じっくり話を聴くことの意味③思う込みをなくす観点から解説。<5. アドバイスをコミュニケーションという観点から見ると>では、①理解すること②きくということの意味について実際と理論とを関連付けた解説を行った。<6. おわりに>では、ラポールの形成には時間がかかる場合もあり、「きく」には「受容」「傾聴」「共感理解」の意味があること、そして、コミュニケーションは共感的理解が鍵であり、お互いの誤解やズレを少しずつ調整していくことが重要であるとまとめた。（p. 86～p. 89の部分） 「Chapter6: カウンセリングを臨床で実践してみよう②」を共著。Chapter5と同じ流れで構成。今回は患者さんに受け入れられなくて困っているという内容についてすすめた。 本人担当部分：<2. 患者さんに受け入れられなくて困っています>患者—歯科衛生士間で生じている現象について、歯科衛生士の言葉が患者さんの自尊心を脅かしているのではないかとという観点から解説したうえで、カールロジャーズのカウンセリングの基本姿勢①無条件の肯定的理解②無条件の積極的関心③共感すること③自己一致について説明した。<3. 相手の鏡になりましょう>では、患者さんが応じてくれない時に“なぜ？”と考え、多角的に視野を広げて自己を調整することが、患者に近づいていく努力を重ねること、それが信頼関係の形成につながると説明した。（p. 96～p. 100の部分）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 会話でわかる看護師のコミュニケーション技術	共著	平成30年9月	中央法規	第6章 様々な分析からわかる看護師のコミュニケーション技術の中の「共感の視点を分析してわかるコミュニケーション技術」のテーマで自己心理学を用い共感に着目し会話を分析した。 (p. 98～107)
(学術論文) 1. 看護師の共感性に関する認識と特徴 (修士論文)	単著	平成15年3月	甲子園大学大学院人間文化学研究科人間文化学専攻	看護師―患者関係で関係性がうまくいかない場面において、看護師の共感タイプによって、認知や行動の差が現れると考えた。平成14年7月～10月に病院で勤務する看護師361名に質問紙調査を行った。アンケートには、①角田の共感経験尺度改訂版②菊池・原田の看護婦の自律性尺度③神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野の3次元モデルに基づく対処方略尺度を使用し、また、かかわるのがしんどいと思われる事例を挙げ、自由記述にて答えてもらった。結果は、経験と共感タイプの間に関連は見られなかった。共感タイプと看護師の自律性尺度では、下位項目の認知・実践・具体的・抽象的判断能力において、共感タイプの共有型と両向型が、不全型・両貧型に比べると高いということがわかり、自立性においては、共有型、両向型、不全型の順に高いという結果が見られた。共感タイプと3次元モデルに基づく対処方略尺度では、下位項目の放棄・諦めにおいて不全型が共有・両向型に比べ、ネガティブな捉え方をすることがわかり、情報収集では、両向・共有型が他に比べ、その傾向が高く、回避的思考においては、不全型が両貧型に比べて高い結果となった。また、肯定的解釈では、両向型が両貧型に比べて高く、計画立案においては、不全型に比べて両向・共有型に、責任転嫁については不全型に、それぞれ高い結果となった。患者とかかわるのがしんどいと思った場面を記述してもらったものに関しては、記述内容から患者に「寄り添う」「寄り添わない」という2つのパターンに分類し、共感タイプとの関連をみた。結果、すべての場面において不全型が他と比べて「寄り添わない」行動をとり、両向型が「寄り添う」傾向を示した。 「A4判 全31頁」

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 入学前授業終了時調査からみる入学前の不安と年代別特性 資料（査読付）	共著	平成25年3月	神戸常盤大学・神戸常盤短期大学部紀要 第6号 p. 57～p. 66	看護学科2年課程（通信制）の入学予定者の特性から年代別の不安について調べ、効果的な教育支援の在り方を検討するため、平成24年度の入学前授業後に参加者124人に対し自記式質問紙調査を実施した。その結果から以下のことが明らかになった。30歳代は学習時間の確保とプライベートな時間の確保に関して不安が大きい傾向がある。40歳代は仕事や家庭の役割が大きい学習時間の確保に関する不安が大きい傾向がある。50歳代は仕事に対する責任感が増し、学習能力や気力に対する自信の低さ等がうかがえた。以上のことから現在のサポート体制も含め、年齢的特性を考慮した支援内容を検討することの必要性が示唆された。 本人担当部分：入学前授業のプログラムの立案と実施、質問紙の作成と集計、結果分析、論文執筆を行った。 共著者：西出順子、金川治美、武ユカリ、小坂素子
3. 2年課程（通信制）看護学科における入学前教育の実施と検討－授業終了時調査の自由記述からみた学生の特性－（査読付）	共著	平成25年3月	日本看護学会論文集看護教育43巻（号）p. 90～p. 93	通信制課程の入学生対象にした入学前授業（プレカレッジ）終了後、質問紙調査を実施した。「気になること」や「授業後の感想」について自由記述欄を設け、内容について分析検討した。8つのカテゴリ【学習課題に関する懸念と不安】【レポート課題への認識変化】【レポート課題に対する苦手・不安】【学習への前向きな心理・姿勢】【成人期にある学生の役割に関わる不安と懸念】【授業の感想】【学習課題に関する理解促進】【学習への後ろ向きな心境】が形成され、学習することに多くの制約がある中で、学習に対する意欲の高さ、大学に対する期待を膨らませている様子、入学後の学習内容に高い関心が向いているなどの入学前の学生の特性が明らかになった。 本人担当部分：入学前授業のプログラムの立案と実施、質問紙の作成、集計と結果分析（文脈からのコード化とネーミング）、論文構成と内容の検討を行った。 担当部分：研究の構想、デザイン、データの取得、分析、解釈、論文作成に関与 共著者：金川治美、西出順子、武ユカリ、小坂素子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 精神科病院におけるトラウマインフォームドケアの有用性について 資料（査読なし）	単著	平成28年3月	甲子園大学 発達・臨床心理センター紀要 10. 11号合併号 p. 30～33	トラウマインフォームドケアは、アメリカの精神科医療におけるコア戦略の中でも核となる概念の一つであり、トラウマインフォームドケアを導入することで入院中の再トラウマ体験を防止し、速やかに回復を図ることが狙いとされ、精神科病院においてこの考え方が浸透している。日本では、2015年に川野がアドバイザーとして所属する特定医療法人寿栄会有馬高原病院で病院をあげてトラウマインフォームドケアの理解を深め、臨床の中で実践を試みている。トラウマインフォームドケアについて、以下二点考察を行った。一つは自己心理学を用い個別的なケアの有用性について、もう一つは組織における管理的な側面からの取り組みの必要性について考察を行った。
5. 看護のケアリング機能—共感の意味についての一考察— 研究報告（査読付）	単著	平成29年12月	日本サイコセラピー学会雑誌第18巻第1号 p. 87～95	急性骨髄性白血病(AML)で化学療法を受けた50歳男性の看護援助の経過について報告し、看護師の患者に対する共感的理解と看護師のニーズに焦点を当てて考察を行う。 生活のほとんどが受け身的にならざるを得ない患者にとって、過酷な入院生活で生じる感情こそが自己の存在を確認するものとなる。しかし、時には患者から発せられる感情は、看護師のニーズに反することもある。看護師は共感を通して患者の気持ちに寄り添いながらも、時としてアンビバレントな感情を抱え、関係性の中でその瞬間に浮かび上がってくる言語・非言語の表現を返し、それを受けて患者は反応し看護師に投げかける。この絶え間ないやりとりがケアリングであり、危うくなる患者の自己存在感を支えることとなる。
6. 訪問看護師にとっての対応困難事例の困難要素について：テキストマイニングソフトを用いた個別面接調査の分析より 原著（査読付）	共著	平成29年12月	日本在宅医学会雑誌第19巻第1号 p. 11～18	困難事例について多職種連携チームでの対応を促進するため、訪問看護師の困難要素を明確にすることを目的とした。訪問看護師12名に対する半構造化面接法による個別面接調査、横断研究で、テキストマイニングソフトを用い解析し、困難要素の分類を行った。【体制・マネジメント】【職務】【疾患・障害】【現状認識】【治療・ケアに対する反応】【利用者・家族の不服】【人間関係】【療養環境】の8カテゴリーの困難要素を特定し、「利用者・家族の感情」「訪問看護師の職務意識」「地域体制の整備と訪問看護ステーションのチームマネジメント」について考察した。 分担部分：構想・デザイン・データの取得・分析・解釈に関与 共著者：武ユカリ、小坂素子、西出順子、安齋三枝子、金川治美

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 20歳代女性のカウンセリング場面の分析～自己心理学の観点から治療的かわりについて焦点を当てて（査読付）	単著	平成30年3月	精神看護におけるディ スコース分析研究会誌 第5巻 p. 25～32	カウンセリングの一場面を取り上げ、 会話分析を行った。セラピストは60 代の男性。患者は20歳代の女性であ り、職場でのハラスメントをきっかけ にパニックになり、認知行動療法を ベースに定期的にカウンセリングを受 けていた。定期的に行われている面接 場面を患者の同意を得て録音・録画 し、そのうちの1セッションの逐語録 を作成した。本稿では、セラピストが 患者のいつもと違う様子を察知し、手 法を切り替えた1セッションを取り上 げ、治療的関りについて自己心理学の 主要概念である「自己対象ニード」 「自己対象体験」「共感」「相互的調 制」に焦点を当て分析を行った。セラ ピストとの安定した自己対象体験は、 患者の傷ついた自己対象（男性像）を 修復し、成果に通じる可能性を大きく 持つと考える。
（その他） 「実践報告」 看護学科通信制課程初 めてのプレカレッジ （入学前教育）	共著	平成23年10月	神戸常盤大学緑葉第7 号（p. 5～p. 16）	平成23年3月、初めての入学前教育を 実施した。実施方法と内容の報告をお こなった。実施目標を「通信制課程で の学習のプロセスがわかる」「レポー ト作成の学習ポイントがわかる」「CCN 操作がスムーズに出来る」とした。授 業タイトルは「学び直しの看護学」と し、Part1「学習を進める留意点」 Part2「“トイレの神様”を題材に書く レポート」Part3「CCNの使い方」で構 成した。入学予定者は准看護学生で あった時期から10年以上を経ているこ ともあり、Part2では学生の馴染みやす い教材として、ヒット曲“トイレの神 様”の歌詞をレポートの題材に選び、 レポート設題からレポートを作成して いく方法について解説を行った。 本人担当部分：入学前授業のプログラ ムの立案と実施、全体の流れを踏まえ て執筆を行った。 共著者：西出順子、武ユカリ、小坂素 子、安齋三枝子
患者を支えるための概 念枠組み—自己心理学 の臨床活用	単著	平成29年11月	第2回 臨床精神看護学 研究会誌 2017年 p. 2～5	筆者は看護師の経験を持ちながら大 学・大学院で心理学を学習する機会を 得た。多くの理論を学び、臨床心理士 としてリハビリテーション病院に入職 し、患者と自己の理解、関係性の把握 に活用してきたが、精神分析系の理論 を治療的な関りに用いようとする と、病院臨床では使うことが難しい現 状に行き当たった。その理由として、 治療の枠組みが厳密であること、患 者自身が自己を分析し、把握していく ためのモチベーションを必要とすること 等が考えられた。模索する中で、患者 の言動と筆者の心理がちょうどマッチ した自己心理学に出会った。本稿では 筆者の臨床での経験を通して、これら 理論の活用概要を紹介する。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「学会発表」 1. 回復期リハビリテーション病院における臨床心理士のひとつの役割～葛藤に寄り添う	単著	平成18年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会 青森2006 抄録 p. 233	回復期リハビリテーション病院においての心理療法の有用性について報告した。対象者は脳血管障害による身体の機能不全から抑うつ状態、否認、強い悲嘆反応等の心理的問題を持つものが多く、ベッドサイドやデイルーム等で主に対話用いた心理療法を行い、障害を受容していく過程に寄り添った。臨床心理士は、専門的な立場で心の状態を把握し関わり続けていくが、その主な手段は、共感をベースに患者の語る物語に耳を傾けることである。患者は自己の過去と現在を語りながら様々な感情を発露し、気持ちの折り合いをつけ、新たな自己とまとめていく。このような関りの過程について紹介し、心理療法のもたらす効果について検討したことを報告した。
2. 短期大学看護師2年課程（通信制）への入学動機と入学後の学習継続に影響を与える要因の分析	共著	平成21年9月	日本看護学教育学会第19回学術集会（北海道北見市）抄録 p. 121	通信制課程2009年3月に卒業した学生267名に対し、先行研究をもとに49の質問項目からなる質問紙調査を行った。データは因子分析で解析し、10因子を抽出した。入学の動機に関連する因子は「資格取得」「学位取得」の2因子、入学後の学習継続を支える因子は「成長の実感と自信」「教職員のサポート」「職場の評価」「看護実践力向上の実感」「学友・友人」の5因子、また、学習継続を困難にする因子は「時間的・経済的制約及び独習の苦しさ」「学習内容の難しさ」の2因子が示された。 本人担当部分：質問紙の作成、データ集計、因子分析解析とネーミング等の結果分析、発表内容と発表原稿・抄録内容の検討を行った。 共同発表者：高宮洋子、西出順子、山岡紀子、柳生敏子、小坂素子、中野順子
3. 2年課程（通信制）看護学科における入学前教育の実施と検討 （1）－授業終了時質問紙調査から－	共著	平成23年9月	第42回 日本看護学会看護総合学術集会（千葉）抄録 p. 121	本課程への入学者は准看護学生であった時期から10年以上を経ており、入学後も准看護師として働き、育児や介護などの役割を担いながら学ぶ背景がある。そのため学習を円滑に進めるには、入学前に通信制課程の学習システムを知り、学習計画や方法、レポート作成等についての理解を促す機会が必要であると考え、入学予定者（希望者）に対して入学前教育を実施した。終了時の調査から、今後の教育内容、方法、学習支援の在り方を検討した。 本人担当部分：入学前授業のプログラムの立案と実施、質問紙の作成、分担データの入力および結果分析、発表とポスターの内容検討を行った。 共同発表者：金川治美、安齋三枝子、西出順子、武ユカリ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4．2年課程（通信制）看護学科における入学前教育の実施と検討 （2）－授業終了時調査の自由記述からみた学生の特性－	－	平成24年9月	第43回日本看護学会看護教育学術集会（岩手県盛岡市）抄録 p. 24	通信制課程の入学生対象にした入学前授業（プレカレッジ）終了後、質問紙調査を実施し、不安に関する質問9項目と自由記述について分析検討した。8つのカテゴリ【学習課題に関する懸念と不安】【レポート課題への認識変化】【レポート課題に対する苦手・不安】【学習への前向きな心理・姿勢】【成人期にある学生の役割に関わる不安と懸念】【授業の感想】【学習課題に関する理解促進】【学習への後ろ向きな心境】が形成され、学習することによって多くの制約がある中で、学習に対する意欲の高さ、大学に対する期待を膨らませている様子、入学後の学習内容に高い関心が向いているなどの入学前の学生の特性が明らかになった。 本人担当部分：入学前授業のプログラムの立案と実施、質問紙の作成、分担のデータ入力および結果分析（文脈からのコード化とネーミングの検討）、発表とスライドの内容検討を行った。 共同発表者：金川治美、西出順子、武ユカリ、小坂素子
5．在宅ケア領域における困難な事例に関する文献学的考察	－	平成25年3月	第17回日本在宅ケア学会（茨城県水戸市）	医中誌Webを用い2012年4月9日に実施した。検索キーワードは＃1（対応困難、困難事例等）と＃2（訪問看護、在宅看護等）で、＃3（退院困難等）を除いた。検索結果54件の28件を対象とし、マトリックス方式で整理した。学術分野は社会福祉14、看護10、社会福祉と看護混合4であった。困難な事例に関する文献数は多いとはいえず、困難事例について現状では社会的認知度が低い。また看護領域での報告が少なく、学術的には困難事例の検討はあまり行われてない現状があった。 本人担当部分：文献内容検討（分担した文献を読み、テーマにあった内容のものを選別）、選別した文献においてデータ表を作成、データ集計、結果分析、発表と発表原稿・抄録の内容検討を行った。 共同発表者：武ユカリ、金川治美、西出順子、小坂素子、安齋三枝子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. 訪問看護の困難事例についての哲学的グループ対話を用いた検討	-	平成26年7月	第22回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会（兵庫県神戸市）	2012年2月～2013年8月哲学的対話手法（Neo-Socratic Dialog:以下NSD）を用いて、異なる背景の参加者（訪問看護師、その他の医療介護職、一般人、倫理等専門家、メディア関係者等）による対話から困難事例の「困難」とは何かについて検討し、結果を報告した。第1回討論から「療養者の意思を尊重しながら、医療ニーズに応えるため、訪問看護師の判断をもとに、関係者（医師、療養者、介護者等）との高度な連携が求められること」、第2回討論から「療養者の生活の多様な価値観のなかで、看護職が重視する価値の実現のため専門的援助を行うこと」、第3回討論から「療養者の生活上の問題に直面しても、ときに訪問看護師1人では援助手段を見出し難いこと」が導かれた。 本人担当部分：NSDに参加、結果分析を行った。 共同発表者：會澤久仁子、武ユカリ、金川治美、 <u>西出順子</u> 、小坂素子、安齋三枝子
7. 訪問看護師の対応困難事例における困難要素の検討ー全国質問紙郵送調査の結果よりー	-	平成28年7月	第18回日本在宅医学学会（東京）	8カテゴリ28分類に整理した個別面接調査の分析結果と文献検討、グループ対話で得られた結果を含め、岩間の分類を参考に質問項目を作成した。回答数588（回収率29.4%）、うち505（有効回答25.3%）を分析対象とした。65項目について最終的に全40項目、4因子を抽出し、以下の通り命名した。i「家族・利用者の抑制のバランスが保てていない態度」、ii「訪問看護師の能力レベルと組織の協力体制」、iii「利用者・家族の疾患と状態に起因する生活能力の低下」、iv「家族が円滑にケアすることを阻む状況」全体のクロンバック α 係数は0.96であり、各因子のクロンバック α 係数は0.89～0.92で内的整合性は高い結果が得られた。 本人担当部分：質問紙の作成（訪問看護師への個別面接調査と語りの内容からカテゴリーの作成とネーミング、文献やグループ対話で得られた結果から質問項目を考えた）、結果分析（因子分析過程においてのデータの絞り込みとネーミング）、発表内容の検討を行った。 共同発表者：武ユカリ、金川治美、小坂素子、 <u>西出順子</u>

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 訪問看護師が感じる困難要素の検討—インタビューによる質的分析と質問紙による量的分析の統合—	—	平成28年8月	第2回 日本混合研究法学会(東京)	訪問看護師は療養者と家族を対象に個別性の高い多様な援助ニーズに対応しなければならない、対応困難事例に遭遇することが多い。文献研究ではこれまで対応困難事例に関する訪問看護領域の研究は少なく、何が困難の要素となっているかについて検討されていなかった。また哲学的対話手法(NSD)による調査では、訪問看護の対応困難事例には非常に複雑な困難要素があるが、それらにはいくつかの抽象的な枠組みがあることが示唆された。そこで本研究では対応策の検討につなげるため、訪問看護師の感じる困難要素の構造を明らかにすることとした。研究方法は、質的研究の結果から訪問看護における困難要素を抽出し、その結果得られた知見をもとに、仮説検証のための量的研究につなげた統合した探索的順次的デザインを用いた。混合研究法を用いることで、より実態に沿った調査を行い、困難要素の構造を明らかにした。本人担当部分：発表内容に関連する研究への関与と発表内容の構成と内容検討。共同発表者：武ユカリ、小坂素子、西出順子、會澤久仁子、金川治美
9. 在宅で生活する精神障がい者の支援方法の検討～訪問看護師のストレングスに着目したケアの一考察～	—	平成30年7月	第49回日本看護学会—在宅看護—学術集会(佐賀)	【目的】訪問看護師が精神障害を有する療養者に対して、独自の方法で行っているストレングスに着目した支援方法を明らかにする【方法】[研究対象]A県下の訪問看護ステーション6施設、各施設管理者に推薦された看護師10名[研究期間]平成28年9月平成29年2月[研究デザイン]質的記述的研究[分析方法]質的統合法(KJ法)【結果】元ラベル74枚から①困りごとは強みに通じるゲート②身体をいたわる③好きなことは現実感覚強化の糸口④自信は新たな希望のエネルギー源⑤望みや願いを第1に守るの5要素を抽出した。【結論】訪問看護師は日々の関りの中で自ずとストレングスに着目しながら支援をしている。時に、利用者の願いや望みが過剰に作用し体調を崩すことにもなるが、あきらめずに将来に希望を持ち共存していく手立てを一緒に探ることが、地域での生活を支えていく上で重要であることがわかった。本人担当部分：研究計画、文献検討、インタビューガイドの作成とインタビュー、結果分析、考察、発表発表者：西出順子、木村聡子、鶴飼知鶴、畑吉節未

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 林 文子

研 究 分 野		研究内容のキーワード
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 清恵会医療専門学院 ・小児看護学実習指導 ・基礎看護学実習指導 ・精神看護学実習指導 ・事例研究指導 ・クラス担任 ・オープンキャンパス担当 ・国家試験対策実施	2011 年 ～ 2012 年	1) 清恵会医療専門学院看護科 3 年生約 50 名に小児看護学実習を担当し指導にあたった。小児病棟および保育所にて 1 クール 3 週間の実習を 9 グループに分け指導した。小児病棟では川崎病、ネフローゼ、気管支喘息、肺炎などに罹患した各発達段階の小児とその家族の看護について指導した。保育所では健康な乳幼児の生活と発達に応じた保育方法を学ぶ学生の指導にあたった。「事例研究」では小児看護学領域の研究に臨む学生の指導を行った。クラス担任として 2 年生約 40 名を受け持ち、学校生活における学生の管理（成績管理、健康管理、必要時面談や指導など）を中心に担任業務を行った。また講義や行事などのスケジュールを組み、HR では、過去の国家試験問題から問題を抜粋し対策時間を設定しクラス会議、レクリエーションや課外活動などを実施し、クラス運営にあたった。講義担当者として終講試験の実施や採点などを行った。担任として基礎実習を中心に計画し、実習病院との打ち合わせ、要項の作成などを行った。学生にオリエンテーションを実施し、基礎看護学の習得に向けて、臨地での進行や指導にあたった。オープンキャンパスでは、入学希望者への学校案内および人形を用いたのバイタルサインズ測定のデモンストレーション実施などを担当し、進行に務めた。
2) 宝塚大学看護学部 ・小児看護学Ⅳ（演習） ・小児看護学実習 実習指導 ・基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ 実習指導 ・総合実習 実習指導 ・看護の探求 研究指導（補助） ・成人看護学実習（慢性期）実習指導 ・チューター 担当 ・国家試験対策 ・オープンキャンパス担当	2012 年 ～ 2017 年	2) 宝塚大学看護学部 3 年次生約 100～130 名の小児看護学Ⅳ（演習）を担当し、「バイタルサインズ測定」「離乳期の児の食事」「児の抱き方・着衣」についての技術演習にあたった。小児看護学実習では小児病棟および小児外来にて 1 クール 2 週間の実習を、10～13 グループに分け指導にあたった。小児病棟では、川崎病、ネフローゼ、気管支喘息などに罹患した各発達段階の小児とその家族の看護について指導した。実習最終日には各学生が、「看護上の問題」と「患者の全体像」を発表し、その講評や指導にあたった。総合実習では、小児看護学ゼミ受講学生の小児関連福祉施設や教育機関等での実習の指導にあたった。看護の探求では学生がこれまでの看護の学びから選択し設定したテーマに合わせ、看護研究の指導にあたった。基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱの各期の実習にて、1 年次～2 年次生に対し指導にあたった。成人看護学実習では、1 クール 3 週間の実習を毎年 2 グループ担当し、慢性期疾患を持つ患者とその家族への看護について、指導にあたった。2 年次生のチューターを担当し、学生生活中的の勉強や就職および健康面の相談など学生生活のサポートにあたった。また必要時 保護者を含めた面談を行うなど問題を抱えた学生に対してチューター主任や学生委員会と連携し指導や支援を行った。
3) 大阪僑偉高等学校看護科・看護専攻科 ・基礎看護学実習Ⅱ実習指導 ・老年看護学実習	2016 年 ～2017 年	3) 大阪僑偉高校の看護科および看護専攻科の学生約 30 名に、基礎看護学実習Ⅱ、老年看護学実習、成人看護学実習の各領域実習を担当し、担当する学生の臨地での指導と学内演習の実技指導にあたった。

・成人看護学実習 4) 太成学院大学 ・小児看護学実践実習 5) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 ・基礎看護技術演習Ⅱ・Ⅲ ・基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ ・卒業研究Ⅱ	2017 年 4 月～ 2018 年 3 月 2018 年 4 月～	4) 太成学院大学看護学部の学生に対して小児看護学実践実習の指導にあたった。 5) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 1 年次生約 90 名に対し基礎看護技術Ⅰ・Ⅱの講義・演習を行い、「活動と運動」「睡眠・休息」「食事と栄養」「総合演習」を担当した。また 2 年次生約 90 名に対しては基礎看護技術Ⅱの「食生活を支える技術」を担当した。
2 作成した教科書, 教材 1) 宝塚大学看護学部 ・小児看護学実習要項 ・実習オリエンテーション資料 ・講義資料 (国家試験対策用問題) ・オープンキャンパス資料		1) 宝塚大学看護学部小児看護学実習要項 (平成 25 年度以降) の作成にあたり、実習目標の検討やスケジュールの設定および記録類を作成した。また、東大阪市立医療センター小児病棟実習の導入にあたり、臨床との打ち合わせや事前研修を行い、各種資料およびオリエンテーション資料を作成し、学生の指導に用いた。その他、市立池田病院、北野病院においても同様に資料を作成し、臨地での実習の進行および学生指導を行った。小児看護学の講義に使用する資料の一部として国家試験問題の作成を担当した。オープンキャンパスを担当し、「子どものバイタルサインズ測定」を参加者に体験してもらうための資料を作成した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他 1) 宝塚大学看護学部 ・小児看護学実習施設の開拓	2014 年 9 月	1) 宝塚大学看護学部小児看護学における臨地実習病院として、市立堺病院・大阪労災病院を実習病院として新たに開拓し、実習を行った。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 ・看護師資格取得	1995 年 4 月	看護師免許看護師免許取得 (第 8 5 7 6 6 5 号)
2 特許等		無し
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

4 その他 宝塚大学看護学部 委員会活動 ・FD 委員会 ・キャリア委員 奈良学園大学保健医療学部 委員会活動 ・学生部会 ・自己点検・評価委員 地域貢献 ・大阪府小児救急電話相談（＃8000） ・NPO 法人小児救急サポートネットワーク認定員 ・大阪府小児救急電話相談マニュアル 改訂 ・病院における電話対応スキルアップ研修会 ファシリテーターを担当 ・お父さんに役立つ育児セミナー 講演 “子どもの病気やケガの対処—＃8000 での相談内容から”		2013 年 ～ 2016 年 2018 年 ～現在 に至る	日本私立看護系大学協会主催「大学新任教員のための研修会」にて、私立大学の現状と課題、大学教員としての役割について受講した。 キャリア委員会に所属し、卒業生にシャトル研修を開催し「若手看護師のためのキャリアアップ研修」を実施した。 <
---	--	---	--

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1,小児救急電話相談（＃8000）における電話相談員の職務満足に関連する因子の探索 (修士論文)	共著	2017 年 3 月	和歌山県立医科大学	子どもの急病時などに家庭での対処を保護者に支援する、小児救急電話相談（＃8000）の相談員 370 名を対象に、相談対応の向上を図るために質問紙調査を行った。まず質問紙作成のため相談員に予備調査を行い、データから電話相談の職務満足概念を質的分析し抽出した。その内容から 54 問の質問項目を作成し、コミュニケーション・スキル尺度および自己肯定感尺度を使用し調査を行った。回収した質問紙よりデータの因子分析を行ったところ、電話相談員の職務満足は【肯定的感情】【労働環境】【自律性】からなる 23 項目の尺度で構成された。また【肯定的感情】には自己効力感やコミュニケーション・スキルおよび相談に必要な電話対応スキルなど電話相談の実践そのものと関連しており、電話相談対応の向上には職務満足が有用であることが明らかとなった。そのため相談員が従事する環境を調整することや、それに向けた支援の重要性が示唆された。 共同研究者：林 文子、内海みよ子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
2,卒業して8か月目及び2年目の看護師に対するキャリアアップ支援の試みーアサーティブネス研修を実施してー	共著	2017年，3月	宝塚大学紀要 ARTES No30	A 大学卒業生のキャリアアップ支援として、組織人としての役割を考えることを目的に、卒業して8か月目及び2年目の卒業生を対象とした合同研修を行った。研修参加者のアンケートより、アサーティブネスという概念から、他者の権利を守りながら自分の権利を守り、自分の意見を伝えることの大切さを学んだ。卒後8か月目の参加者は、先輩と話をし、1年後の姿を予測できた。卒後2年目の参加者は、1年前の自分を振り返り、自分の成長を実感するとともに、職場の後輩への接し方を考えていた。それぞれの立場で重要と感じる点や考える視点は異なるが、お互いの考えを知ることによって、職場におけるチームワークへの理解が深まった。研修の意義を実感し、今後も継続する必要があると考えられた。 共同研究者：美王真紀、岩下真由美、岡和美、江口秀子、合田友美、寺田准子、大和志麻、福島美幸、上田裕子、<u>林文子</u>、人見啓江、西絵里 担当部分：データ分析
3,健康な高齢者におけるケリーパッドを用いた安楽な洗髪姿勢時の股関節・膝関節の屈曲角度、及びそれら角度と基本属性の関連	共著	2019	日本健康医学会	ベッド上仰臥位でケリーパッドを用いて実施する洗髪援助は身体的負担の少ない援助方法として挙げられるが、その援助方法における膝関節の屈曲の程度についてはどの程度屈曲することが対象者にとって安楽であるのか明らかではない。そこで、本研究の目的は、基礎的研究として、健康な高齢者において、ケリーパッドを用いた仰臥位での洗髪援助時に、人が安楽だと感じる股関節及び膝関節の関節屈曲角度を明らかにし、それら角度と対象者の基本属性との関連について検討することである。対象者は51名の高齢者で、バイタルサイン、基本属性、関節角度に関するデータを収集した。分析では、関節角度データは分布を確認し、基本属性データとの関係について pearson の積率相関係数を求め、さらに基本属性データの各

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
				項目において高値群と低値群に分け対応のない t 検定を行った。その結果、1) 人が安楽だと感じる股関節の平均屈曲角度は 34.7 ± 9.6 度、膝関節の平均屈曲角度は 73.2 ± 20.1 度である、2) 人が安楽だと感じる股関節と膝関節の屈曲角度のバランスは、股関節の屈曲角度に対し膝関節の屈曲角度が平均 2.1 ± 0.3 倍である、3) 股関節・膝関節の屈曲角度は、性別や年齢、体格（身長、体重、BMI、体脂肪率、大腿長、下腿長）を含む基本属性と相関関係を認めない、4) 大腿長の長さからみて高値群と低値群では股関節の屈曲角度に差があり、高値群のほうが低値群より有意に値が小さい ($p < 0.05$)、ということが明らかとなった。以上から、今後実際にケリーパッドを用いた仰臥位での洗髪援助時に股関節や膝関節の屈曲角度を決定する際には、本研究結果を活用されることが望まれる。木村 静 1、澤田京子、上山直美、葉山有香、 <u>林文子</u> 、中馬成子 担当部分：データ分析
(その他) 学会発表 1, 慢性疾患児との対応経験と担任の対応の分析(査読あり)	共著	2014 年 8 月 30 日	日本育療学会第 18 回 学術集会 (於新潟県)	慢性疾患児に関わる教育機関関係職種の役割を明確にし、連携を円滑に進めるために質問紙調査と面接調査を行った。慢性疾患児と身近に関わっている担任の対応を分析し、学内体制としての担任への支援の方法を検討したところ、各担任は児に対する配慮や対応策など情報共有の工夫をしていた。そのため、管理職の統率力により連絡調整の方法や連携プログラムが明確なことなどが学内体制の充実につながることが明らかになった。 共同研究者：河合洋子、中塚志麻、大見サキエ、横田雅史、津田聡子、 <u>林 文子</u> 、江村多加子 担当部分：データ分析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
2. 健康な女性高齢者における床上仰臥位での洗髪時の膝関節屈曲の有無が対象者の感覚に及ぼす影響の違い	共著	2018 年 12 月 15 日	日本看護科学学会第 38 回学術集会（於愛媛県）	健康な女性高齢者に対し仰臥位でケリーパッドを用いた洗髪援助における膝関節の屈曲の有無が対象者の感覚に及ぼす影響の違いについて調査した。対象者（12 名）の年齢は70.5（±1.8）歳（平均値±SD）であった。感覚データでは大腿・下腿の筋の緊張感において伸展群は34.9（±10.5）点、屈曲群は5.1（±2.1）点で、屈曲群のほうが伸展群より筋の緊張感が低く、有意差を認めた。（p=0.021）姿勢の安心感では、伸展群は58.7（±11.1）点、屈曲群は94.5（±1.9）点で、屈曲群のほうが伸展群より安心感が高く、有意差があった。（p=0.021）したがって仰臥位での洗髪時に膝を伸展するより屈曲したほうが、足にかかる筋の緊張感が有意に少なく、安心感が得られることが科学的に明らかとなった。今後は対象者数を増やすことや身体的な影響も含めて総合的に検討すること、さらに実際にベッド上で洗髪援助を受けている高齢者を研究対象者として研究を進めていくことが課題として考えられる。 共同研究者：木村静、澤田京子、大江真人、上山直美、葉山有香、平野加代子、 <u>林文子</u> 担当部分：データ分析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
3. 女性高齢者における仰臥位で洗髪援助を受けるときの股関節と膝関節の屈曲の有無が、血圧と脈拍に及ぼす影響についての検討	共著	2019年3月9日	日本看護研究学会第32回近畿・北陸地方会 学術集会	健康な女性高齢者に対し仰臥位でケリーパッドを用いた洗髪援助における膝関節の屈曲の有無が対象者の血圧と脈拍に及ぼす影響について調査した。屈曲群→伸展群の順で実施した者が6名、伸展群→屈曲群で実施した者が6名であった。洗髪前後の比較は、血圧では有意差がなかったが、脈拍では屈曲群において前81.3 (±11.6) 回/分が、後69.1 (±9.8) 回/分に、伸展群において前82.0 (±10.6) 回/分が後71.0 (±10.4) 回/分、2群ともに洗髪前後で有意差があった (p=0.001、p=0.000) 各側手項目の変化率における2群の比較では全て有意差は認めなかった。したがって女性高齢者では仰臥位で洗髪援助を受ける際、洗髪前より洗髪後に脈拍が有意に減少するが、膝関節の屈曲の有無によって脈拍の減少における有意な違いは認めないことが明らかとなった。今後は対象者数を増やすことや心理的な影響も含めて総合的に検討すること、さらに実際にベッド上で洗髪援助を受けている高齢者や療養患者を研究対象者として研究を進めていくことが課題として考えられる。 共同研究者：木村静、澤田京子、大江真人、上山直美、葉山有香、平野加代子、<u>林文子</u> 担当部分：データ分析

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 前田 吉樹

研 究 分 野		研究内容のキーワード
人間医工学 境界医学 脳科学		疼痛 恐怖条件付け リハビリテーション
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) 実験形式の授業とレポートの提出・添削	平成 22 年 4 月 ～現在 に至る	ハーベスト医療福祉専門学校 理学療法学科 「生理学実習」 血圧・スパイロメータ・筋電図・心電図・コキガス分析装置・感覚検査・バイオフィードバック・誘発電位などを用いた実験の指導と、実験レポートの作成法を指導。1 グループ 4-5 名のグループに分かれ実験し、その内容をレポートとして提出させた。レポートについては個別に添削をおこない、授業中盤で実例を交えながらレポート作成時の注意点を再度説明した。
2) プレゼンテーションの導入、小テスト形式	平成 27 年 1 月 ～平成 28 年 3 月	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科 「内部障害学Ⅱ」 内臓疾患、内分泌・代謝疾患の講義を担当。該当する箇所について定期試験を作成・実施した。テスト対策として国家試験の問題を改変して小テストを作成・実施し、理解力向上の一助とした。
	平成 27 年 1 月 ～平成 28 年 3 月	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科 「理学療法総合演習」 国家試験対策として、「内分泌・代謝疾患」、「バイオメカニクス」「統計学・研究法」の分野に対し講義を実施。小テスト形式で添削をおこない回答力の向上を図った。
	平成 27 年 1 月 ～平成 28 年 3 月	甲南女子大学 教養科目「現実をみる G」 他学部の学生を対象とした、健康科学関連の教養科目を担当。「痛みを知り痛みと向き合う」「女性が抱える痛みについて」「リハビリテーションの実際（脳卒中）」の 3 回を担当し、講義をおこなった。授業の終わりには理解確認のための小テストをこない、成績評価の一部とした。

3) プレゼンテーションの導入、小テスト形式、実践・体験型学習・実技試験	平成 27 年 1 月 ～平成 28 年 3 月	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科 「筋骨格理学療法 I」 「下肢の骨折 (1)」、「脊椎疾患 (1)」を担当。疾患の基礎知識の復讐として講義を行った後、実技形式でストレッチ・筋力増強運動の手技や各種治療機器の使用 方法について説明、学生どうして模倣・練習させ、適宜 個別指導によって指導した。その次の授業では小テスト をおこない、理解力向上の一助とした。定期考査では筆 記試験の他、実技試験も実施した。
	平成 27 年 1 月 ～平成 28 年 3 月	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科「運動機能障害診断学 I」 整形外科的検査手技についての説明と、実技指導をお こなった。模擬患者を想定し、どのような検査が適当か を考えさせるグループワークもおこなった。定期考査と して実技試験をおこなった。
4) 模擬患者を用いた実習、ビデオ撮影による振り返り、実践・体験型学習、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成 27 年 1 月 ～平成 28 年 3 月	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科「理学療法計画論」 「中枢疾患に対する理学療法評価」の実習を担当。1 グ ループ 3 名で模擬患者の理学療法評価をおこない、症例 レポートを作成させる。レポートは個別で添削をおこな う。その後発表レジュメを作成させ、5～6 名のグループ で症例発表をさせる。最後に、模擬患者評価の模様をビ デオ撮影したものを編集し、患者に対応する上での危険 な場面、失礼に値する行動がなかったかを指摘、講義を 行った。
5) 実験形式、マニュアルによる自己学習、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成 27 年 1 月 ～平成 28 年 3 月	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科「運動学演習」 「筋力と関節角度や角速度の関係」に関する実習項目を 担当した。バイオデックスを用いた筋力の測定実習に対 してレポートを作成させた。実習は機器の使用方法を記 載したマニュアルを読ませることで、学生自身で問題を 解決させながら進めるよう実施した。レポートはグルー プにつき 1 つを提出するようにし、添削もグループ単位 でおこなった。実習の終わりには、実験した内容につい ての発表会を行わせた。
6) 動物を用いた実験、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成 27 年 1 月 ～平成 28 年 3 月	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科「人体の生理機能演習 II」(補助) ウシガエルを用いた動物実験で、機器の使用法や結果の 解釈の仕方などを学生に指導した。実験は 1 グループ 5 ～6 名でおこない、事前学習によって実験の結果予測し たものを発表させ、入念に実験方法を学習させてから解 剖を行わせた。
7) ゼミ活動	平成 27 年 1 月 ～平成 28 年 3 月	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科「基礎ゼミ I・II」 1 年次学生を対象としたゼミで、勉強の仕方やプレゼン テーションのまとめ方など、学生の基礎スキル向上を目 的とした指導をおこなった。

	平成 27 年 1 月 ～平成 28 年 3 月	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科「卒業研究」 配属された学生（3 年・4 年次生）に対して、研究計画の立て方や、データを解釈し論文にまとめるまでの過程を指導。ゼミ内での論文抄読や予備実験、実験スケジュールの作成など行わせた。指導した卒論テーマは「運動誘発性鎮痛と身体感覚不一致感の関連についての研究」、「4 肢位のマンスリービクス実施による月経随伴症状軽減効果の違いについての研究」であった。
2 作成した教科書，教材 なし		
3 教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 「勉強会・研修会」 1) Human brain mechanisms of muscle pain: Combining fMRI study and Psychophysics (筋痛に対するヒトの脳内機構：f MRI 研究と心理物理学を組み合わせた研究)	平成 23 年 2 月	大阪大学グローバル COE プログラム「認知脳理解に基づく機械工学創成」第 29 回創成塾
2)「痛みの研究とリハビリテーション：ヒトの痛みをどう捉え、検証するか」	平成 24 年 11 月	兵庫県理学療法士協会 中播磨・西播磨ブロック合同研修会
3) 「高齢者の慢性疼痛管理」	平成 29 年 12 月	奈良学園大学公開講座 登美ヶ丘カレッジ「最新の痛みのリハビリテーション ～痛みの病態に応じたケアを考える～」
4)「臨床実習指導と臨床研究指導」	平成 21 年 4 月 ～平成 25 年 1 月	石川病院の理学療法士として、理学療法士養成校からの実習生を受け入れ、臨床実習教育に従事した。主に神戸大学、吉備国際大学、大阪リハビリテーション学院の実習生を指導した。また、研究面では院内理学療法士の研究・症例発表において指導をおこない、若手スタッフの研究発表の奨励に努めた。
5 その他 大阪大学 グローバル COE プログラム 「認知脳理解に基づく機械工学創成」 リサーチ・アシスタント	平成 22 年 4 月 ～平成 26 年 3 月	大阪大学の実施する GCOE プログラムで、医学・工学・人間科学の学生・研究者が集まり、学際的な融合研究の創成を目指すプログラムで RA となり、セミナーやシンポジウムで討論や発表をおこなった。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格，免許 理学療法士免許取得	平成 16 年 4 月	登録番号：第 48466

修士号（医科学）	平成 21 年 3 月	神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程 第 439 号
2 特許等 なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 石川病院 理学療法士	平成 16 年 3 月 ～平成 25 年 1 月	回復期リハビリテーション病棟、一般病棟、療養病棟、 外来部門の患者に対して理学療法を実施。術後含めた骨 関節疾患、および脳血疾患や神経難病含めた症例を一日 につき 6～10 名ほど担当。また、院内委員会や部門内係 の業務も実施。
4 その他 なし		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1) 痛みのケア	共著	平成 29 年 3 月	ピラールプレス	本書は看護職が患者への最善の痛みケアを提供できるよう，第Ⅰ部で「痛みと人間」をテーマに「痛みと性」，「痛みの意味」，「痛みと倫理」「痛みと医療」について述べ，人間と痛みの関係を理解する。そして第Ⅱ部 5 章～8 章で「痛み理論」を紹介し，痛みに関する理論をもとに痛みについての理解を深める・第Ⅲ部では「痛みと看護」をテーマに「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」，「検査に伴う痛みの看護」，「治療に伴う痛みの看護」「ターミナルケアと緩和医療」といった臨床の場面を想定した痛みのケアを学ぶ。そして，第Ⅳ部では「痛みケアにおける看護実践例」として，術後疼痛，癌性疼痛，急性・慢性疼痛，出産に関連した痛みの看護，小児に関連した痛みの看護といった主な疾患や状況における痛みケアの展開事例を紹介する。 B5 版・全 180 頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，池辺寧，辻下守弘，<u>前田吉樹</u>，篠原百合子，棚橋千弥子，田中登美，梶村郁子，立川茂樹，新谷奈苗，小池恵理子，澤田京子，横山美菜，室津史子，高垣麻衣 本人担当部分：

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				「第7章 痛みの心理と情動」 P48－P57 を単著 痛みに深く関わる「心理」として不安・抑うつ，「情動」として社会的痛み，痛みの恐怖について解説。非侵襲的脳機能計測の発達により，目に見えない心を情動として観察し，その働きを推察することが少しずつ可能になってきている。情動から心理への因果関係や，それらのベースとなる共通の神経機構を理解することは，痛みの心理的・情動的側面を分析するうえでの一助となる。
2) 高齢者のための疼痛ケア	共著	平成 30 年 3 月	三恵社	科学研究費助成事業「高齢者入居施設における疼痛管理教育プログラムの開発」の一環として、高齢者入居施設に勤務する看護職対象の疼痛管理教育テキストを作成した。「高齢者入居施設に勤務する看護職が受講したいと考えている教育内容」のアンケートに基づき、内容を構成した。 B5 版・全 33 頁 編者：田中和奈 共著者：田中和奈，百瀬由美子，溝尾朗，<u>前田吉樹</u>，高橋晶 本人担当部分： 「第1章 高齢者の痛みとその特徴」 P2-P10 を共著 痛みの定義や種類の説明、さらには高齢者の抱える疼痛の問題点について概説した。 共著者：田中和奈，百瀬由美子，高橋晶，<u>前田吉樹</u> 「第3章 理学療法的観点からの疼痛管理」 P25-27 を単著 理学療法士の立場から、高齢者の痛みのマネジメントに重要な点と、効果的な運動療法の実施方法を中心に解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1) 立位リーチ動作反復による学習の汎化について：三次元動作解析器を用いた検討 (修士論文) (査読付)	共著	平成 21 年 1 月	神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程	臨床上頻繁に用いられるファンクショナルリーチテストにおいて、リーチ動作練習の反復によって動作の汎化がおこるかどうかを三次元動作解析装置を用いて検証した。中枢におけるリーチ動作の運動プログラムは、手の前後方向の速度がピークに達したときに終了するとされているが、リーチ動作練習は手のピーク速度がより早期に出現するようにファンクショナルリーチ動作に対して汎化した。 (A4 12 ページ) 共著者：◎ <u>前田吉樹</u> ，安藤啓司 担当部分：研究計画、データの計測・解析、論文の執筆
2) 低侵襲腰椎後方椎体間固定術後 1 年の能力障害を予測する術前および術後早期の心理的要因の検討 (査読付)	共著	平成 29 年 9 月	日本運動器疼痛学会誌 No. 9 (2), 2017 pp308-313	腰椎後方椎体間固定術は脊柱管狭窄症や腰椎すべり症に対して有効である一方、改善の乏しい症例も報告されている。そこで術前・術後の破局的思考・運動恐怖とが術後の能力障害に与える影響を検証した。結果、術前ではなく術後早期の運動恐怖が術後の長期的な能力障害に影響を及ぼすことが明らかとなった。 共著者：◎田村典子，西上智彦， <u>前田吉樹</u> ，加賀威浩，和田治，田所浩 担当部分：論文の執筆、データの解析
3) 局所皮下麻酔と圧刺激による筋の痛みの心理物理学 (査読付)	共著	平成 30 年 2 月	医療福祉情報行動科学 研究 vol. 5, 2018 pp19-25	麻酔薬の皮下注により皮膚の痛みを除去し、筋のみに持続的な機械的痛み刺激を与える方法を用いて、被験者の主観的な痛みの強さと刺激圧と関係性を回帰モデルにあてはめた。健常成人 13 名を対象とし全員に「麻酔なし」と「麻酔あり」条件で、デジタル圧痛計による圧刺激を与え、痛みの強さを NRS で報告させた。結果、麻酔の有無にかかわらず線形

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				モデルよりも非線形モデルの方が決定係数が高くなった。先行研究では熱刺激による皮膚の痛みの回帰モデルがべき関数で表されることが報告されているが、圧刺激による筋の痛みも同様に回帰できることを示している。 共著者：◎<u>前田吉樹</u>，大城宜哲，小山哲男，植松弘進，柴田政彦 担当部分：研究計画、データの計測・解析、論文執筆
4) Verbal instruction can induce extinction of fear of movement-related pain (教示は運動への痛み関連恐怖の消去を促す) (査読付) (博士論文)	共著	平成 30 年 4 月	The Journal of Pain, Epub ahead of print	「動かしたら痛い」という患者の恐怖（運動恐怖）が形成される過程と、その治療に繋がる心理過程を実験的に検証した基礎研究。運動時に痛み刺激が提示される過程を繰り返すことによって運動恐怖を形成し（恐怖条件付け）、その後の条件付けの消去の手続き（痛み刺激が伴わない運動の反復）によって運動恐怖が消失するかを検証した。さらに患者を安心させる声かけのように「動かしても痛み刺激がこない」という教示が条件付けの消去に影響するかを併せて検証した。結果、教示を与えて消去の手続きをおこなった群は恐怖を反映した皮膚電気活動が即座に消失し、教示を与えなかった群は皮膚電気活動の有意な減少がみられなかった。運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までと、自身の研究テーマである「運動と痛みの恐怖条件付け」の集大成として発表した。 (共同発表者：Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yuji Fujino, Masahiko Shibata) 担当部分：研究計画、データ測定・解析、論文の執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(その他) 「総説」 1) 痛みの恐怖条件付け (筆頭著者)	共著	平成 26 年 11 月	Monthly Book Medical Rehabilitation No. 177 (11 月号) pp25～30	痛みの慢性化には、「動かすと痛い」という一種の恐怖条件付けが重要な基礎として機能する。この考え方を支持する臨床研究、基礎研究を紹介しながら、恐怖を中心とした痛みの認知面の変化に基づき、痛みの慢性化の病態とその治療の考え方を概説している。 共著者：前田吉樹，柴田政彦 担当部分：全体の構成、本文執筆
2) 慢性痛の問題点と今後の取り組み	共著	平成 26 年 12 月	理学療法学 No. 41(8) pp699～705	疫学、認知行動療法、条件付け、運動療法、脳機能画像研究、バイオフィードバックという幅広いテーマから、リハビリテーションにおける慢性痛の位置づけを詳細に解説した。 共著者：柴田政彦，山田恵子，前田吉樹，安達友紀，西上智彦，寒重之 担当部分：全体の構成、本文執筆
「学会発表」 国際学会 1) Fear Conditioning and Extinction Associating Voluntary Movement with Painful Stimulus: Experimental Verification of Fear Avoidance Model Using Skin Potential Response (運動と痛みの恐怖条件付け：恐怖回避モデルの実験的検証)	—	平成 26 年 10 月	15th World Congress of International Assicuation for the Study of Pain, Buenos Aires. 2014. 10. 6-11	運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までを検証した。 共同発表者：◎Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yoshitetsu Oshiro, Satoru Miyauchi, Aya Nakae, Ben Seymour, Hideki Kashioka, Masahiko Shibata 担当部分：研究計画、研究総括 ポスター発表

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2) Psychological characteristics related to the acquisition and extinction of pain-related fear (痛みに関連する恐怖の獲得と消去に影響する心理的特性の検証)	—	平成 28 年 9 月	16th World Congress of International Association for the Study of Pain, Yokohama, 2016. 9. 26-30	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期における SPR 振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 共同発表者：◎Takatoshi Masaki, <u>Yoshiki Maeda</u> , Shigeyuki Kan, Masahiko Shibata 担当部分：研究計画、データ測定 ポスター発表
国内学会 1) 道順イメージングにおける脳賦活部位 fMRI による検討	—	平成 22 年 3 月	第 11 回 兵庫県リハビリテーションケア研究大会 (兵庫県)	右頭頂葉の障害は地誌見当識障害の責任病巣とされているが、実際に道順をイメージしたときに活動するのかは明らかでない。本研究では、健常成人によく知っている場所から別の場所への道順をイメージさせ、その際の脳活動を fMRI を用いて調べた。結果、道順イメージ中は右の頭頂下小葉や頭頂-後頭連合野の活動を示し、道順の想起に右頭頂葉が関与するという仮説を支持した。 共同発表者：◎間嶋亜由美, 三角幸子, 馬瀬麗子, 徳沢勝也, <u>前田吉樹</u> , 柳田真希, 大城宜哲 担当部分：データ収集, データ解析 (口述発表)
2) 動的な痛みと静的な痛みの脳機能画像: 二次体性感覚野の機能分布について	—	平成 22 年 7 月	日本ペインクリニック学会 第 44 回大会 (京都府)	動く痛みと動かない痛みの脳内処理機構を fMRI を用いて実験的に検証した。トゲのついたローラーで足を刺激したときと、トゲのついたプレートで刺激したときの脳活動を比較すると、同じ痛みの強度でも前者の方が広範な活動を示した。特に、二次体性感覚野はローラー刺激のみ下内側部の活動を認め、当部位の機能分布を反映していると考えられた。 共同発表者：◎ <u>前田吉樹</u> , 岩倉健夫, 大城宜哲, 柴田政彦

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
				担当部分：データ解析、抄録執筆 (ポスター発表)
3) 左右逆転めがねと fMRI で幻視を視る	—	平成 22 年 7 月	日本ペインクリニック学会 第 44 回大会 (京都府)	左右の世界が逆転して見える「逆転めが ね」を幻視痛患者にかけ、幻視を動かさ せたときの脳活動を検証した。幻視を動 かしたときに対応する運動野に信号変 化がみられ、同側の頭頂野にも強い信号 がみられた。後に後根進入部遮断術によ って幻視痛が改善したあとは、頭頂野の 信号変化は消失していた。頭頂葉が幻視 痛の機序に何らかの役割をもつ可能性 が示唆された。 共同発表者：◎大城宜哲、宮内哲、 <u>前田 吉樹</u> 、柴田政彦 担当部分：資料収集 (ポスター発表)
4) 局所皮下麻酔と持続的 な圧刺激によって誘発さ れる筋の痛みの心理物理 学	—	平成 23 年 7 月	第 33 回日本疼痛学会 (愛媛県)	機械的な圧刺激で生じる筋の痛みは、皮 膚の痛みとの区別が困難である。そこで 麻酔薬の皮下注入によって筋だけに圧 刺激を与える方法を用いて、与える圧と 筋の痛みの強さの関係を心理物理学的 手法でモデル化した。結果、皮膚の麻酔 の有無に関わらず、圧と痛みの強さの関 係は線形回帰できることがわかった。 共同発表者：◎ <u>前田吉樹</u> 、植松弘進、大 城宜哲、柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、 抄録執筆 (口述発表)
5) 慢性期失語症患者の訓 練経過 当院外来失語症患 者を対象に	—	平成 24 年 3 月	第 13 回兵庫県リハビ テーションケア研究 大会 (兵庫県)	発症から半年以上経過した脳卒中後の 失語症患者を対象に、外来言語療法の訓 練効果について検討した。SLTA の「聞く」 項目と「話す」項目に分けて解析した平 均 1 年程度の通院の結果、いずれの項目 も有意に増加し、慢性期における言語訓 練の必要性を支持する結果となった。 共同発表者：◎溝口仁、金山ひとみ、 <u>前 田吉樹</u> 担当部分：データ解析、抄録執筆 (口述発表)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
6) 当院回復期病棟における摂食嚥下障害患者の動向	—	平成 24 年 8 月	第 17・18 回日本摂食・ 嚥下 リハビリテーション 学会学術大会 (北海道)	摂食嚥下機能が自宅復帰率に与える影響を検証した。FIM と食形態を独立変数とした名義ロジスティック回帰の結果、食形態は有意な変数として採択されなかった。これは摂食嚥下機能が低いまま自宅退院している患者が少なからず存在することを示唆しており、今後は外来や訪問におけるフォローアップを積極的におこなう必要がある。 共同発表者：◎前田佳恵，徳沢勝也， <u>前田吉樹</u> 担当部分：データ解析，抄録執筆 (ポスター発表)
7) Conditioning of fear to voluntary movement paired with painful heat stimulus: Experimental verification of fear avoidance model using skin potential response 運動と痛みの恐怖条件づけ：恐怖回避モデルの実験的検証	—	平成 24 年 11 月	第 42 回日本臨床神経 生理学会学術大会 (東京都)	運動と痛みの恐怖が結びつく「条件付け」を心理実験の手続きを用いて再現した。手関節の運動をおこなうと痛み刺激が提示されるシステムを構築し、運動に結びつけられた恐怖を皮膚電気活動によって評価した。結果、痛み刺激を伴わない運動でも、痛み刺激がある場合と同程度の皮膚電気活動を認め、運動に痛みの恐怖が条件付けられることを示した。 共同発表者：◎ <u>前田吉樹</u> ，寒重之，大城宜哲，宮内哲，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 (ポスター発表)
8) 皮膚電位反応を用いた運動と痛みの恐怖条件付けとその消去の検証	—	平成 25 年 12 月	第 6 回日本運動器疼痛 学会 (兵庫県)	恐怖条件付けによって結びついた運動と痛みの恐怖を、条件付けの消去によって軽減できるかを実験的に検証した。消去の手続きによって運動に痛み刺激が伴わないことを学習すると、恐怖を反映して出現する皮膚電気活動が減少することを示した。しかし全体としては最後まで皮膚電気活動が出現し続ける傾向にあり、運動に結びついた痛みの恐怖が容易には取り去ることができないことを示唆した。 共同発表者：◎ <u>前田吉樹</u> ，寒重之，大城宜哲，宮内哲，圓尾知之，齋藤洋一，

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 (口述発表)
9) 教示は運動に伴う痛みの恐怖条件付けの消去に強く影響する	—	平成 26 年 6 月	第 36 回日本疼痛学会 (大阪府)	患者を安心させる教示の有効性が条件付けの消去に基づくものかを検証するために、「運動に結びついた痛みの恐怖」の消去に「動かしても刺激がこない」という教示が影響するかを実験的に検証した。結果、教示と経験による消去をおこなった群は恐怖を反映した皮膚電気活動が即座に消失し、経験だけで消去をおこなった群は最後まで皮膚電気活動の有意な減少がみられなかった。 共同発表者：◎前田吉樹，寒重之，大城宜哲，宮内哲，中江文，Ben Seymour，柏岡秀紀，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 (口述発表)
10) 運動への恐怖条件付けに関連する心理尺度	—	平成 27 年 11 月	第 8 回 日本運動器疼痛学会 (愛知県)	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期における SPR 振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 共同発表者：◎柁木隆寿，前田吉樹，寒重之，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定 (口述発表)
11) 肩甲下筋テスト時の肩関節周囲筋の筋活動の検討	—	平成 28 年 11 月	第 56 回 近畿理学療法学会 (和歌山県)	肩甲下筋のテストである Lift off test として Belly press test と Belly off sign が挙げられる。これら二つのテストの肩関節周囲筋の筋活動の違いを筋電図を用いて明らかにすることを目的とした。結果、BP は B0 に比べ大胸筋、大円筋の働きが抑えられ肩甲下筋、三角筋の働きが大きくなることがわかった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				共同発表者：◎吉村拓実、春名匡史、立花 孝、土山耕南、西川 仁史、 <u>前田吉樹</u> 担当部分：研究計画、準備 (口述発表)
依頼原稿 1) 「プラセボ効果とはどのようなものですか？」	—	平成 26 年 10 月	Locomotive Pain Frontier vol. 3 (2) pp42～43	プラセボ効果は、医学研究、とりわけ試薬の研究において本来の治療効果とは異なる「取り去るべき」ものとして捉えられてきた。しかしながら、近年痛みの臨床においてはプラセボ効果も治療の一つとして取り入れようという流れがある。それらプラセボ効果に関する認識の変遷を、具体的な研究報告とともに解説した。 (2 頁) (分担執筆者： <u>前田吉樹</u> ，柴田政彦)
研究助成金 1) 日本損害保険協会 交通事故医療特定課題研究助成		平成 23 年～平成 25 年	日本損害保険協会	研究題名：③新しい運動療法の開発：脳機能画像を応用し、外傷後の「痛みの慢性化」に対して有効な運動療法を開発する 【平成 23 年度～25 年度】 研究助成金：5,000 千円 共同研究者：柴田政彦，寒重行， <u>前田吉樹</u> ，大城宜哲，中江文
2) 奈良学園大学保健医療学部共同研究費		平成 29 年度	奈良学園大学	研究題名：痛みと運動知覚の恐怖条件付け研究 【平成 29 年度採択課題】 研究助成金：500 千円 共同研究者： <u>前田吉樹</u> ，辻下守弘，守本とも子

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 井上 昌子

研 究 分 野	研究内容のキーワード	
在宅看護学	小児 重症心身障害児 レスパイト	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 老年看護学援助論授業補助	2018 年 4 月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部の手として、老年看護学援助論の授業・演習のサポートを行った。
2) 統合看護学臨地実習指導	2018 年 5 月	奈良学園大学保健医療学部の手として、実習施設との調整、実習前オリエンテーションを行い、実習では学生自身の目標が達成できるようチーム医療の一員として看護師が果たす役割や、複数の受け持ちの中での優先順位を考え行動することを指導した。単位認定者の教授とともに実習後の評価を行った。
3) 「基礎・老年・成人・在宅看護実習」において臨地実習指導を担当した。	2018 年 9 月～ 2019 年 3 月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習に必要な日常生活援助技術の練習を行い、学生が実習に取り組めるようにした。実習では、情報収集、アセスメント、看護過程の展開を通して患者に何が必要な看護かを考えるよう指導した。また学生に自分の看護を振り返り、学びを深められるよう支援できた。単位認定者の教授とともに、実習後の評価を行った。
2 作成した教科書、教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記		
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 看護師免許	2015 年 4 月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記		
4 その他		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 2019 年出題傾向がみえる必修問題	共著	2018 年 12 月	株式会社ピラールプレス B5 判 全 189 項	2019 年の看護師国家試験対策問題集として、近年出題された問題と要点がまとめられている。 共著者：守本とも子（監修）、松浦純平（編著）、井上昌子、斎藤英夫、溝口みちる、明神一浩（著） 本人担当箇所は、要点編「健康に影響する要因」「人間のライフサイクル各期の特徴と生活」「主な看護活動の場と看護の機能」「人体の構造と機能」「疾患と徴候」「診療に伴う看護技術」の一部を担当した。
(学術論文) (その他)				

教 育 研 究 業 績 書

平成31年3月31日

氏名 野口 寿美子

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護基礎教育		臨地実習教育 メタ認知 リフレクション	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項			
事項	年月日	概 要	
1 教育方法の実践例			
(1) 成人看護学	平成24年4月 ～平成26年3月	白鳳女子短期大学成人看護学において「感染症」「脳神経」「免疫疾患・アレルギー」「看護過程」の単元を担当し、病態の理解と症状とその看護援助を理解できるよう画像資料や、授業資料を作成し授業を行った。成人看護学看護過程演習においては、20人の小グループにおける演習を担当し、共同学習によってグループ間での相互教授によって理解を図るように行った。	
(2) 国家試験対策	平成24年4月 ～平成26年3月	白鳳女子短期大学において、7名の学生を担当し、毎月面談を行い学習進度を確認、問題を作成し苦手科目対策を行い国家試験受験に向けてサポートし合格への支援を行った。	
(3) 基礎看護学技術演習Ⅰ・Ⅱ	平成28年4月 ～平成30年3月	奈良学園大学基礎看護学において基礎看護学技術演習Ⅰ・Ⅱの補助を行った。学内演習では、座学で学んだことを理解できているかフィードバックし、学生自身が根拠を持って演習できるよう指導した。	
(4) 在宅看護学援助論	平成30年4月 ～平成30年8月	奈良学園大学在宅看護学援助論において、在宅における清潔援助として家庭用品で簡易洗髪器を作成し洗髪する演習を企画し担当した。学生が家庭にある物品を用いて創意工夫するよう促し、演習後のグループワークでの成果を発表する機会を設け、学びの共有を図った。次に、エンゼルケア演習において、亡くなった人のできなくなったセルフケアを代理として、家族のそれぞれの立場を演習を通して理解し考察する機会とした。実施後のグループワークの場面でリフレクションし、共同学習場面を通して学びを深められるように意図した。第15回目にゲストスピーカーとして在宅療養者を講師として招聘し、領域実習開始前の学生が在宅看護のイメージをより具体的に理解できるよう場の設定を行った。	
(5) 在宅看護学概論	平成30年9月 ～平成31年3月	在宅看護学概論では、第8回在宅看護を支える医療福祉制度②医療保険制度の講義を教授の指導の下で担当し、公的医療保険制度の変遷から現在の在りようを理解するため、視聴覚教材を使用し理解を深めるよう促した。第12回在宅における安全管理についても教授の指導の下に担当した。	
2 作成した教科書，教材 急性期看護学実習 実習前ワークブック	平成25年5月	白鳳女子短期大学において、成人看護学実習における実習前ワークブックを作成し導入した。特に周手術期の生体反応を捉えた実習前学習の資料として、周手術期の理解を深めて実習展開の早い急性期実習に活用した。	
3 教育上の能力に関する大学等の評価	平成25年12月	白鳳女子短期大学において、授業アンケート調査における年間優秀教員評価として教務委員会から発表された。	

4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 臨地実習指導	平成23年12月 ～平成24年1月	白鳳女子短期大学において、基礎看護学実習Ⅰ、老年看護学実習、成人看護学実習Ⅱにおいて実習指導を行った。基礎看護学実習は学生にとって初めての実習であるため、病院および療養環境、患者との適切なコミュニケーション、日常生活援助が行えるように指導した。老年看護学実習及び成人看護学実習Ⅱでは、再履修学生5名の実習を担当し、実習展開が円滑に運べるよう学生及び実習環境の調整を行い、病棟環境・患者背景・疾病理解・生活歴の理解を促し、老年期及び成人期の理解から情報収集・計画立案・実践・評価の看護過程を辿りながら看護実践できるように指導し、5名とも最後まで実習を完遂した。
	平成24年5月 ～平成25年12月	白鳳女子短期大学にて成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、精神看護学実習の指導を行った。慢性期実習では、慢性期特有の生活習慣や生活歴から個別性のある看護展開及び看護実践を指導。急性期実習では全身麻酔下の生体反応を捉えた看護実践及び退院を見据えた生活指導につながるよう学生カンファレンスでの共同学習の機会を意図的に設けた。精神看護学実習においては、病棟環境及び患者、患者を取り巻く社会、家族、看護実践の理解から患者との相互交流を深め、プロセスレコードを用いて自己の振り返りと自己の特性理解とつながるよう指導した。小児看護学実習では、小児の発達段階と成長発達を捉えて母子関係、遊びを通した看護実践を指導した。
	平成27年5月 ～12月	白鳳女子短期大学において、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、小児看護学実習、精神看護学実習指導を行った。
	平成28年1月 ～3月	宝塚大学において、老年看護学実習を担当した。回復期リハビリテーション病棟にて、脳神経疾患の生活リハビリテーション看護として高次脳機能障害への看護実践や日常生活支援を指導した。
	平成28年7月 ～平成30年2月	奈良学園大学において、早期体験演習、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、在宅看護学実習、基礎実習Ⅰ・Ⅱを担当した。入学間もない学生たちが早期に医療現場の実際を見学する機会から実際の看護を見学を通して学ぶ中で、看護学生として望ましい学ぶ姿勢、立ち振る舞いなど接遇面に始まり、具体的な看護師像のイメージを捉えられるよう働きかけを行った。成人看護学実習では、急性期・慢性期看護の看護過程展開の指導を行った。在宅看護実習では、2か所の訪問看護ステーションへの巡回指導を行った。
	平成30年9月 ～平成31年3月	基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、在宅看護学実習、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱの実習指導を行った。
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 看護師免許 介護支援専門員	昭和59年6月 平成11年5月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 病院から「家に帰りたい」という人のために	共著	平成20年11月	財団法人在宅医療助成勇美記念財団	手を結ぼうプロジェクトとして在宅看護支援のための小冊子を作成。(全23頁、湯沢八江、甲州優、中村祐子、町屋千鶴子、若林和枝、大澤紀子、佐藤正子、野口寿美子、村松静子)
(学術論文) 1. 看護系大学の臨地実習カリキュラムのあり方の検討ー認知心理学の援用からの一考察ー	単著	平成30年3月	星槎大学大学院教育学研究科	本研究は、見学実習にとどまってしまう臨地実習の現状とその教育内容を検討する重要性から、日本の看護学教育の変遷をまとめ、次に、実習教育の現状を整理し、米国のコンピテンシーに基づく看護教育を比較検討した。次に、同じ医学である医学教育についての先行研究からも、これまでの看護学研究の上に、科学的知見に基づいた心理学や教育学の学習理論に基づいた教育の重要性が明らかとなった。
2. 看護学教育におけるコンピテンシー獲得に向けた教育方略検討の試みーメタ認知とリフレクシオンからの考察ー (総説)	共著	平成31年3月	医療福祉情報行動科学研究Vol. 6, March, 2019	看護学教育におけるコンピテンシー成果修得のための教育方略をメタ認知とリフレクシオンに焦点を当て文献研究を行い、心理学や教育学で得られた有用な知見に基づいた教育内容を取り入れることの有用性が示唆された。 (全頁数10頁、野口寿美子、伊藤一美)
3. 「老人性皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケア効果の検証 (原著)	共著	平成31年3月	医療福祉情報行動科学研究Vol. 6, March, 2019	老人性皮膚掻痒症のスキンケアに皮脂量の増加に効果があるシュガー・スクラブを用いたケア群と清拭による統制群の前後の皮膚の水分と皮脂の比較から効果を検証し有用性が示唆された。(全頁数8頁、高橋寿奈、斉藤英夫、山口求、吉村雅代、佐藤郁代、野口寿美子、井上昌子、守本とも子)
4. 高齢者の「老人性皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケア効果の検証	共著	平成31年3月	アビサル・ジャパン委託研究報告書	老人ホーム入所者を対象に皮脂量・水分量不足による老人性皮膚掻痒症に対してシュガー・スクラブの効果を検証した。清拭・入浴後の皮膚バリア機能(油分量・水分量)とストレス指標となる唾液のクロモグラニンAの検体を採取してデータを比較分析した結果、シュガー・スクラブ使用群は皮脂量・水分量に有意な差が見られた。(全頁数10頁、山口求、守本とも子、吉村雅代、佐藤郁代、斉藤英夫、高橋寿奈、井上昌子、野口寿美子)
(学会発表) 1. 大学における看護基礎教育課程の日米の比較	単独	平成30年9月	第54回日本教育方法学会(和歌山県立大学)	2017年最優秀大学看護学校ランキングで全米1位となった米国のデューク大学看護学部とオレゴン州看護教育コンソーシアムの共通カリキュラムと日本の看護学教育の比較検討を行った。看護学教育におけるカリキュラムは、講義・実習・演習を同時に進行させ、学生が複合的に学ぶことができるよう学習活動を促進することが重要であること、認知心理学や教育学などの理論を共有し、知識の理解よりもどこまでスキルが高くなったのかという教育方法や評価法の開発によって、自立的な主体性のある学習者の育成に向かうことが示唆された。
(その他)				

教 育 研 究 業 績 書

平成 31 年 3 月 31 日

氏名 溝口 みちる

研 究 分 野		研究内容のキーワード	
看護学		臨床看護学	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事項	年月日	概	要
1 教育方法の実践例 1) 基礎看護学の講義・演習の工夫と技術試験の試み (社会医療法人 畿内会 岡波看護専門学校1年生)	平成 24 年 4 月～ 平成 29 年 1 月	「生活を支援する技術Ⅱ」（環境）、生活を支援する技術Ⅳ」（食事・排泄）を担当した。DVD も活用し、講義後にはすぐに練習できるよう、授業はすべて白衣を着用し、実習室で行った。また、グループワークでは、グループで協力して調べること、共有する利用し目的で、図書室も利用した。そうすることで、よりグループ内の協調性が増し、演習でも自ら考えてグループメンバーが全て体験できるよう時間配分や意見交換も行えた。	
2) 能動的な授業を考えたジグソー学習の導入 (社会医療法人 畿内会 岡波看護専門学校2年生)	平成 27 年 4 月～ 平成 29 年 1 月	座学やグループワークのみにとどまらず、学生がいかに効果的・能動的に授業を行うことができるのかを考え、「診療行為を支援する技術Ⅰ」の注射の授業で実施した。「注射」は学生にとって一番興味を示す反面、医療事故にも繋がるものと考えたためである。「皮下注射」「皮内注射」「筋肉注射」「静脈内注射」のどれか一つを担当し、他のメンバーに伝える。事前課題を提示し、授業当日に役割別の専門家チームに参加、グループ内で統一し他者に教えることができるまで学び合う。その後、学生は他のグループで教員役となり実施する。教員はそれぞれの専門家チームのアドバイザー的存在として指導する。ジグソー学習前には、教員による講義と実践を行い、根拠、留意点、ポイントを伝えている。30 項目の授業アンケートを作成し、「責任感を感じた」「自分から進んで理解しないとこの授業は難しいと思った」「友達に伝えようという気持ちを持った」など全項目において評価が高く、効果的であったと考える。	
3) 統合看護学実習を意識した統合看護技術の実施 (社会医療法人 畿内会 岡波看護専門学校3年生)	平成 27 年 3 月～ 平成 29 年 1 月	ケーススタディ・シナリオを用いた演習を行った。6 名の受け持ち患者を想定し、グループで患者の優先順位、行動計画の立案をさせた。その後、モデル人形を活用し、実際に状況設定し、観察項目や看護技術などの演習を行った。隣接する病院看護師および当該学生 1 年生の協力のもと、統合看護技術試験を行った。時間内に優先順位を考え、ナースコールの対応やリーダー・メンバーの役割等を確認した。またこの授業の中には、看護の統合知識確認として、統合看護技術、医療安全の確認試験を行った。学生は実際にはできなかった場面が多く、看護師国家試験終了後より卒業まで、技術練習を自主的に行うようになった。	

2 作成した教科書，教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 成人看護学実習Ⅰおよび成人看護学実習Ⅱの実習指導 (奈良学園大学保健医療学部看護学科) 2) 実習調整者 (社会医療法人 畿内会 岡波看護専門学校)	平成 30 年 9 月～現在 平成 28 年 4 月～平成 29 年 1 月	3 年生を対象とした成人看護学実習Ⅰおよび成人看護学実習Ⅱの臨地実習指導を担当している。 臨地実習の調整、実習調整会議にて司会進行等を行った。
5 その他 1) 学生の目標達成に向けたポートフォリオの作成	平成 25 年 4 月～平成 29 年 1 月	学生が自らテーマや目標を決め、学び続ける学習法を取り入れることを考え、ポートフォリオを作成した。入学時に説明し、ビジョンとゴールを記載させた。中間の面接時に、ゴールに向かうためにはどうしていくのかを指導した。また 2～3 月に全体での発表会を設け、学生全員に発表させた。学生自身がどのように成長してきたのか、また自信をもって成長できたと主張できるようになった。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格，免許 1) 看護師免許 2) 厚生労働省認定看護専任教員養成講習会終了 3) 看護学（修士）	平成 12 年 4 月 平成 24 年 1 月 平成 30 年 4 月～現在	第 1075353 厚生労働省認定三重県専任教員養成講習会 奈良学園大学 大学院
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 日本看護技術学会第 18 回学術集会 企画委員	平成 30 年 4 月～現在	「過去・現在から未来へ発信する看護のイノベーション」をテーマに、2019 年 9 月 7・8 日の学術集会の開催に向けて、役割を遂行する。
4 その他 1) 入試対策委員 (社会医療法人 畿内会 岡波看護専門学校) 2) 広報活動 (社会医療法人 畿内会 岡波看護専門学校) 3) 学校における防災・災害に関する見直しを検討 (社会医療法人 畿内会 岡波看護専門学校)	平成 27 年 4 月～平成 29 年 1 月 平成 25 年 4 月～平成 29 年 1 月 平成 25 年 4 月～平成 29 年 1 月	入学試験に関する筆記試験監督および面接試験監督を行った。判定会議に向けて、入試状況をまとめた。 三重県および奈良県内の高等学校を訪問し、学生募集の案内を行った。また、学校ホームページのニュース更新や広報業者との打ち合わせに参加するなど、広報活動を行った。 「災害発生時に適切な判断・行動がとれる教員の養成－防災マニュアルの再構築－」として、アクションカードを作成した。実際に、防災訓練に活用し、「責任者（指示命令）」「第一発見者（初期消火）」「応援者（避難・誘導）」を行った。結果、焦らずスムーズに学生を誘導でき、自らの役割も担うことができた。また、隣接する病院内での業務改善発表会で発表した。

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 2019 年出題傾向がみえる 必修問題	共著	平成 30 年 12 月	ピラールプレス	看護師国家試験出題基準の中項目に基づき づき、要点編と過去問題編からなる 2 部構 構成となっている。 担当部分：健康の定義と理解、看護におけ る倫理（看護師等の役割）、人間の特性、 人間のライフサイクル各期の特徴と生活（ 成人期）、人体の構造と機能（人間の死）、 疾患と特徴（吐血、咯血、チアノーゼ、呼 吸困難、胸痛、不整脈、腹痛・腹部膨満、 悪心・嘔吐、下痢、便秘、下血、乏尿、無 尿、頻尿、多尿）、薬物の作用とその管理 （薬物の管理）、看護における基本技術（ フィジカルアセスメント）、患者の安全・ 安楽を守る看護技術、診療に伴う看護技術 （救急救命処置） 著者：守本とも子，松浦純平，井上昌子， 齋藤英夫， <u>溝口みちる</u> ，明神一浩
(学術論文) (その他) <学会発表> 1) テキストマイニングを用 いた災害看護における教育 に関する研究の動向と課題	—	平成 31 年 3 月	第 32 回日本看護 研究学会 近畿・ 北陸地方会	国内における災害看護の教育に関する研究 の動向と課題を明らかにするために、KH Coder を用いて論文のタイトルを分析した。 クラスター分析、共起関係ネットワーク分 類の結果、臨床や教育現場で多角的な分類 より、盛んに研究が取り組まれている現状 が明らかとなった。 共著者： <u>溝口みちる</u> ，松浦純平
2) テキストマイニングを用 いた精神看護学実習におけ る学生の学びの分析	—	平成 31 年 3 月	第 32 回日本看護 研究学会 近畿・ 北陸地方会	看護学生が精神障害者に実際にに関わり、対 人関係のプロセスを通して、どのような「学 び」があったのか、その特徴を明らかにす ることで今後のより良い実習の提供や教育 内容の示唆を得ることを目的とした。「考 える」「感じる」「関わる」といった情意 ・精神・運動領域に関する記述が多くあり、 学生は受け持ち患者の関わりを通して精神 障害者の「生きにくさ」を理解していた。 共著者：山崎陸世， <u>溝口みちる</u> ，井上葉子

教 育 研 究 業 績 書

平成31年3月31日

氏名 山崎 陸世

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学		精神看護学 ストレス レジリエンス 看護学生 臨地実習	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事項	年月日	概 要	
1 教育方法の実践例 2)看護研究の指導	平成21年4月～ 平成30年3月	田北看護専門学校3年生が実習で担当した患者についてのケーススタディの指導を担当している。 対象に実施した看護を振り返り、論文の一連の過程を通して、論理的思考を養うとともに、自分は看護するうえで何を大切にしているのか、看護とは何かを表現できている。	
3)基礎看護学「筋肉内注射」「点滴(静脈内注射「直腸内与薬」の看護技術演習にて教員作成のモデルの活用	平成21年4月～ 平成25年12月、 平成29年9月～ 平成30年3月	田北看護専門学校の専門分野Ⅰの科目「基礎看護学」の単元の「与薬」の技術演習で、静脈シュミレーターを使用し手技を学ばせるとともに、教員が作成したモデルを装着し、患者役も体験させた。演習後のレポートに「針を刺す恐怖を感じたが、声かけで安心することを感じた」という感想があり、患者の心理状況が理解できていると考えた。	
4)基礎看護学「筋肉内注射」の看護技術演習にて協同学習（ジグソー学習法）の導入	平成27年9月～ 平成30年3月	田北看護専門学校にて技術演習にデモストは実施せず、協同学習法（ジグソー学習法）を導入している。「クラークの点」「ホッホシュテッターの部位」など選定方法に対して、教師役を担い自分が担当した学習課題をお互いに教え合う。正しい知識を伝授できるように、ひとり一人が責任をもって学び、教え合うことによって根拠がよく理解できたという感想が聞けた。	
5)簡単な事例を通して考えさせる基礎看護技術演習	平成28年4月～ 平成30年3月	田北看護専門学校の専門分野Ⅰの科目「基礎看護学」の単元の「活動と休息」の体位変換の演習で事例を設定し、その患者に合った安全で安楽な体位変換や移動を考えさせた。患者に触れることは単に作業的な援助を行うにとどまらず、安心やこちよさなど精神的な援助を行うことにつながった。	
6)精神看護学の講義に動画（視聴覚教材）の使用	平成26年4月～ 平成30年3月	田北看護専門学校の専門分野Ⅱ「精神看護学概論」の講義で学生より「精神看護ってよくわからない」「統合失調症の幻覚・妄想のイメージがわからない」などの意見があった。講義で精神看護のイメージをつかみ、そして実習でよりよい学びにつながるように映画や実際に精神障害者の出演しているテレビなどを授業のテーマに応じてこちらの学ぶ目的・意図を明確に説明し、視聴させた。視聴したあとグループワークをさせると、活発に意見交換ができ「実習に行ったらこんな看護がしたい」と具体的な感想を述べることでできていた。	
7)国家試験担当：他2名の教員とともに国家試験対策を実施している	平成27年4月～ 平成30年3月	田北看護専門学校にて他2名とともに国家試験担当をしている。3年間を通した対策を実施している。各学年の進度に合わせて3年間にわたって模擬試験のスケジュールを考え実施し、成績データの分析を行い、個別に継続した学習支援を行っている。成績だけでなく精神面や学習環境面にも配慮して学生からは「学習方法が分かった」「成績が上がった」「不安が軽減した」などの感想が聞けた。	
8)基礎看護技術演習：授業および演習の補助	平成30年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて基礎看護学領域の授業・演習の補助として入っている。	

事項	年月日	概 要
2 作成した教科書, 教材 1) 基礎看護技術モデル作成	平成21年4月～ 平成25年12月、 平成29年9月～ 平成30年3月	田北看護専門学校で専門分野Ⅰ基礎看護学「与薬」(1年次配当、1単位、40人クラス)において直腸モデルや筋肉内注射や静脈内注射のモデルを考案した。学生からは購入したデモ器は数に限りがあるが、作成したモデルも活用することでより多く技術を練習することができたという感想が聞かれた。技術チェックは全員合格している。
2) 「精神看護学実習要項」	平成26年4月～ 平成30年3月	田北看護専門学校で専門分野Ⅱ「精神看護学実習」(3年次配当)において、実習目的、実習目標や具体的な学習内容、看護過程の記録方法、実習の心得などのなどの要項を作成した。また実習の評価表には「ループリック評価」を取り入れている。
3) 国家試験担当	平成27年4月～ 平成30年3月	田北看護専門学校にて他2名とともに国家試験担当をしている。平成28年度は国家試験の傾向と対策の資料を作成して学生に配布し指導をした。 (平成29年度は他1名の教員が作成)
3 教育上の能力に関する大学等の評価 特記事項なし		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 5) 基礎看護学の担当	平成21年4月～ 平成30年3月	田北看護専門学校で専門分野Ⅰの科目「基礎看護学」の単元「活動と休息」「清潔」「食事と排泄」「与薬」「検査」(1年次配当 40人)など3単位90時間もしくは2単位45時間を担当した。
6) 基礎看護学「技術試験」の担当	平成24年4月～ 平成25年9月	田北看護専門学校で専門分野Ⅰの科目「基礎看護学」単元の「技術試験」を担当した。技術試験の内容や評価表など担当した。
7) 精神看護学の担当	平成26年4月～ 現在に至る	田北看護専門学校で専門分野Ⅱの科目「精神看護学」の単元「精神看護学概論」「精神看護学方法論Ⅲ」(2年次配当 40人)2単位45時間を担当している。
8) 臨地実習の担当	平成21年4月～ 平成30年3月	田北看護専門学校での臨地実習の精神看護学、看護統合分野(3年次配当)、基礎看護学、成人看護学Ⅰ実習(2年次配当)の実習指導を担当している。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 資格, 免許 1) 看護師免許	平成5年5月6日	第792352号
2) 高等学校教諭一種免許(理科)	平成12年3月31日	平一一高一め第2925号
2 特許等 該当なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(学会発表) 1. 看護教員の看護学生への「共感と思いやり」の認識と実態 第1報	共同	平成21年8月	第35回日本看護研究学会 (於 神奈川県横浜市)	臨地実習において「共感」は患者－看護師関係を築く上でキーポイントとなり、学生に体験させたい技術と言える。しかしながら、教員は「共感」についてどのような認識を持っているのか、教育の場面で教員－学生間での「共感」の体験について、明確にする機会がなかった。本研究では、教員にアンケート調査を実施しその実態を把握することで、今後の看護教育に役立てることを目的とした。その結果、看護教育上、学生に「共感と思いやり」の態度に関わることの必要性は認識しているが、半数以上の教員が、困ったことがあると回答している。今後は教員と学生のそれぞれの立場から個別的に深く洞察していく必要があると考えられる。 共同研究者：北出千春・梶谷薫 (本研究の発表者として中心となり研究に取り組んだ)
2. 基礎看護学実習におけるフィジカルアセスメント技術の活用の実態	共同	平成24年8月	第43回日本看護学会－看護教育－学術集会 (於 岩手県盛岡市)	3年課程の看護専門学校4校の学生196名を対象に基礎看護学実習でのフィジカルアセスメント技術に関する質問紙を実施した。その結果、授業で学んだことを基に、臨地実習で体験を積み重ねることが重要であり、そのためには授業と臨地実習との連動性を強化した教育内容が必要であると示唆を得た。 共同研究者：中川利子・田畑典子・井上葉子他 (本研究の発表者として中心となり研究に取り組んだ) 論文採択された。 抄録集 P. 85
3. 臨地実習における看護学生のストレスとレジリエンスについての実態	共同	平成29年8月	第48回日本看護学会－看護教育－学術集会 (於 香川県高松市)	臨地実習は学生にとってストレスが大きいことが指摘されている。学生のレジリエンスを発揮できれば、ストレスに対処できることが期待される。そこで本研究は、時期の異なる2つの実習の前後で、学生個々のストレス反応とレジリエンスの状態を調査した。その結果、ストレスがレジリエンスに及ぼす影響には個人差があり、個人の特性を理解した個別的な支援の重要性が示唆された。 共同研究者：平山亜矢子・井上葉子・丸田裕子他 (本研究の発表者として中心となり研究に取り組んだ) 論文集 P. 75-78 (論文に採択された)
4. 臨地実習における看護学生のレジリエンス育成に関する文献研究	共同	平成30年8月	第49回日本看護学会－看護教育－学術集会 (於 広島県)	臨地実習における学生のレジリエンスに関する研究論文を整理・分析することで、レジリエンス育成に向けた個別的な支援方法の示唆を得る目的で、医中誌Web、CiNii Articlesを使用し「看護学生」「レジリエンス」をキーワードに2010年から2017年に限定し、さらに「臨地実習」に関する記述が含まれている論文に絞り込み4件を対象文献とした。その結果、自尊心や情動面なども合わせた学生の感情を受容し、学生個々の適応過程を見極めた上でレジリエンス育成に向けた支援を行うことが重要であることがわかった。 共同研究者：井上葉子・平山亜矢子・葦原佐衣他 (本研究の発表者として中心となり研究に取り組んだ) 論文採択された。 論文集p. 59-62

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. テキストマイニングを用いた精神看護学実習における学生の学びの分析	共同	平成31年3月	第32回日本看護研究学会-第32回近畿・北陸地方会学術集会 (於 福井県立大学)	平成29年度4月～11月に精神看護学実習を行った3年課程A看護専門学校3年生42名に対して実習記録「精神看護学実習を終えて」を対象として、Text Mining studio 6.1を用いて分析を行い、精神看護学実習の目標との関連を検討した。その結果、受け持ち患者との関係性を築く中で患者の「生きにくさ」も感じることができ、社会復帰に及ぼす影響も理解できていたが、精神状態をアセスメントする技術も活用することを強化する必要性が得られた。 共同研究者：溝口みちる・井上葉子（本研究の発表者として中心となり研究に取り組んだ 示説発表。抄録集P. 43
(その他) 1. 精神科における倫理についての授業方法についての検討	共同	平成27年8月	奈良県看護教員研究会	精神看護学実習で学生は倫理的な場面に遭遇することが少なくないと考えられ、そのため講義の中で倫理的感受性を高める必要があると考えた。本研究ではでは授業案を作成し、授業を実施をした後に学生のアンケート調査を行った。その結果より、患者の精神面を具体的に考えられるような事例の工夫の必要性の示唆を得た。 共同発表者：加納由紀子・丸田裕子・ <u>山崎陸世</u> 他 研究会会報 P. 29～34